陶器集

841
124

ガラス使用

陶器集

841
124

ガラス使用

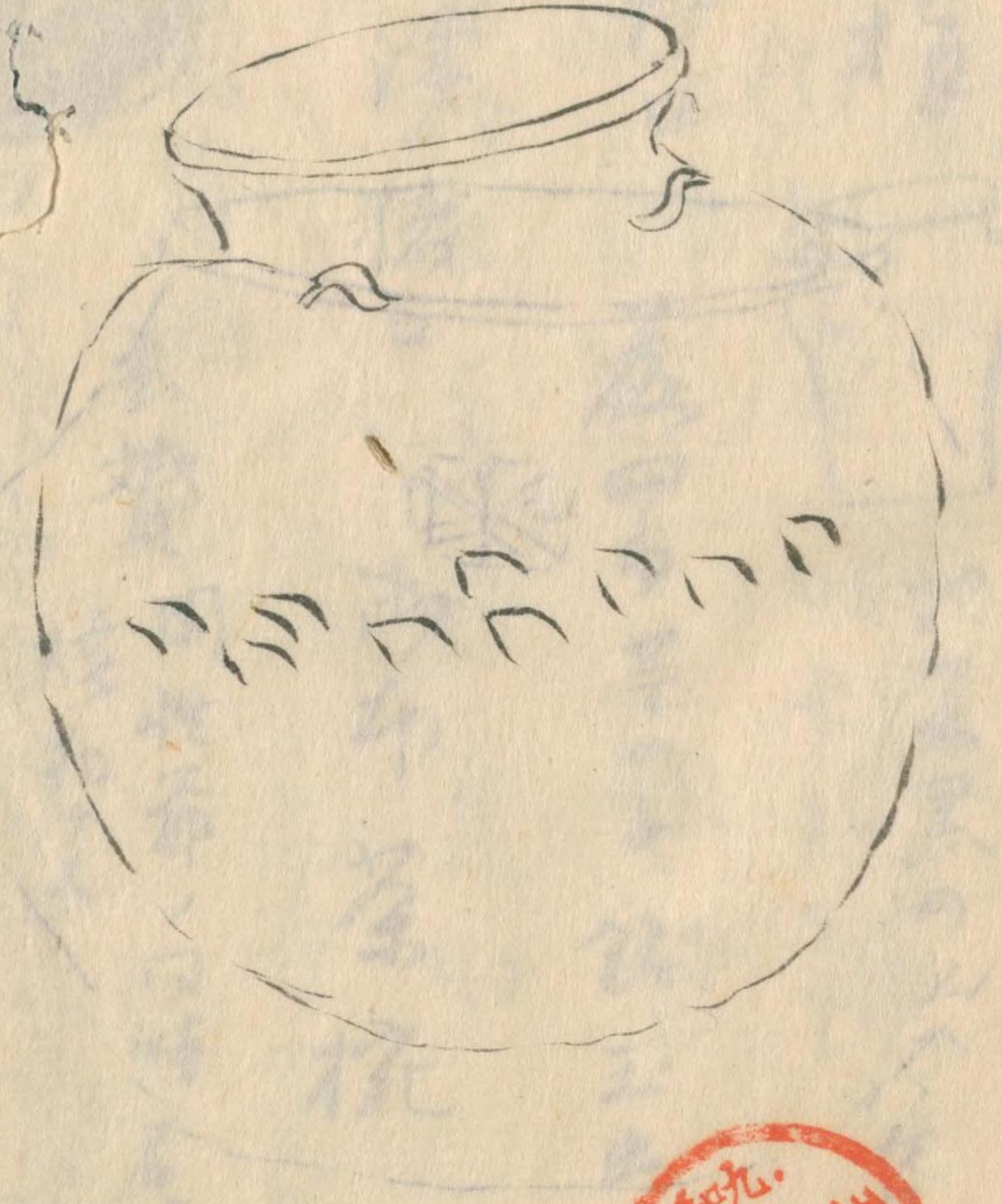
帝国図書館蔵

明治二十三年一月廿九日於テ岩瀬君ニテ鑑定会

号所見

呂宋茶壺

銘 延命



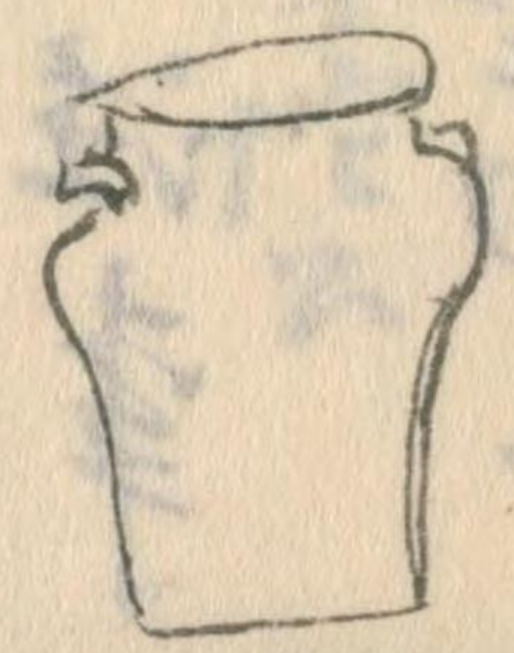
根岸信輔氏寄贈

昭和九.五.三〇

ガラス使用

二月廿日 覽定会於前田君宅

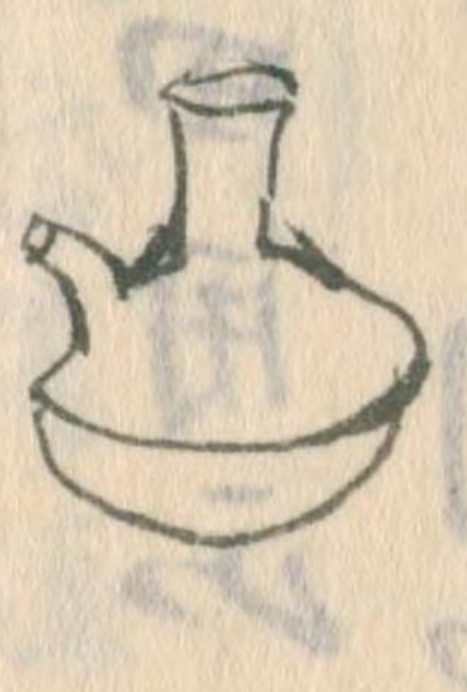
萩茶椀 唐津天目 薩摩水指 後窯肩衝



（地茶黒の上へハケ目）

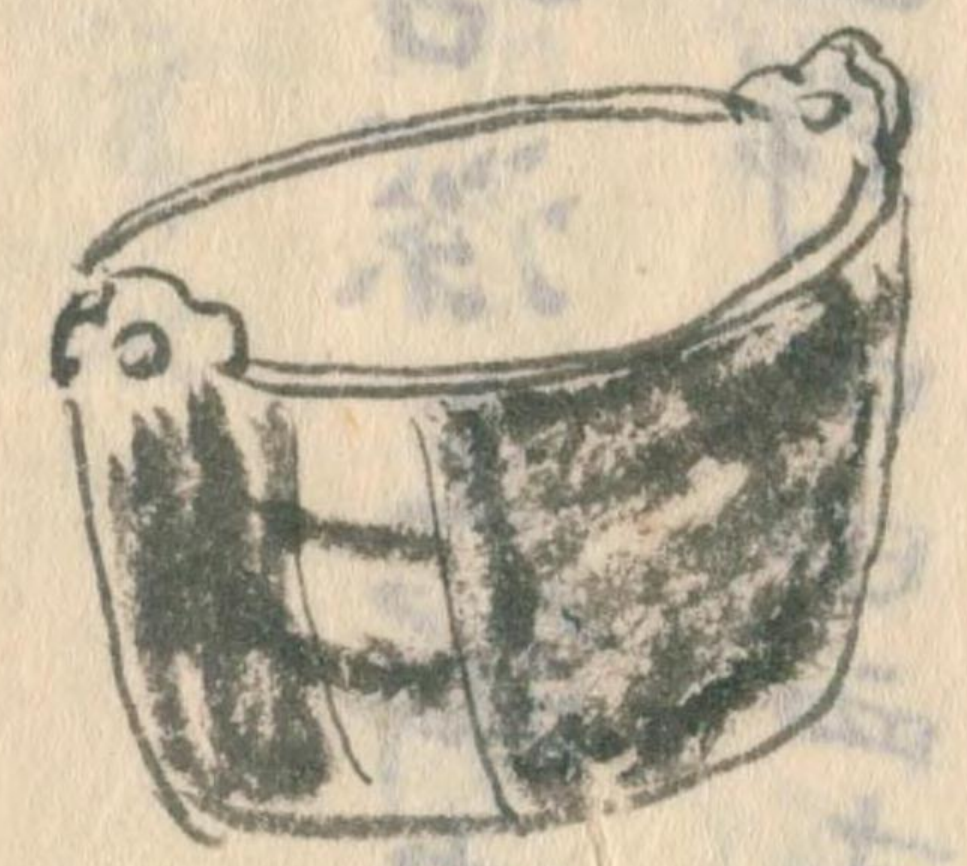
大山ふた置 志野水指

春慶肩衝 志うす片口 藤四郎 芋の子 銘玉虫



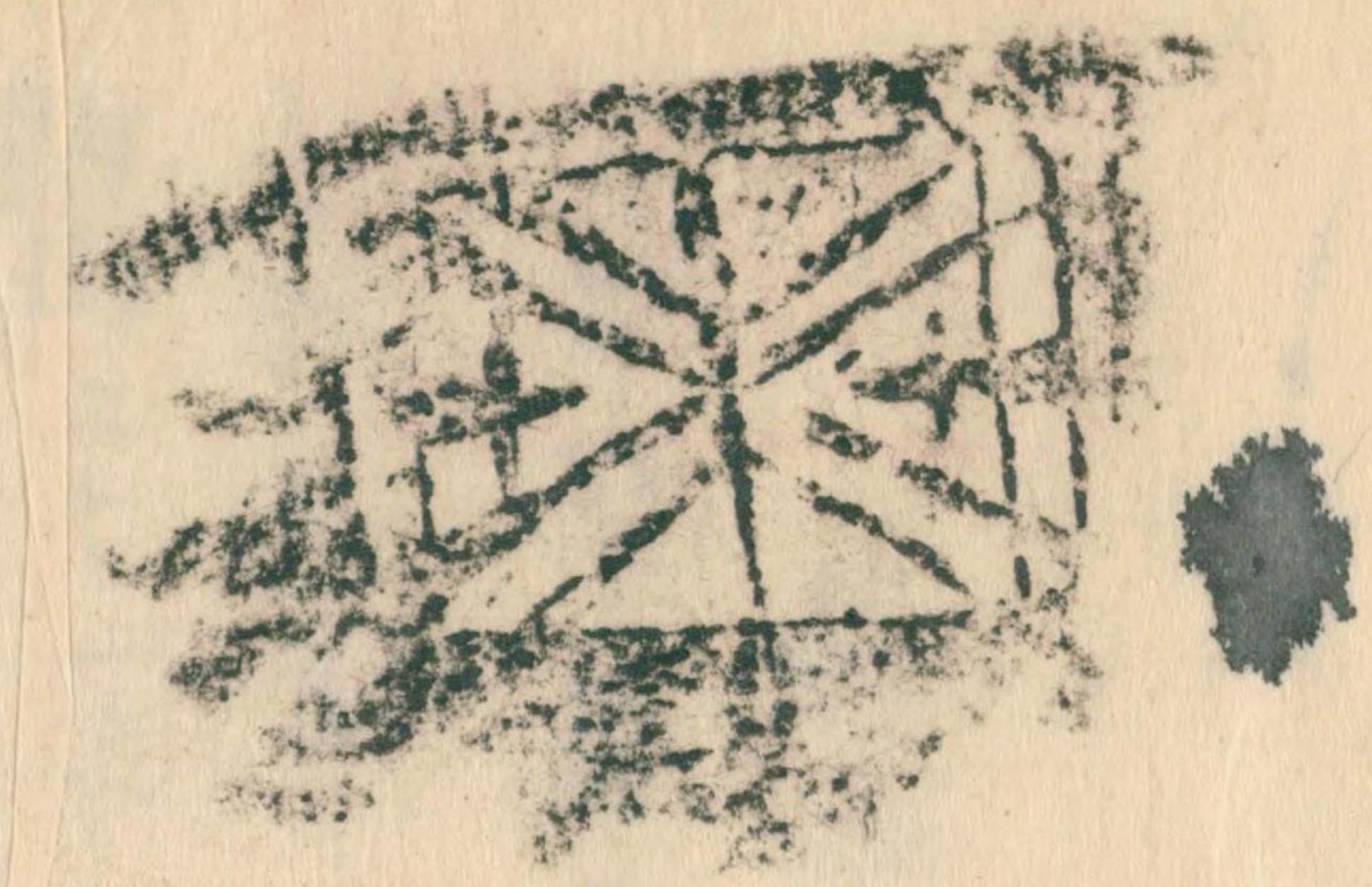
ミトロ香炉なり 香炭入 唐津猪口、御本茶椀

水さし 朝鮮 内しふ

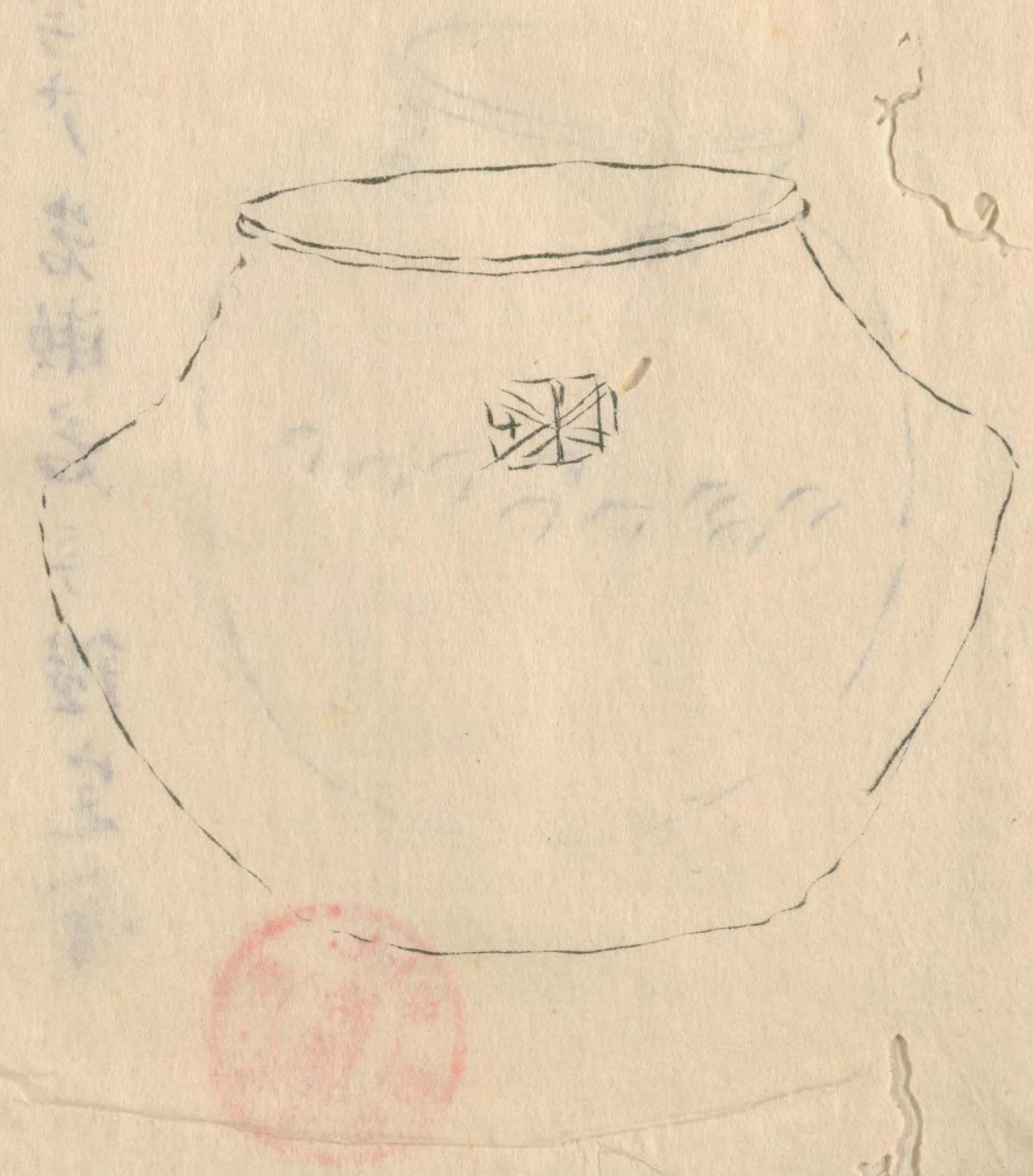


玄賓国性爺ノ同時 尾州ニ来ル
焼物ス

ワ附



蓮花王水指



ガラス使用

宇陀郡産三善深主解申正税賣買墾田立券文事

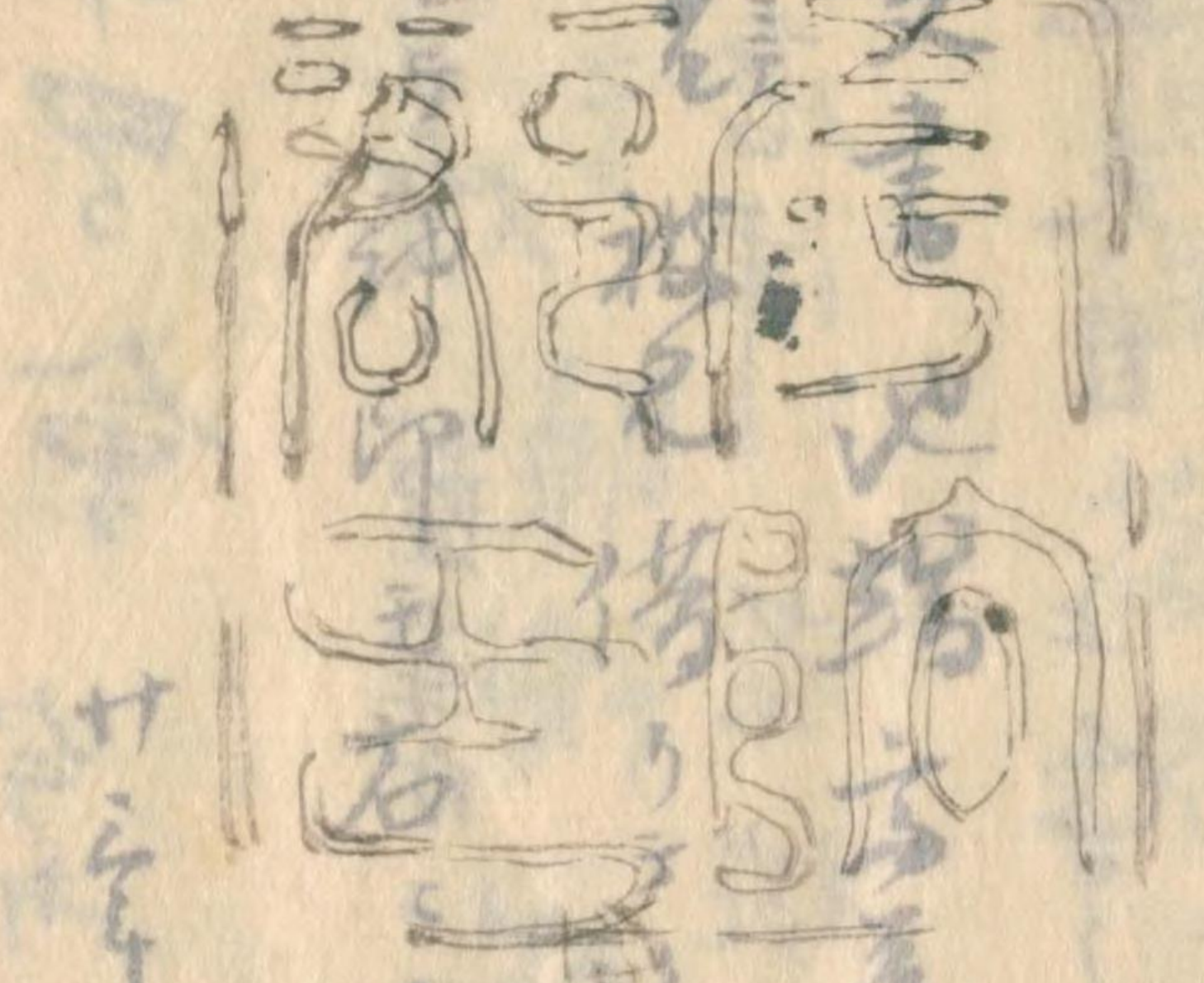
十條（六里五野中田西貳段百歩）

右件墾田用正税六拾束充價直切
常土賣与同郷調首深主已畢望
請唯式欲立券文仍注事如件以解

大同二年正月廿六日　墾田主　三善深主
宇田公彦人
宇田石高師

郷長宇田公真以

権大領外従八位下宇陀公田雄
副擬大領　正七位宇陀公　擬主帳平君等
少領外従八位下十二等



付スル印ハ[illegible]参議三氏ノ宅ニアリ西ノ京係大[illegible]寺の邊ナル
此ノ[illegible]福井町ノ梅陶銘見ヘ紙モ書体モ古ク
ナリ[illegible]捺シタル採[illegible]伏[illegible]丁ぬ

廿三年[illegible]廿七日

ガラス使用

三月十四会　今井啓衛氏

東山焼　藍染付小皿　東山ハ姫路之

献上唐津　茶碗

信楽天目　上くすり黒　土きんくろし　多り

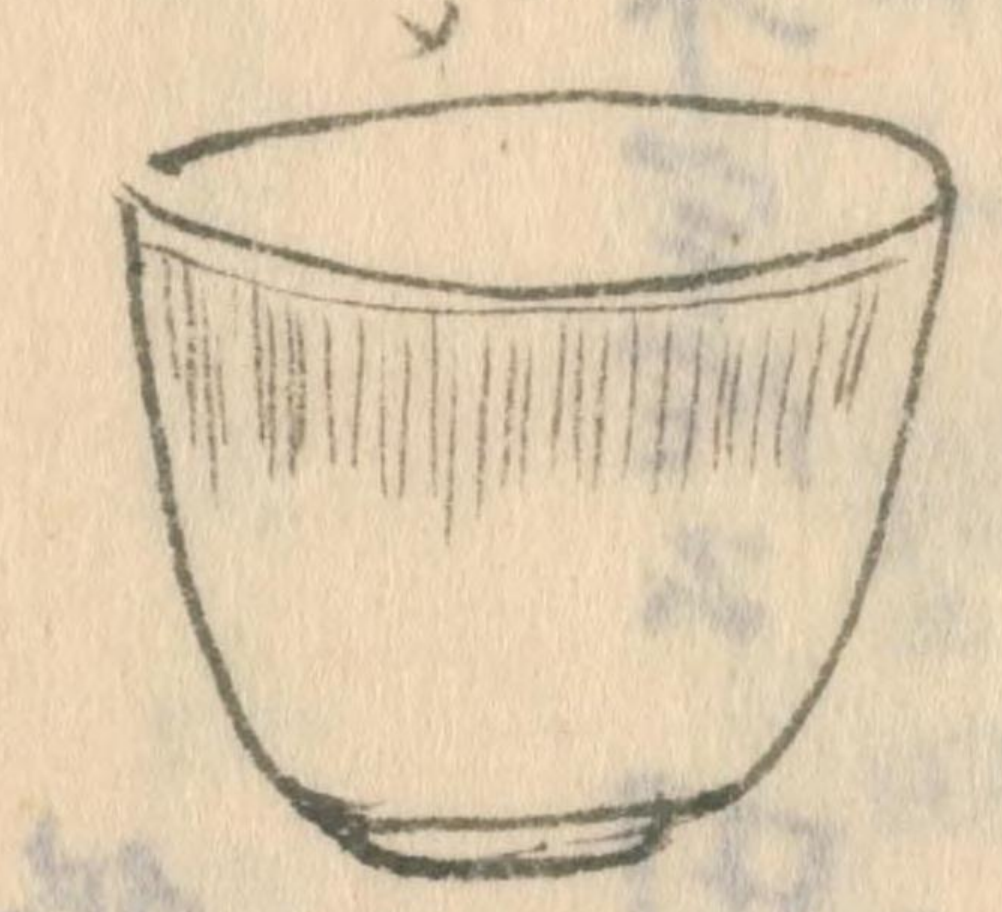
竹形水さし　（志ゆうきうハ代々宗匠之）

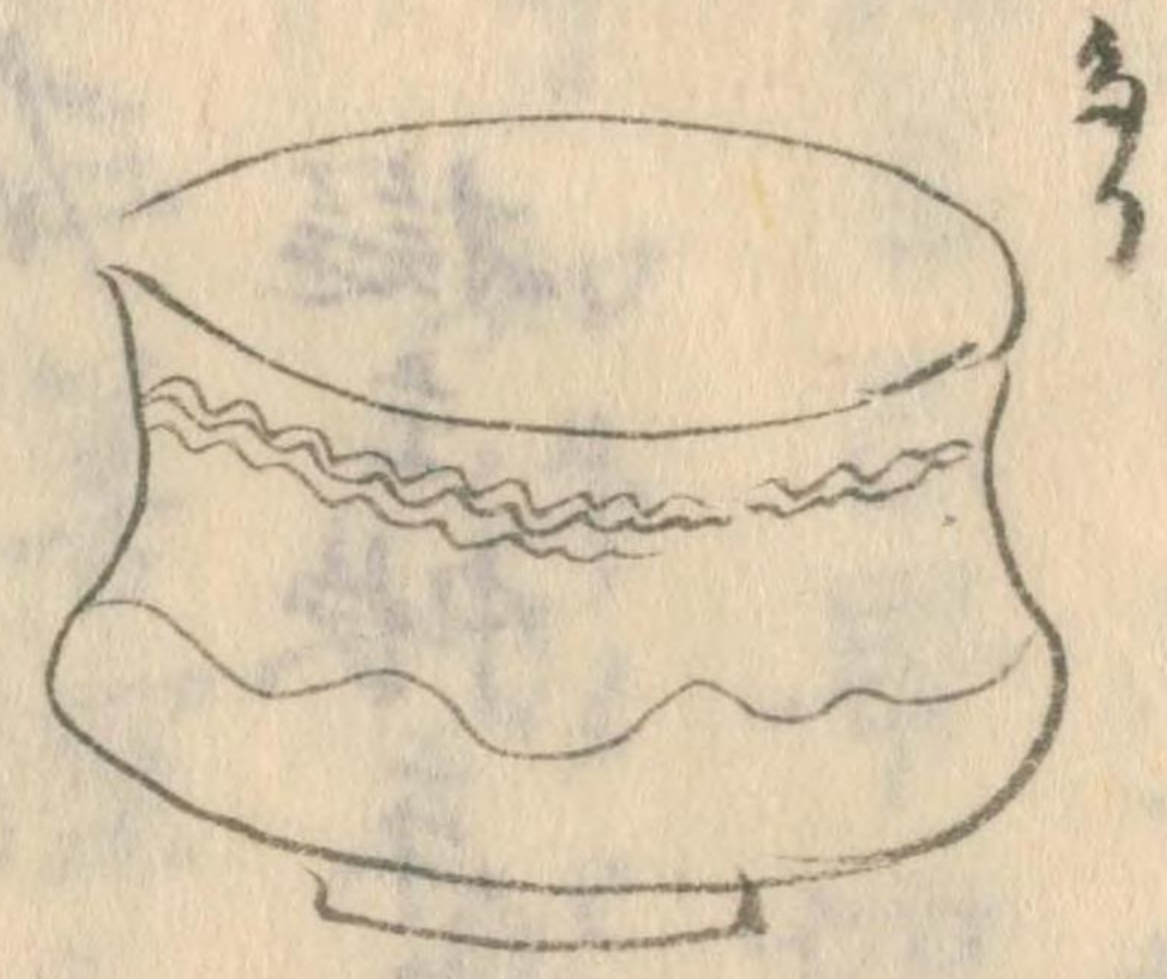
薩摩茶碗　玉子出

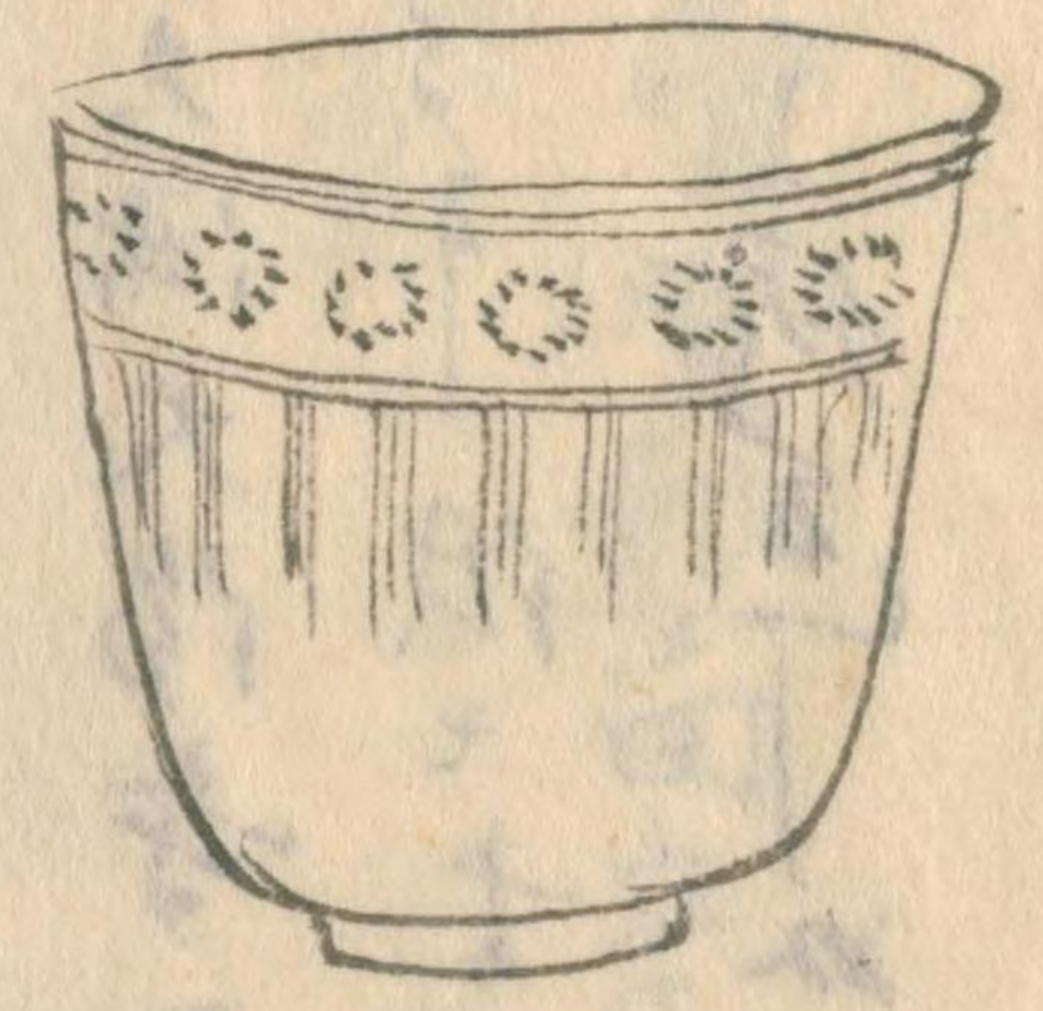
萩茶わん　土わかき

萩茶わん。

御本たけ色





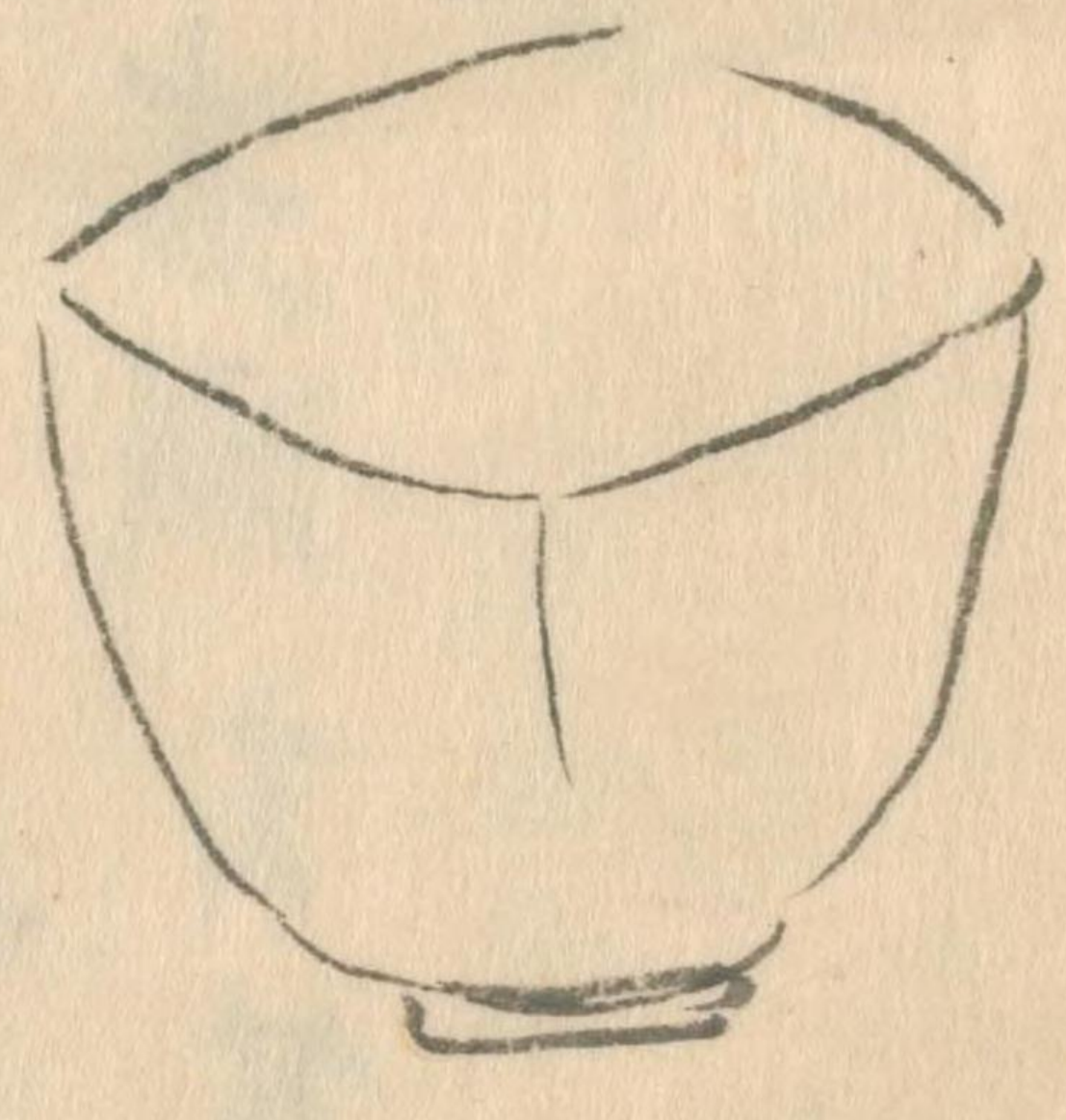


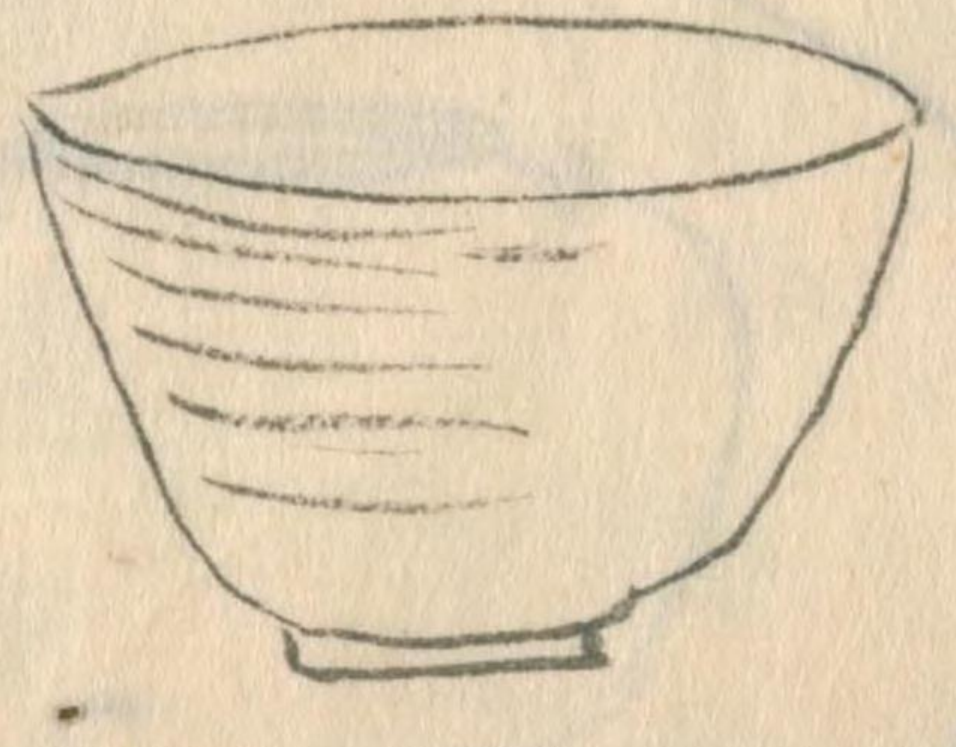
古高原　本国摂州ニて片桐石州の頃焼出後幕府の命により江戸へ下り御茶水割前の高き地所を拝領し高原五郎兵衛と云代々茶碗をやきたり

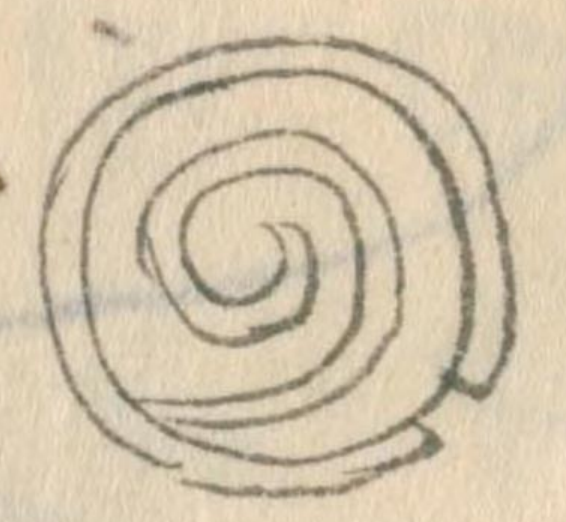
金花ほのた

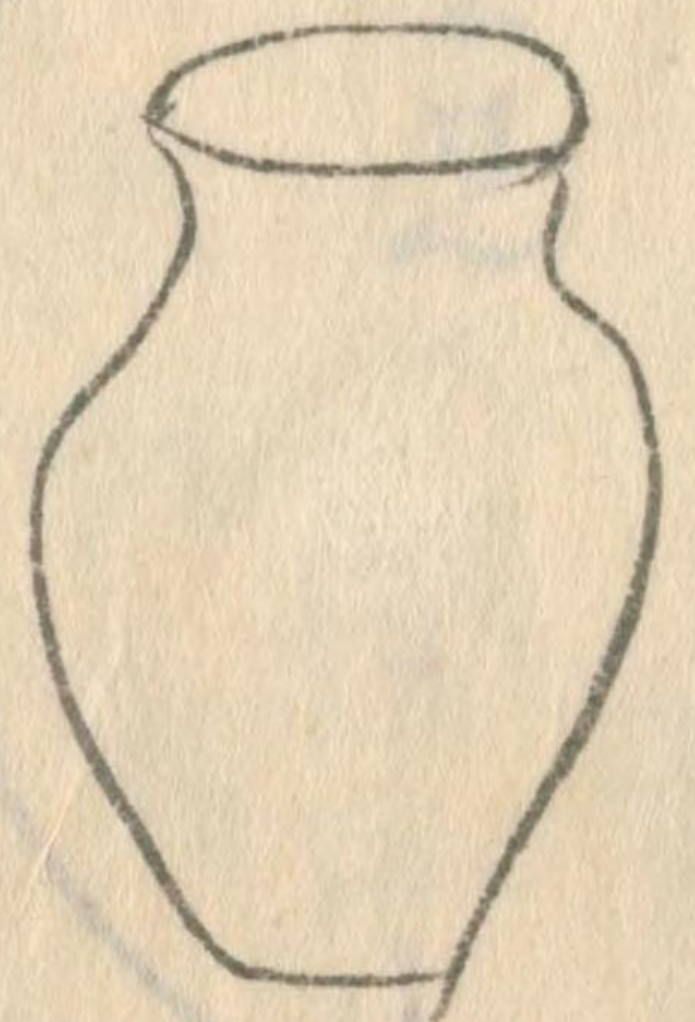
伊羅保茶碗　高麗

片手朝鮮瓶





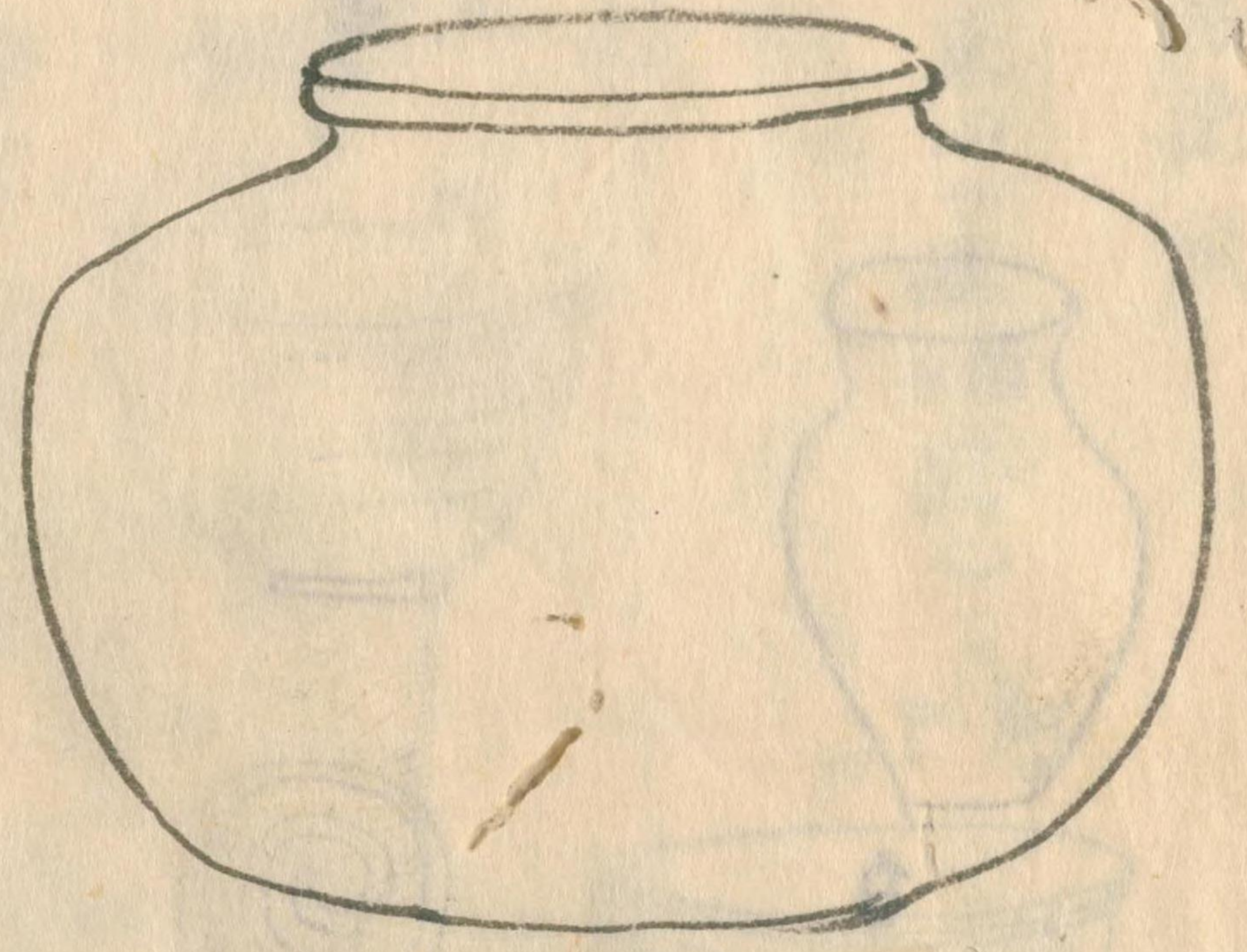


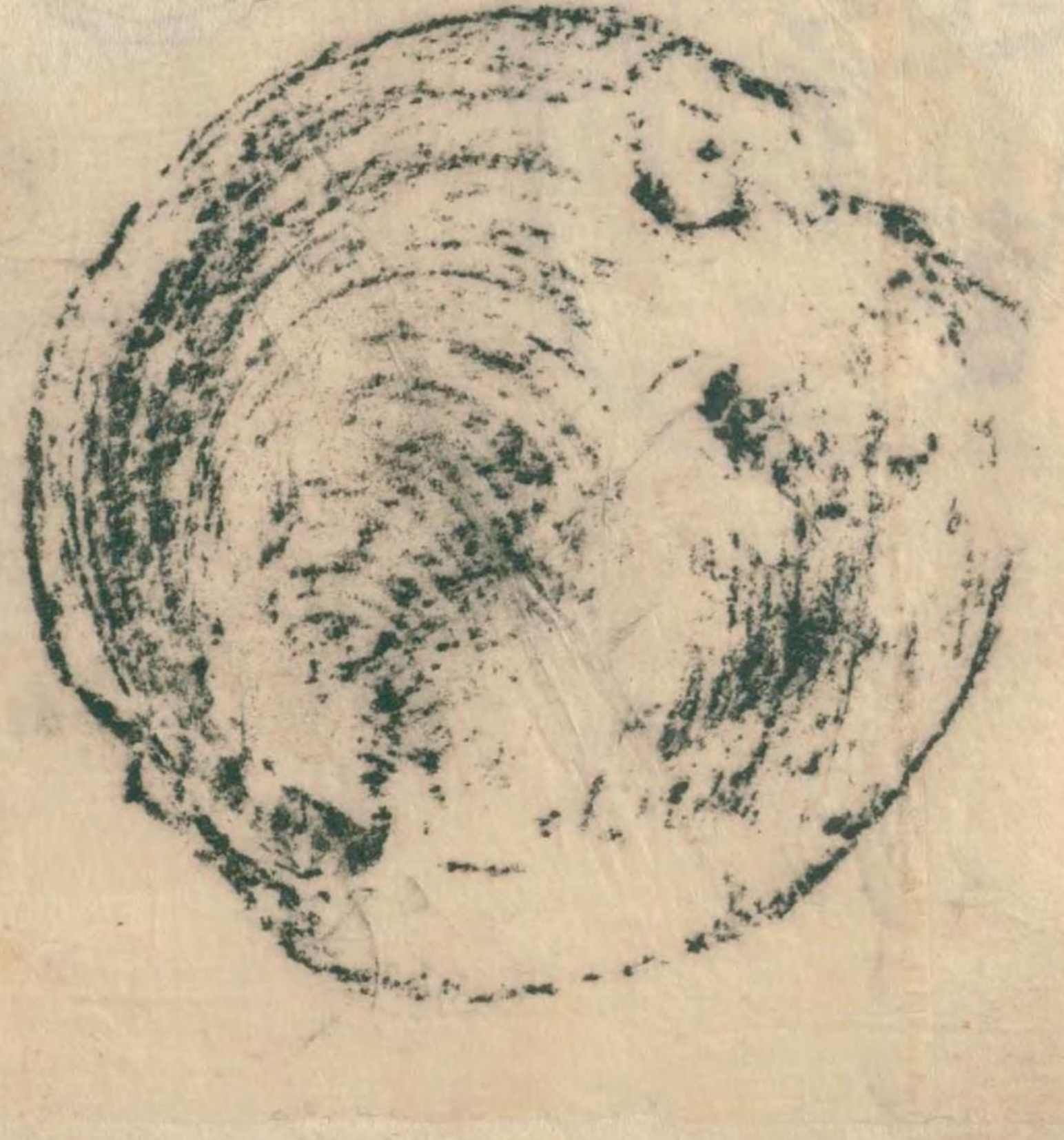


ガラス使用

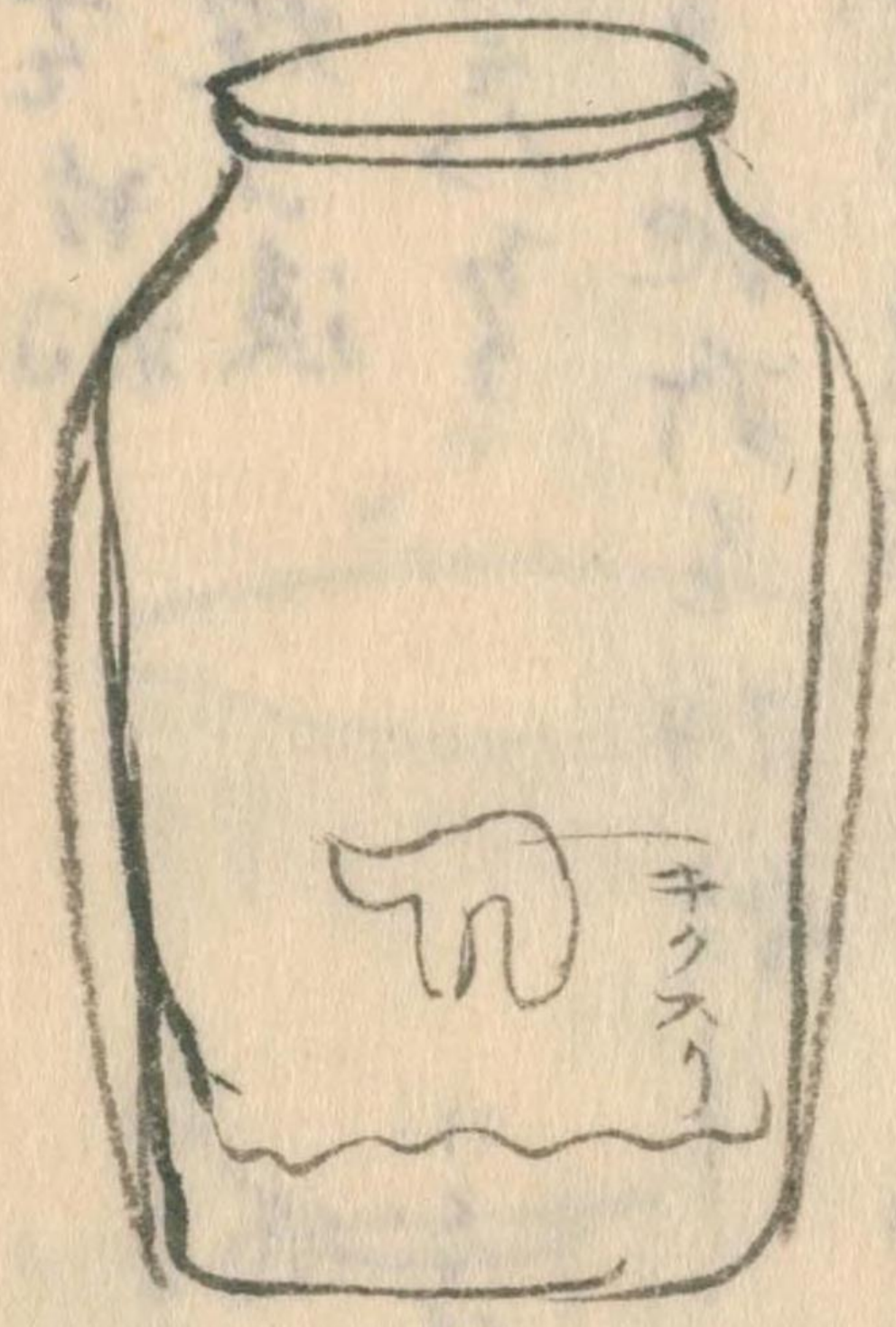
藤四良 唐物

大サ如圖

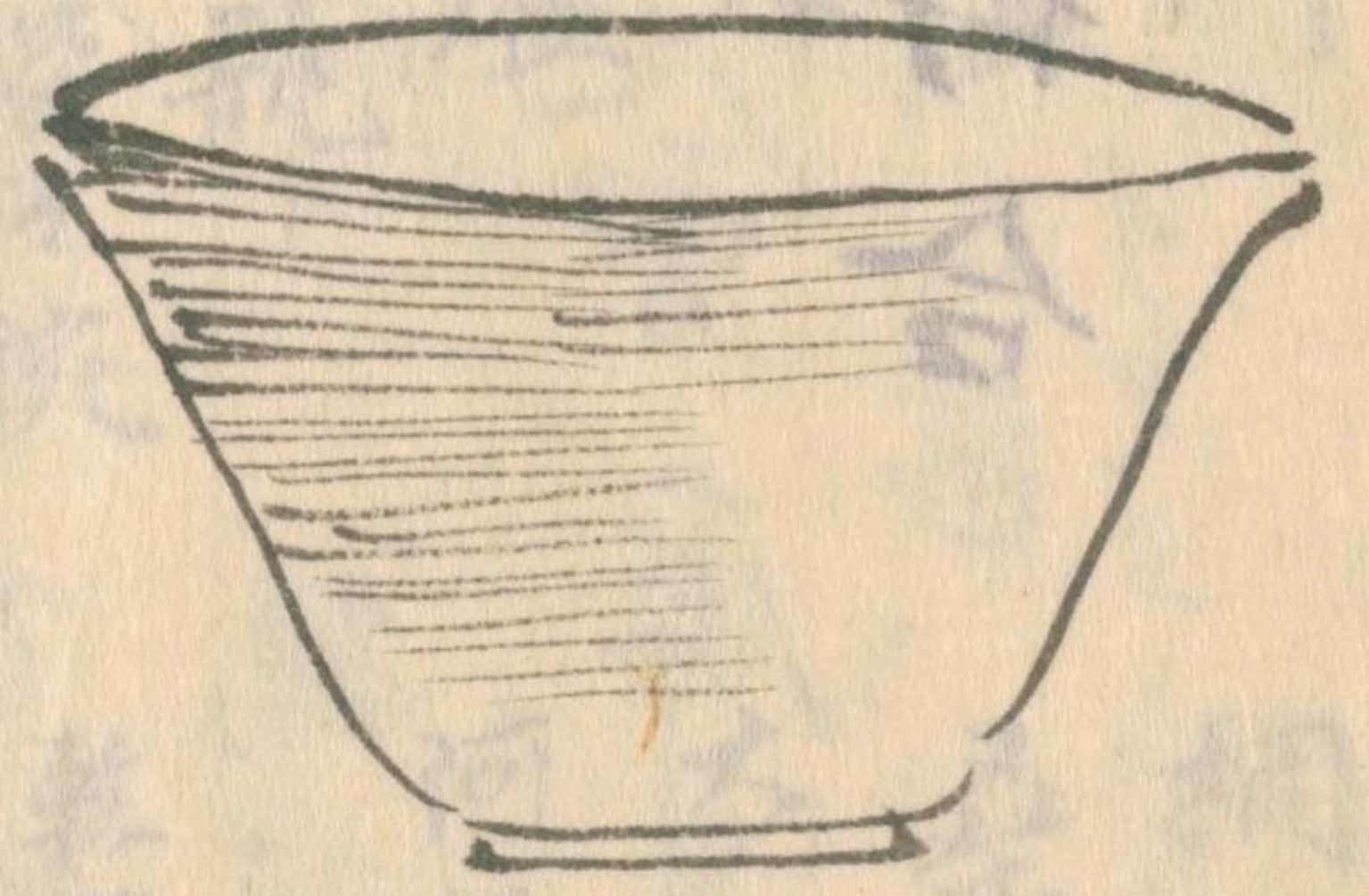




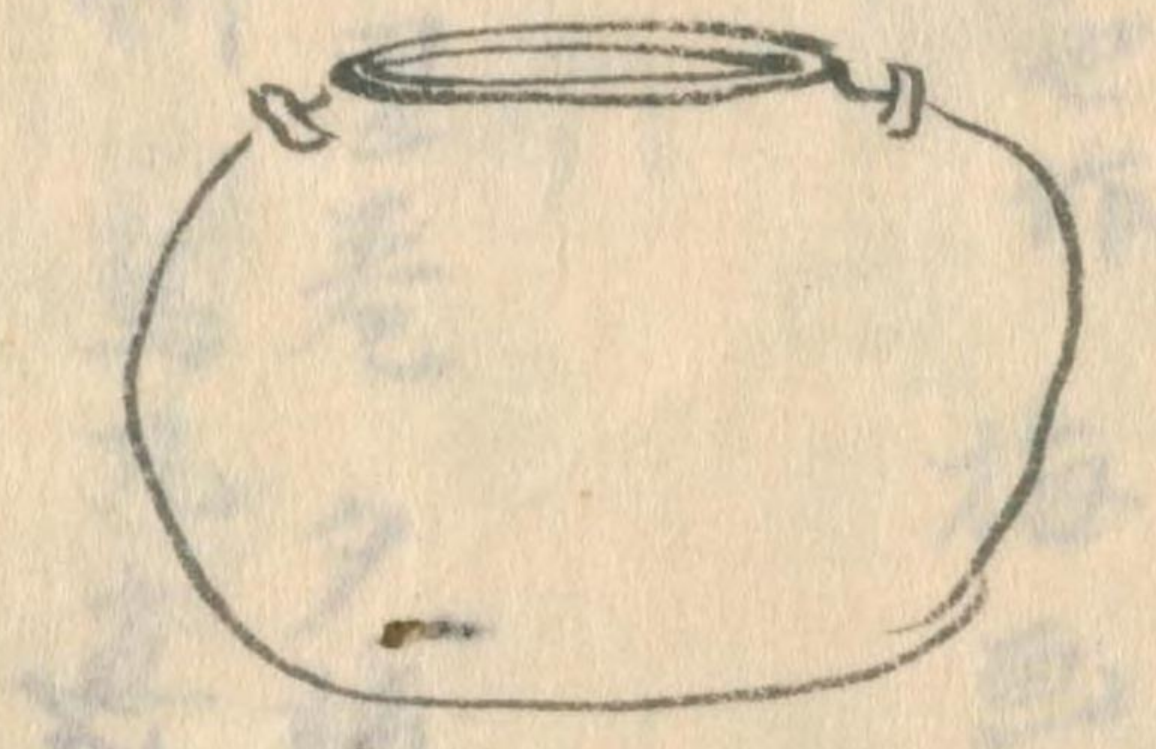
金華山 大草の手



黄伊羅保 茶わん



唐物 茄子耳付



交趾香爐 獅子鈕三足

合十六点

三月十五日正午

前田健次郎亭

客　谷村嘉順

田中小右衛門

田中八重子

我等

岩瀬玄算

待合

火倚　桐角

煙草盆　桑四方手附

火入　大ひゞ

小風爐　阿蘭陀

銭瓶

煎茶々碗　乾也作　梅画

香菓

棚

歌書　源氏花散里巻　夕顔巻

外ニ豆州　烏丸光廣卿書

席　四畳半　大目

掛物　澤庵筆　色紙

於隅田川木母寺　詩歌

釜　寒雉作　十王口
炭取　時代　竹籠四方
香合　唐物寫竹寳盡　小堀宗中好
同人箱書付
灰焙烙　乾也作
水つぎ　古銅
羽箒　鶴羽
會席
向　花うつ亟
あえふ、ひたしもの
汁　三州味噌
志ゝみうひ
房うし
椀盛　うつら団子
ひしをえしよ
小丼　いりまれ
白魚　防風
焼物　むつの子
唐の芽のたい　につけ
吸物　こゝめ海苔
取肴　本ー
香物　本つけ
菓子　道明寺　桜もち
紅白
みどり杉風
薄茶菓子　最中　白露羽
みどり杉風

御茶湯者　上林牛加諾

後入

花入　信楽鉤瓶　椿ツちさい

水指　祥瑞筒

茶入　丹波耳付　銘春霞木下長嘯子書付　袋うつんす

茶杓　清水鉤玄筒書　杉山子あて送る

水洒

蓋置　引切

薄茶

水指　萬古

棗　青貝人物

茶椀　祥瑞筒

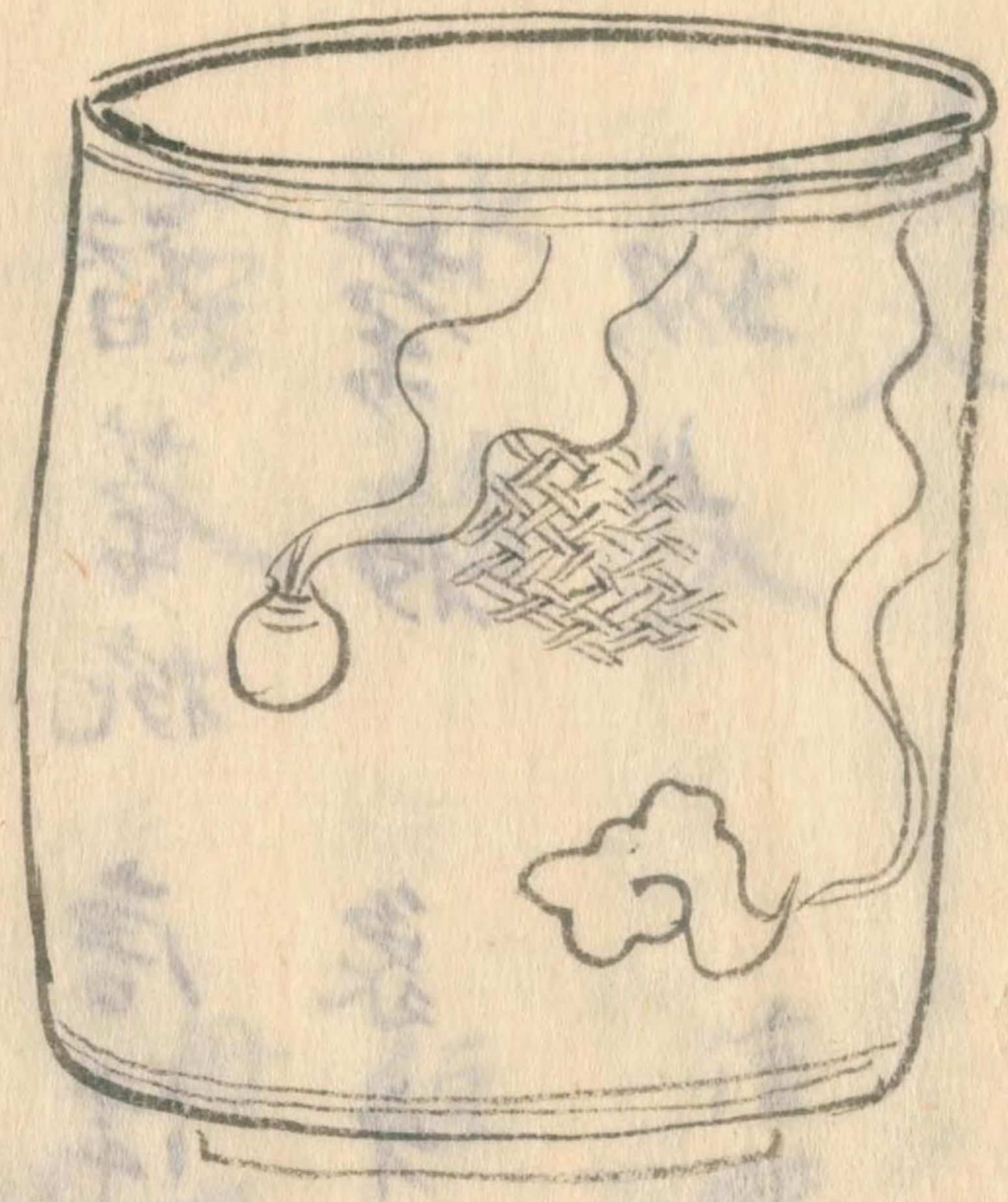
替茶椀　唐津

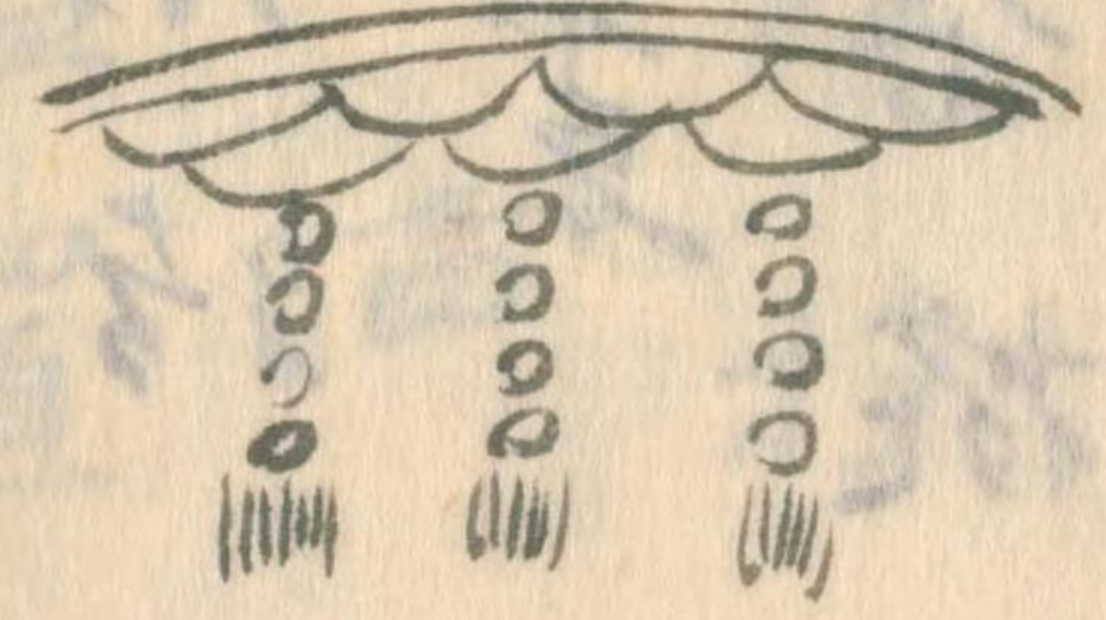
茶杓　象牙竹形

以上

ガラス使用

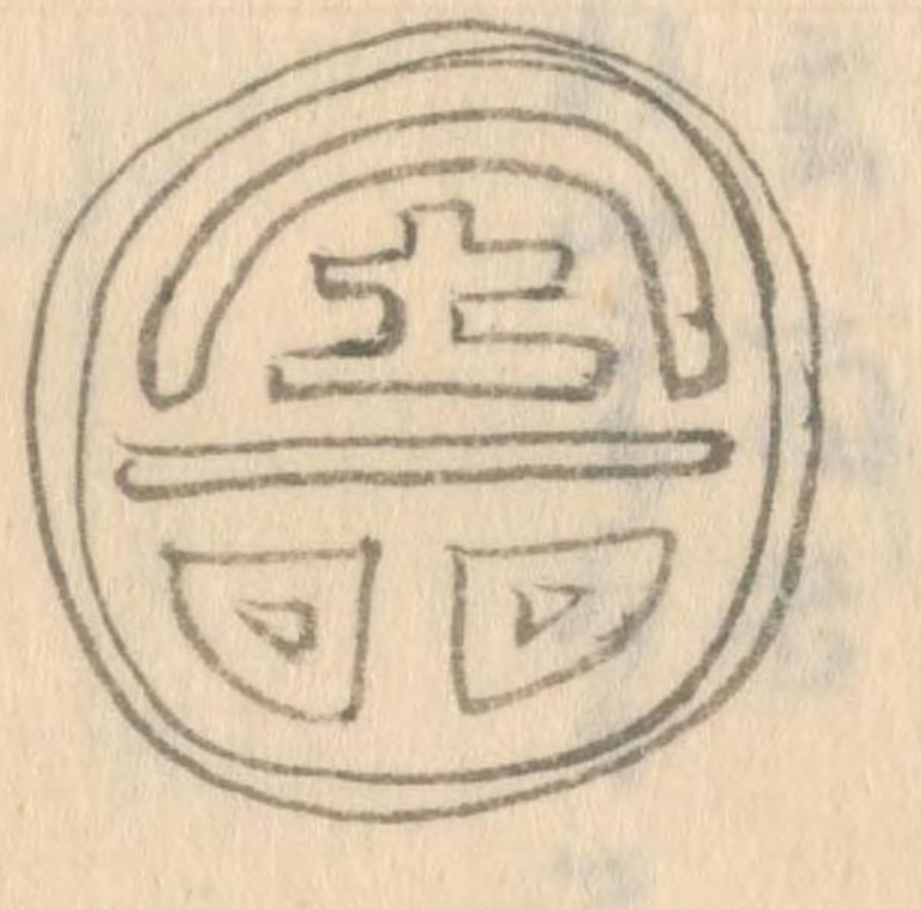
祥瑞筒



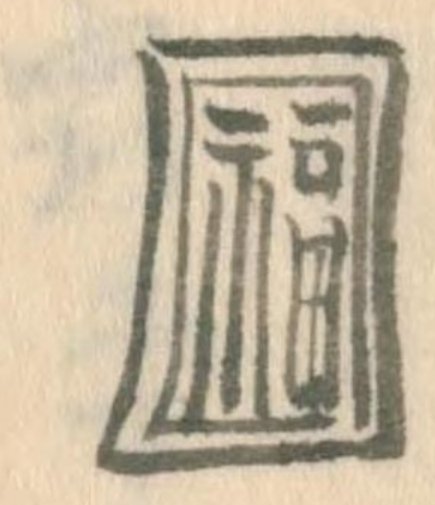


内モヤウ
青貝入

内底

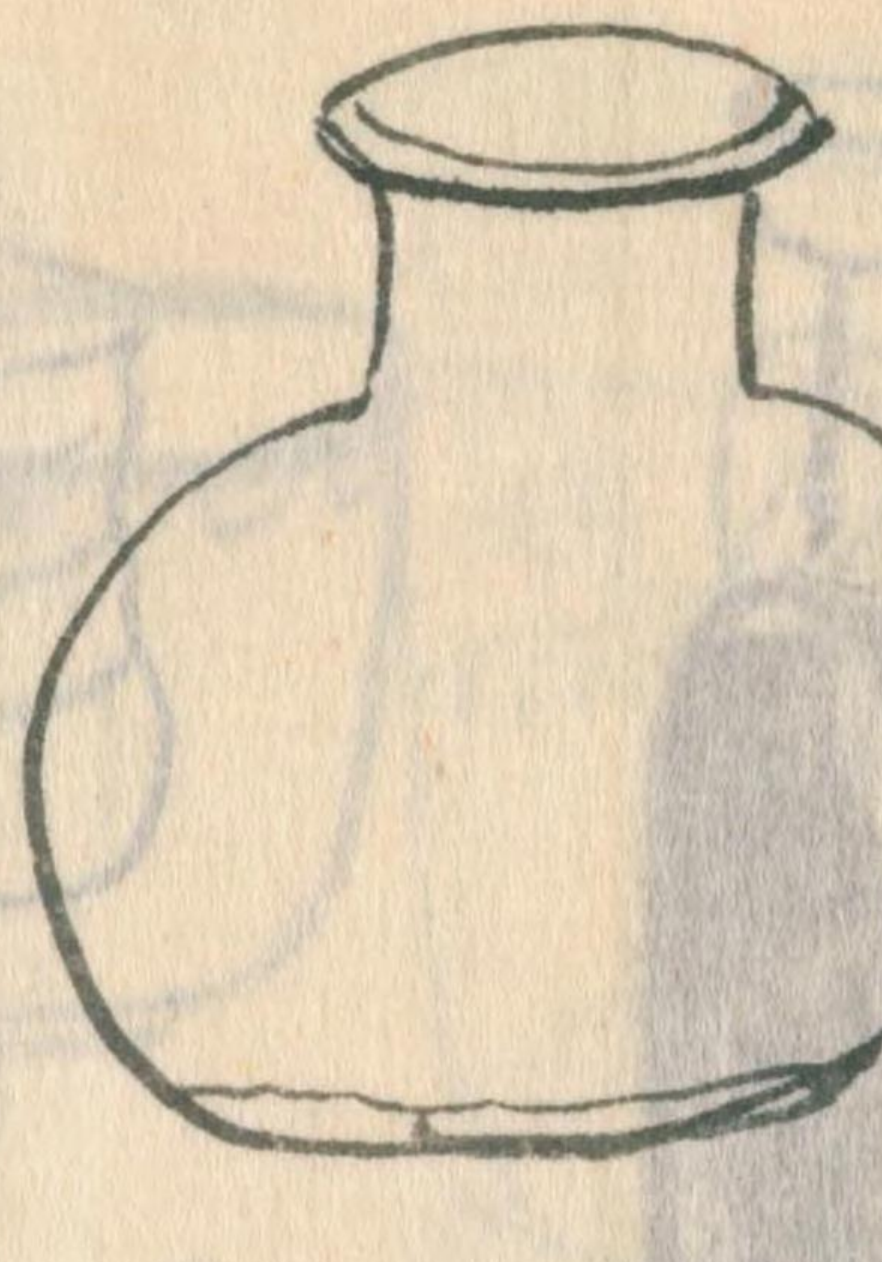


高台内

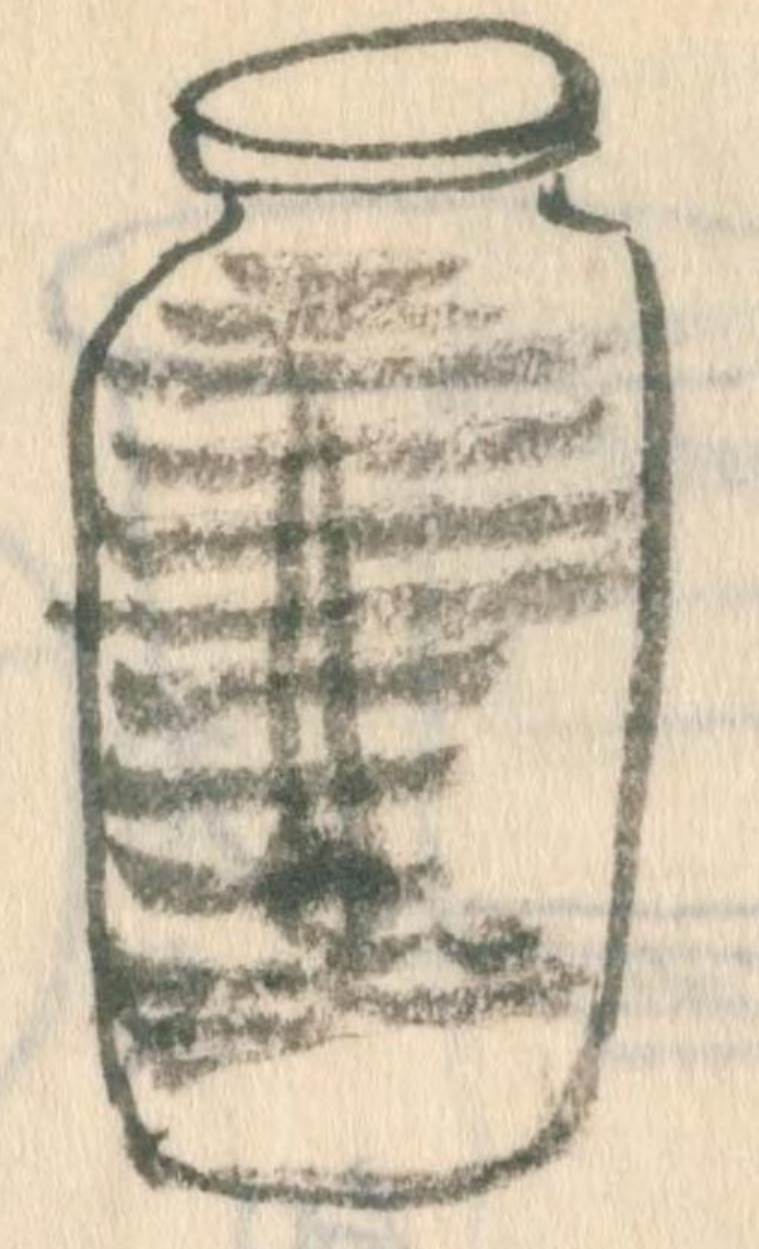


福

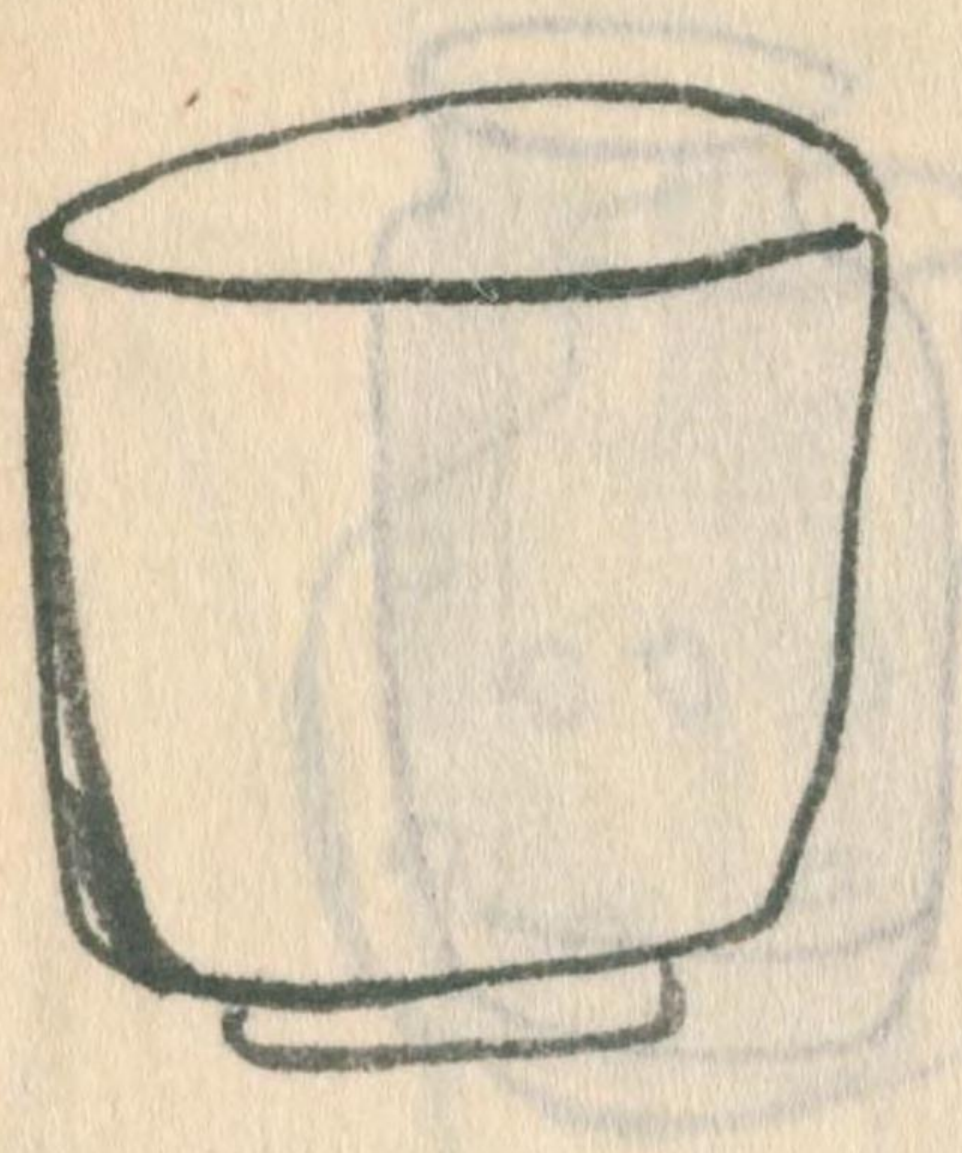
五月六日鑑定会出品　前田家



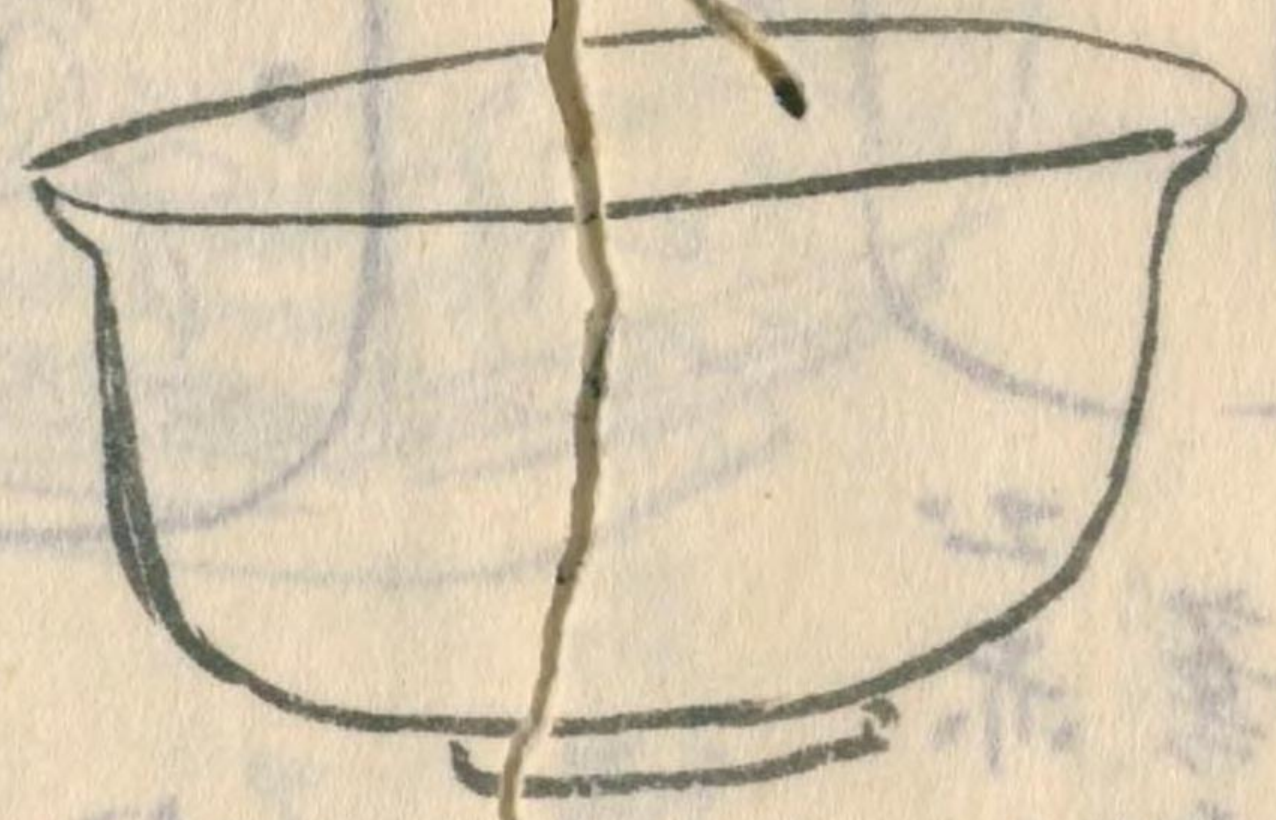
土備前　黄茶薬
仁清ノ印アリ



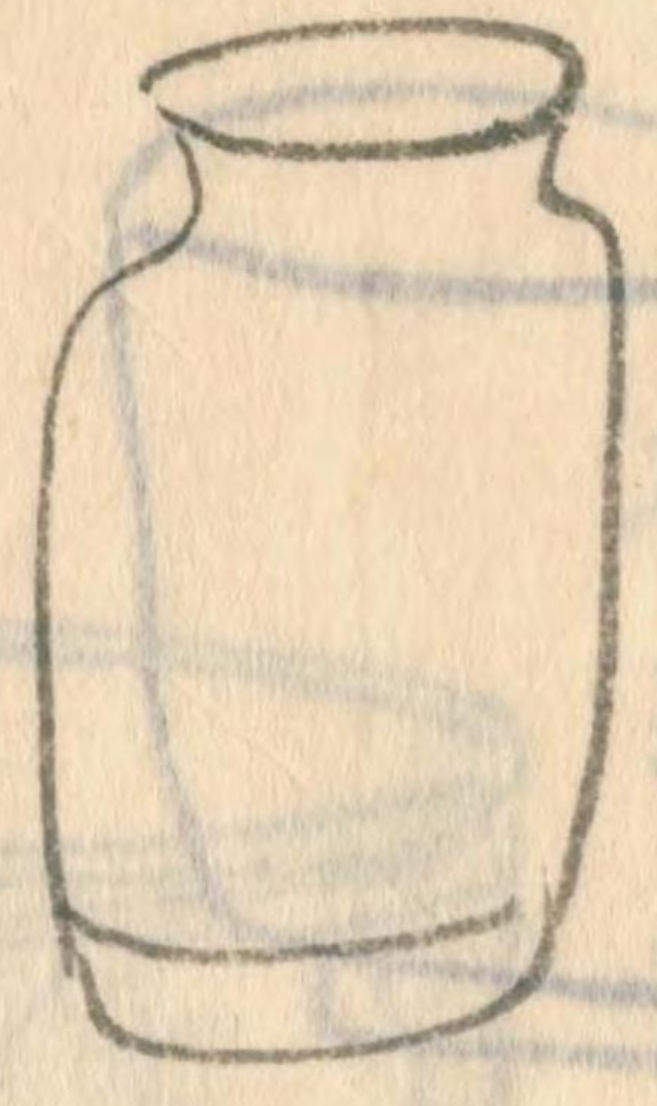
尾張土物



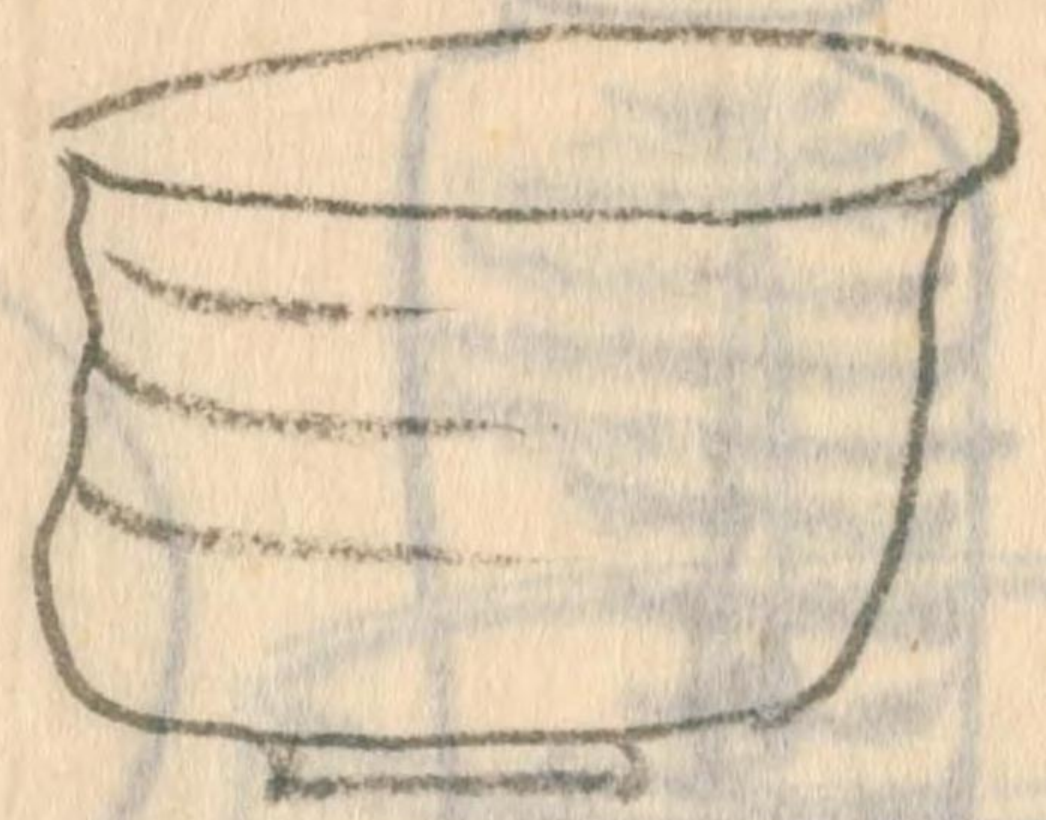
萩葉黄
古原



黄瀬戸
高台内
赤土物
小さく
砂子茶めしアリ

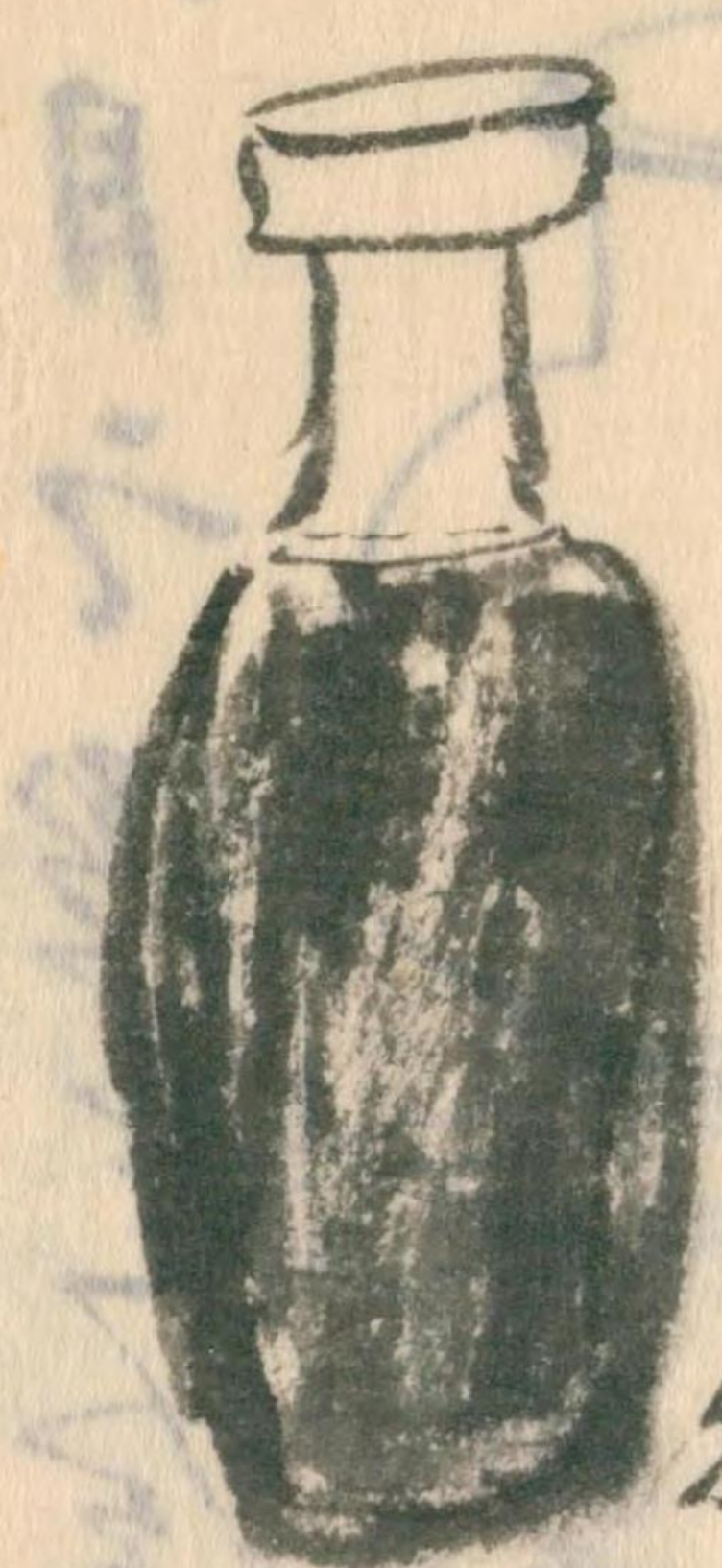


破風

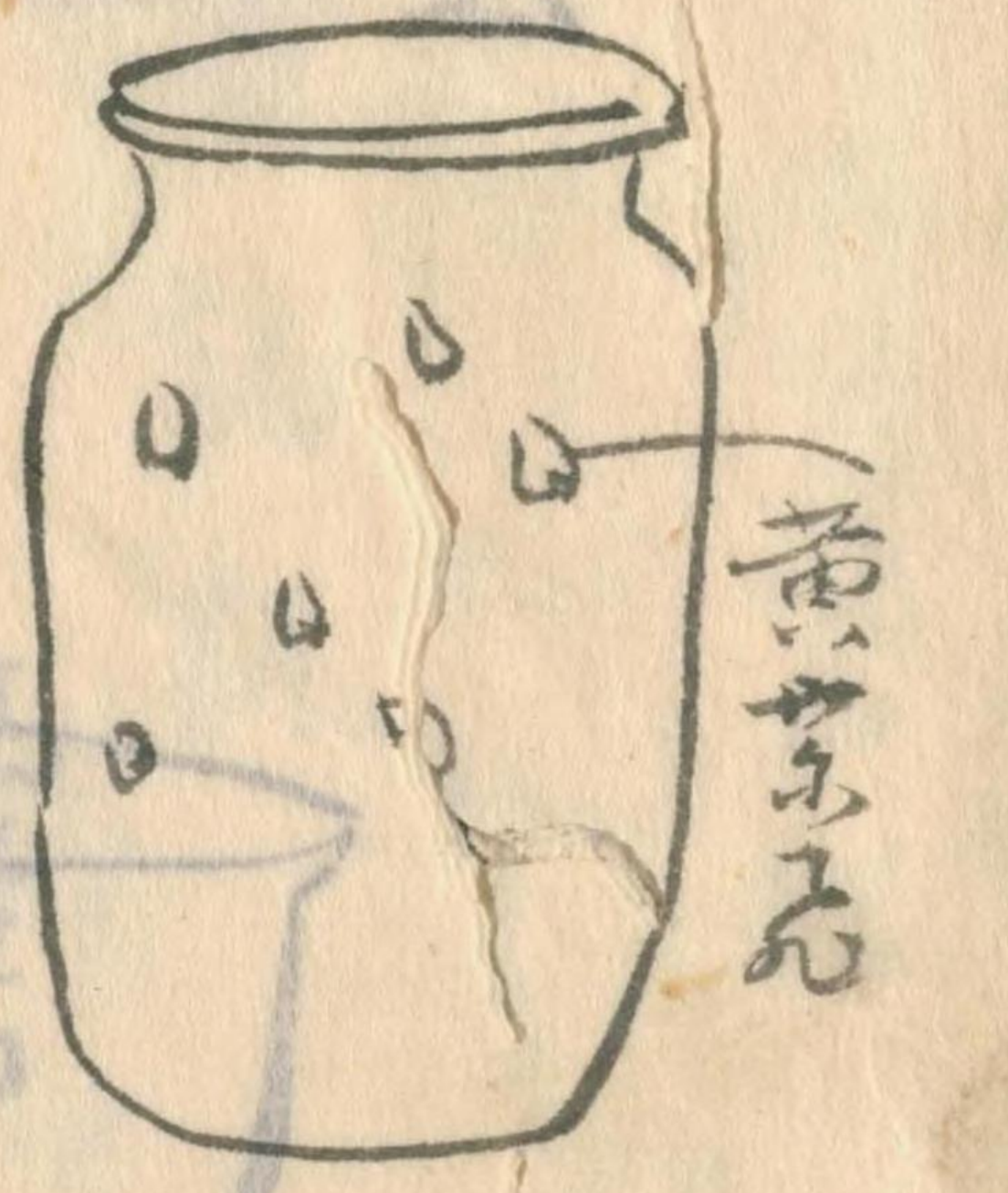


朝鮮ハケメ

茶碗白[illegible]

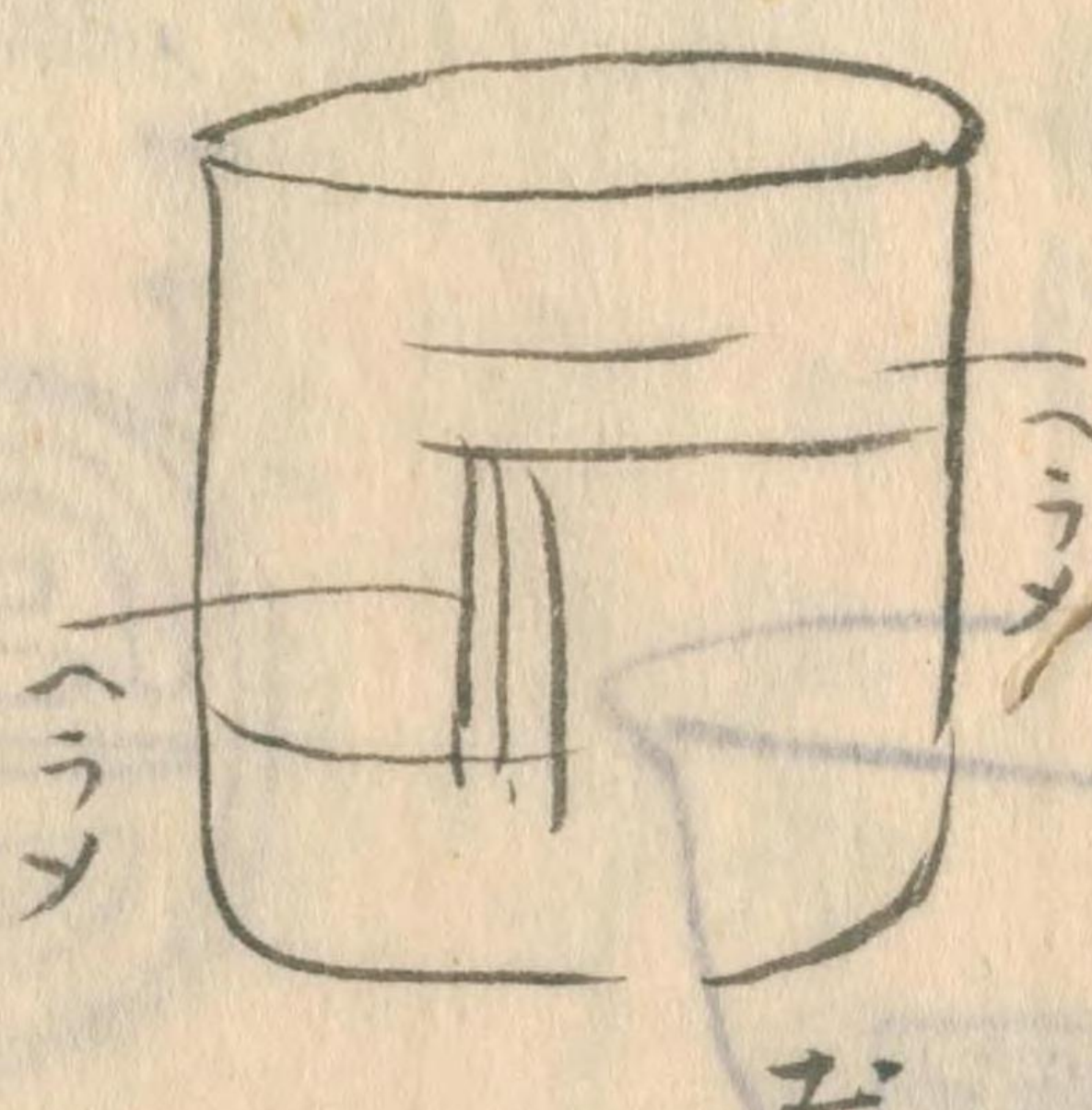


朝鮮とつ



藤四郎アリ

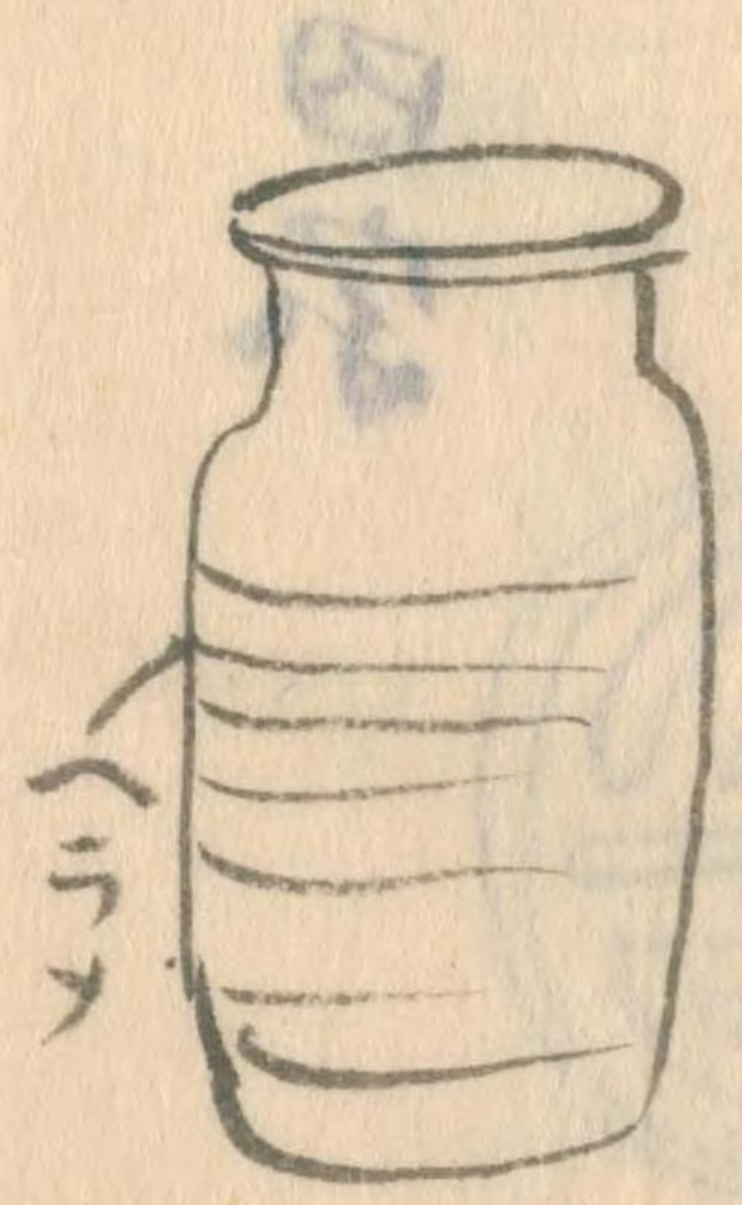
金海カト云



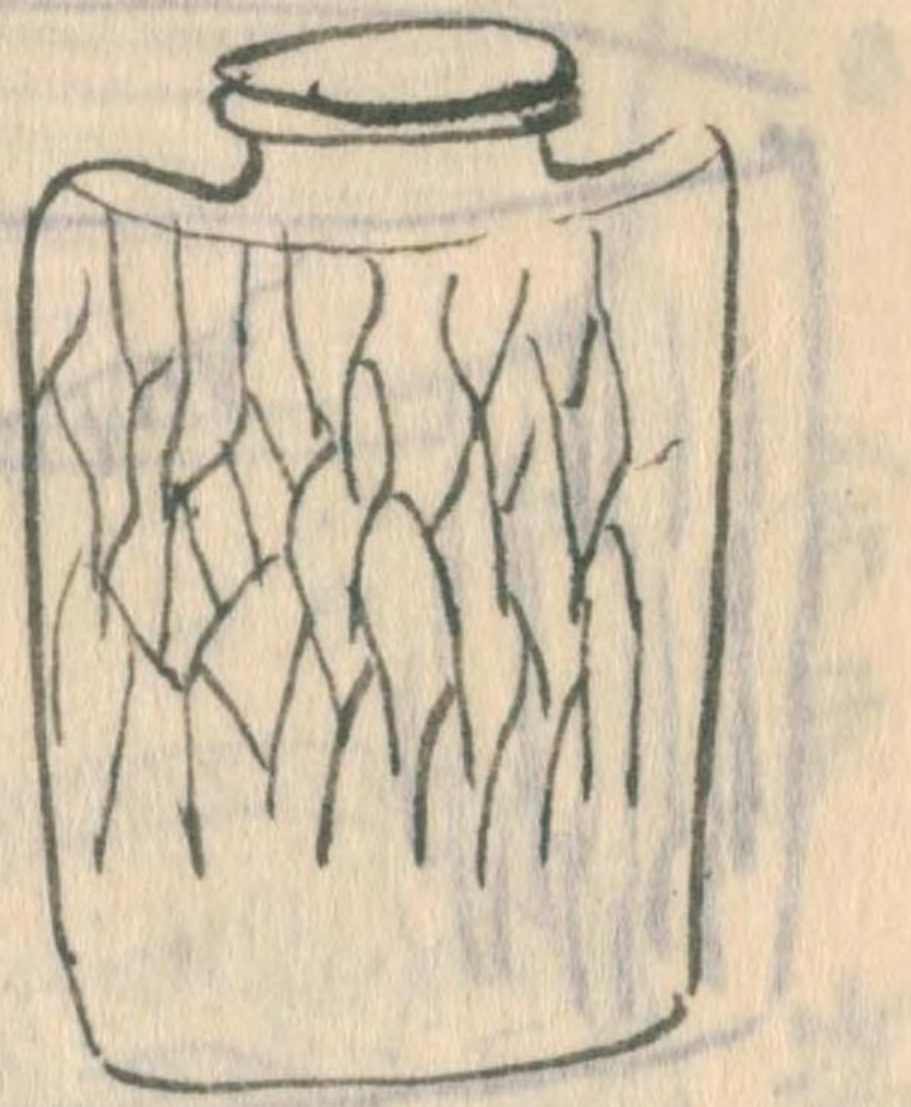
土赤

薬赤

のんこ

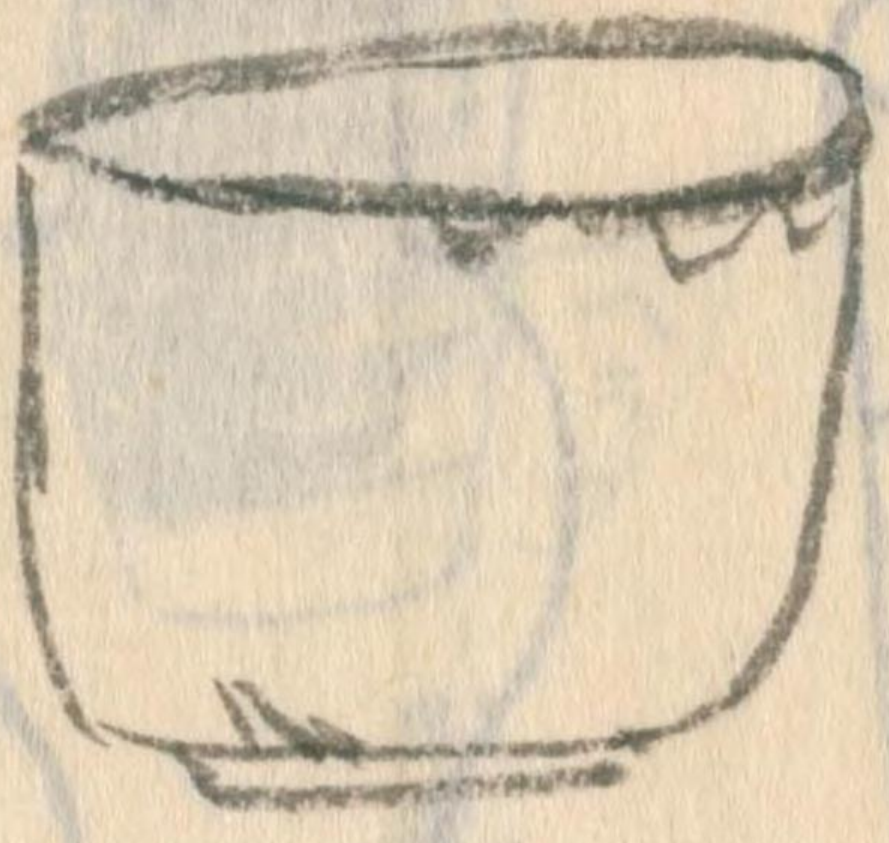


利休

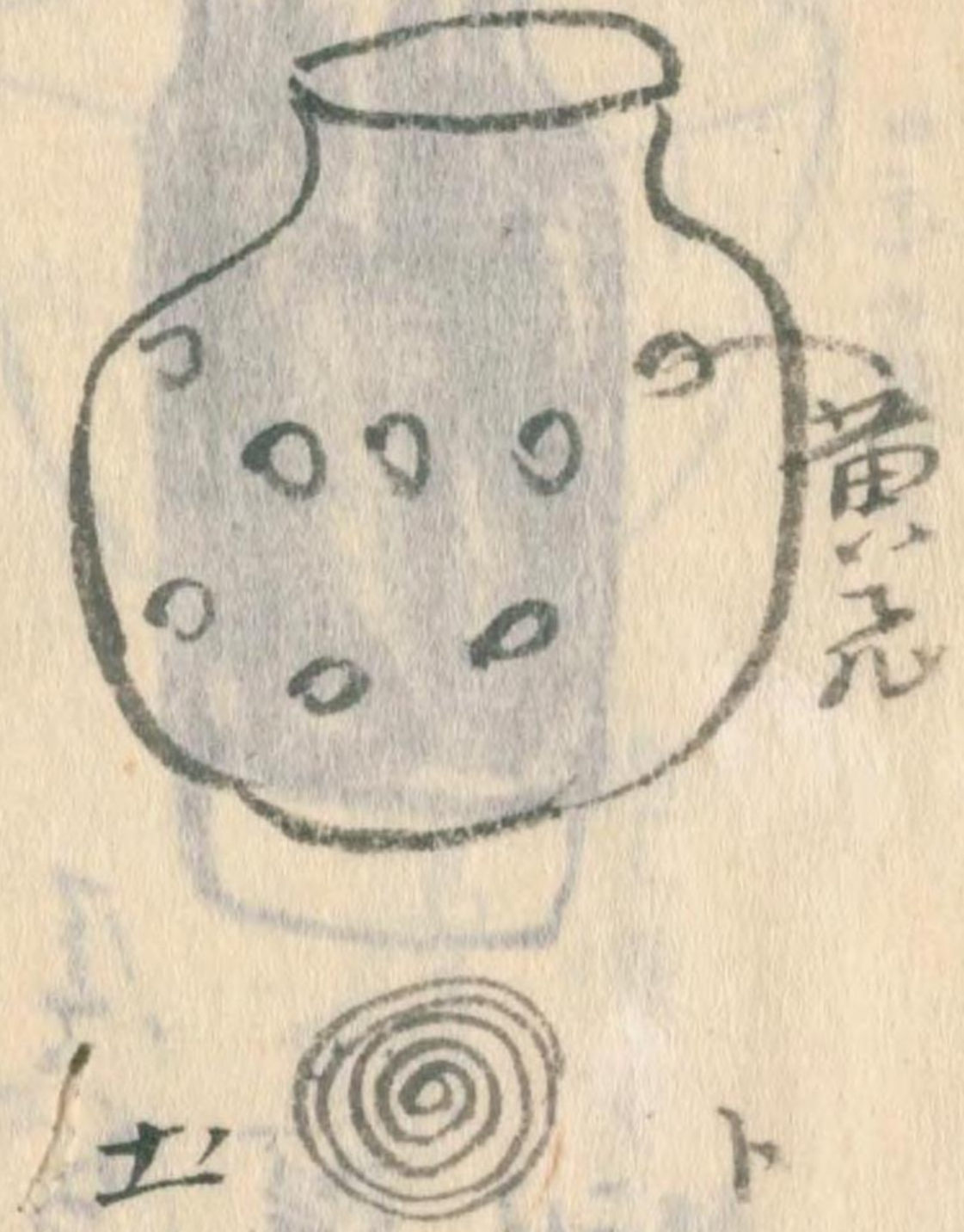


ミドロ

茶入

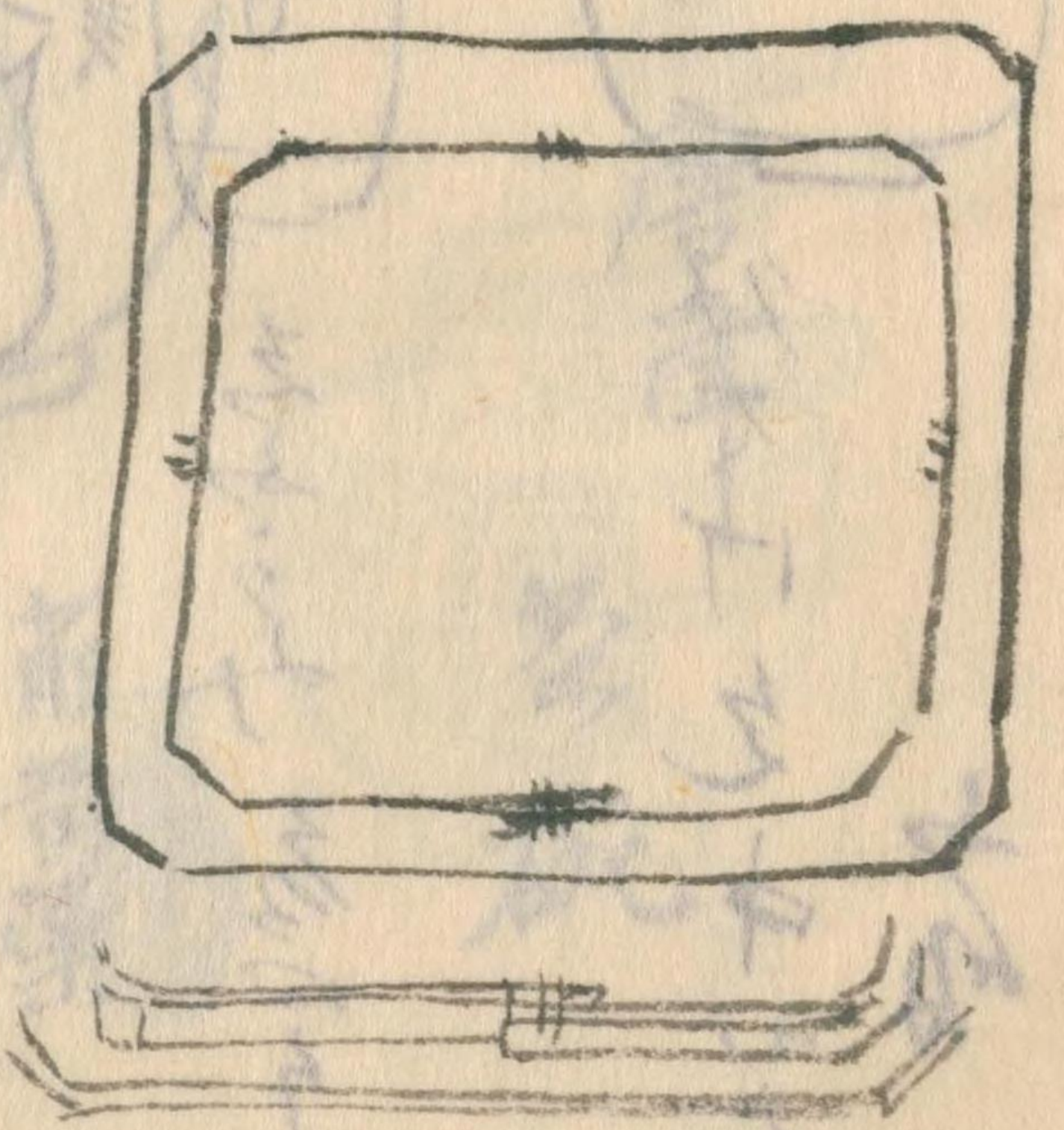


五本半筒



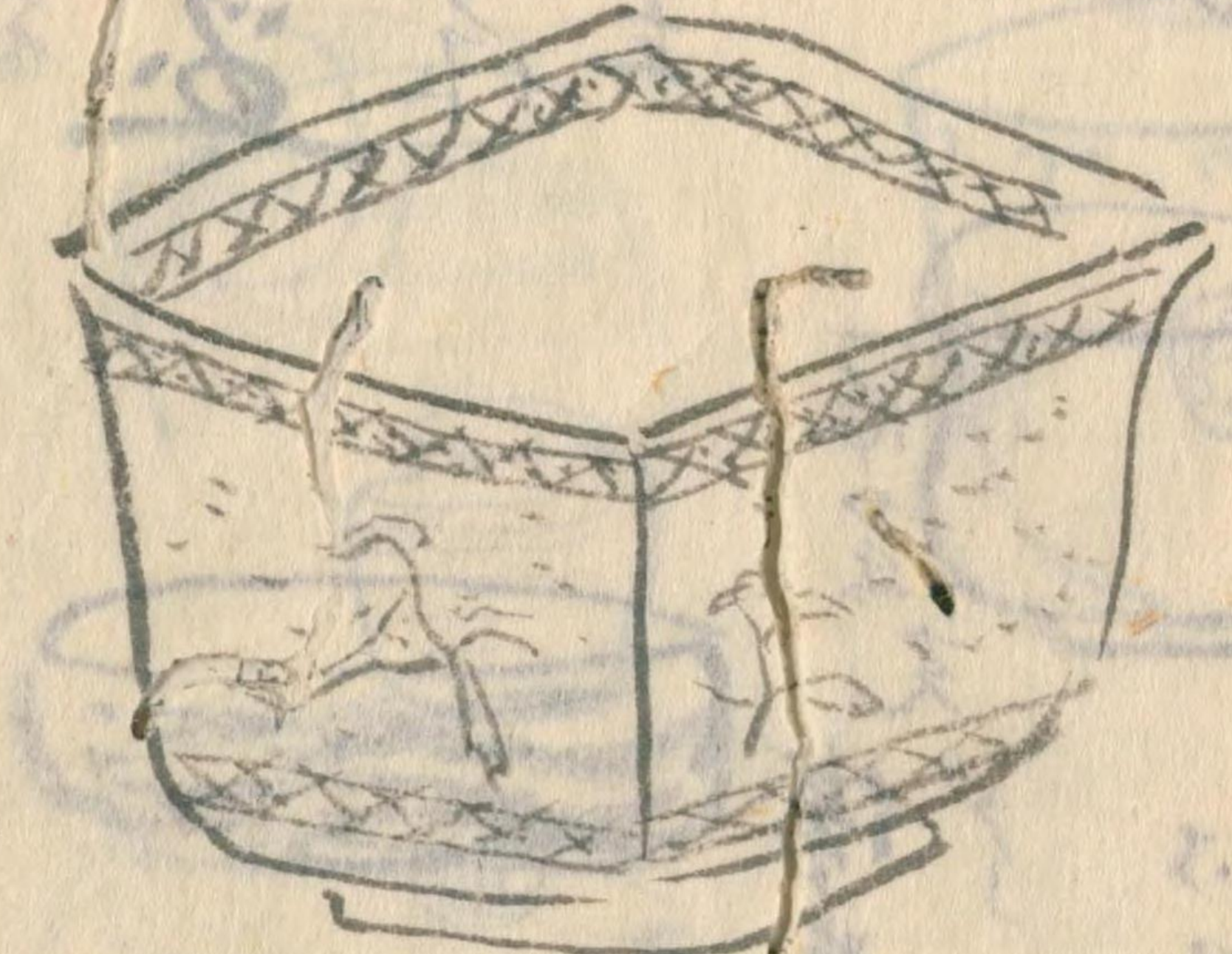
土前

トヒ春慶



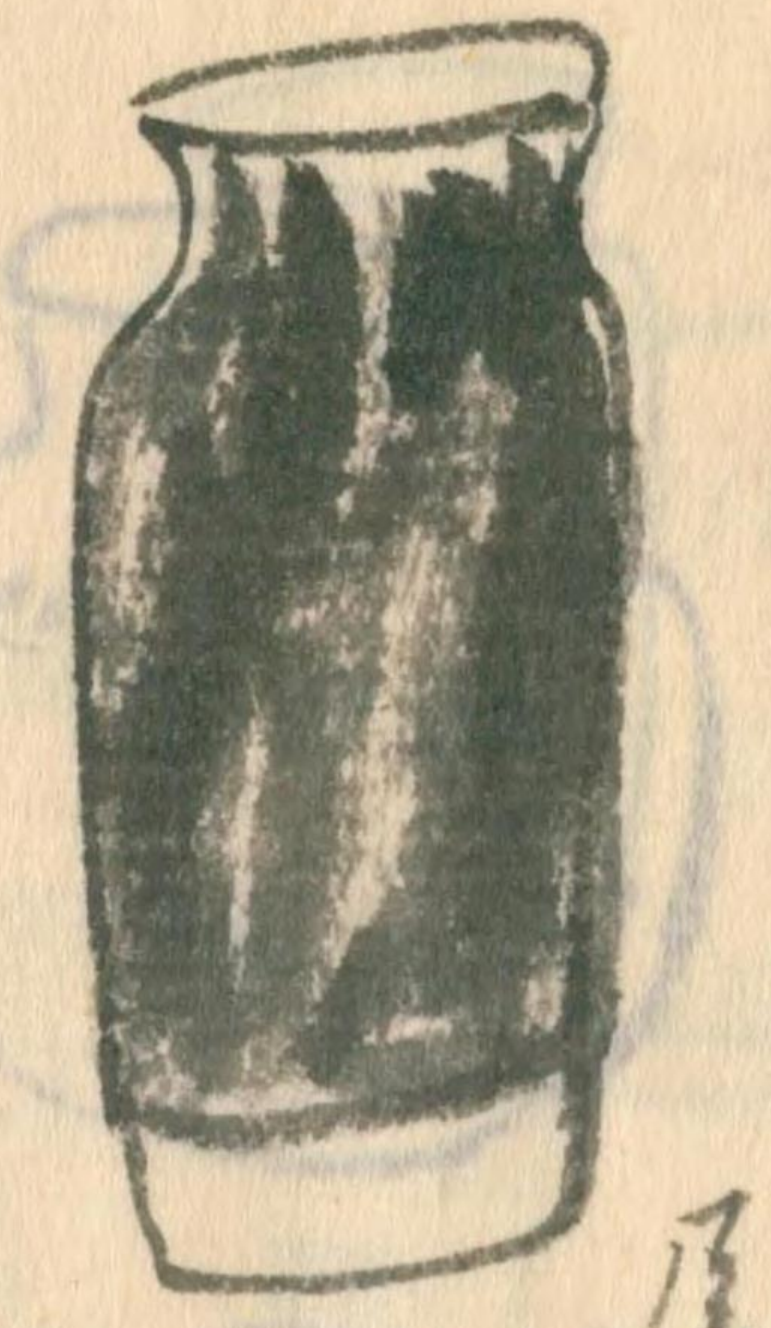
七碗

御本



乾山ノ名アリ

偽



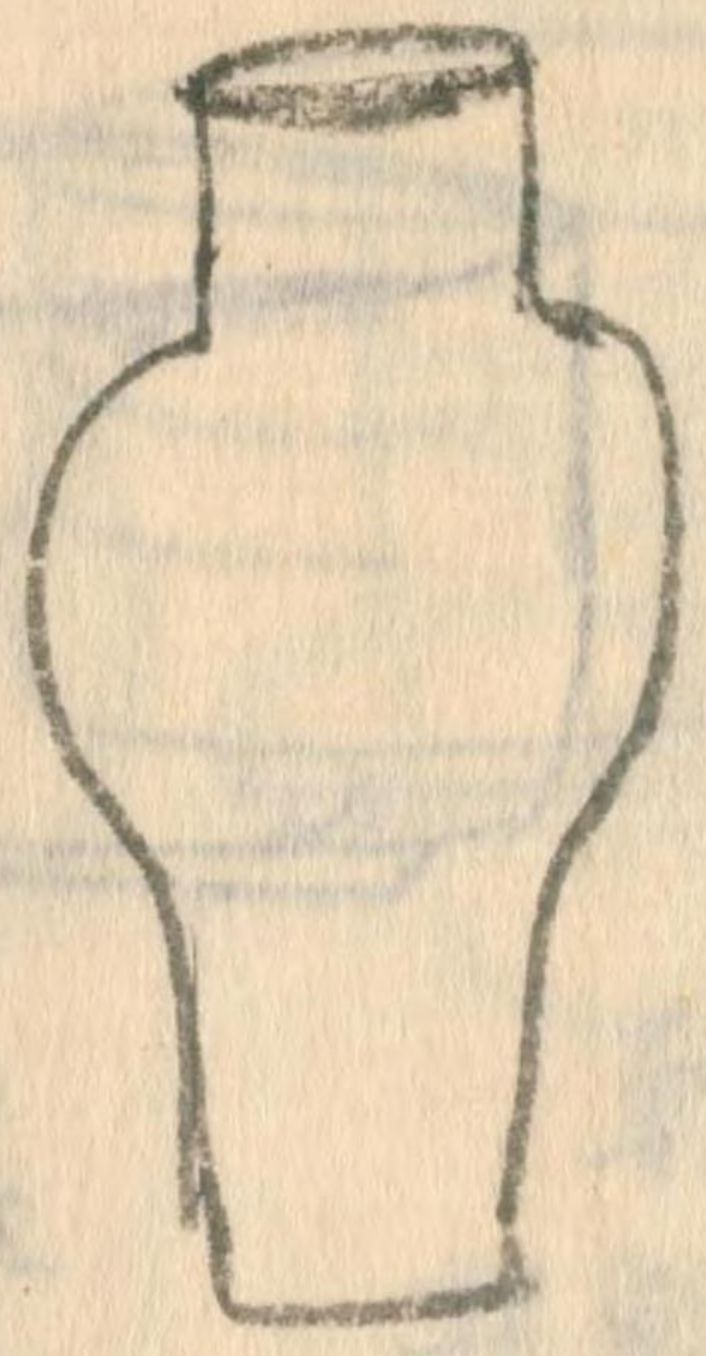
尾形蔵荘作

深井焼

祖母懐土ニ而作

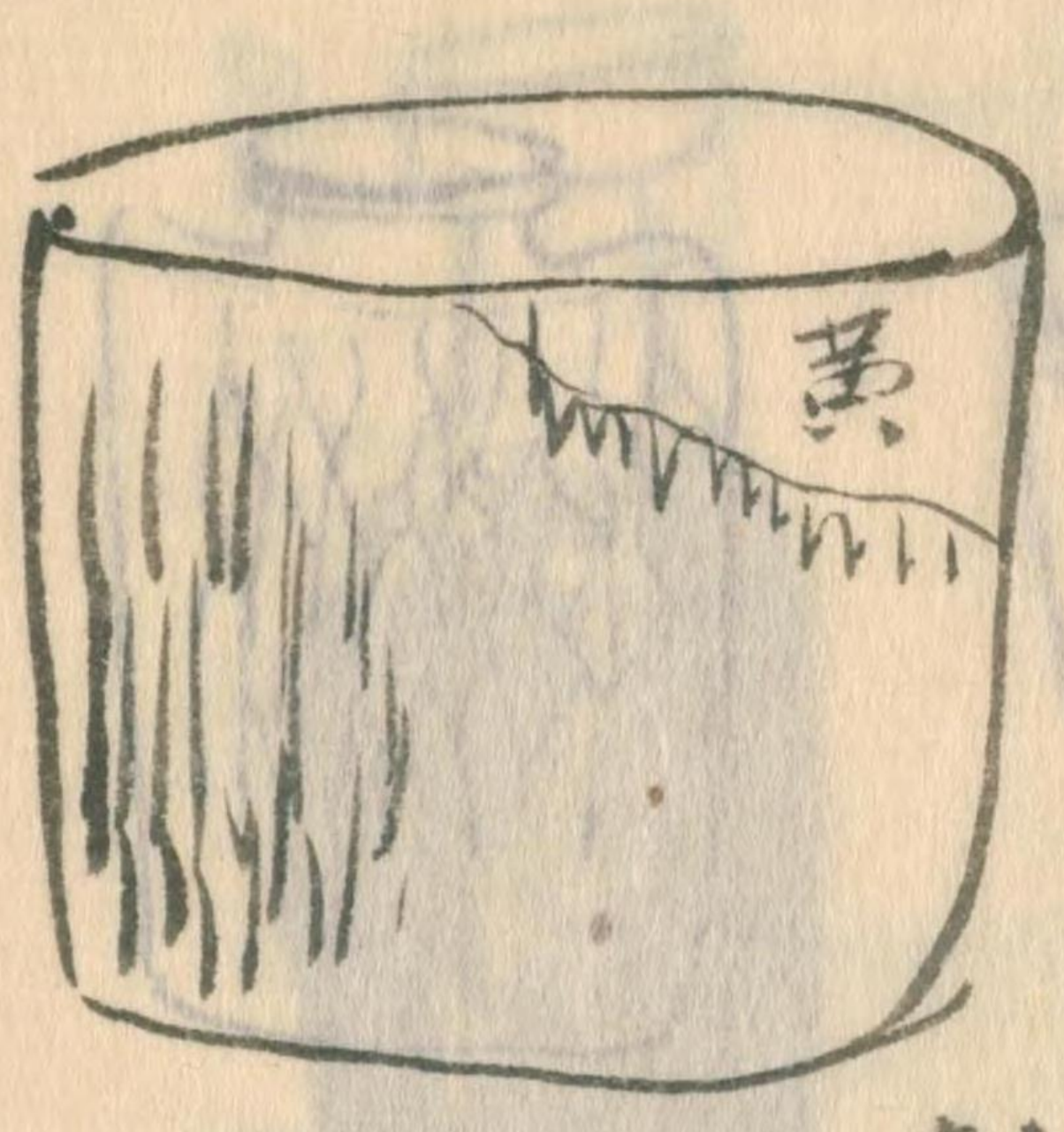
名黒立

[illegible]



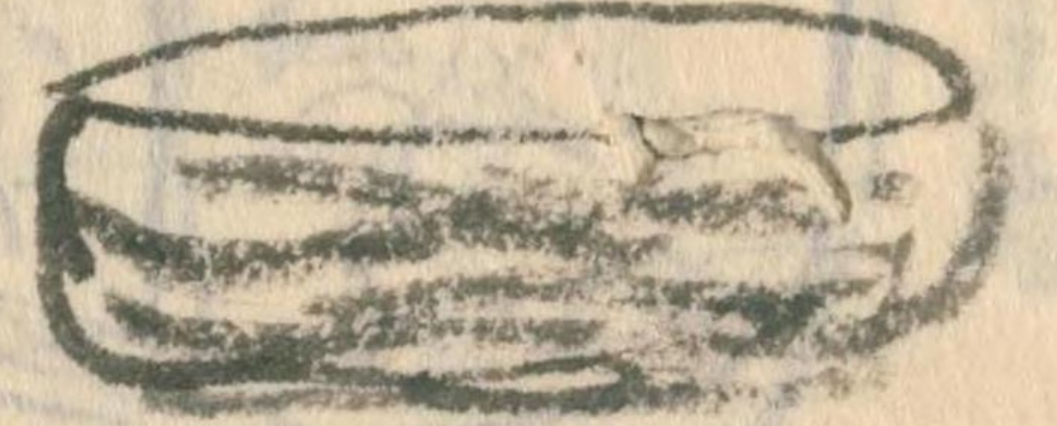
鐏

唐物茶入



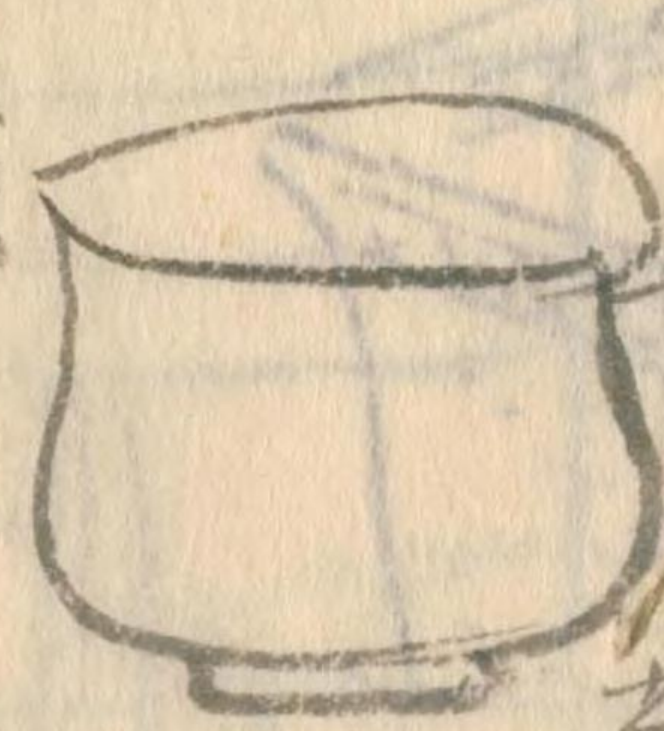
土風
火の色
アリ

伊賀



天けうろく

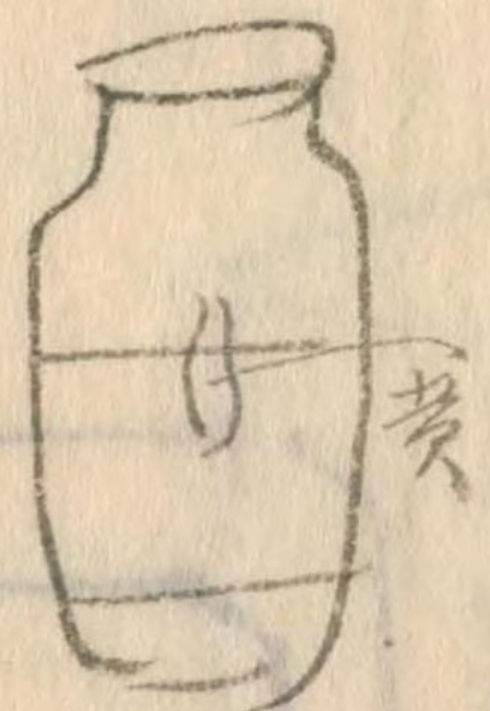
南竜



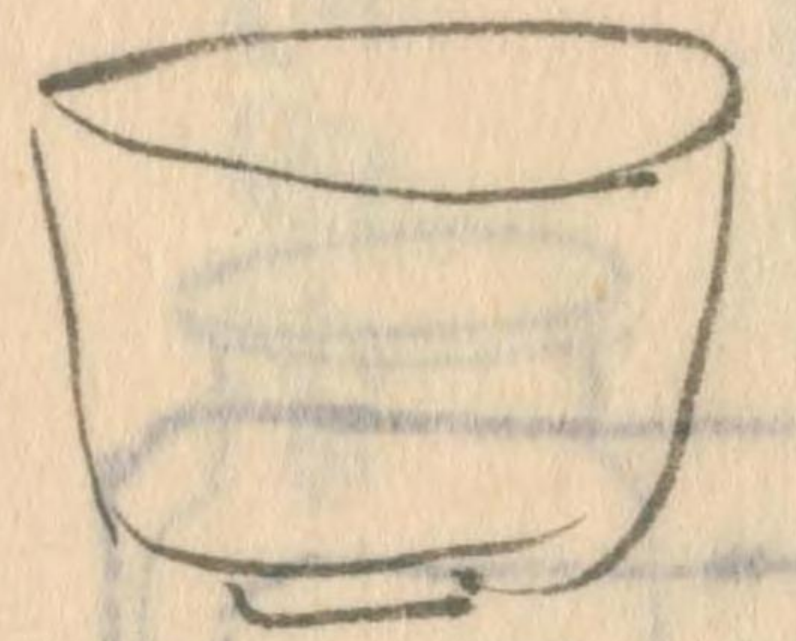
嵐
茶丸リアリ

備前
田土ヲ云説アリ

小花片手



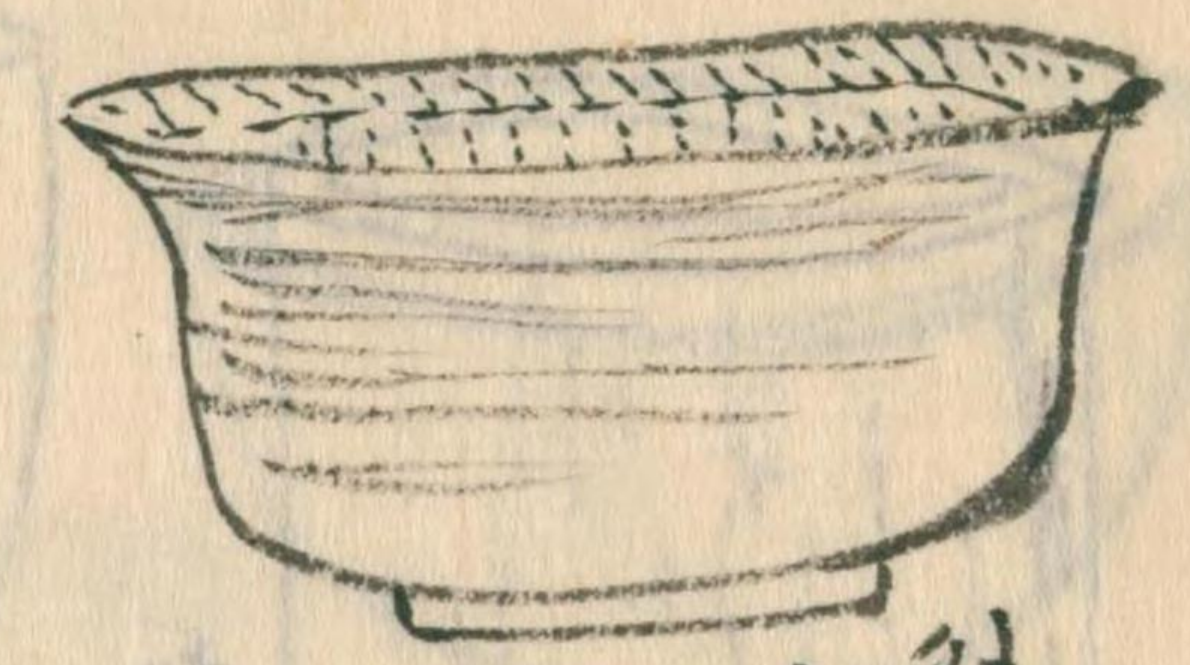
志のみ
高麗ト云



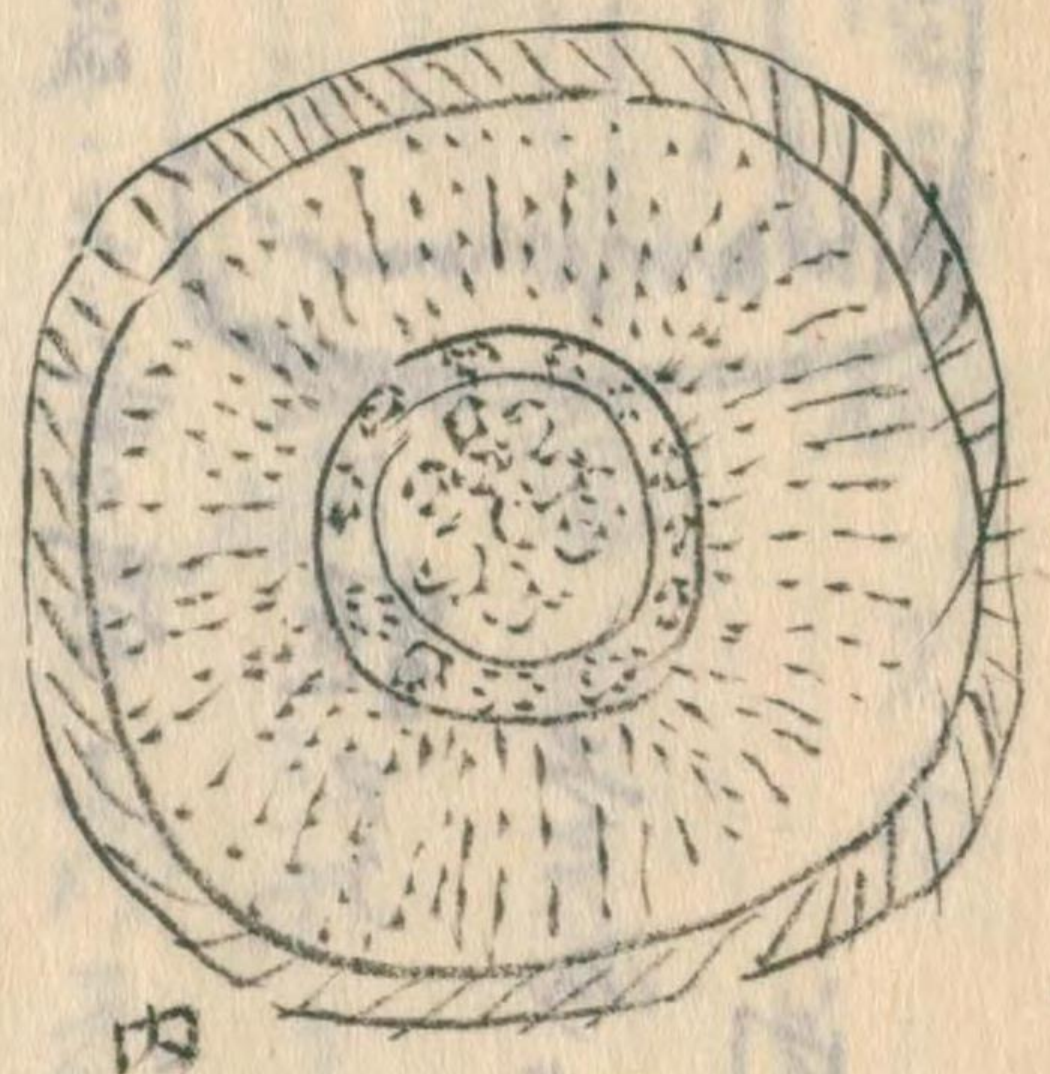
外たけ色
中わすみ色

備

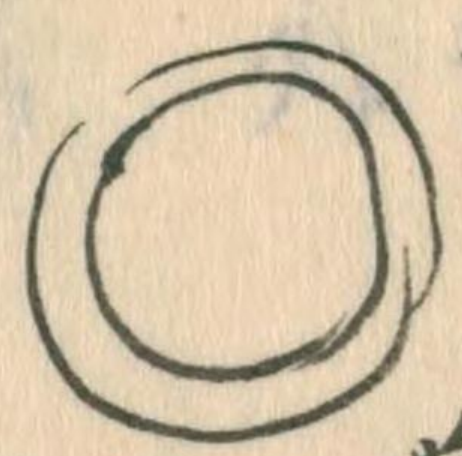
六月廿三日　今戸　岩瀬君亭



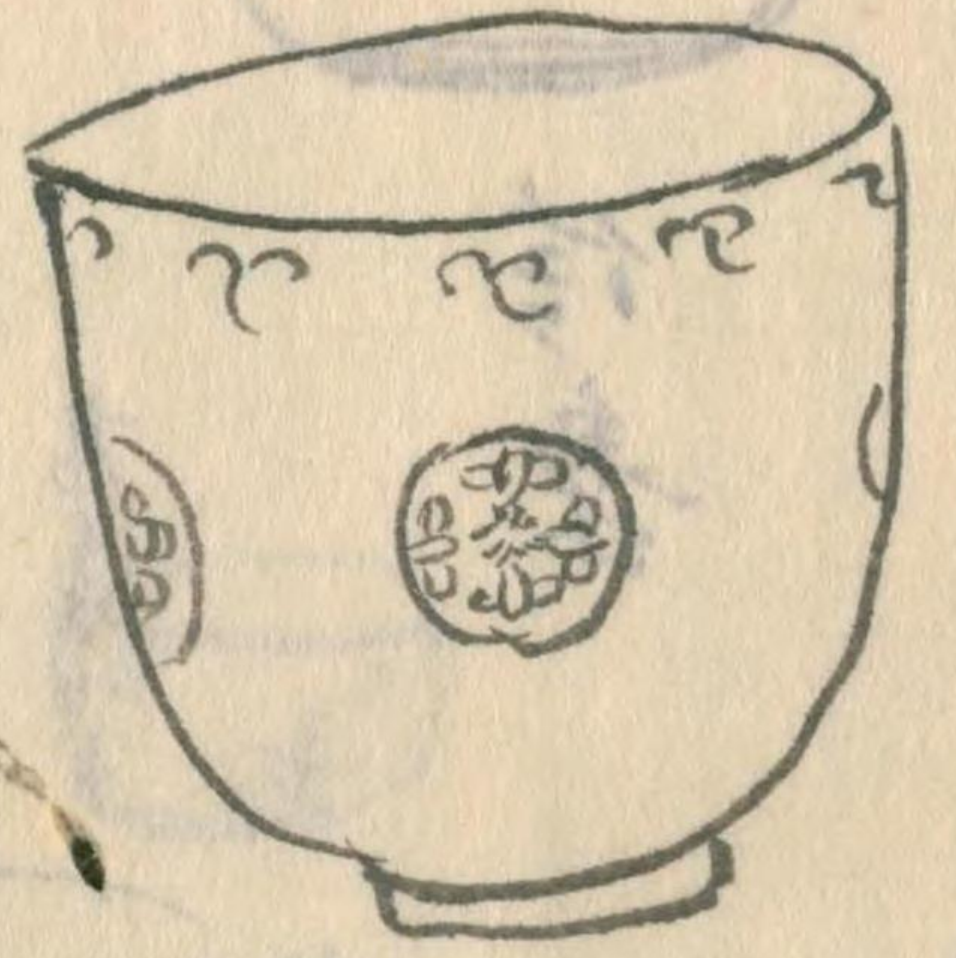
外
ハケメ



内小三ミ手

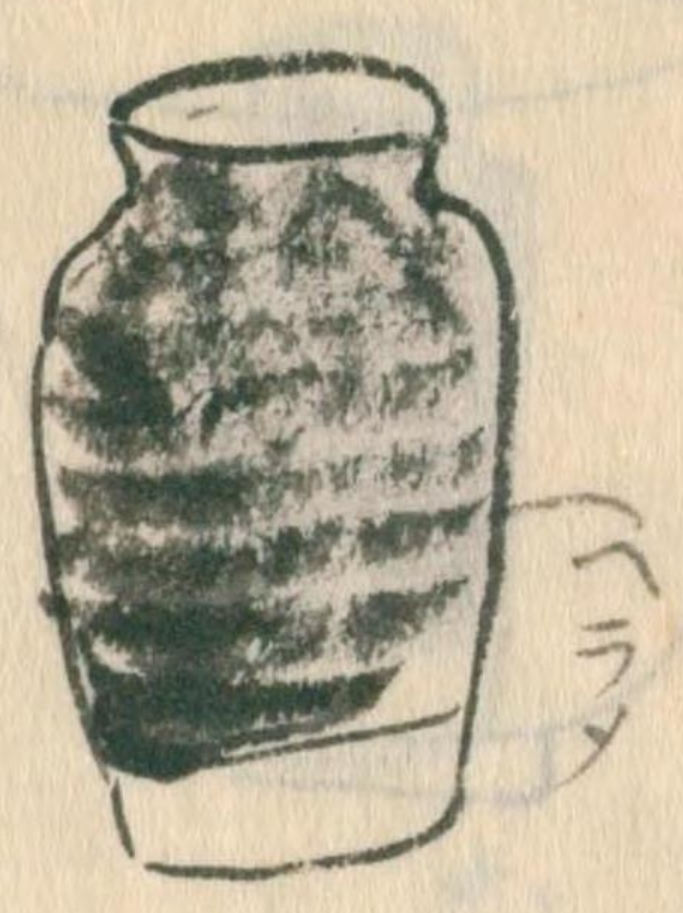


高台元下
片太

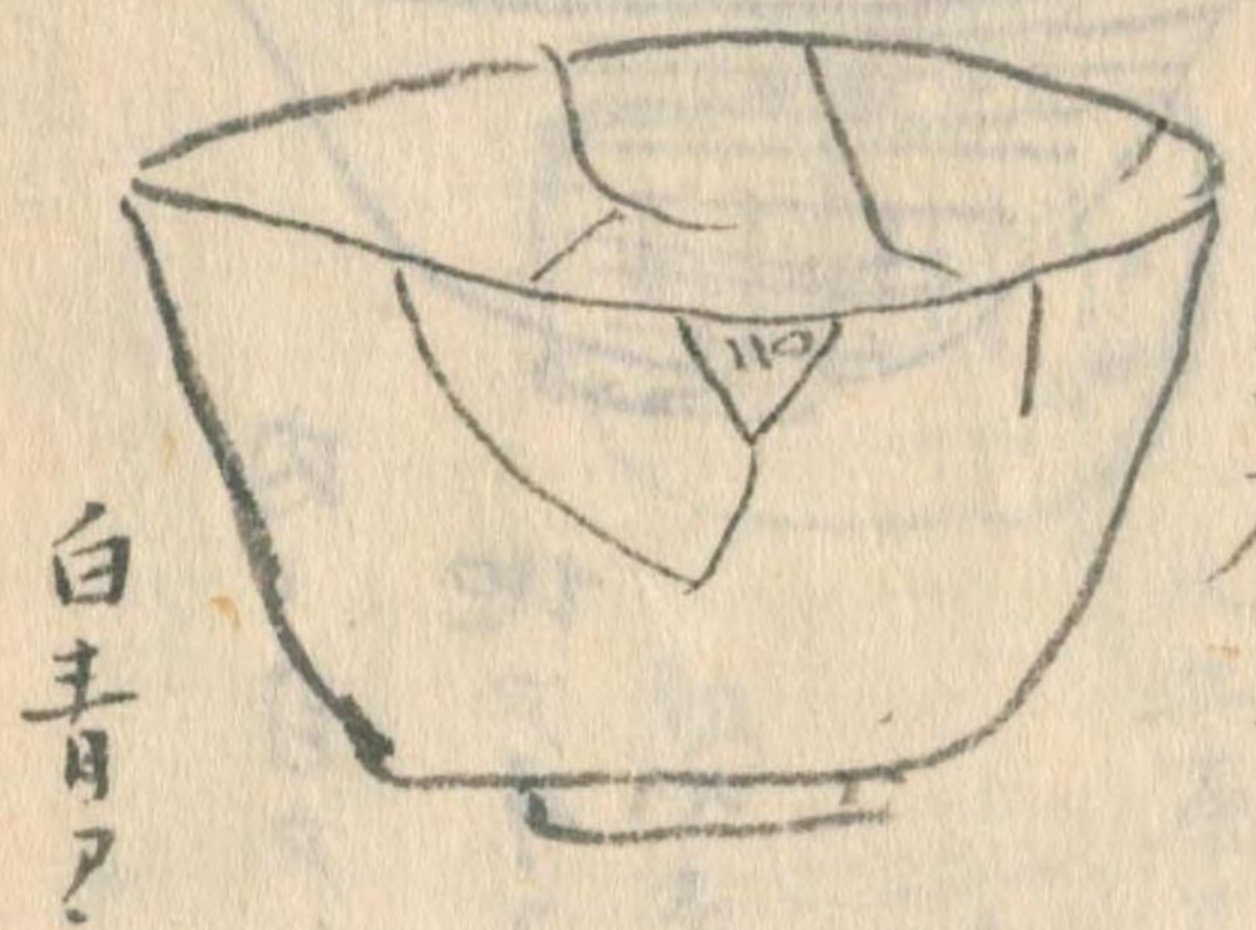


唐津
茶碗

萌黄薬
八代

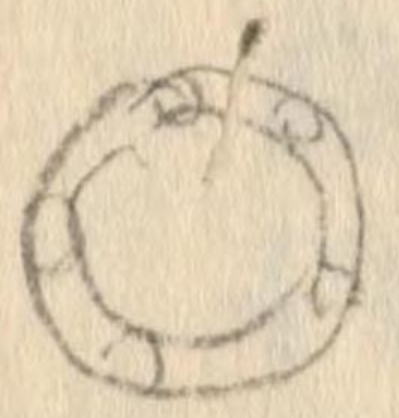


土赤
金花山



口ニ肩ヅキ

白青アミアル茶



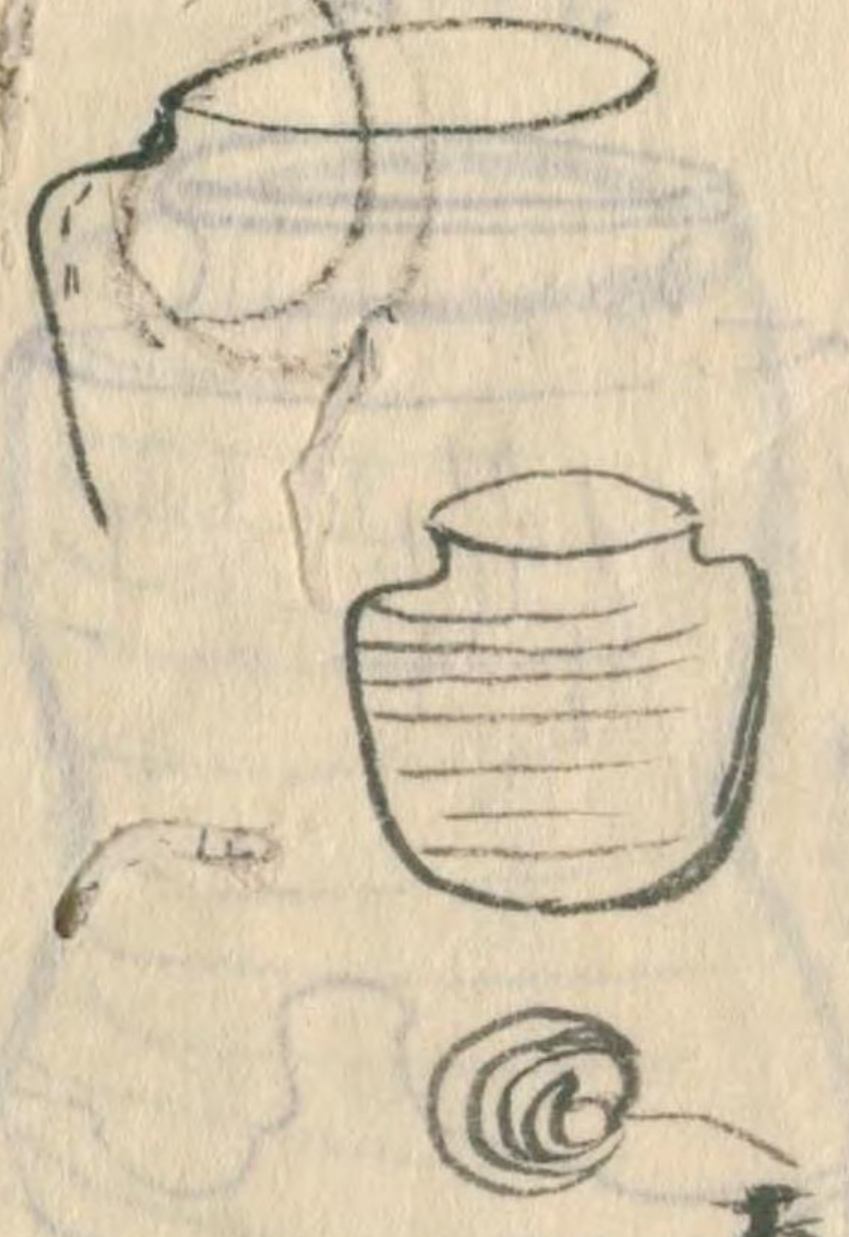
内ニ目アリ

高サ
置跡如図

片手

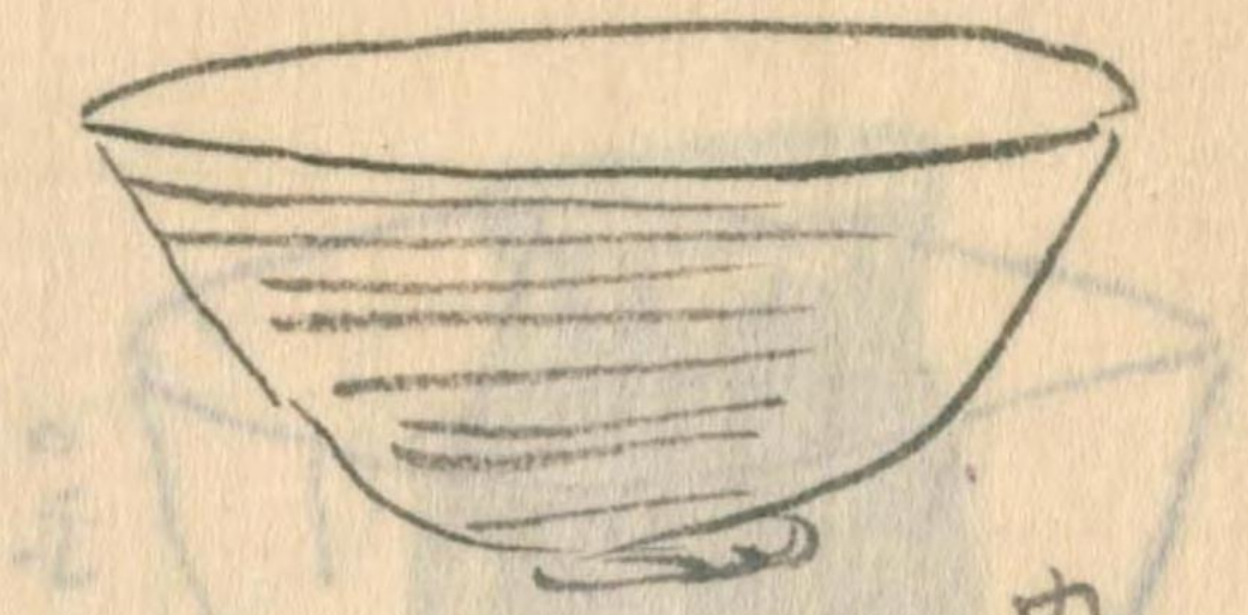
青井戸トモ
見ゆ

又井戸脇
トモ
見ゆ



赤糸切
土白大分アリ

竹楽

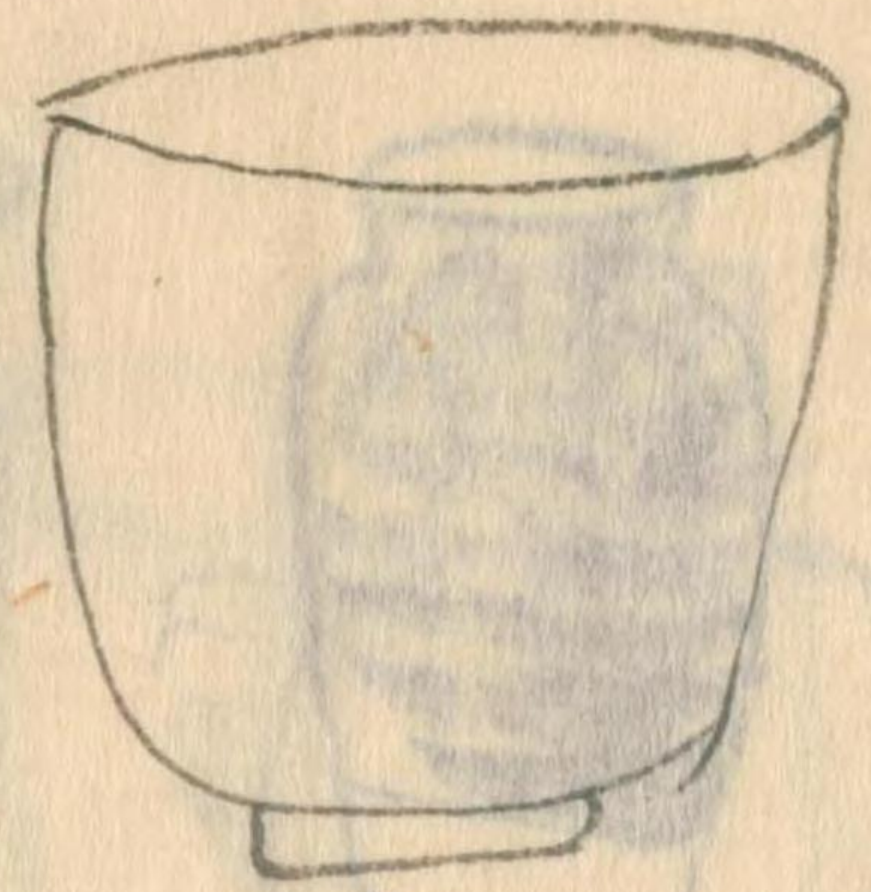

内ニ目アリ

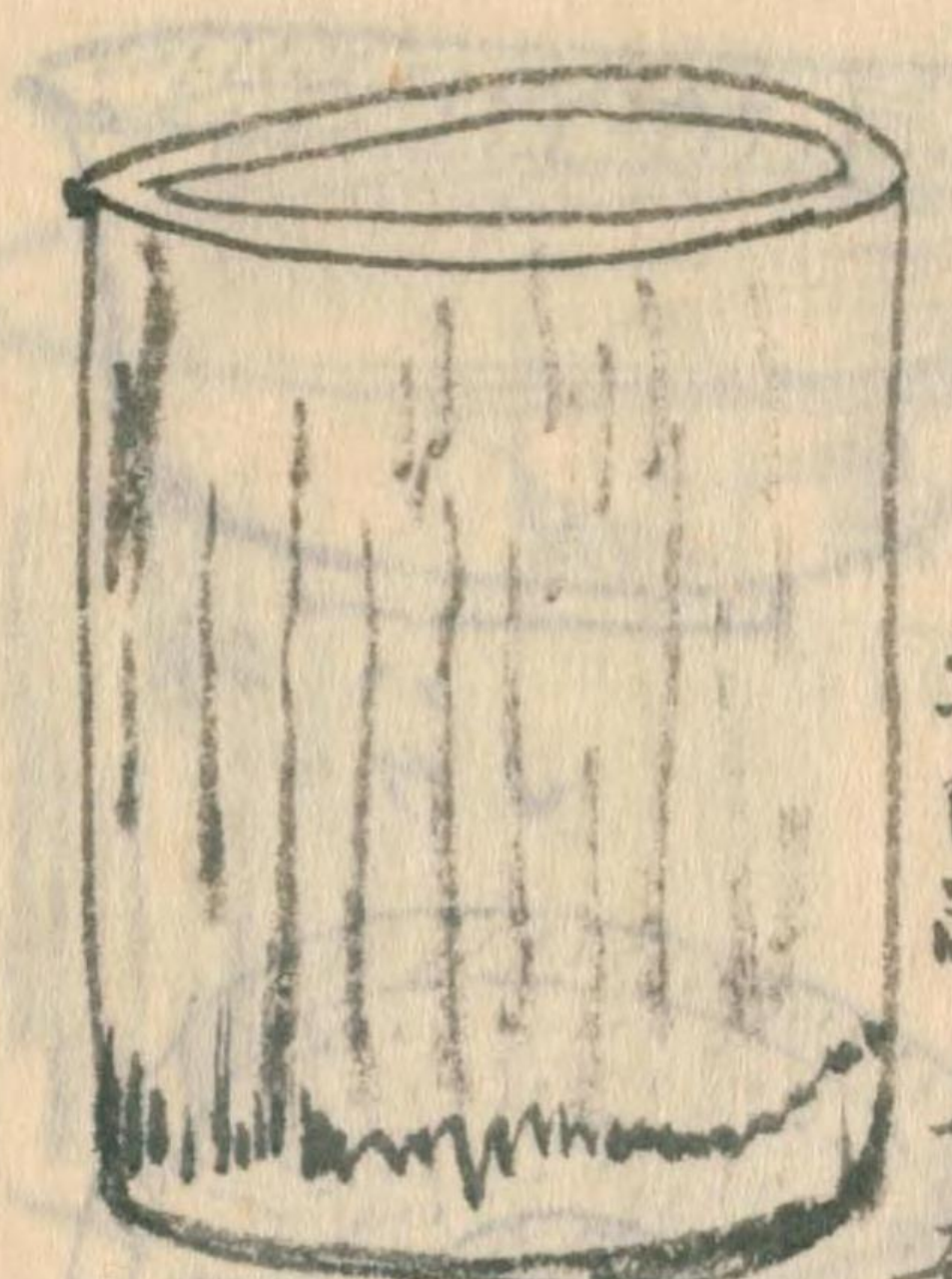
地アチ伴白ハケメ

イヤミ光澤アリ

朝鮮写

京焼

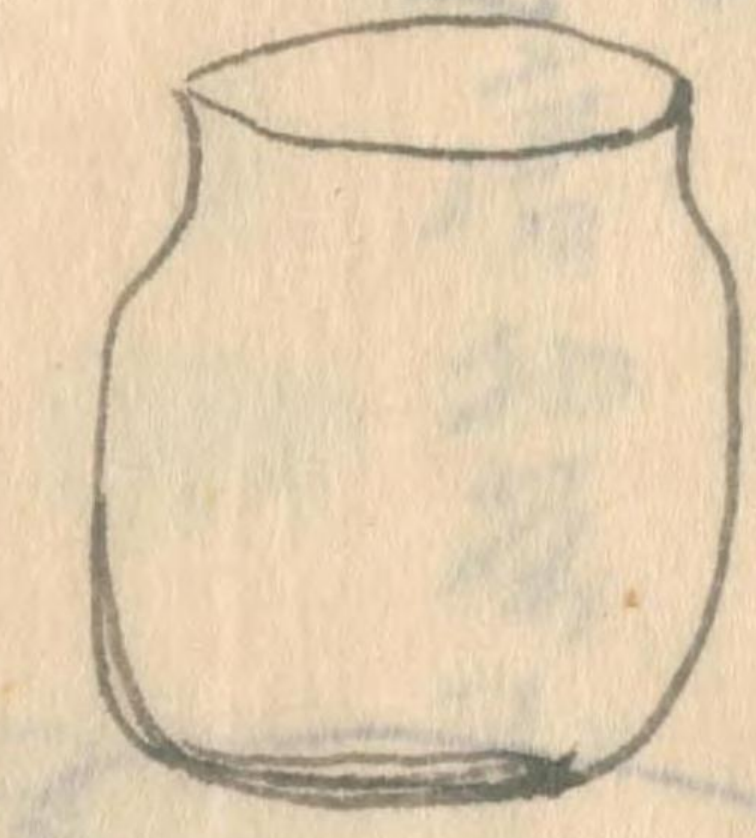

萩


土白尻ノ上ニ垂帯ア

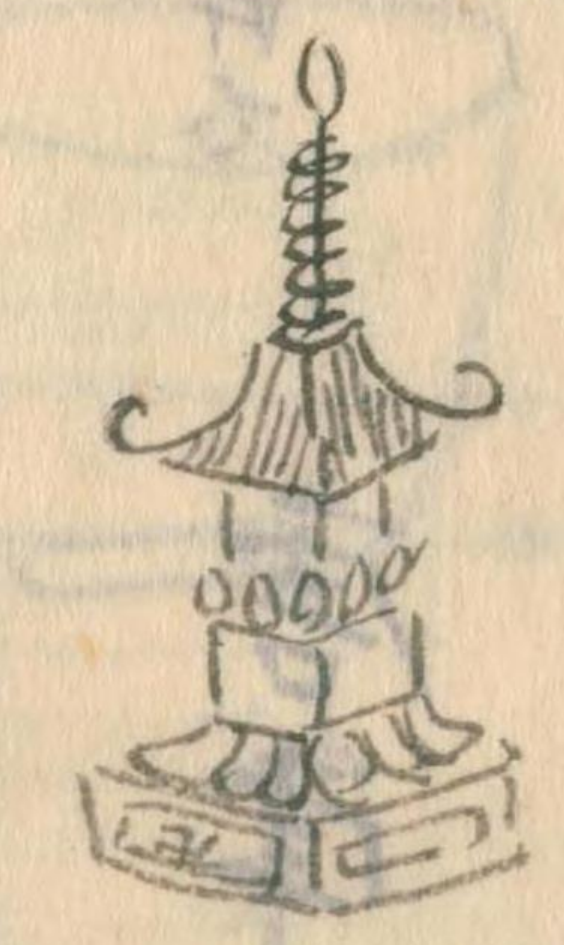
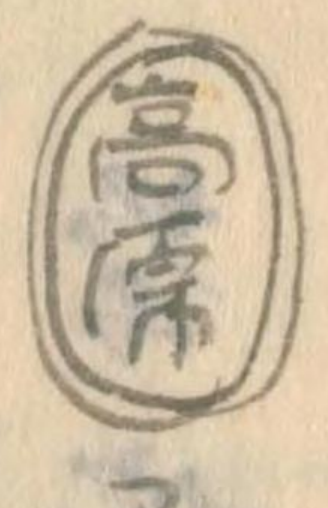
艶アリ

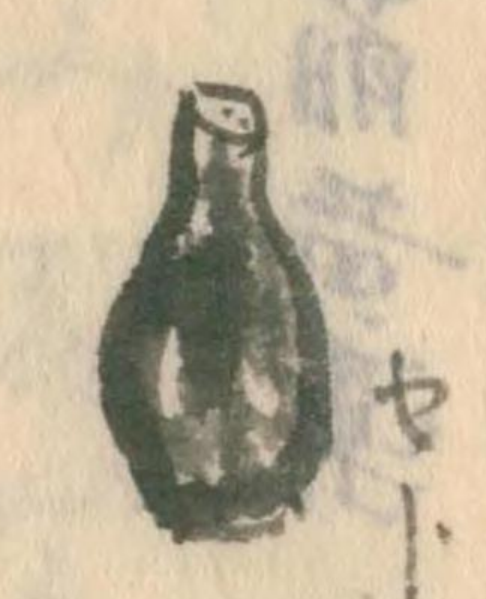
吉向時代

瀬戸

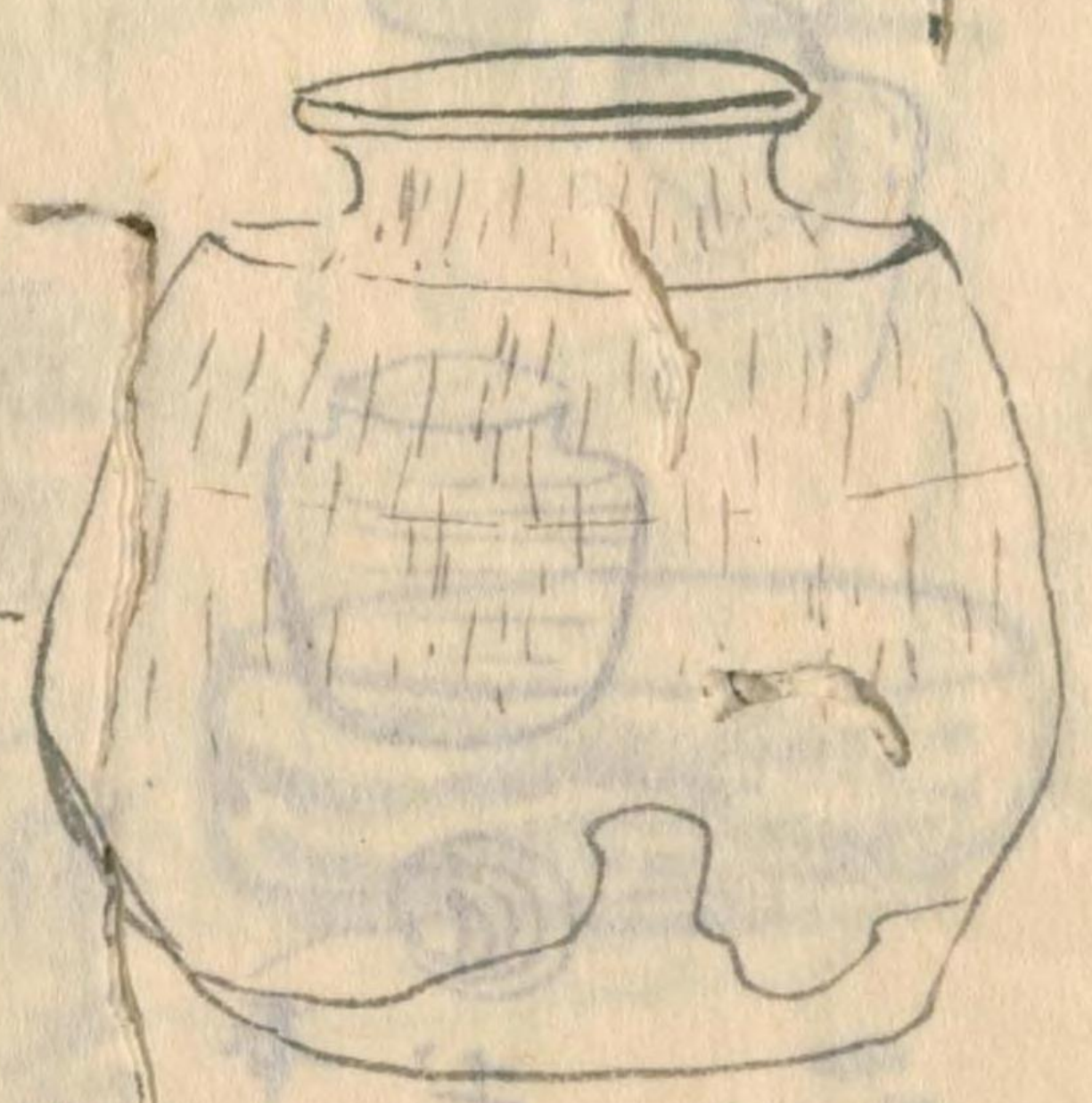

大八

信楽



高原アリ


セト

径二寸

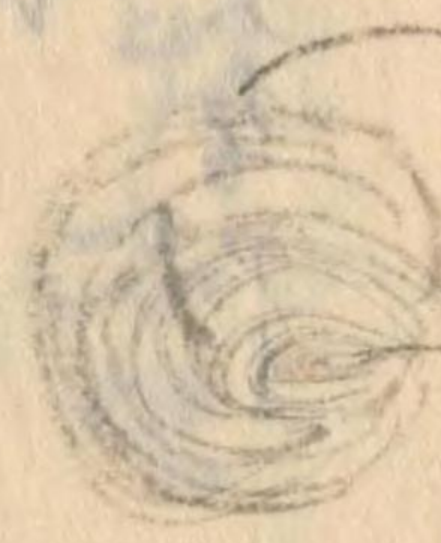

茂四郎之木手ノ茶入

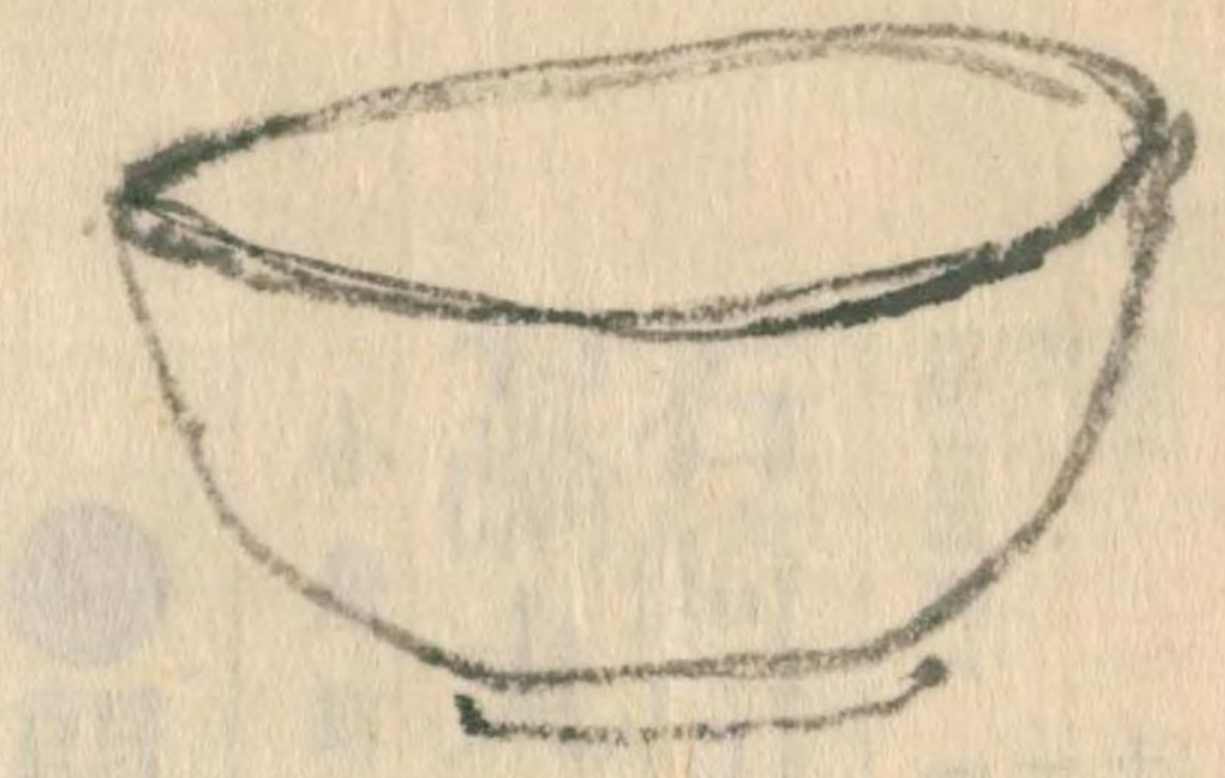
高サ二寸八分

底ハシタト

天目ニ示 天目トミ存外

此葉アリ

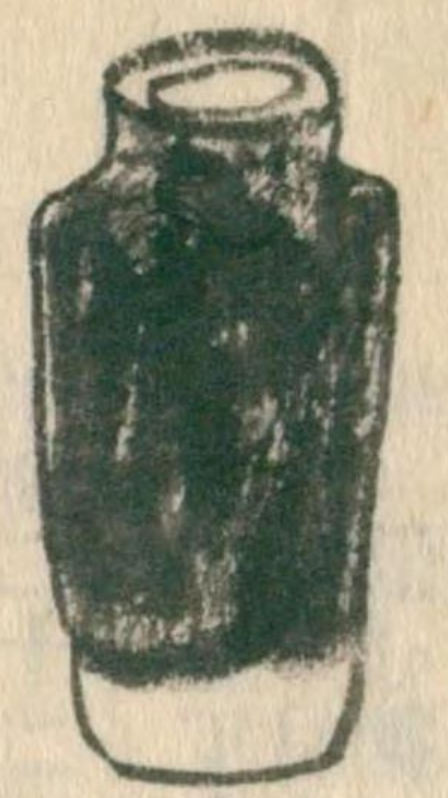

底ハ子ニト

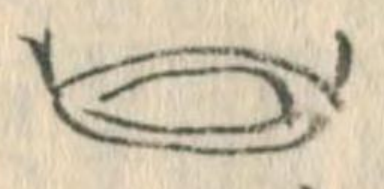

白青磁トス由

御蔵井手

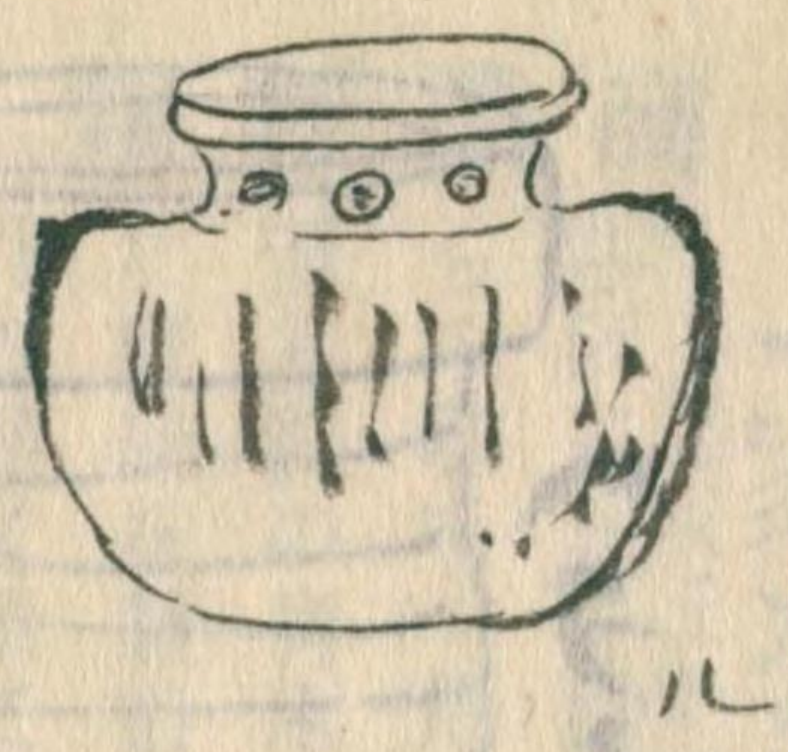
底ニシホリアリ

御蔵ノ例之


土黒


底切アリ

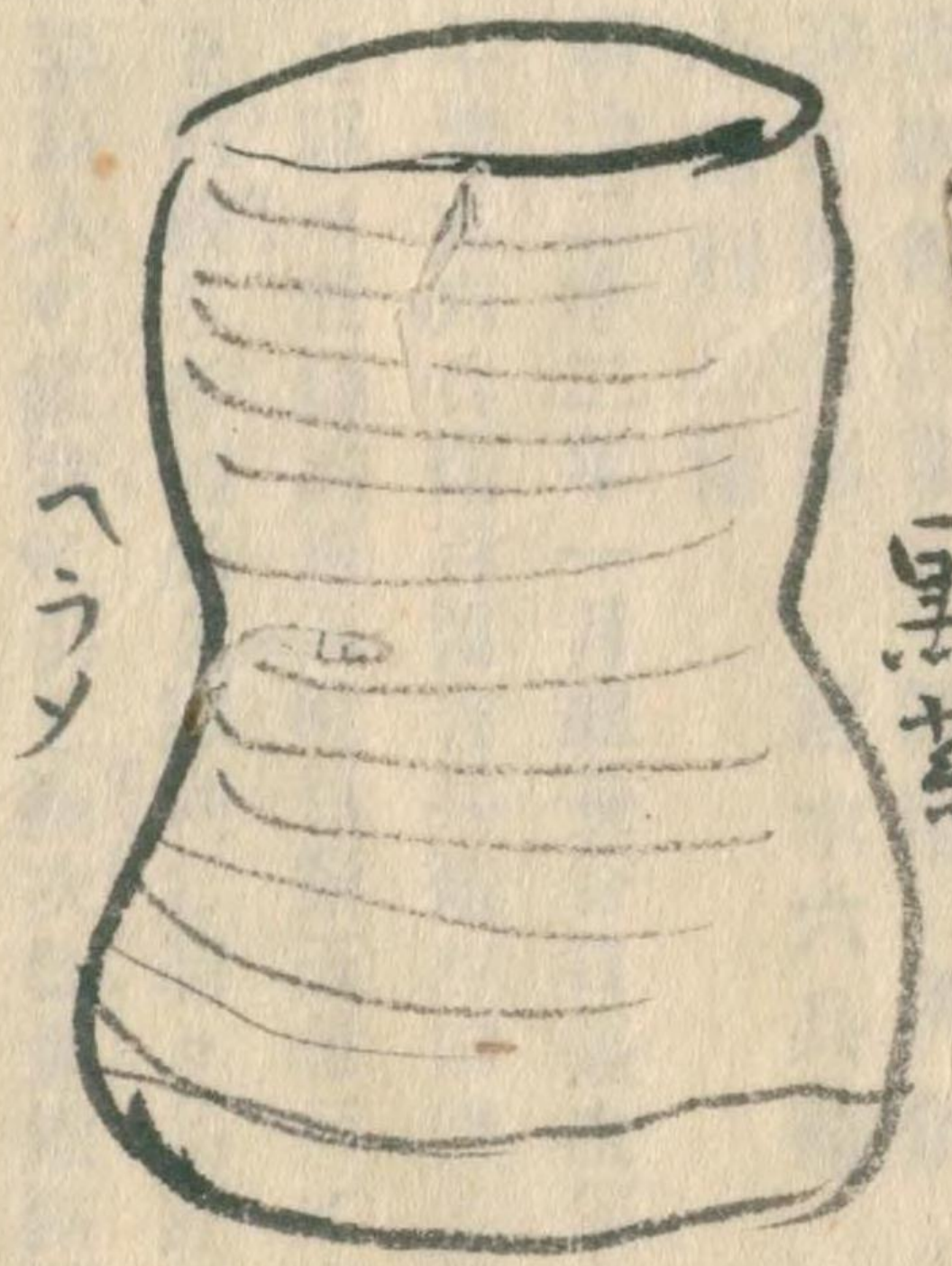
瀬戸


ハエ座アリ

湯気印

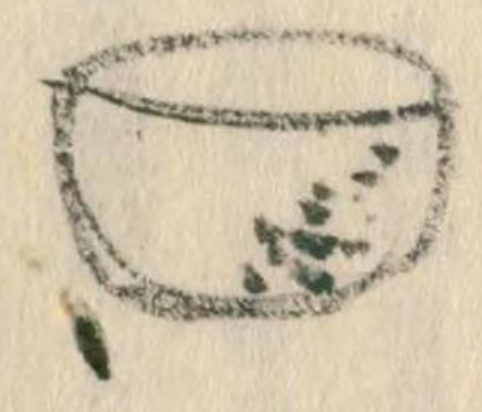
伊勢春慶

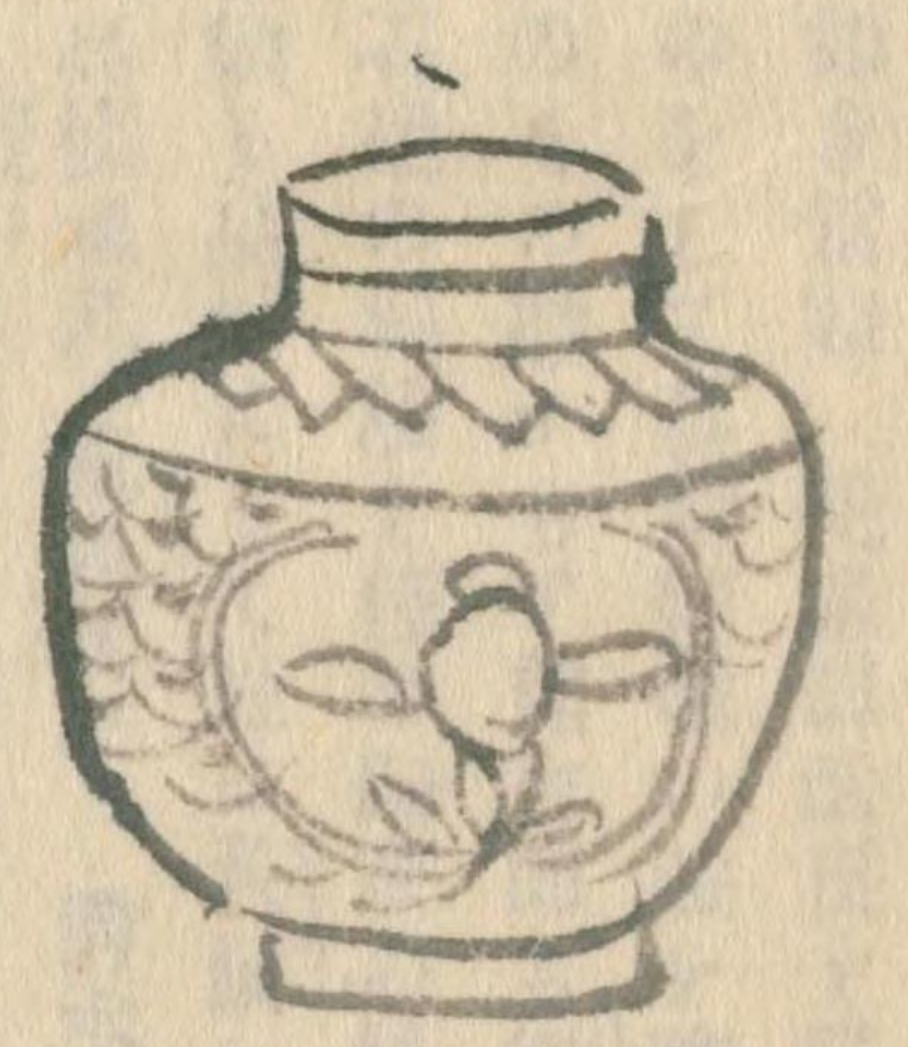
萬古


ヘラメ

黒楽

後ウト


基清ノ器


呉洲

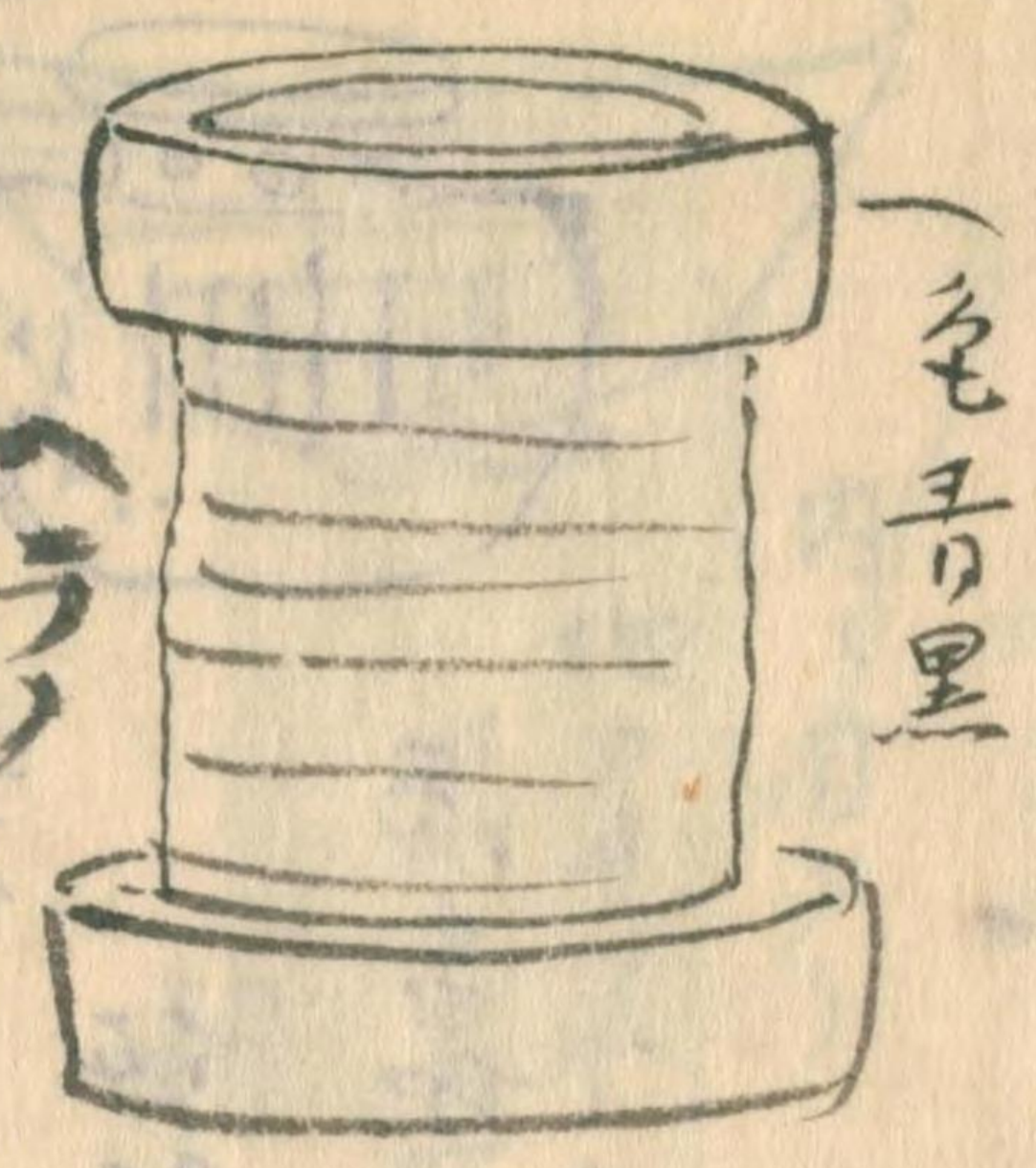
明治二十二年十二月十四日　土曜日
中外商業新報　第二千三百十九號　(三)

●京都五條、清水燒の起原　に就き京都より左の如く知らせ越したれを爰に掲げて同業者の參考に供す

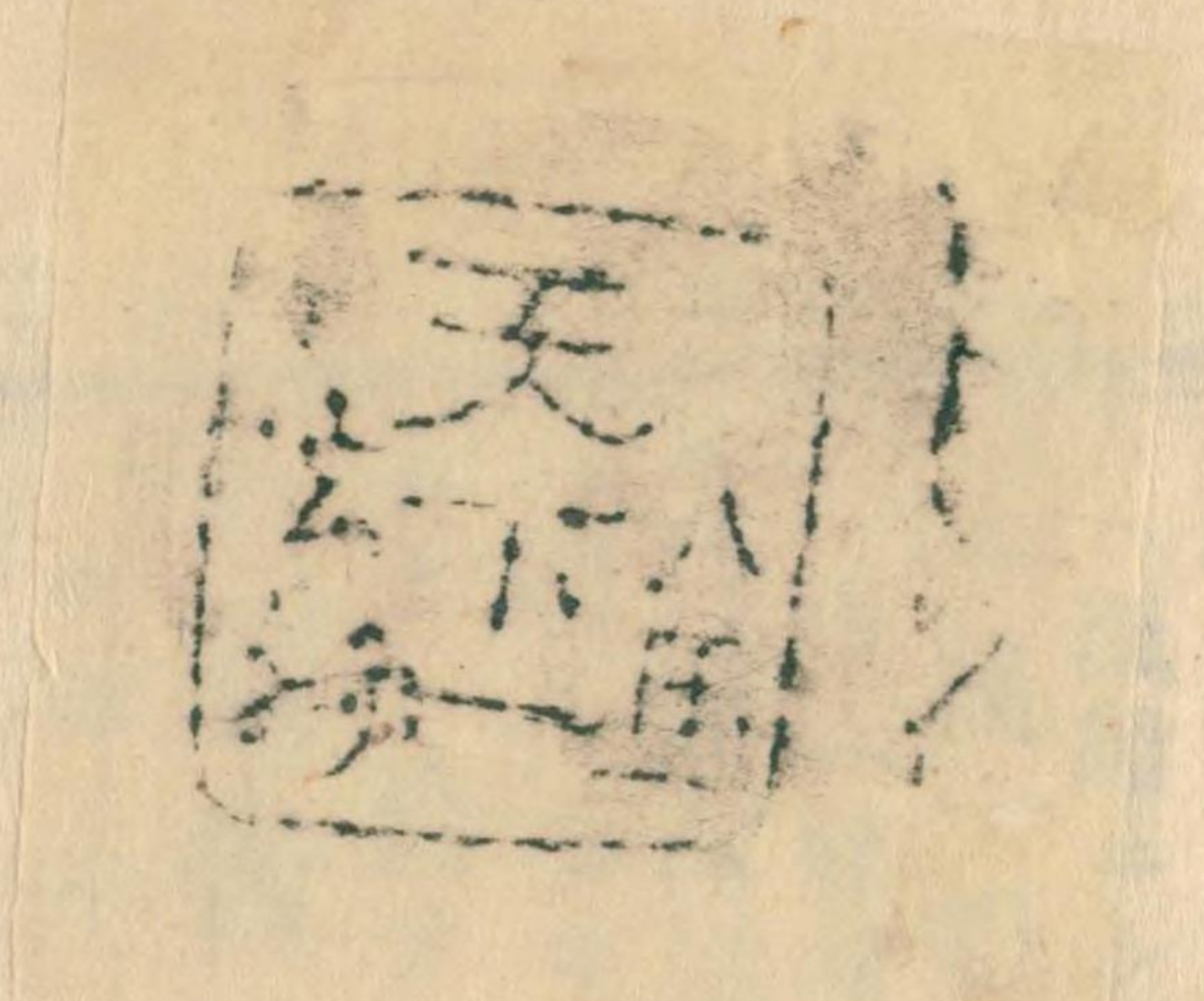
土器の始めは大己貴命の時茅渟縣(今和泉國大鳥郡湊村なり)大陶祇と云人創製すと云　聖武帝の御宇僧行基詔を奉じて愛宕郡清閑寺村字茶碗坂にて土器を製出す今其地に古跡あり之れを京都清水燒則五條阪清水阪陶器營業の祖とす而して桓武帝の延暦年中洛北、鷹ケ峯に瓦窯あり平安城の碧磁を造る尋て後鳥羽帝の元暦年中に至り洛南、深草の地に窯を移し專ら器物を製す而れとも其製粗にして釉藥なく俗に云ふ燒〆の類なり降つて正安年中伏見帝の時用禪寺の僧に徑正なる者あり此僧製陶に委し偶々深草の瓦工某に之れか製法を授く是れより同地の瓦工其法に據り往々陶器を製す然れとも尙火力強度の法を詳にせさる爲め惡な陶を成さず後桃園帝の寶德年間愛宕郡清閑寺村の工人音羽九郎右衛門なるもの前記茶碗阪の遺跡を發見し爰に深草の窯を移し亦陶を製す而して其製未た堅良ならさるも亦稍全きに至れり後又澁谷の土人に元吉なるものあり深草製の古法に據り之れが改良に苦心し竟に釉藥のことを發明す其後天正及ひ慶長年間正意、萬右工門、宗伯、六左工門、宗三、源介、源十郎等の各工輩出し皆陶業に從事す各工(音羽、清閑寺、小松谷、清水等に住す號を音羽又音羽屋丸屋等を以てす)然るに茶碗屋久兵衛なる陶工あり金赤青等の彩色を發明す(奇説あり俗に云碗久之れなり)而して慶長晩年に至り窯烟の同地阿彌陀ヶ峯豐公廟を蔽の故を以て移轉を命せらる仍て五條阪に窯を移す後寛永年間野々村清兵衛清水、産寧阪に窯を築づき專はら雅器を製し大に世に賞せらる尋て、尾形乾山、種々製陶す就中文化年間に至り彼の靑木木米博ろく濃土の陶法を研磨し盛んに雅器を製出し且つ陶説を世に弘めて以て國益を計る是に於てか五條清水の製陶亦た漸やく進歩し從て京窯の名聲世に顯はる而して此の時に當り尙ほ高橋道八、清水六兵衛、清風與平、龜亭平吉、水越與三兵衛等の工人輩出し皆な其の業に聲名あり殊に磁器の創業ハ文化九年三世龜亭平吉、尾形周平の如き當時　花磁器改良を謀り龜亭門弟熊吉なるものをして各地製磁の法を研究せしめ大に勉むる所のもの尠からす熊吉即ち經歷し遂に肥前有田にて石磁の秘法を修め歸京の後ち之を驗製せしに其製頗る良好にして玆に舊製を一變するに至れり爾後高橋道八、清風與平、清水六兵衛、其他輩出し尙ほ其製を練磨し遂に金襴彩畫等の美術品を製して廣く海外輸出の道を開き以て今日に至る是れ則ち清水陶磁器沿革の梗概なり而して明治十六年四月甲第十九號御布達及仝十八年四月第十號を以て同業組合準則御發布に基き五條清水の仝業組合を設置し商工奬勵して各製品の改良を謀る仝年より二十二年に至る商工組長に當撰する人員左の如し

吉岡吉兵衛　西田伊介　高橋道八
谷口長次郎　清水六兵衛　清風與平
小島利兵衛

明治二十二年一月組長谷口長次郎高橋道八清風與平清水六兵衛吉岡吉兵衛西田伊太郎等外二十一名と謀り五條橋東五町目第五番戸に京都陶器蒐集場を假設し各製品を陳列し時々品評をなす而して平素諸人の縱覽に供し漸次改進販路擴張を企圖すと云ふ

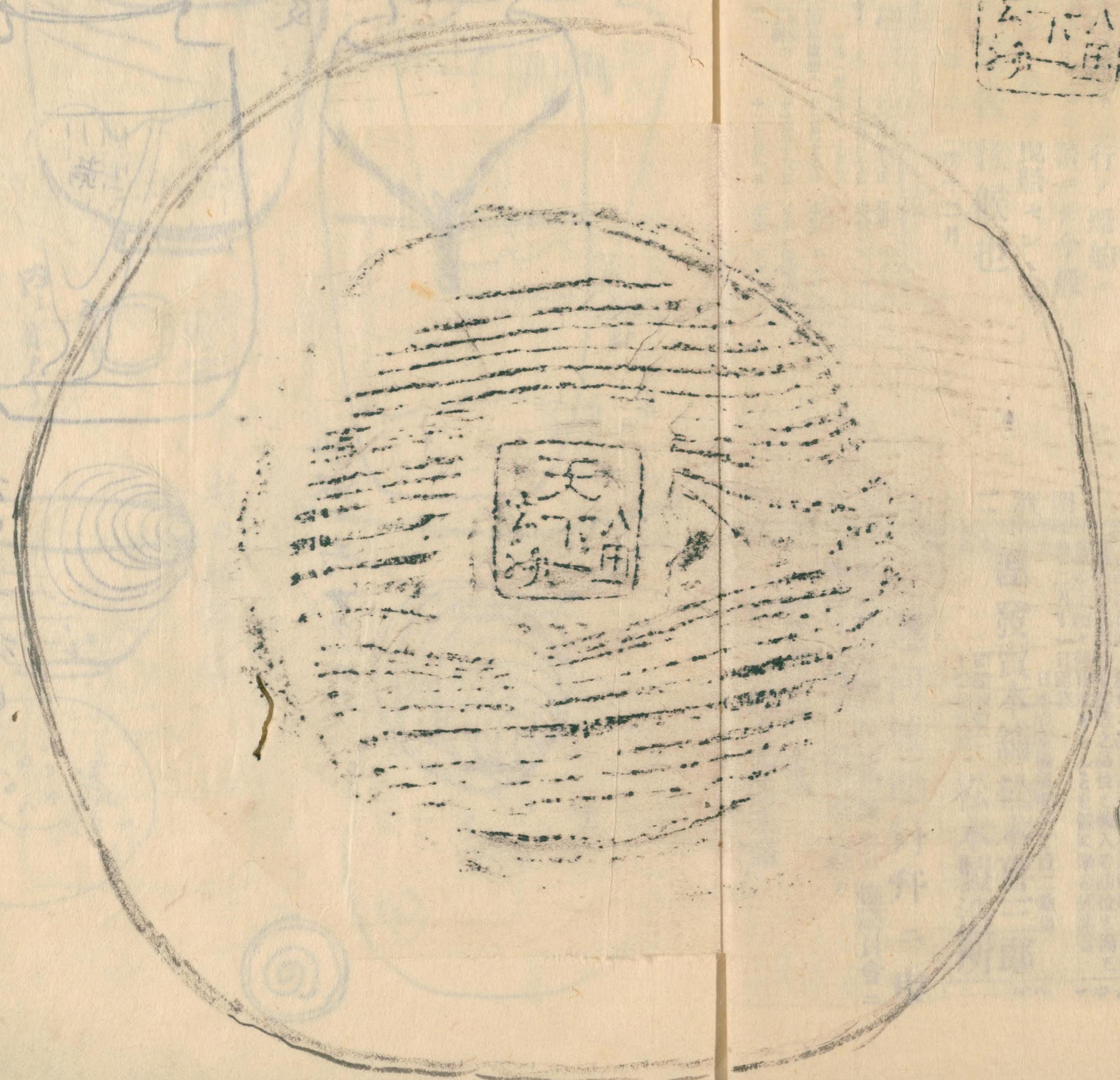


丹波うつし
柿

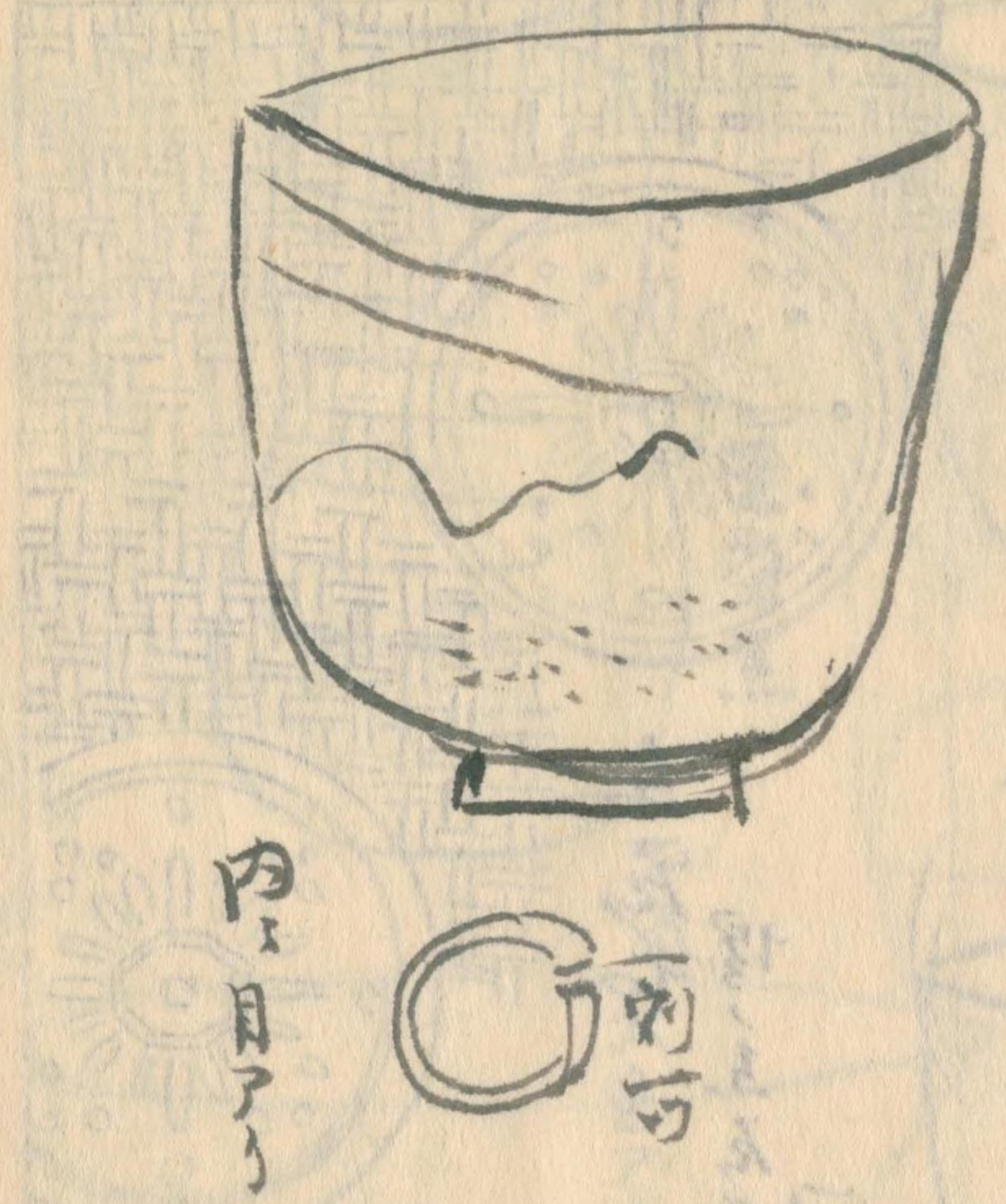


八田玄斎作灰焙焼

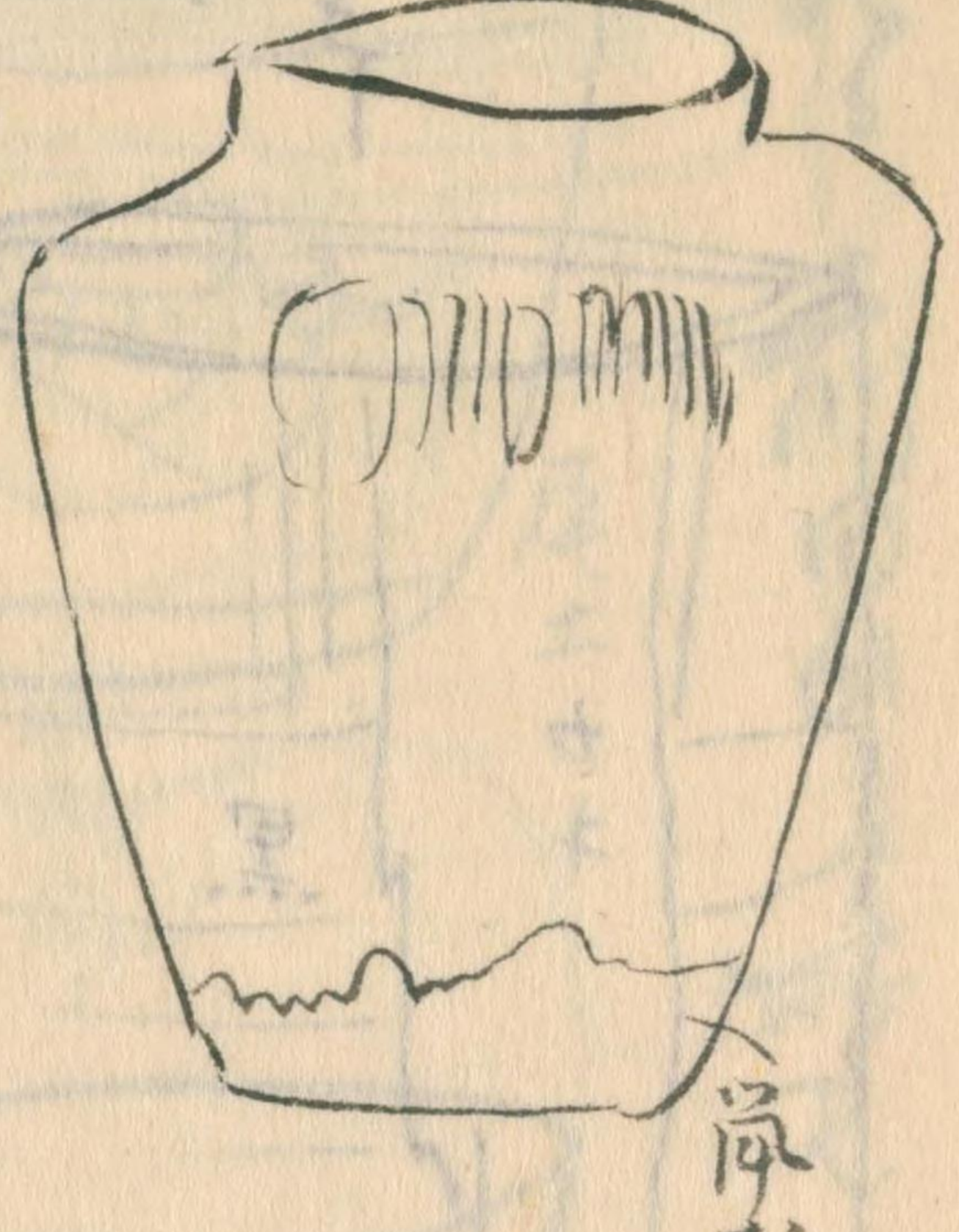
八田玄斎ハ秀吉の次の風炉師也

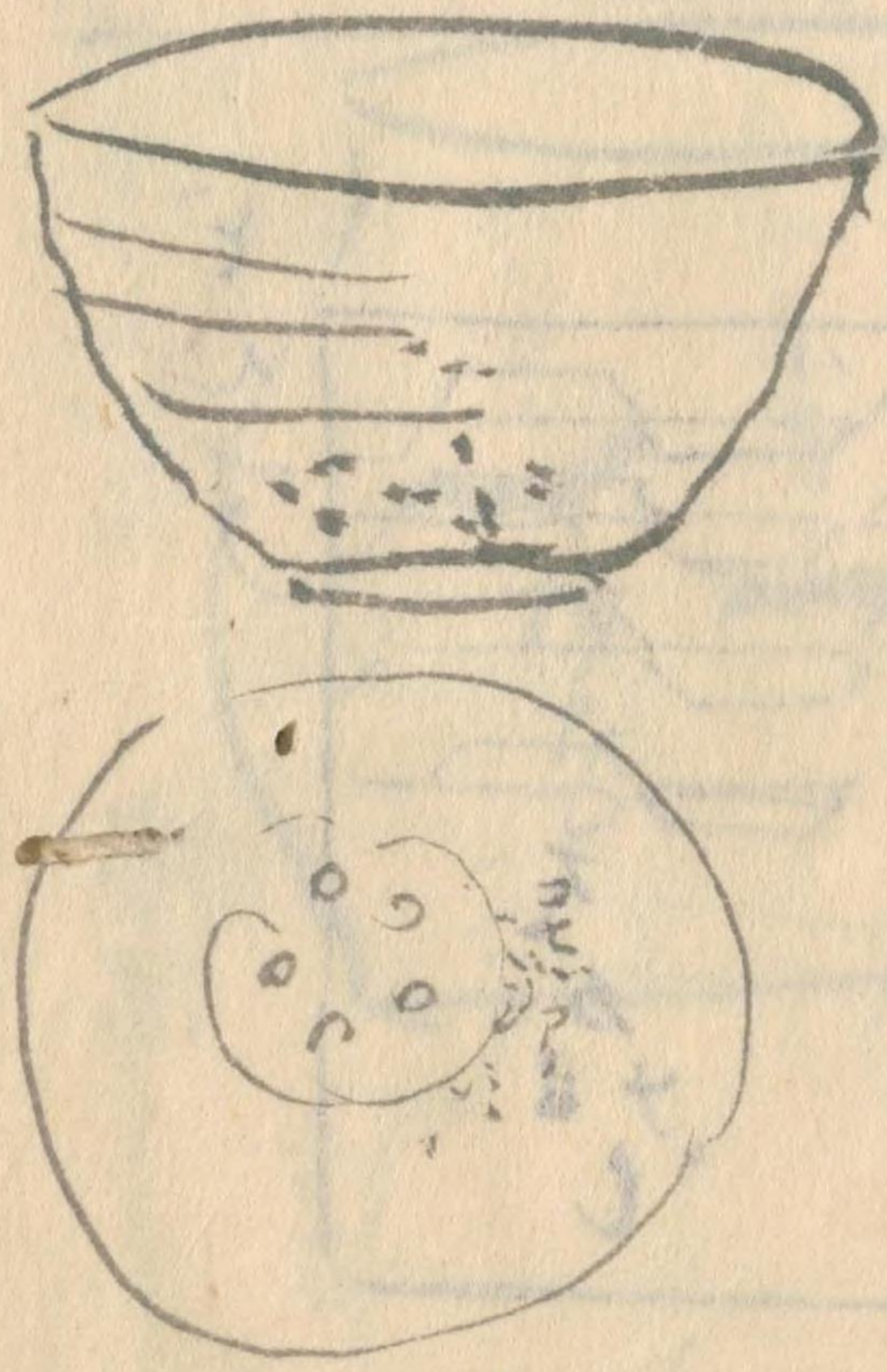


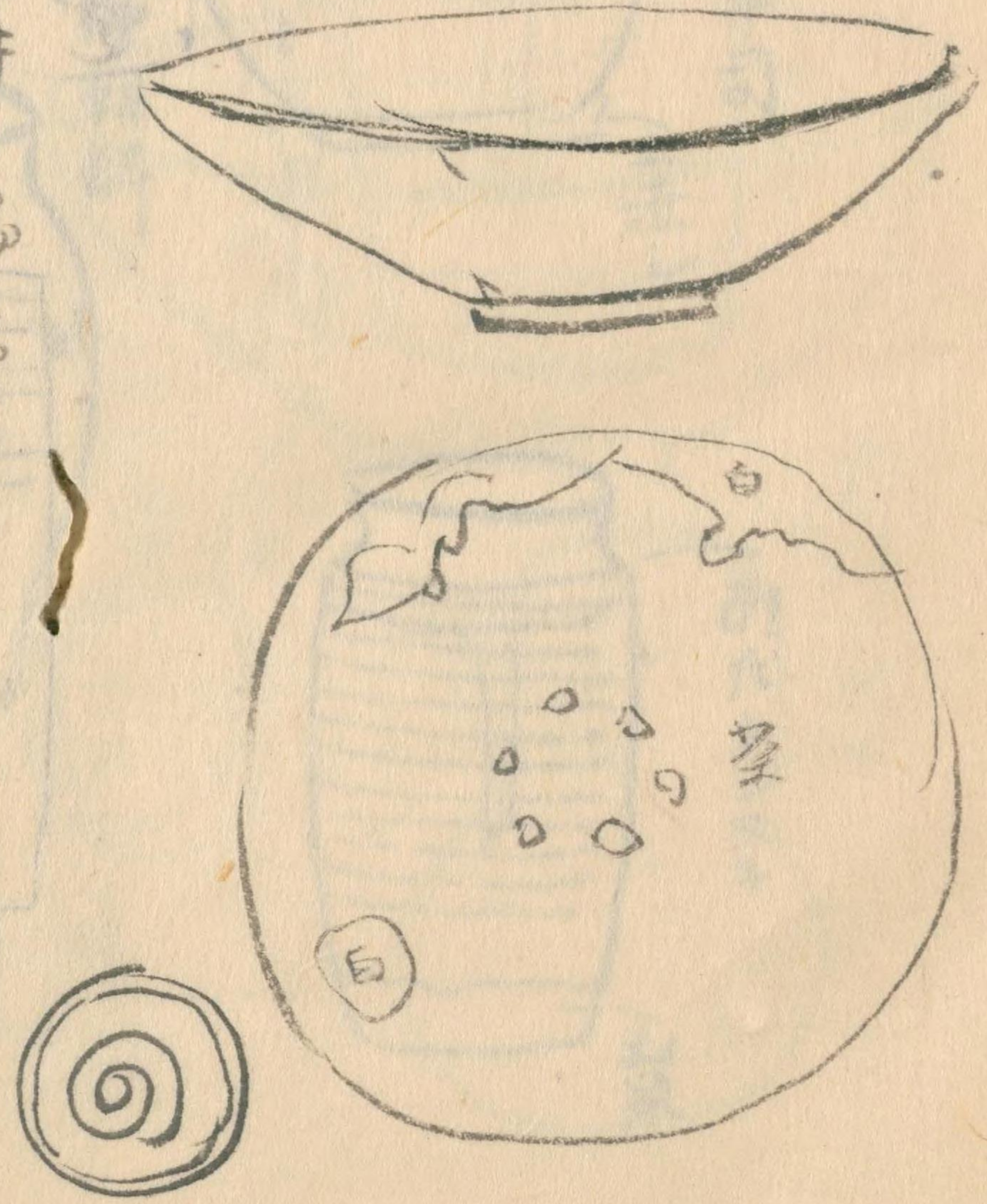
半司



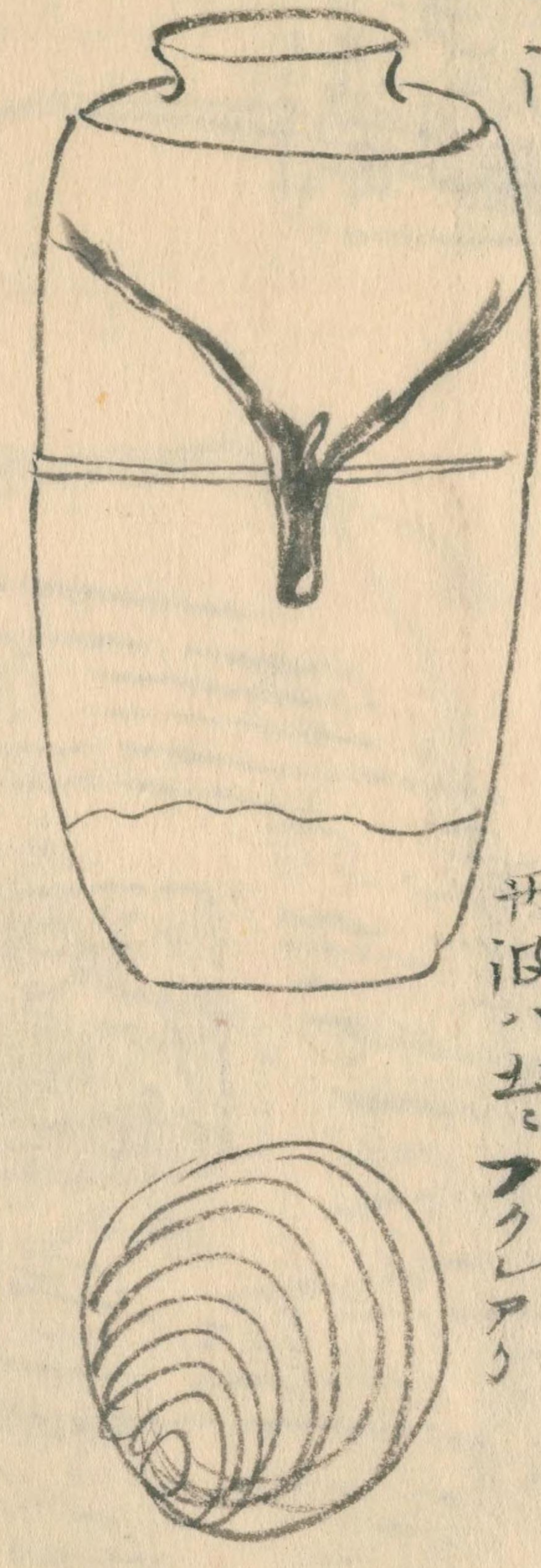
瀬戸

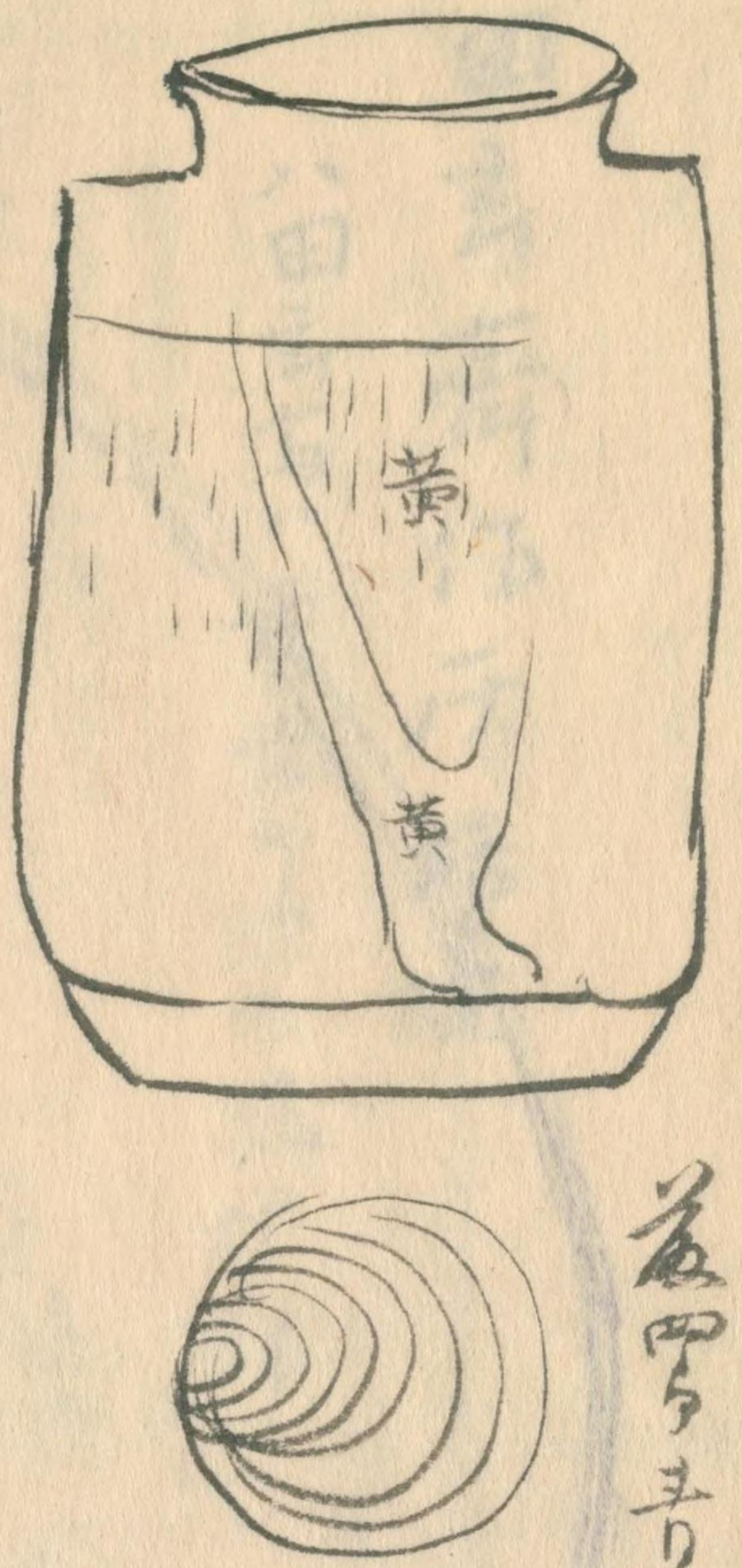






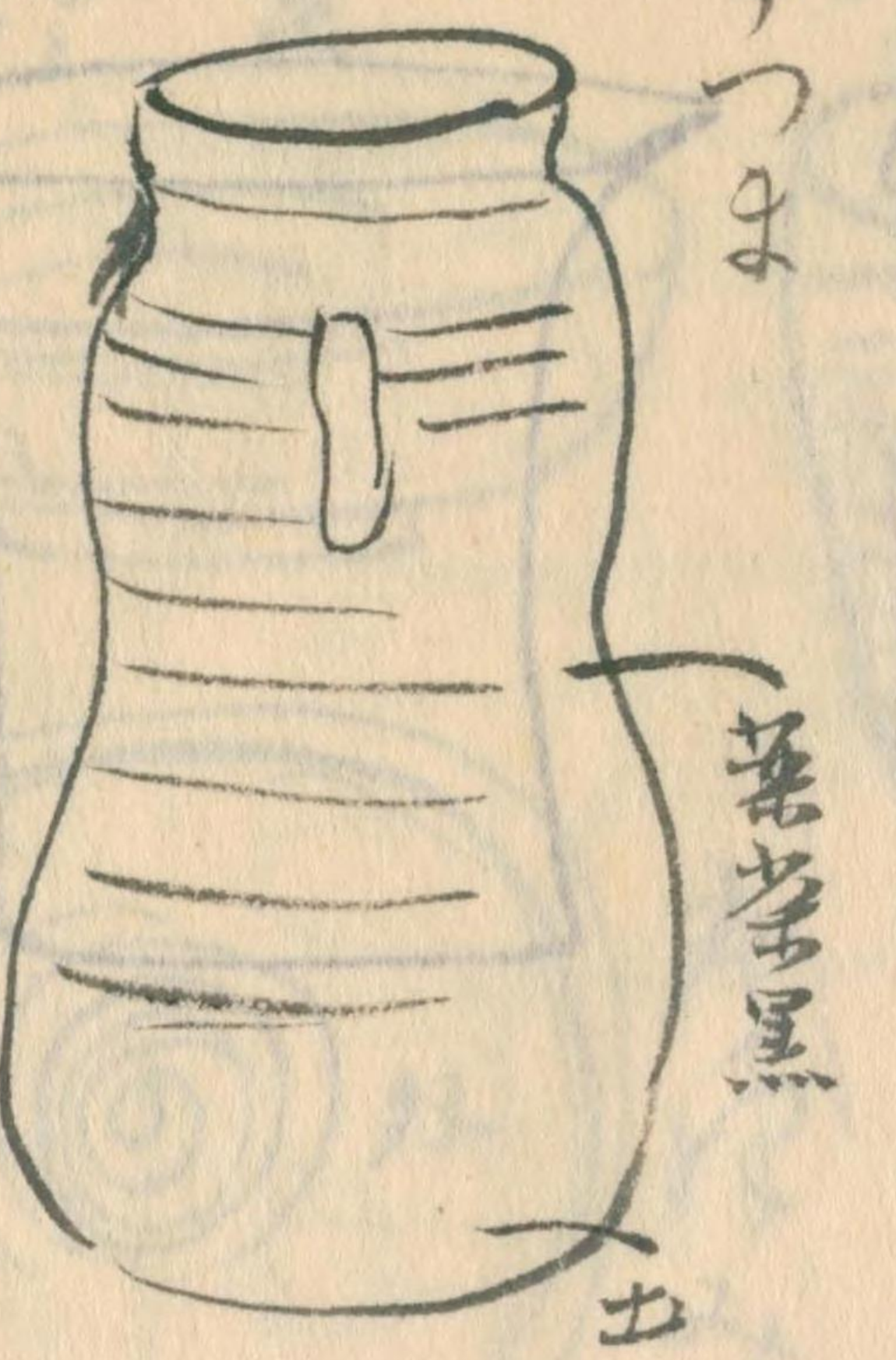
古丹波

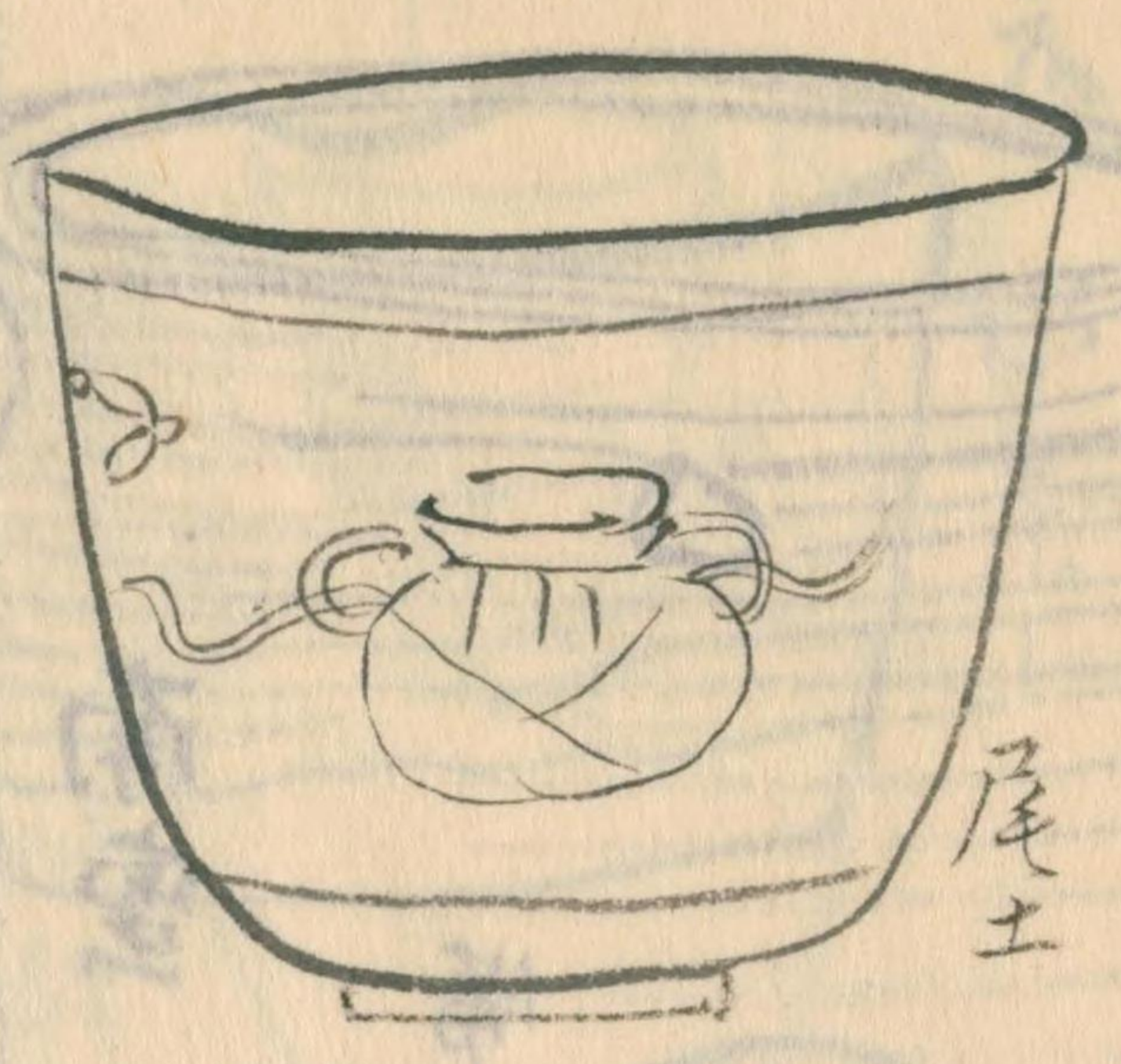

丹波ハ大ニフクレアリ

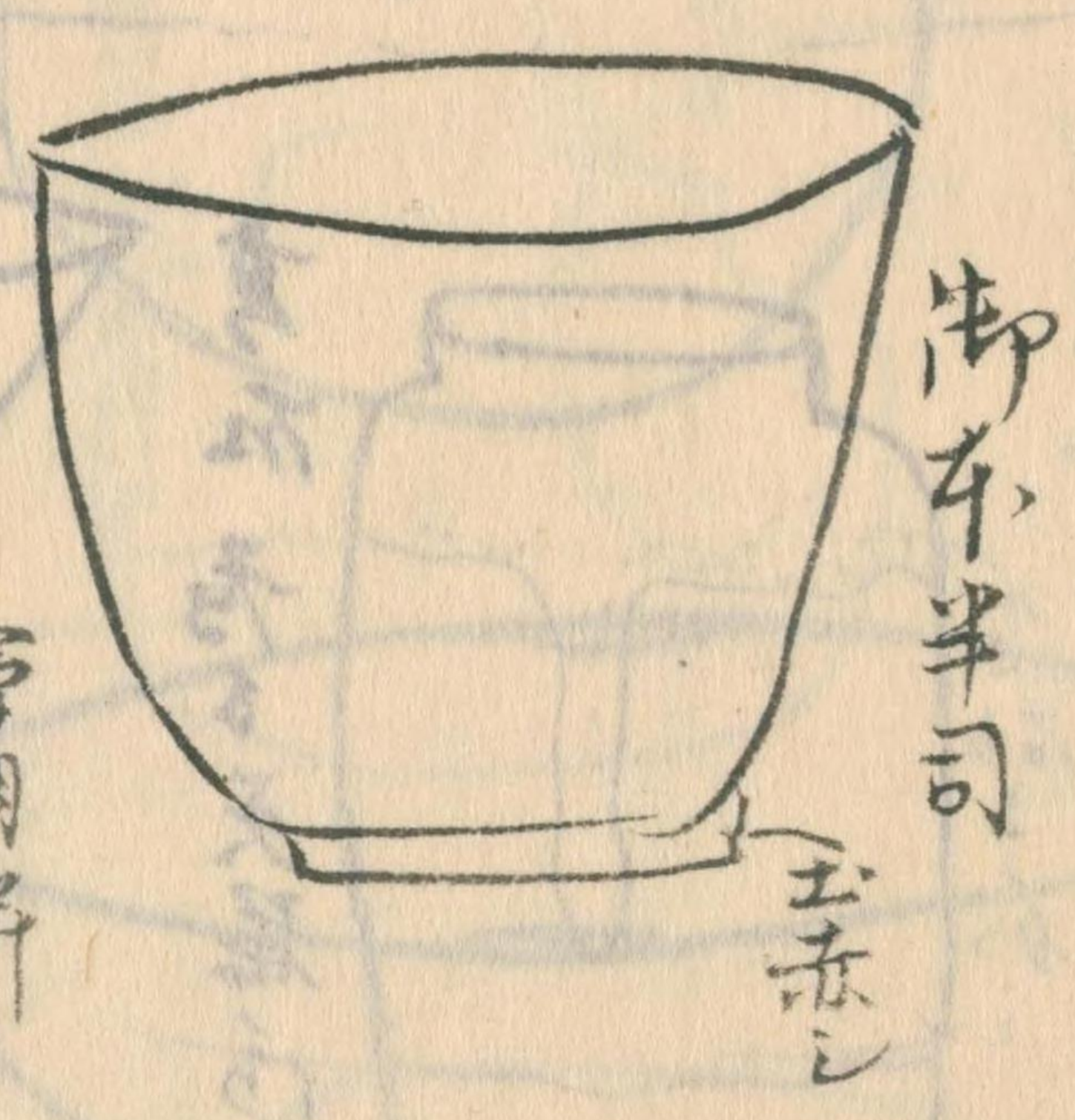


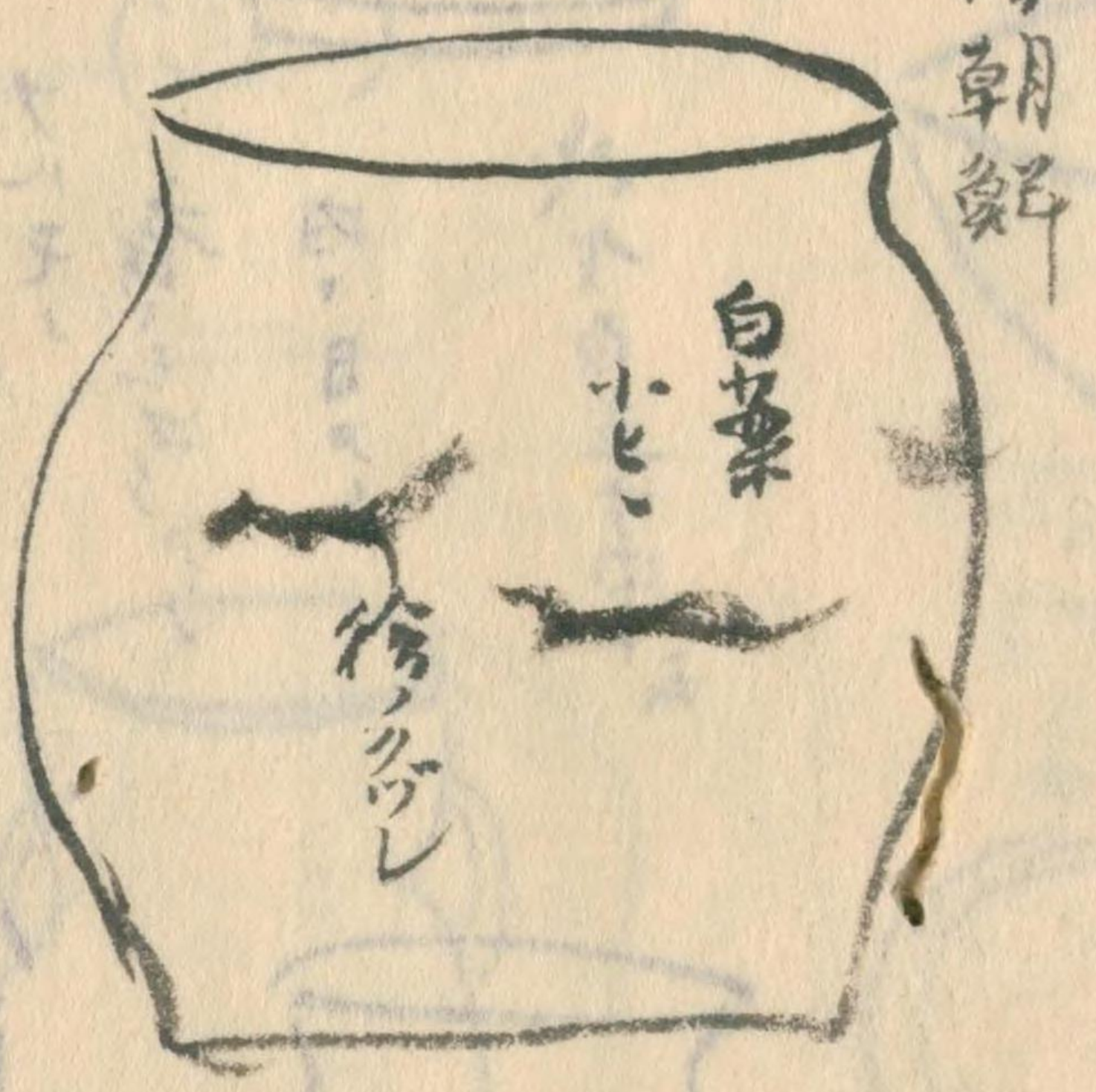
[illegible]

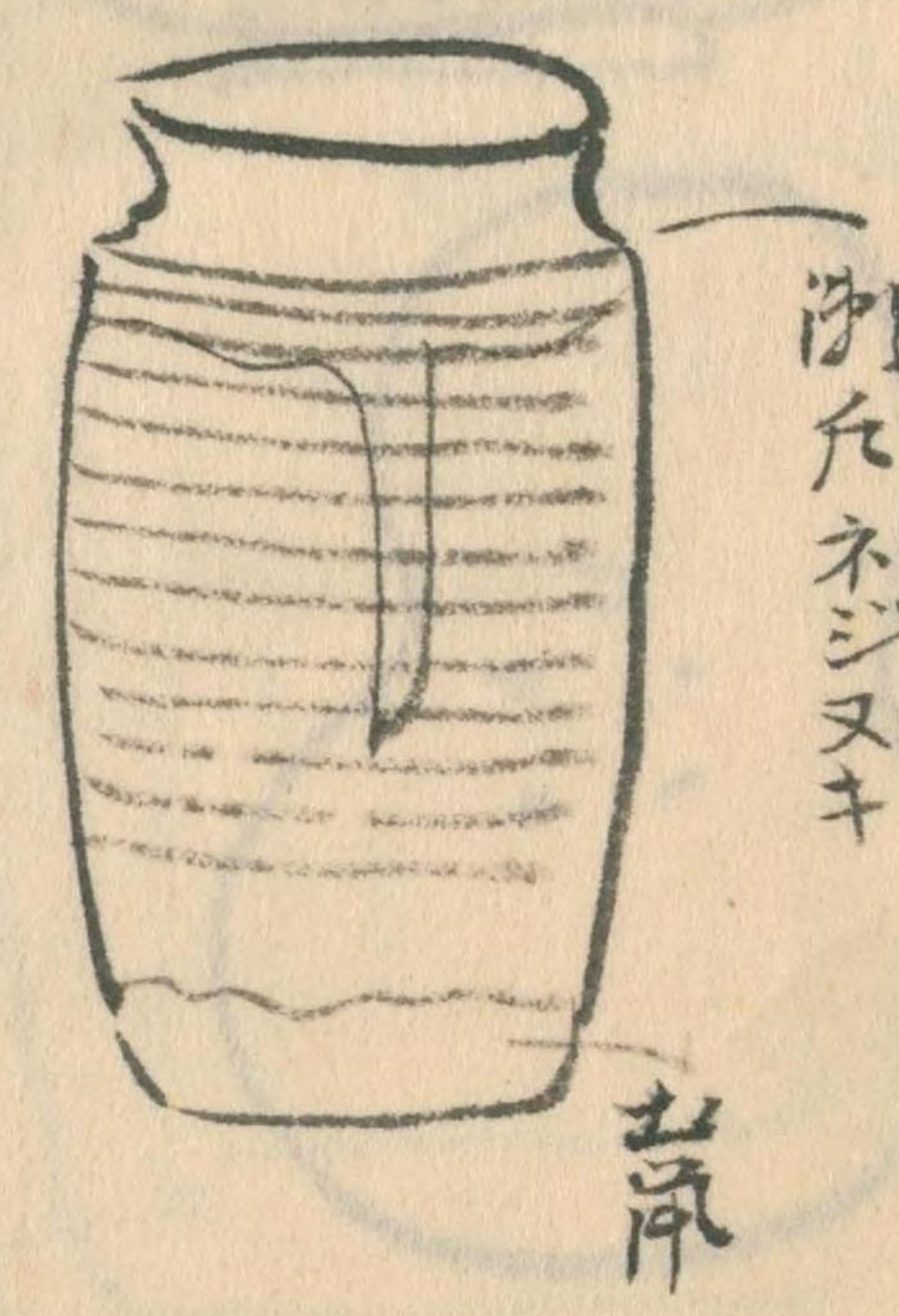
八月九日 前田氏ニテ所見

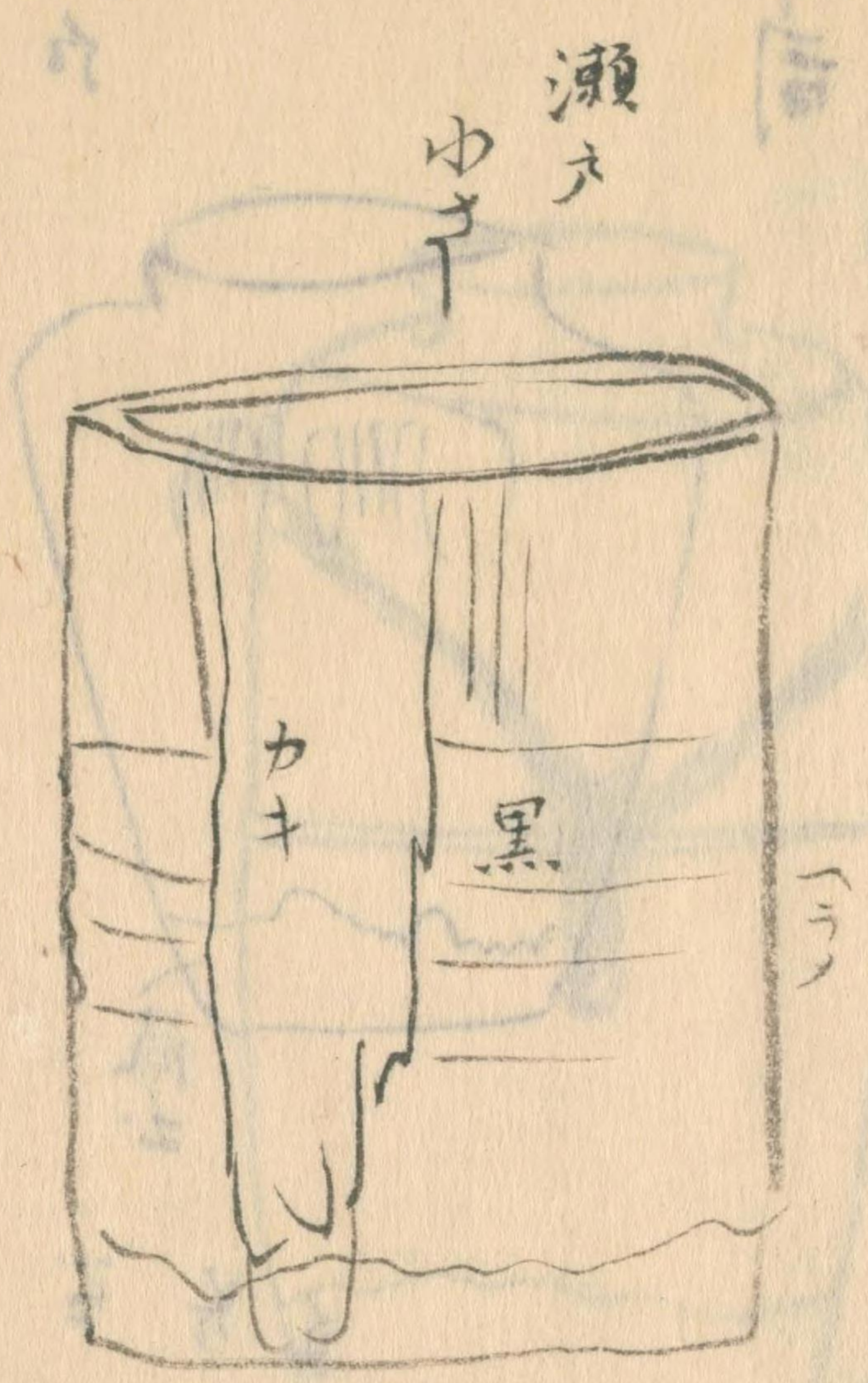

さつま
薬黒
土風火色アリ



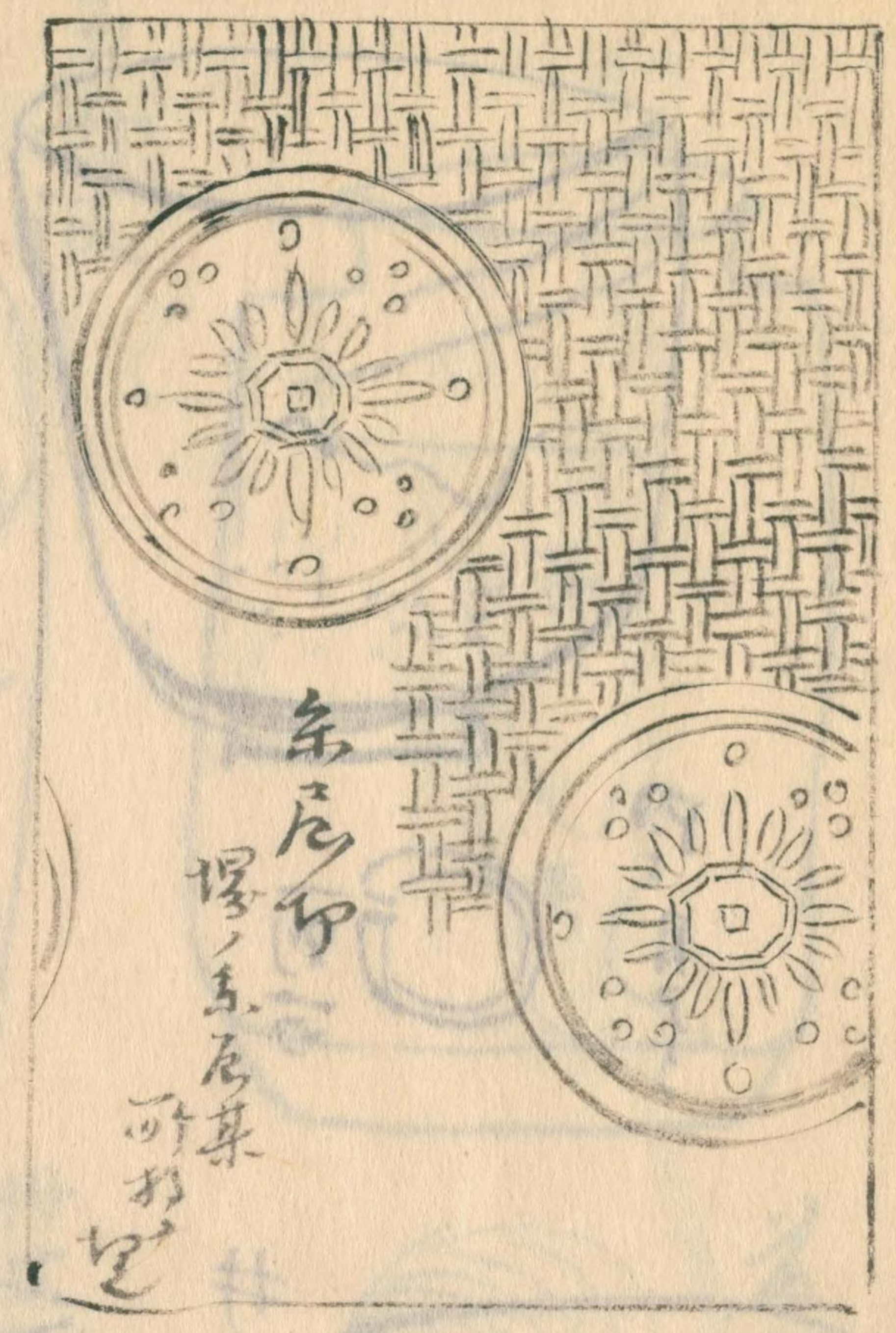


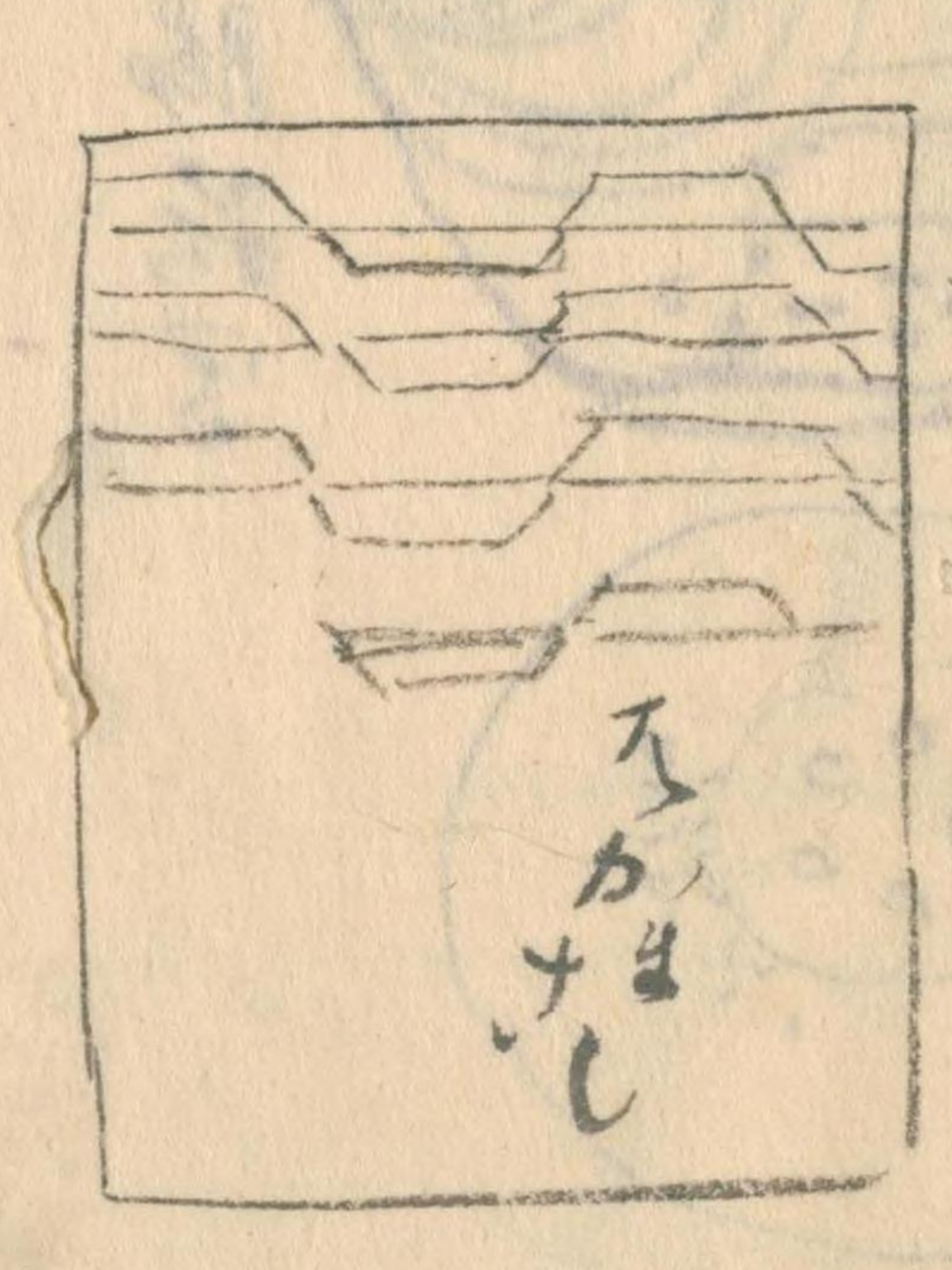

徐朝鮮
白薬
ハヒこ
絵ノクヅレ

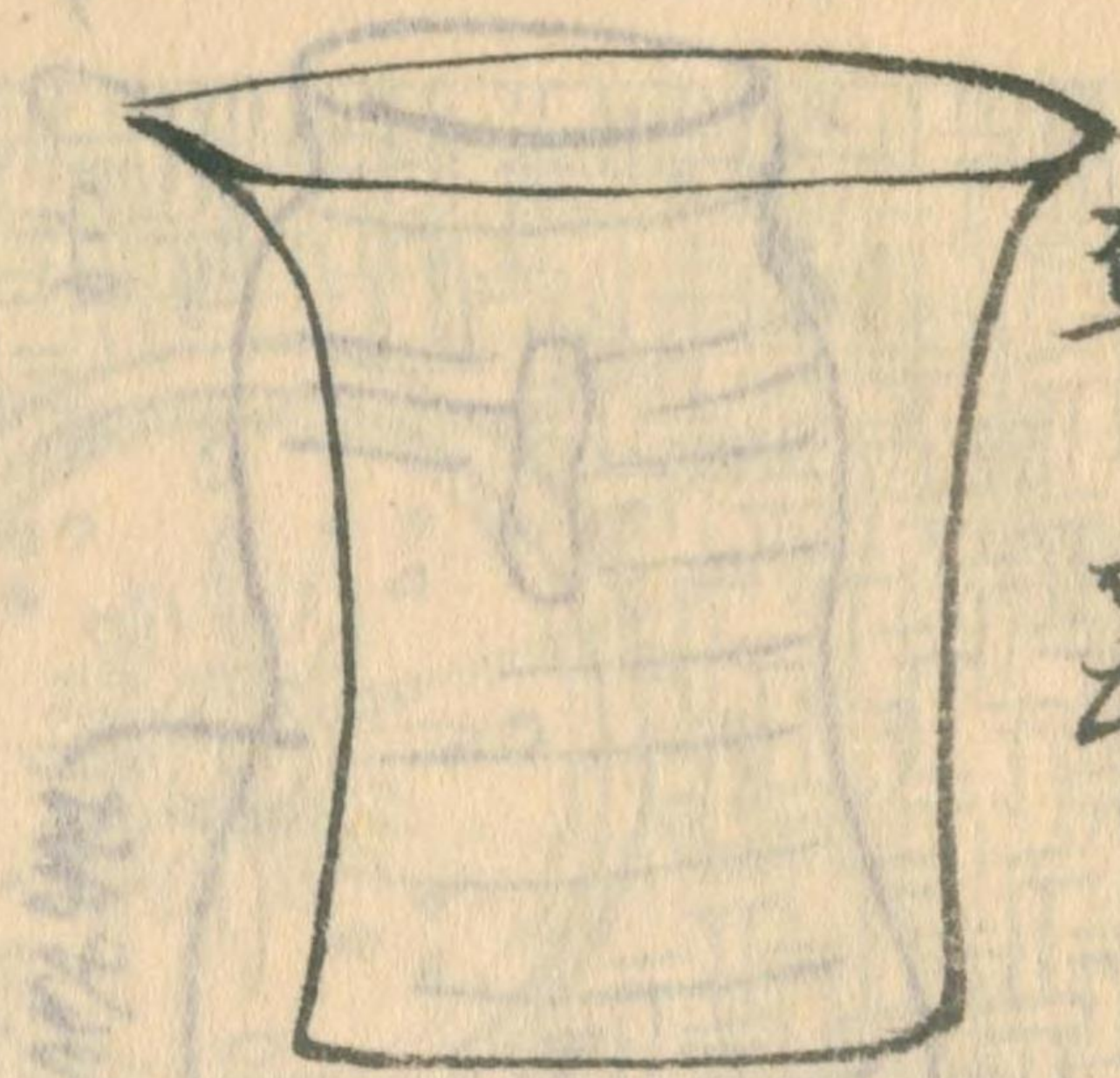




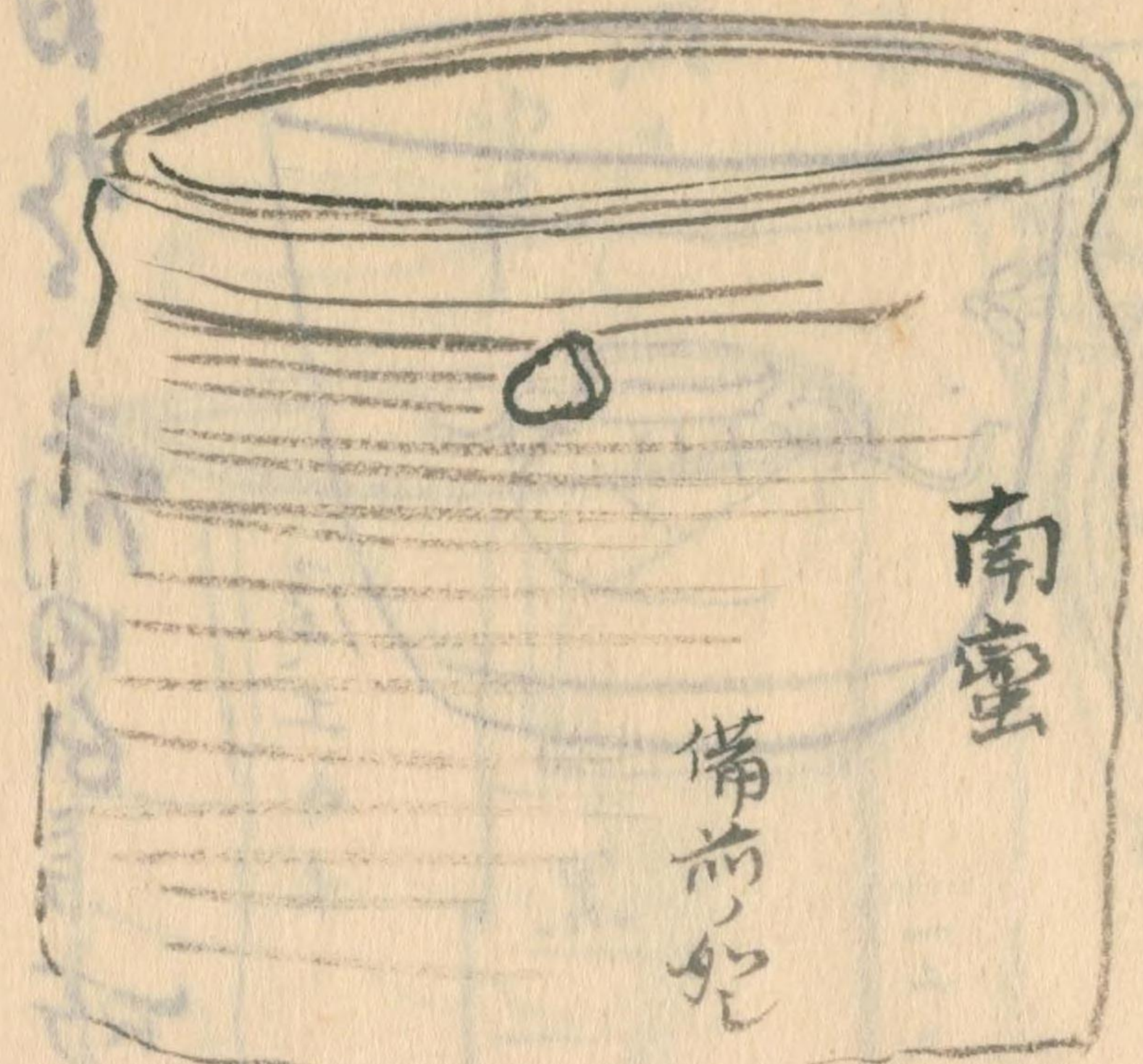
金襴


糸屋印
堺ノ糸屋某所持也





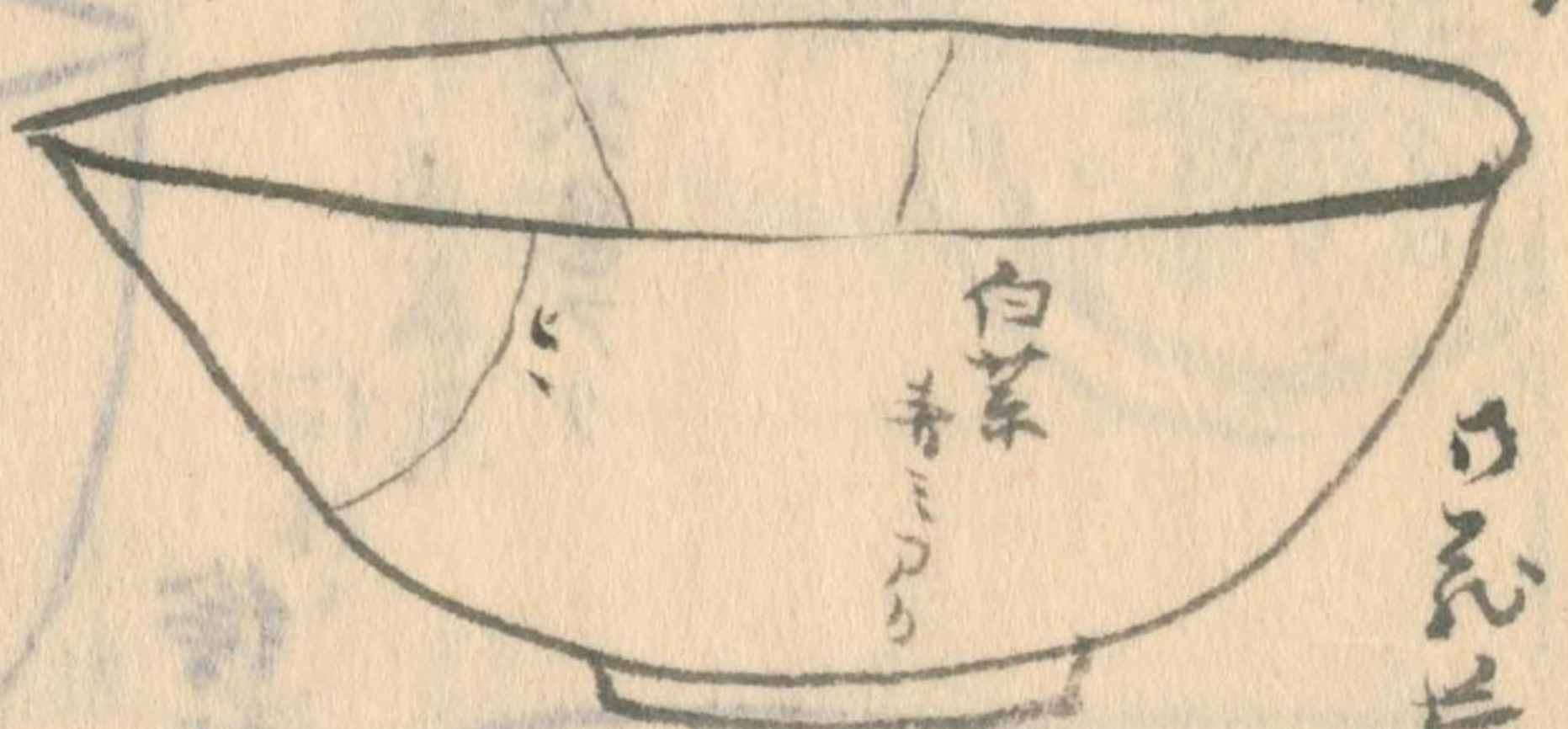
朝日乃手



南蛮

備前ノ如

祢ノ手



白茶
青ミアリ

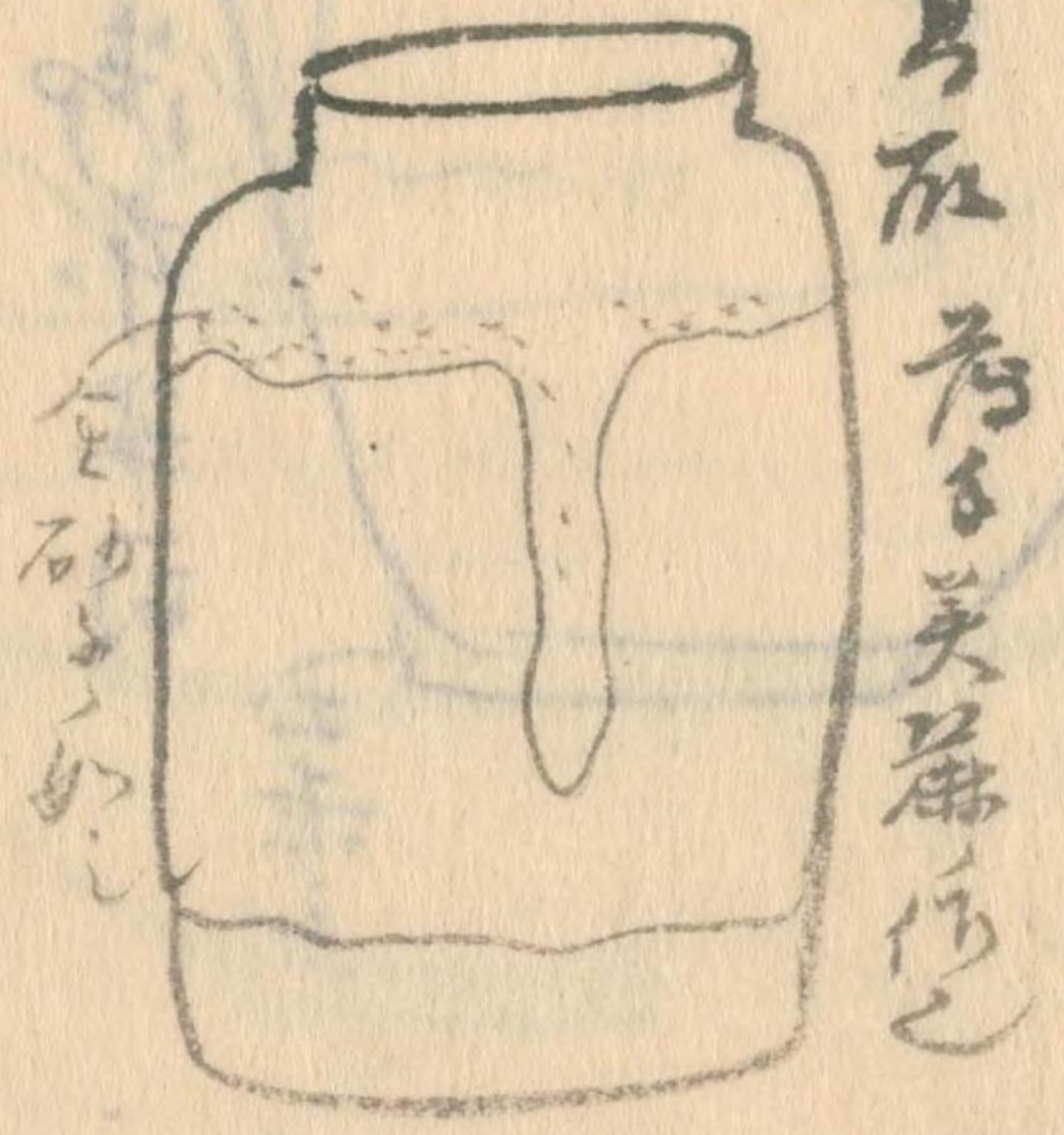
日花片手ノ上出来

カルモノ

底ミシボリアリ

内ニ目アリ

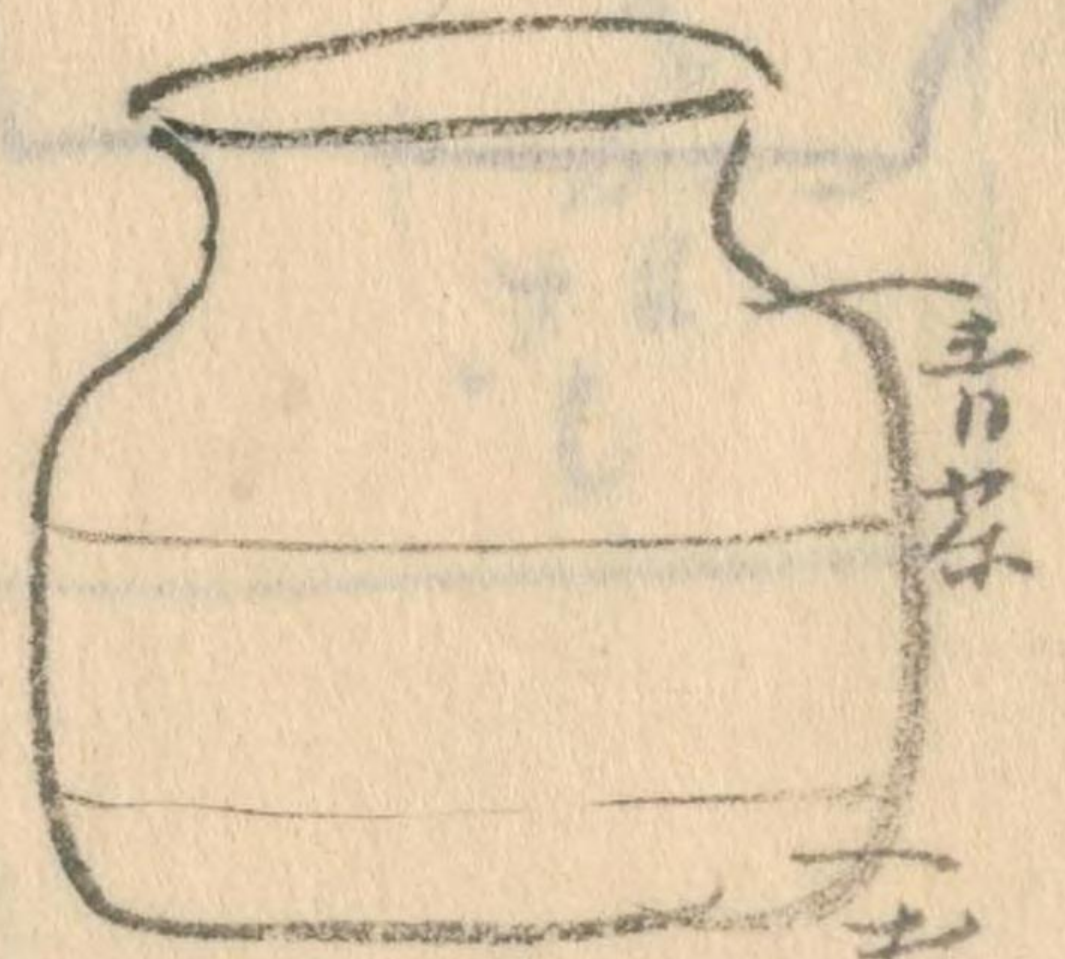
代金百五十両ト云



高麗 写手美濃作之

金砂子ノ如し

唐津

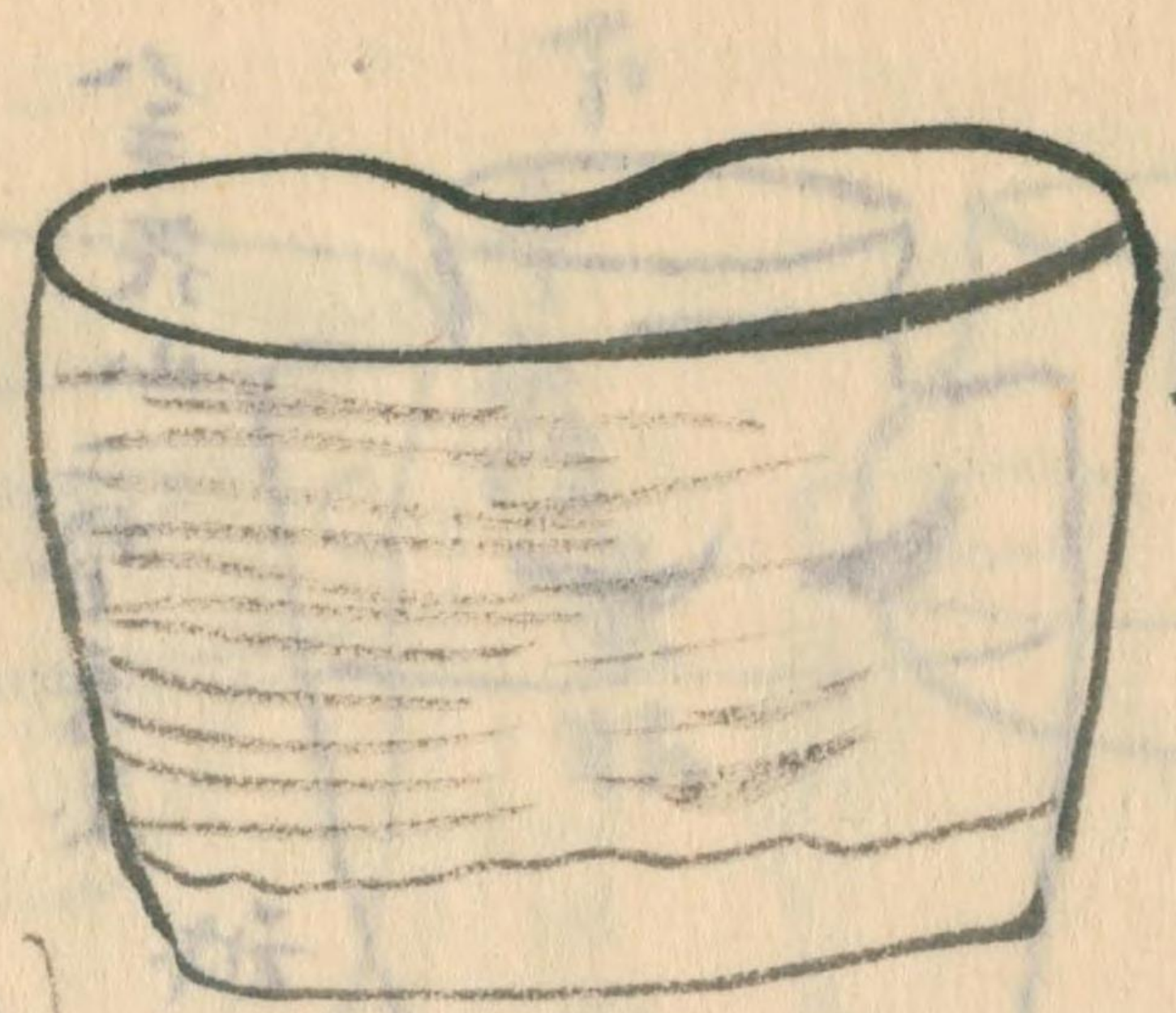


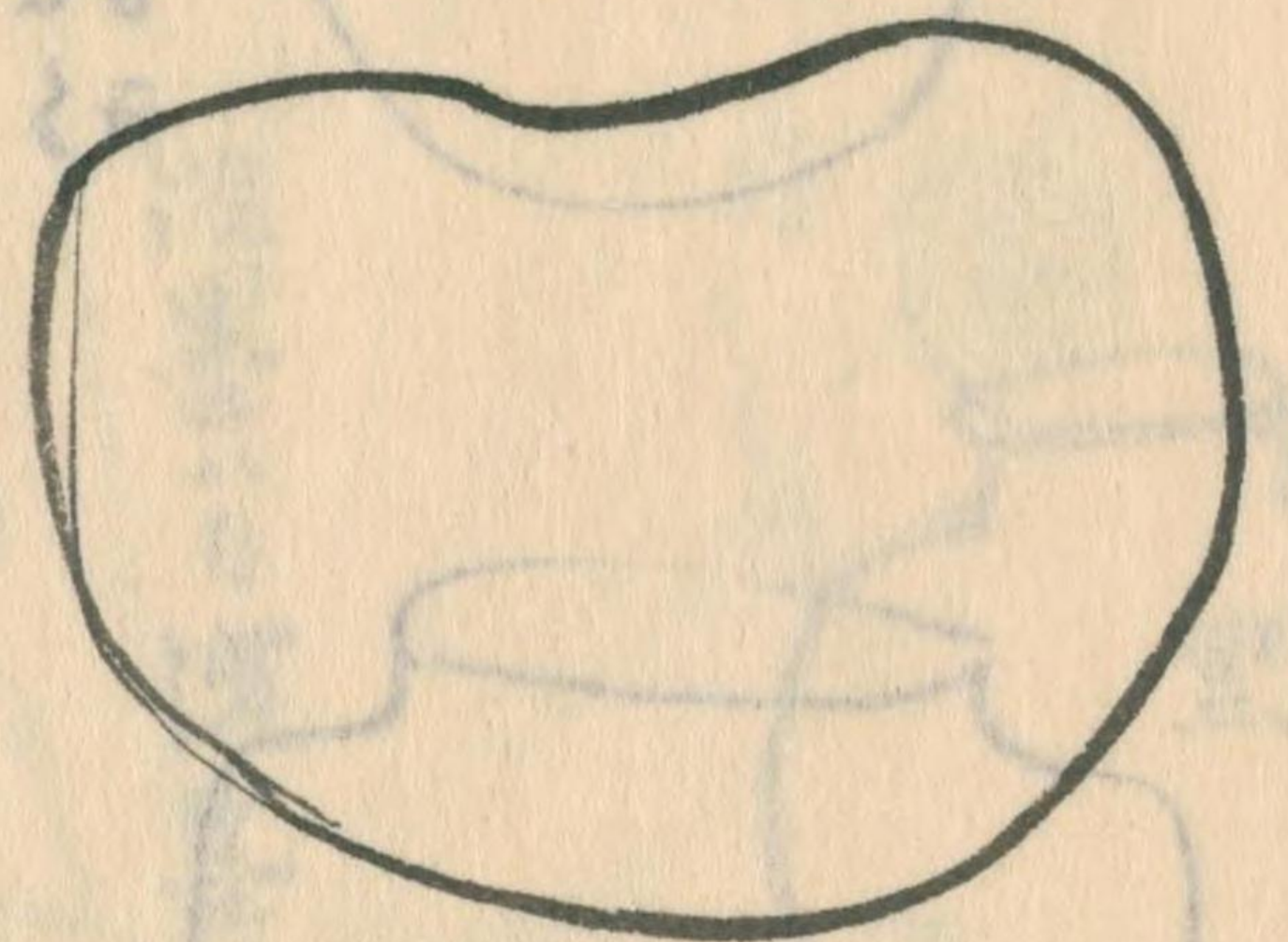
青茶

土茶

九月廿 前田家寶

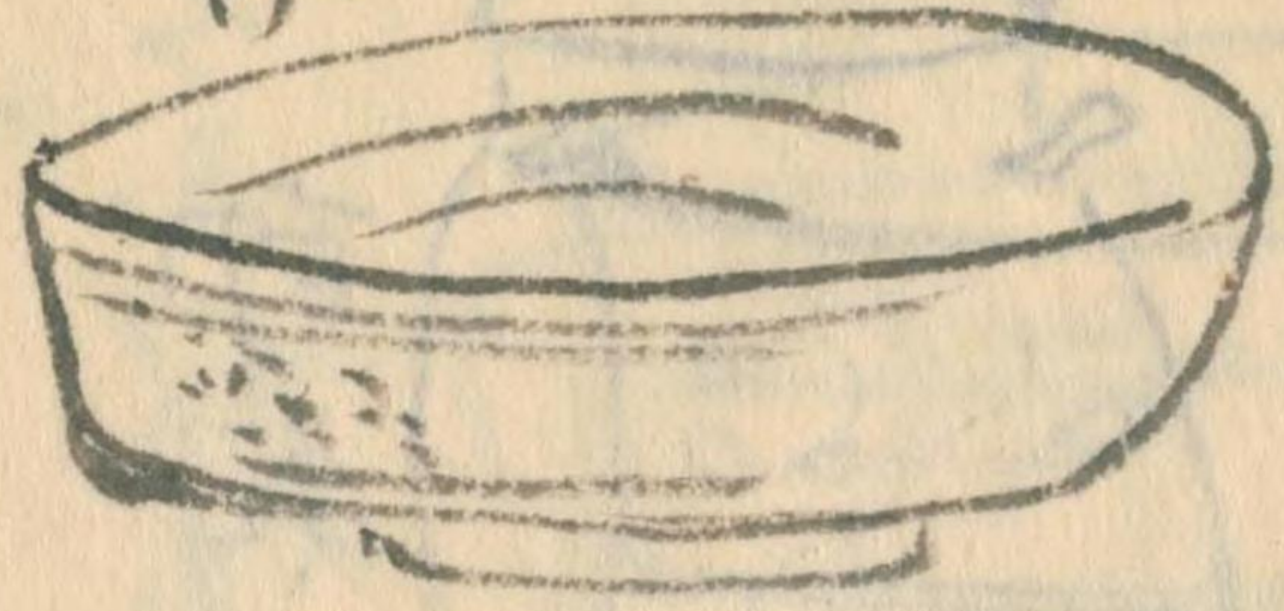
高麗 水コボし



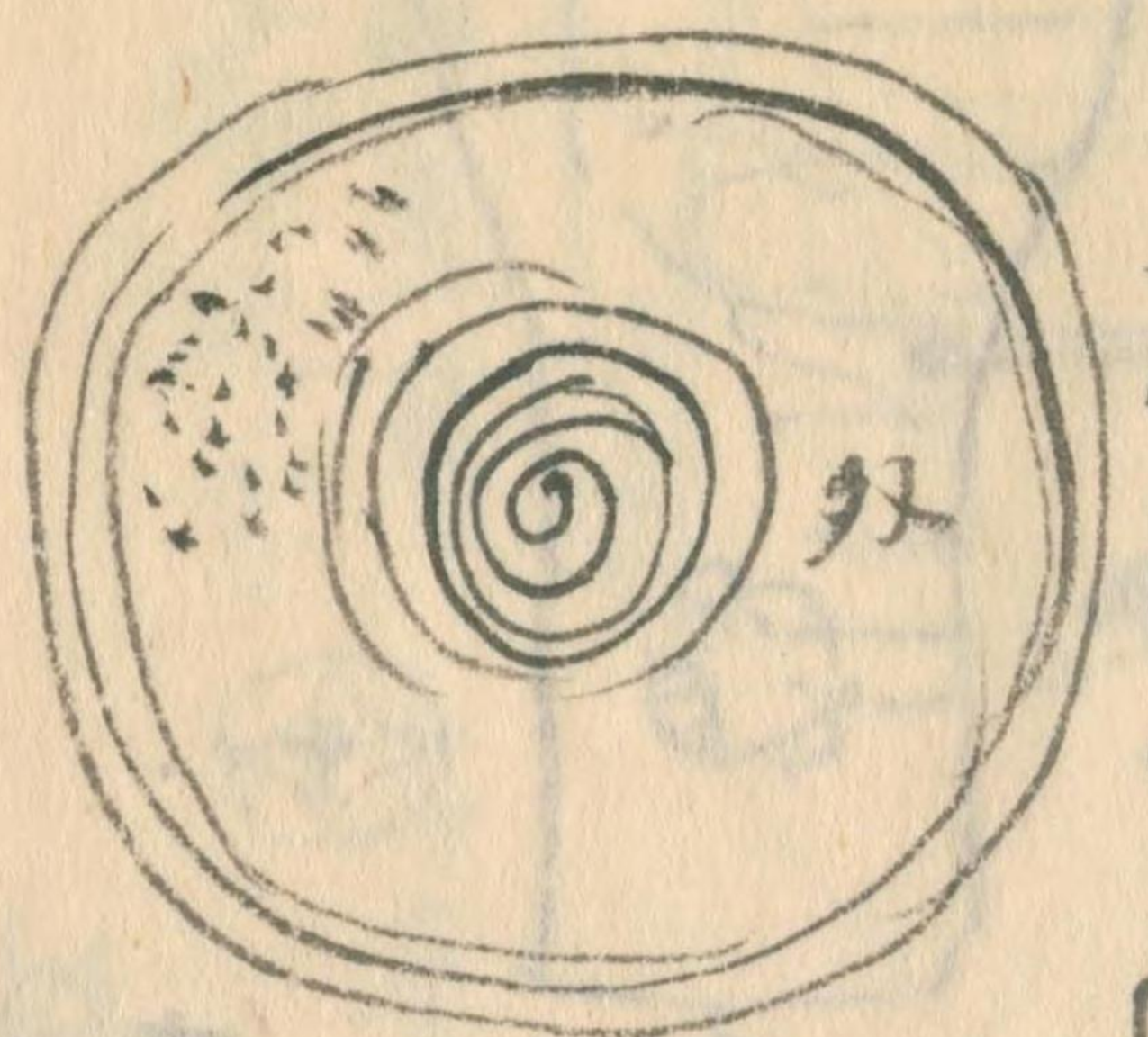


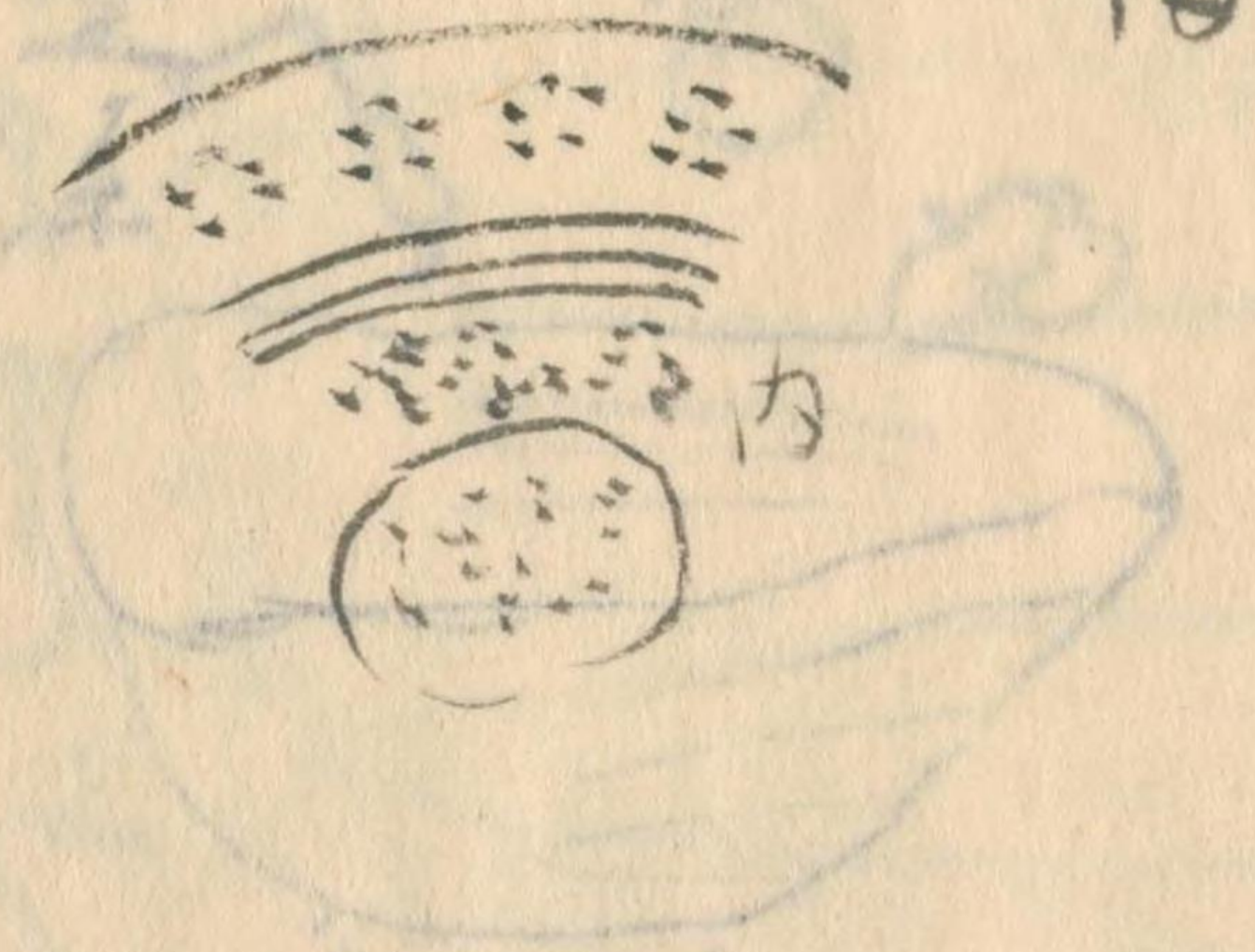
茶菓

白ノキヤウ

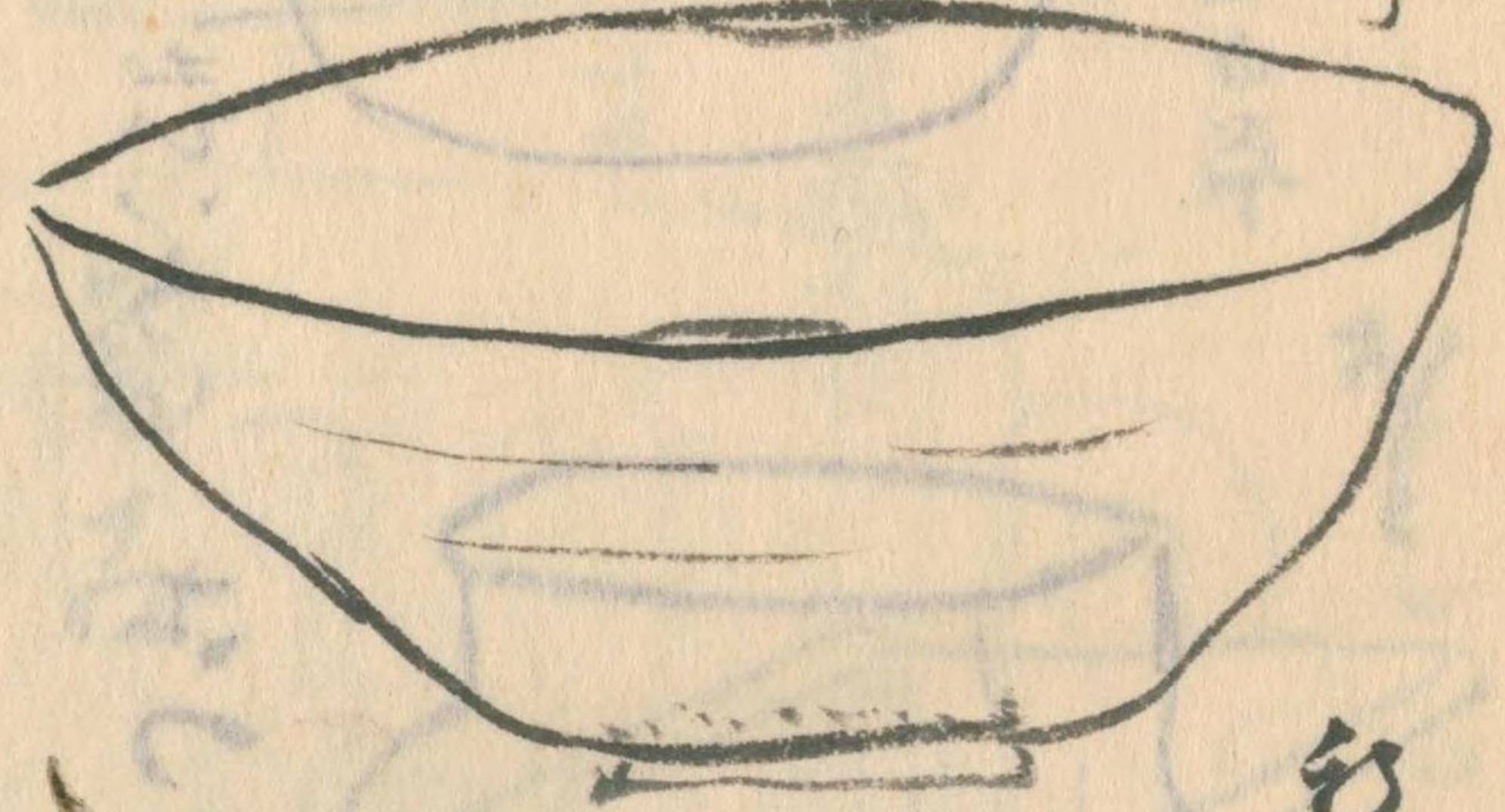


南京みす田

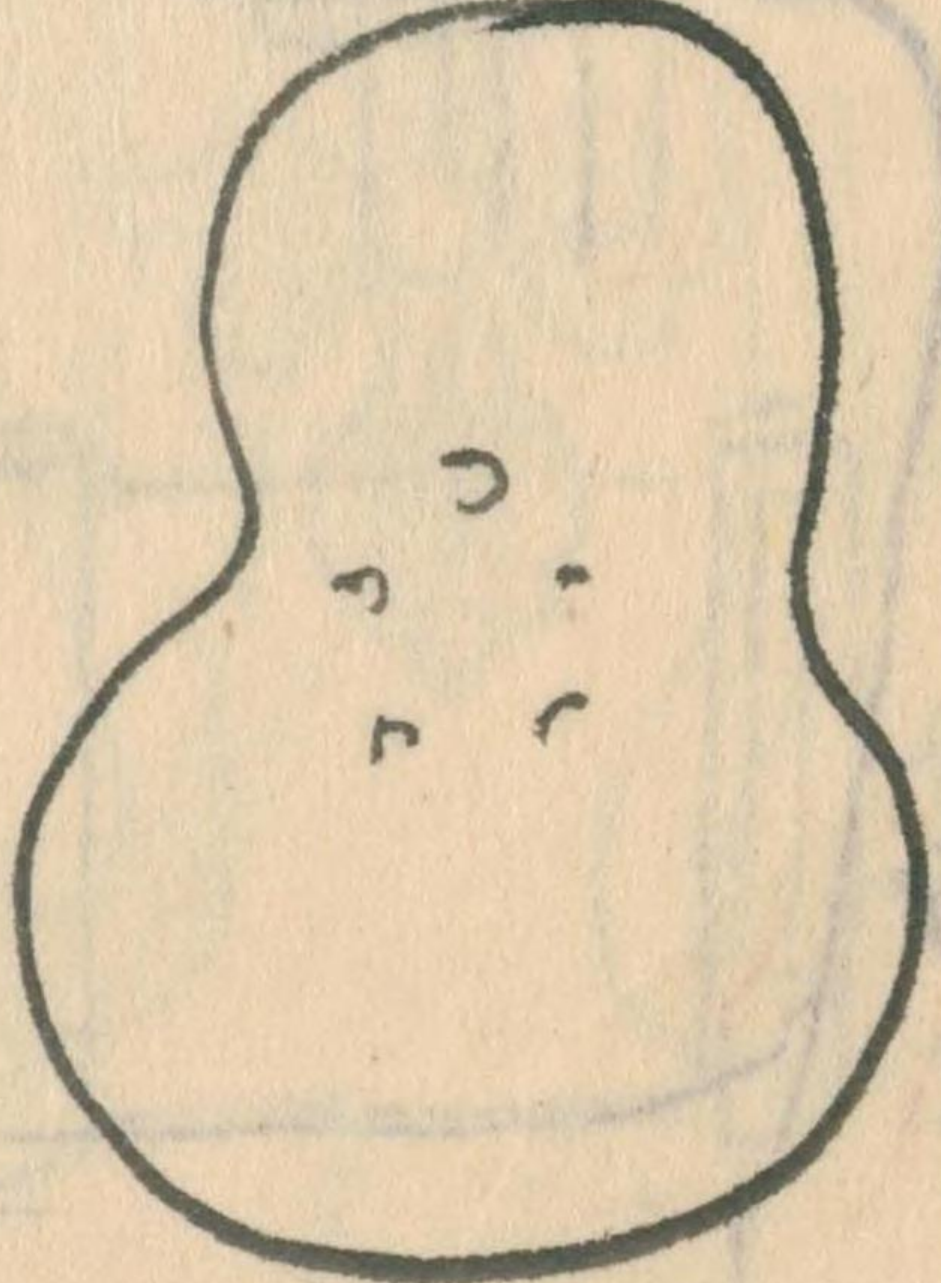


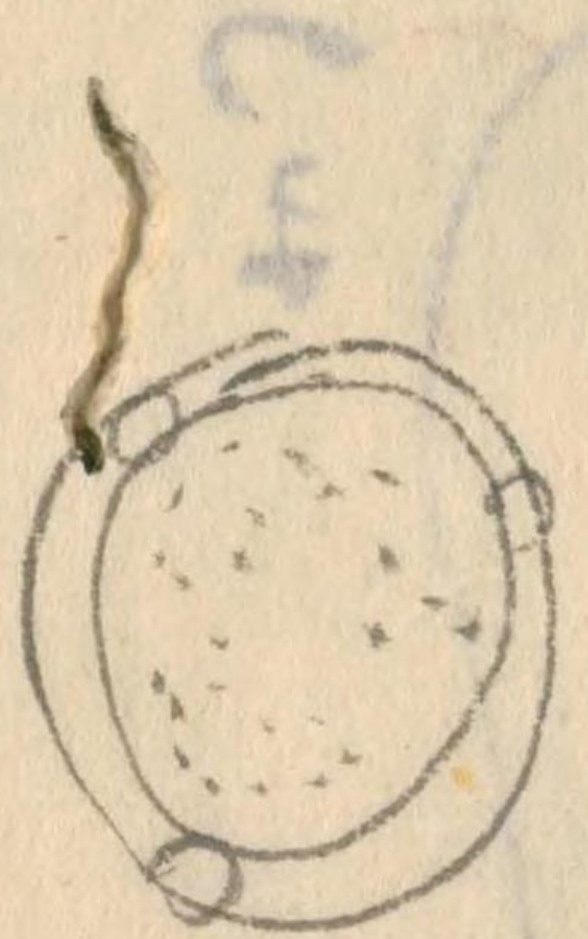


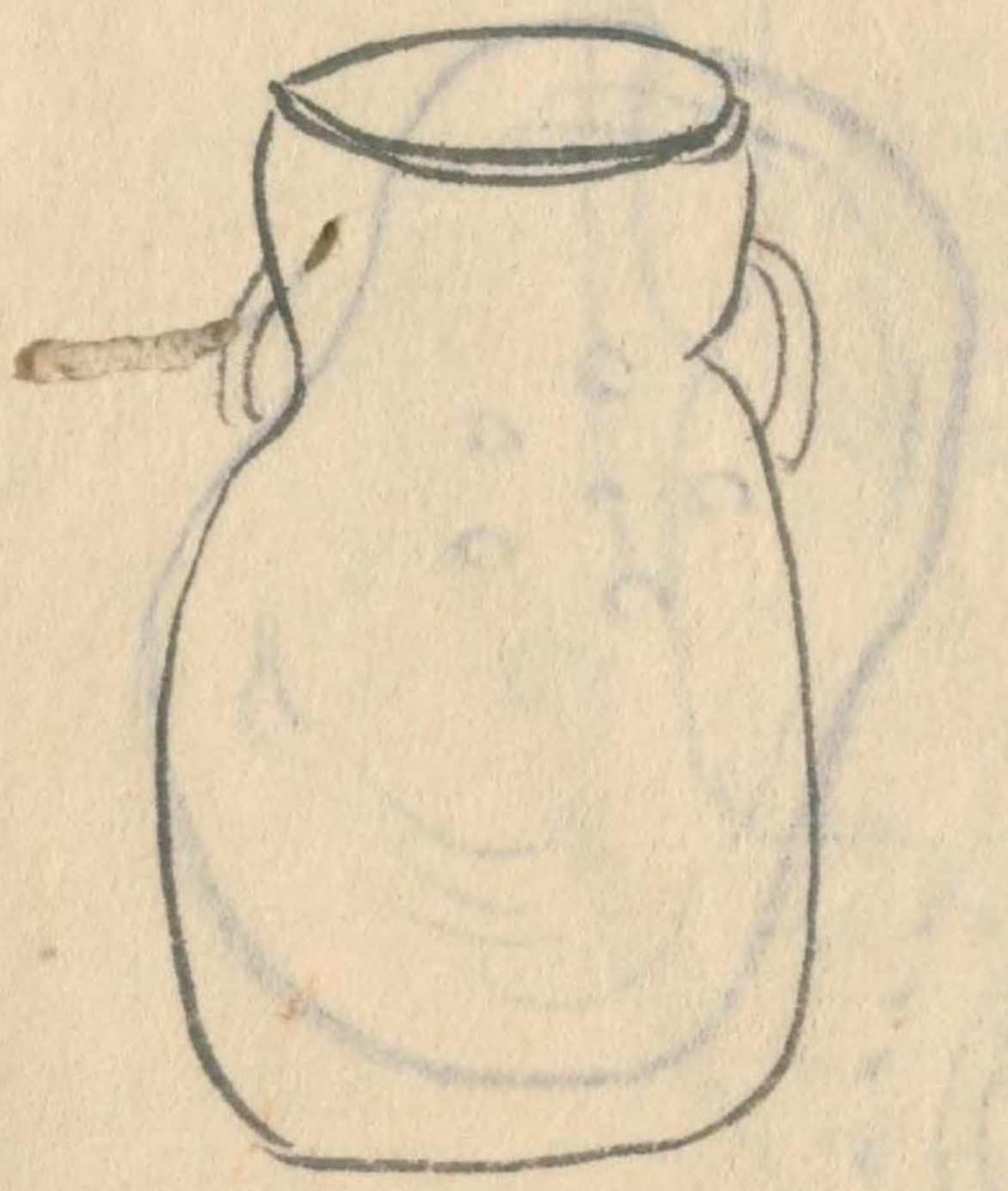
新今渡

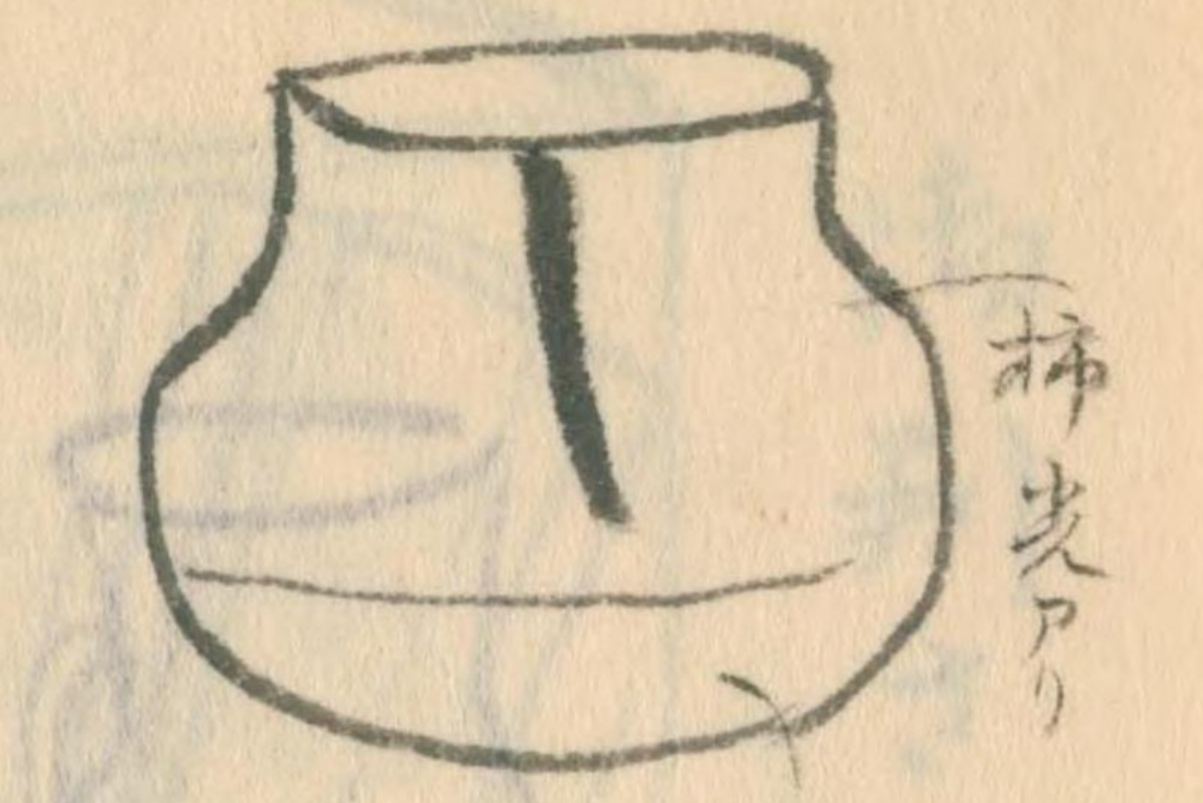


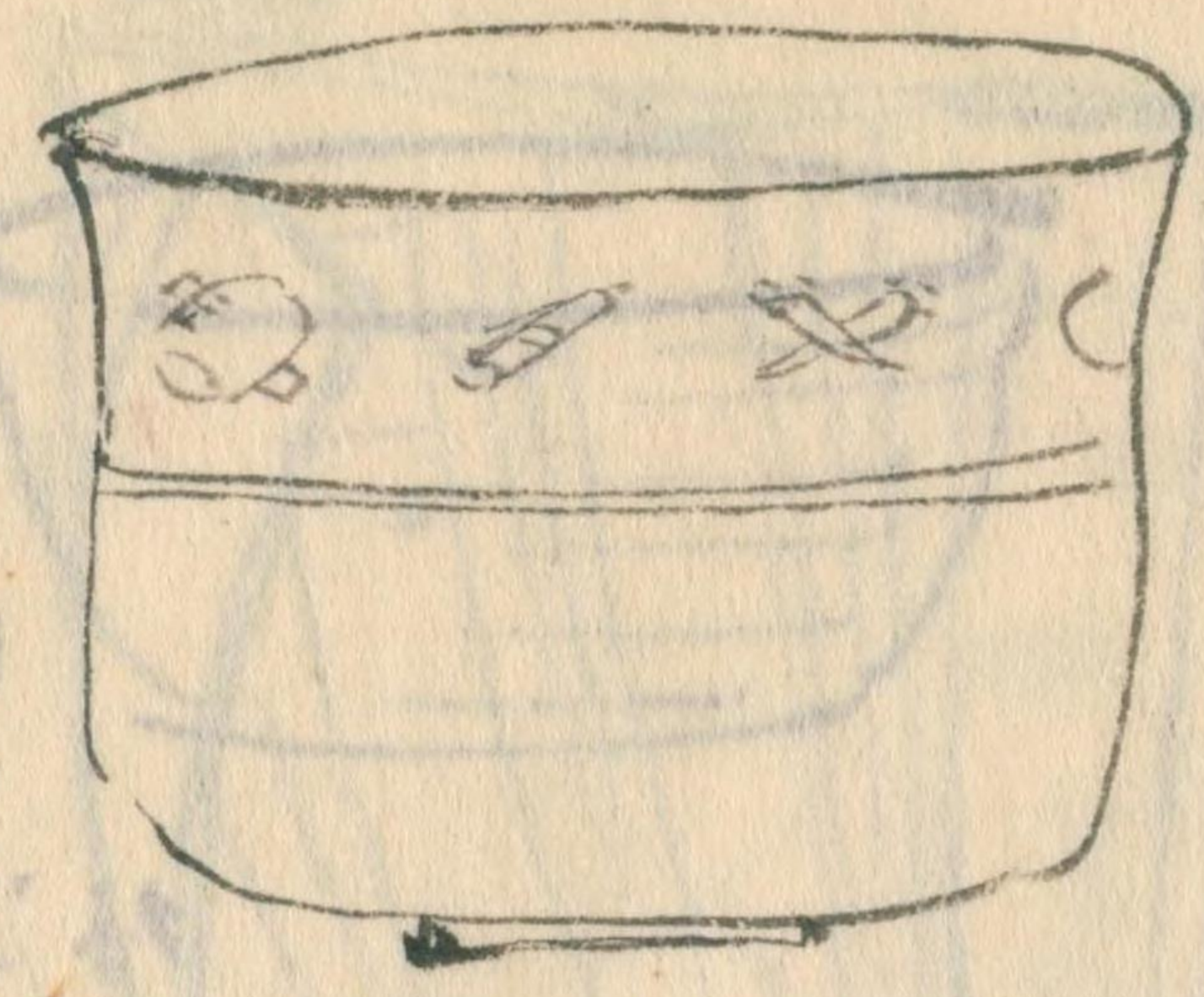
私しき足

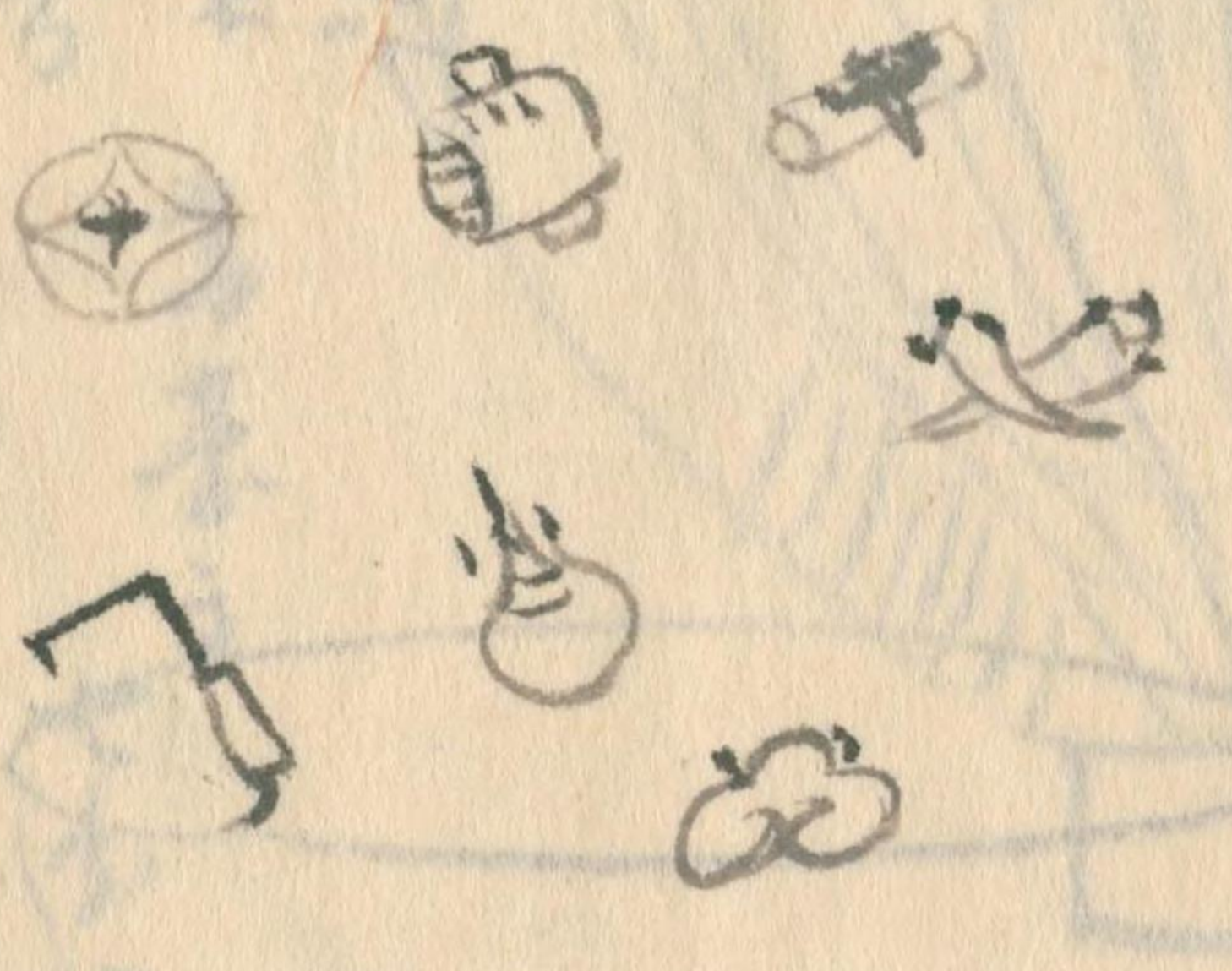


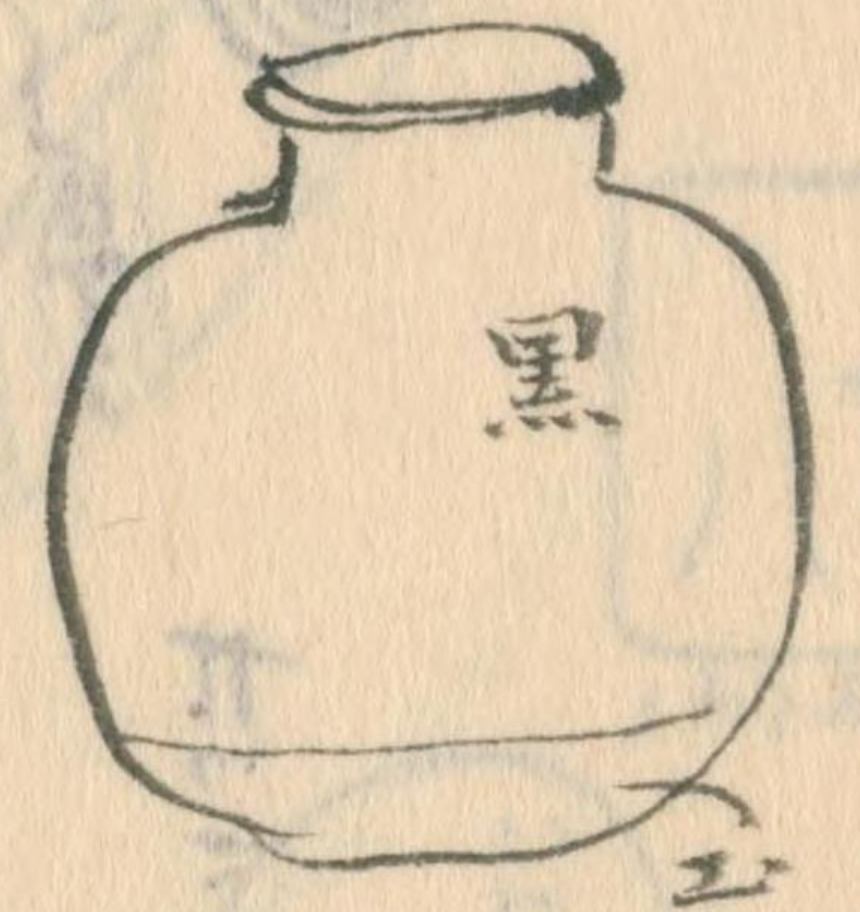


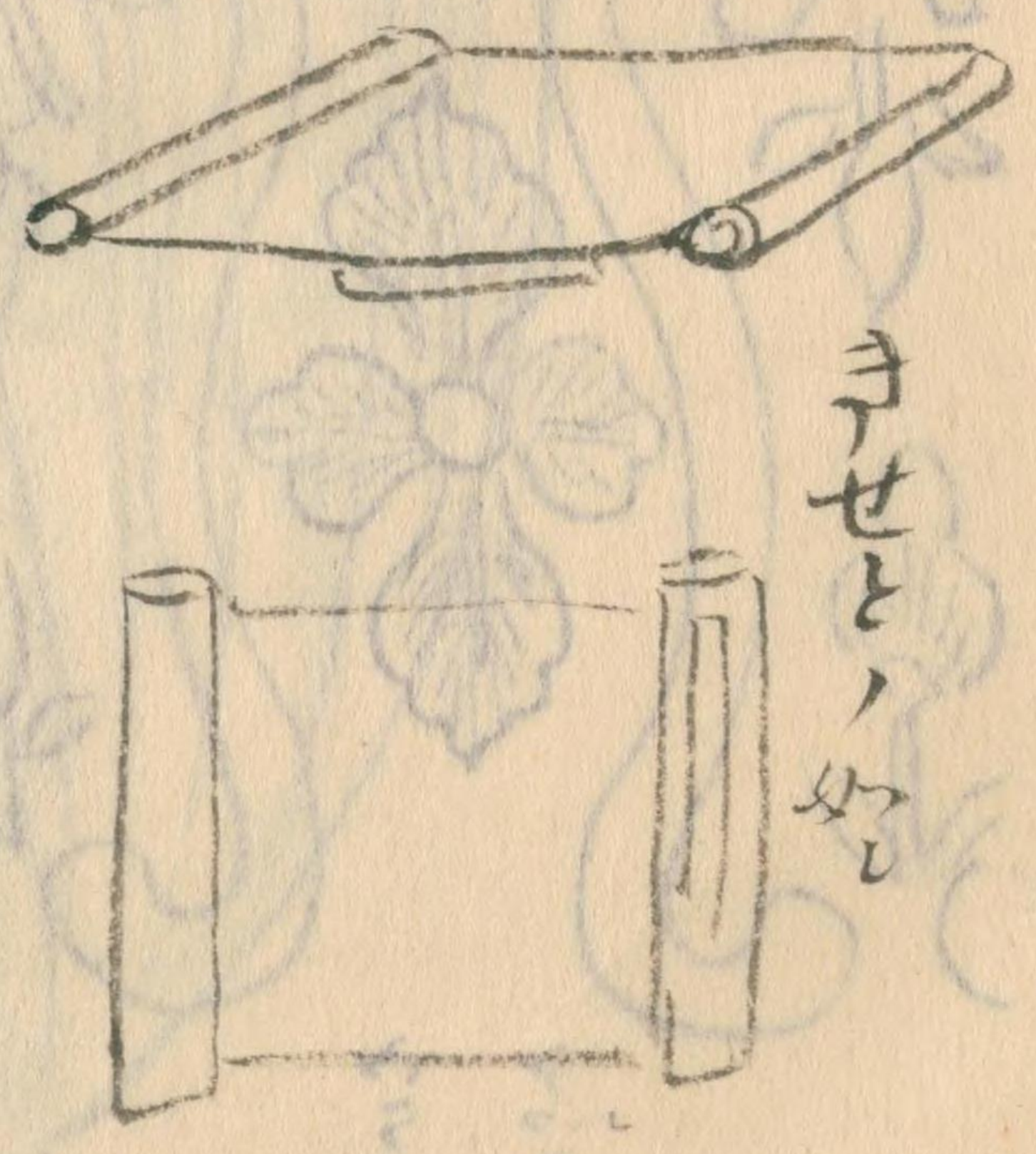


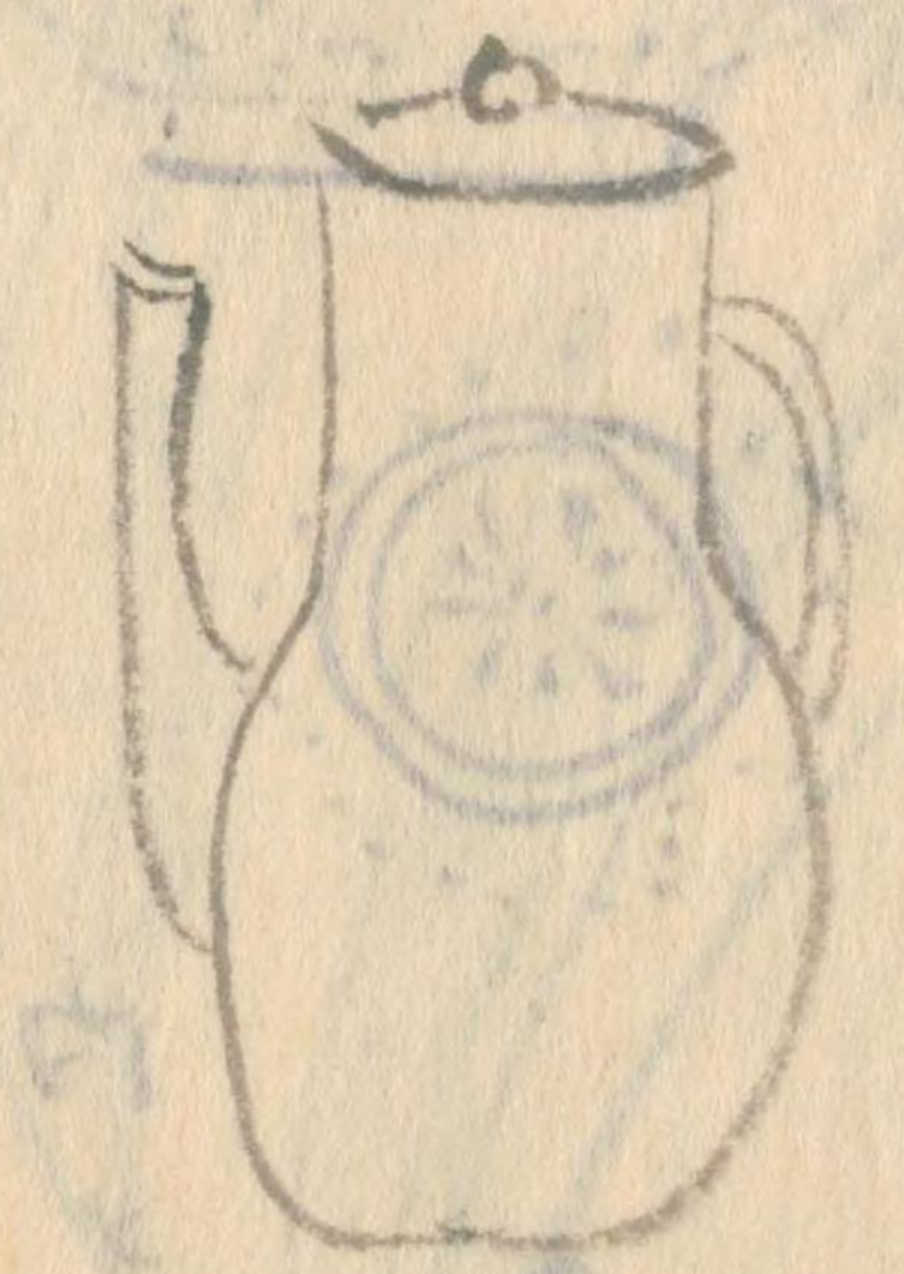

伊賀
柿炎アリ
土白用

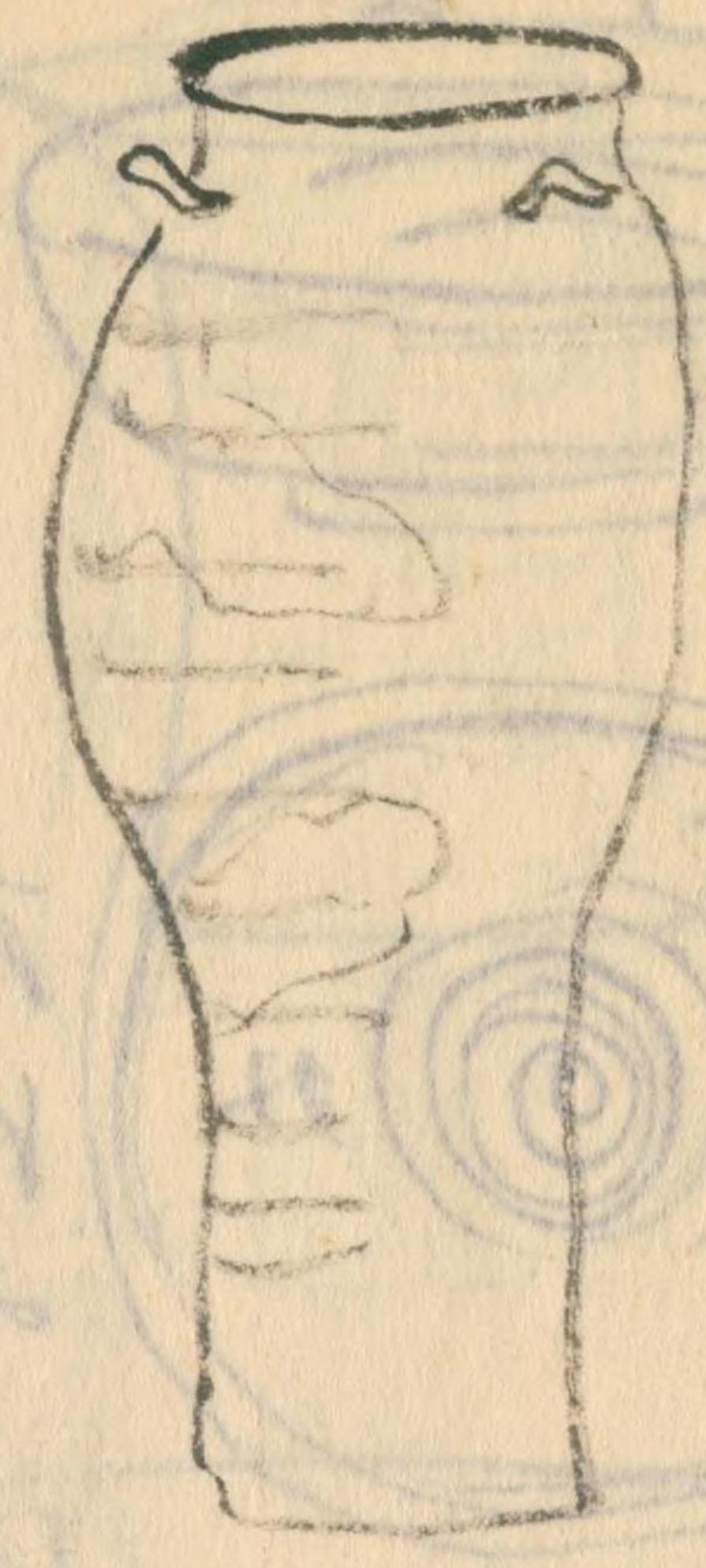

湯下
守彦茶碗

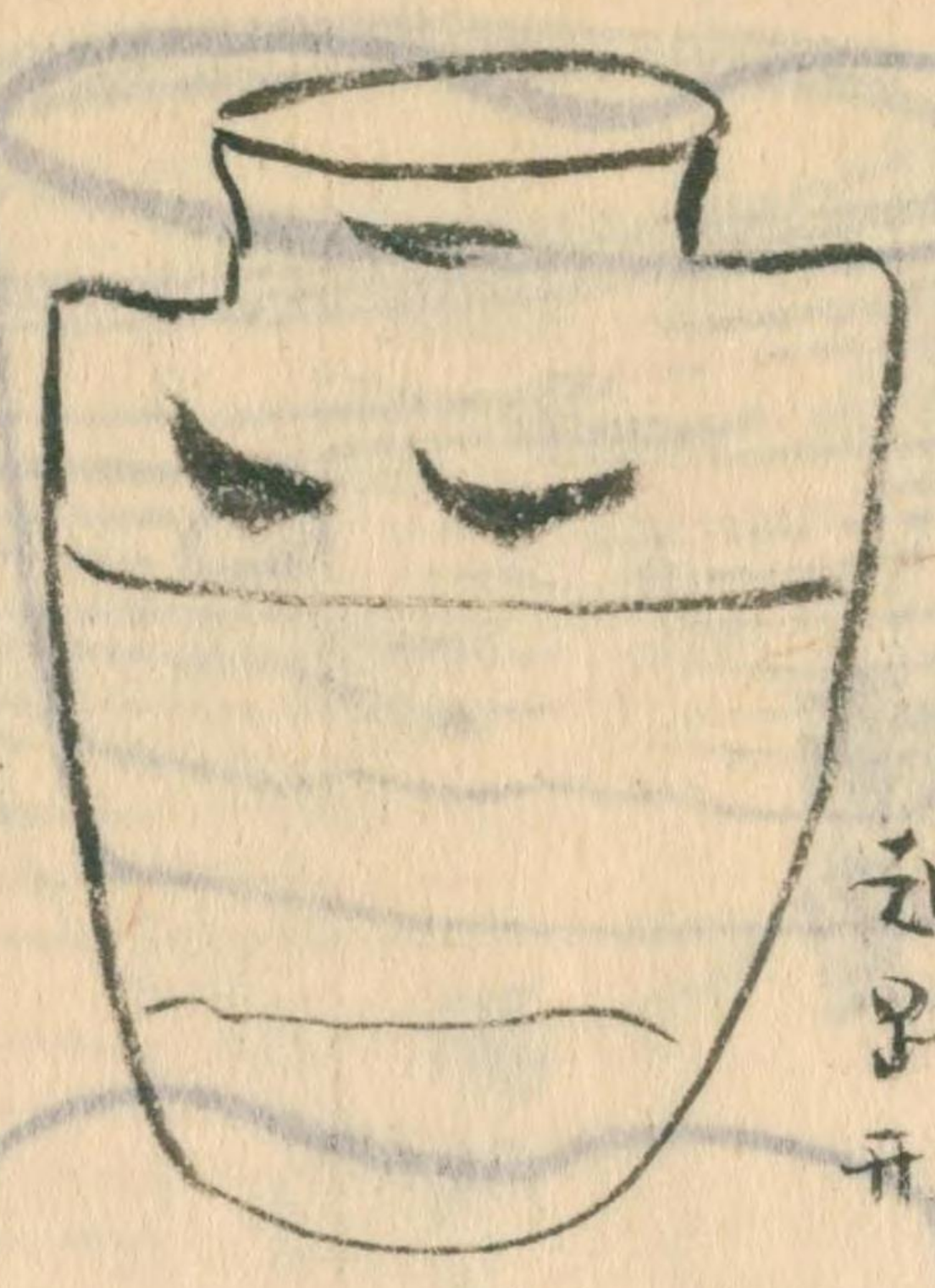

淡墨ハ白
濃墨ハ黒

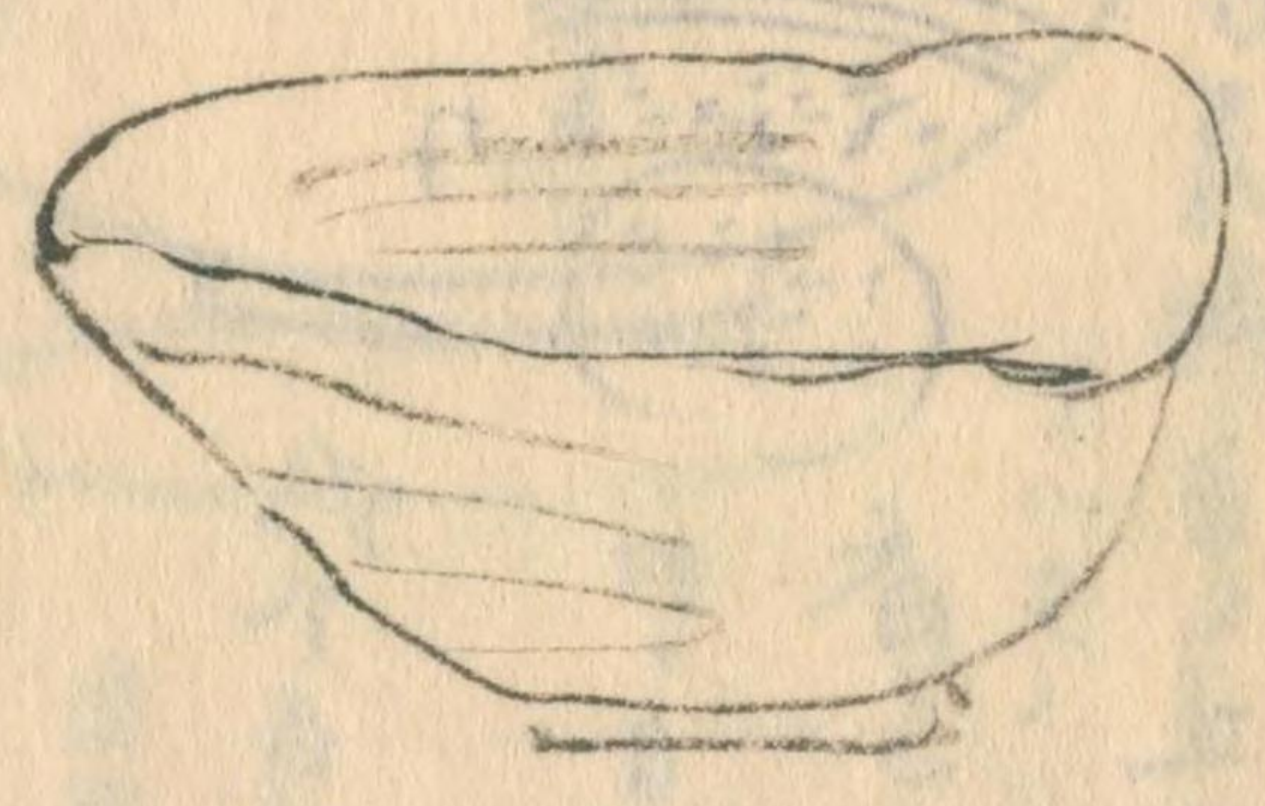

唐物丸壺
黒
土白用

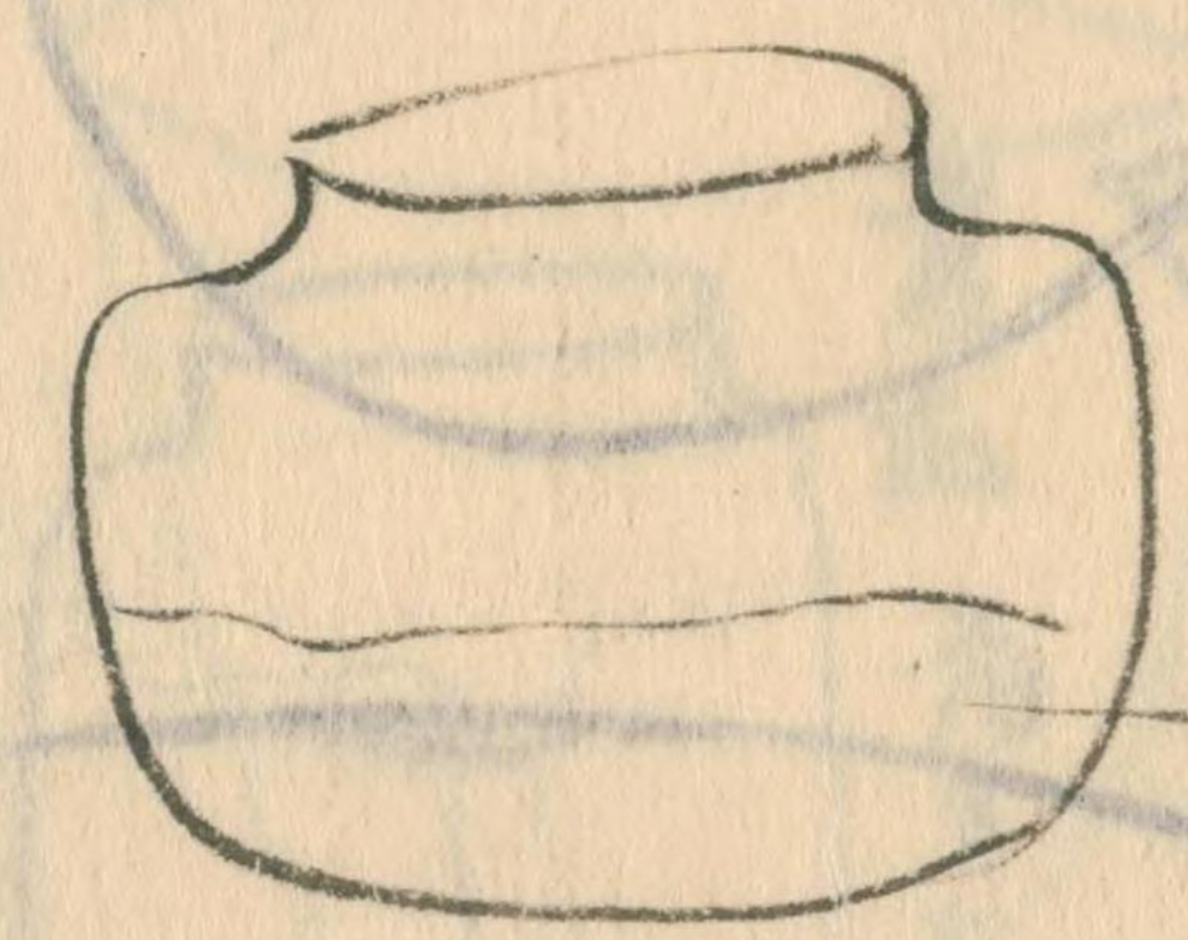

おと
キセトノ如し

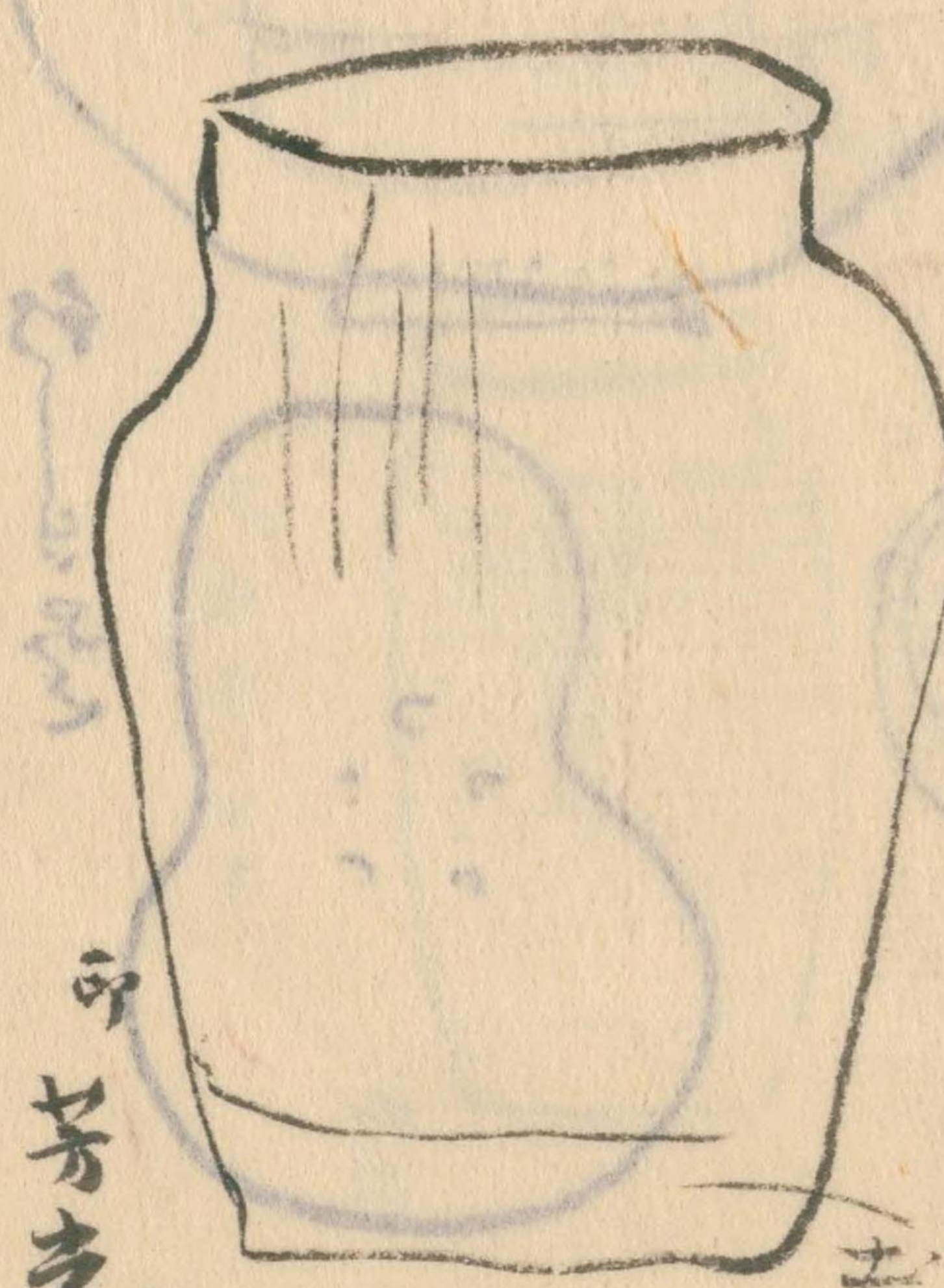

萬古

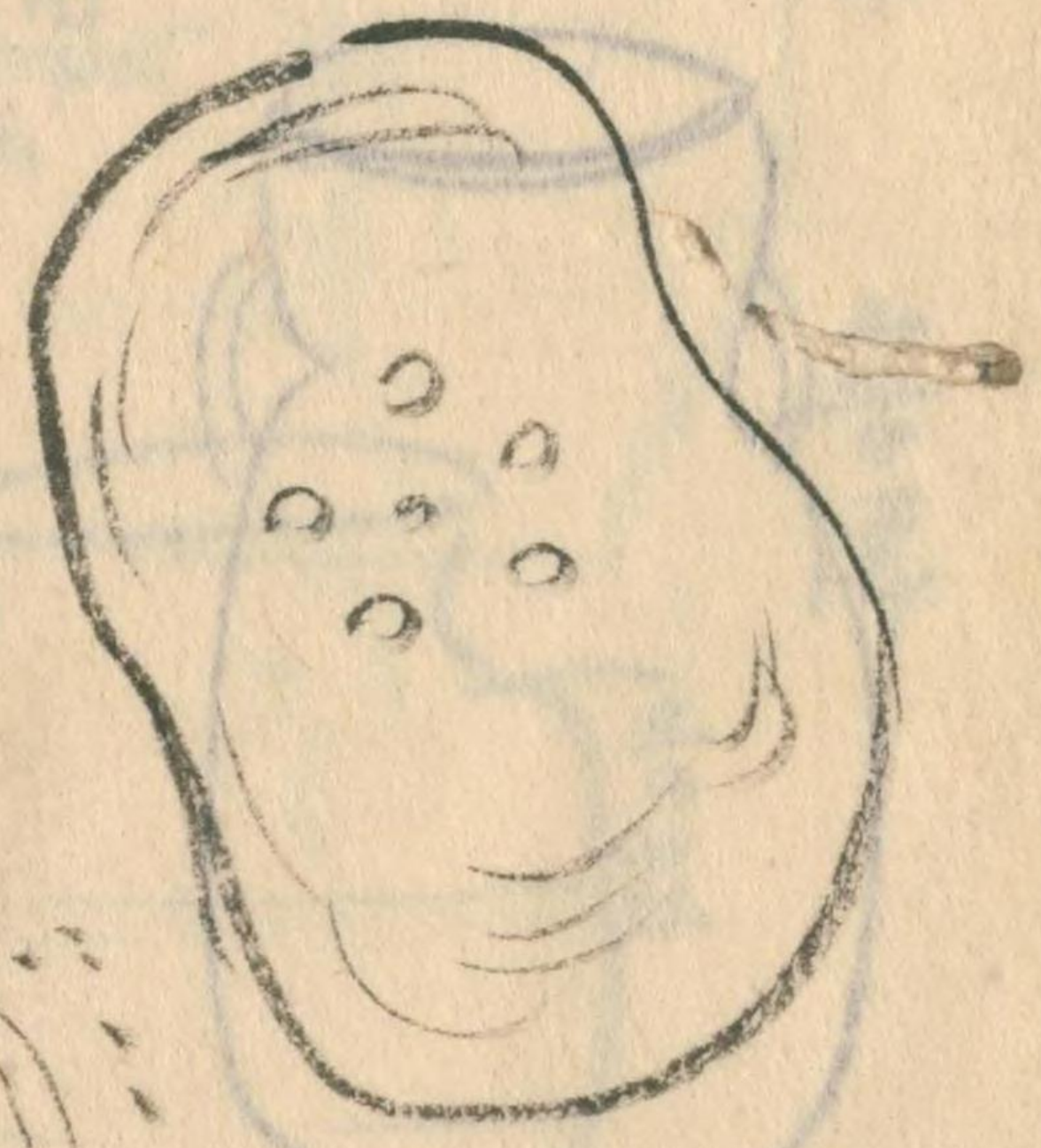

朝鮮

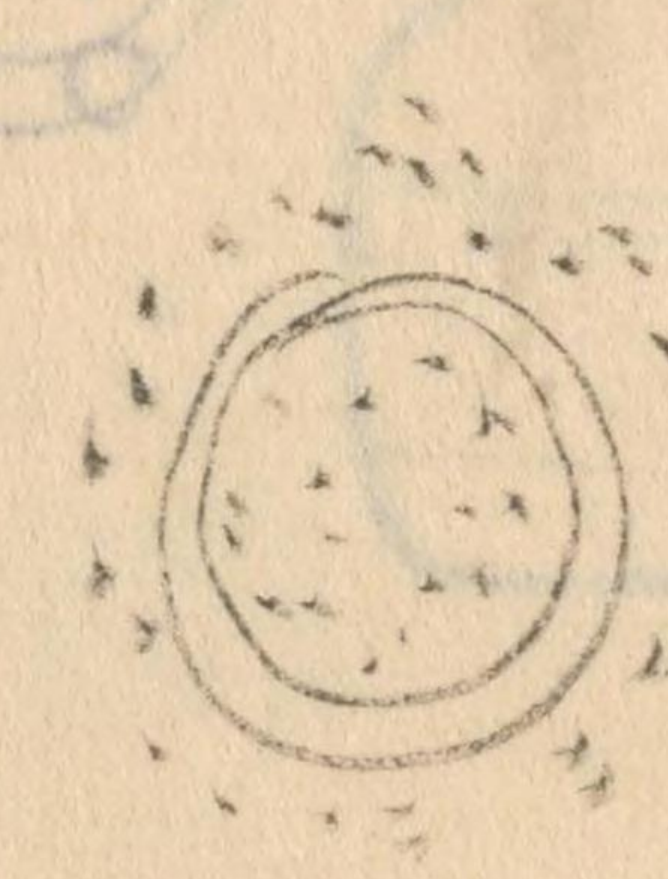

金衣山 二代目春ま
越路形


土系


おひろ


さつま
印
芳光
崇

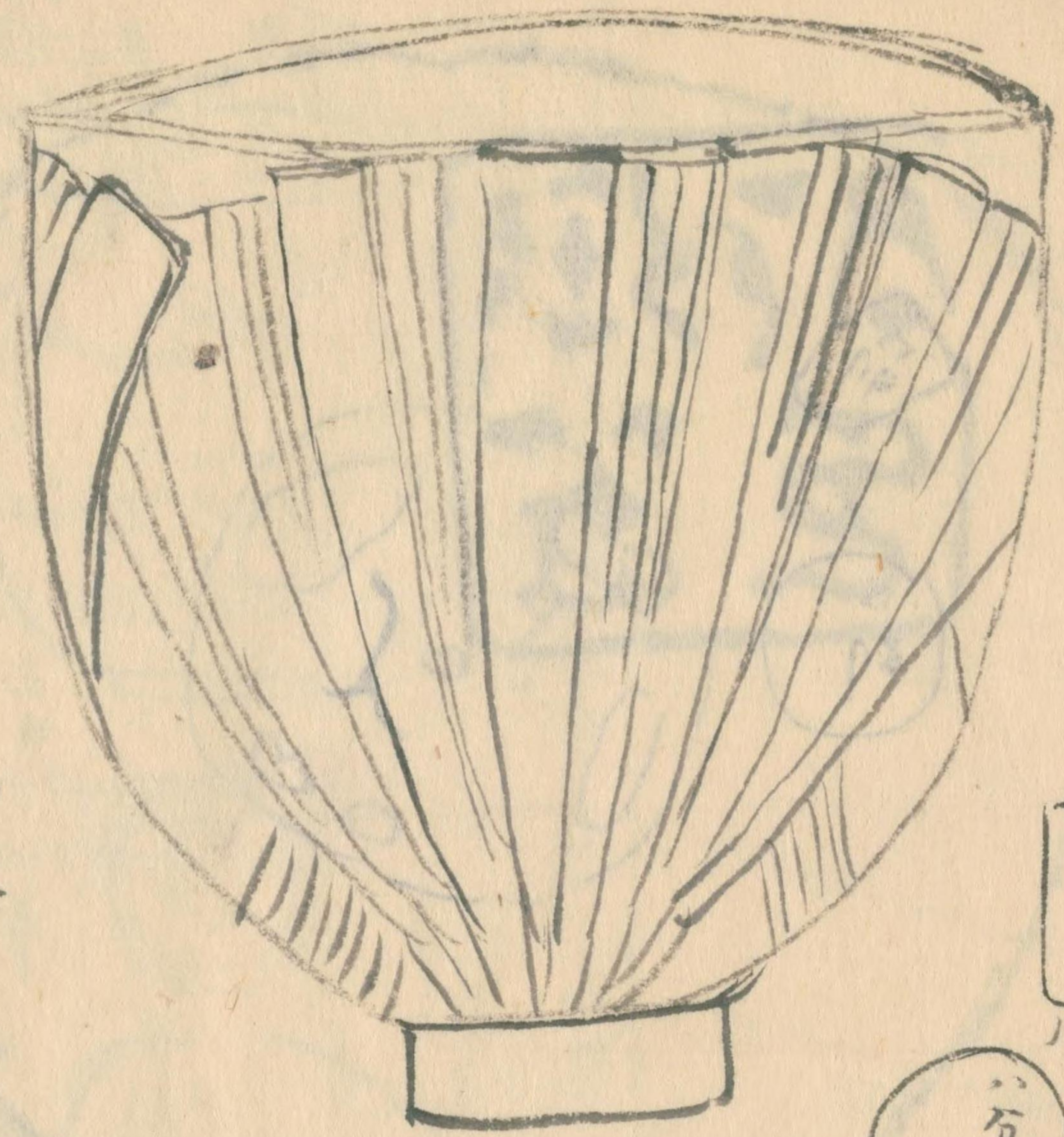


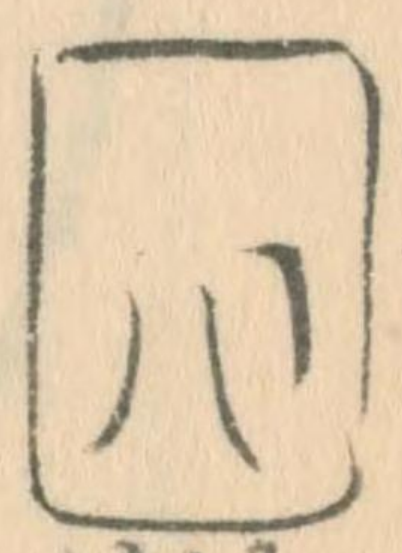


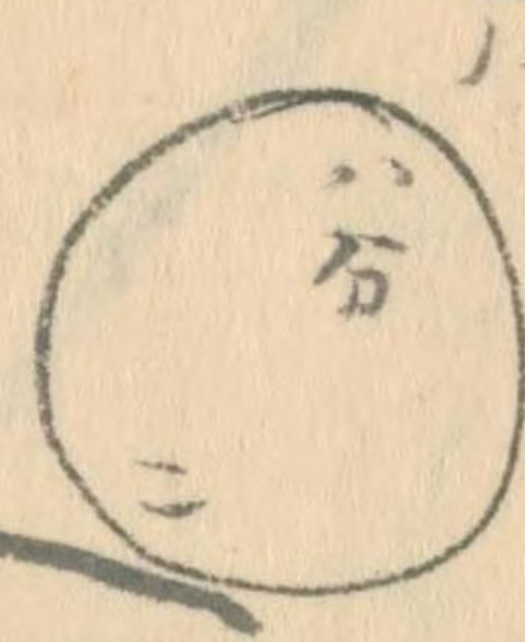
御判さつま

高三寸七分

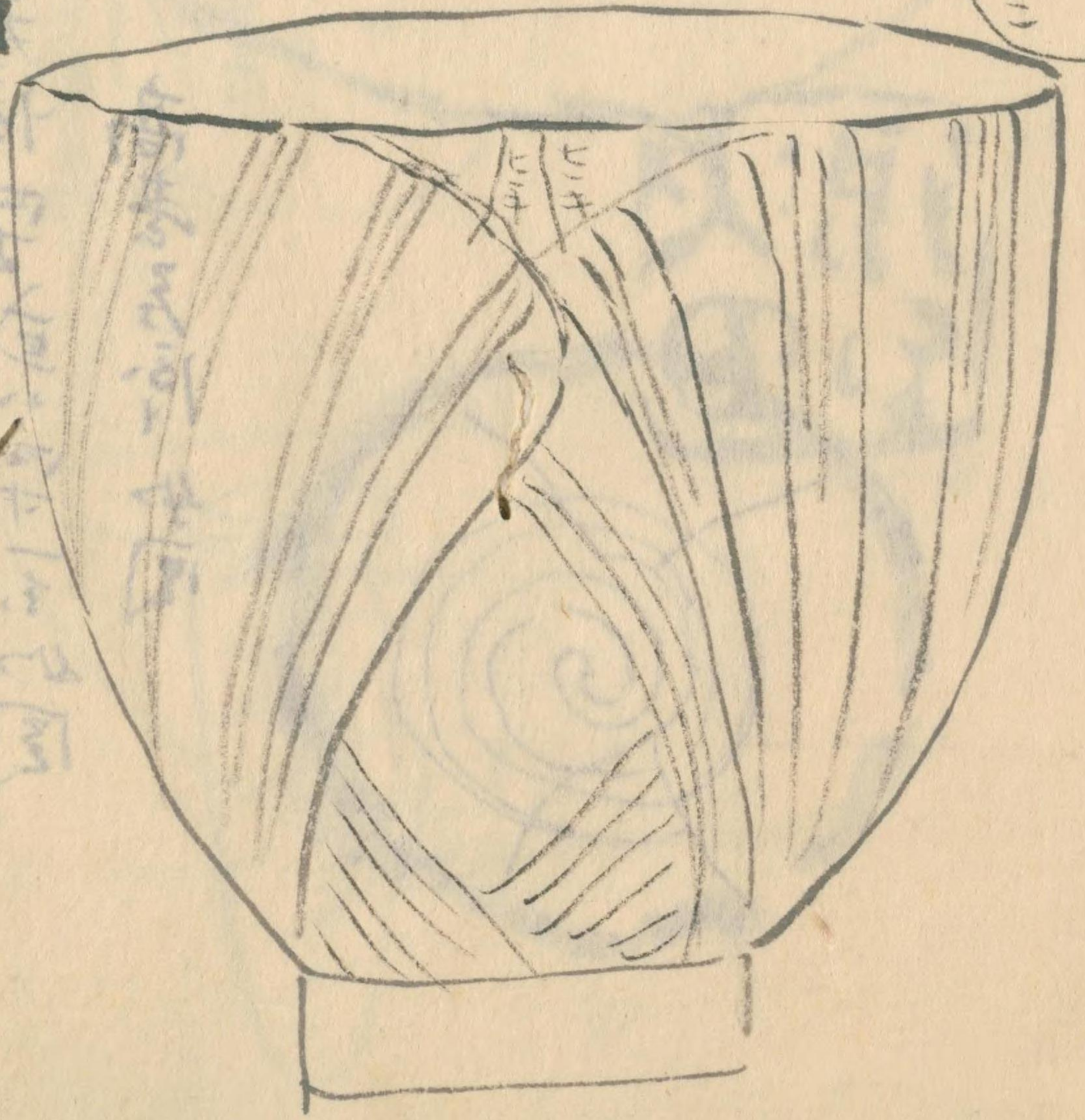
高台ゟ七分八厘



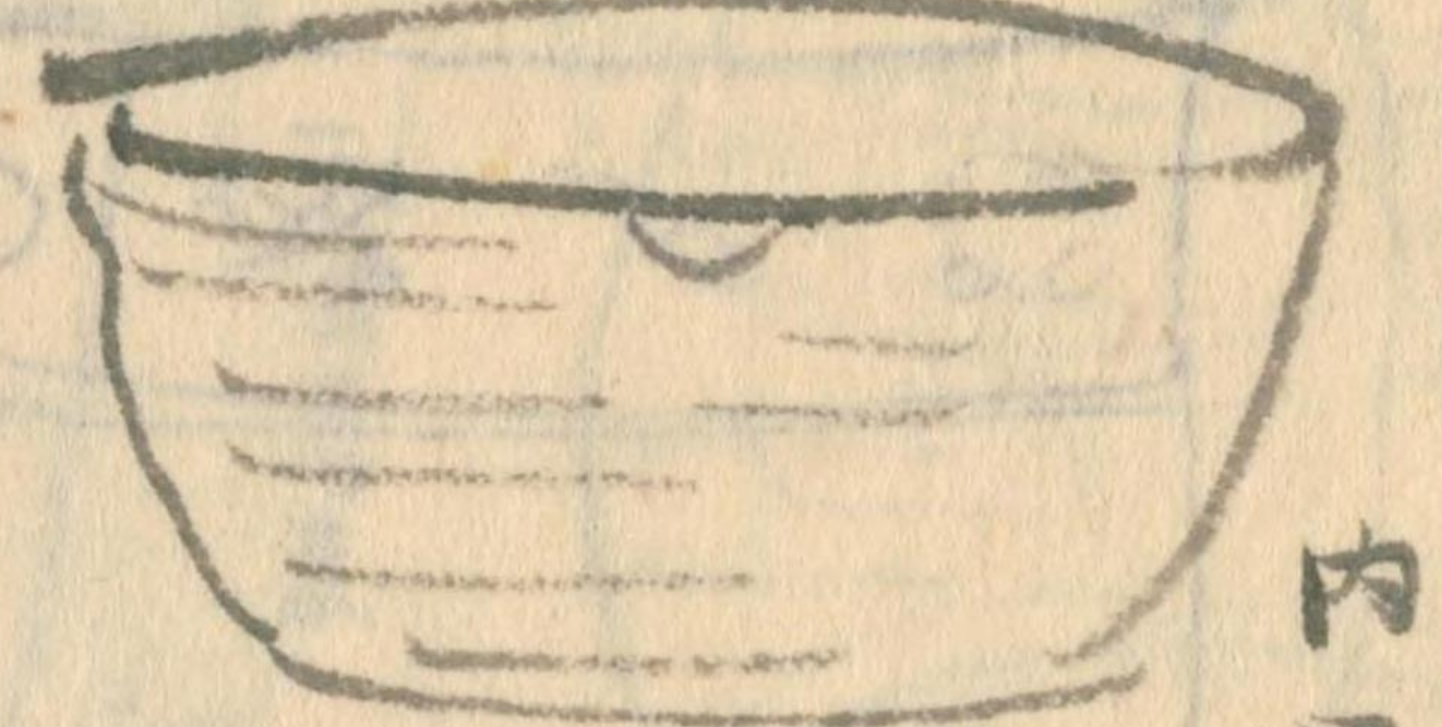




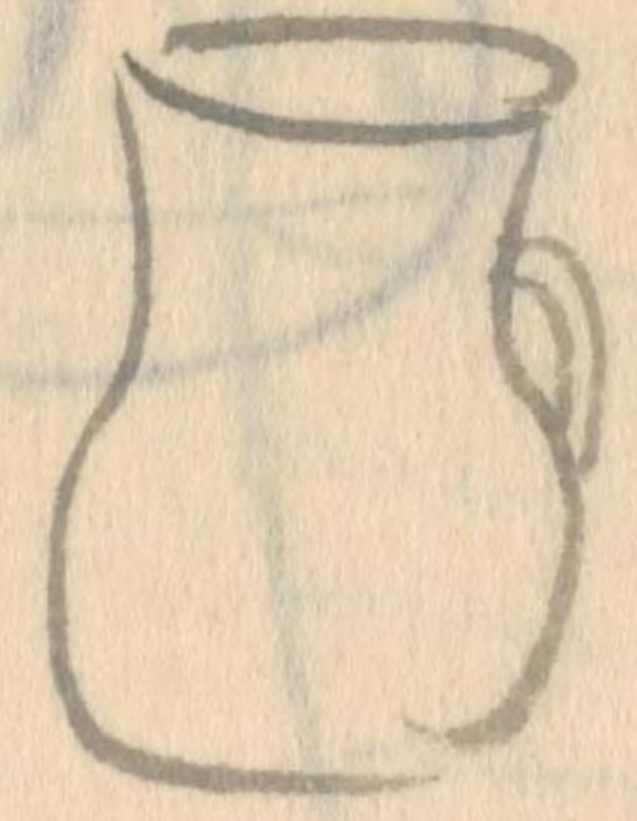
内ニアリ



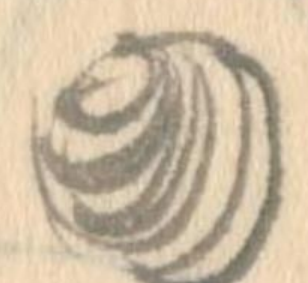
内志ゟ写片口



内黒薬
外しブ

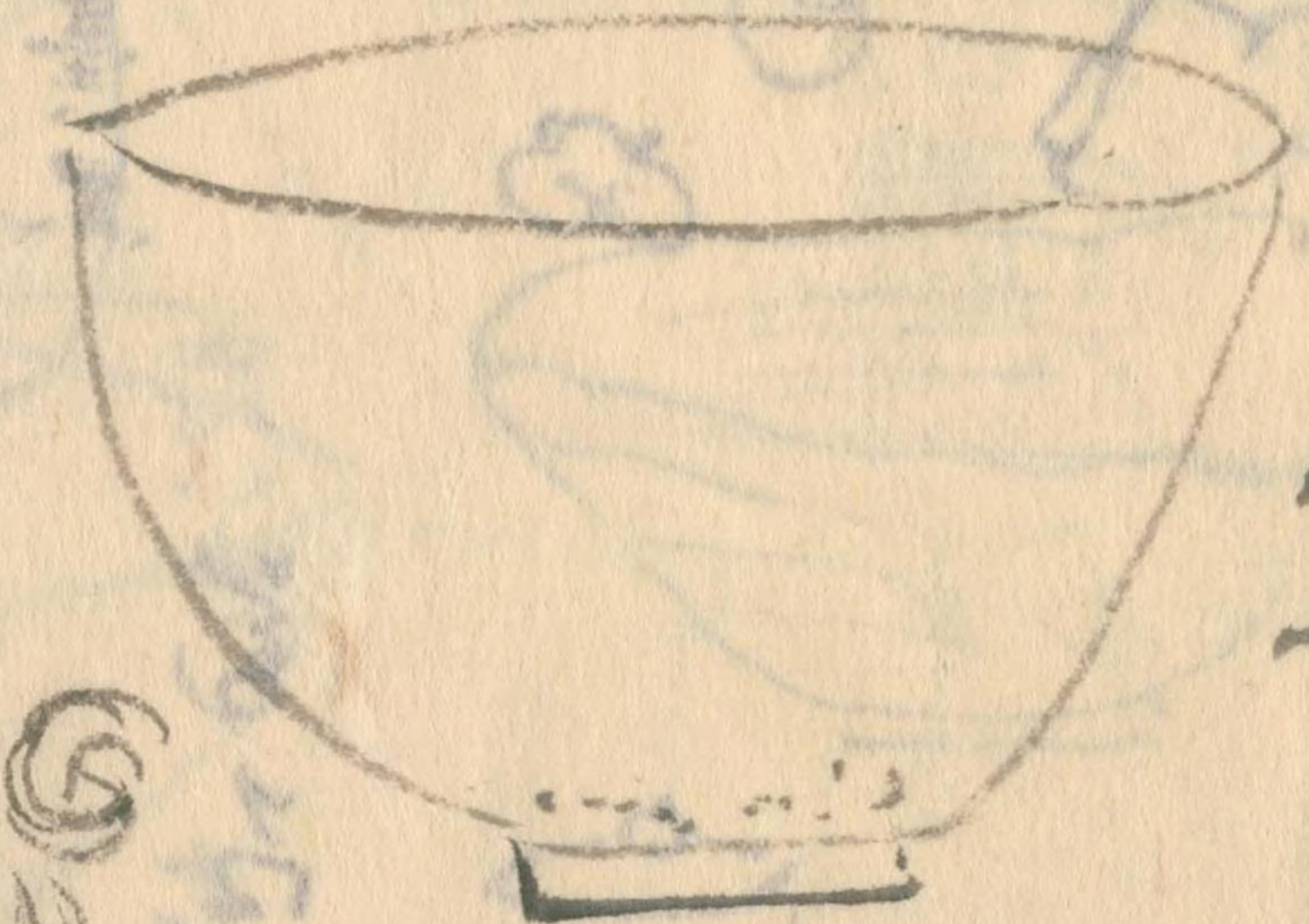


ヒトロ



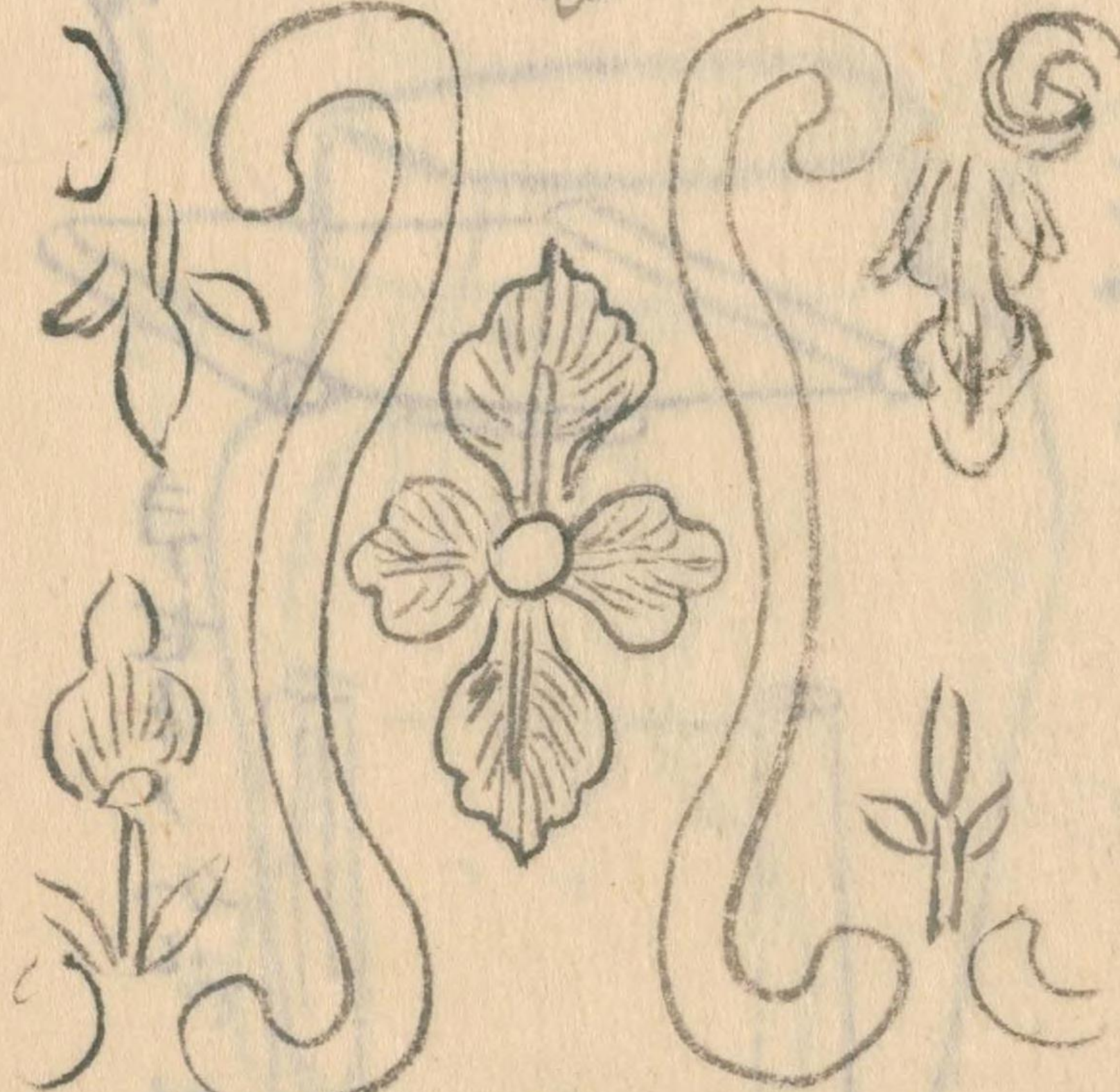
衣しま

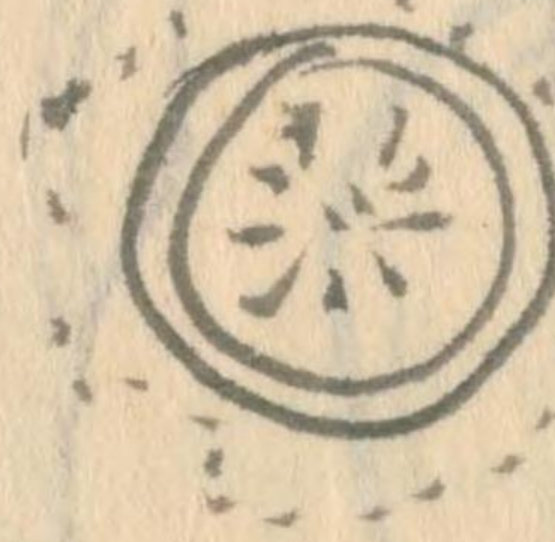
井戸きんふう



右
エリミミキ

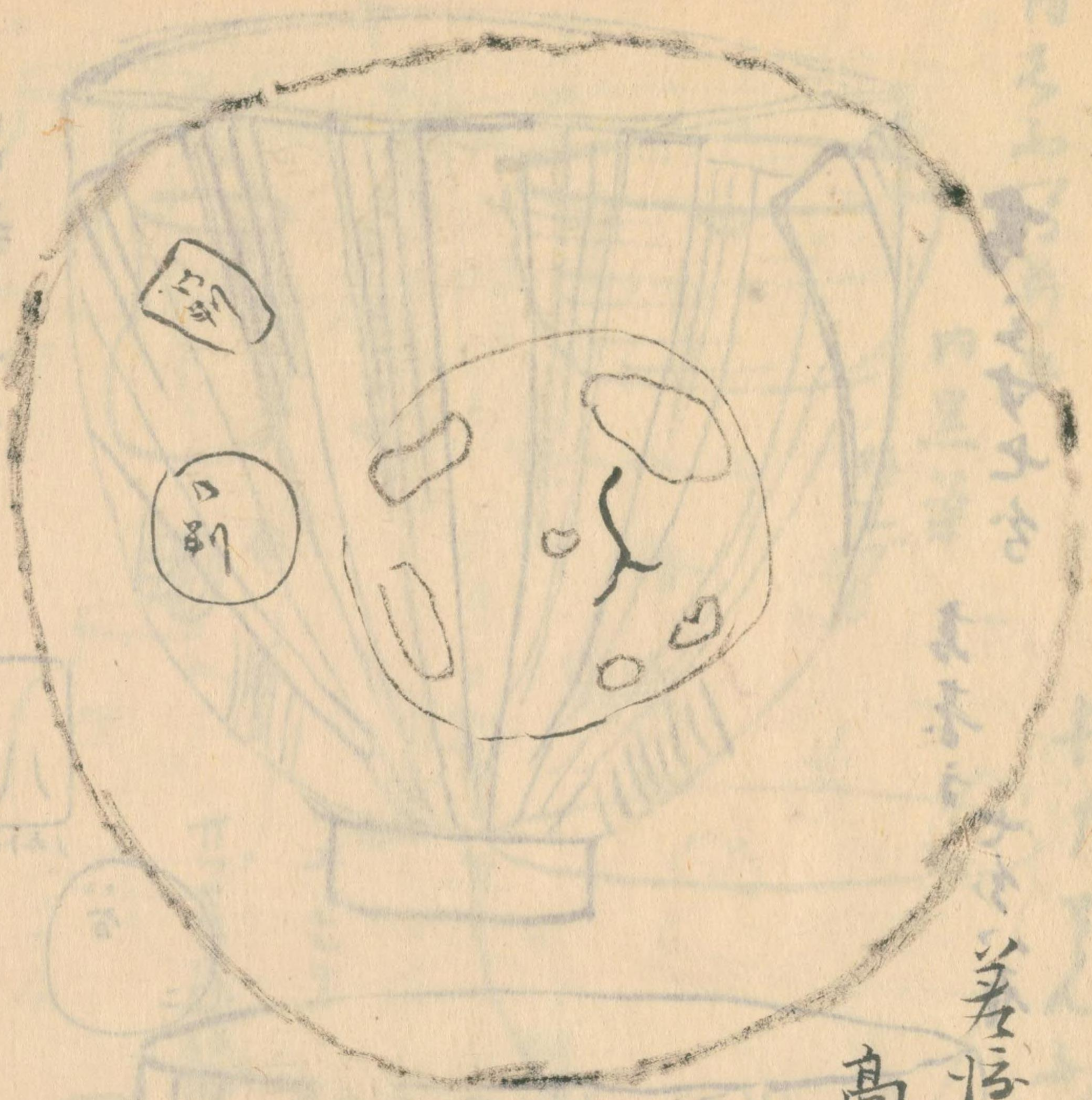
ボッテ茶碗袋

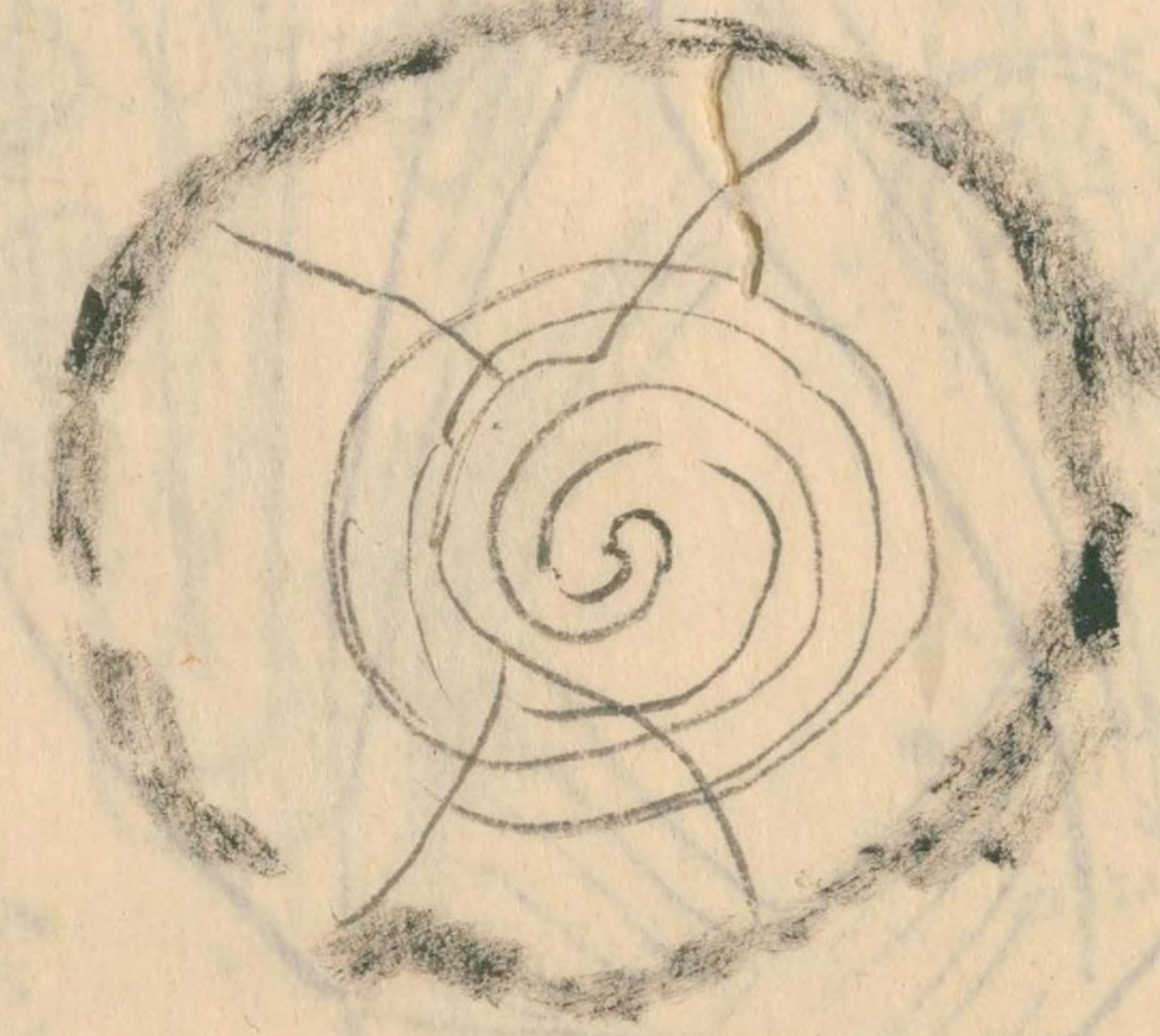




内ノ

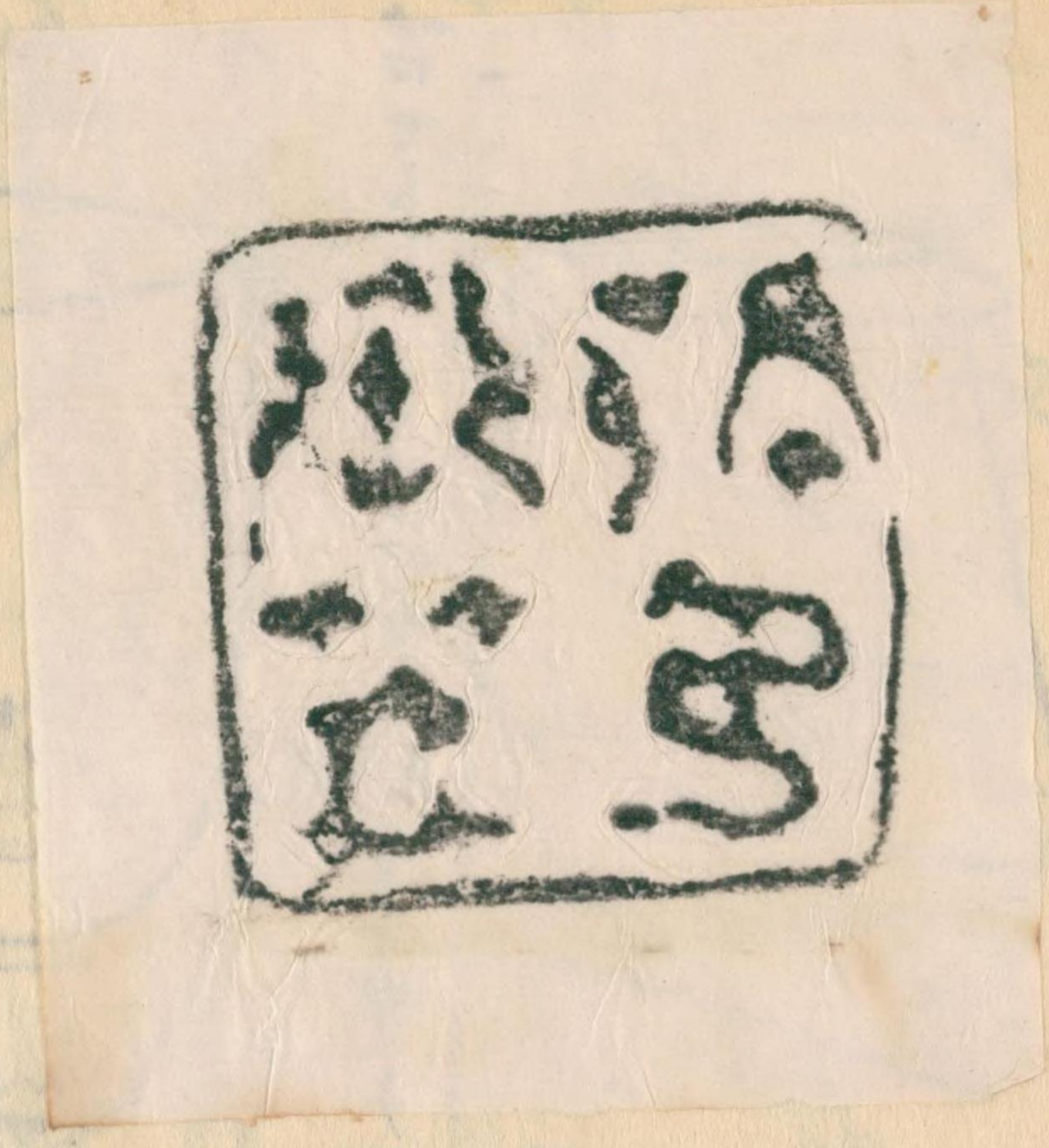
やう楽カイキ
ニカリ
カハ

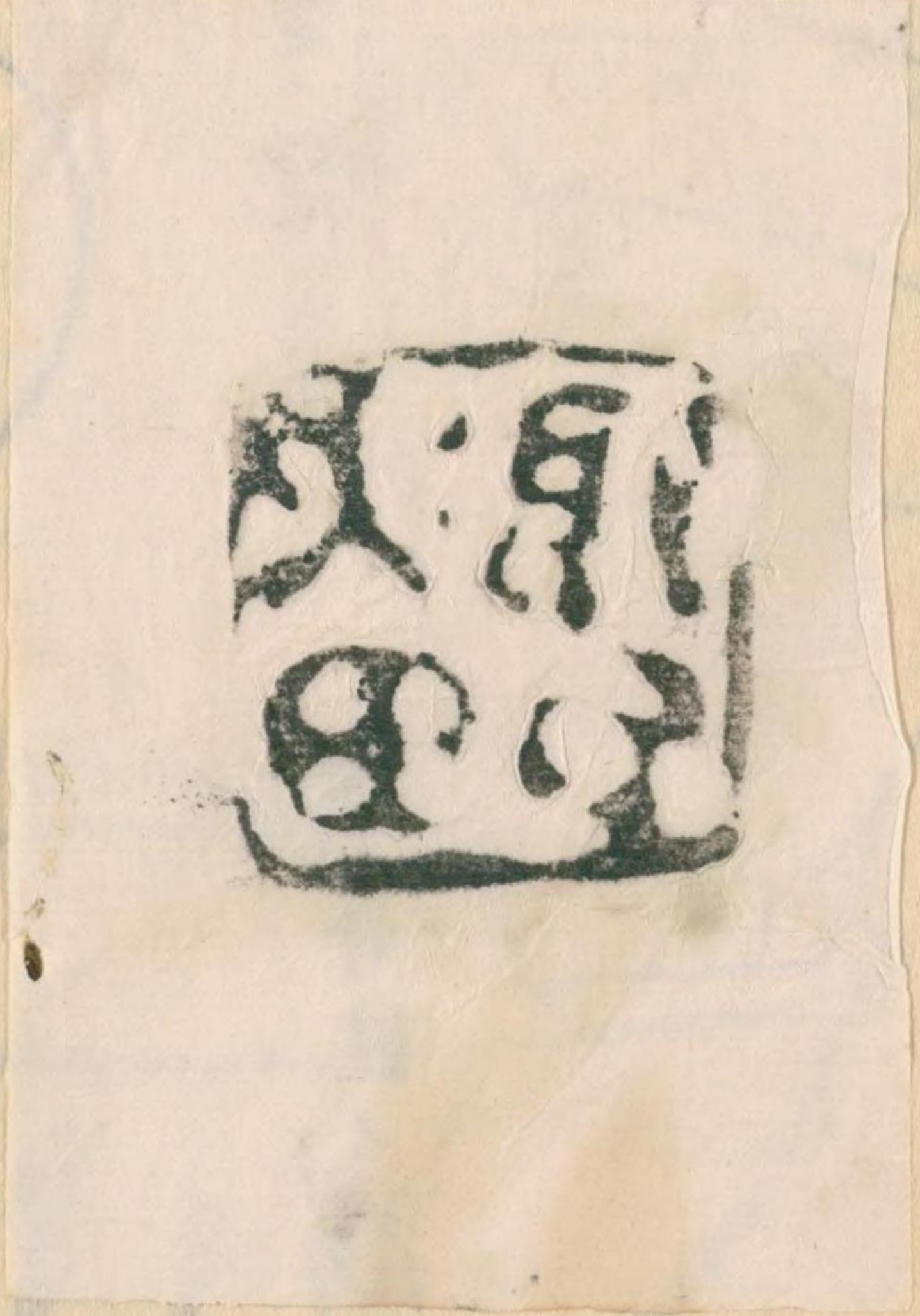




差渡四寸弐分四寸一分如図

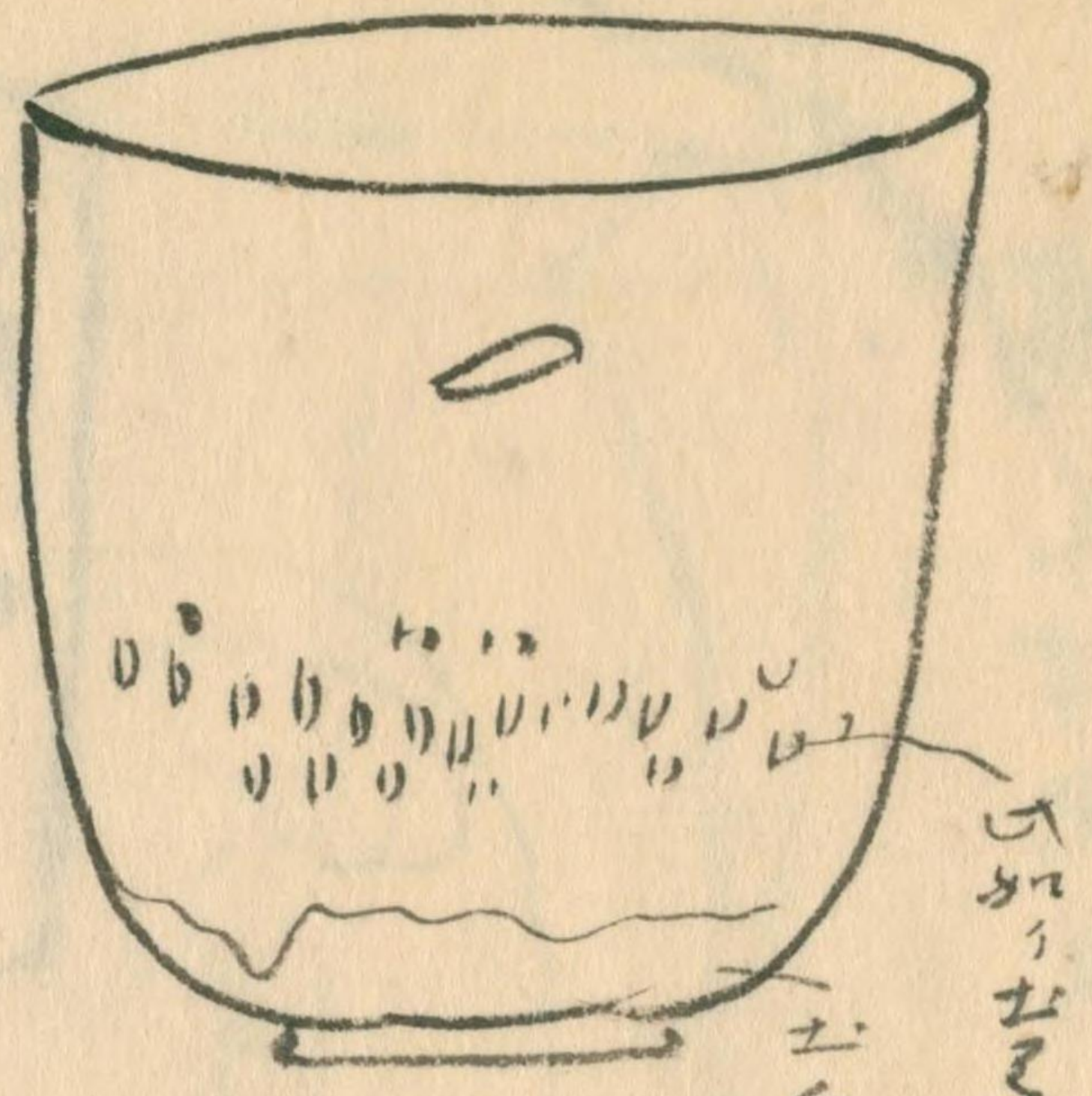
高臺差渡 如図

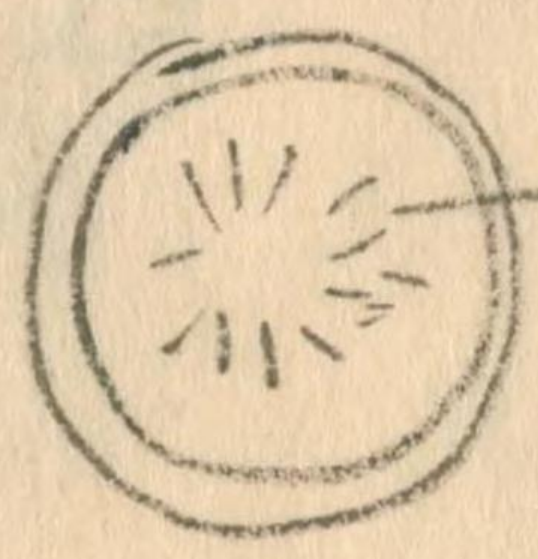


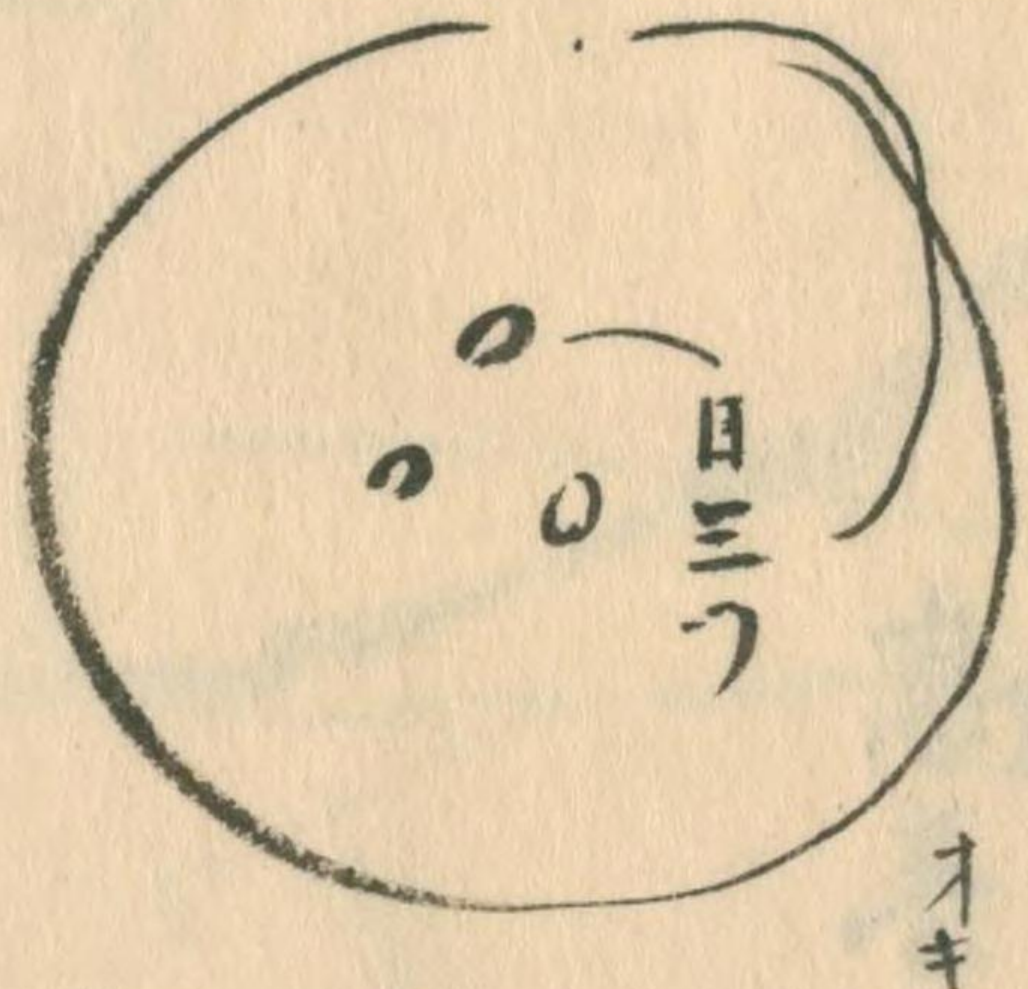


十月十八 今日

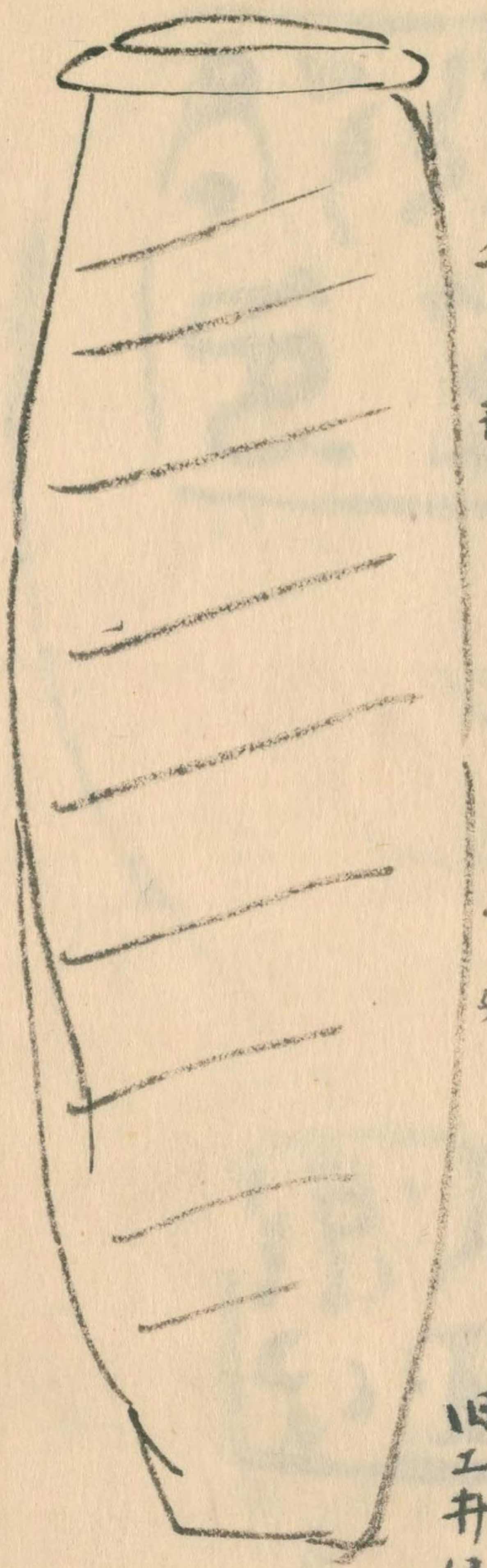
瀬戸唐津

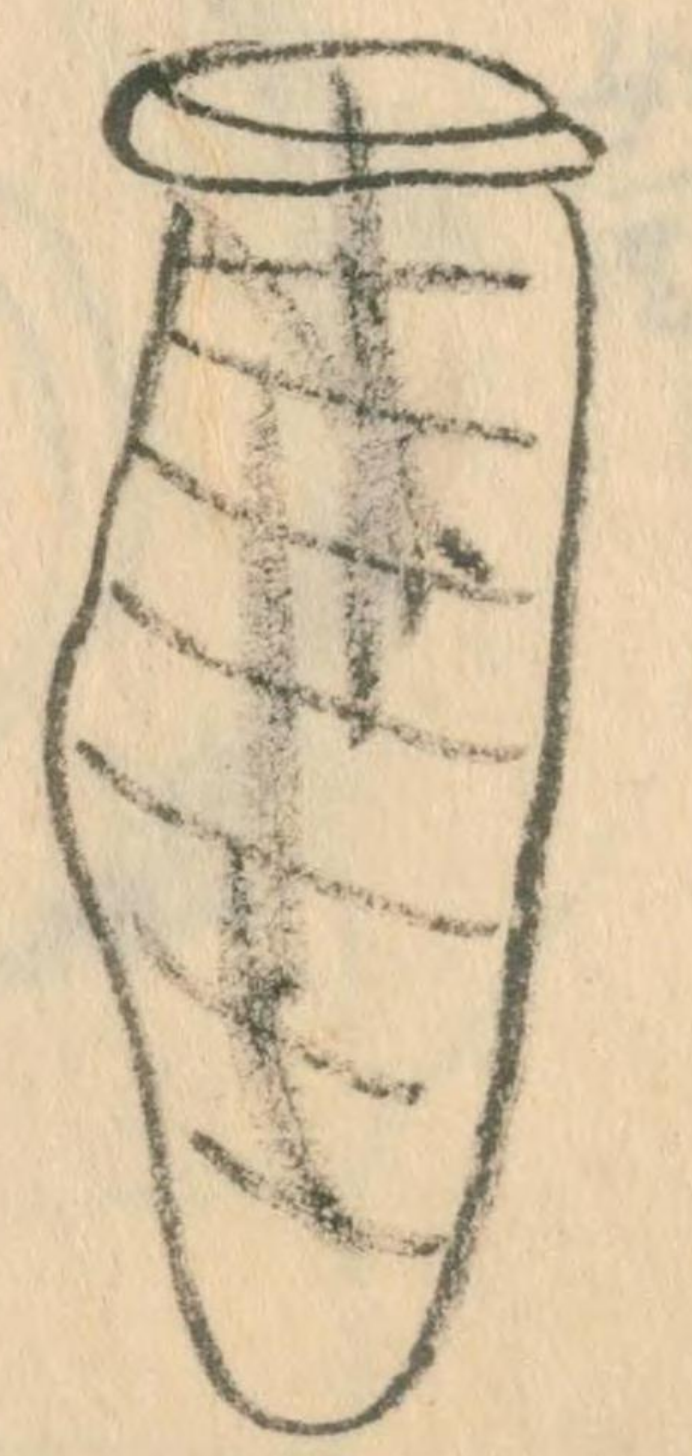

此如クむら
土白


シテリ

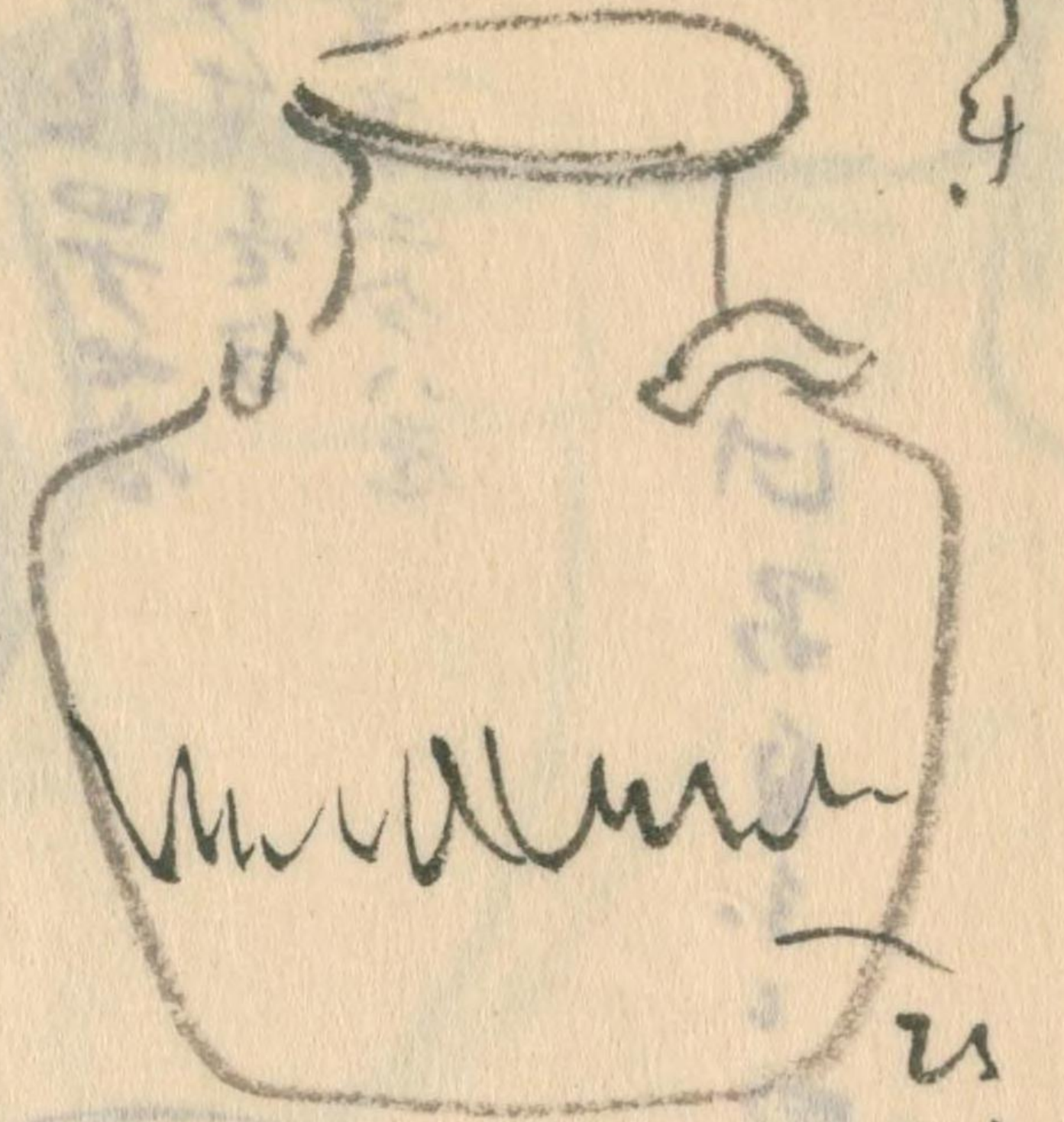

日三ツ
目三ツハセト唐津ノオキテ之

古セト

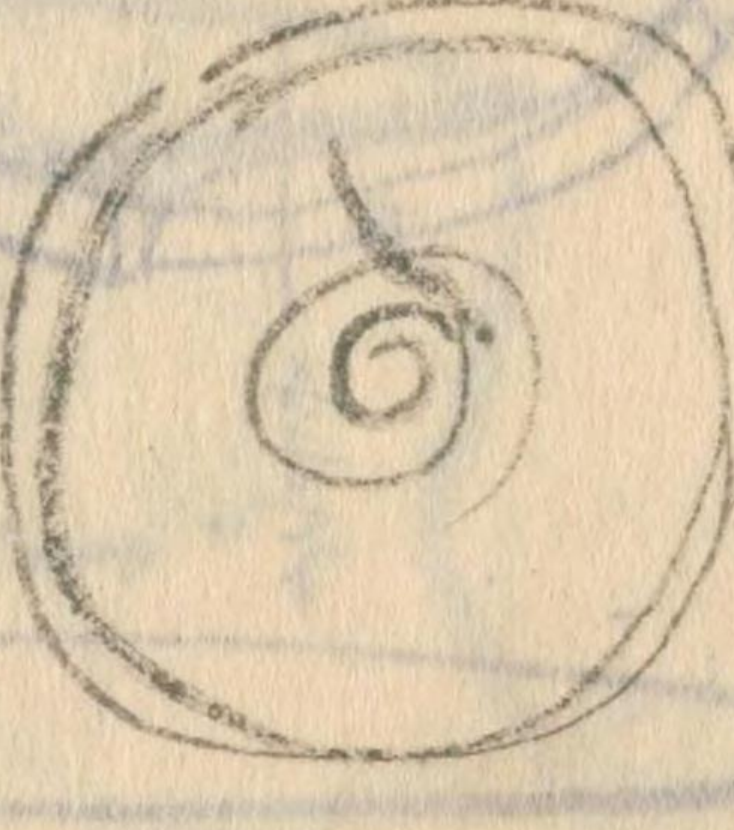

チマキ形ネヂ[illegible]ニナル
南蛮ノ如し


旧土井殿ノ花

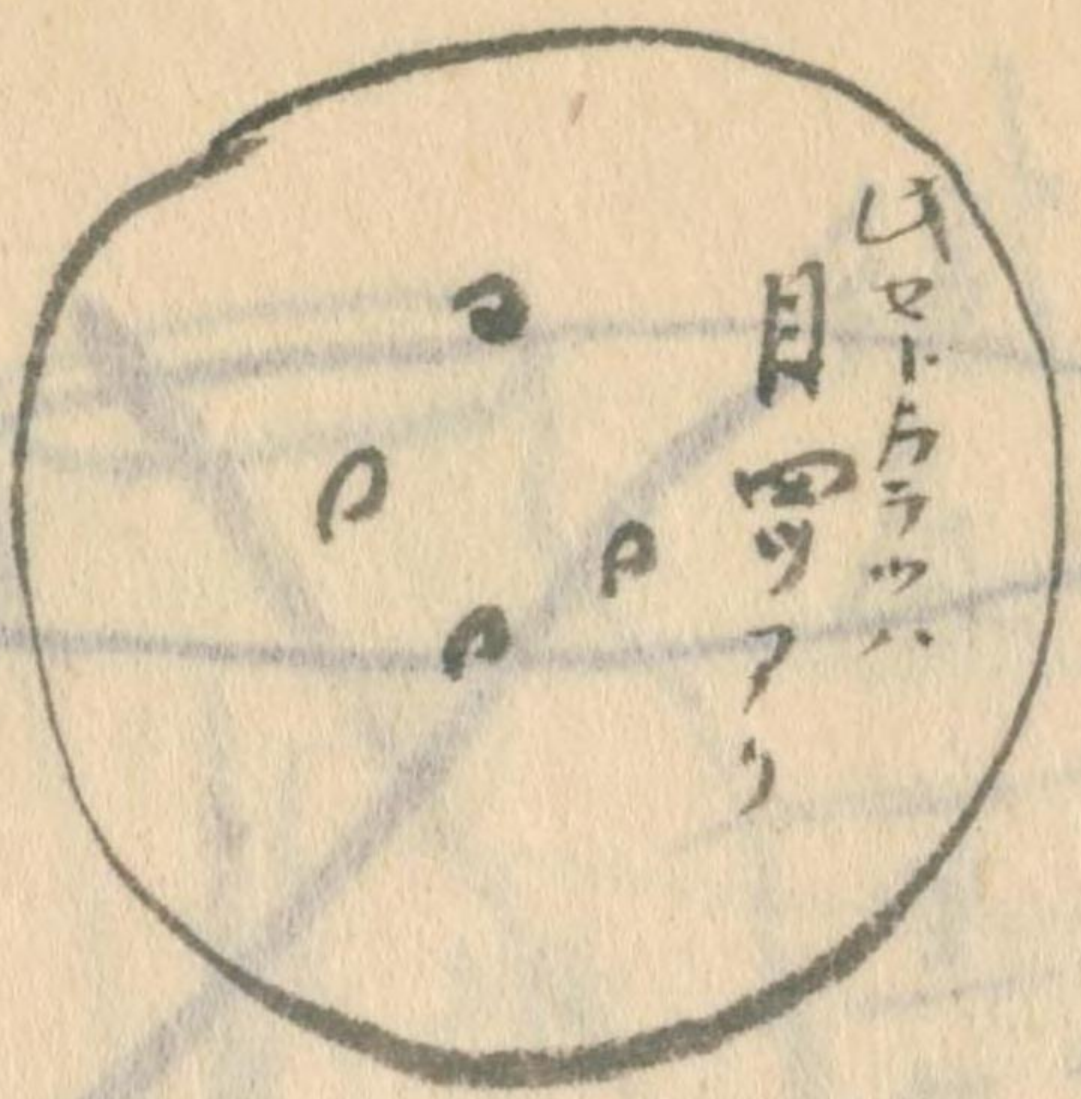
志ミ手


ひゞ

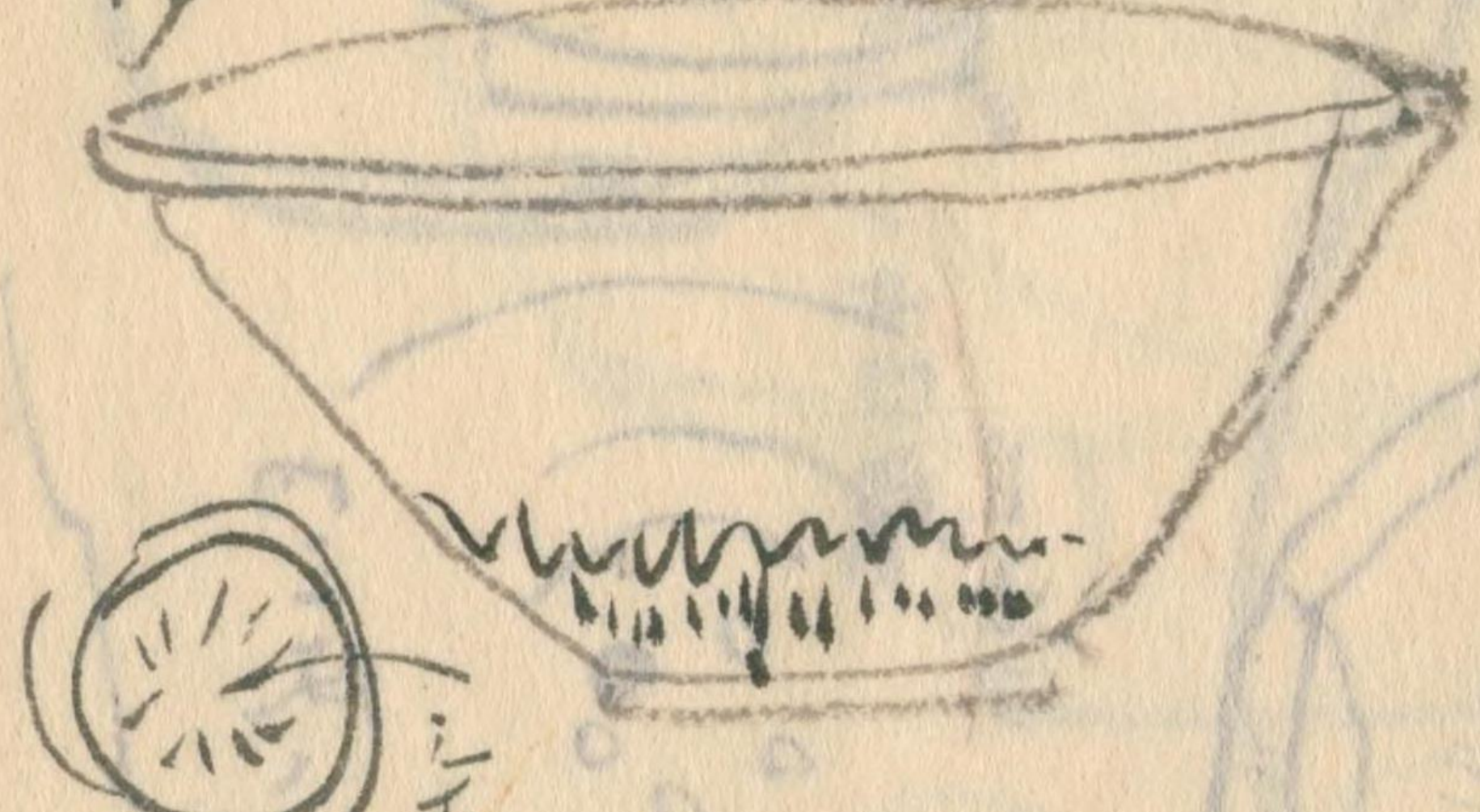
黄黒

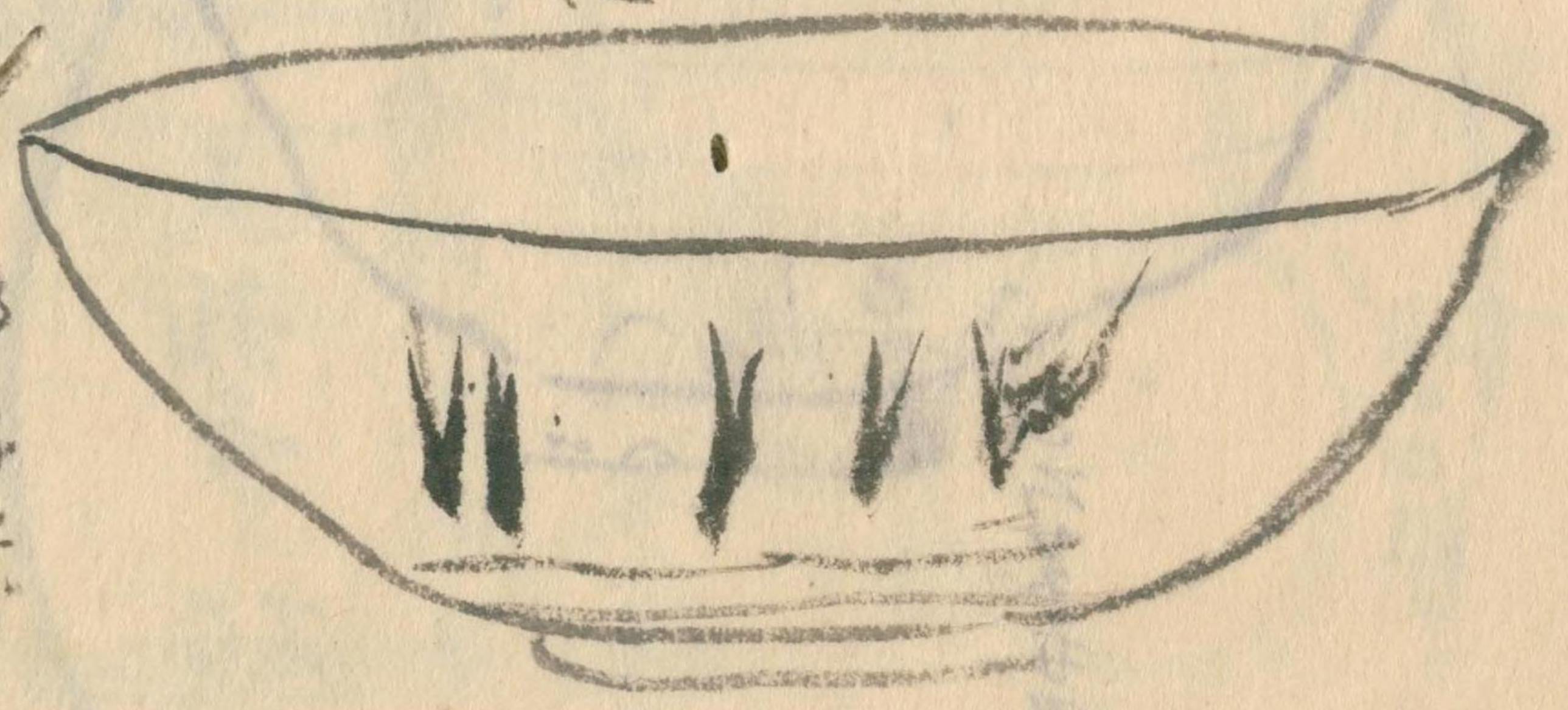

ウラ

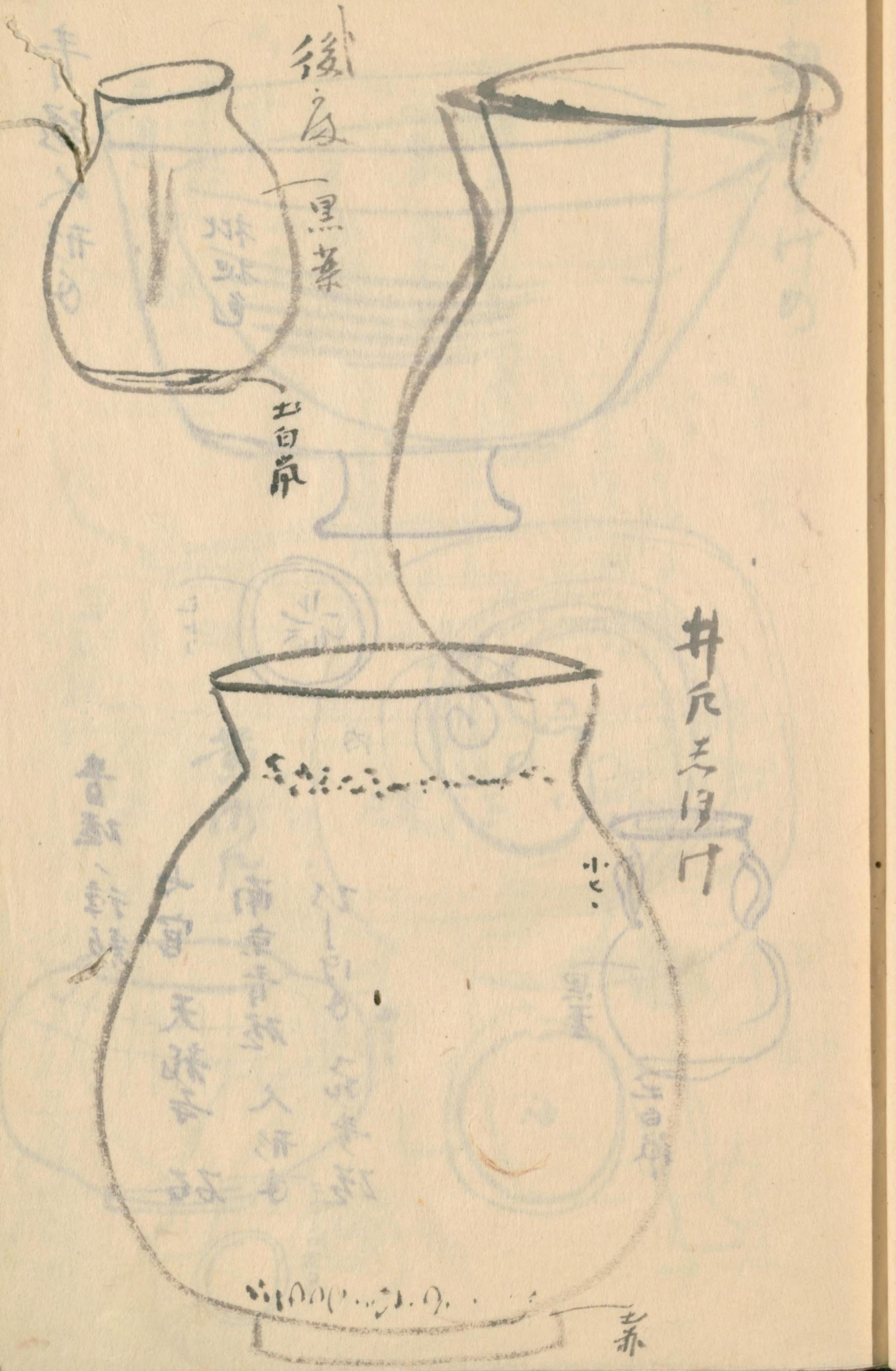
瀬戸唐津


此アトカラツハ目四ツアリ

黄黒 唐代ヨリ今之唐津
[illegible]焼しむ

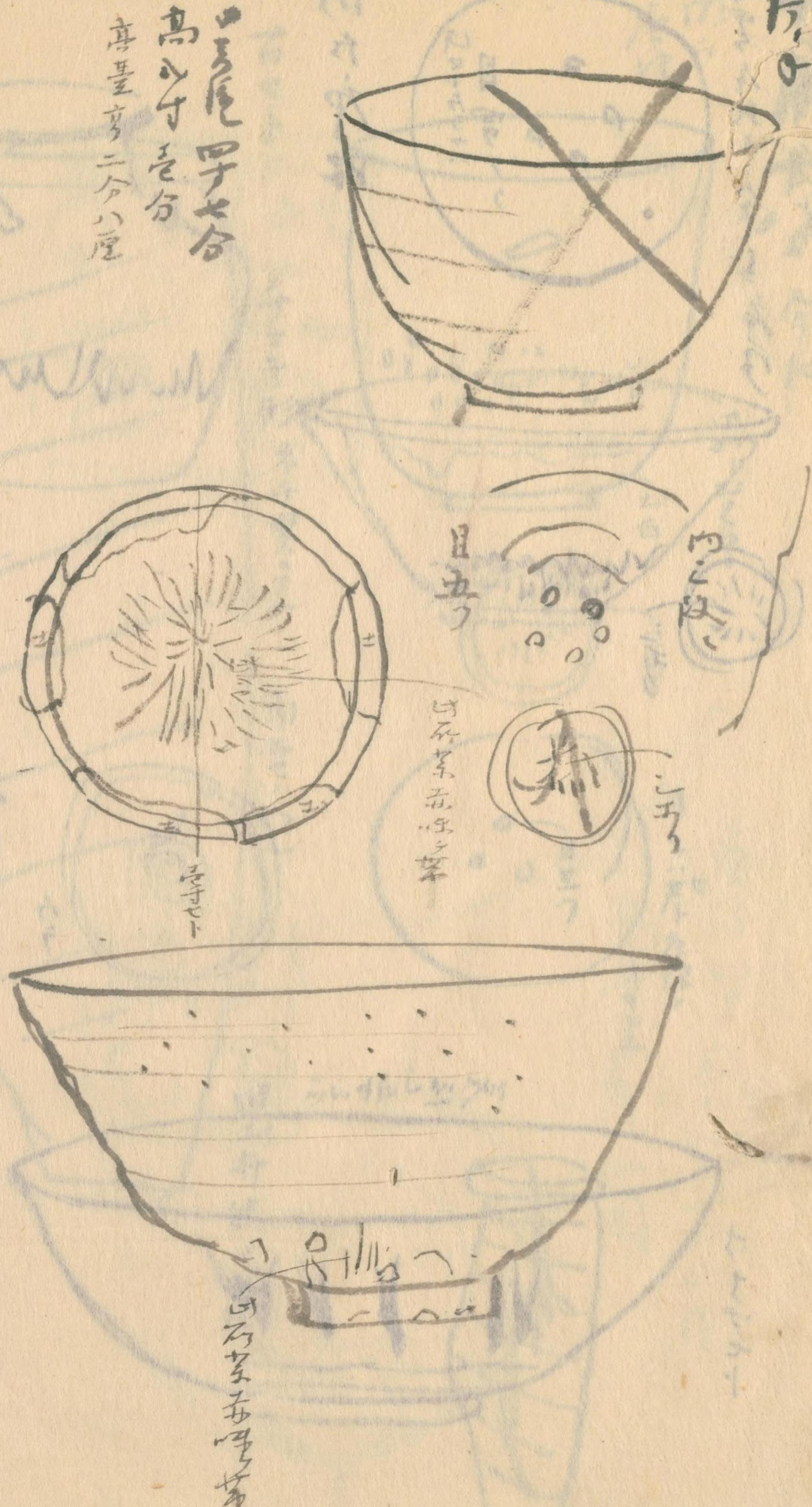

シテリ


キキナセト

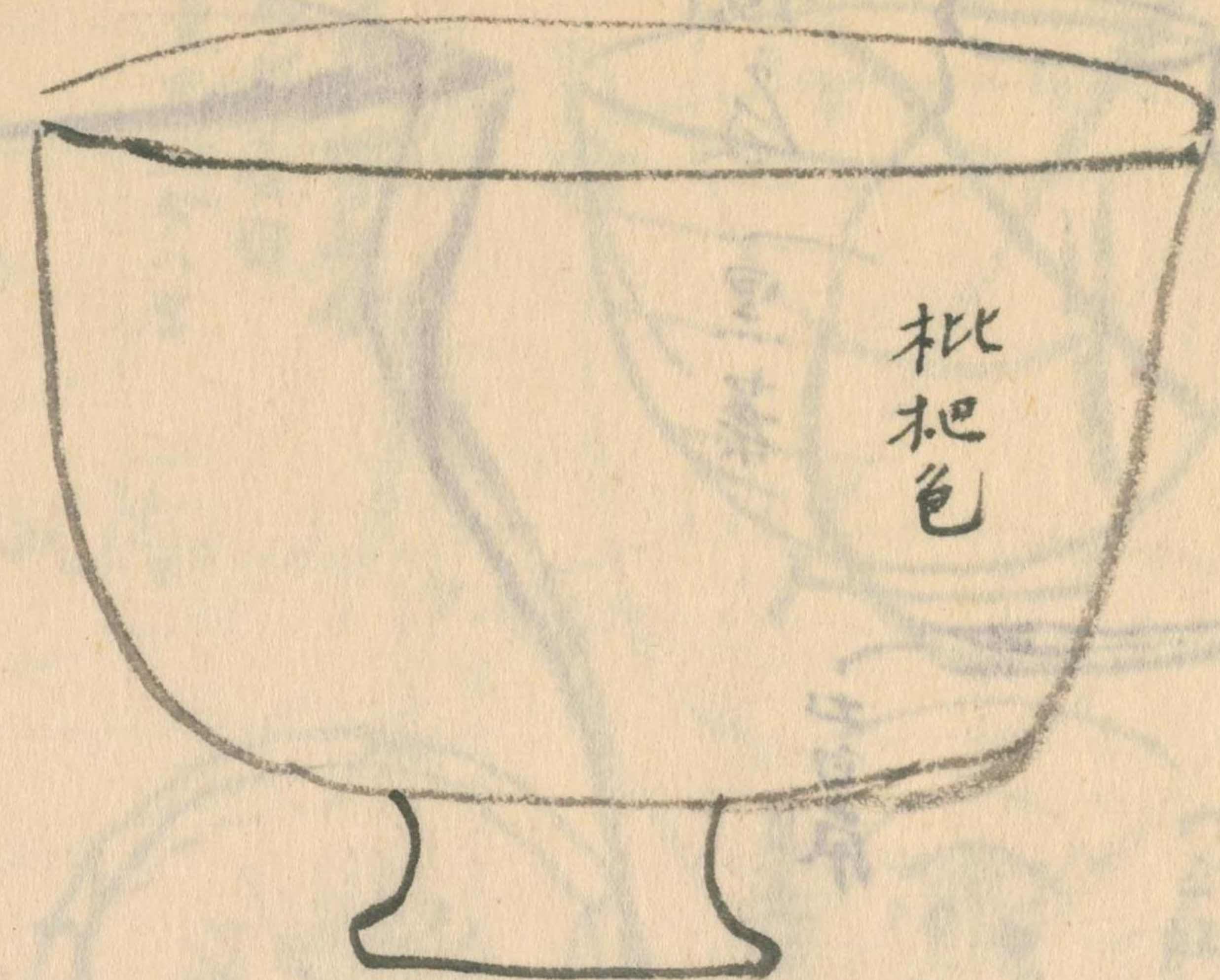

後唐
黒薬
土白肌
井戸手目付
小さ、
土赤

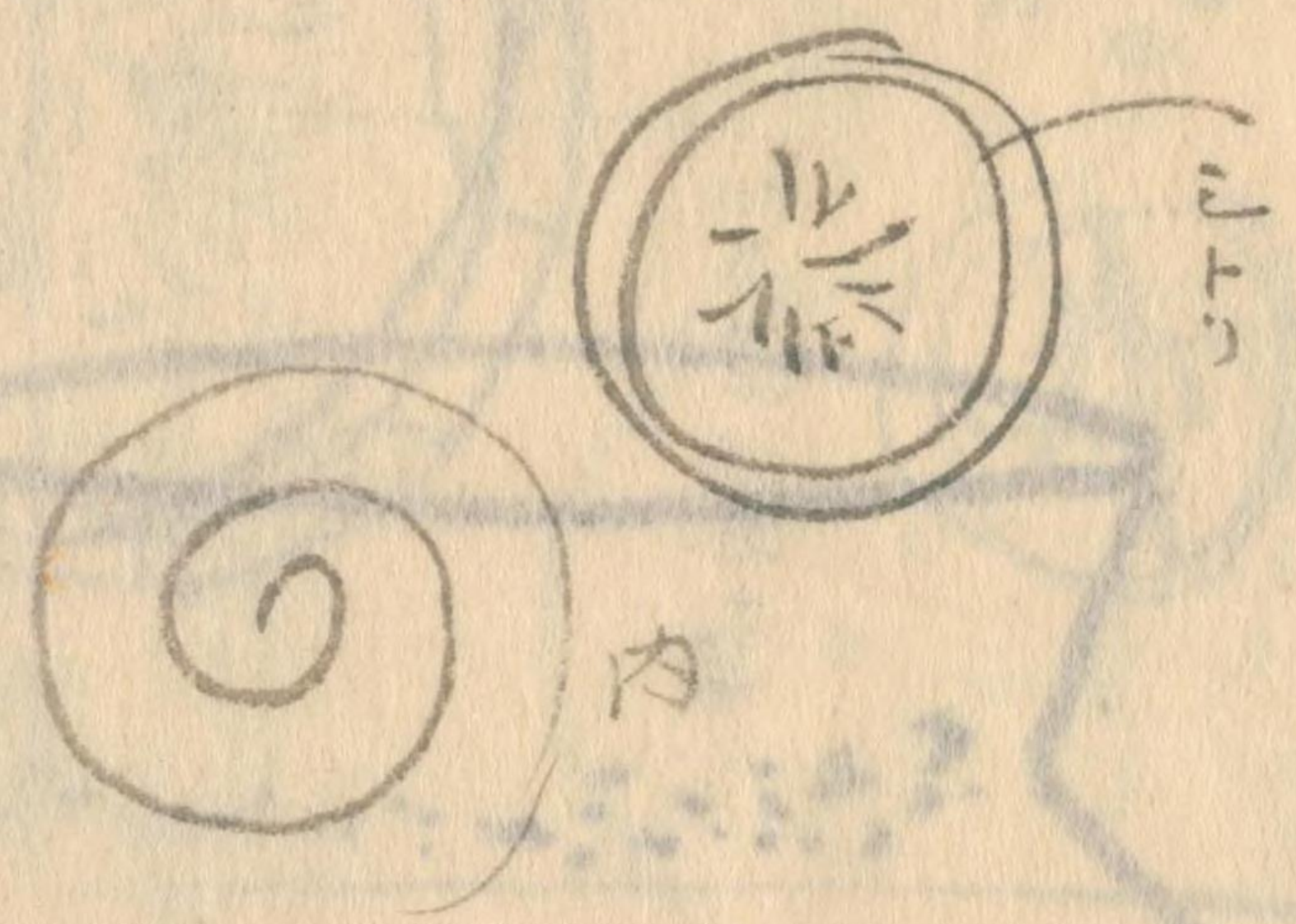
口径 四寸七分
高 弐寸壱分
高台高 二分八厘

此品自分ニ買入 十月廿二

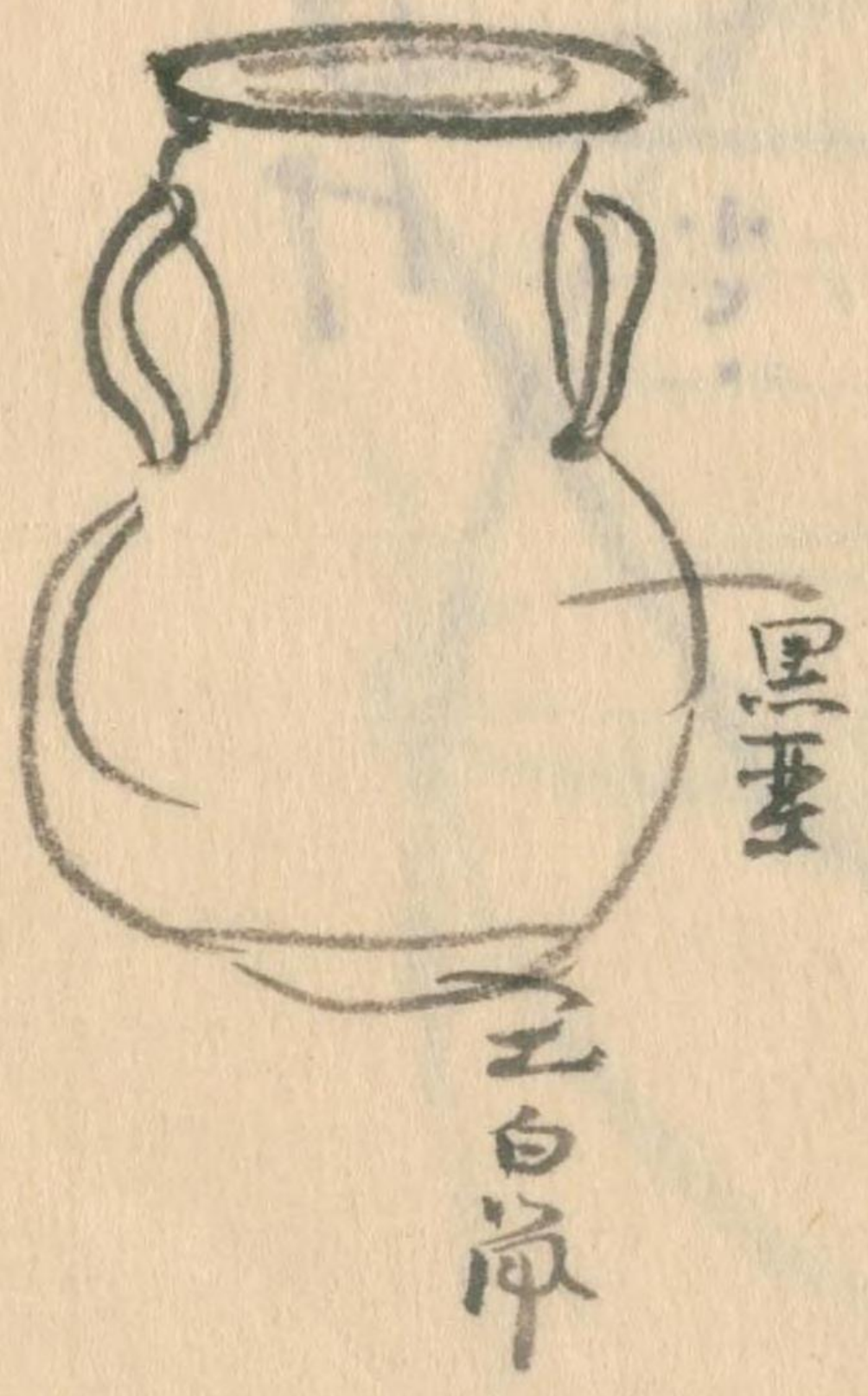

片口
目五ツ
やと段に
此品茶碗之印
こちう
壱寸七ト
此品茶碗之印

青磁人形手

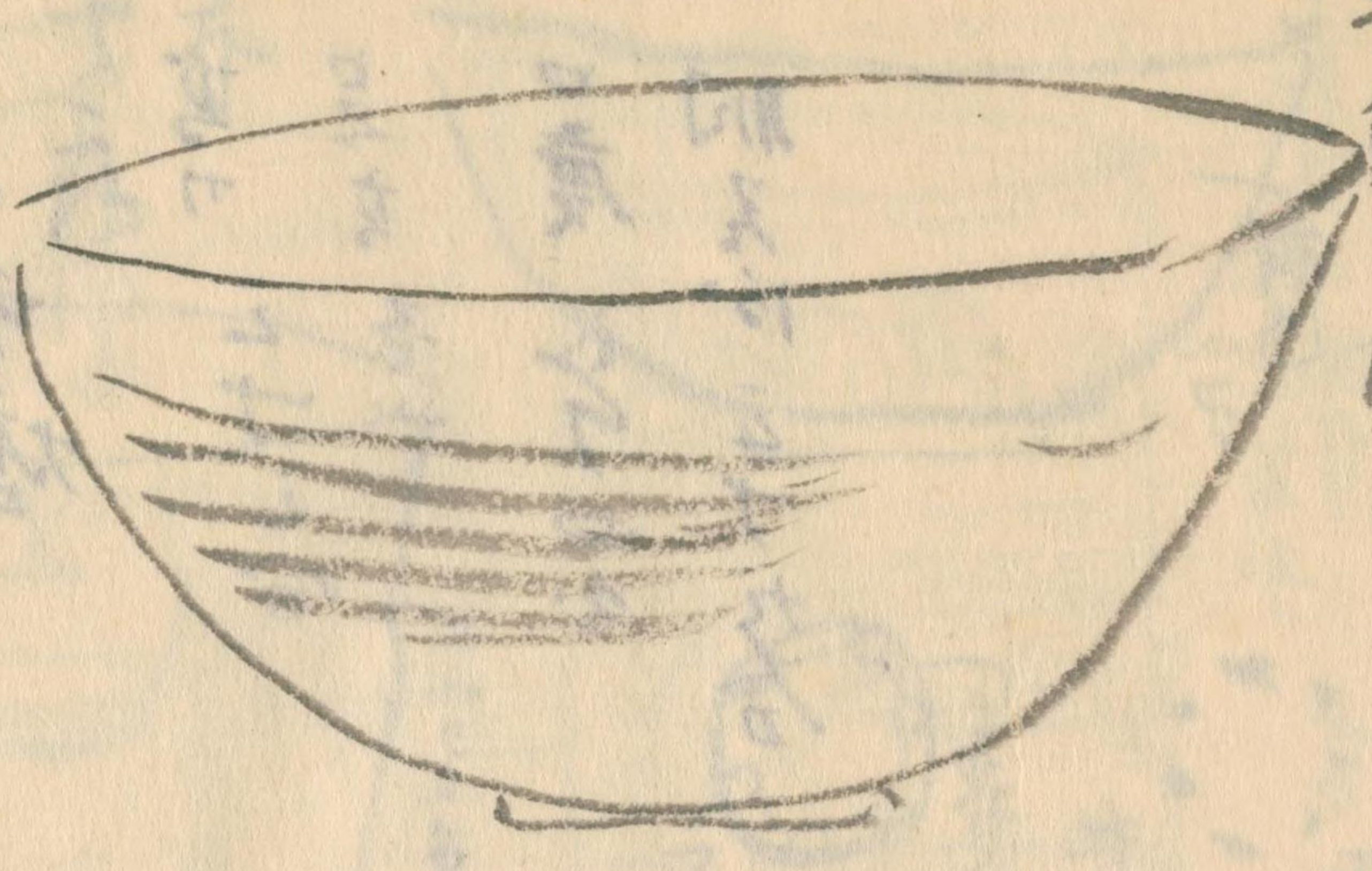


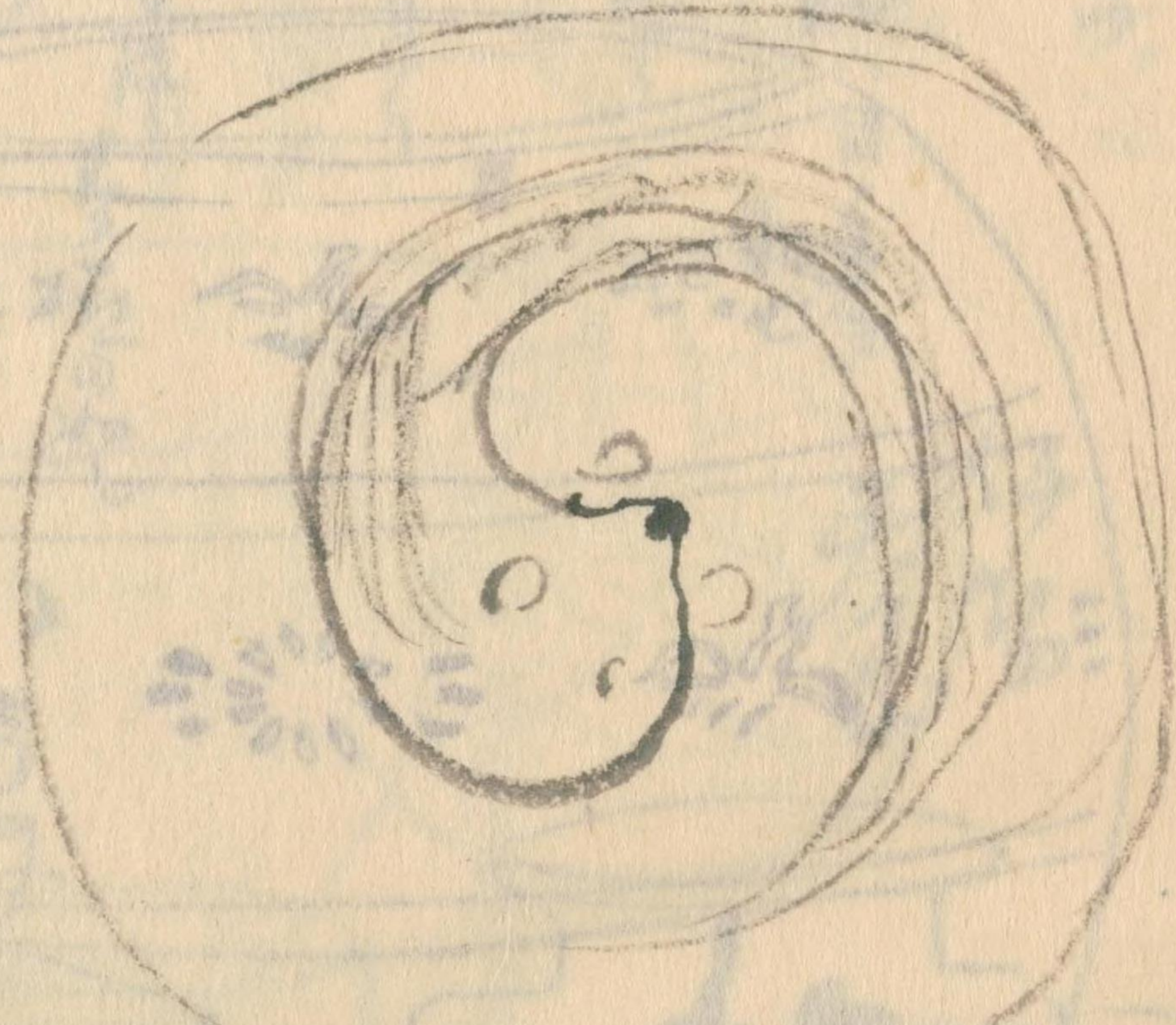


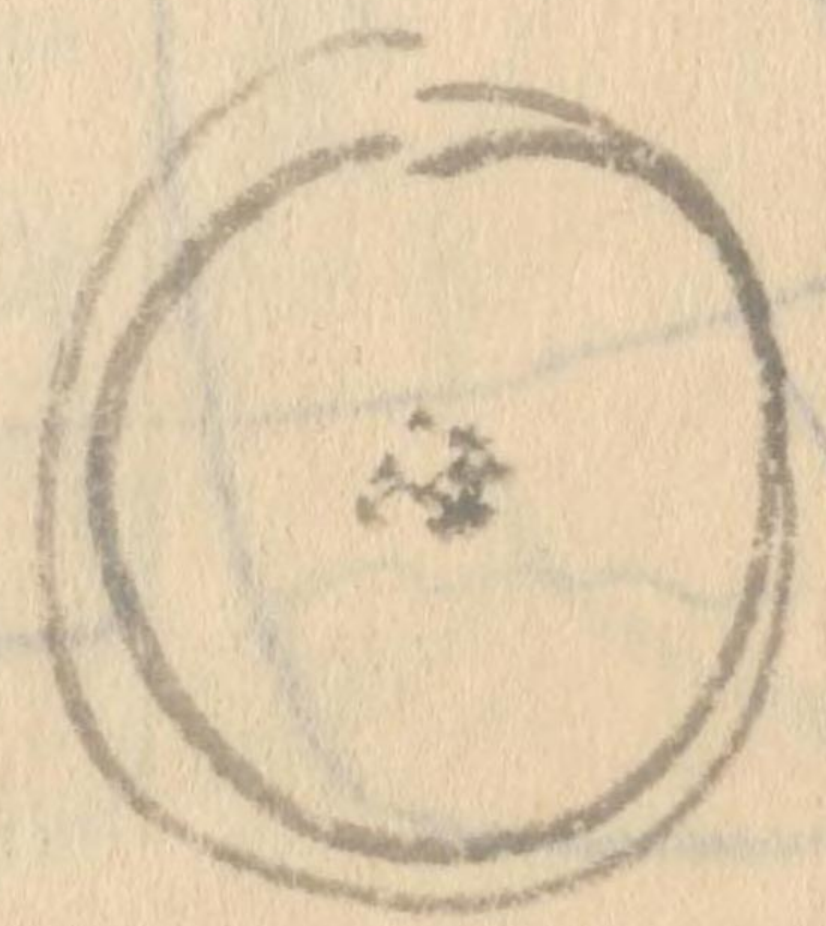
青磁ノ種類
七官 天龍寺 砧
南京青磁 人形手
ひしほ手
元青磁



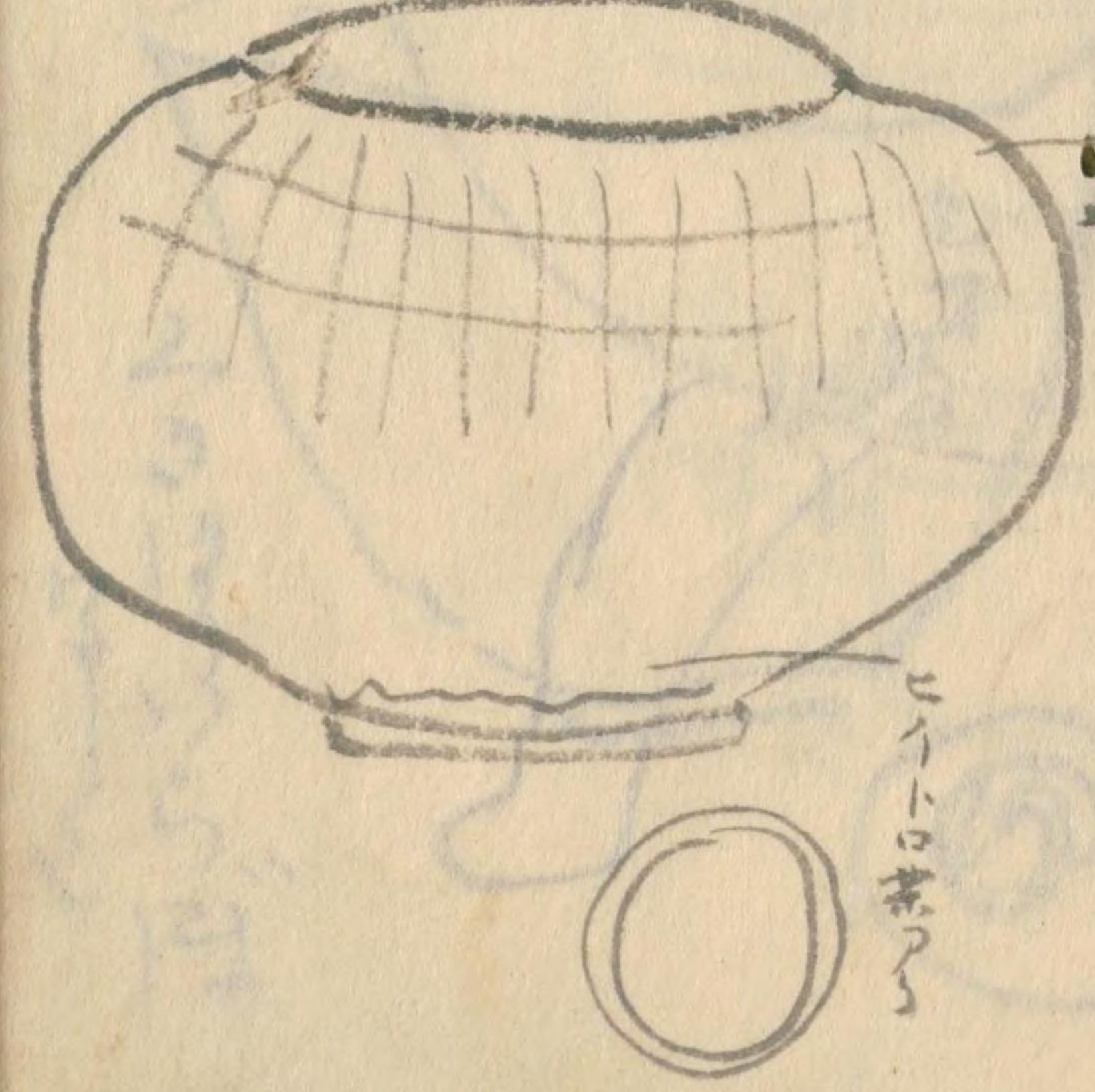
朝鮮はけの





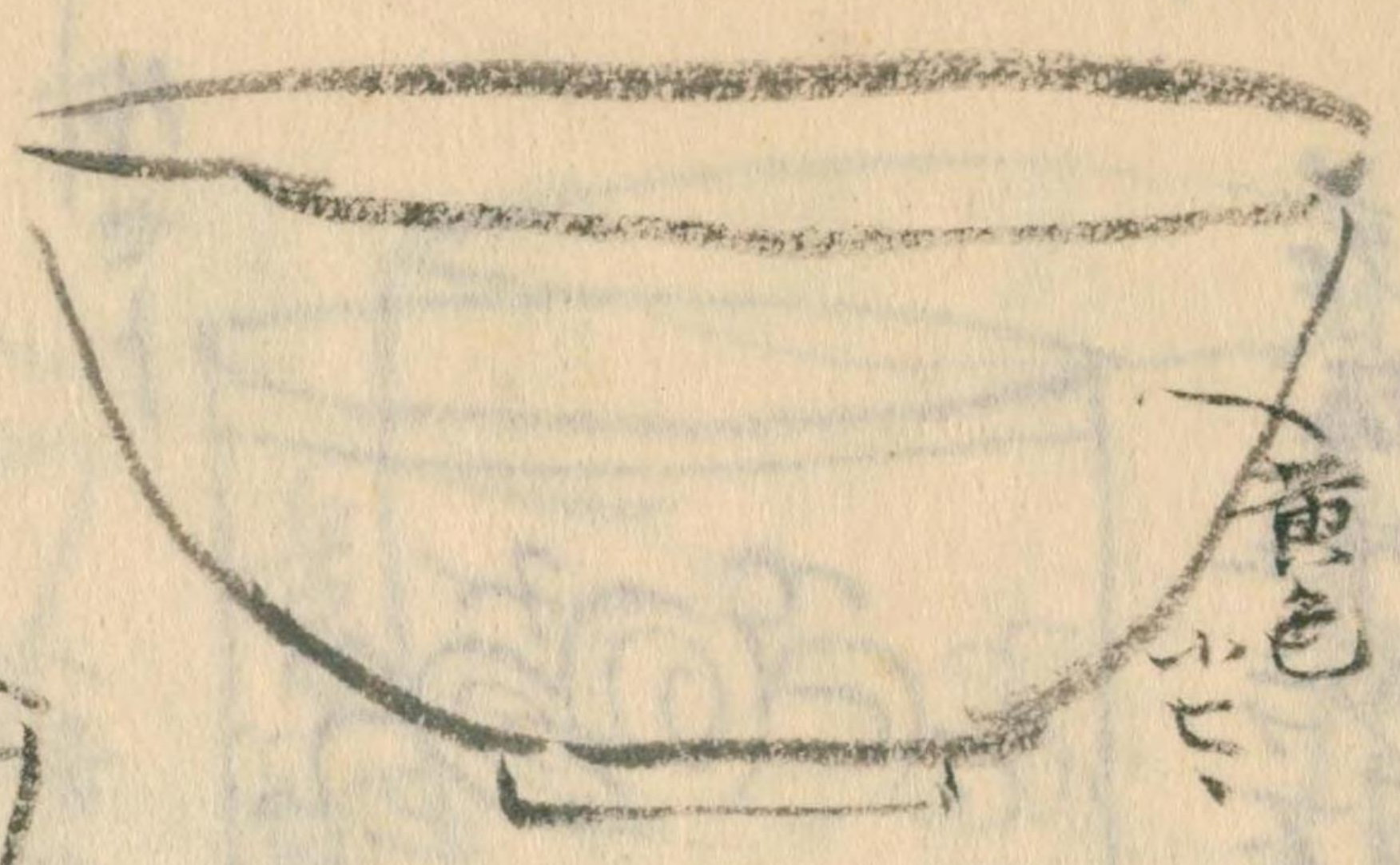


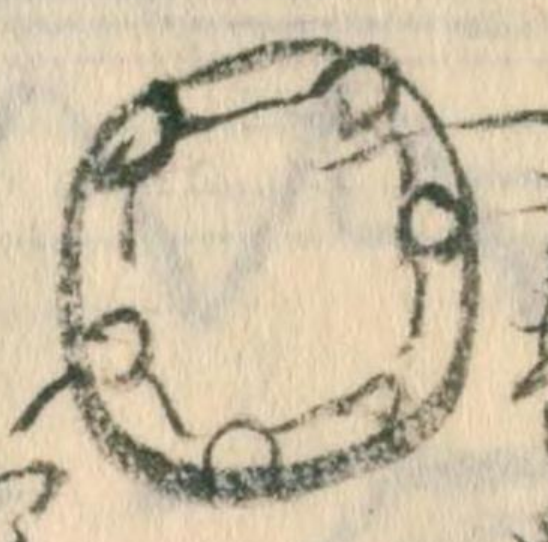
黄ノ瀬戸



十月五日 前田氏

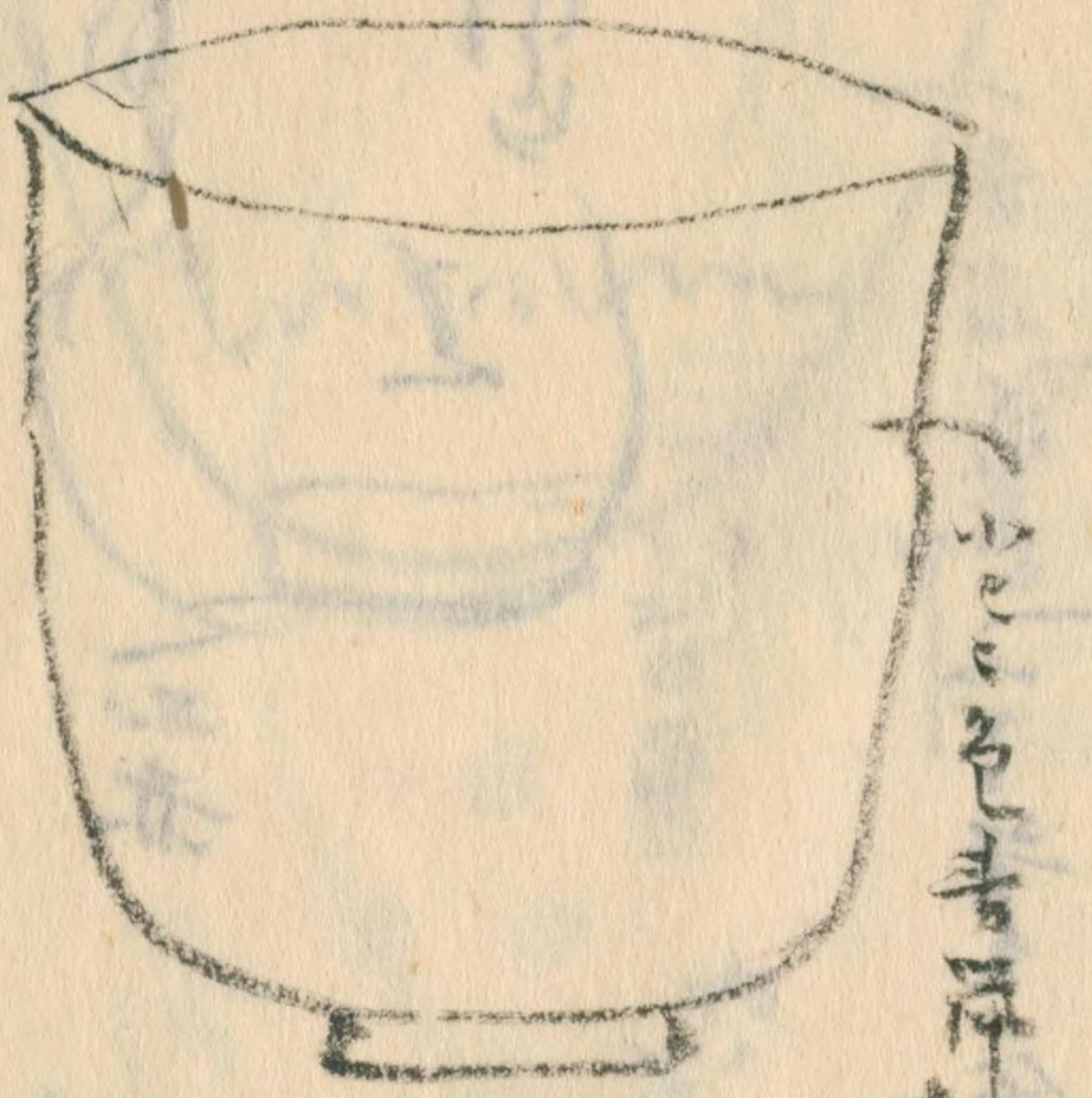
井戸脇




一寸巻ハ内ニ茶すり
フチニ目アリ

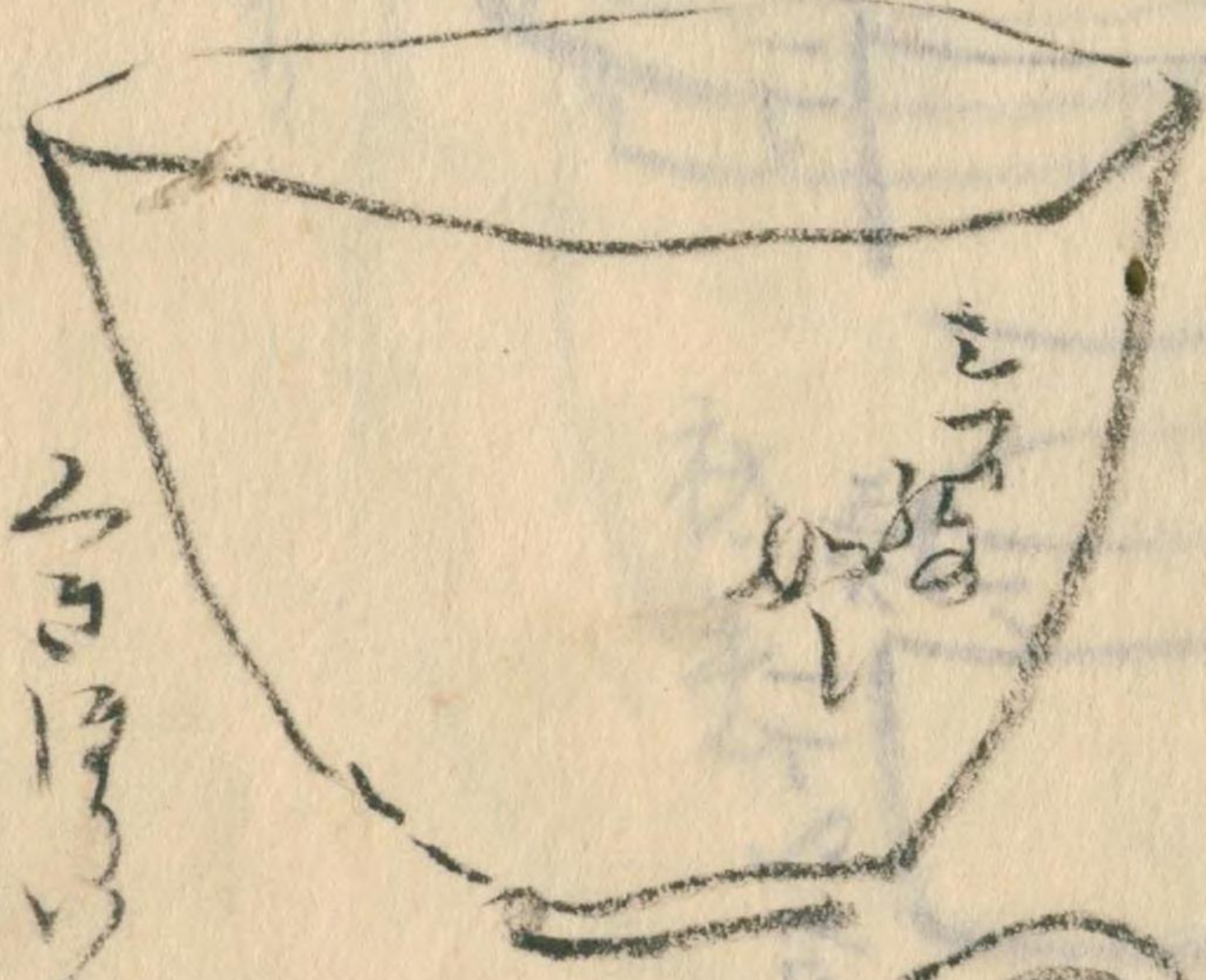
井戸脇八目多き物也

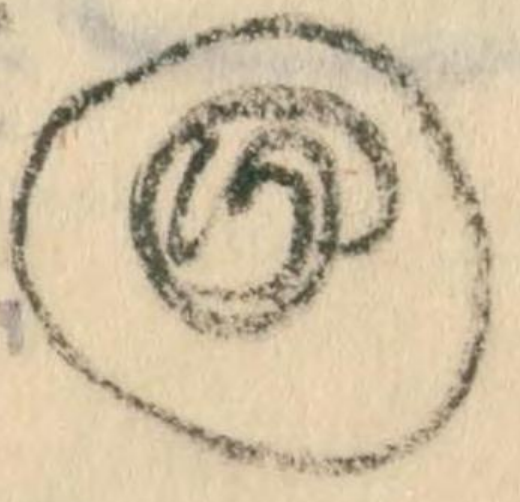
萩
手藤

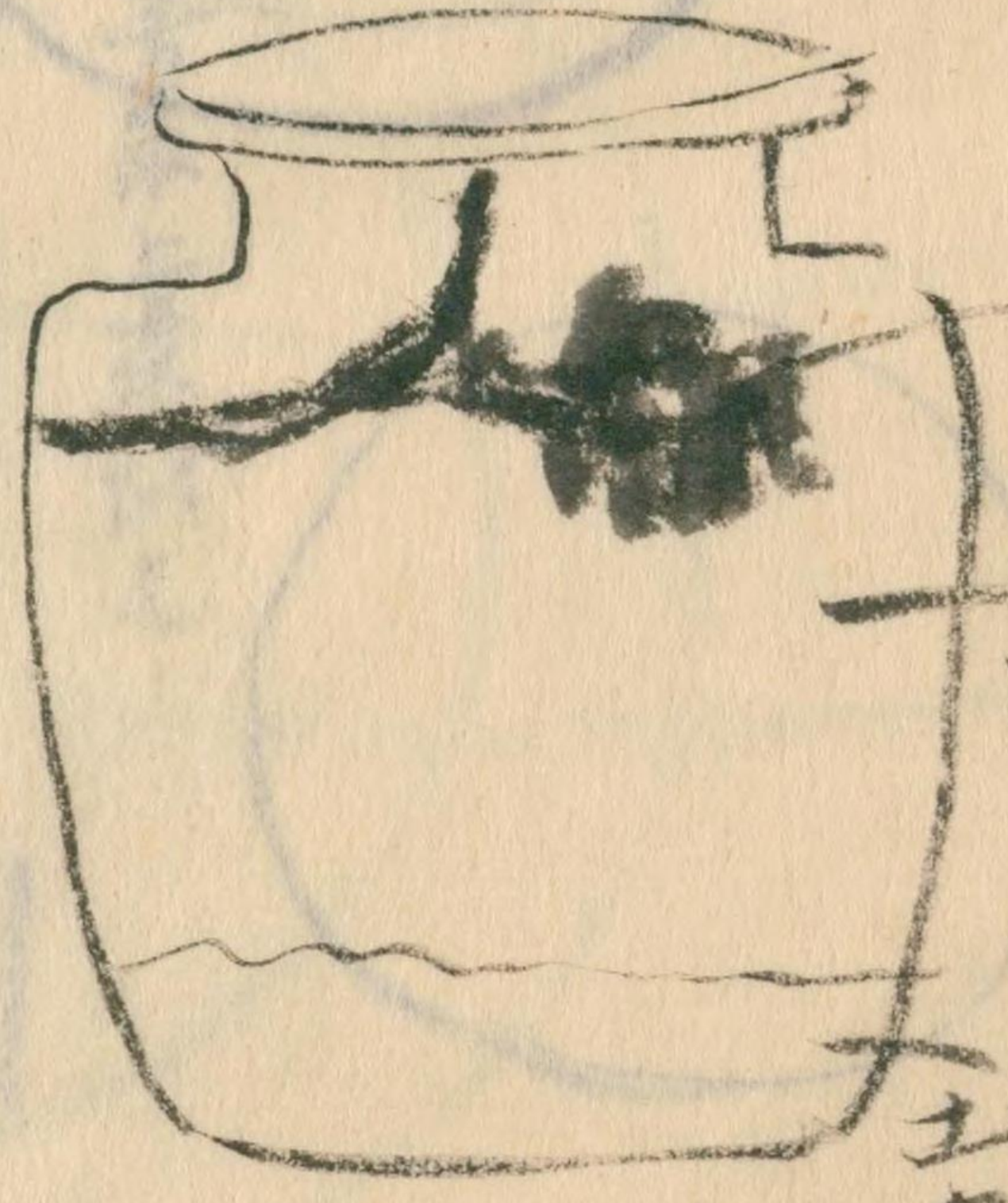

やゝこ色青磁
青磁のめし

伊部
香合

いらほ
うつし


とつ皆如し
むきほいらほ
写し




黒
茶
柿実より
土白風
手ろうし

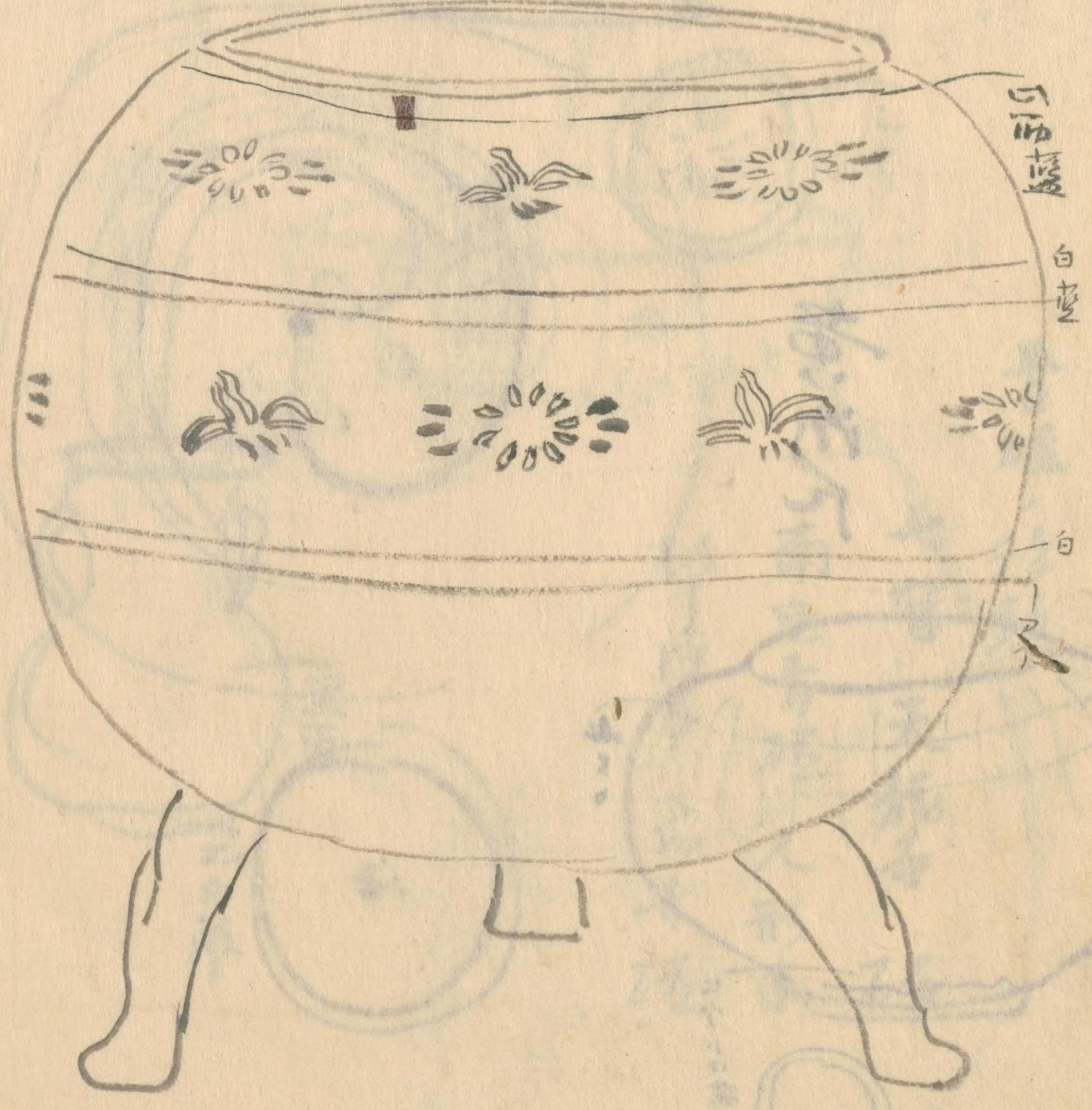
三島香爐

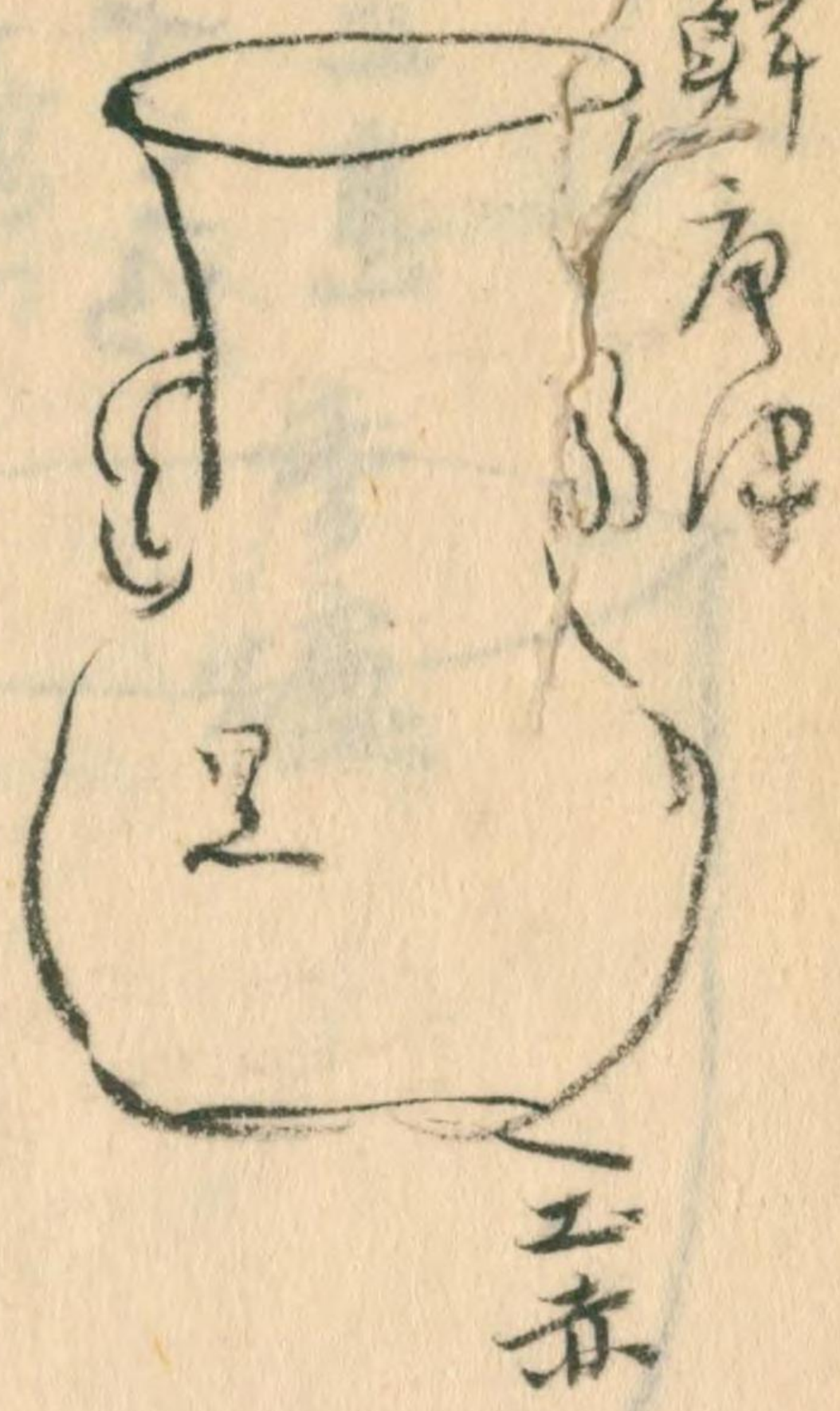
高サ 二寸二分

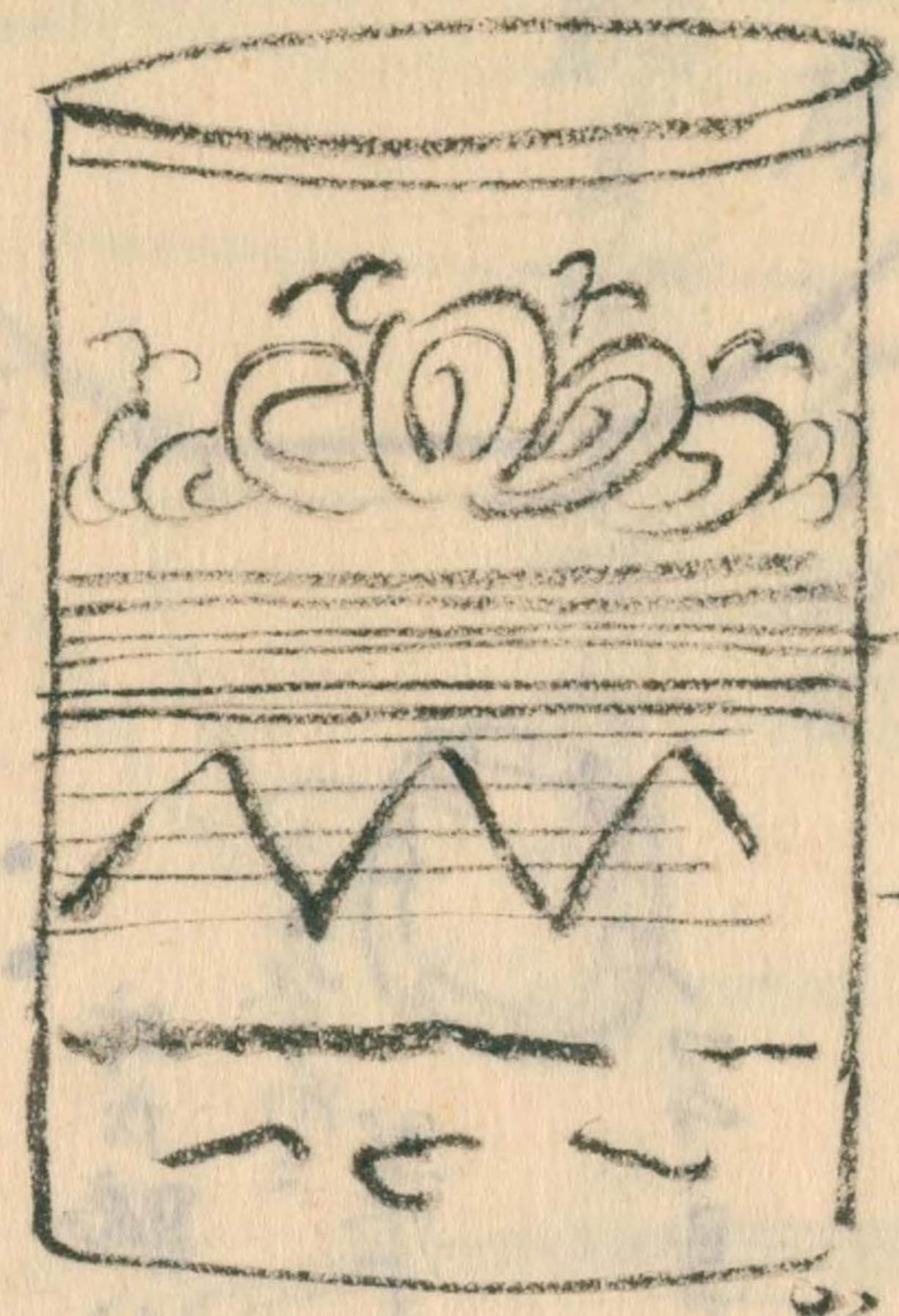
足高 壱寸

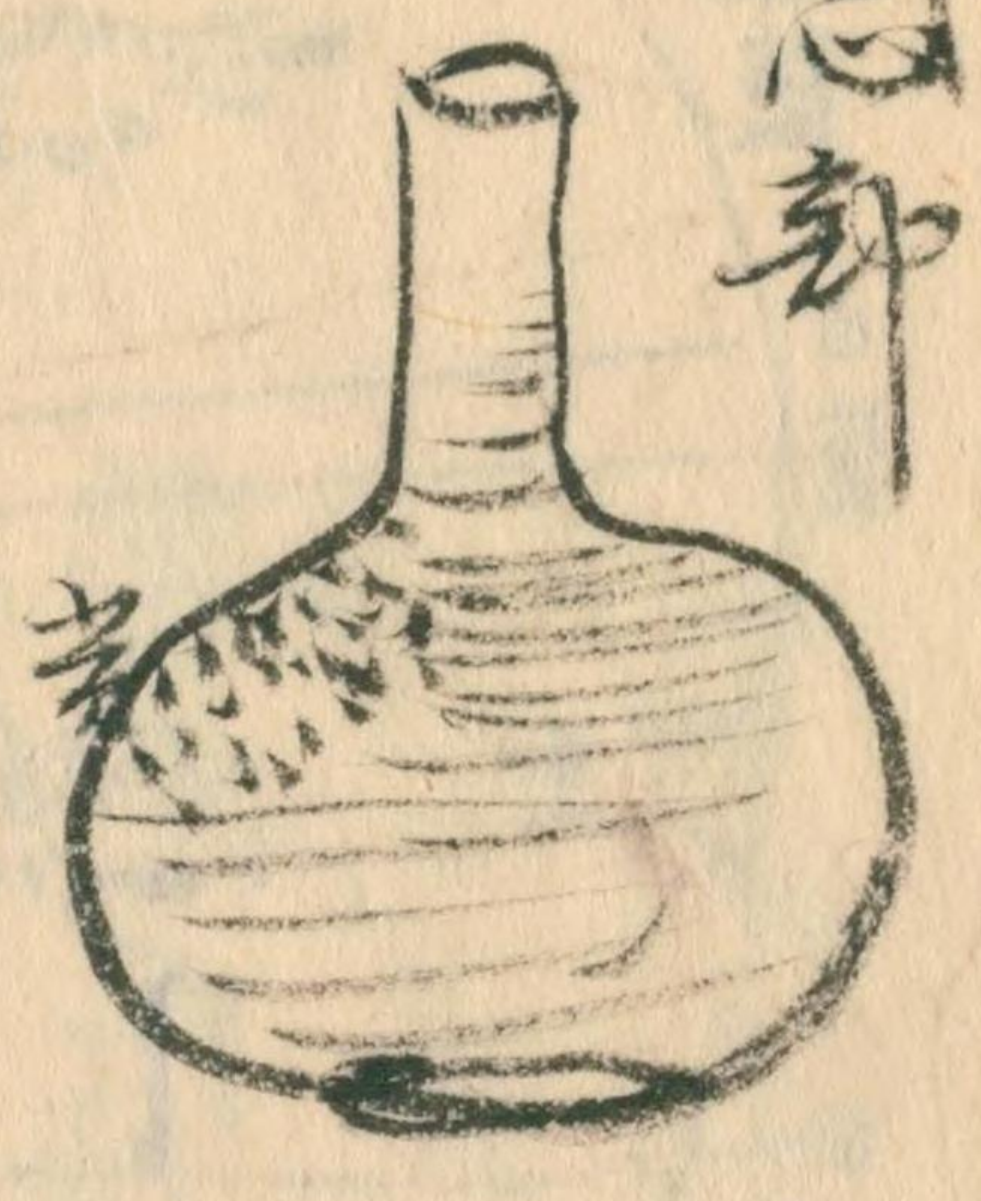
口廣 弐寸四分

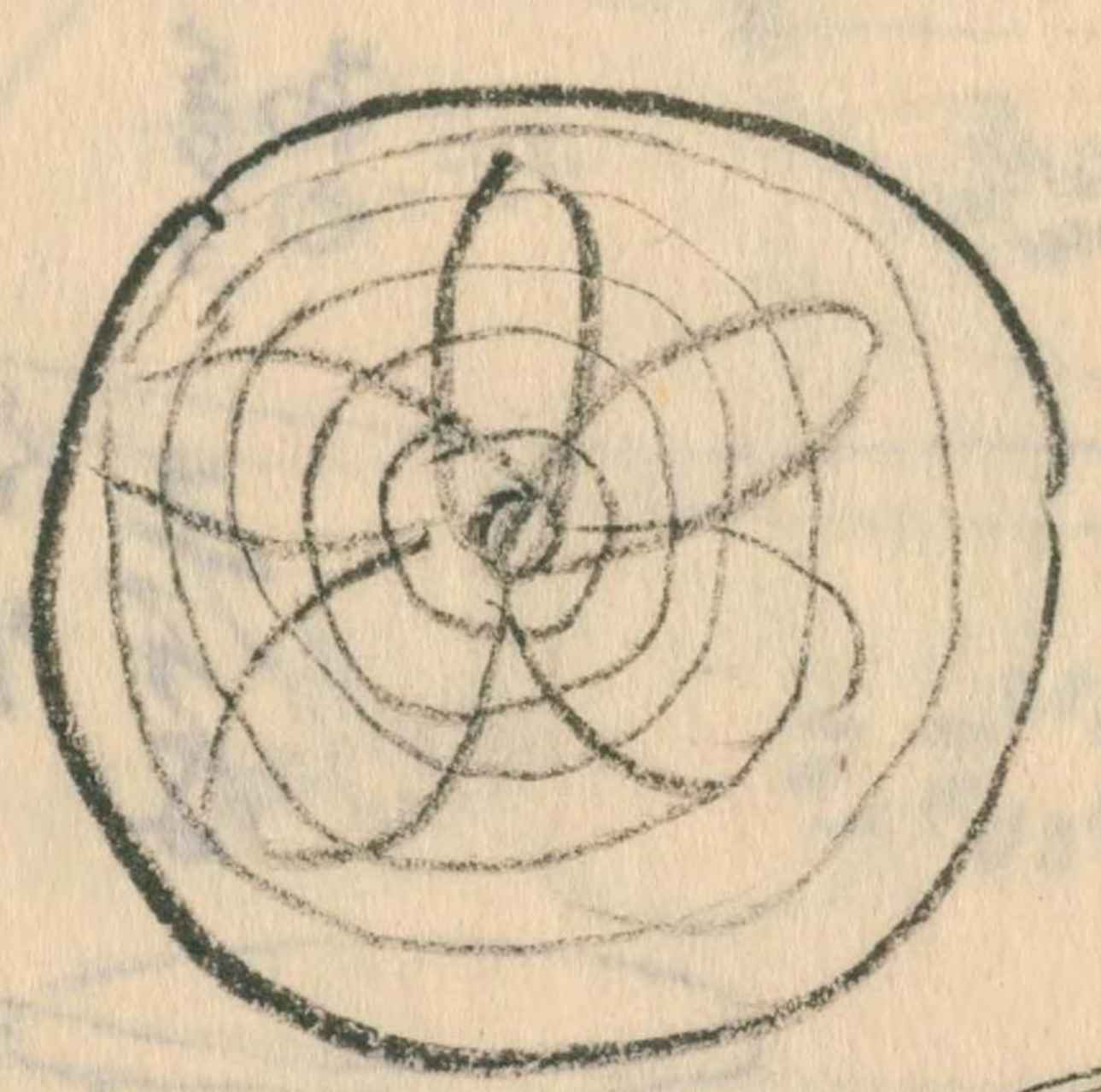
胴差渡 二寸九分

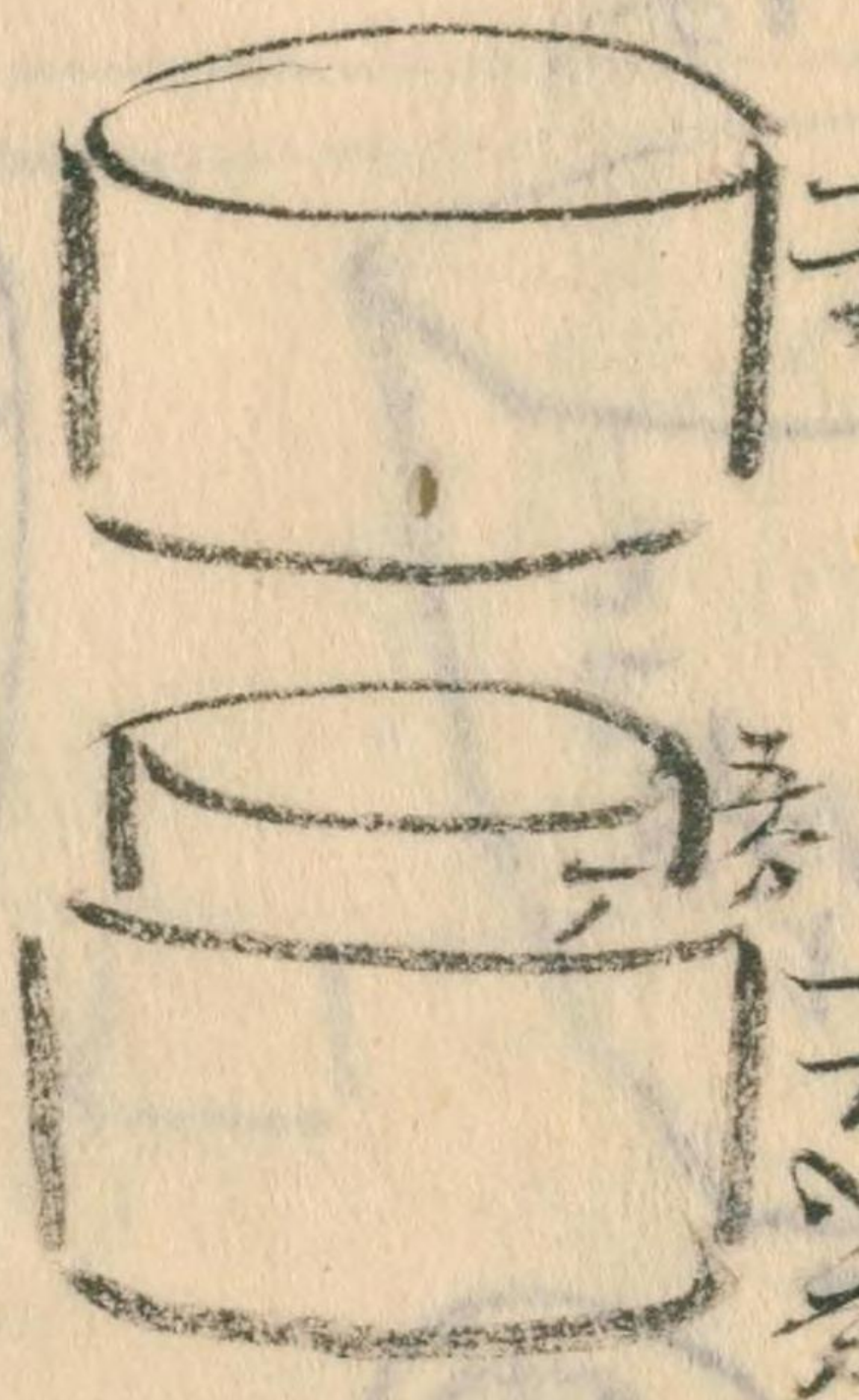


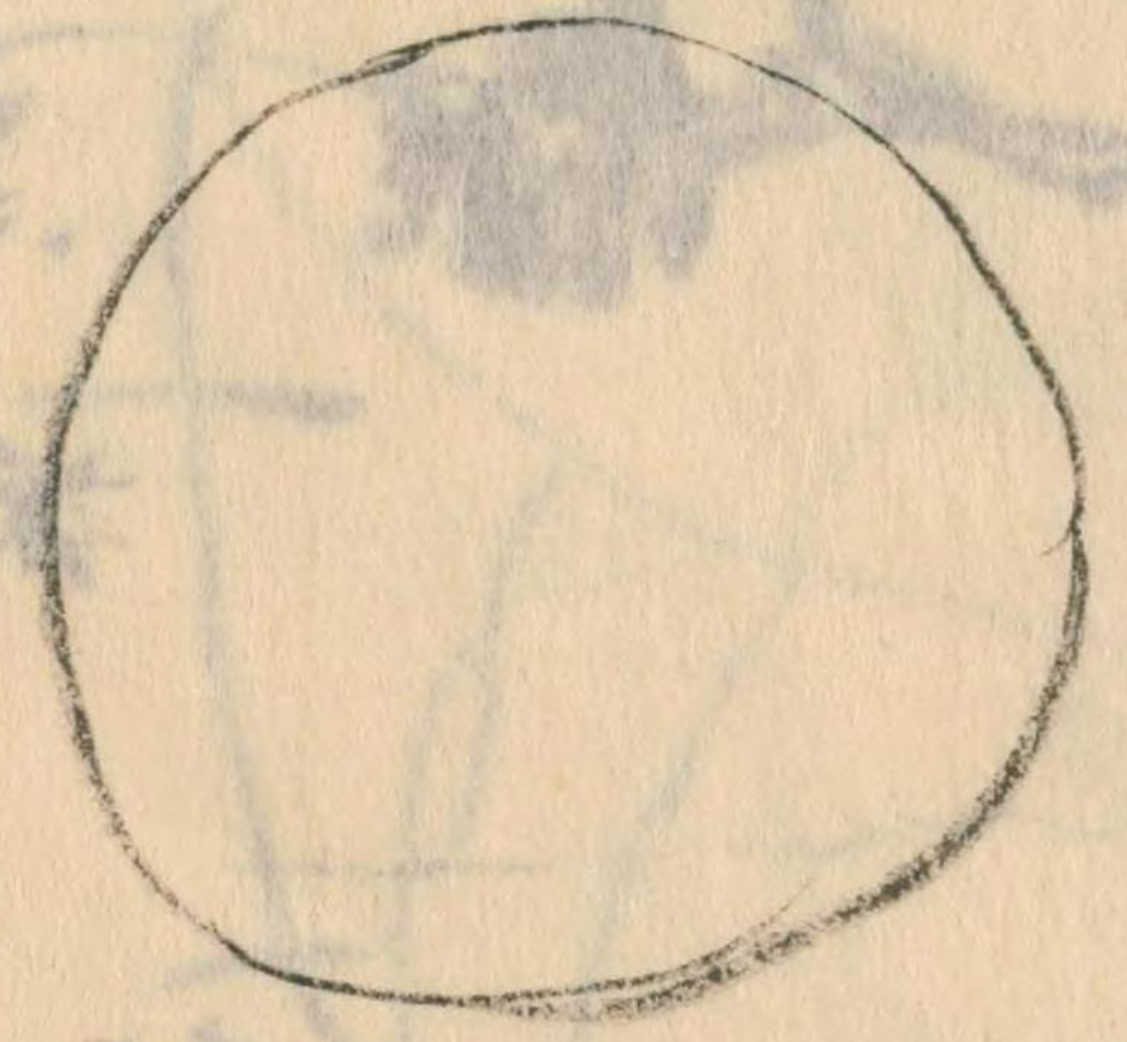

朝鮮唐津
足
土赤

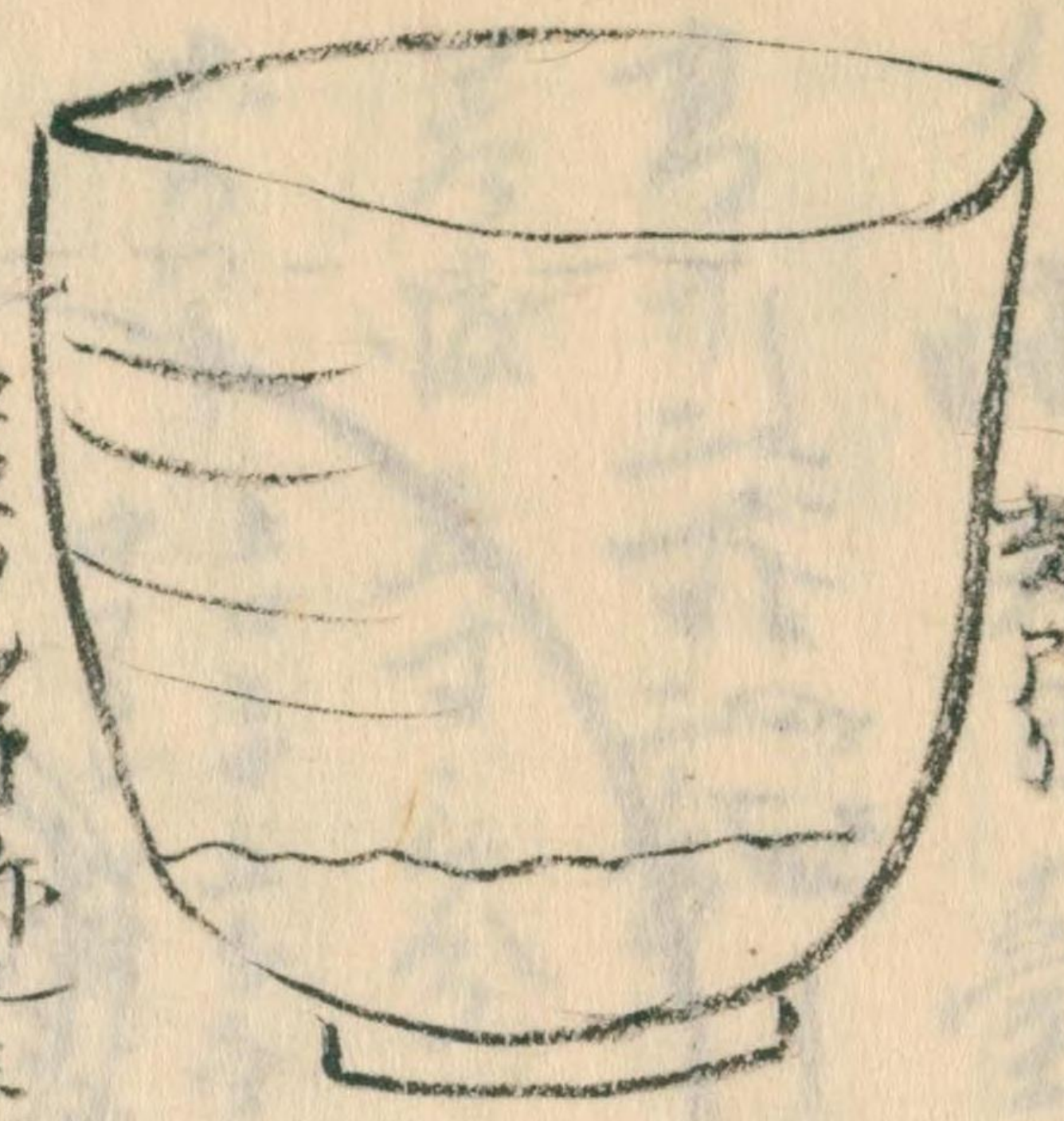

御セト
差渡上弐寸五分
中弐寸
下一寸九分八リ
高弐寸四分
合
一ふた薬色ノ合
土白

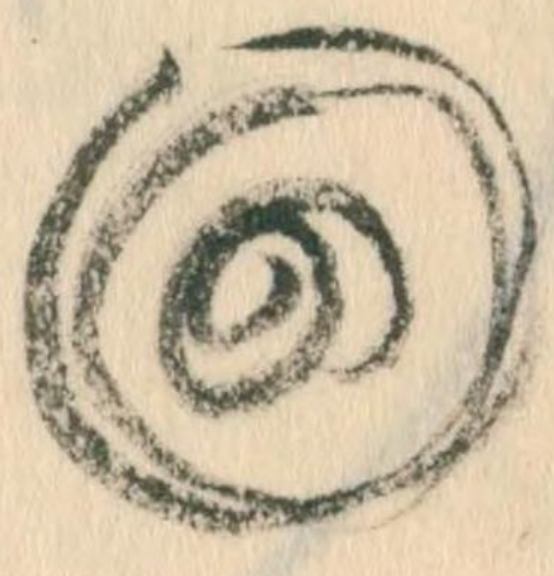

忌部
薬

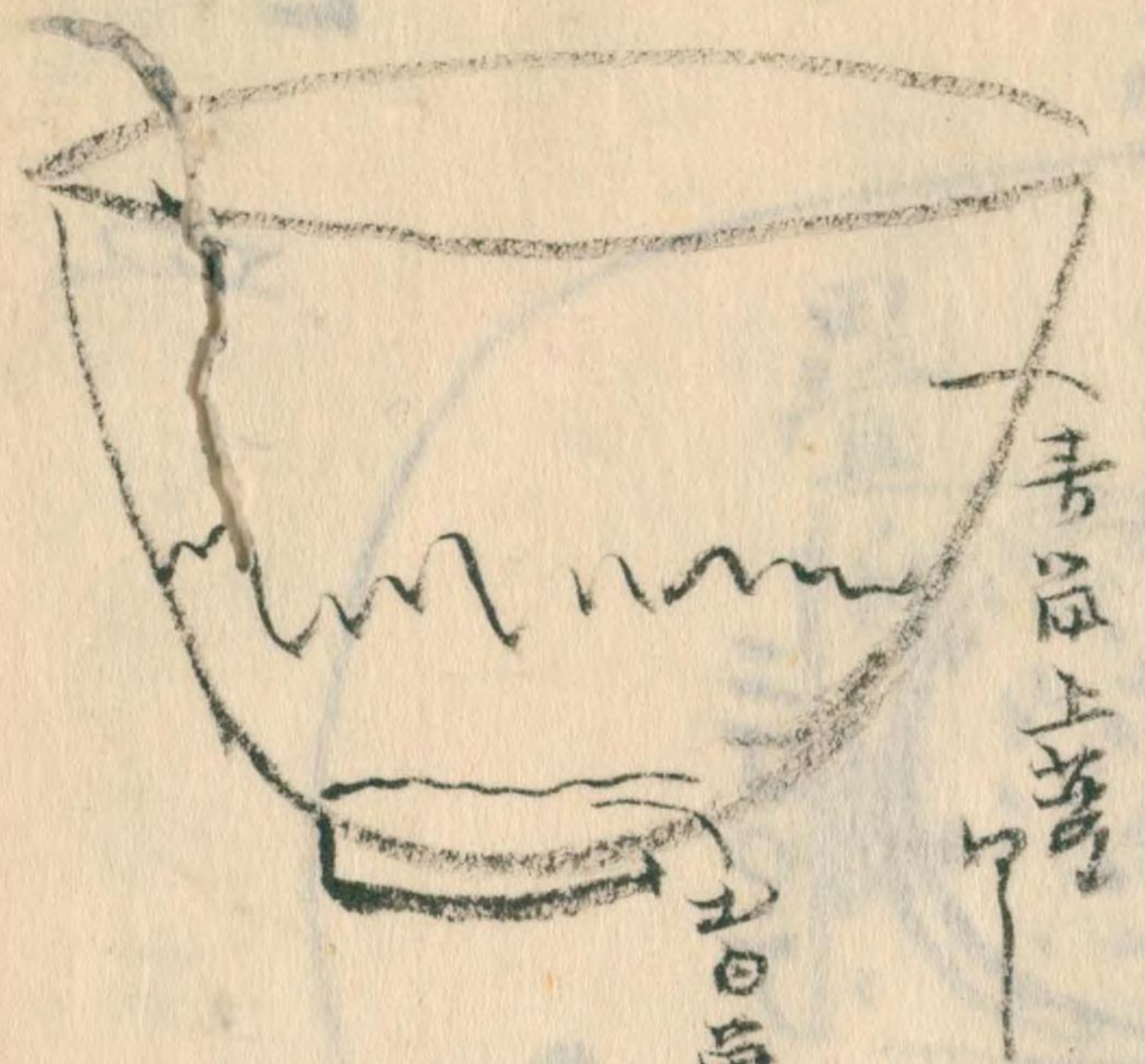


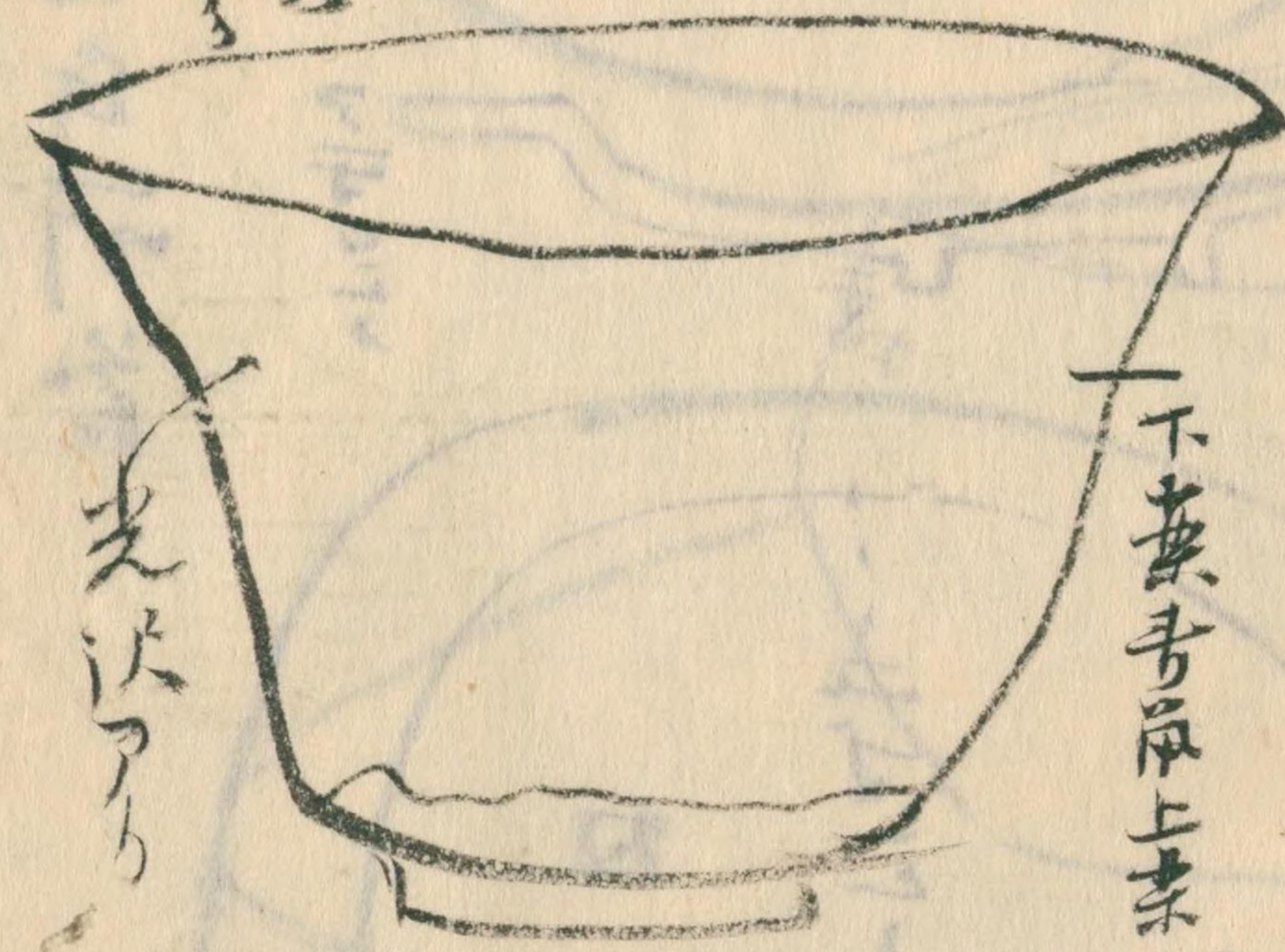

一寸
高一寸四分




古唐
筋アリ
黄ノ帯赤ミとアリ


土赤
片手


志どろ
青品上薬
土白


内ノ茶酒一面ア
光沢アリ
下黄青品上薬ひえ
衣手

尼ヶ崎天目臺

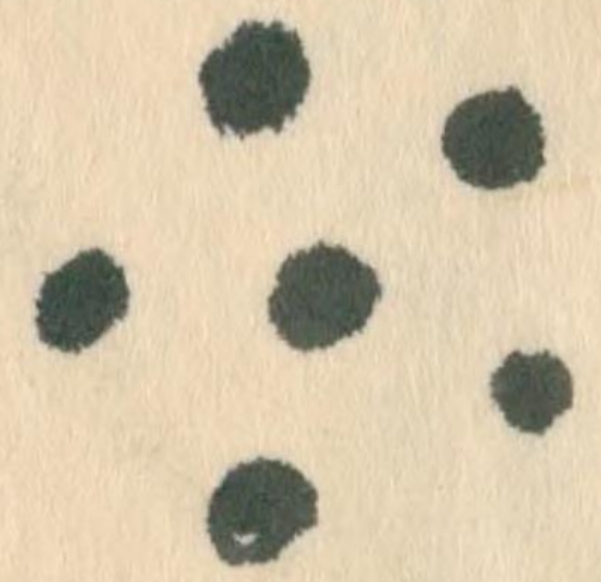
高サ二寸二分

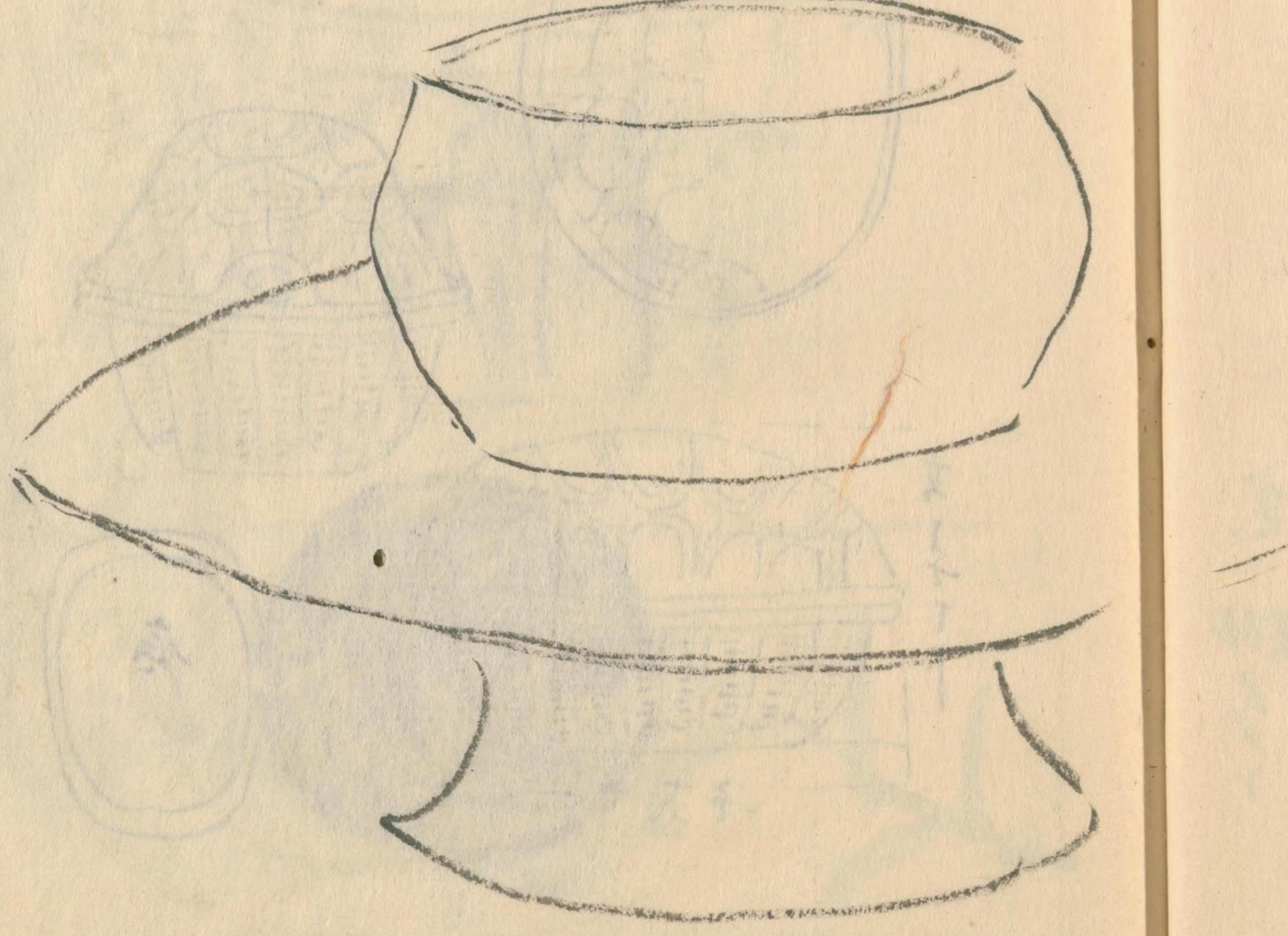
差渡五寸三分

ホウツキ（上口三寸五分三厘 中フクレ四寸八分）

畳ツキ 二寸六分

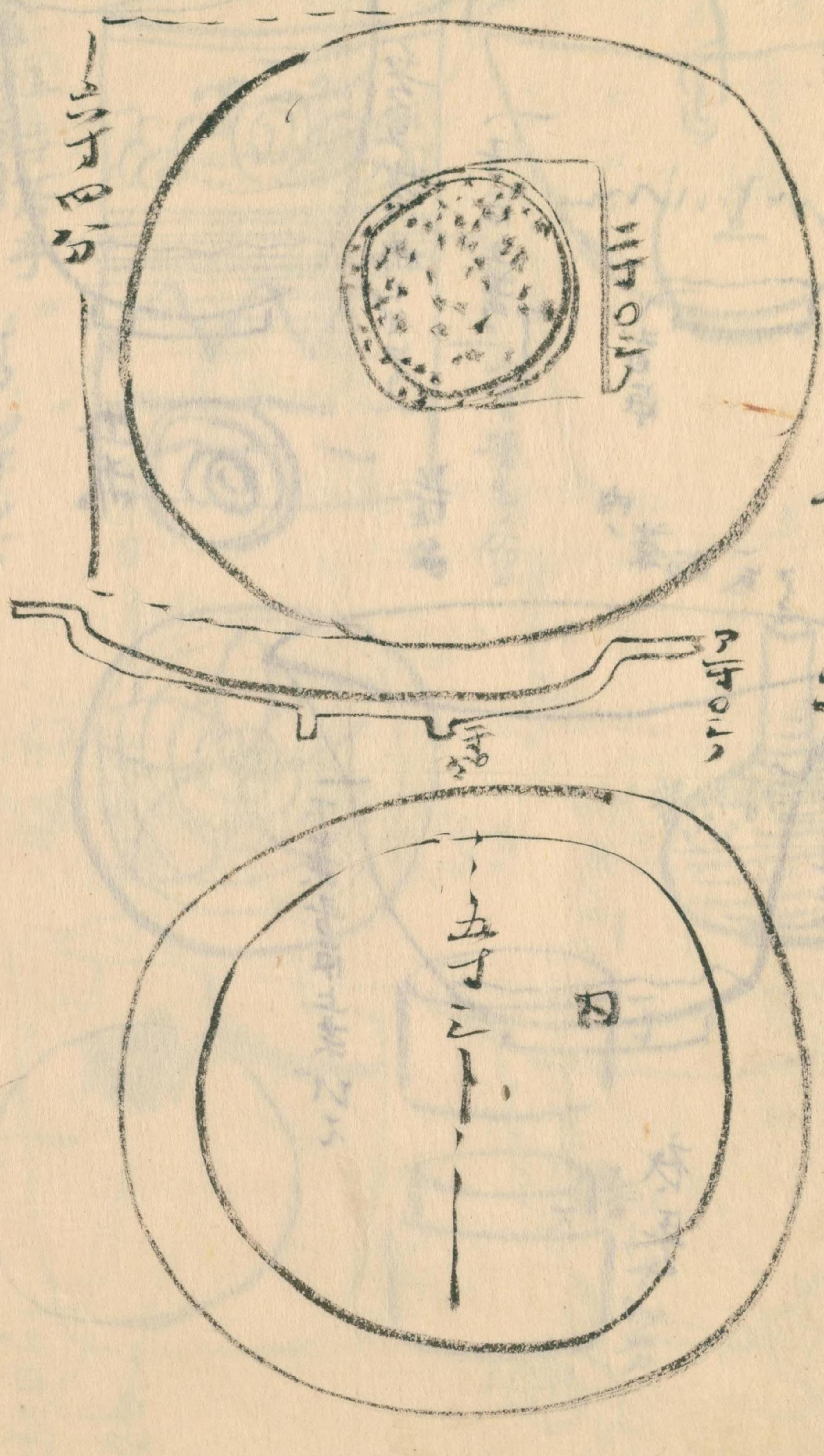
畳附裏



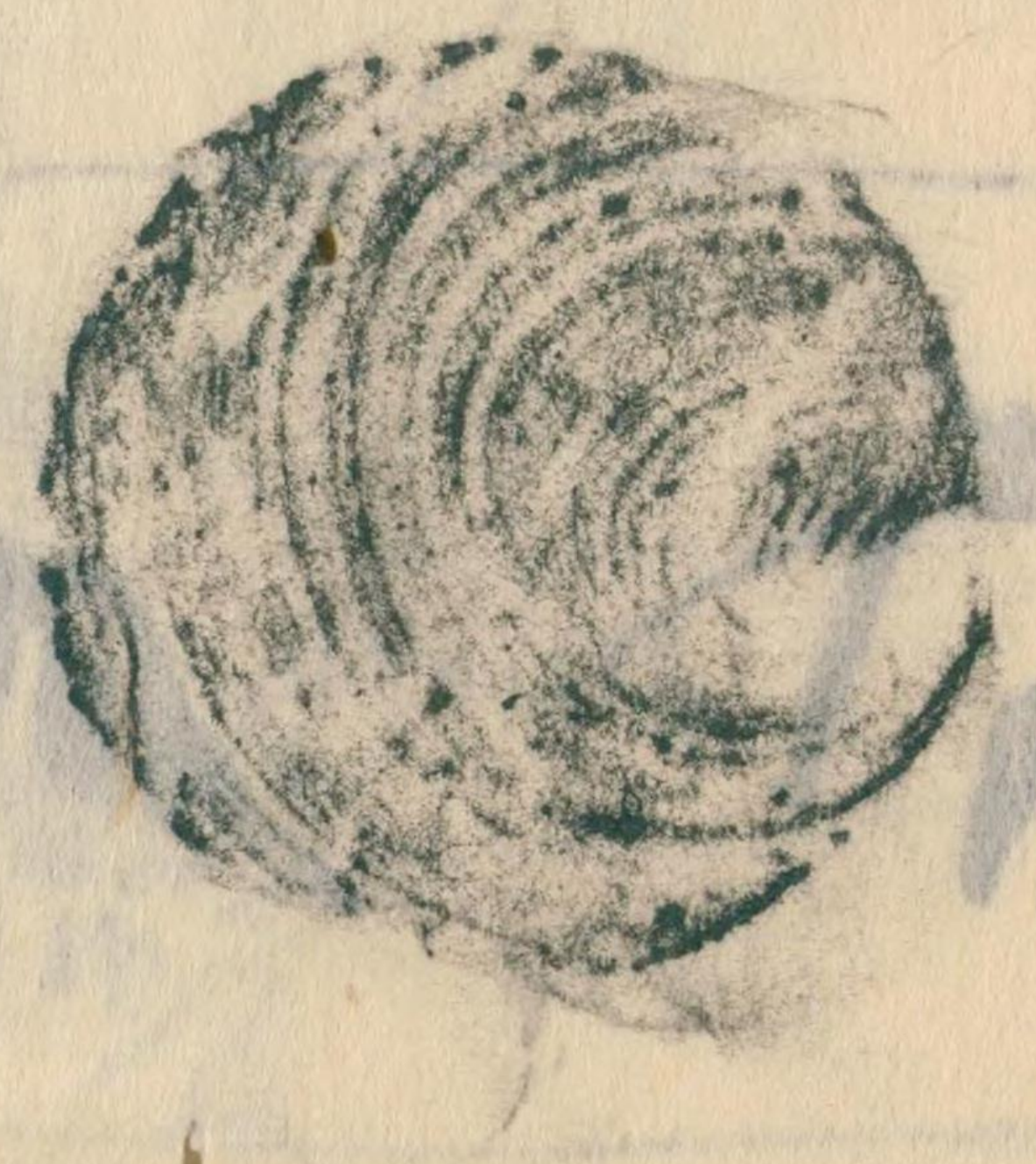


此不 箱ニ

前田氏所蔵


二寸四分
二寸〇二
一寸〇二
一寸
五寸二ト
内

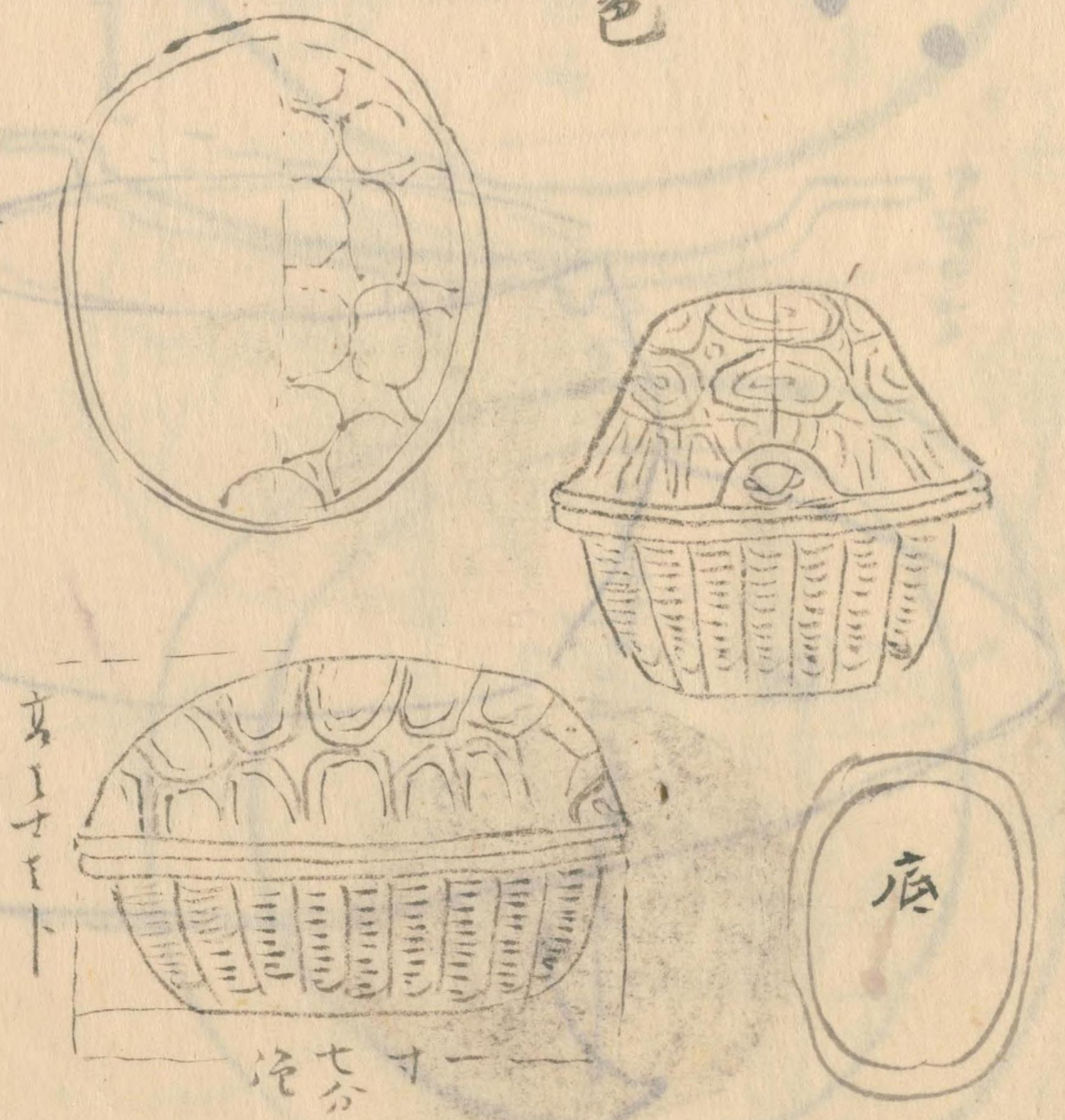
文政ノ頃月行 大坂谷松屋宗兩ト云人
東京市中ヘ佐久やちよとも宮り
ハタし佐々や作ゟ末ノ茶入ち亦セしゟ
ヲ利しタル哉しゟ
今ノ判
樽丁 中川九兵衛
油田ヶ原下 佐々や吉右ェ門
大坂新町 表店
京や 平兵衛
深川三井ノ別荘
岩字や 介七



跂趾白檀銭亀香合 廿四両 十五分

袋白地亀甲純子共裏
緒ワリ花色

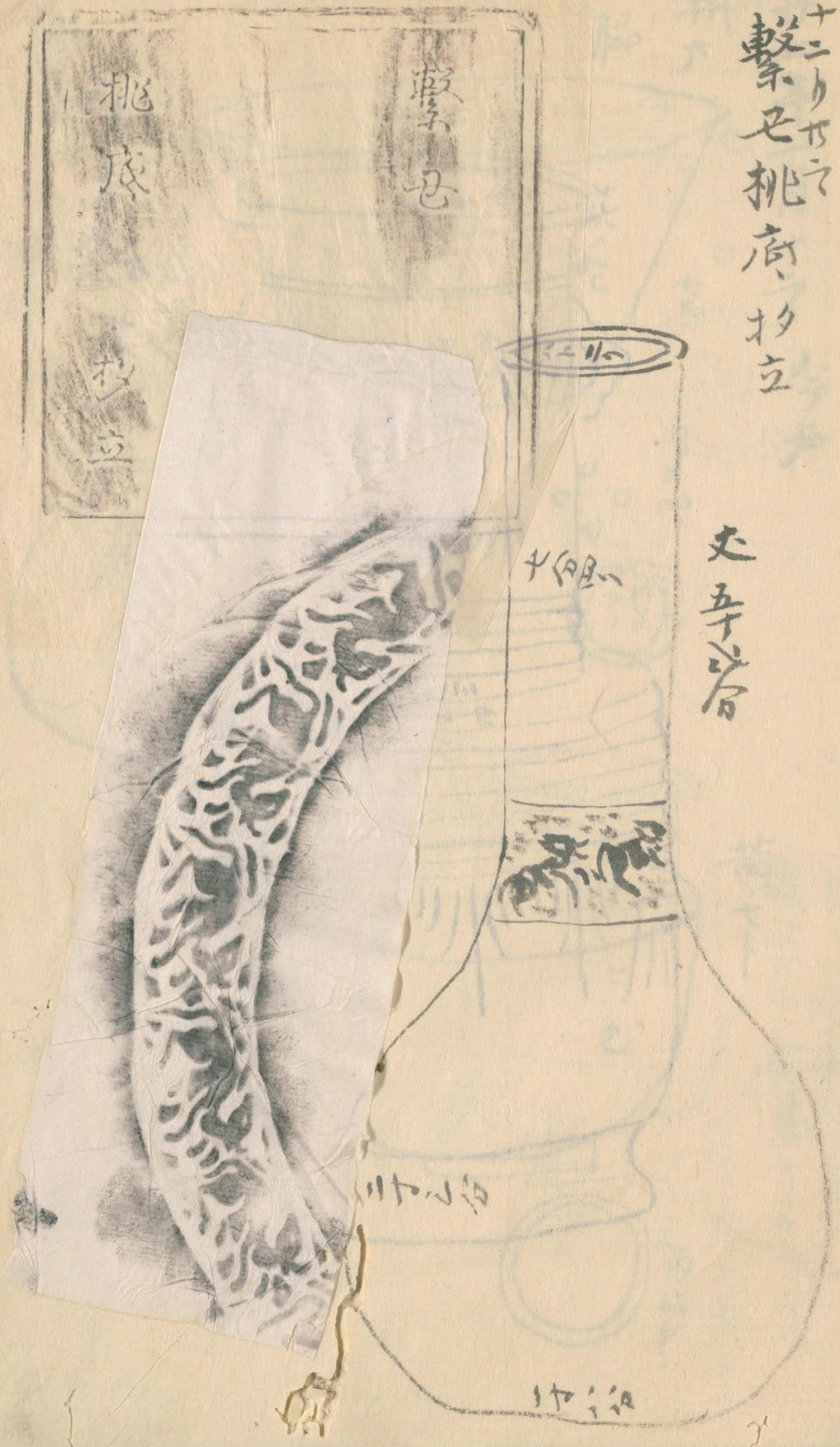
銭亀
跂趾


高三寸三卜
一寸七分径
底

十二月廿六日

繋巴桃底杉立

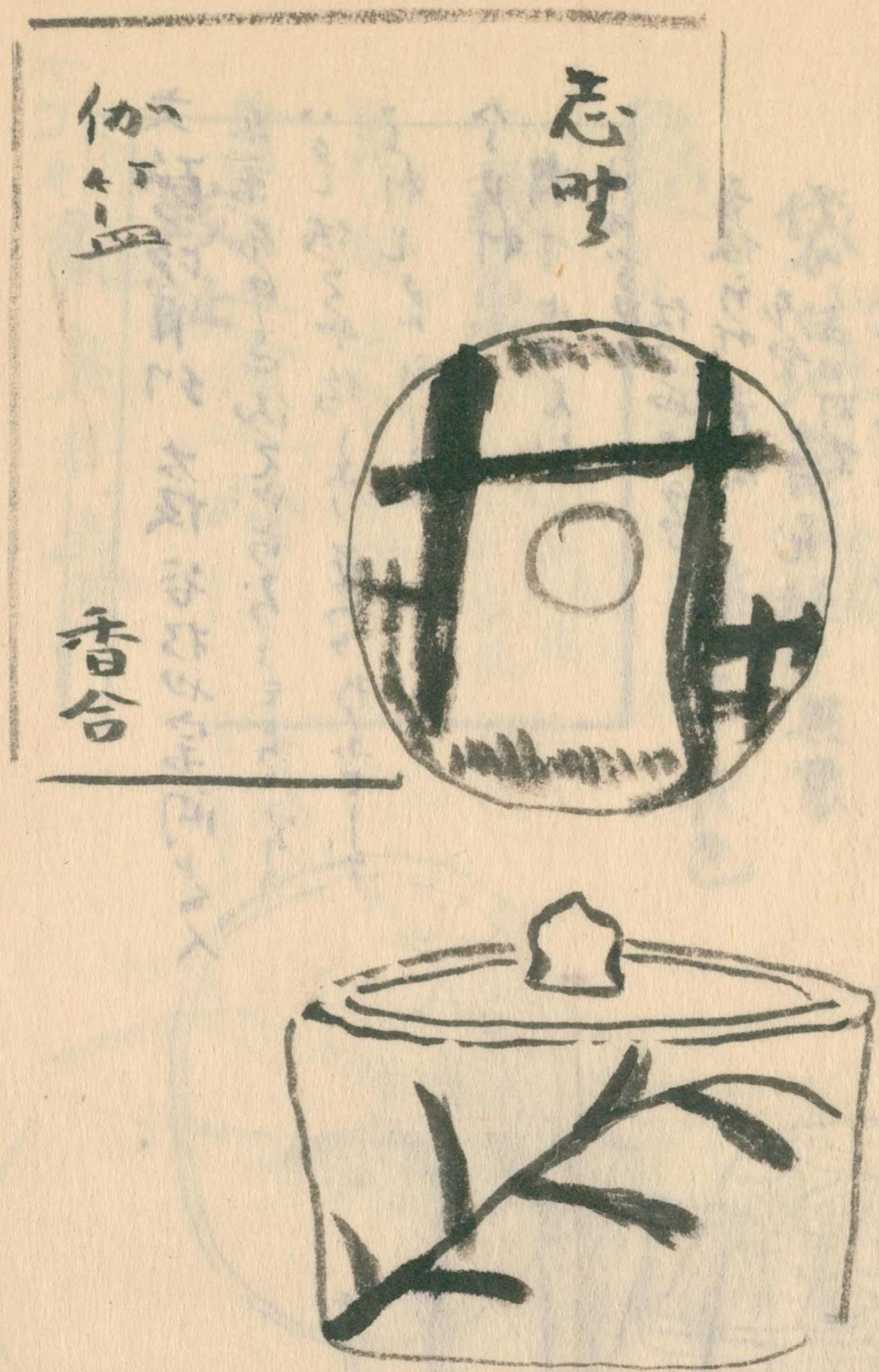
丈 五寸谷

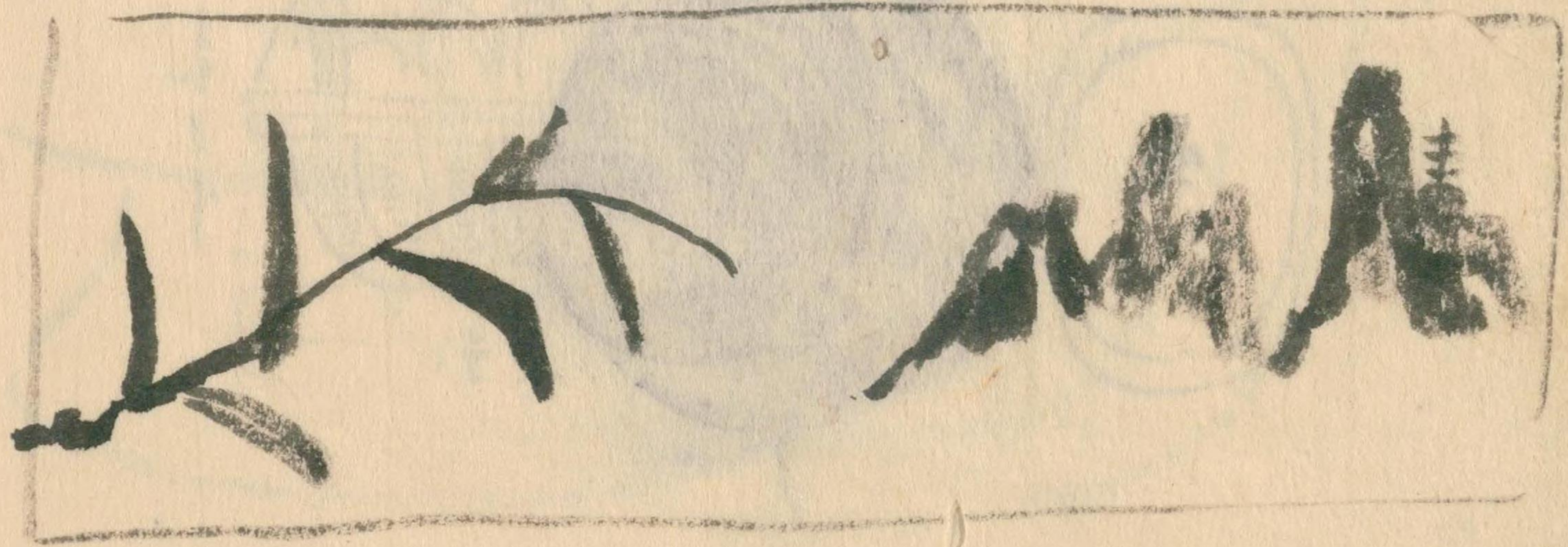

繋巴
桃底
杉立
七分ほし

廿四年一月十五日 谷が

志野伽藍香合

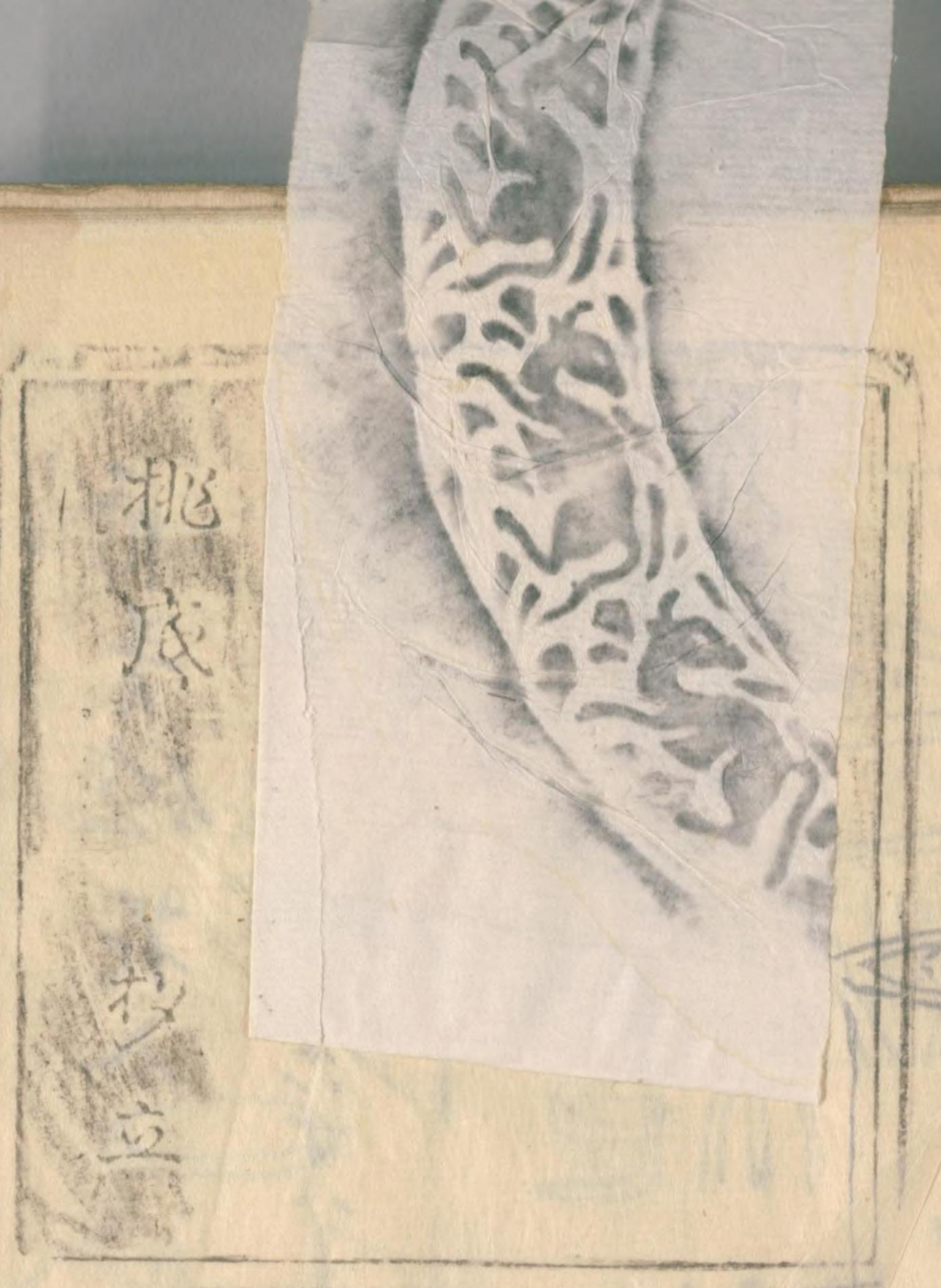
袋 雲霄純子ウラ縞ニひき ラウカン茶



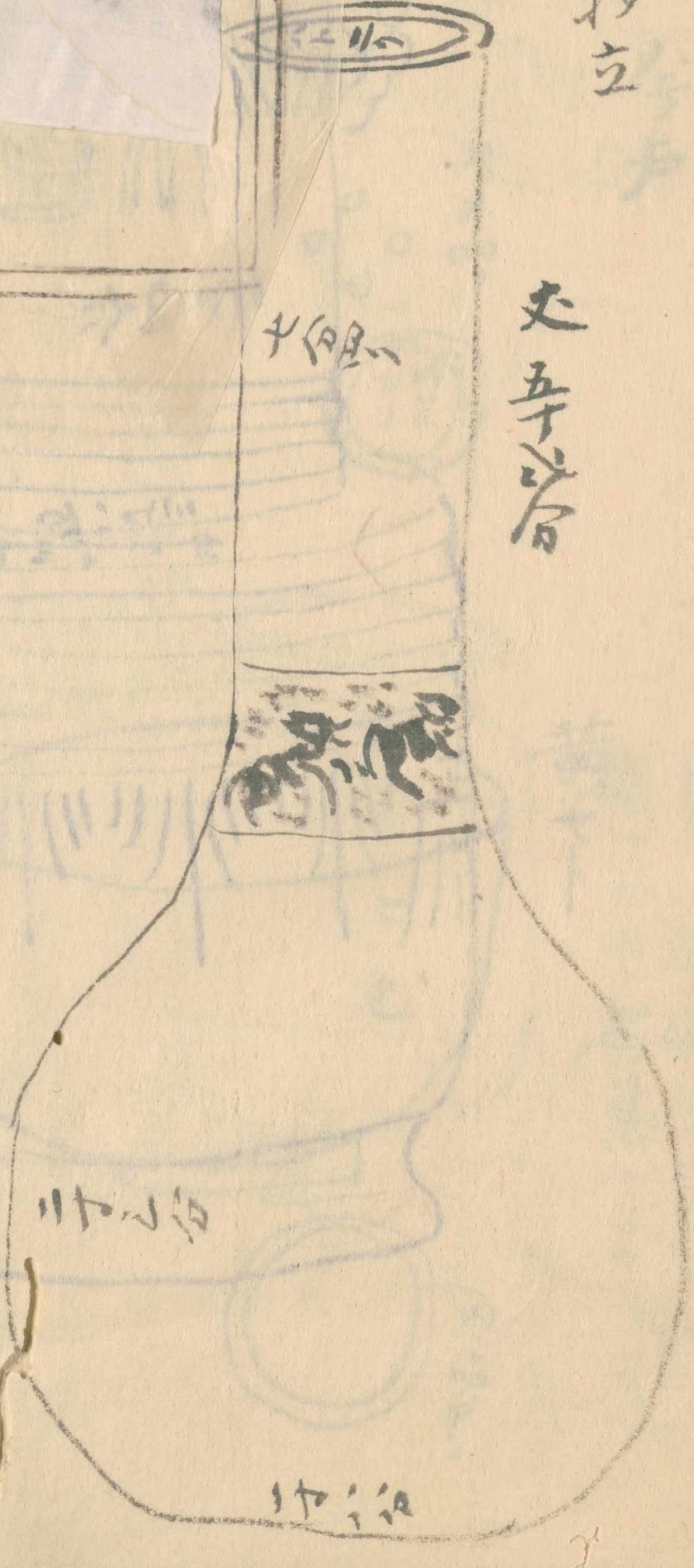


十二月廿二日

繋巳桃底抄立



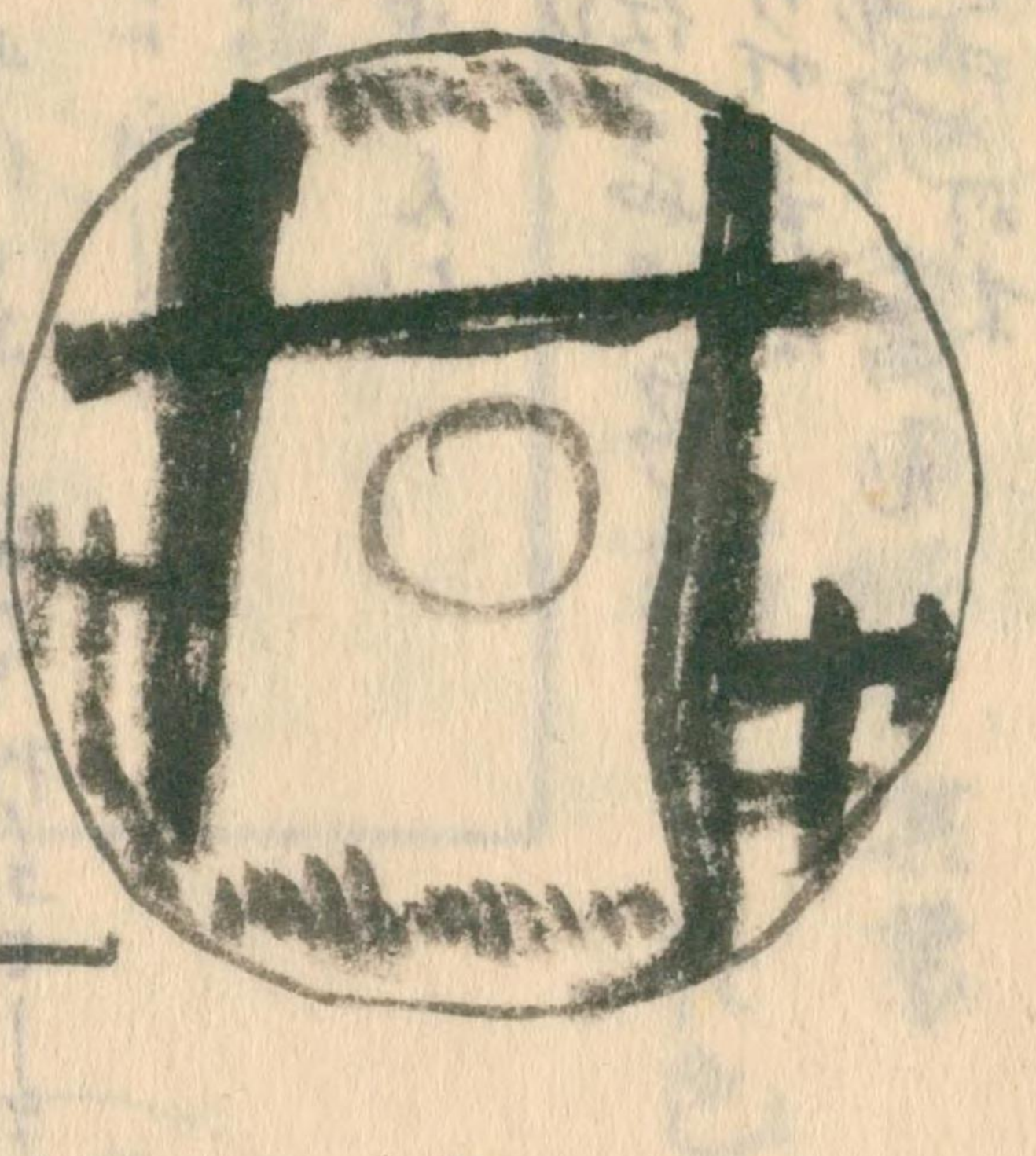
丈五寸八分

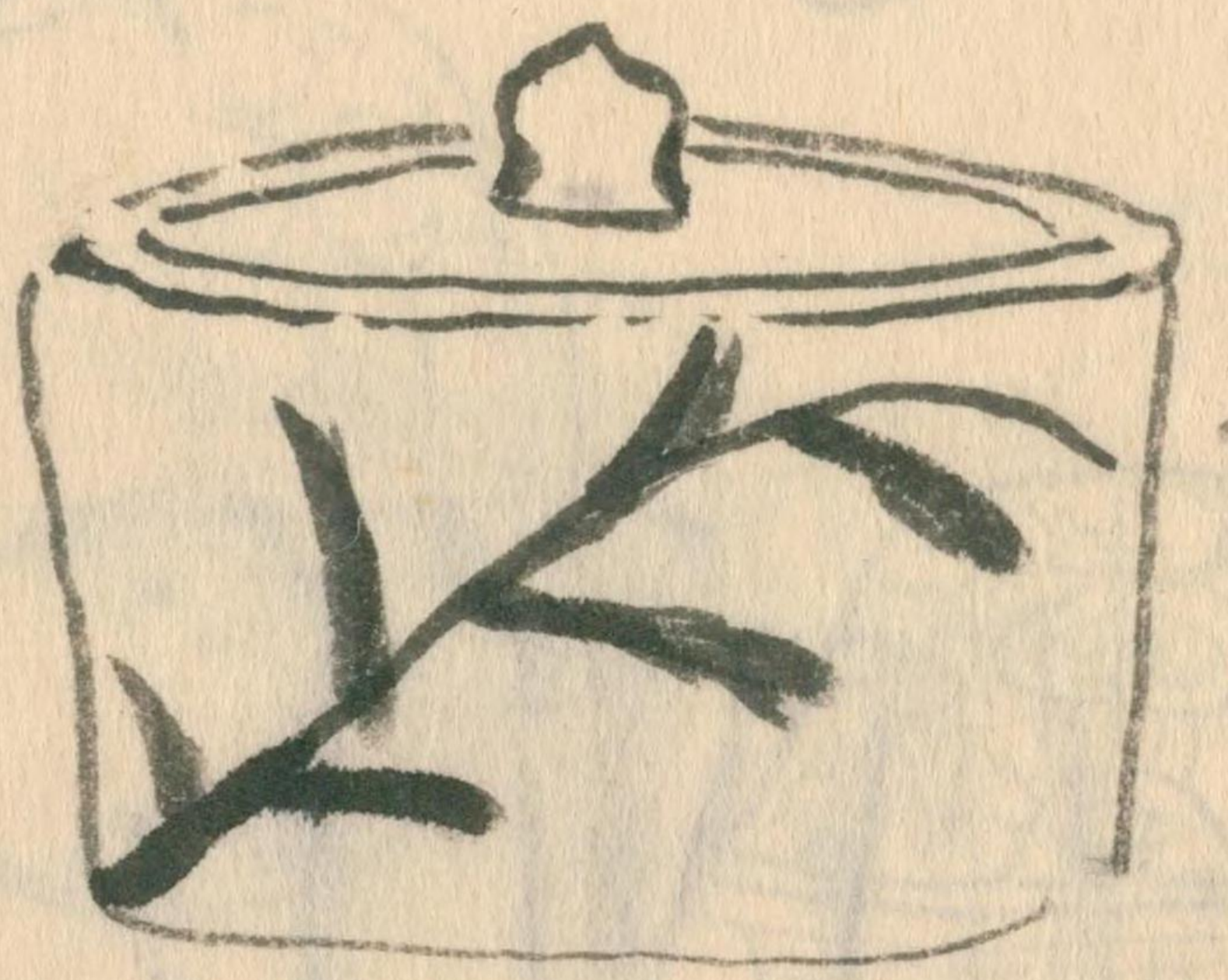

一寸
寸四分
二寸八分
一寸

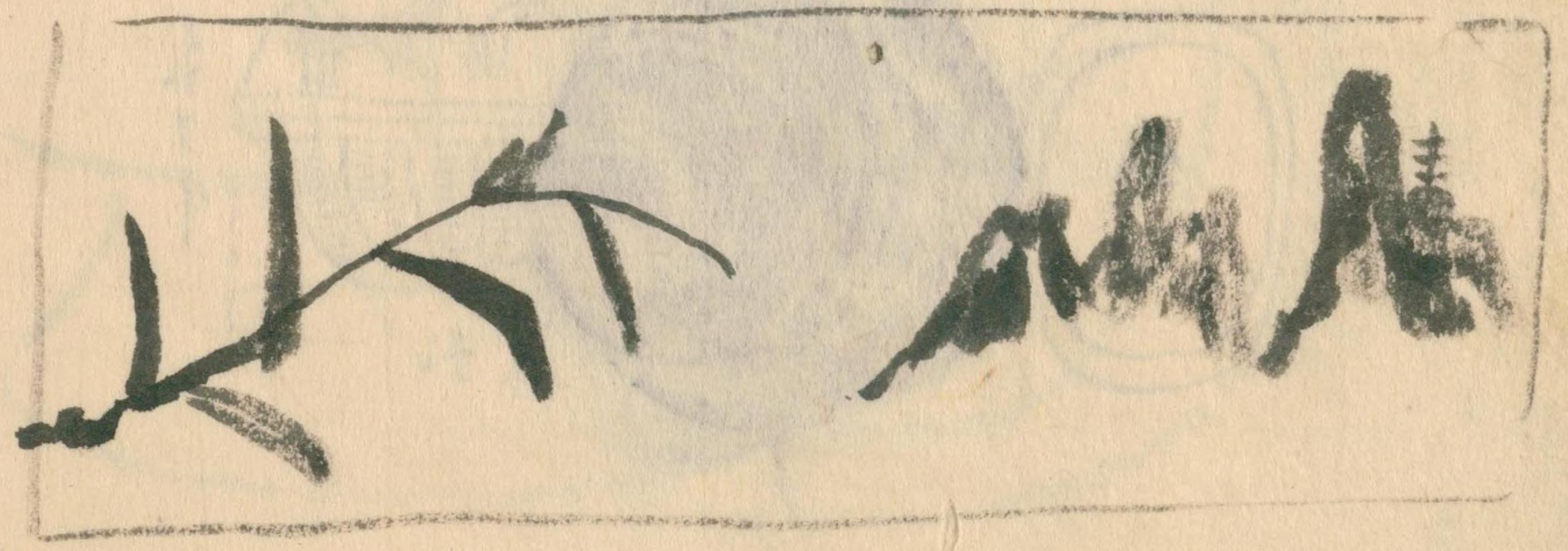
廿四年十一月十五日 谷か

志野御盥香合

袋 雲霄純子ウラ絹ロひヨヨウカリ茶

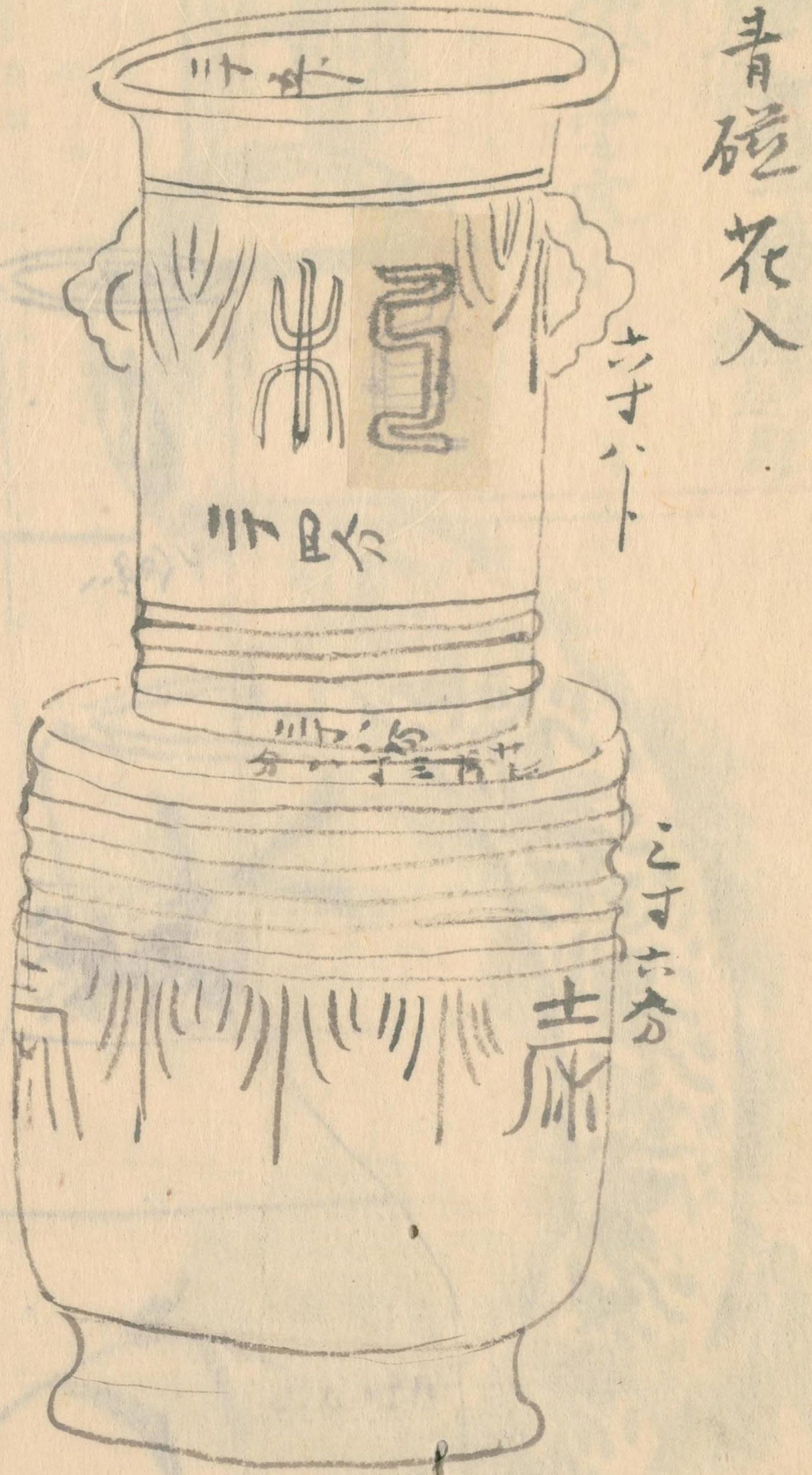






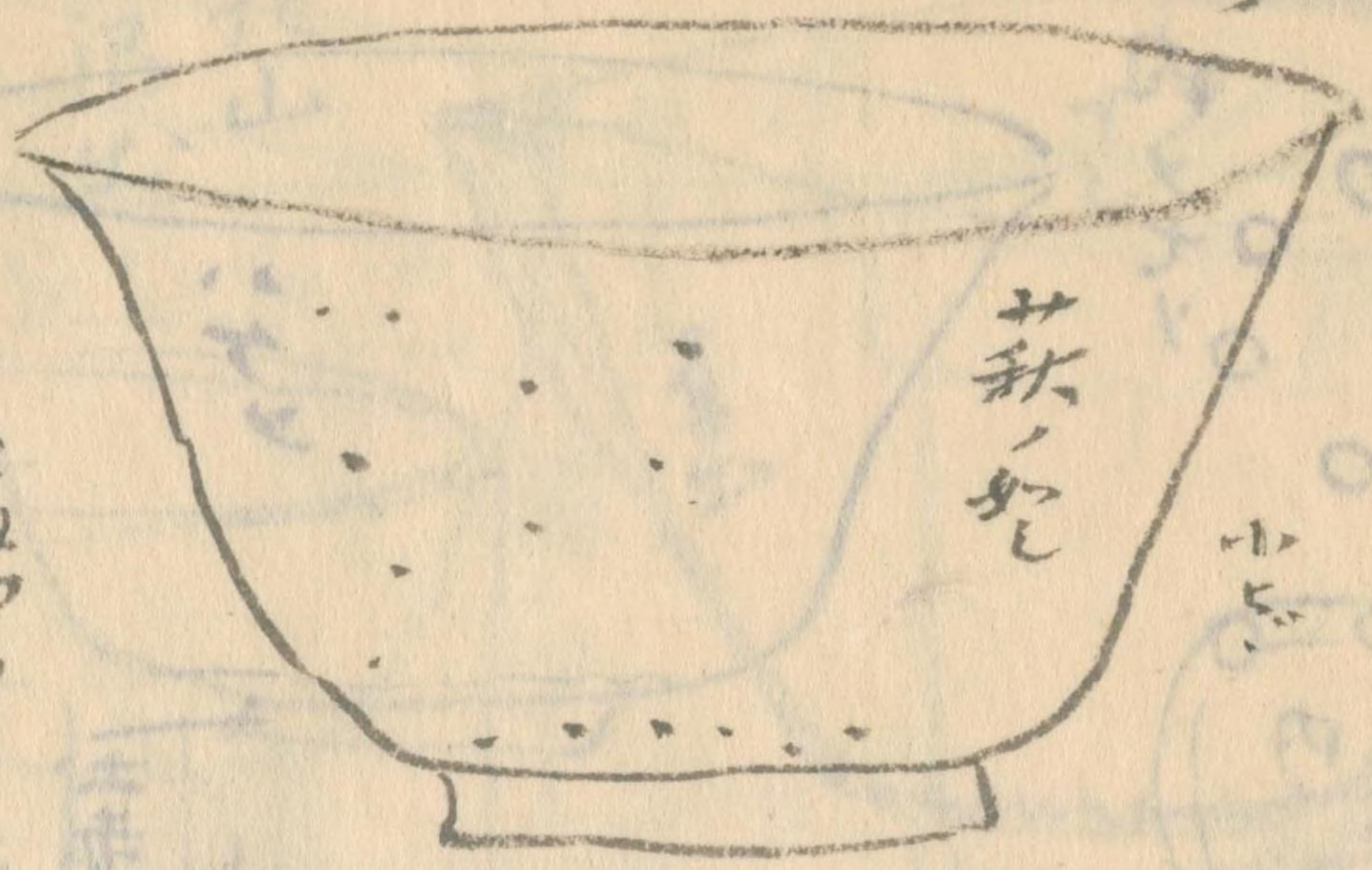
ワ

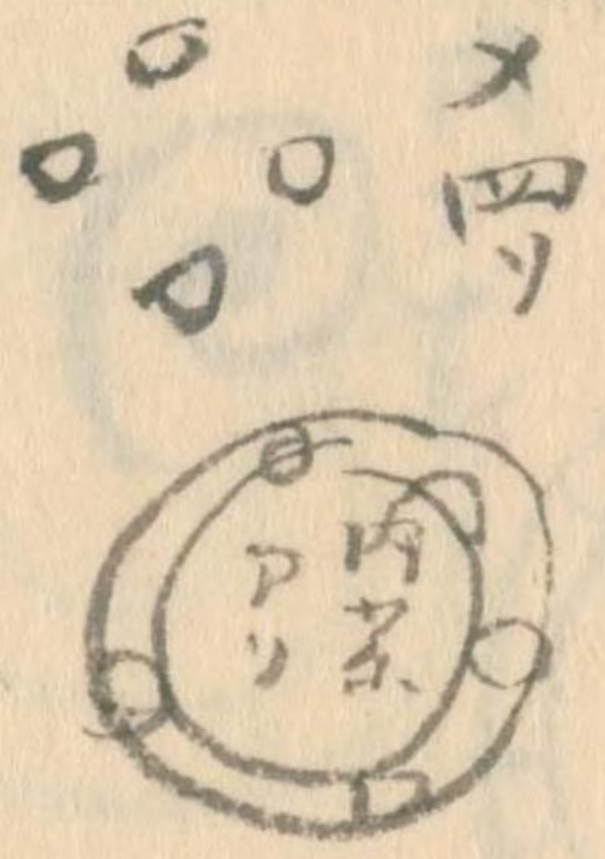
飛青磁 花入

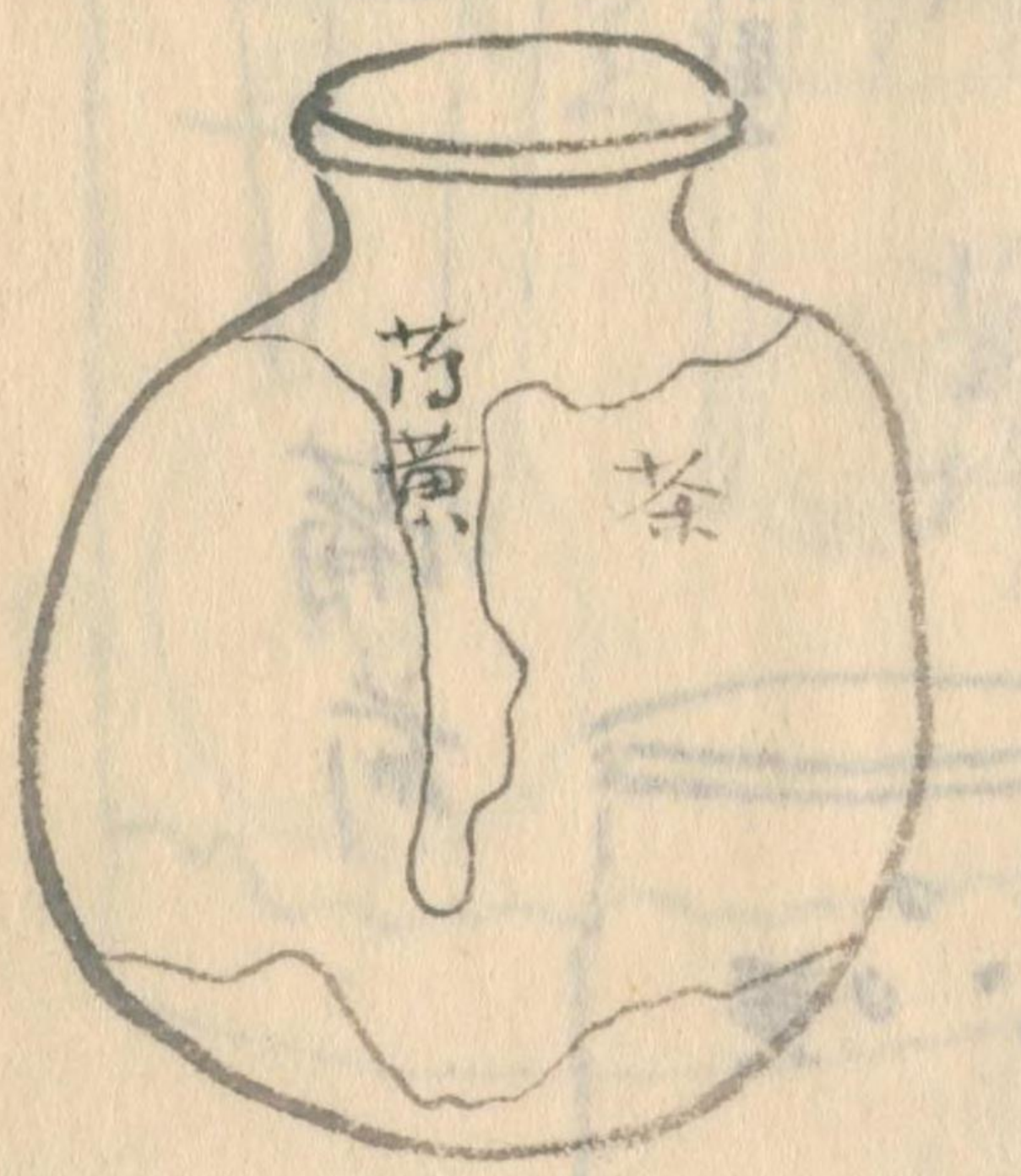


廿四年一月十三 今戸

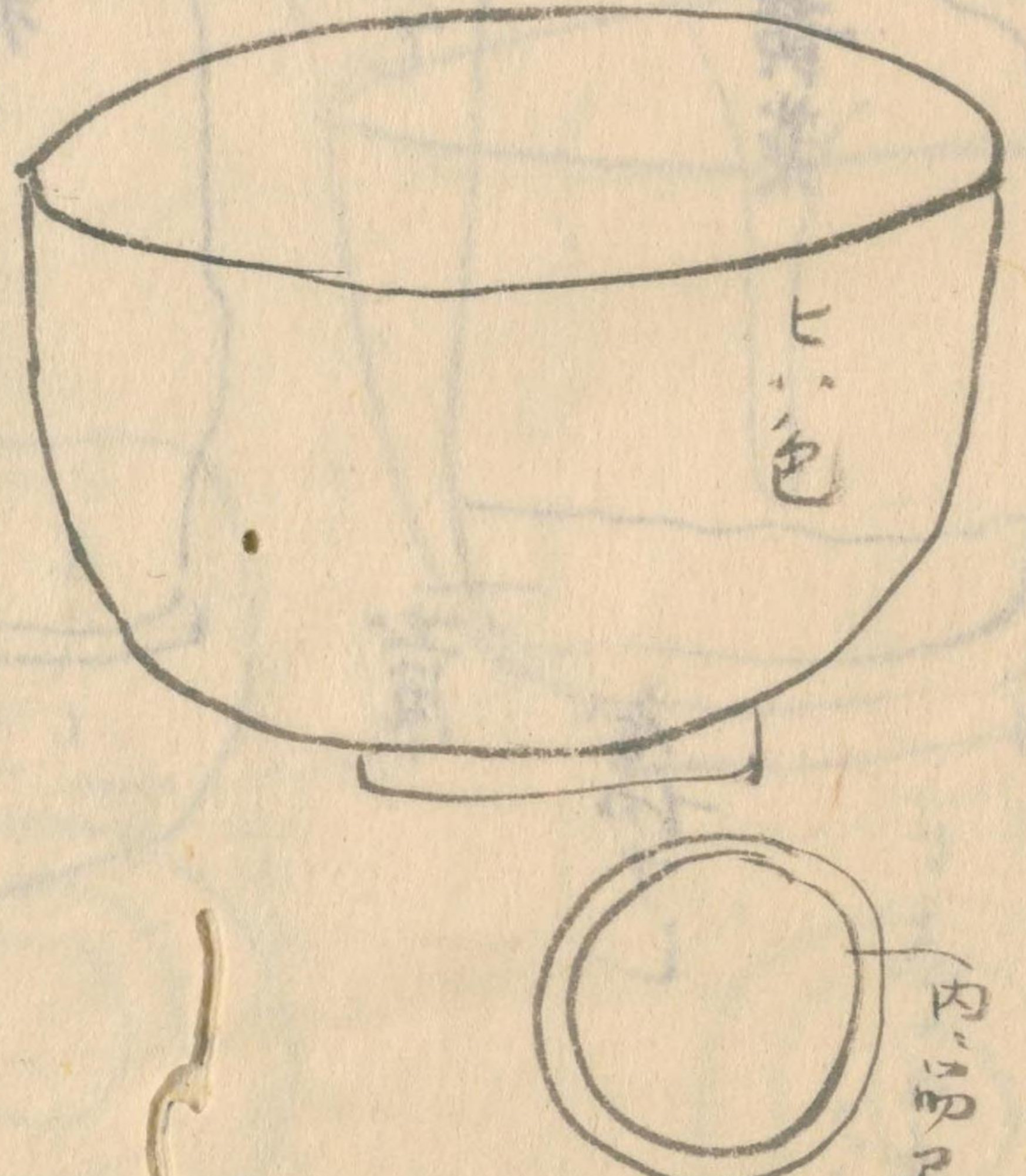
井戸 脚



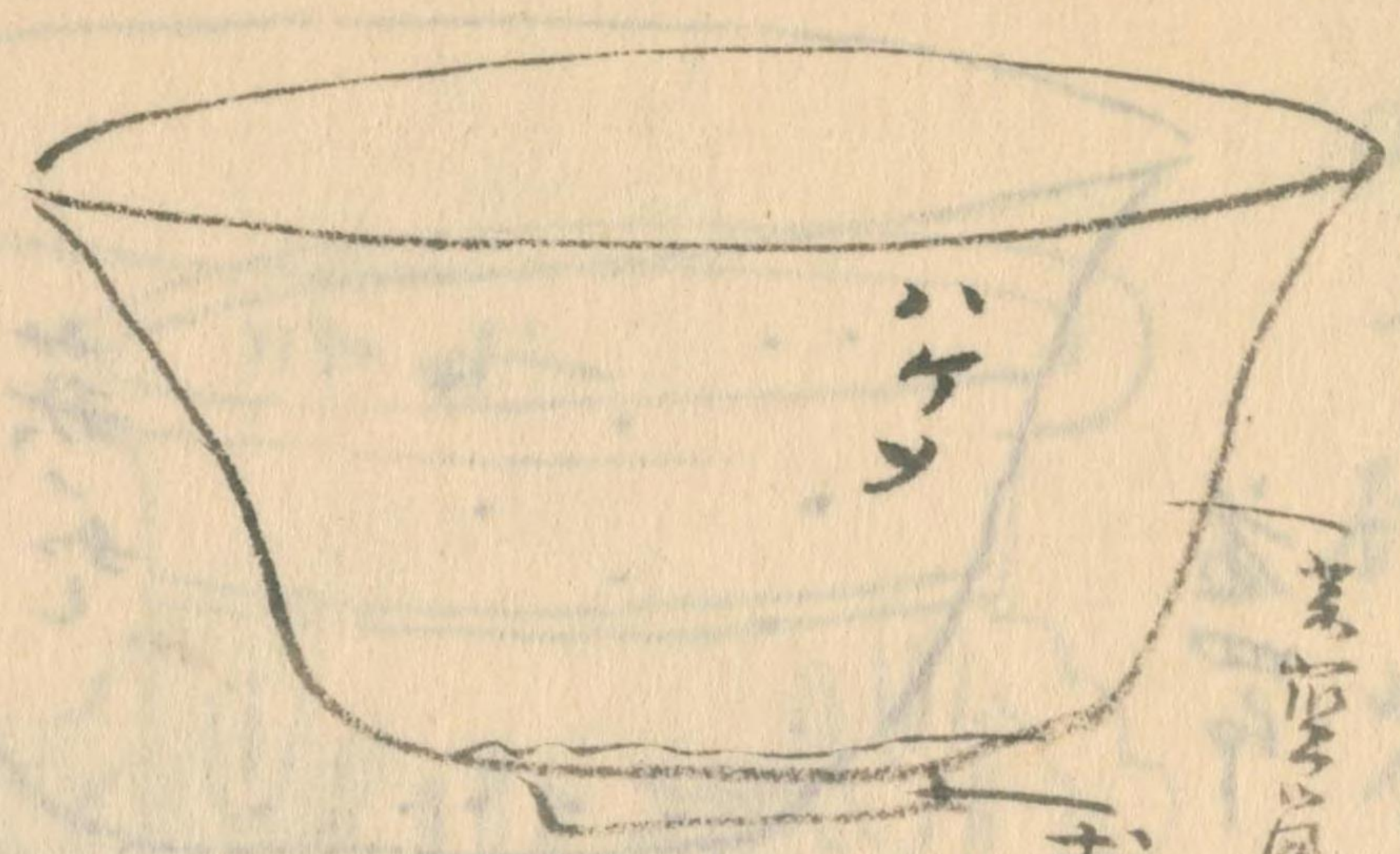


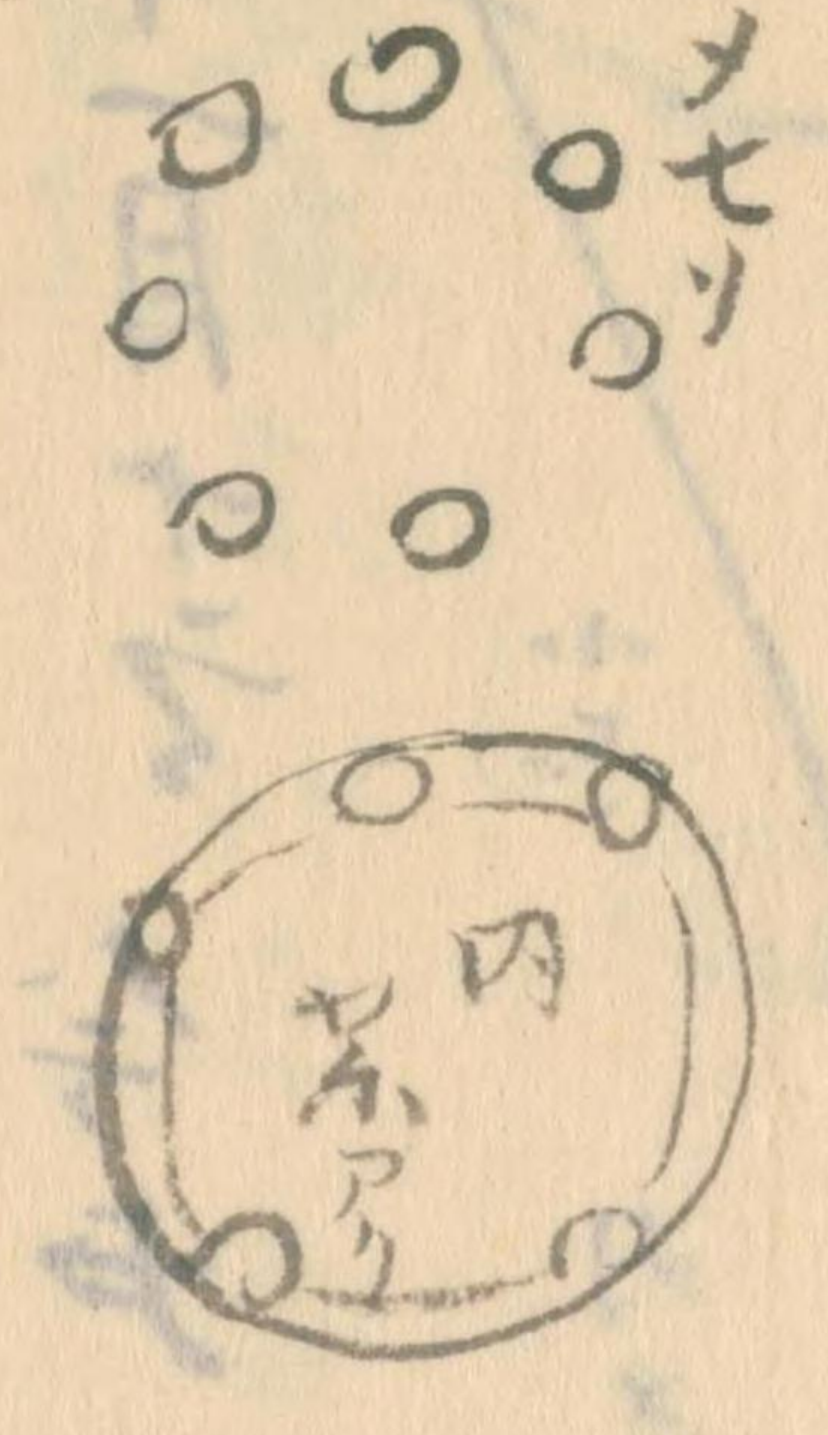


黄セト

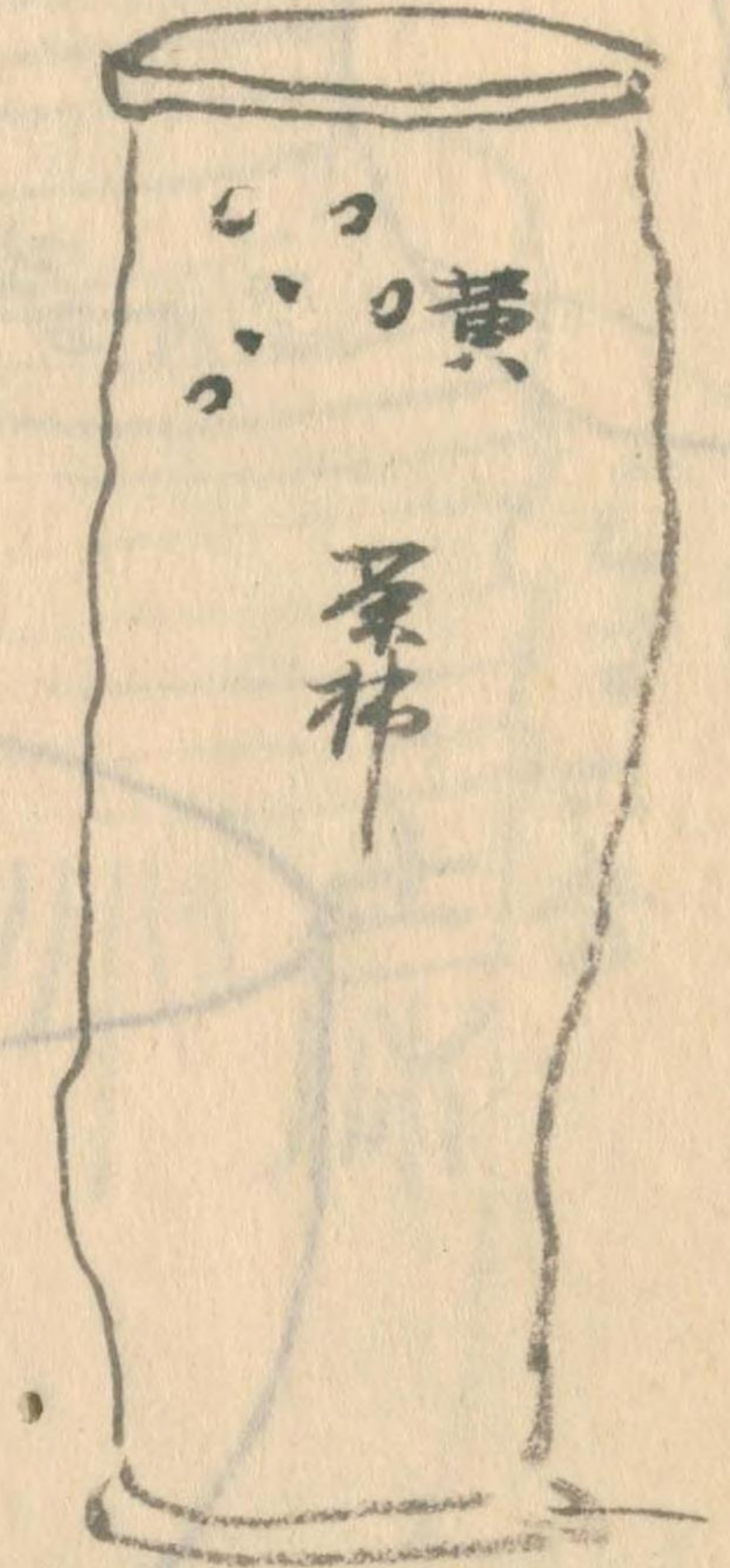


朝鮮はけめ

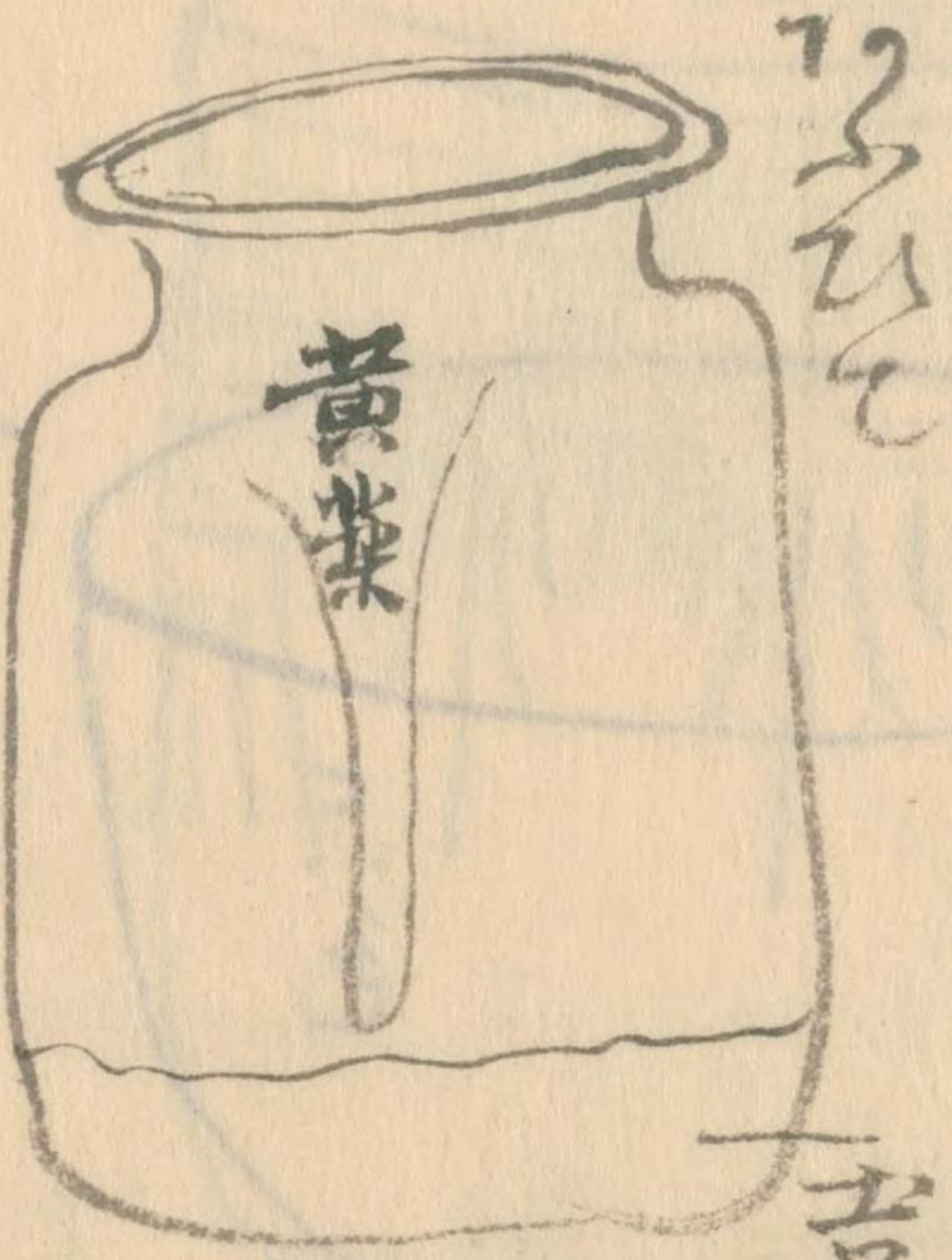

ハケメ
一 土窯岸
土赤堅



備前



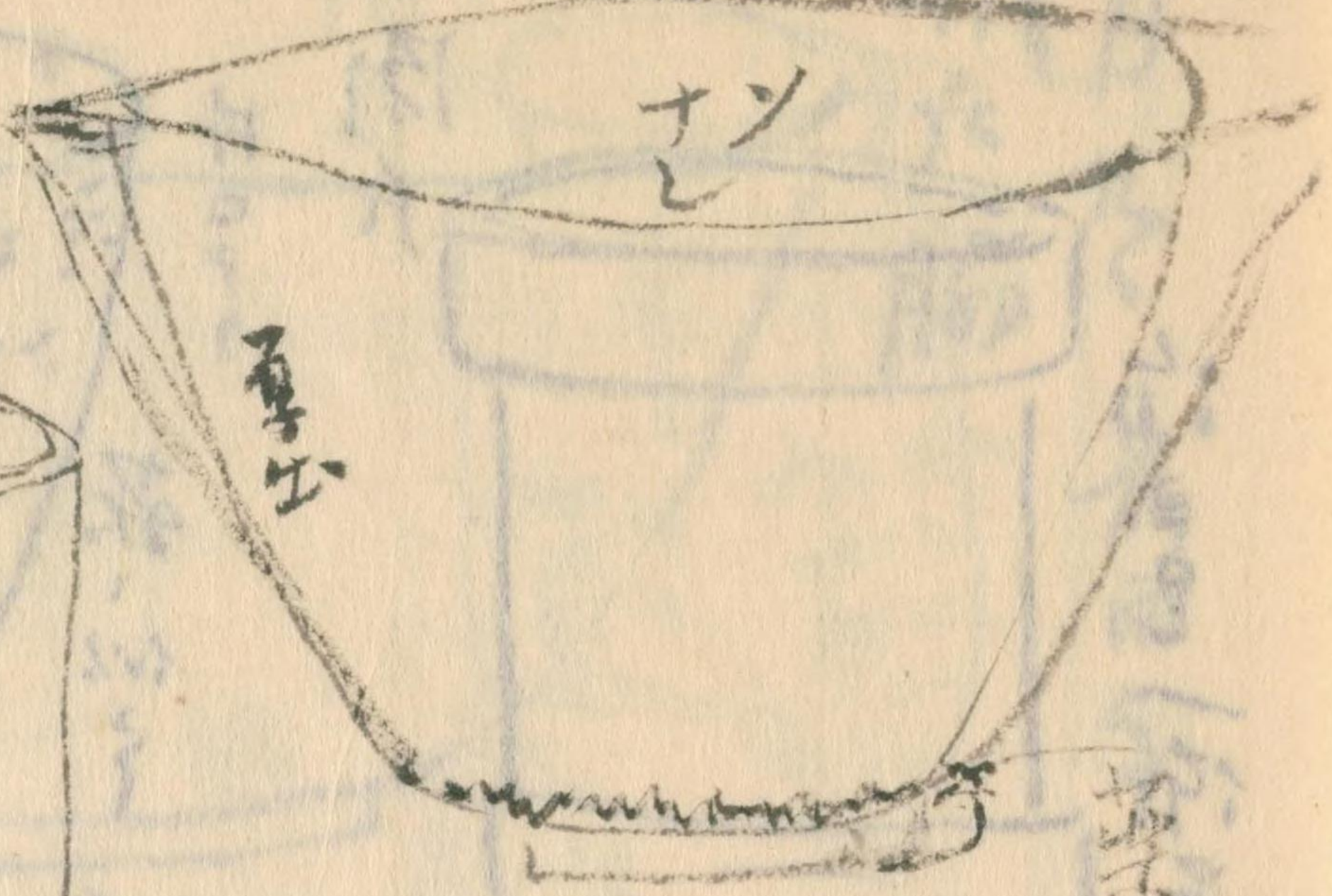
金花山ハうふひて

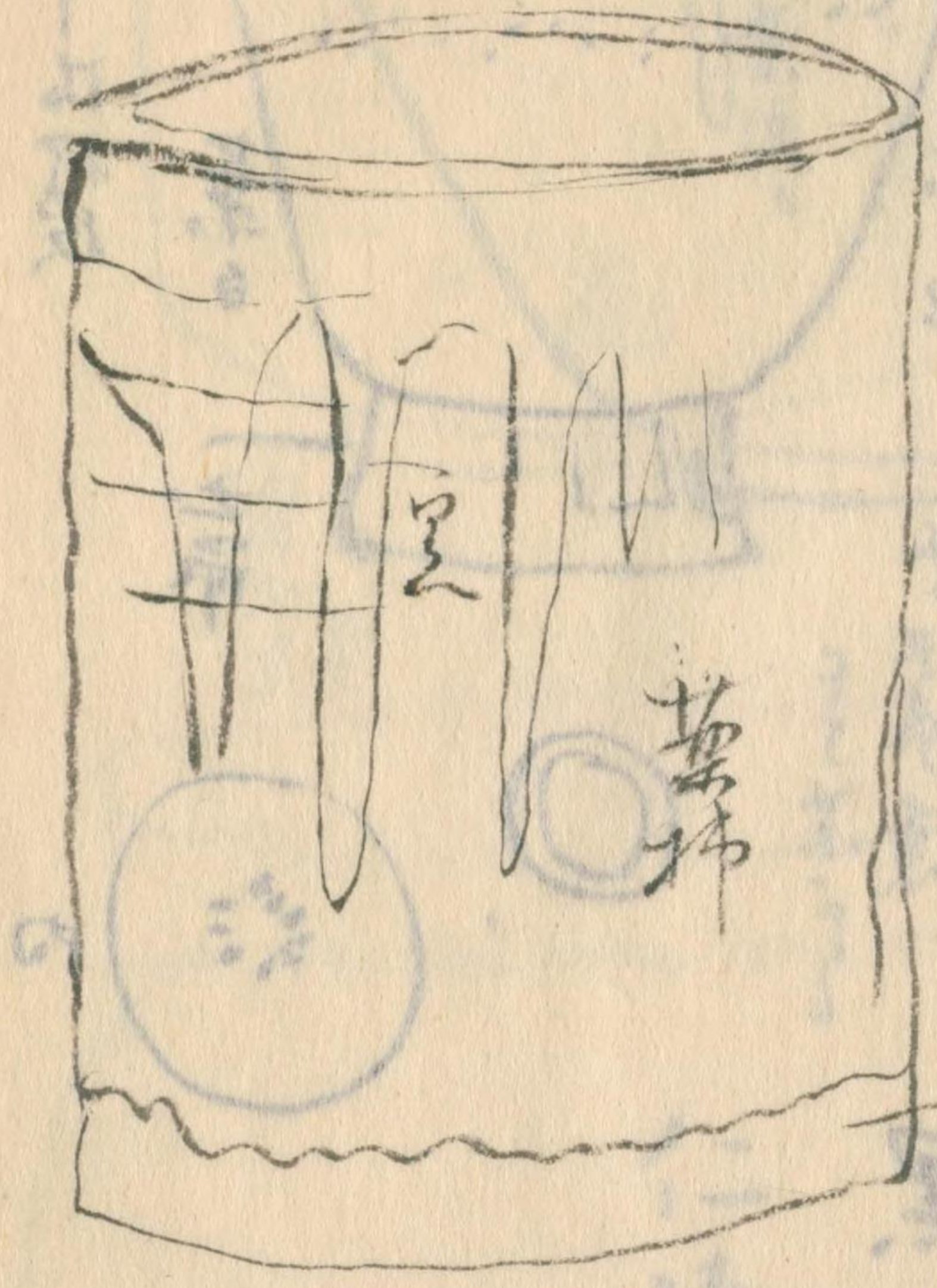


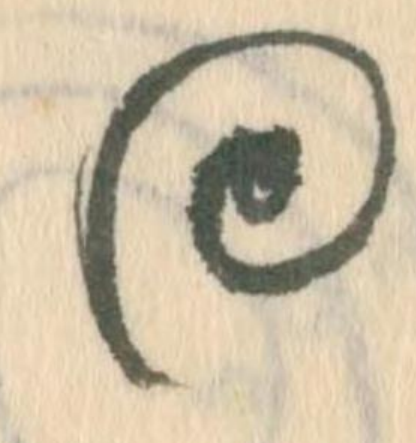
黄瀬出ハ黄薬ナルト言伝ふ
半アレ共是ハ黄薬アリ

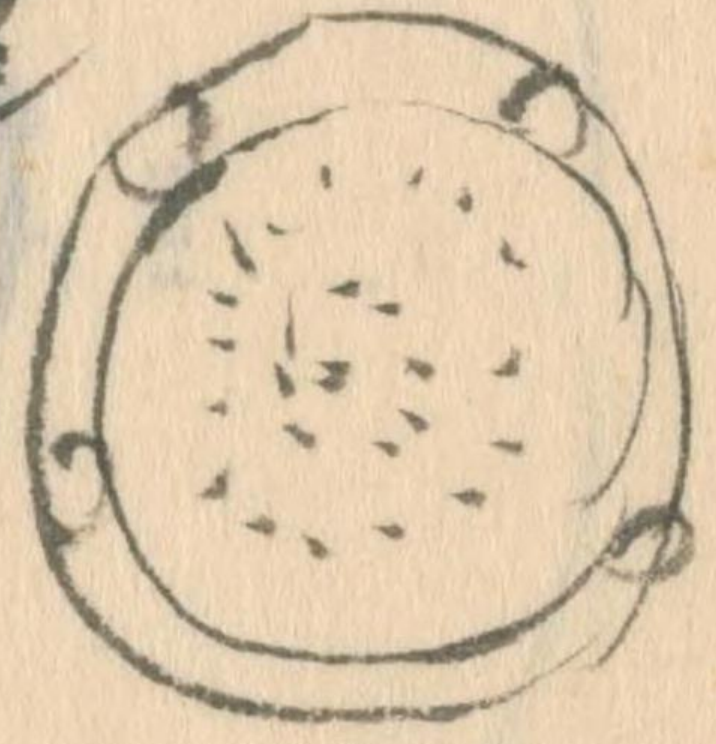
井戸
名物出

金花山
茶泥出
小寸

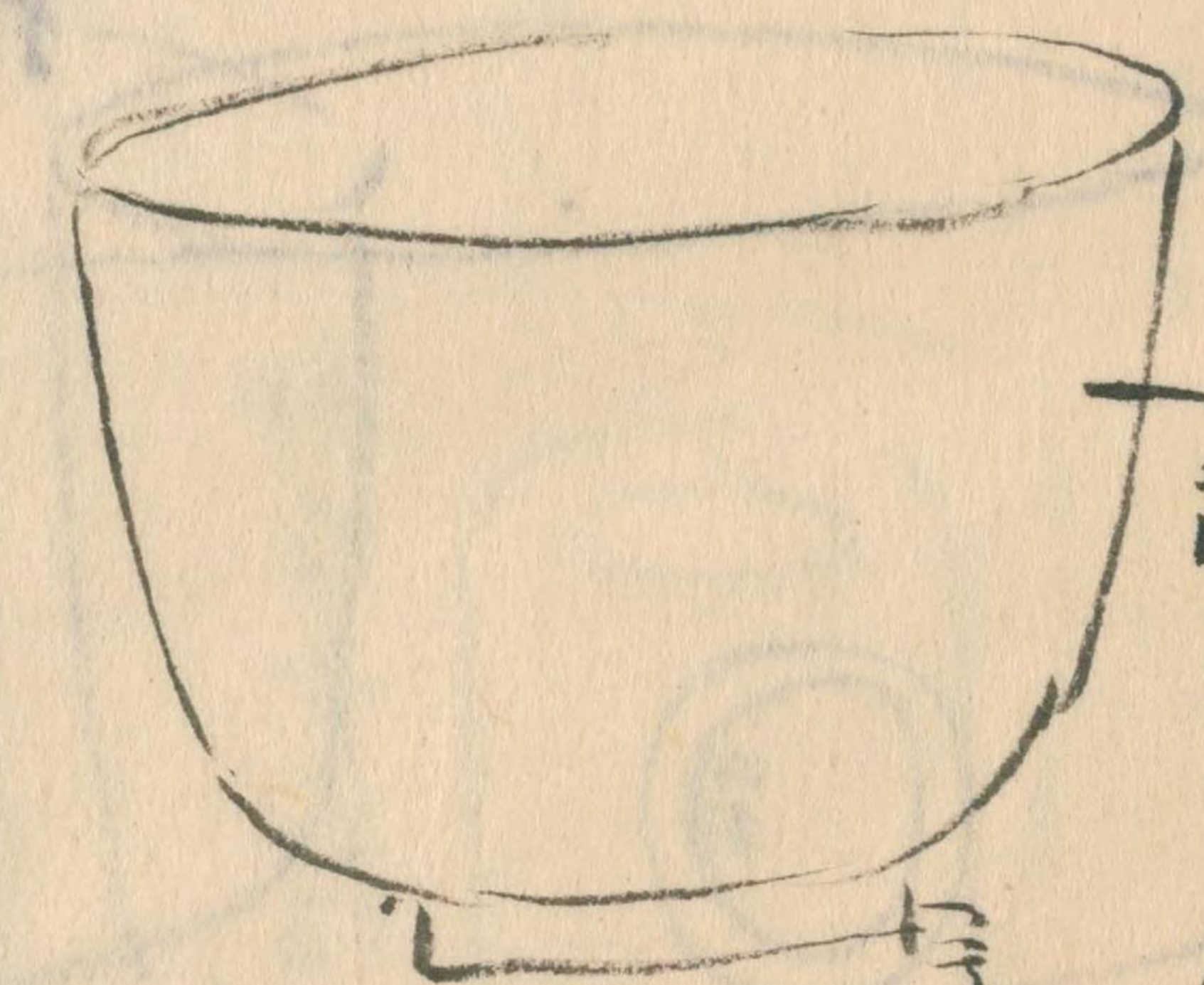




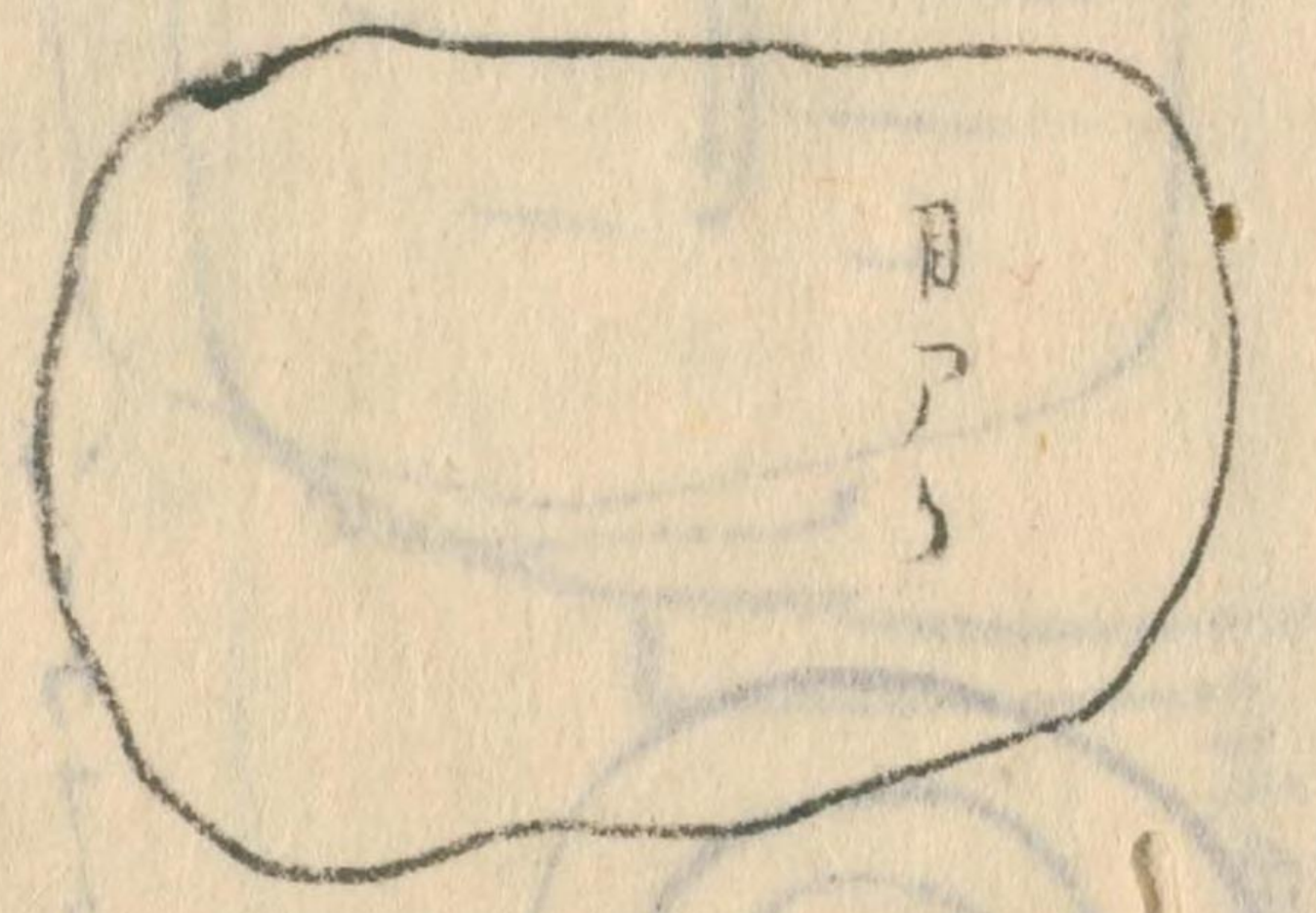




御本半日



一 薩摩色ハ赤ミアリ火色アリ
にきんちると茶アリ
さ色の内毒
火うそ
かり

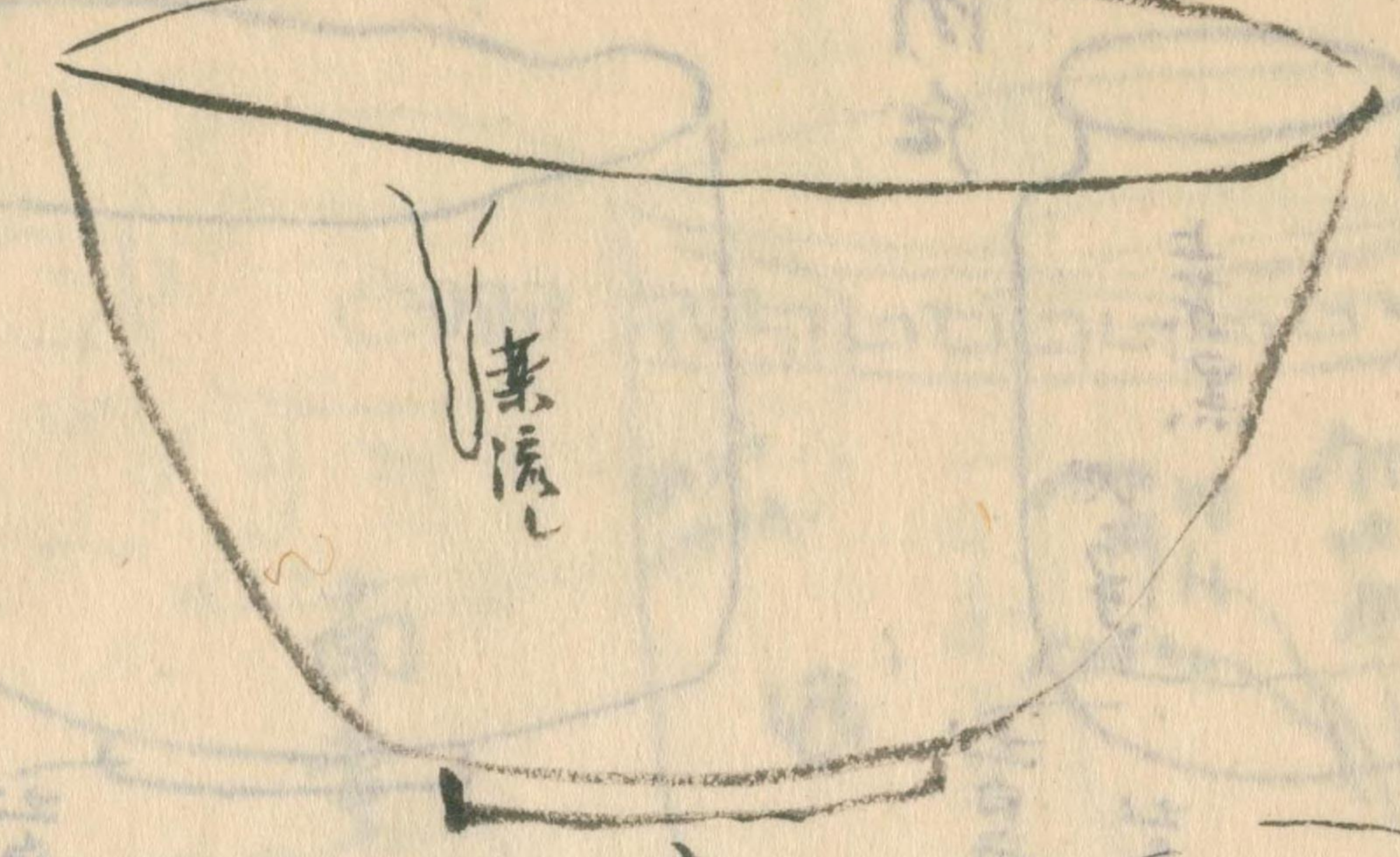


ガラス使用

二月九日

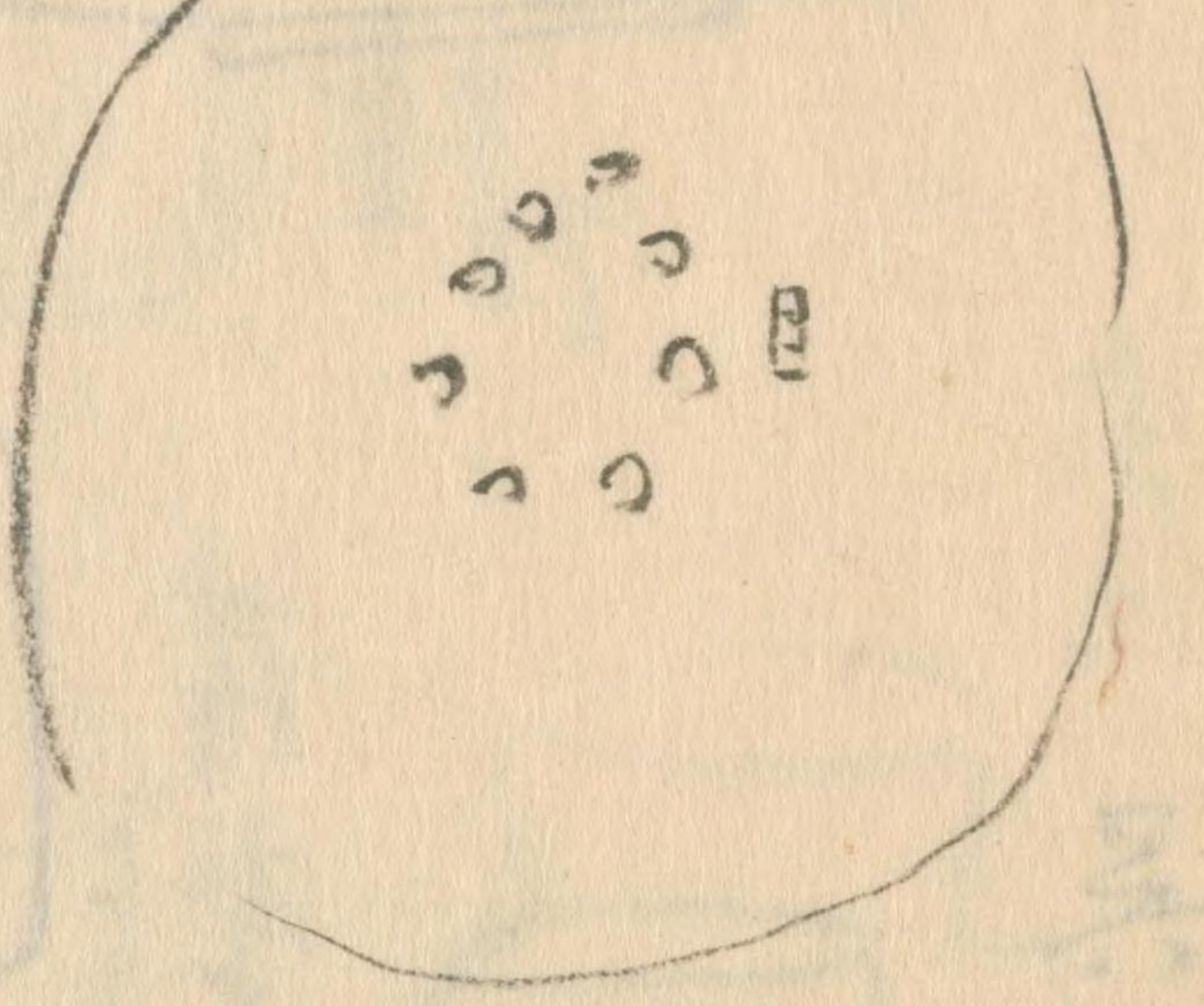
拂片脚

前田手

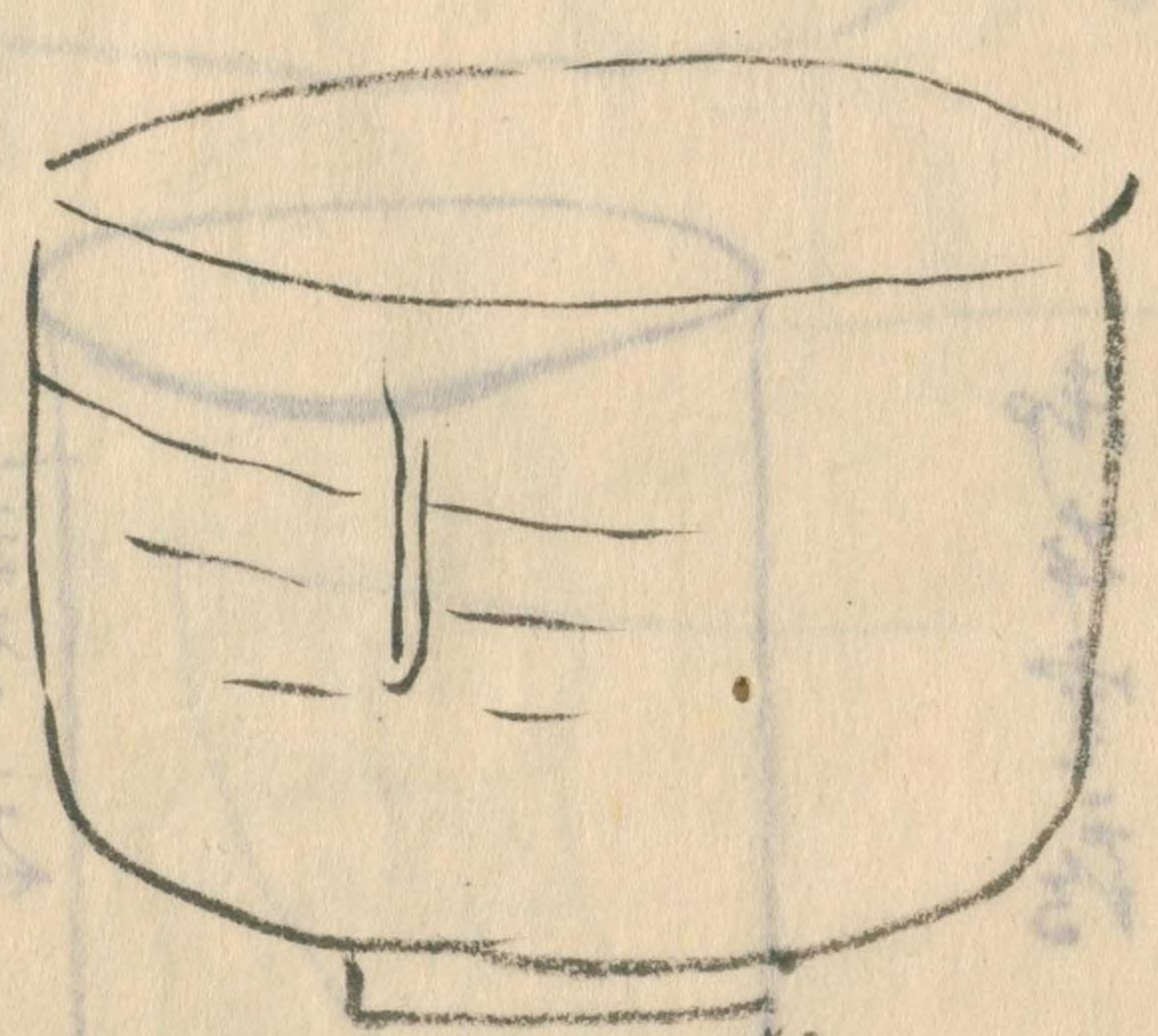


寸之庵表

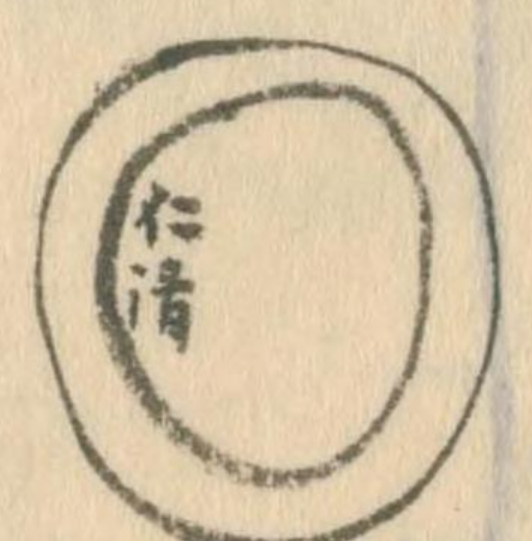
土茶入る



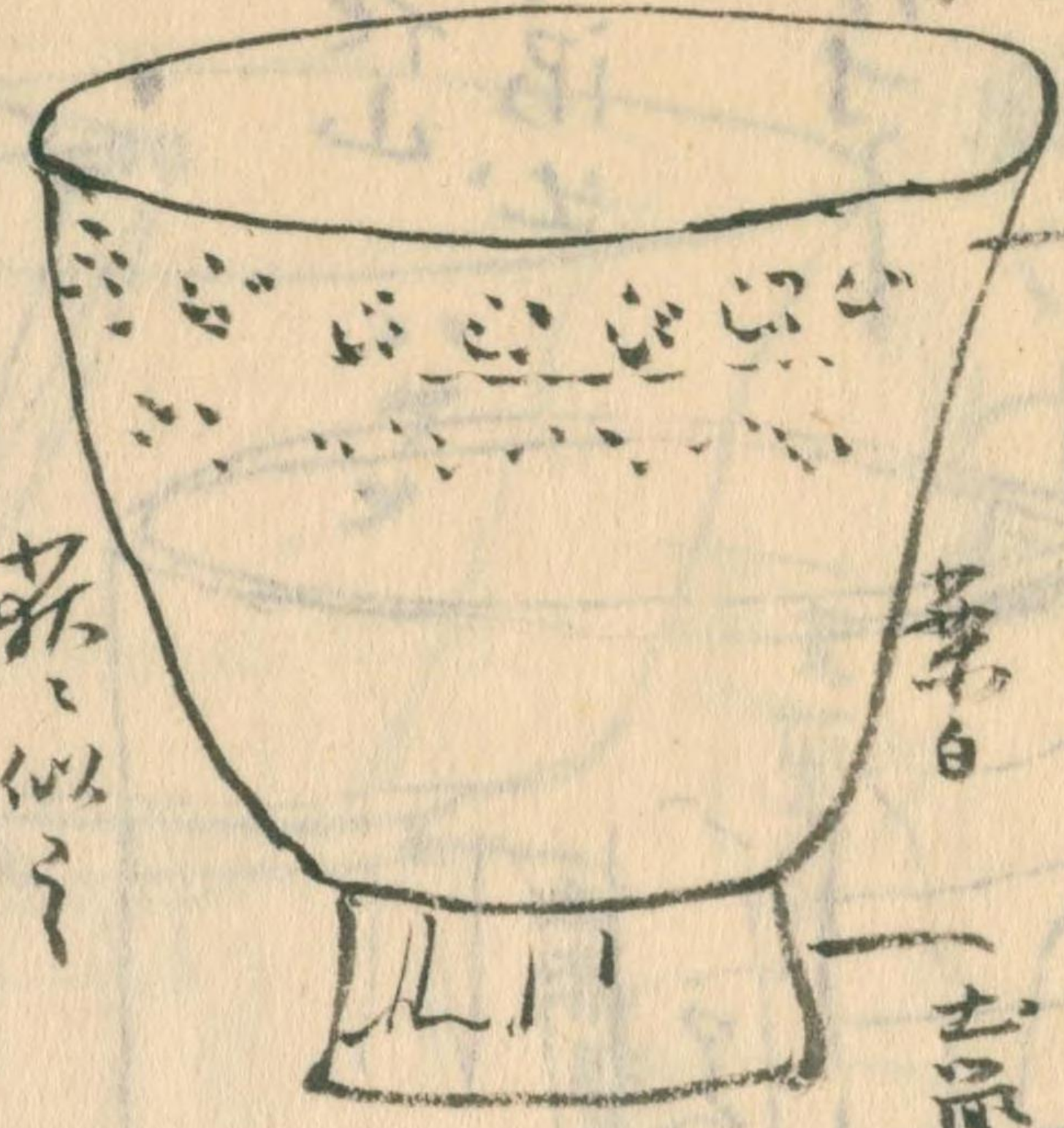
仁清



土白大毛



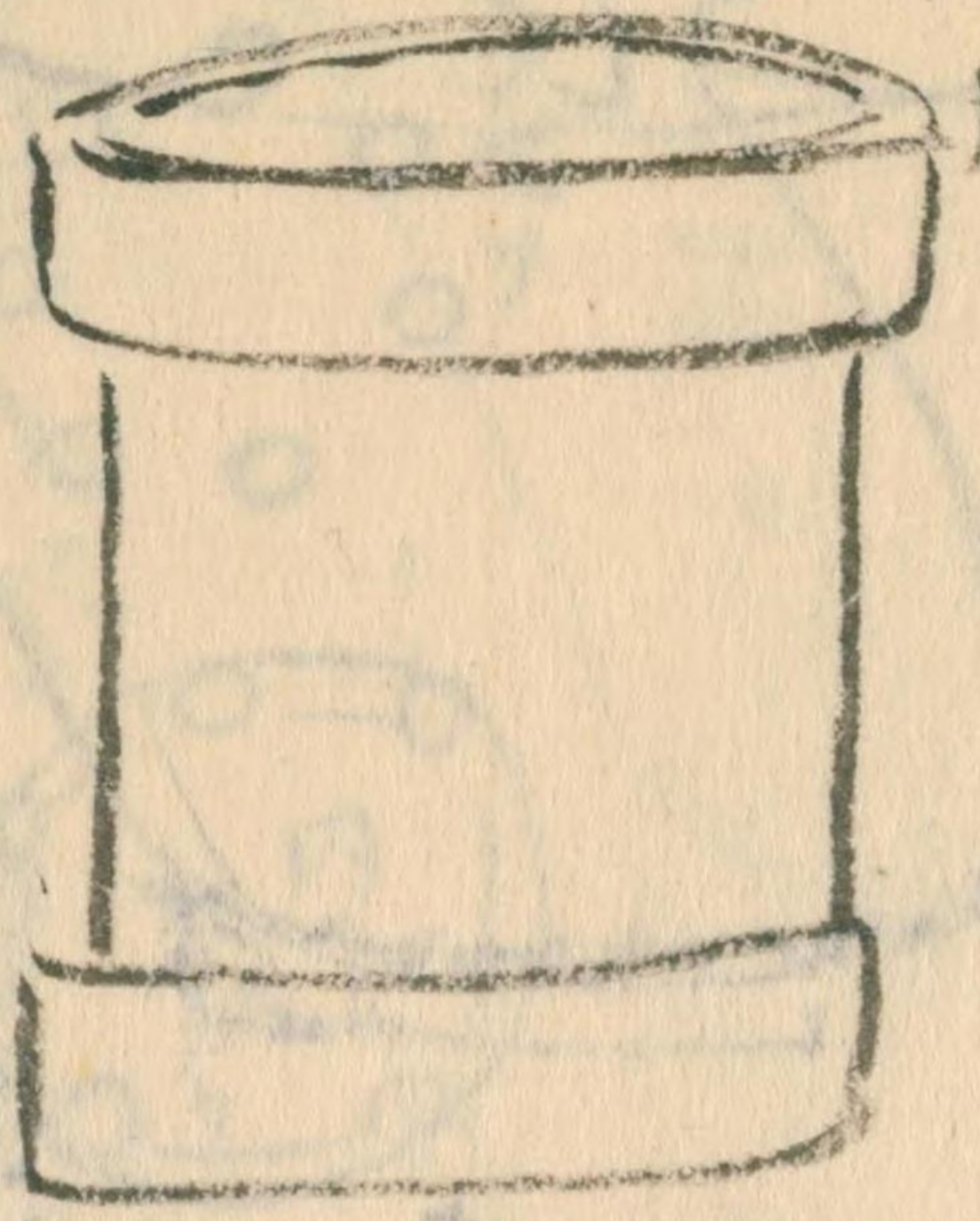
御本みしま



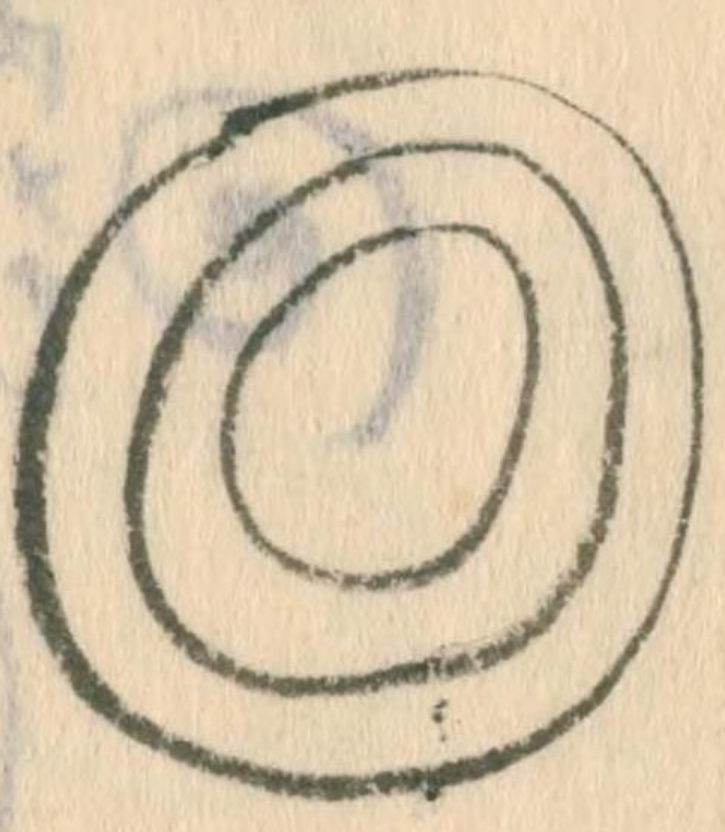
萩ニ似テ

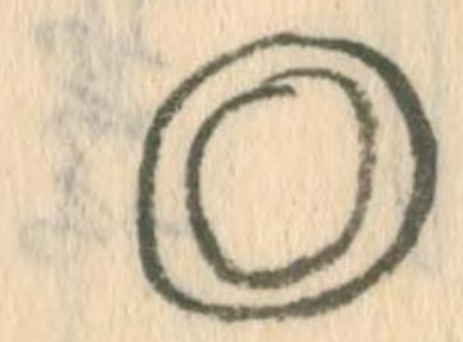
片口アリ

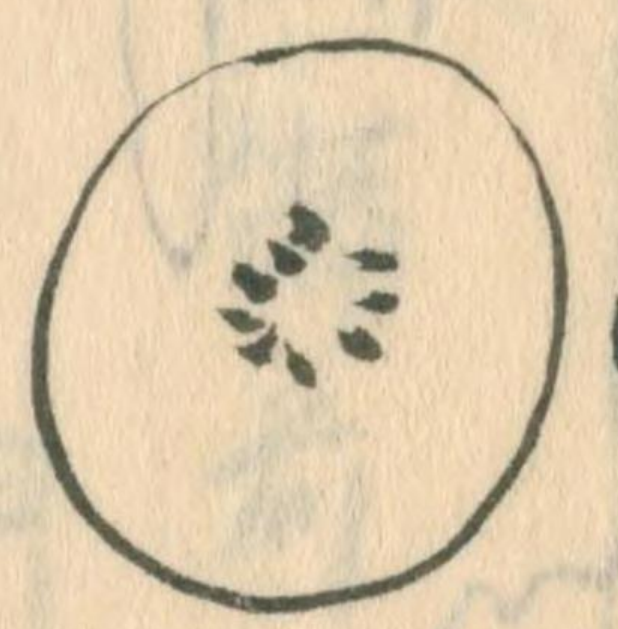
黒陶片



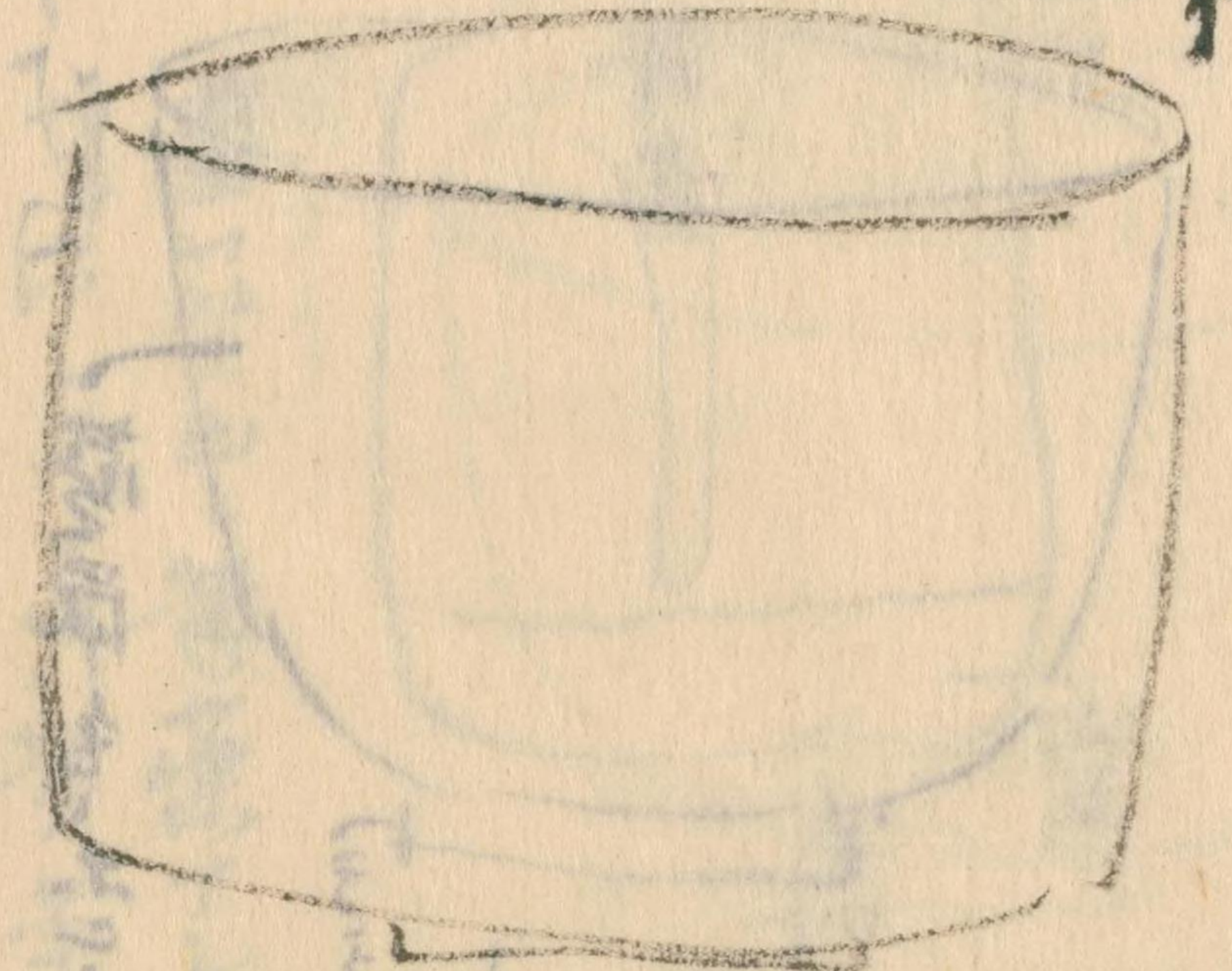
治ヨ巳一作前作

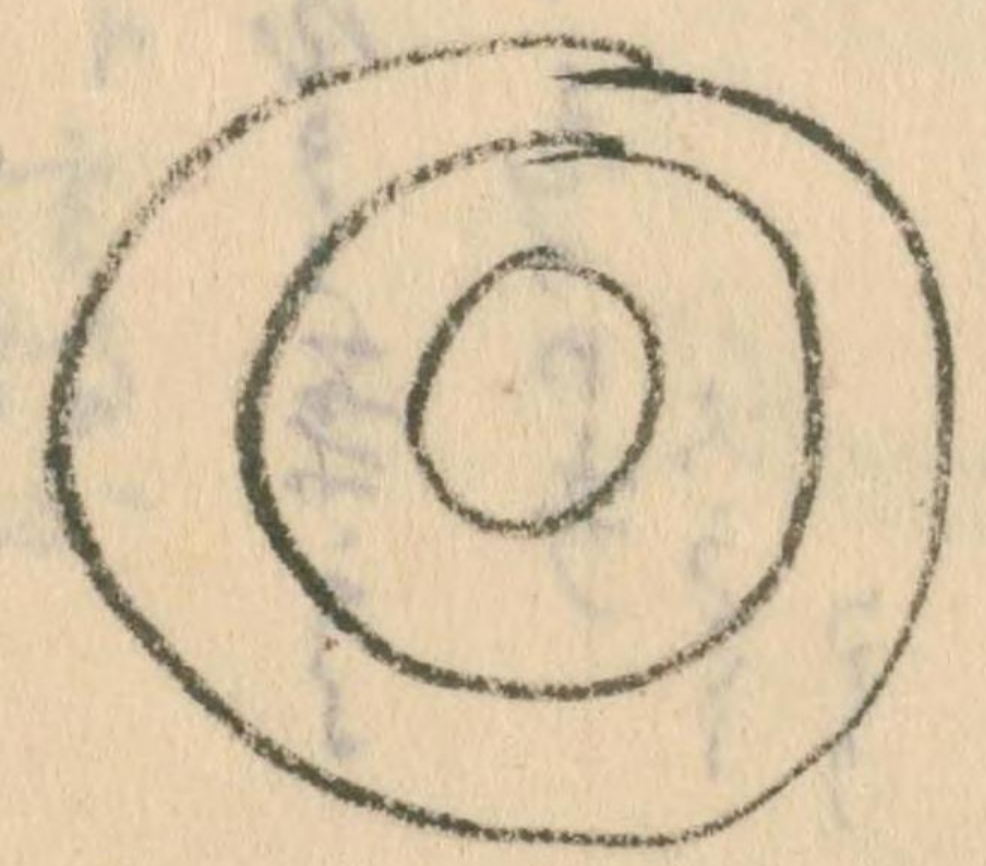






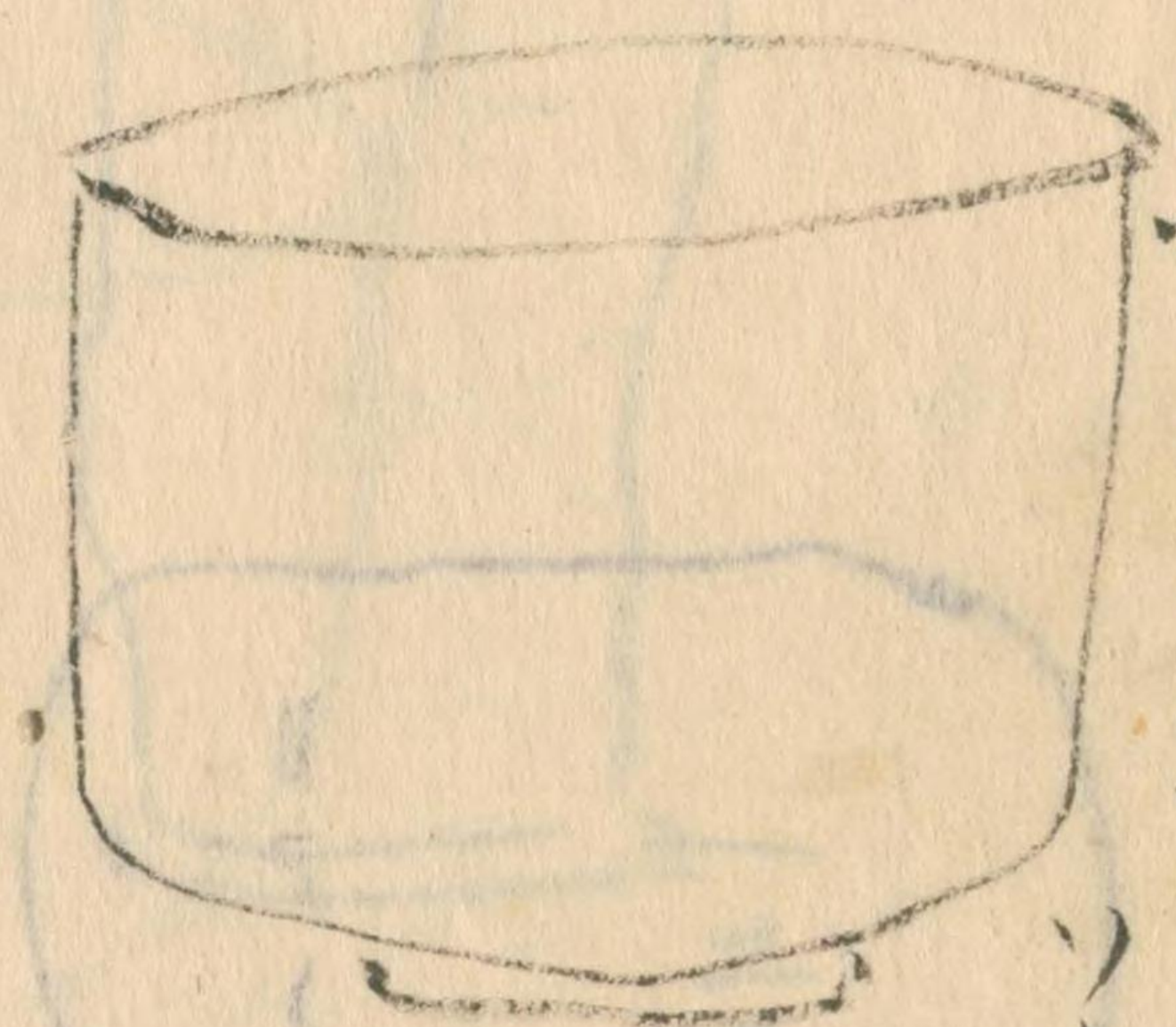
黒織部

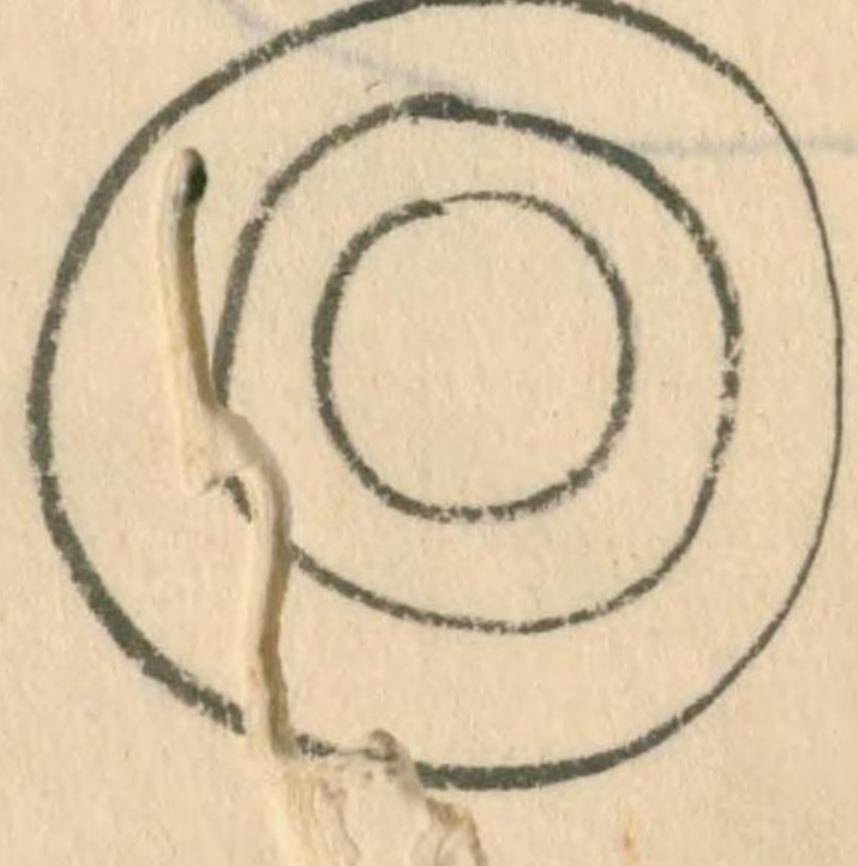




瀬戸黒　寸庵ベタリト有

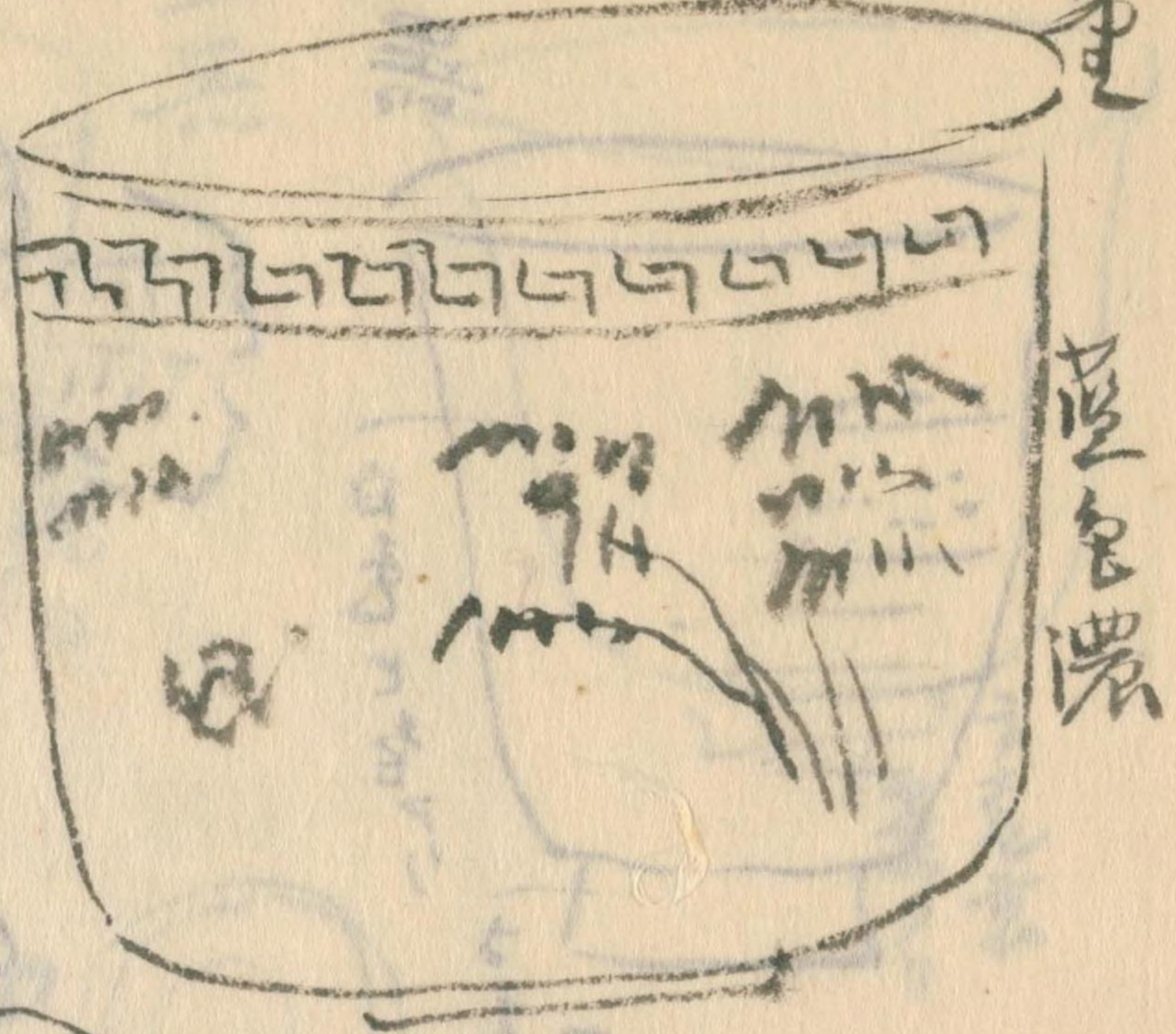
ソーウナリ作ナリ





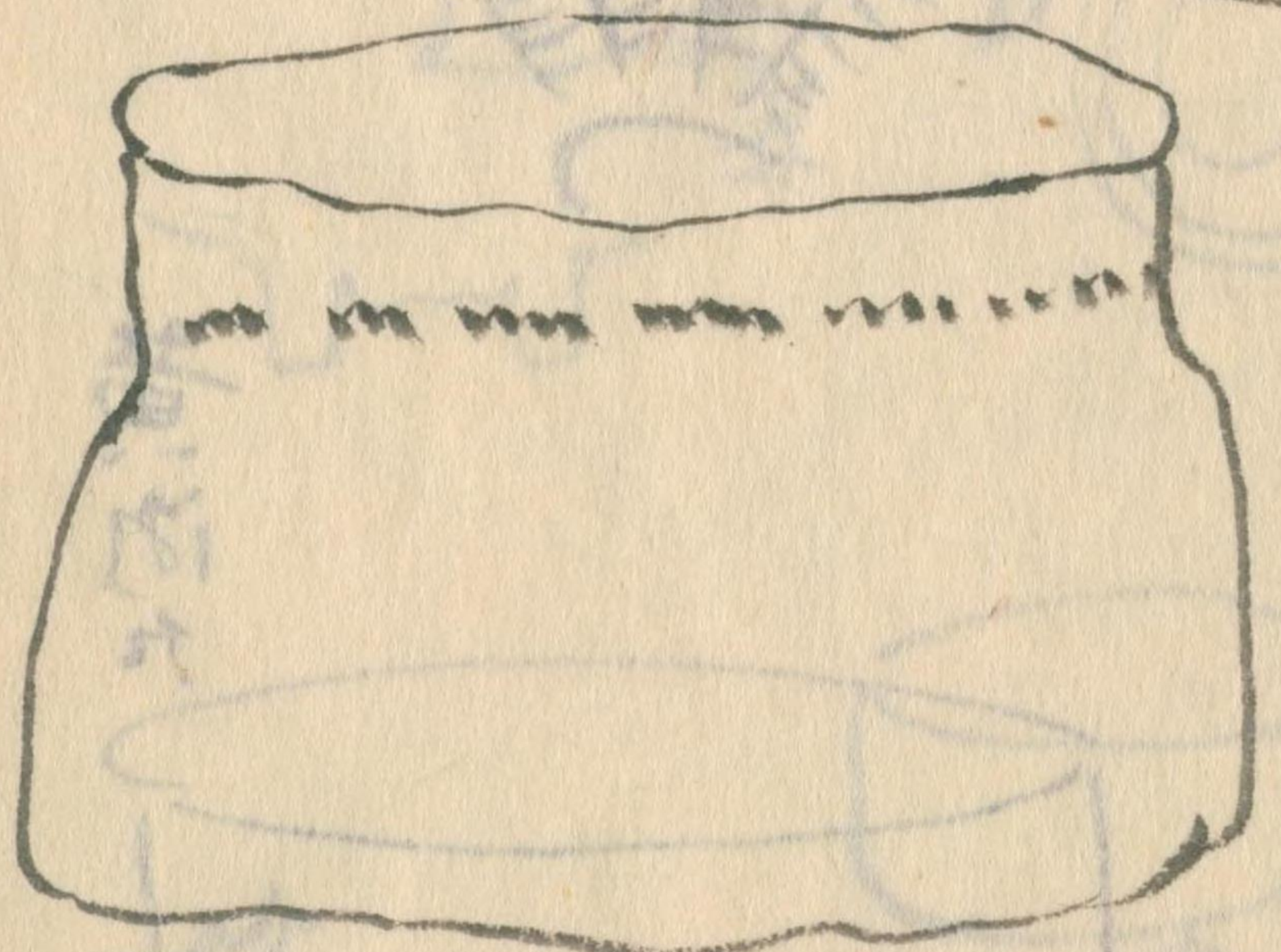
ガラス使用

雲堂

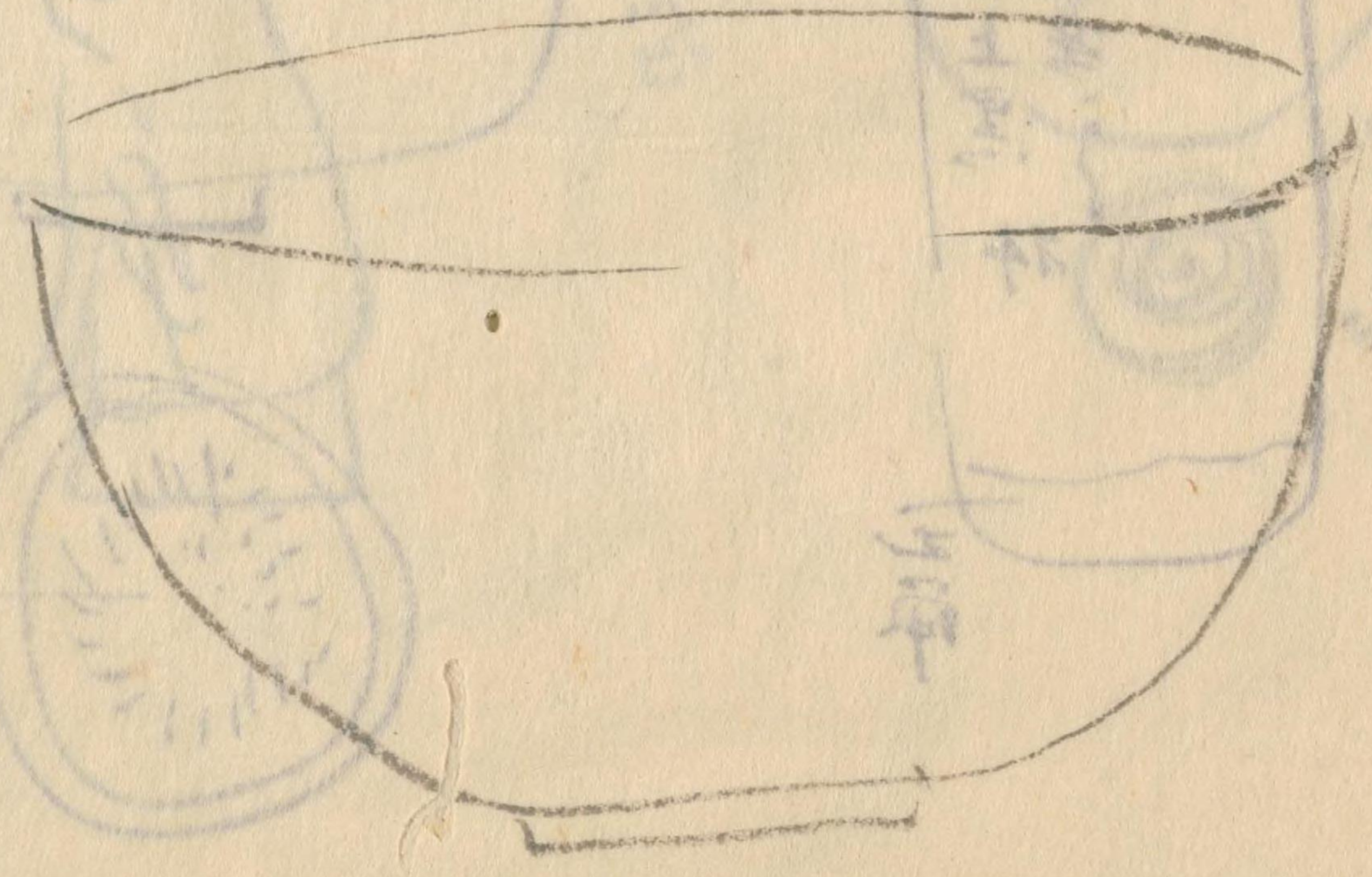


藍色濃

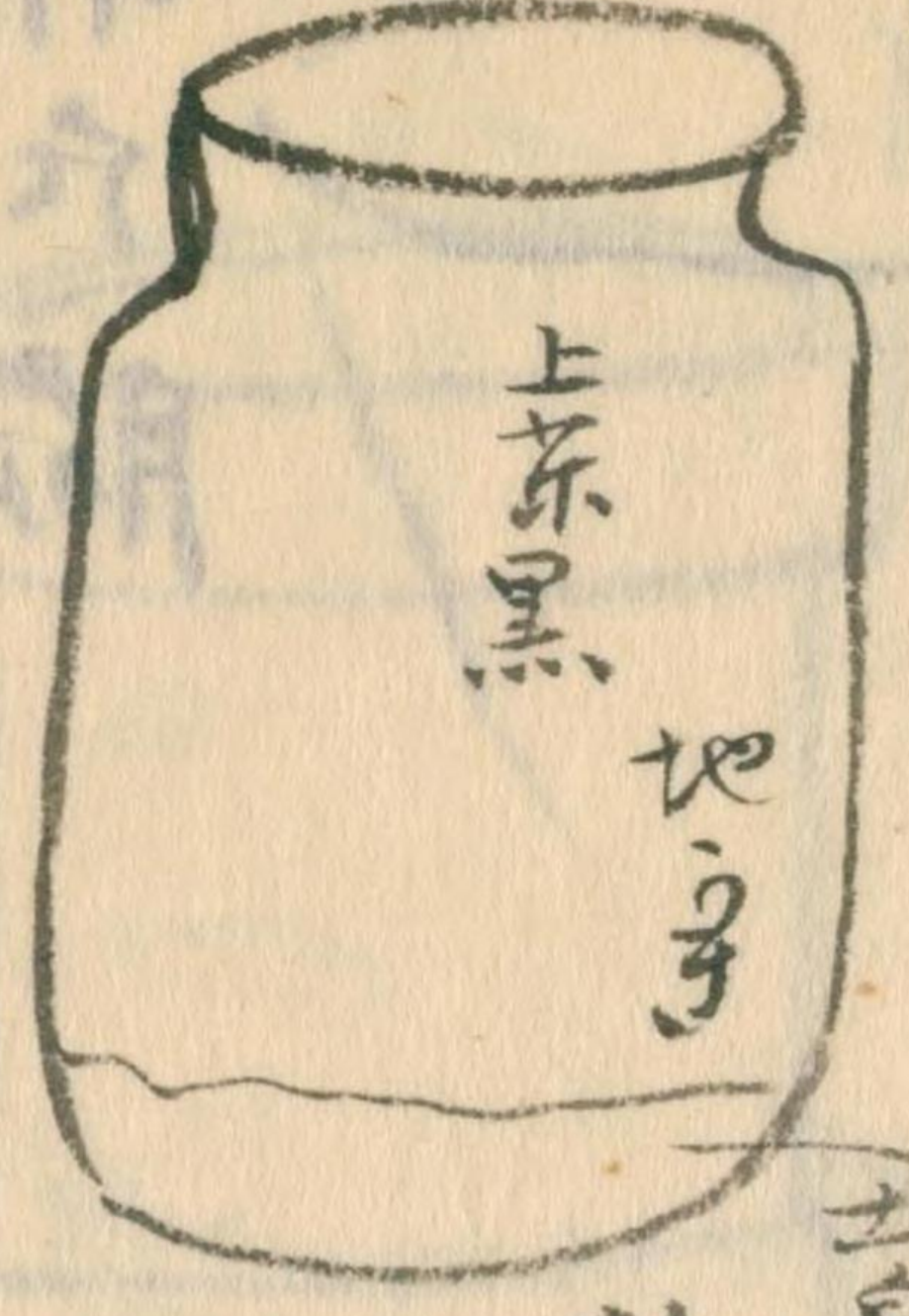
南蛮



呉洲水指



古渉仁



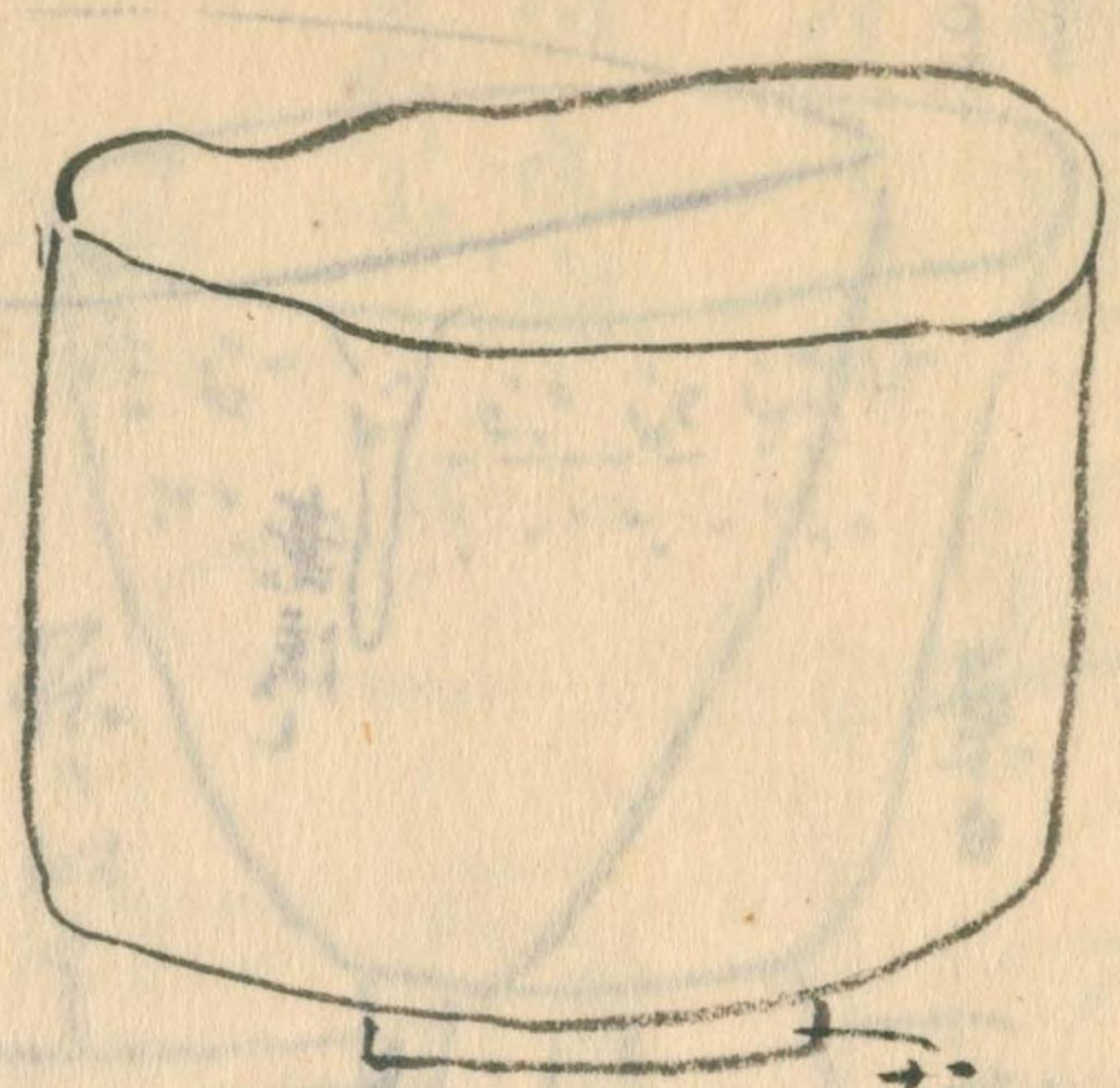
上茶黒

地多

土白荒

薬切

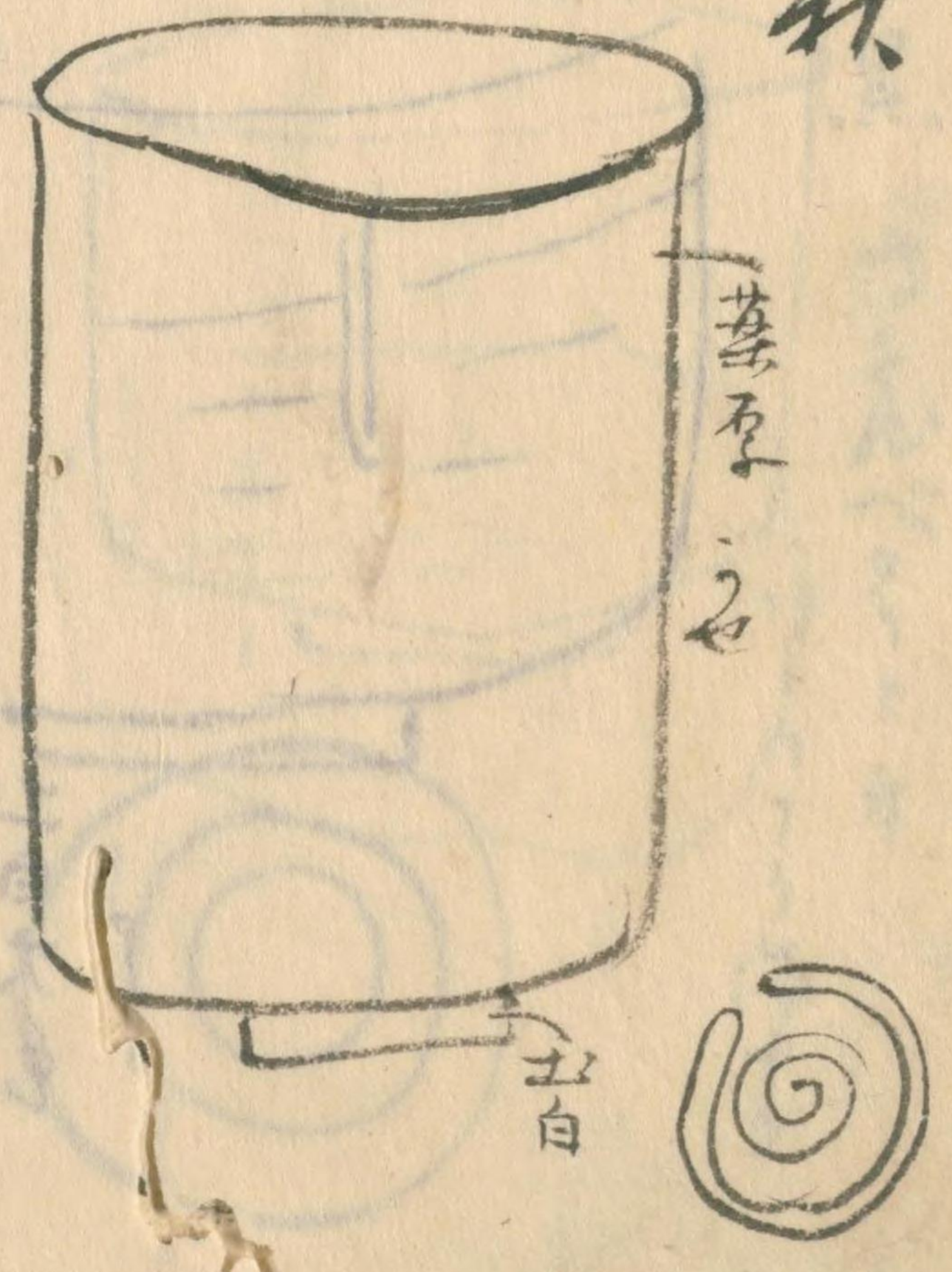
玄賓



土白大毛

古

萩

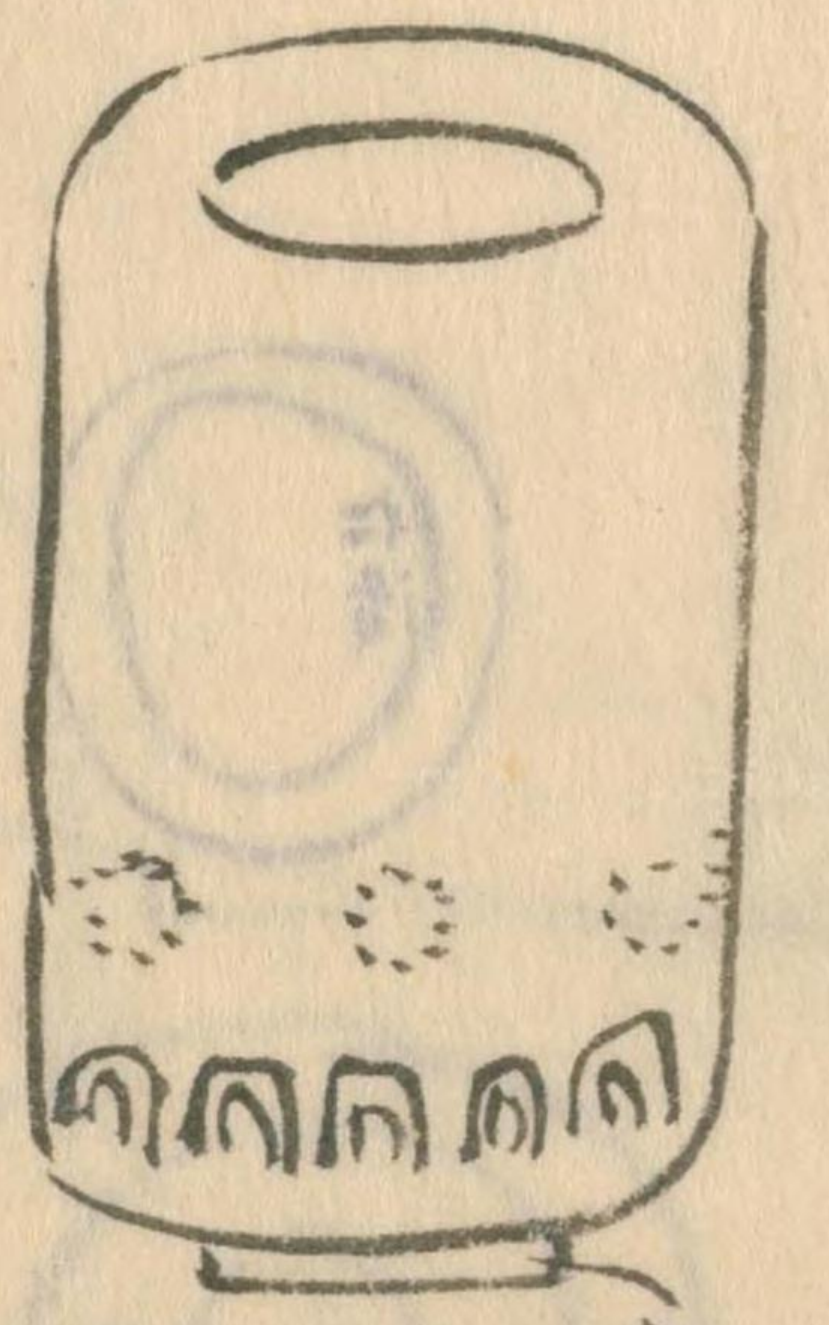


薬厚

ニ石

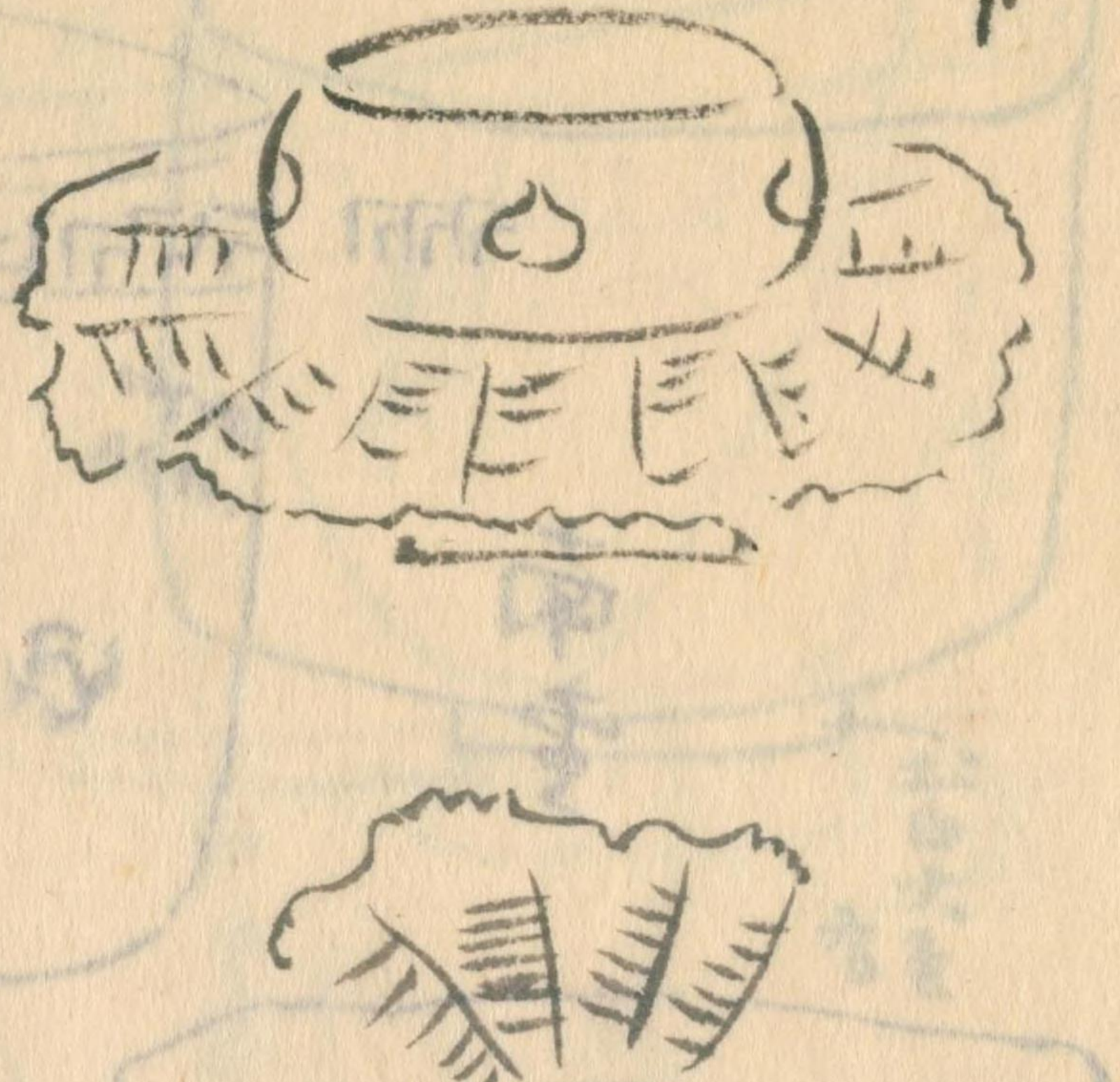
土白

御本雲鶴

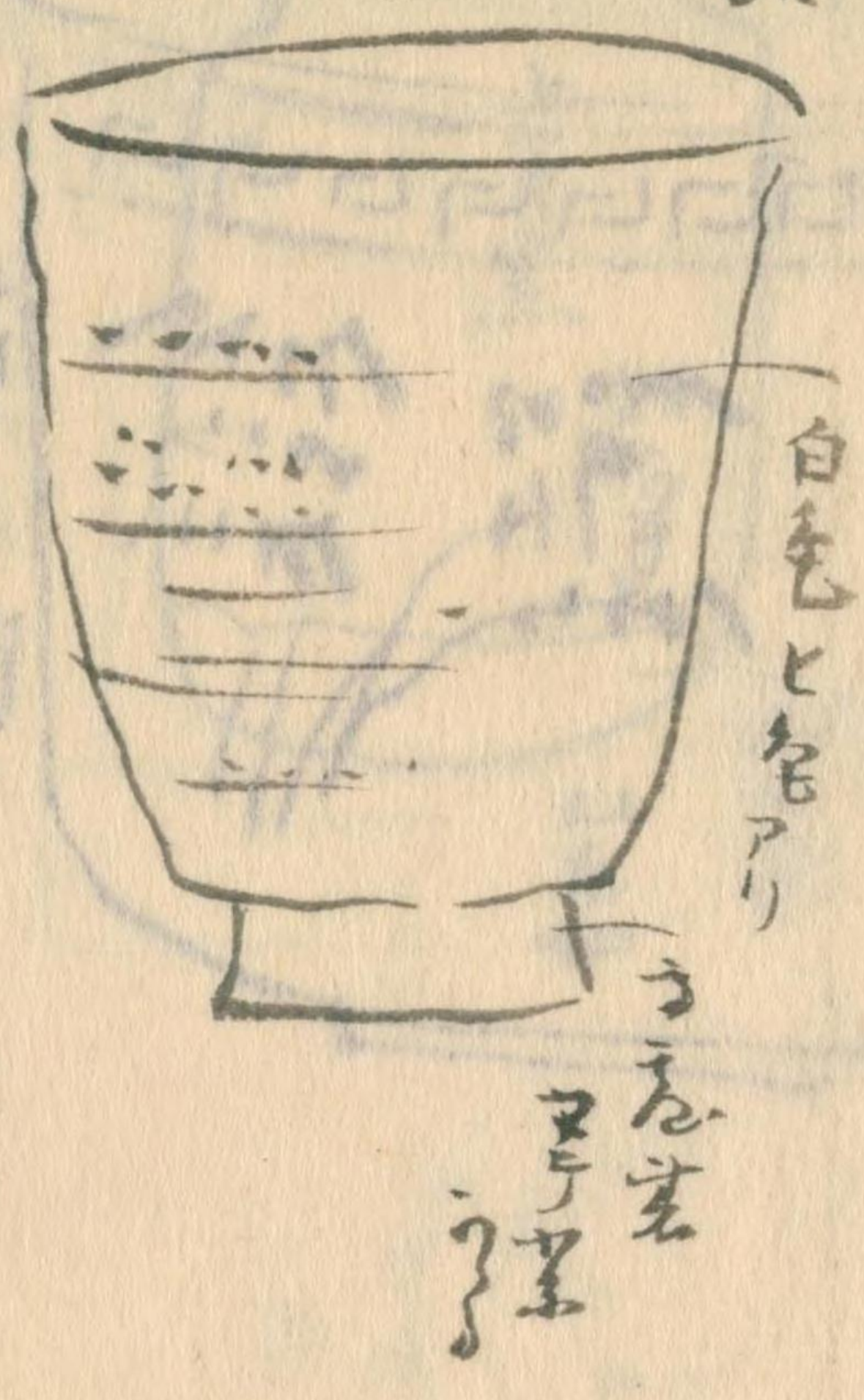


土赤

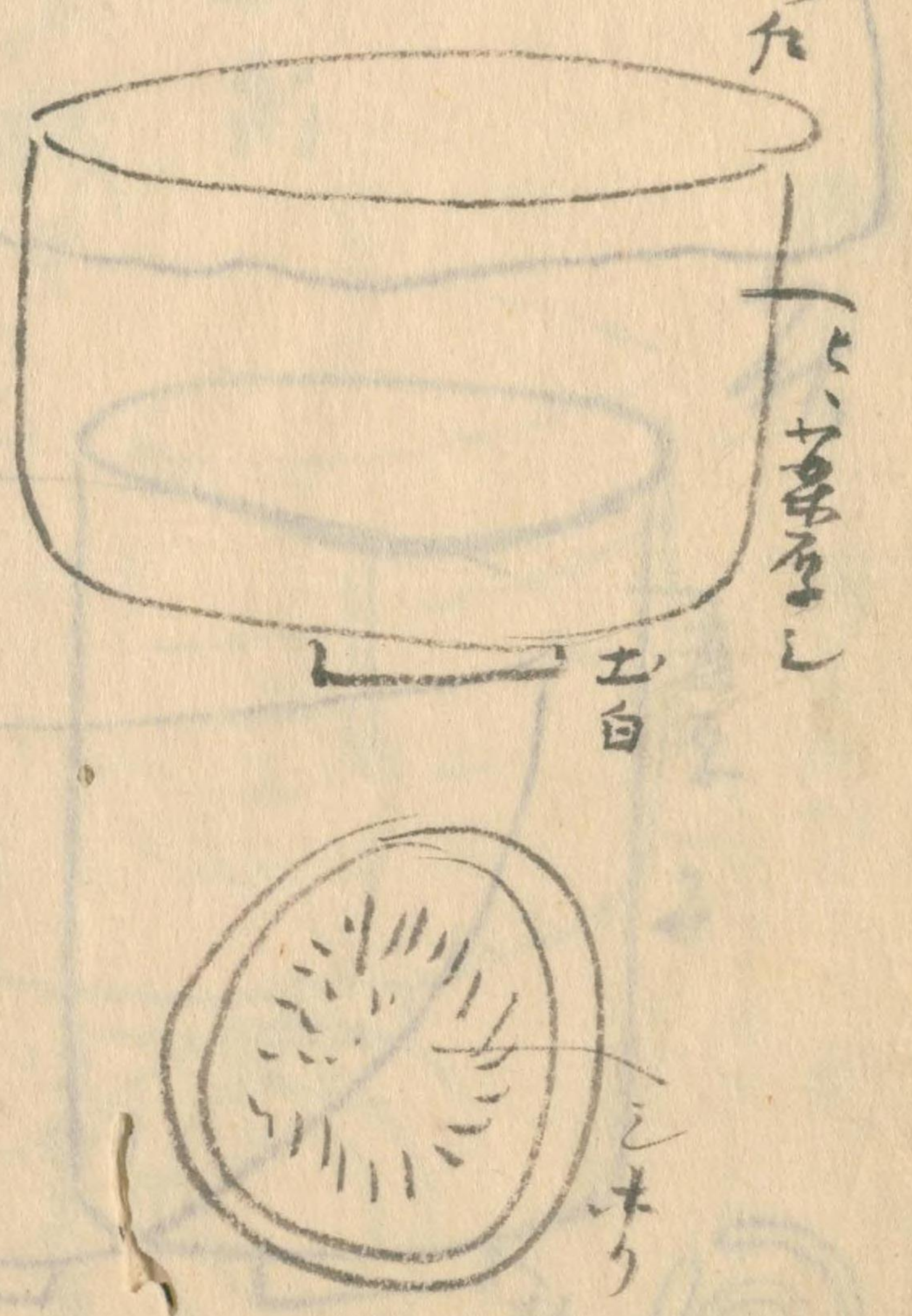
キセト



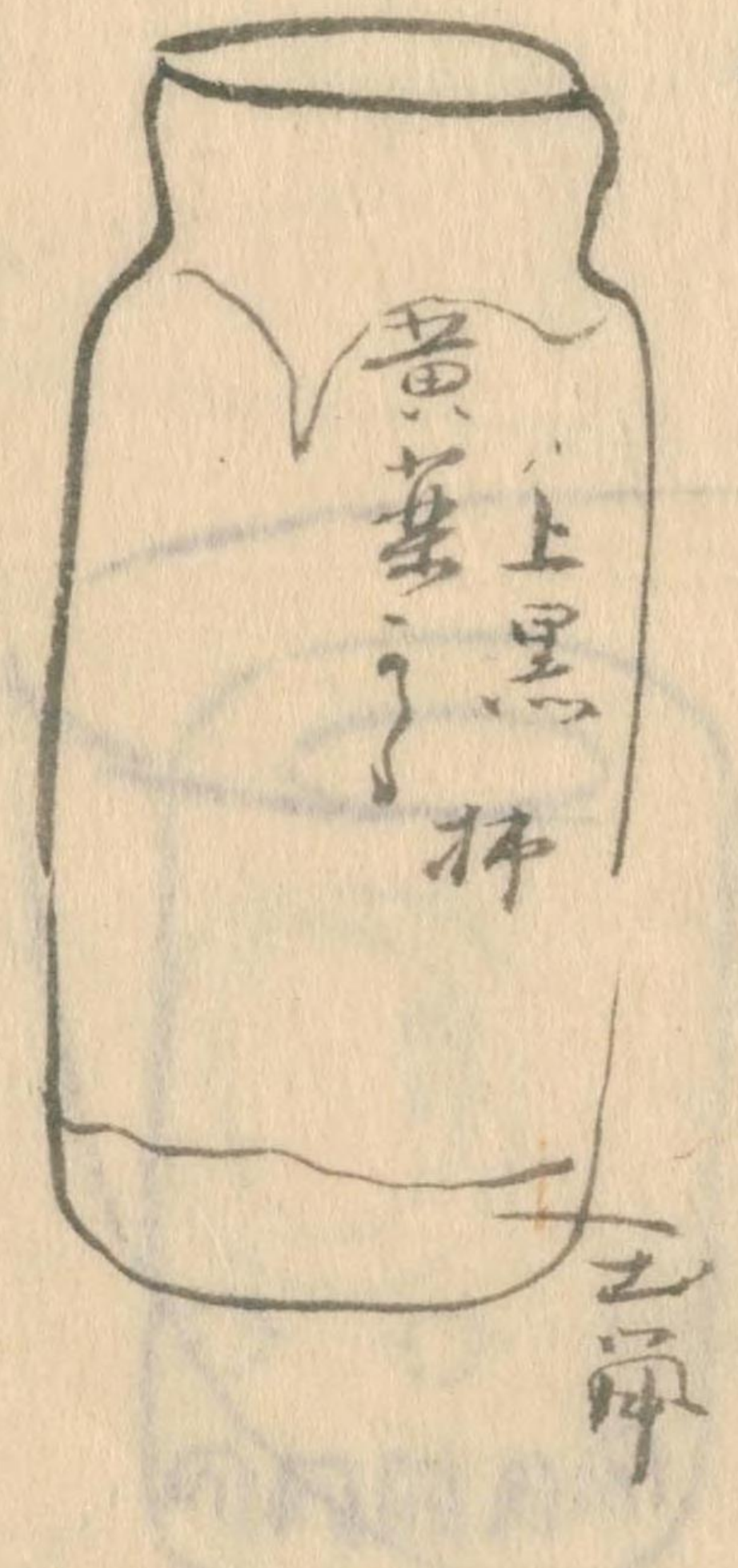
呉器


白毛と色アリ
土荒
薬うり

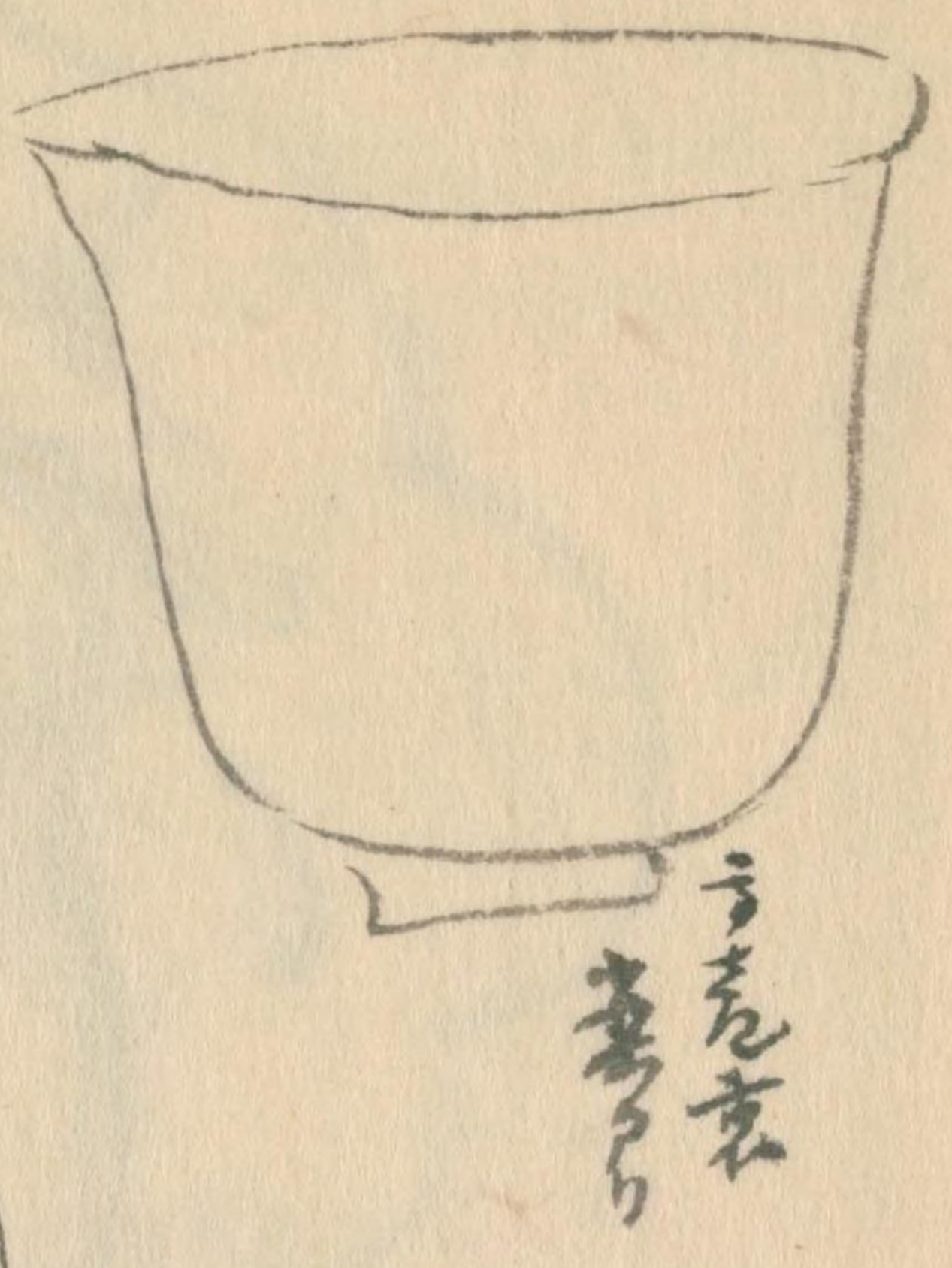
黄瀬戸



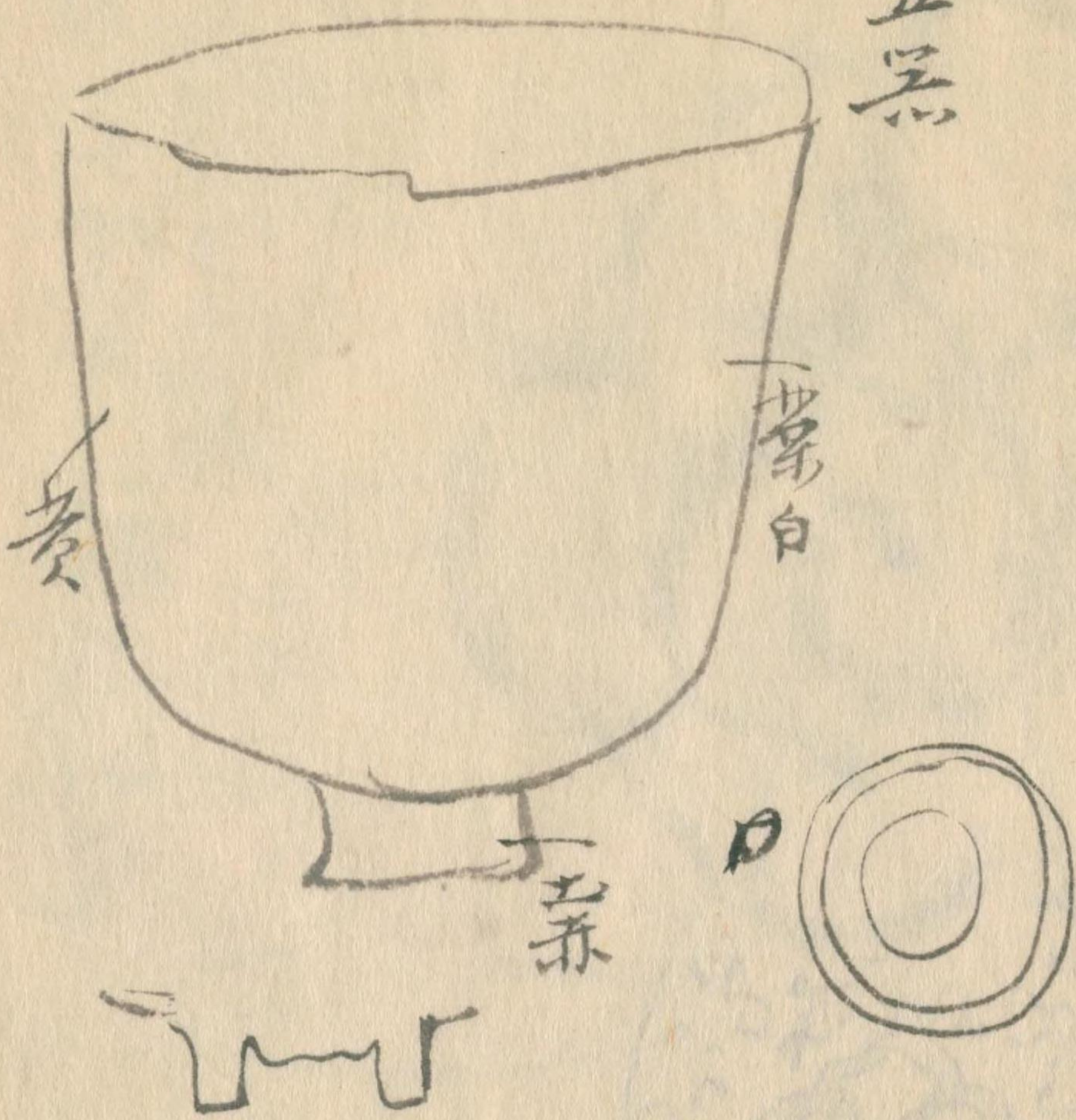
薩摩



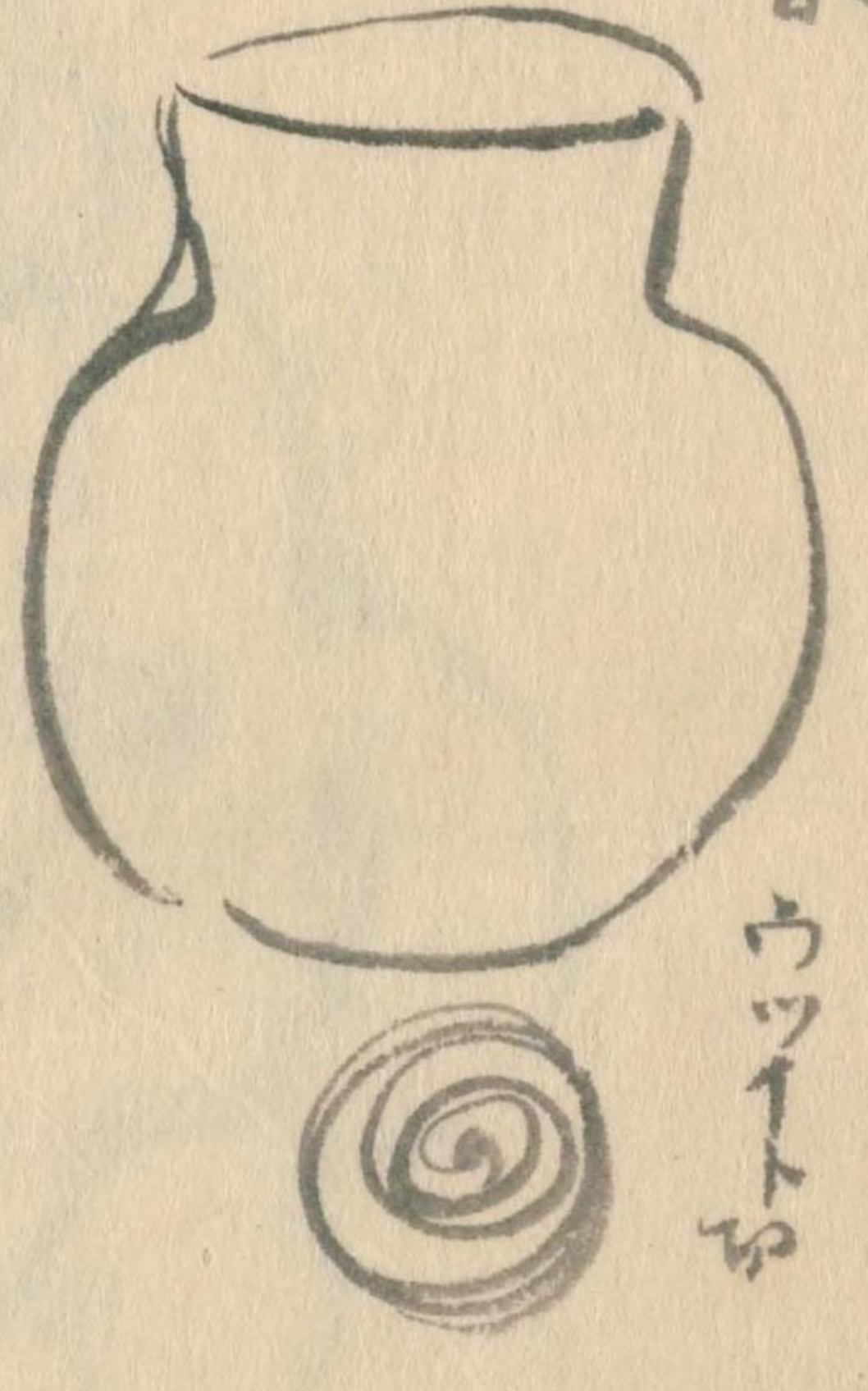
黄イラボ



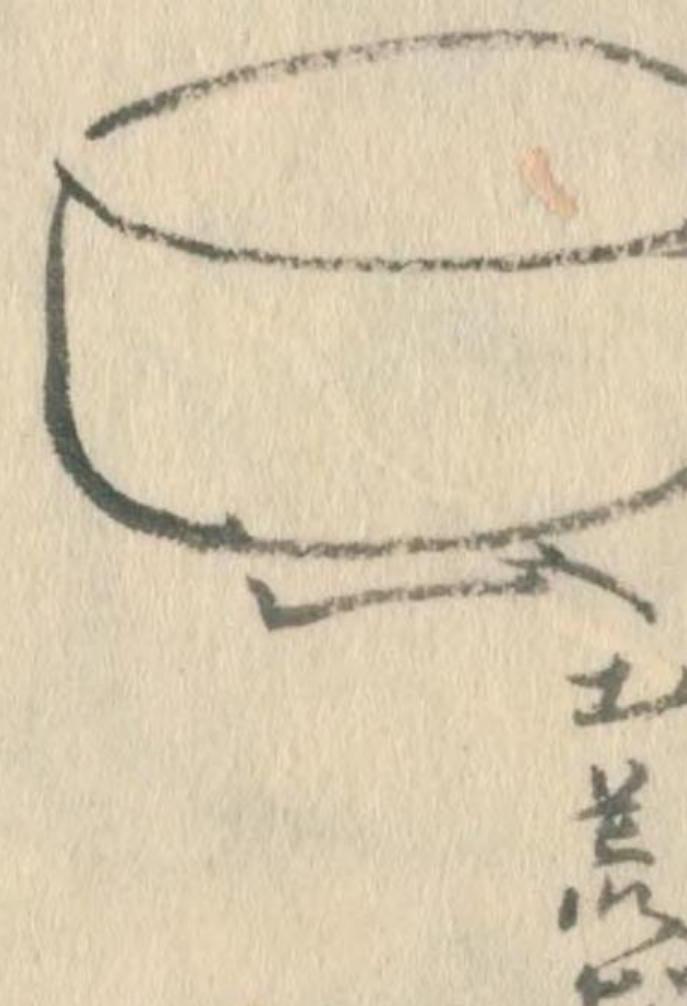
尼五器



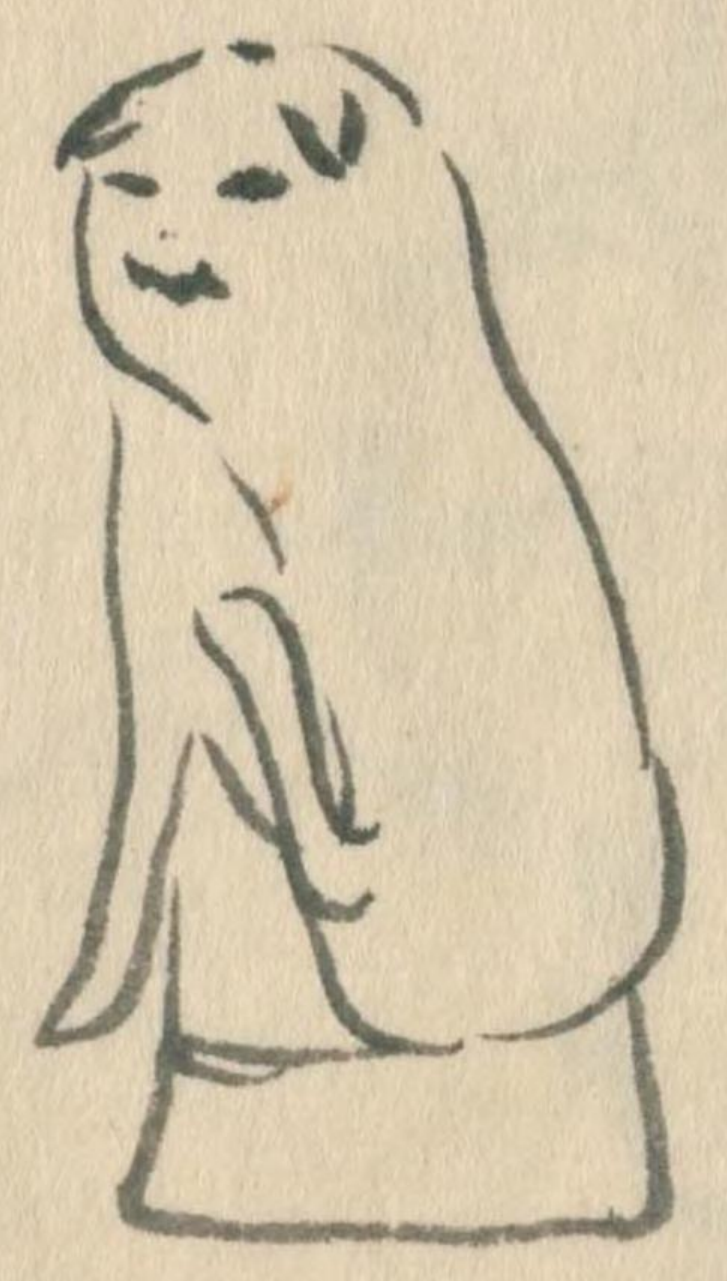
唐物

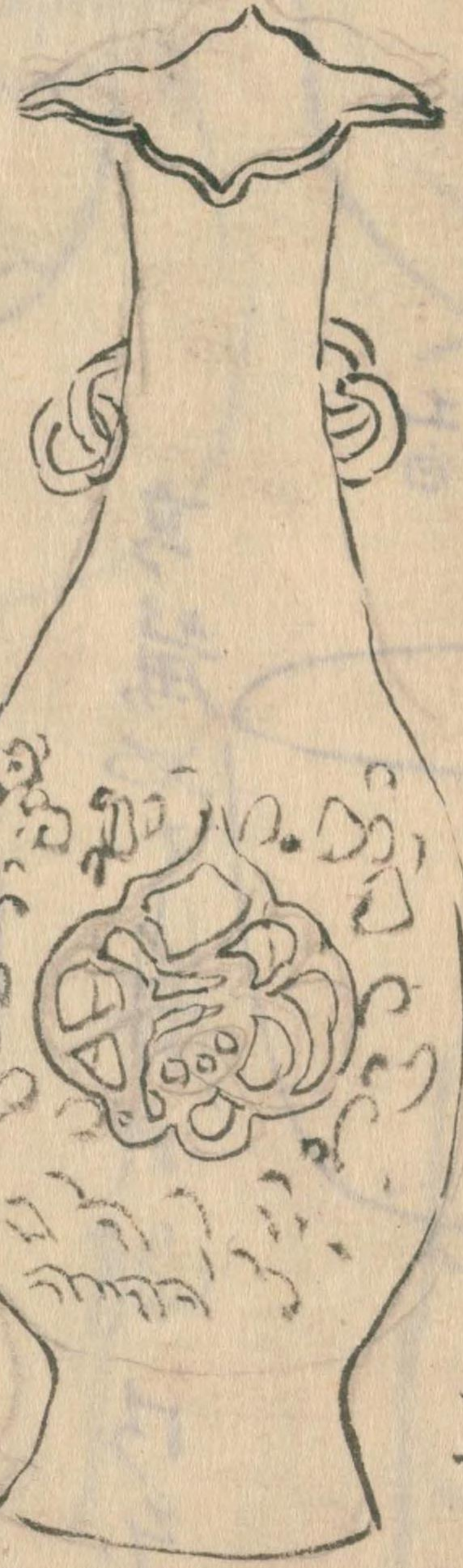


キセト

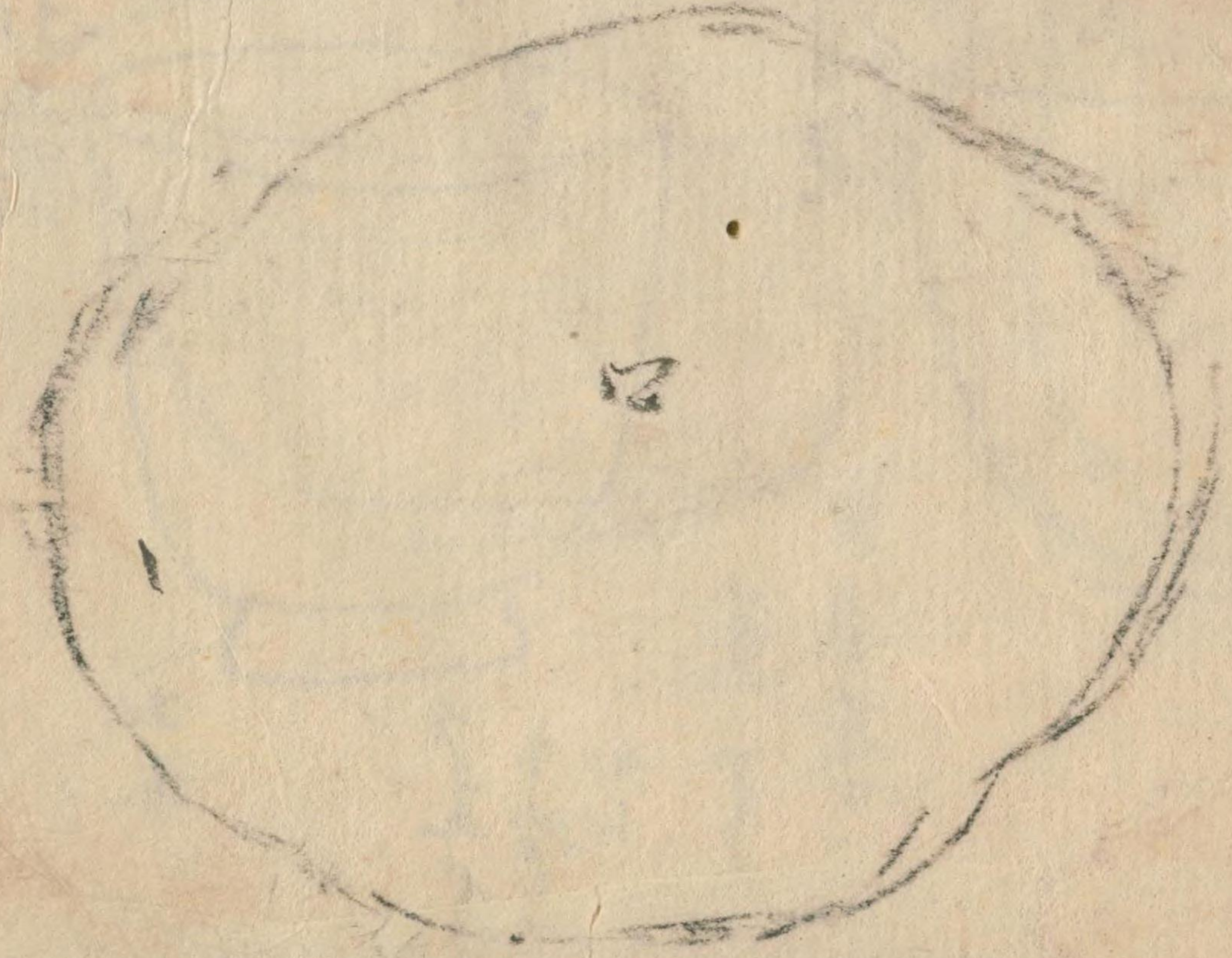


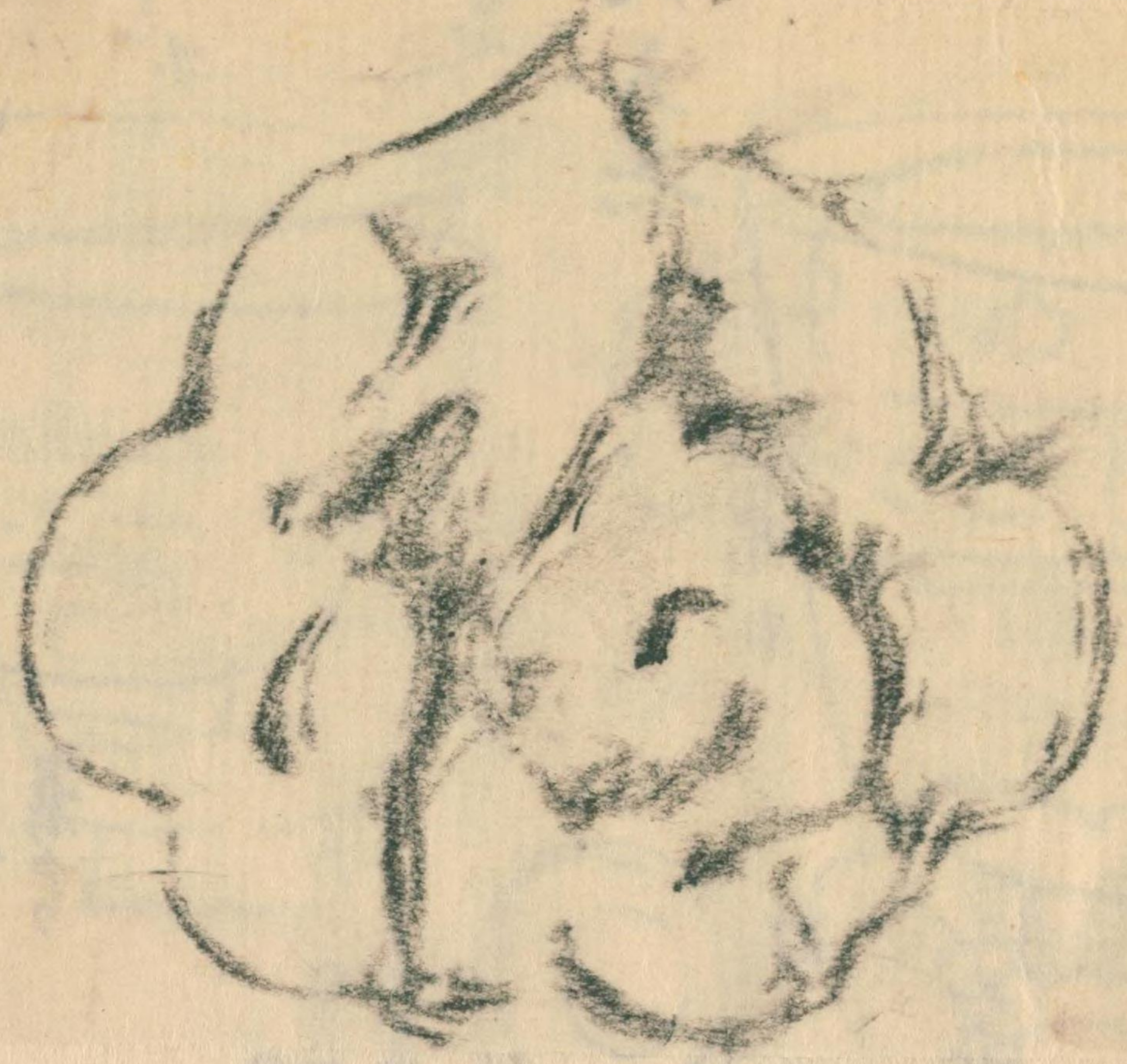
修ち麻

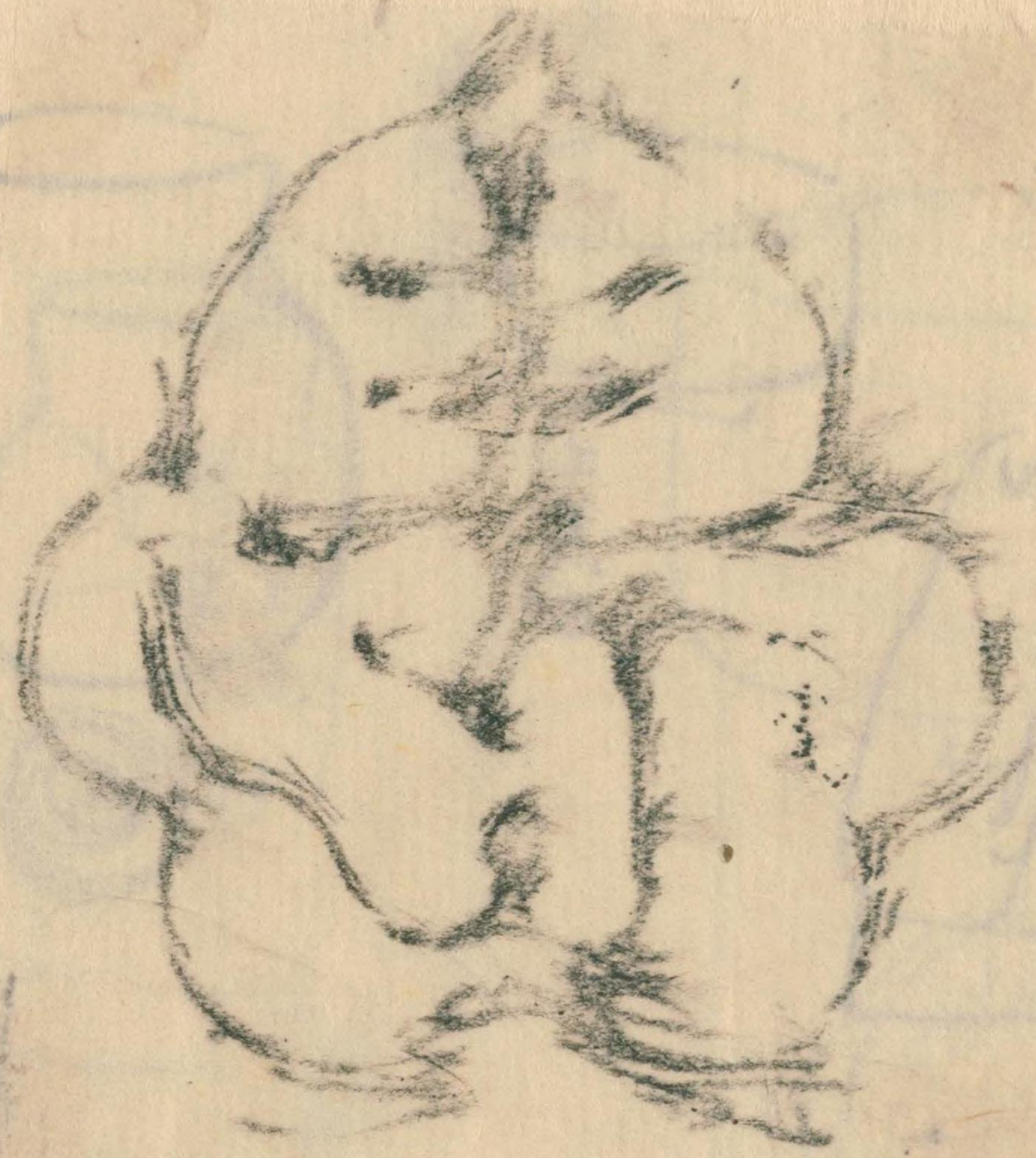




丈七寸ツト
差渡三寸一ト

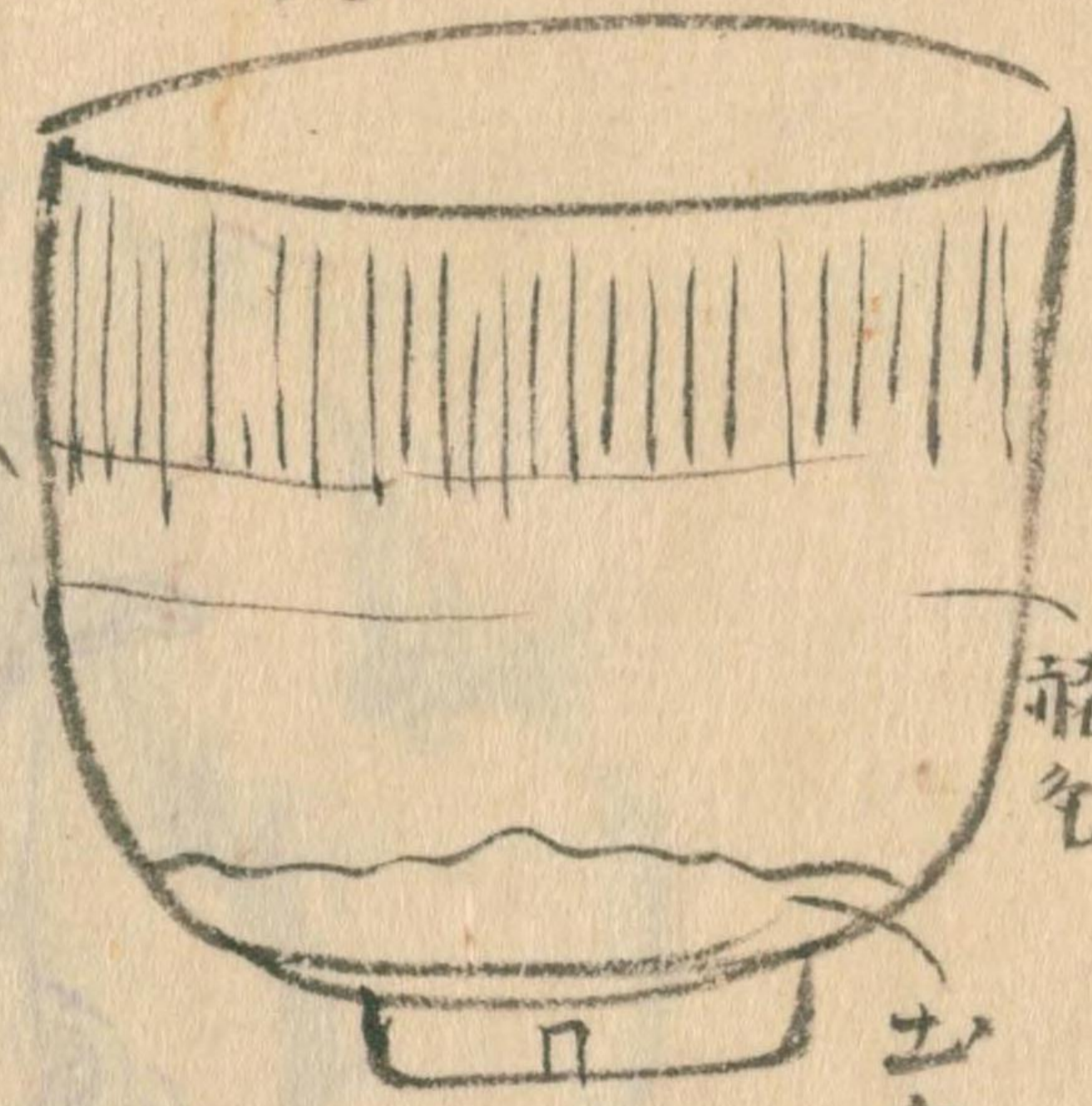




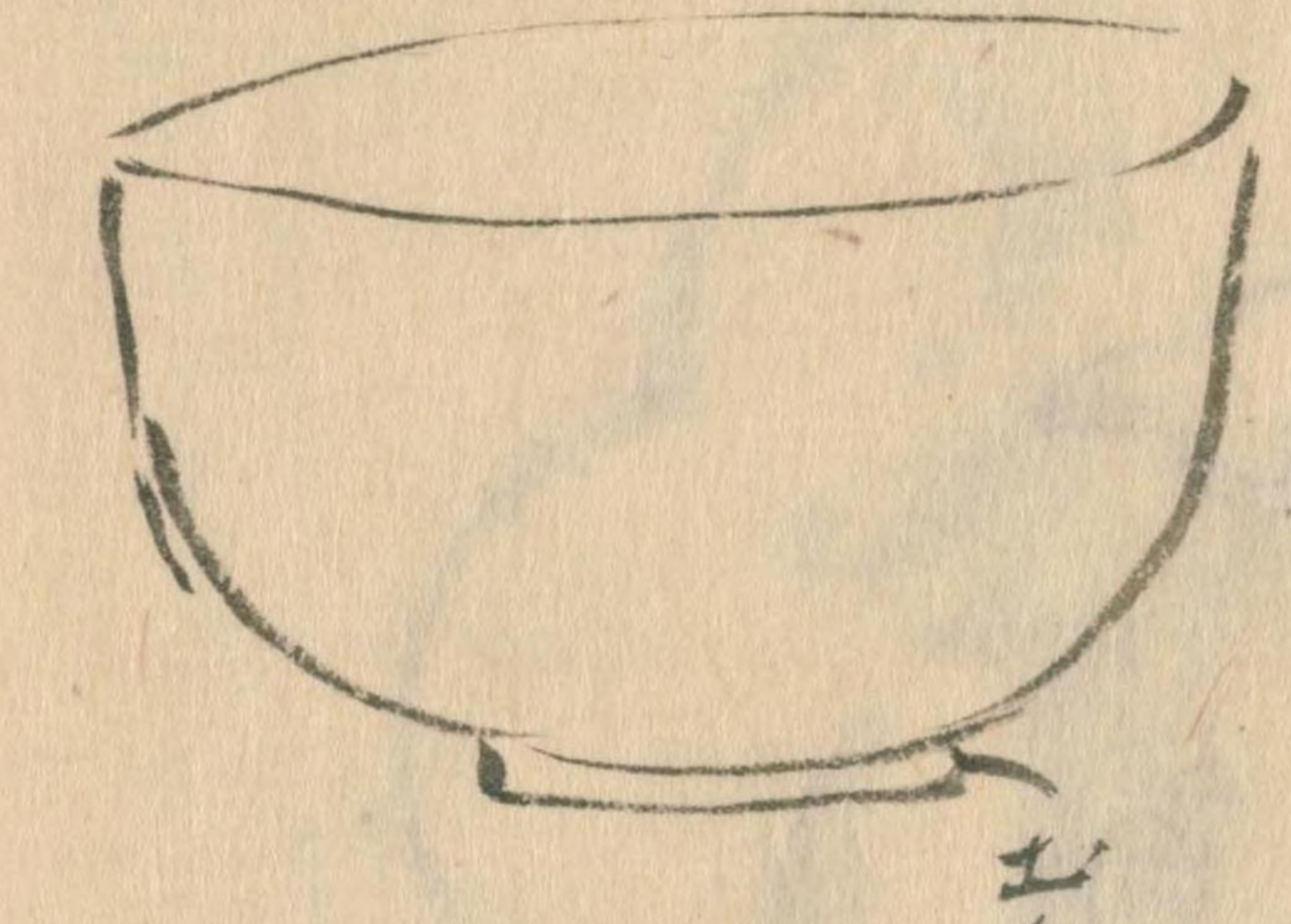


三月三十日福井所宅

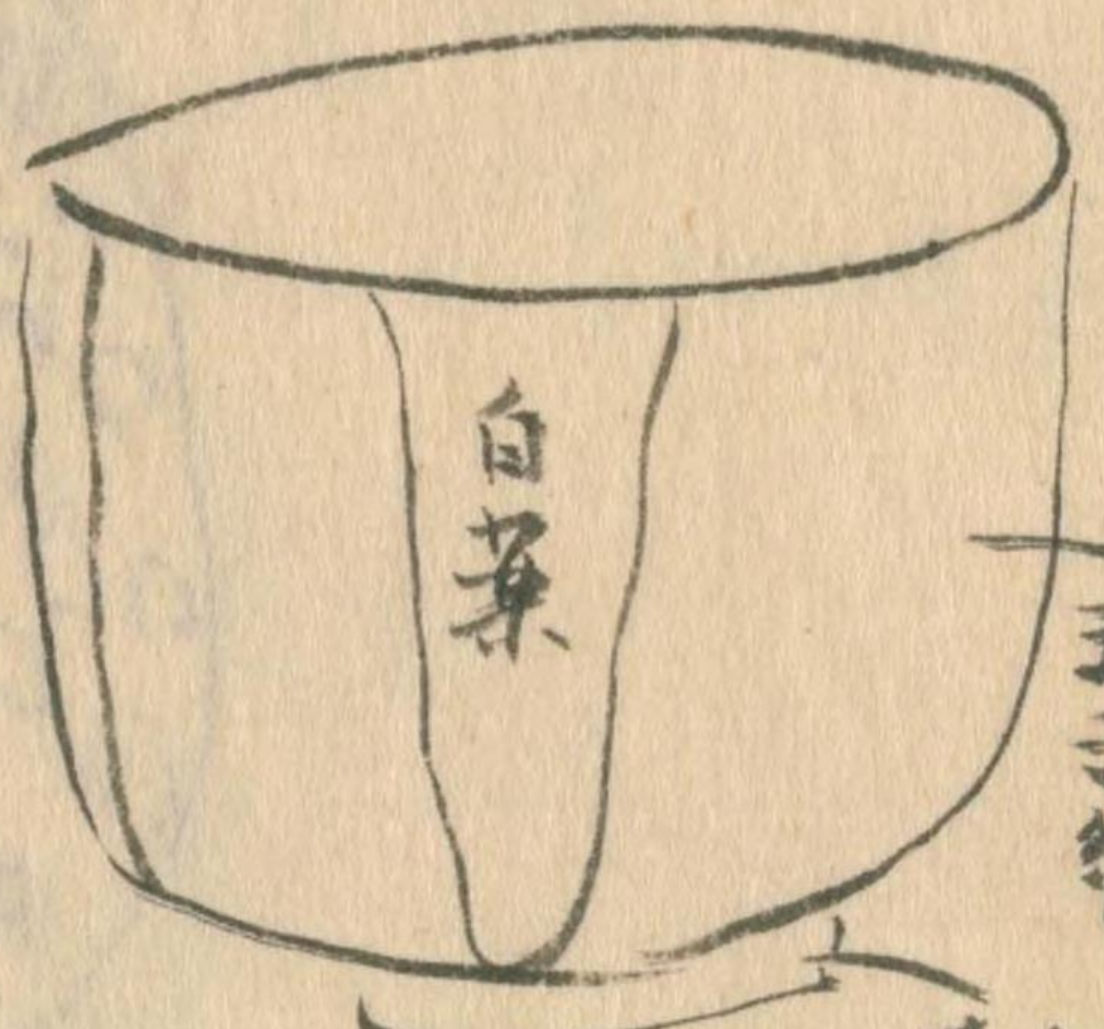
御本みしま


ヘラメ
釉气
土白

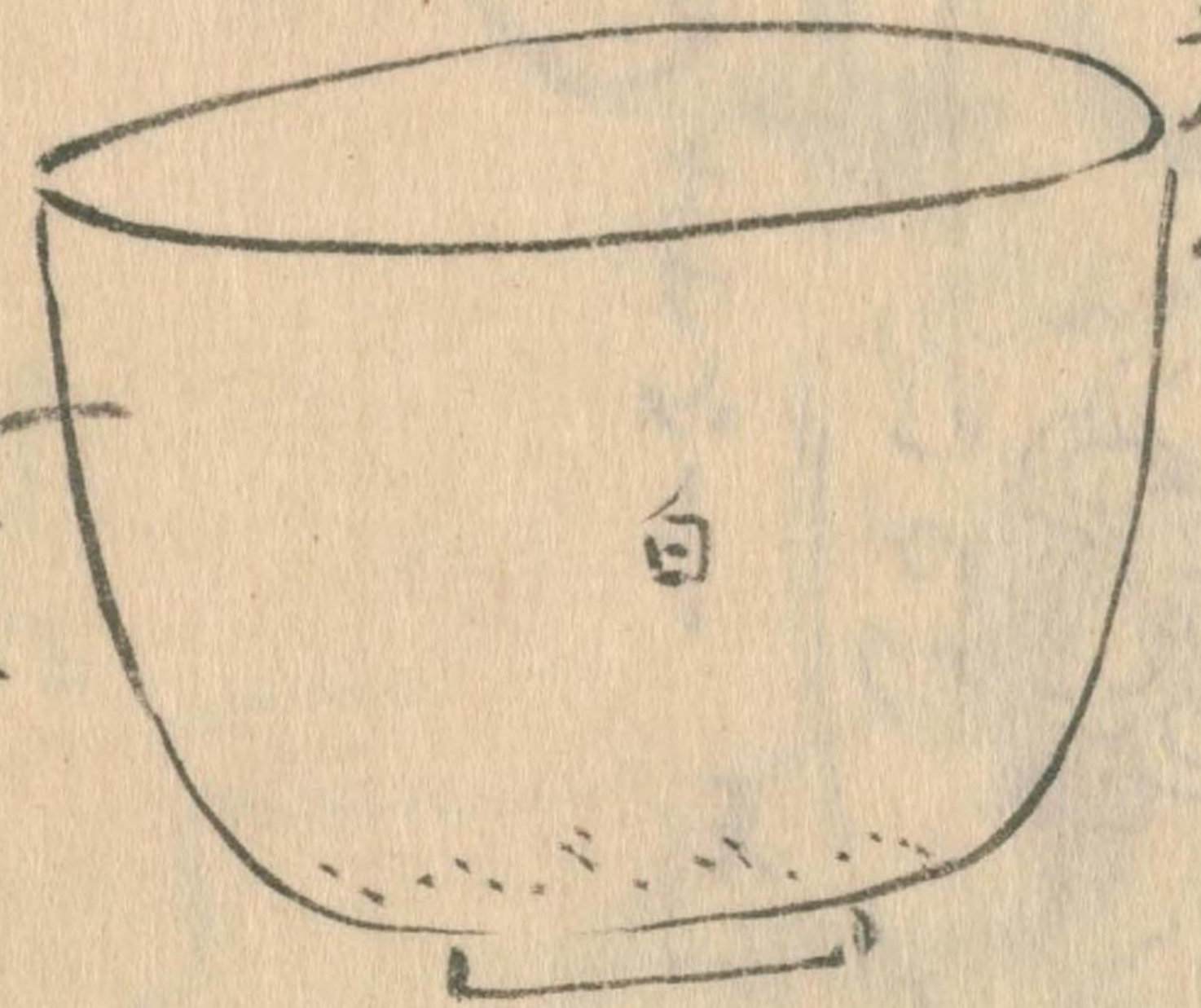
雲鶴青磁


土白

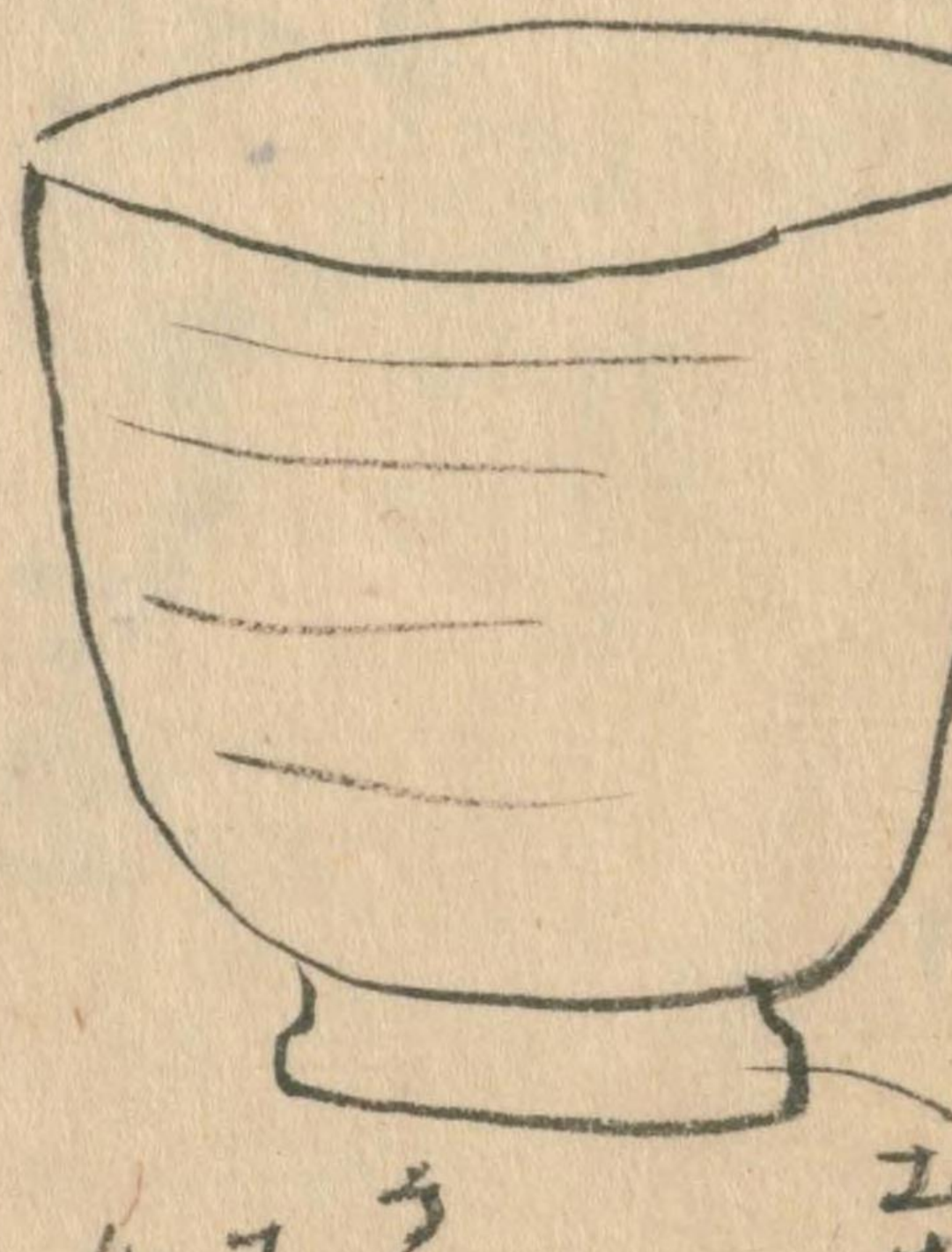
さつま浄佐


白薬
玉子色
土白

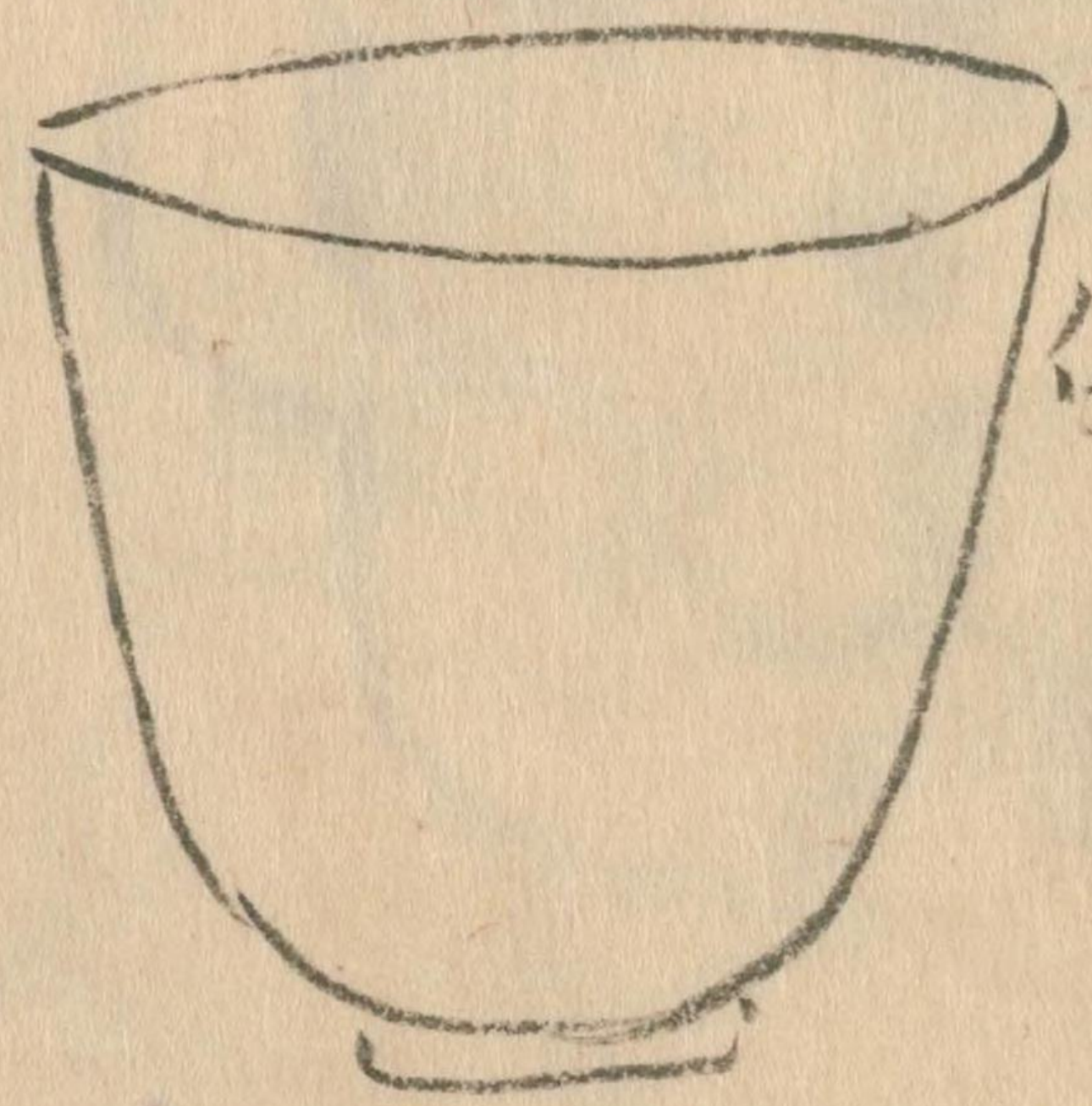
高麗やえふて


白
青み

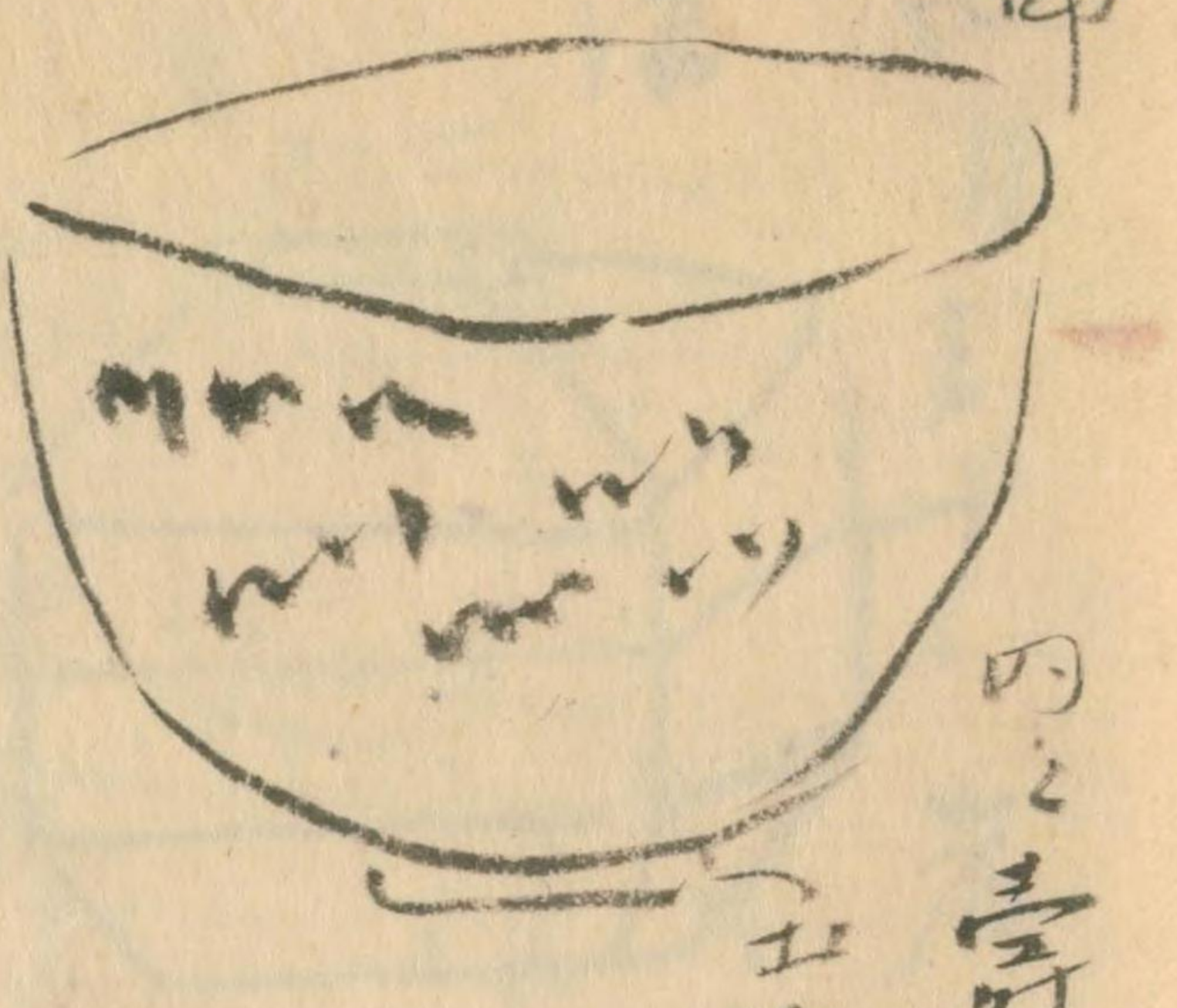
切五器


土赤
うえノ真下摺タル如し

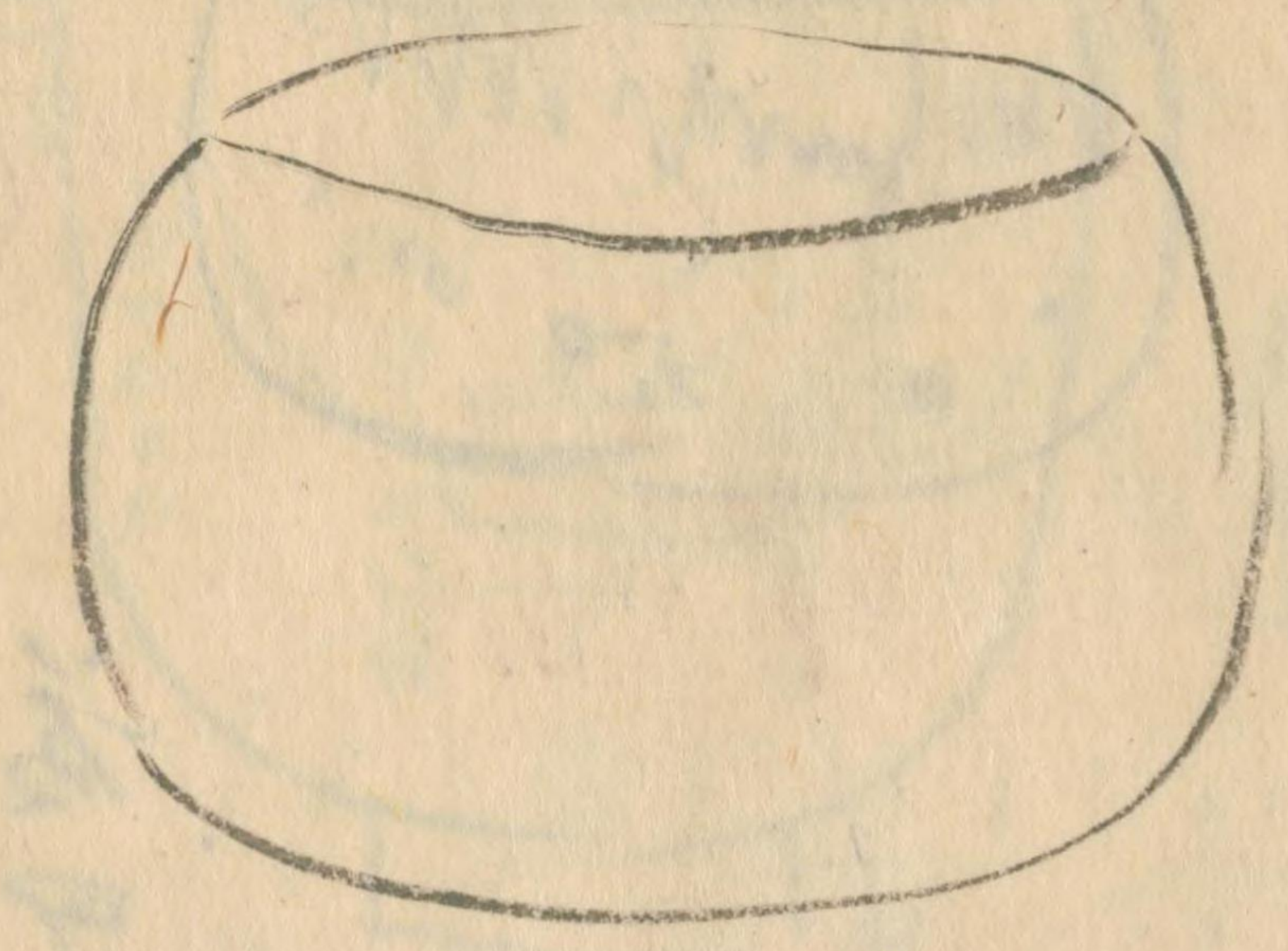
内本ま使



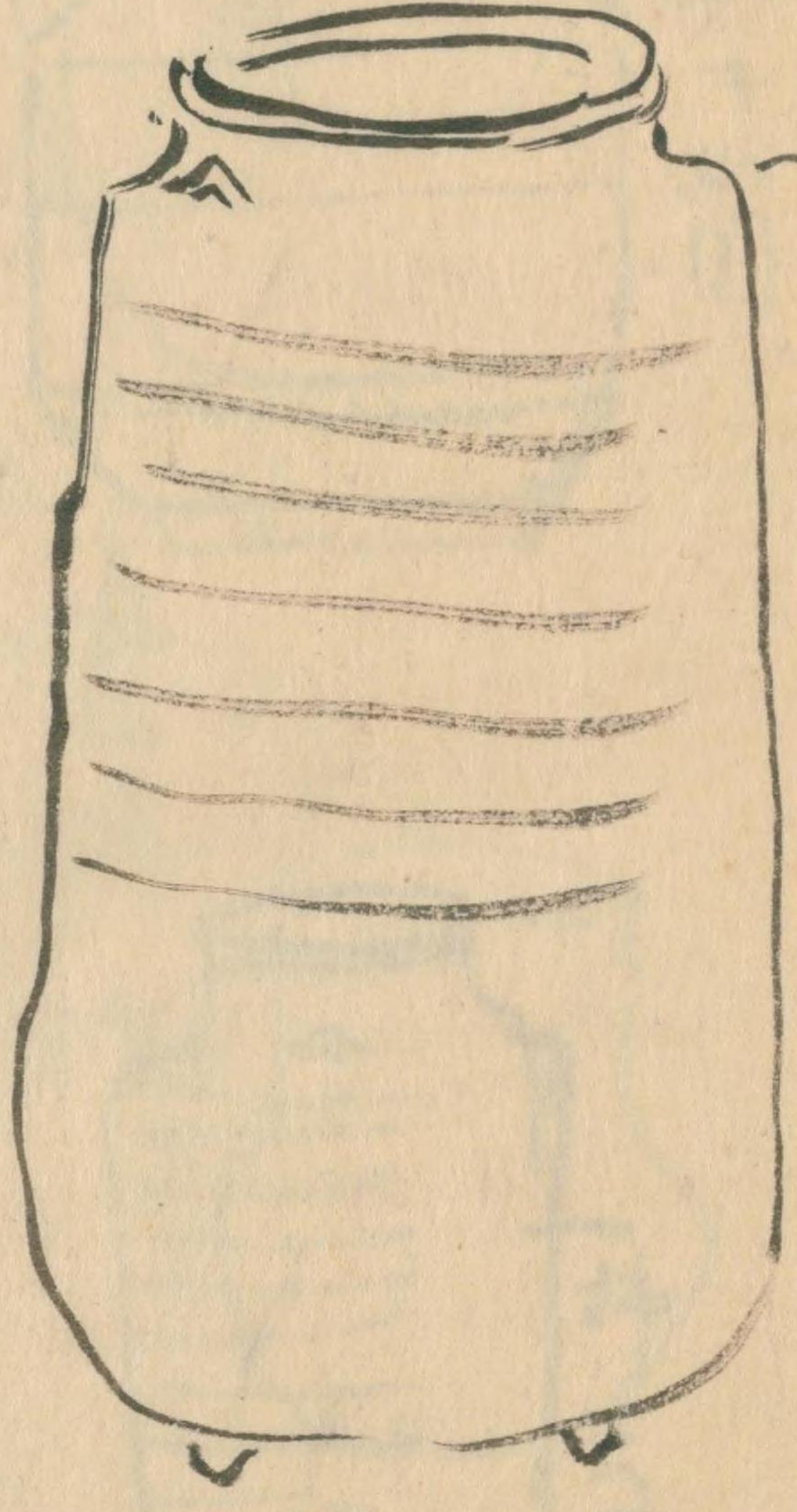
安南


土白
田之寿ノ字アリ

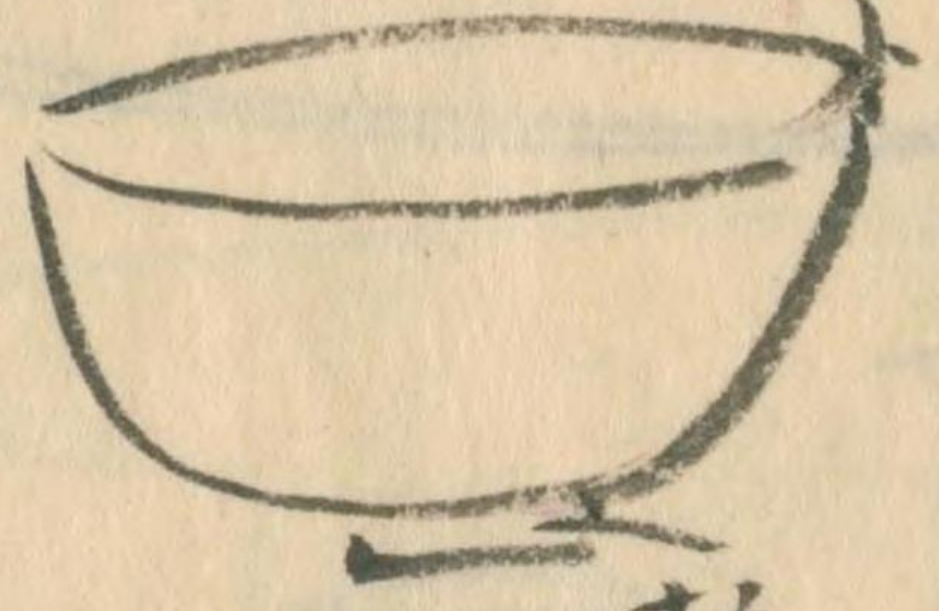
仁清



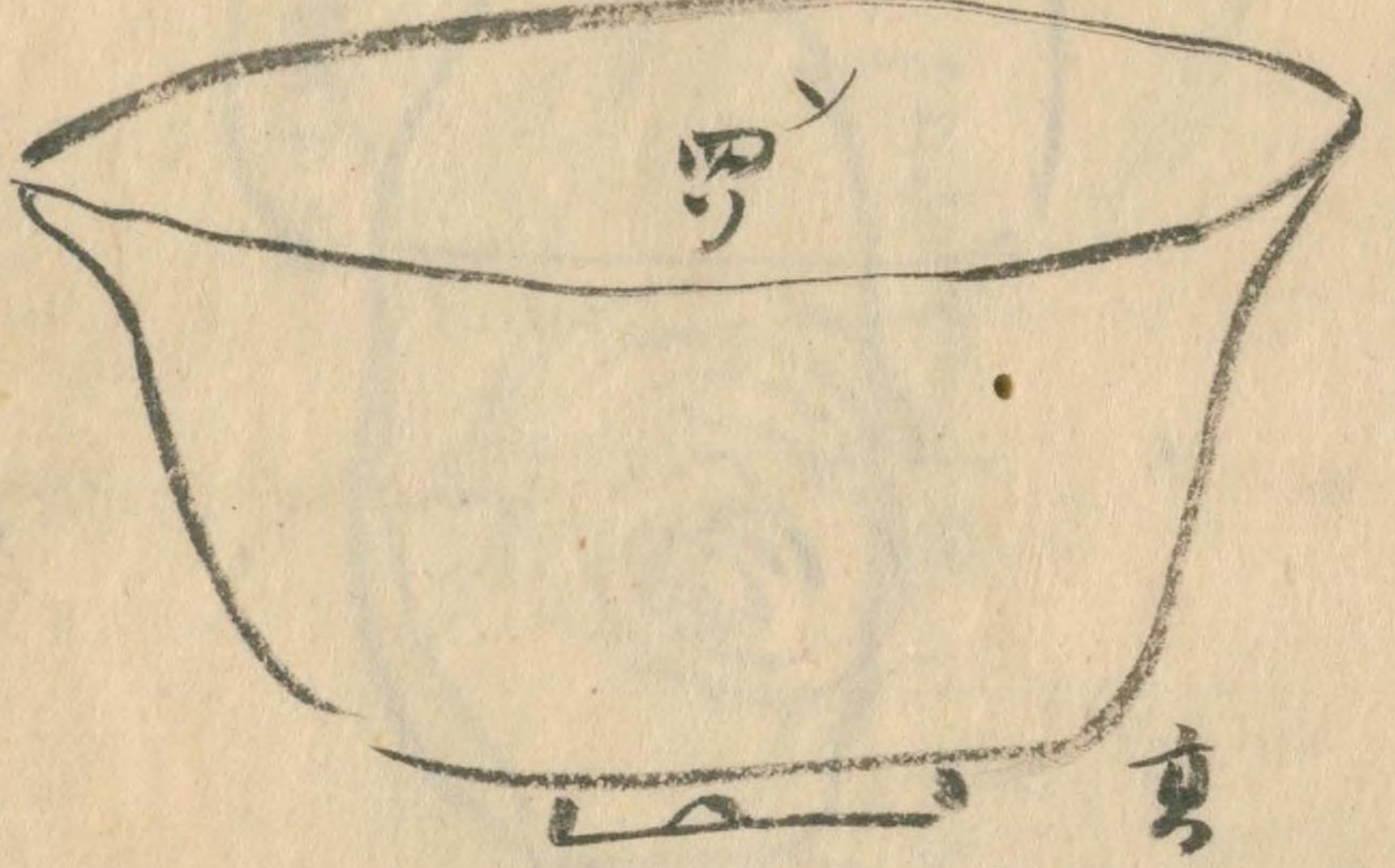
あしべ



キセト

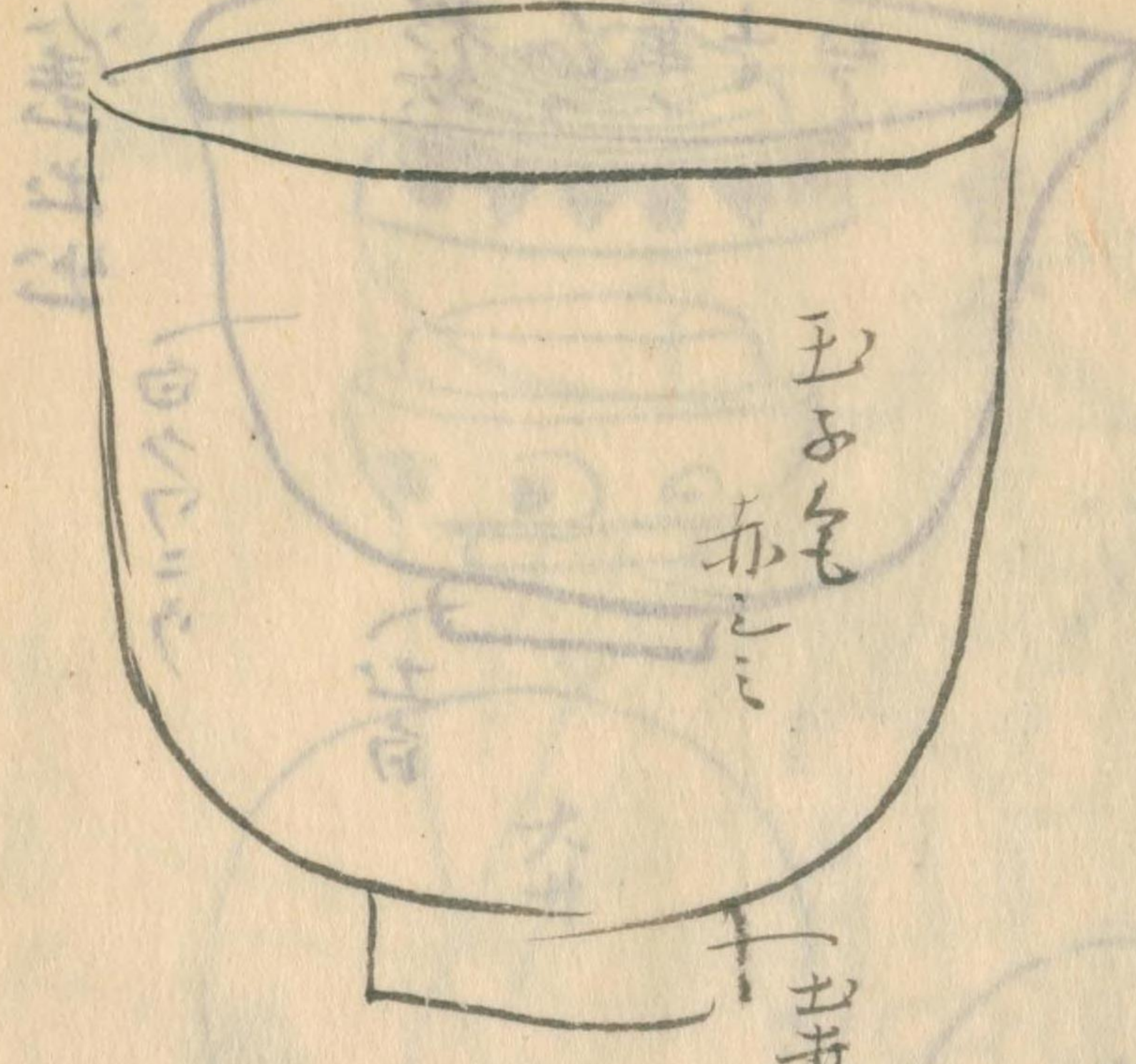

土火色アリ

井戸脇


罒ソ
高台裏アリ薬かゝる

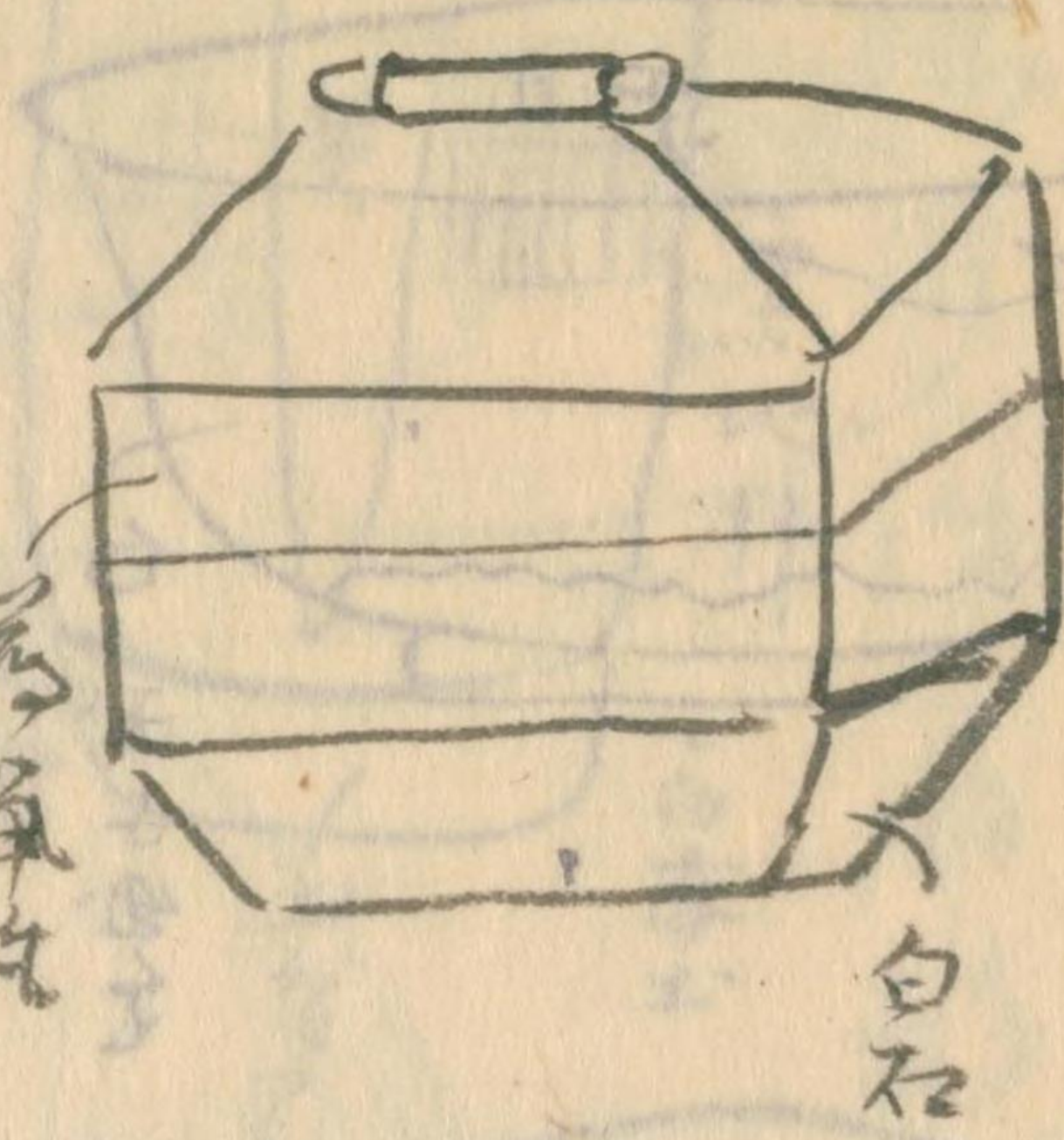
ガラス使用

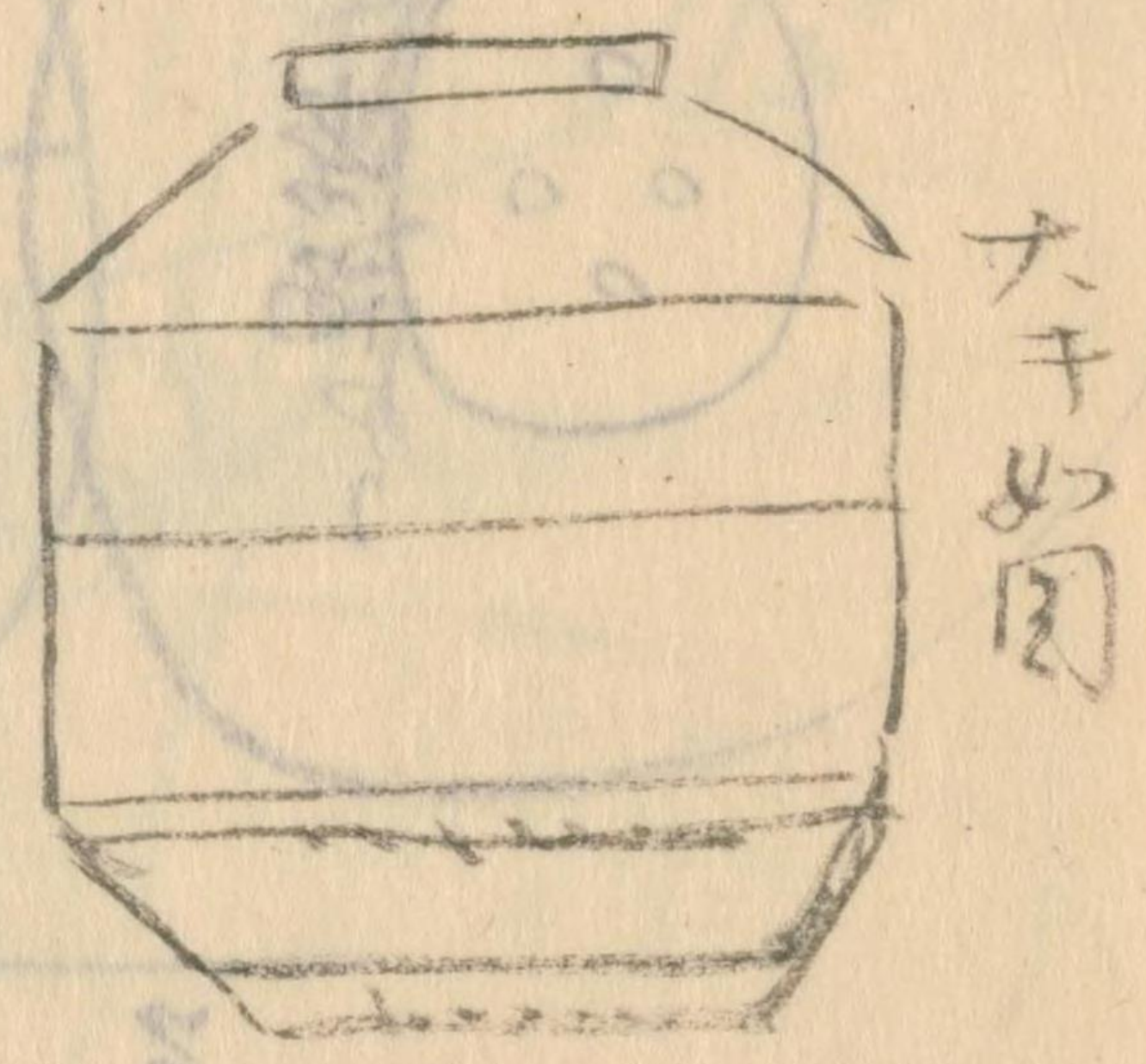
朝日



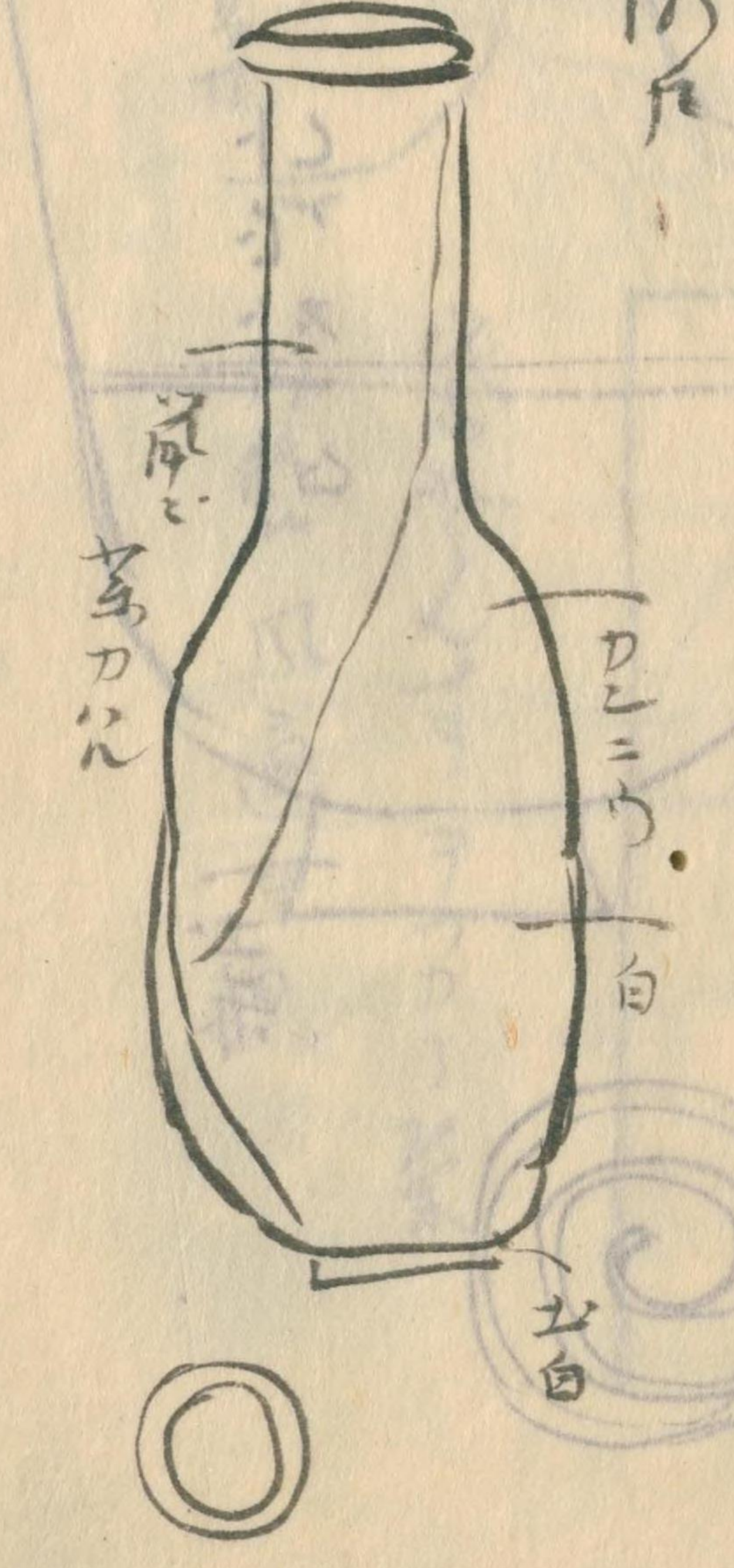
唐津

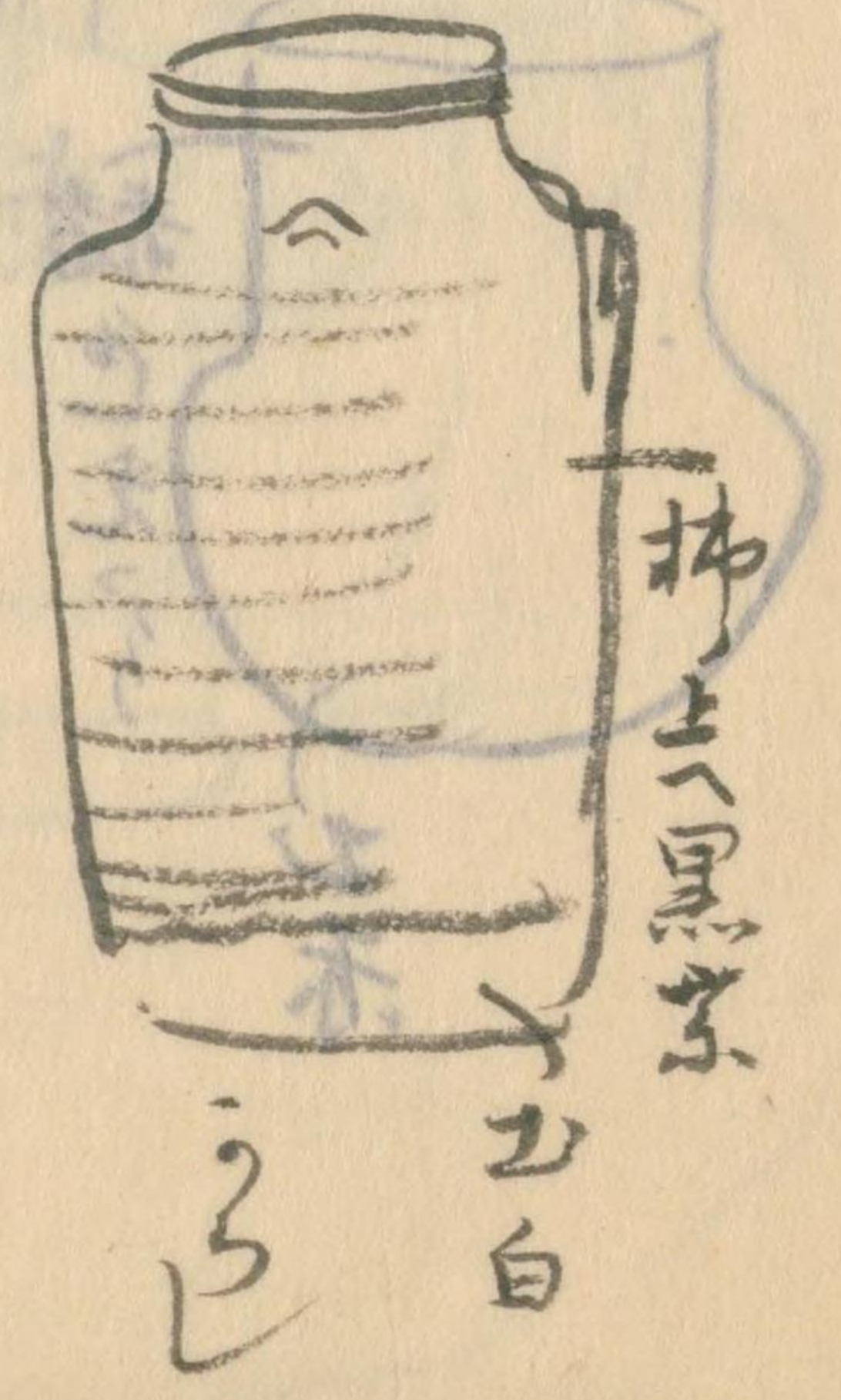
四りミナ、蓋風呂



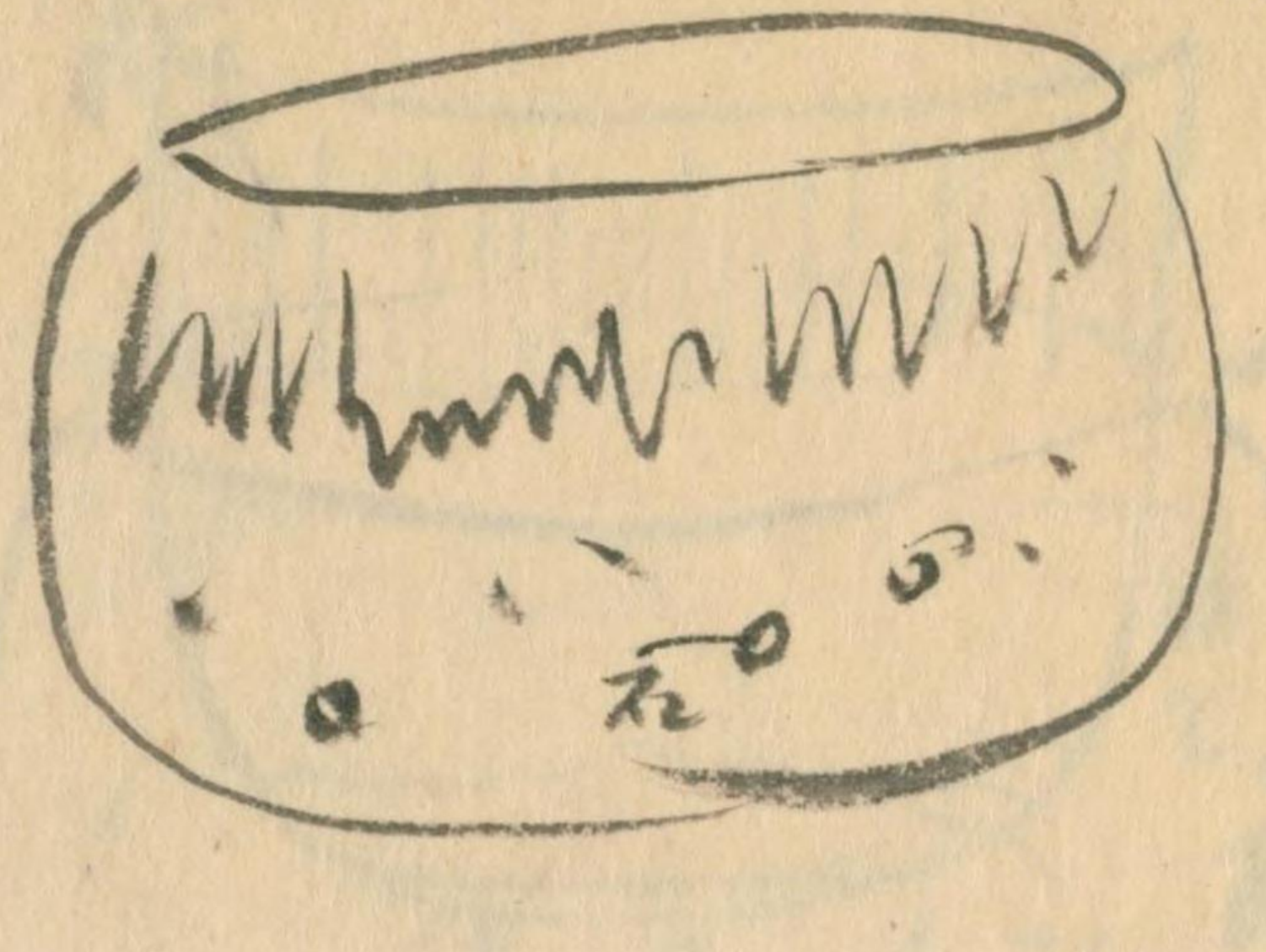


黄瀬戸

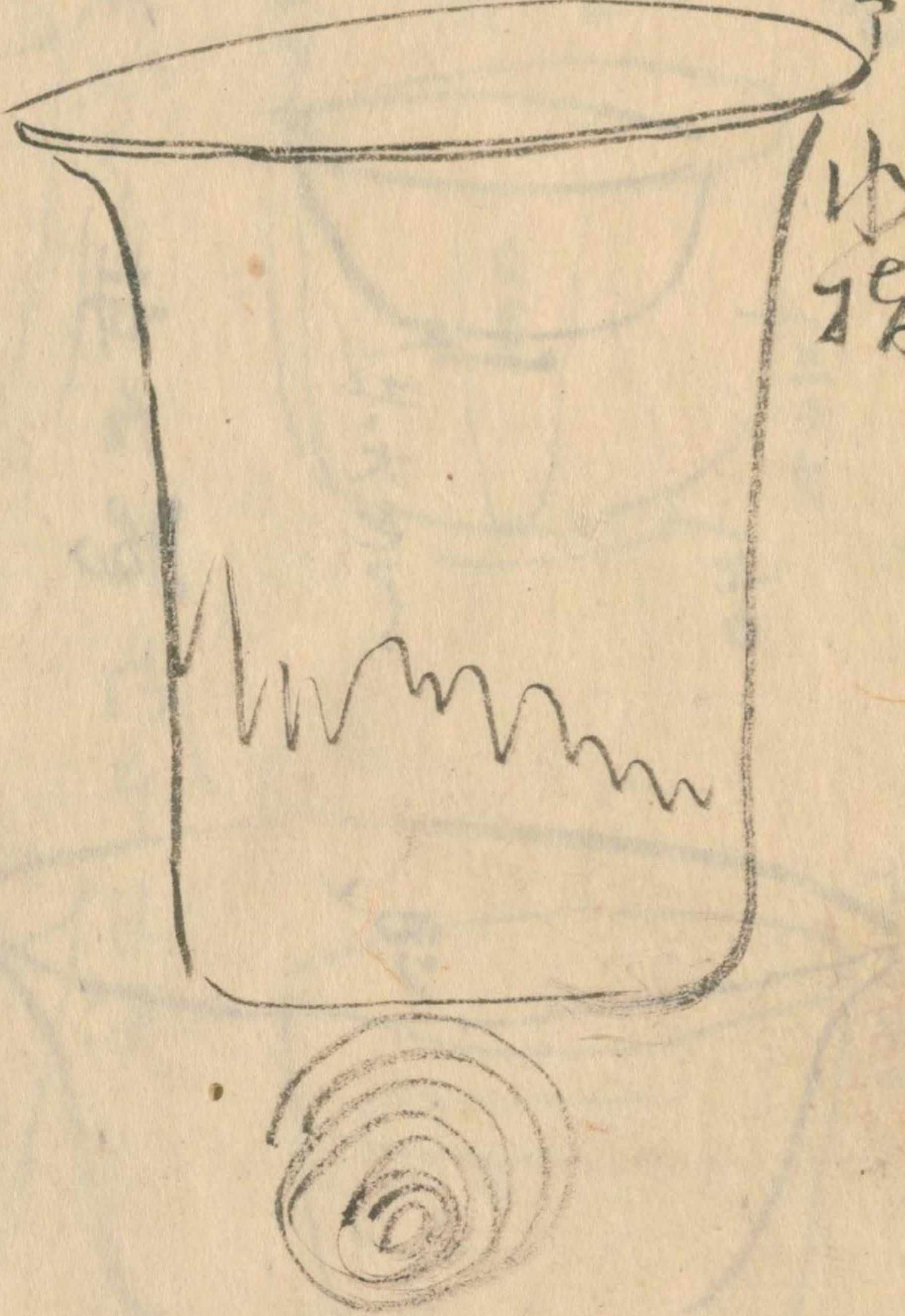

瀬戸
茶カ入
カヒニウ
白
土白



伊賀

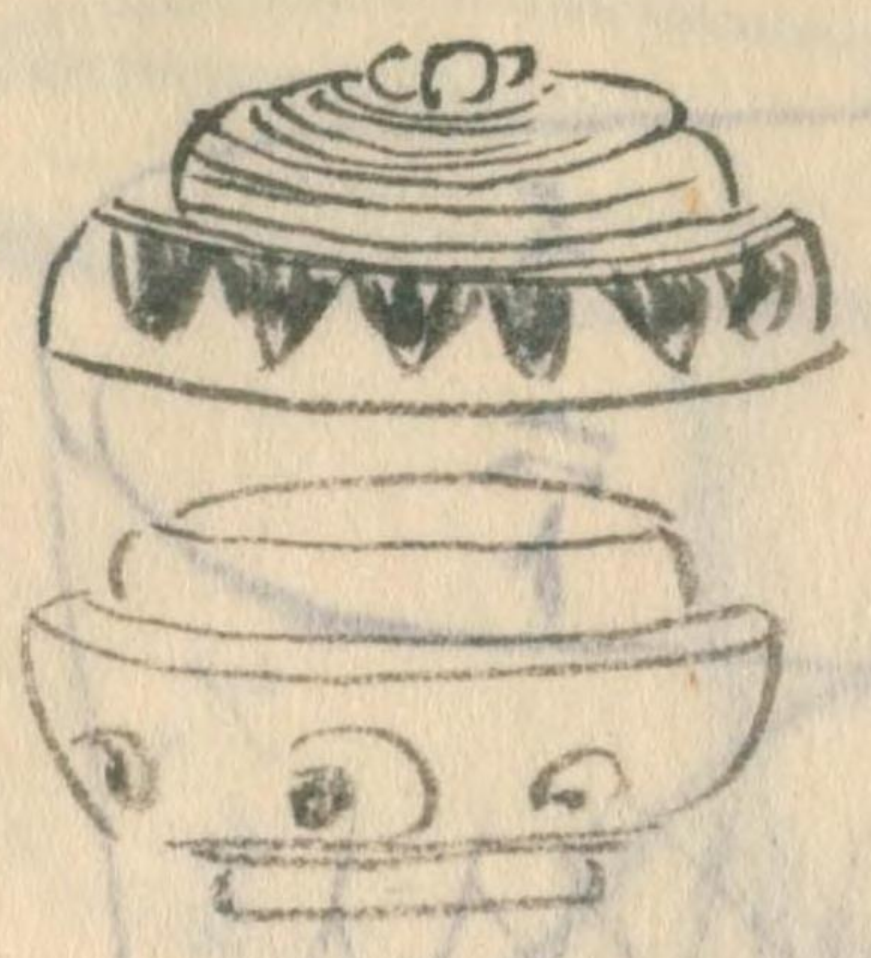


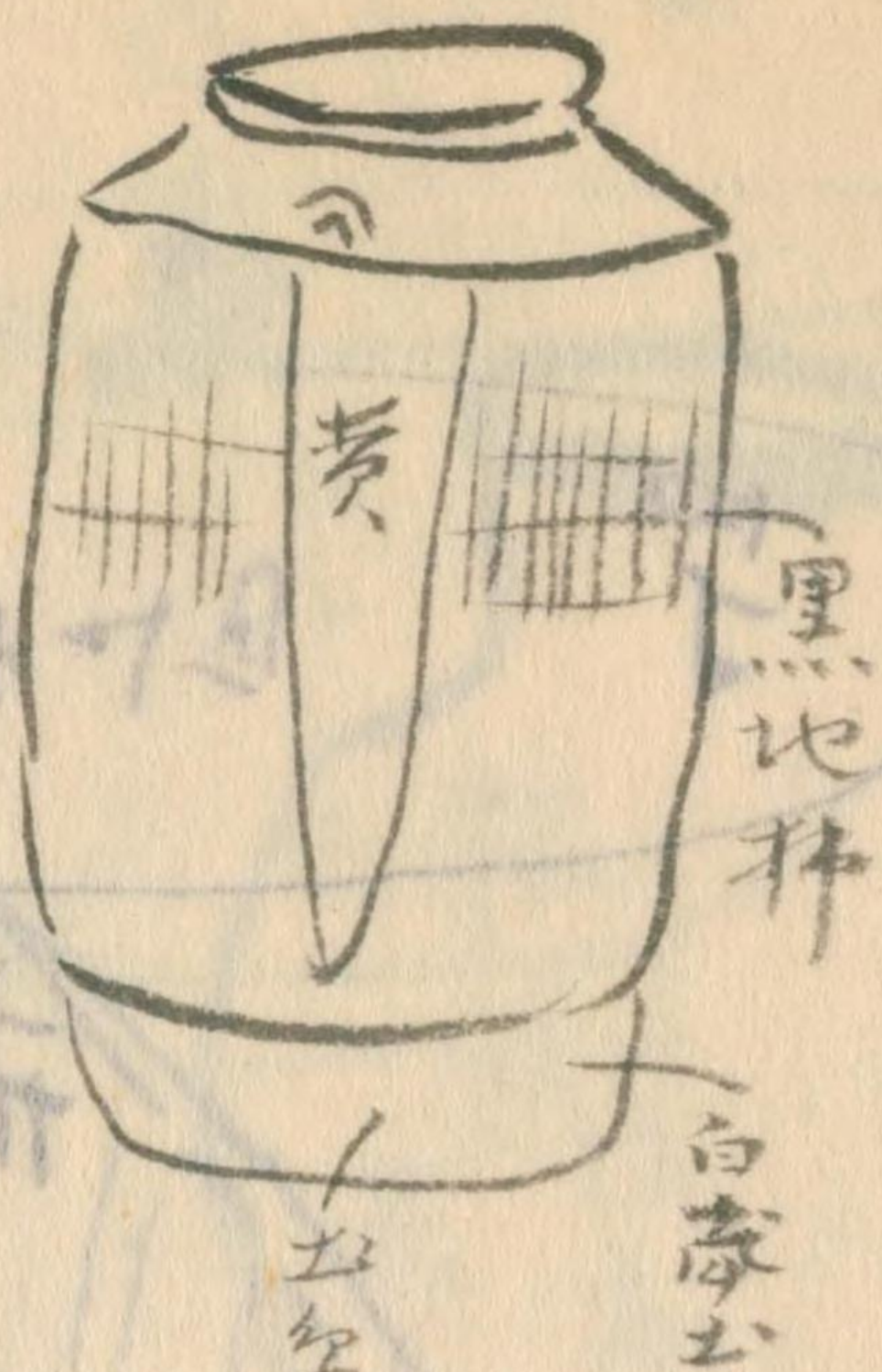
蓋四 水指



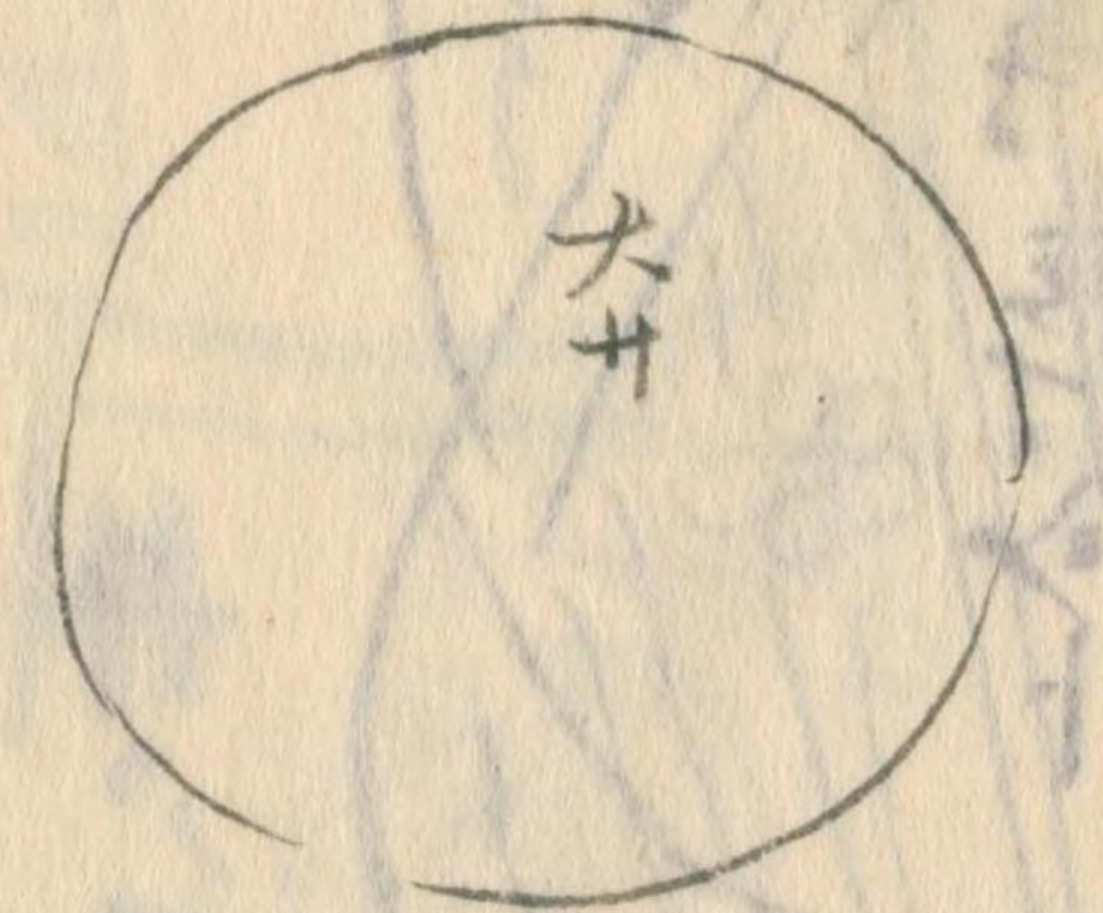
ガラス使用

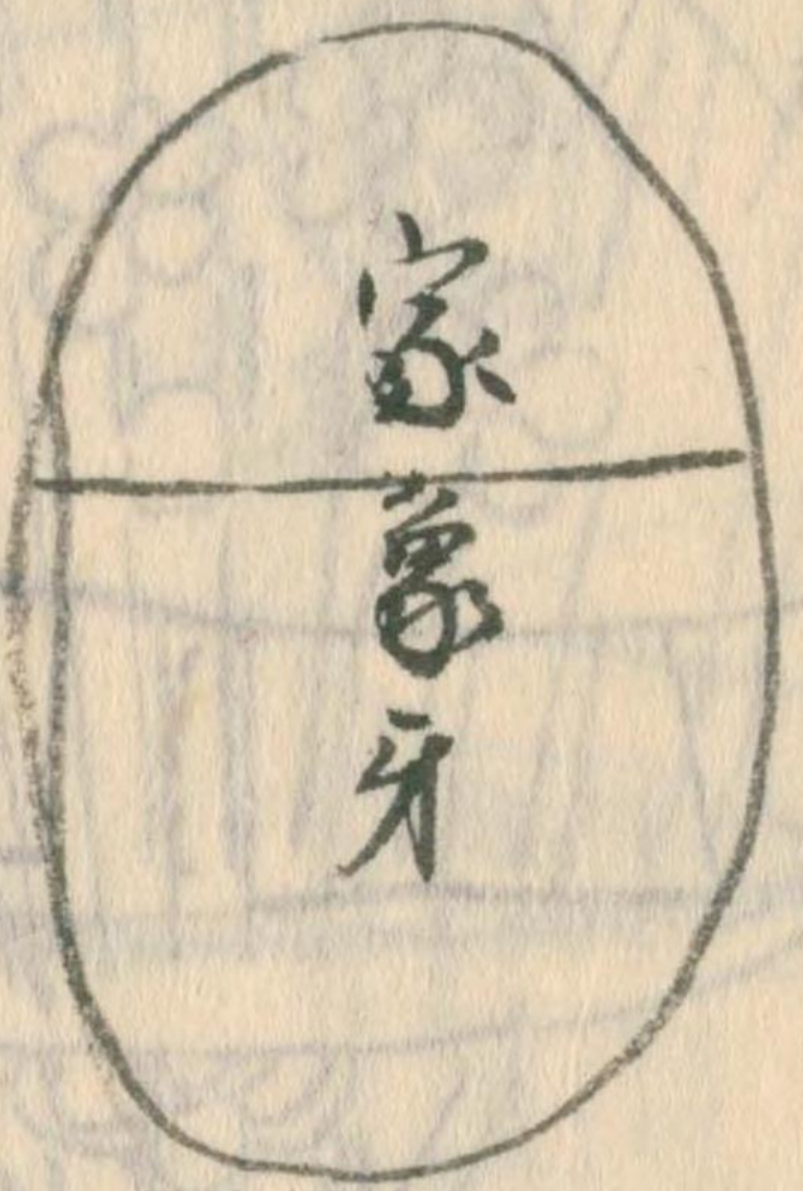
宋胡禄香合



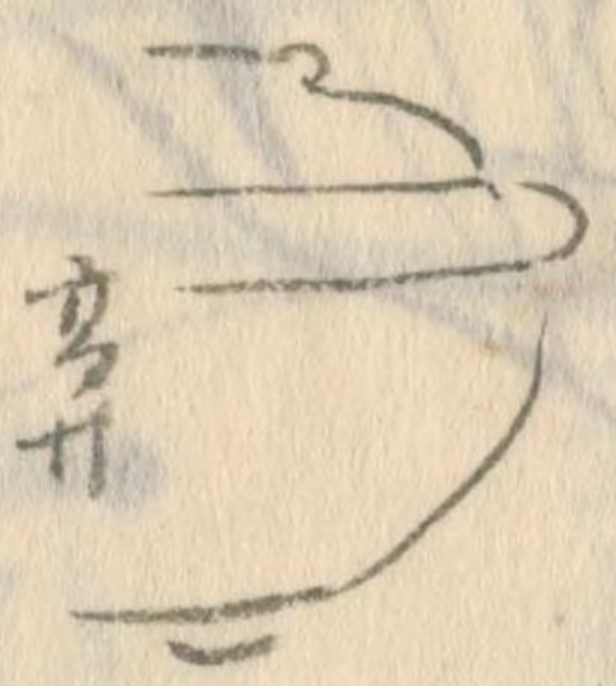


黄
黒地抹
白壽土
土器アリ





五り三

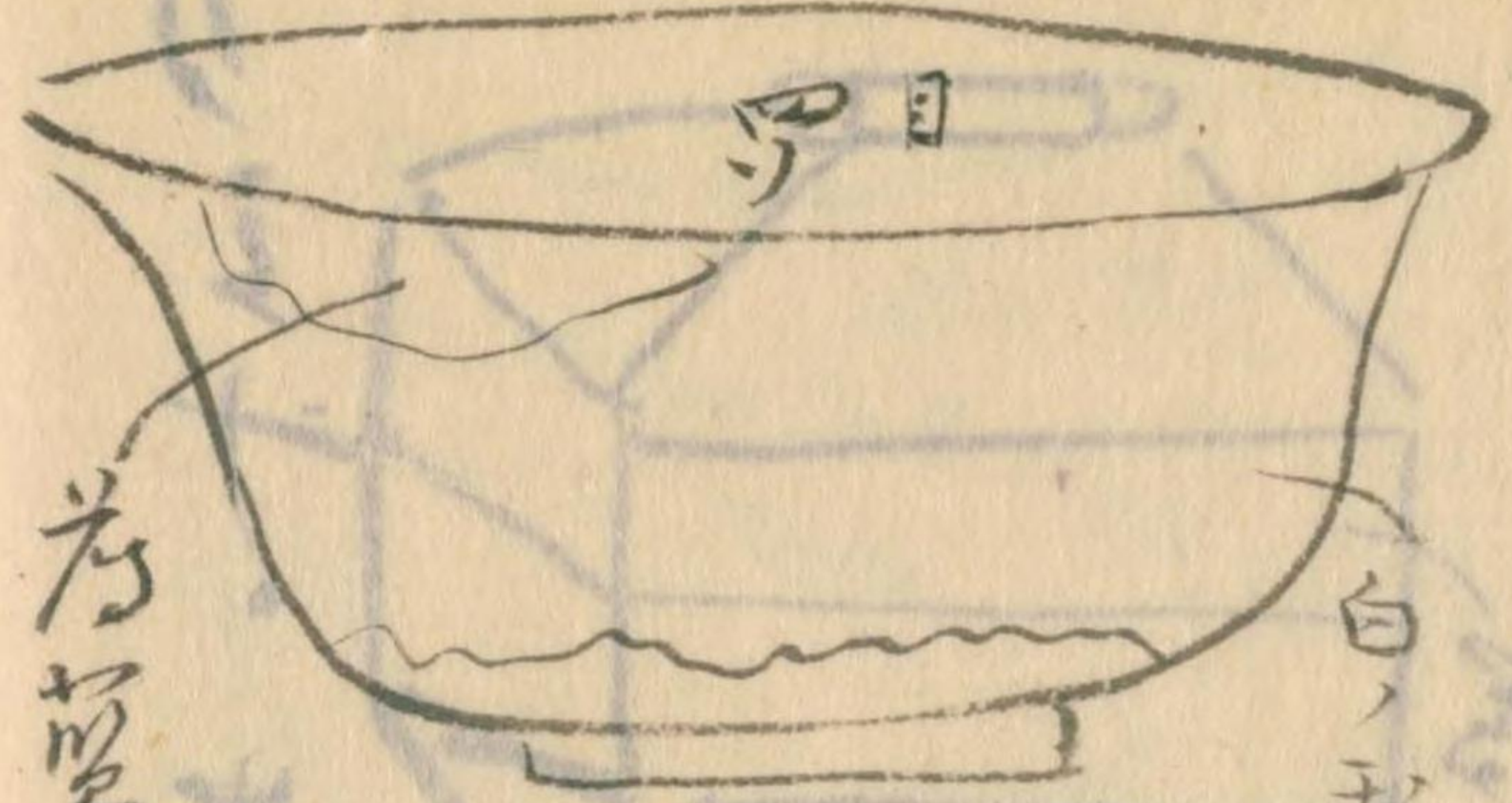


袋やんす ヲツカリ紫
外袋 瓜通シ白

宋胡禄

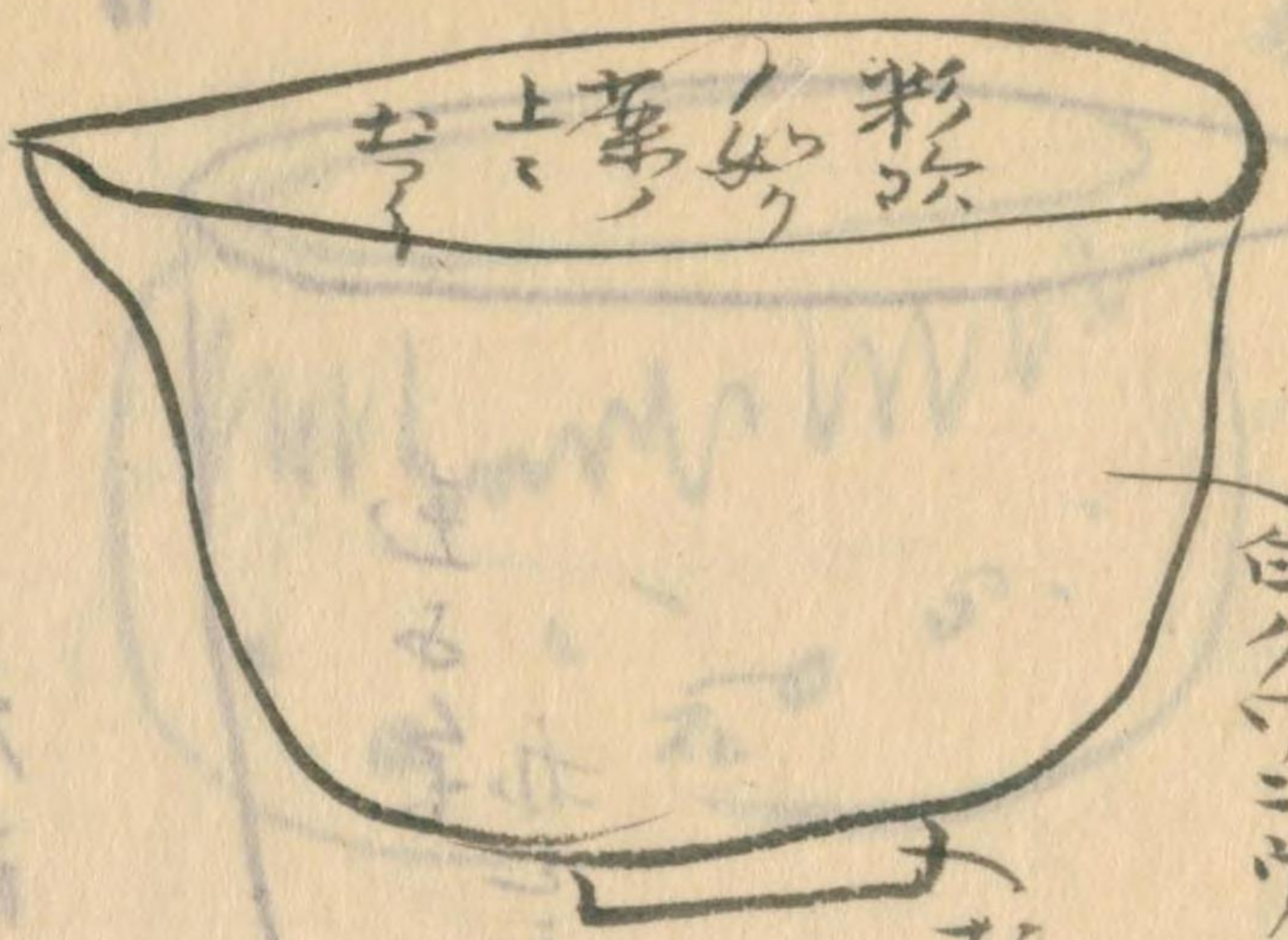
香合

高麗
玉子出

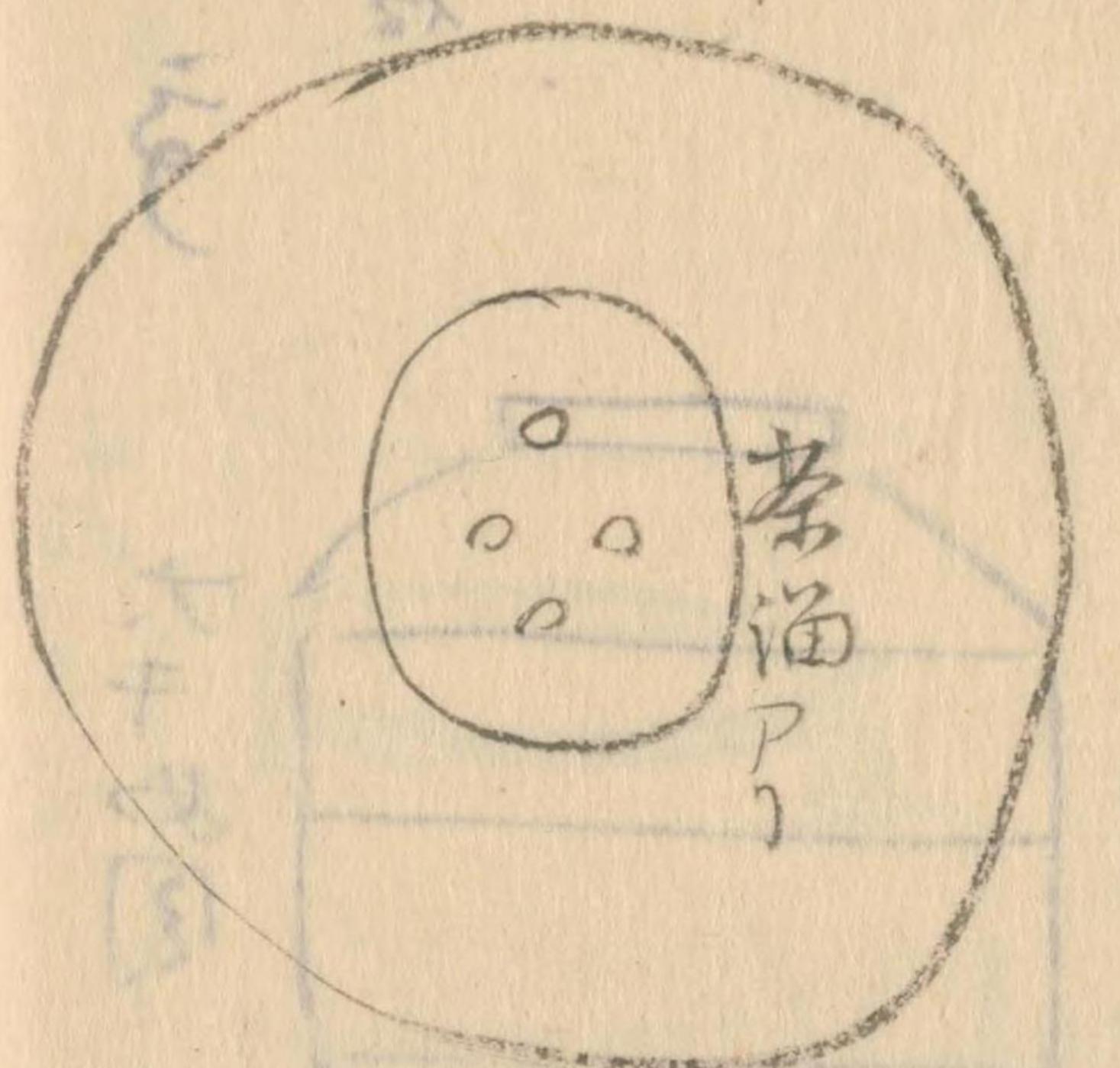


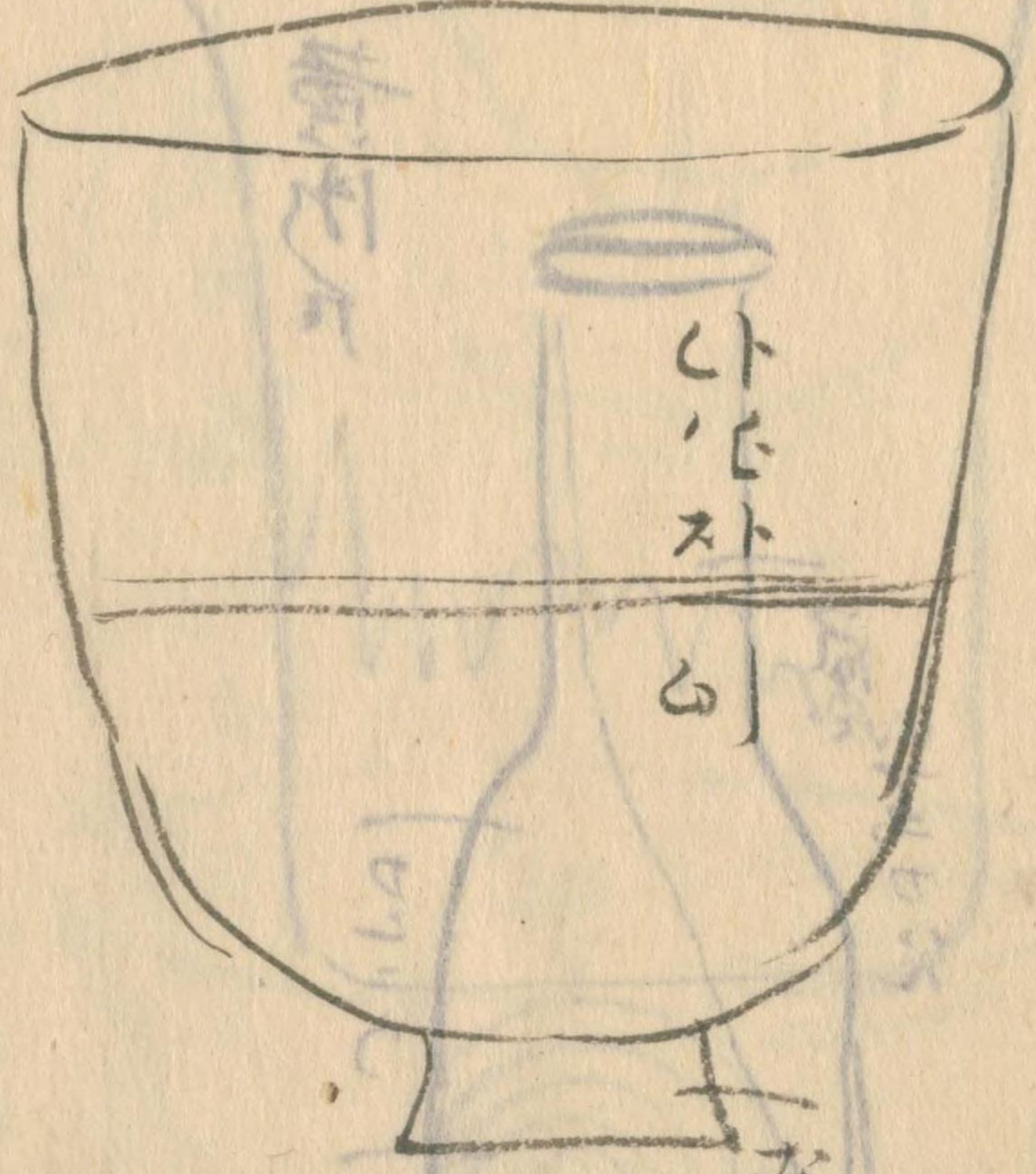
四目
若草うるミ
白ノ玉子色

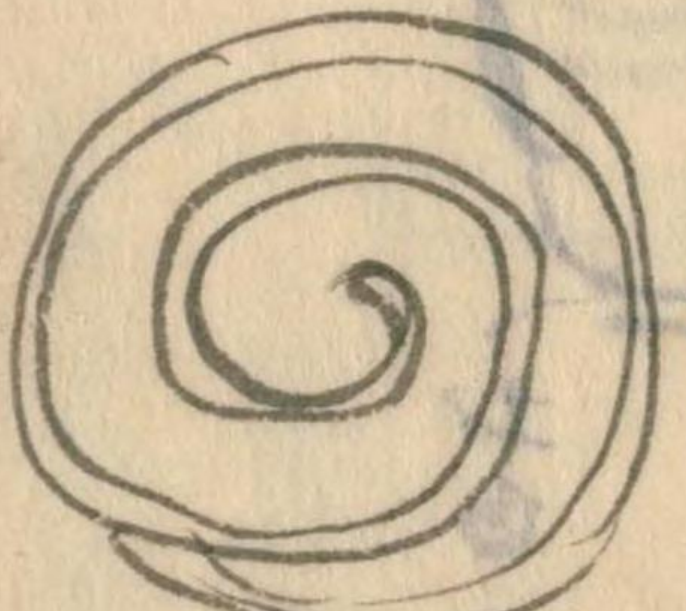
高麗
釜山出



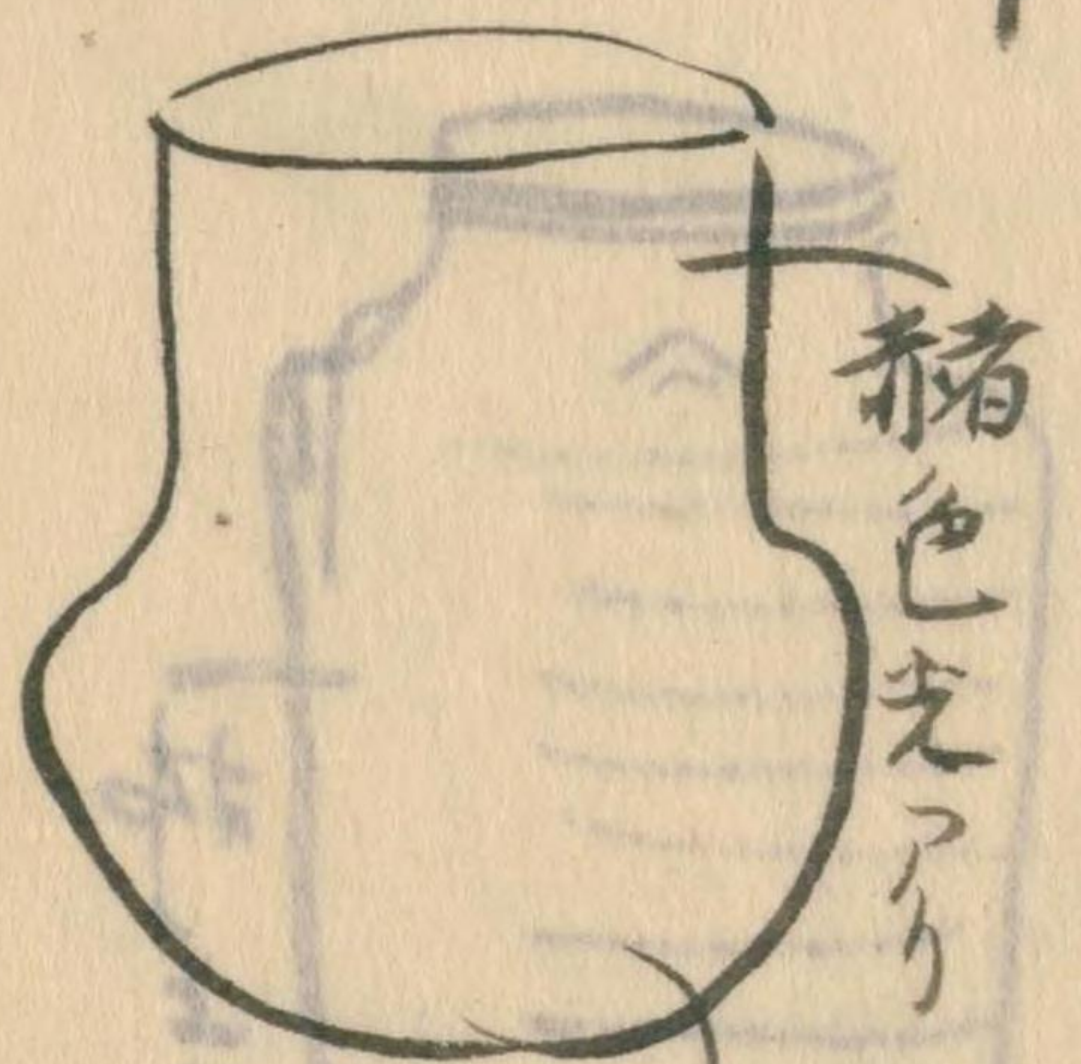
彩吹
ノ如ク
上薬
おそく
白クワニウ
土白



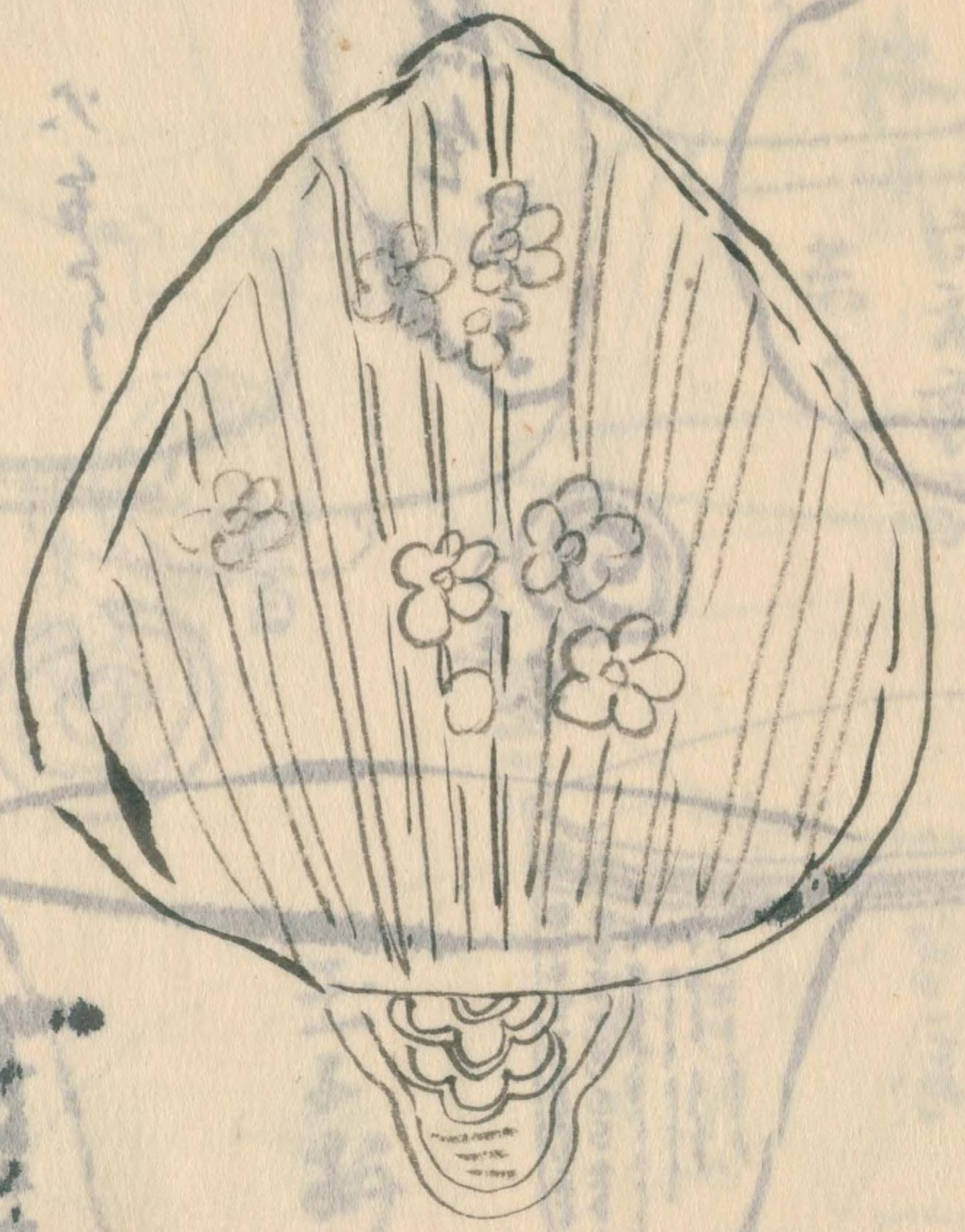


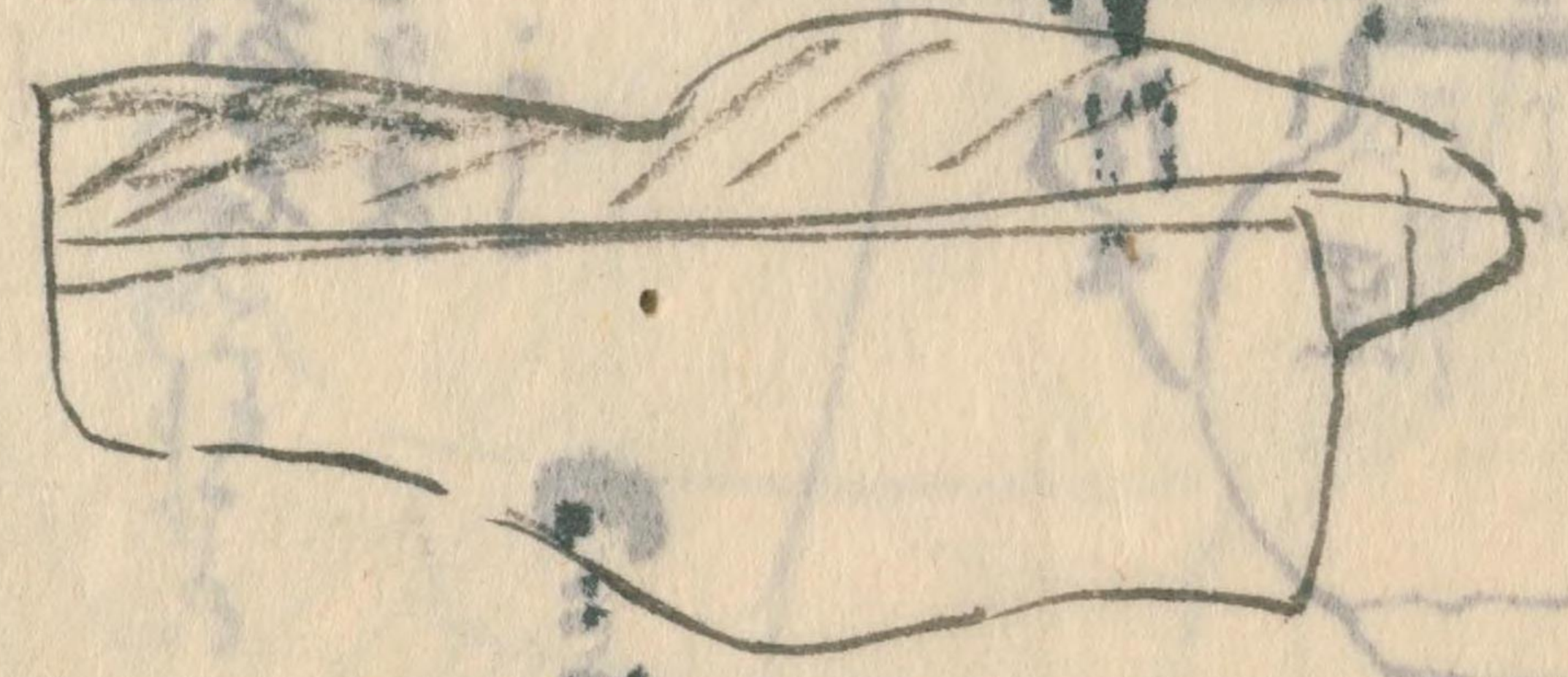


藤四郎

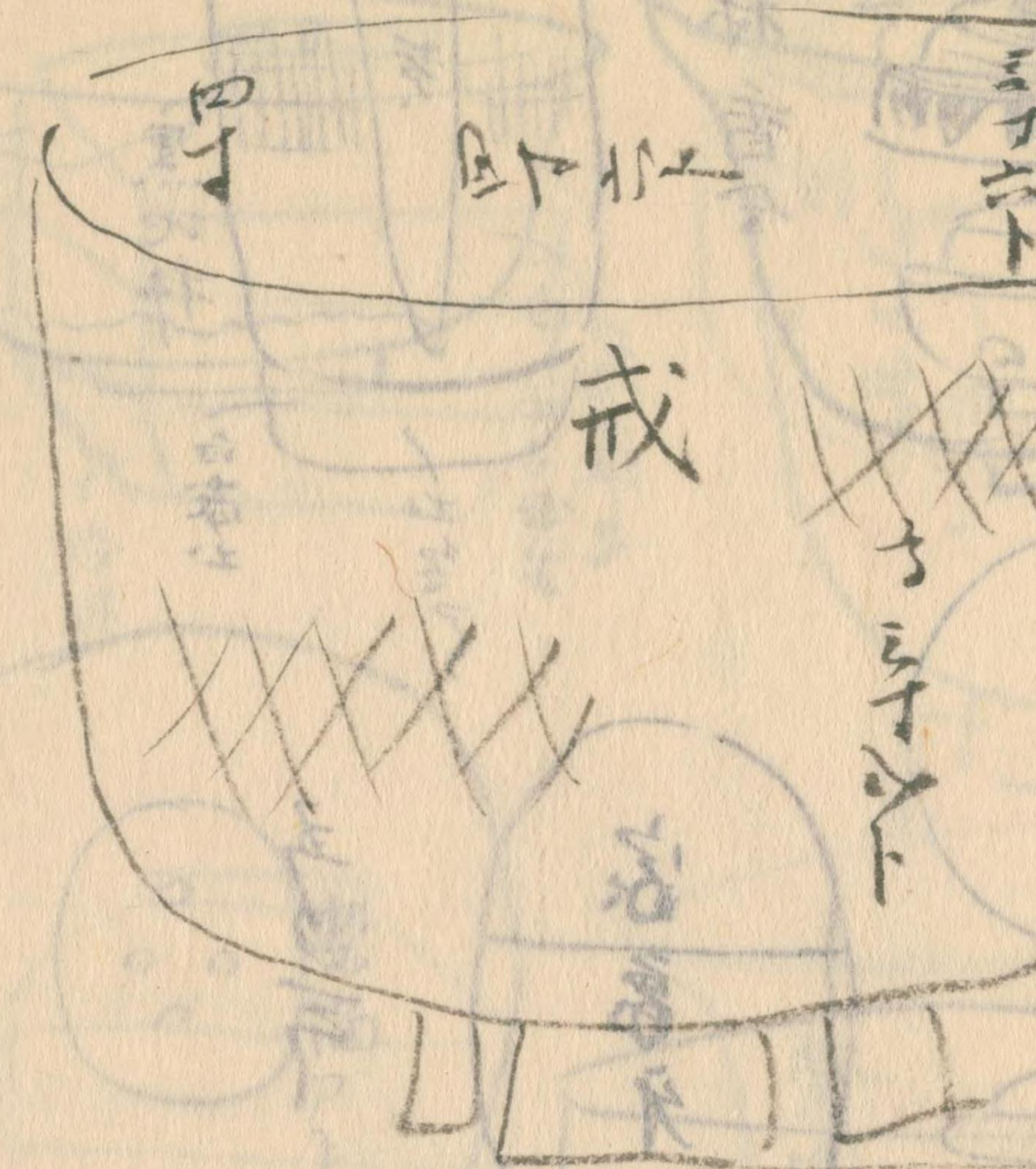


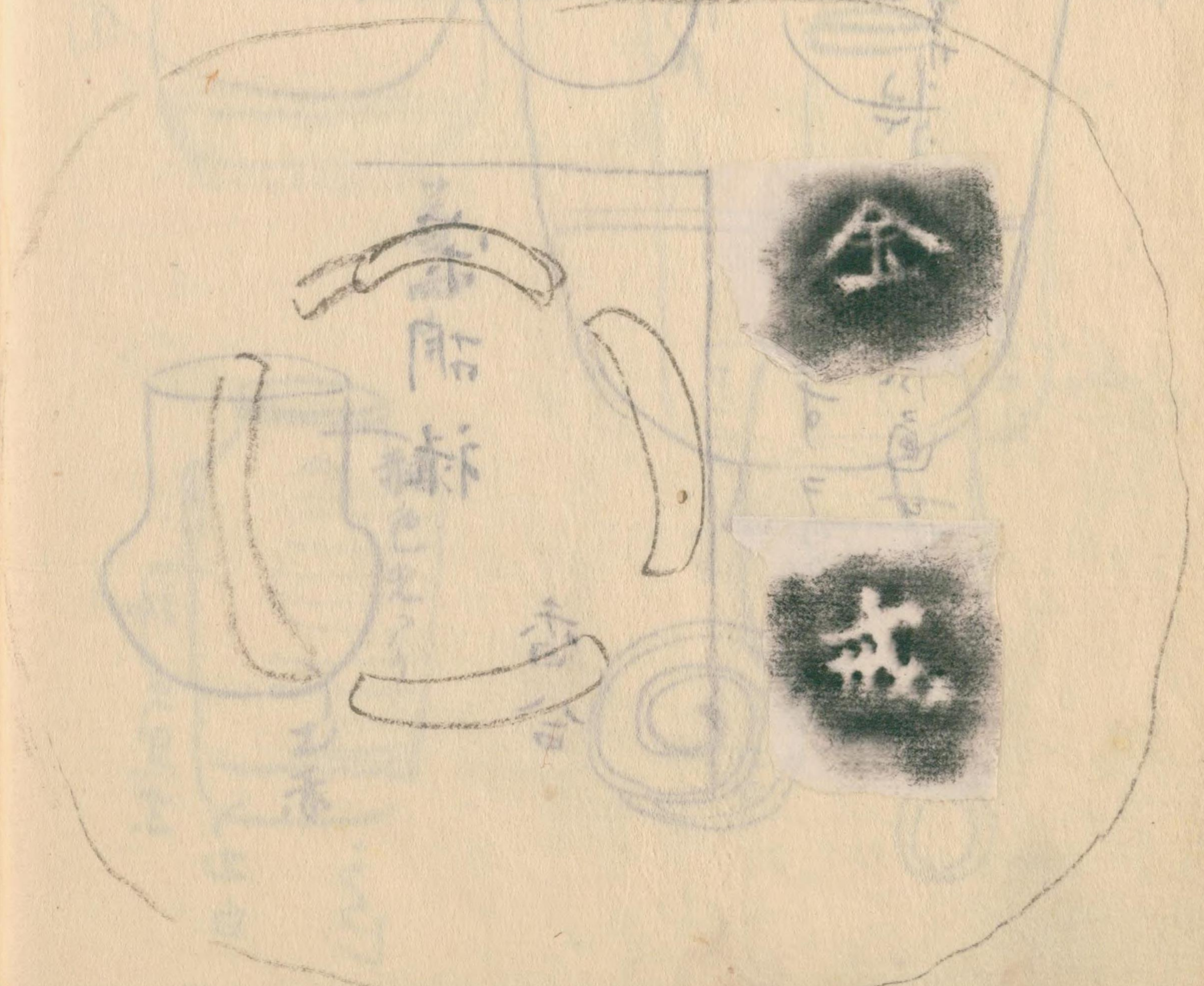
深川陶扇形香合



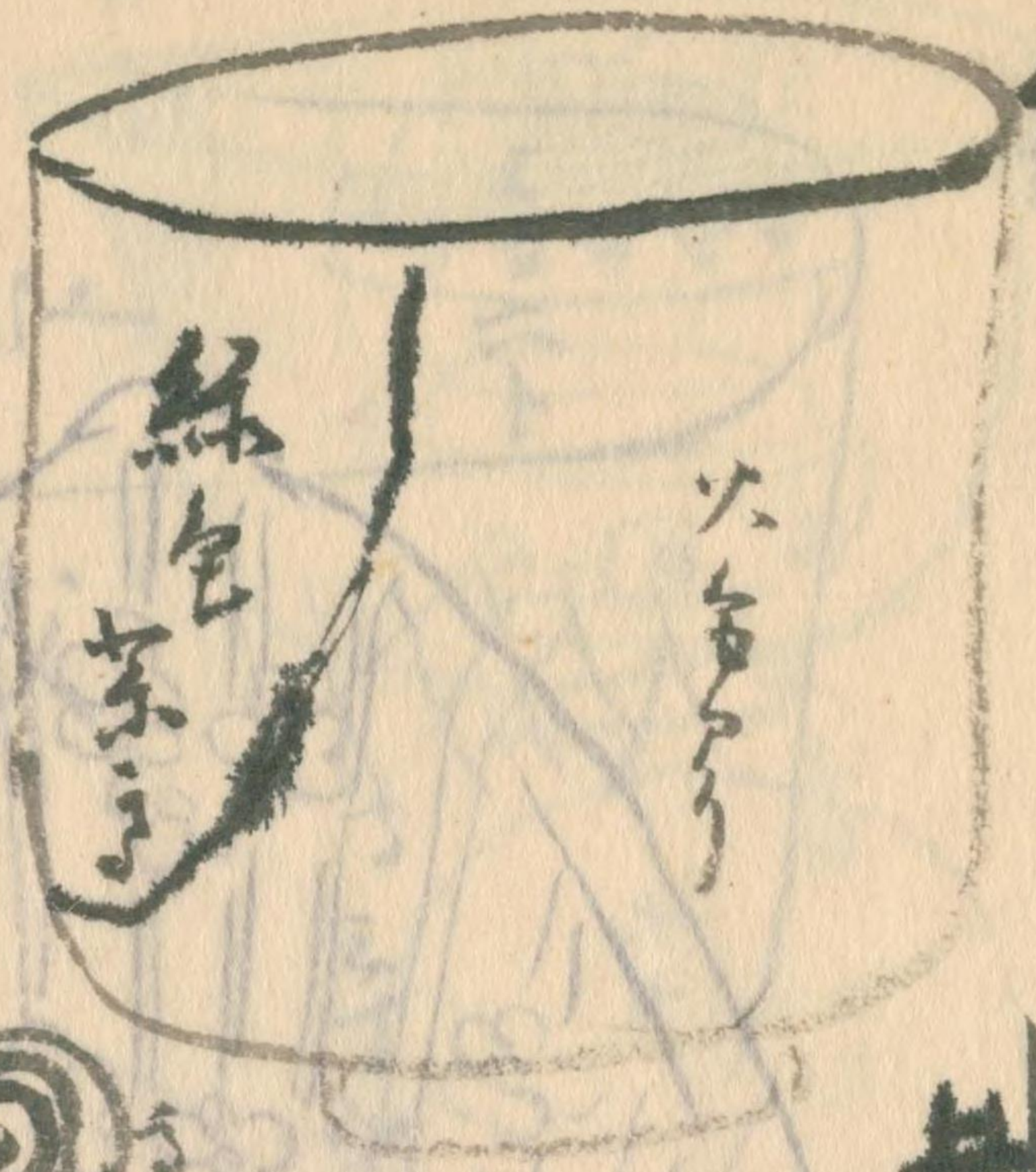


金戒


四寸
一寸八分
三寸六分
戒
三寸五分

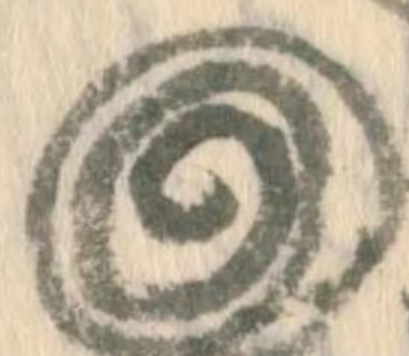


信楽



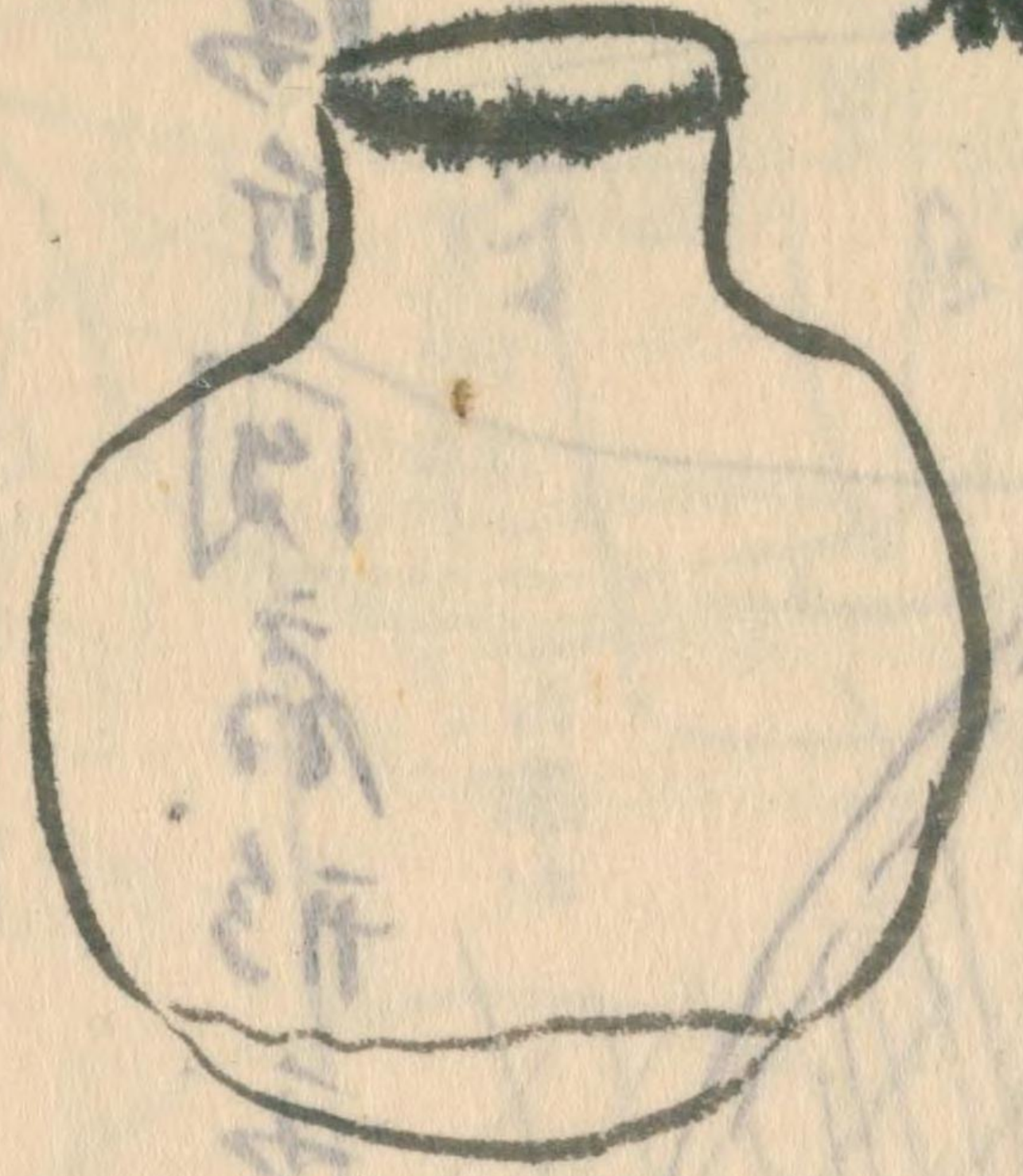
緋色 茶ニ

火色あり



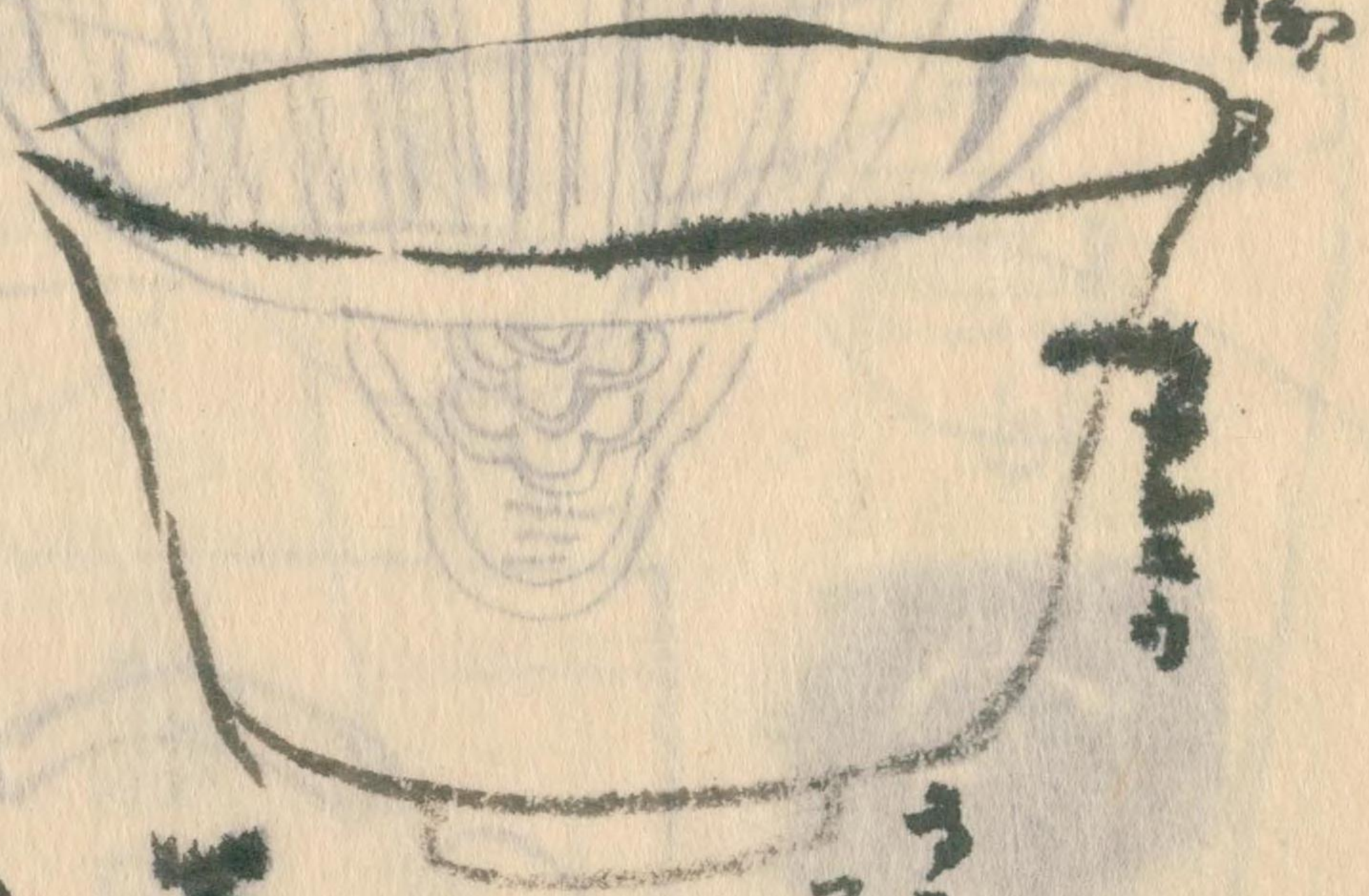
宗入 家

呂宋



七月て 若口ろ

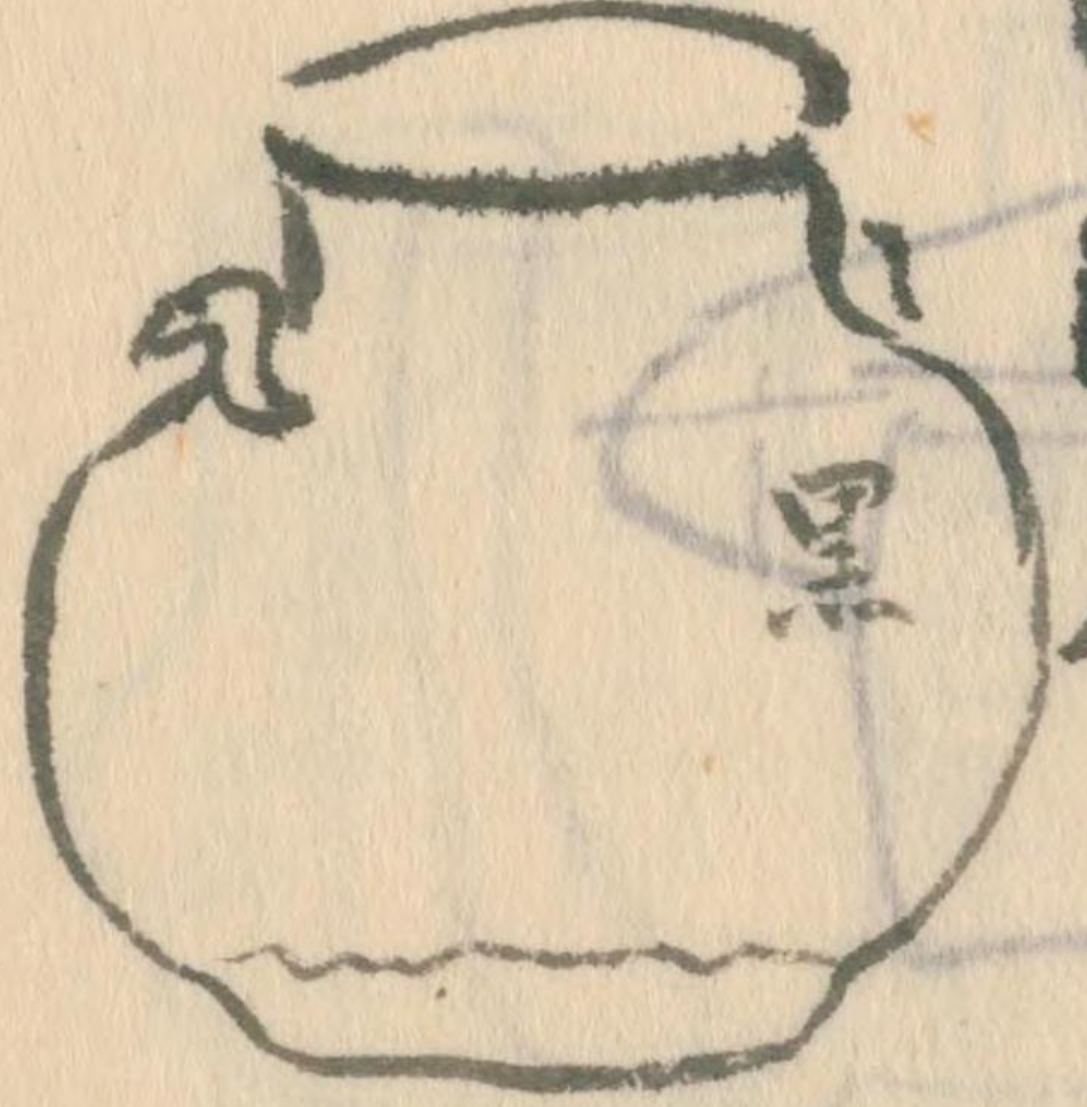
井戸脇



ヒビあり

うち茶 コク茶 う

古瀬戸

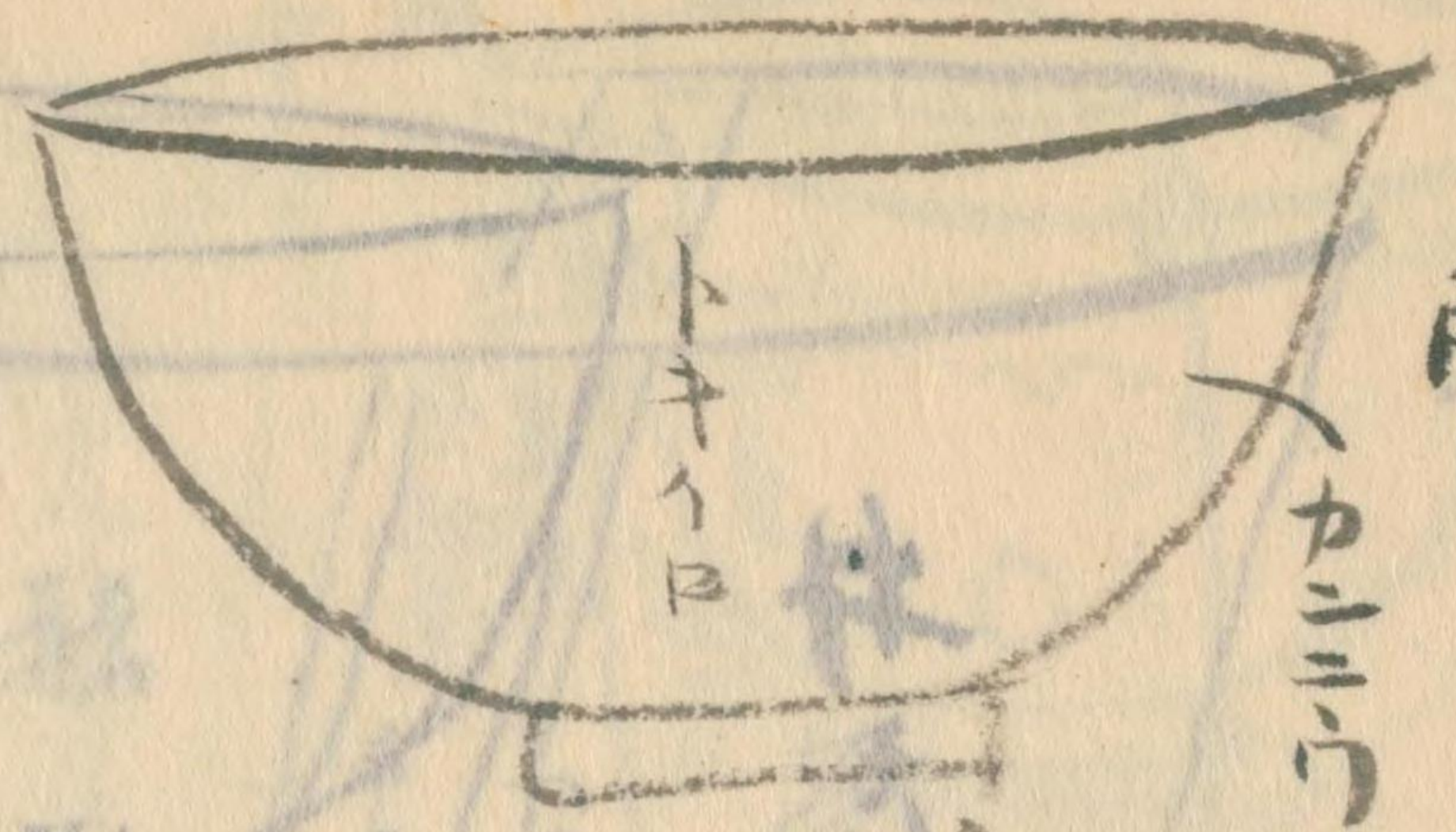


黒

内ニ茶泊り

井戸脇

内こ 茶 泊 あり

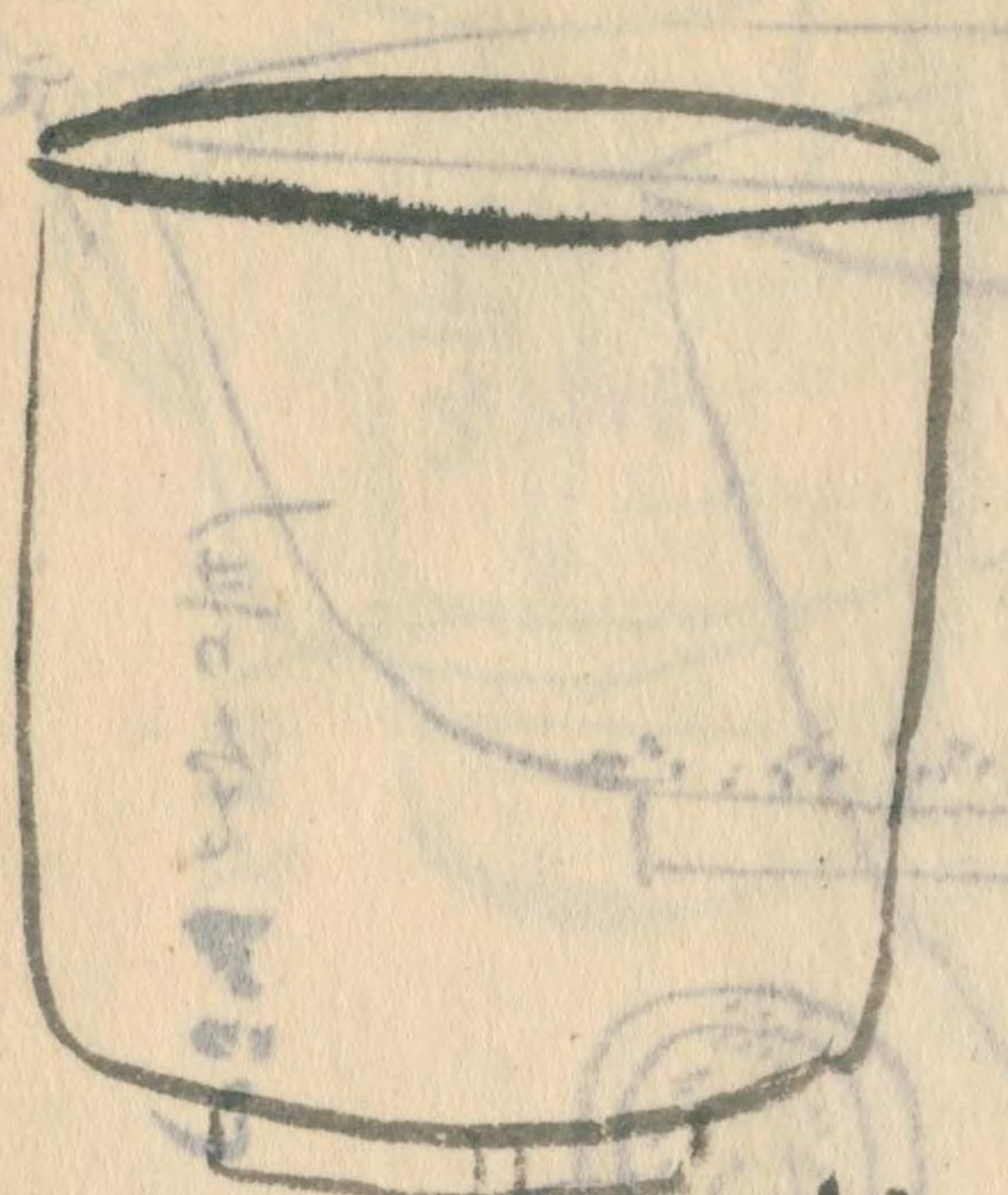


トキイロ

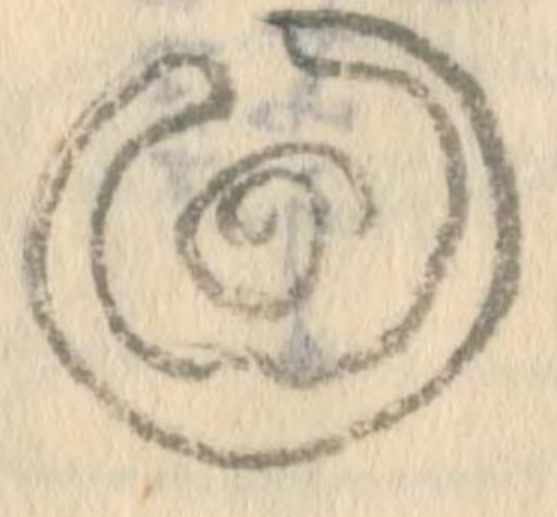
カンニウ

うち表ニ 茶う

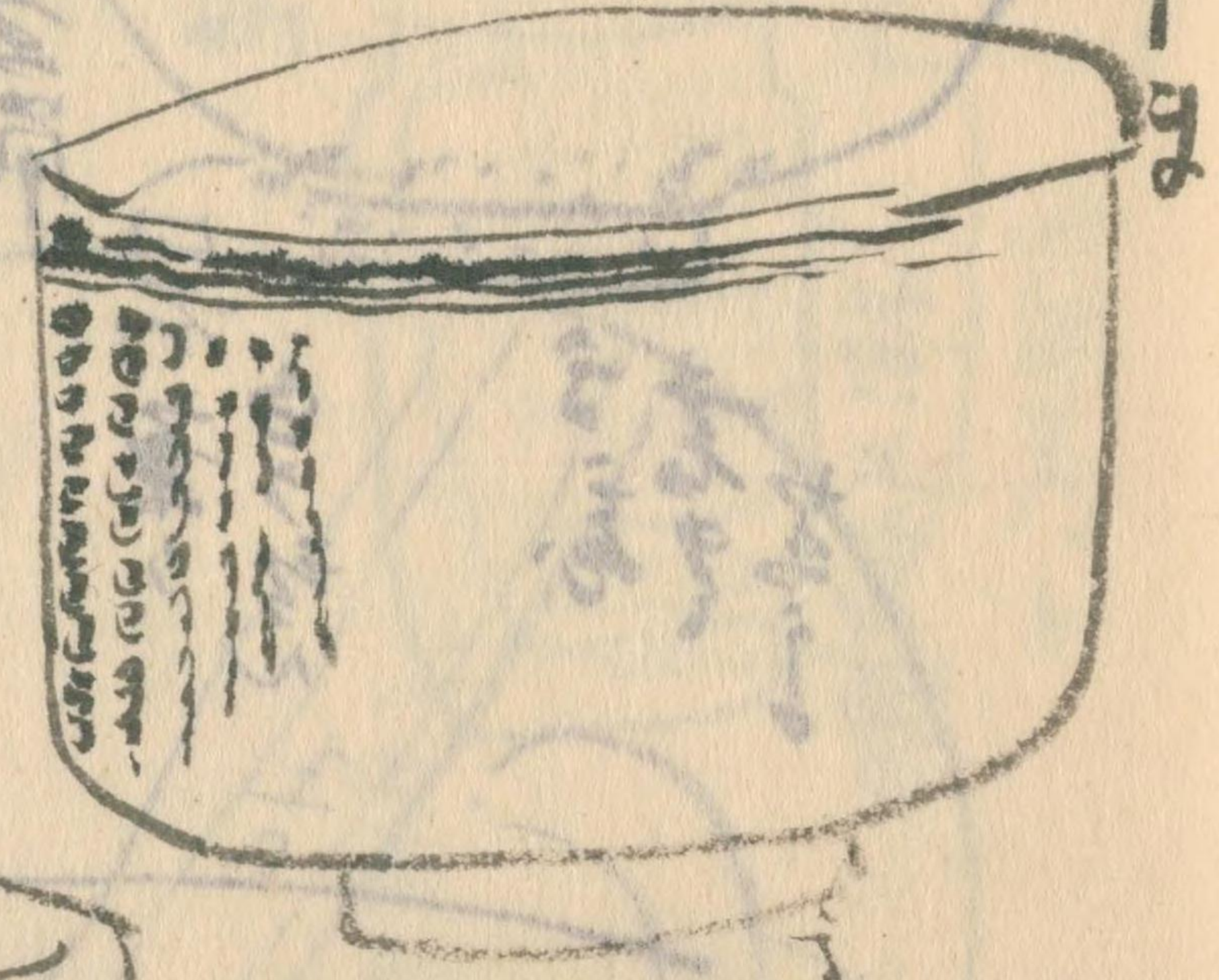
古唐



土白

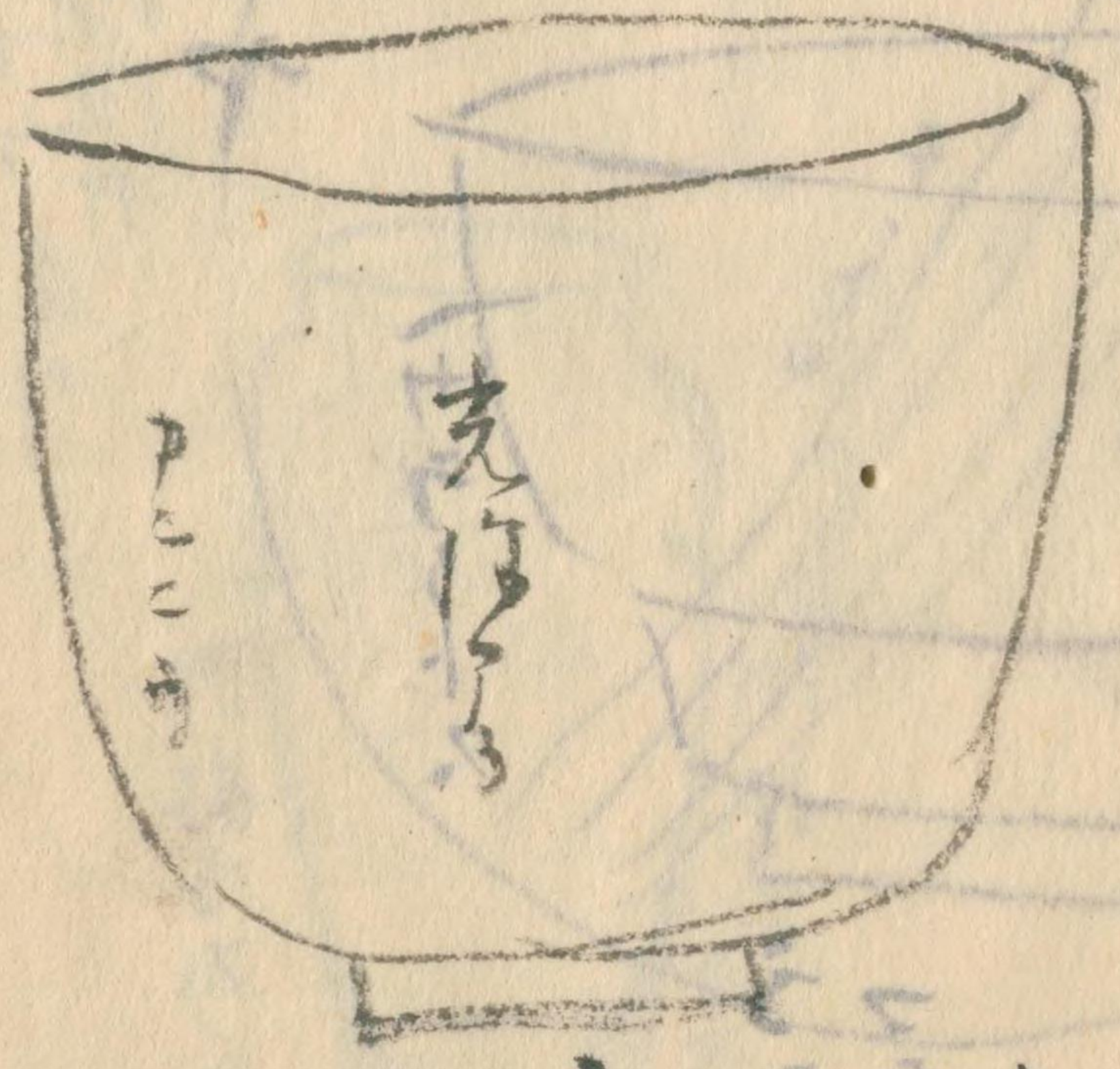


朝鮮ミシマ



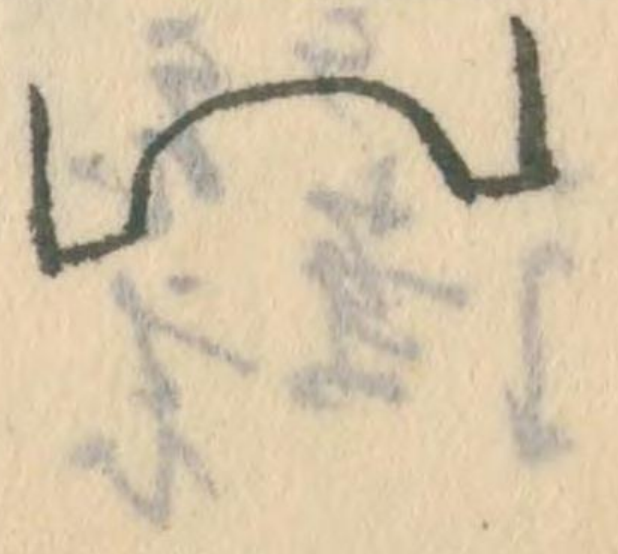
うち窯のたし 茶てる 花唐の如し

玉子手



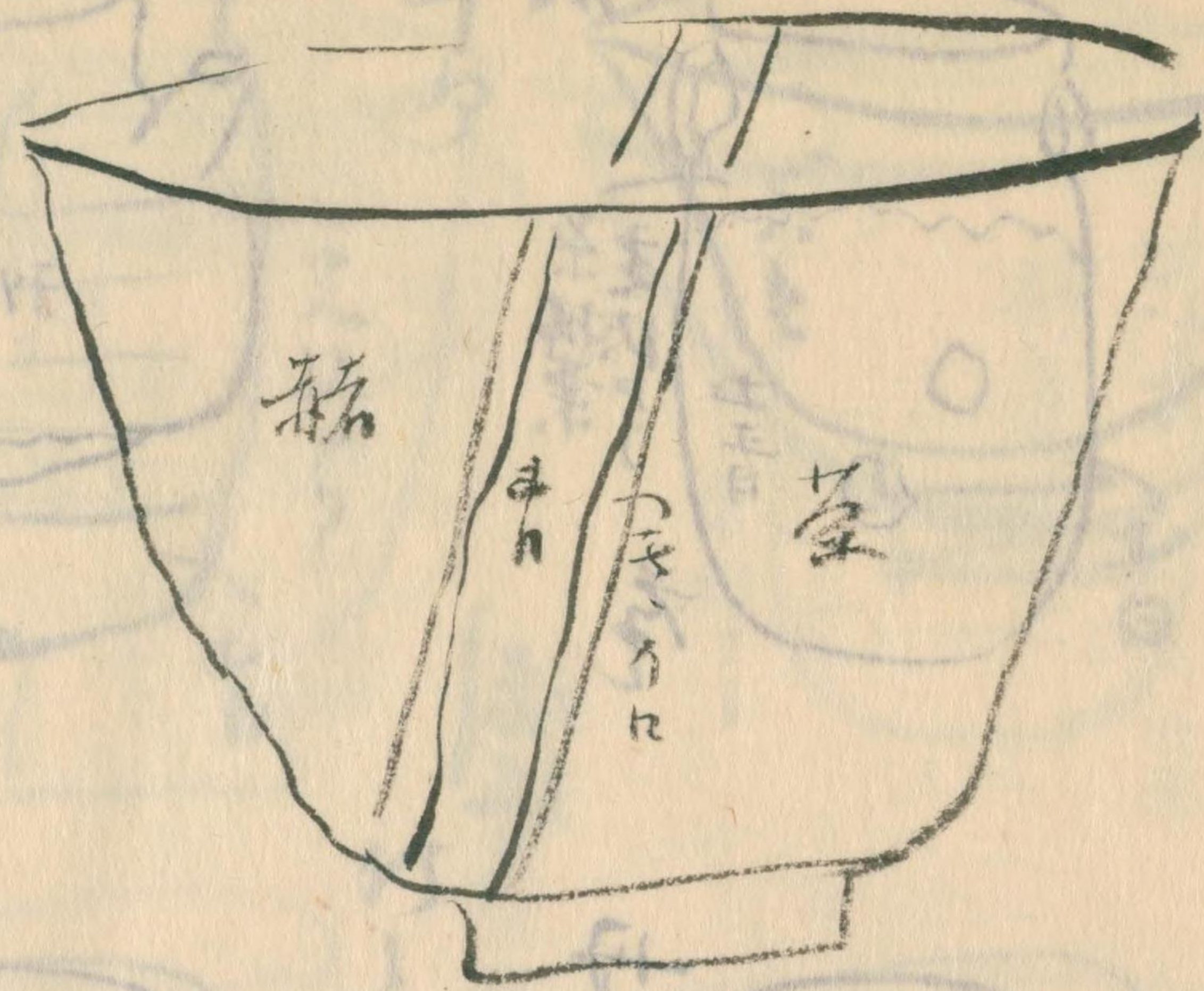
カンニウ

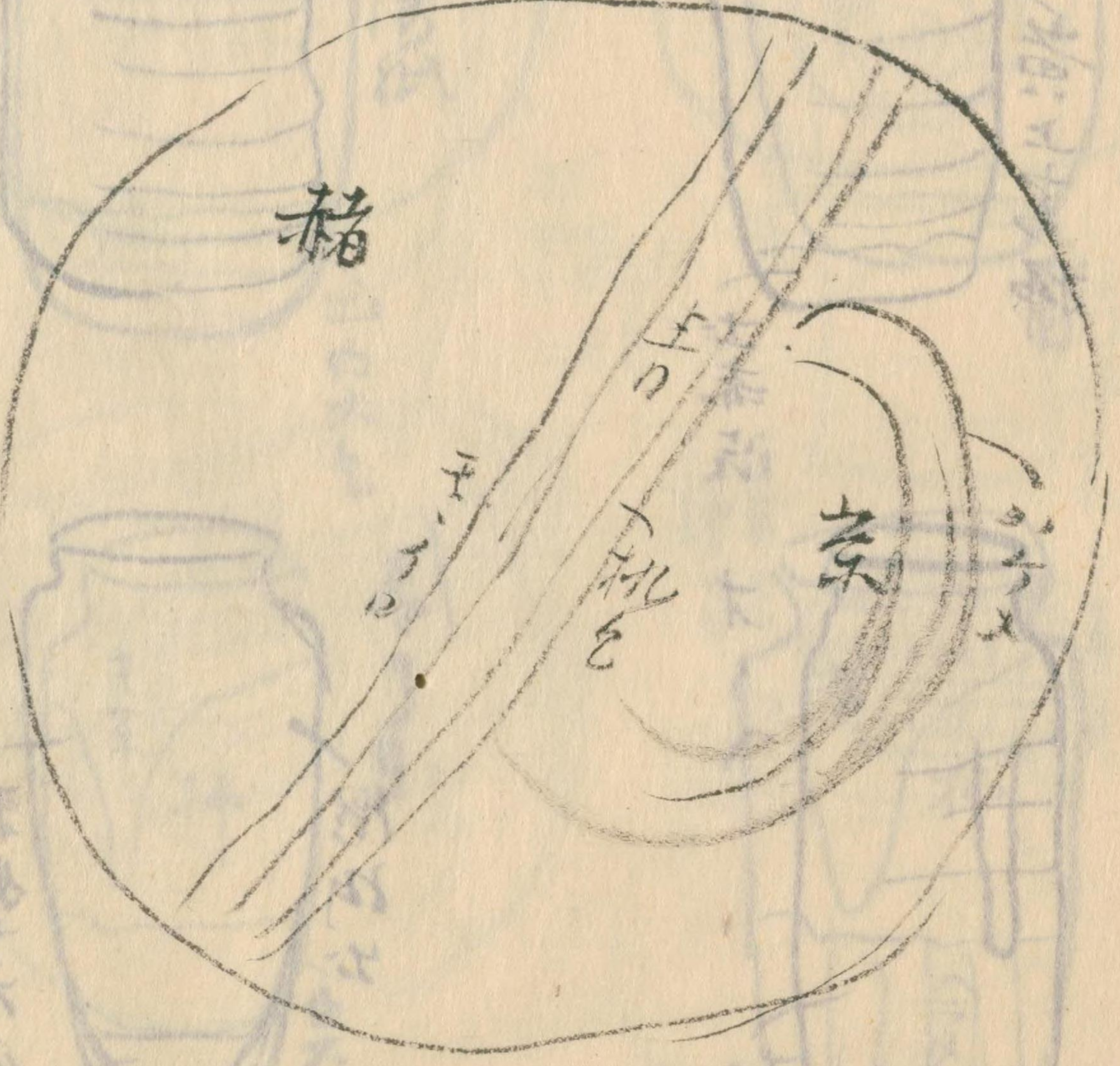
光沢ある



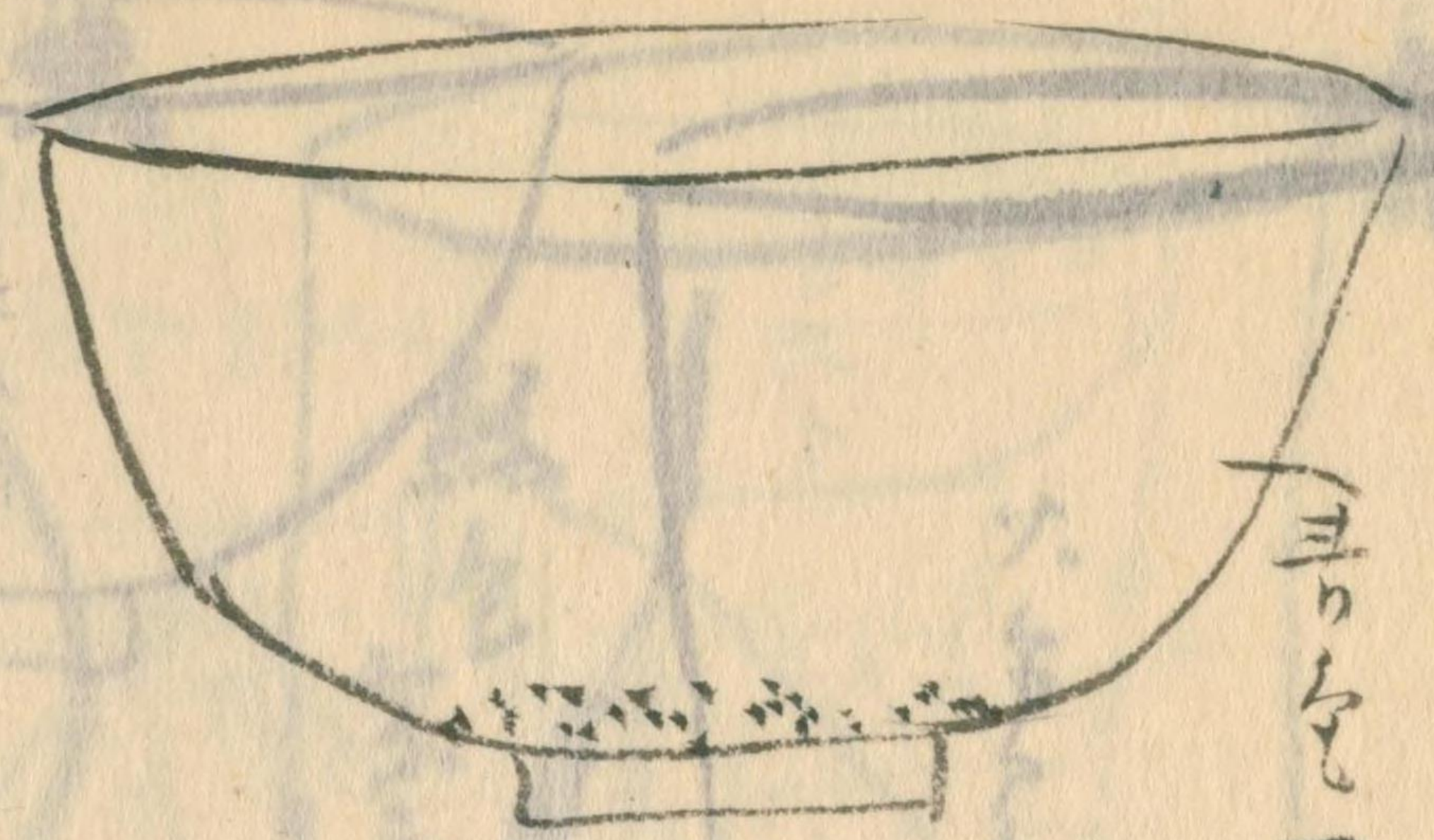
うち 素のを 茶 うる

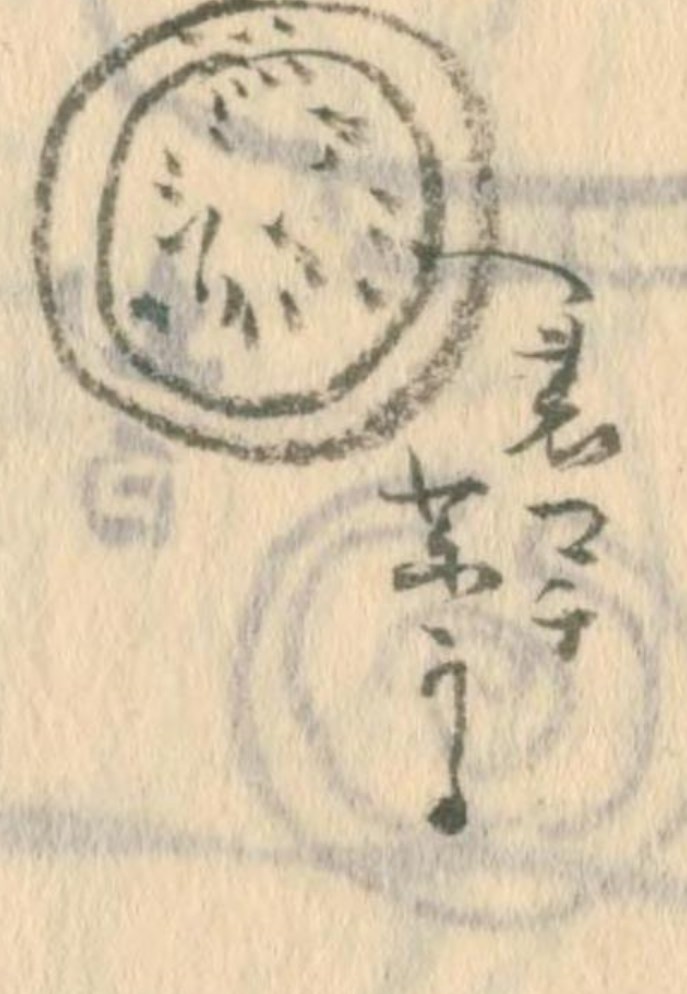
伊良保 内ハケメ



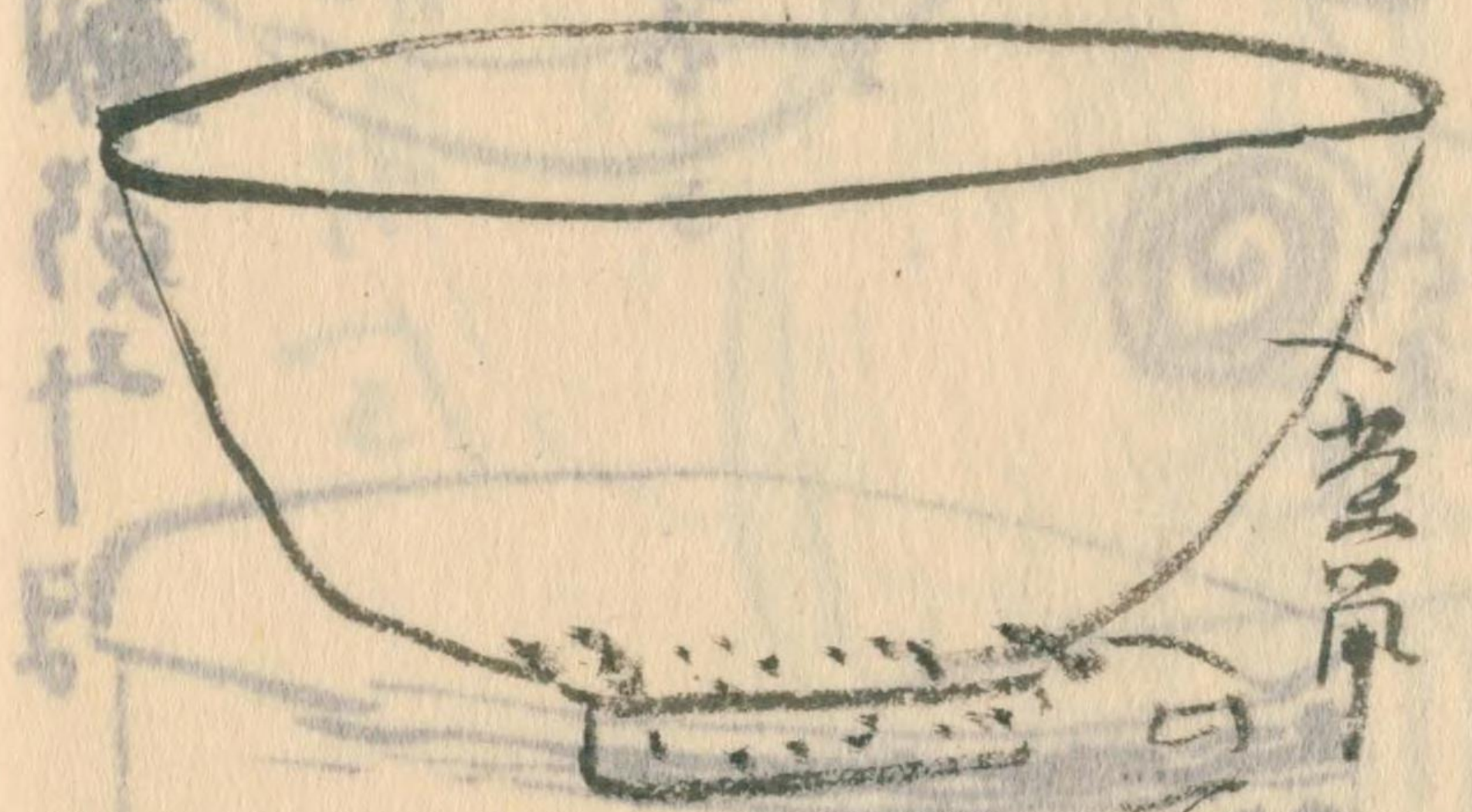

赭
青
モミカロ
地を
茶
ぶ文

青井戸

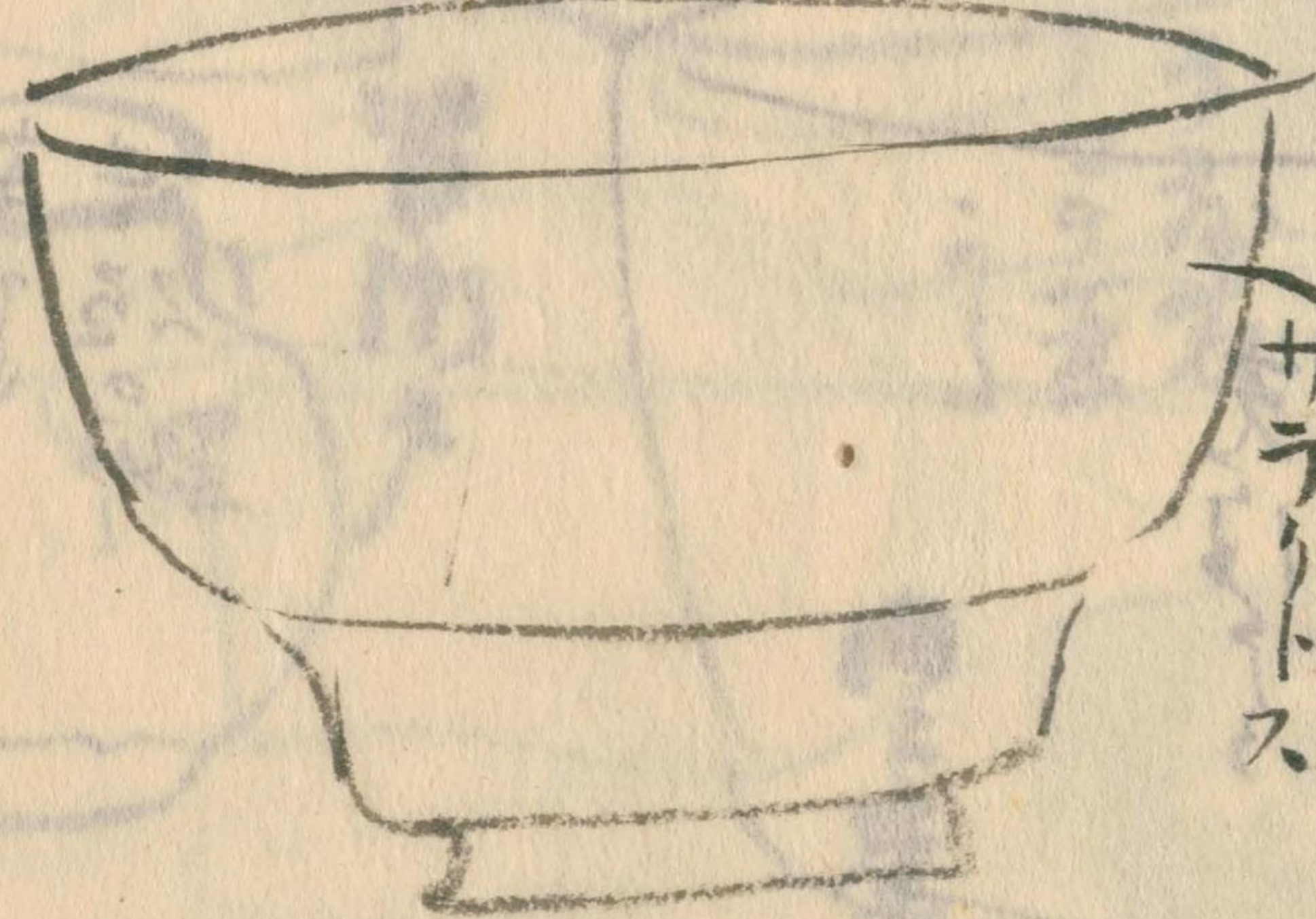




井戸

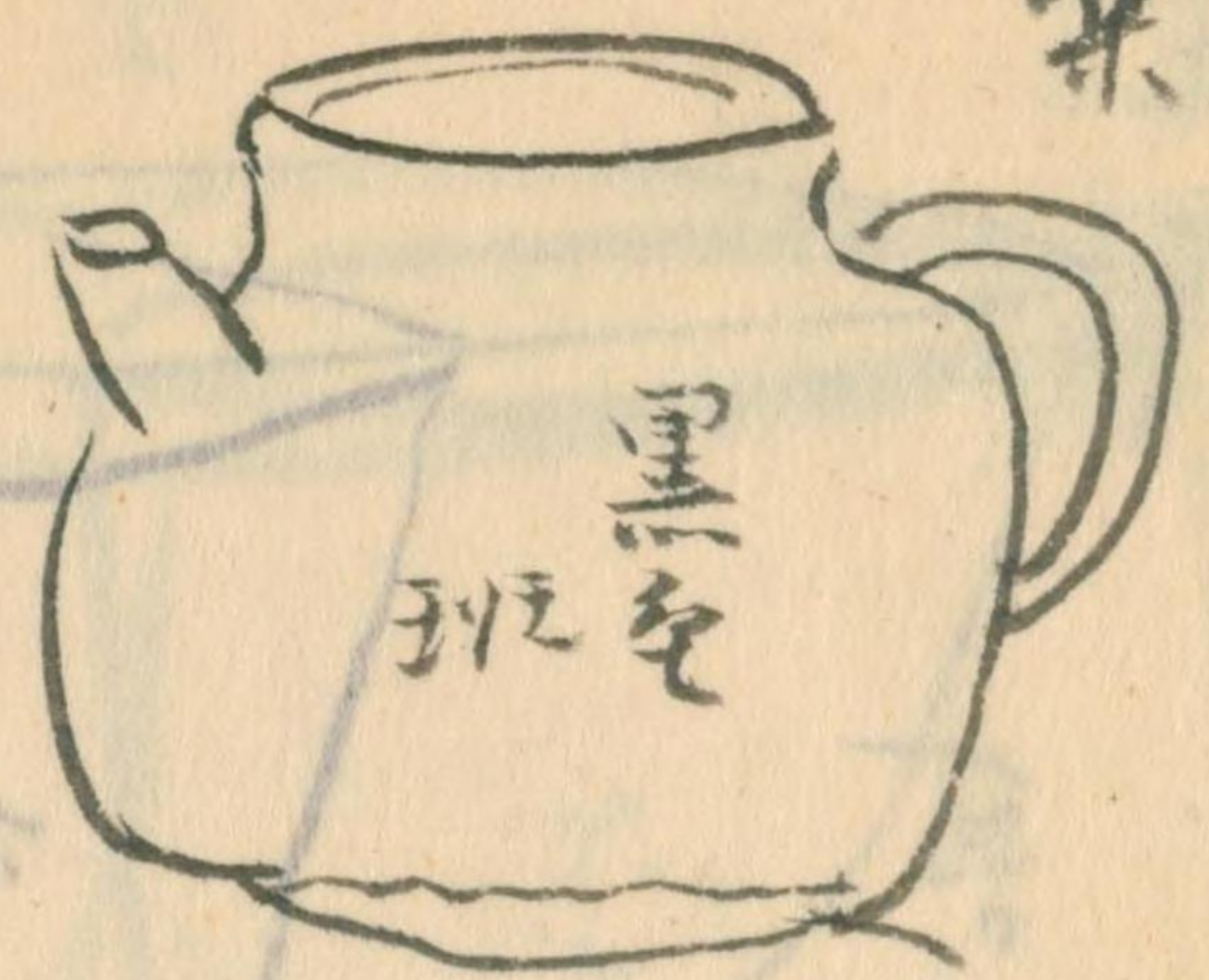

大黒
口縁薬り
白ク強ん
うす
赤き
茶う

トヽヤ

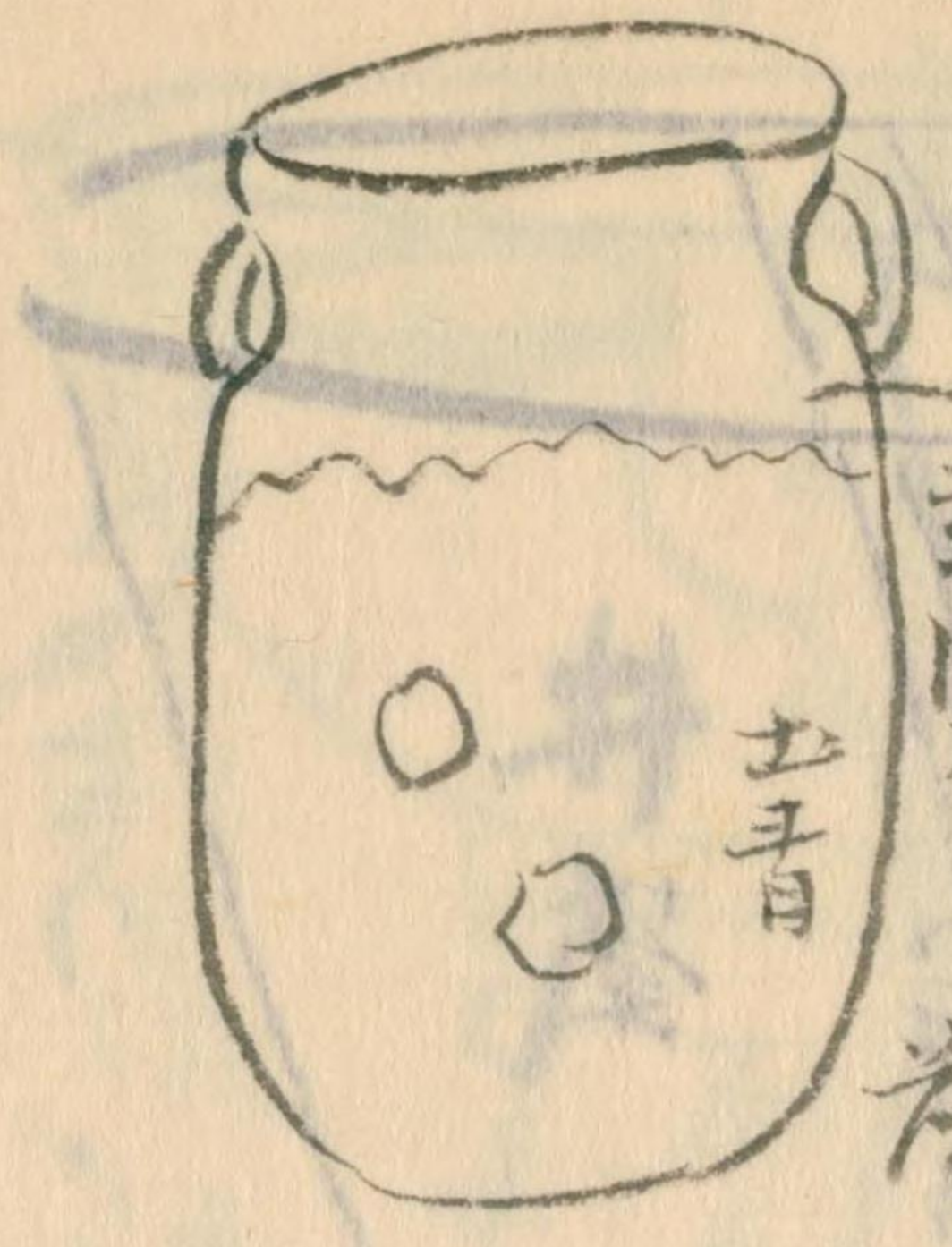


うす色
コケ薬
ら

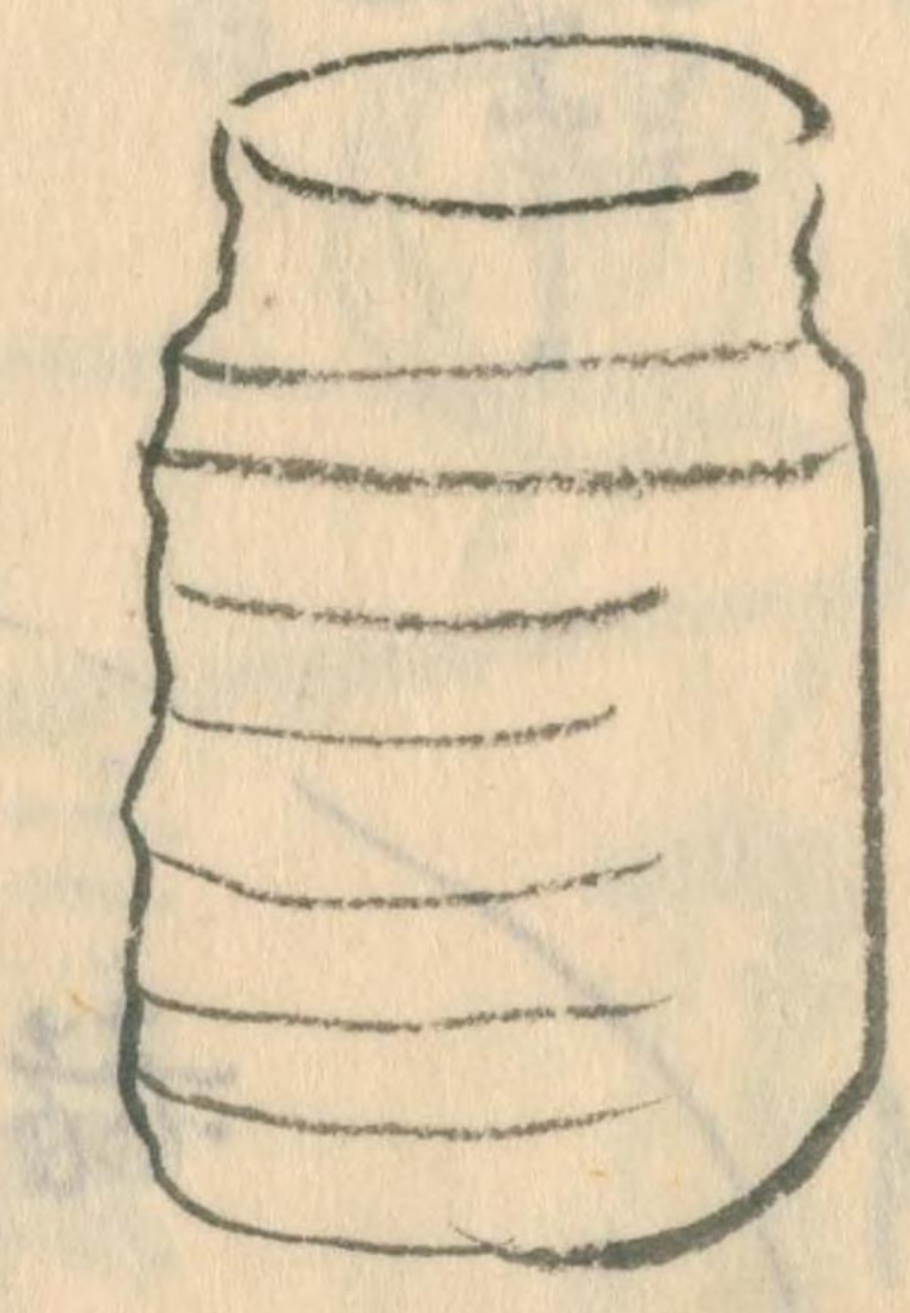
信楽



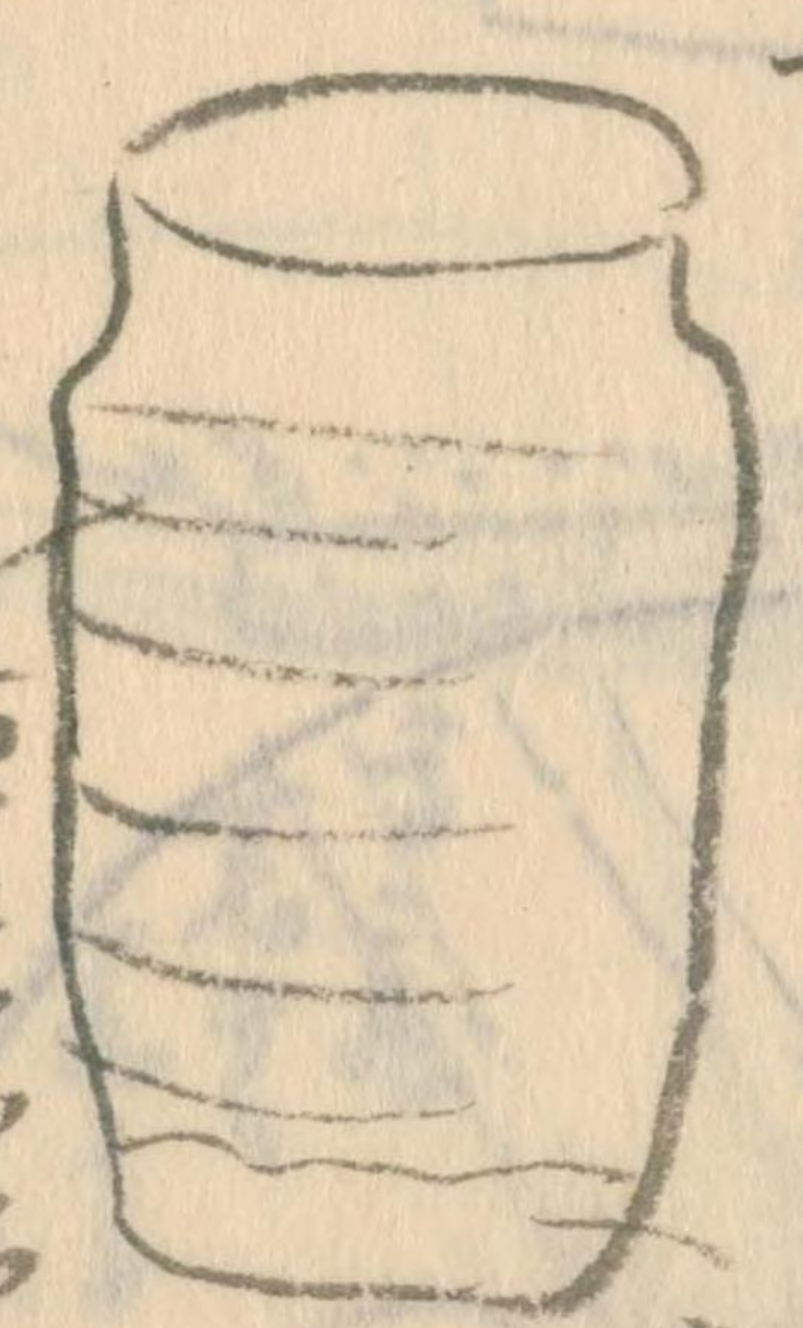
京焼


茶掃葉
支灰アリ
土青
虎

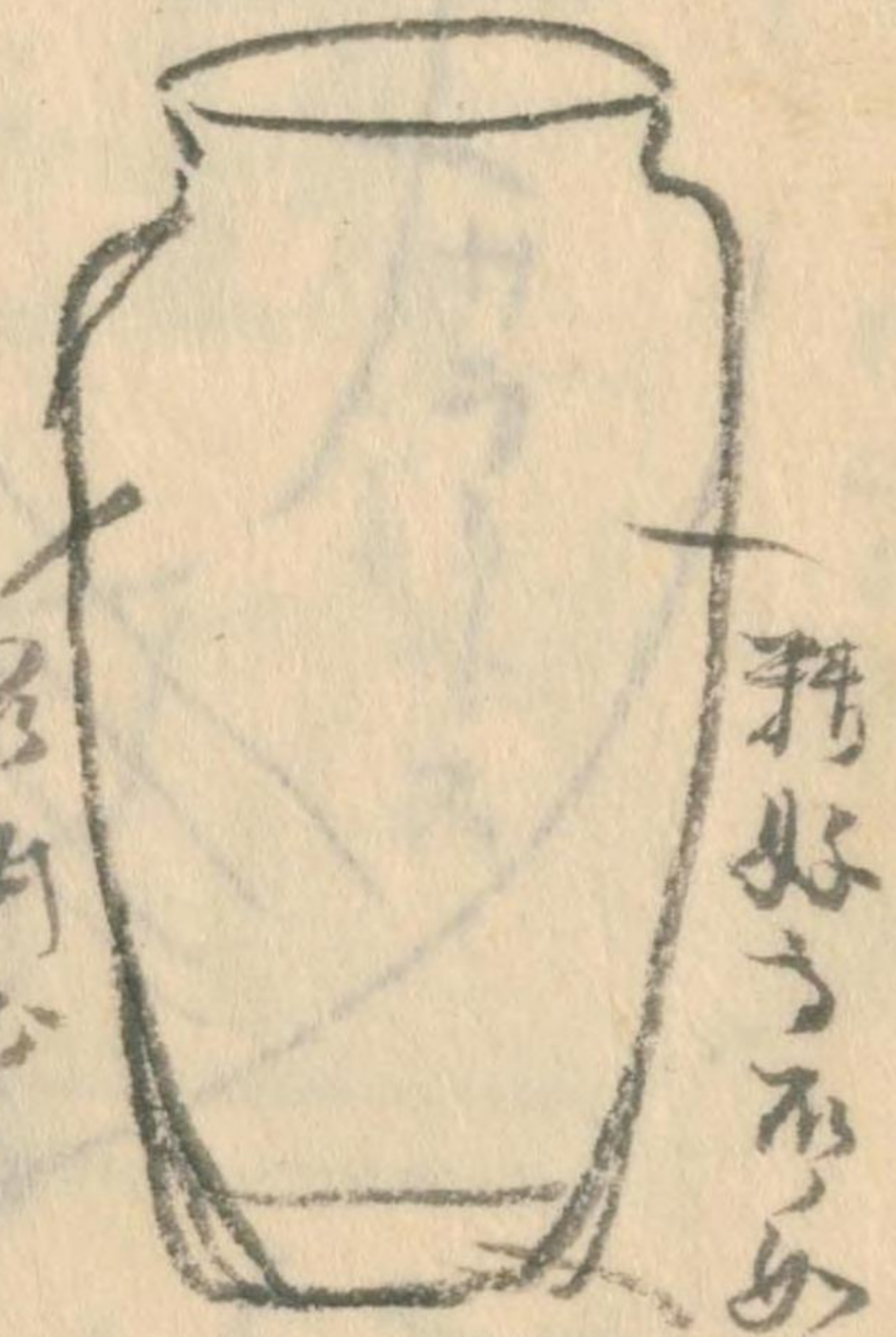
何がし



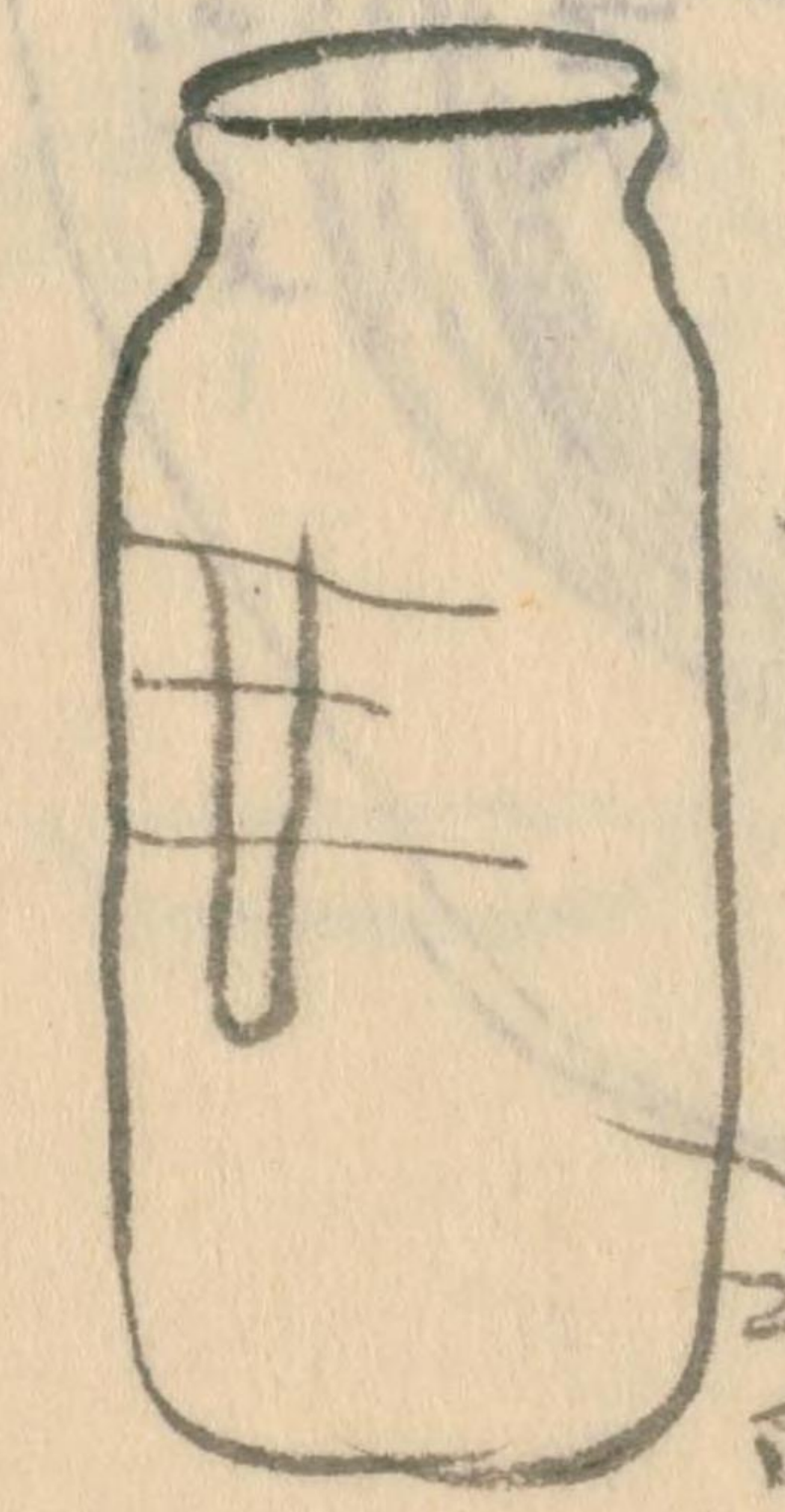
丹波



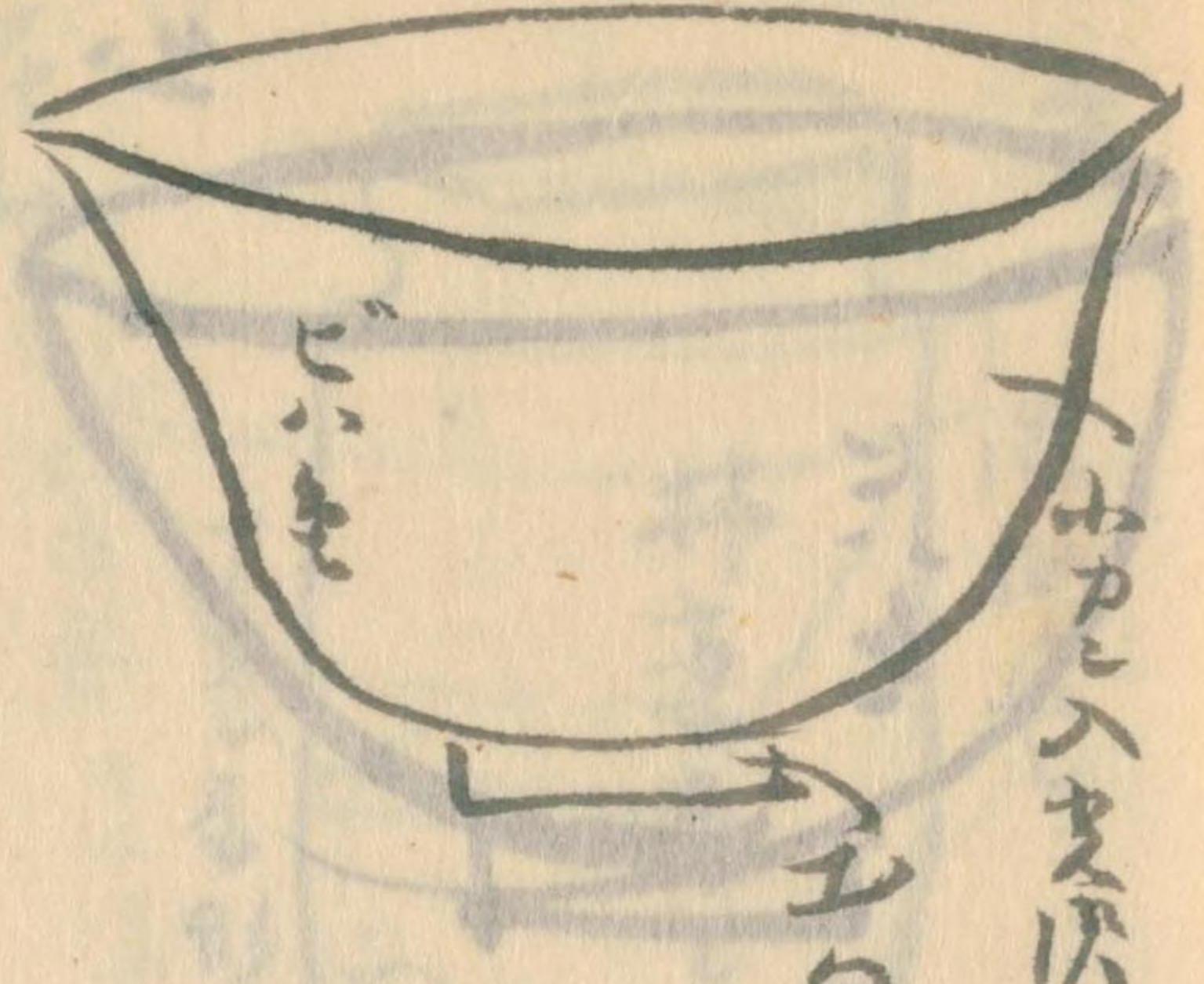
オフケ
湯浅井
屋川


釉渦出
稍好ミ形ナシ
土扉

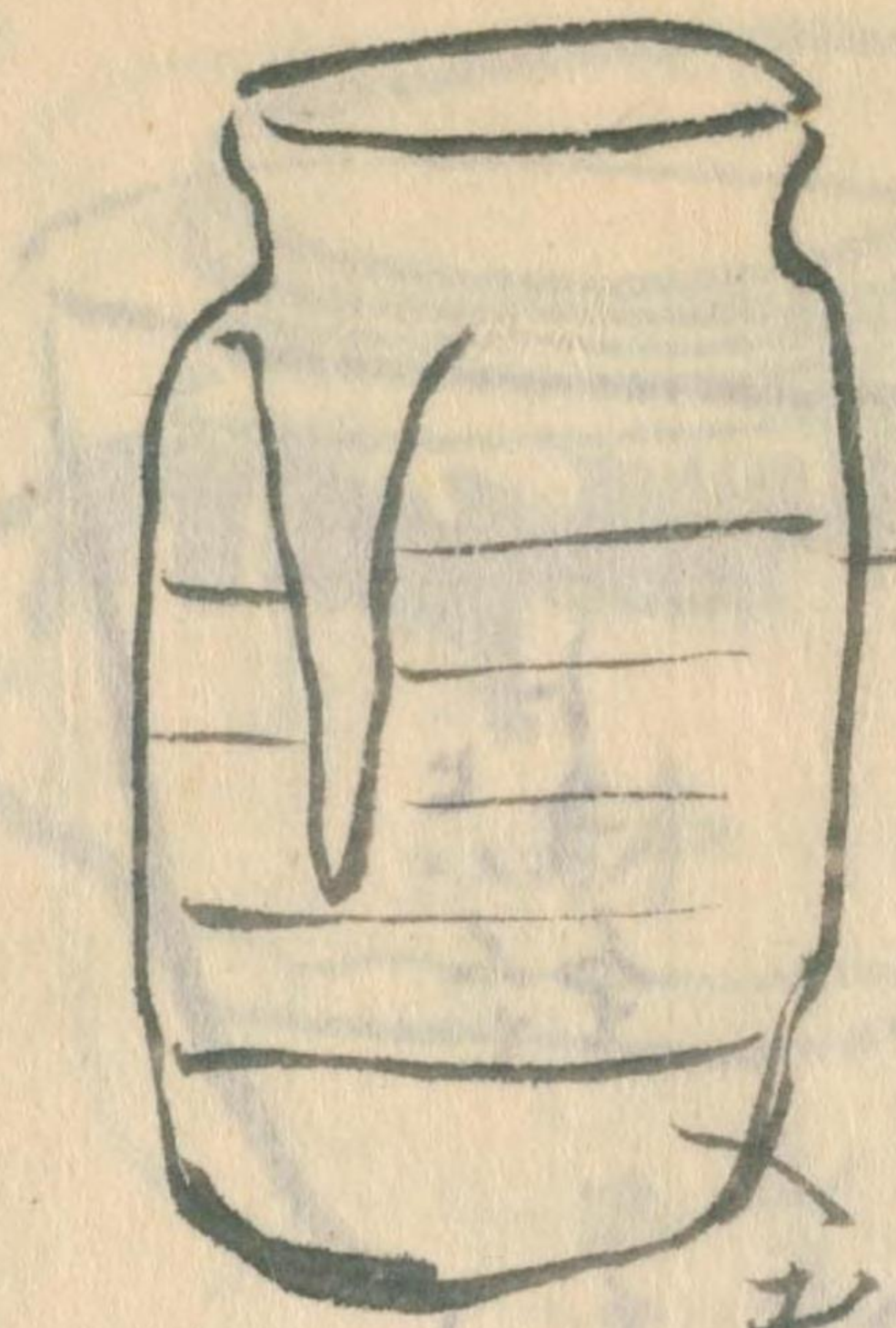
オラヘ



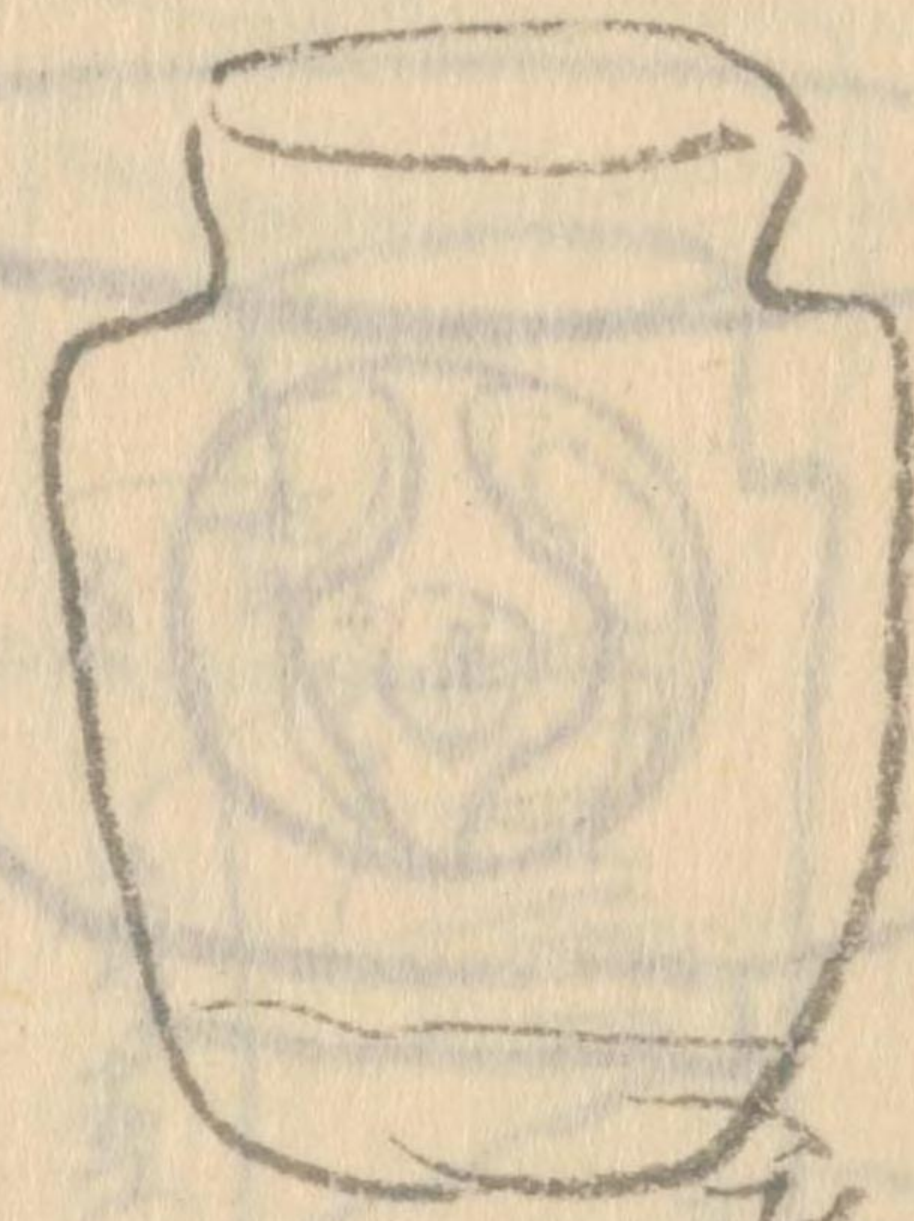
萩


ビハ色
小カヒ入支灰アリ
土白

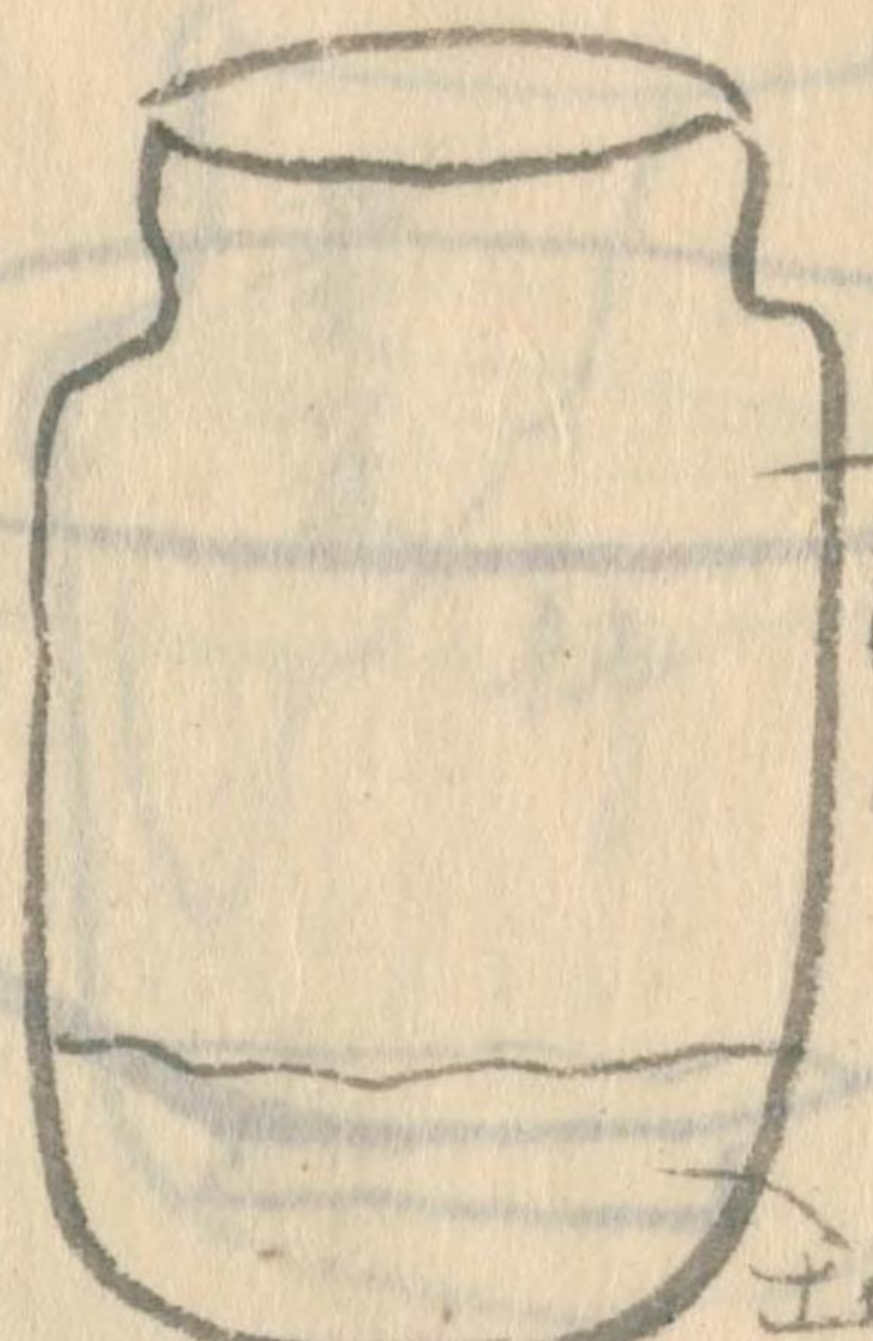
深川



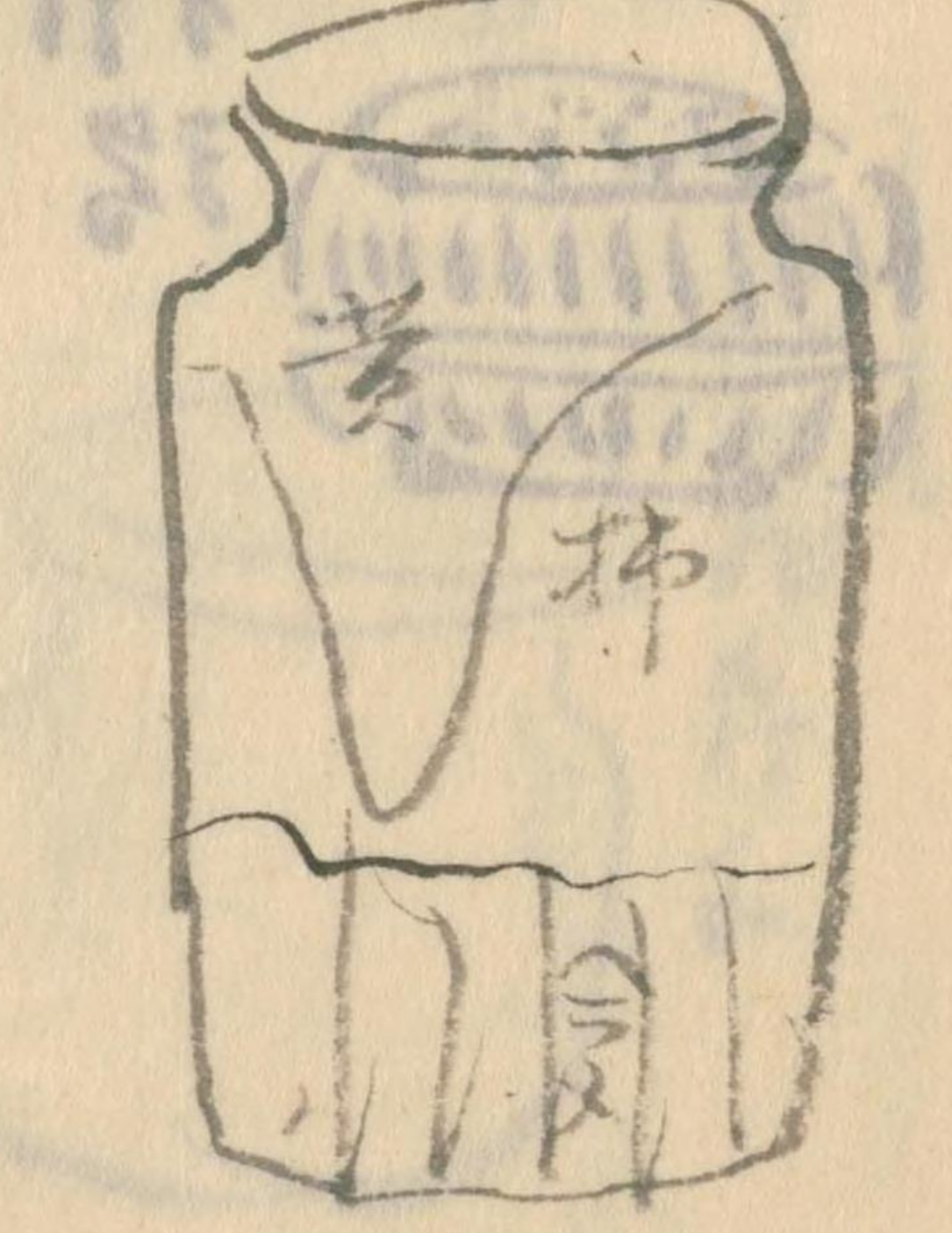
瀬セト



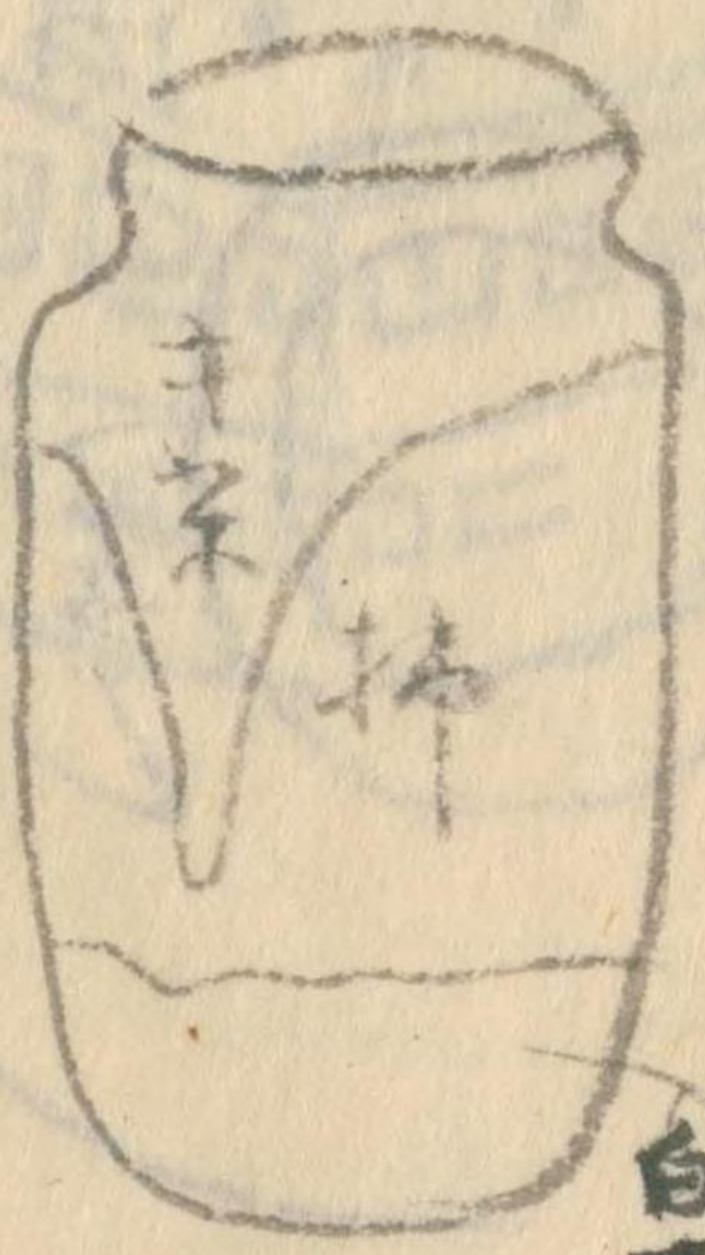
打く

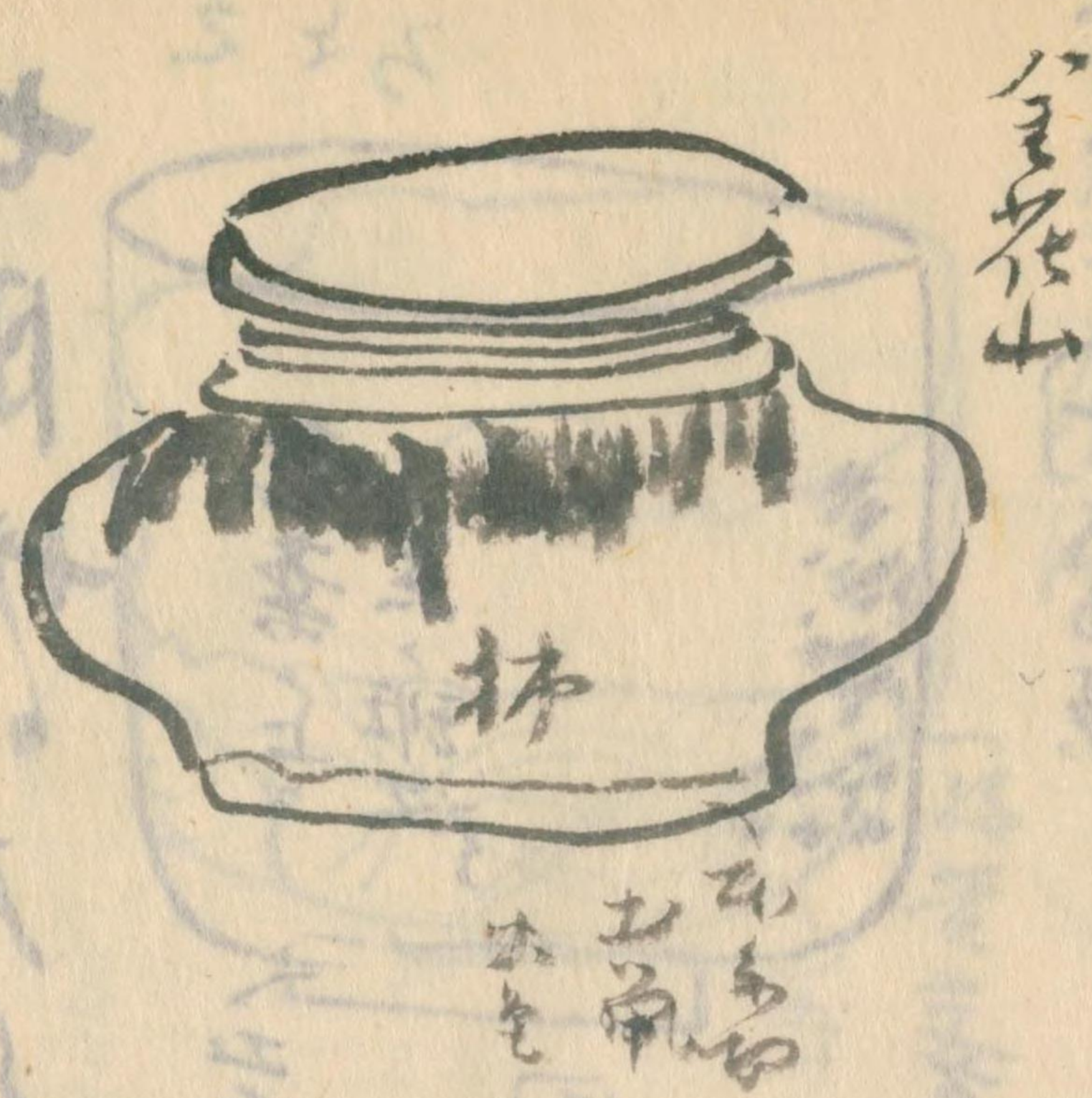


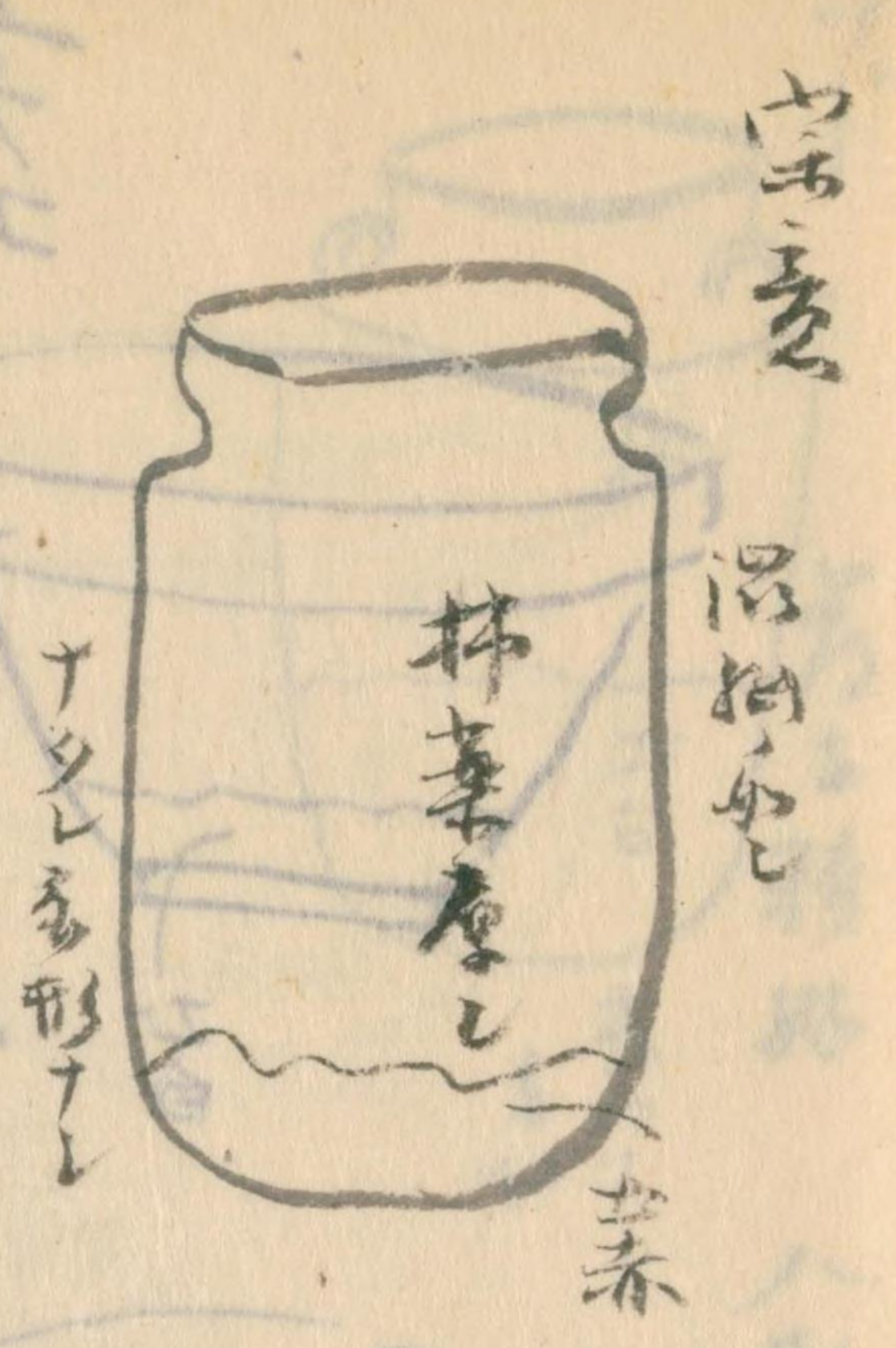
備前

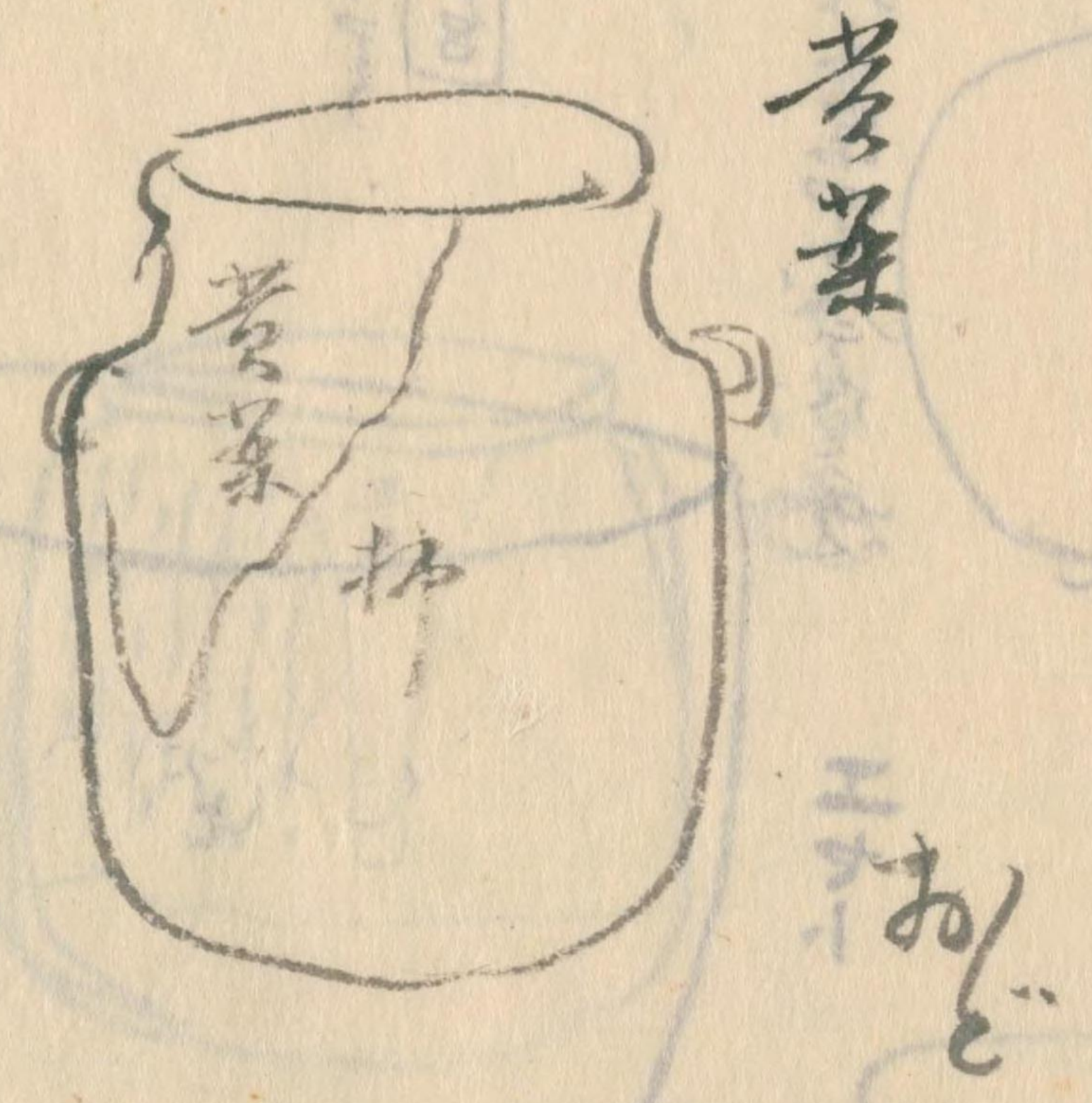


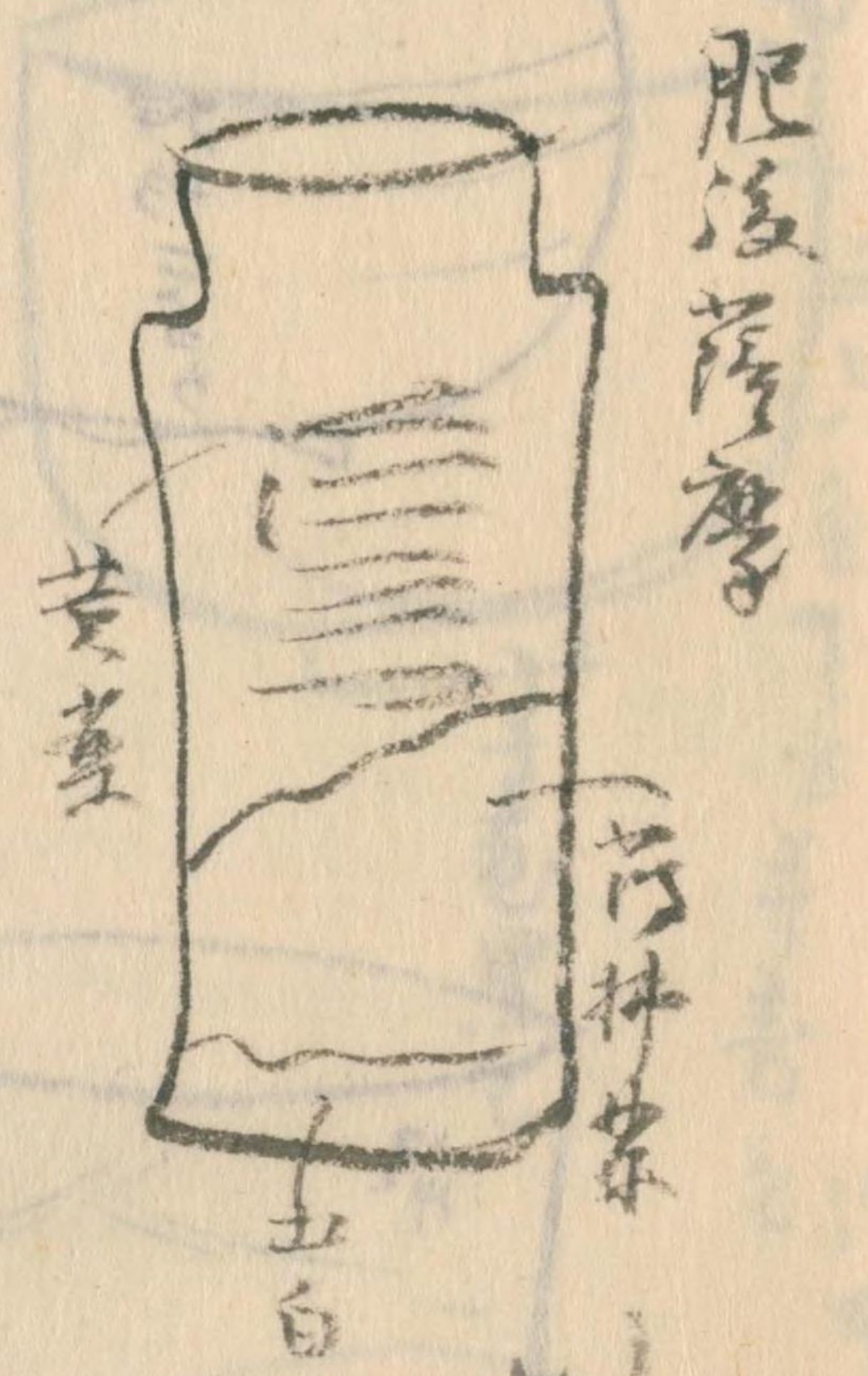
赤り身

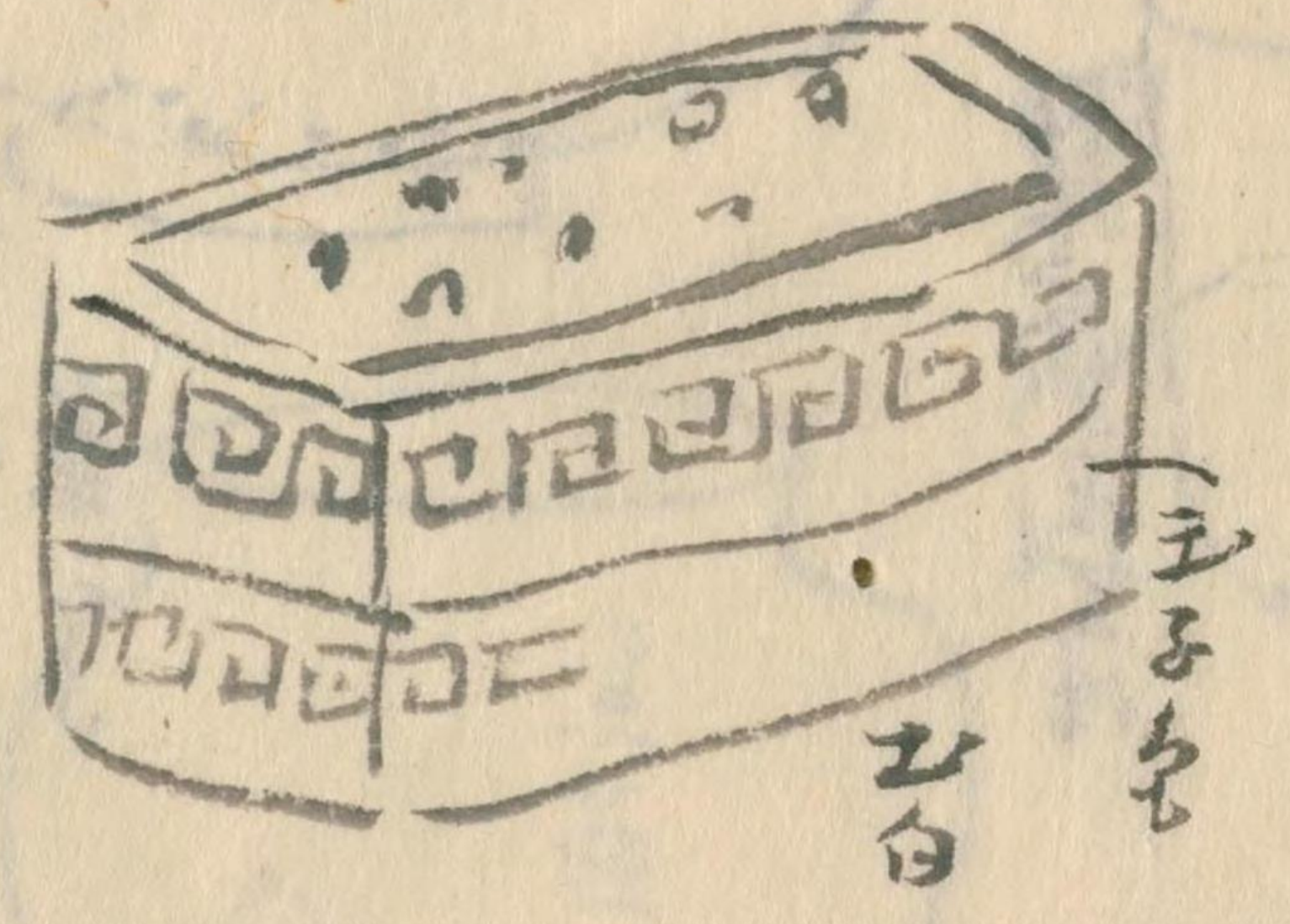


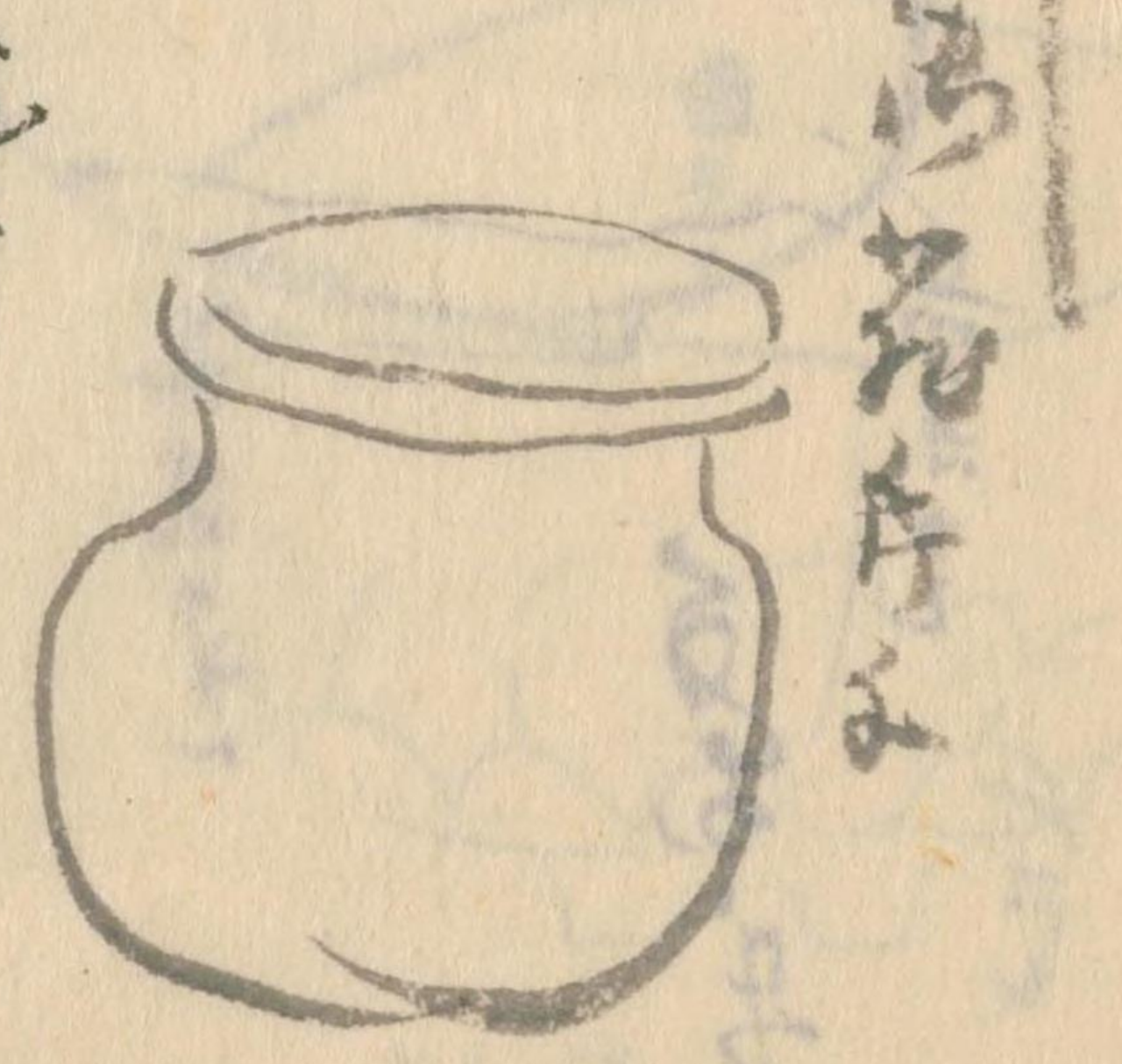

金花山
柿
[illegible]

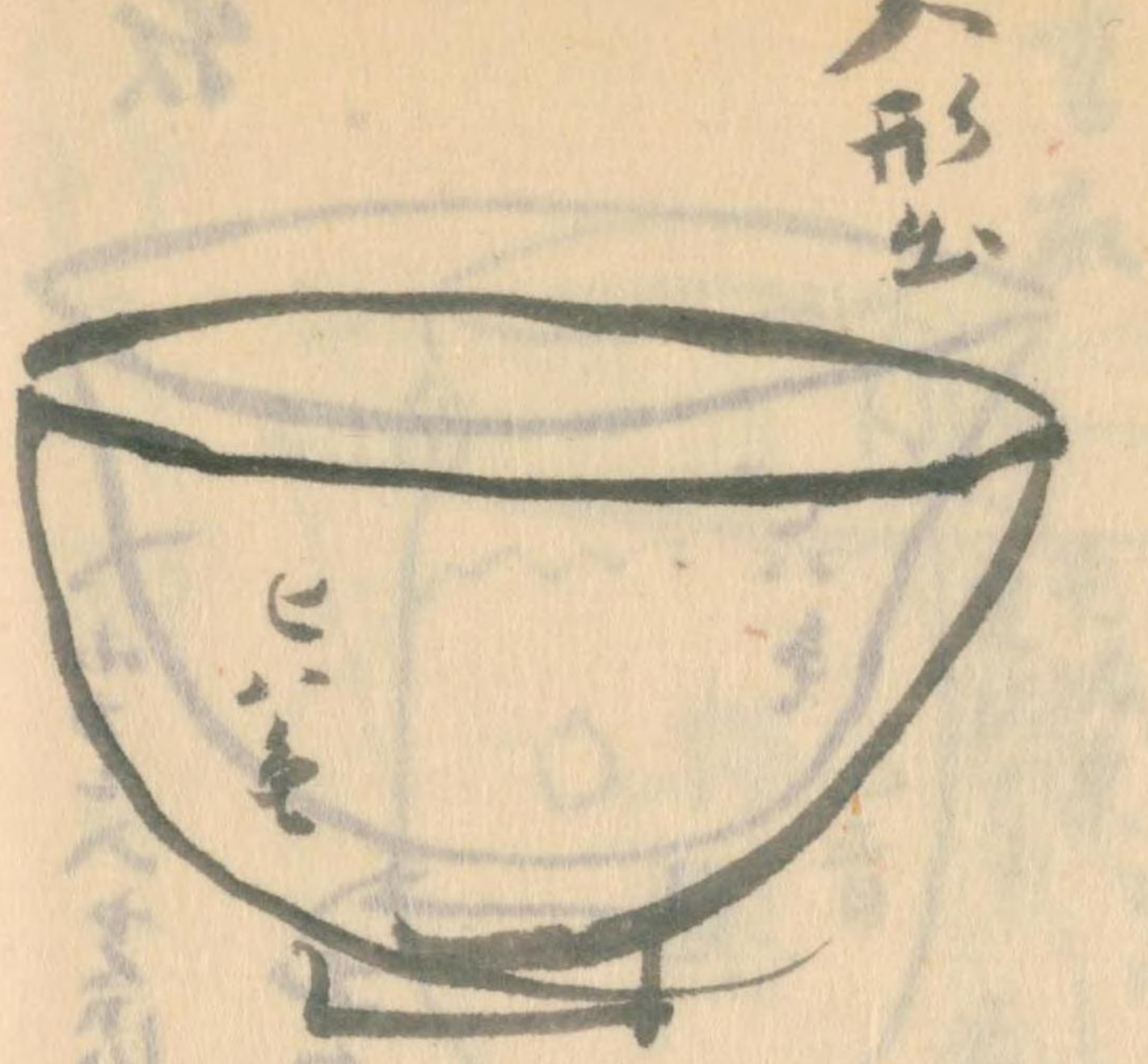

宗寿
沼樹手
柿薬厚し
ナダレ薬形ナシ
素

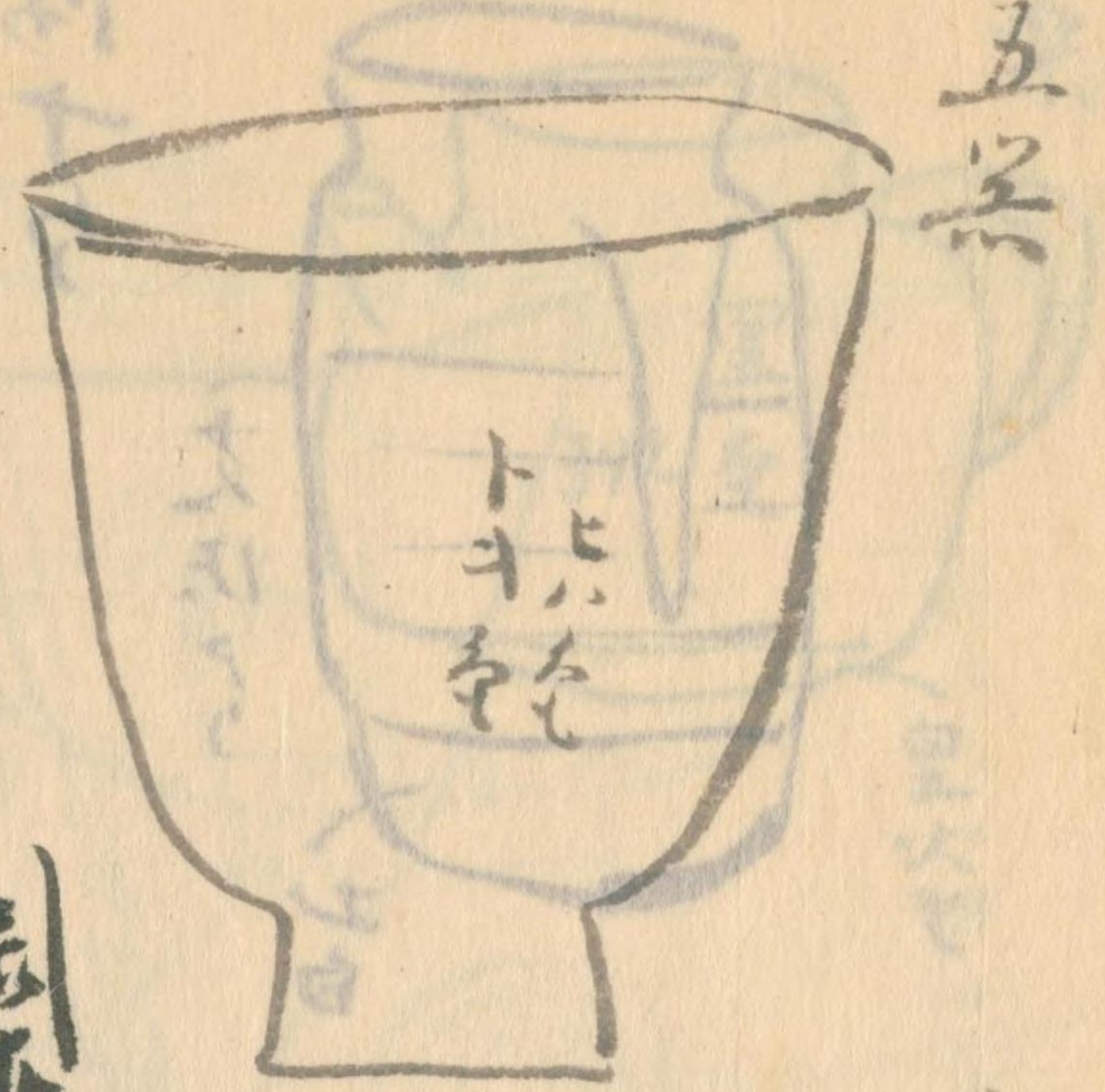

黄薬
黄薬
柿
ねぢ

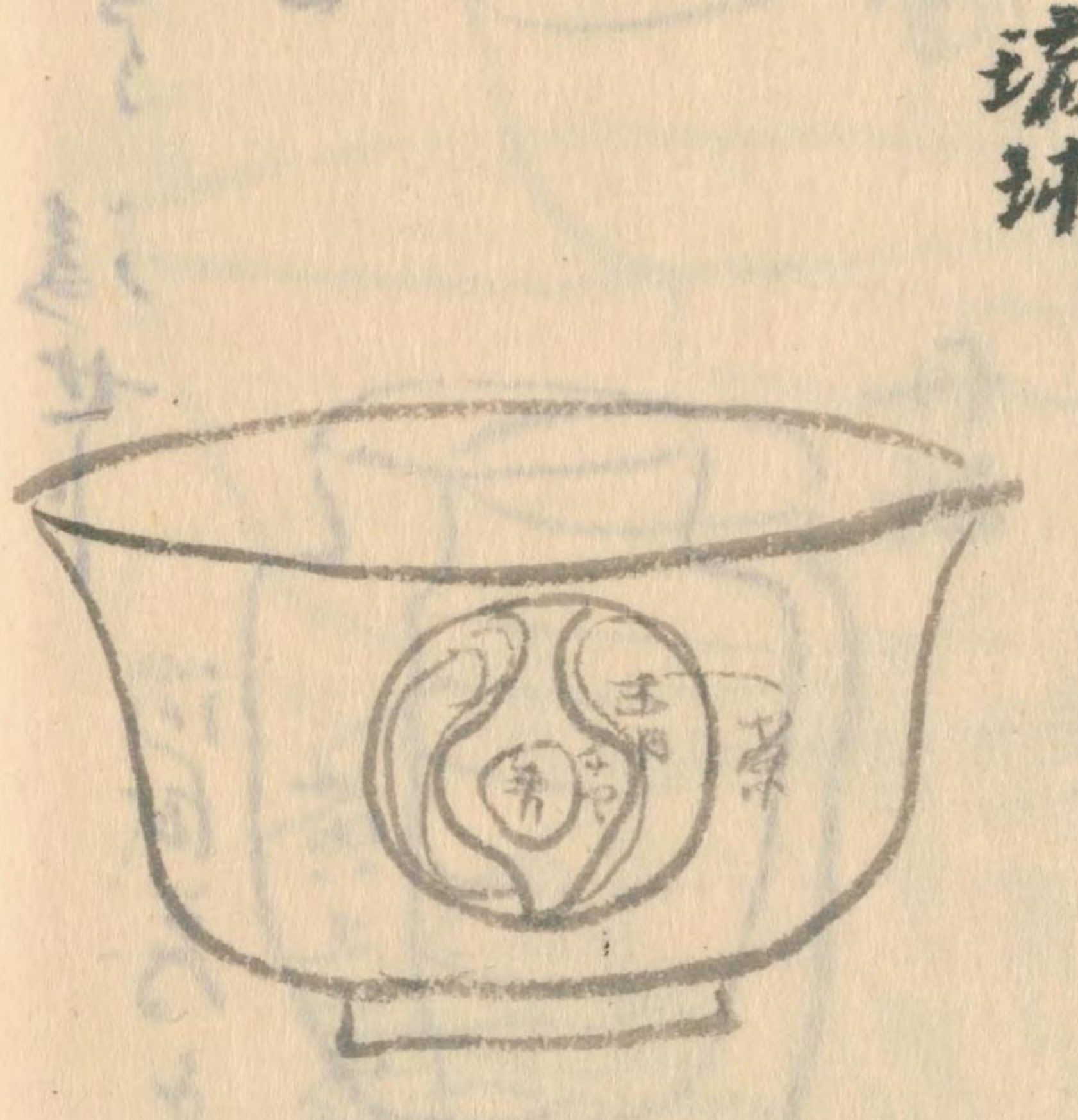

肥後薩摩
黄薬
一ノ柿茶
土白

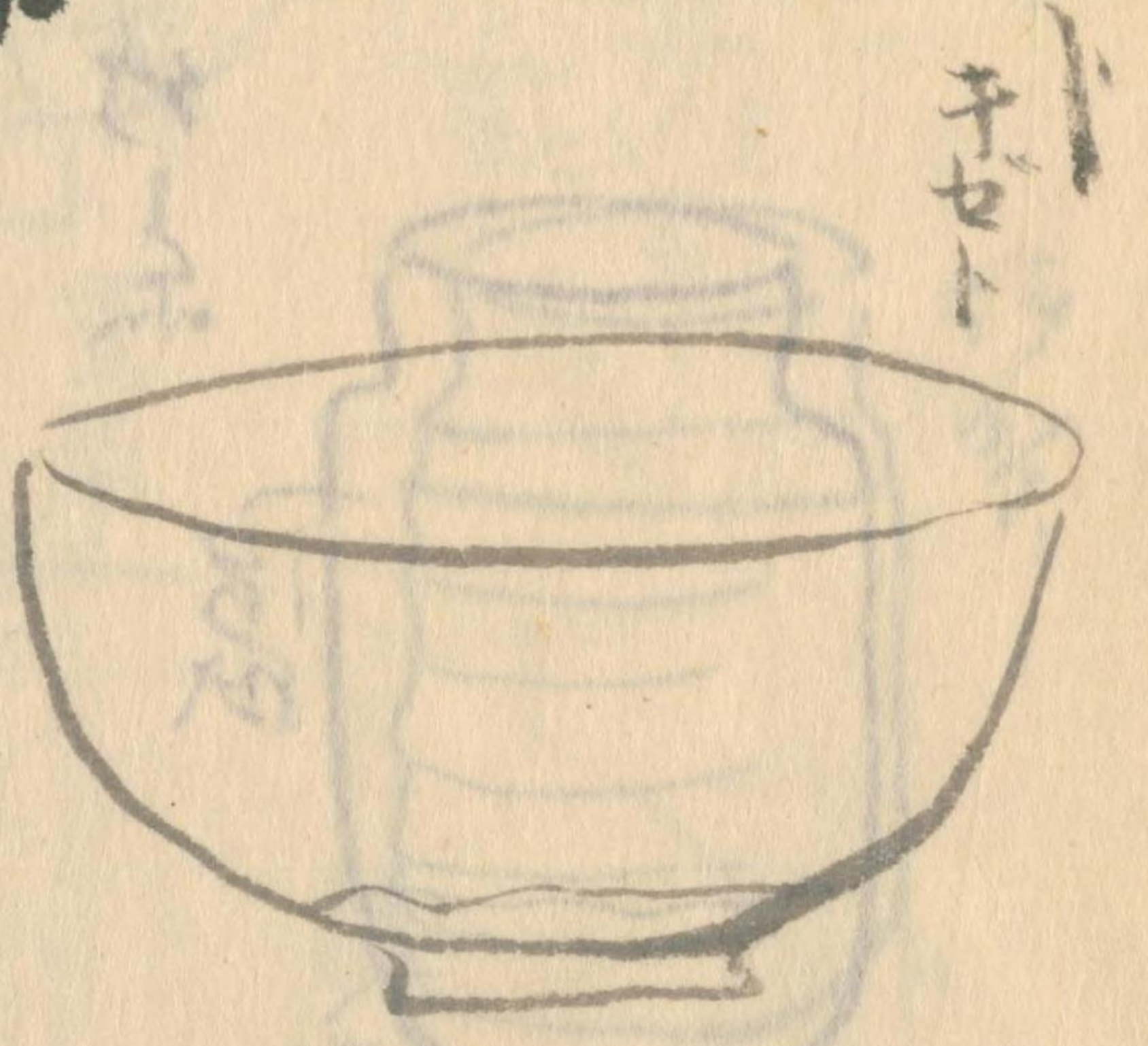

玉子色
土白

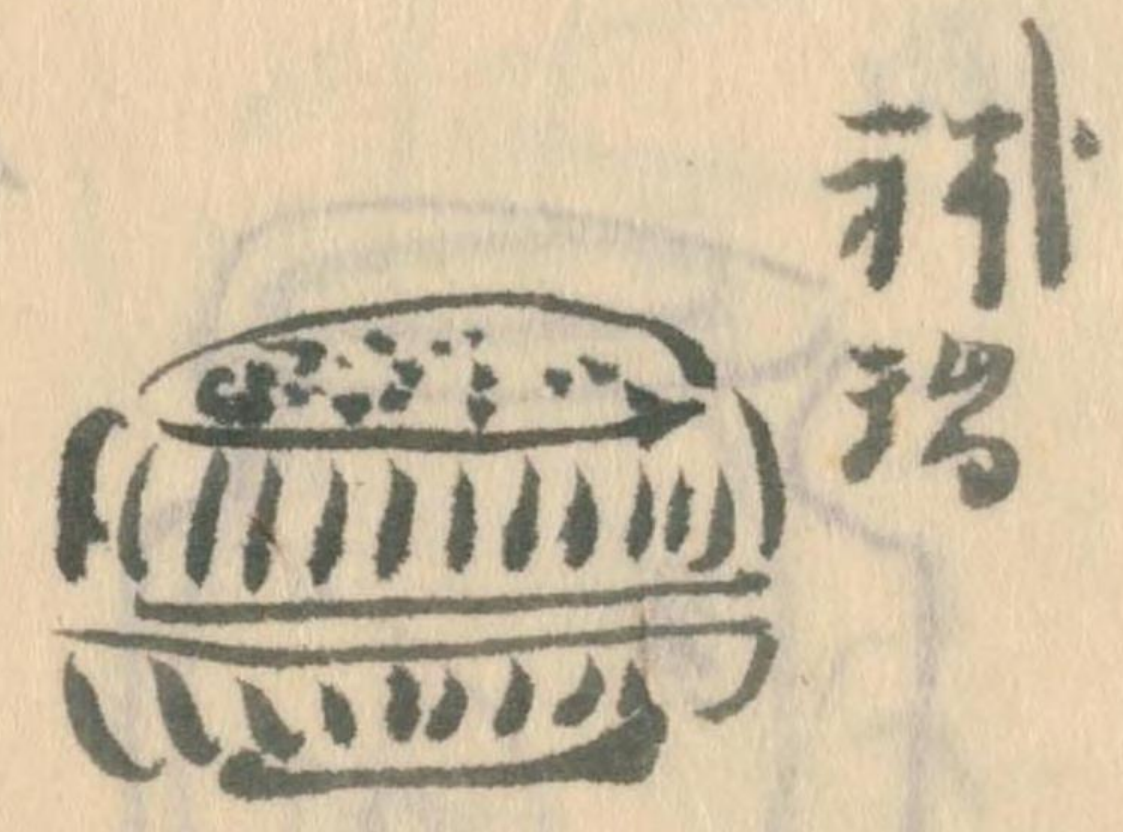

[illegible]

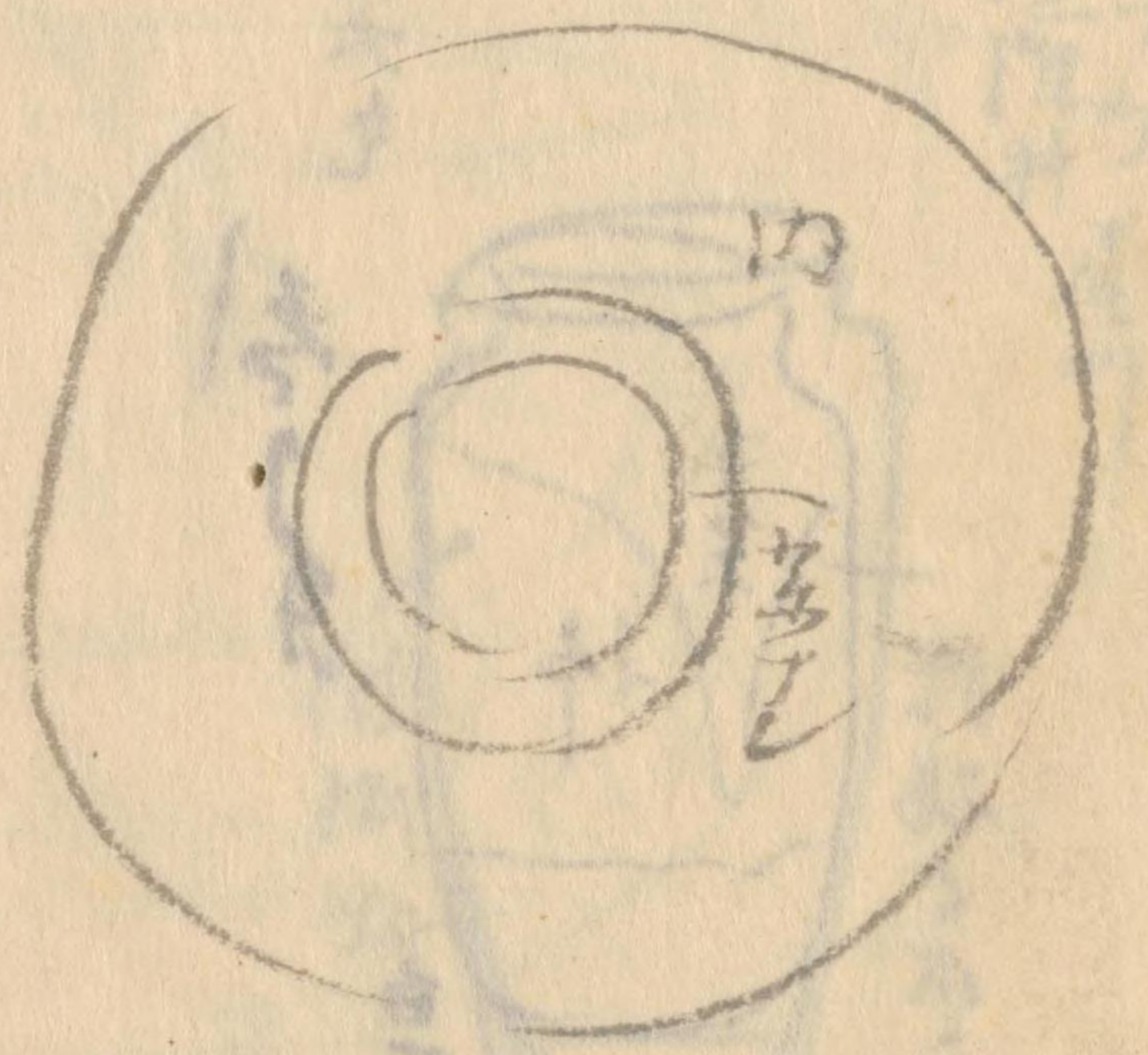

人形出
ヒハ色


五器
ヒハ色
トキ色


琉球
薬

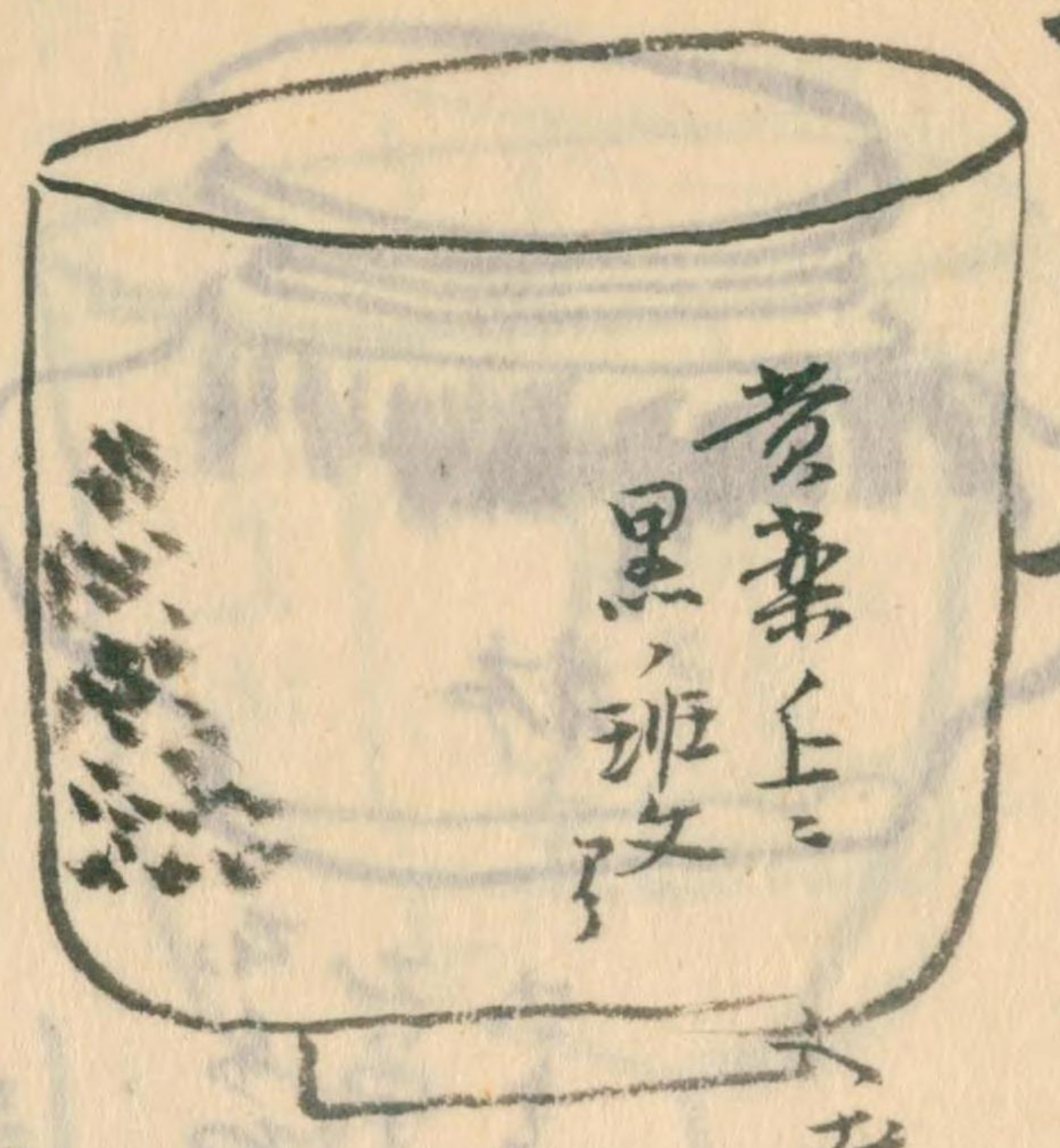

キセト


祥瑞

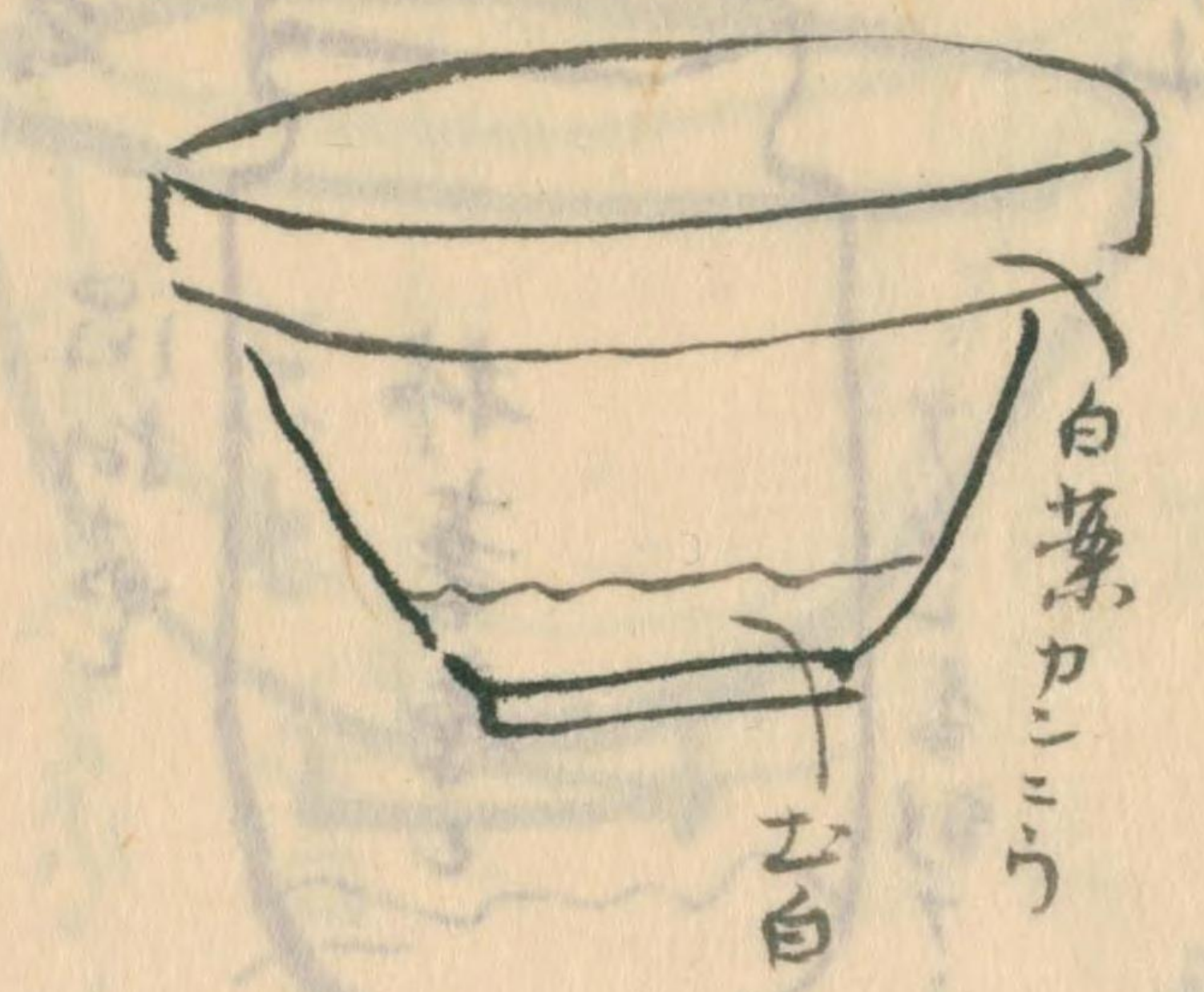

内
薬なし

七月廿、唐津也

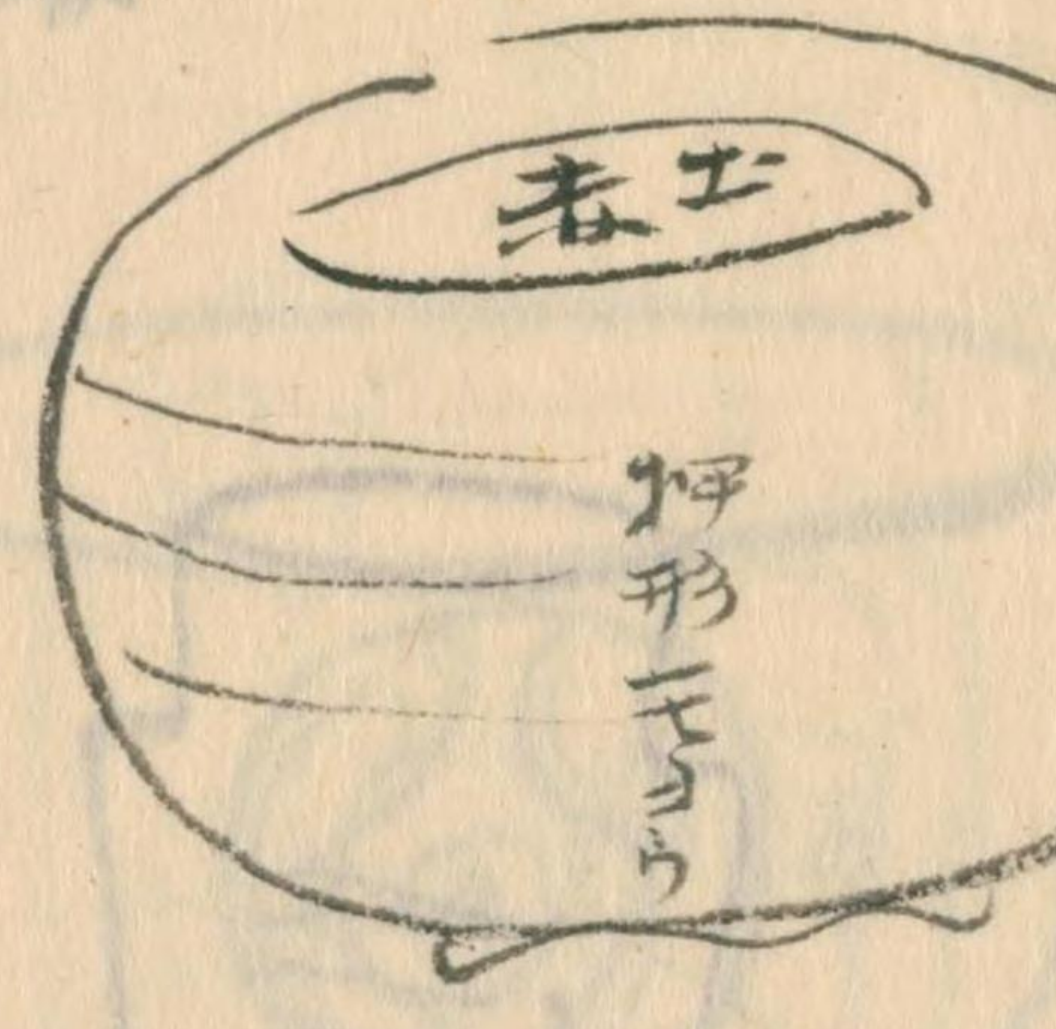
ゑとろ


黄薬上ニ黒ノ班文アリ
土赤
志戸呂
印アリ

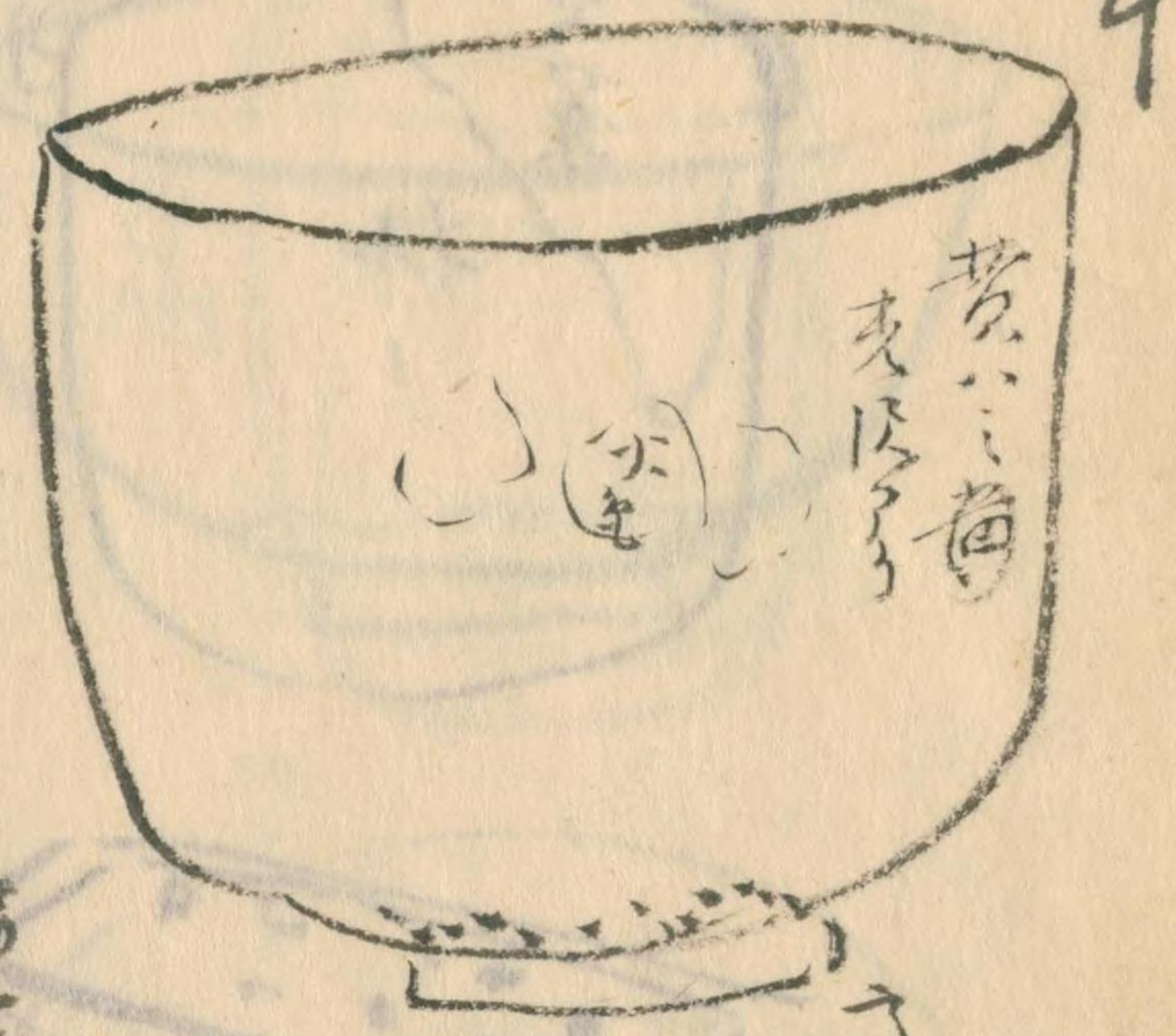
ユフゴ



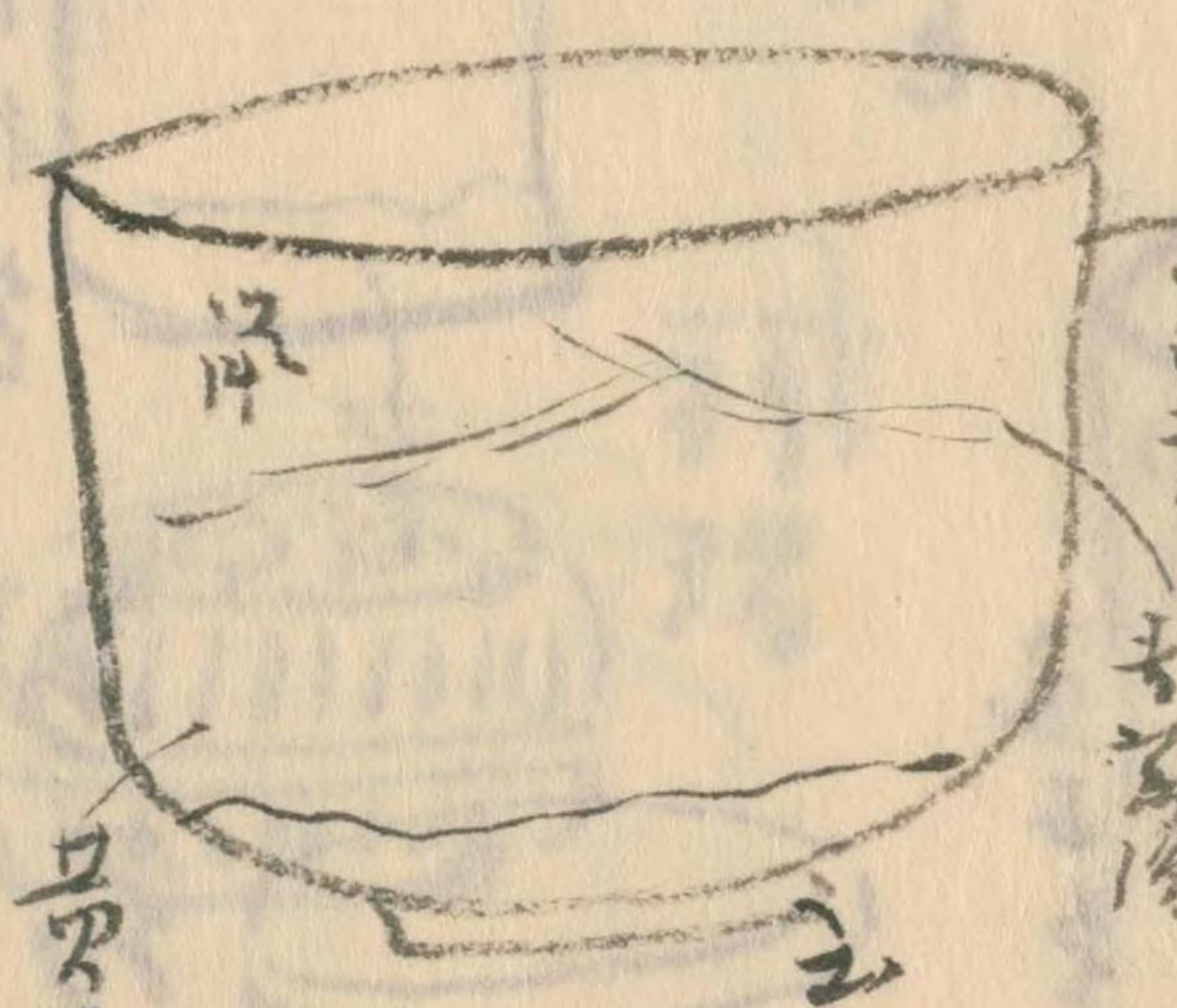
京松本宗四郎作ニ焼



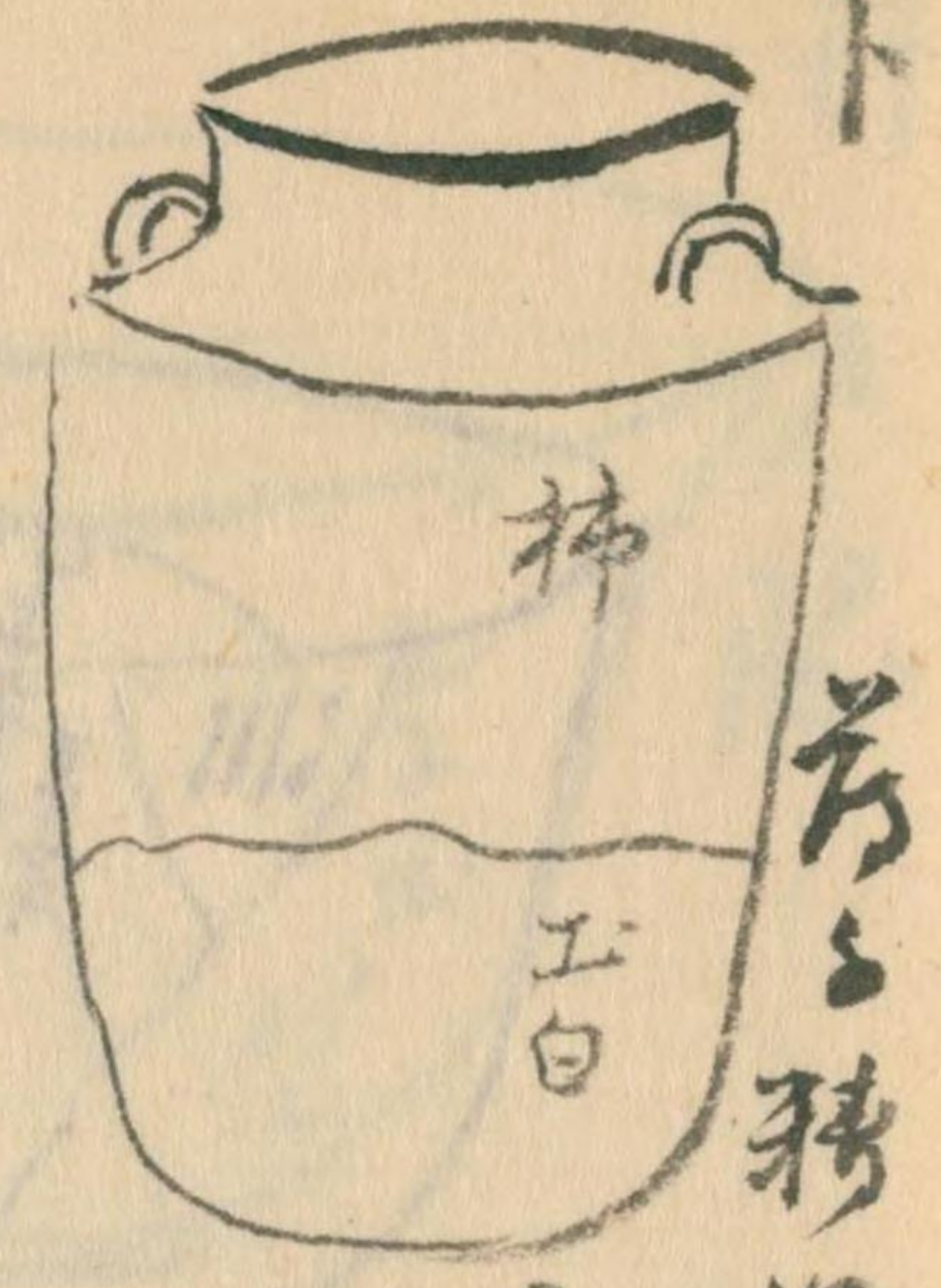
御本


黄ハニ釉
赤斑アリ
火
印
古唐物手
薬二ツアル

エセト

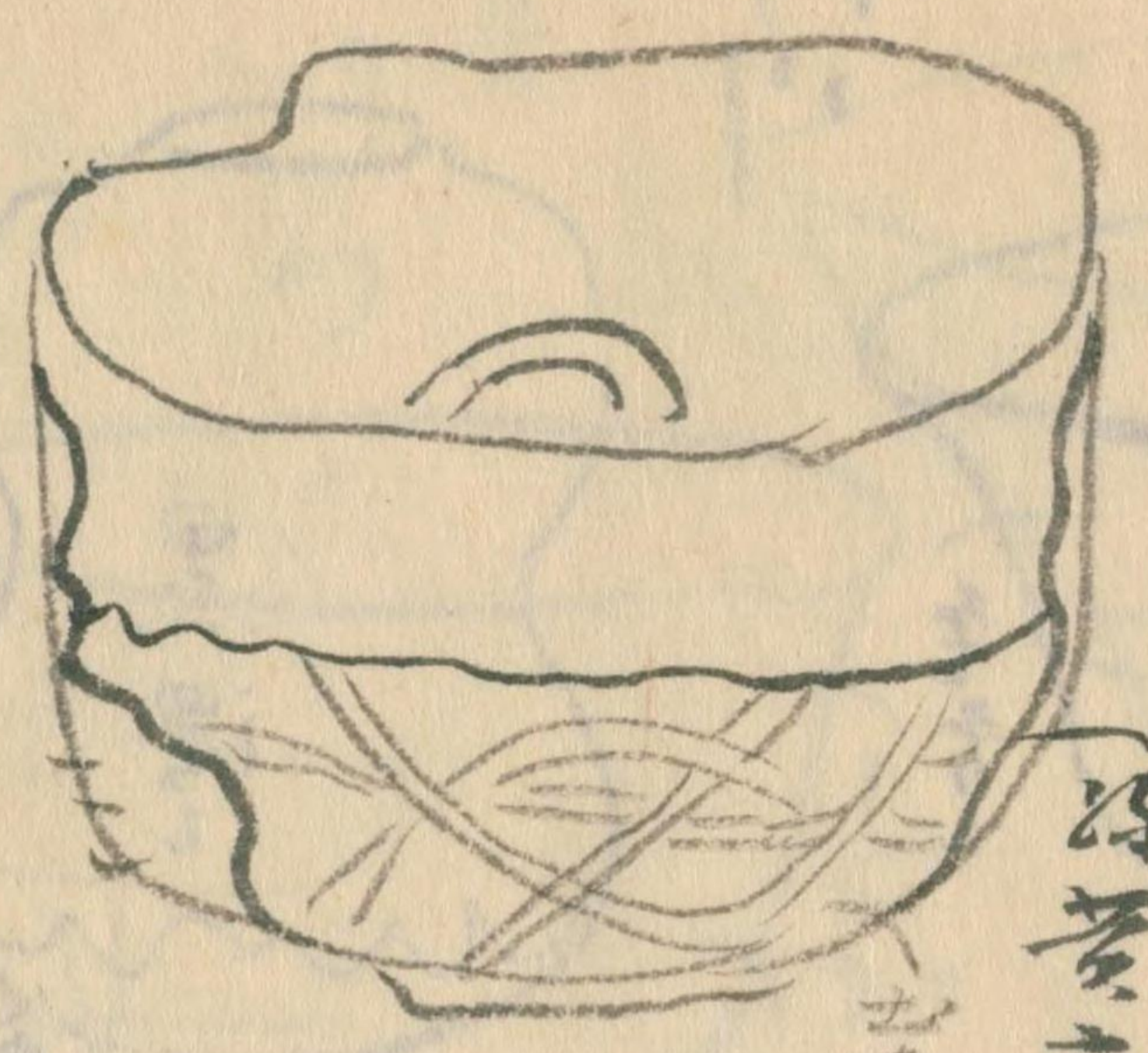

釉
カンニウ
赤薬溜
黄ホカシ
土ヌケ
白釉乗ん

ヨド

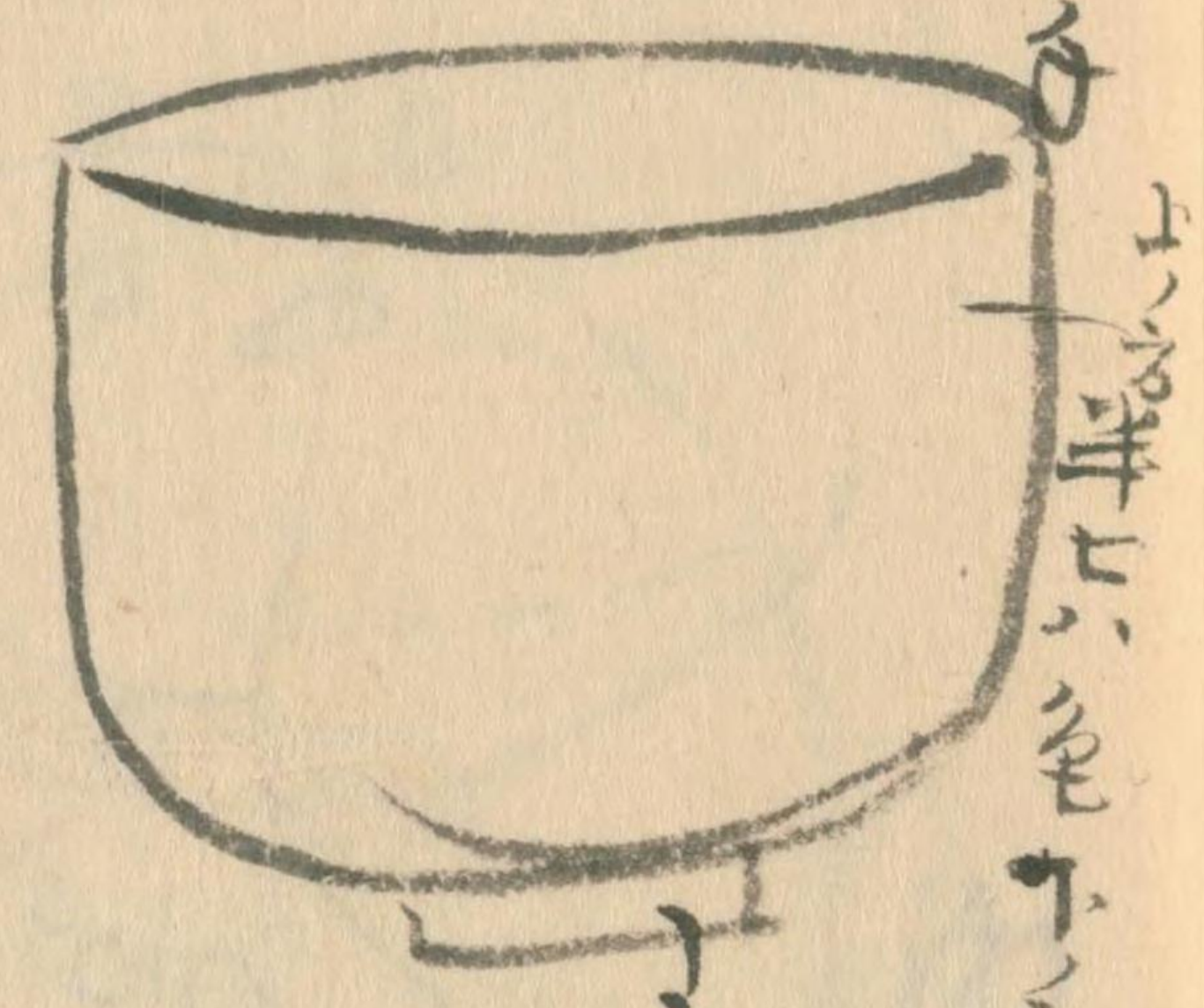


芦ヶ精好

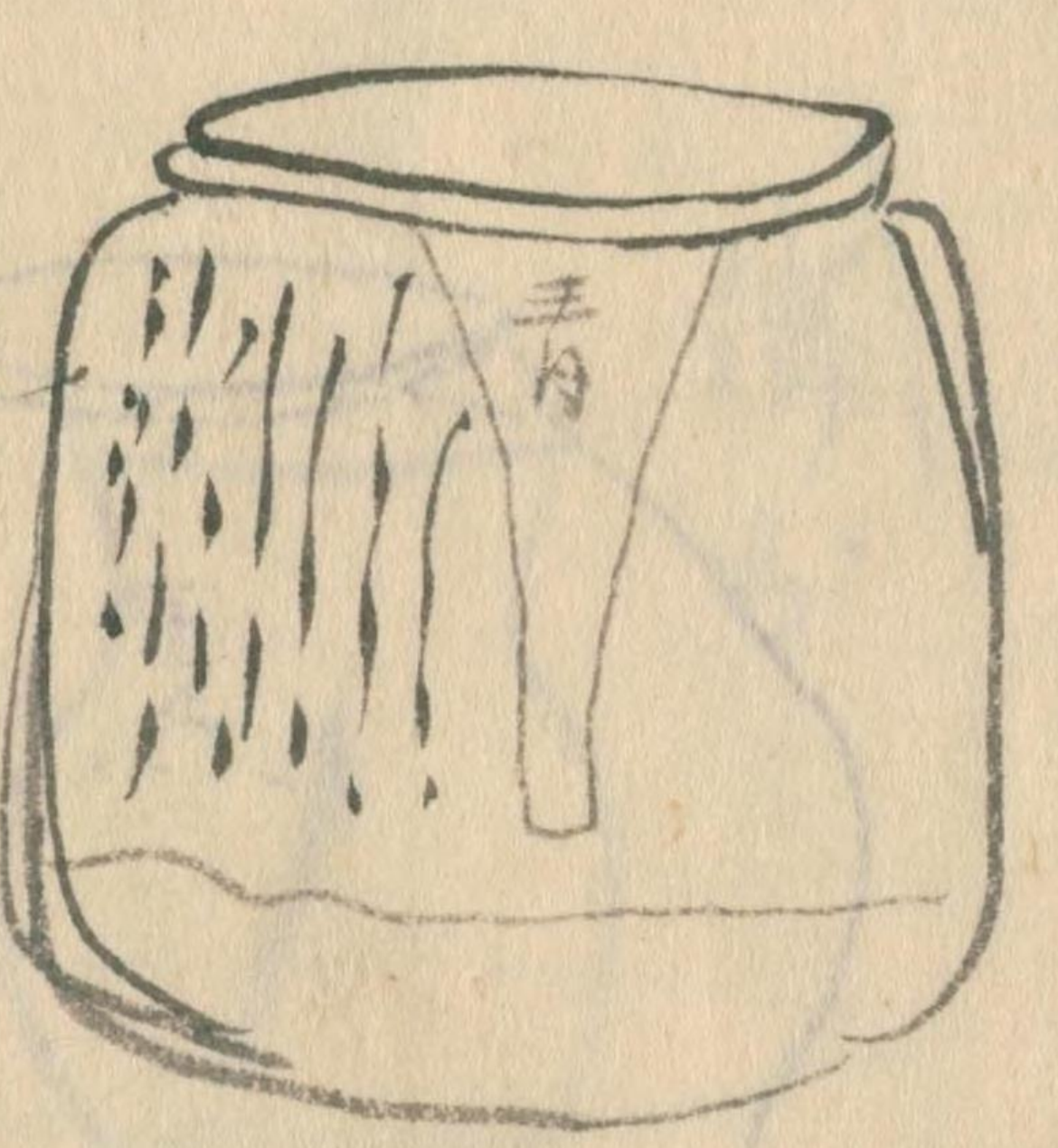
コタラ唐津



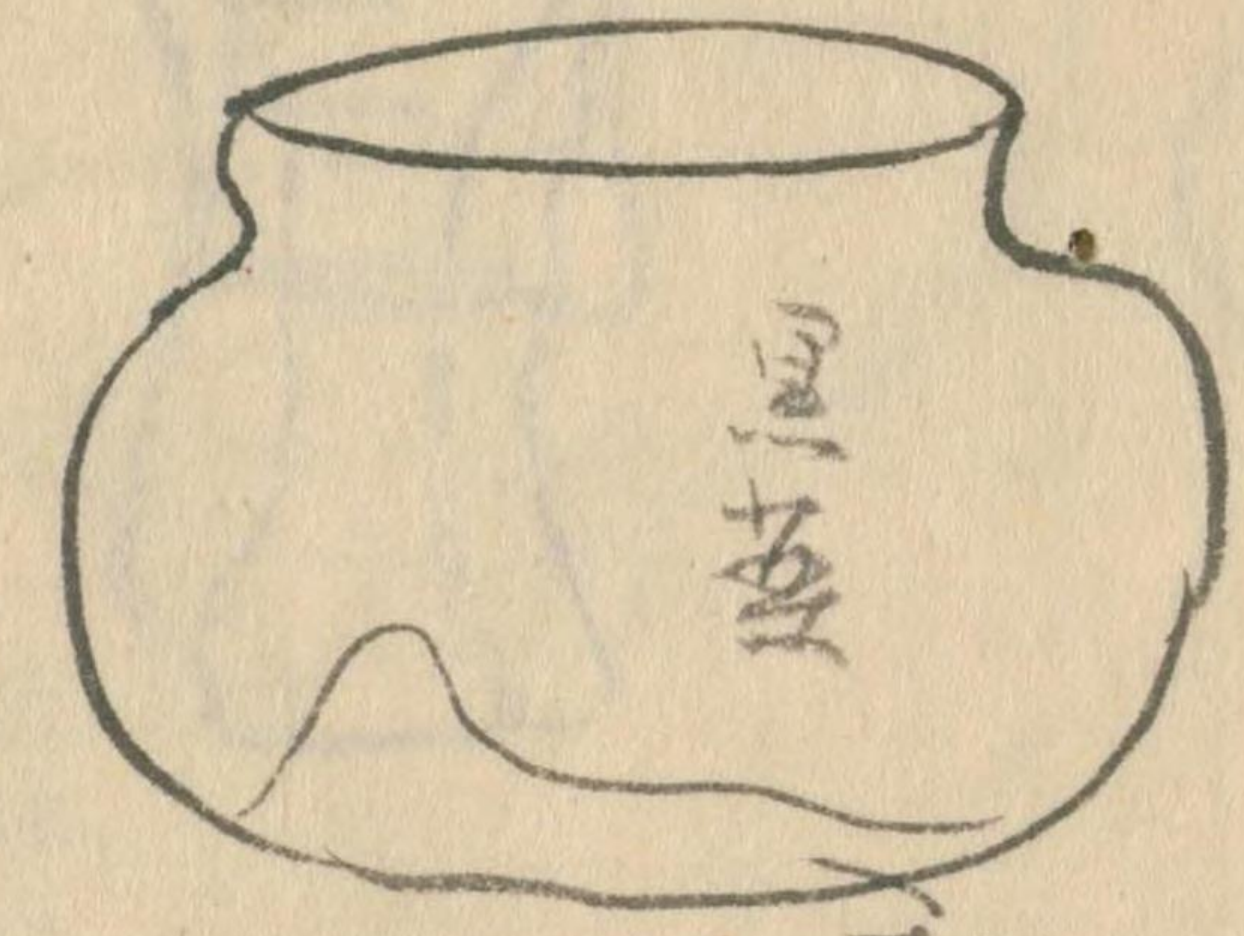
八形手


上ノ方
半七ハ色
下ノ方
半青色
土ヨモ黒色

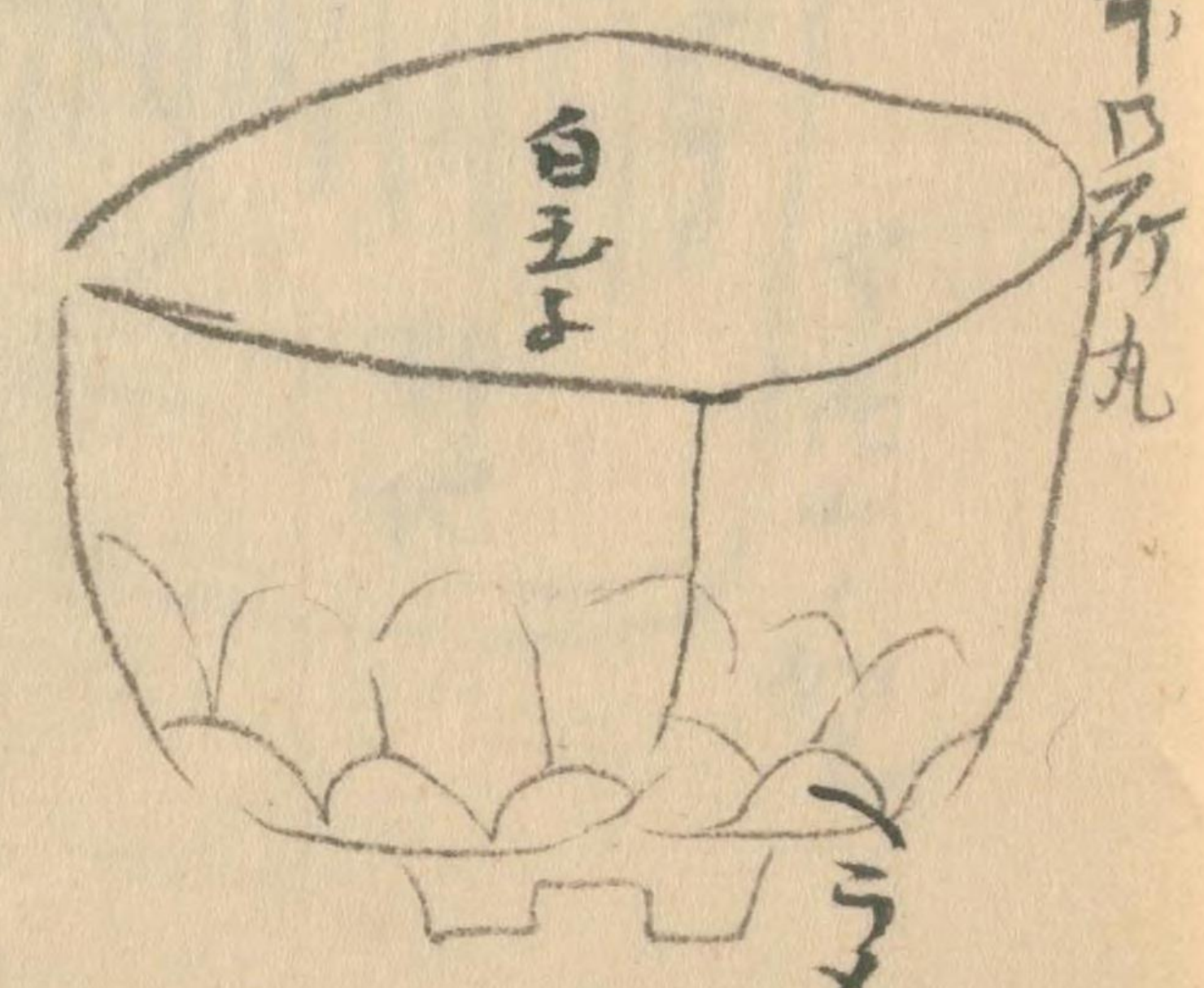
宇治焼



黒唐津

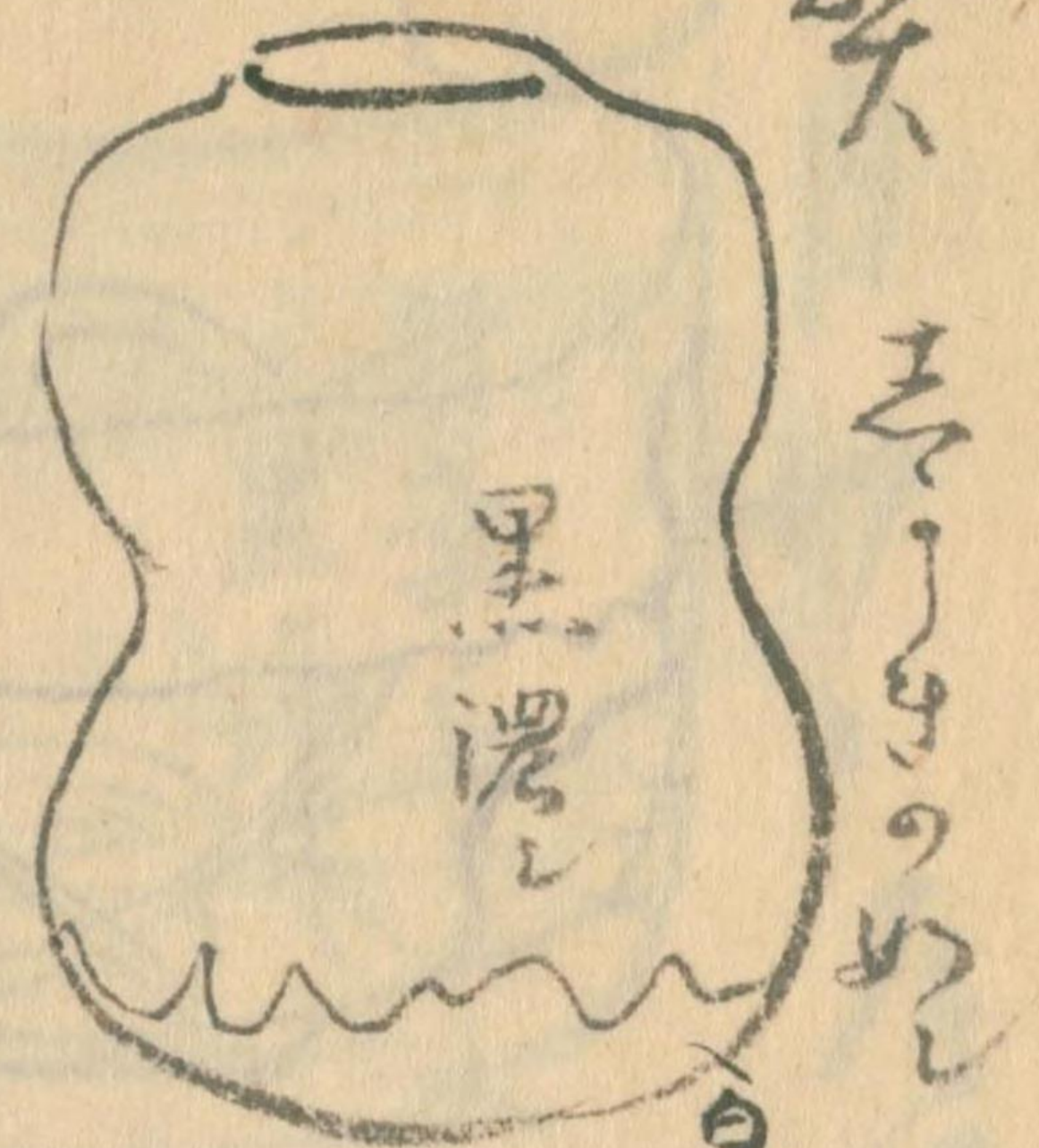

黒薬
白釉乗ん
土赤
糸切

御本口所丸

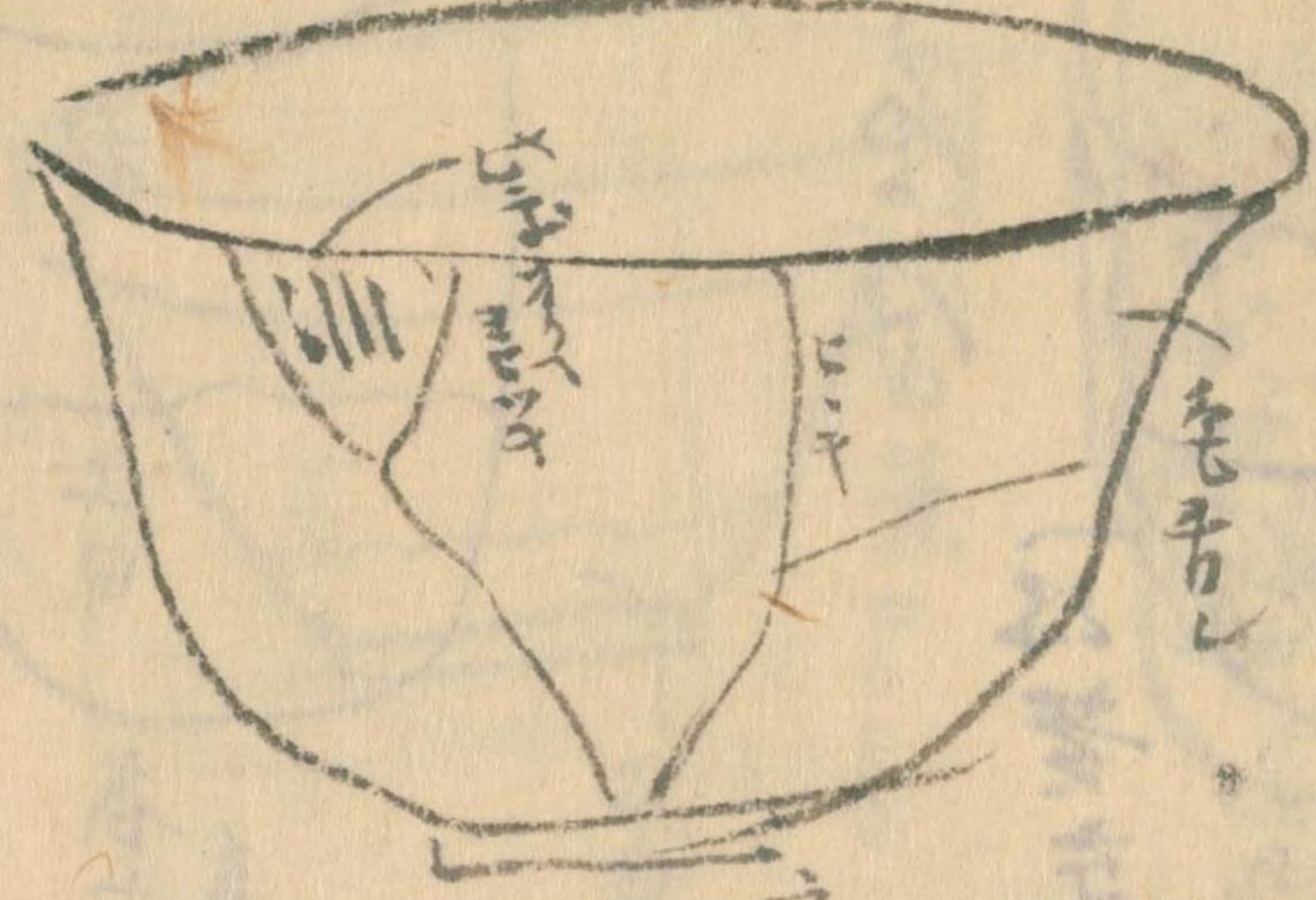


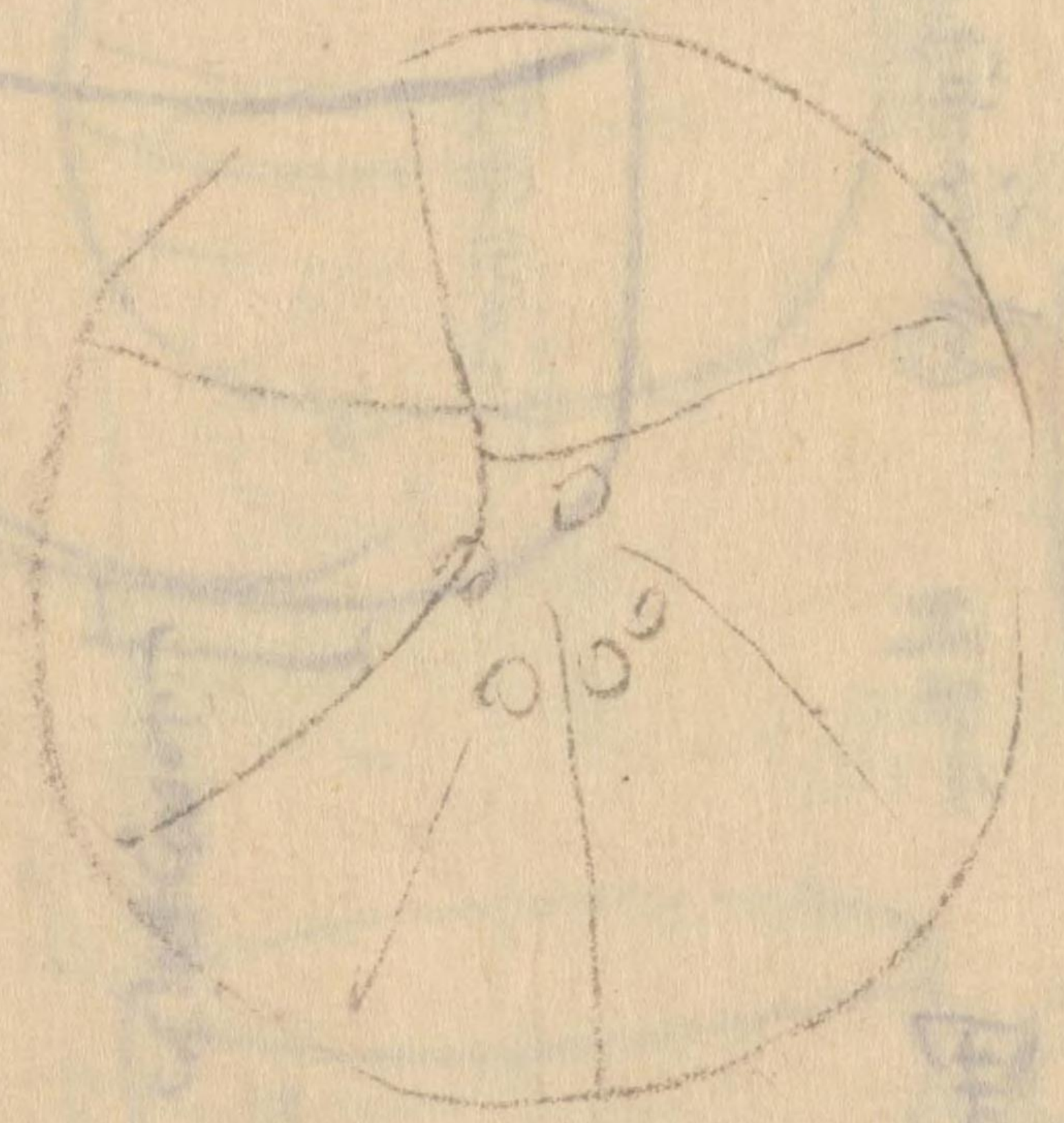
ガラス使用

伊賀

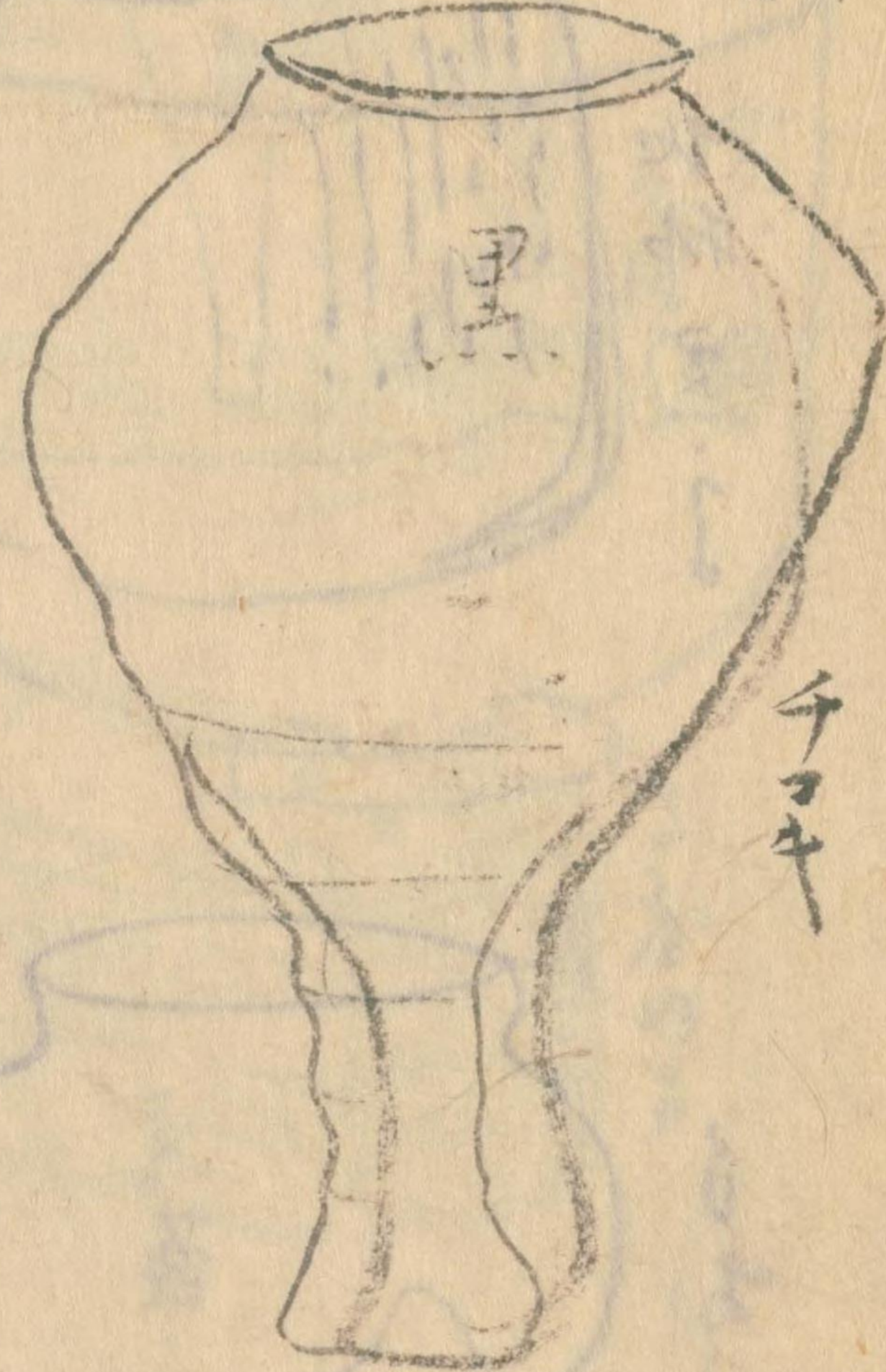

赤てきの如し
黒渋し
白玉大分アリ

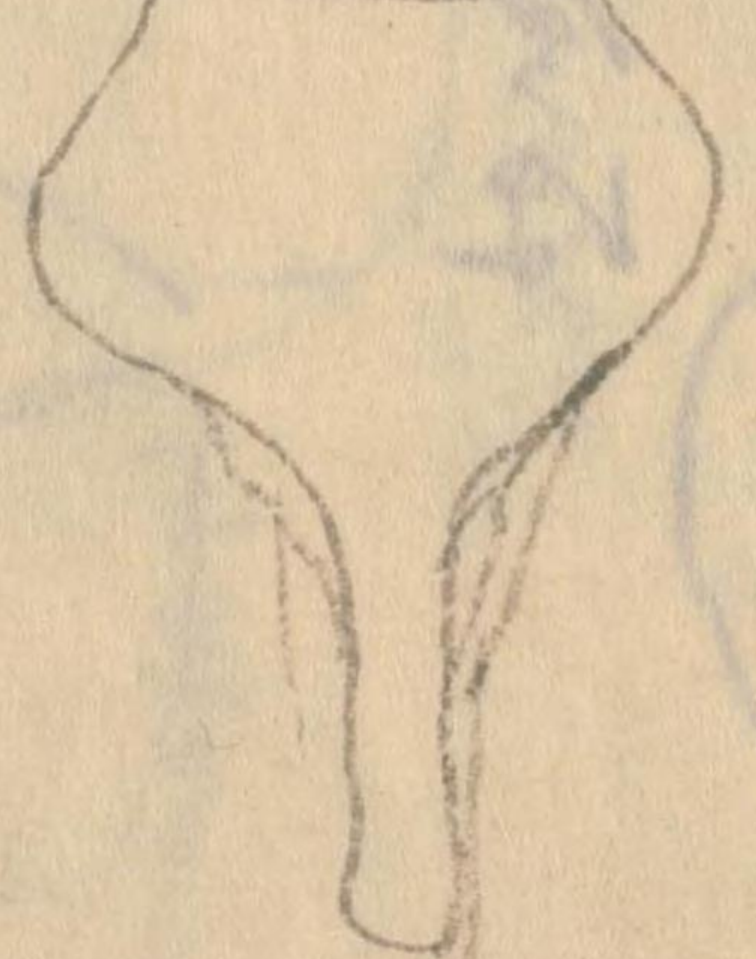
柳川


ビードロ入ミヒツキ
ヒヽキ
毛青し
ウ元コシ茶ヽる

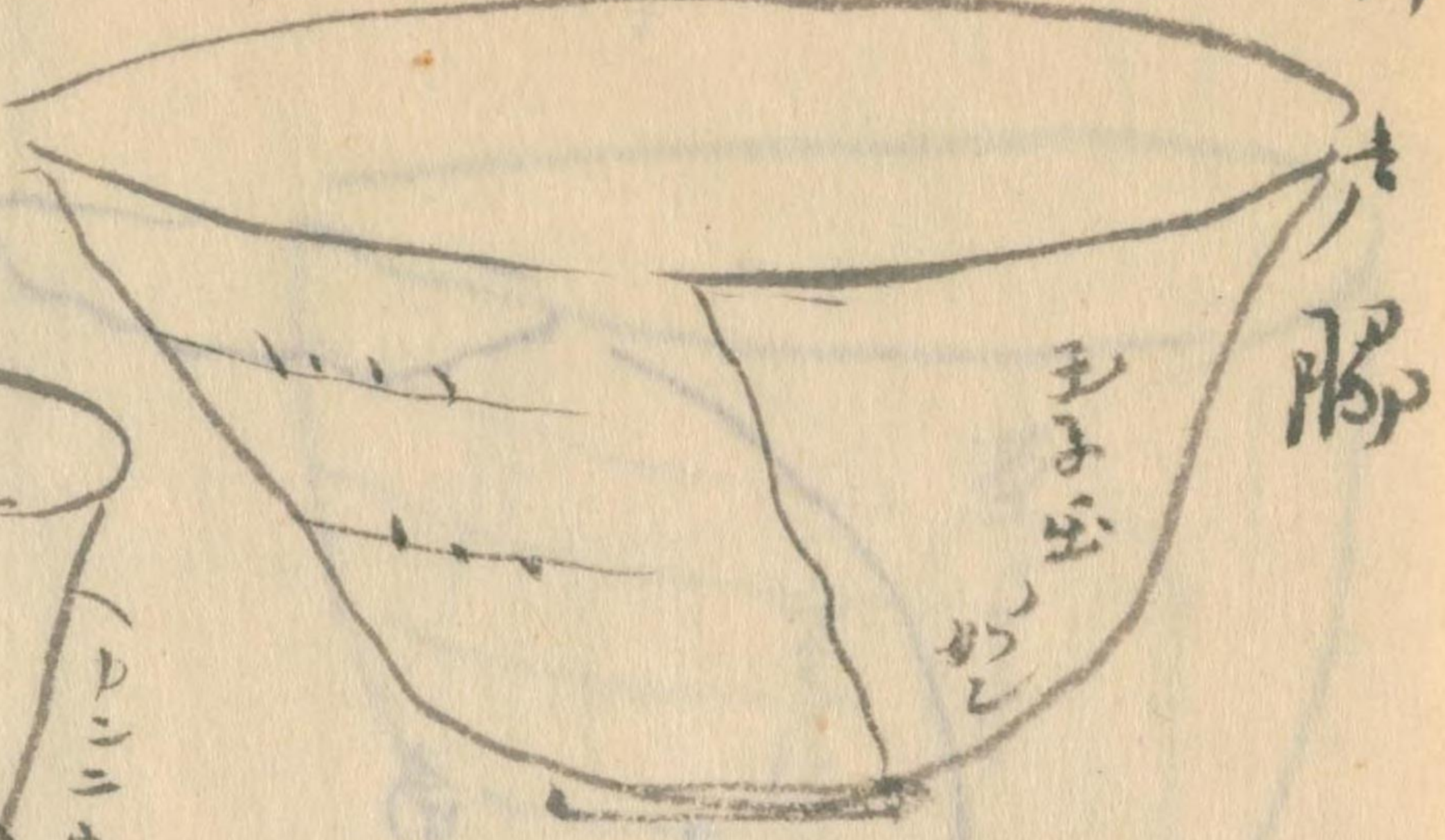


朝鮮

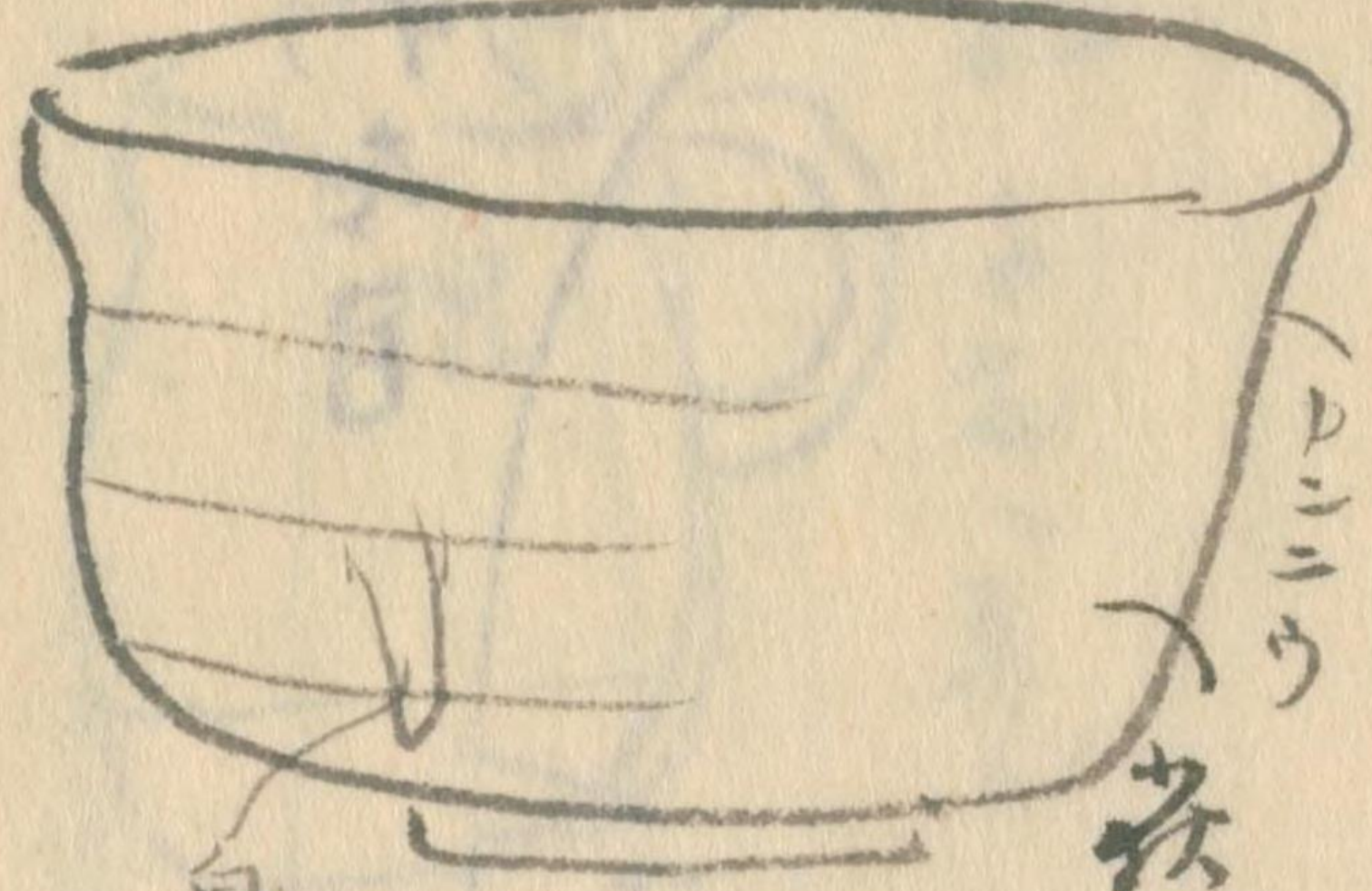


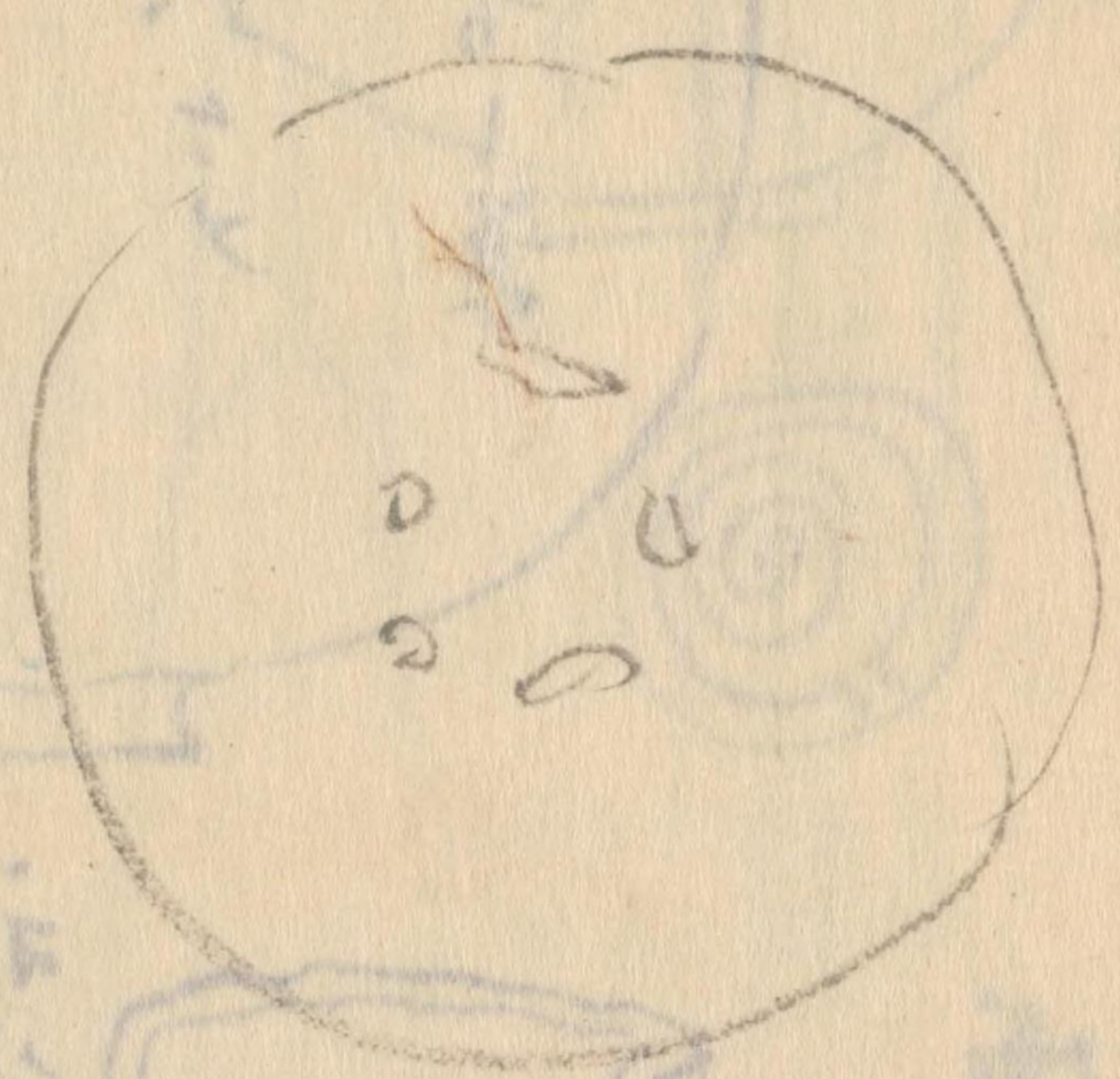


井戸脇

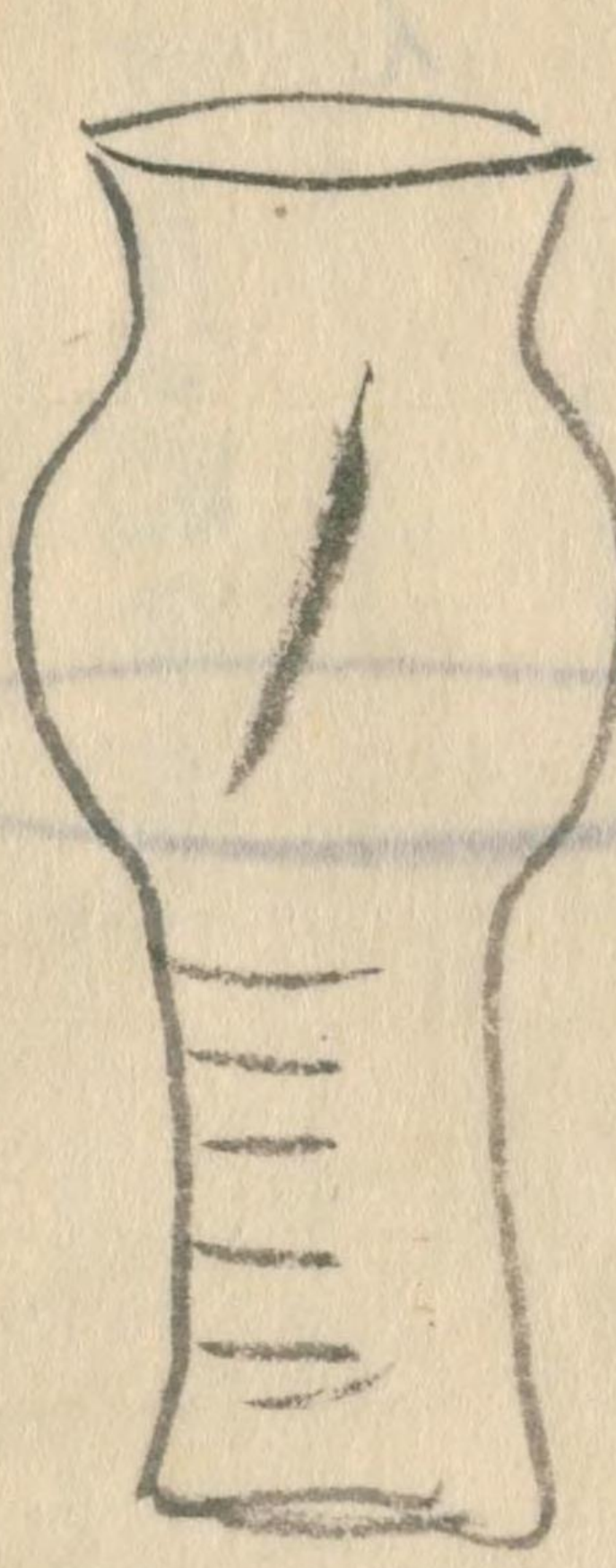


真うつ

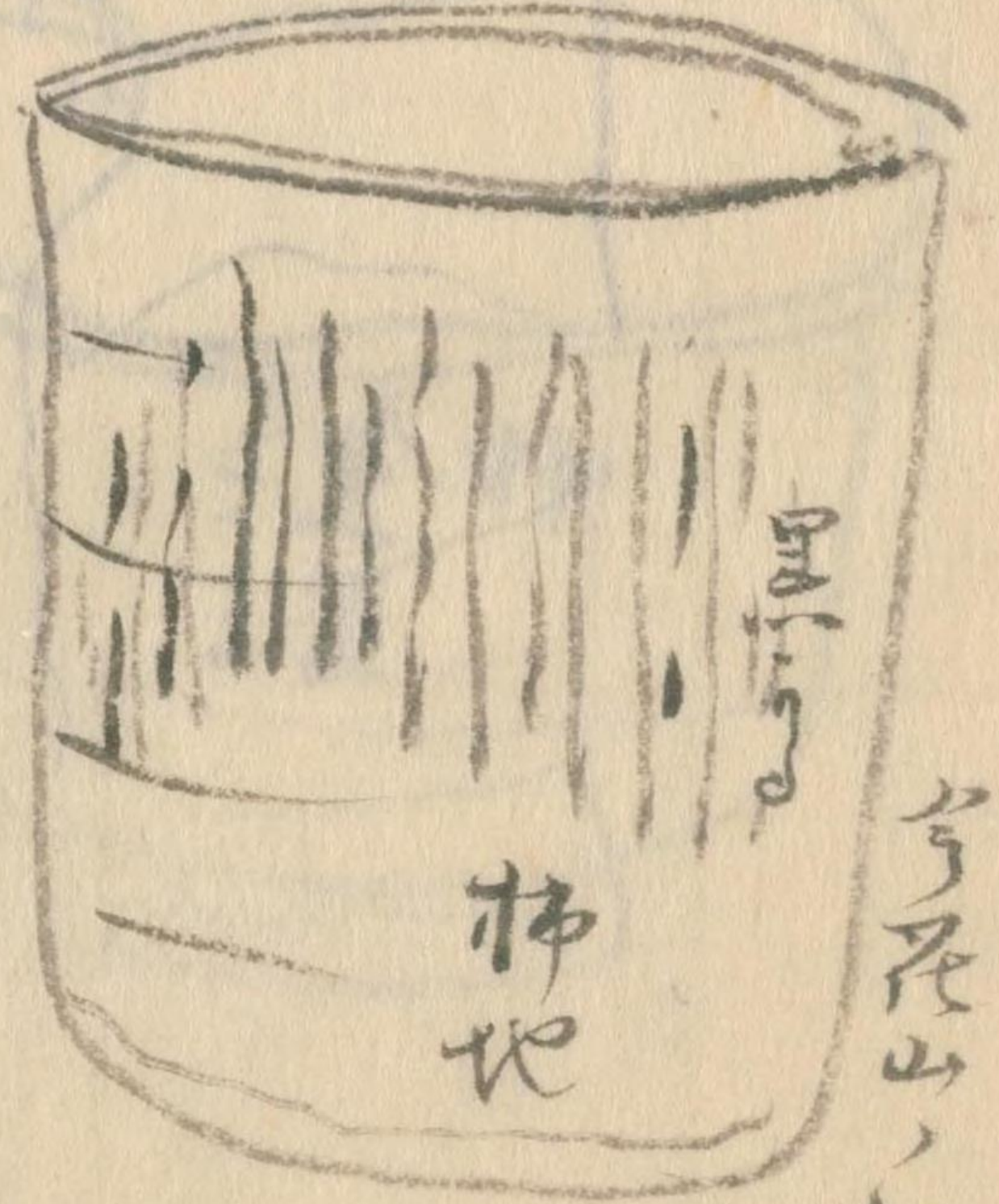

ヒシニウ
萩ノカブ目アリ
白薬垂ん



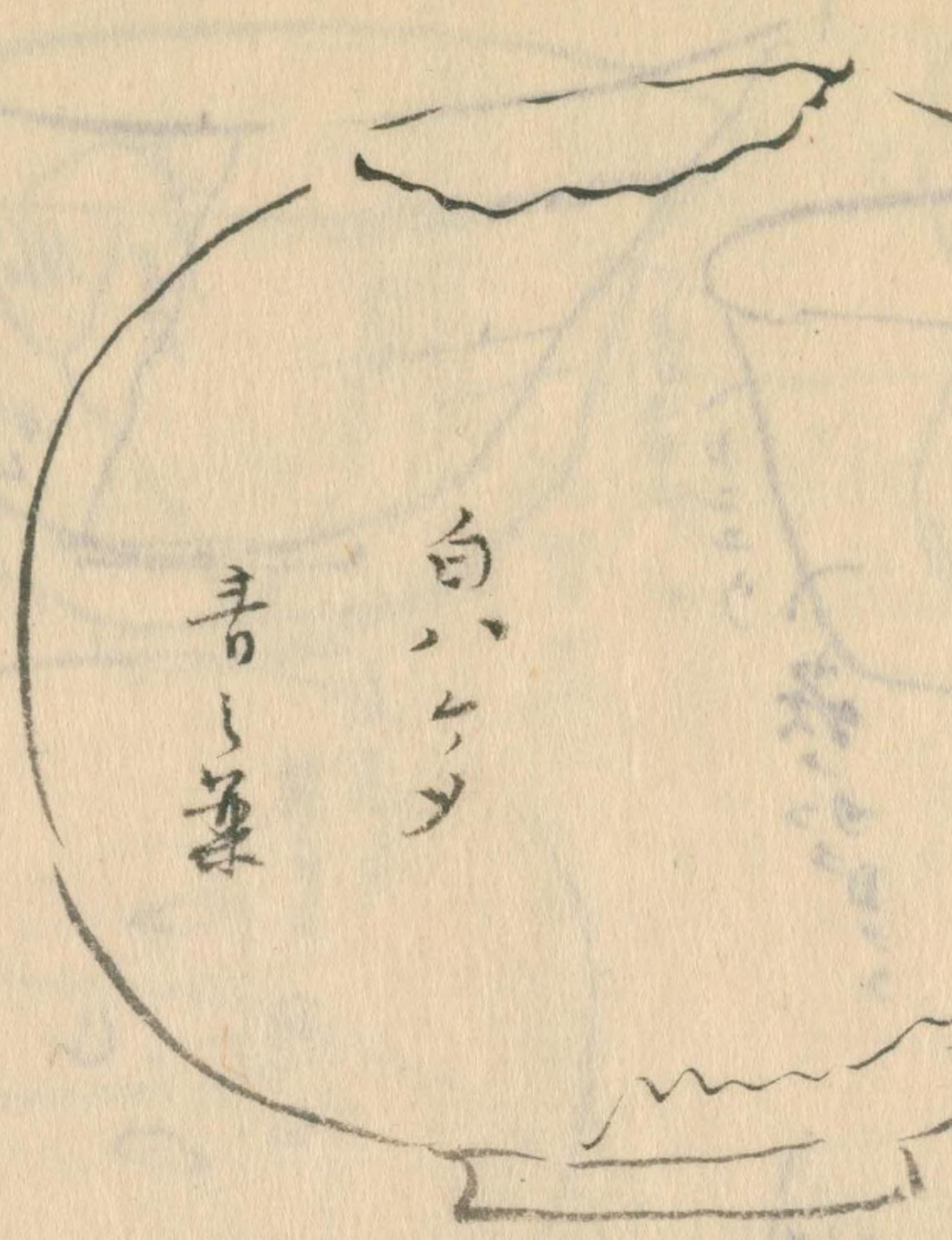
備前

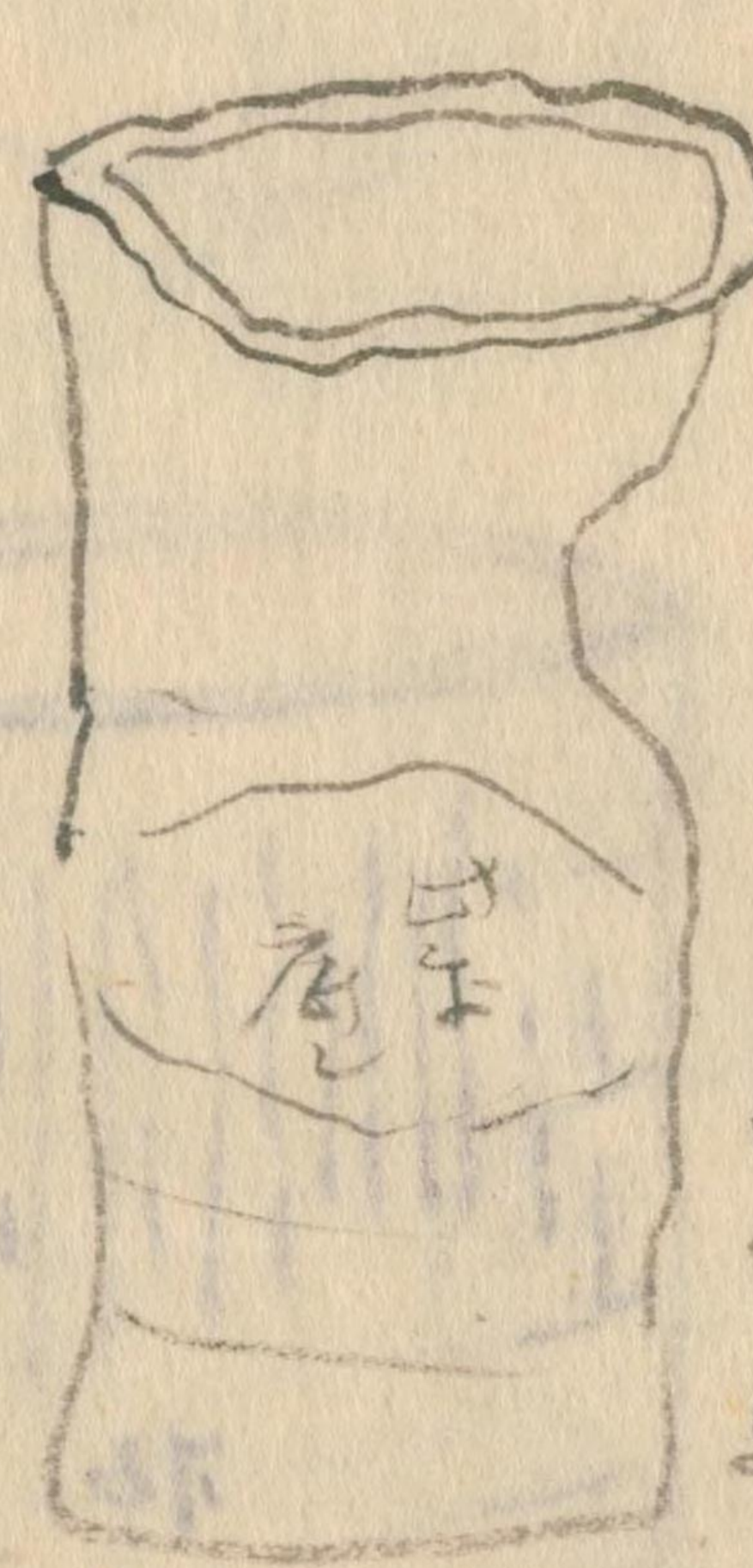


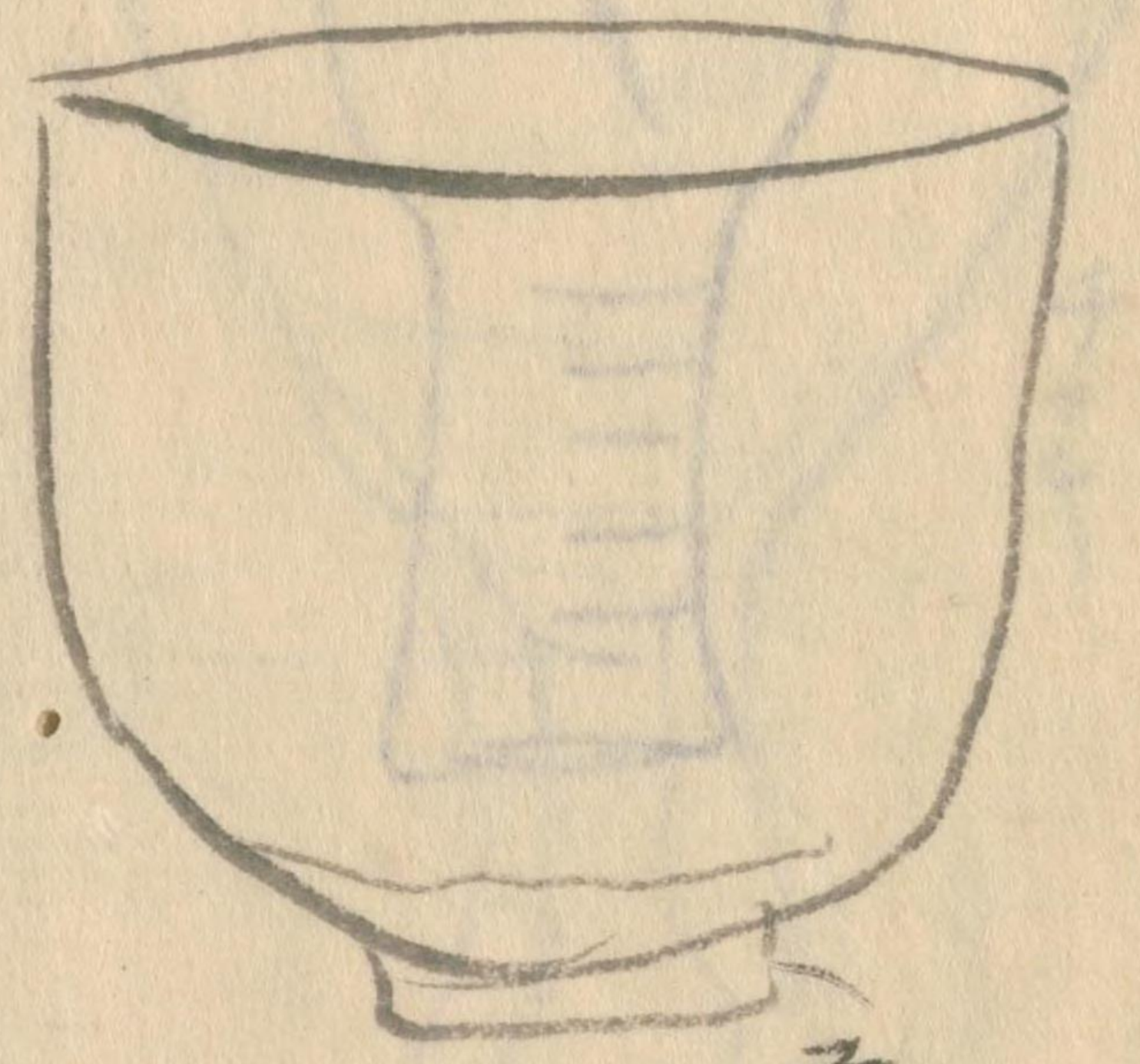
瀬戸

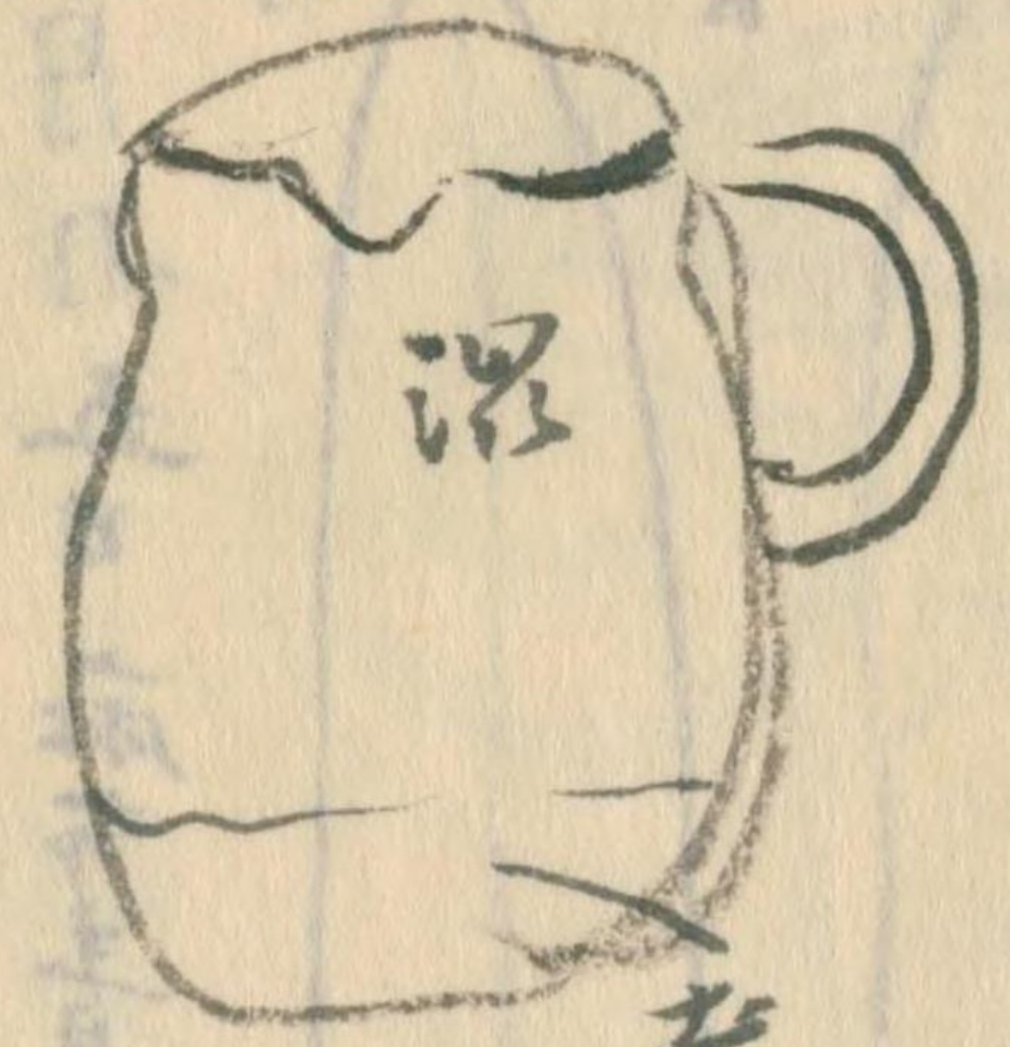

黒くる
柿地
宇尾山ノ如し

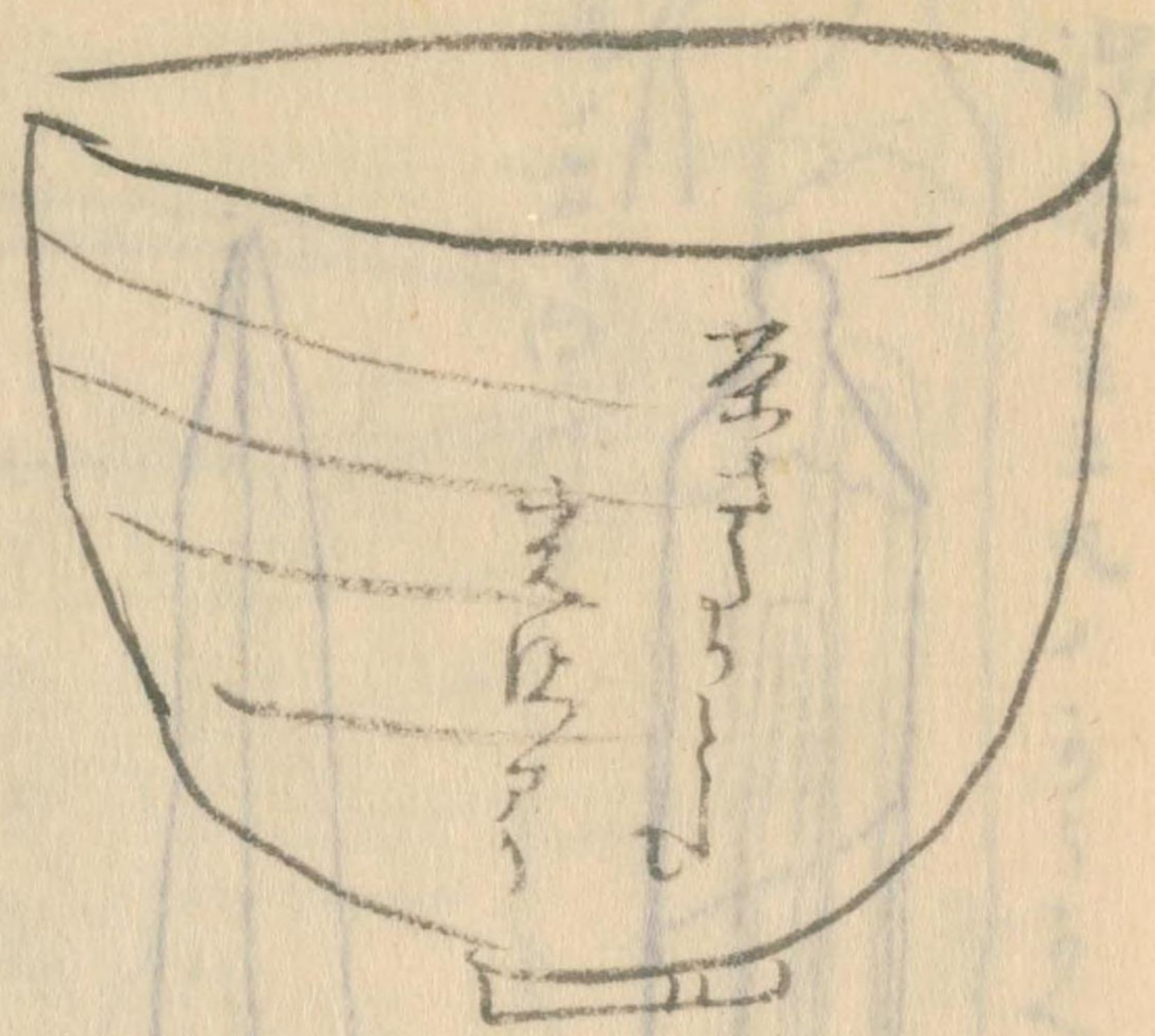
ガラス使用

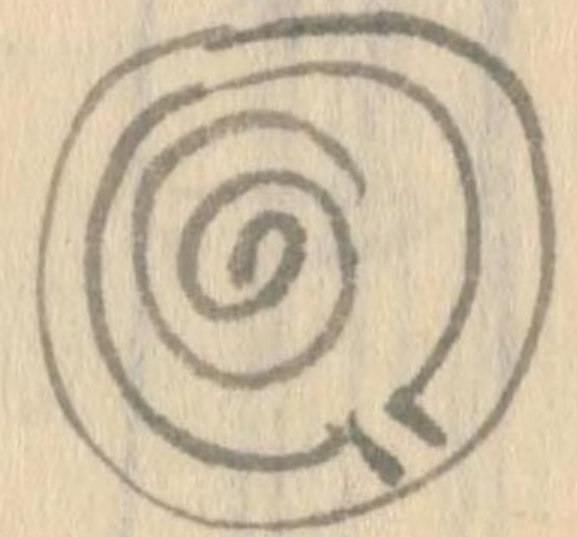

古刷毛目
白ハケメ
青く薬
作さん

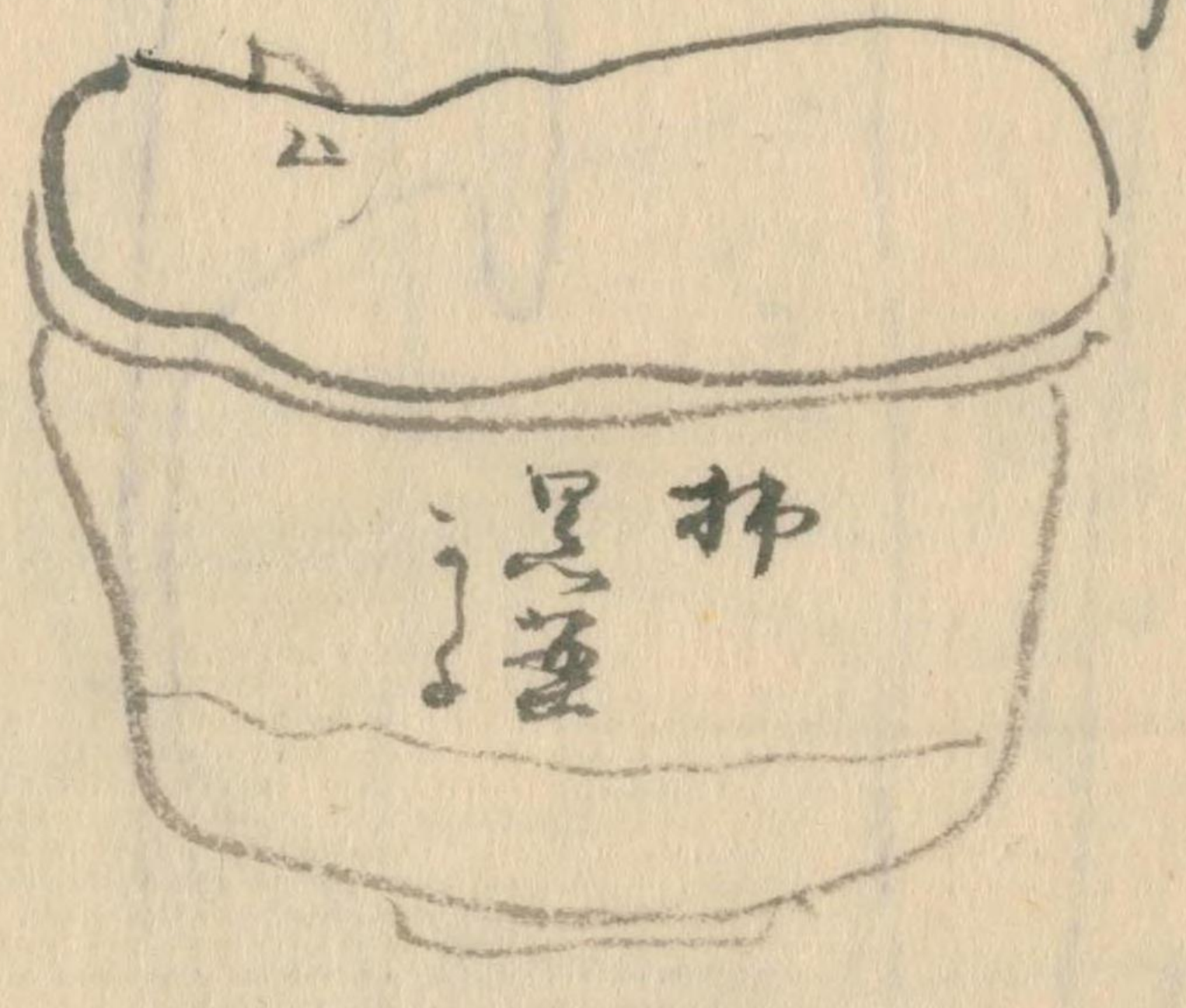

初代大樋長左ら
さよ
屋
南吉ゟ


朝ハ
無地とクリ


志野
手あへ見
沼
赤茶
薬

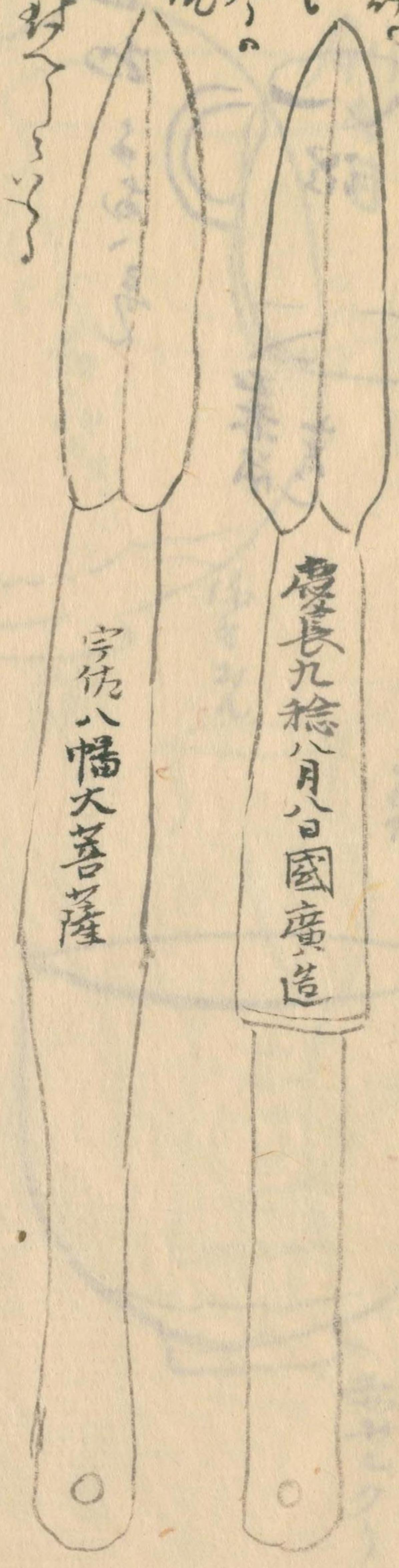

茶きうしむ
赤はかり

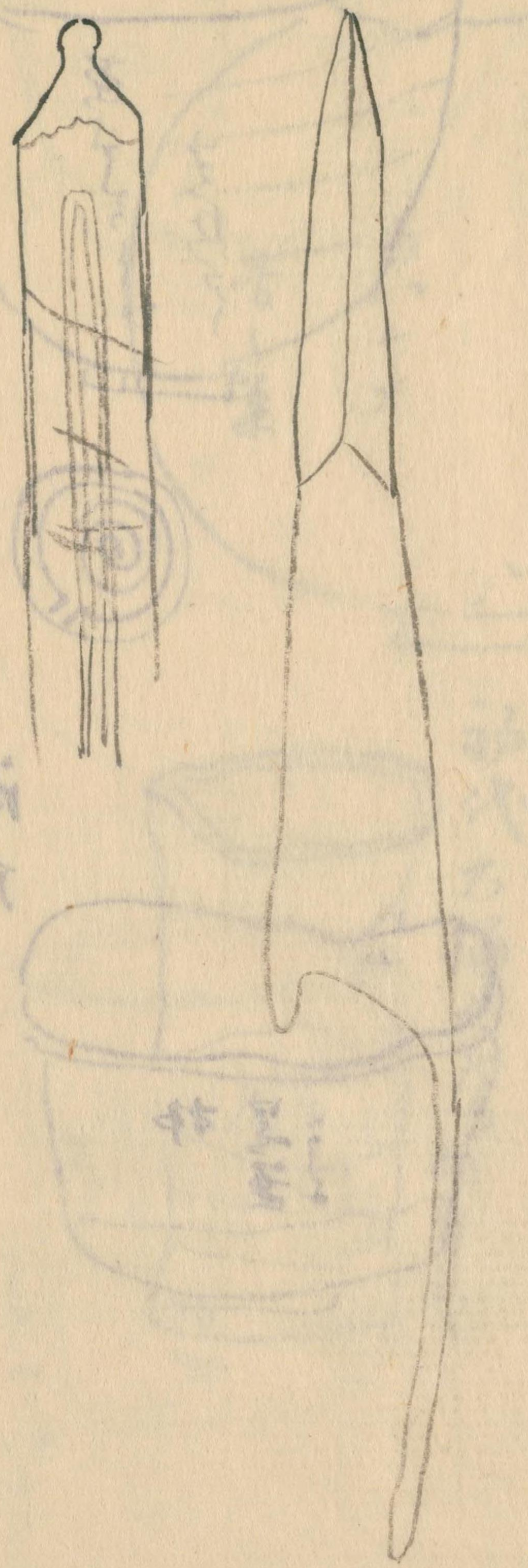



御庄
山
柿
黒薬
うす

廿四年七月廿五日麻布青山南町十番地小礒方雪窓主ヲ訪ふ翁甘呂ヲ出而て日弓の矢へ

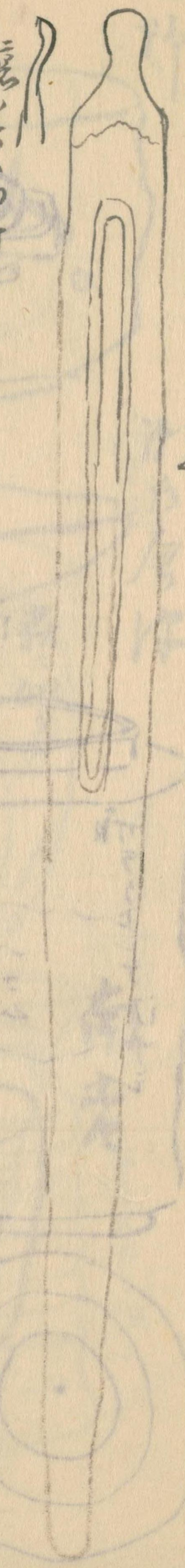
所ゝ家の傳之と只田今の銅ヶ鏡の物等おもて射てうつす


慶長九稔八月八日國廣造
宇佐八幡大菩薩



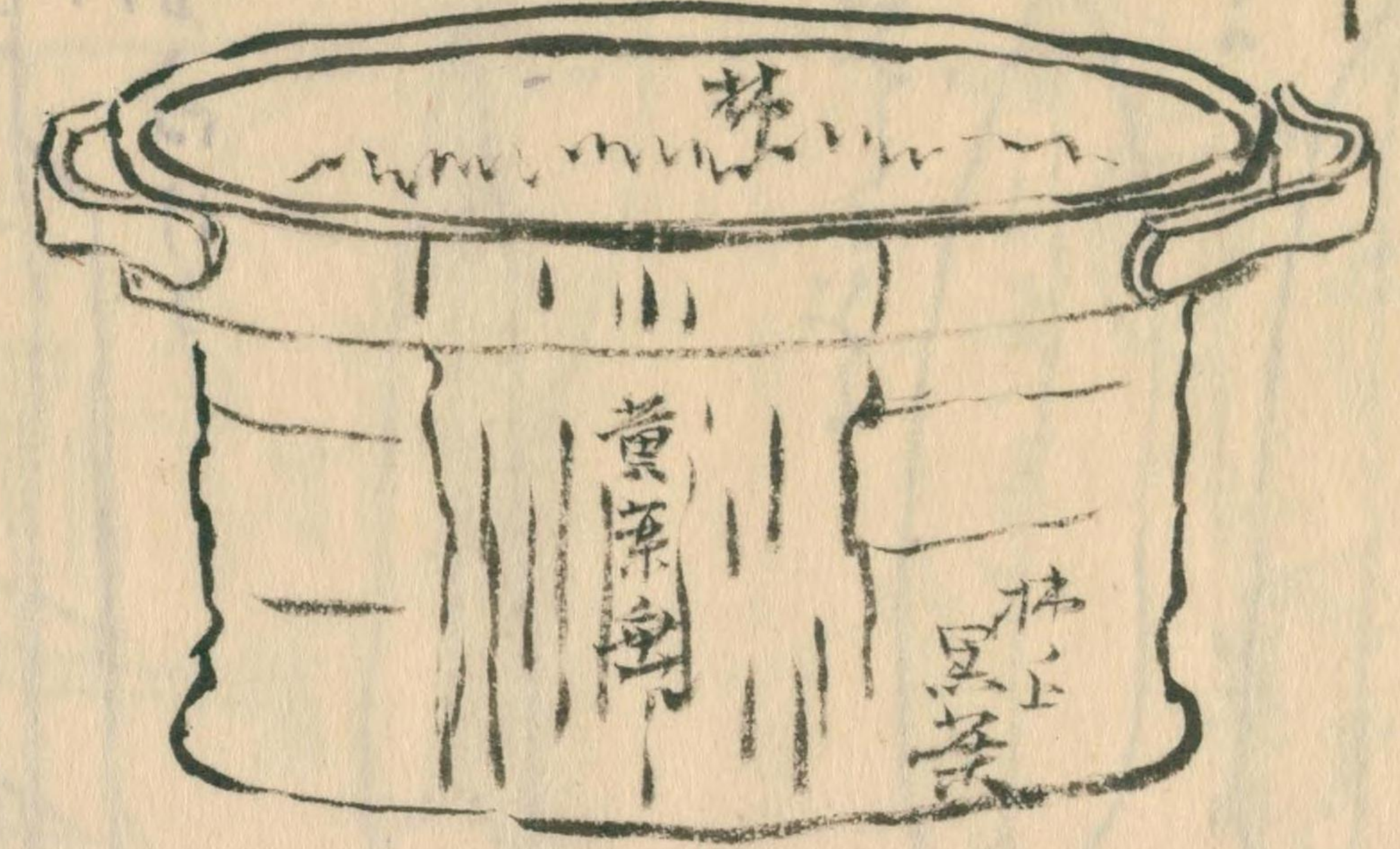
澁谷金王丸ノ[illegible]之

裏ノ方ハ白けり

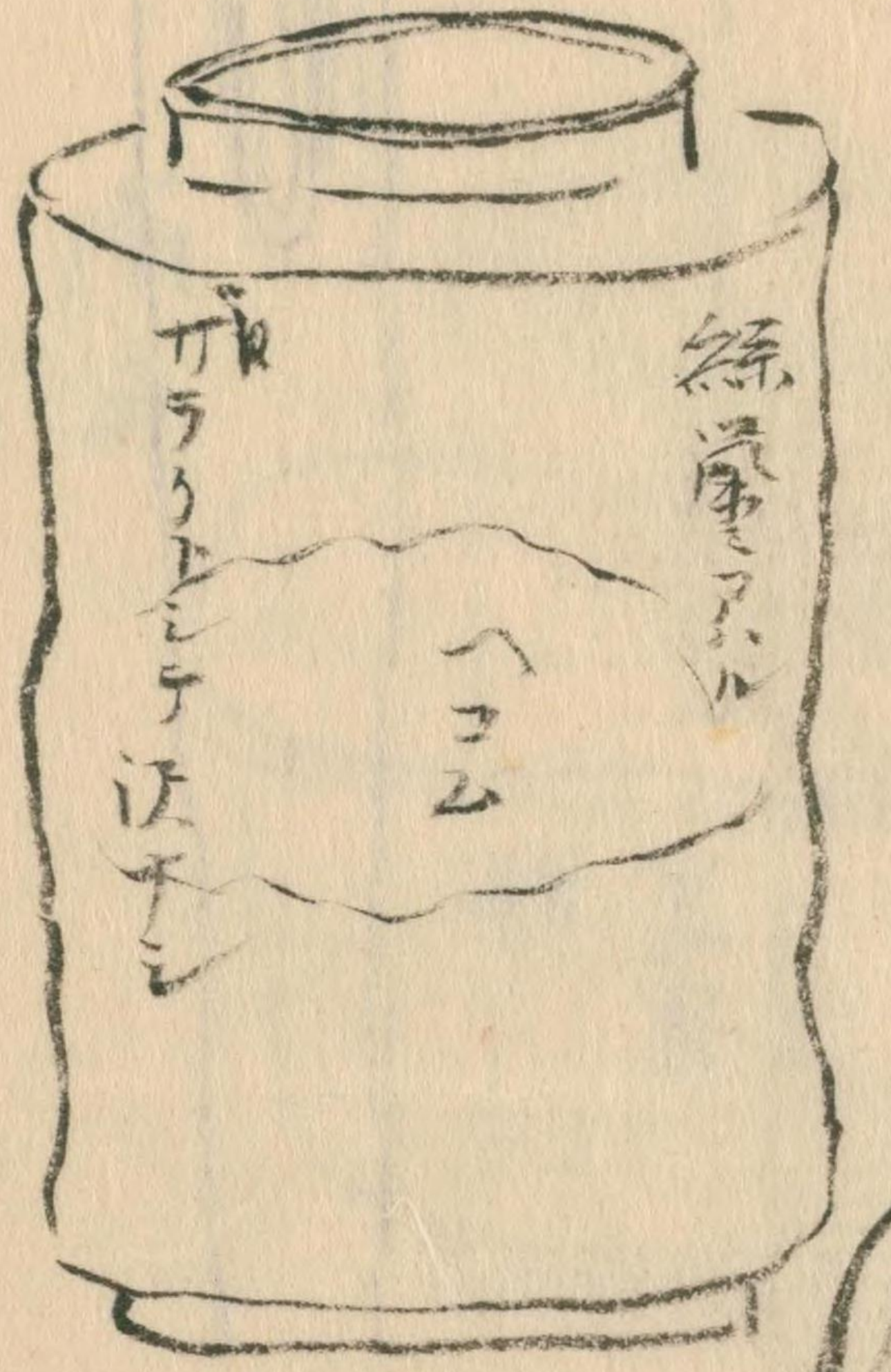


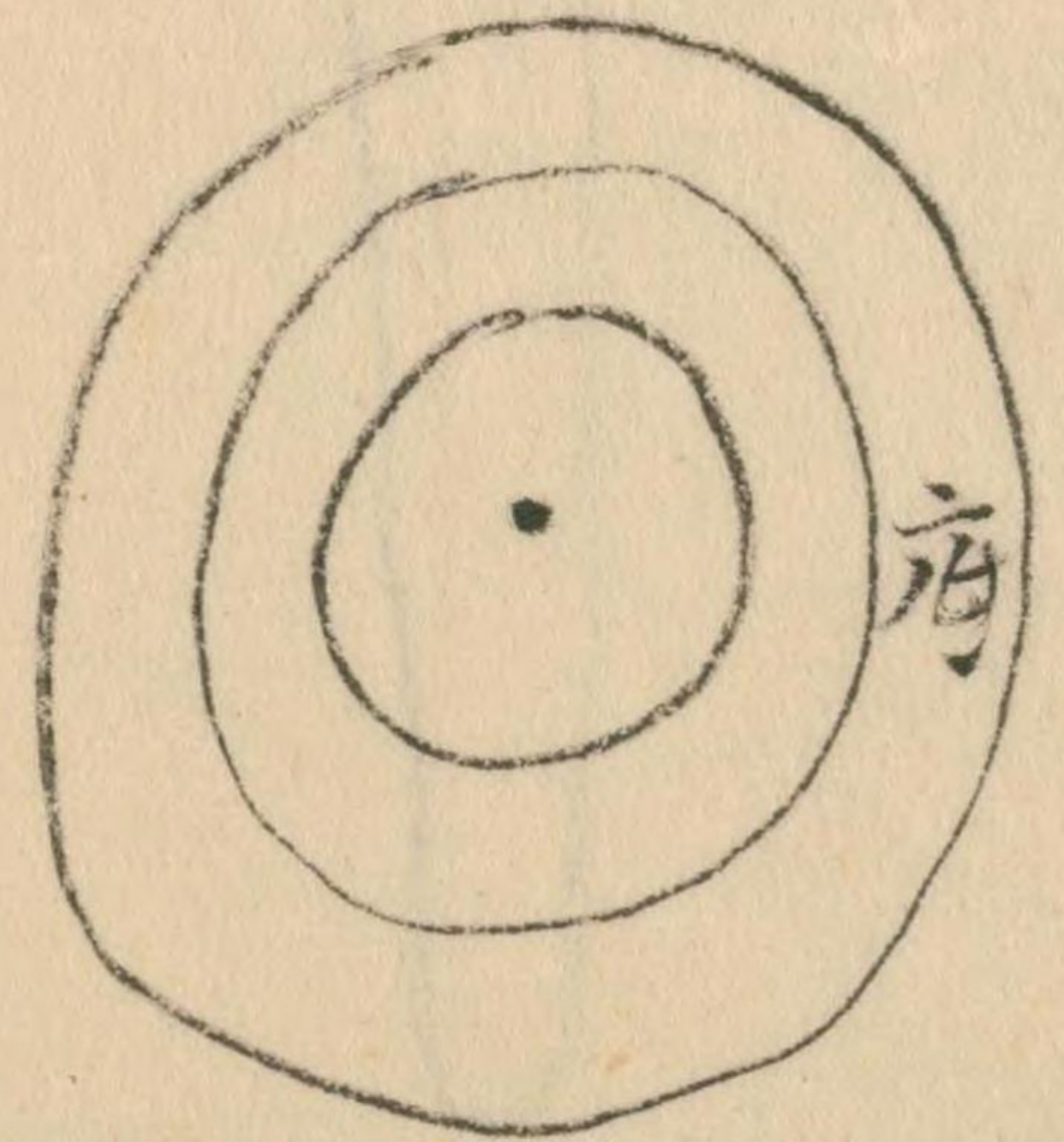
廿四年八月ニ今戸器内[illegible]

朝鮮

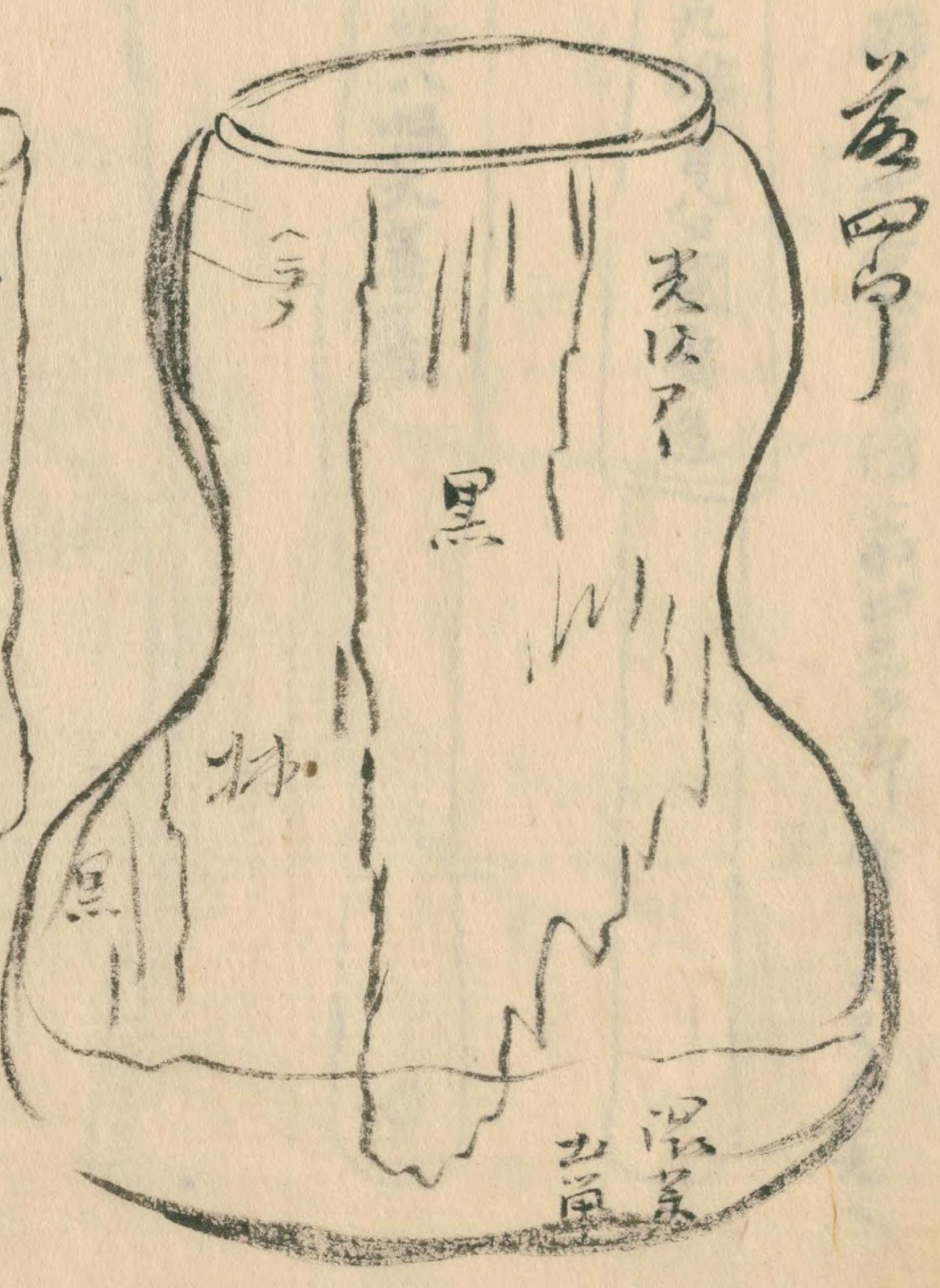


唐津

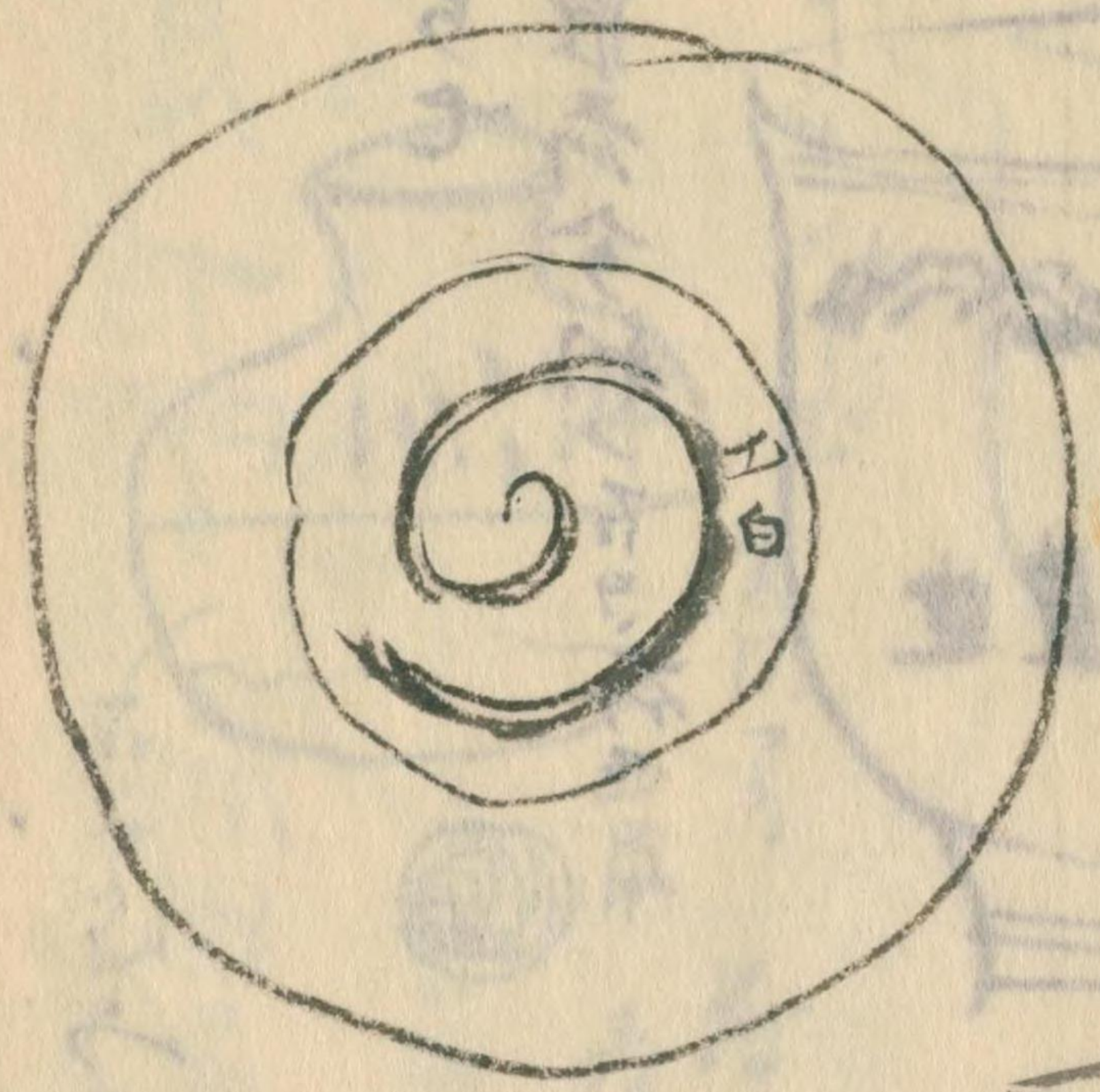

緑薬アル
ガラクトシテ流セシ
ヘコム

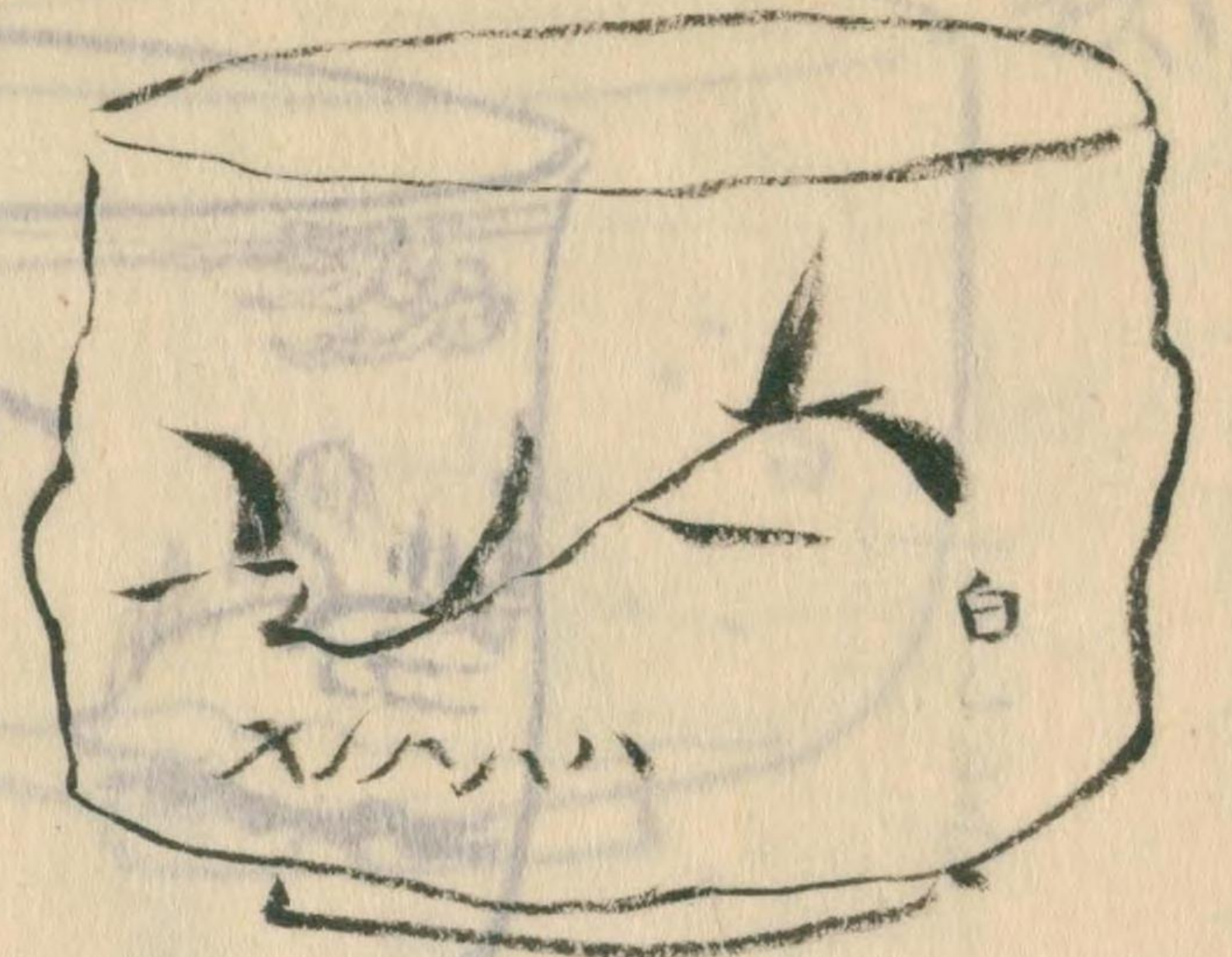


薩摩

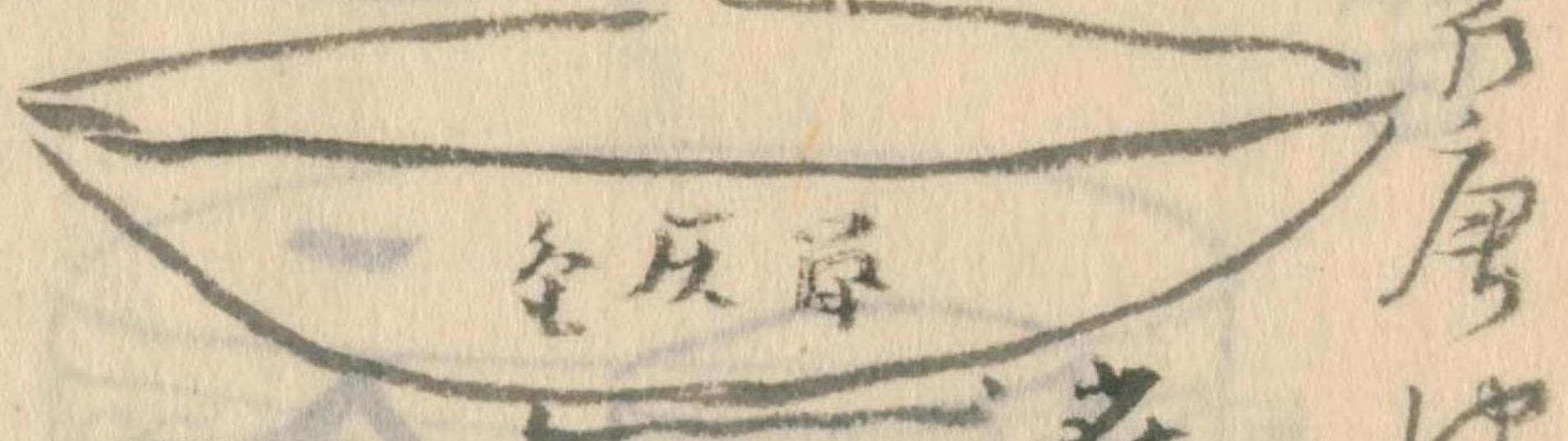

ヘラメ
光沢アイ
黒
柿
黒
黒黄
土見

志野

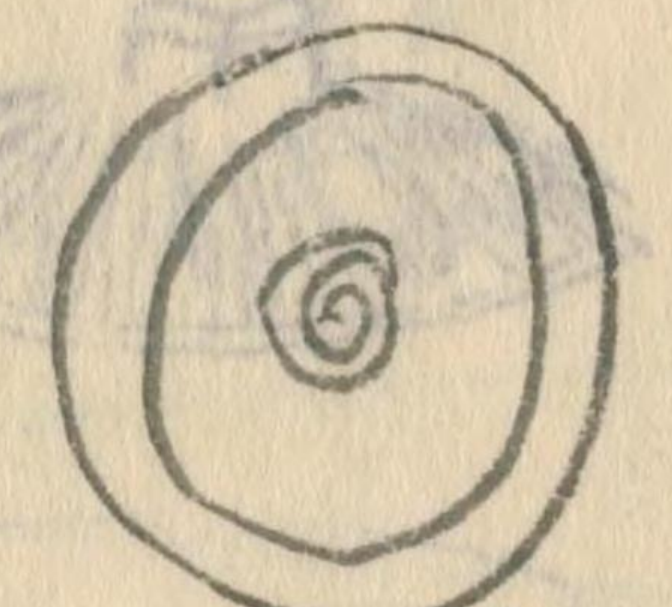


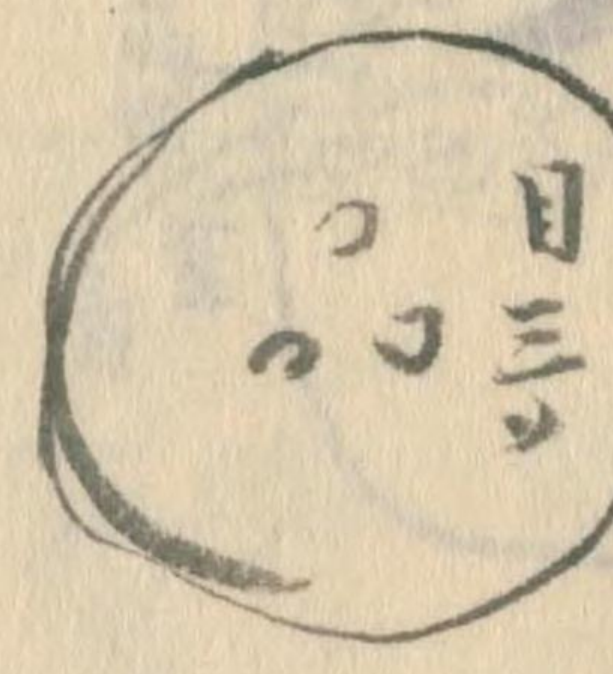


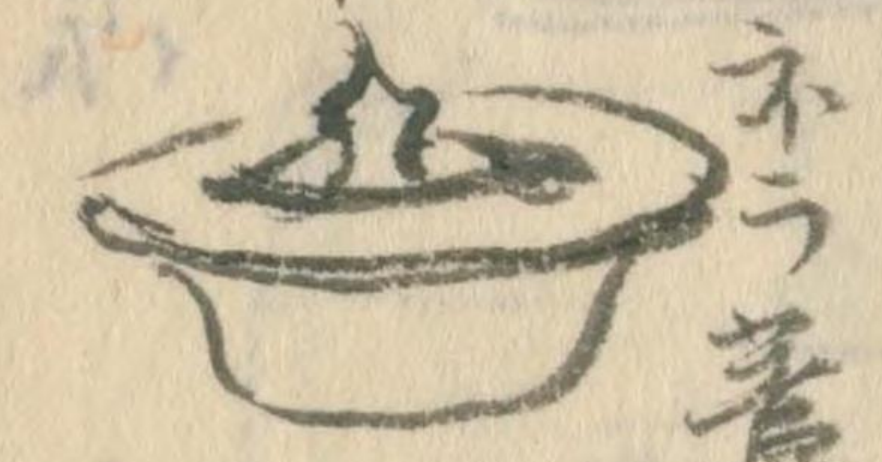
瀬戸唐津



萩ニ似タル

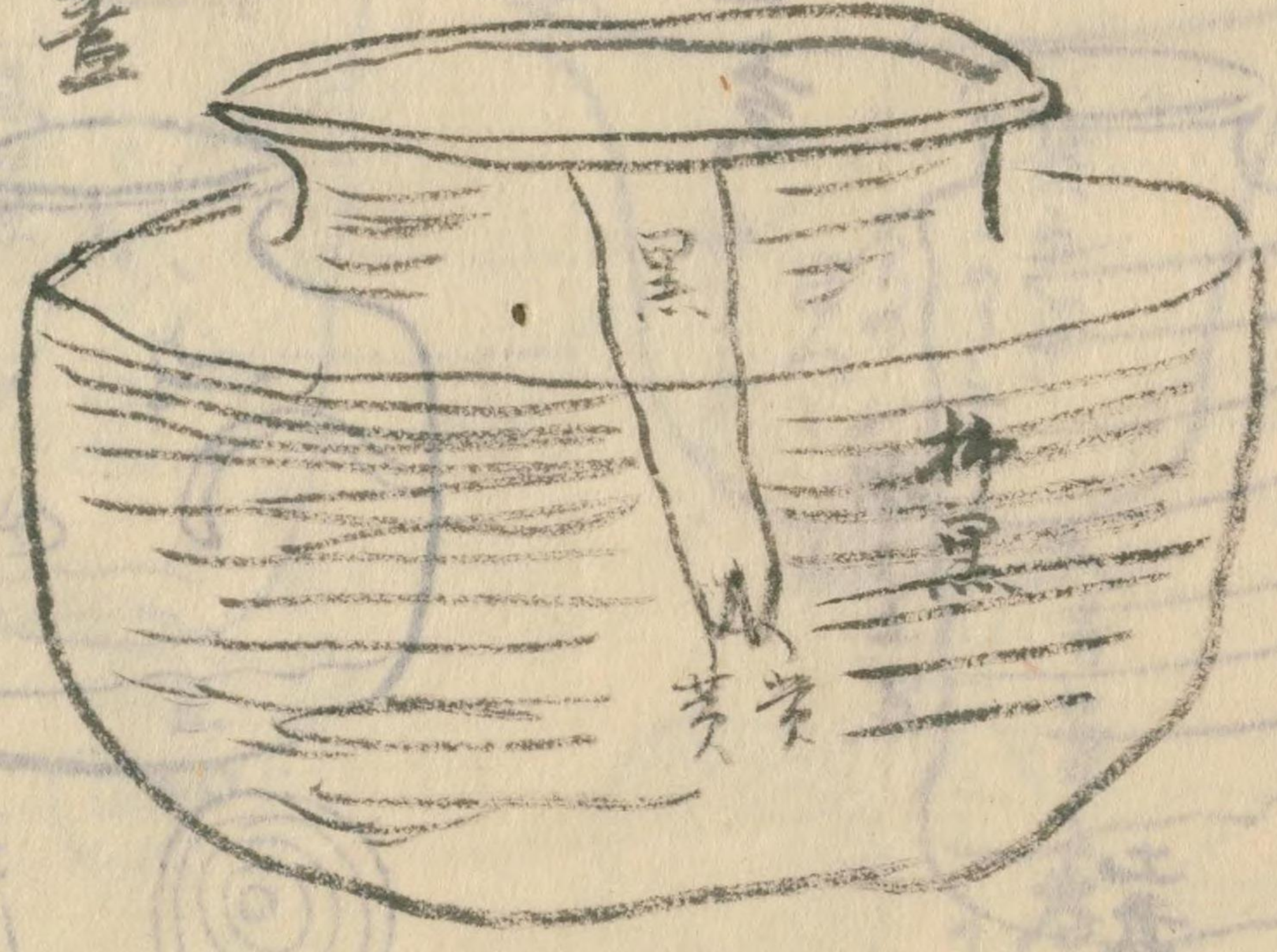




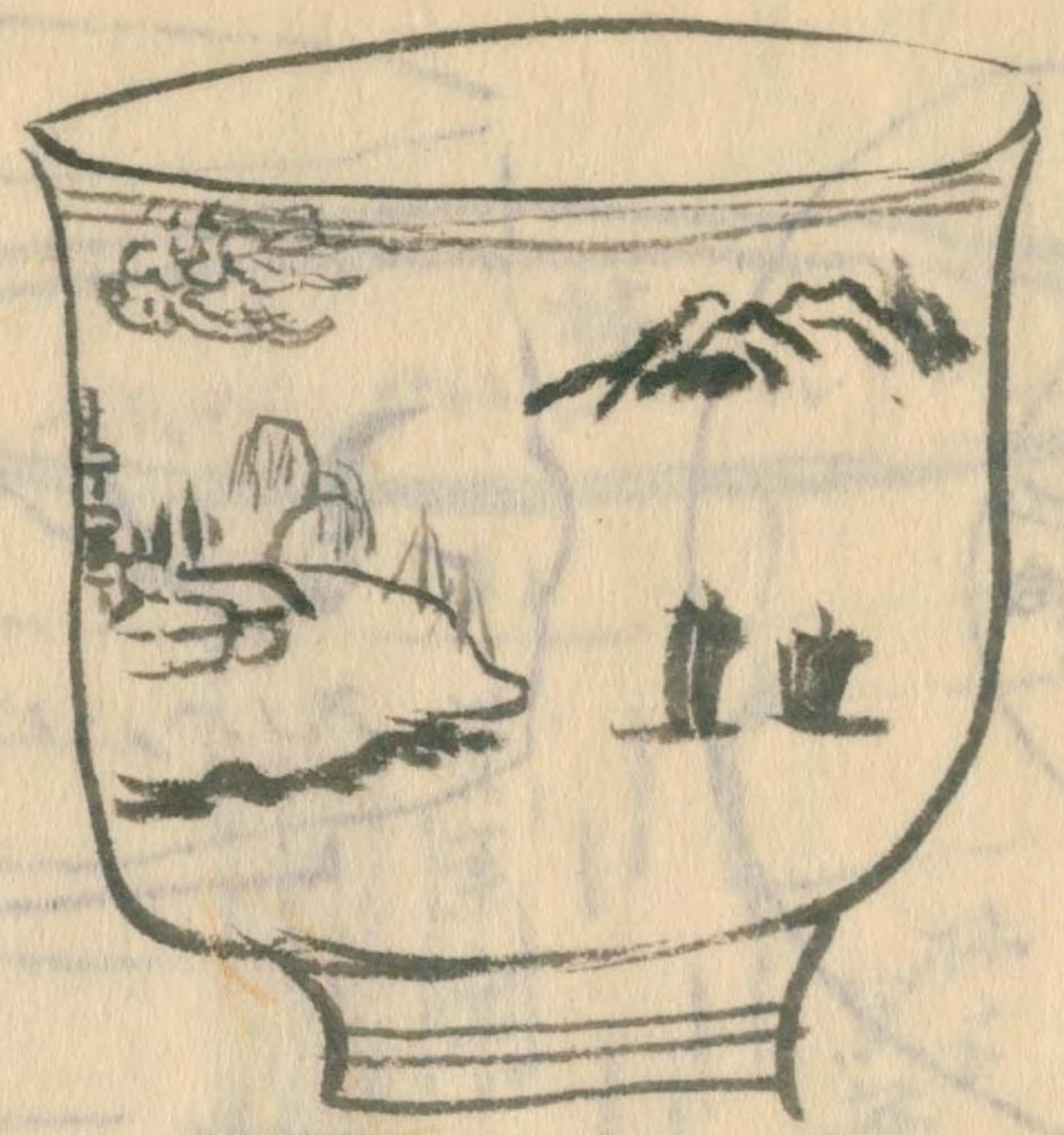


ハンネラ蓋

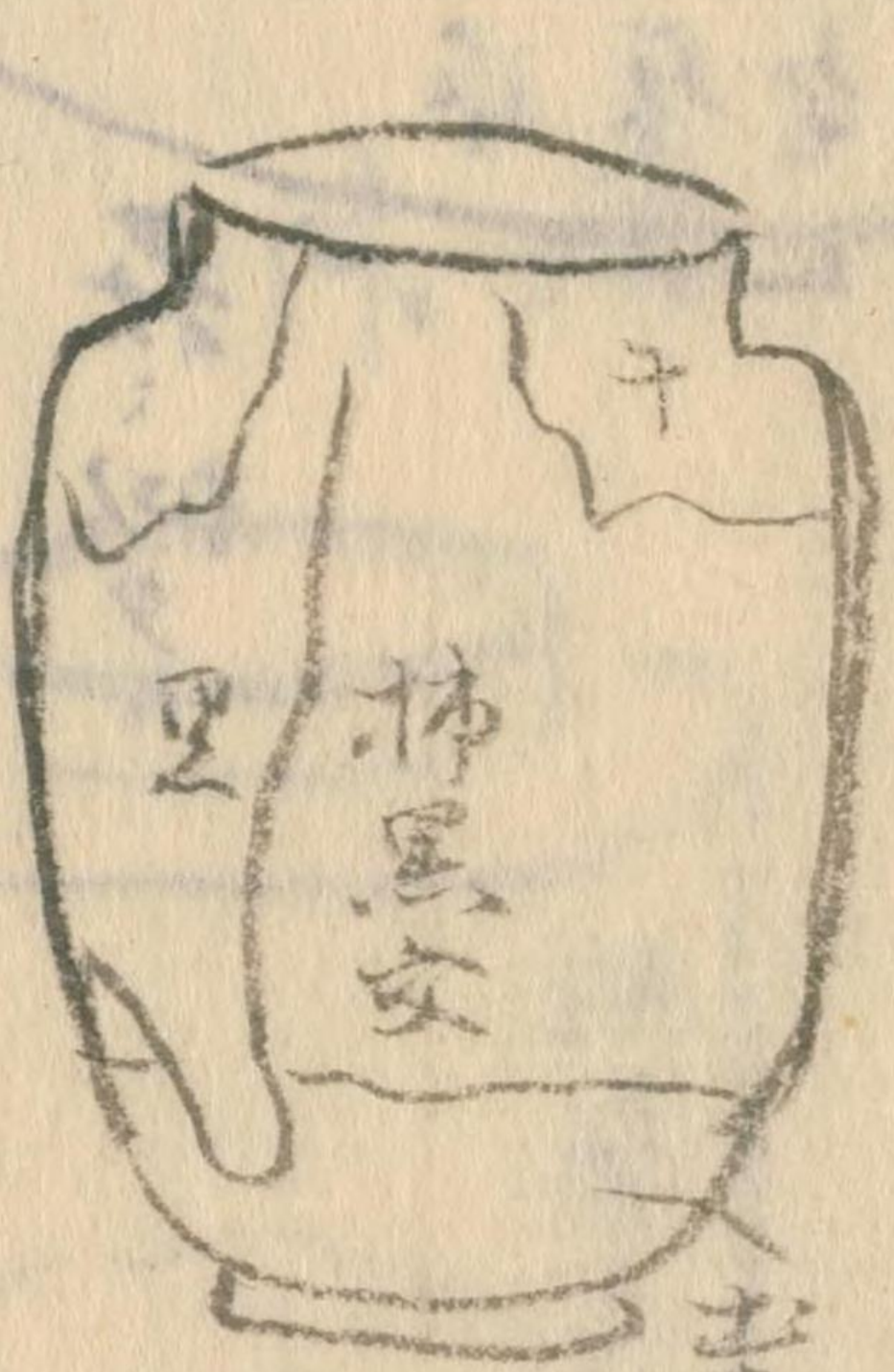
南蛮



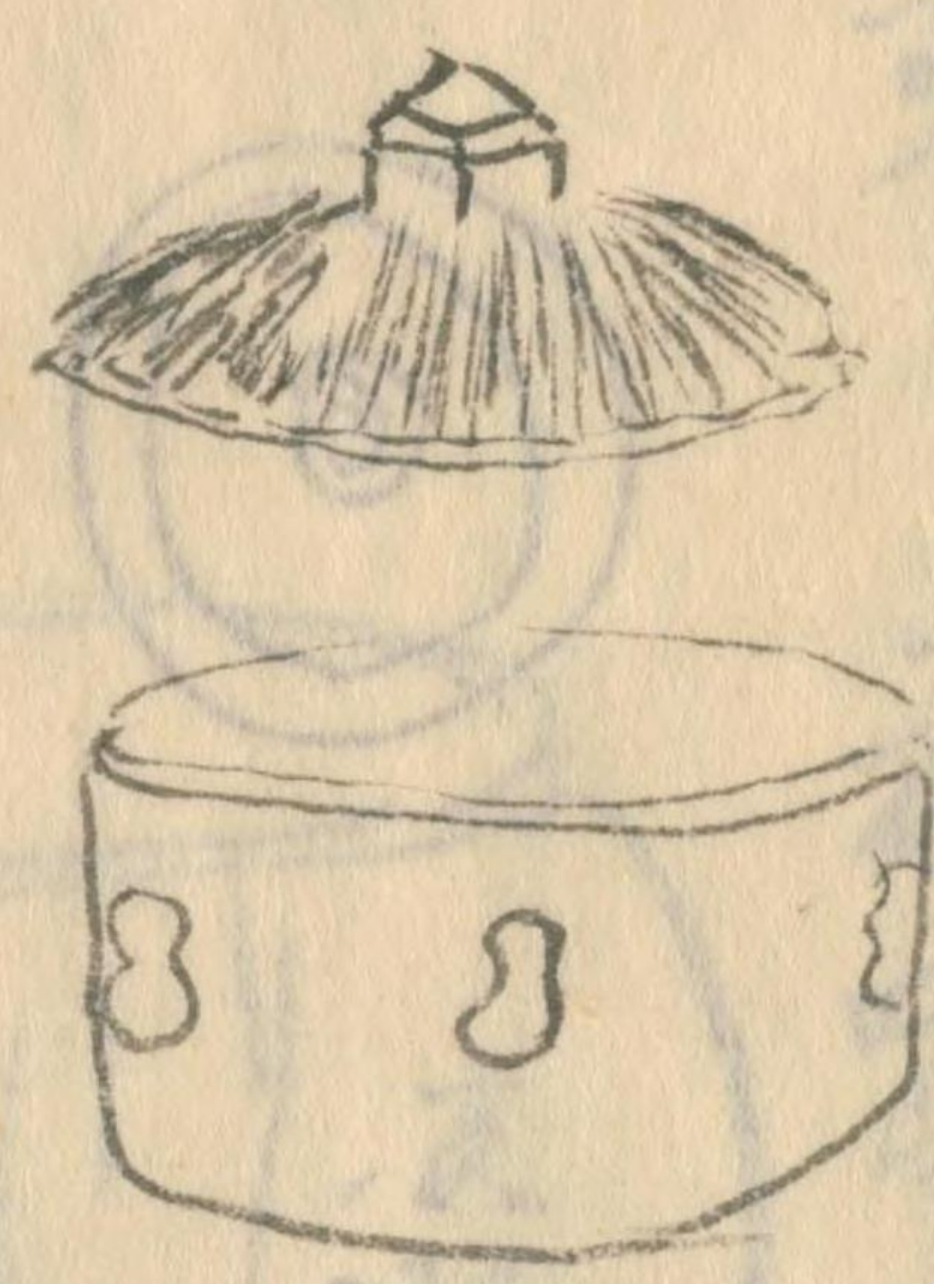
五ら七
肥前今利ノ古き碗



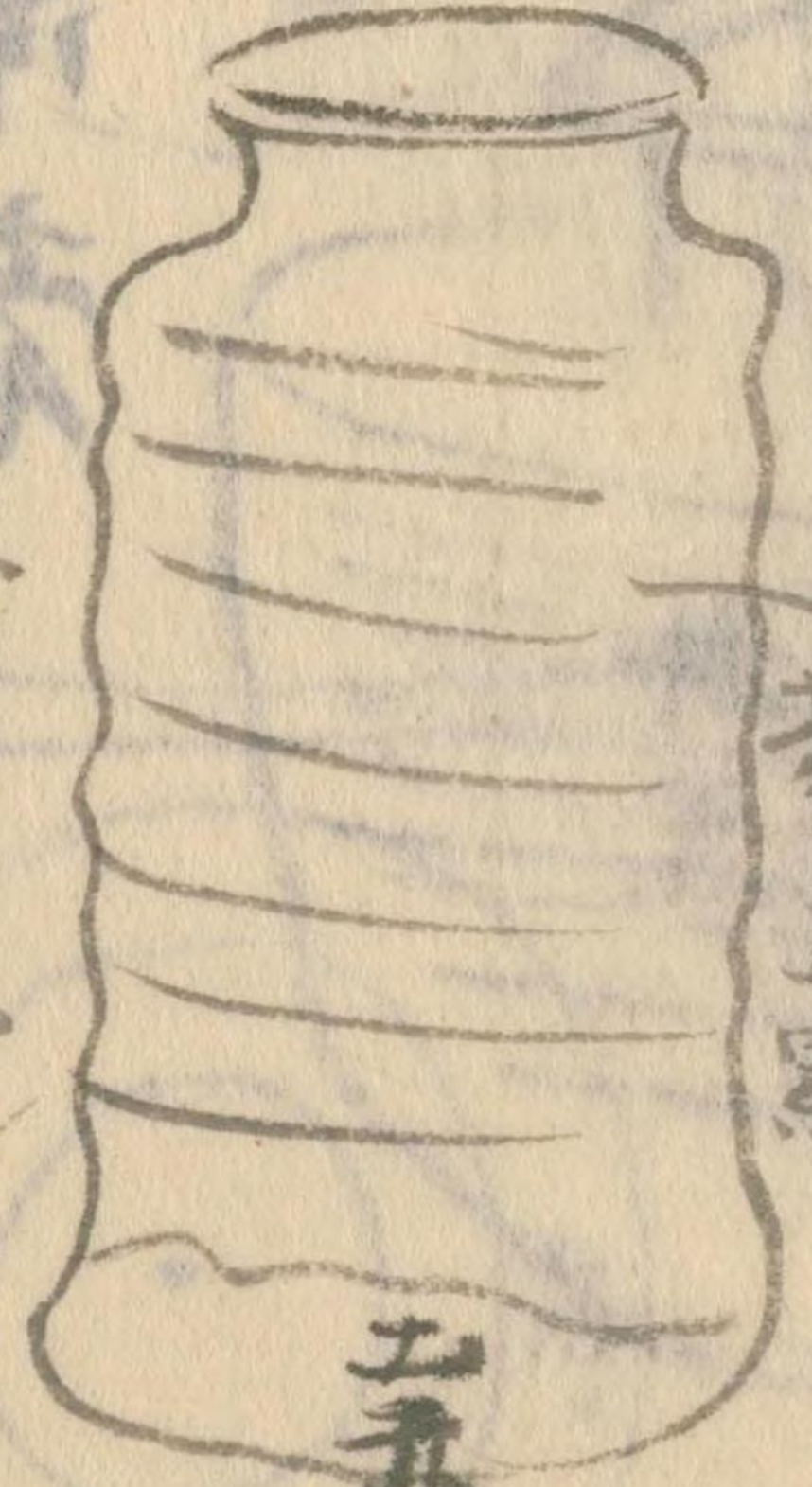
一入



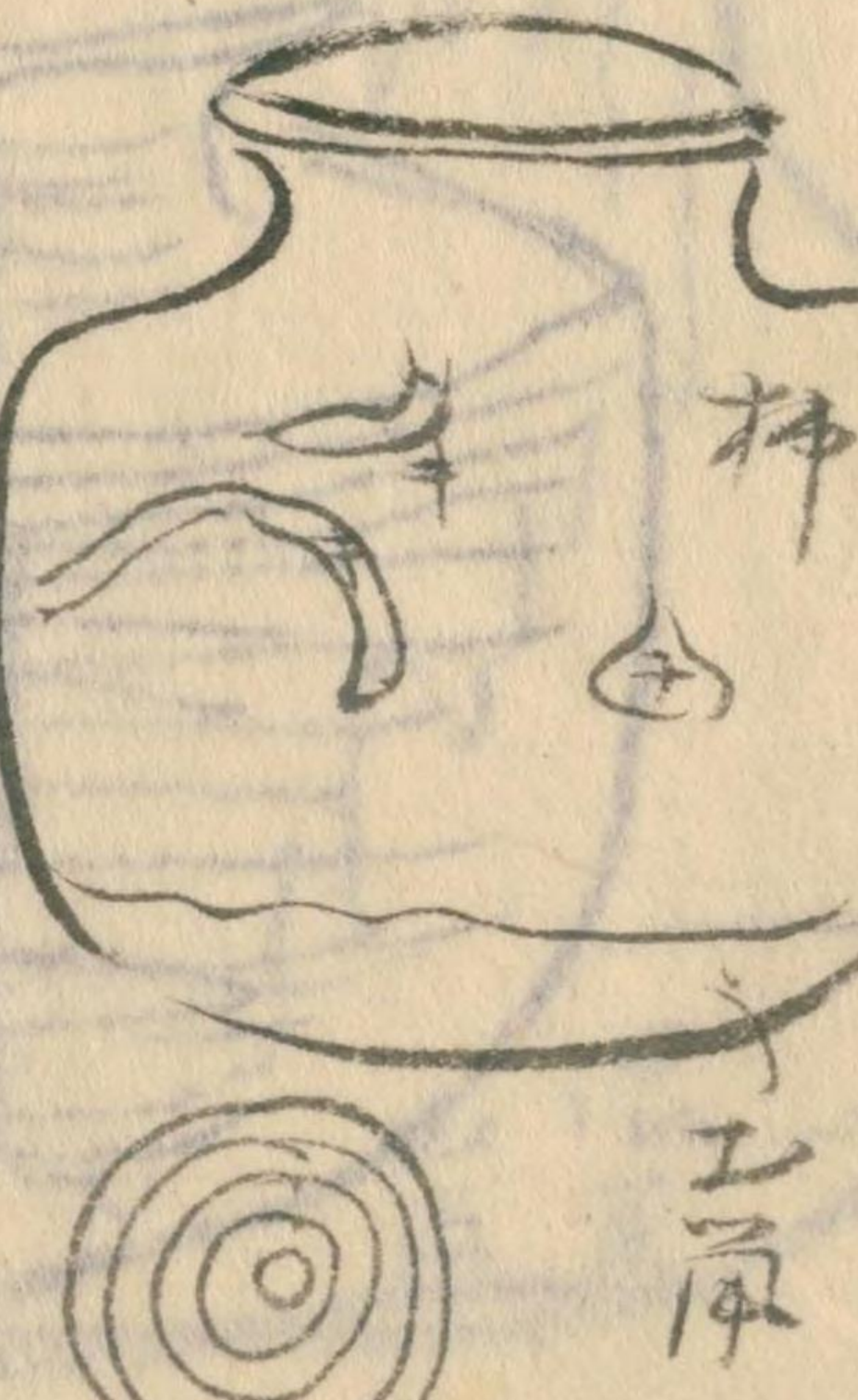
らく 屋宇似タリ 瓢ノ自作



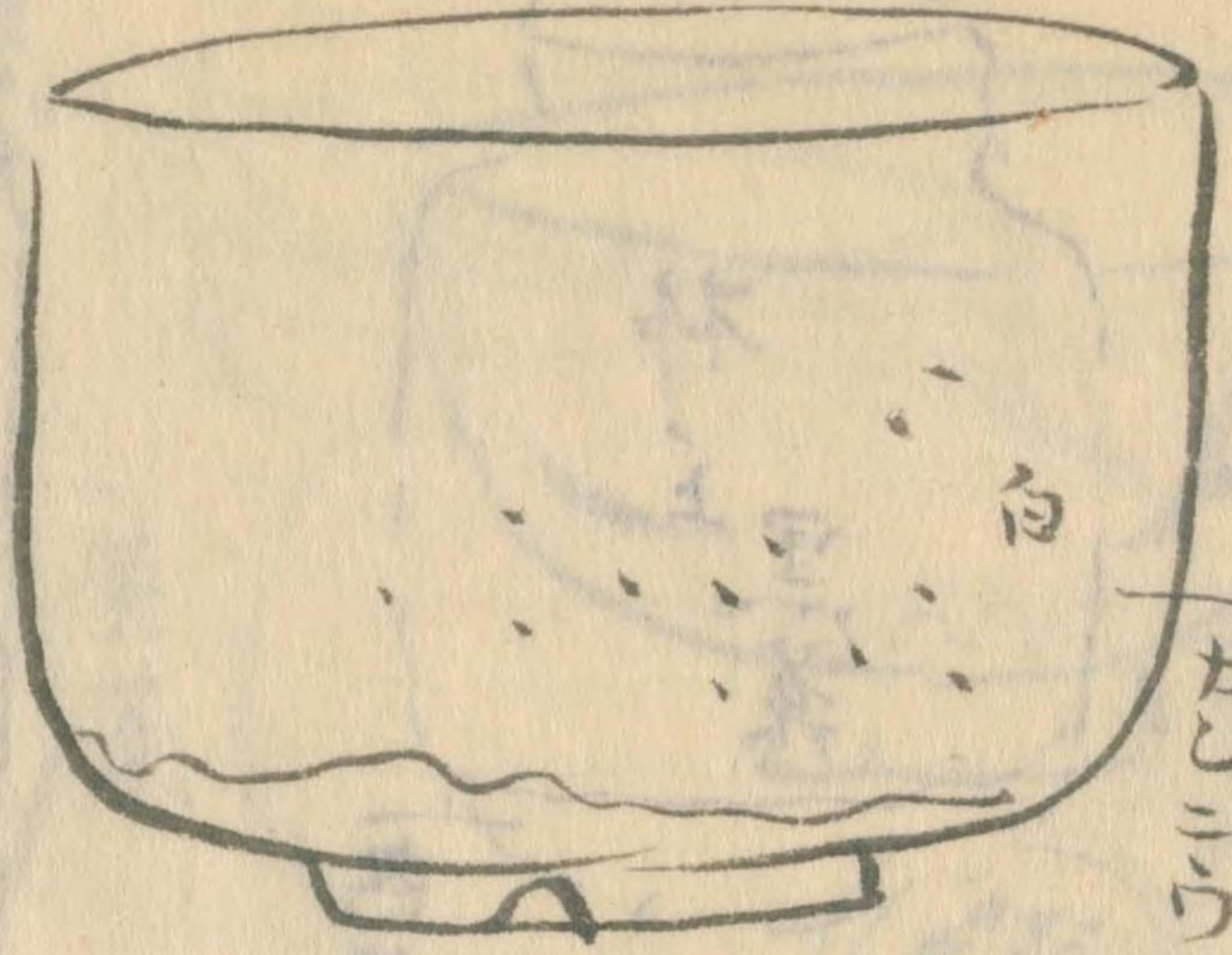
正意


ネジヌキノ如シ
茶ノ上黒
土共

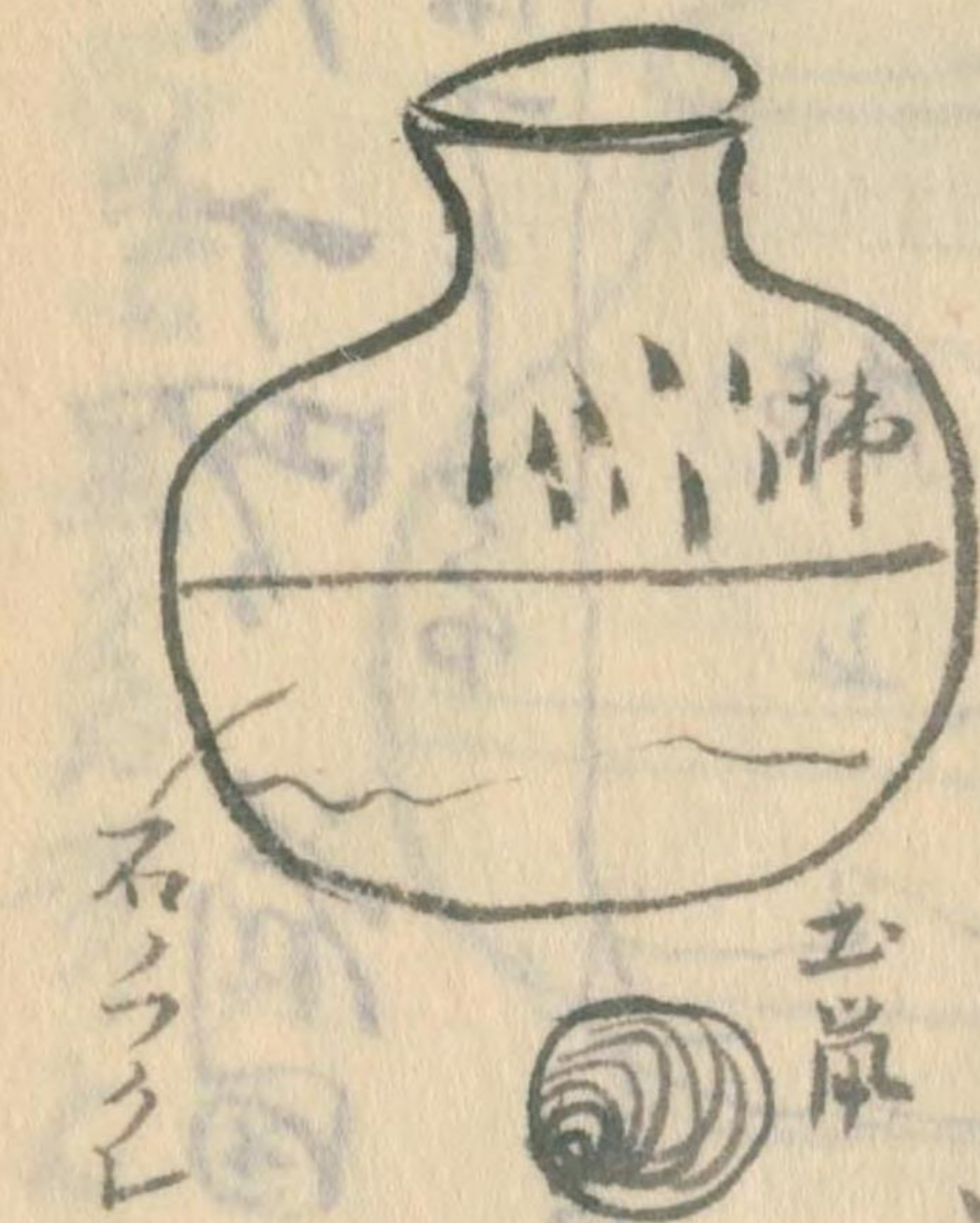
椿子春〆



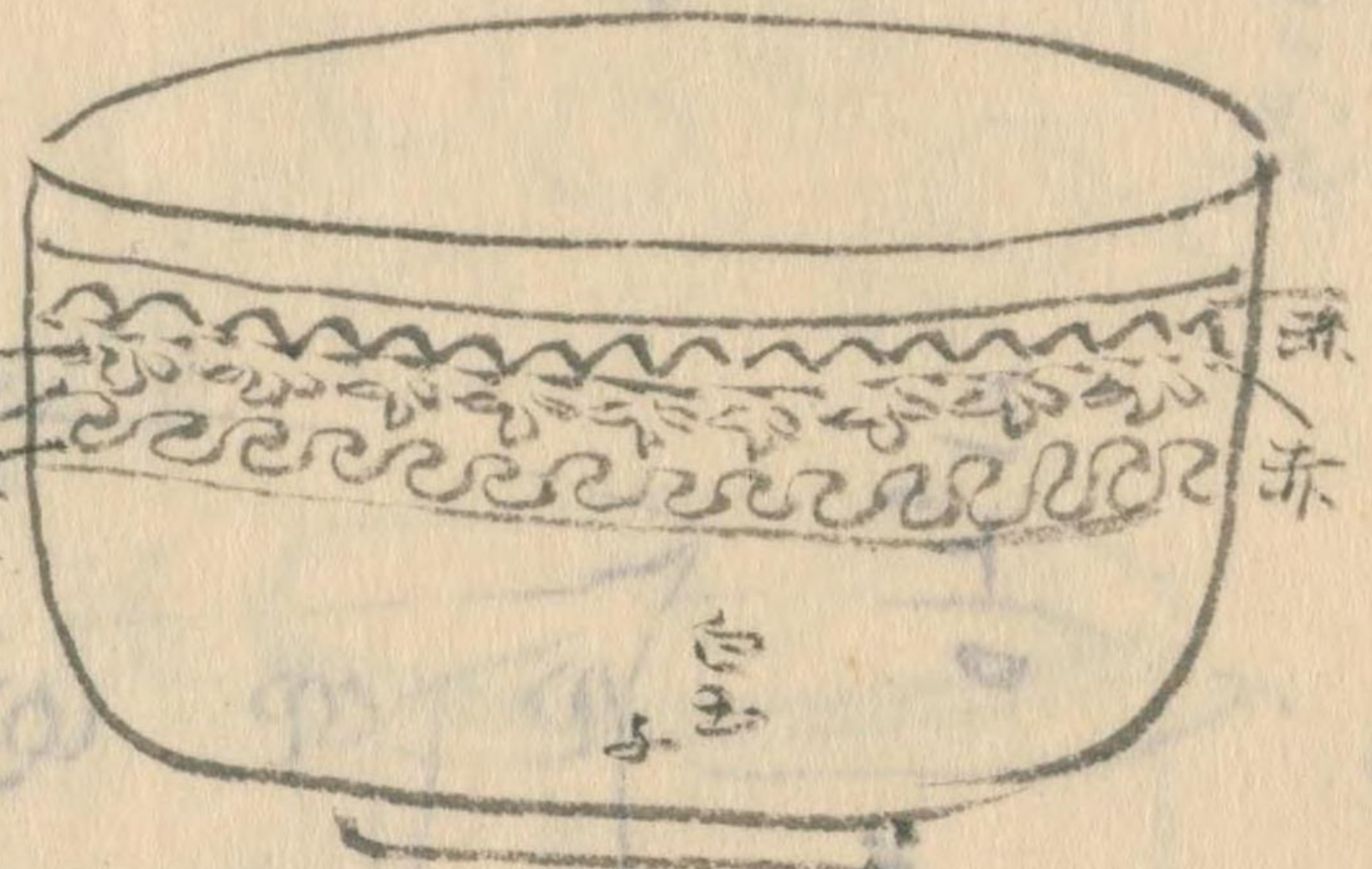
萩



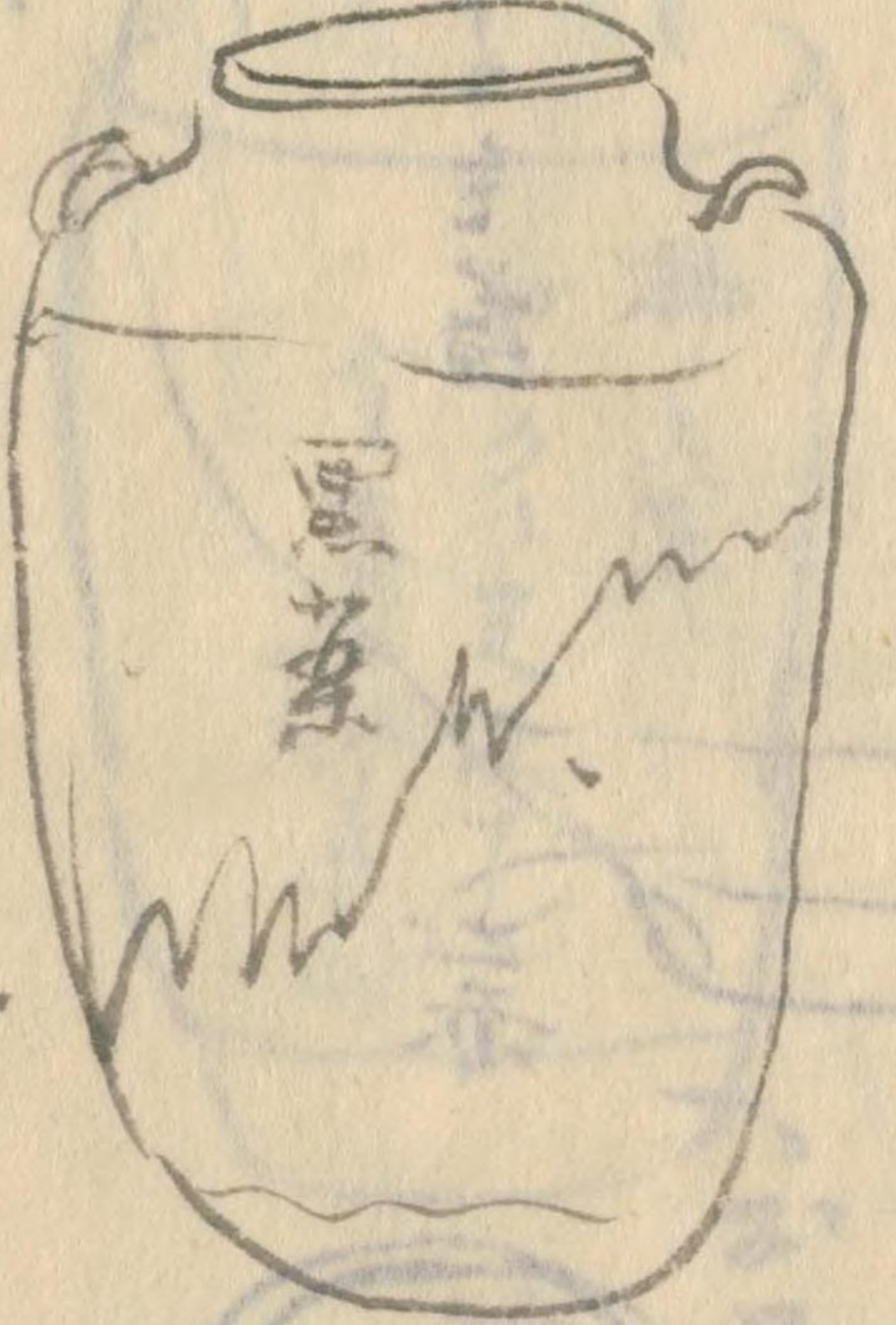
先キ白ク土
丈低ク
土嵐
石ノフクレアリ
斉作 孝峯 器



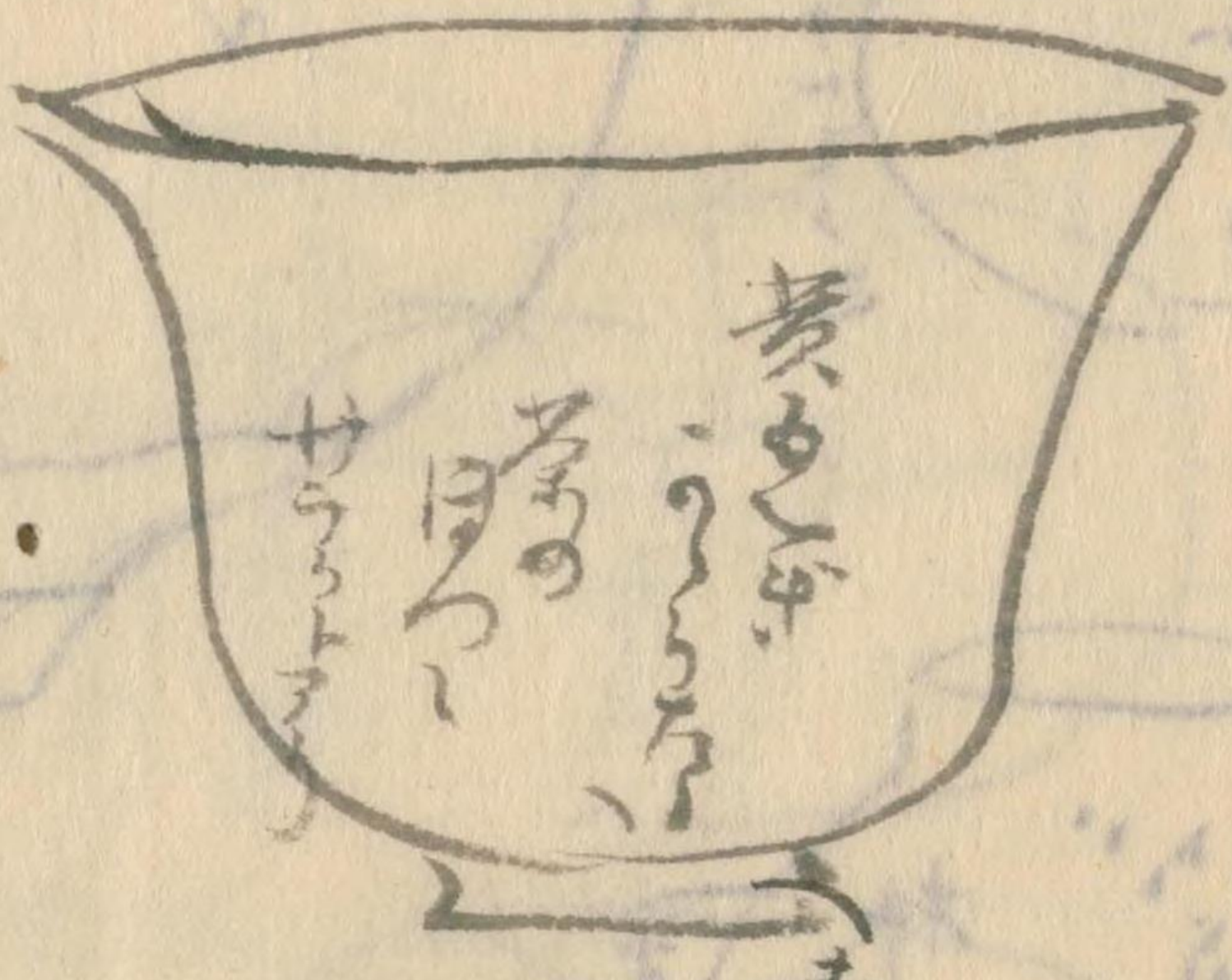
粟田


萌黄
金
青
朱
赤
宝ら
土白

高取

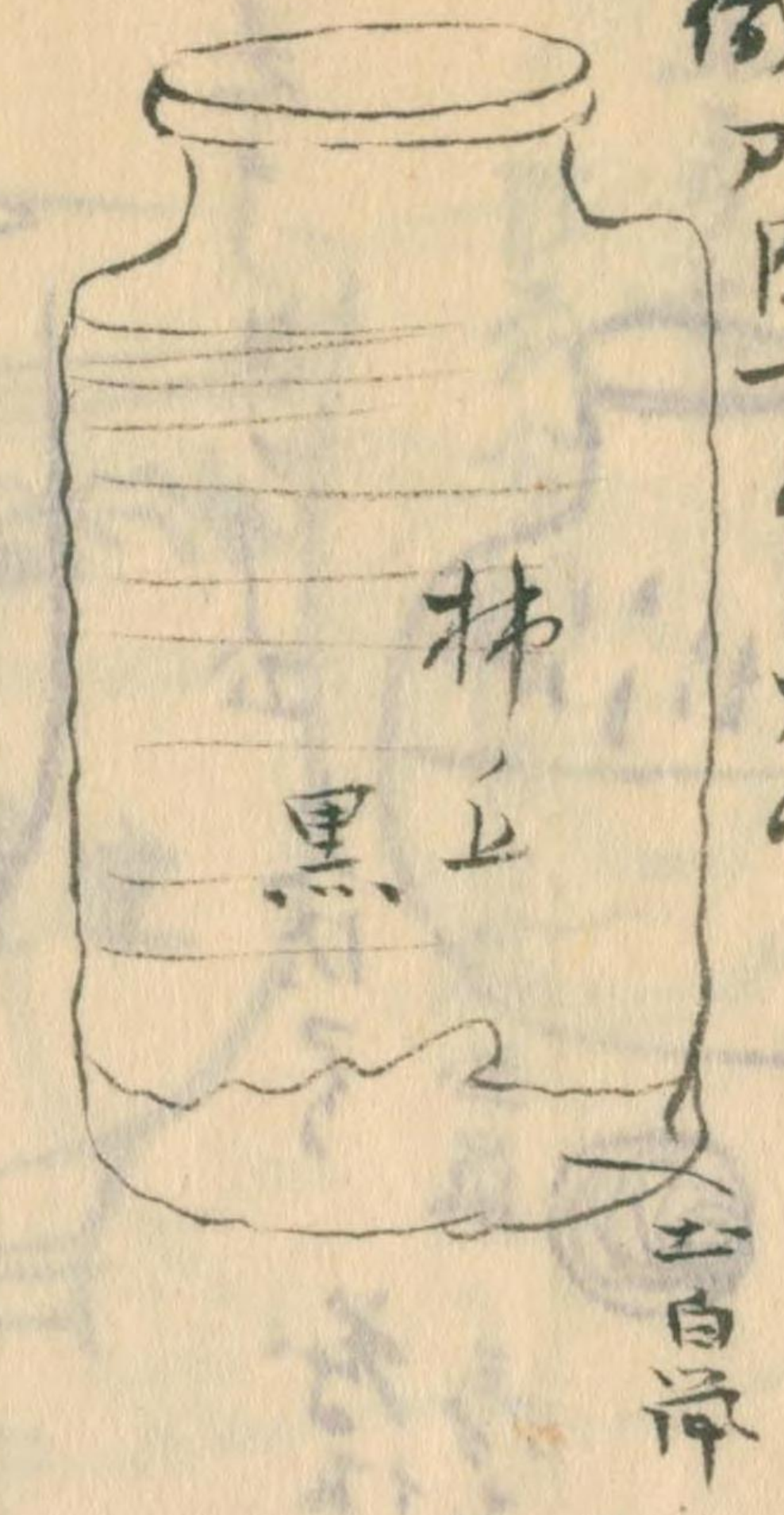


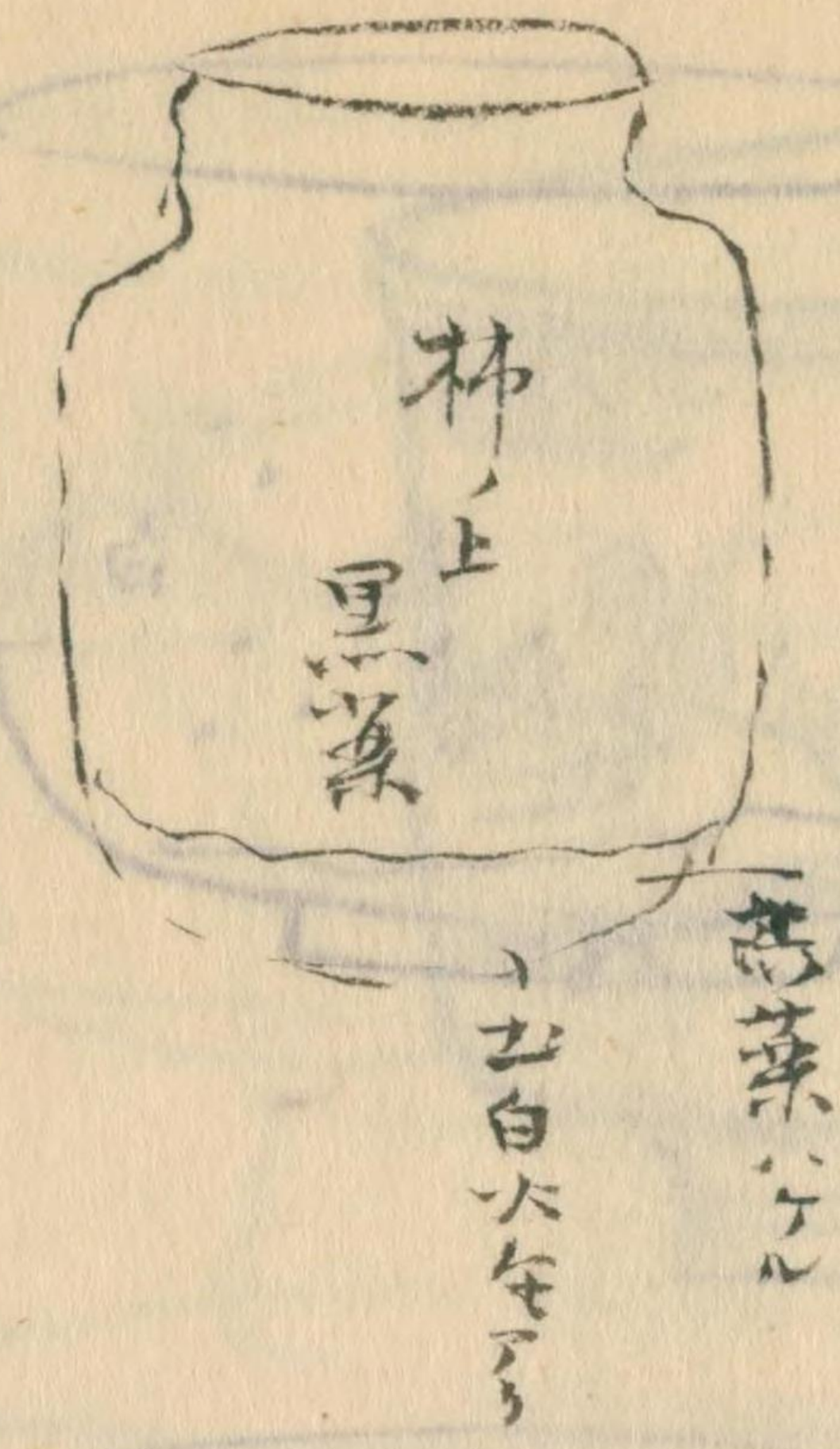
イラホ

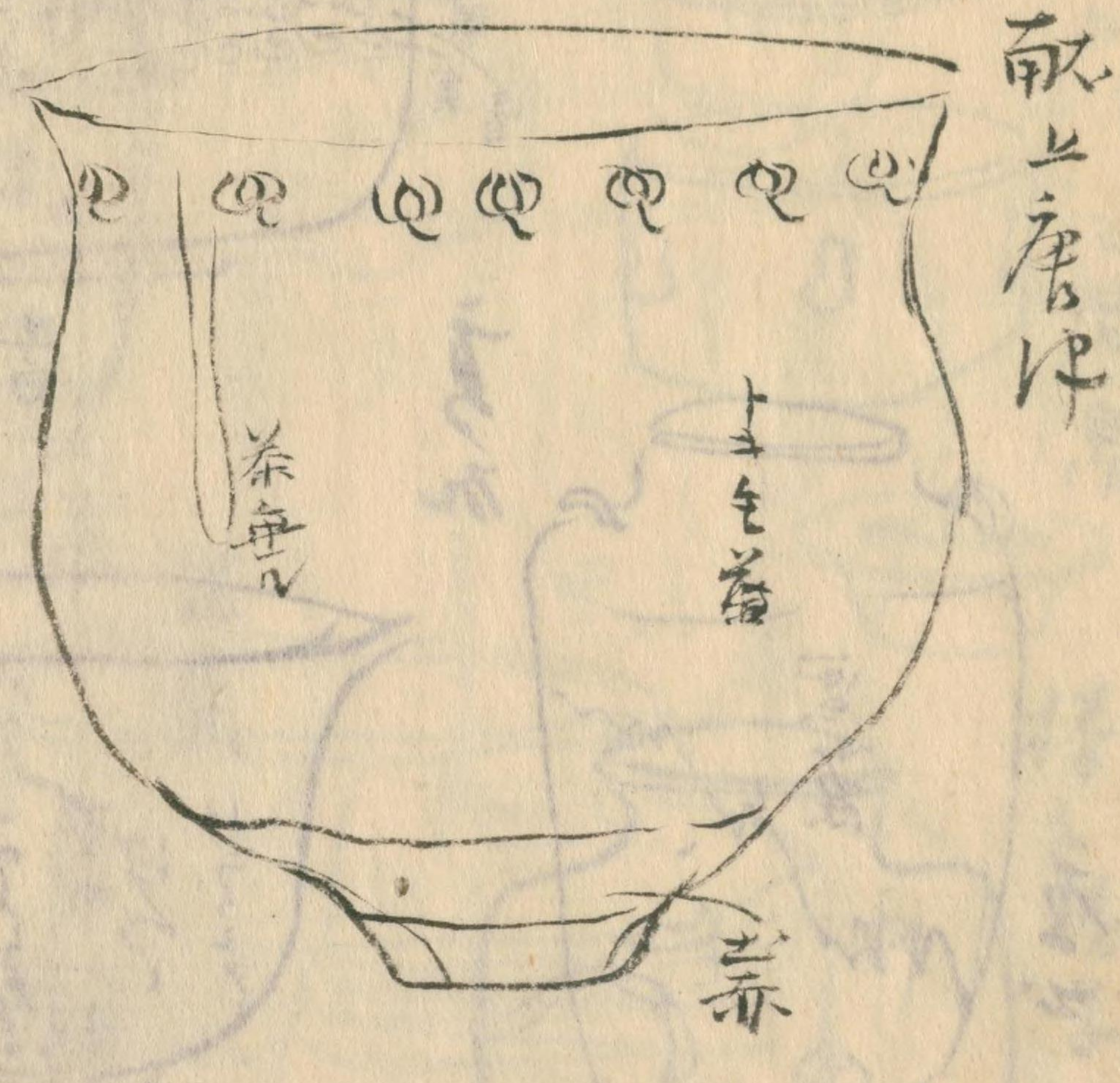

黄色ナ中
うちうち
茶のほつし
サラトスル
青薬ニ春号ある

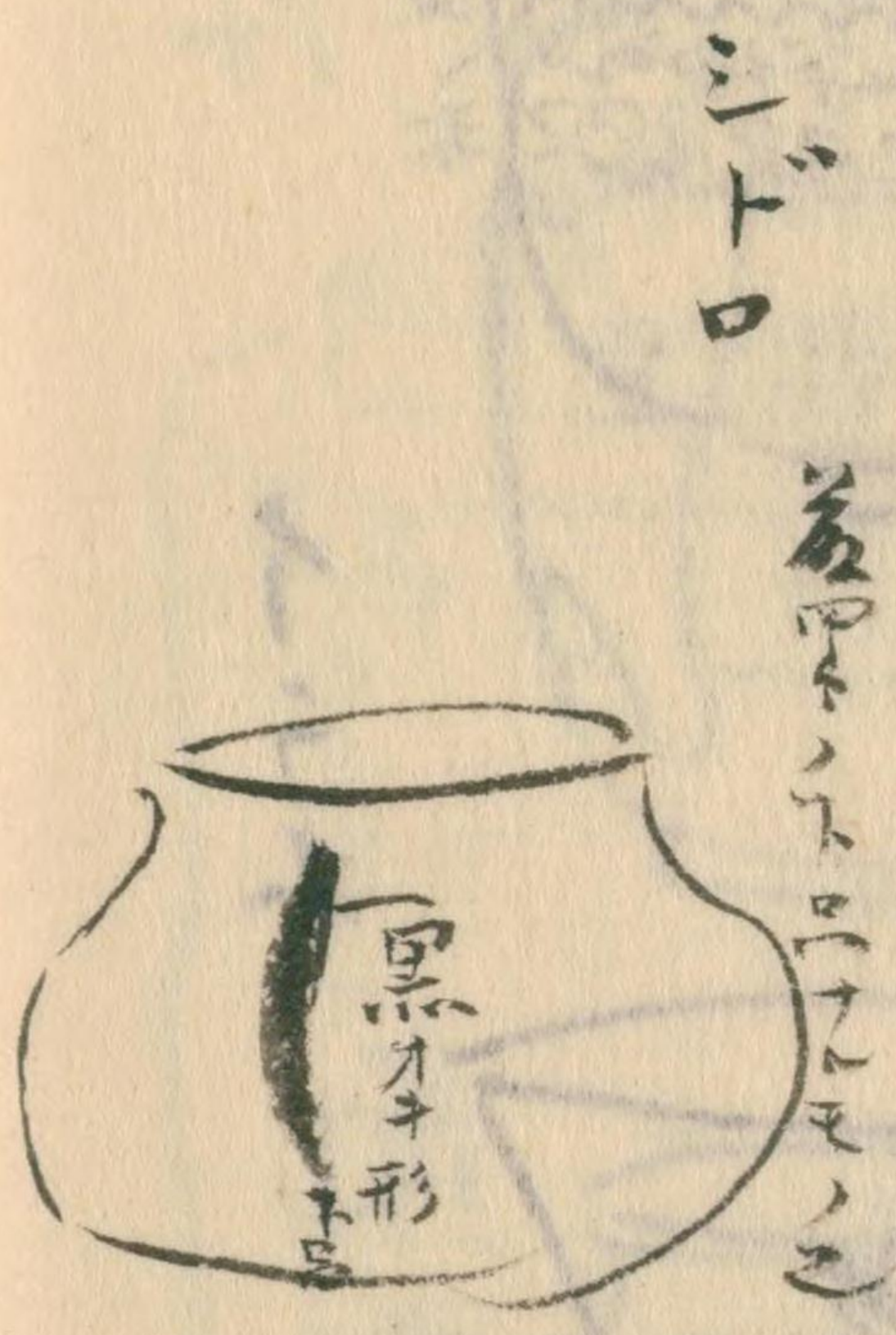
ガラス使用

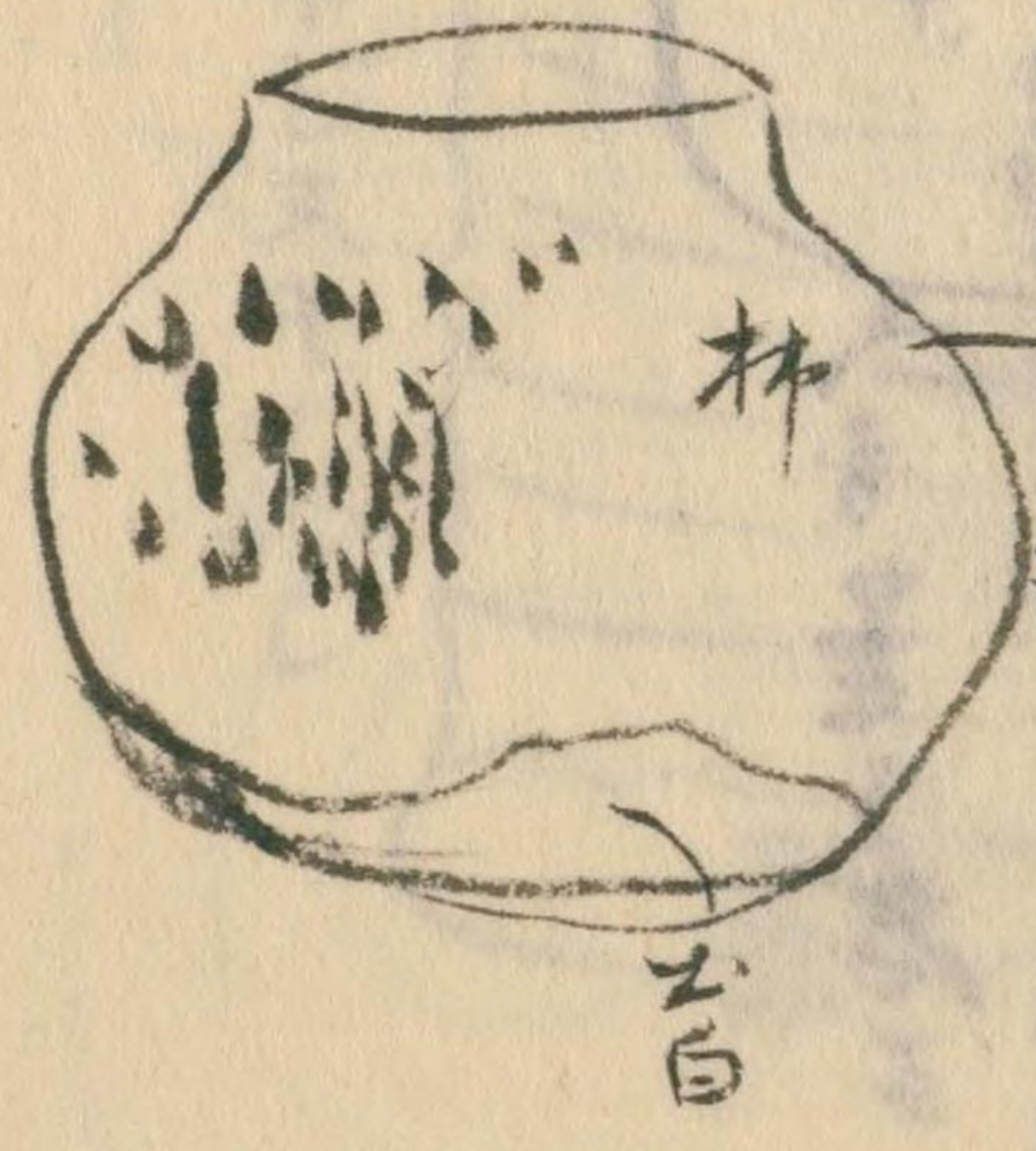
九月十四日前田ヨリ

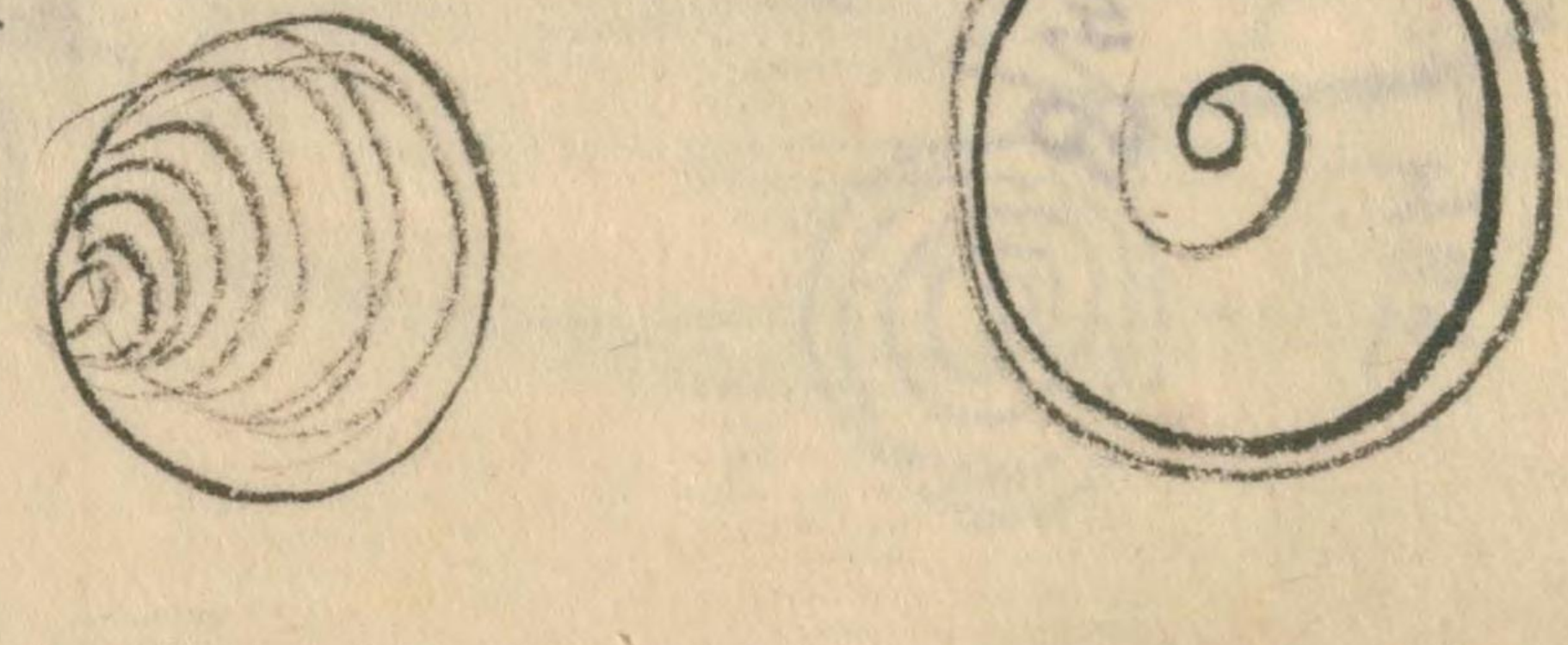

織ア焼ナリトヨブ
柿ノ上
黒
土白焼

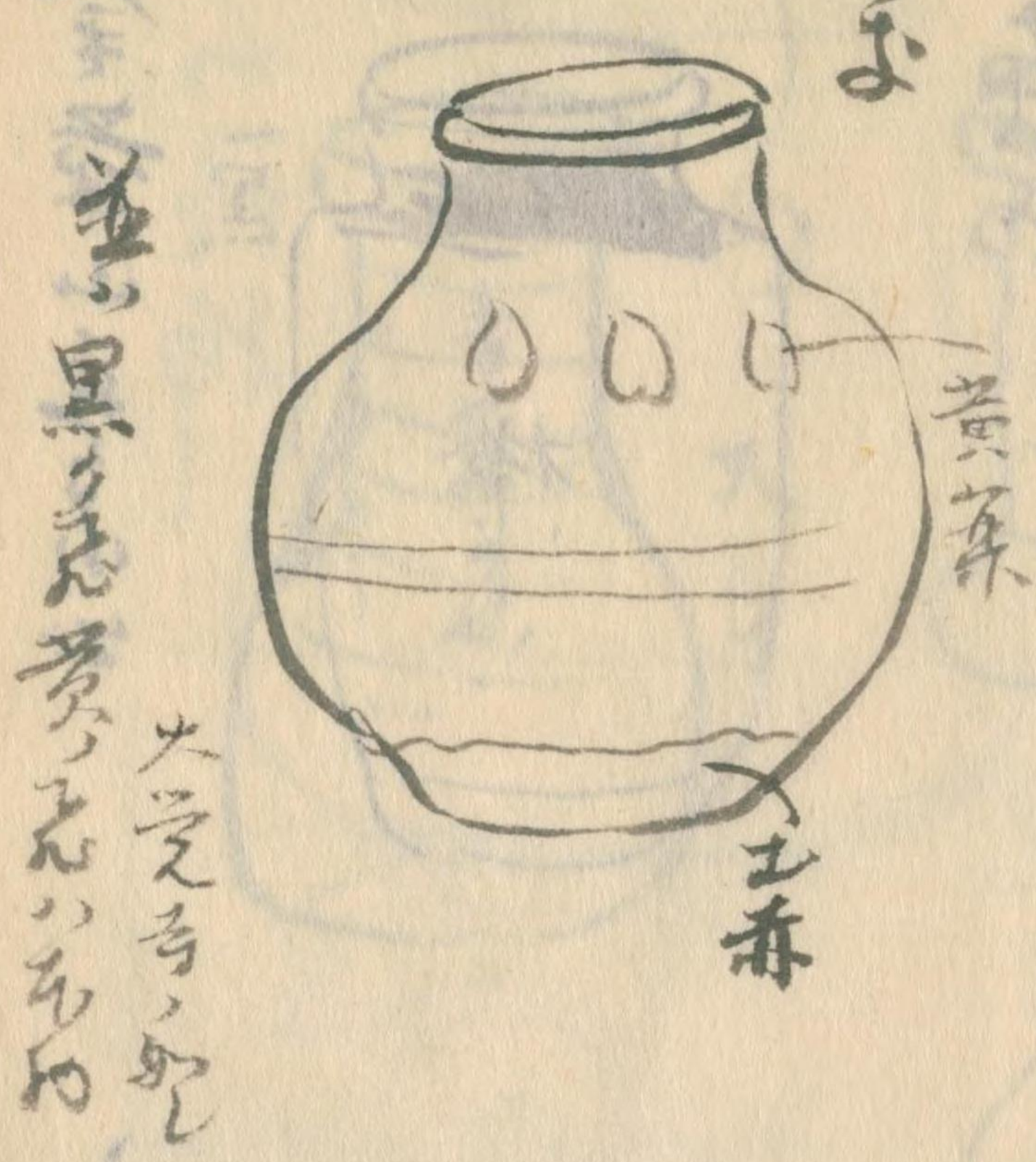

柿ノ上
黒薬
一萬薬ハケル
土白火色アリ

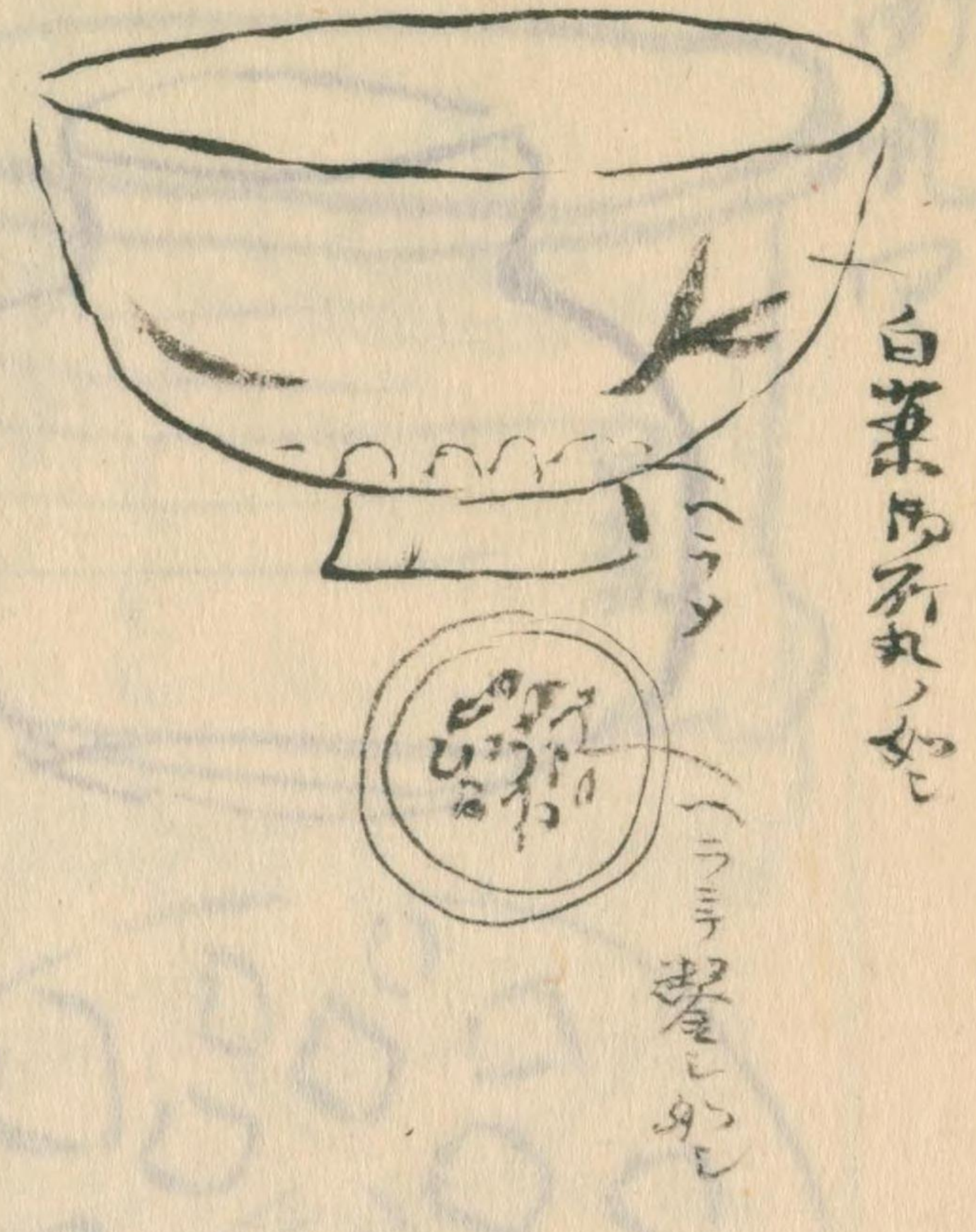

献上唐津
茶垂ル
上モ藍
土赤

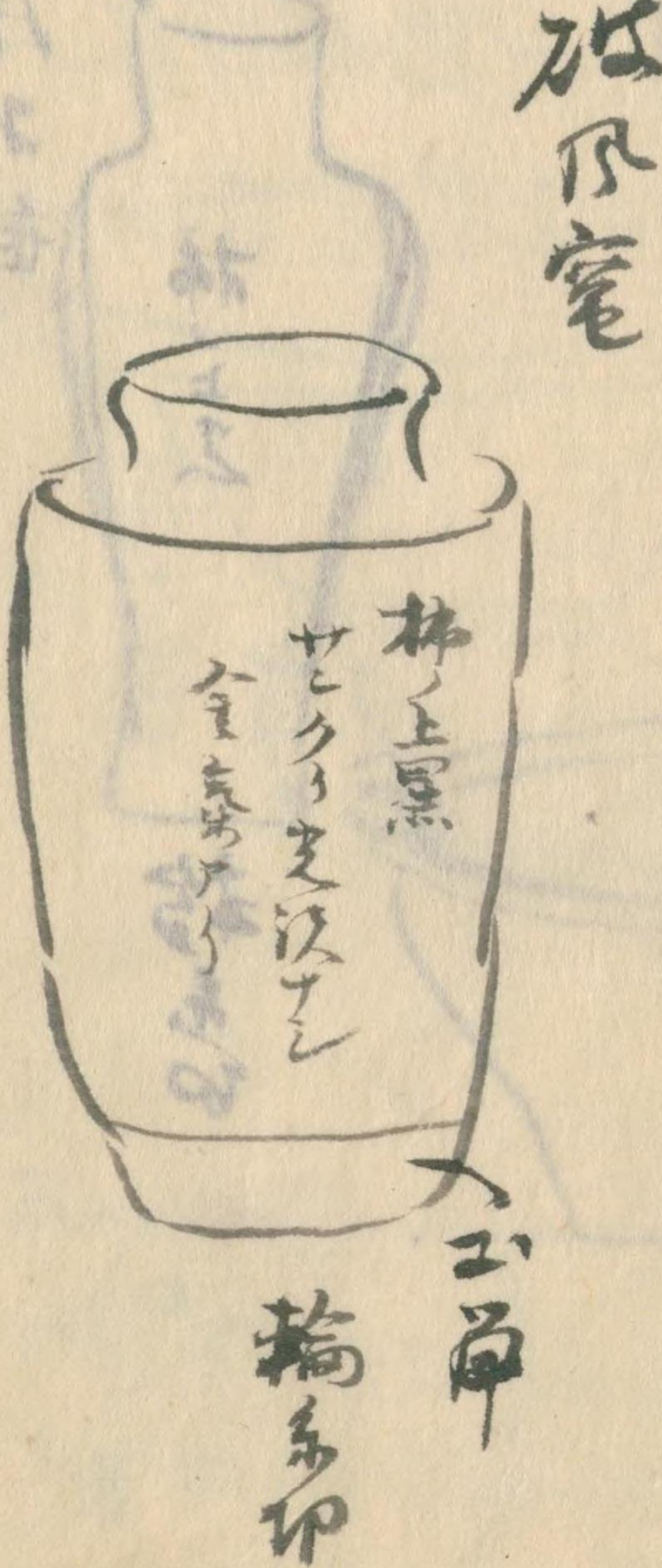

シドロ
藍界ノ下ニ口ナルモノ也
黒オチ形

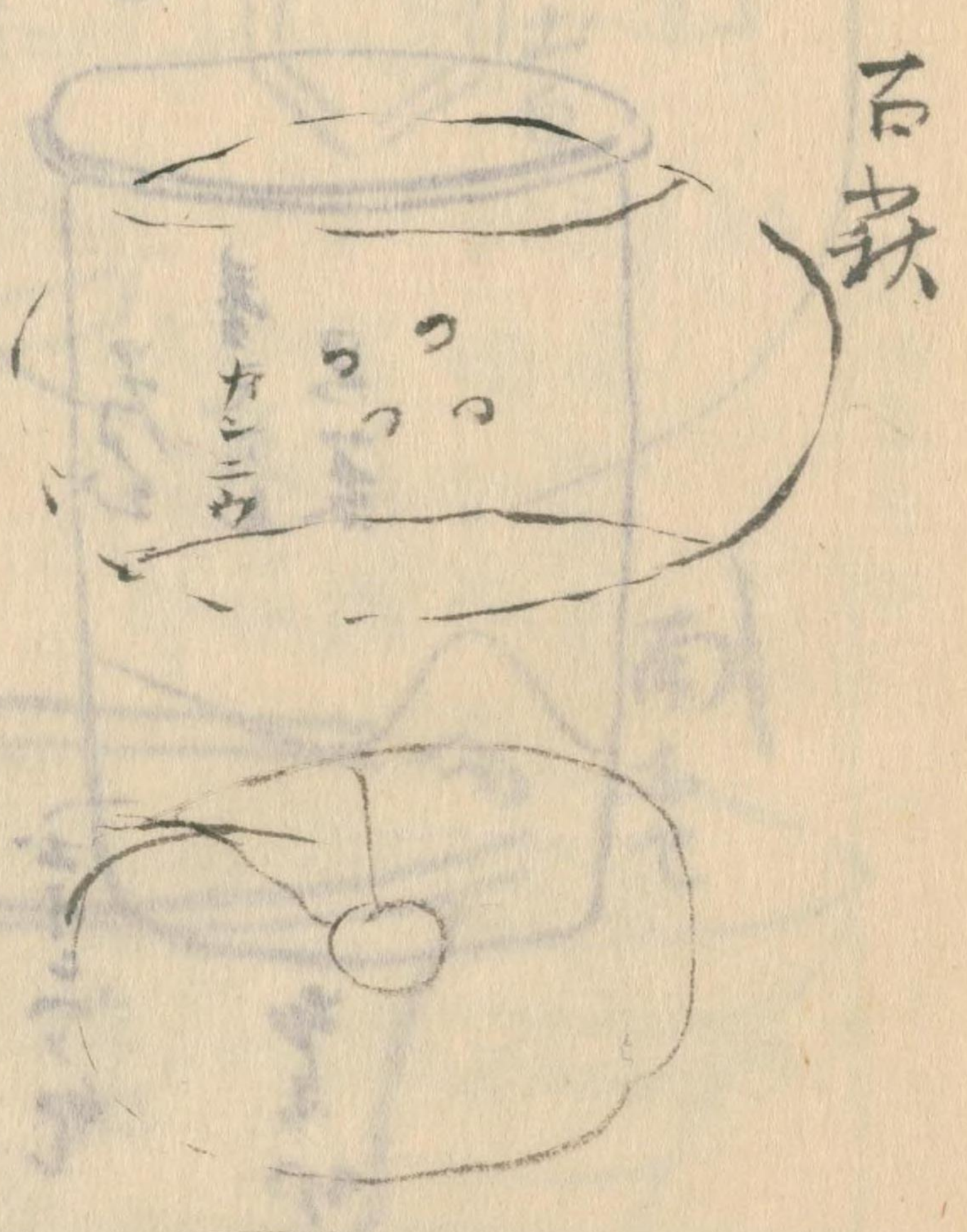

柿
支次アリ
土白

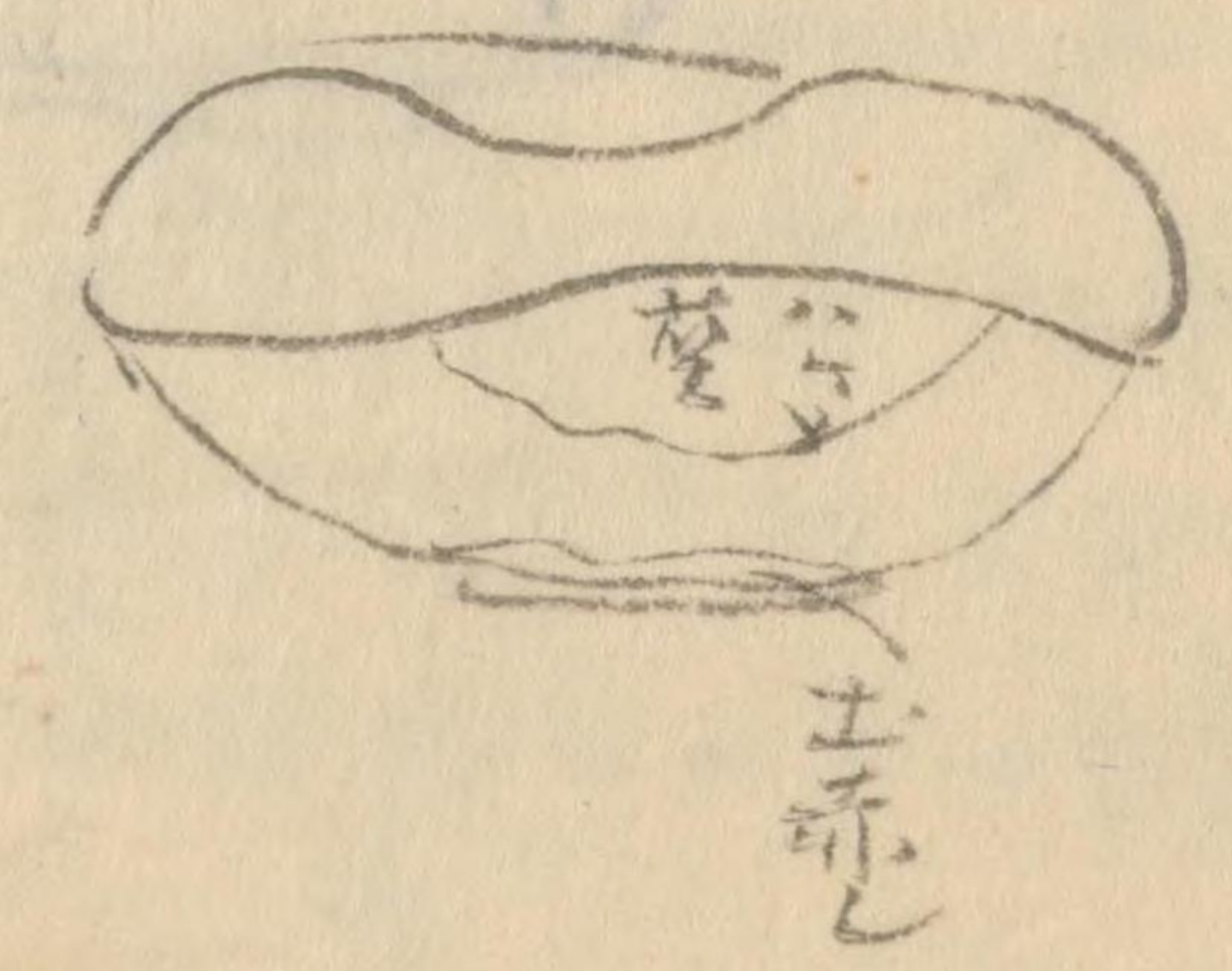



[illegible]
並ニ黒ノ所黄ノ所ハ
大覚寺ノ如シ
黄薬
土赤

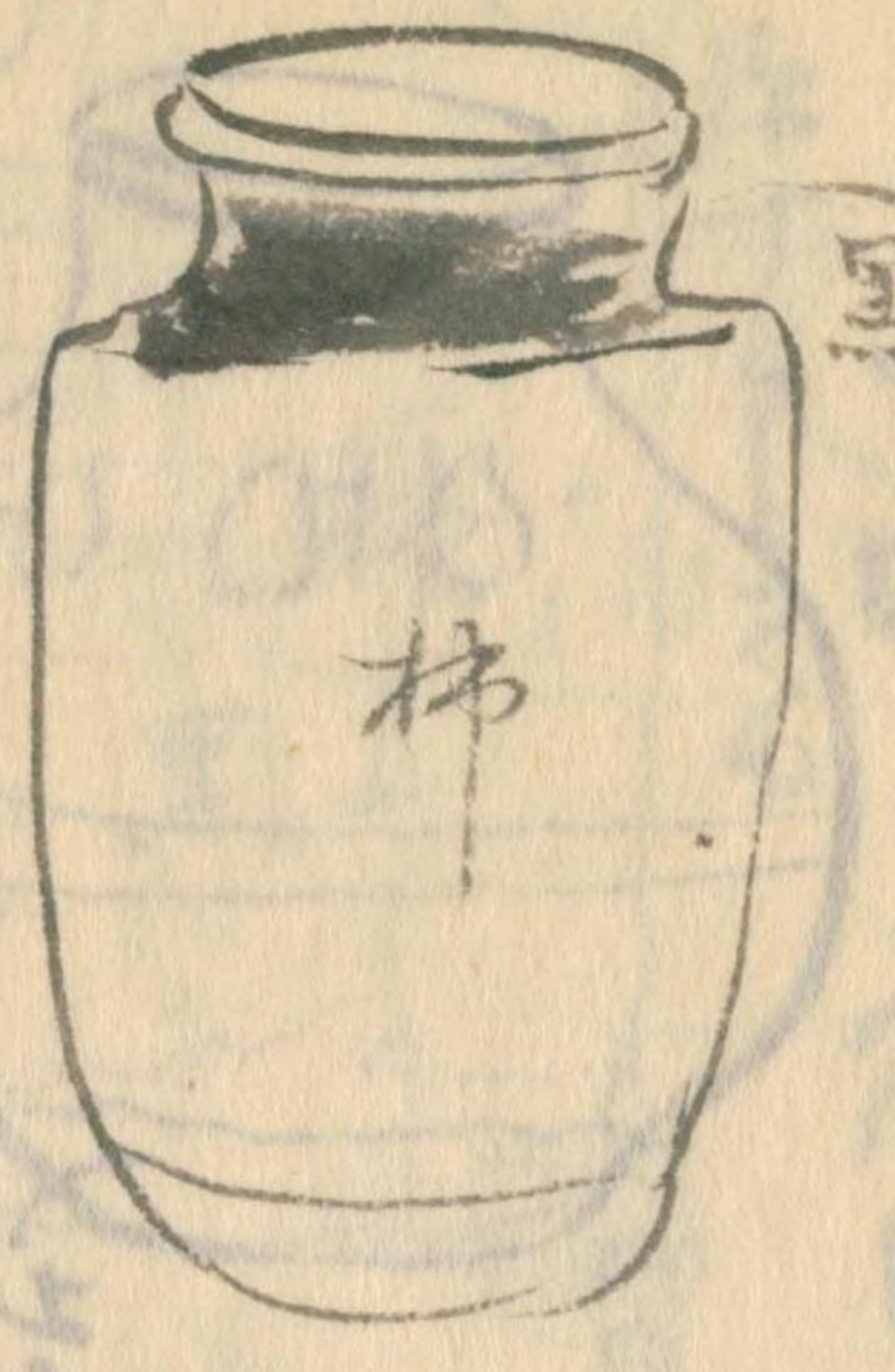

白薬所々丸ノ如シ
ヘラメ
ヘラデ書シ如シ


破風窯
柿ノ上黒
サビクリ支次ナシ
金気アリ
土白
輪糸切

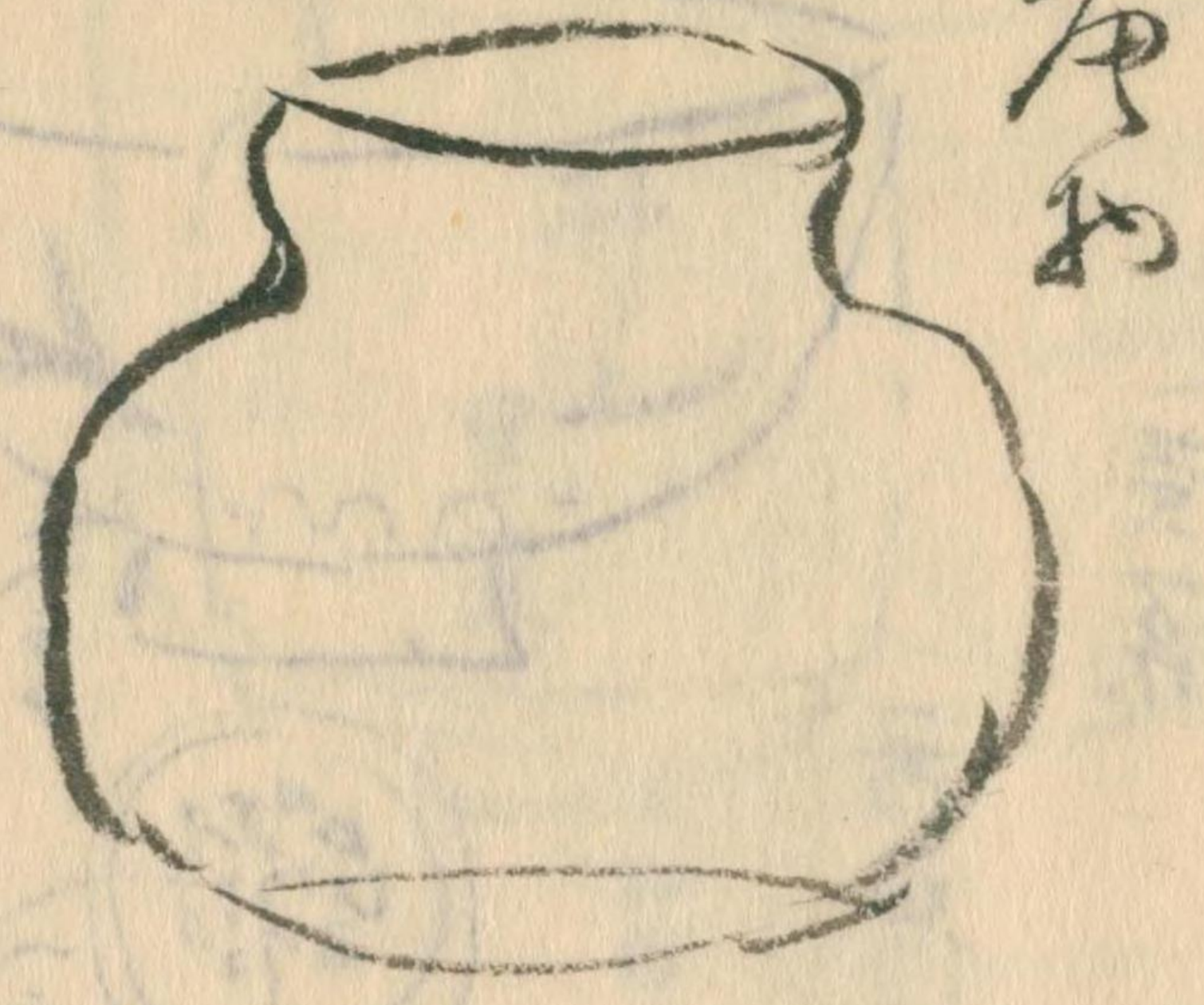

古萩
カンニウ


薬ハケ
土赤シ

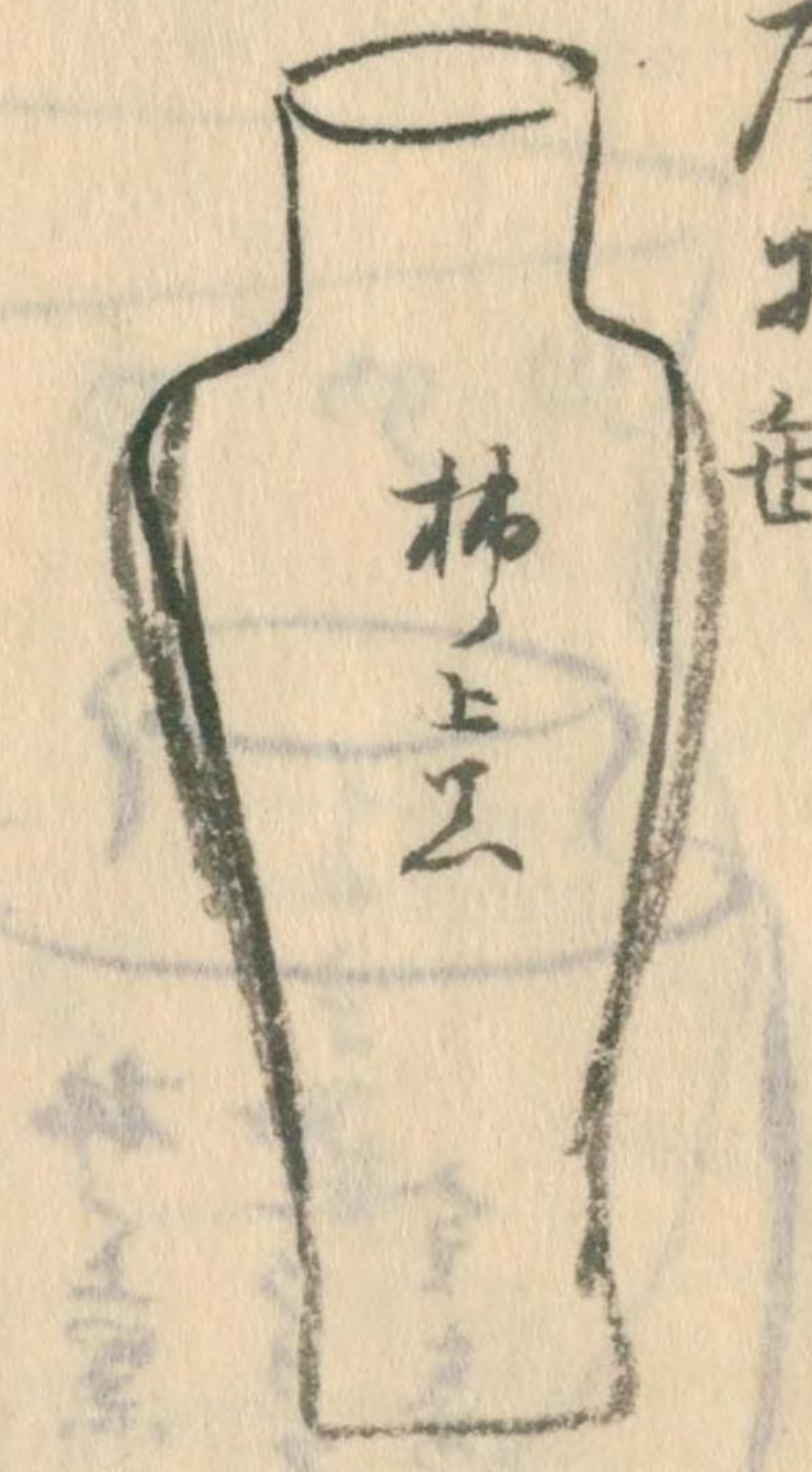
金華山まり小公



唐物

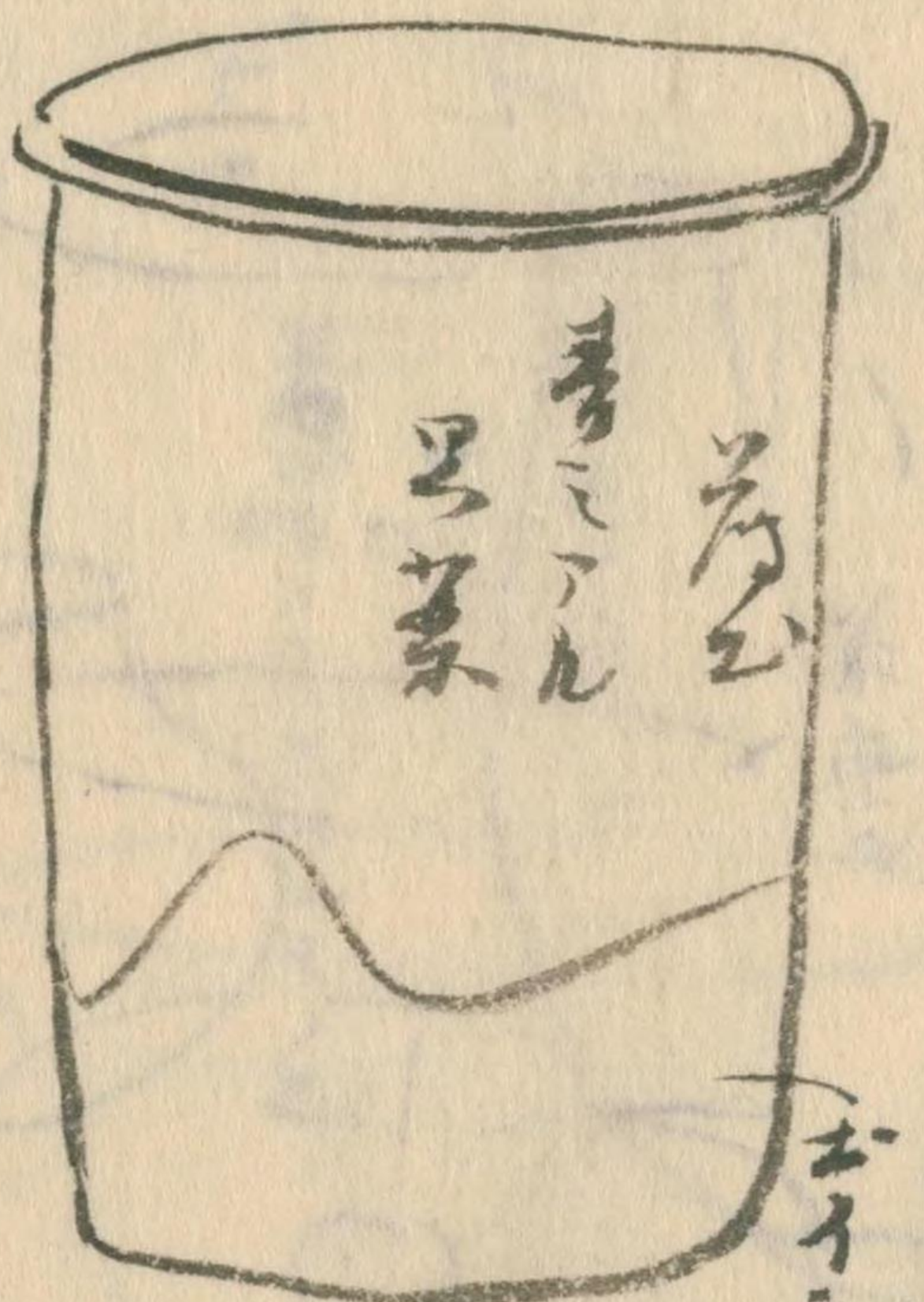


唐物鐏



粉青印

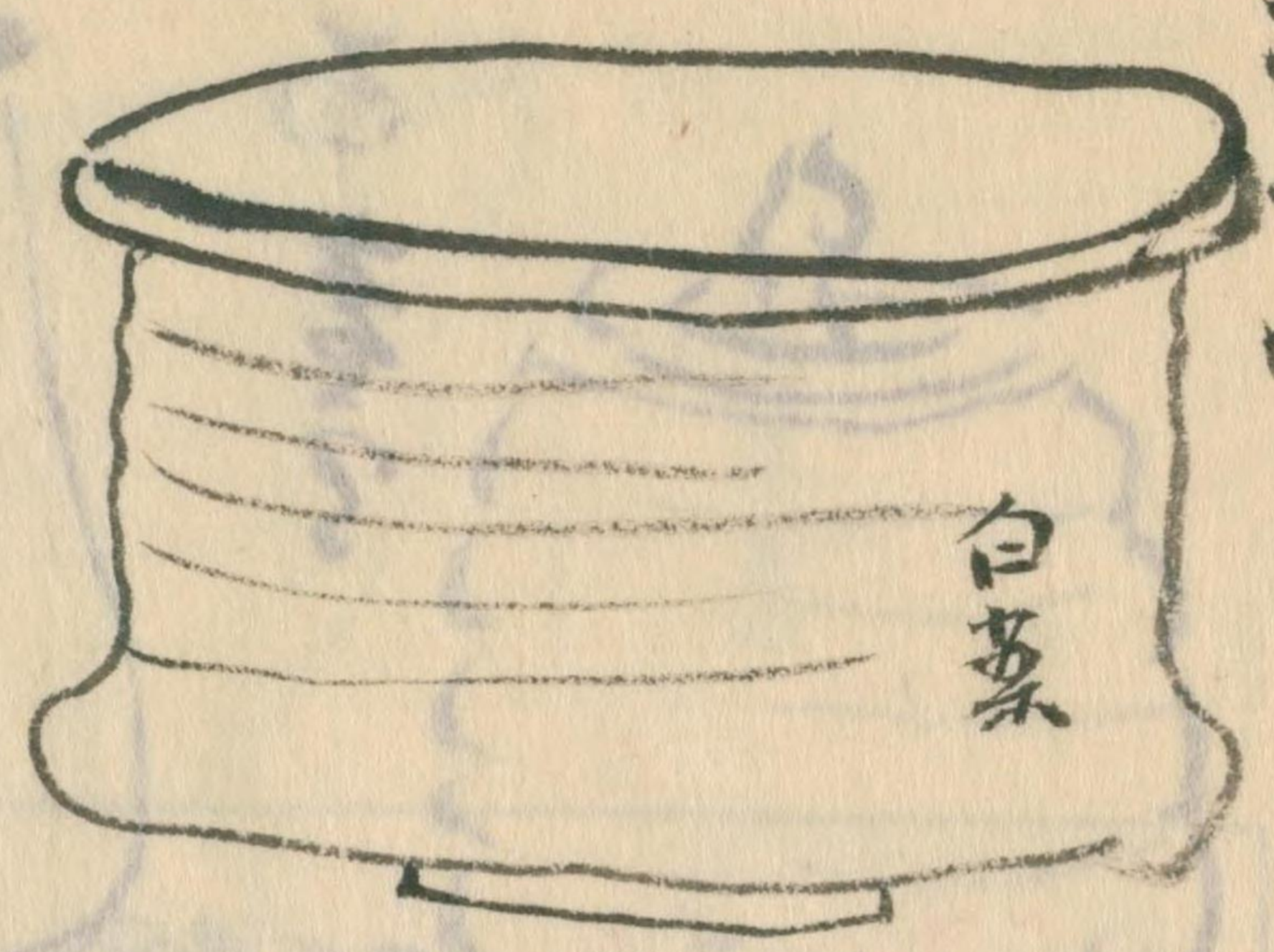
朝鮮

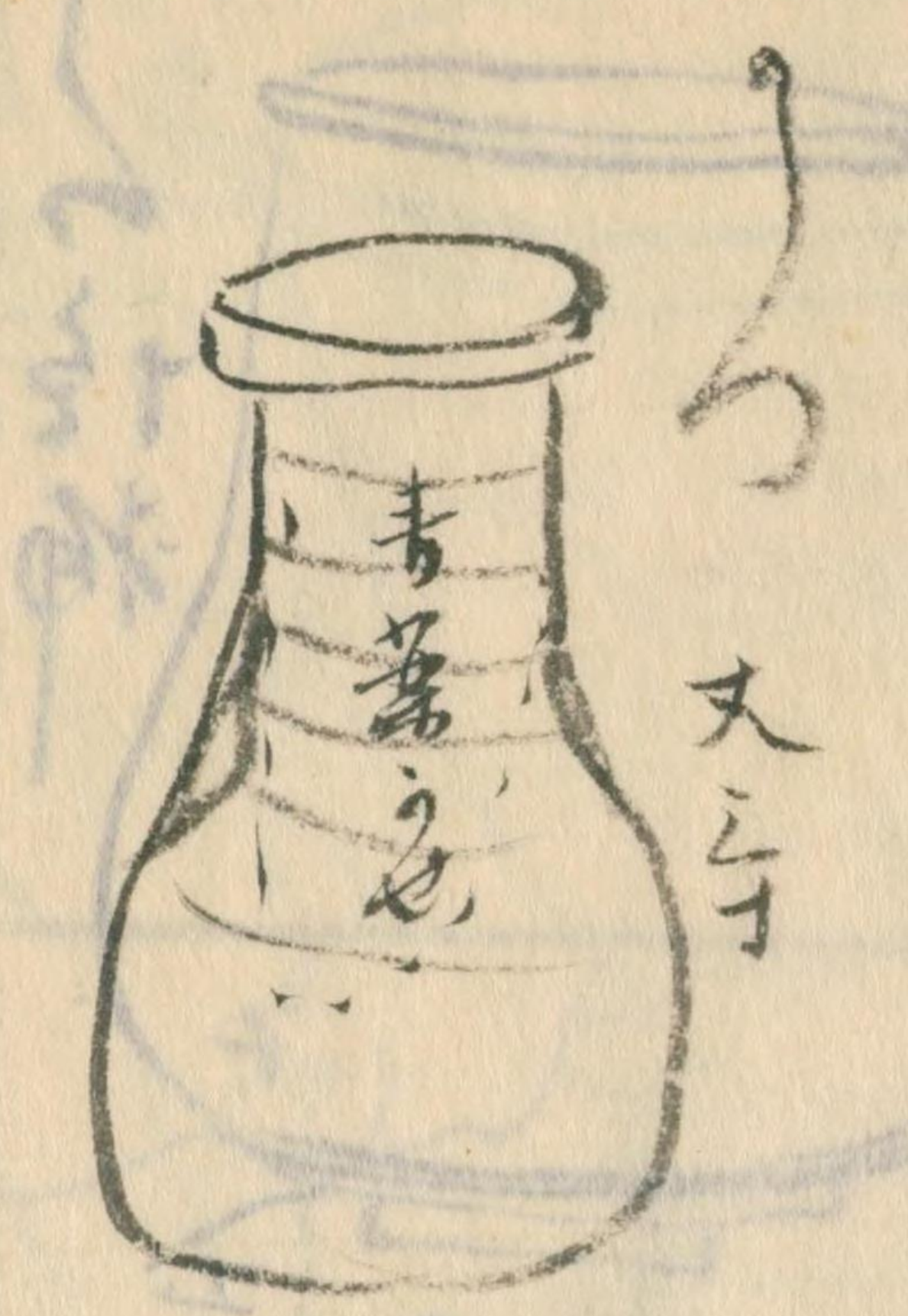


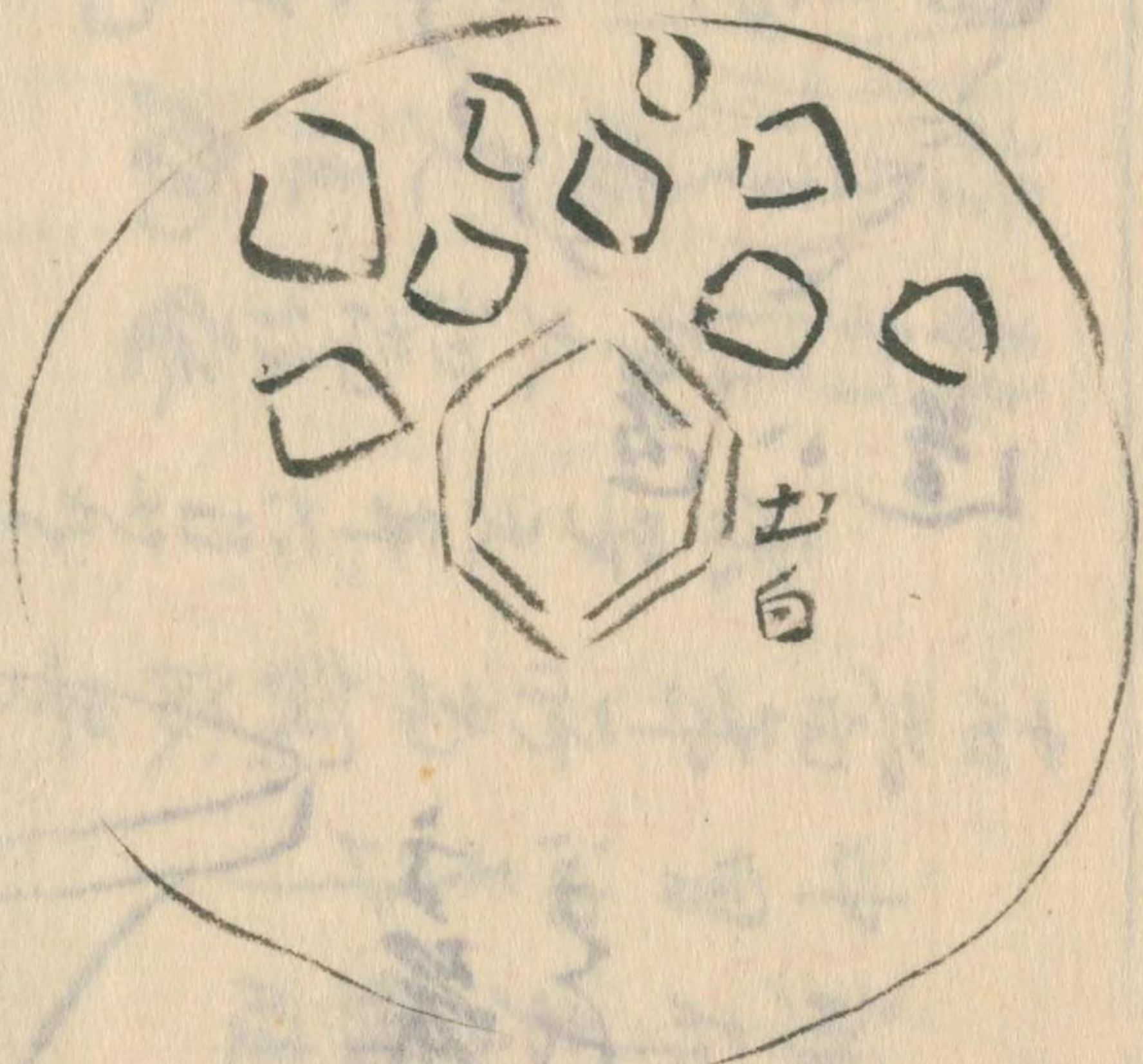
おオニヘノ也

其外印

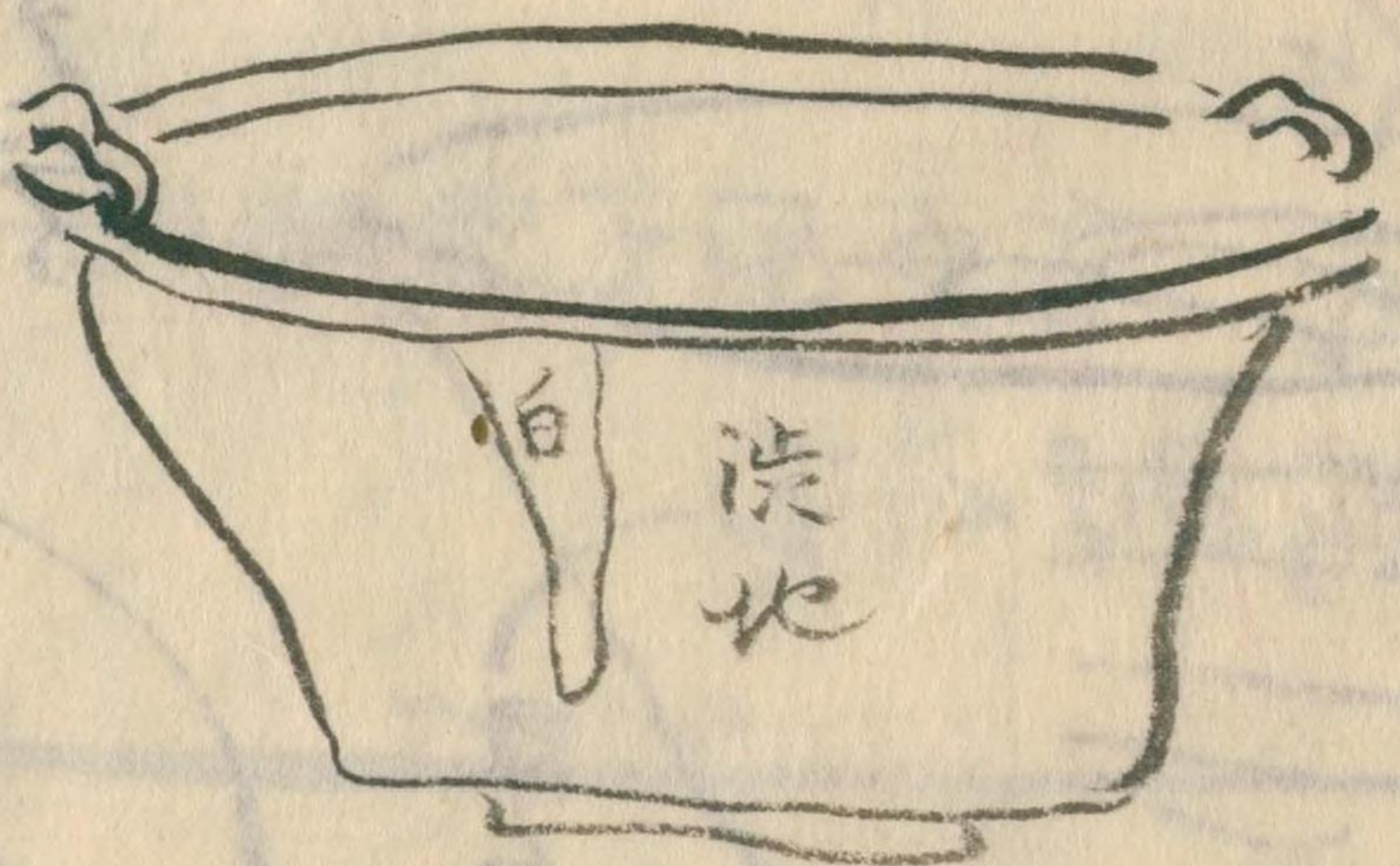
御所丸写



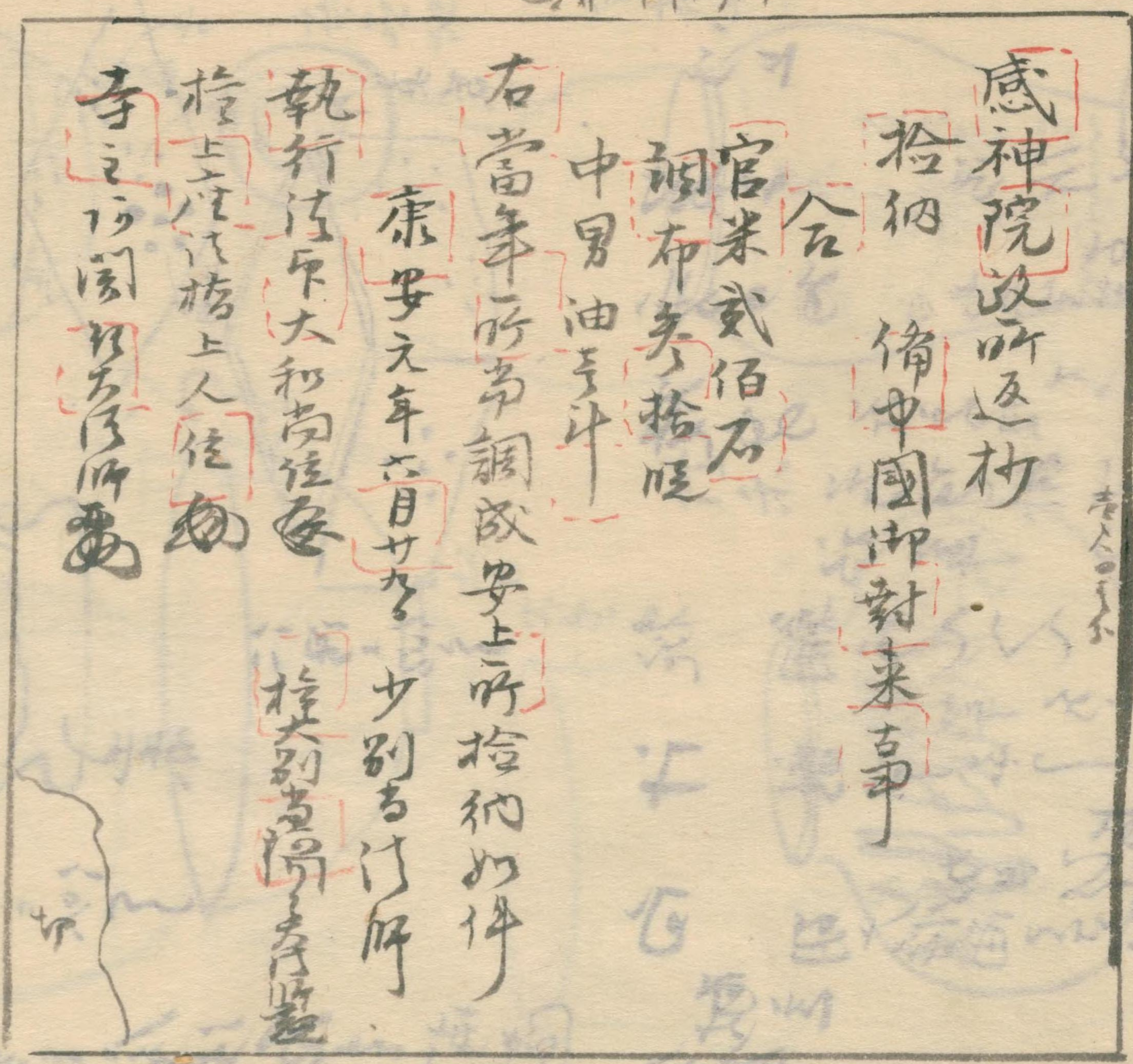




南蛮



明治廿四年九月廿三日　京都寺町通六角南
山田屋卯兵衛方ニ此図全ニ而返り又代八円五十銭ニ
此文書ハ物ニ表隠シ印章ハ明瞭ナレハ十分ニ写ス



感神院政所返抄

拾俵　備中國御封米事

合

官米弐佰石

調布参拾疋

中男油壱斗

右當年所當調致皆上所拾納如件

康安元年六月廿九日　少別当行所

執行法印大和尚位

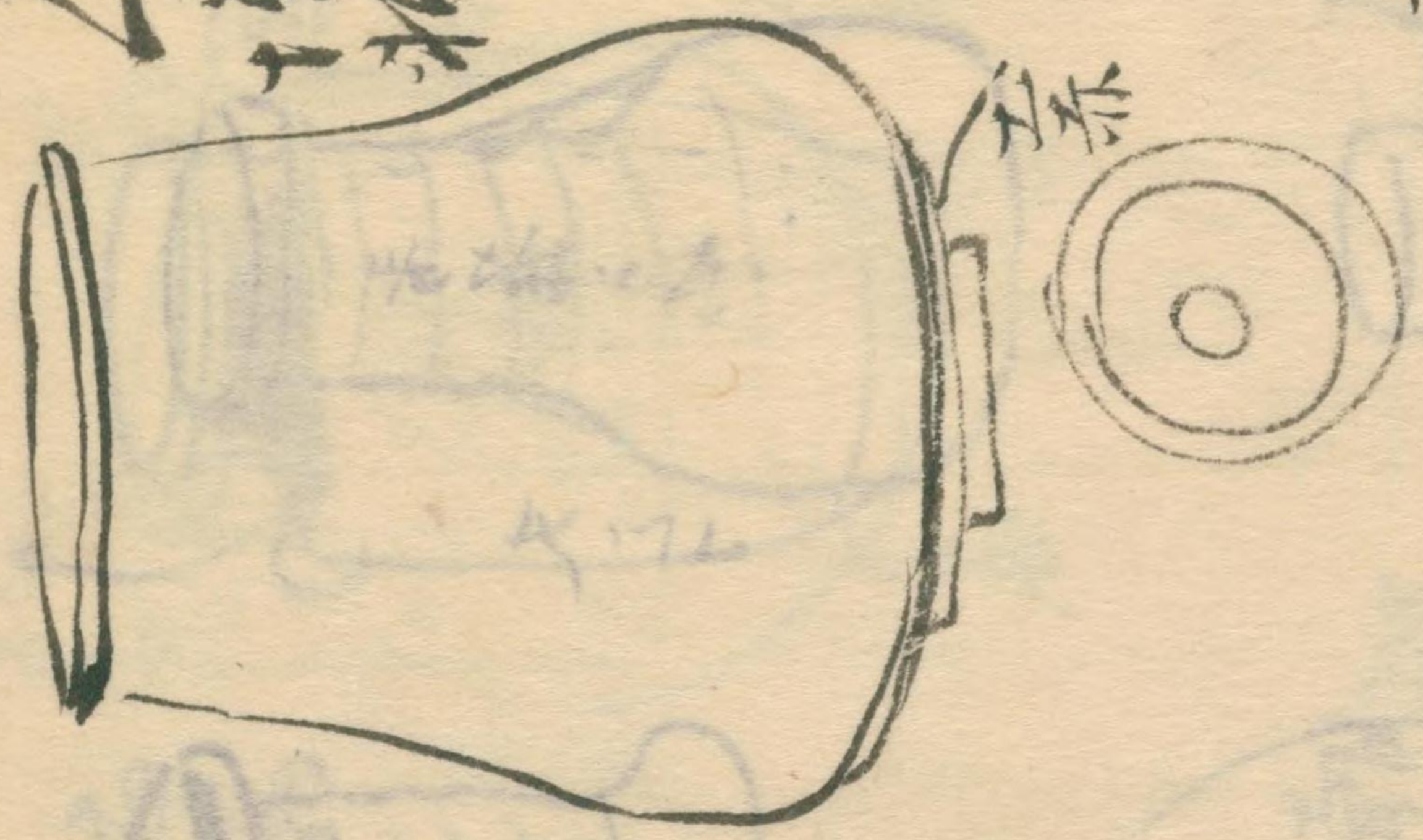
権上座法橋上人位

権大別当法印大和尚位

寺主法眼和尚位

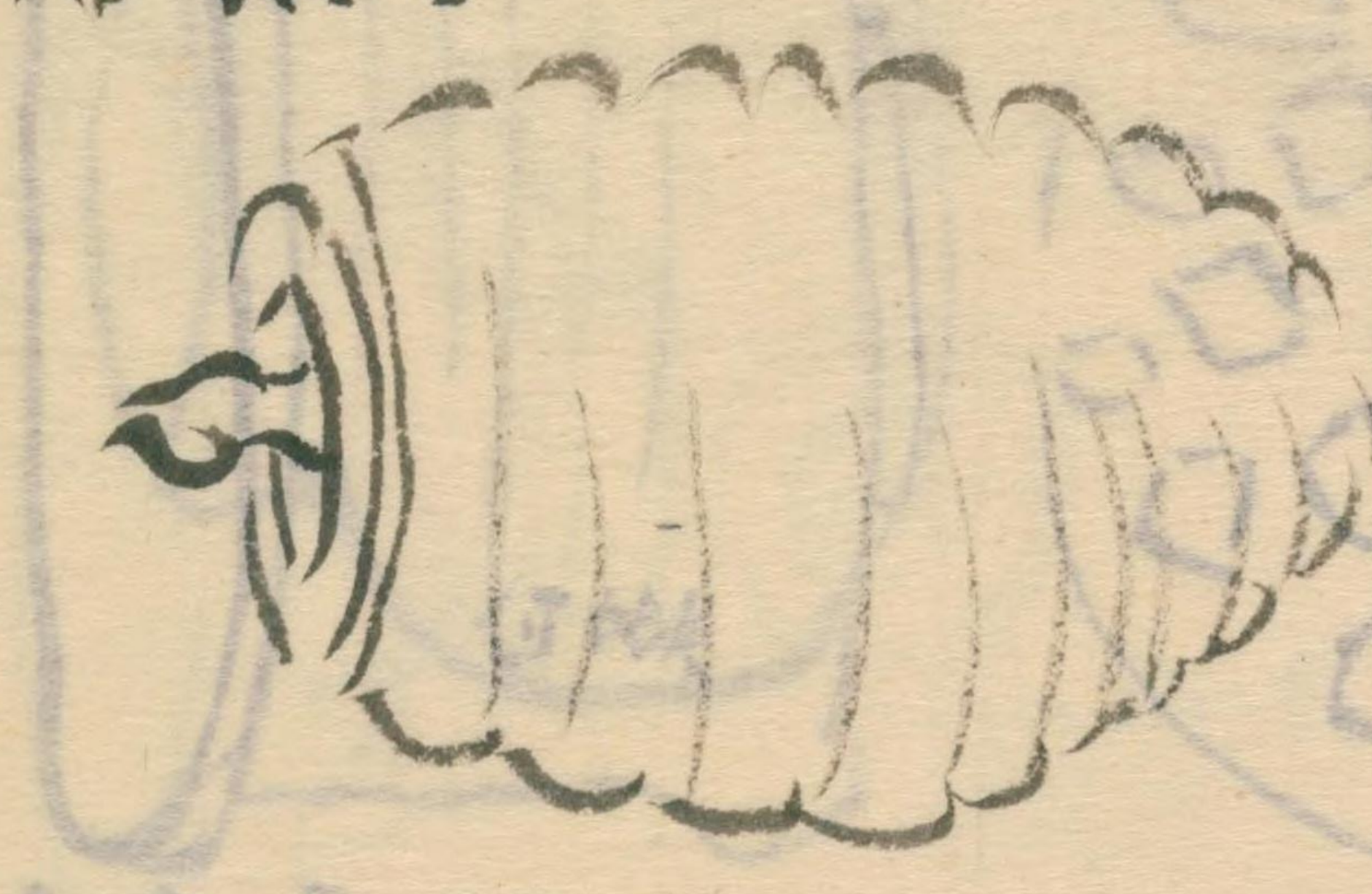
壱尺四寸

切



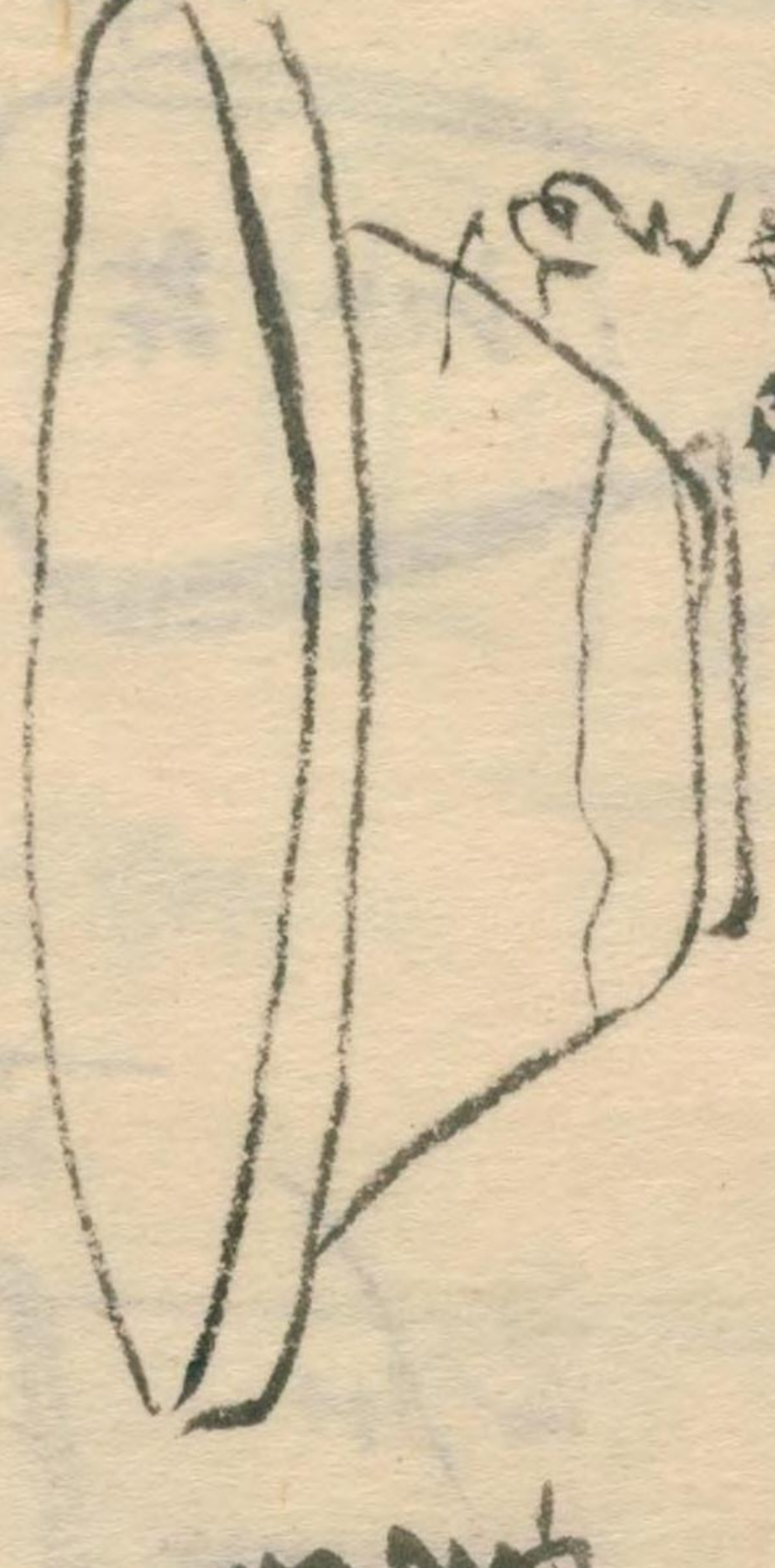
かくつ柿釉

土赤



南京写

道八造

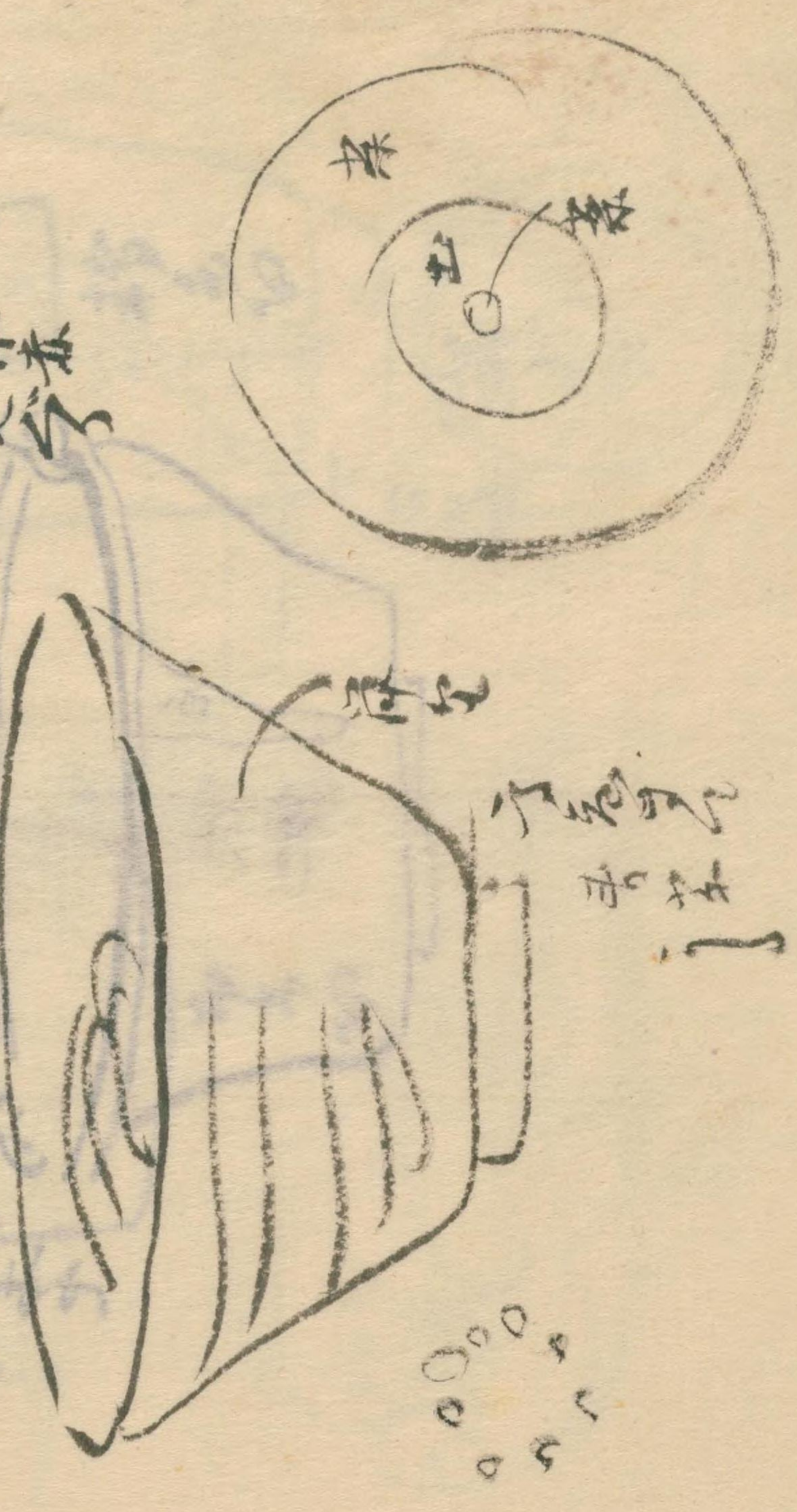


黄[illegible]

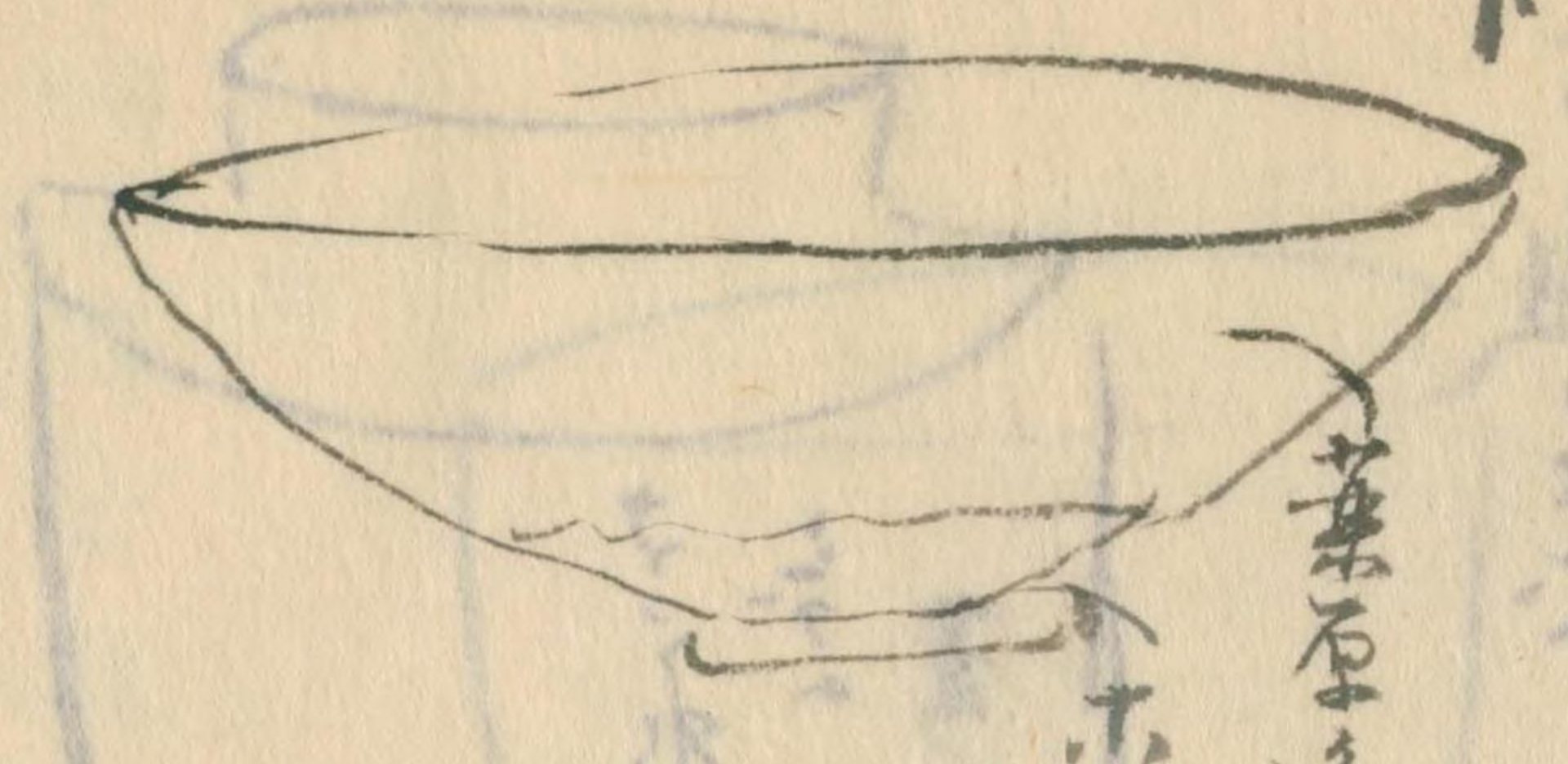
土赤

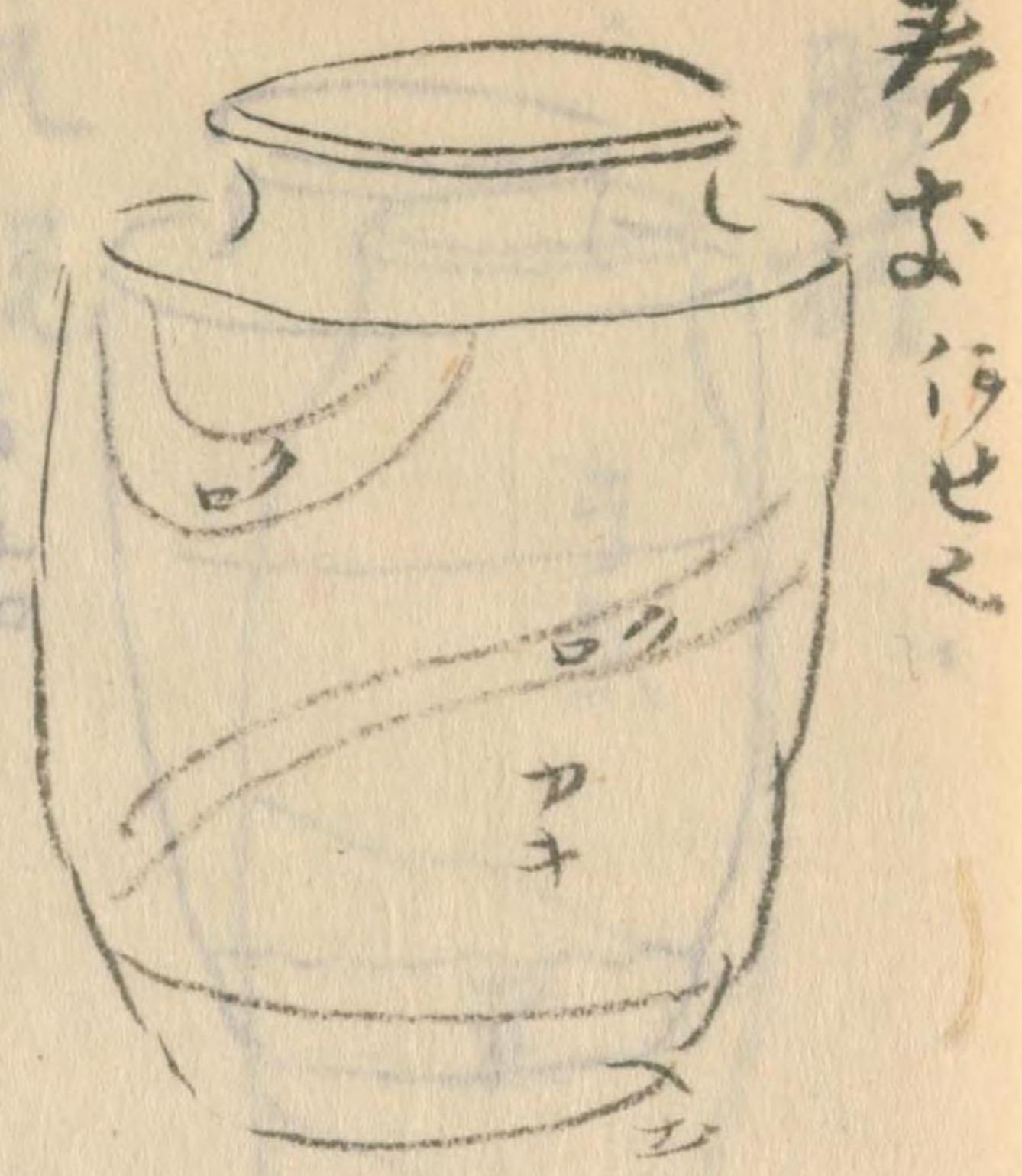
さび

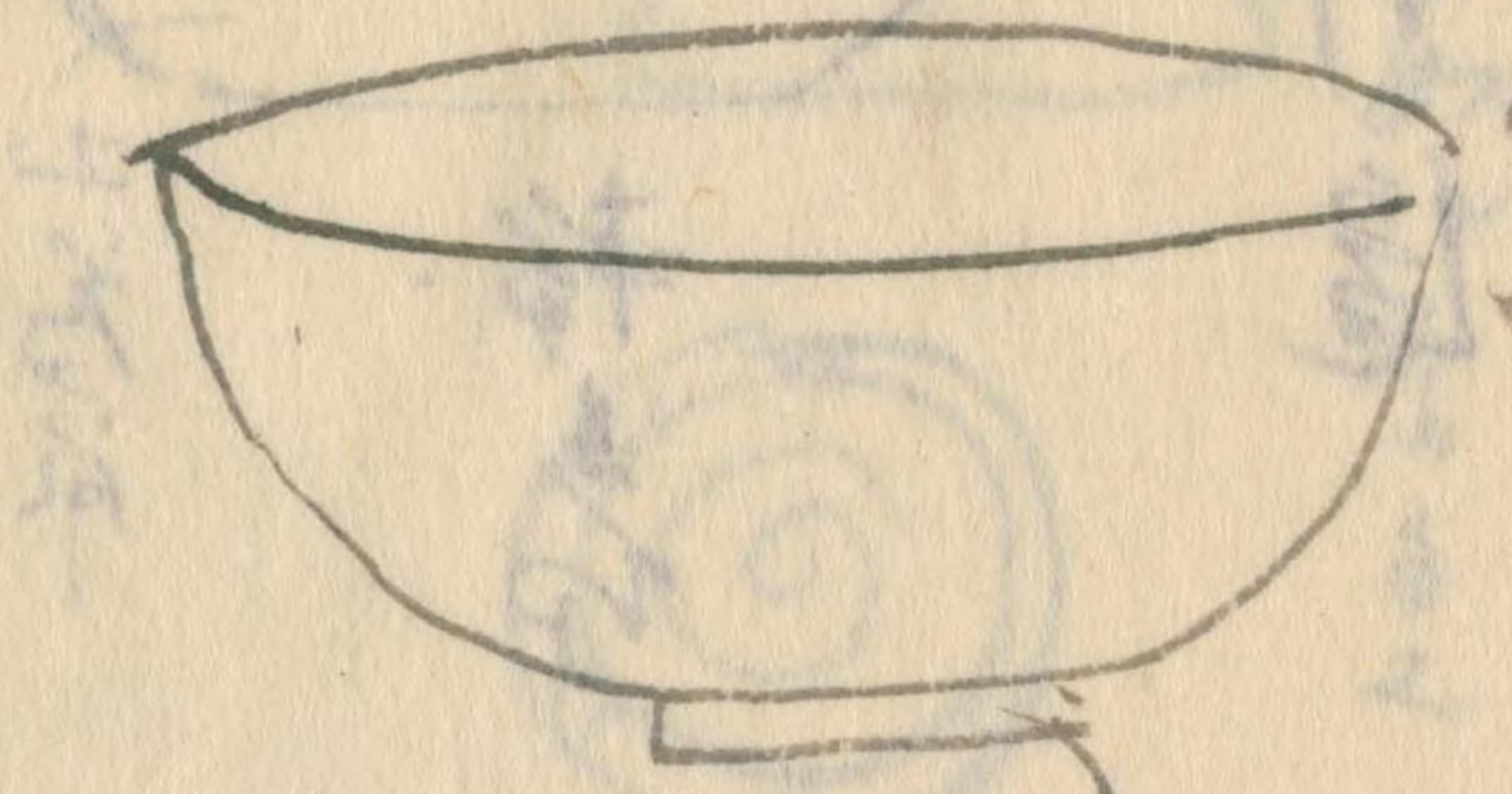
[illegible]うけめ

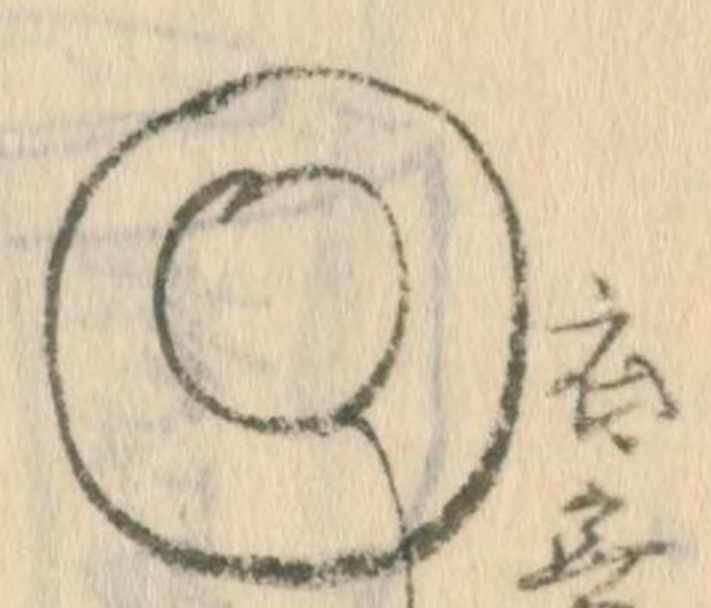


後寿お作せ之

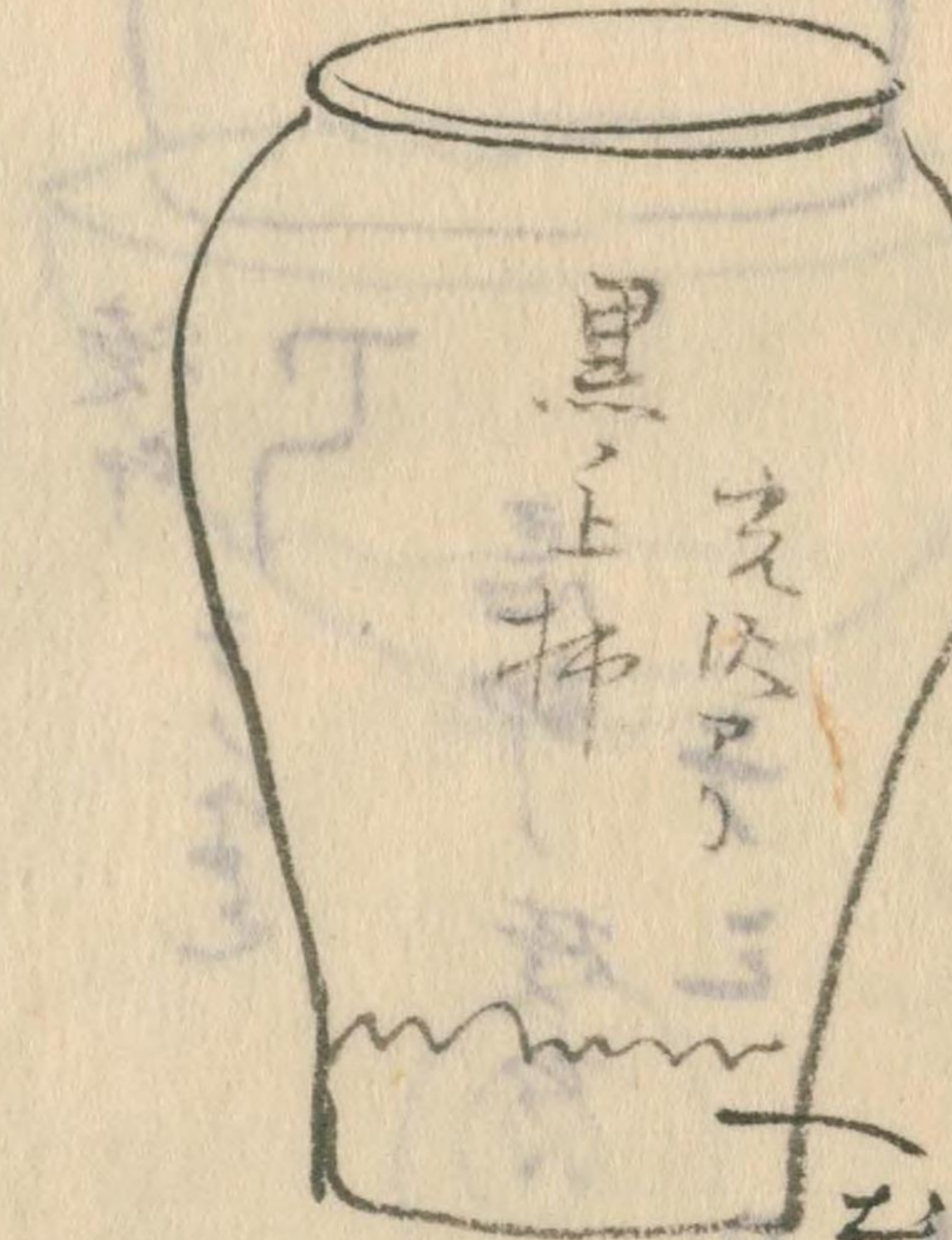

キロト
薬厚ク
カニウ
土白



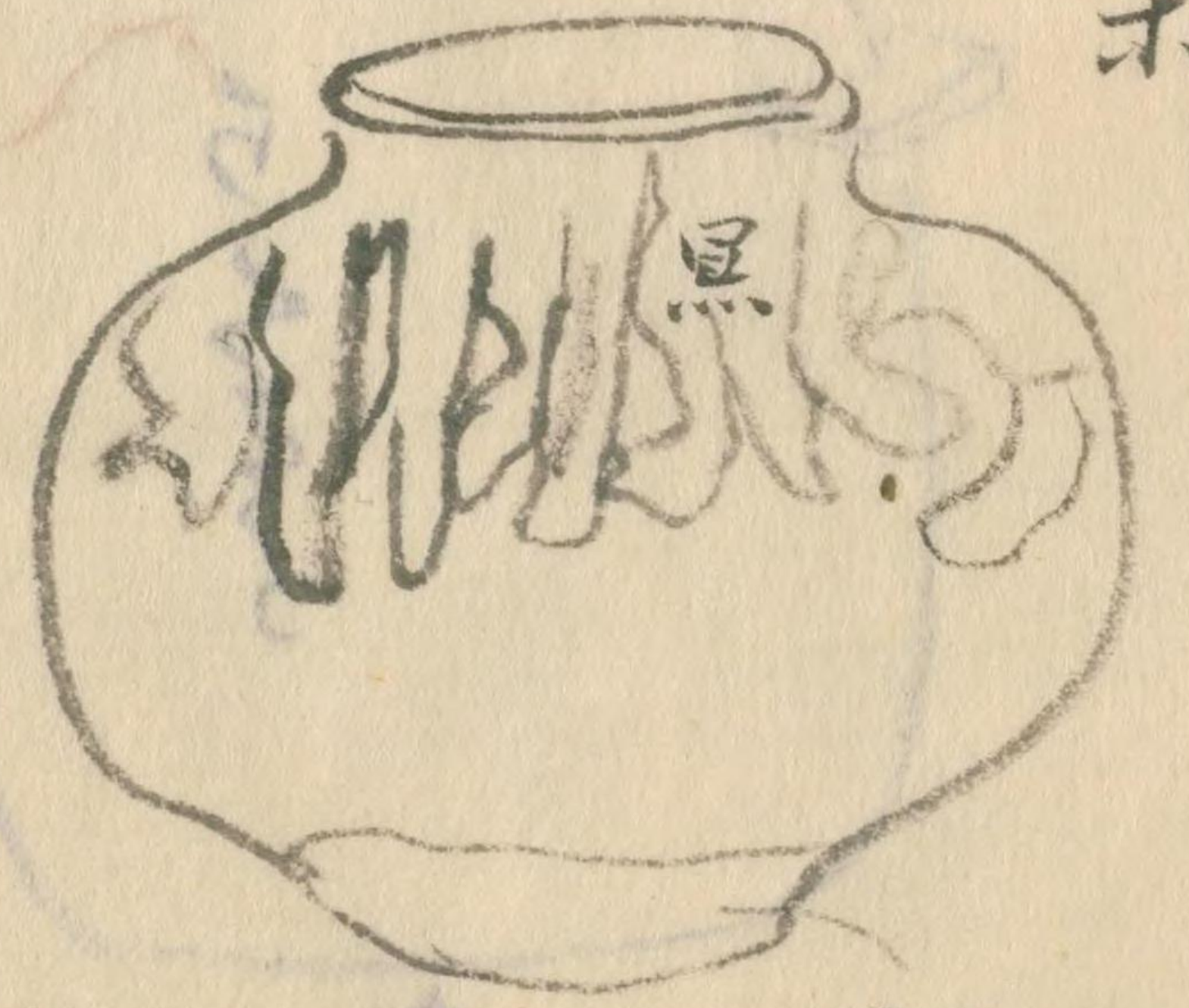




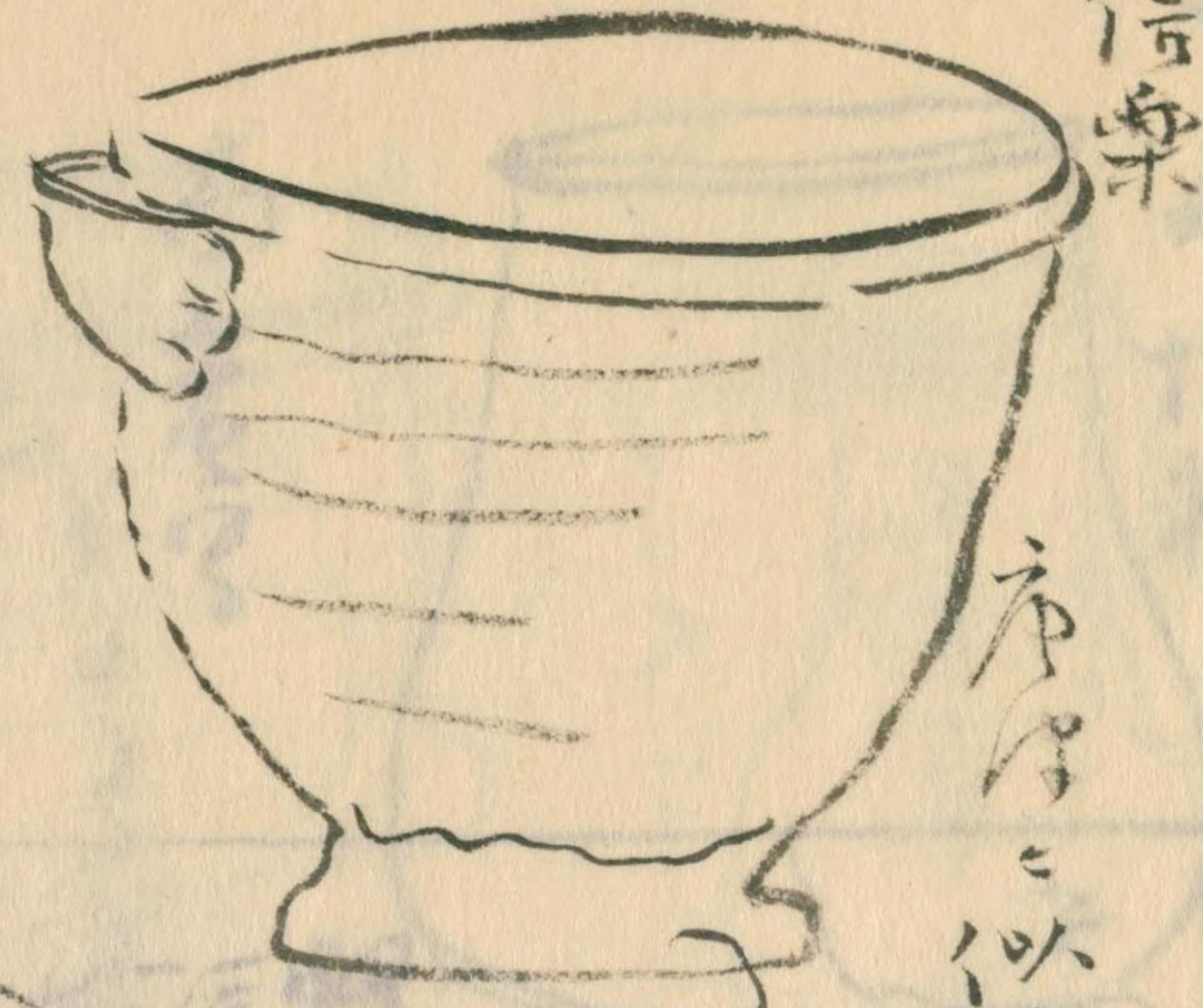
八之花山


黒ノ上柿
大ぬリ
土赤ニシテ
本窯印

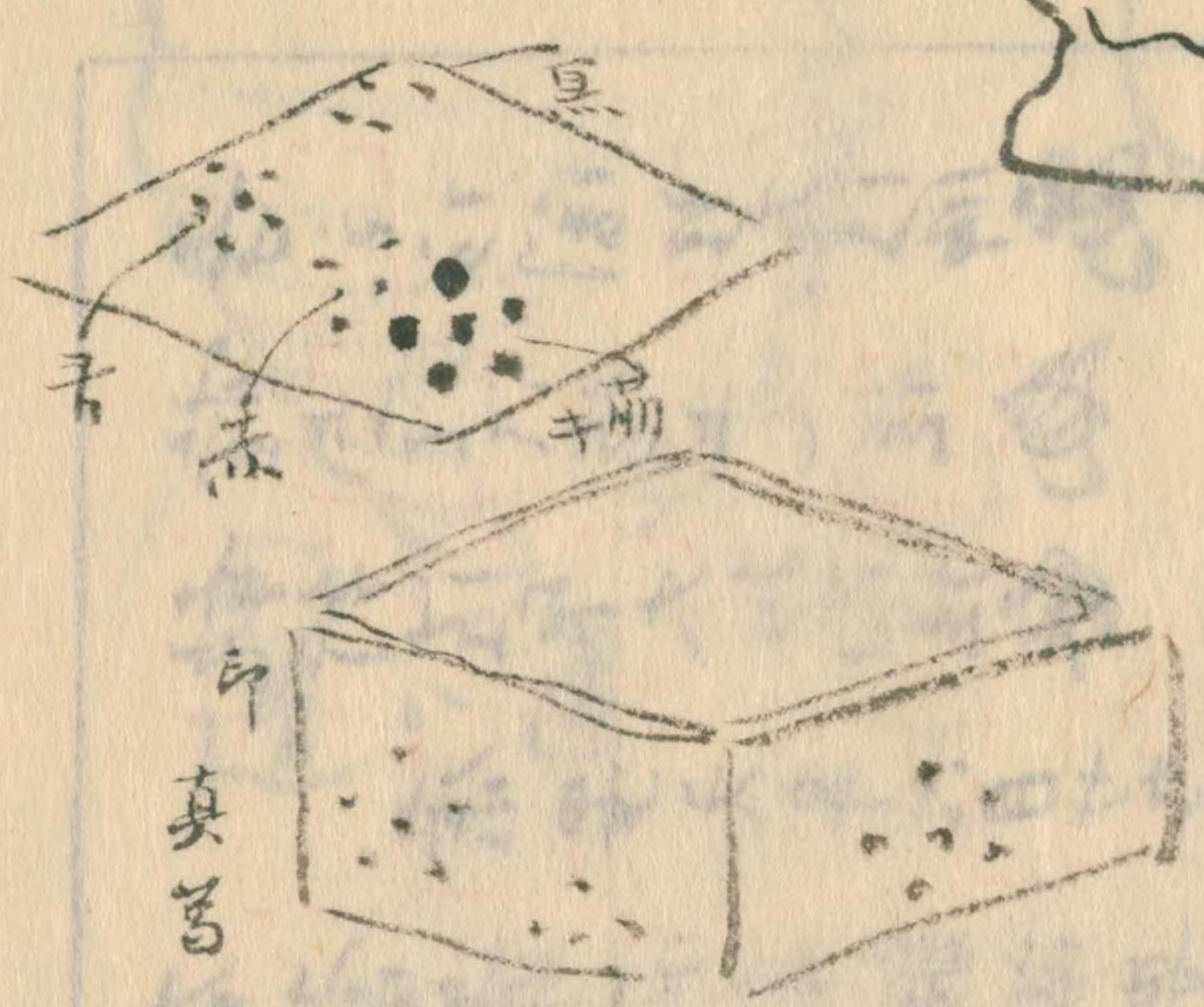
作朱



十月十七　奥谷ニ庄次宅を問ふ


信楽
唐津ニ似タリ
土赤

京
真葛



仁清ニ似タリ

今日献立

向　胡麻醤油あへ　かきひしめ　梅干かん

汁　鰯すみれ　汐芋おろし

椀　鯛はんぺん　初茸　つみ入　お千代

芦ほそ撫すり生姜

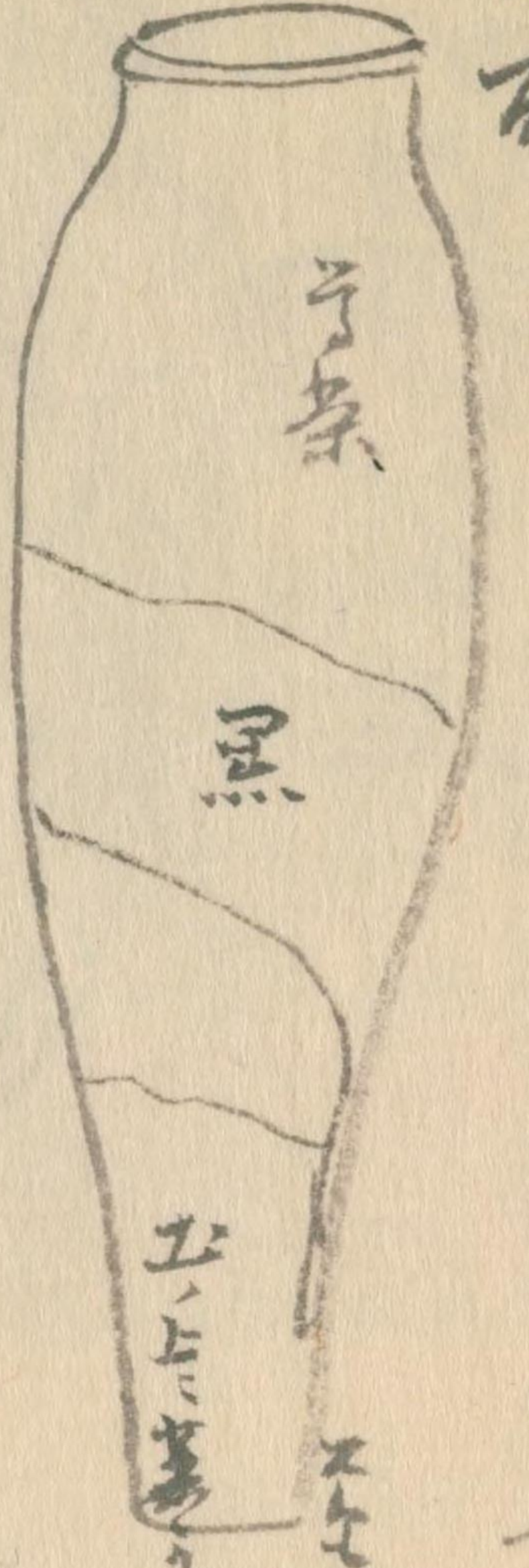
焼もの　鰆つけほ　あせ大和尾

香の物　白瓜生姜　古漬のへや

菓子　湯所形　田楽酒中

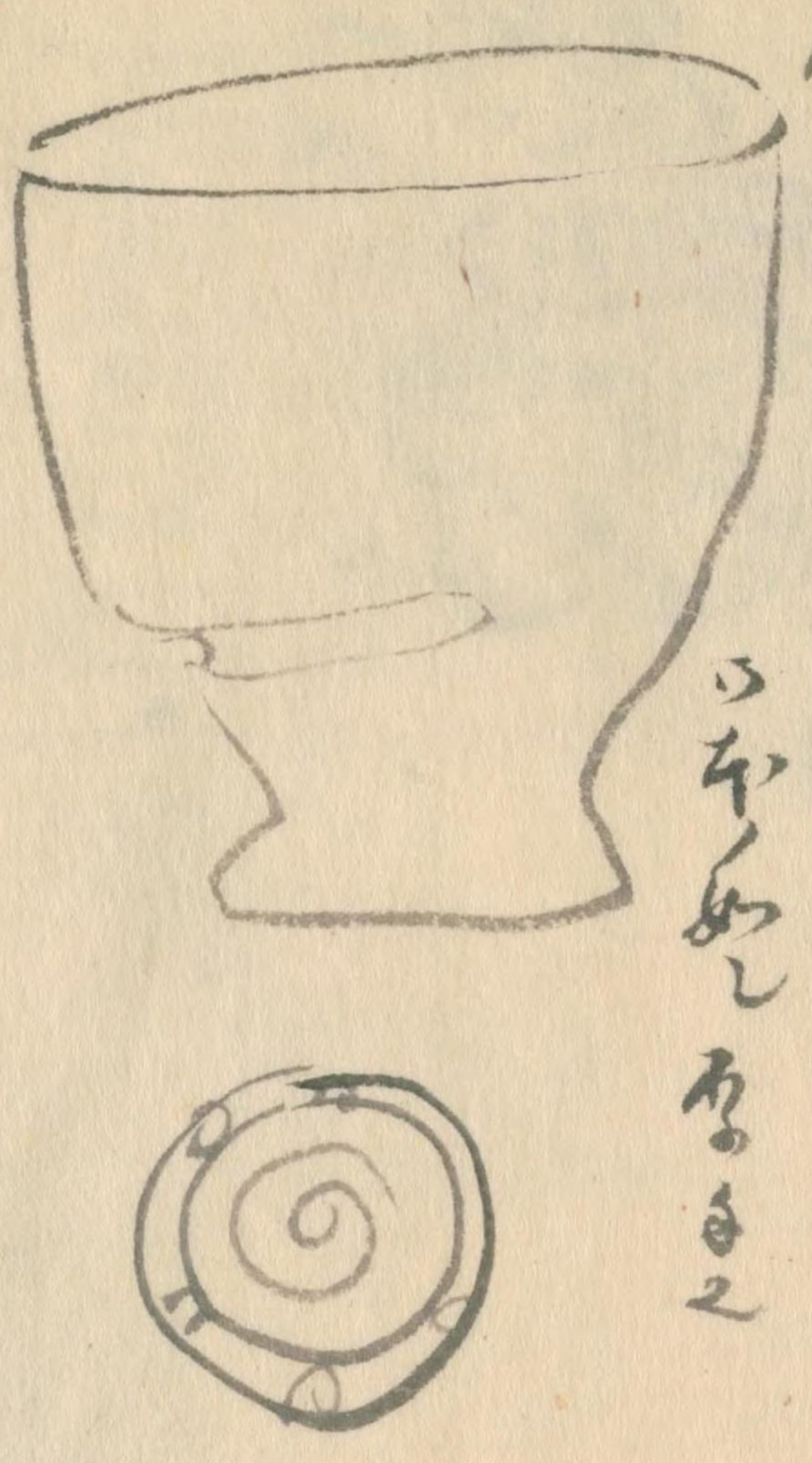
以上

膳所

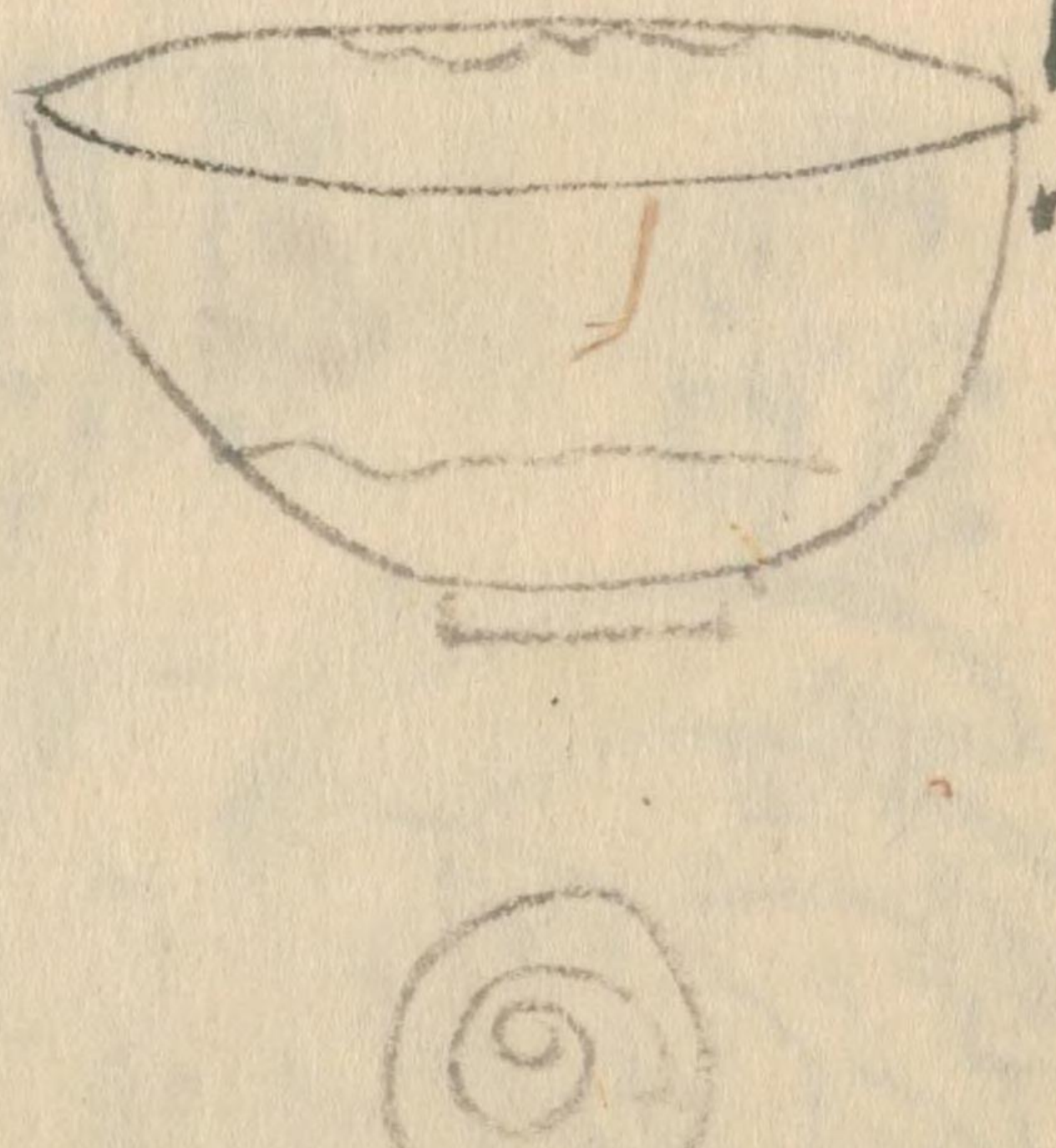


白釉
黒
土ノ上ニ薬
薬アリ

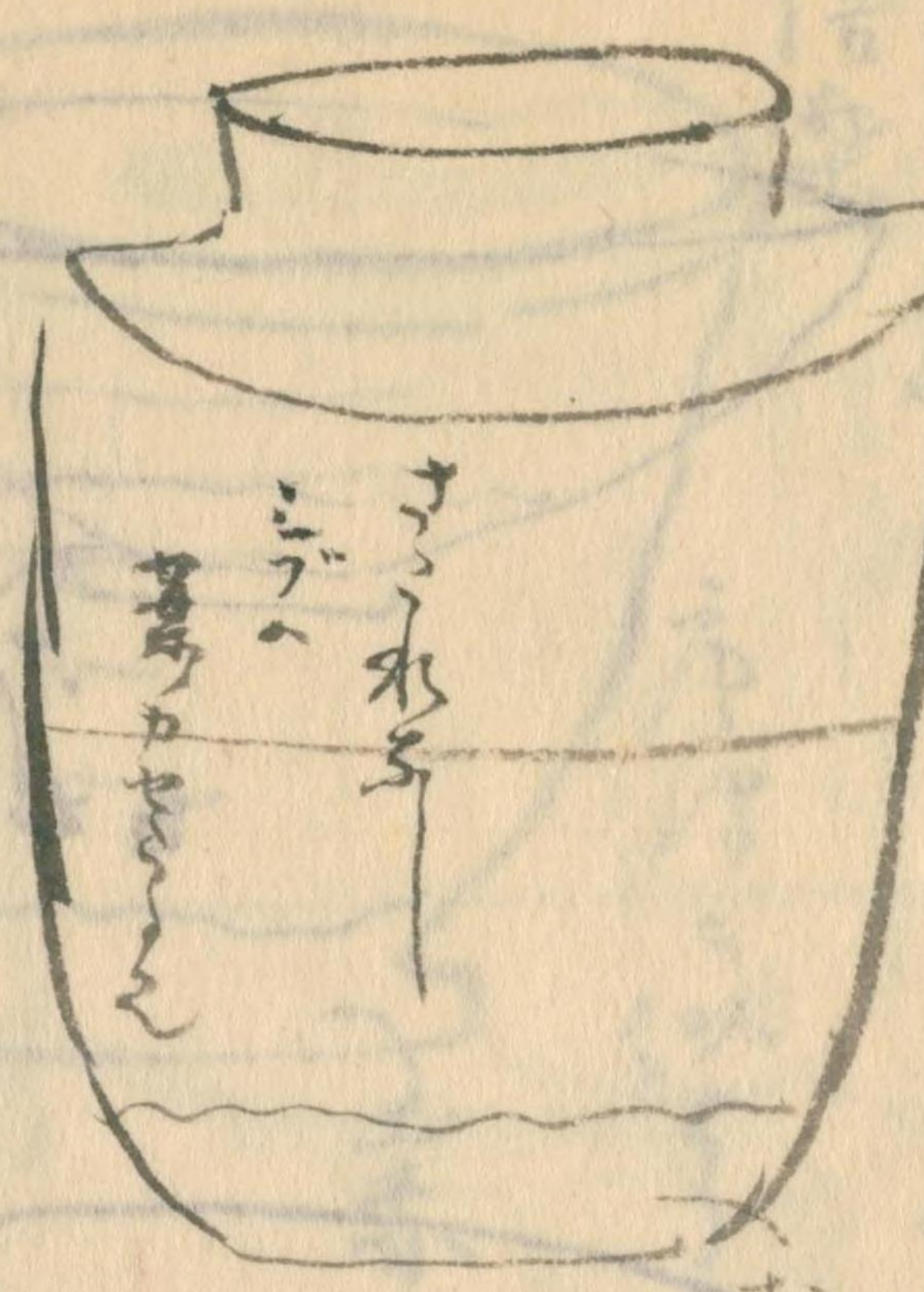
元悦



いつもいらほ写



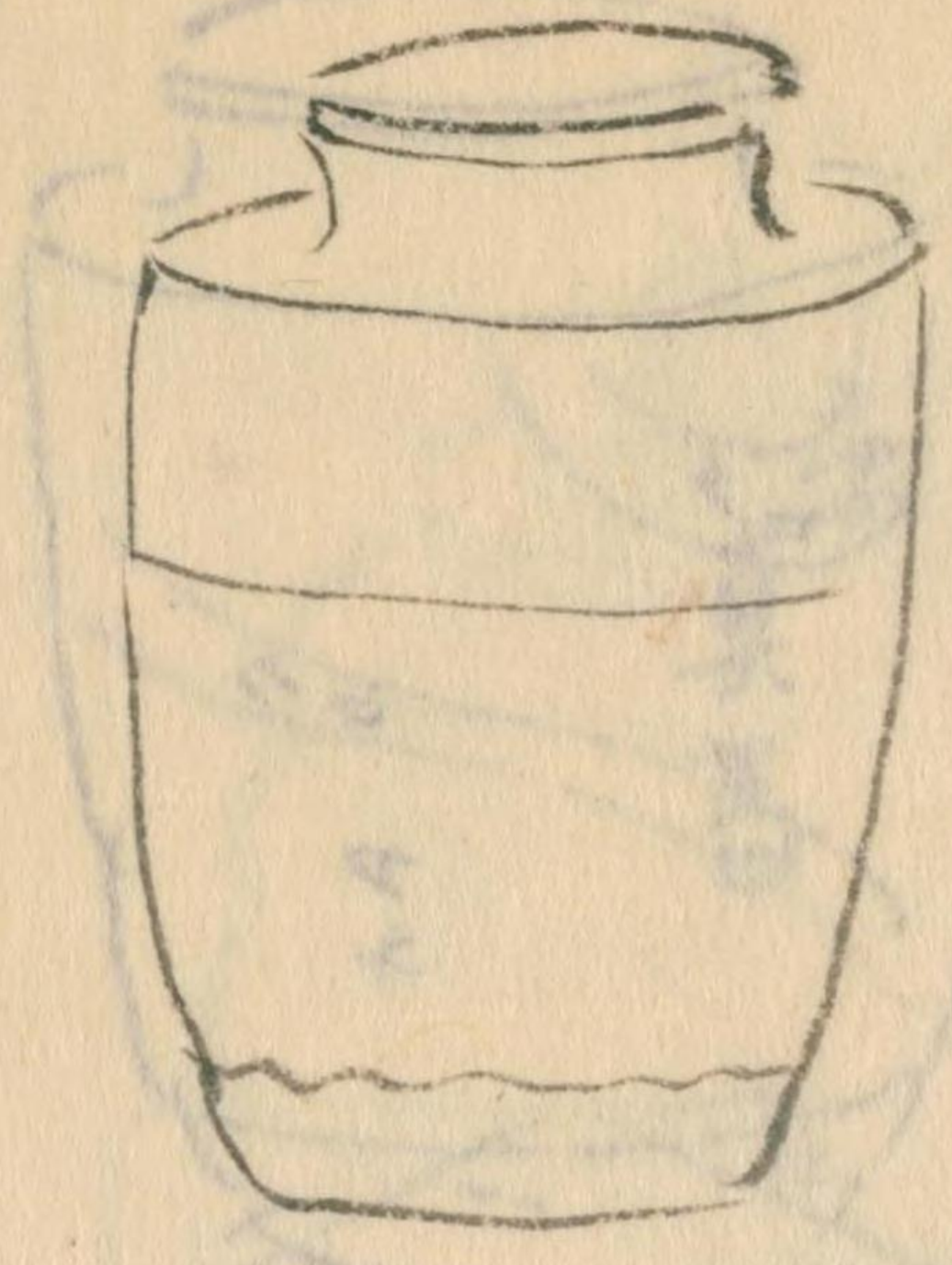
大寿ま



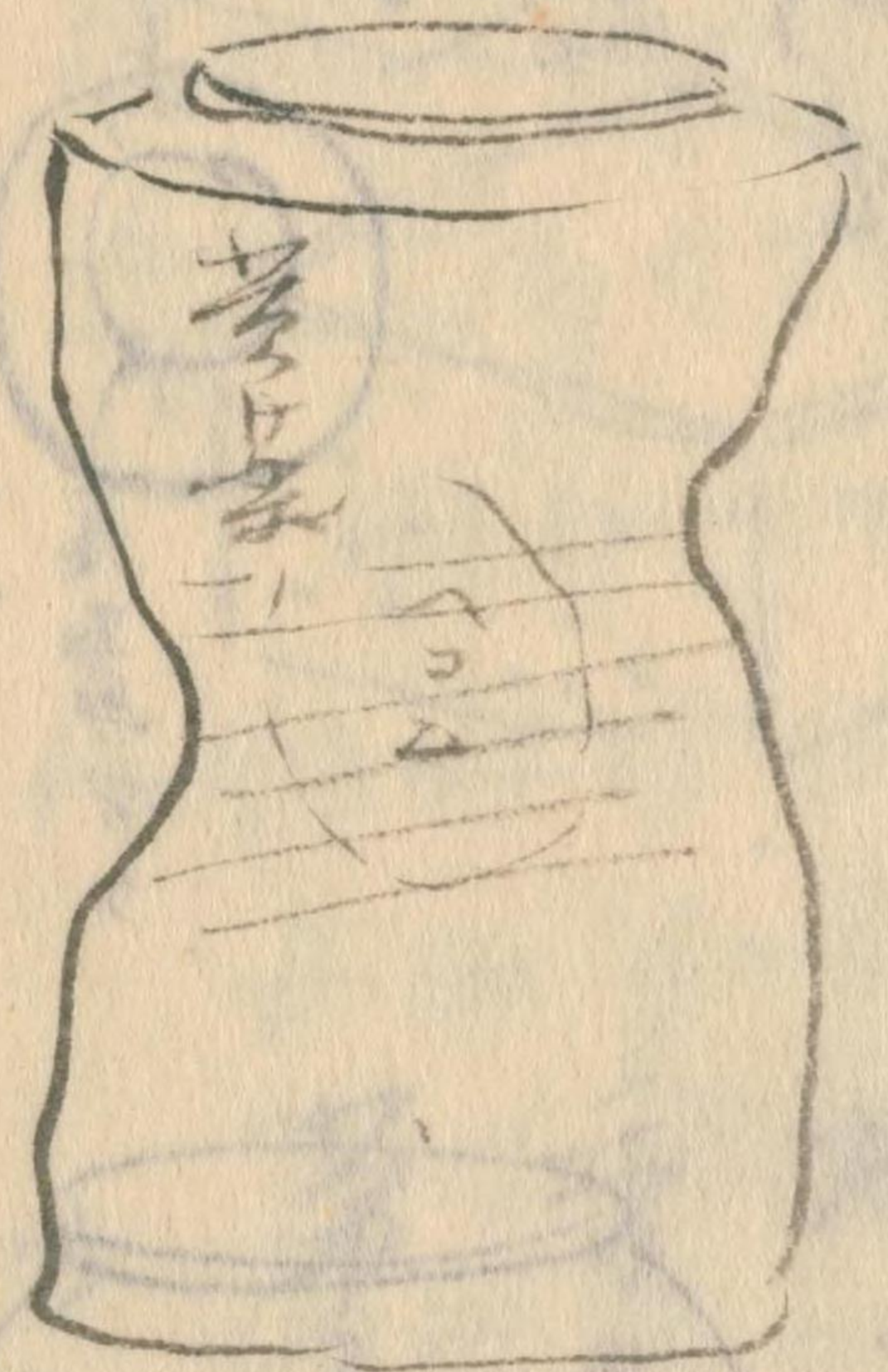
さつ水ミ
シブへ
薬カセる
土薄耳

静寿印

浅寿ま



印遠

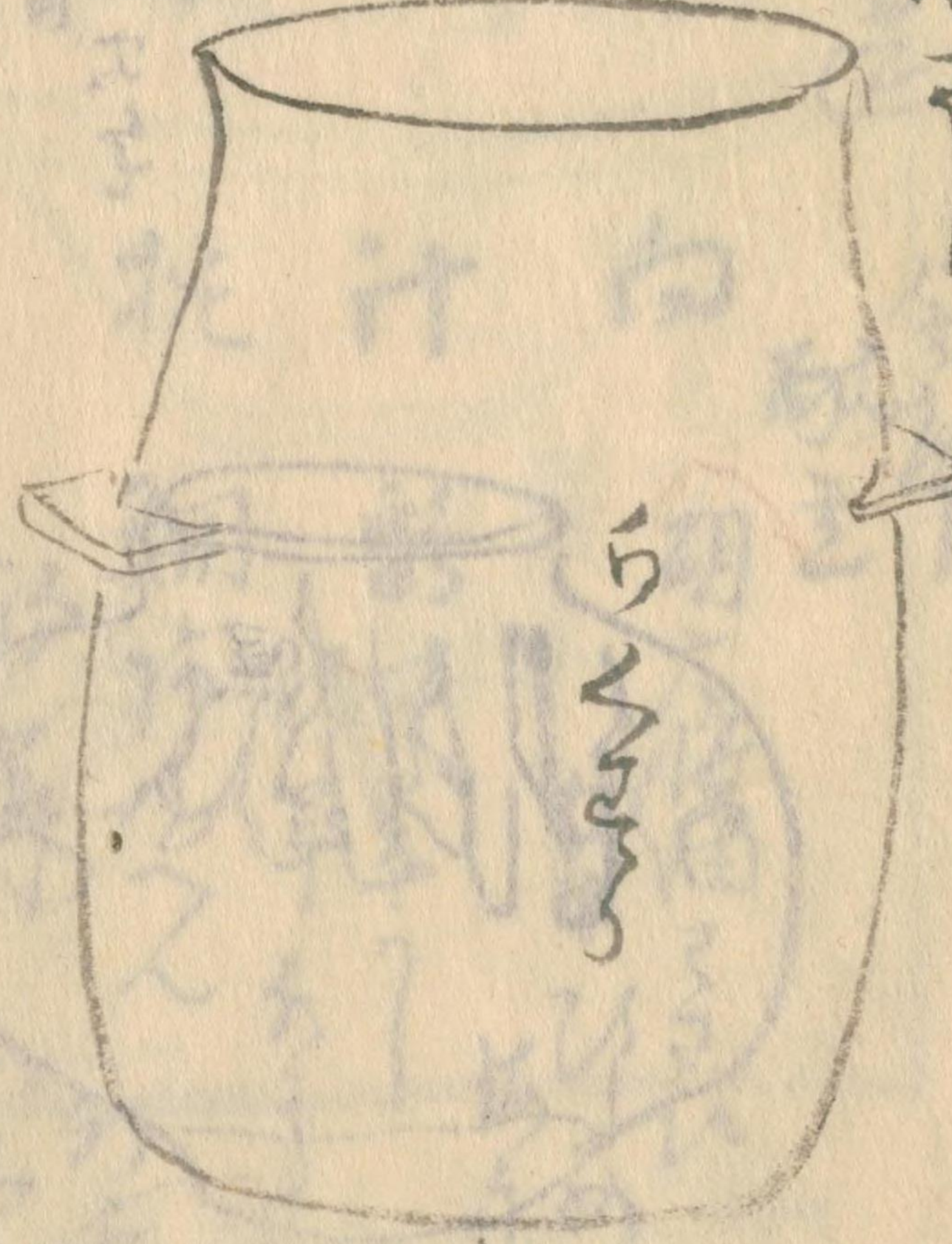


焼印
テノ字

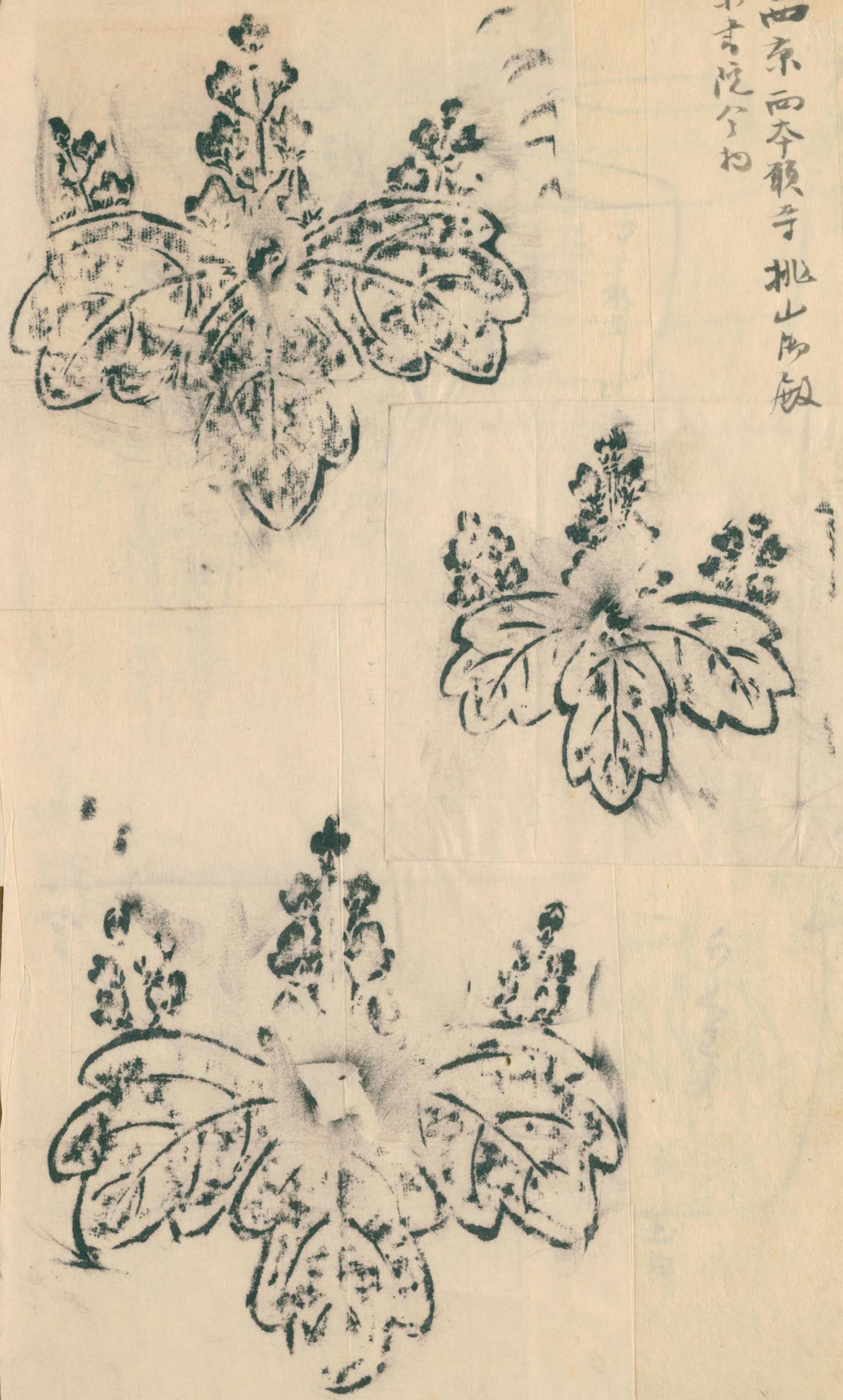
志部ノ焼印ハ
テ三

ノ月
六
六

片手水さし



西京西本願寺 桃山御殿
小書院今ね

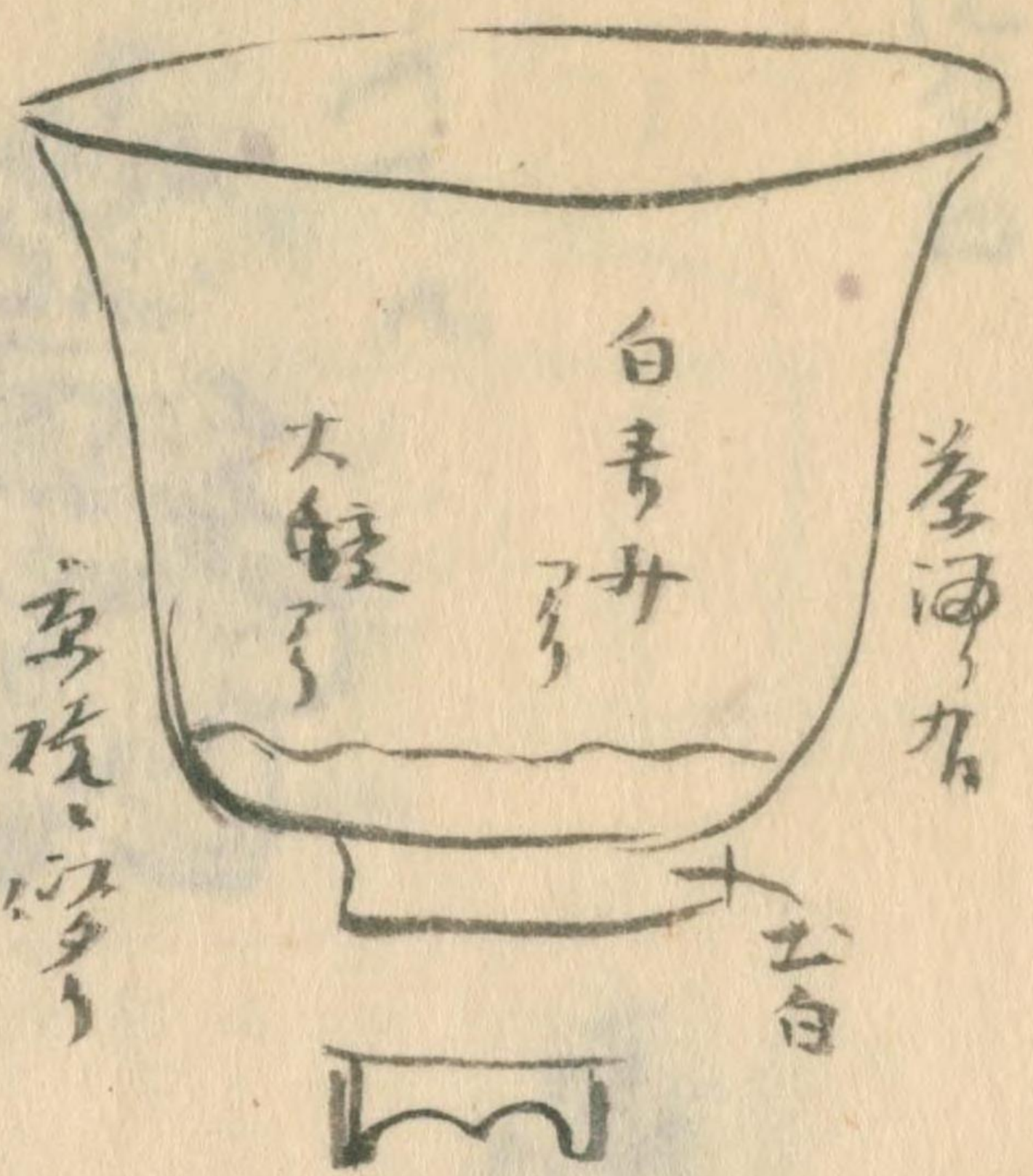


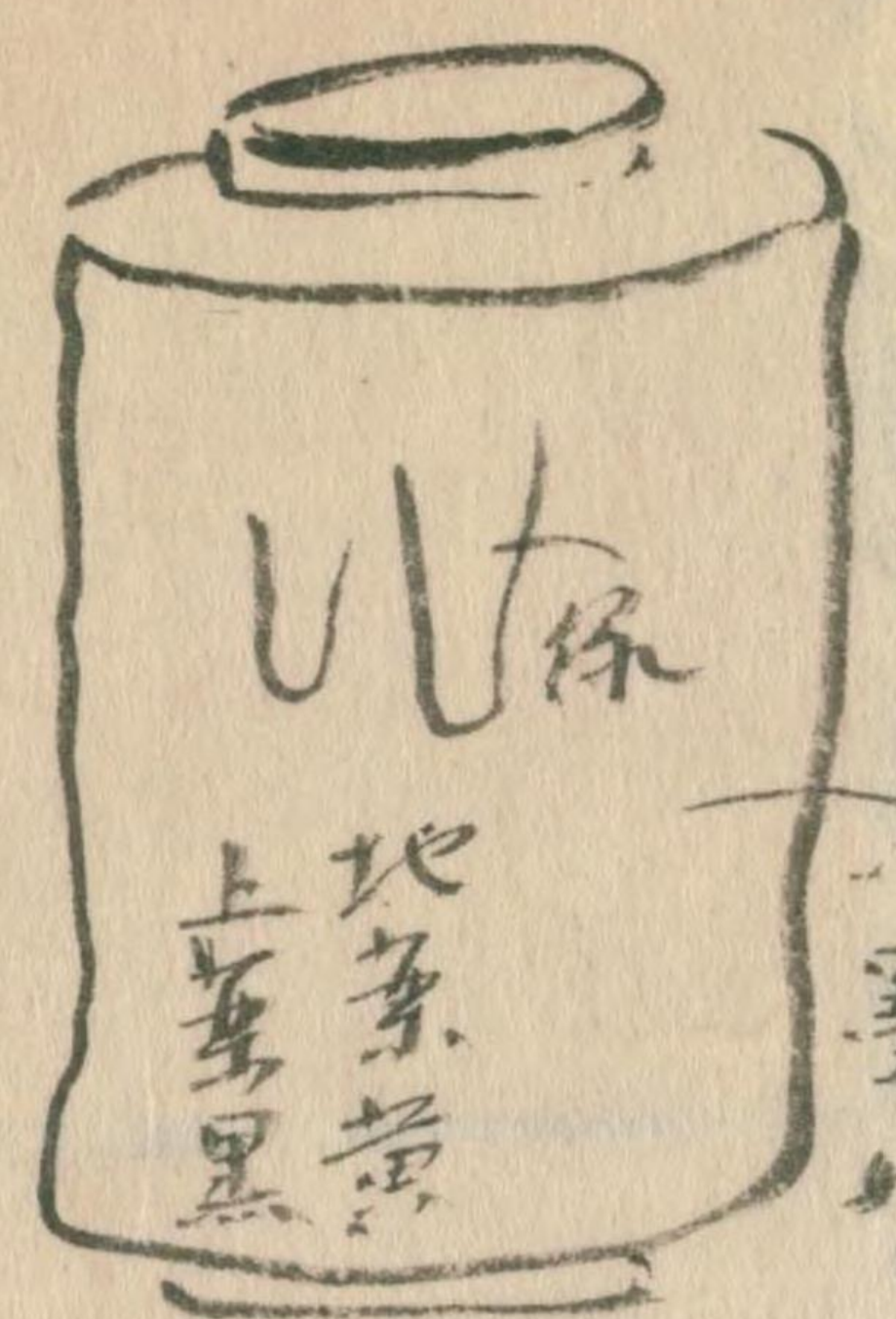
京　蛤御門前
御粽司
都　川端道喜

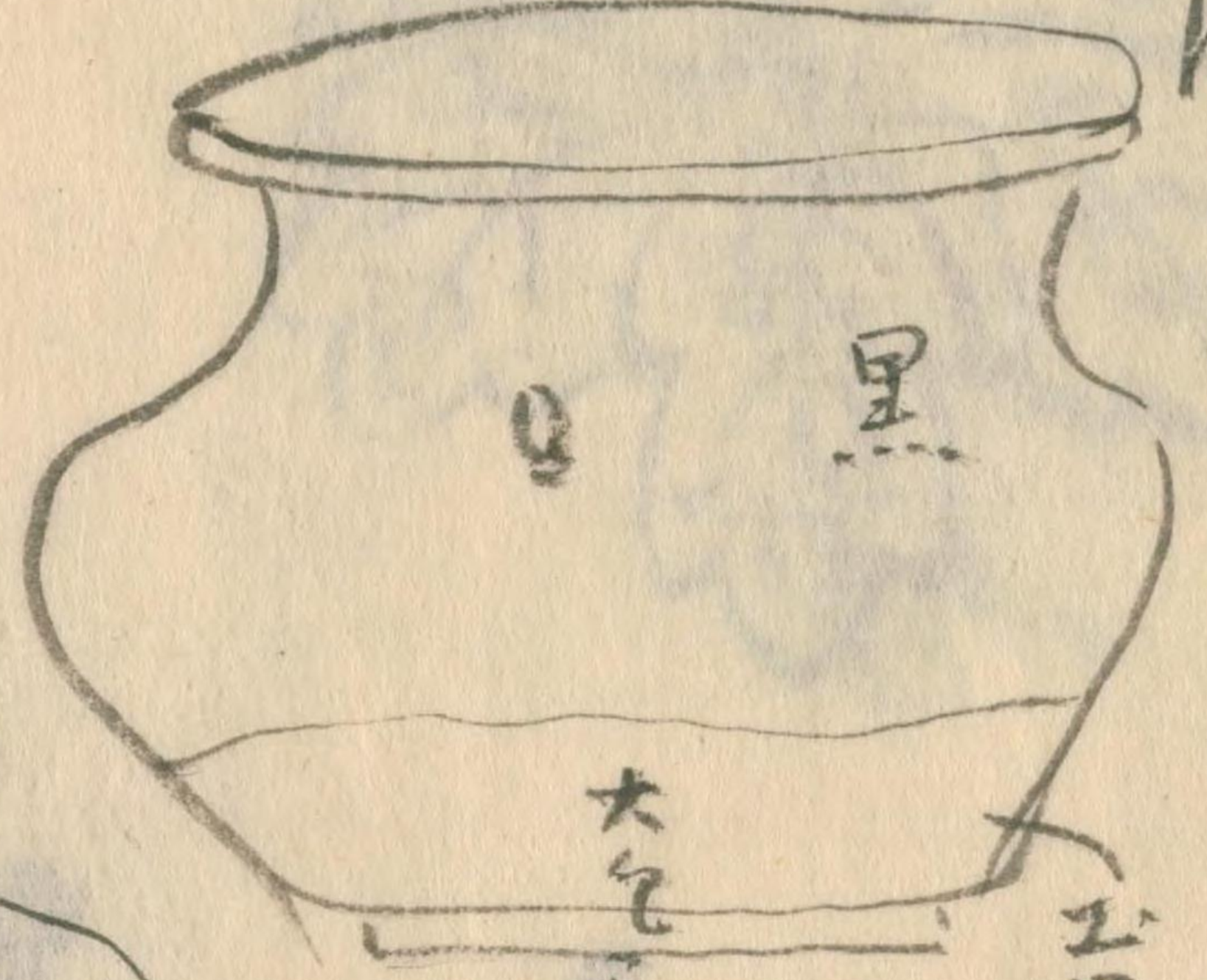
京　蛤御門前
[illegible]
都　川端道喜

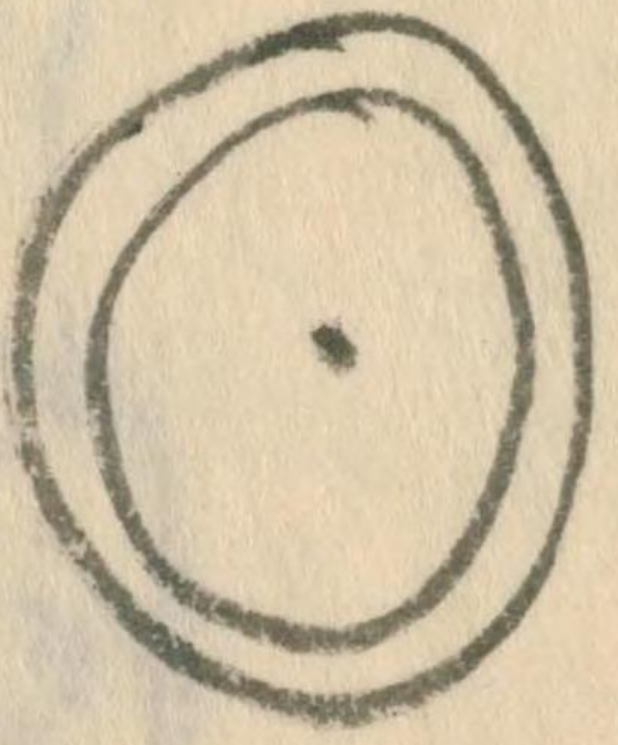
国立国会図書館　タイトル『陶器集』 請求記号 841-124　ガラス使用

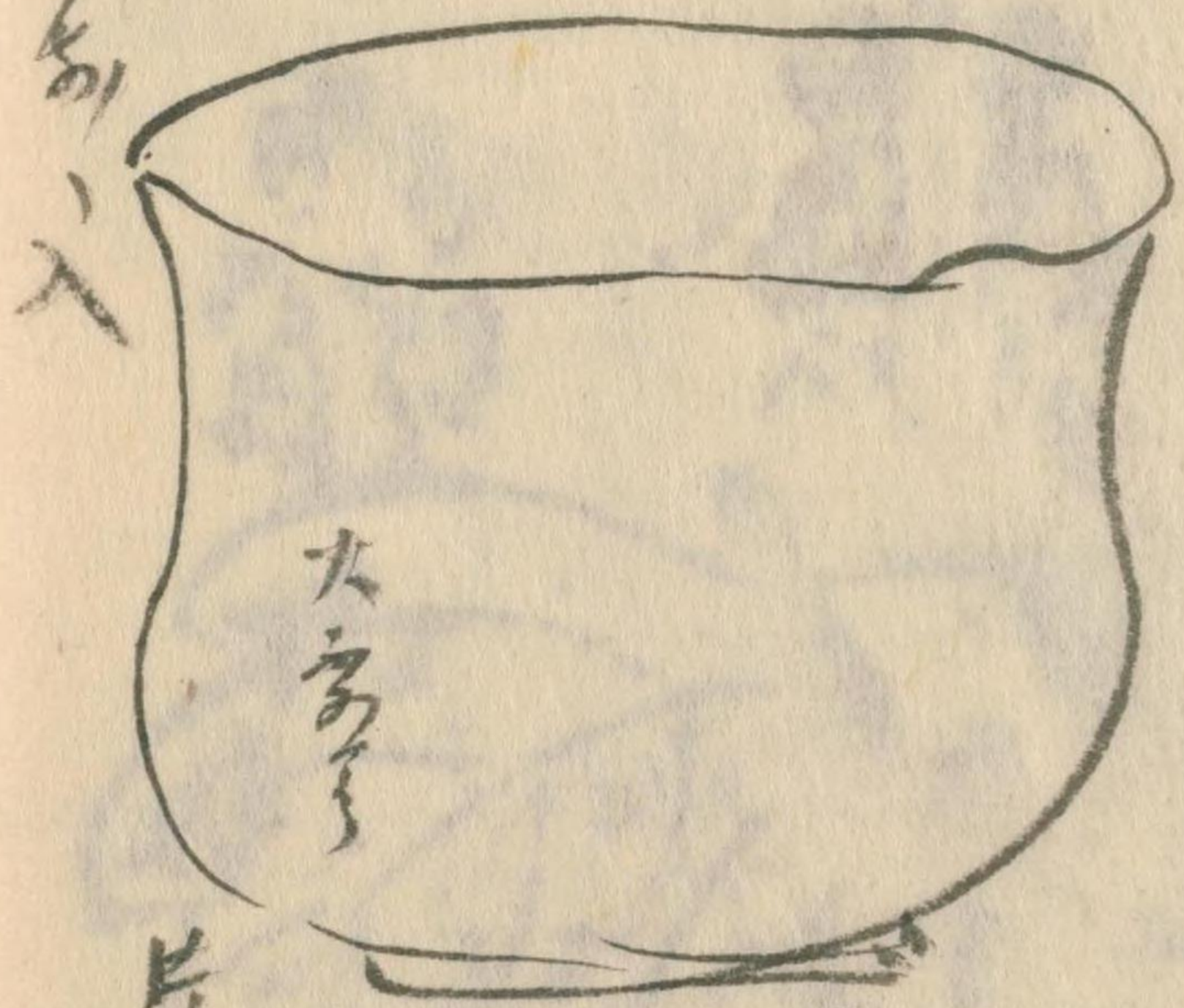
明治廿五年一月十八日 岩淵方

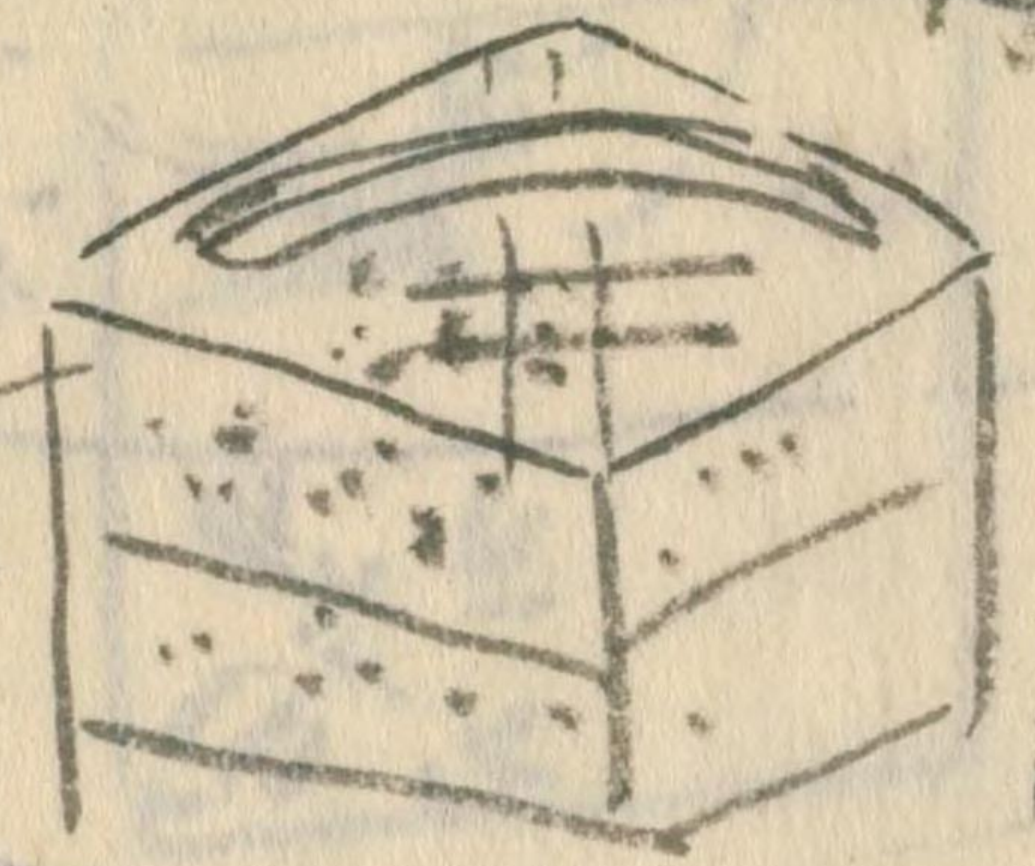

蔵三
茶渇ノ右
白青ミアリ
大ヒヾアリ
高横ニ疵アリ
土白

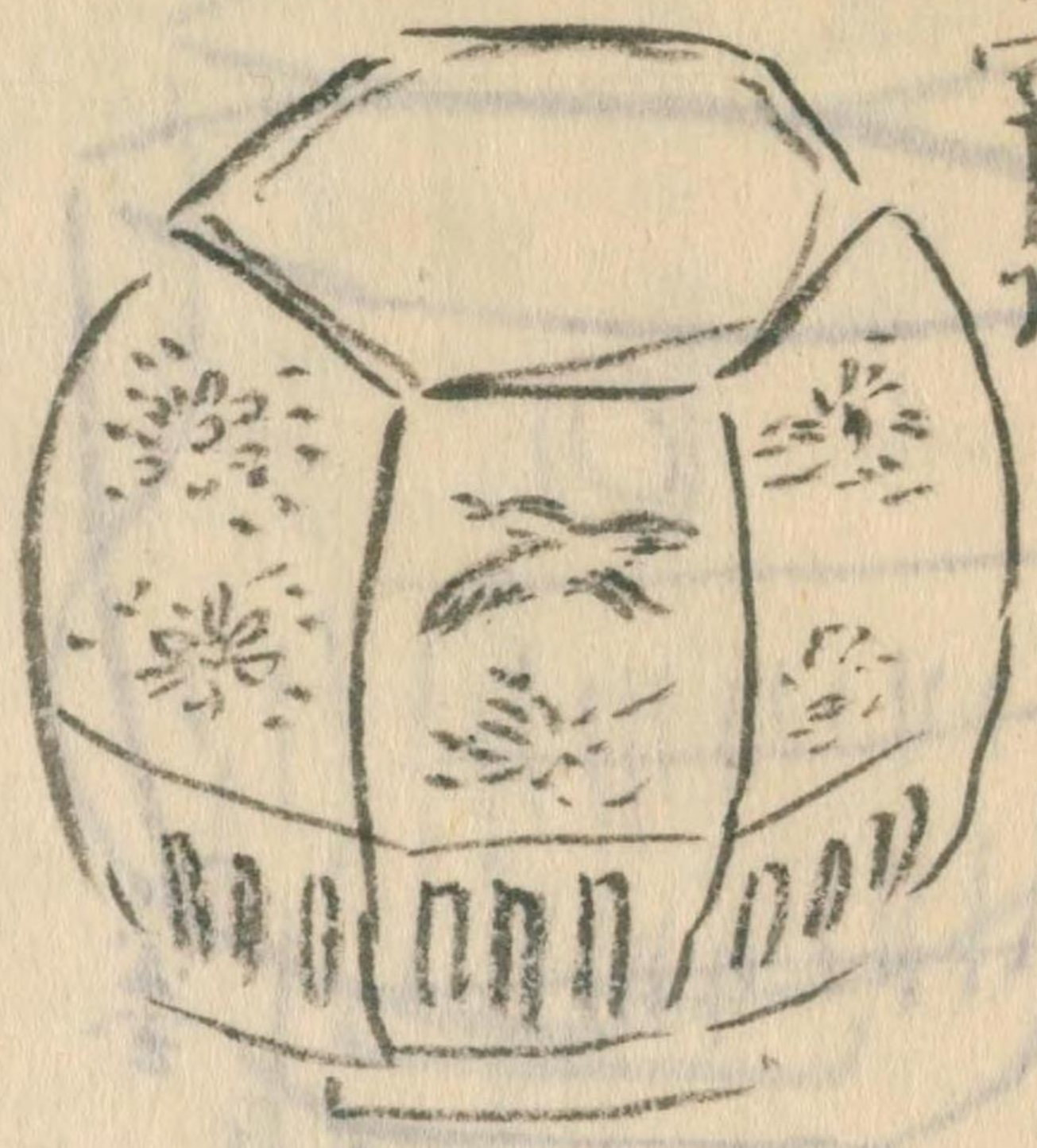

薩摩
川
大係
地茶黄
上薬黒
火墨ノ如し

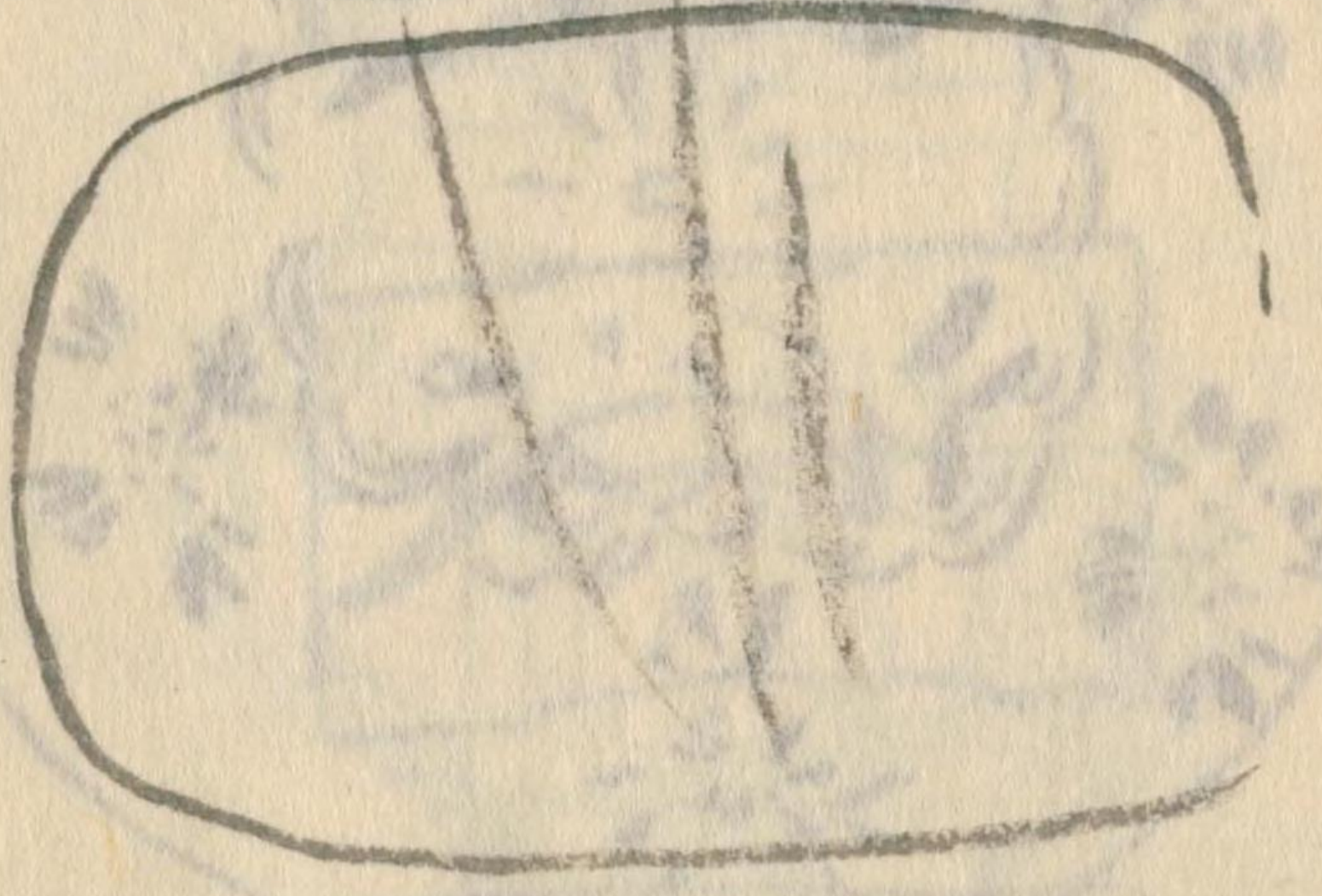

唐津
黒
大ヒヾアリ
土風

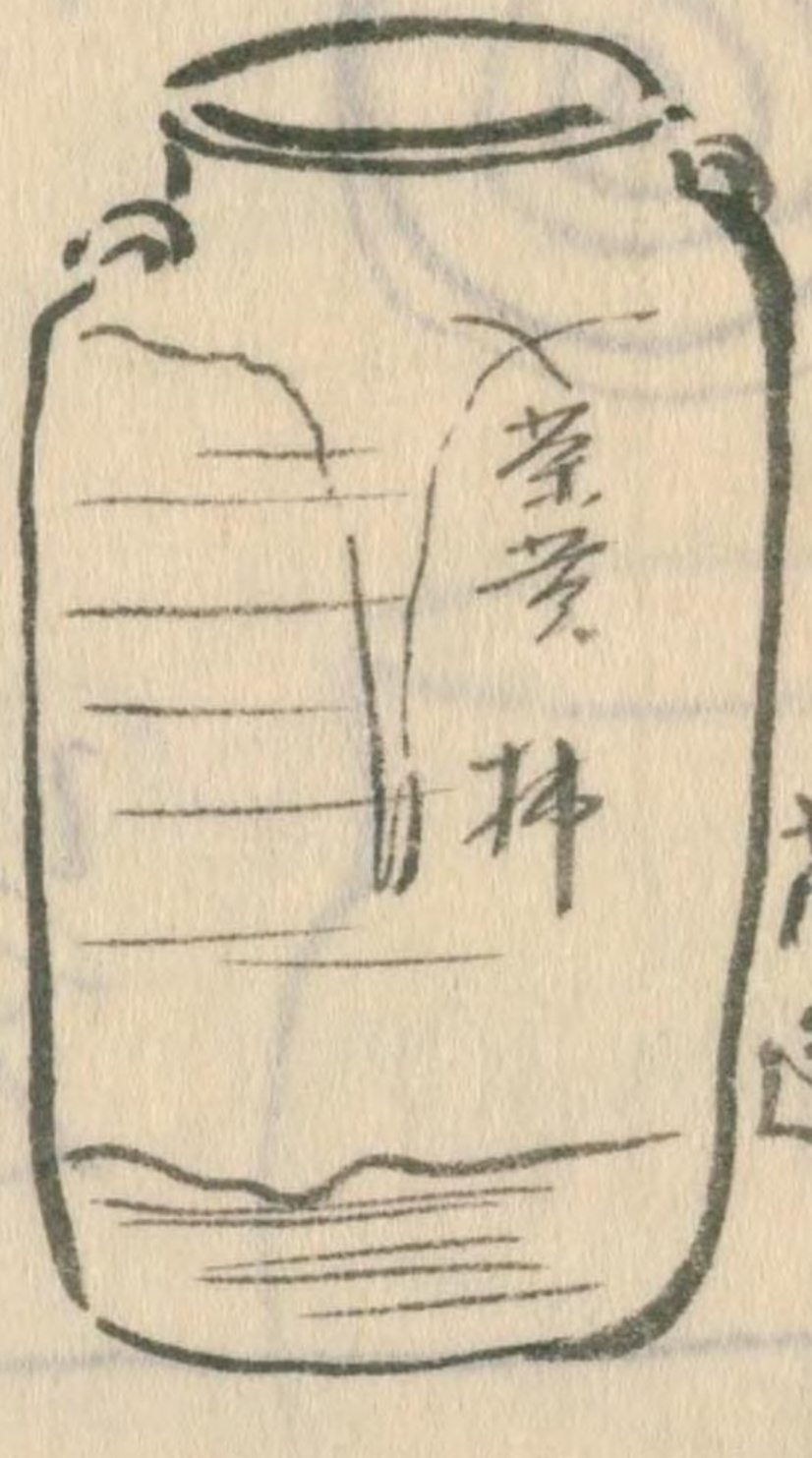


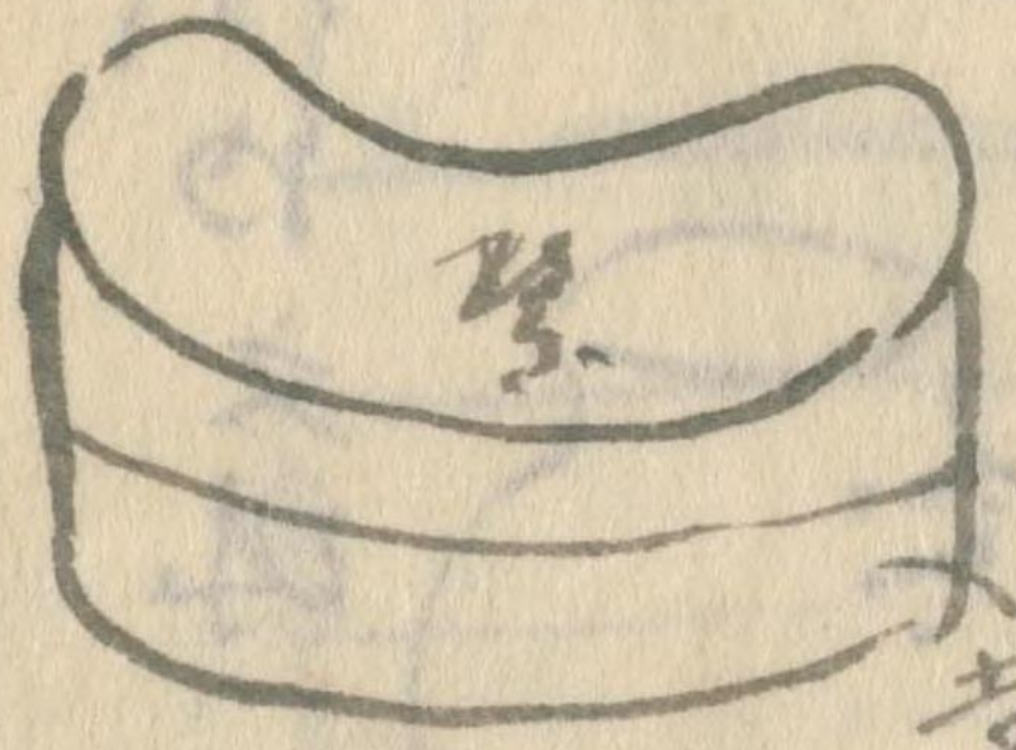

伊部
半田
手ニ入
大ヒヾアリ
片手ノ如し

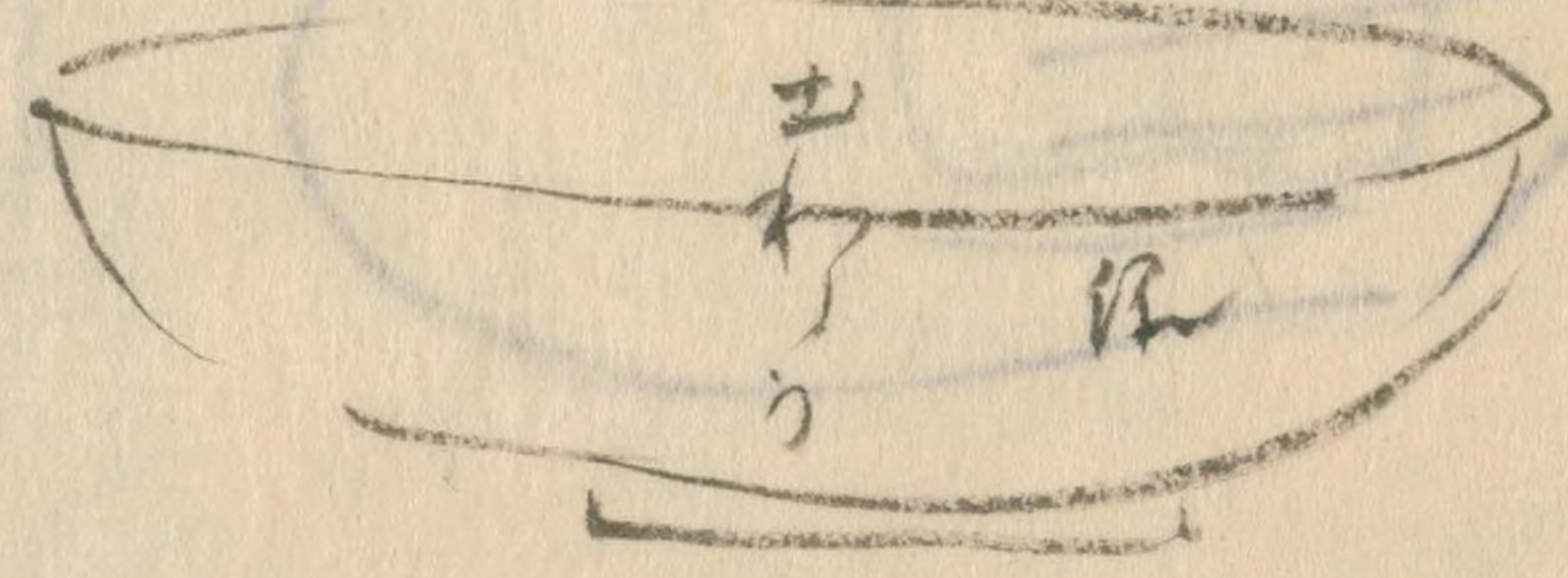

唐津
土黄
象ニ好モアリ



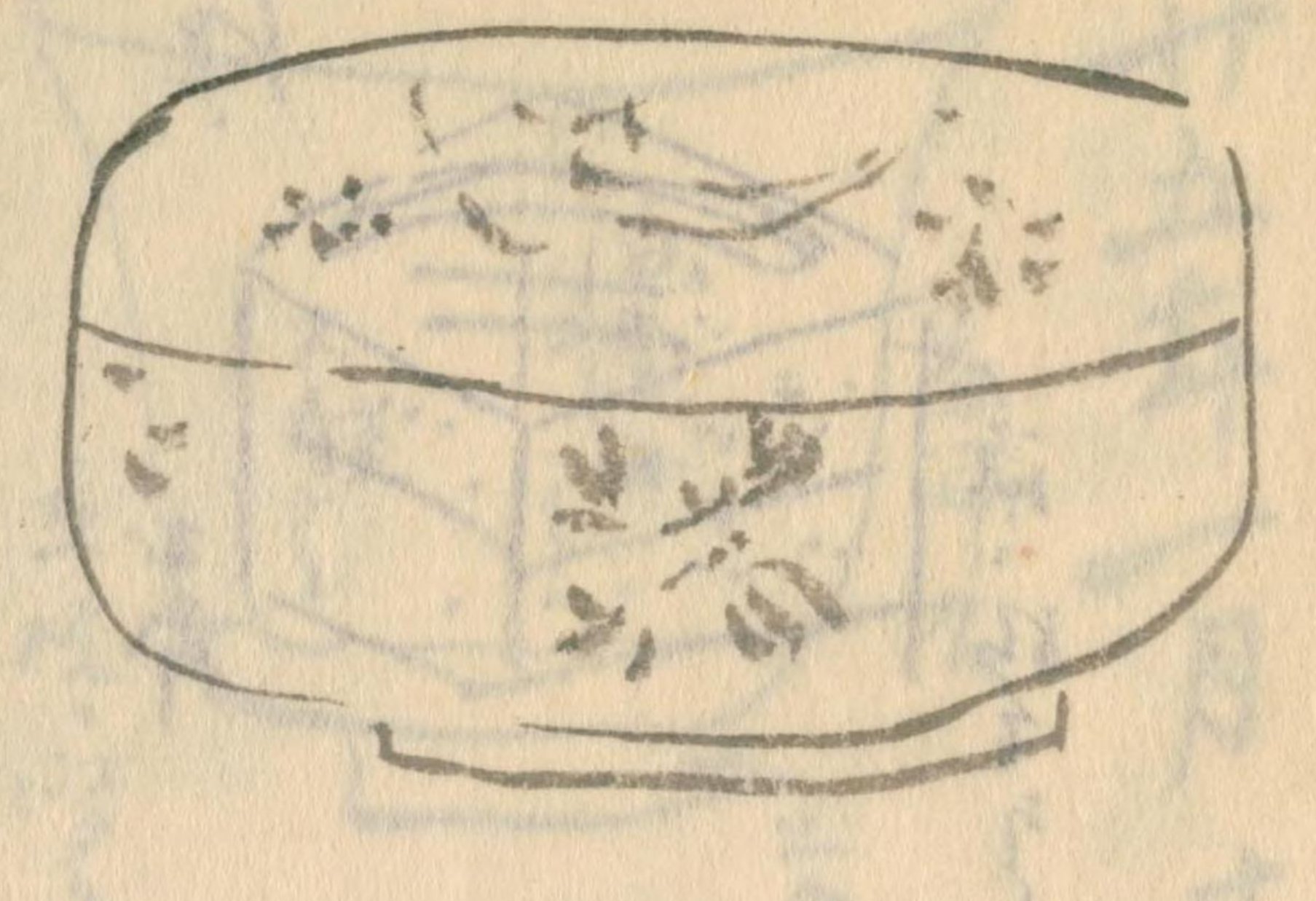


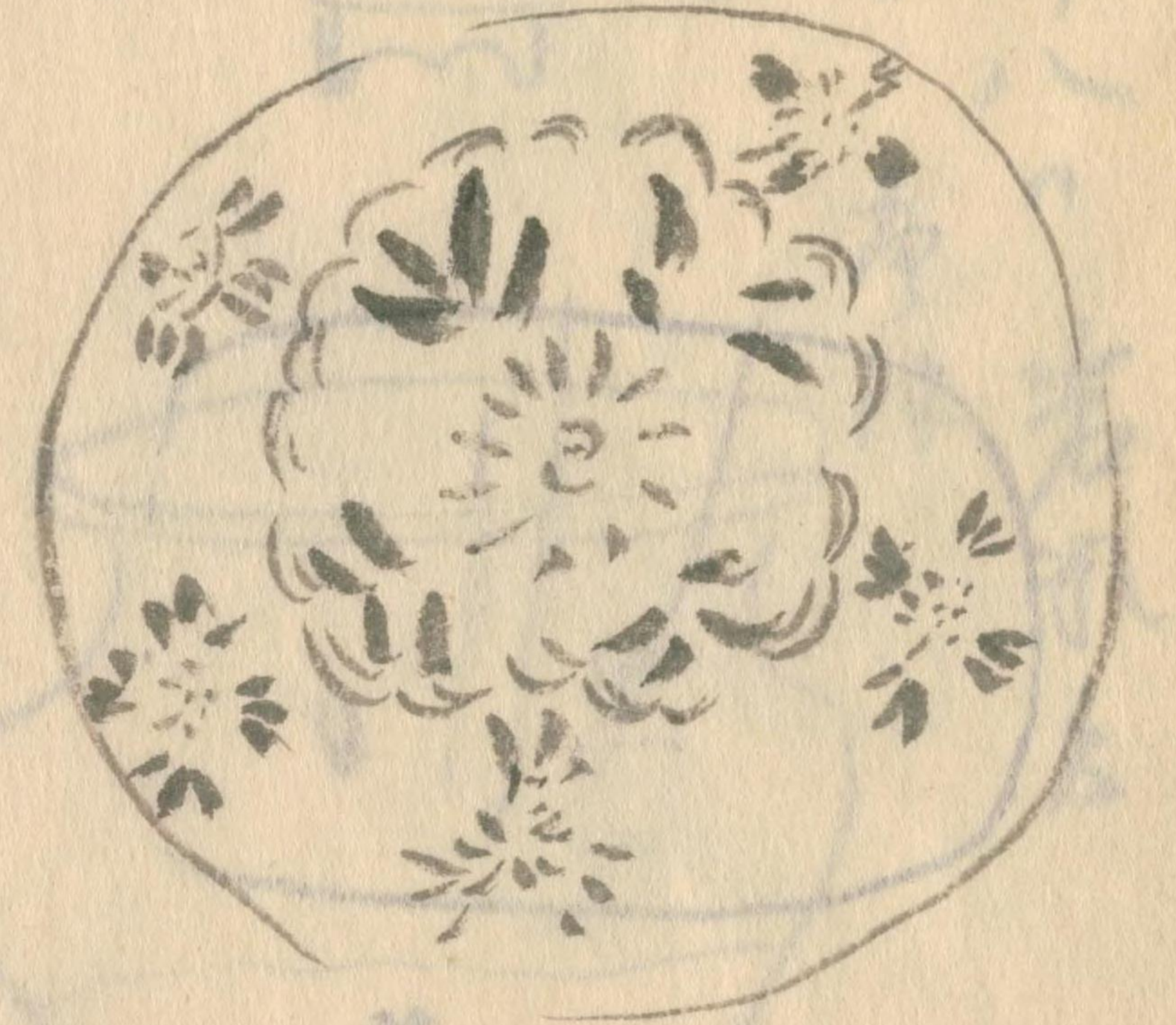

朝鮮
錦王柳
茶黄
柿
高遠



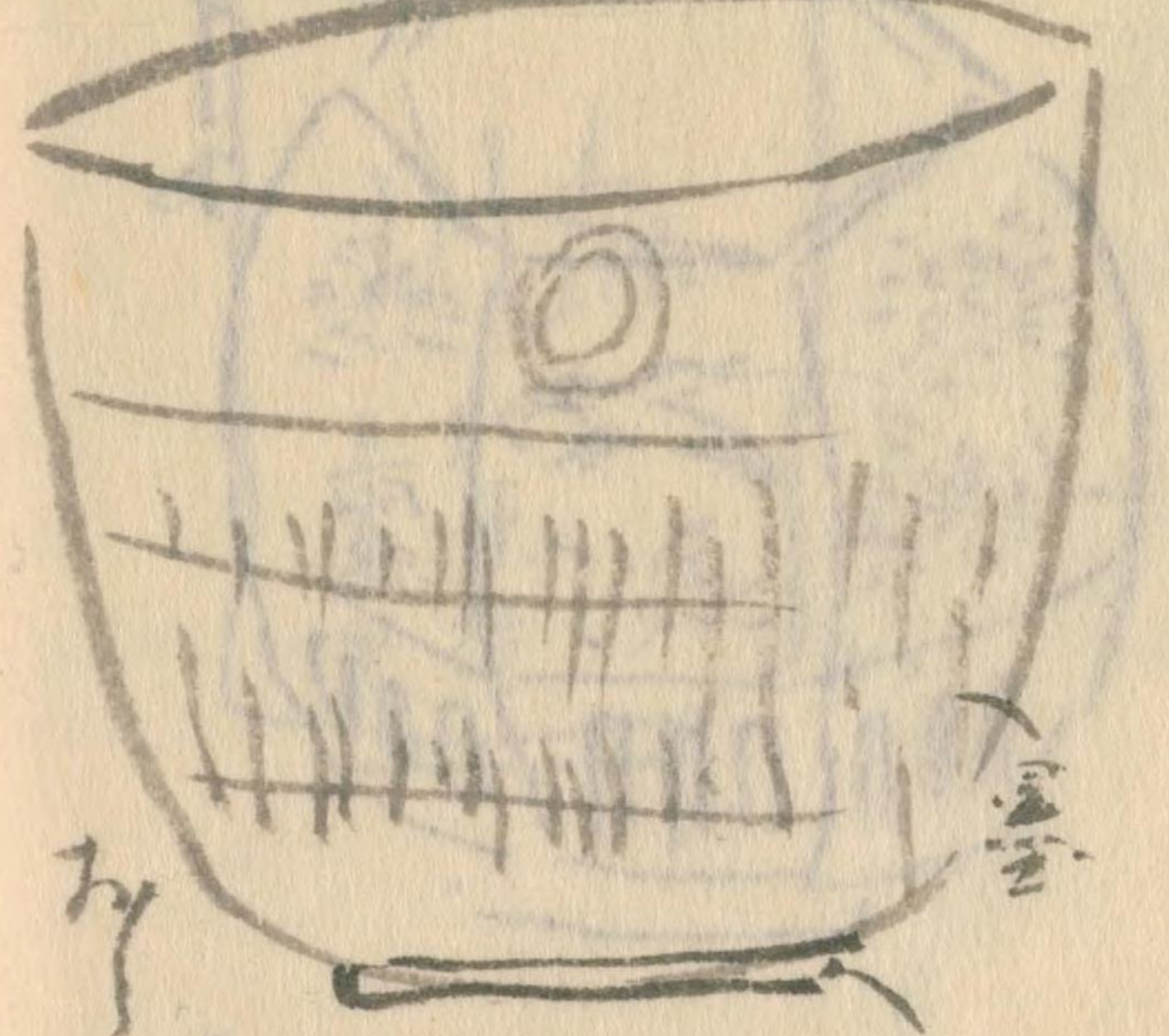

時代ミシカ
交趾
土ヤワリ
風

雲鶴

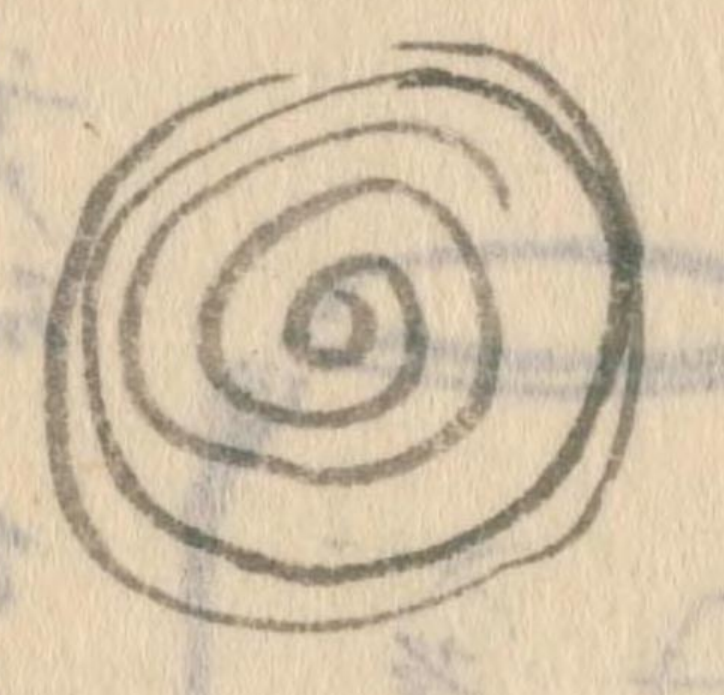




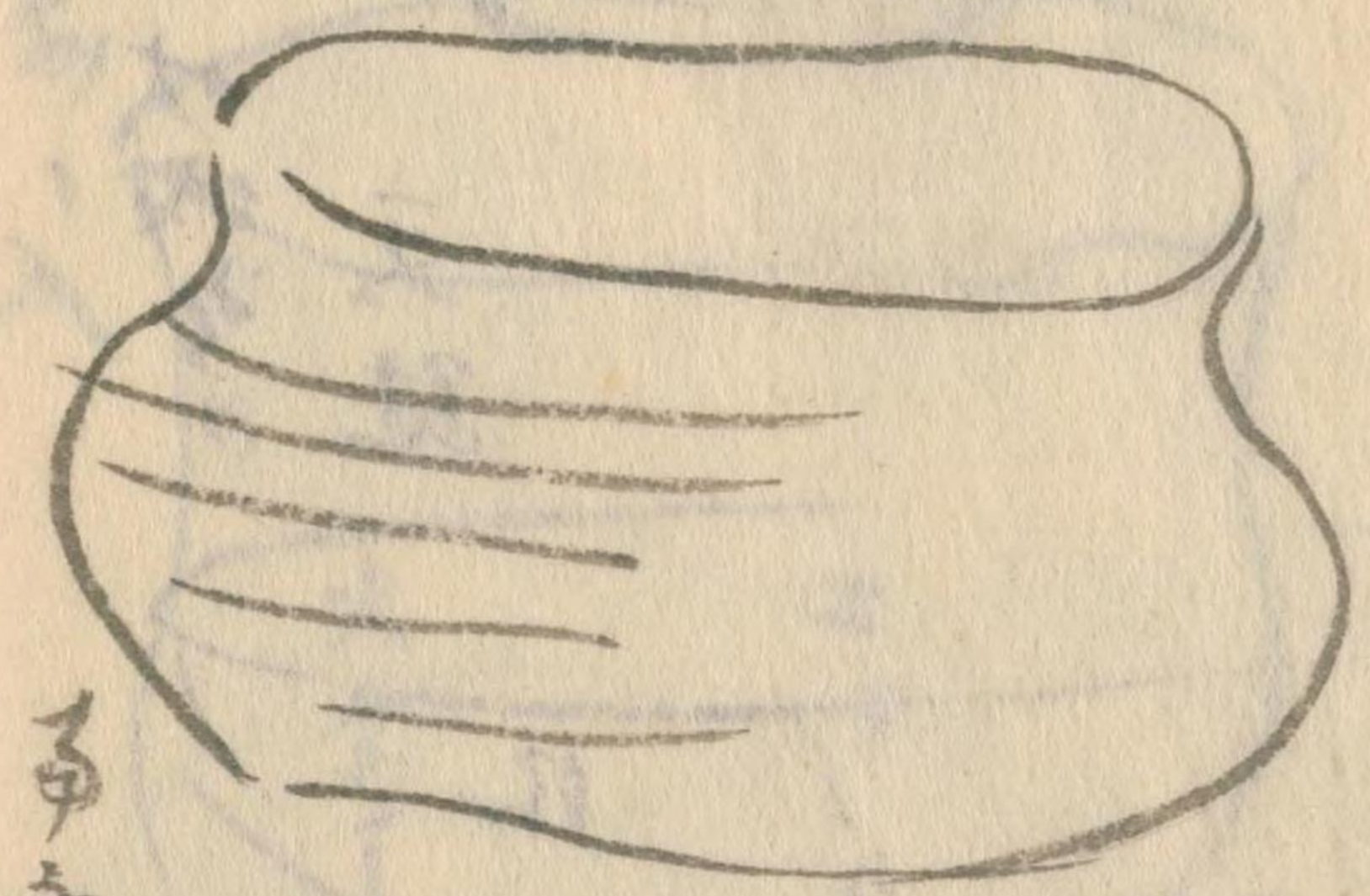
雲鶴



わーのめし

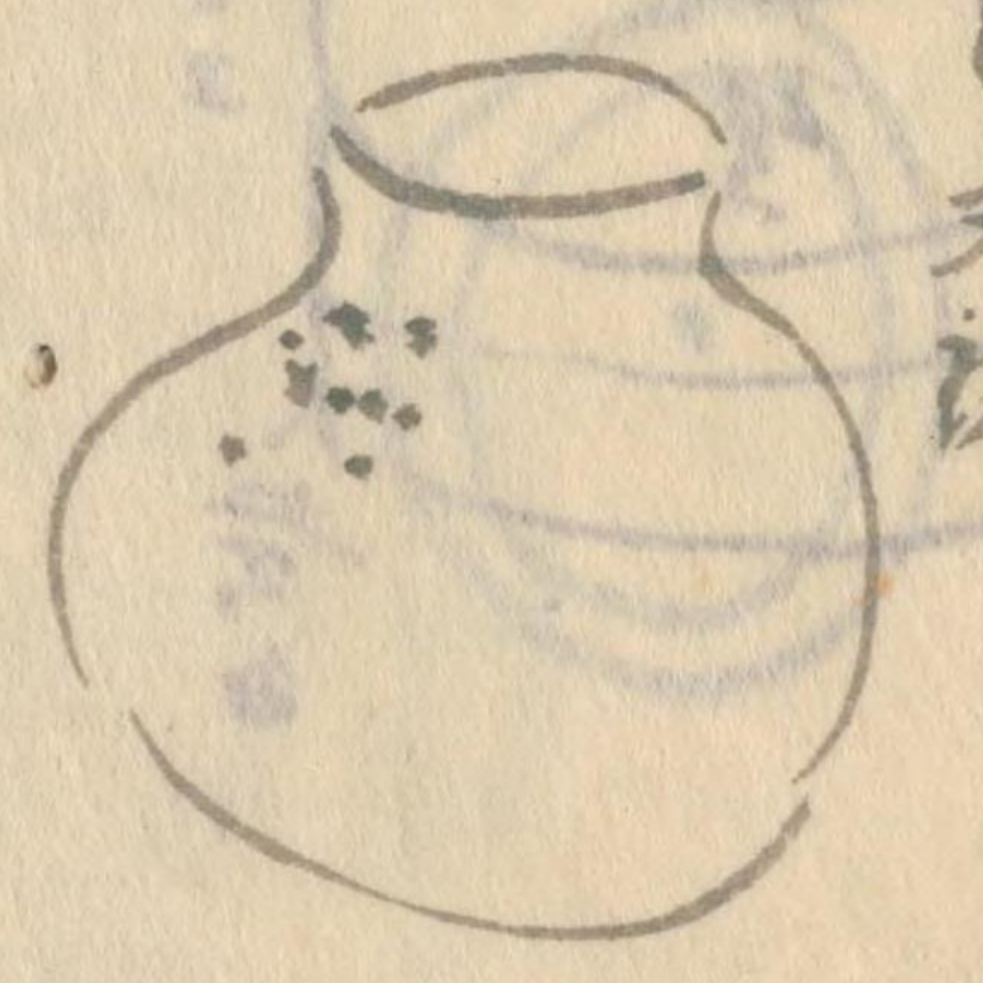


びぜん

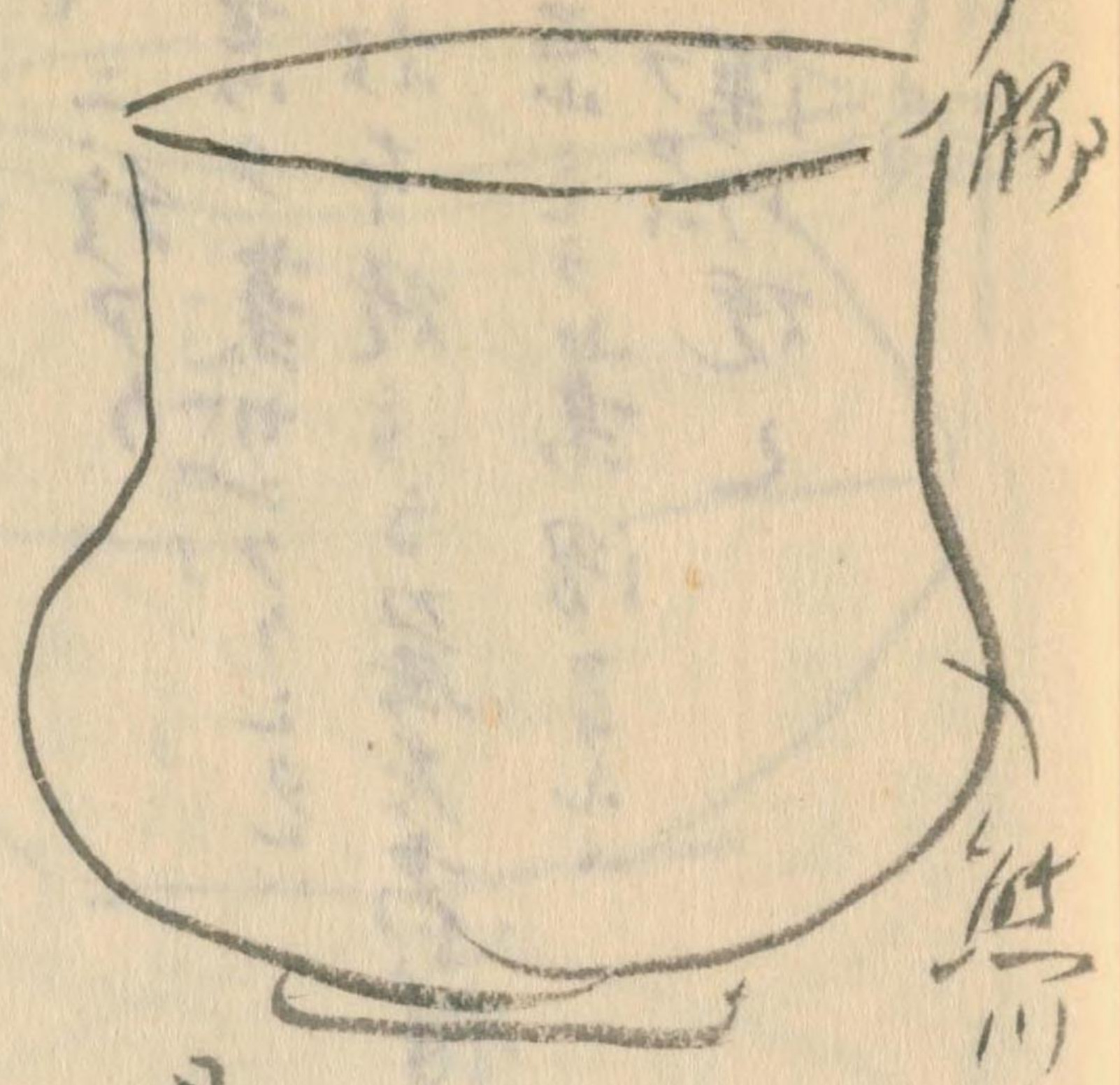


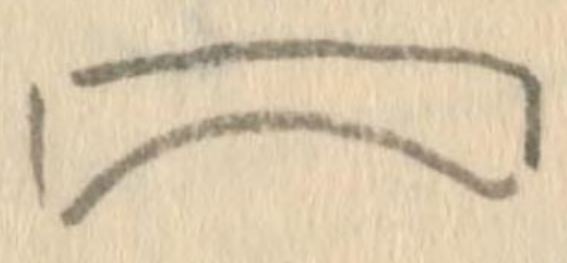
南蛮ノめし

唐物文琳

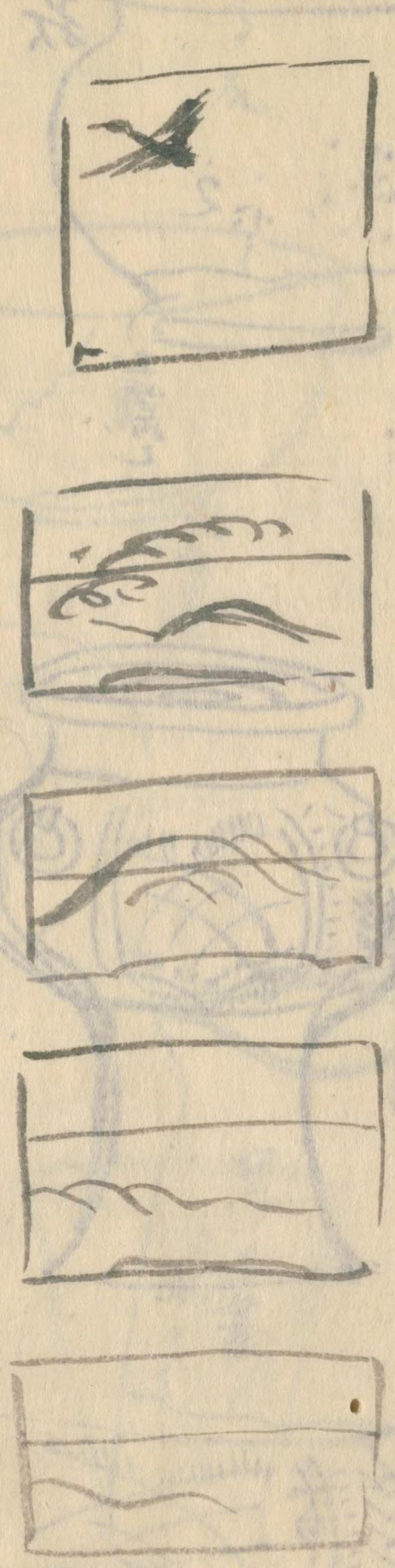


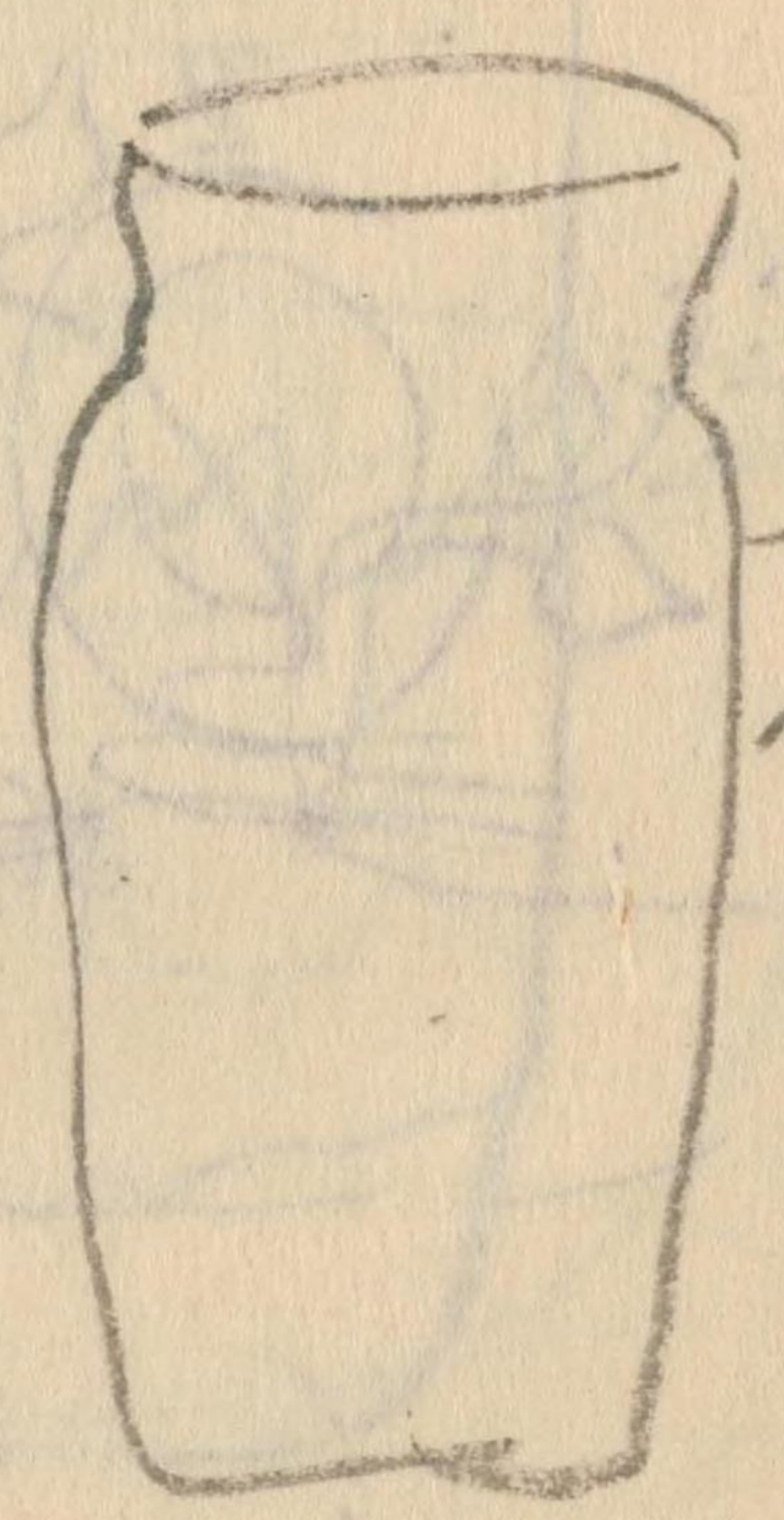
井戸脇





目六ツ

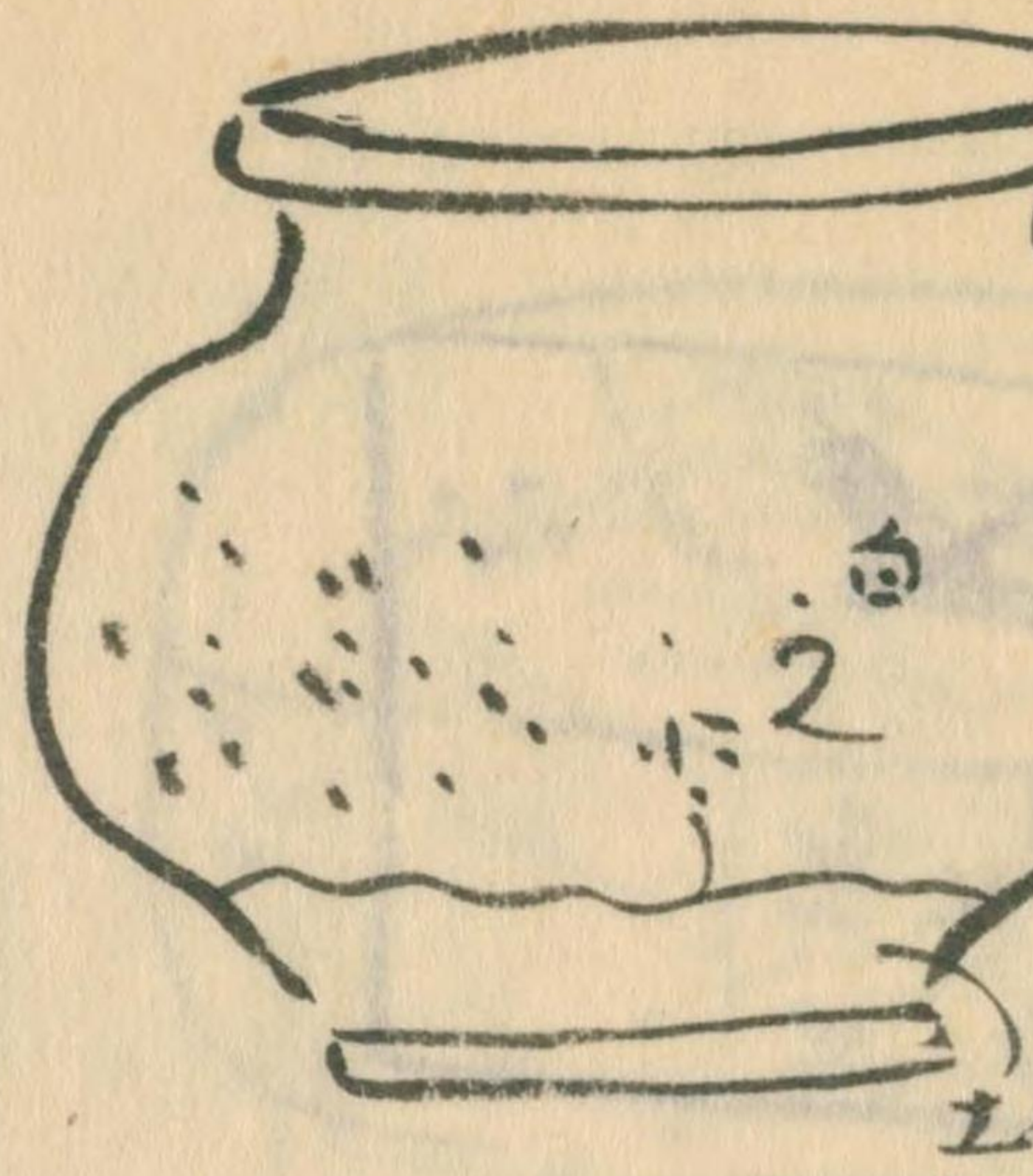




びぜん

二月九日

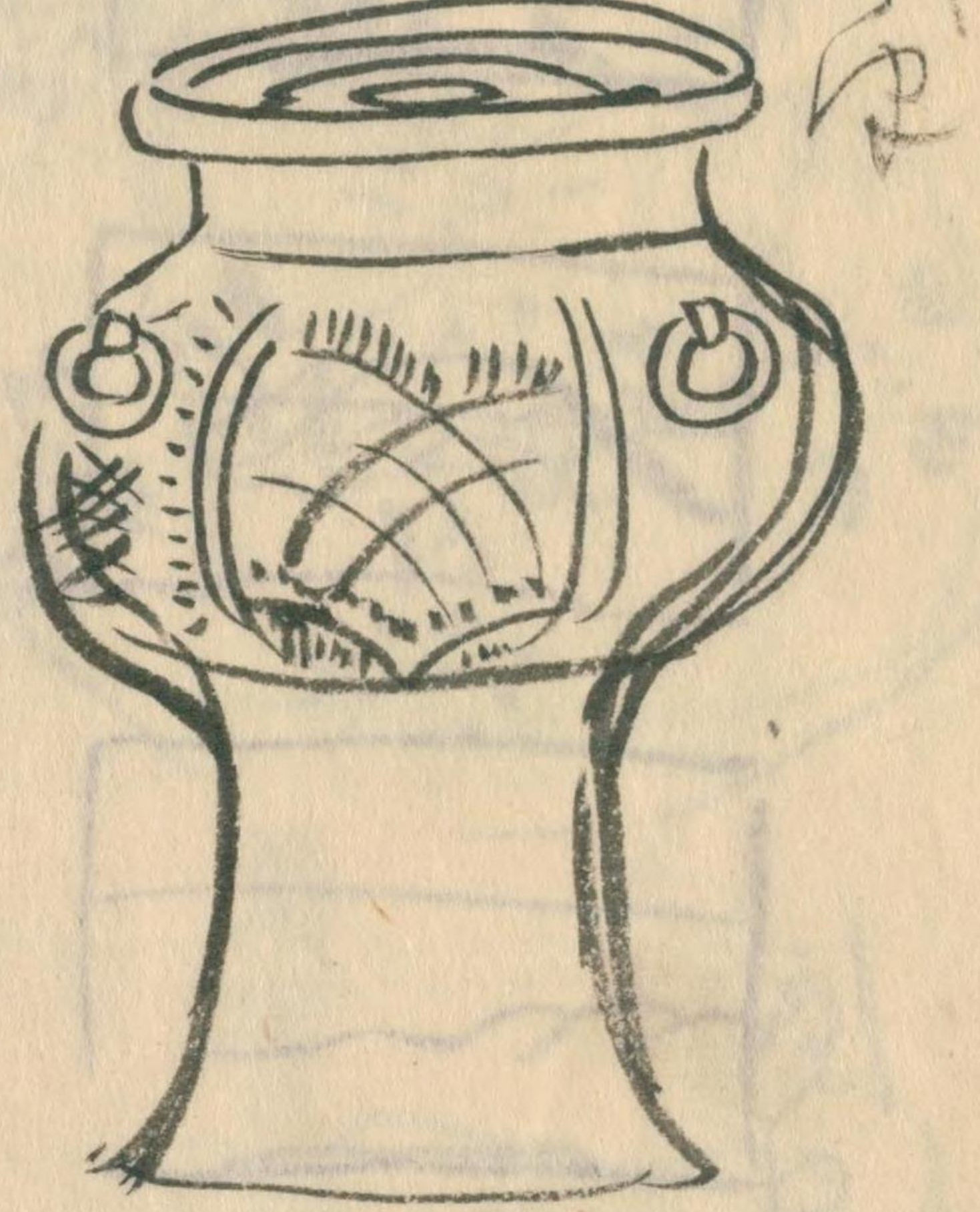
杉村款



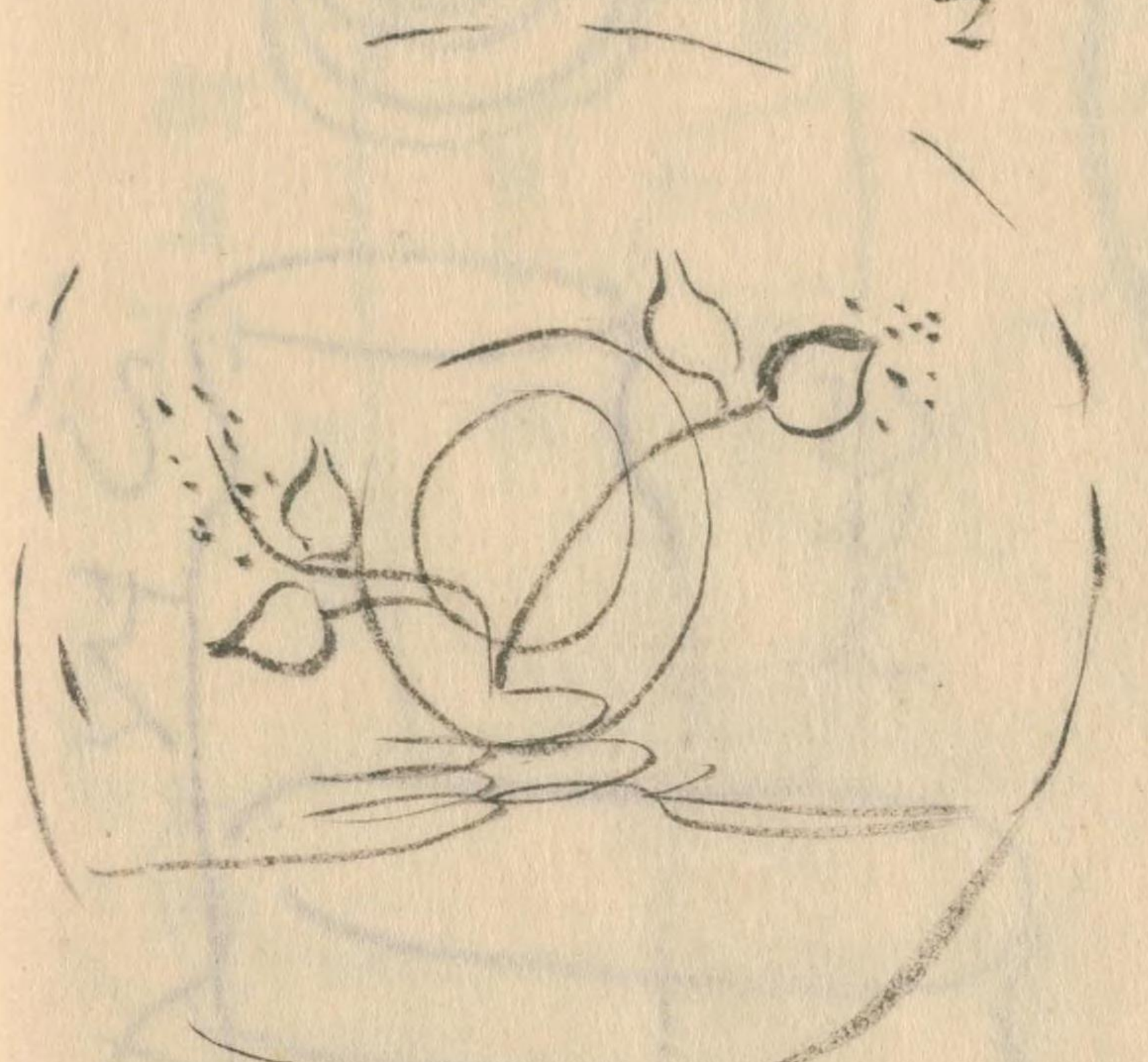
土荒し

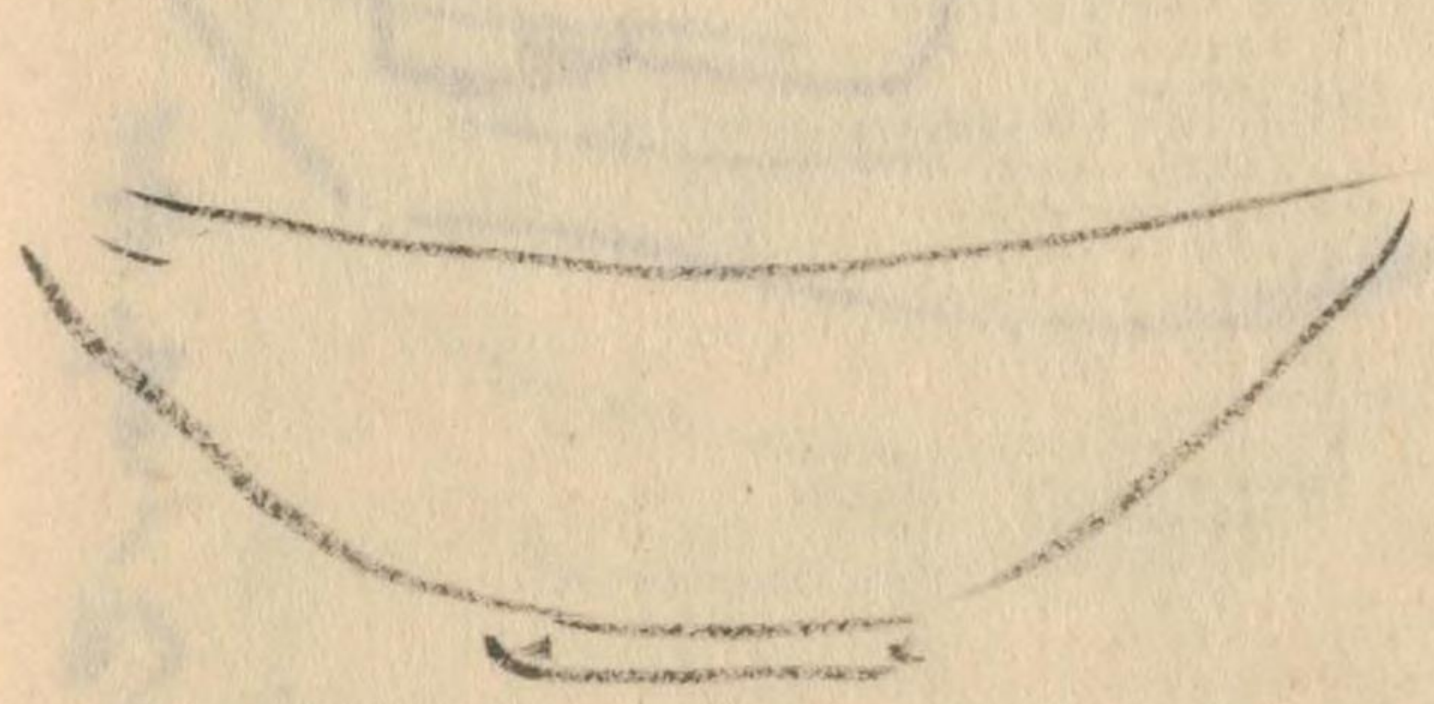
萩ニ二種アリ
土荒ク薬ザングリシタルハ
杉本焼ニテ加屋左吉ノ物也
土密ニテ薬滑カナルハ
深川（フカハ）焼也

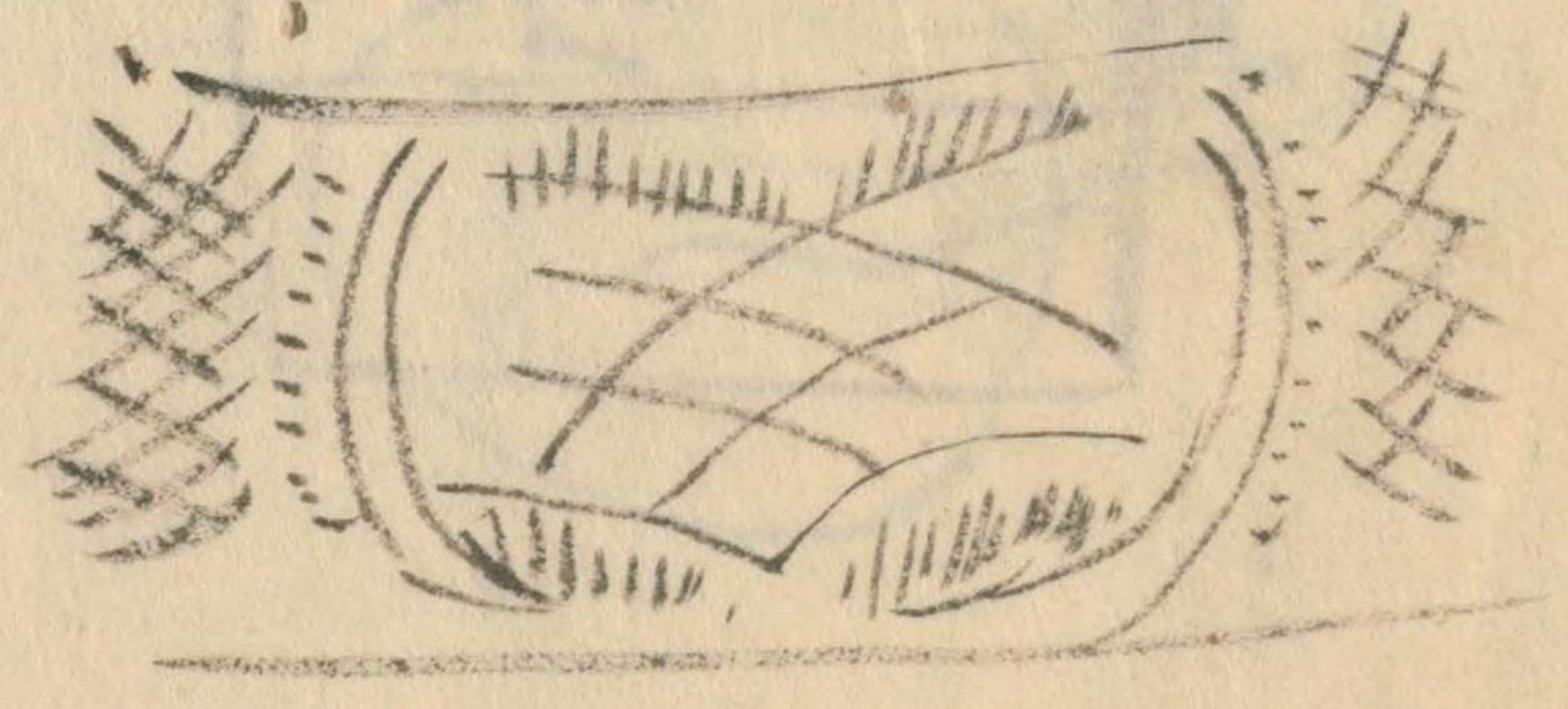
南京



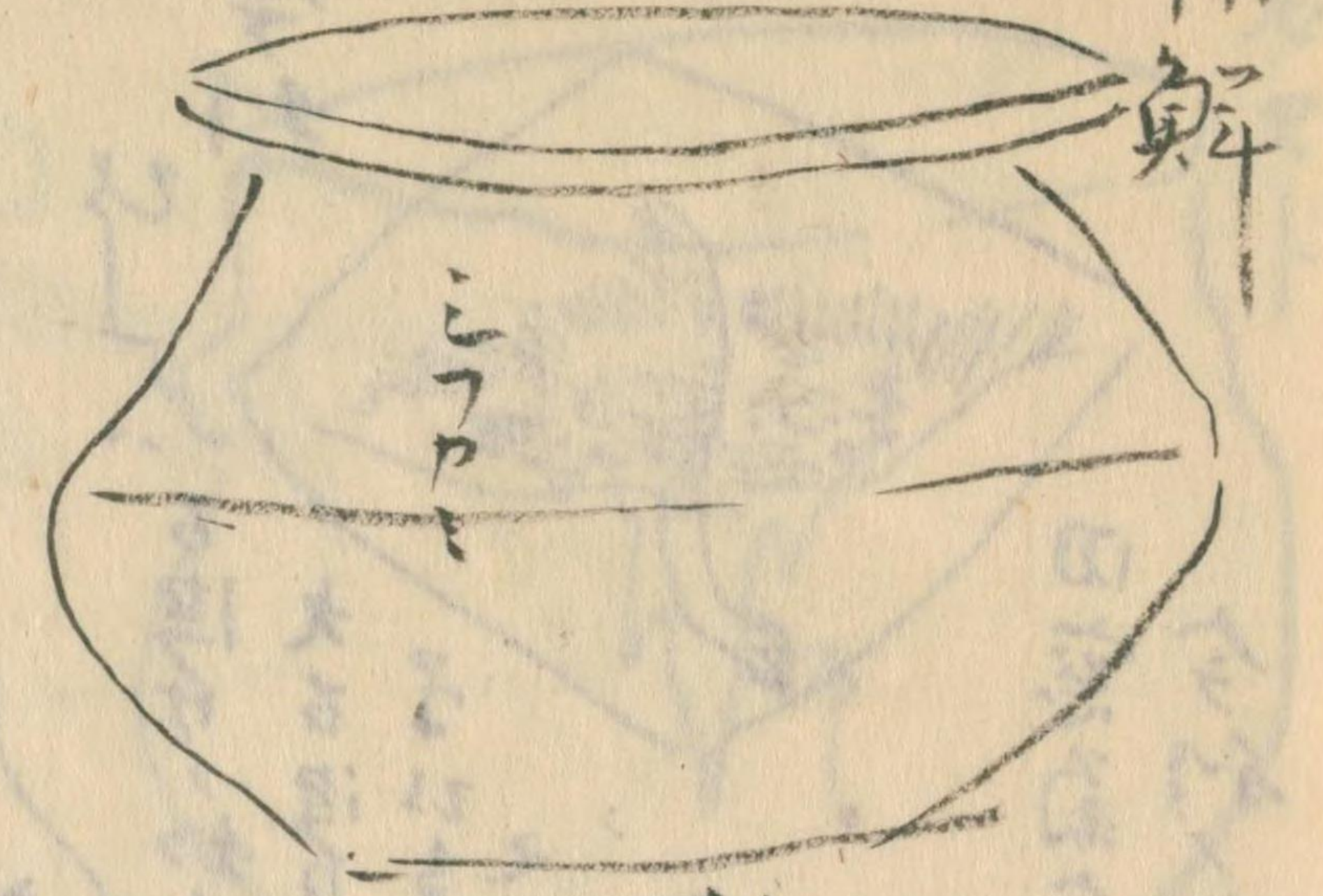
サツマ





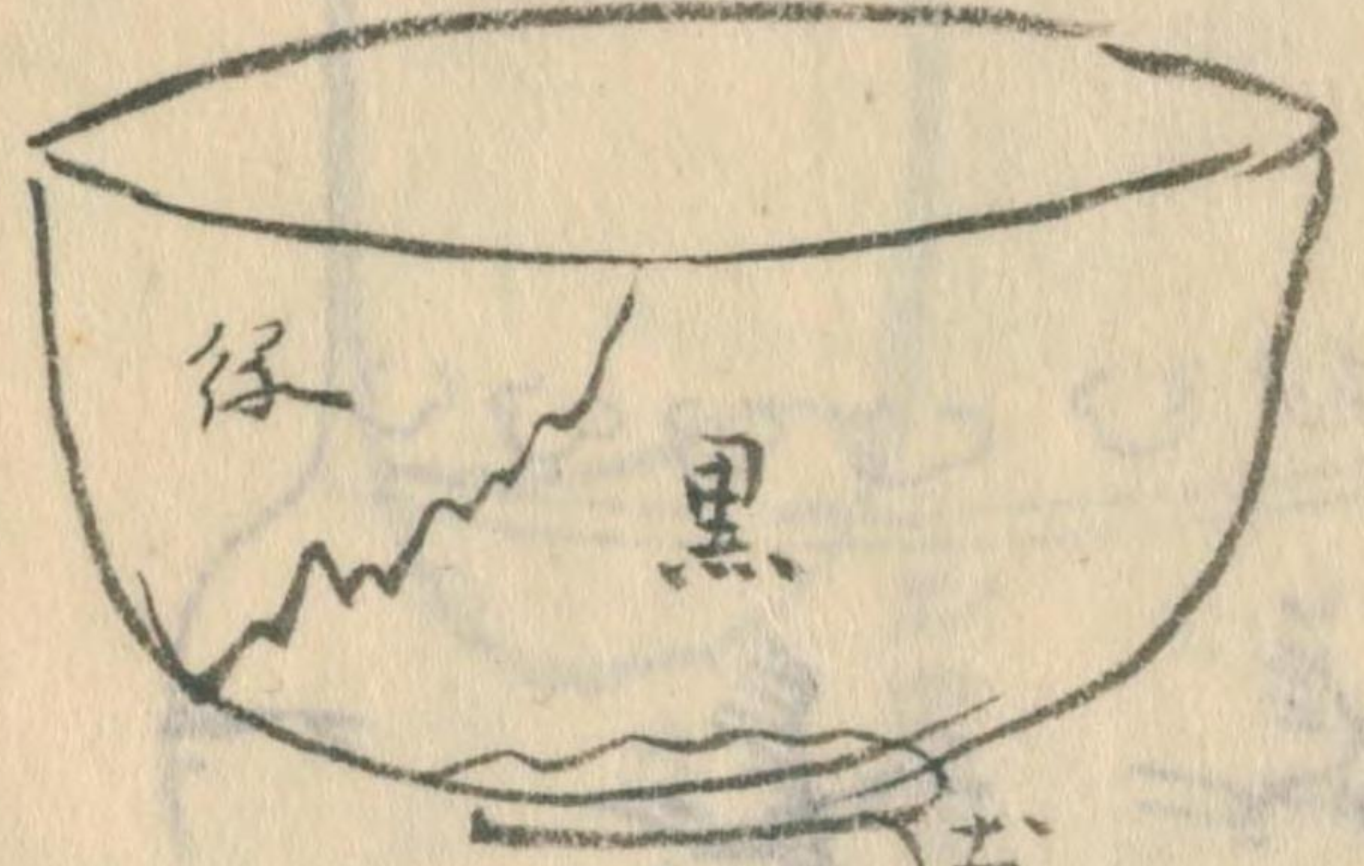


朝鮮

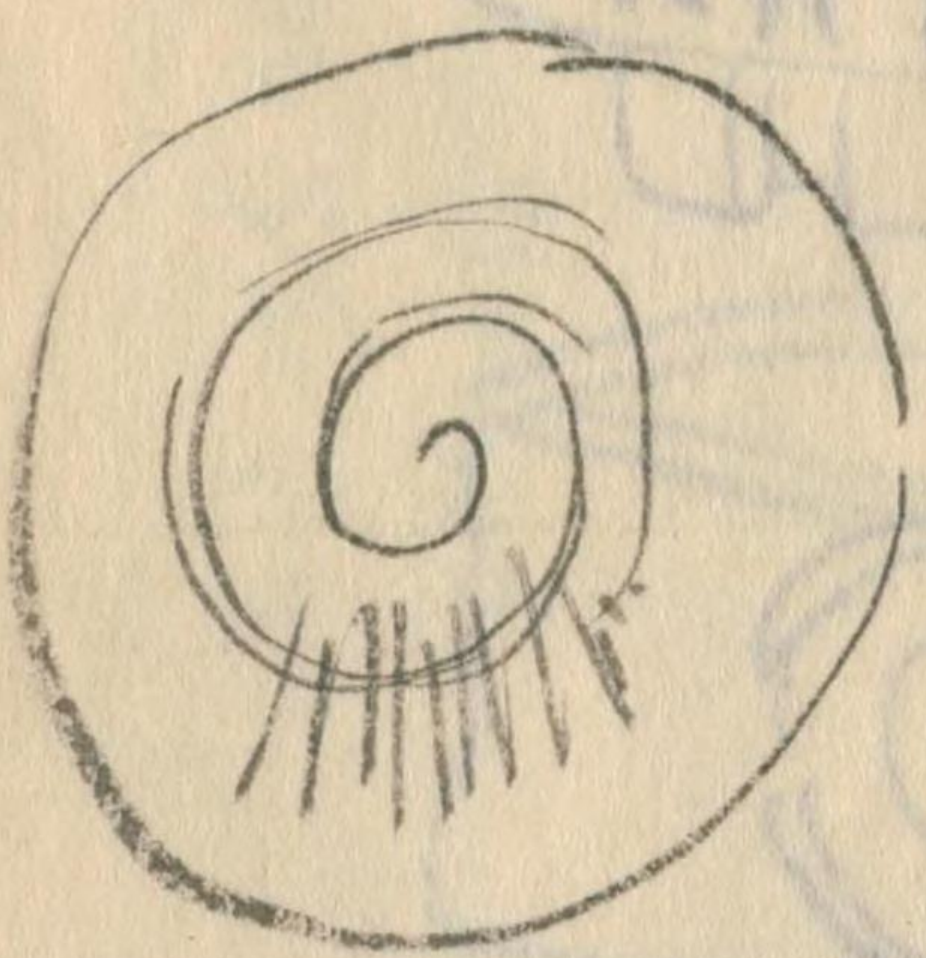


土赤

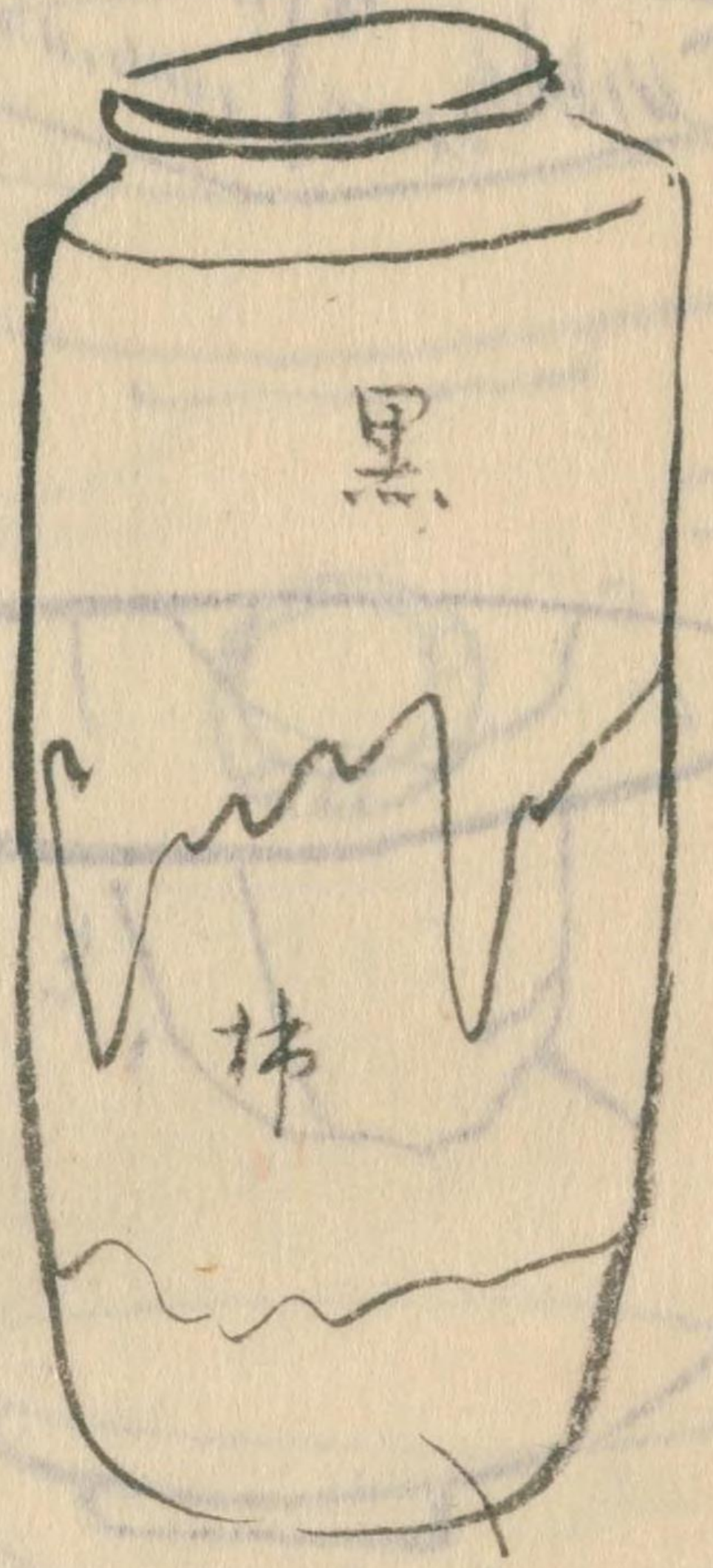
手尻



土赤墨

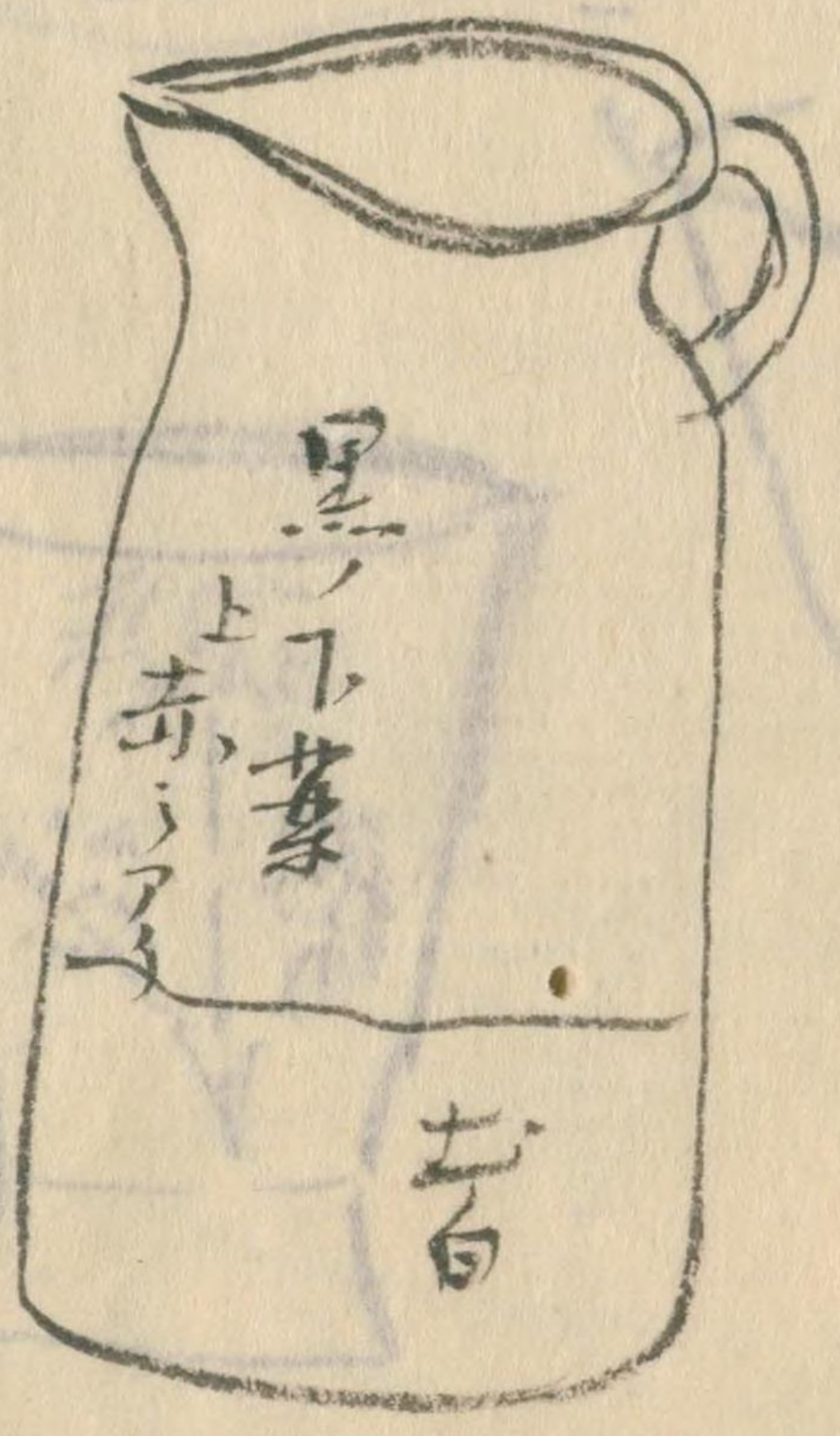


御深井（オフケ）

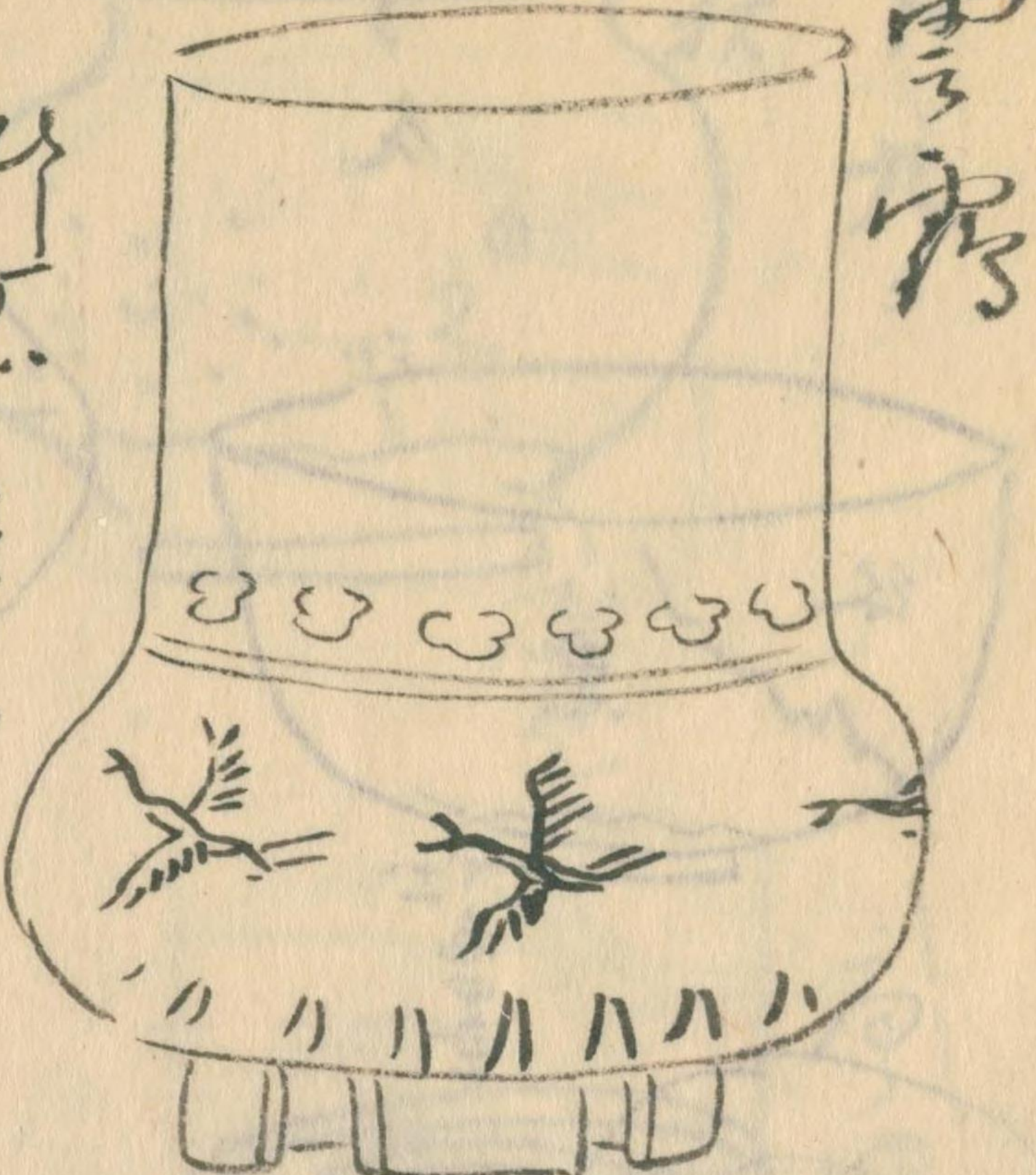


火色

志ら手

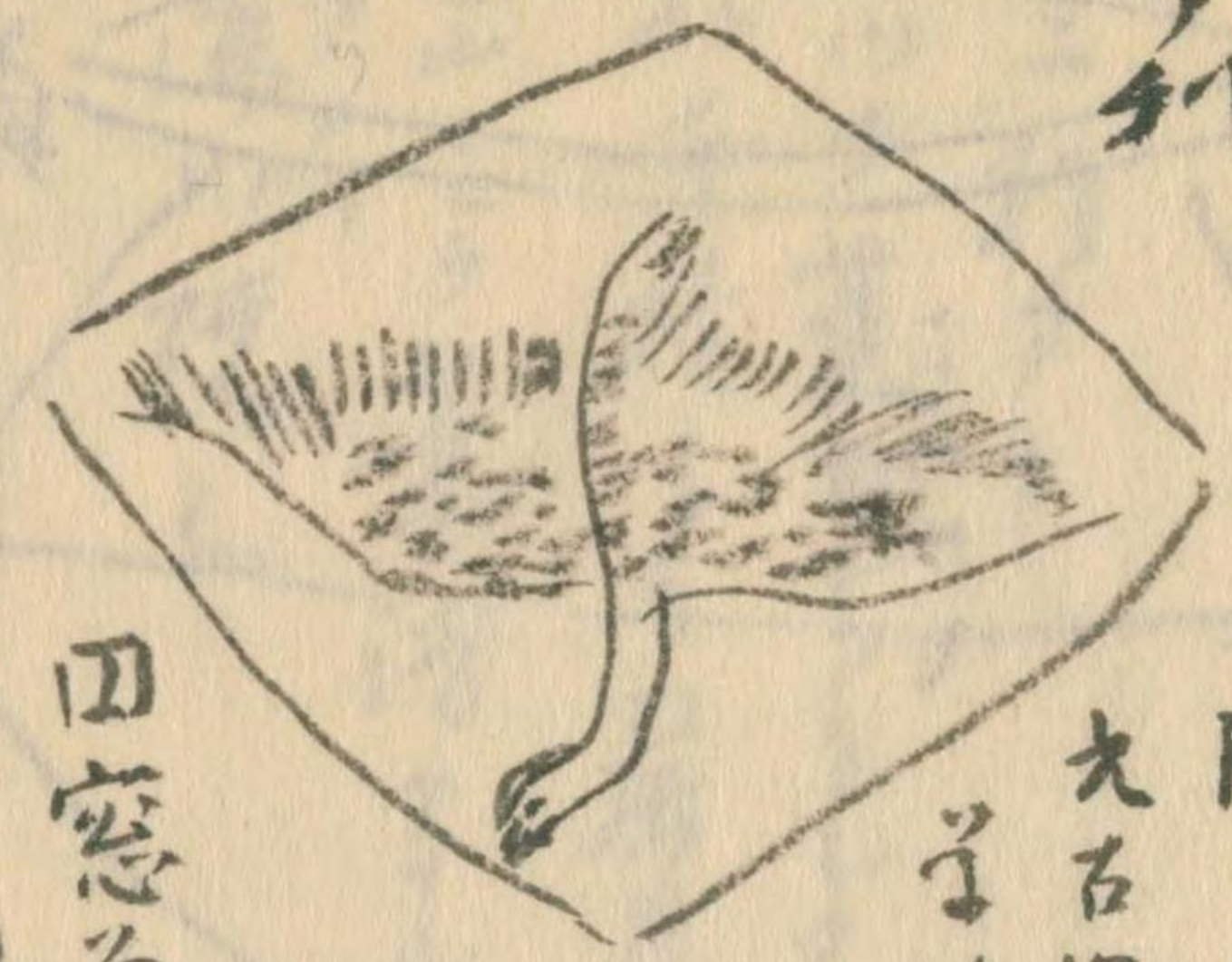

黒ノ下薬
上赤ミア文
土白

古雲鶴



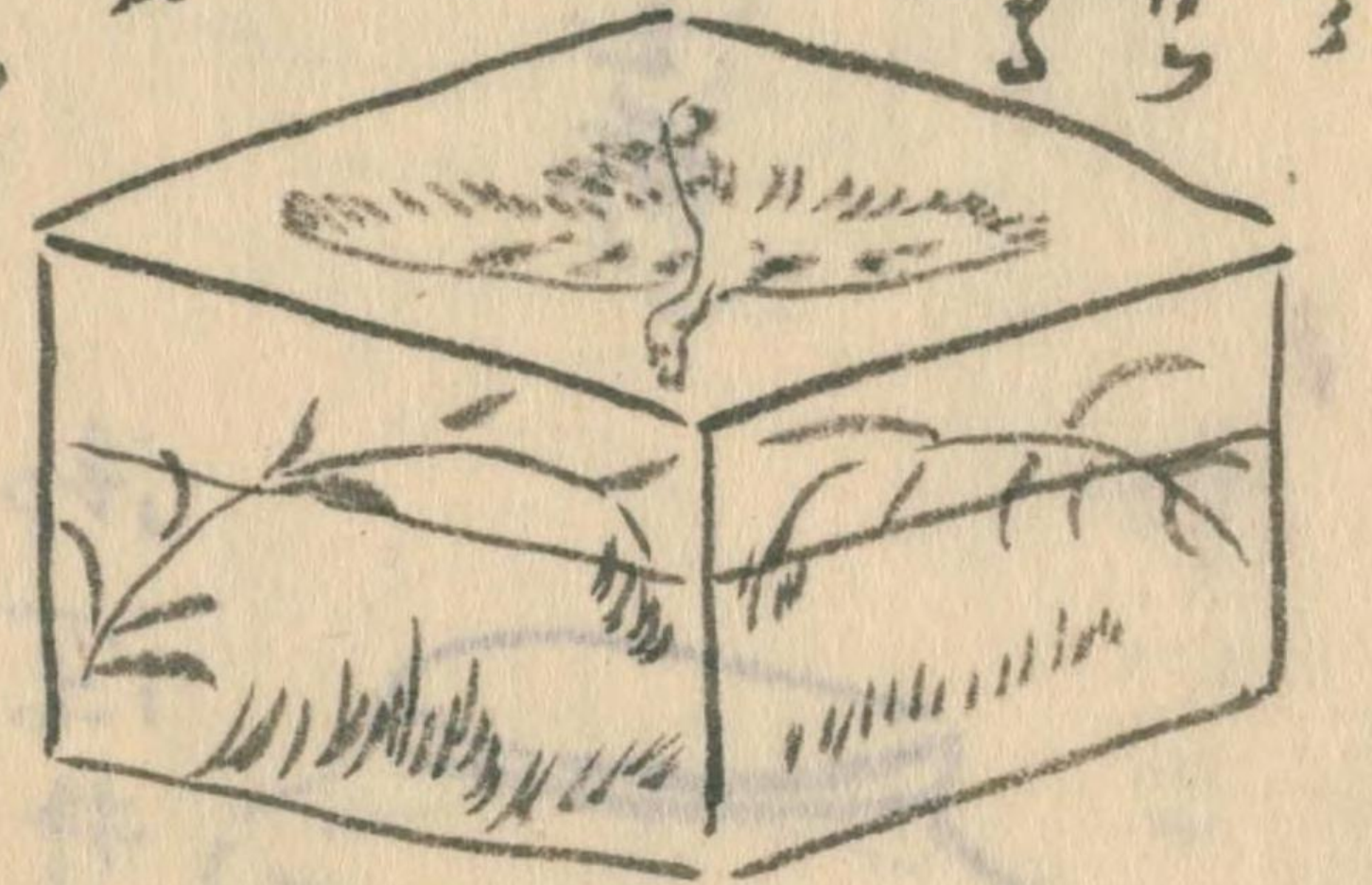
古今利

ひしノハ

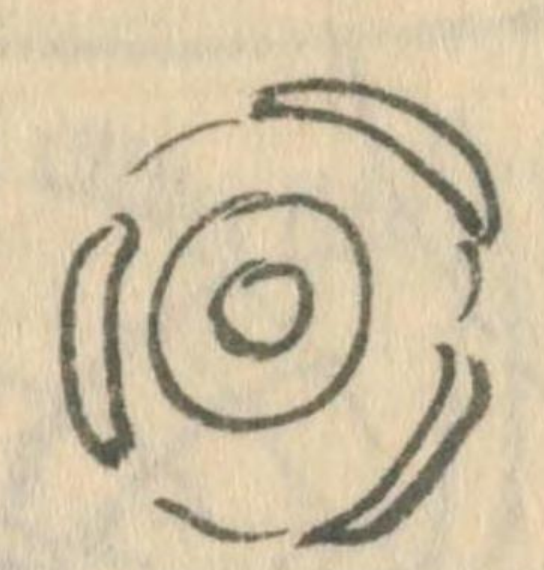


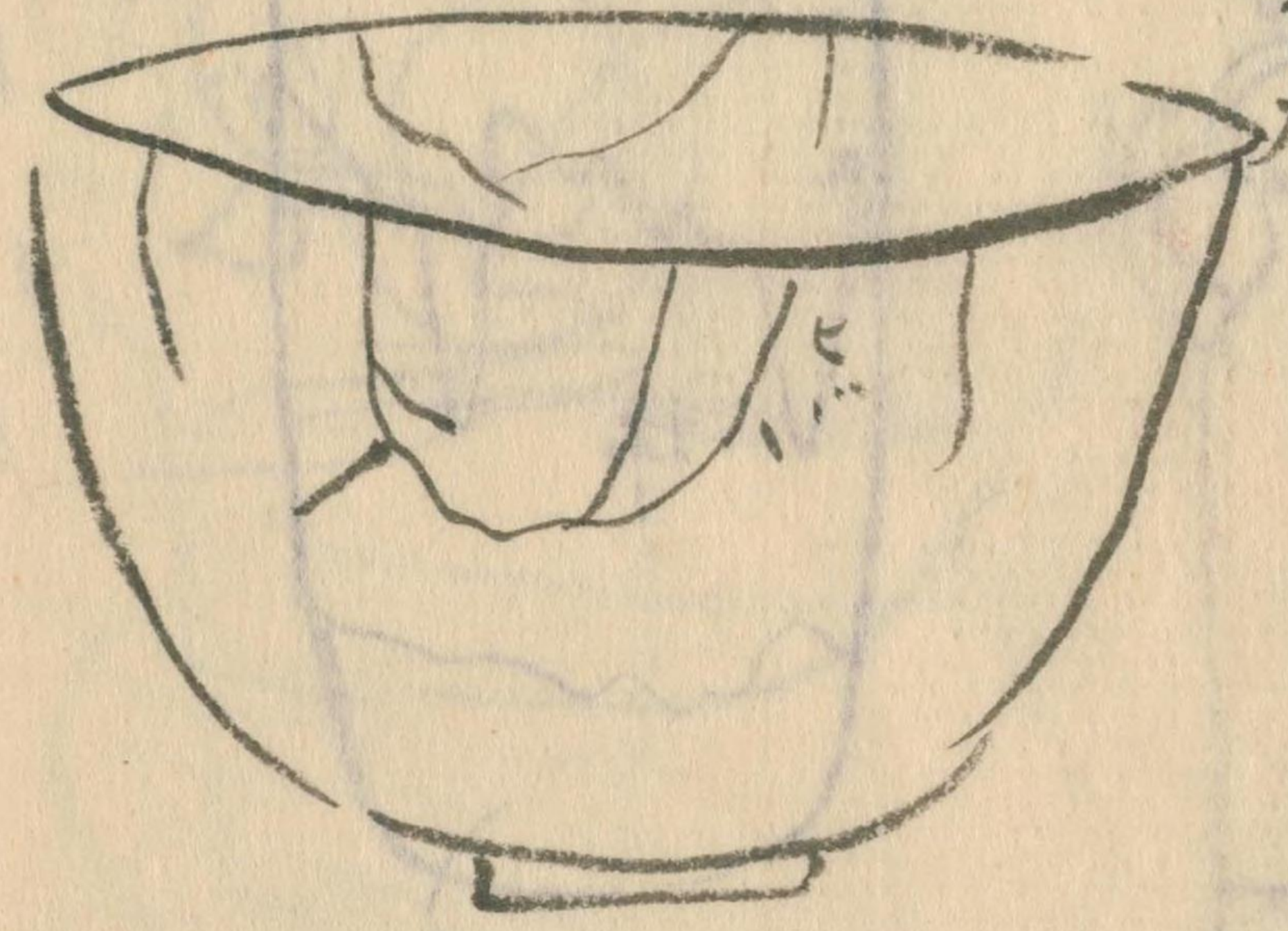
古染付ノ如く
尤古染付ヨリ
手ぬるき
之

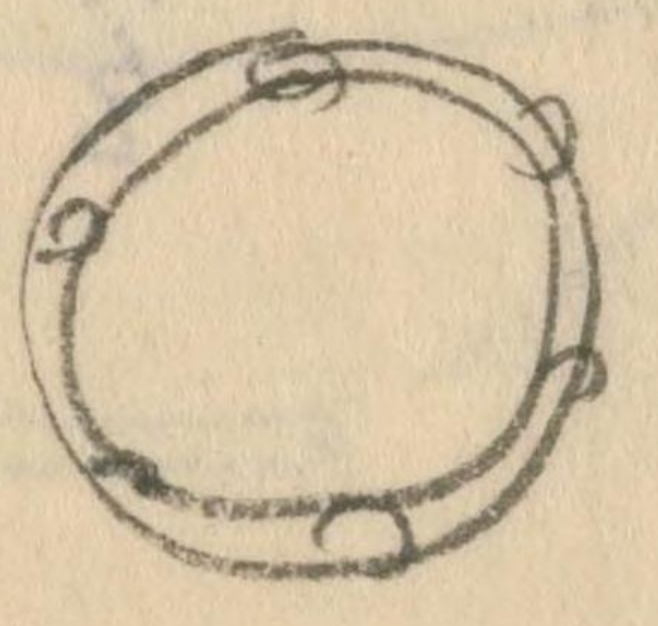
田窓菊ハ
今利ノ作多アリ



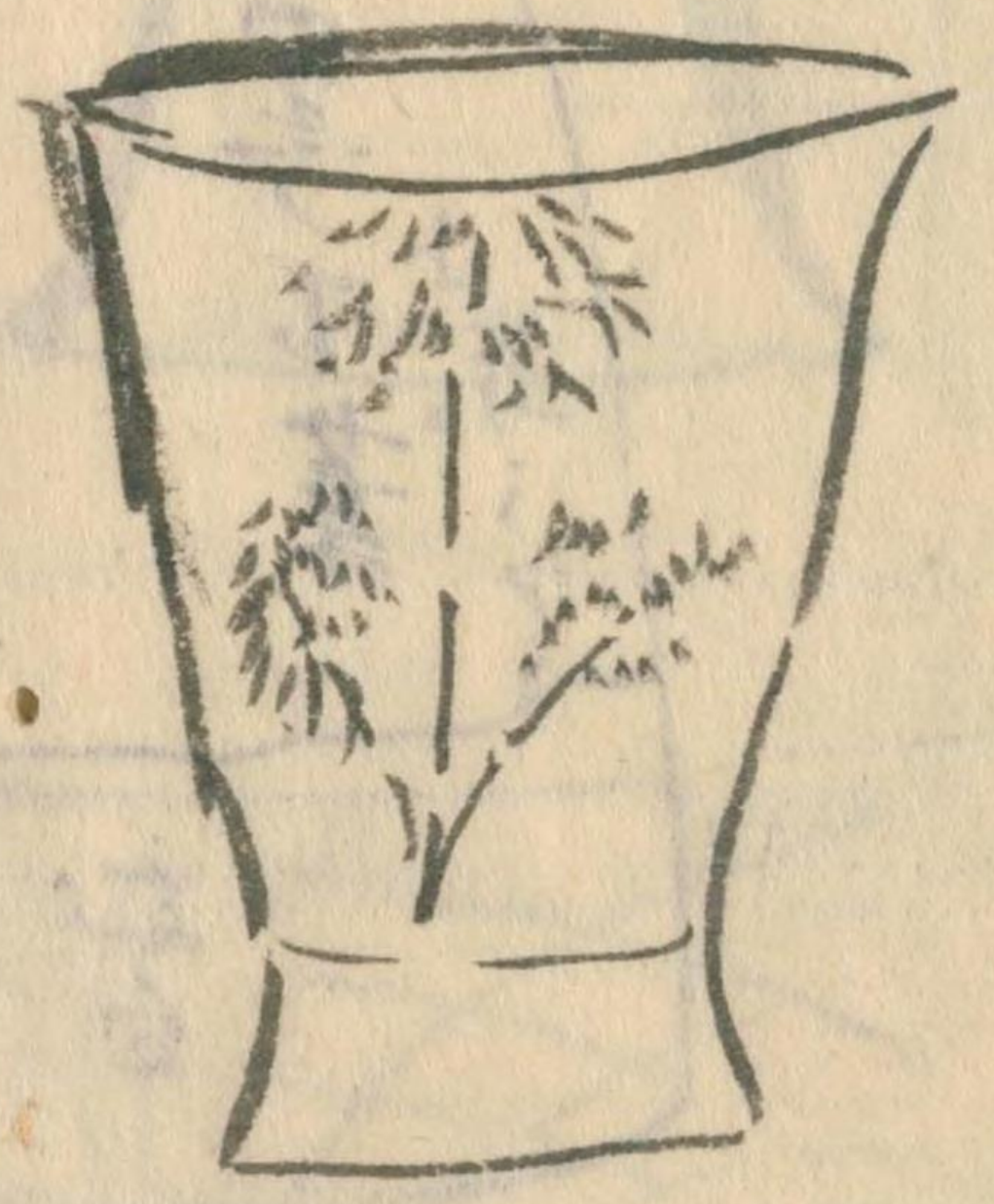
無地カニノメ



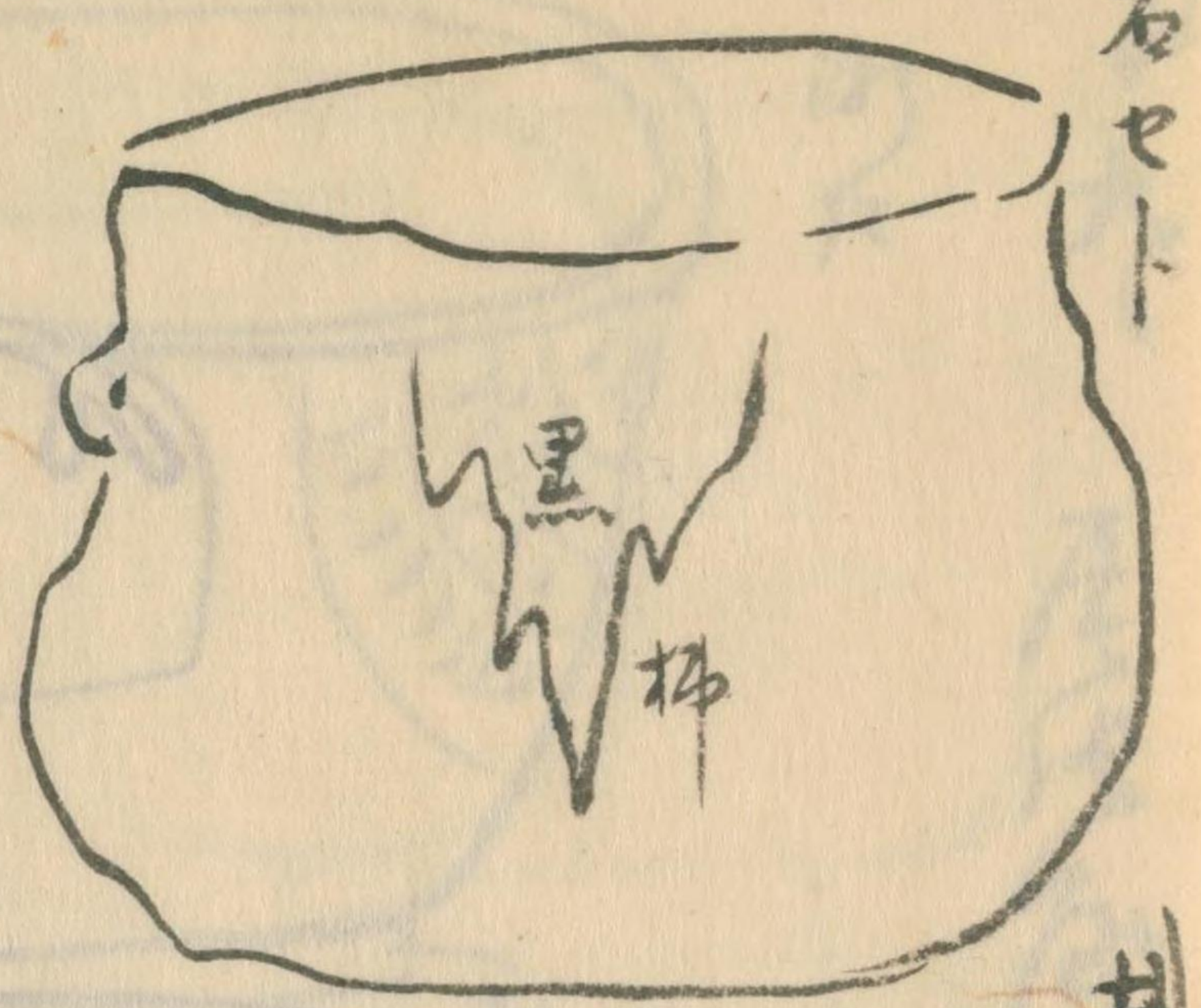




今利

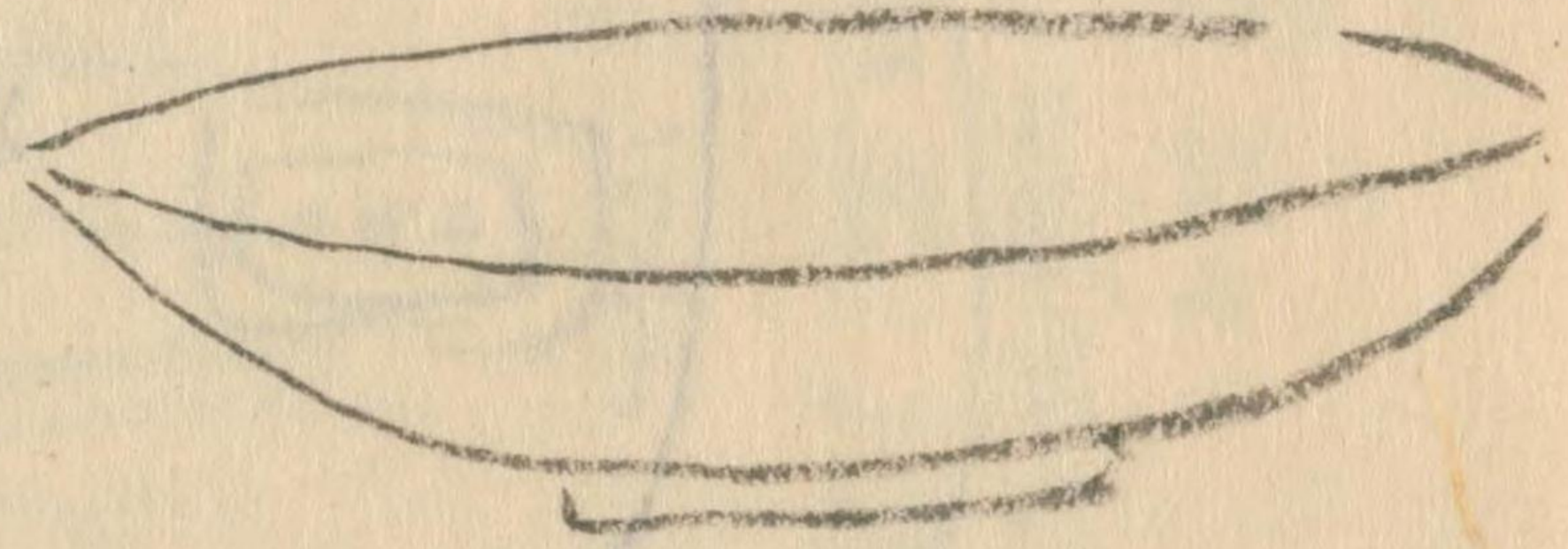


古セト

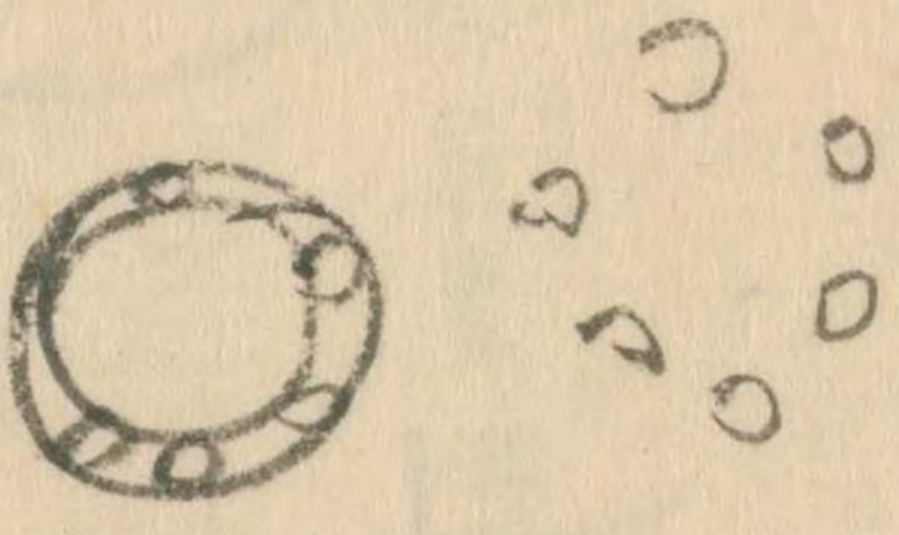


黒
柿

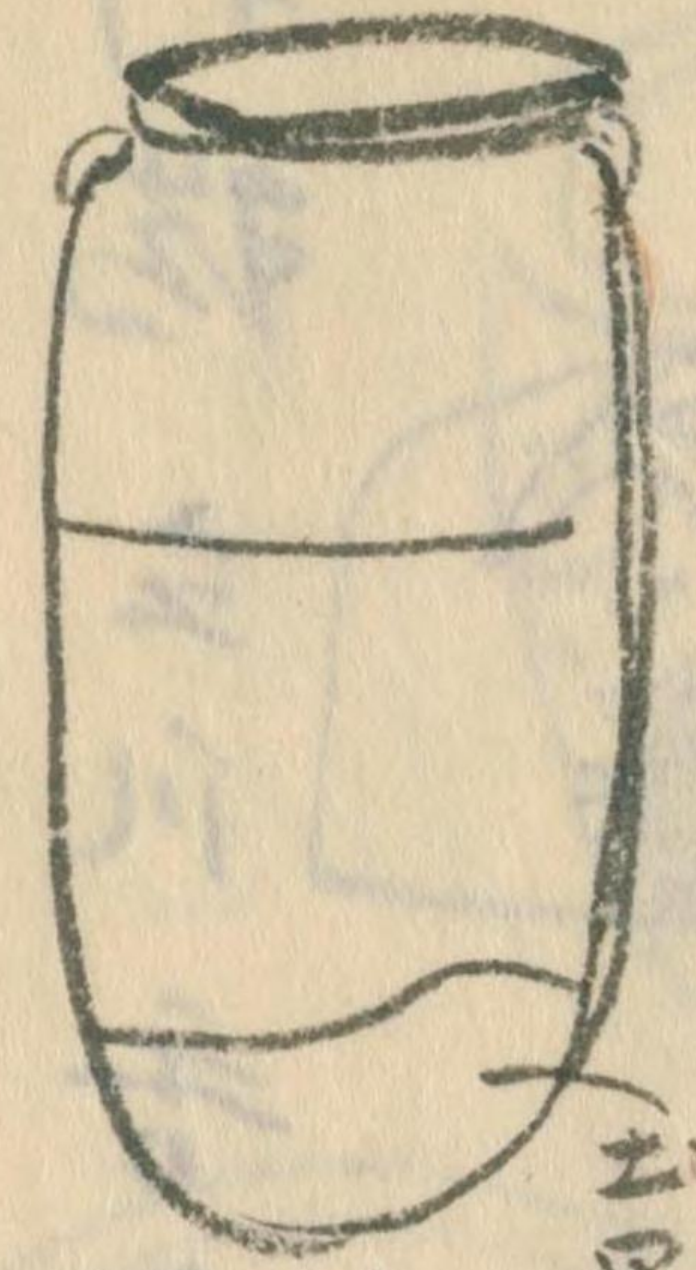
井戸脇



内ノ目

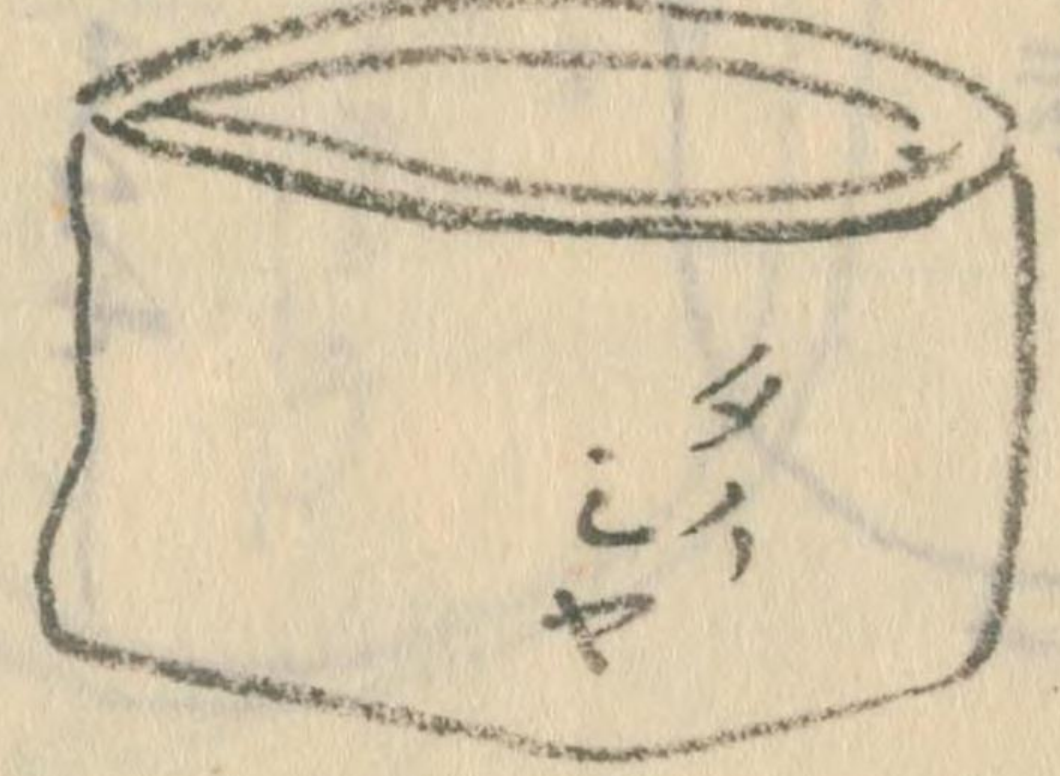


瀬



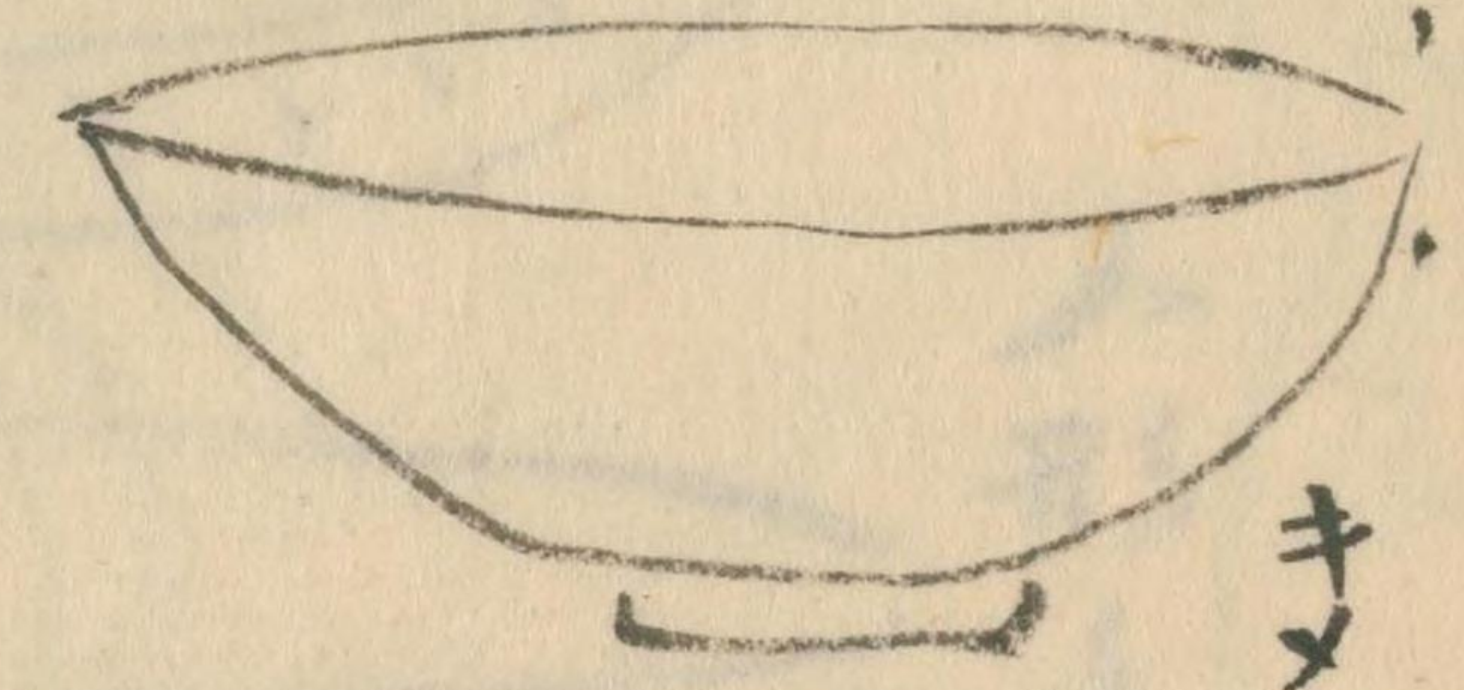
出黒
本糸切

大樋



タイ
こヤ

萩深川

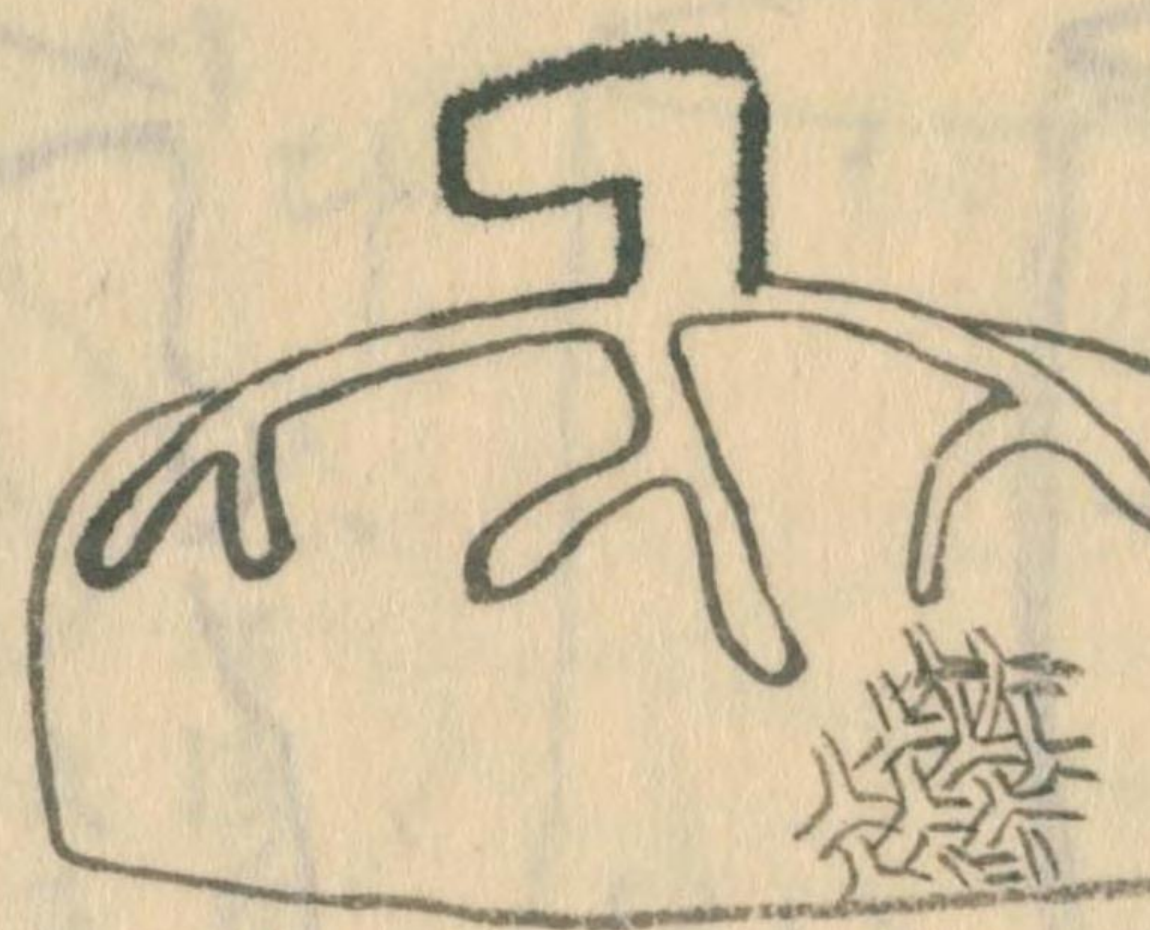


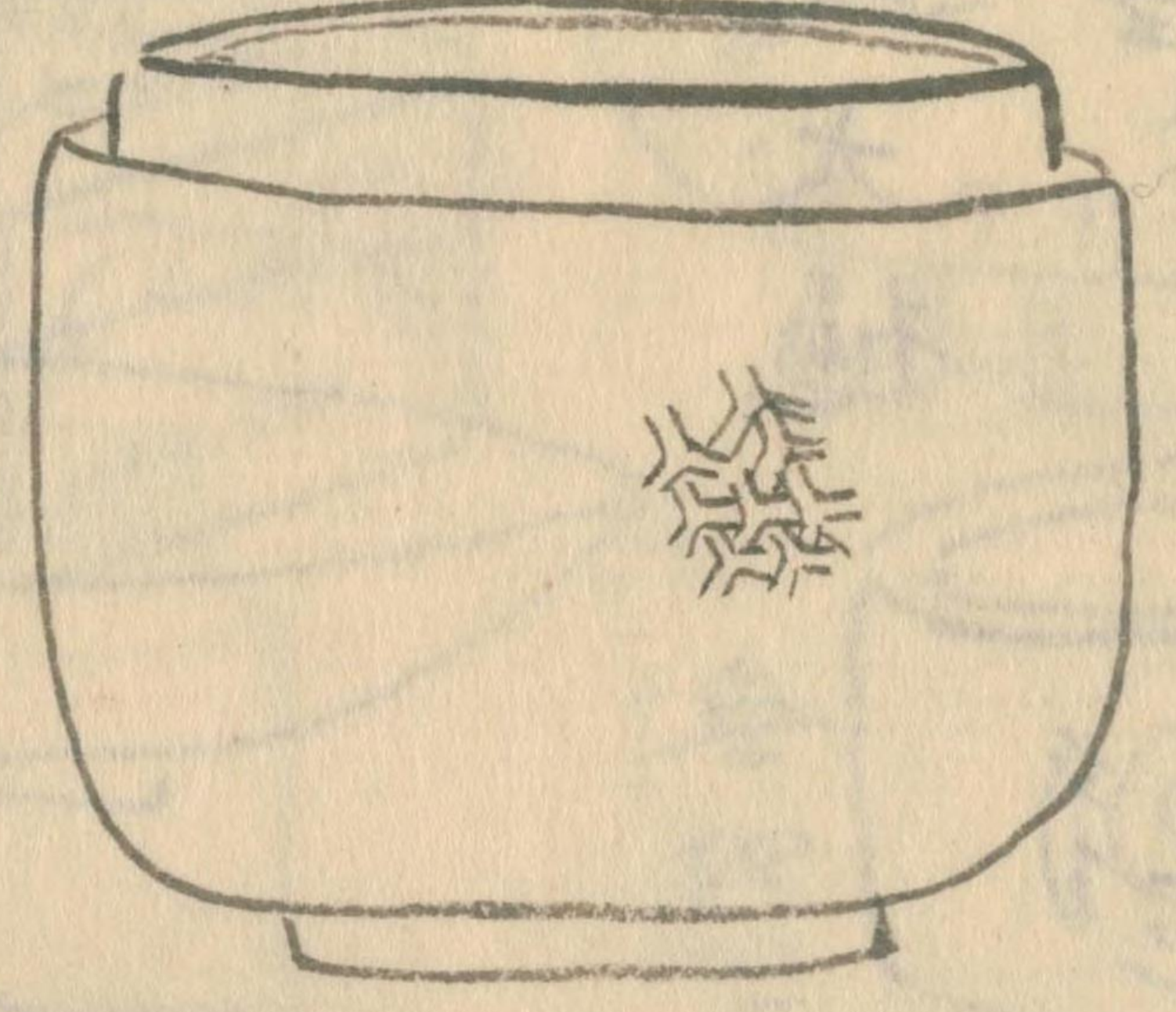
キメ濃
ナミアリ

ガラス使用

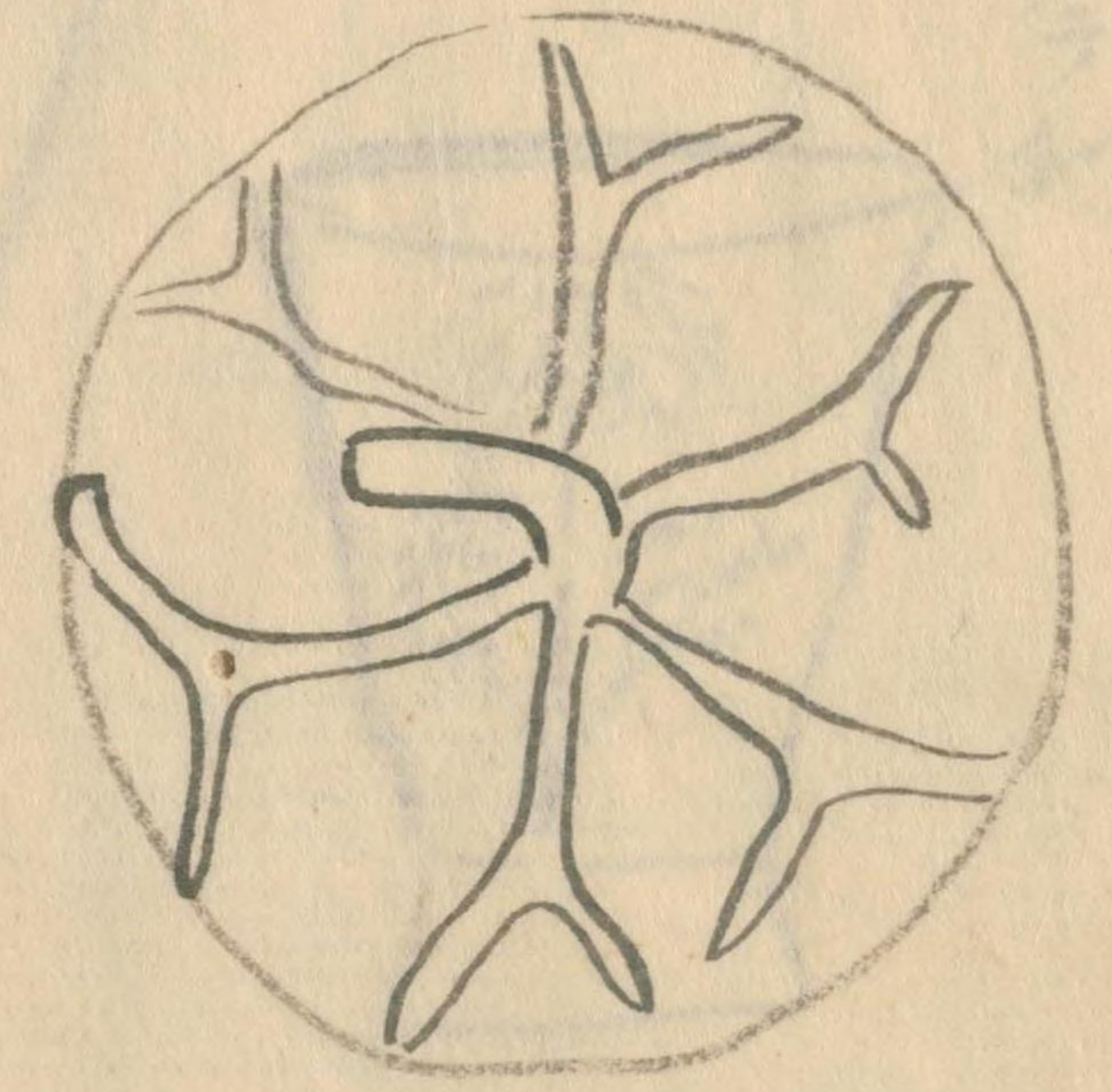
二月廿七 高お

祥瑞 立瓜香合



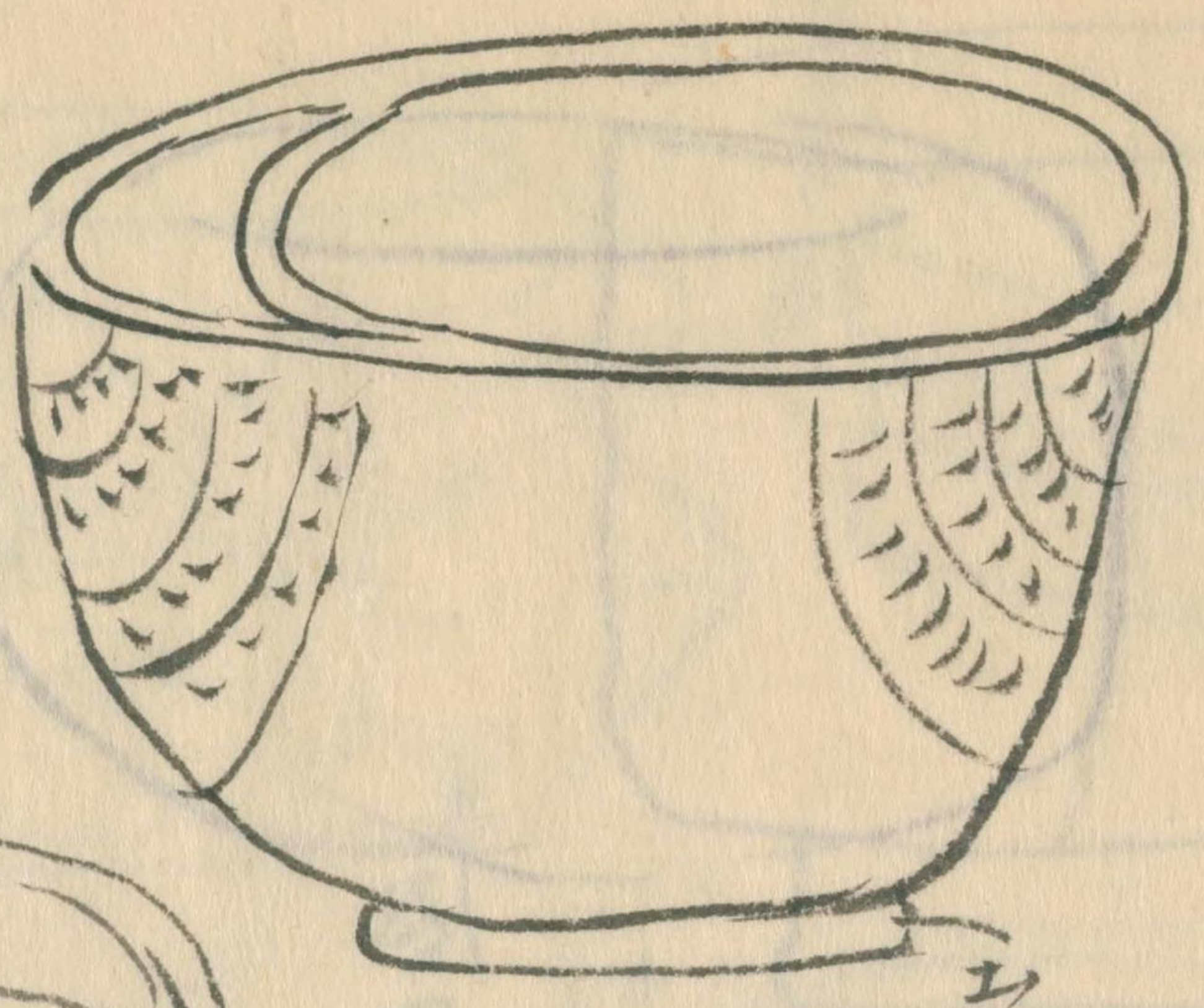


高サ寸卜
差渡シ寸七卜

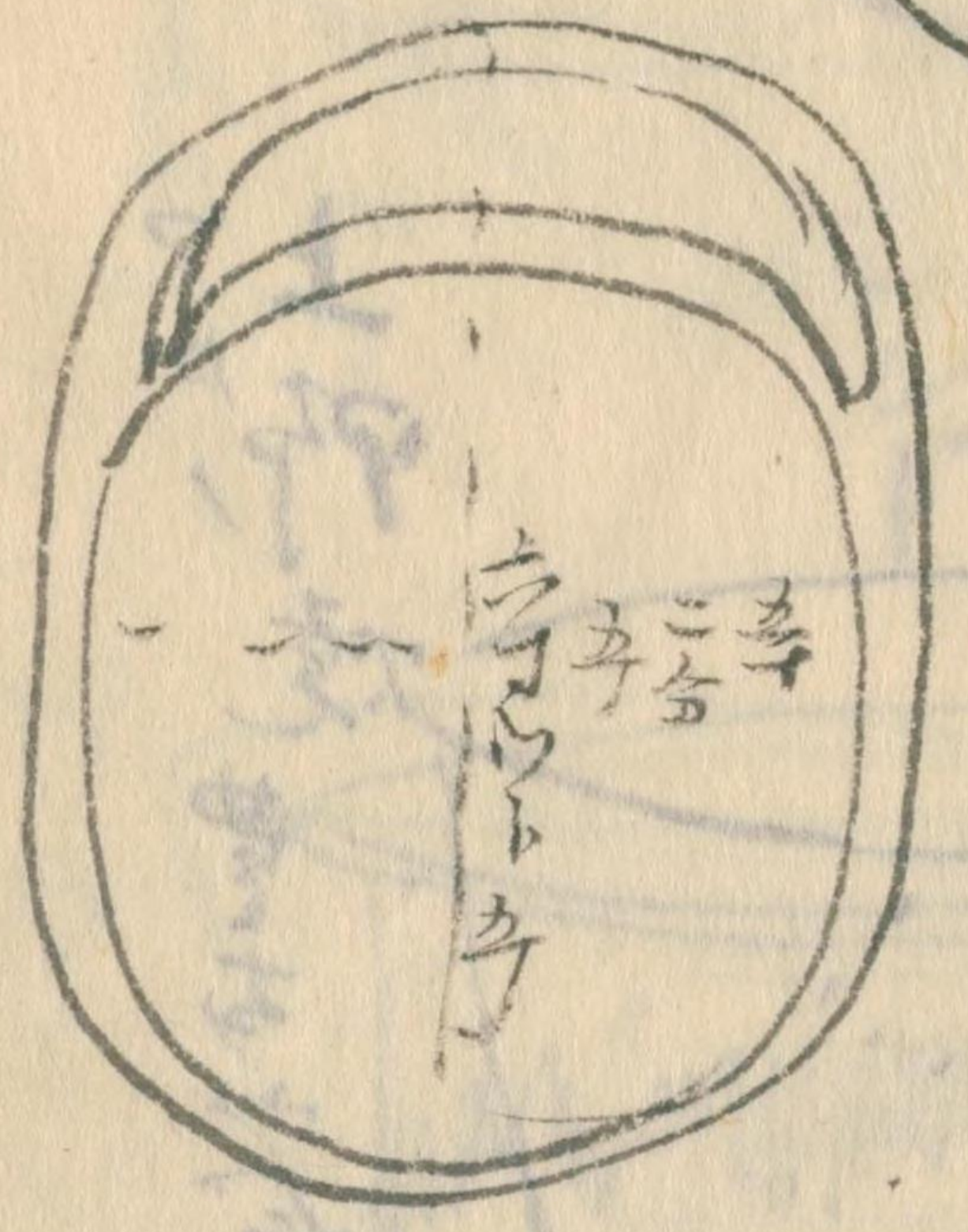


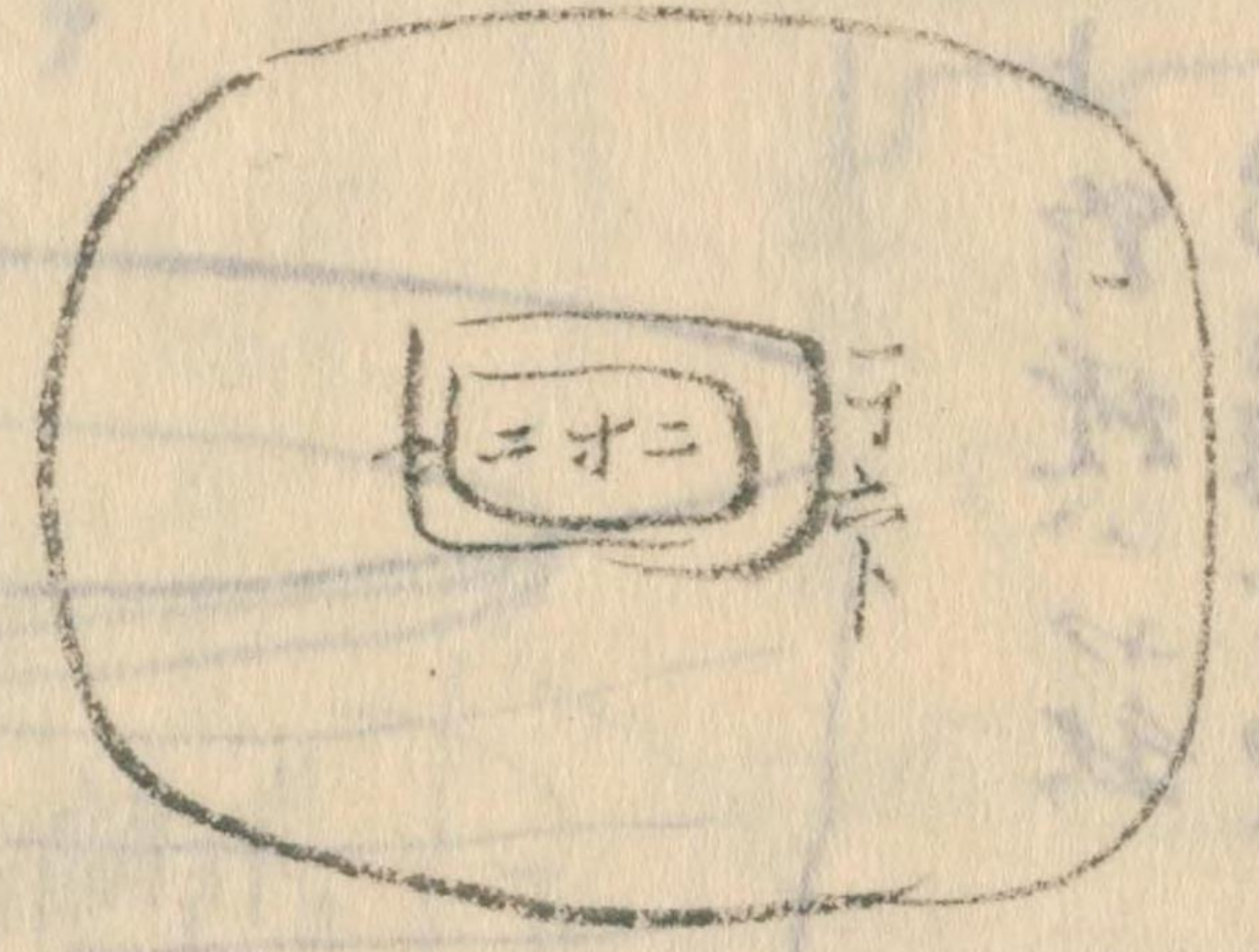
二月九 唐津茶

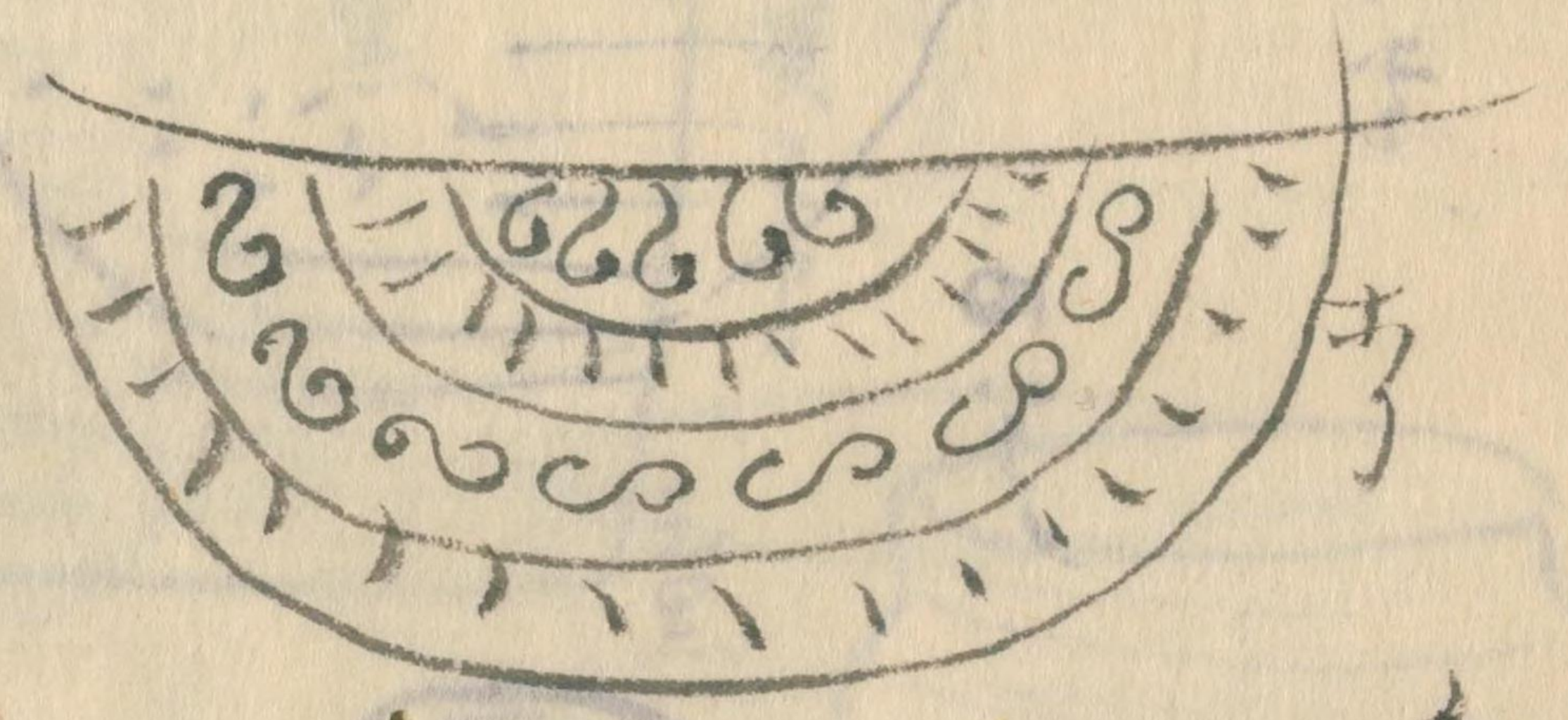
黄瀬戸



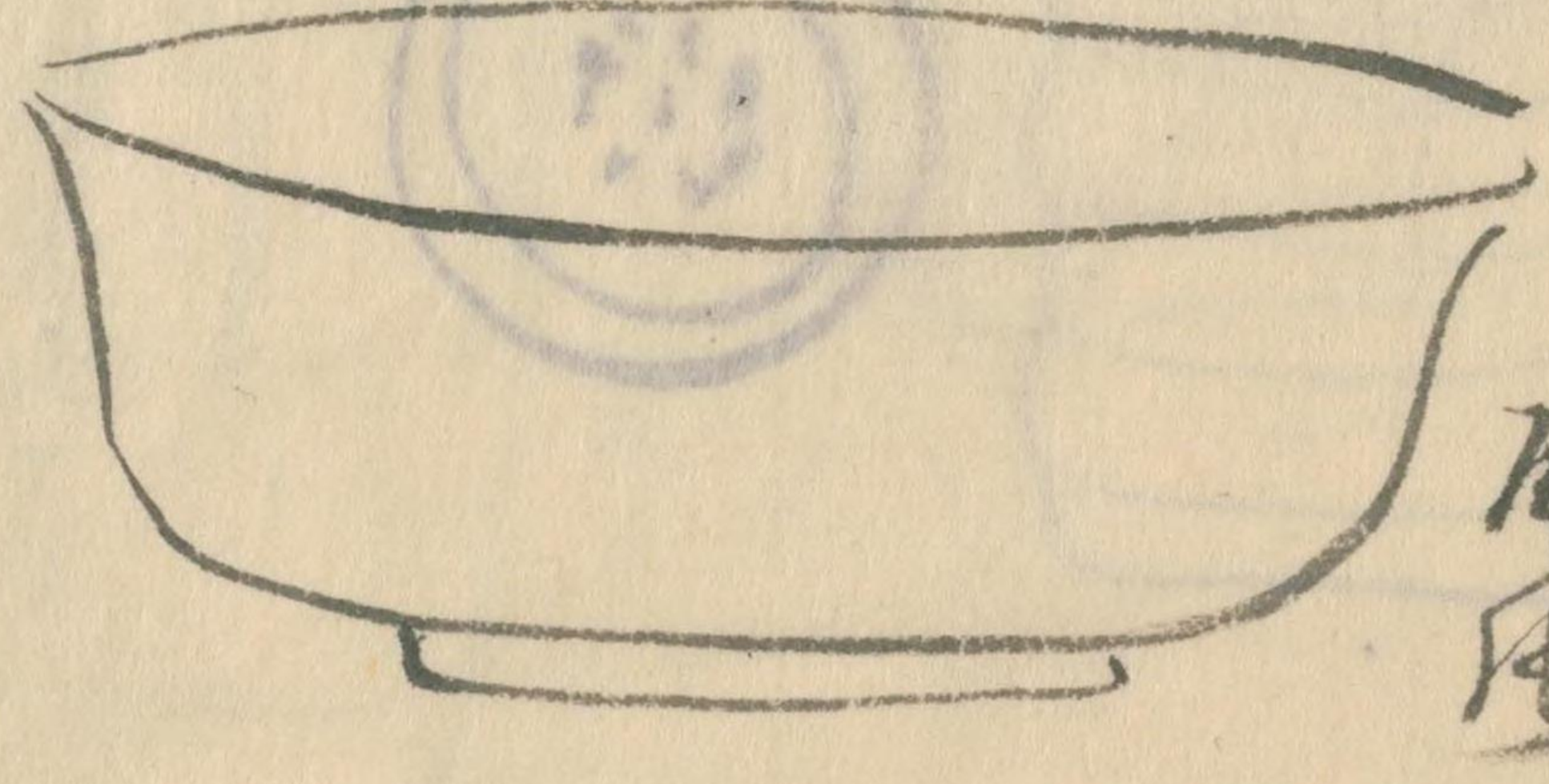
土白



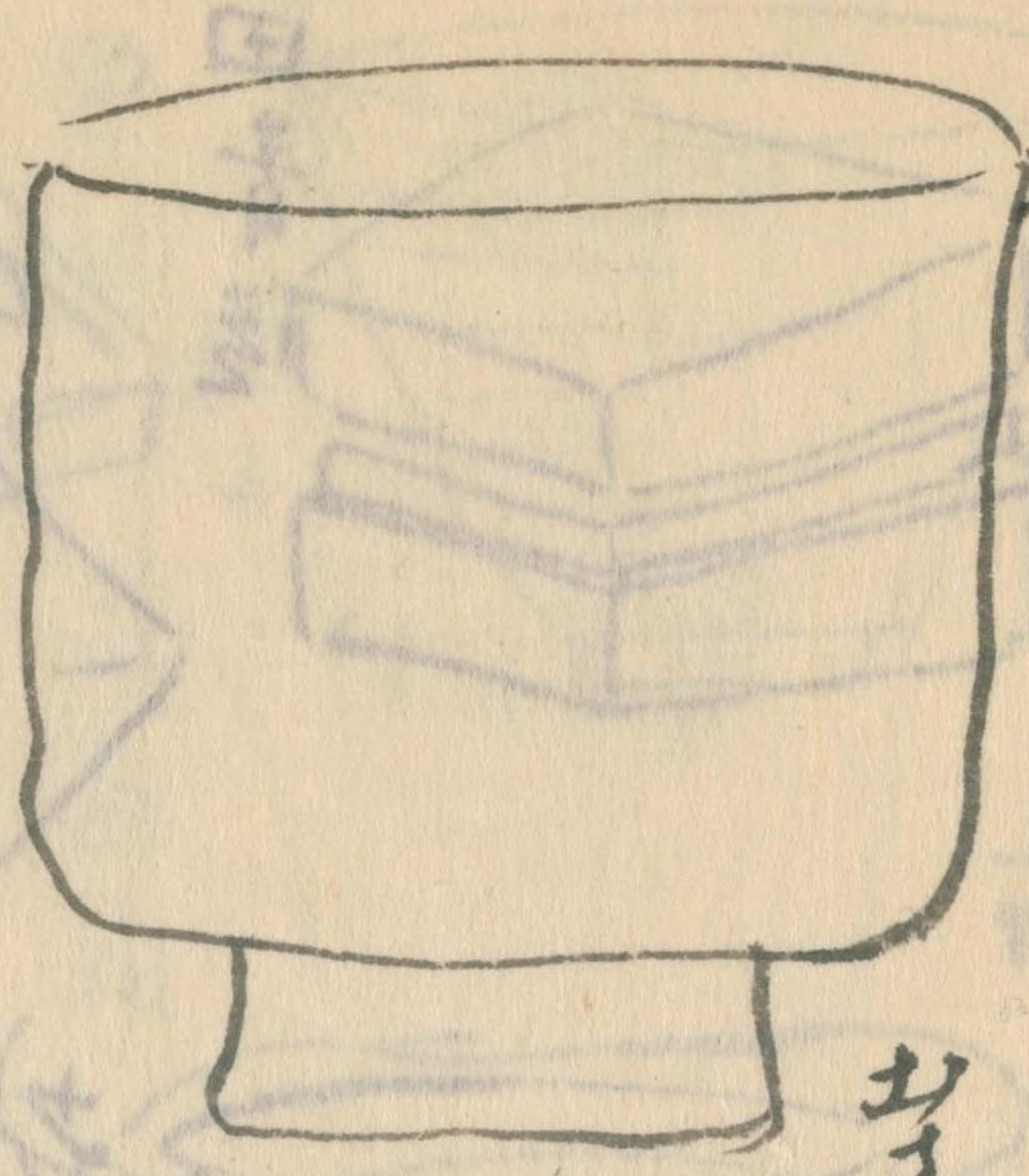


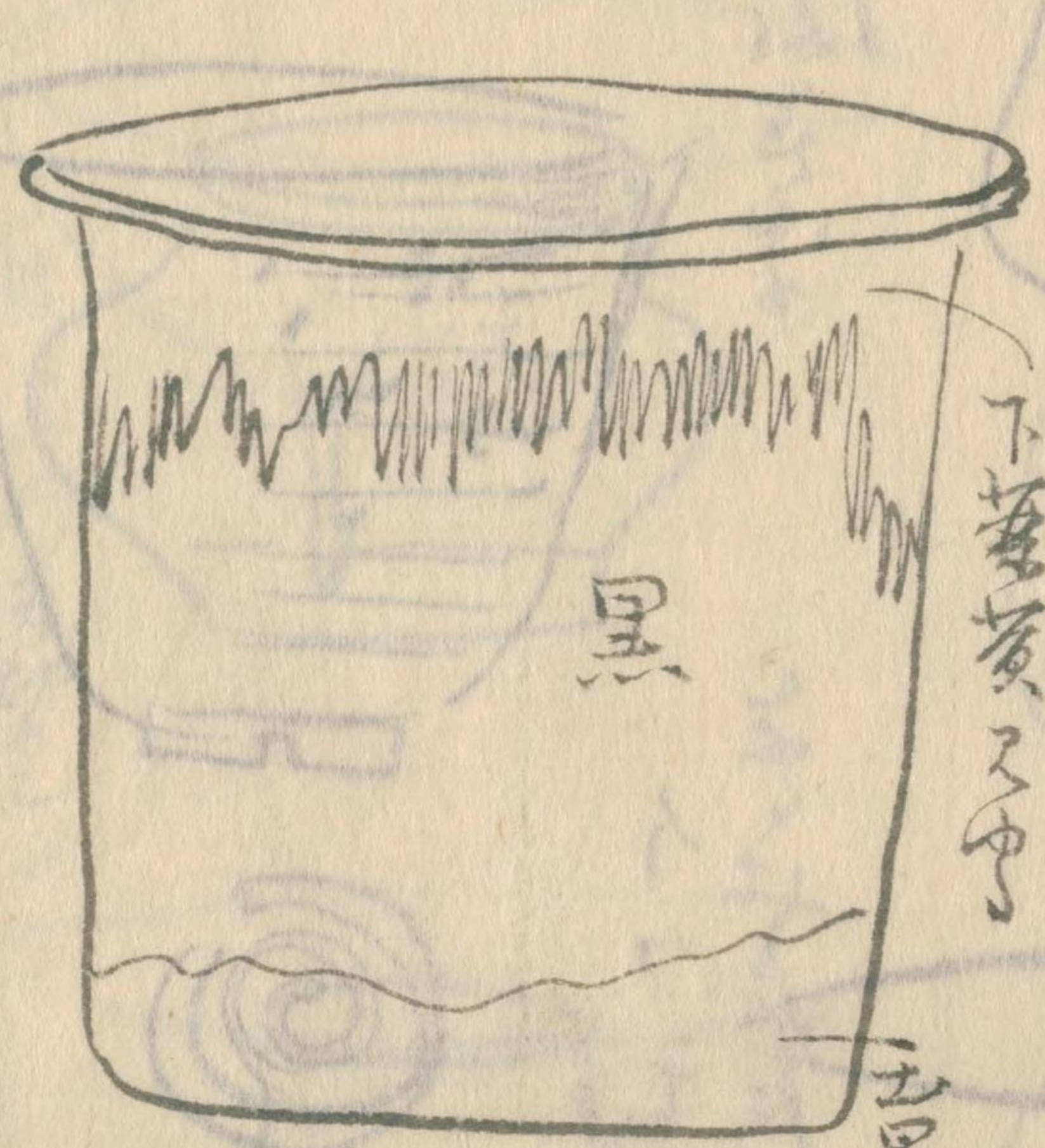


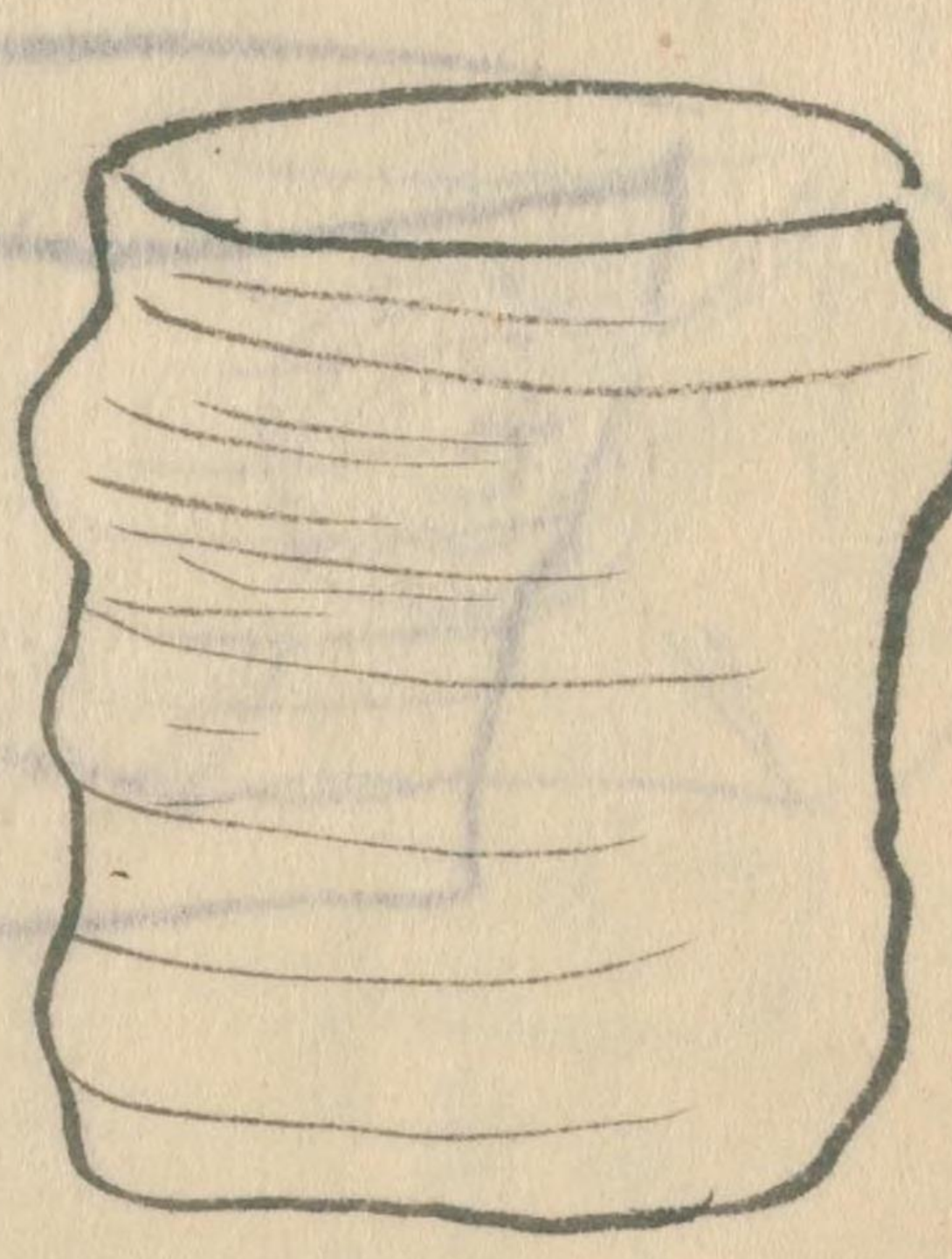
有り

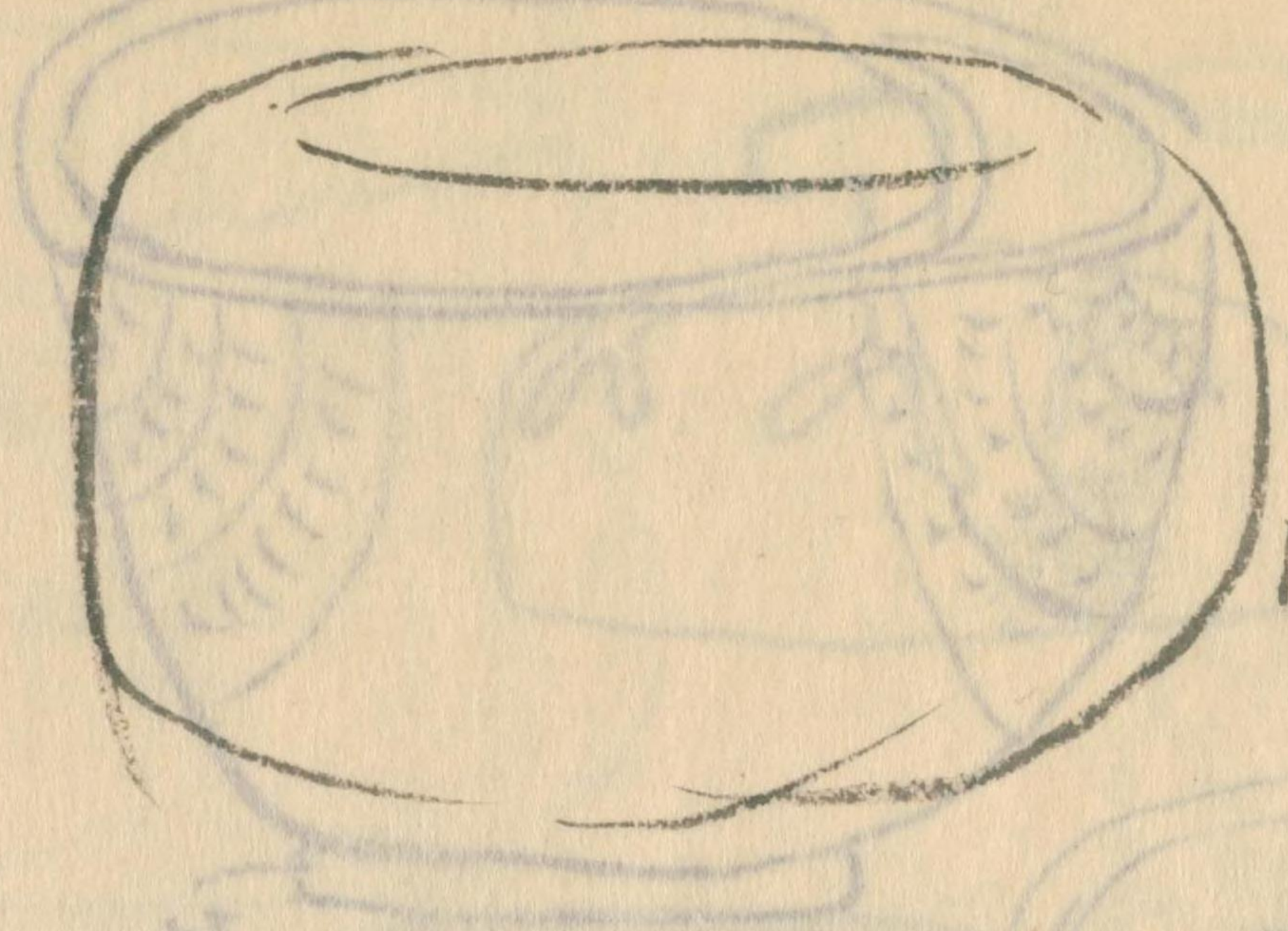


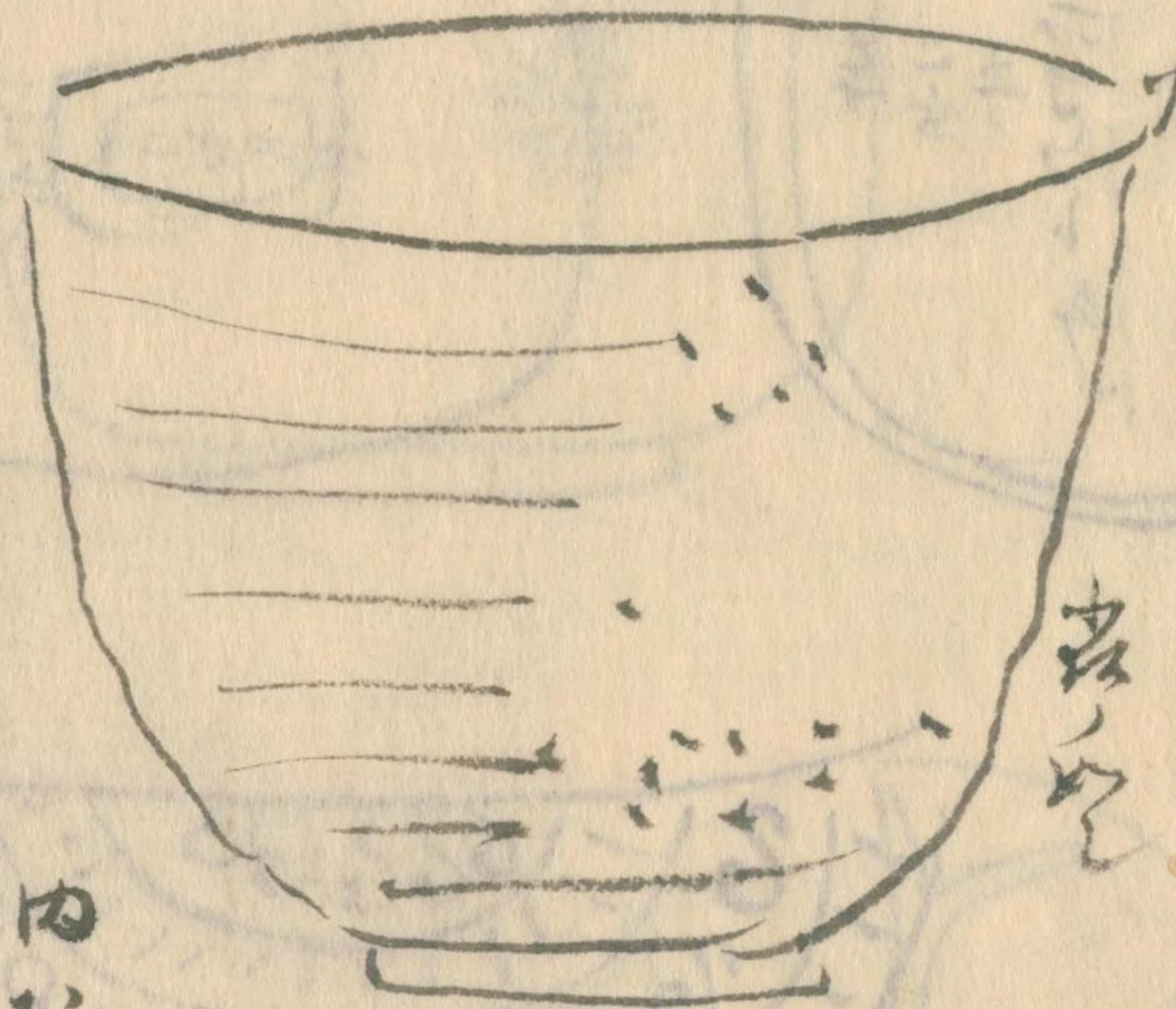
人形手写 唐津



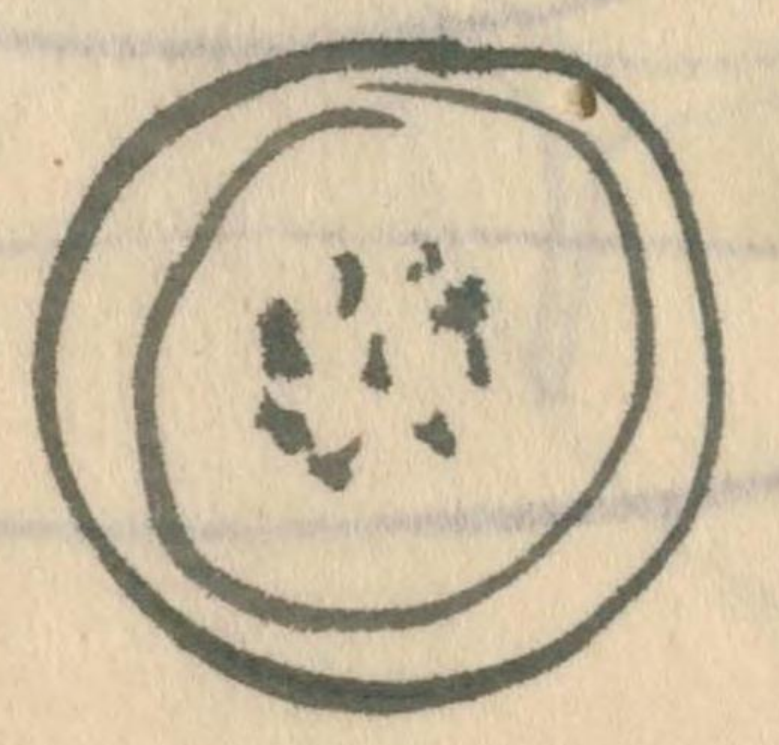

高麗
ハンド
下薬黄ノ中
黒
土黒



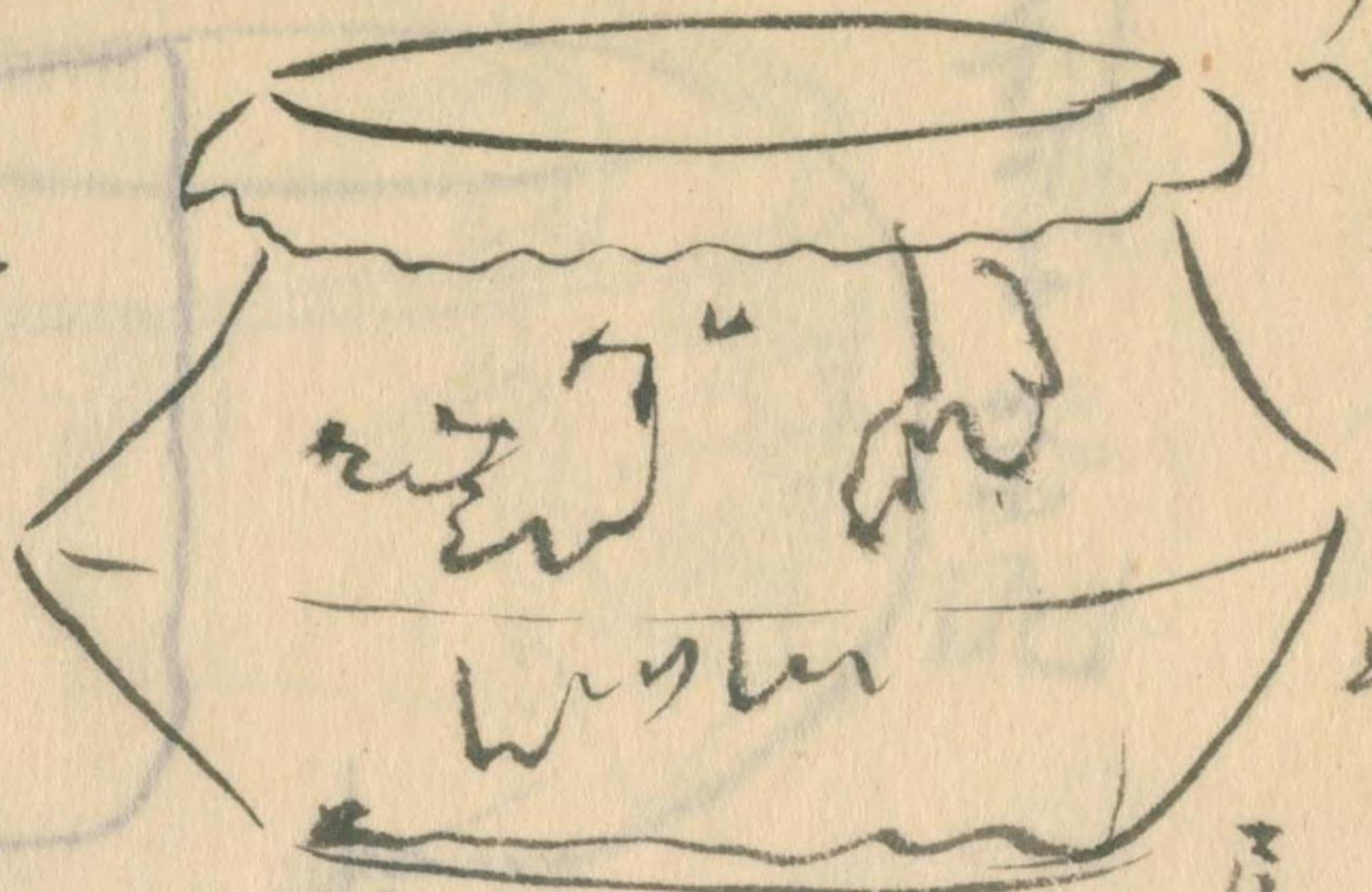



アカノ
上野焼 豊前小倉
土ノ色
[illegible]

上野焼ハ萩
ト薩摩の系統
焼物也



トコナヘ
新物

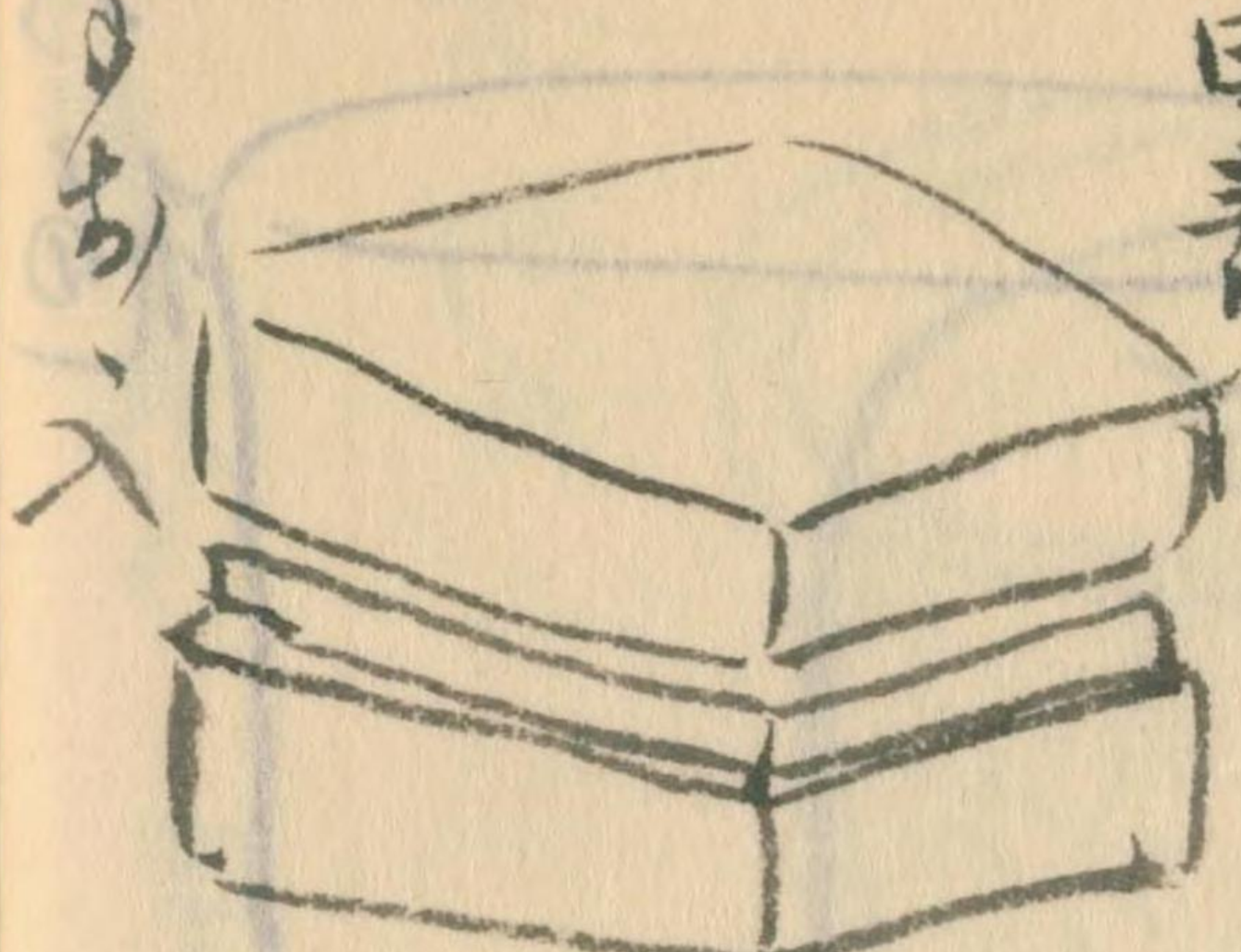


南蛮ノ如し

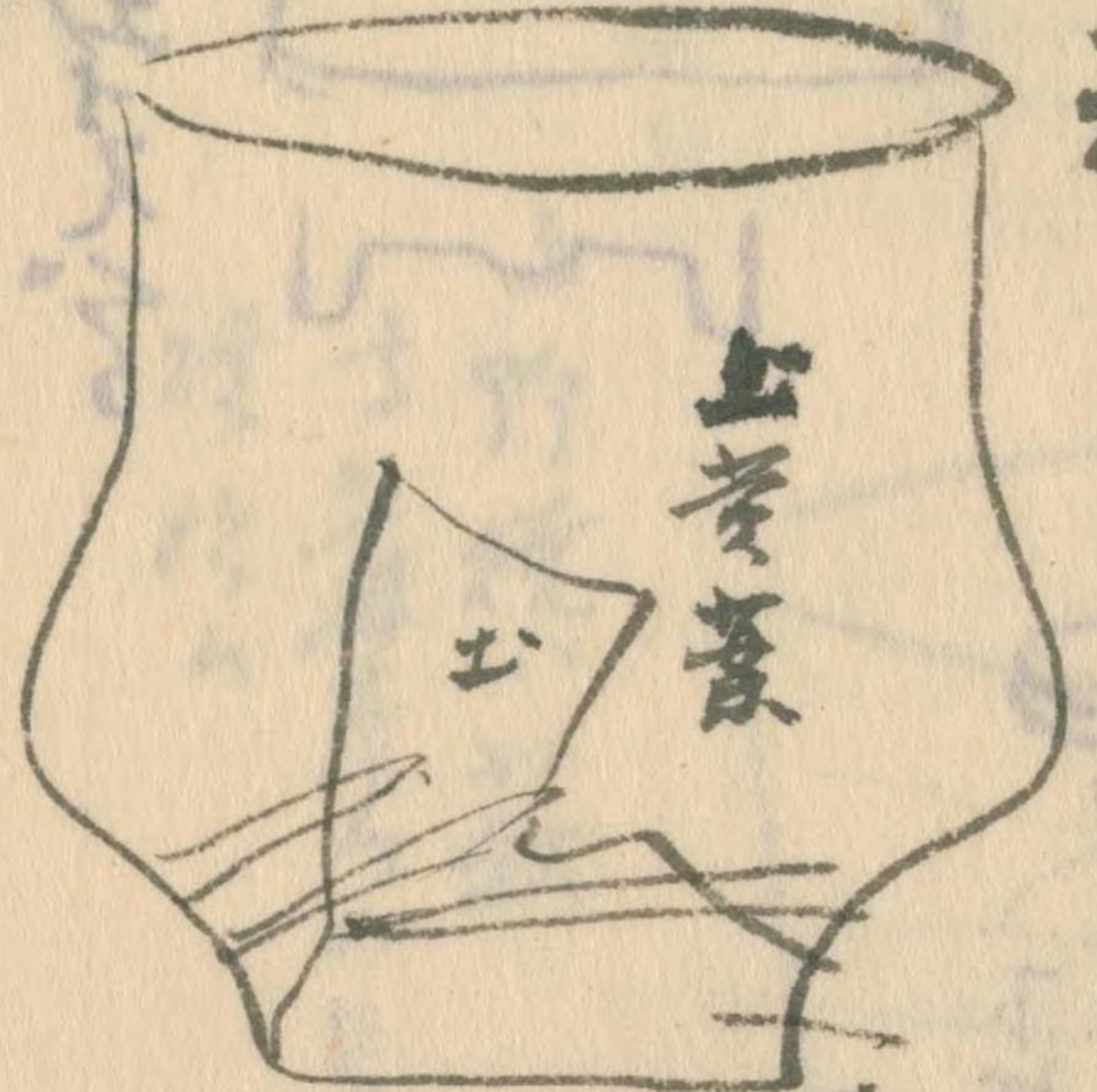
唐津や
三ん

三田青磁

香合入

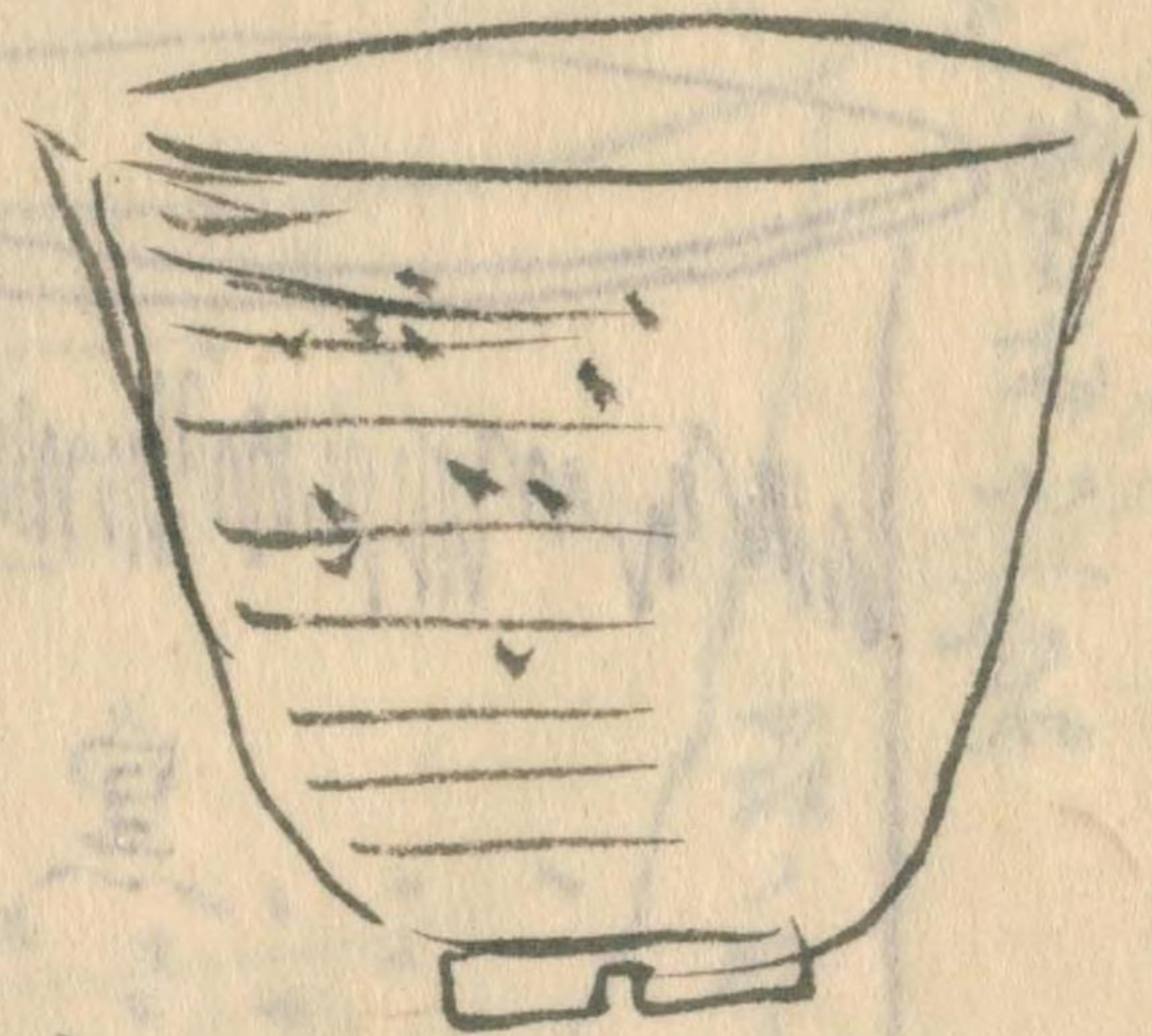


萩

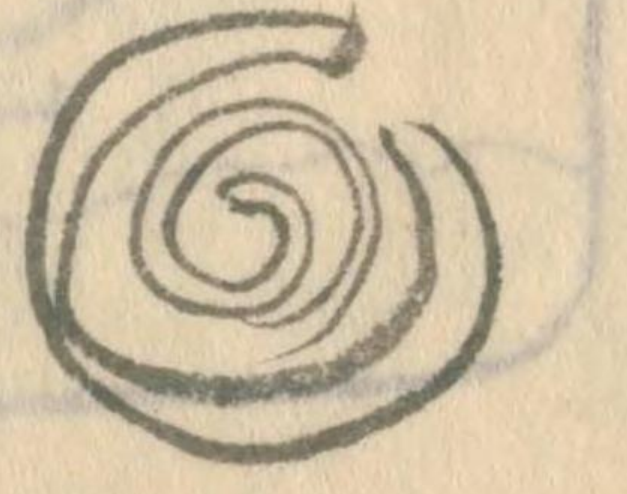


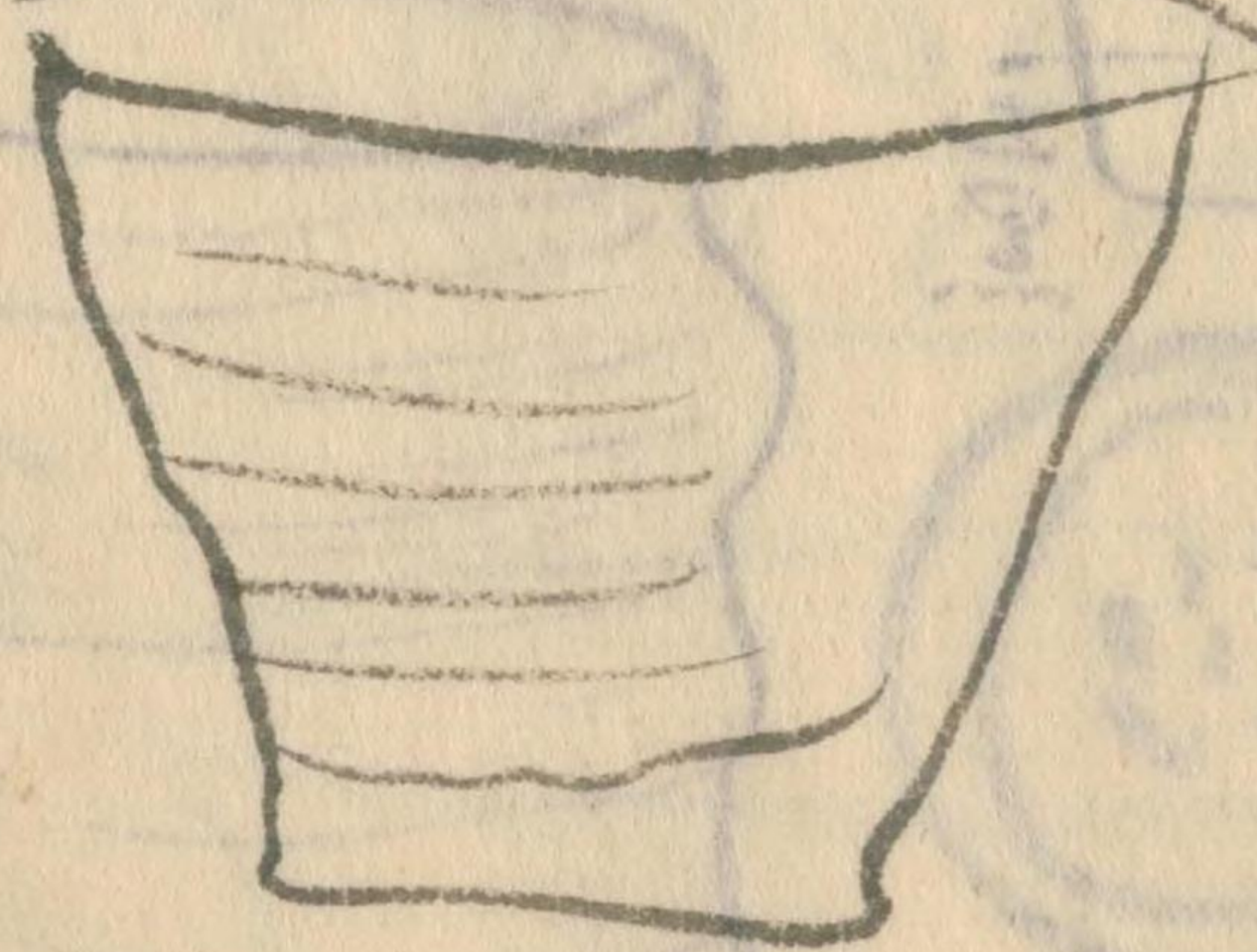
土赤豆入

釘ほりいらほ

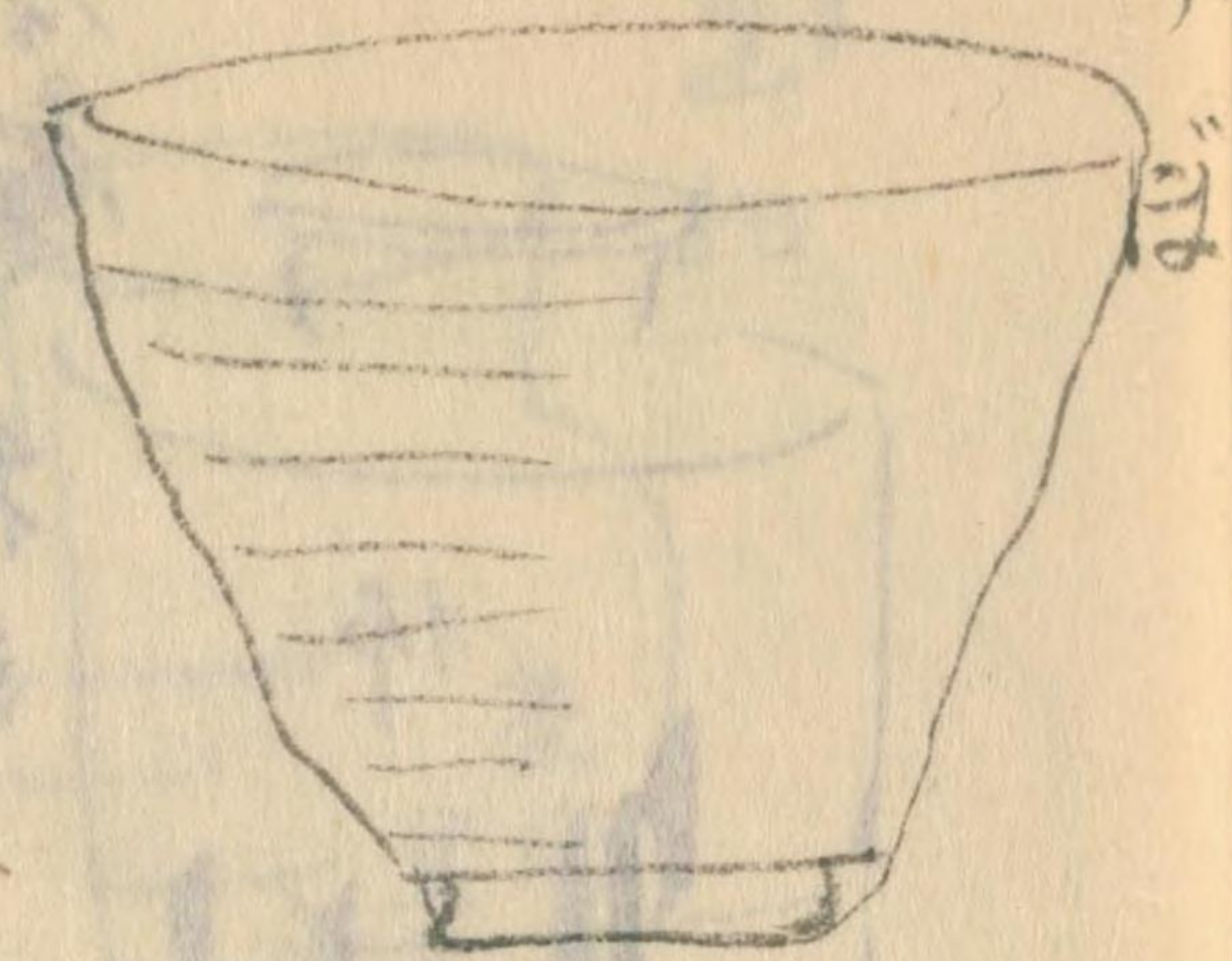


イツモ

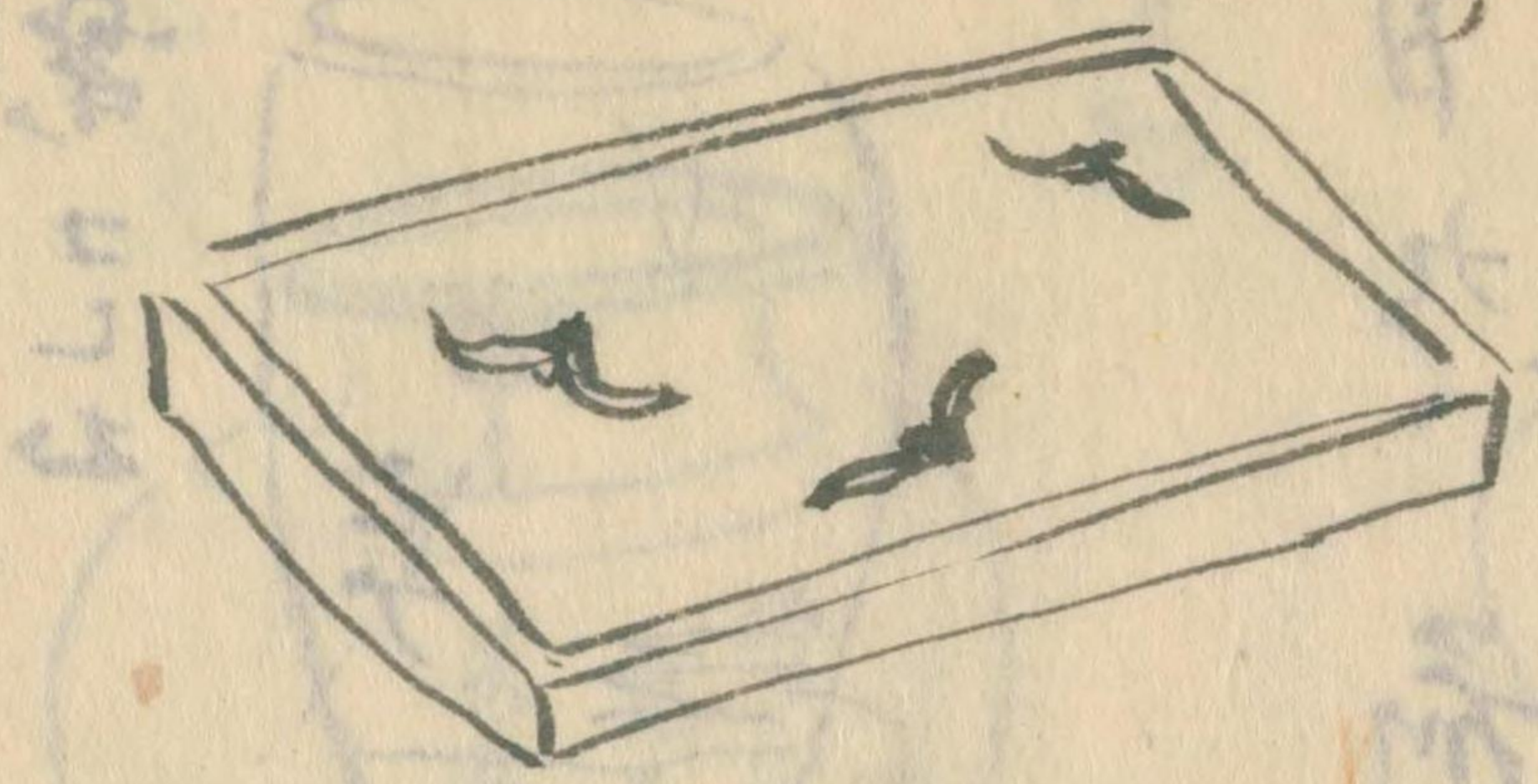




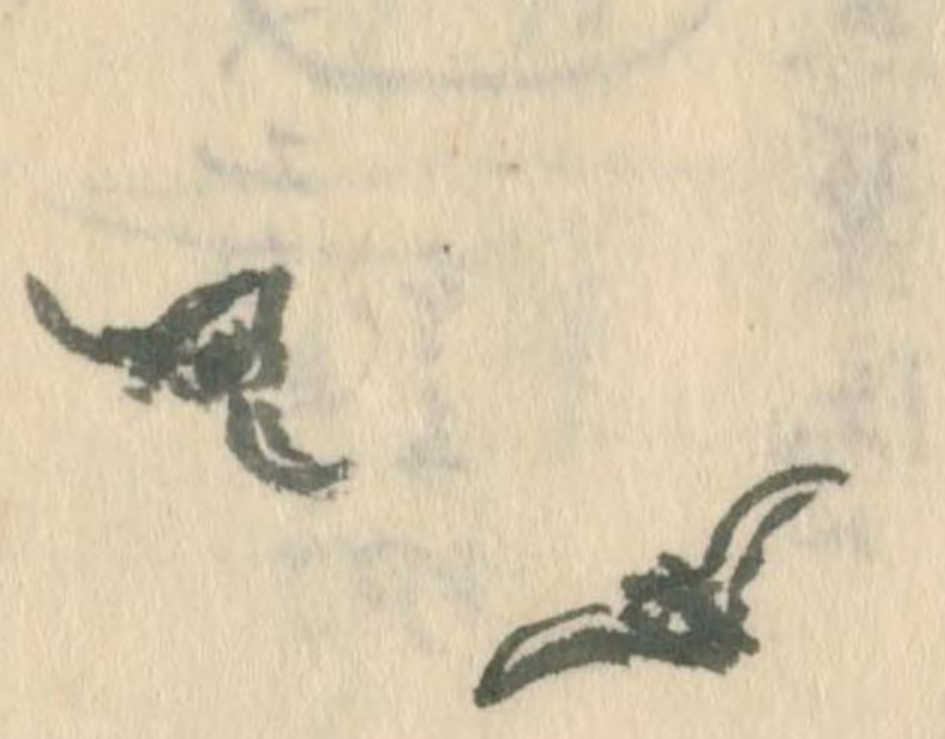
いらぼ



四方

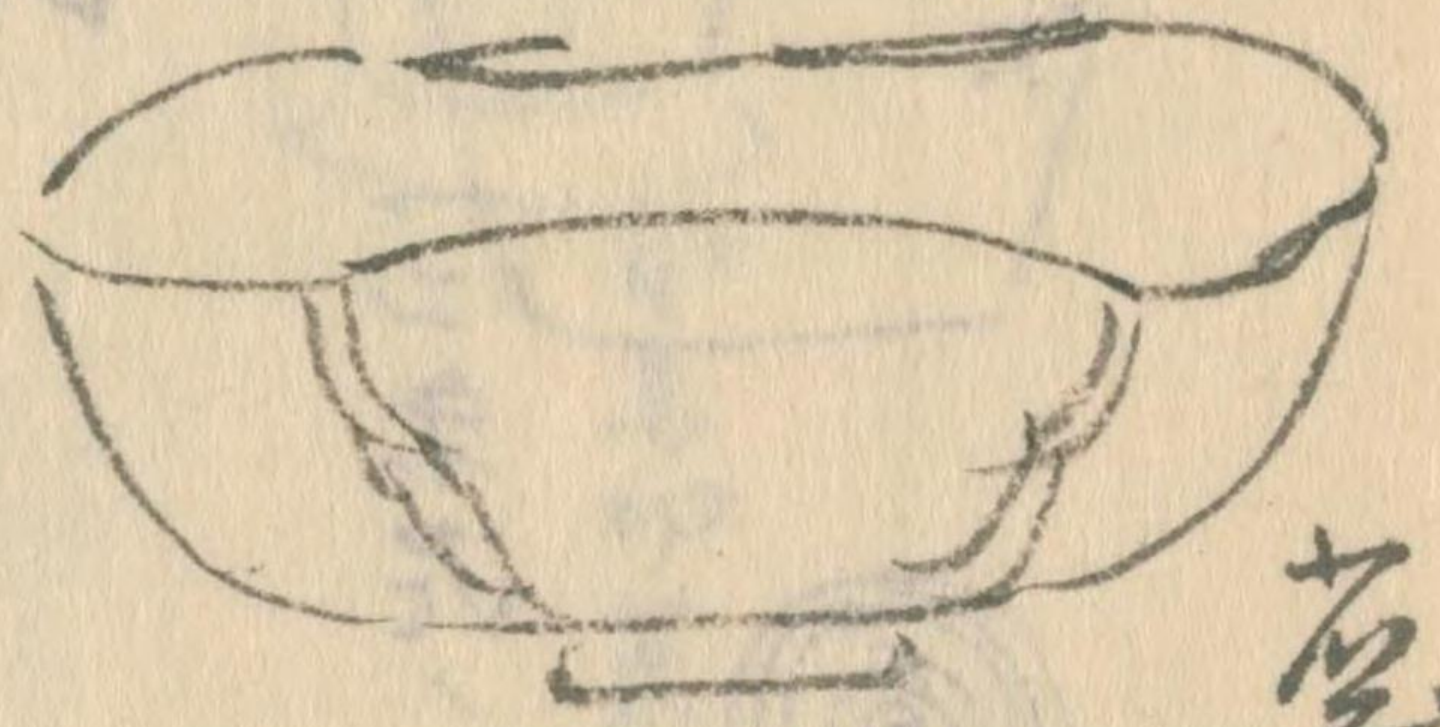


いろ
久光山

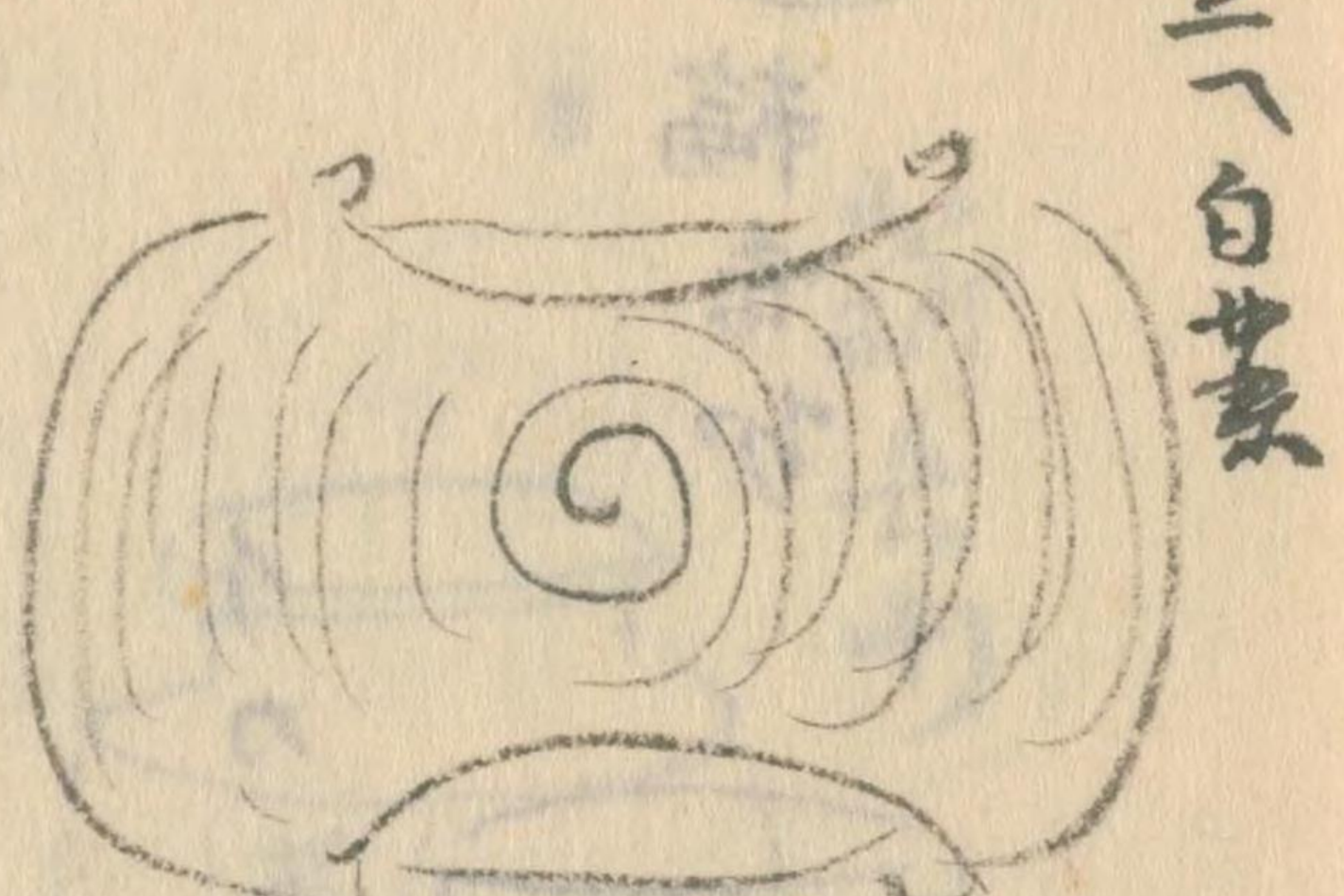


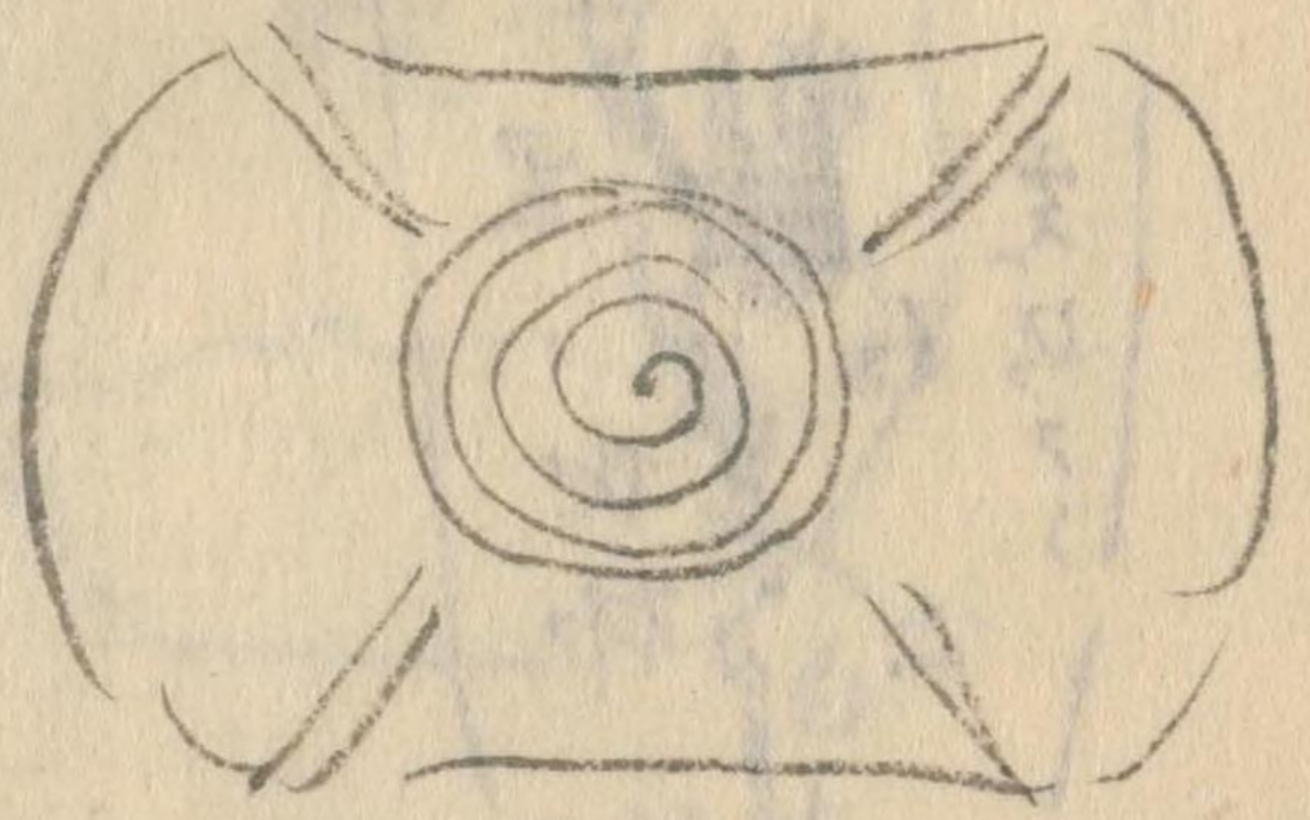
上白

萩

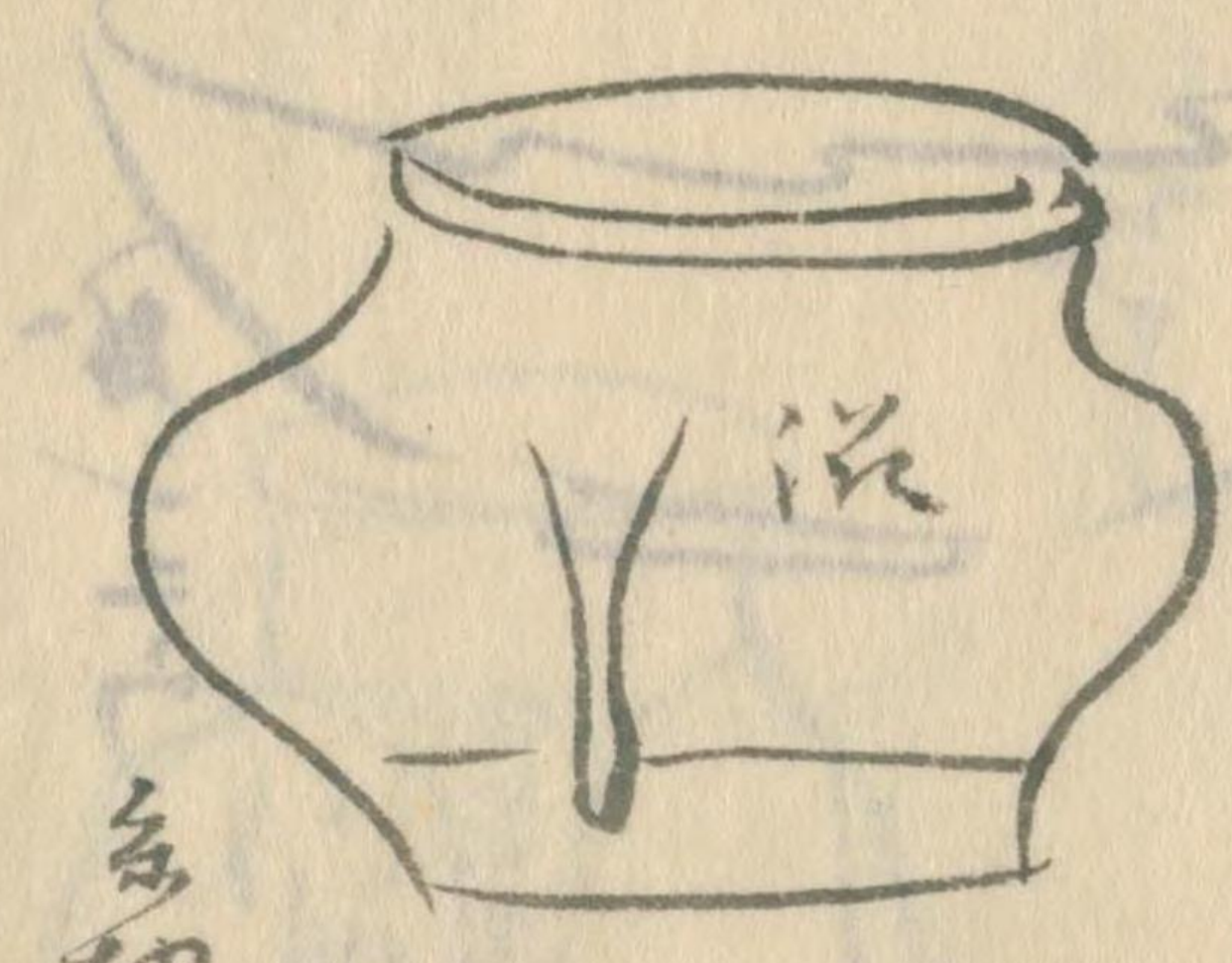


蓋ノ上へ白薬





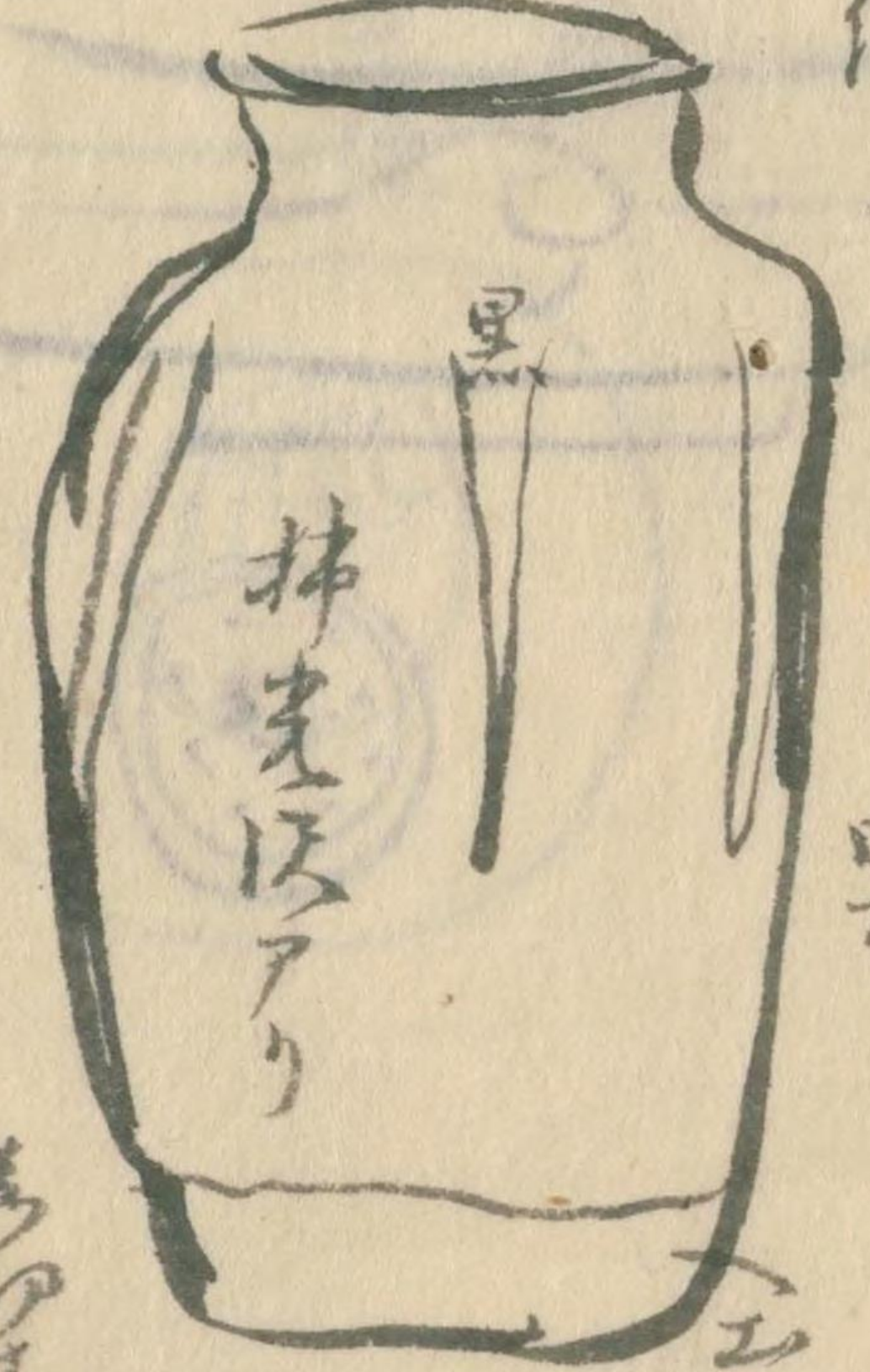
浅黄なり



糸切なし

東ノ織部

ナタレ四耳

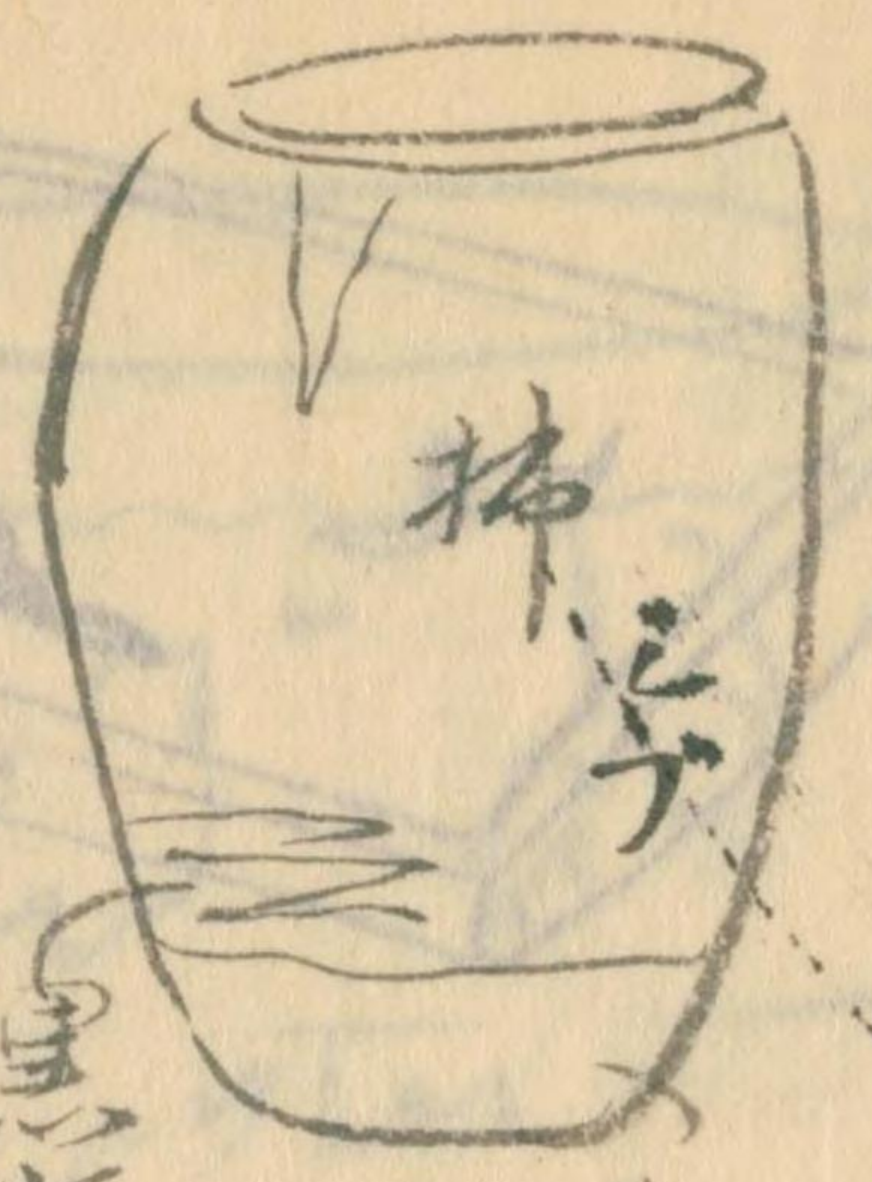


糸切なし

上黒

ガラス使用

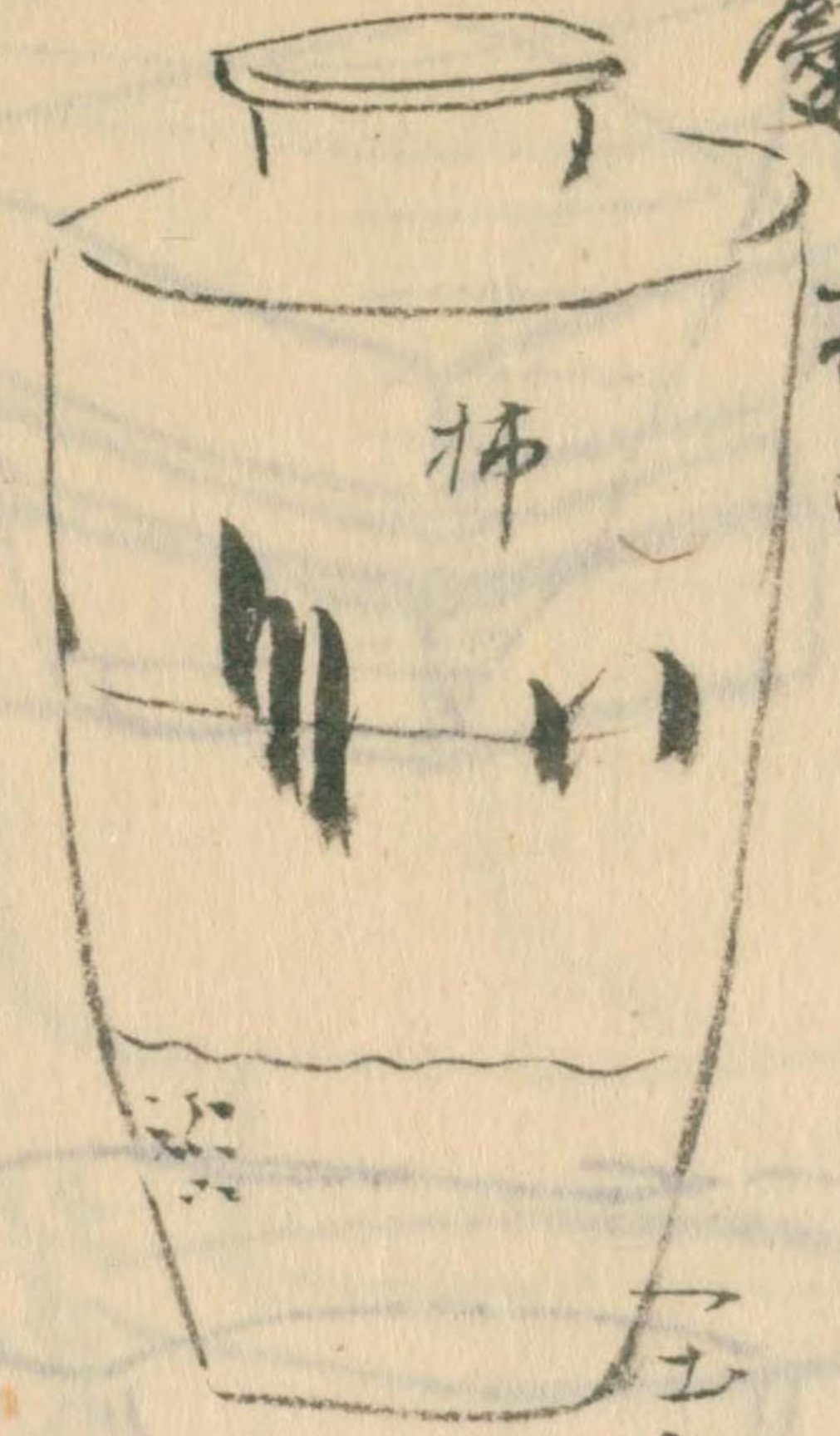
信楽コヒル



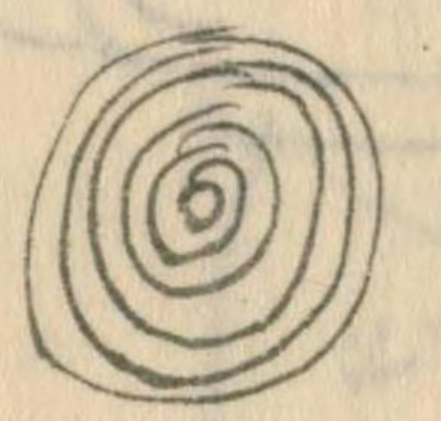
黒薬流レ

土白 糸切

後藤慶 四月九日 揚手 前田氏

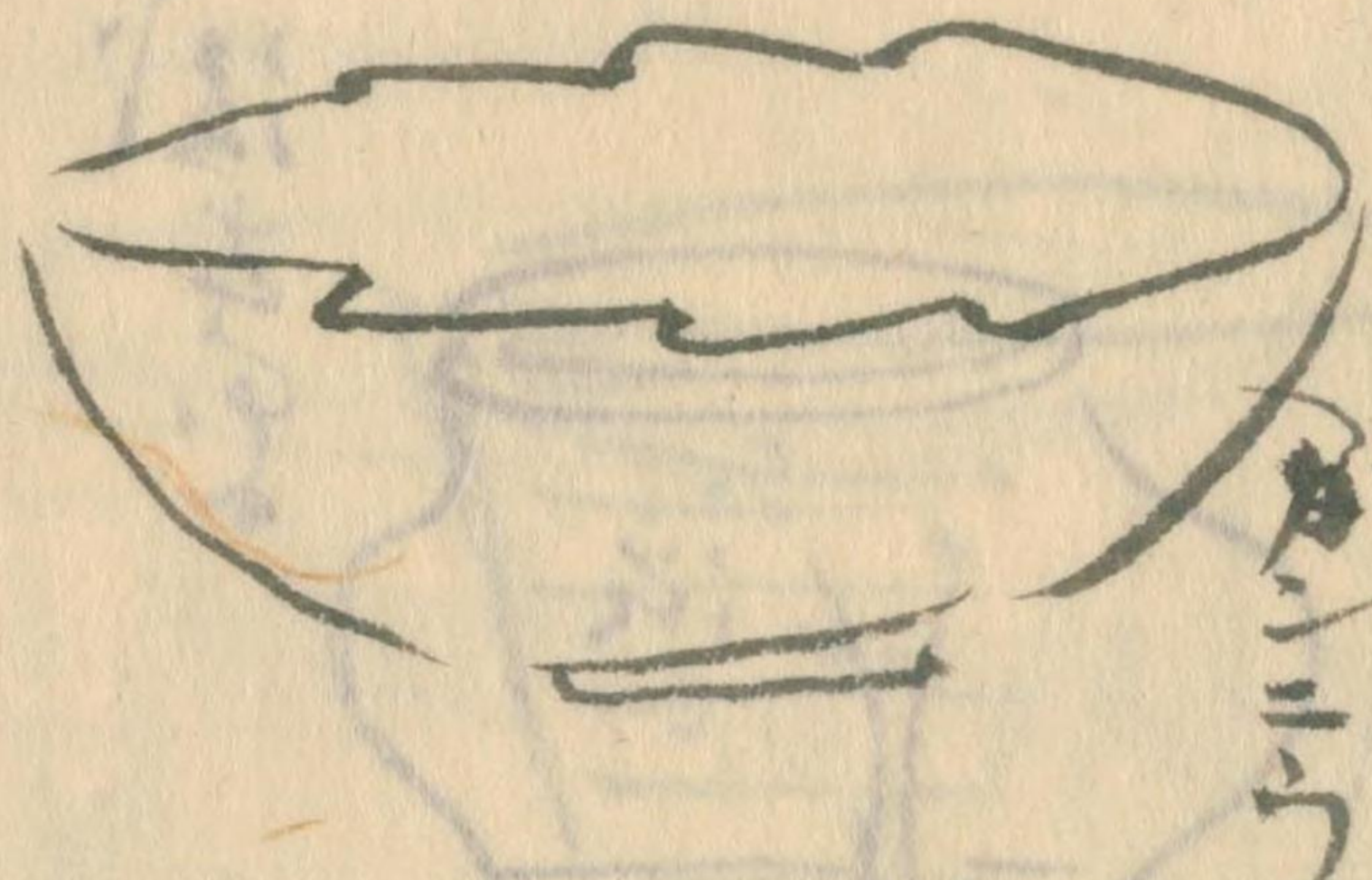


土朱泥ノ如し



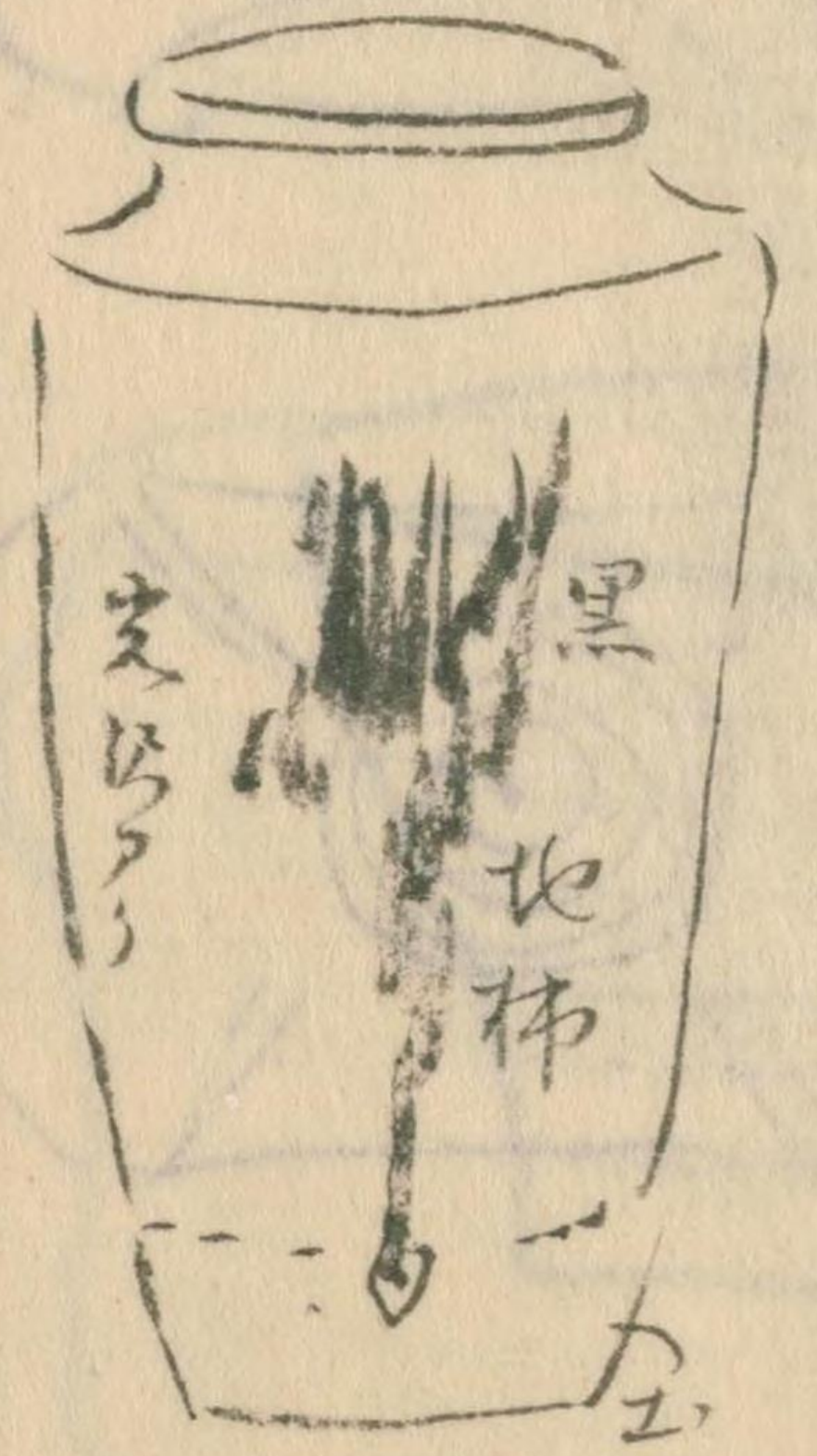
輪糸切

ヒノ

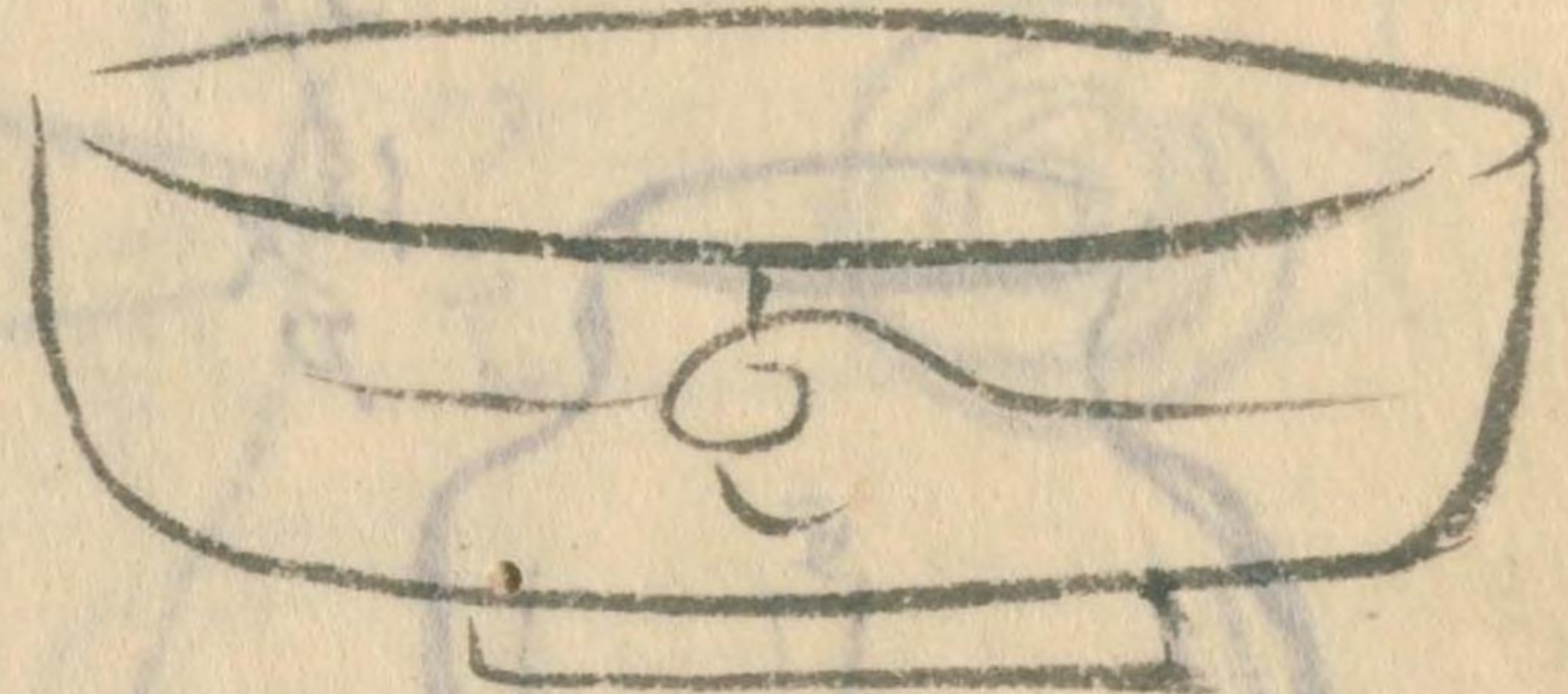


カンニウ

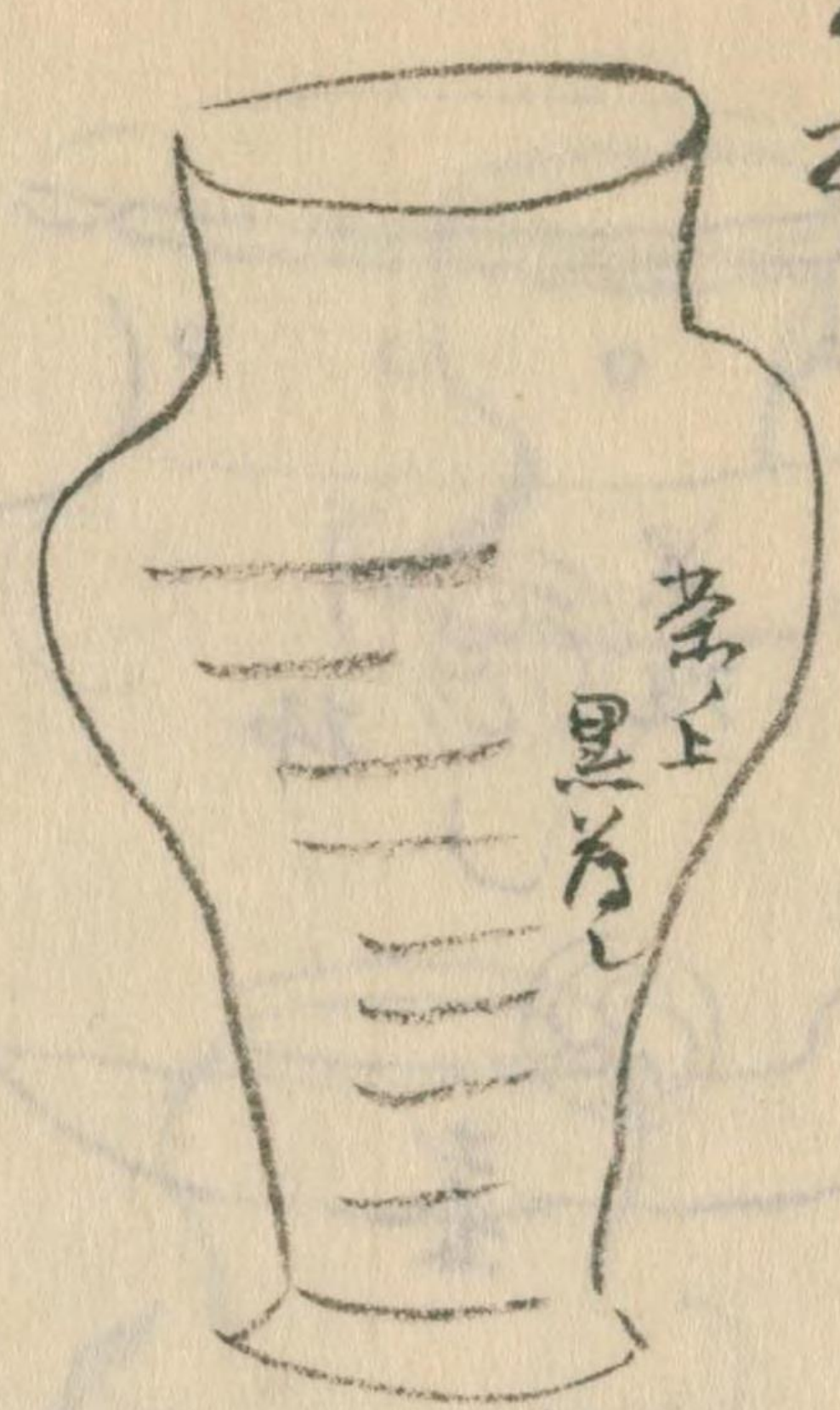
イカ



土サンクリ 赤ミテアリ 糸切

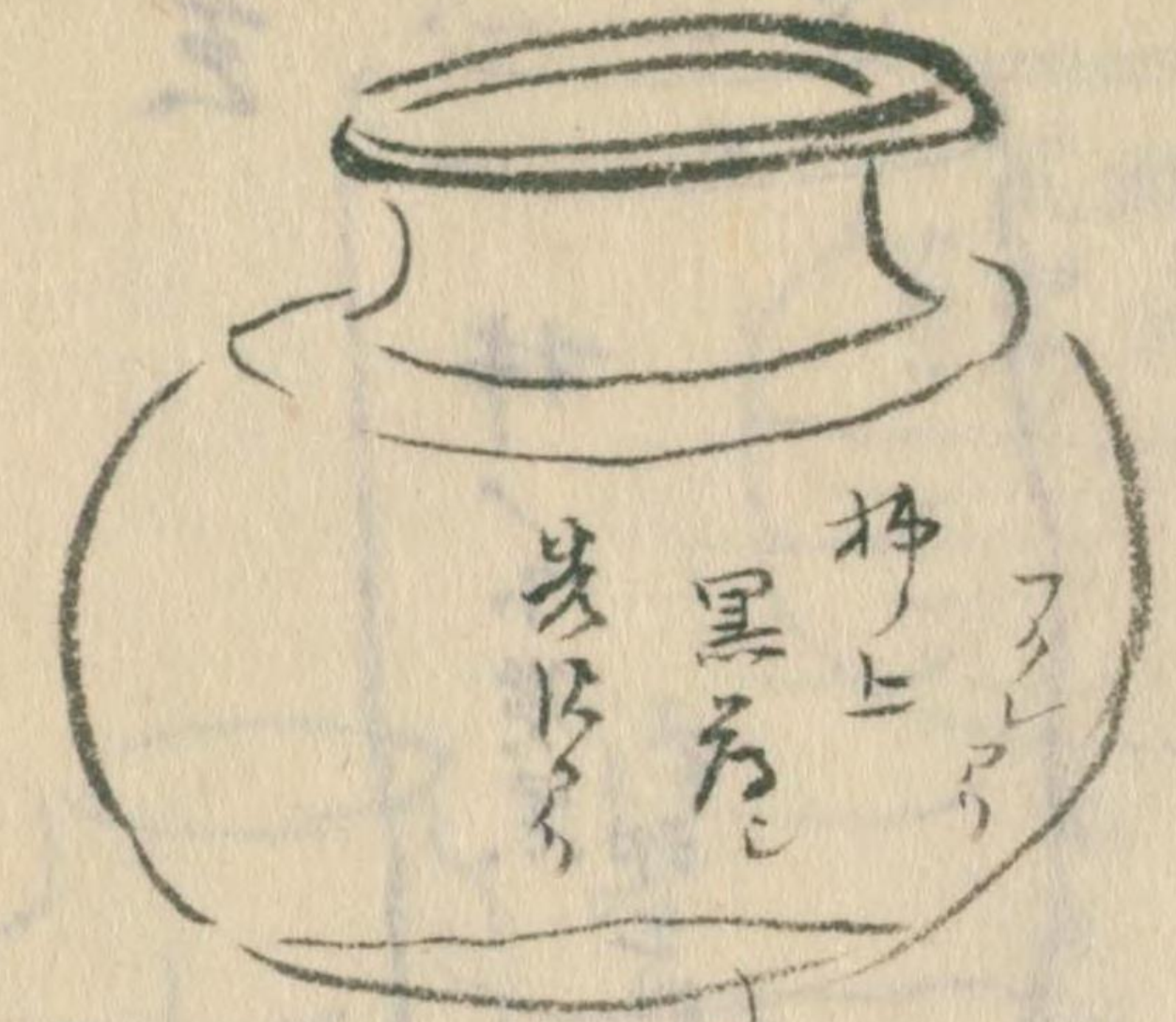


釘ね



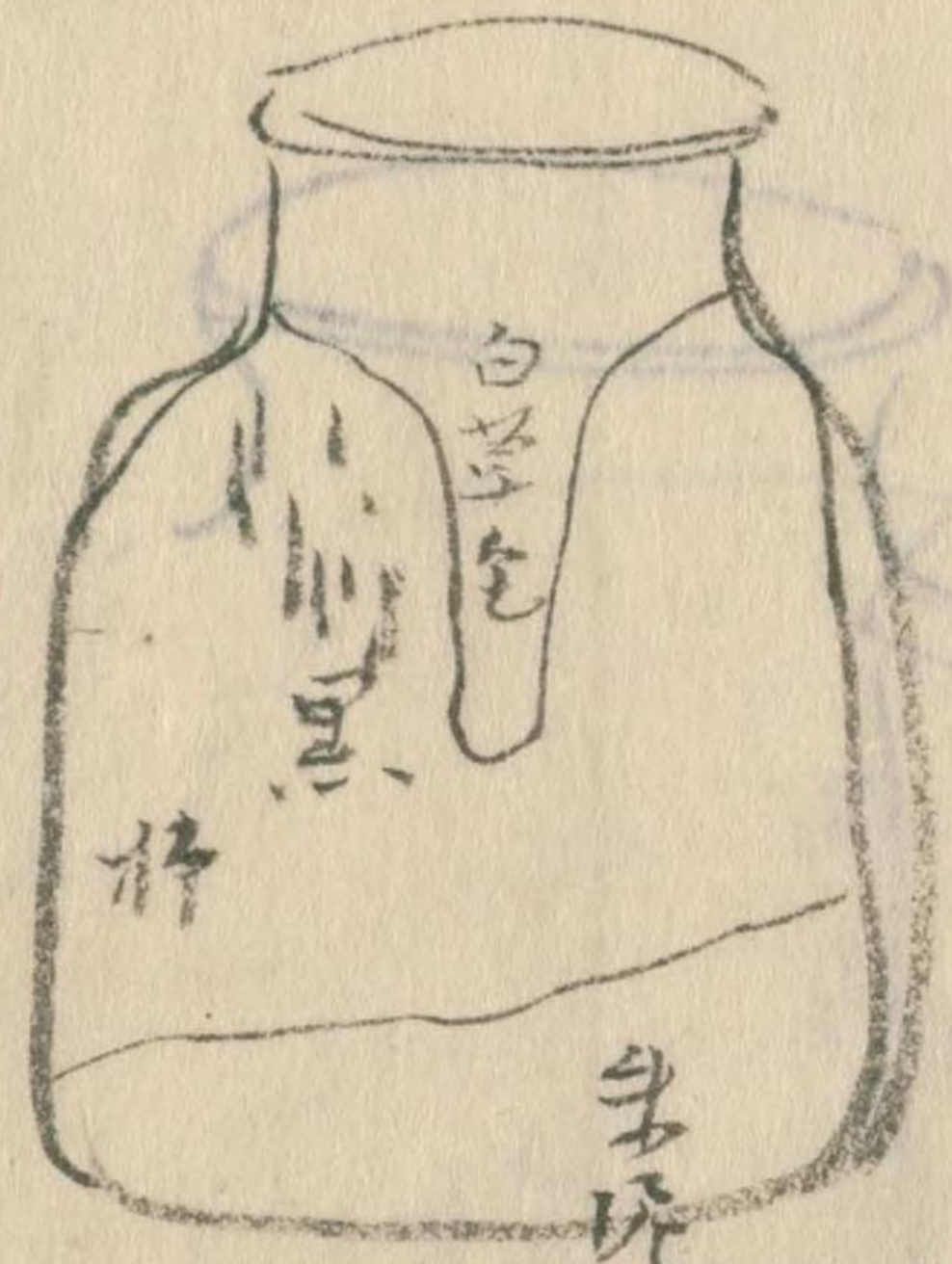
本糸切薄し

廣ね

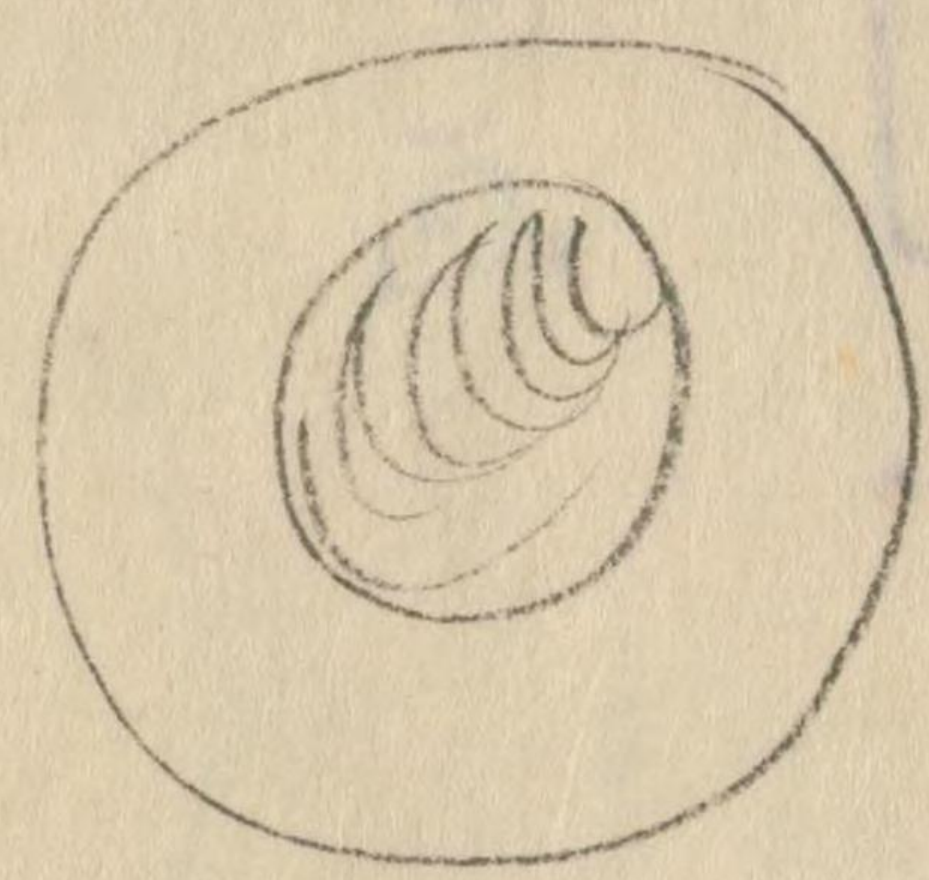

フレアリ
柿上 黒落し
先ニアリ

土 糸切也し

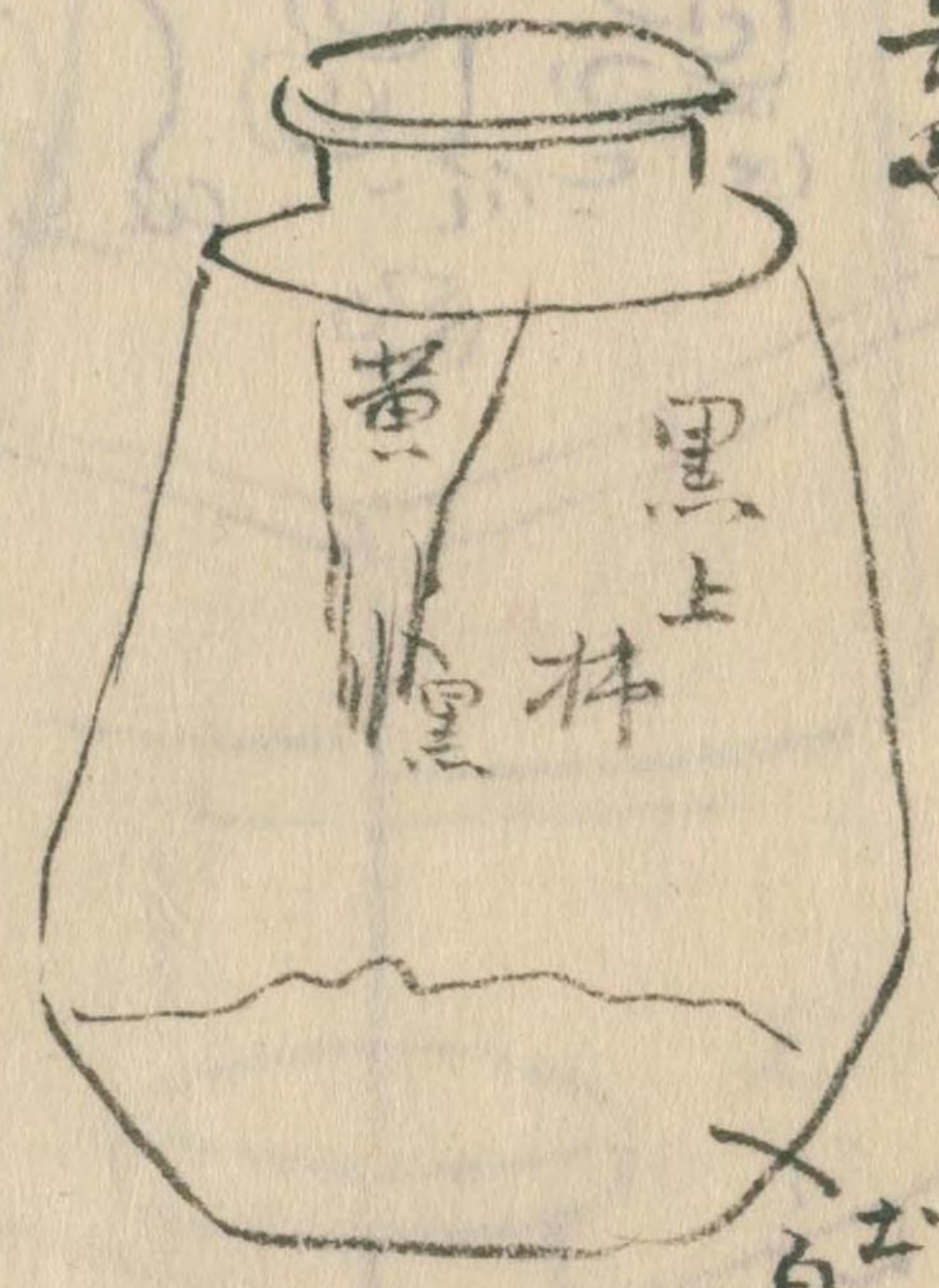
ぜゞ



土焼

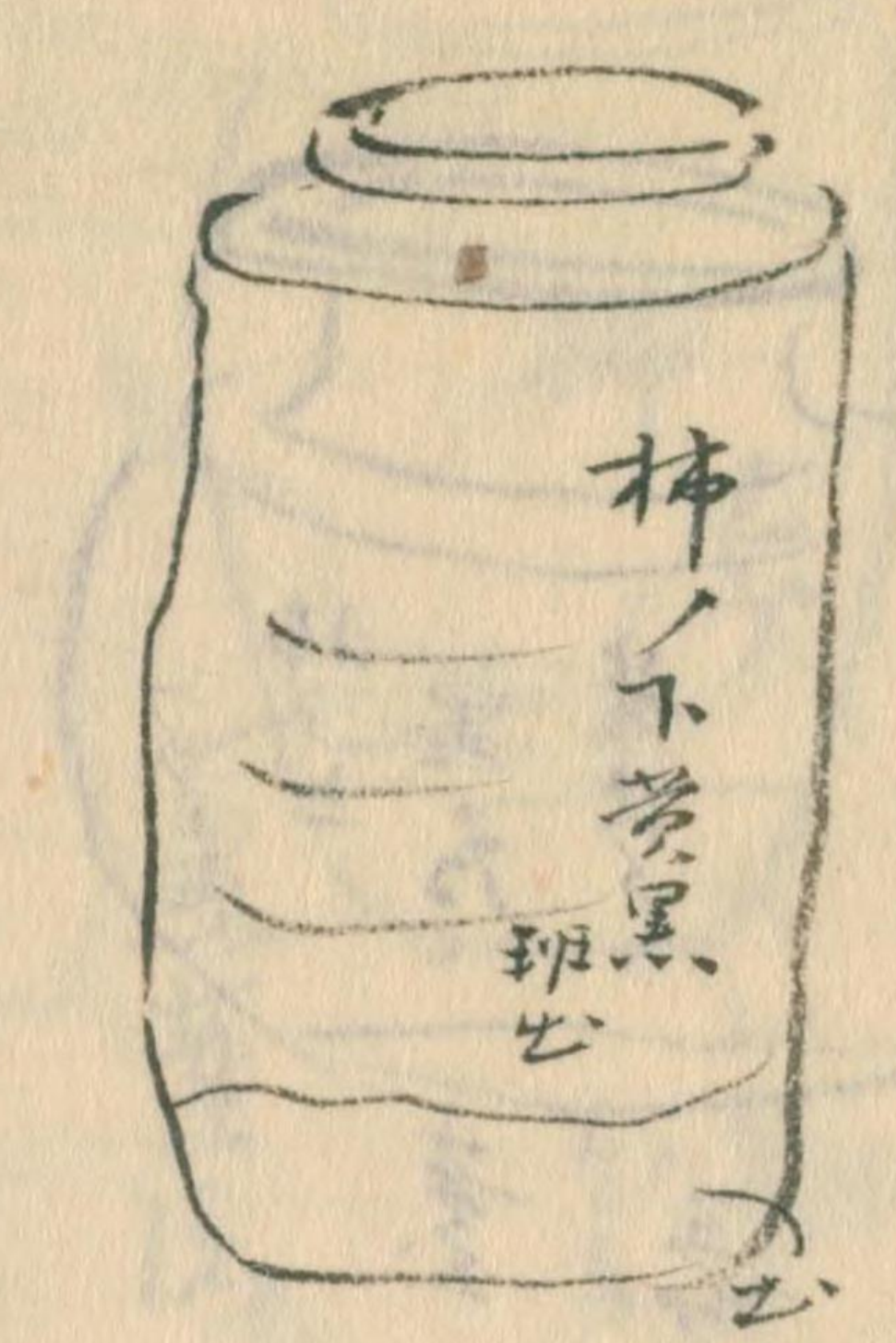


新兵衛



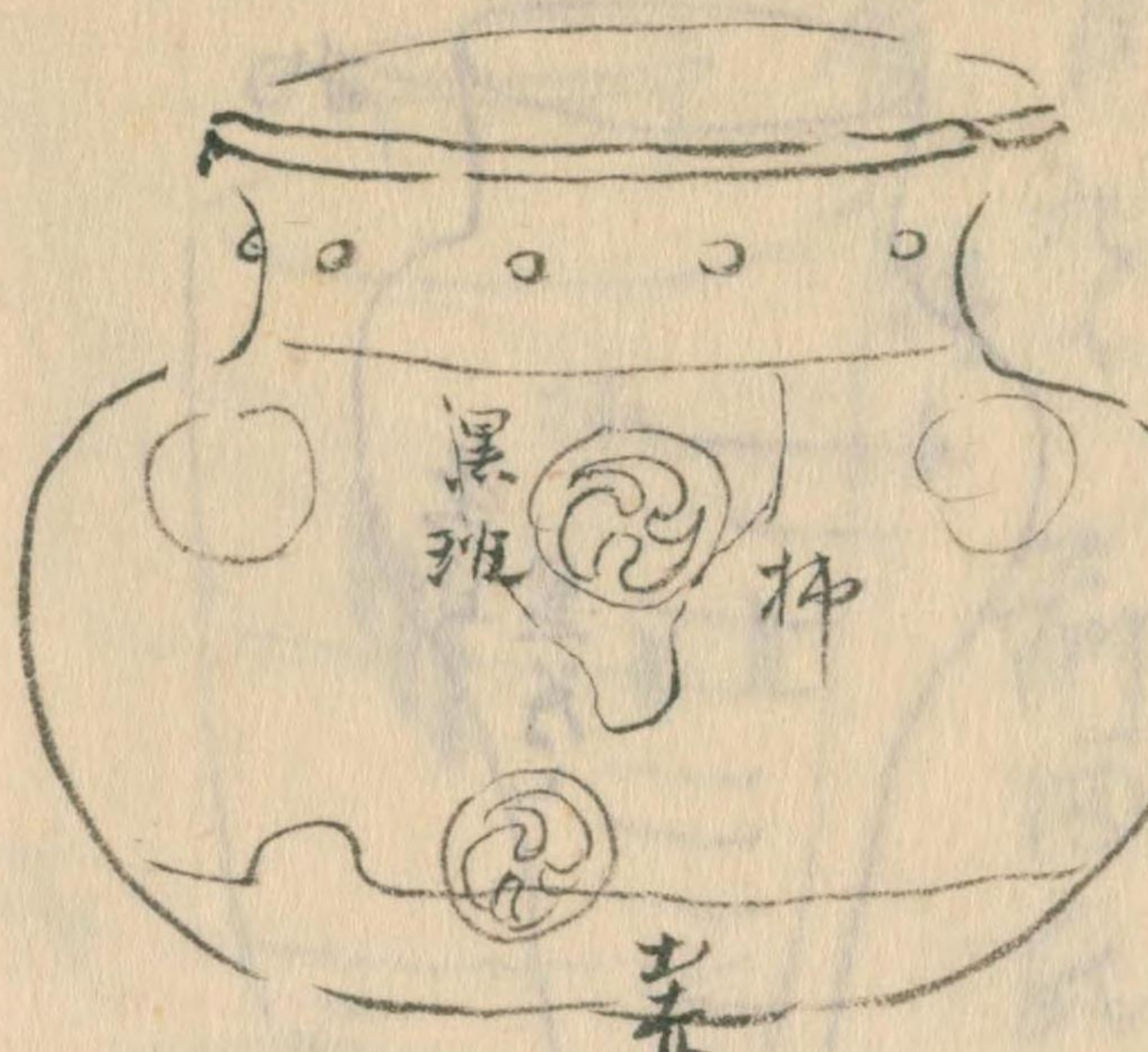
土白 火色アリ 信楽如し

正喜

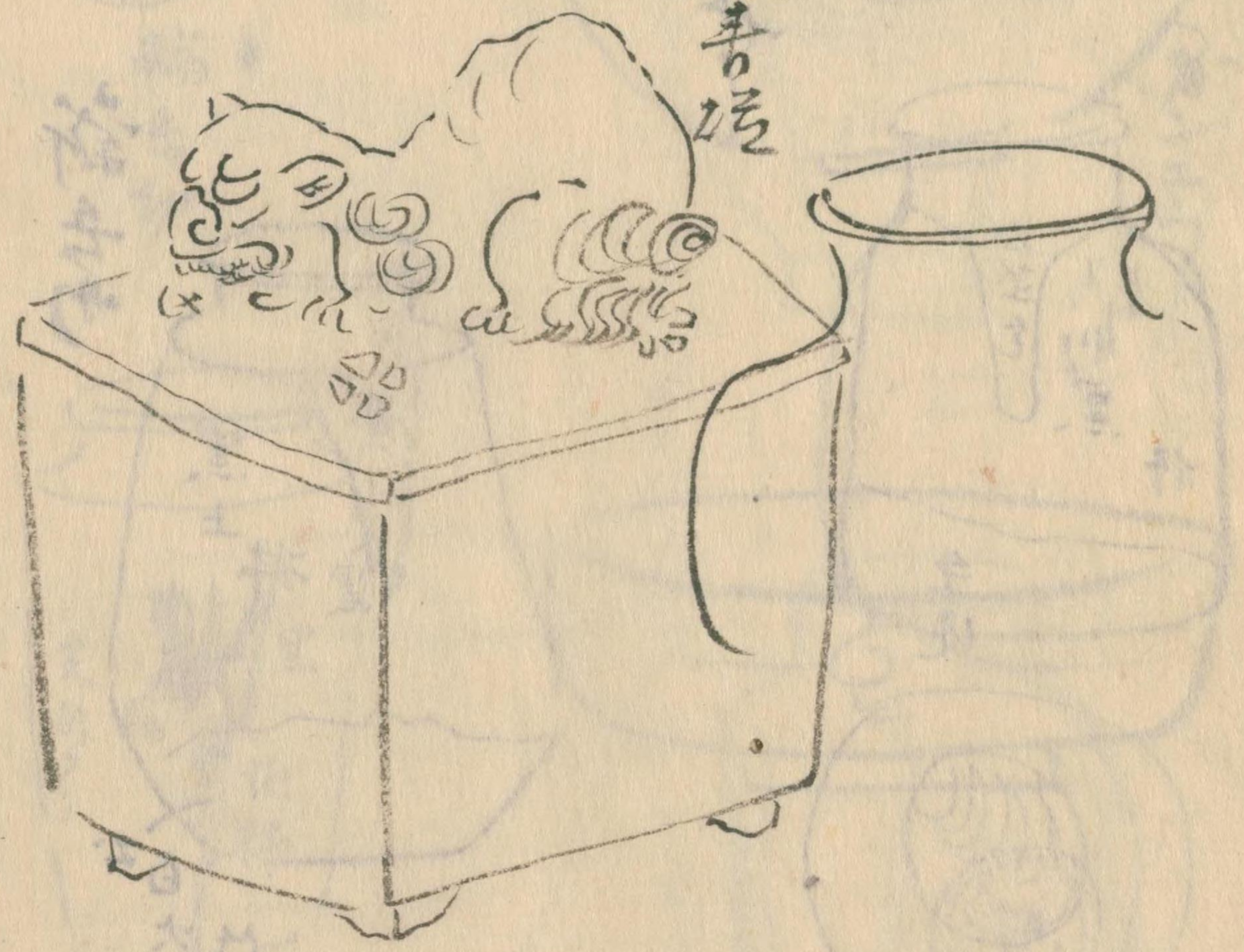


上ヘ泥ヲ塗タル如シ

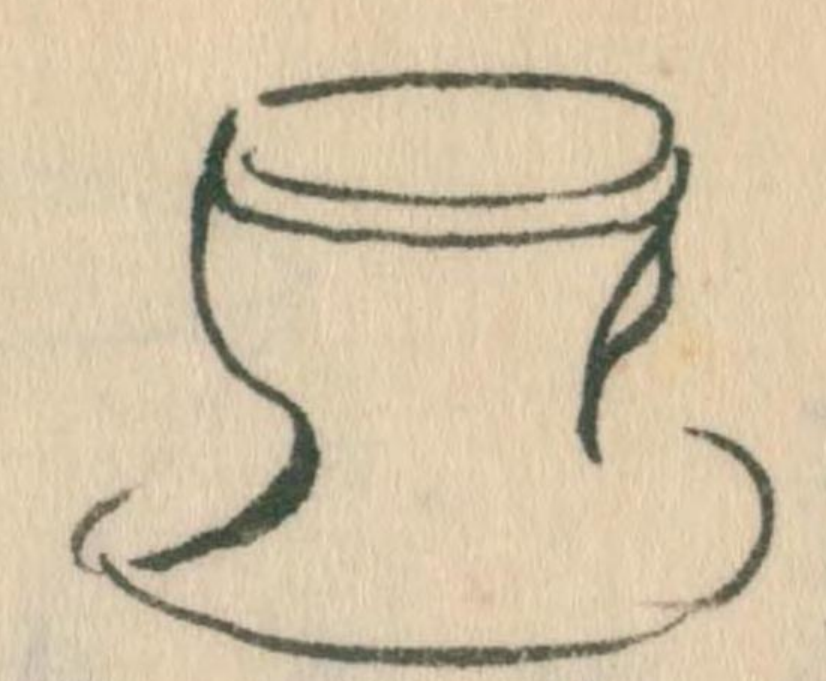
志ゝ手

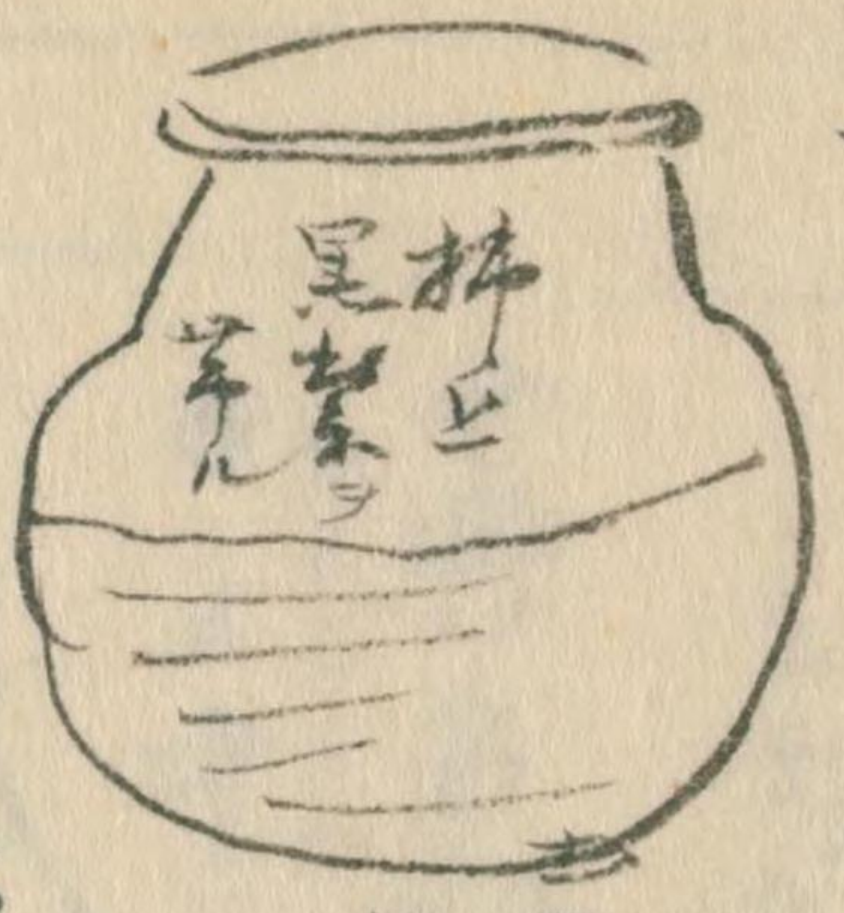


雲鶴香炉

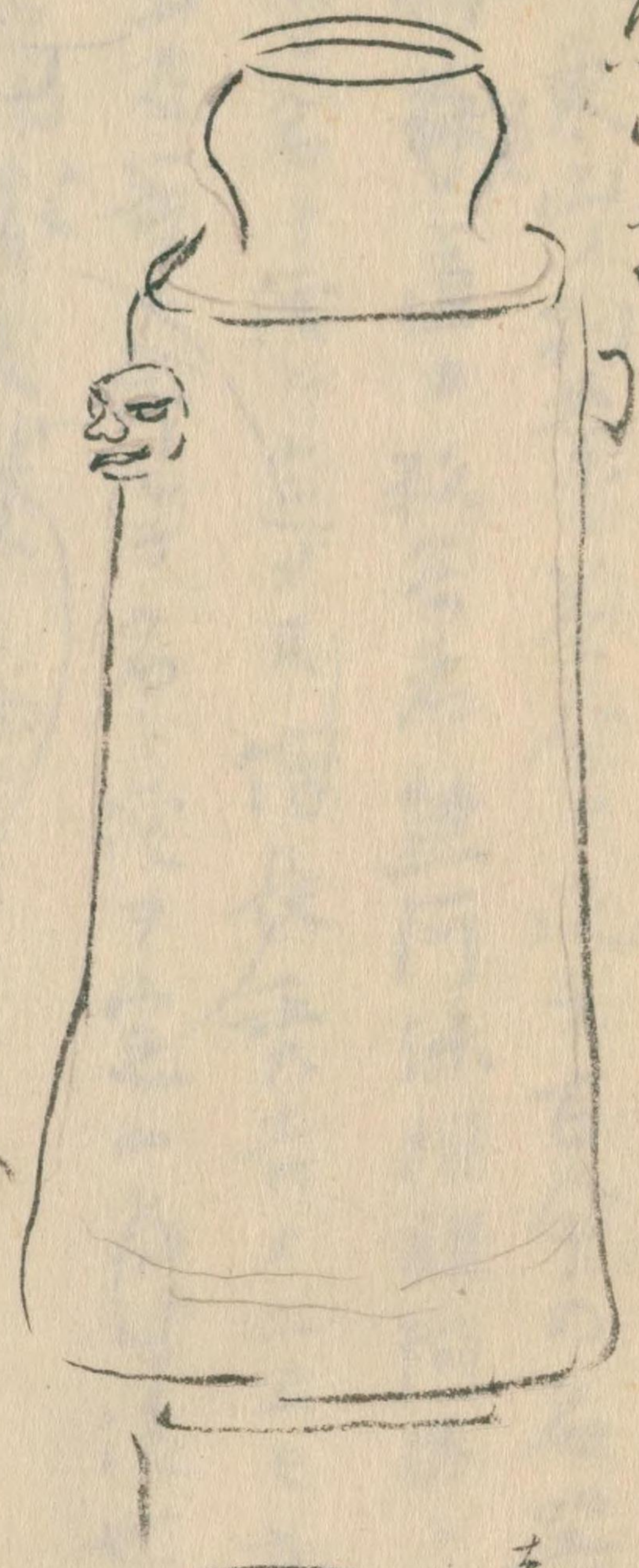


フロセト

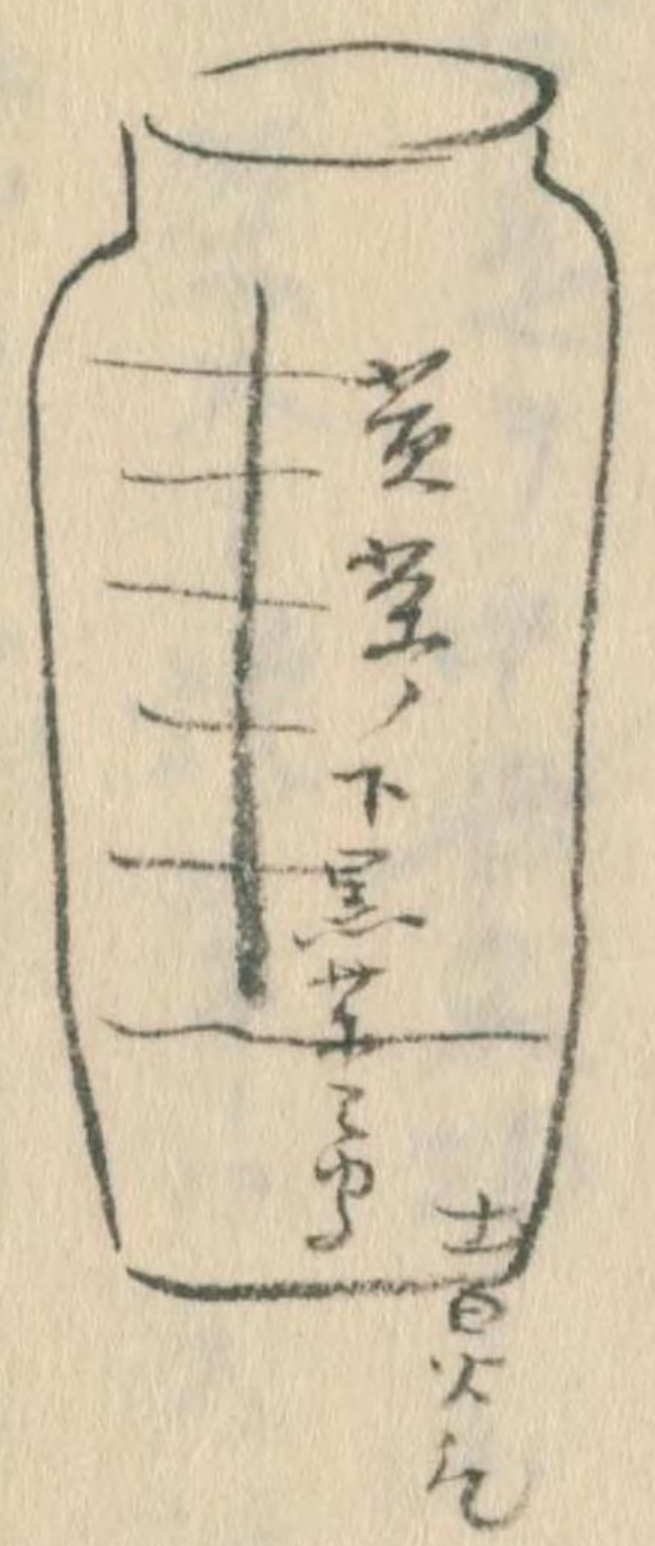


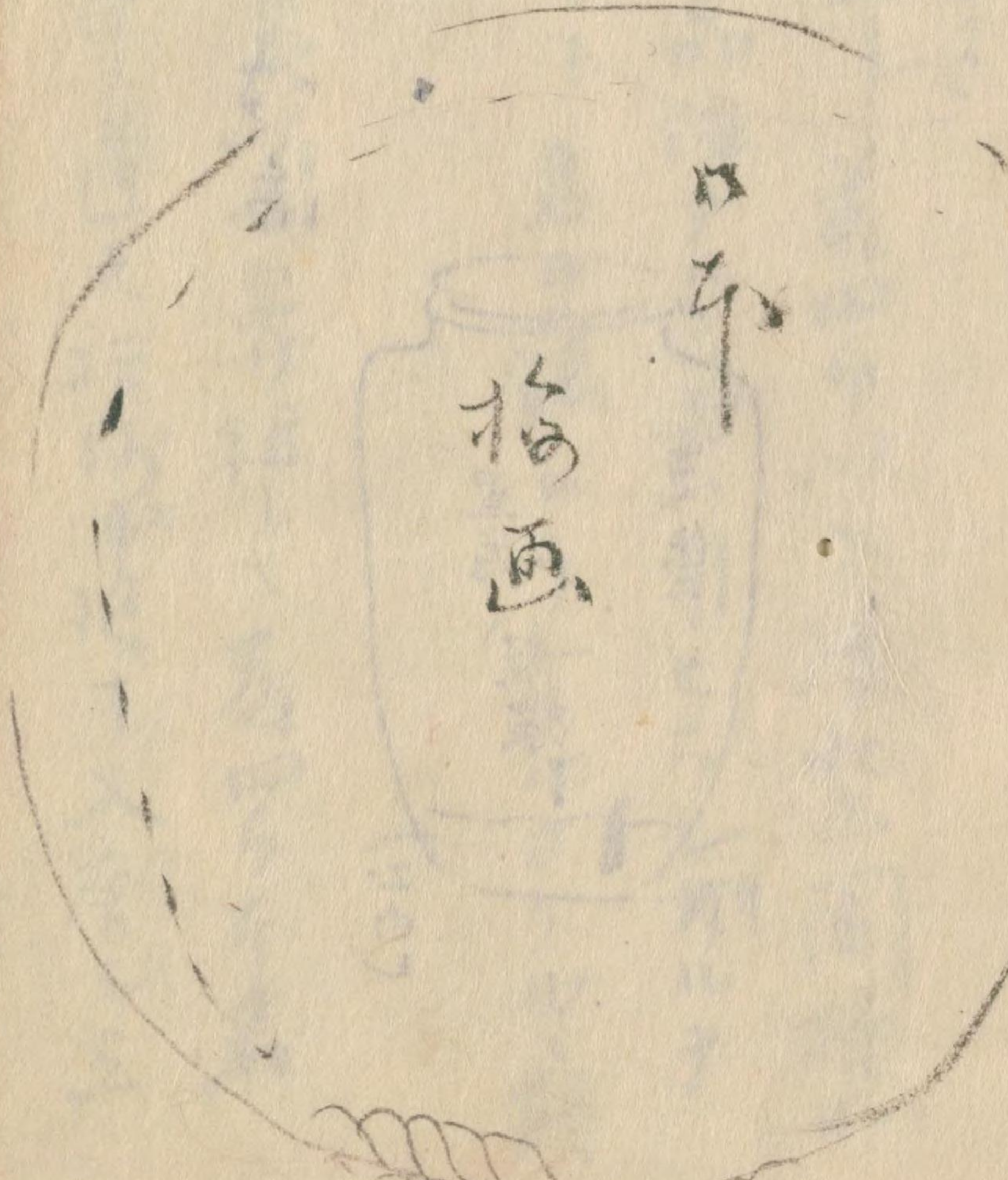

柿上
黒紫ヲ
兼ル
土黒
本白釉

能川花入

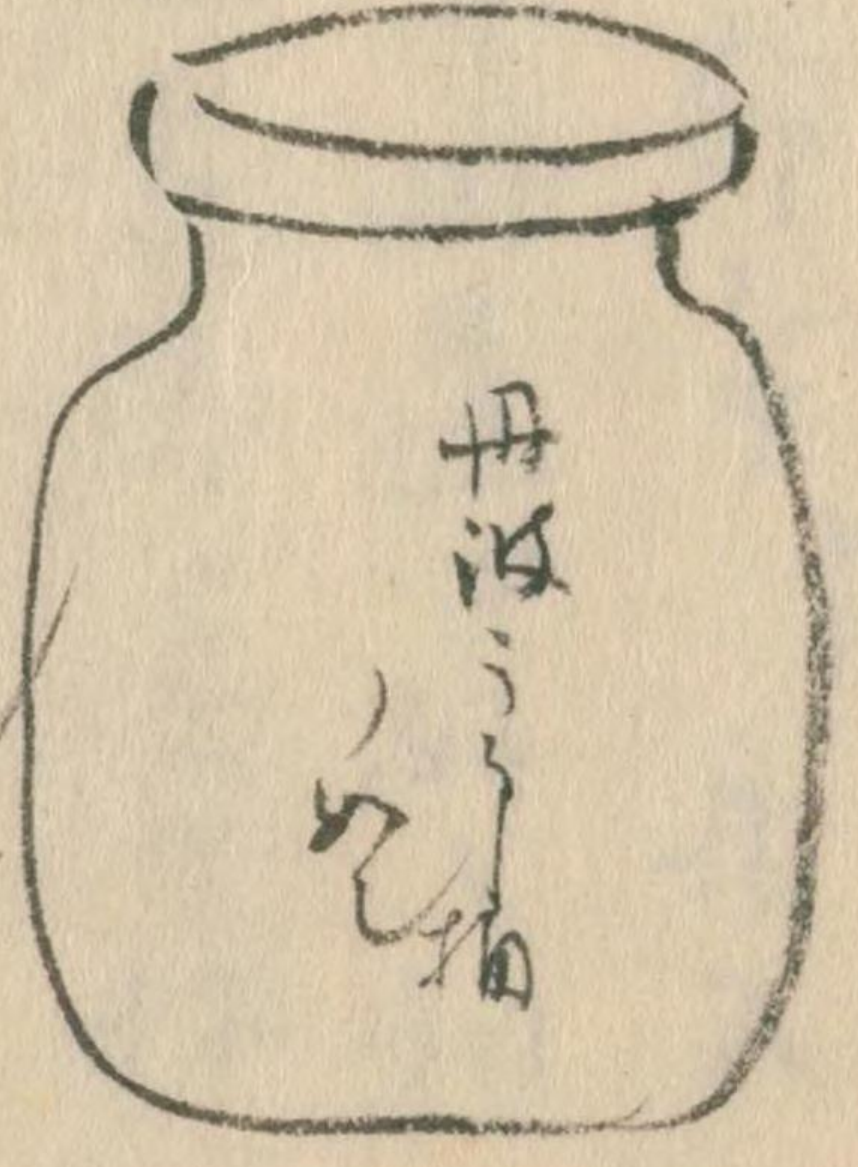


瀬戸


黄薬ノ下黒薬アリ
土白ク光

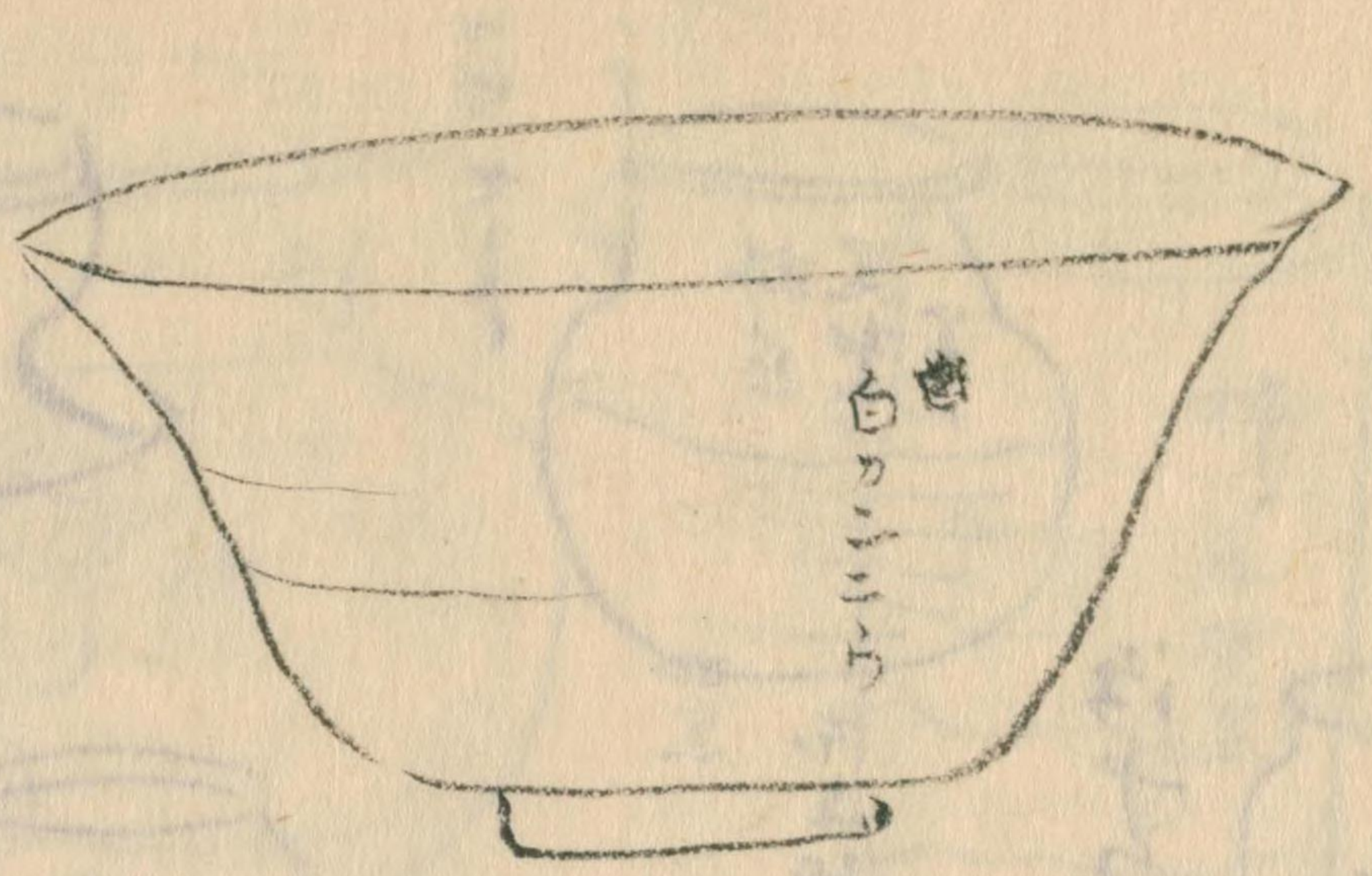


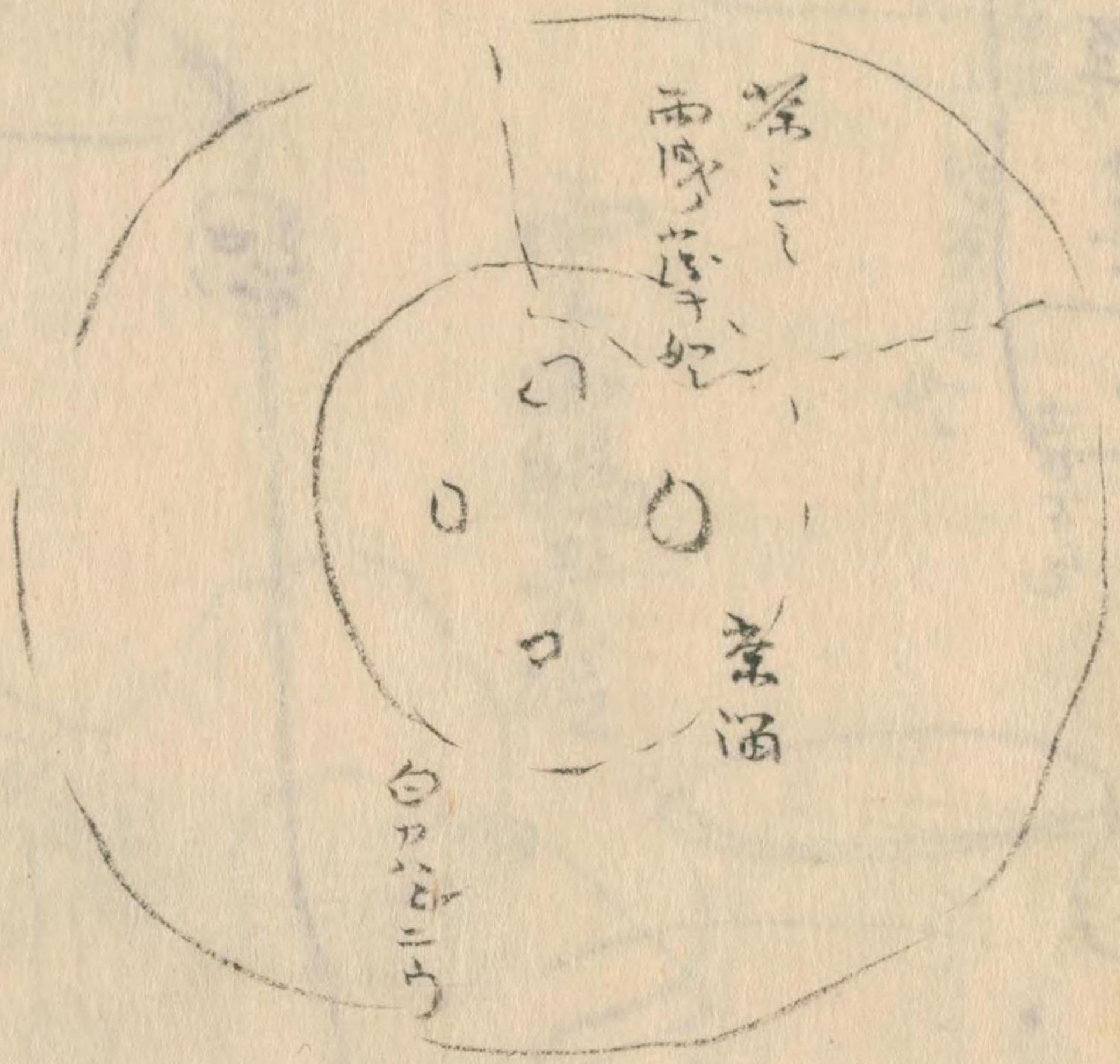
志どろ



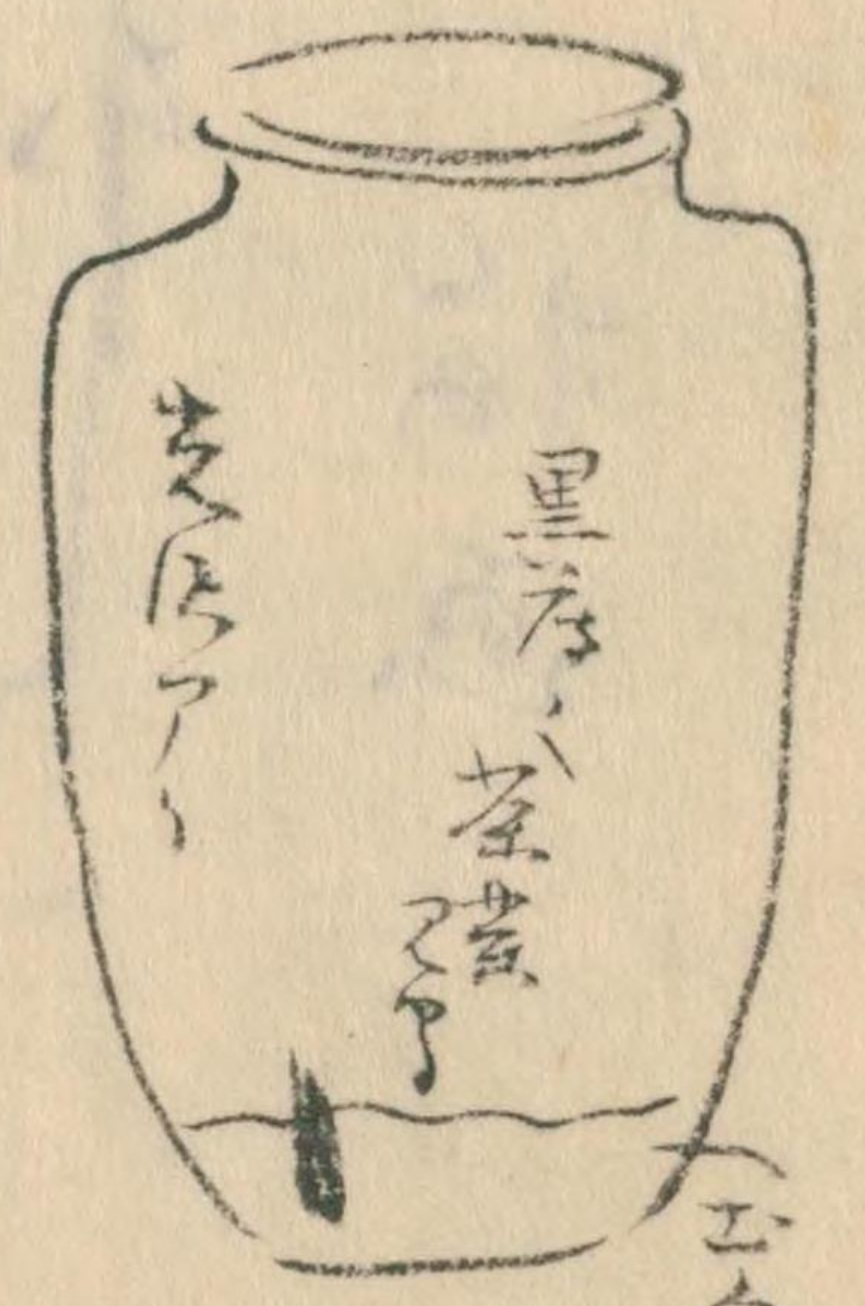
ガラス使用

井戸脇




茶ニミ
両側ヲ葉ノ処
茶溜
白カンニウ

[illegible]海


黒唐ハ茶溜アリ
黄唐アリ
土白し

大名物

足利東山義政公東山ニ隠棲シテ茶道ヲ好ミ蒐器物ヲ翫フ東山ノ別業ニ茶会ヲ設ケ古今の名器書画ヲ聚ム當時茶道ノ数寄者能阿弥相阿弥ニ命シテカク撰ス其器ニ名ト價ヲ定ム又信長秀吉ノ二公モ亦此道ヲ好ミ利休宗及等ニ命シテ名ト價ヲ定ム併後世是等ノ器ヲ称シテ大名物ト云後世大名物ト云

中興名物　小堀遠江守六器ヲ愛シ藤四郎以下後窯國焼ホノ中ニモ古渡唐物ニモ優ル品位アルモ世ニ用ヒラレ挫ルヲ惜ミソレカ中ニモスクレタルヲ撰ミテ名ヲ銘シラレタルヨリ世ニ顕レ今是ヲ中興名物ト云

藤四郎春慶　茶入ヲ焼キハ元祖藤四郎ヲ以テ鼻祖トス藤四郎本名加藤四郎左衛門ト云貞應二年永平寺道元禅師ニ従テ入唐シ土

留スルヿ五年陶磁器ノ法ヲ練磨シ安貞元年八月帰朝ス（此春慶ト号ス）

口兀（クチハゲ） 藤四郎入唐以前尾州春日井郡瀬戸村ニ（於テ始テ）薬入ヲ焼タル時ノ製法不鍛錬ナレハ口ヲ下ニシ焼ク故ニ口薬掛ラス又形モ宜シカラス

厚手口兀

掘出シ手 口兀出来悪シクシテ一窯土中ニ埋リタルヲ後ニ掘出シタルナリ 一説ニ小堀遠州時代ニ掘出タルト云 総テ入唐以前ノ作ハ土

[illegible]田夫三下作ナリ

唐物 藤四郎帰朝ノ当時唐土ノ土ト薬トヲ携来リ焼タルヲ唐物ト（初テ唐物窯ニテ）

尤支那ヨリ渡リタルモノハ漢ト云重宝セシモノナリ唐物ト混スヘカラス

古瀬戸 藤四郎唐物ヲ焼タル後ヲ和土和薬ニテ焼タルヲ古瀬戸ト云

古瀬戸ハ総名ナリ大形ニ出来タルヲ大瀬戸ト云小形ニ出来タルヲ小瀬戸ト云 大瀬戸小瀬戸ノ手自ラ異ナレリ

煎餅手 是ハ何レノ窯ヨリモ出ル窯ノ内ニテ大気ノヨク当リ上薬カセ地土フクレ出来タルモノナリ

春慶 藤四郎ノ土ザラリタルニ依リテ和ノ土ヲ合テヤキタルヲ春慶ト云 藤四郎ノ法名ナリ

真中古物 二代目ノ藤四郎作ヲ云 世ニ藤四郎作ト云ハ二代目ヲ指スナリ

元祖藤四郎作ハ古瀬戸ト云 藤四郎春慶モ二代目ナリ

中古物 三代目藤四郎（次）作ヲ云 金華山窯ノ作者ナリ 四代目藤三郎是ヨリモ中古物ト云 破風窯ノ作者ナリ 黄薬ト云[illegible]

其窯ヨリ出タルモノナリ

正信春慶 正信ハ何人ヲ詳カナラス

後時代春慶 堺春慶吉[illegible]慶ナリ

後窯 坊主手 宗伯 正意 山道 茶臼屋 源十郎 姉 利休

ガラス使用

鳴海織部　捻貫　八ツ橋伊勢手　万右衛門等有之

遠州時代ニ至テ新兵衛　湖春　茂右衛門　吉兵衛アリ

同焼　薩摩　高取　肥後　丹波　膳所　唐津　備前　伊賀

信楽　御室

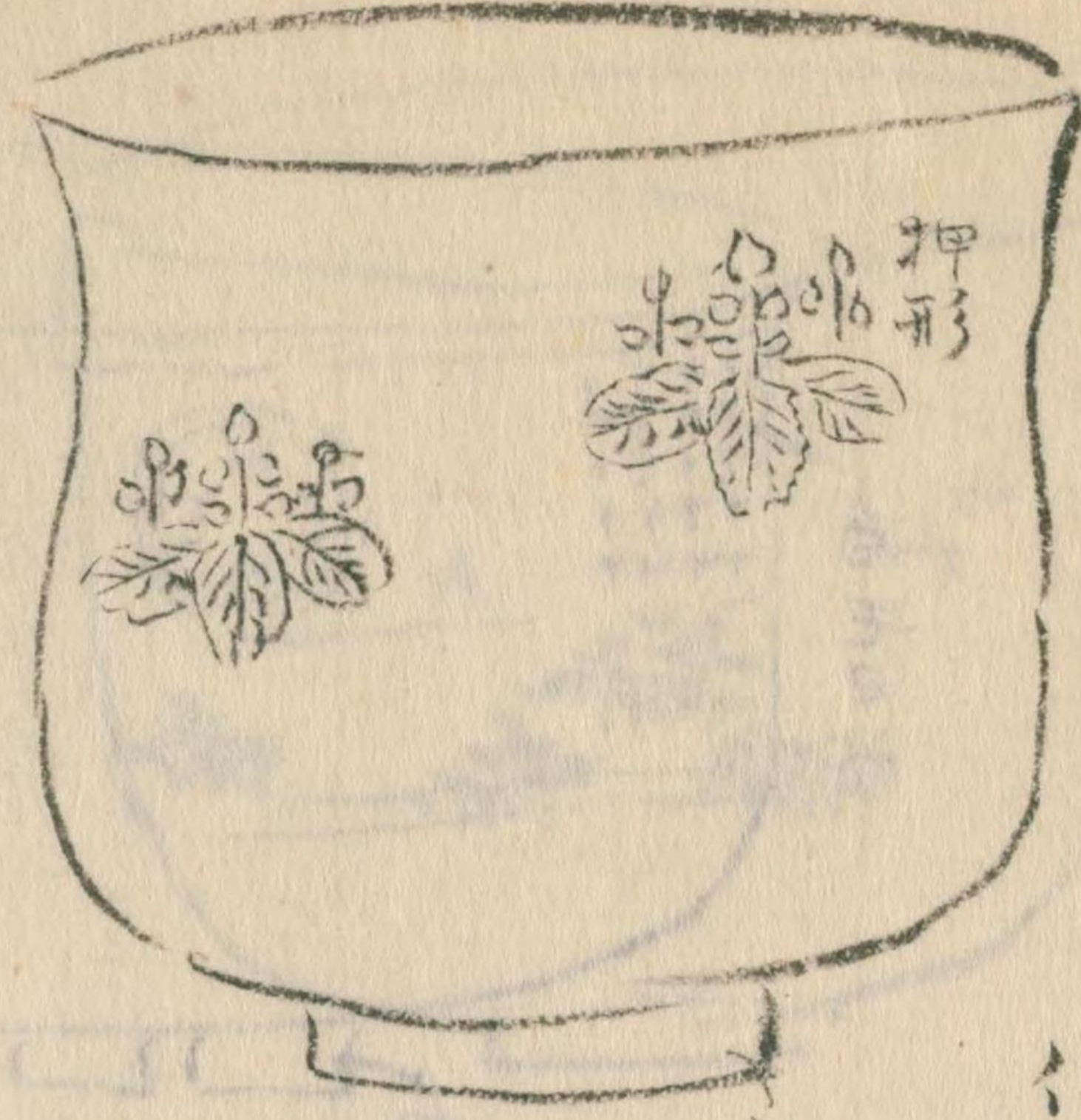
祖母懐　嘉濃ノ同焼ナリ

大名物　御在ナレトモ至テ後世ノモノニテ（天明頃）漸ク百年余リニナルモノナリ　同焼以下遠州名物数多之

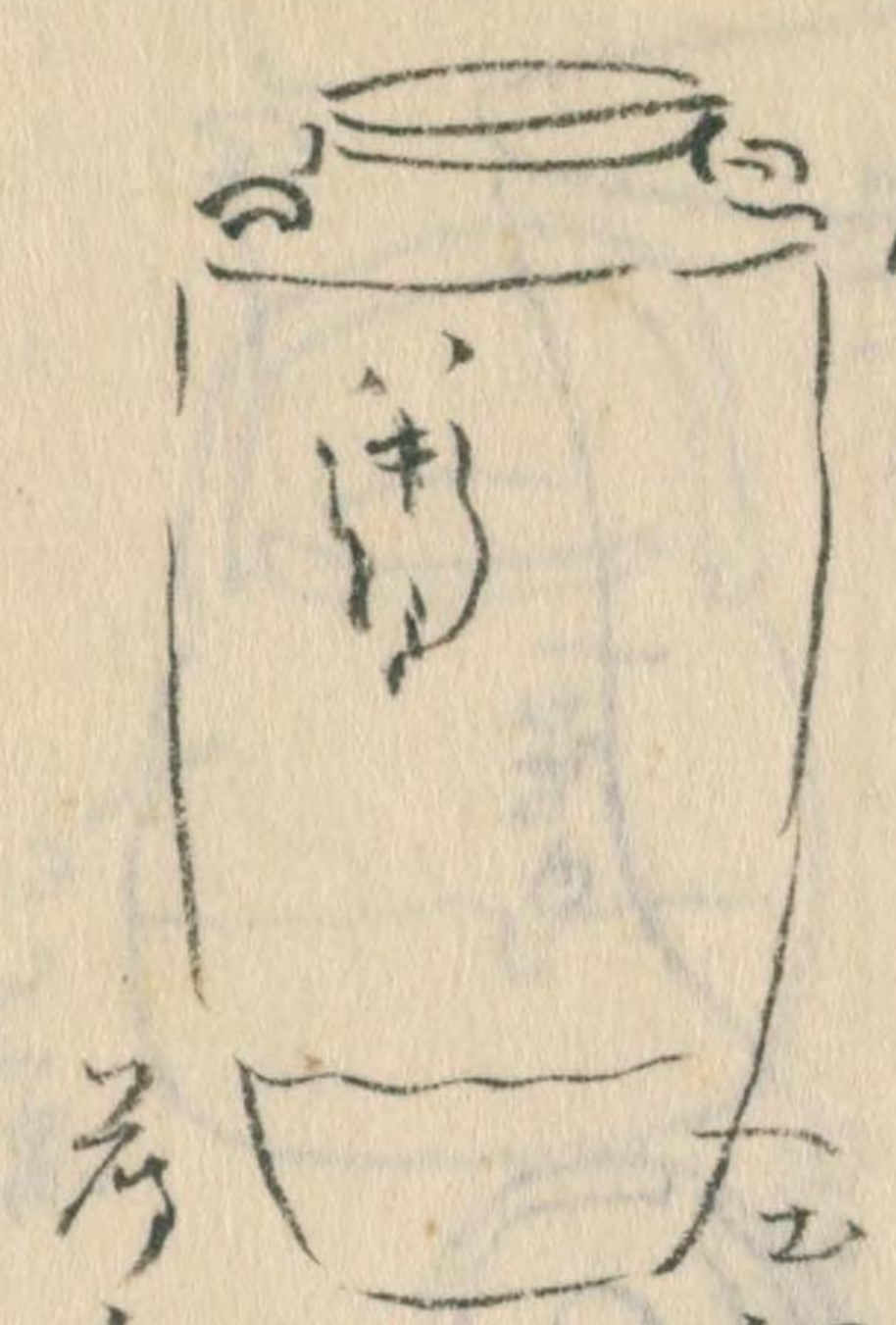
桃山御本

初代道八ハ唐津手て桃山ト位

仁阿弥ト云

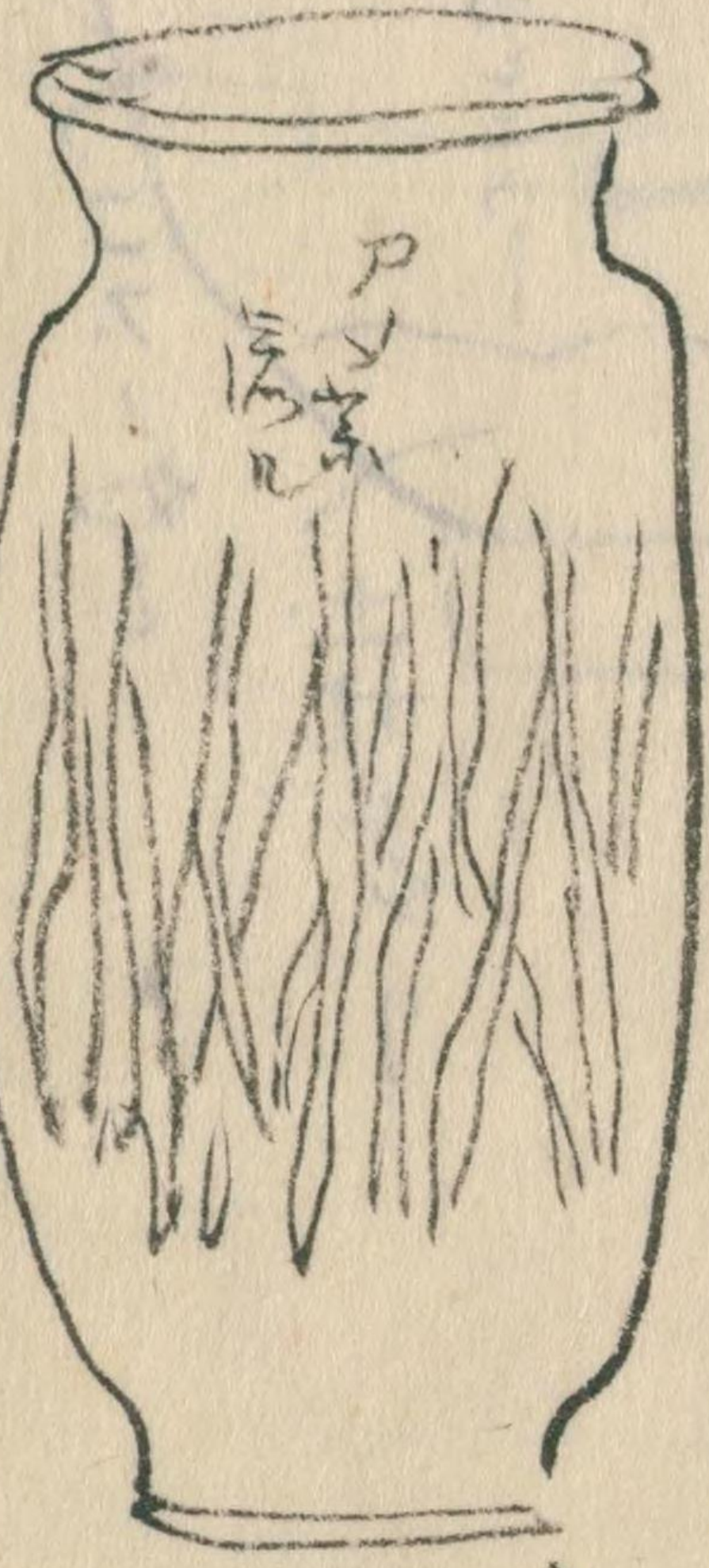


祖母懐



祖母懐ノ形名アリ

志戸呂

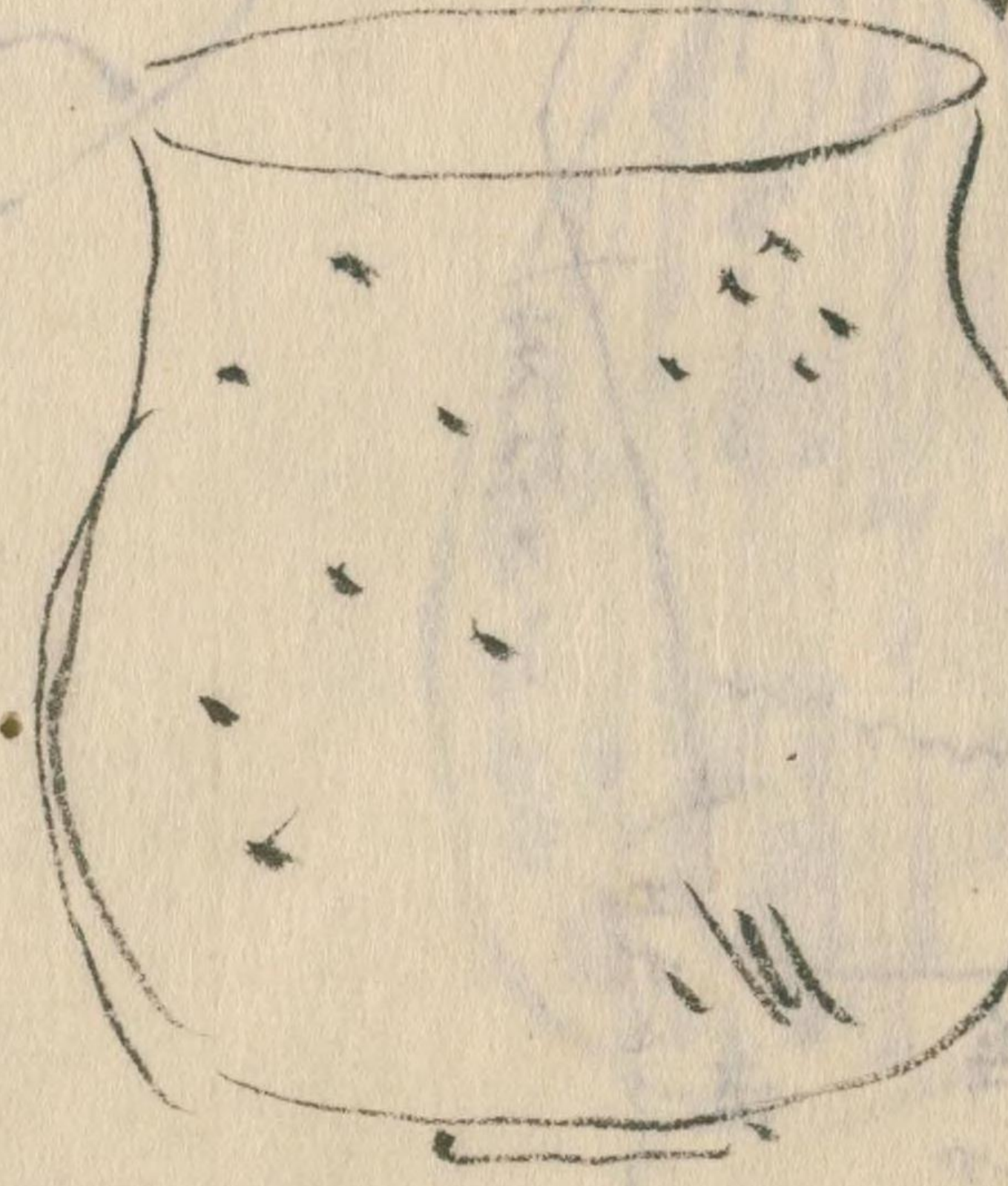


内ニ流レアリ

底ニ貝ノ跡アリ

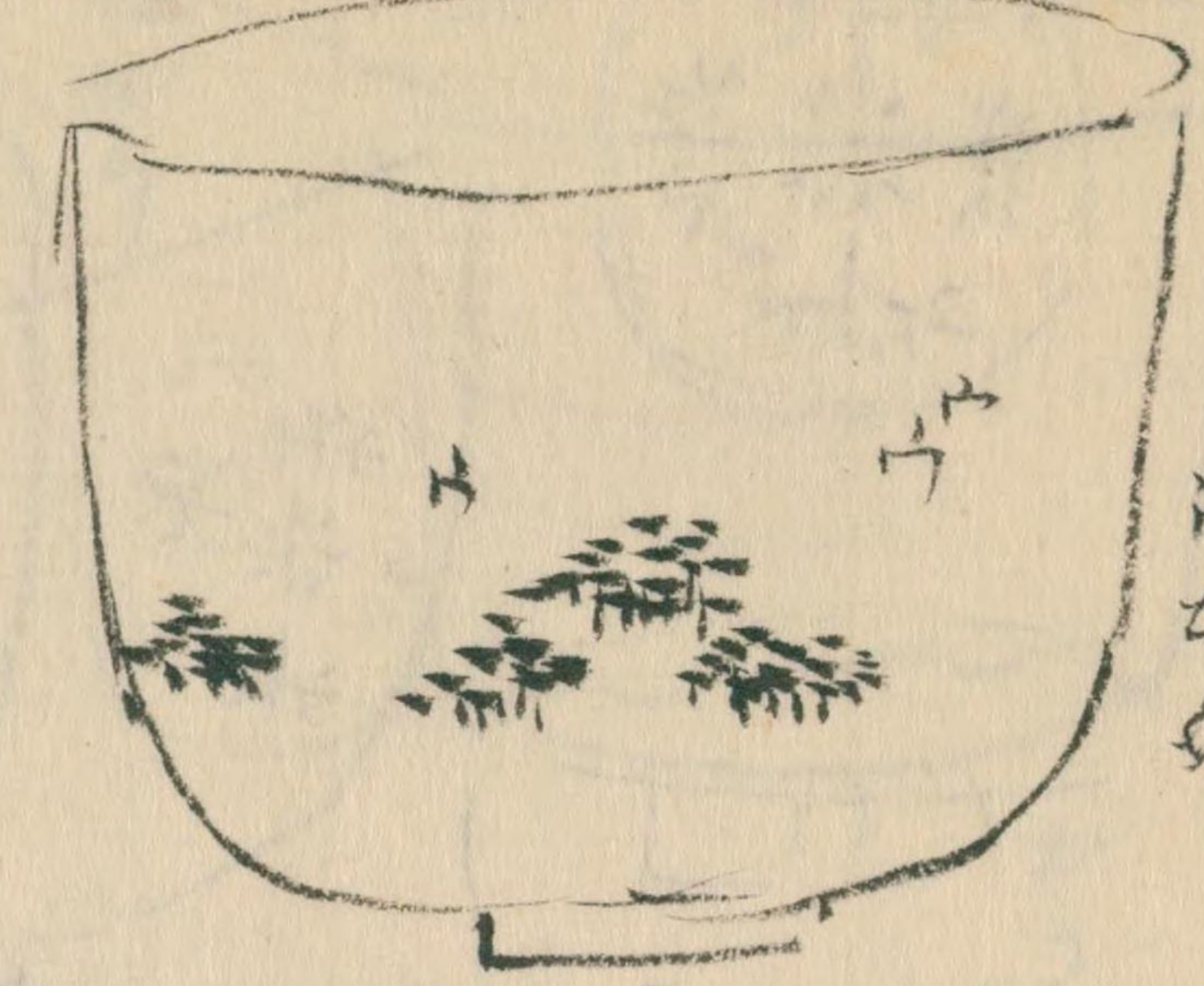
鉢ノ手

堅手ノ又荒手ニ云

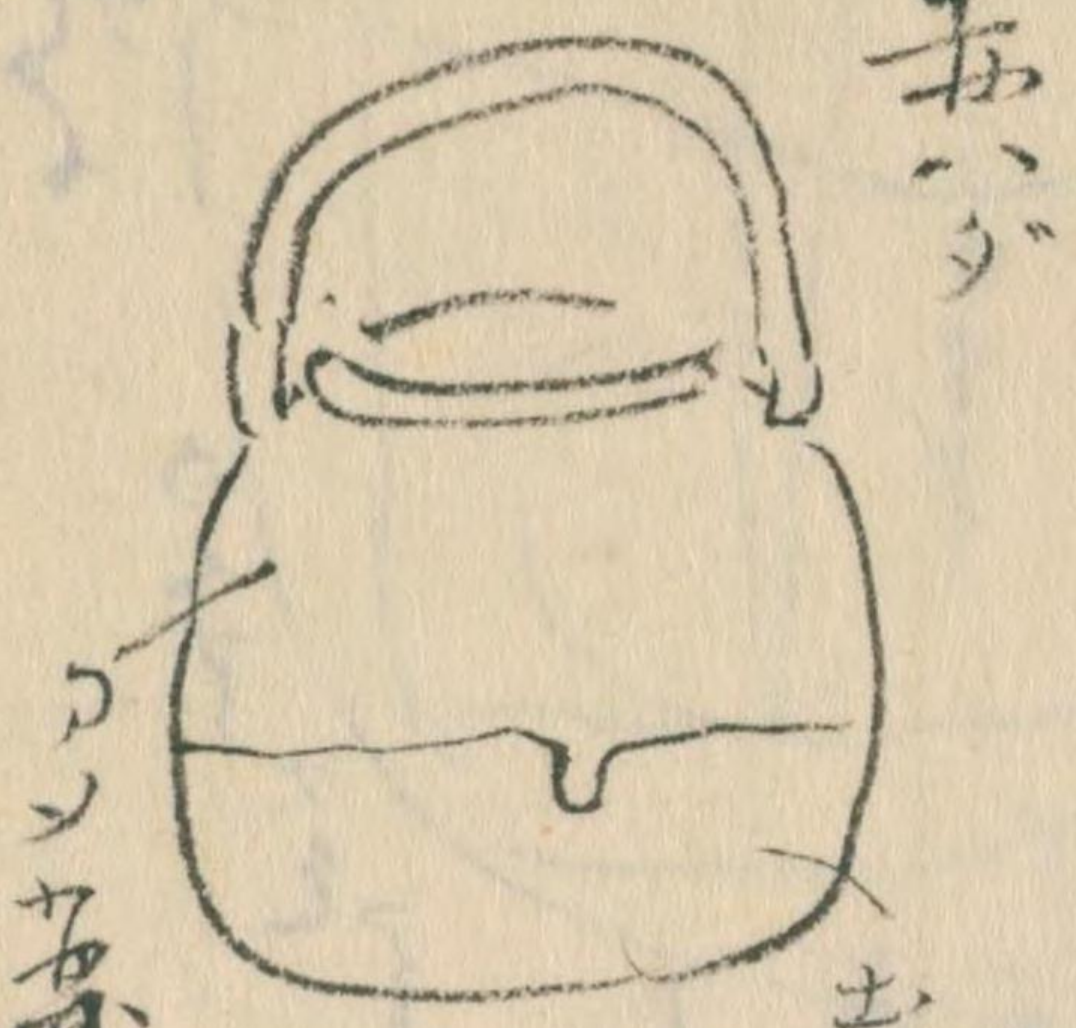


ガラス使用

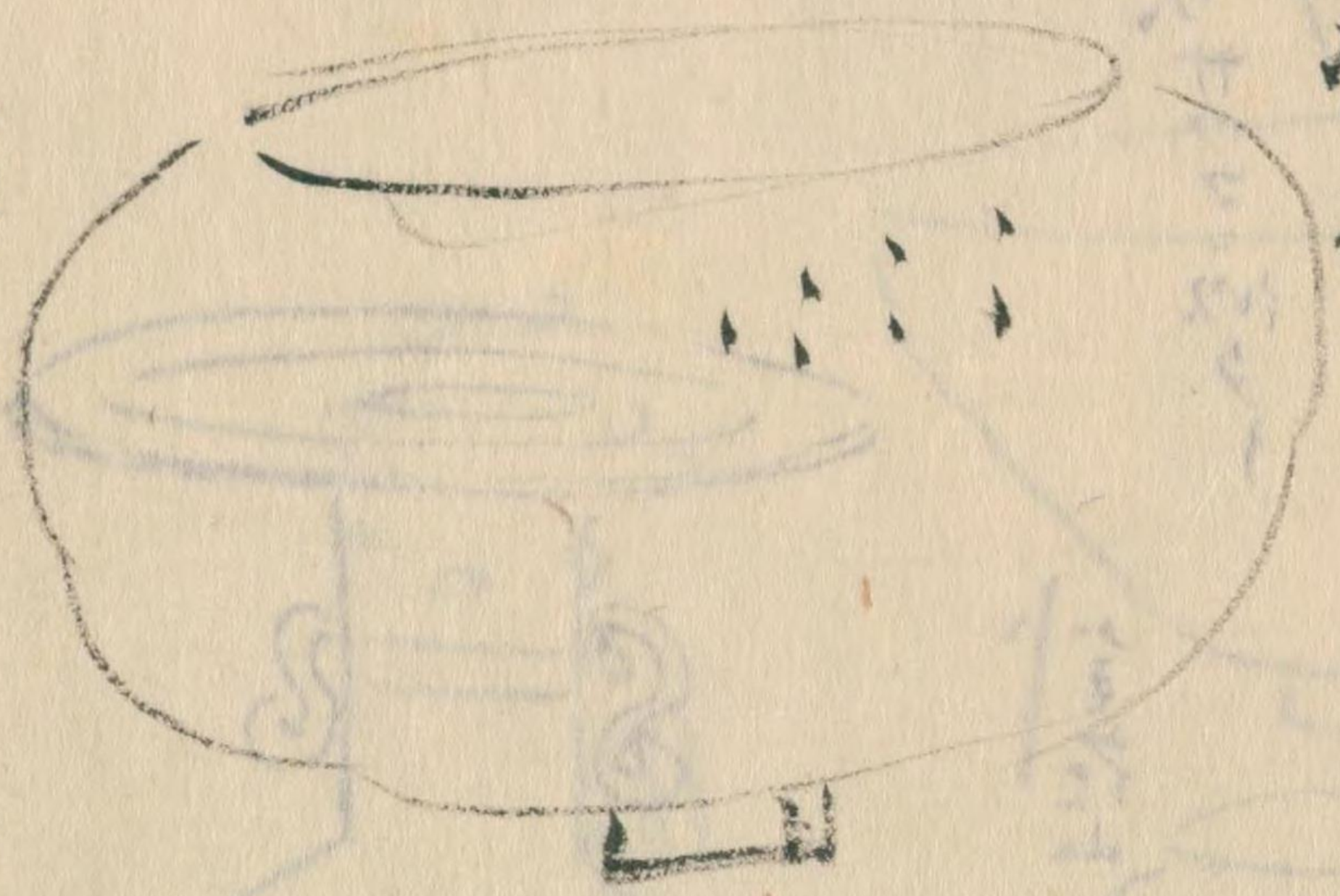
ミカ粉吹



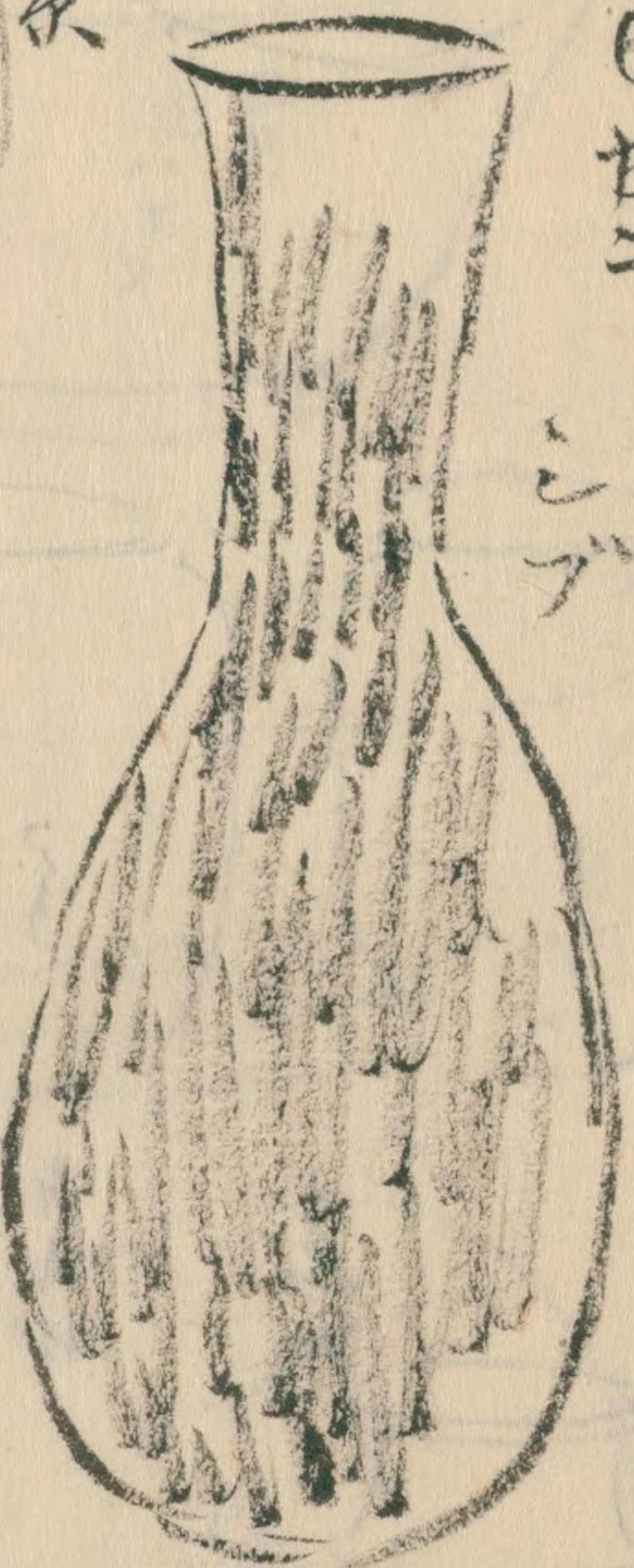
赤ハダ



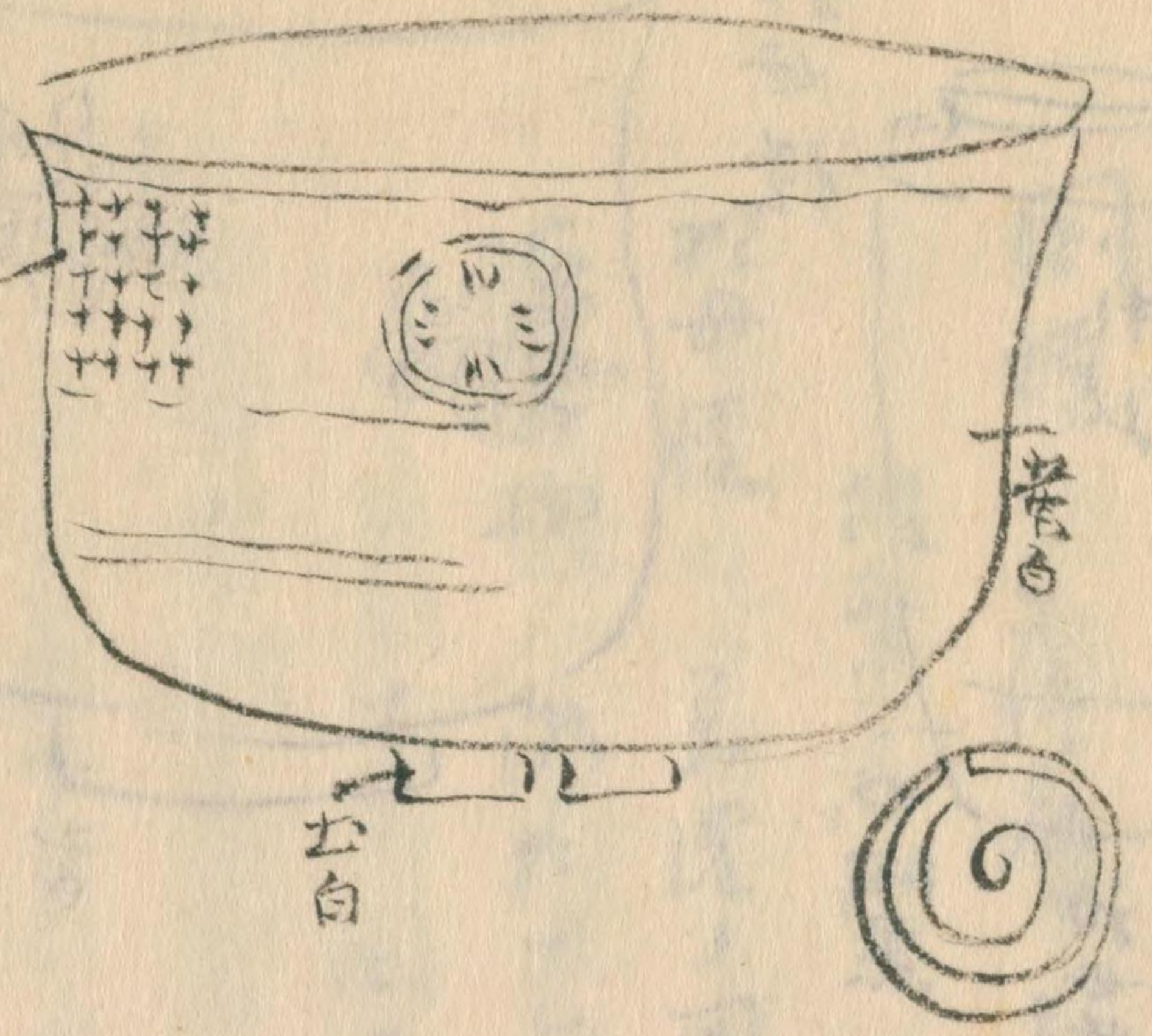
白南京



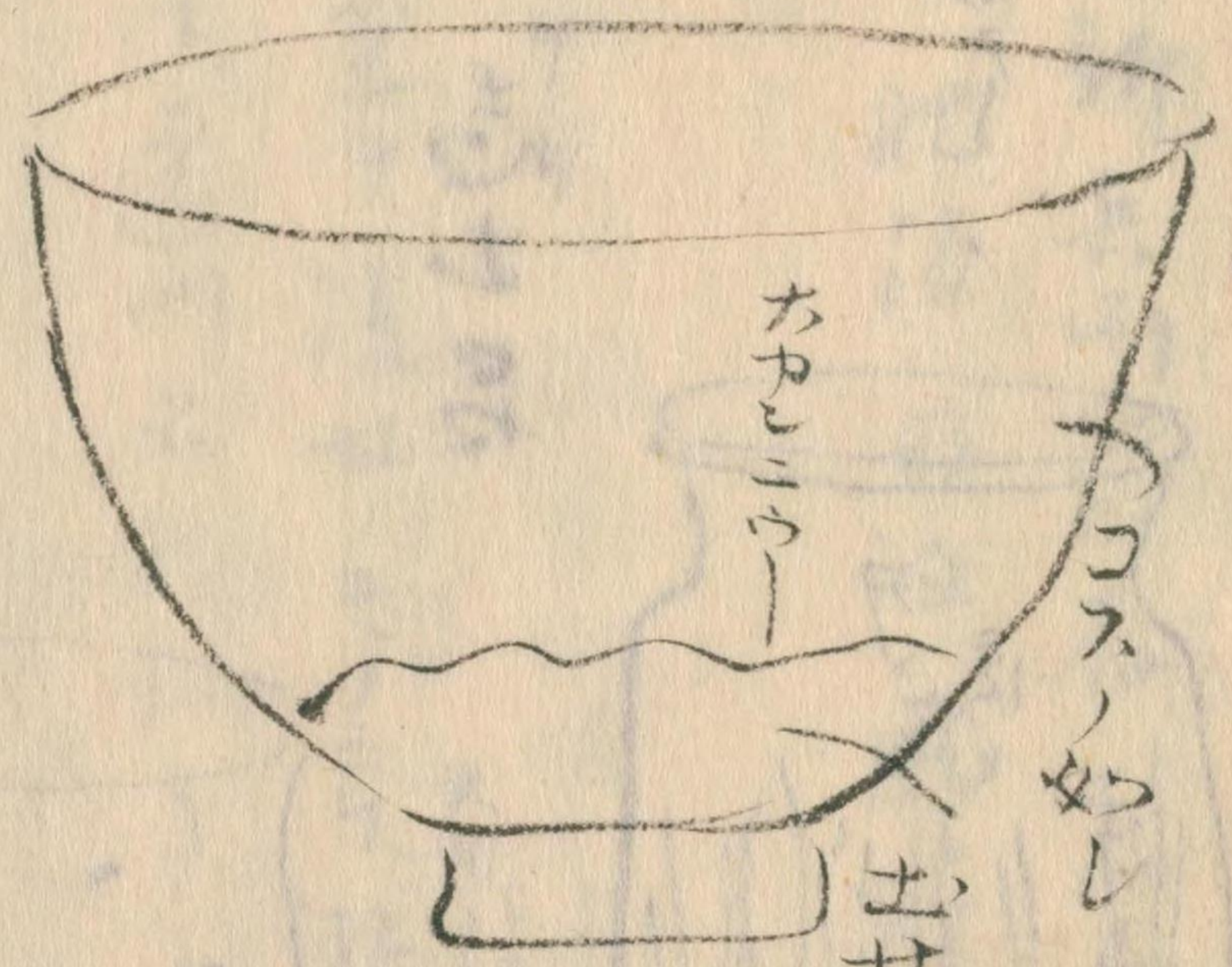
ヒセン



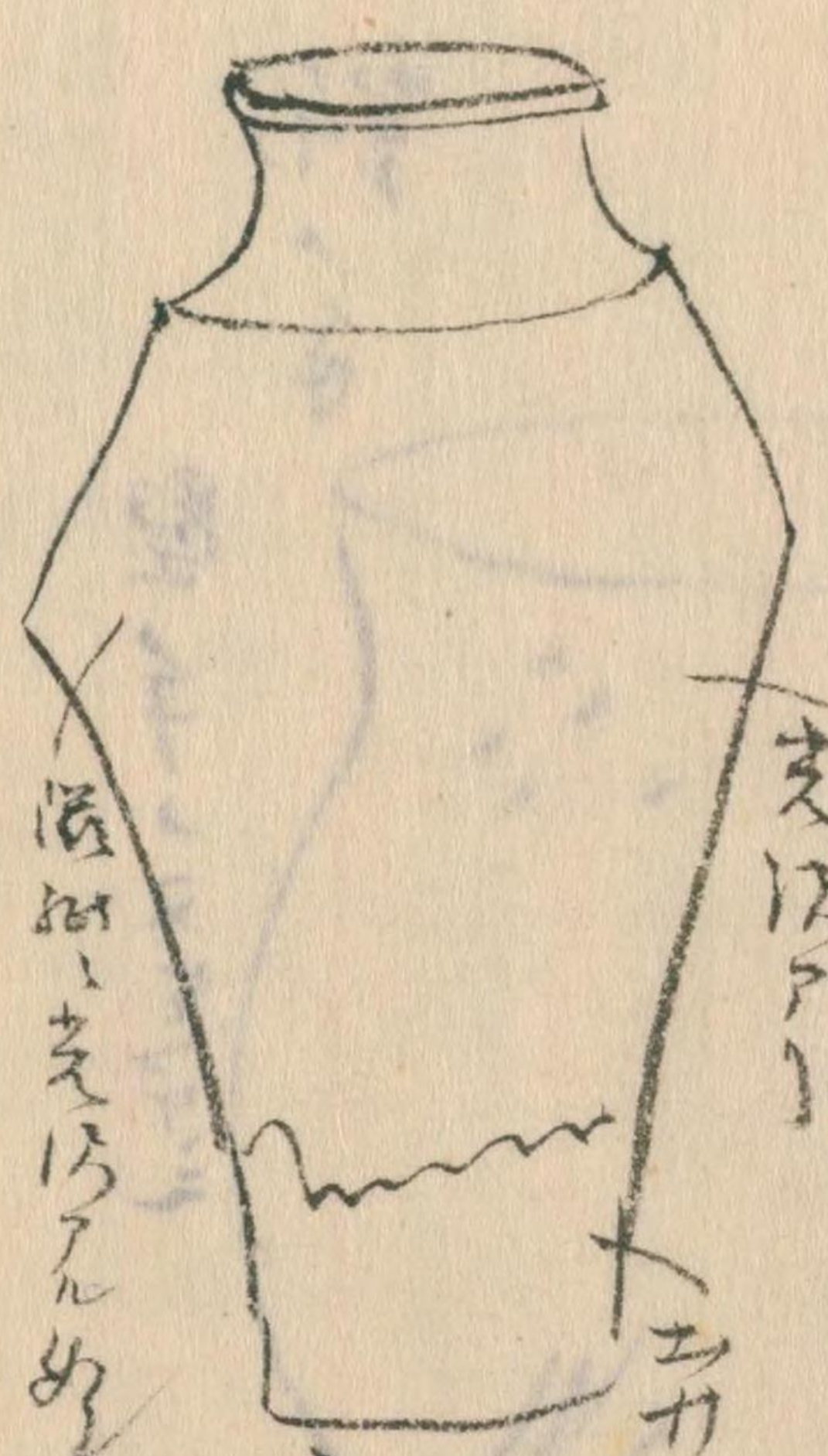
御本



セト唐津

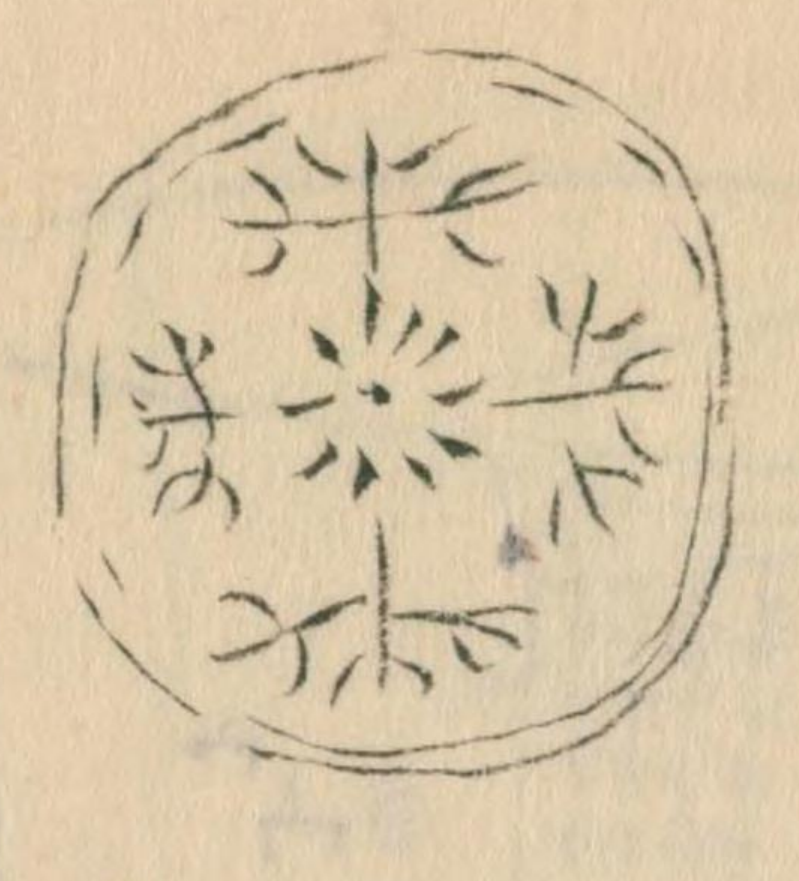

カカトニウー
コスノ如し
土サヒタリ

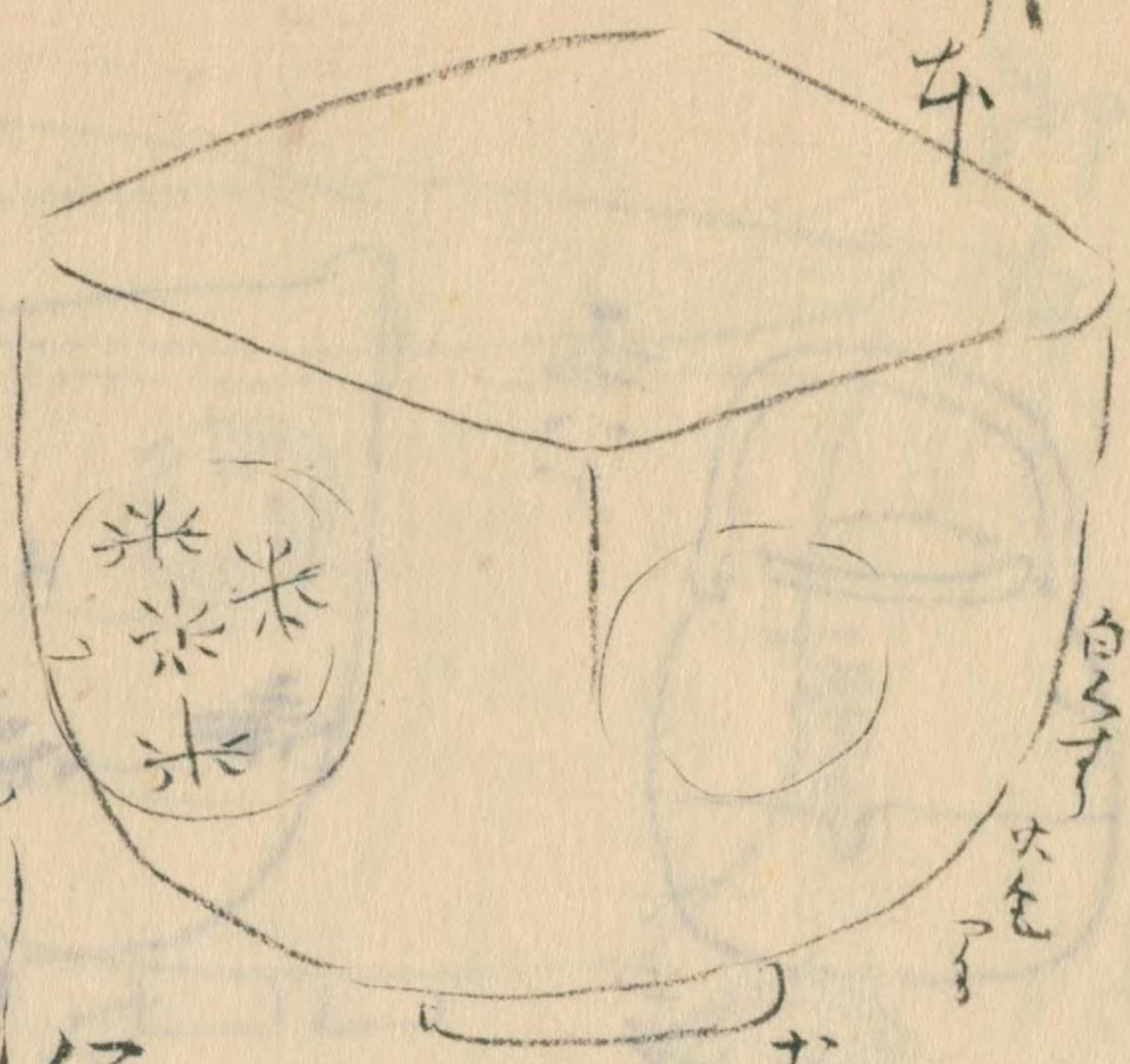
唐津


黄ほアリ
濃紺ト黄ほアル如し
土サヒタリ
赤
糸切ナシ

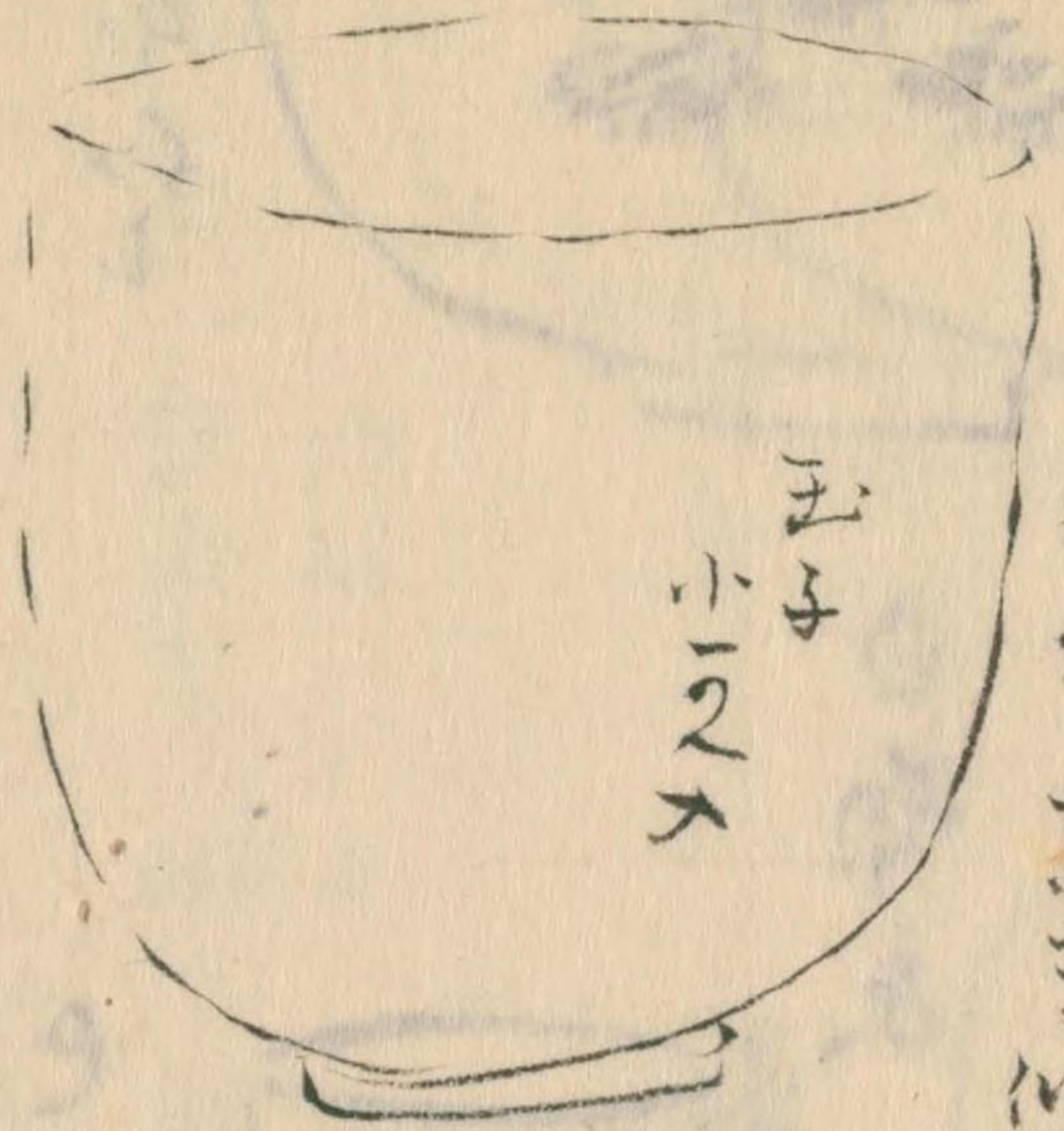
六月九

御本



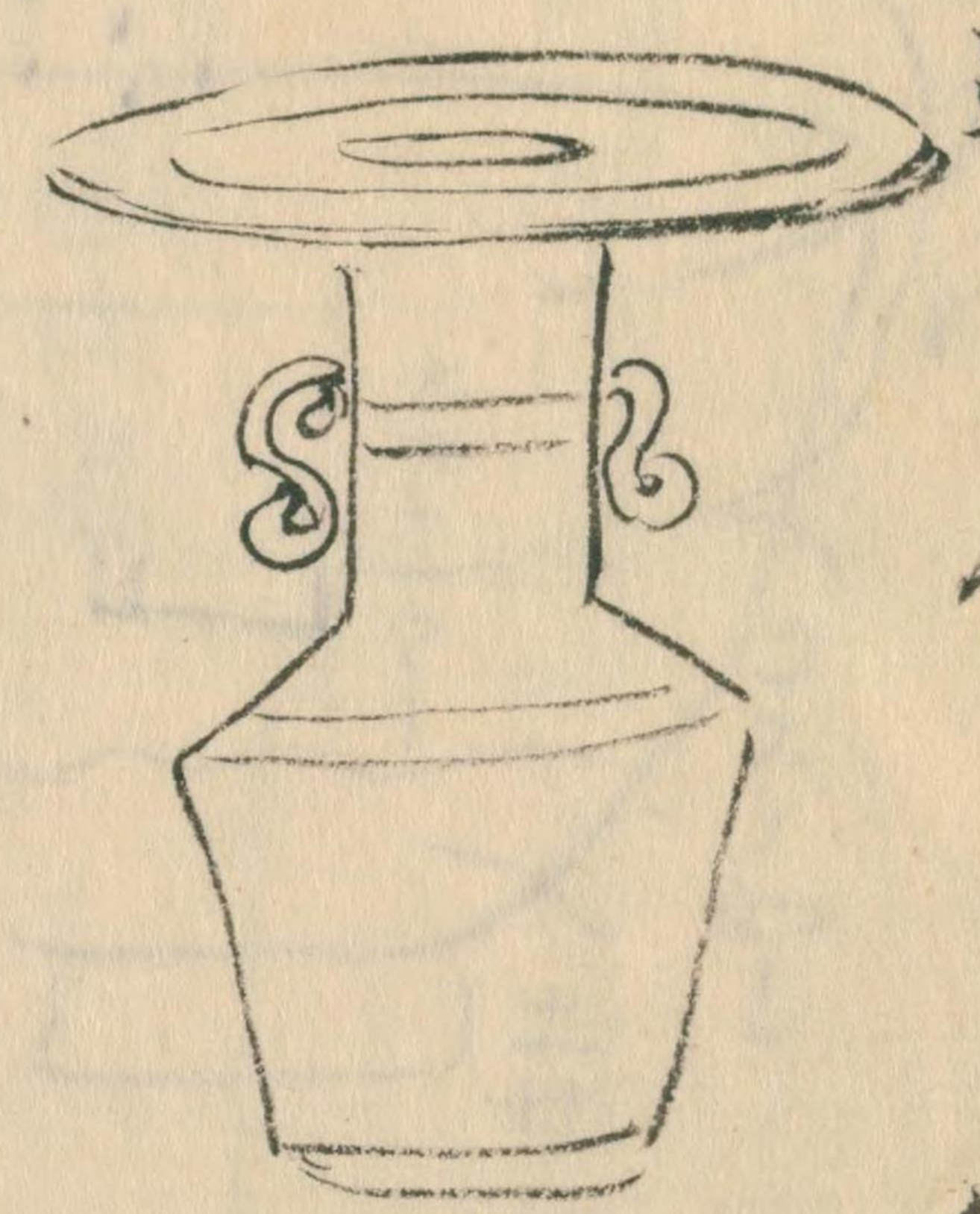


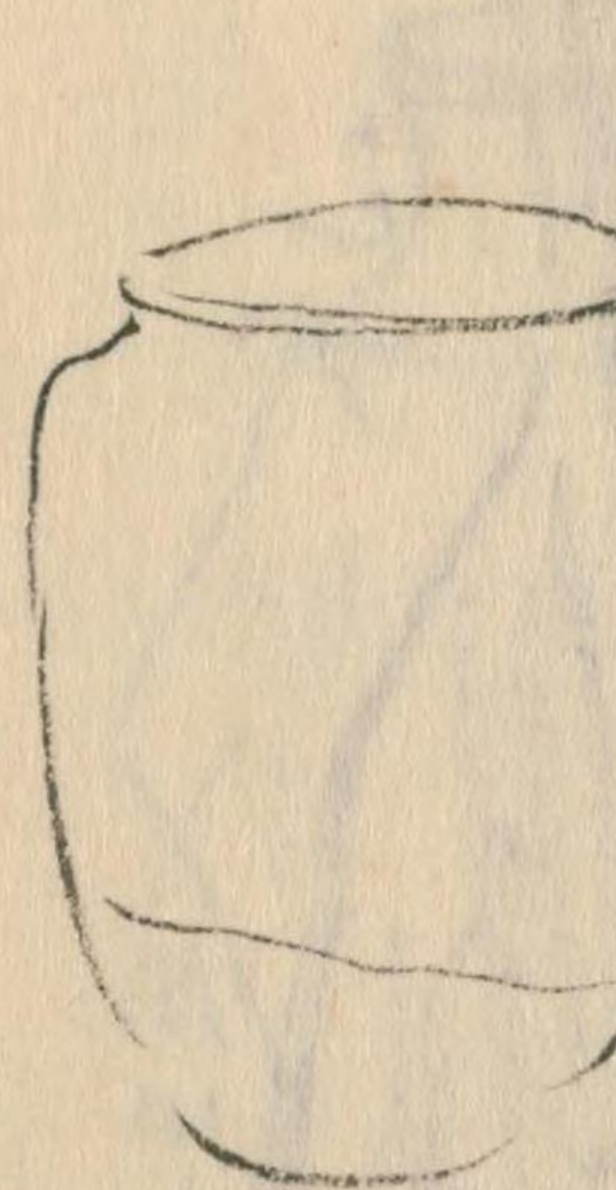
そそりや



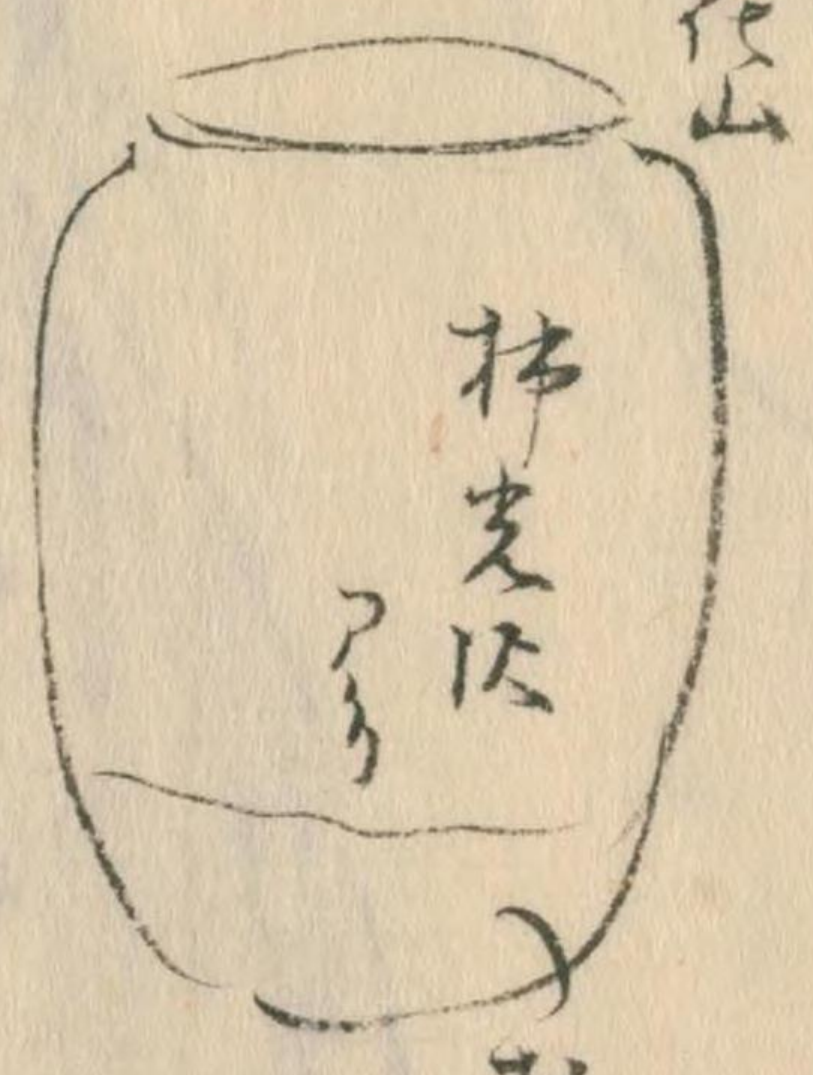
伊賀ハサツマニ似タリ

朝鮮うつ

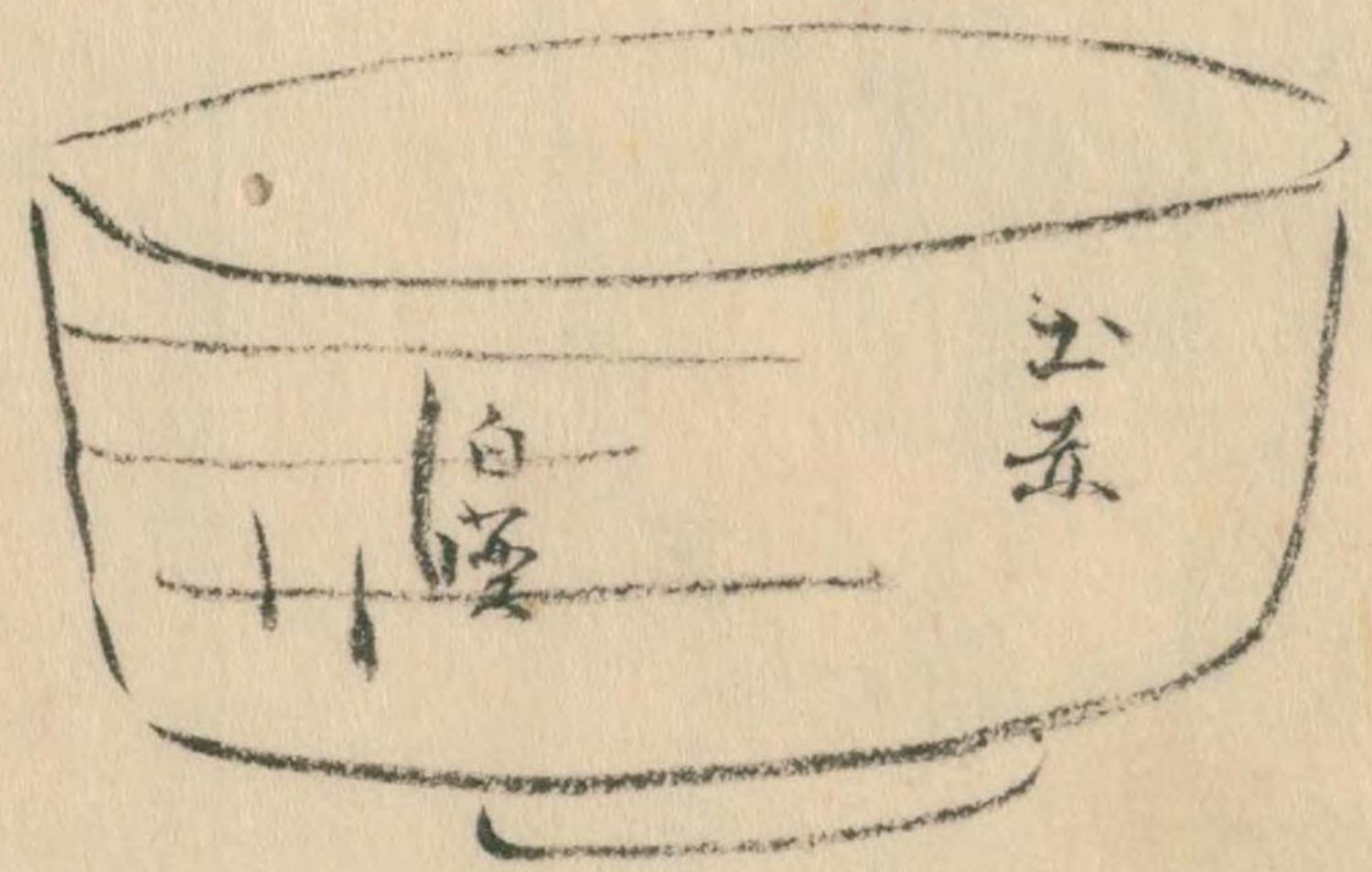


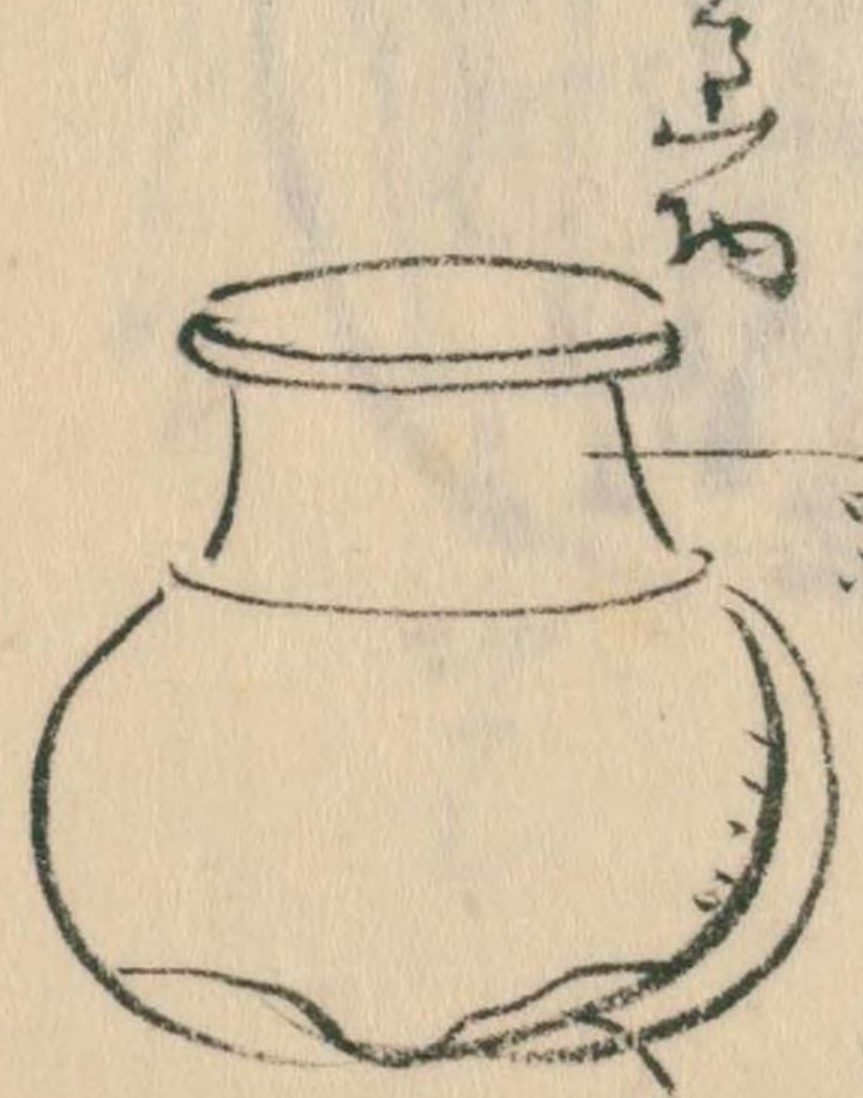


小 八宝花山

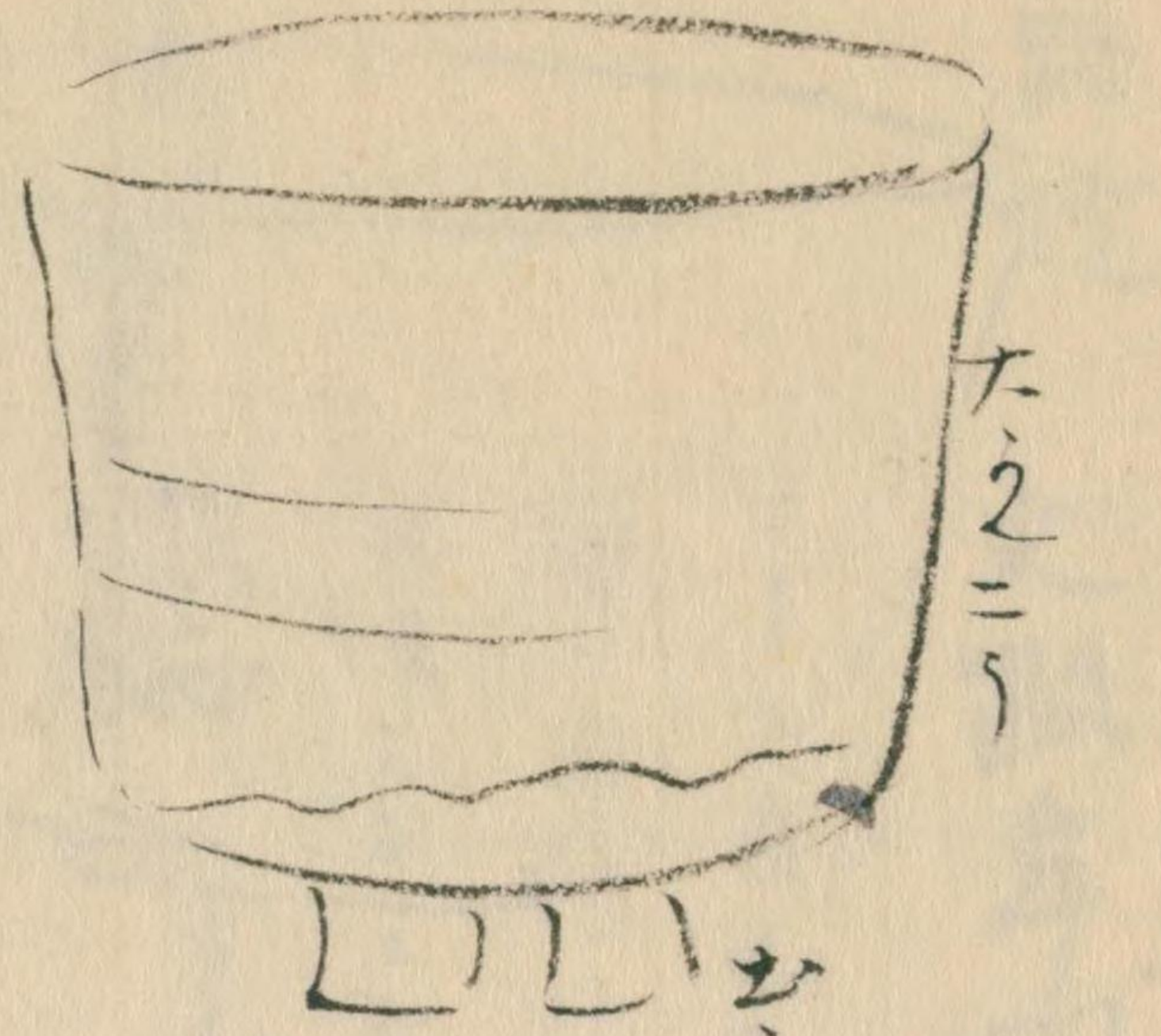

林光院アリ
土赤
赤糸印

竹木ひせんに似タリ

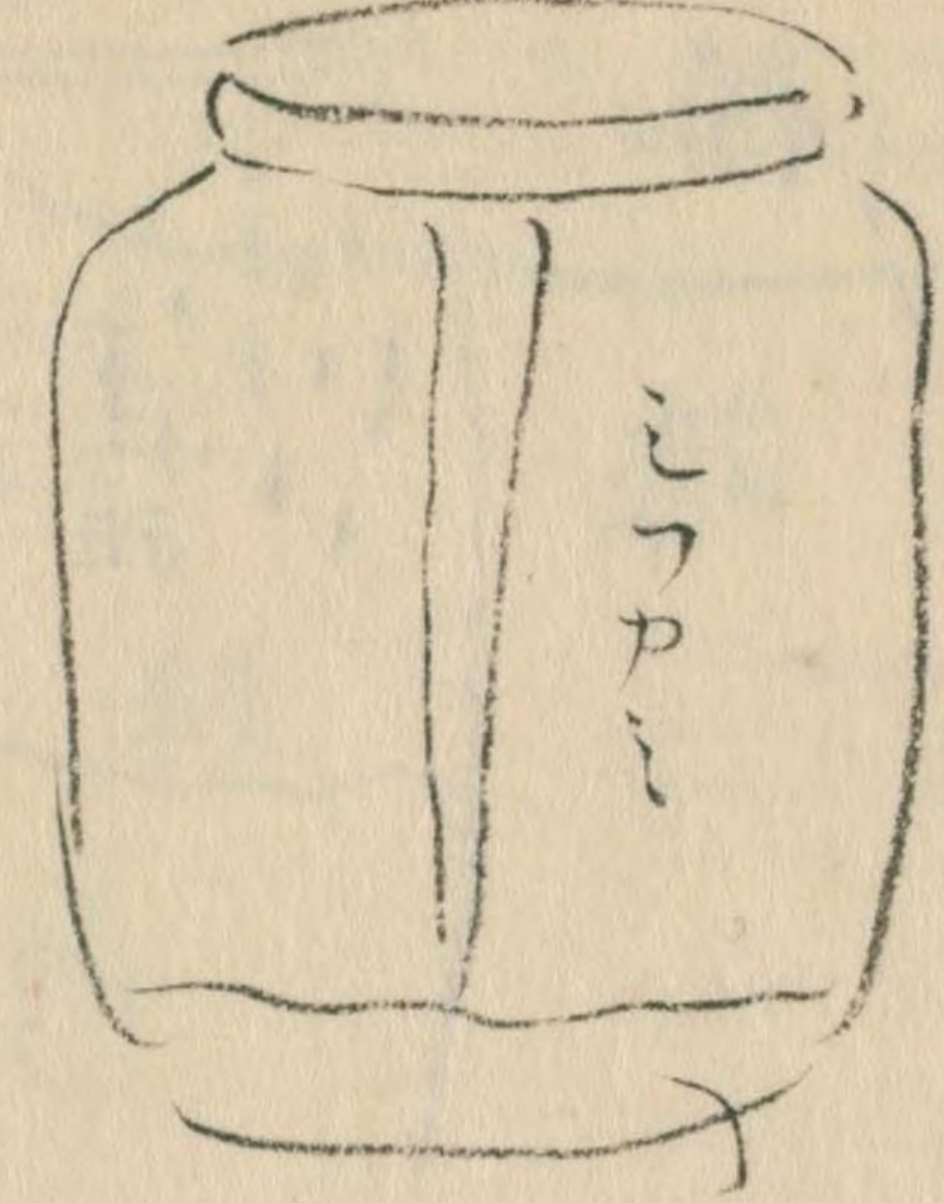



ロ
糸切
黒林下ムラ中
土荒
赤糸印

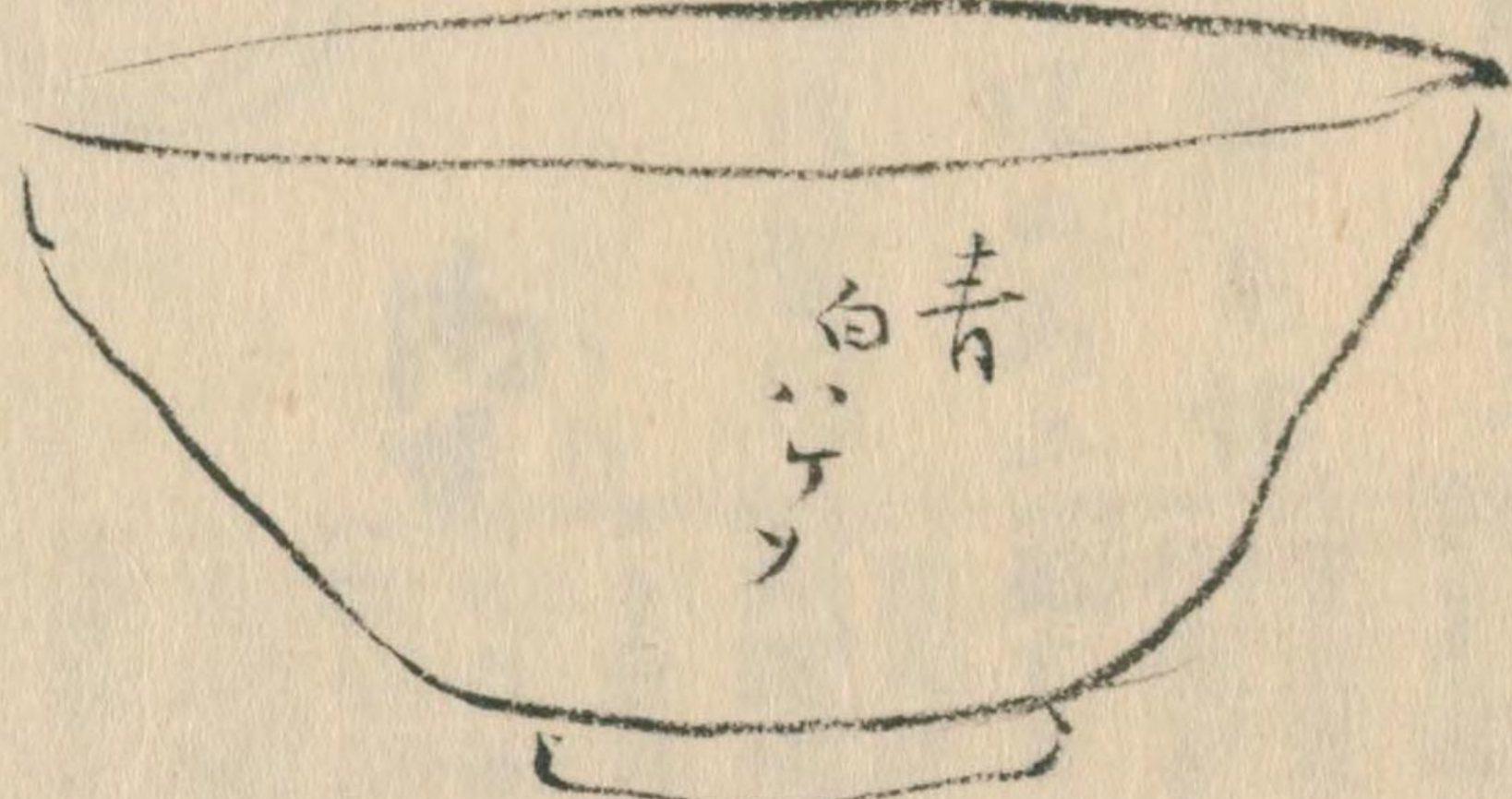
萩

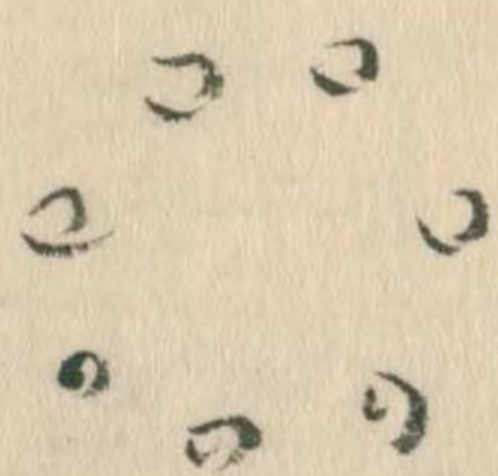


茶四寸

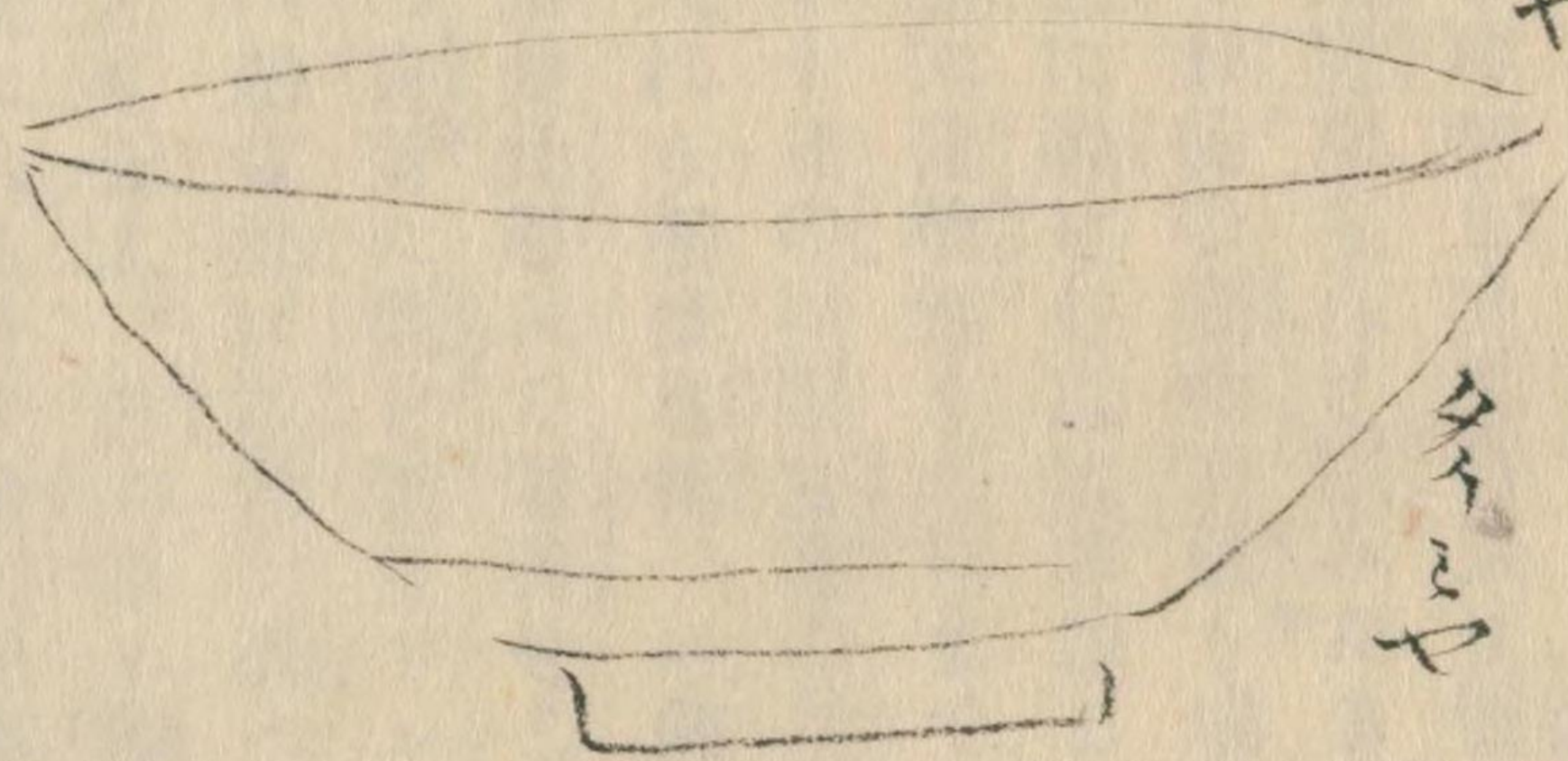


古ハケメ

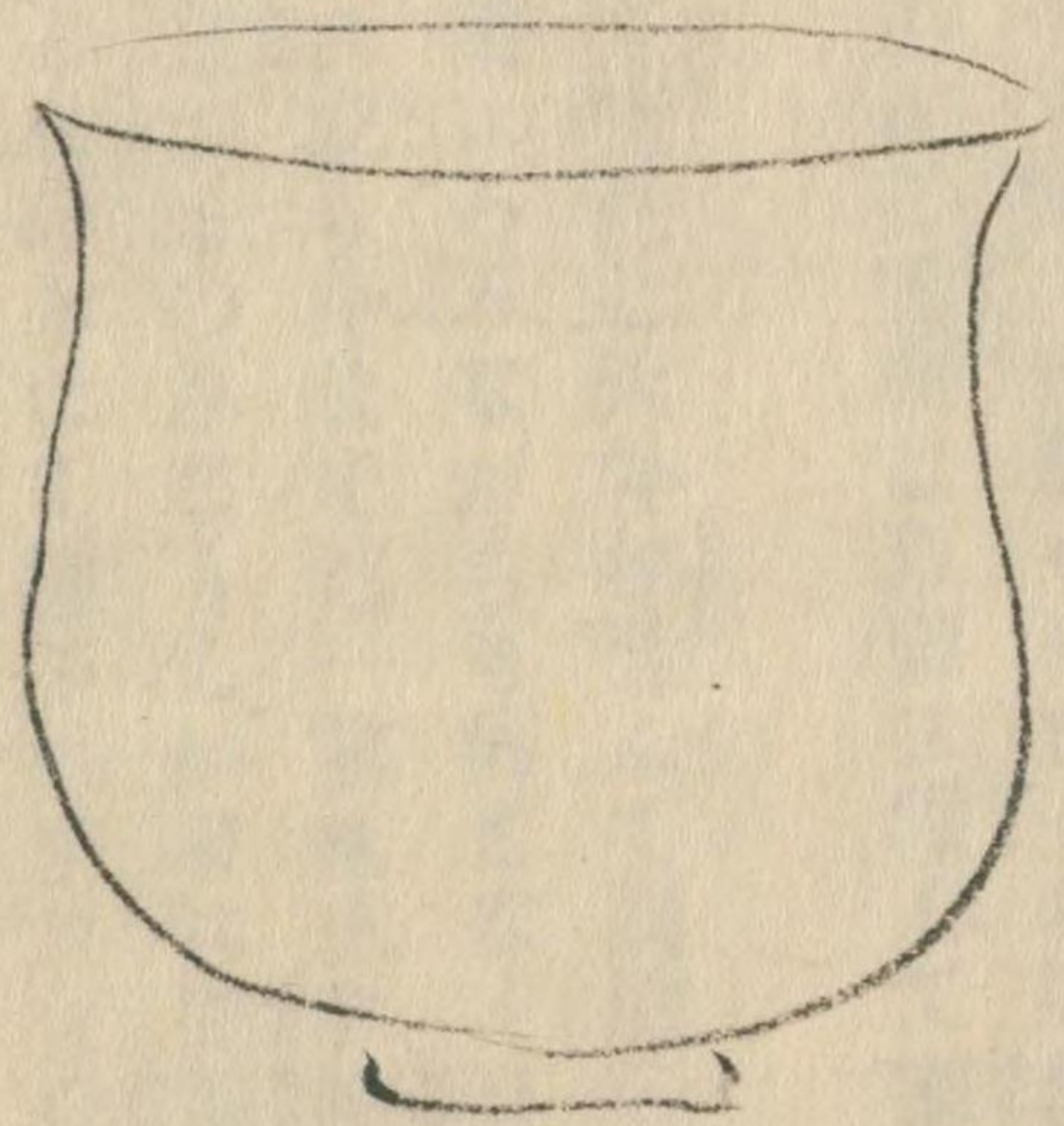


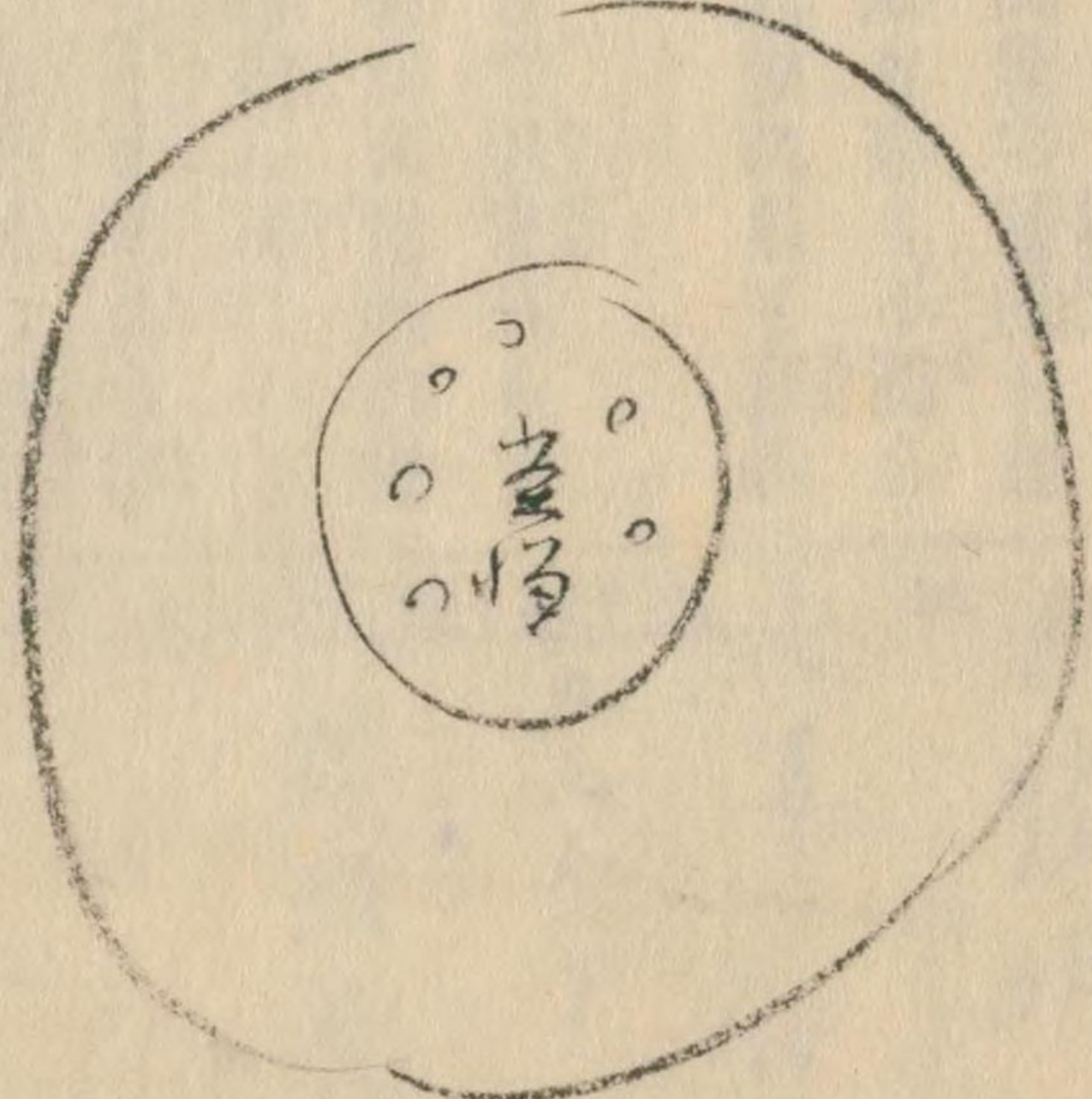


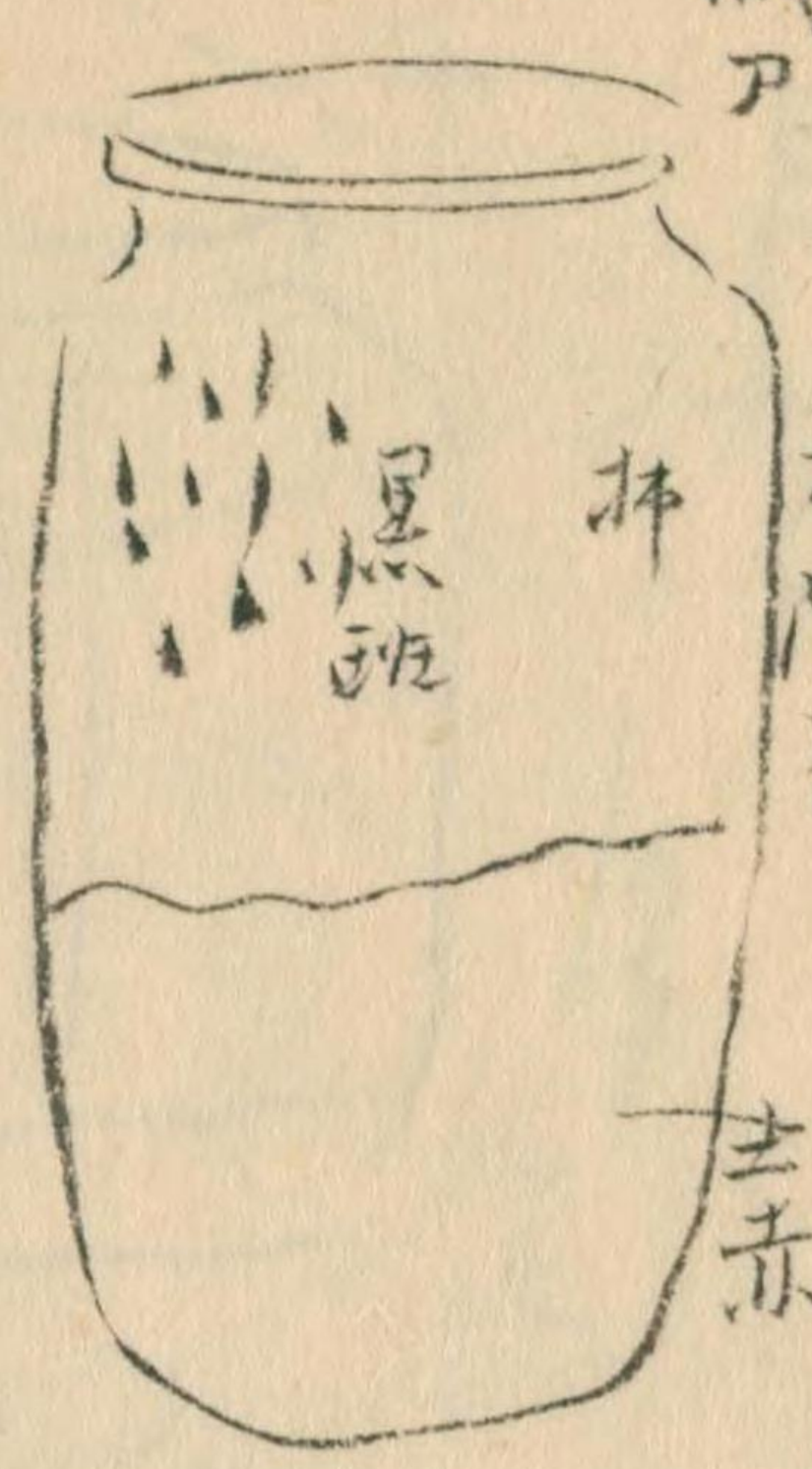
とゝや



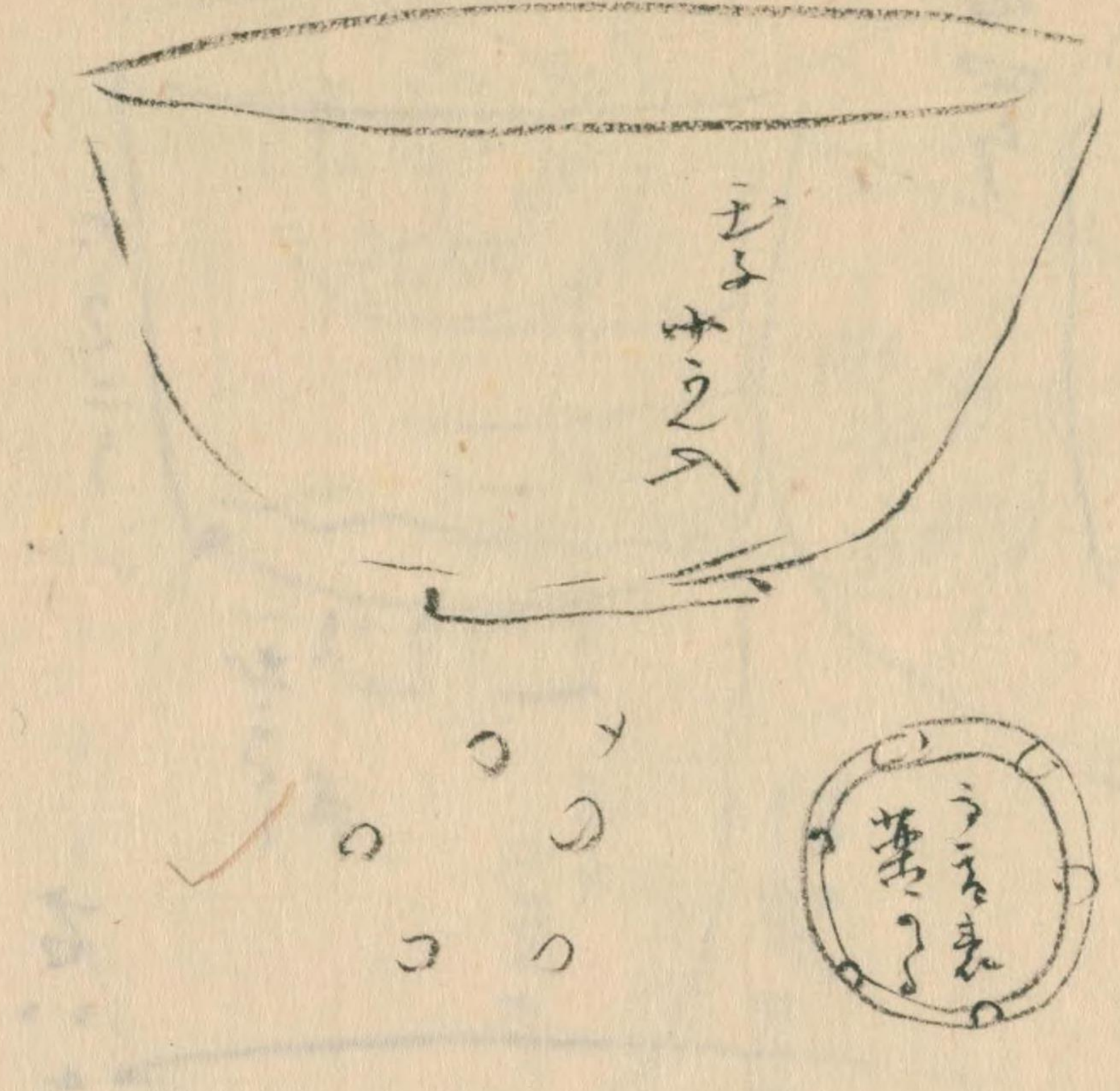
浅然川

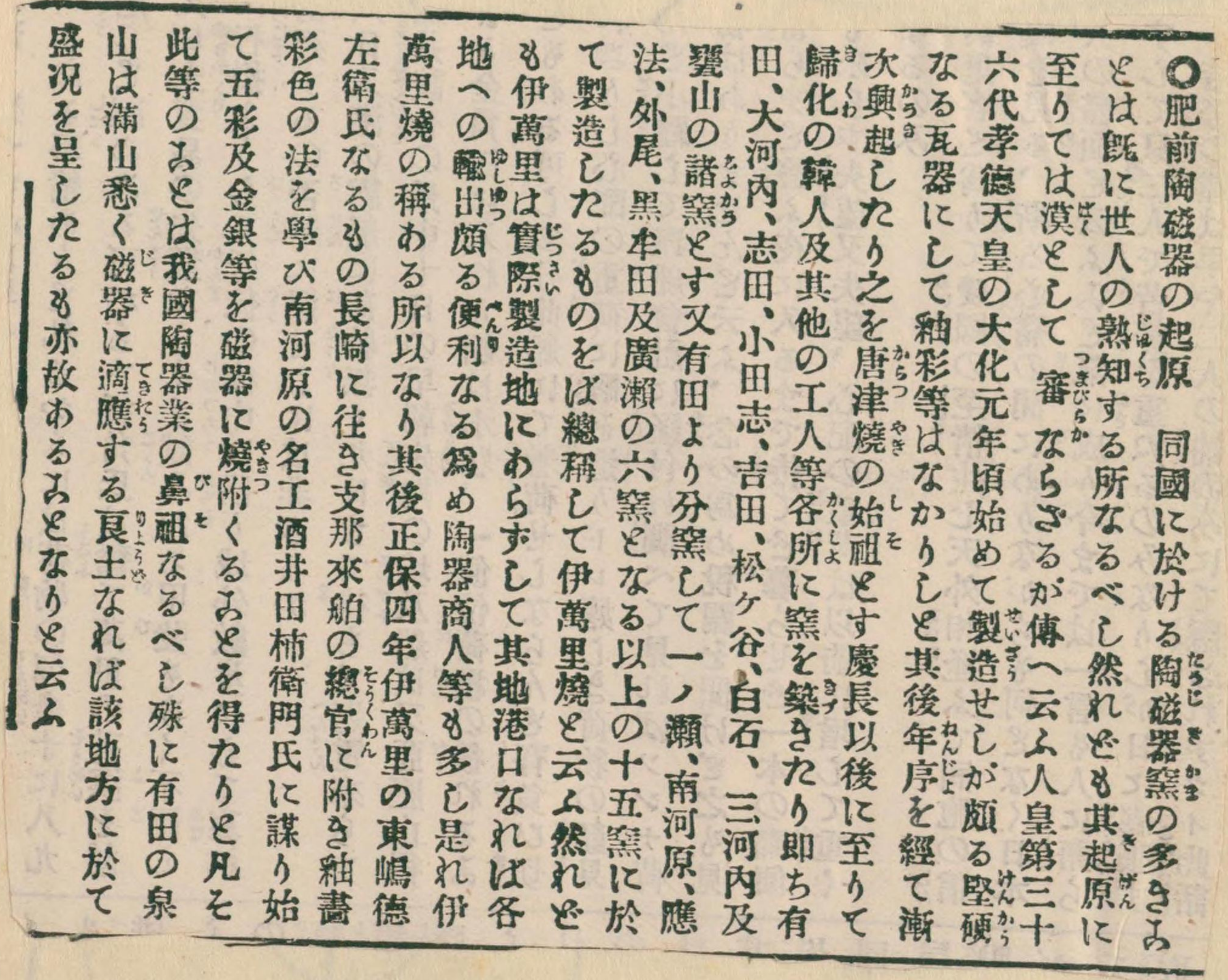






井戸椀





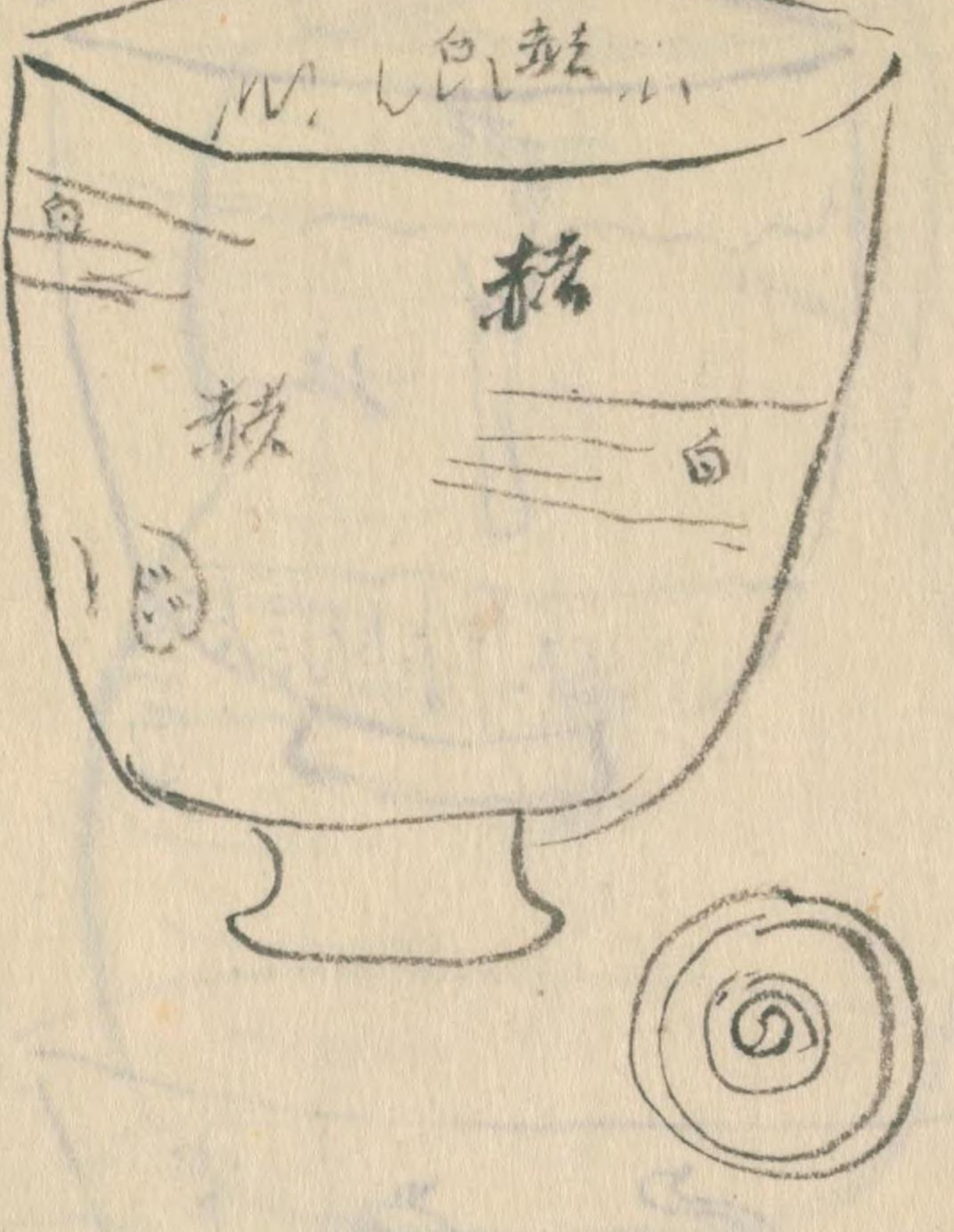
○肥前陶磁器の起原　同國に於ける陶磁器窯の多きことは既に世人の熟知する所なるべし然れども其起原に至りては漠として審ならざるが傳へ云ふ人皇第三十六代孝德天皇の大化元年頃始めて製造せしが頗る堅硬なる瓦器にして釉彩等はなかりしと其後年序を經て漸次興起したり之を唐津燒の始祖とす慶長以後に至りて歸化の韓人及其他の工人等各所に窯を築きたり即ち有田、大河內、志田、小田志、吉田、松ケ谷、白石、三河內及甕山の諸窯とす又有田より分窯して一ノ瀨、南河原、應法、外尾、黑牟田及廣瀨の六窯となる以上の十五窯に於て製造したるものを總稱して伊萬里燒と云ふ然れども伊萬里は實際製造地にあらずして其地港口なれば各地への輸出頗る便利なる爲め陶器商人等も多し是れ伊萬里燒の稱ある所以なり其後正保四年伊萬里の東嶋德左衛氏なるもの長崎に往き支那來舶の總官に附き釉畫彩色の法を學び南河原の名工酒井田柿衛門氏に謀り始て五彩及金銀等を磁器に燒附くることを得たりと凡そ此等のことは我國陶器業の鼻祖なるべし殊に有田の泉山は滿山悉く磁器に適應する良土なれば該地方に於て盛況を呈したるも亦故あることなりと云ふ

淡路焼

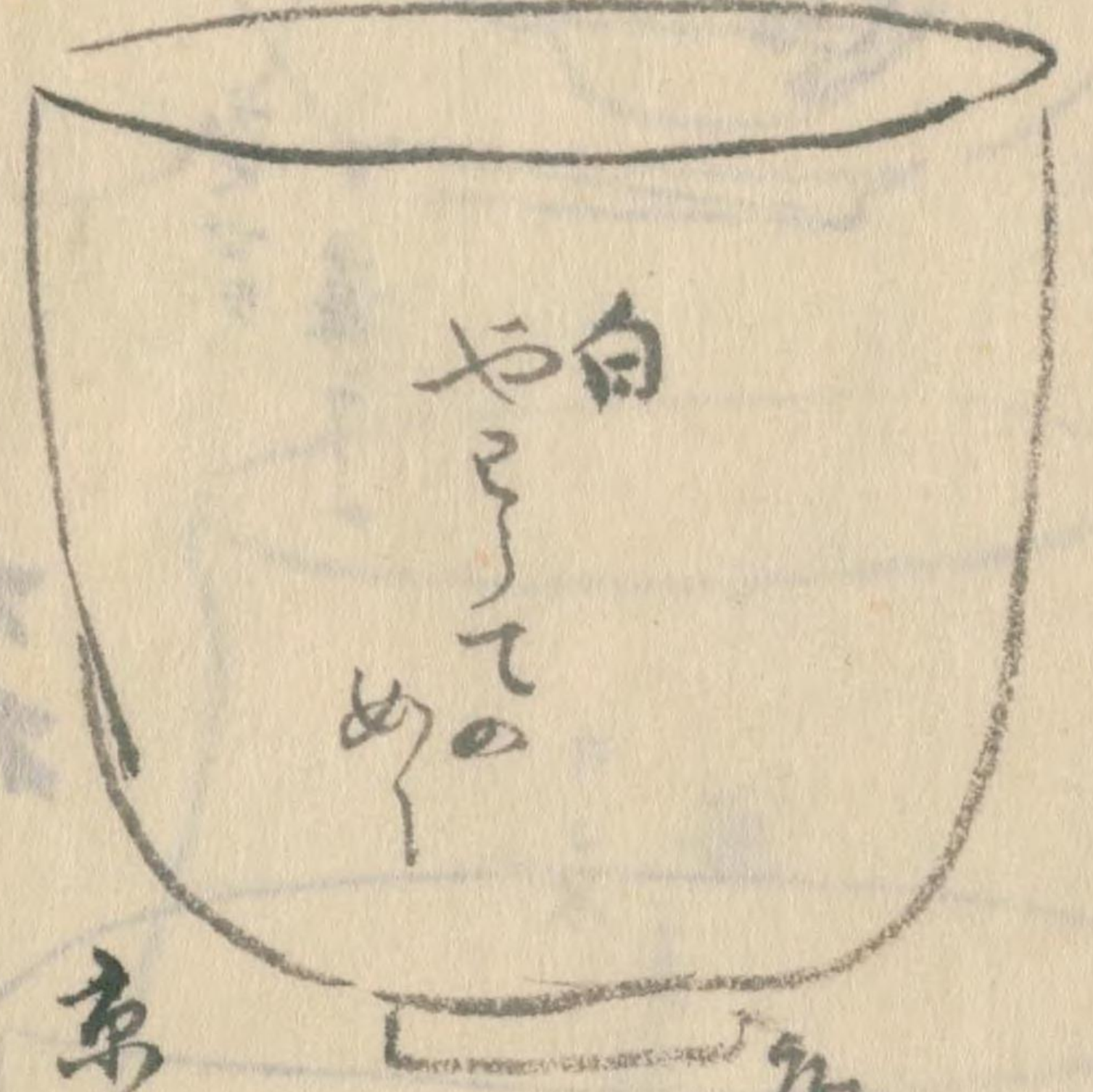
文政年間 淡路国三原郡稲田村豪農加集珉平氏発明ニして自己の邸宅に窯を築きて試陶したり氏ハ國焼を起し又京都より陶工を聘し京阪ハ粟田五条坂の名工尾形周平氏に就き大に陶業を研究したり天保三年より藩主蜂須賀侯に召し出され奨励せられたりけるといふ之れ即ち淡路焼なり

古萩陶器公園 名世に著く有りぬ

萩

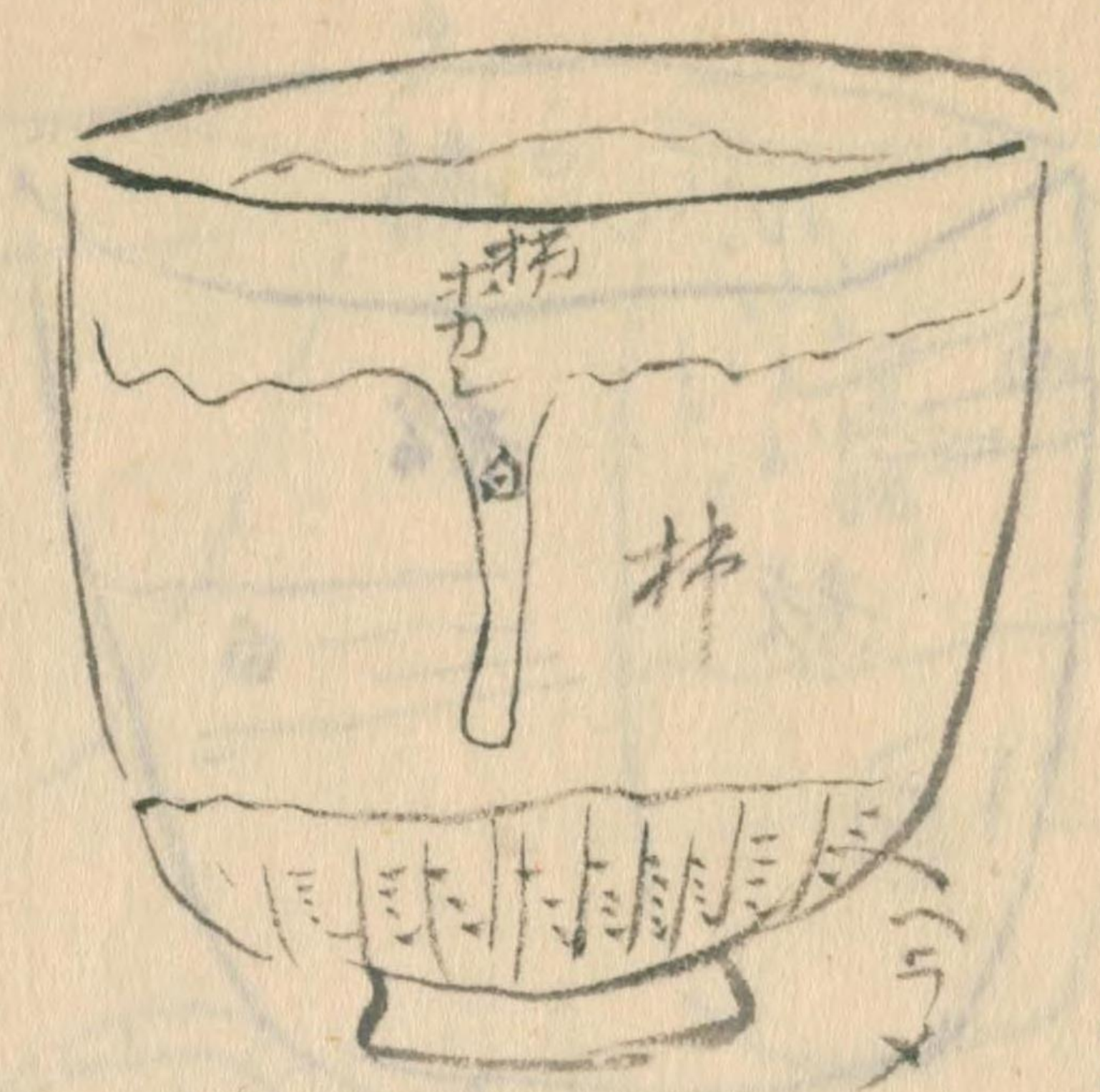


[illegible]焼
うり口



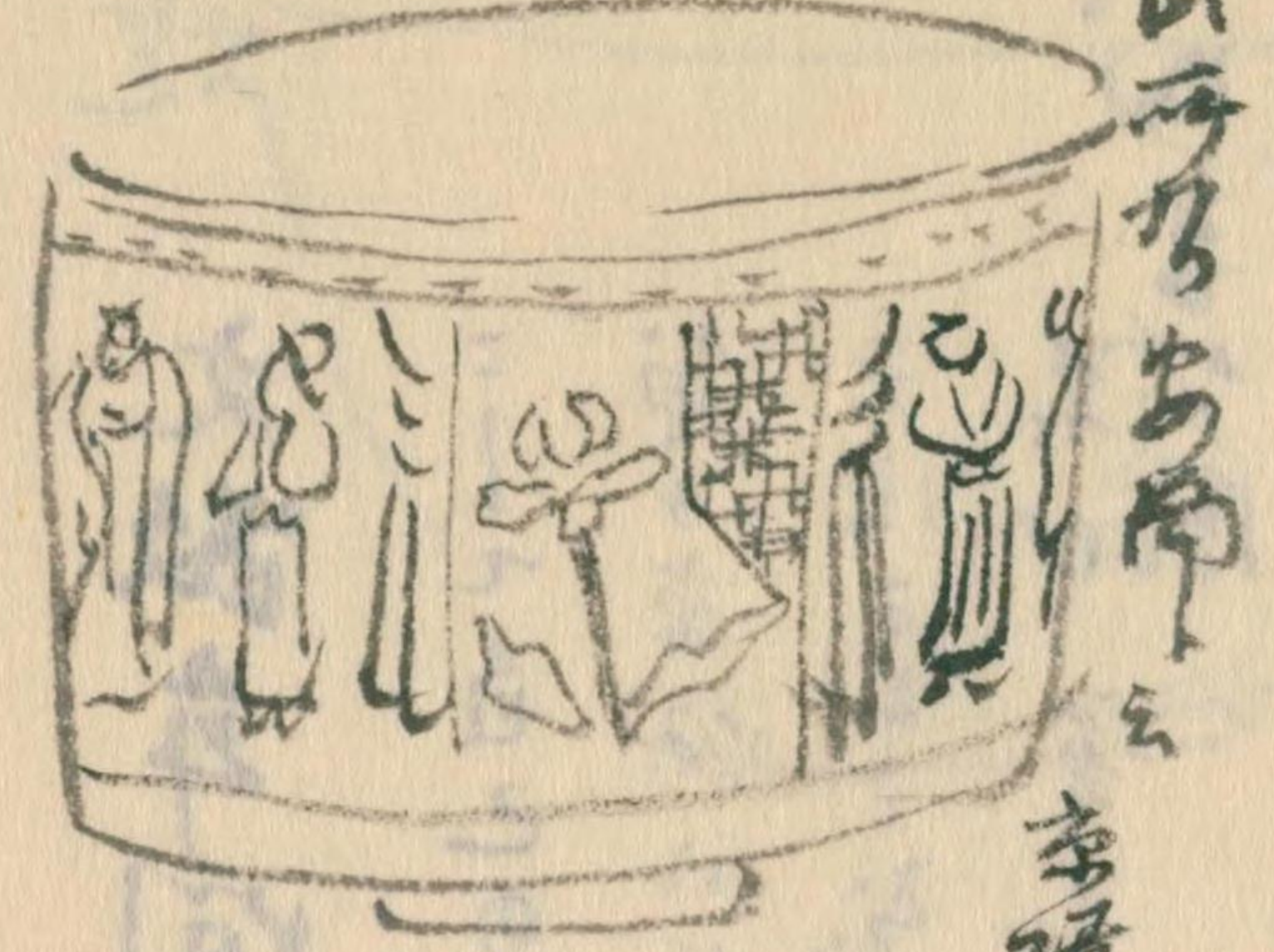
やく
京みやこ来川善吉

志か楽

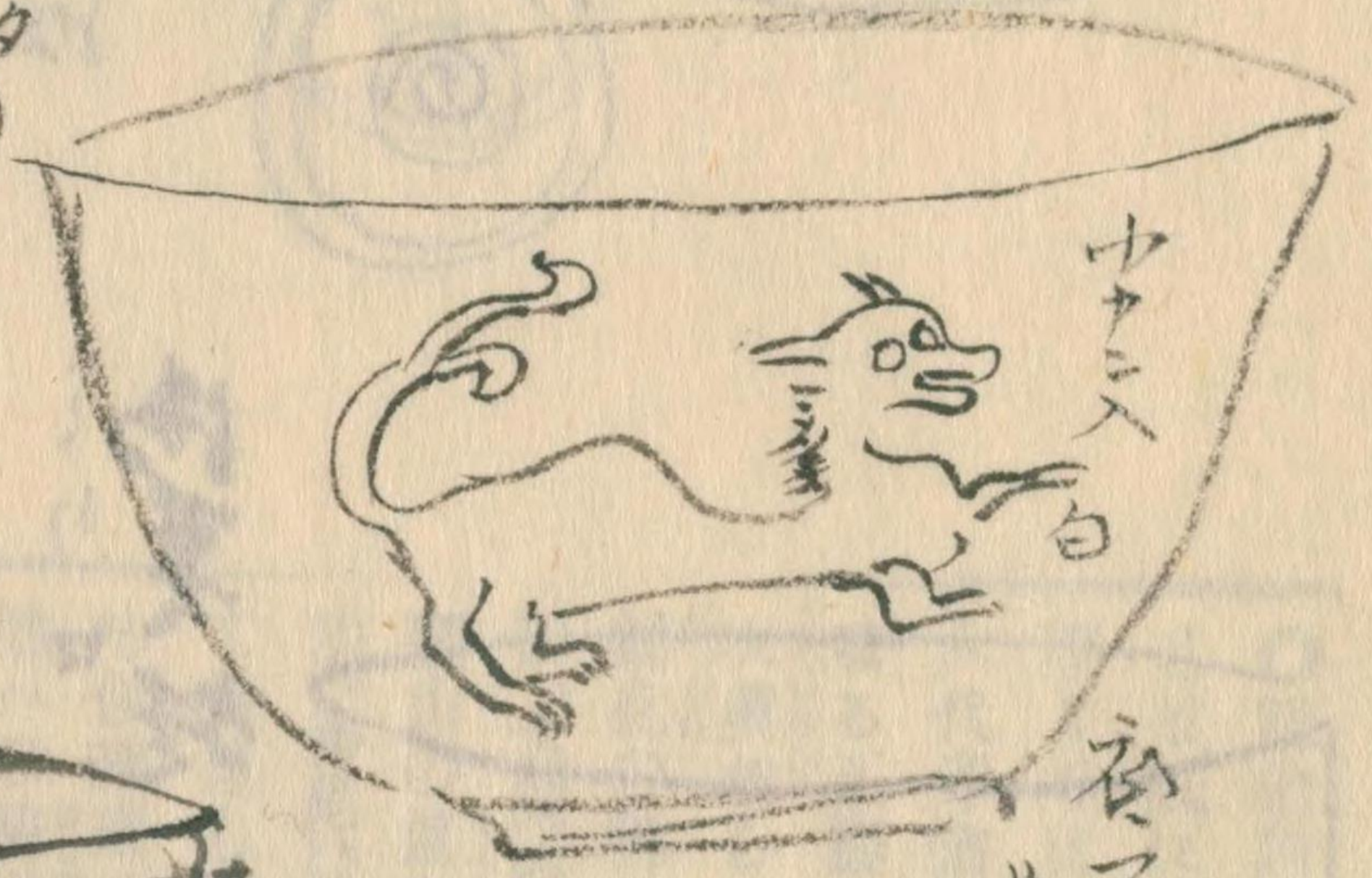


笄氏所持安南ト云

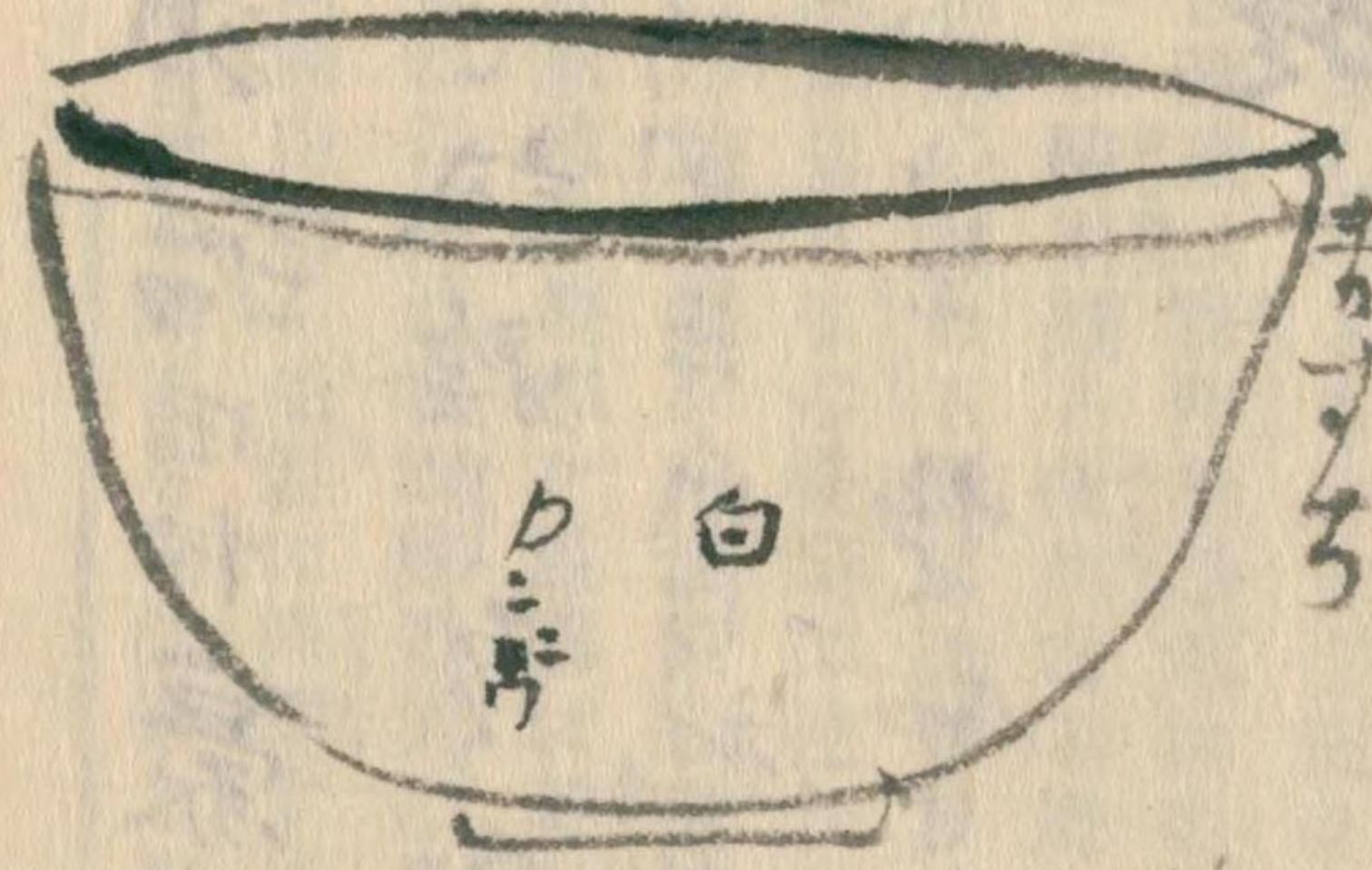
古様之仕タリ



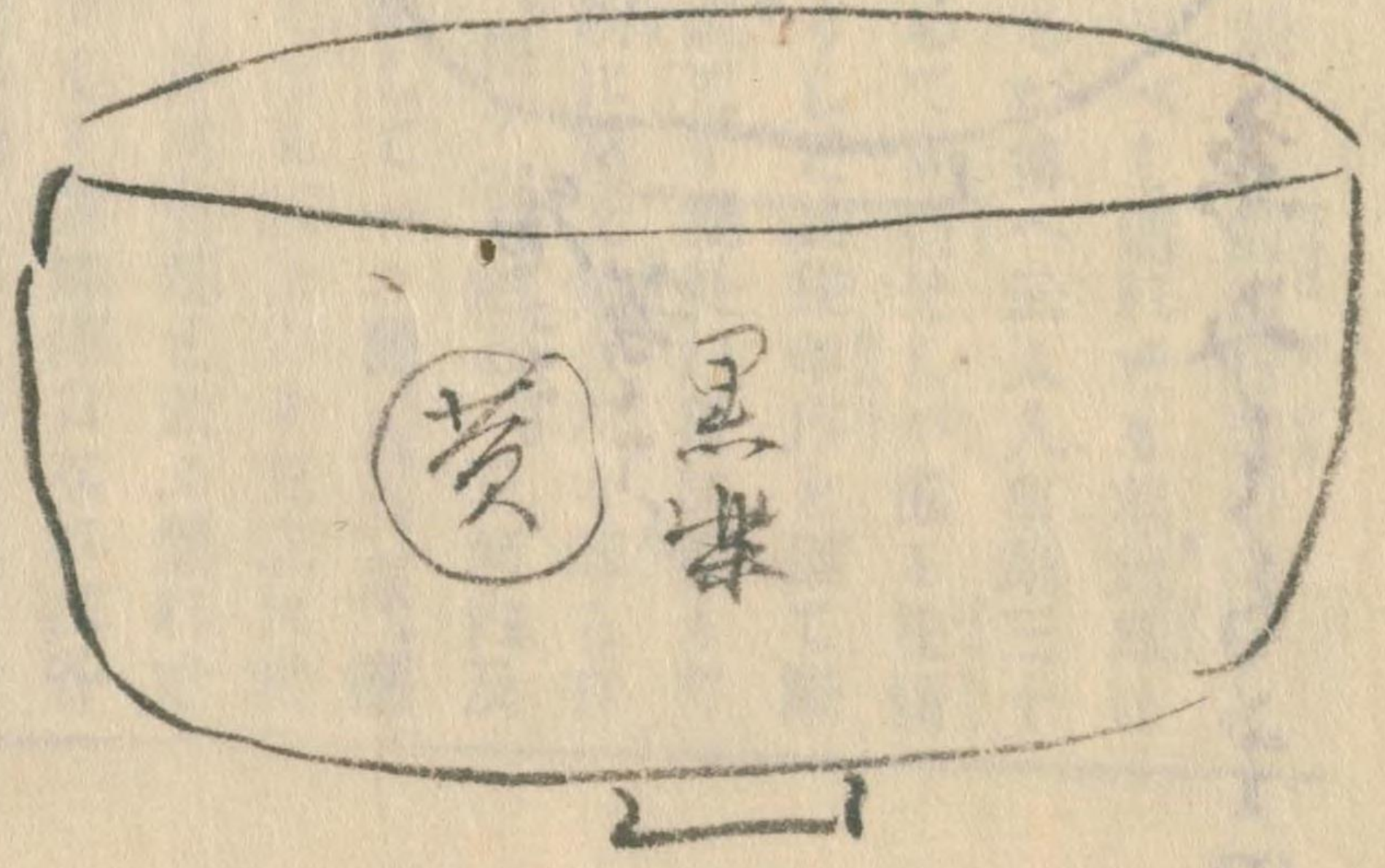
絵付楽


小ヤニ入
白
底マデ
薬アリ

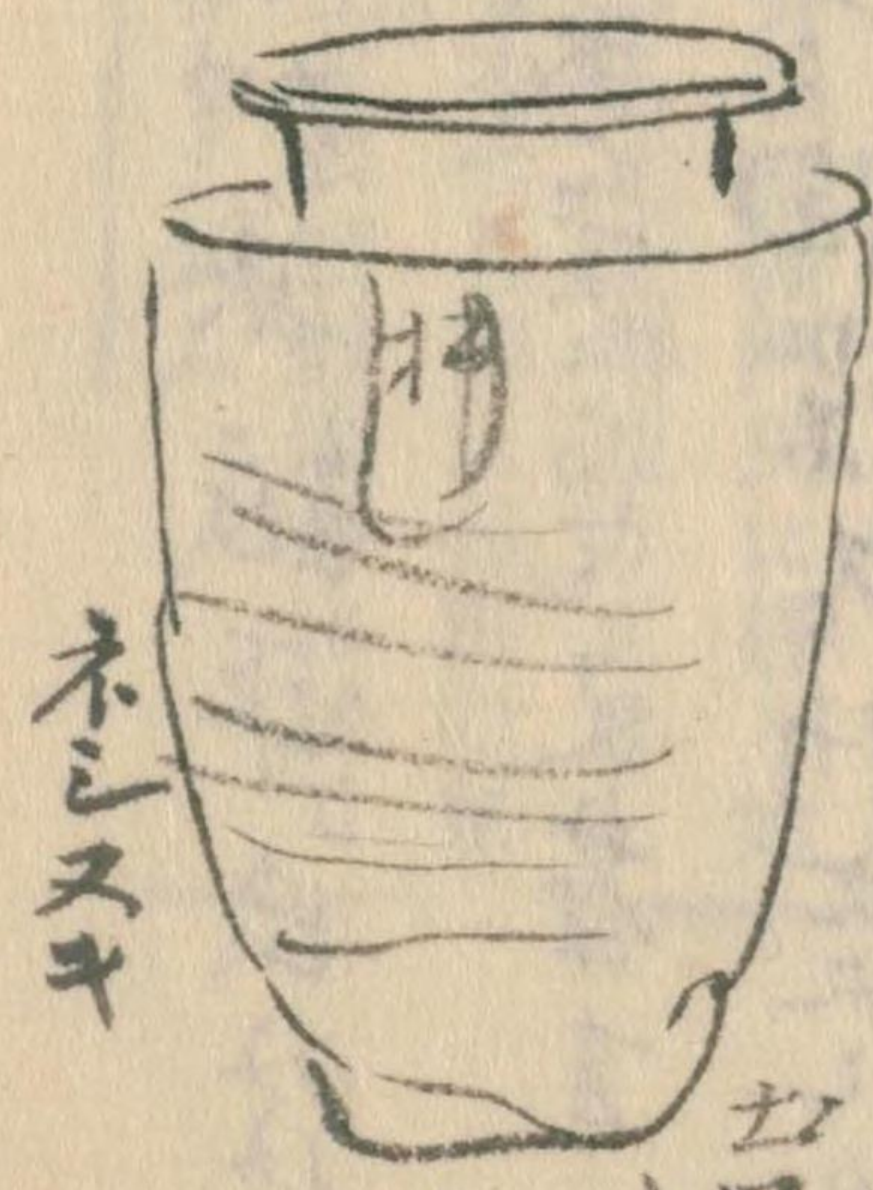
安南



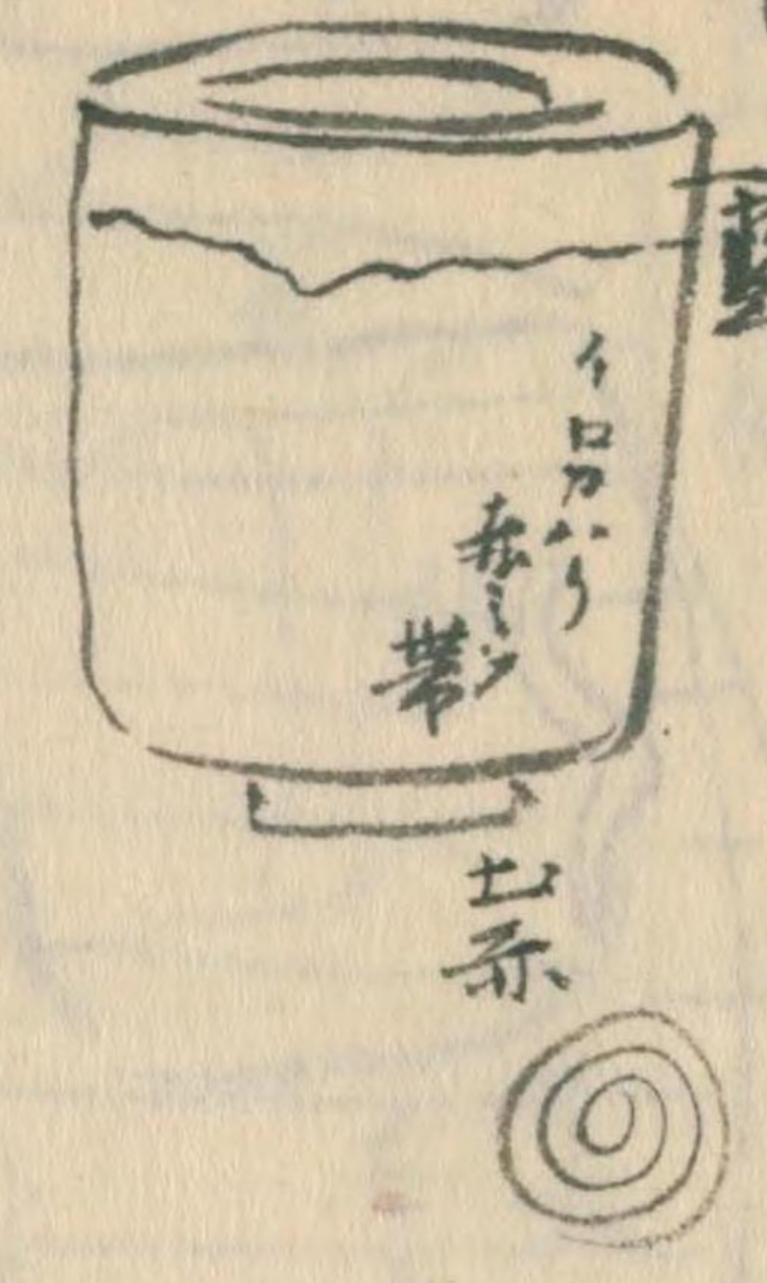
大樋



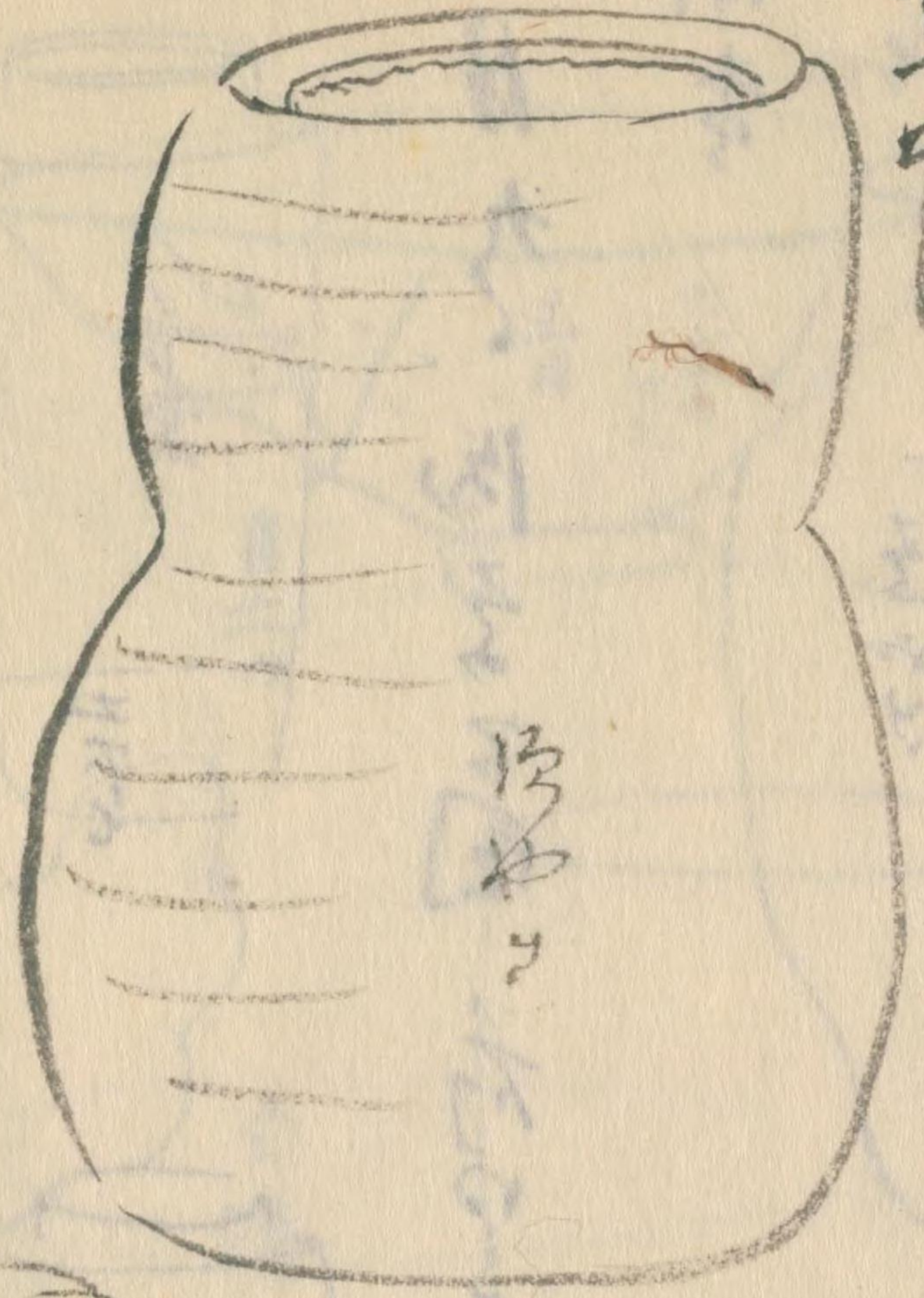
肥後薩摩

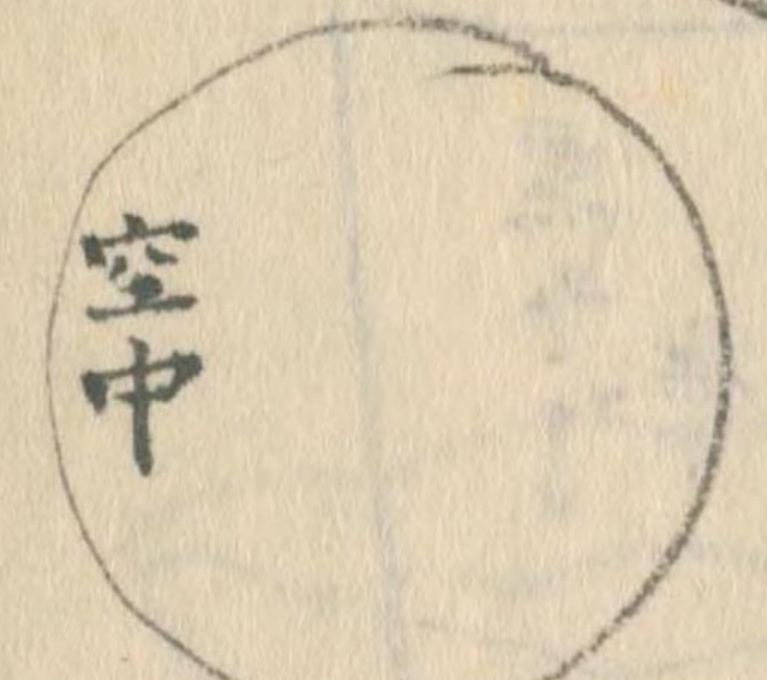

柿
ネジヌキ
土前
キメ細
本糸切

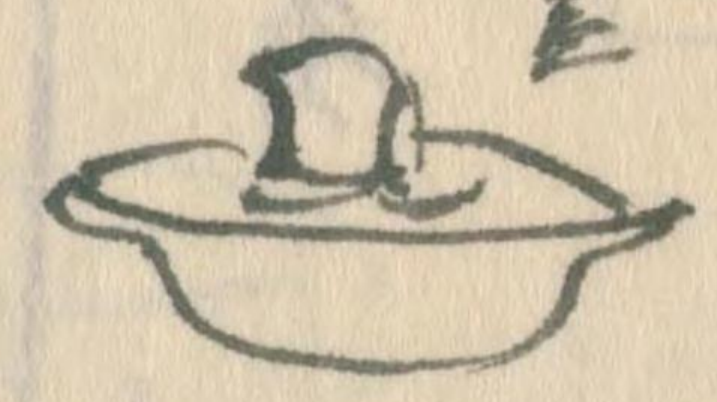
黄瀬戸


盃
イロカハリ
赤ミノ
帯
土赤

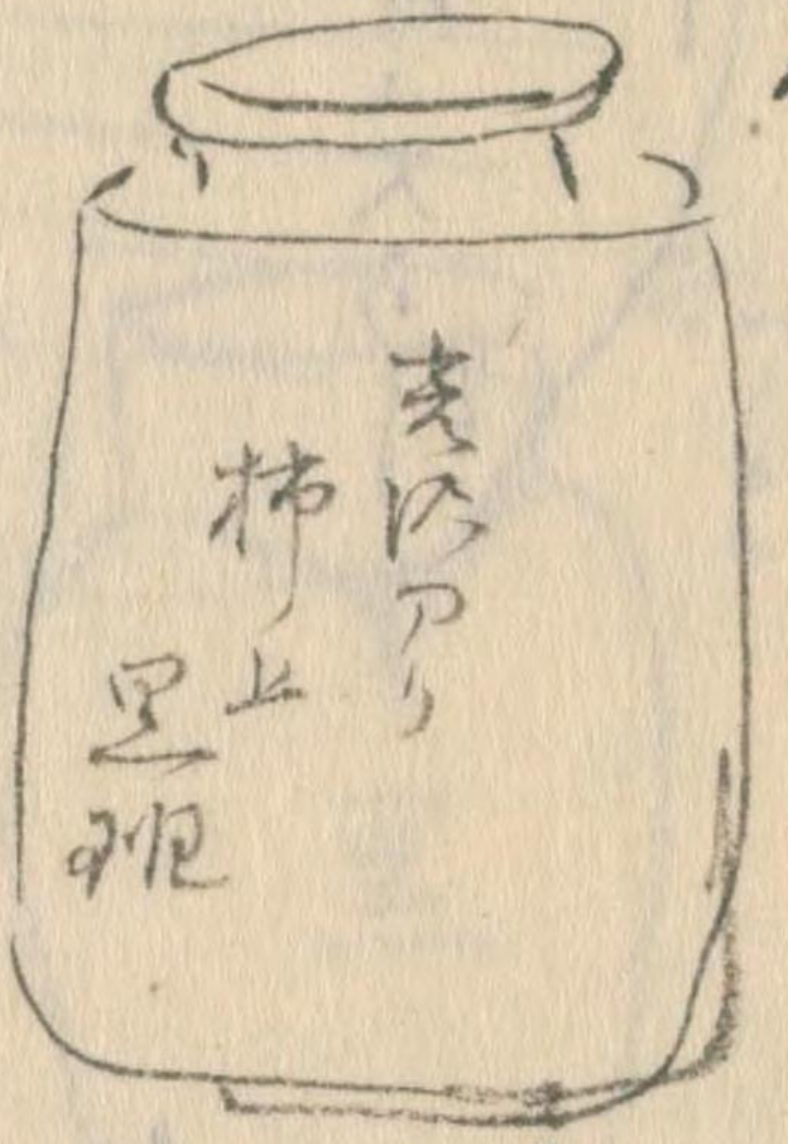
空中



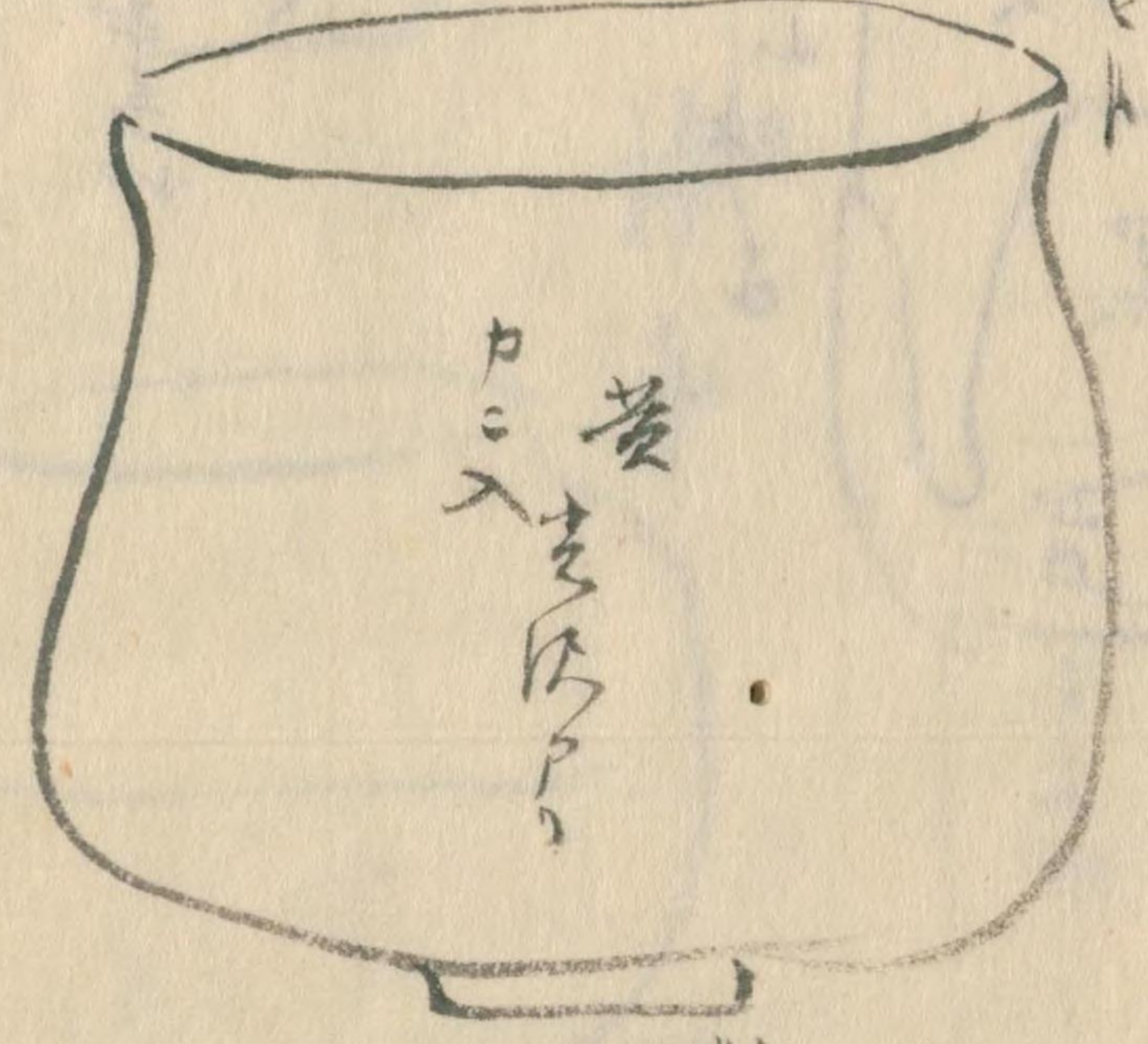




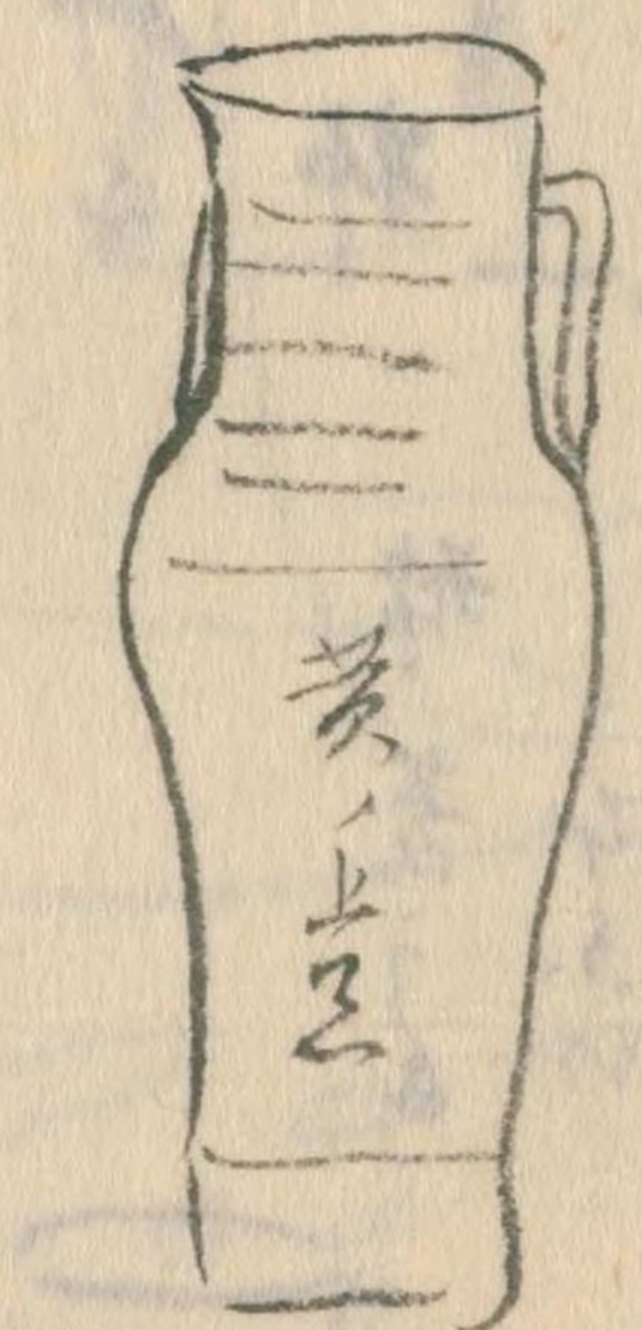
伊賀


青ビアリ
柿上
黒釉
本糸切
土赤

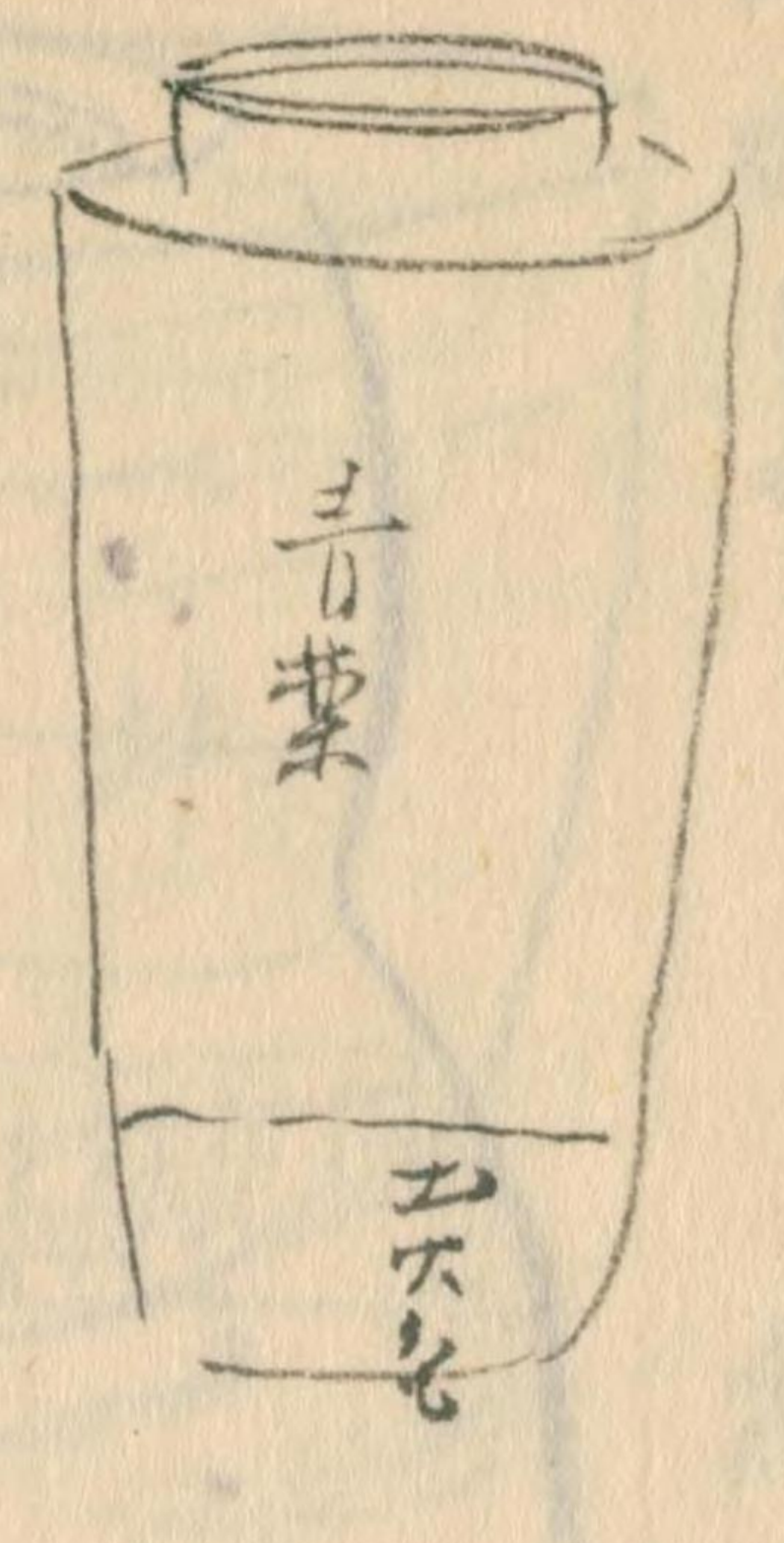
キセト

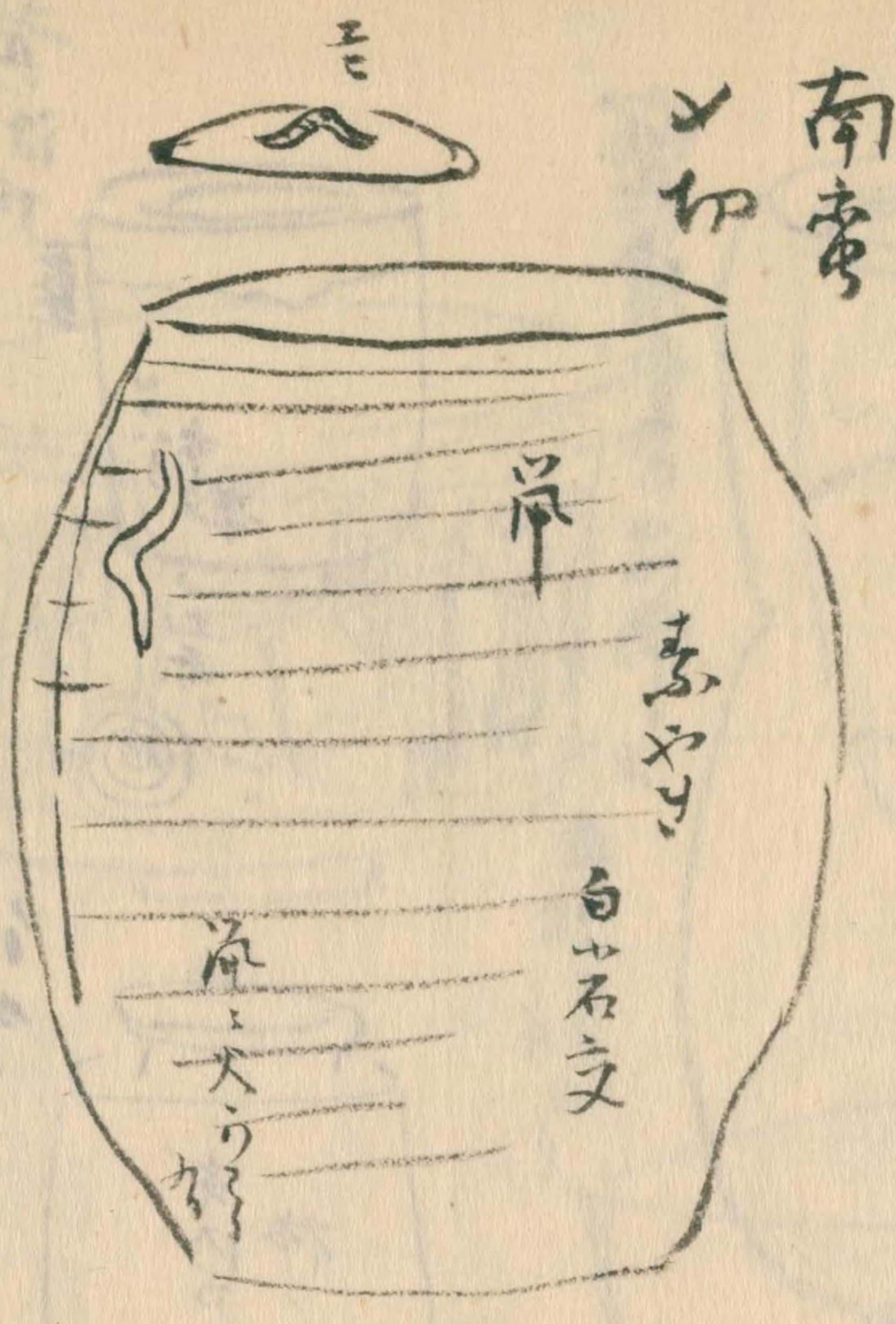

黄
カニ入
青ビアリ
土赤

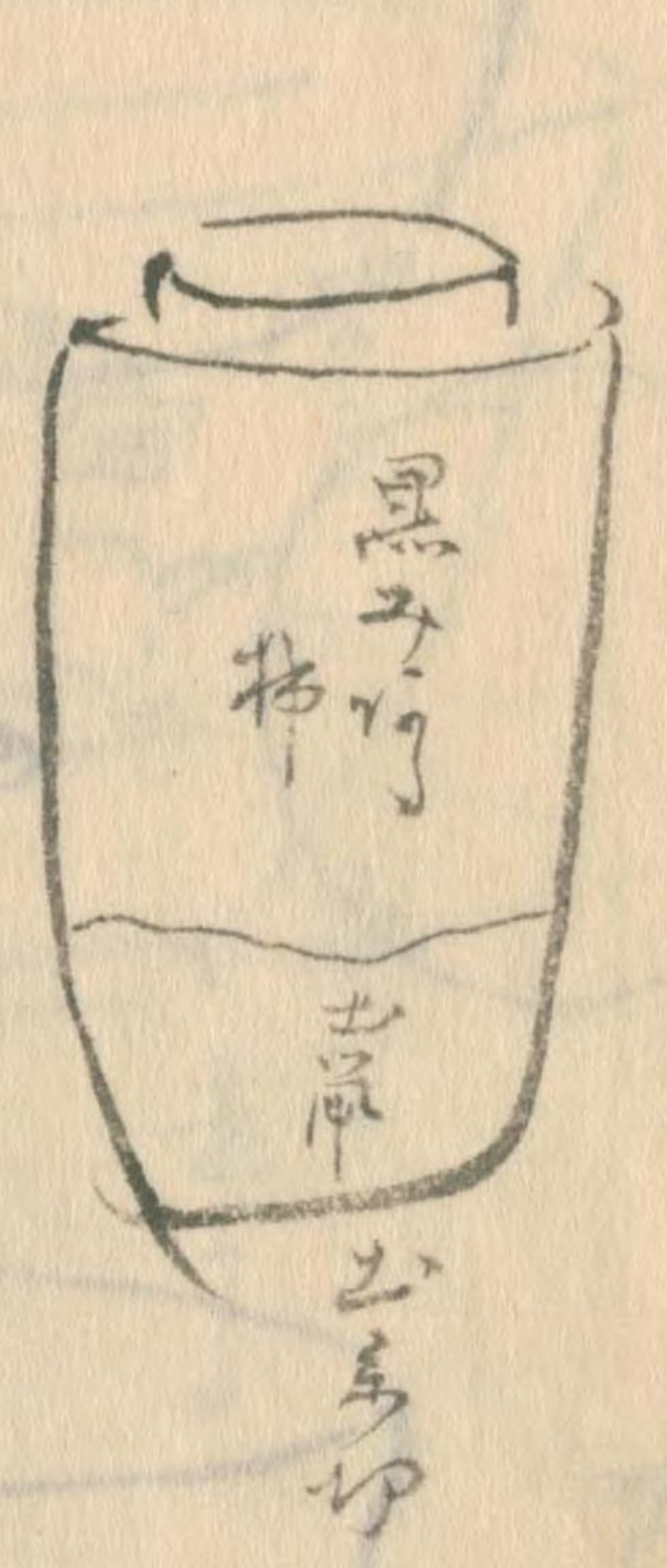
高取

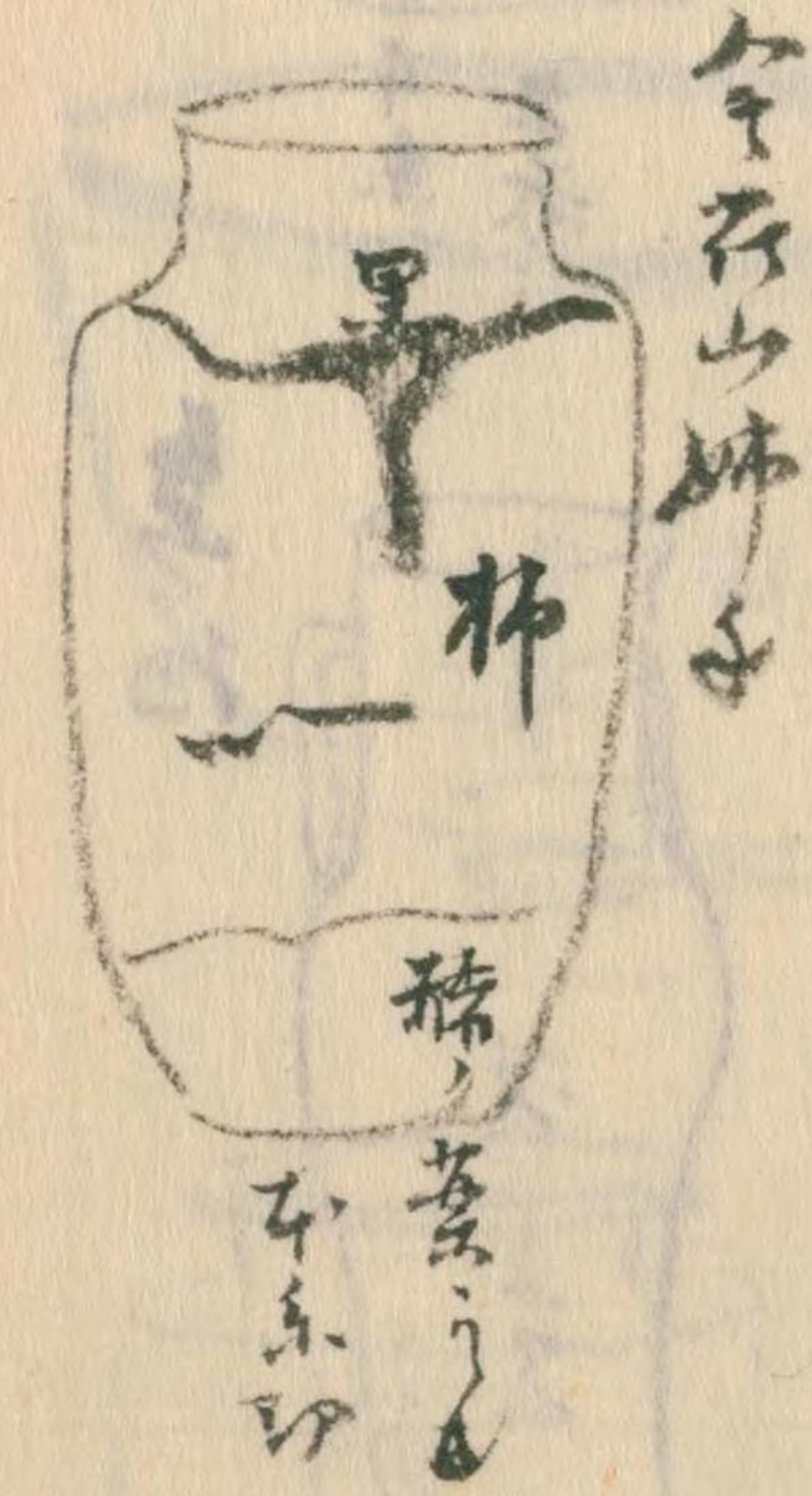


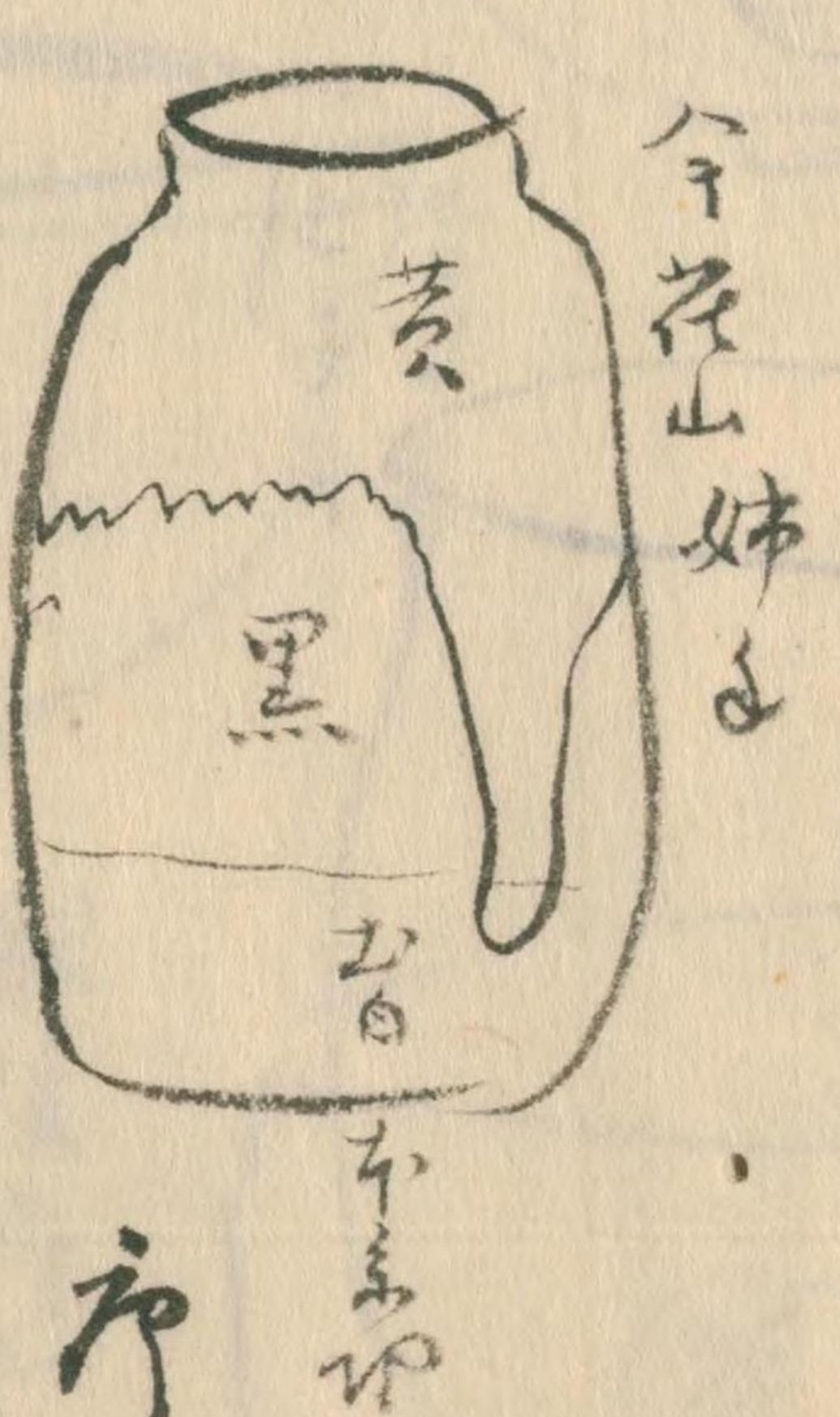
八月九日 陶器之図 前田家蔵

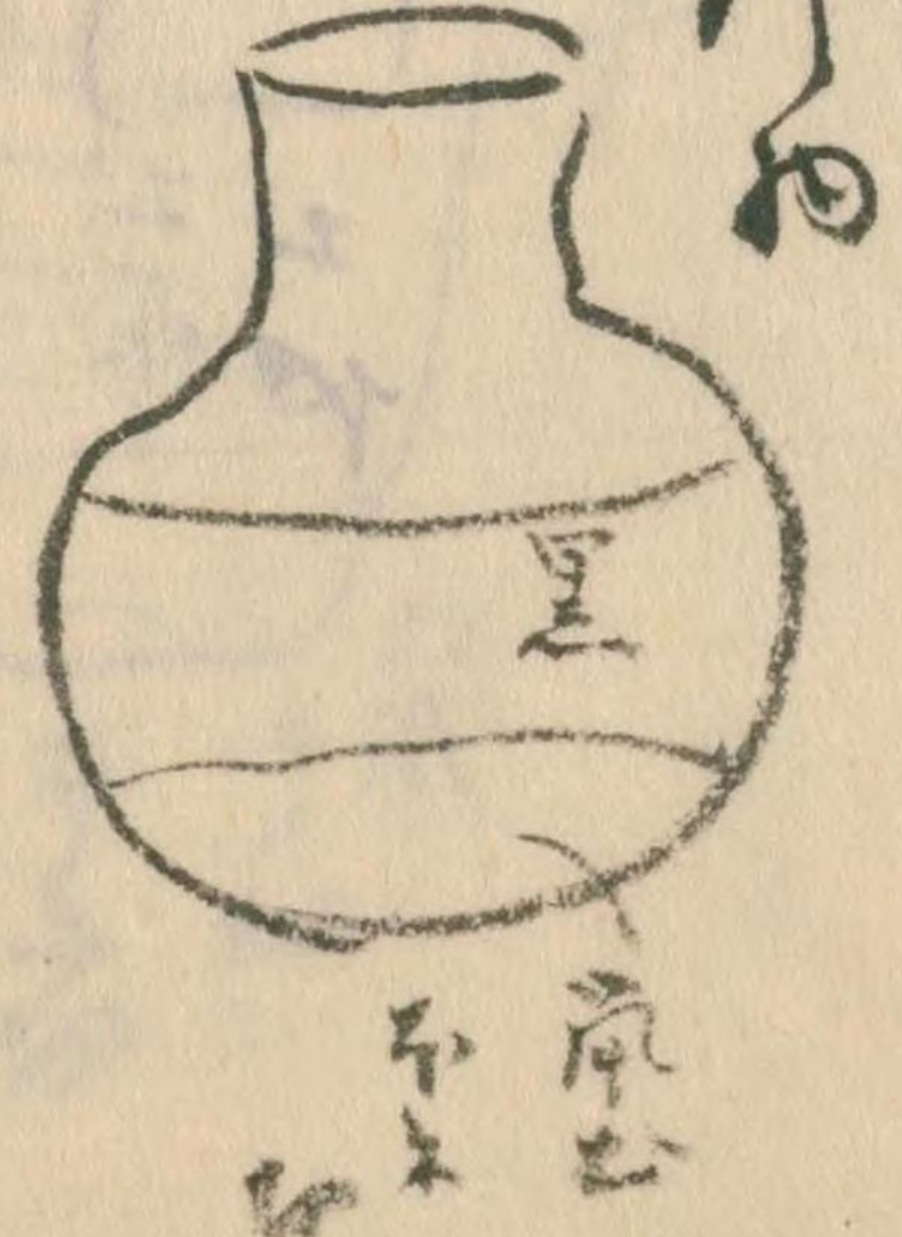


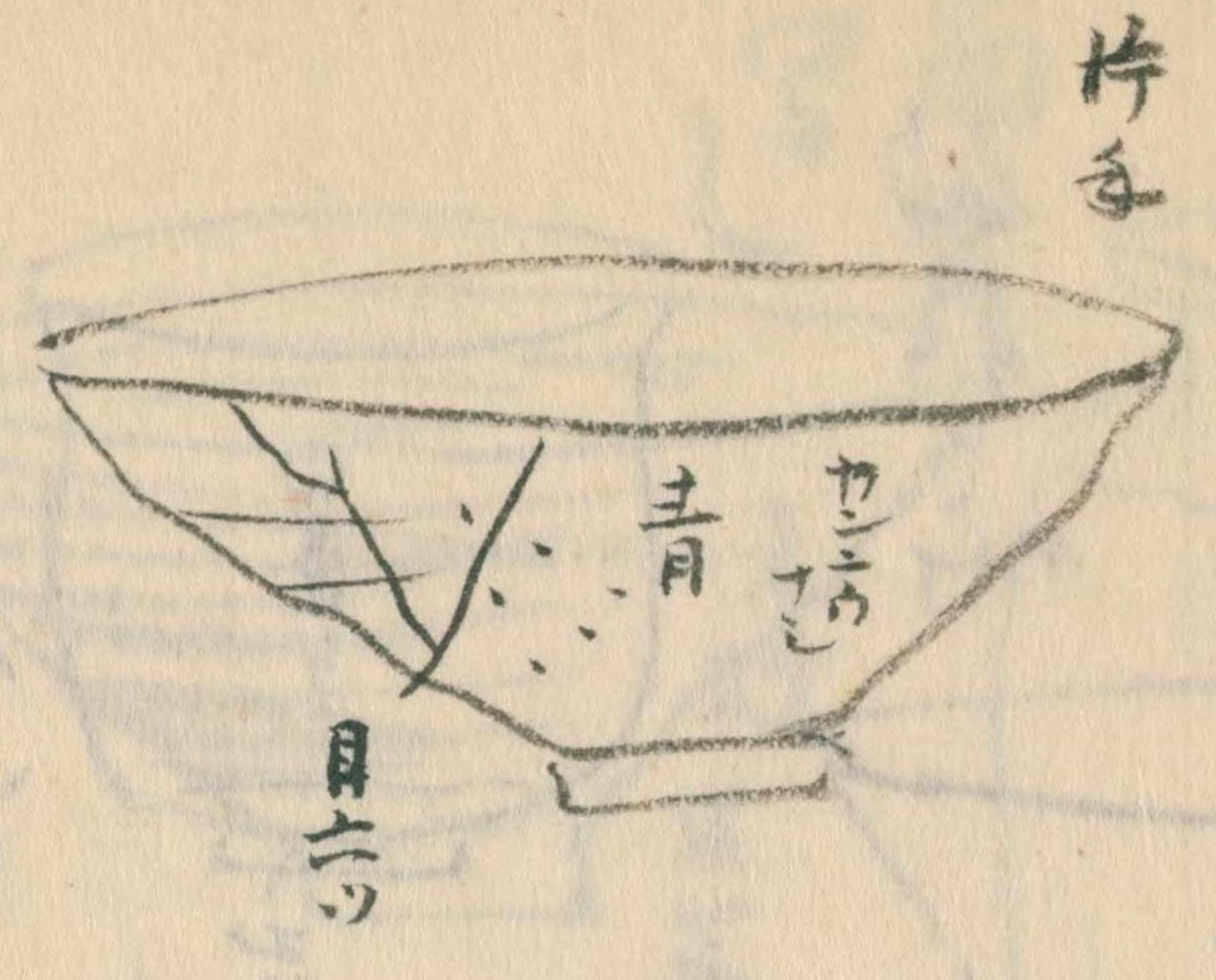

南蛮
〆印
三ミ
黒
赤やき
白山石文
底ニ大ワレ有

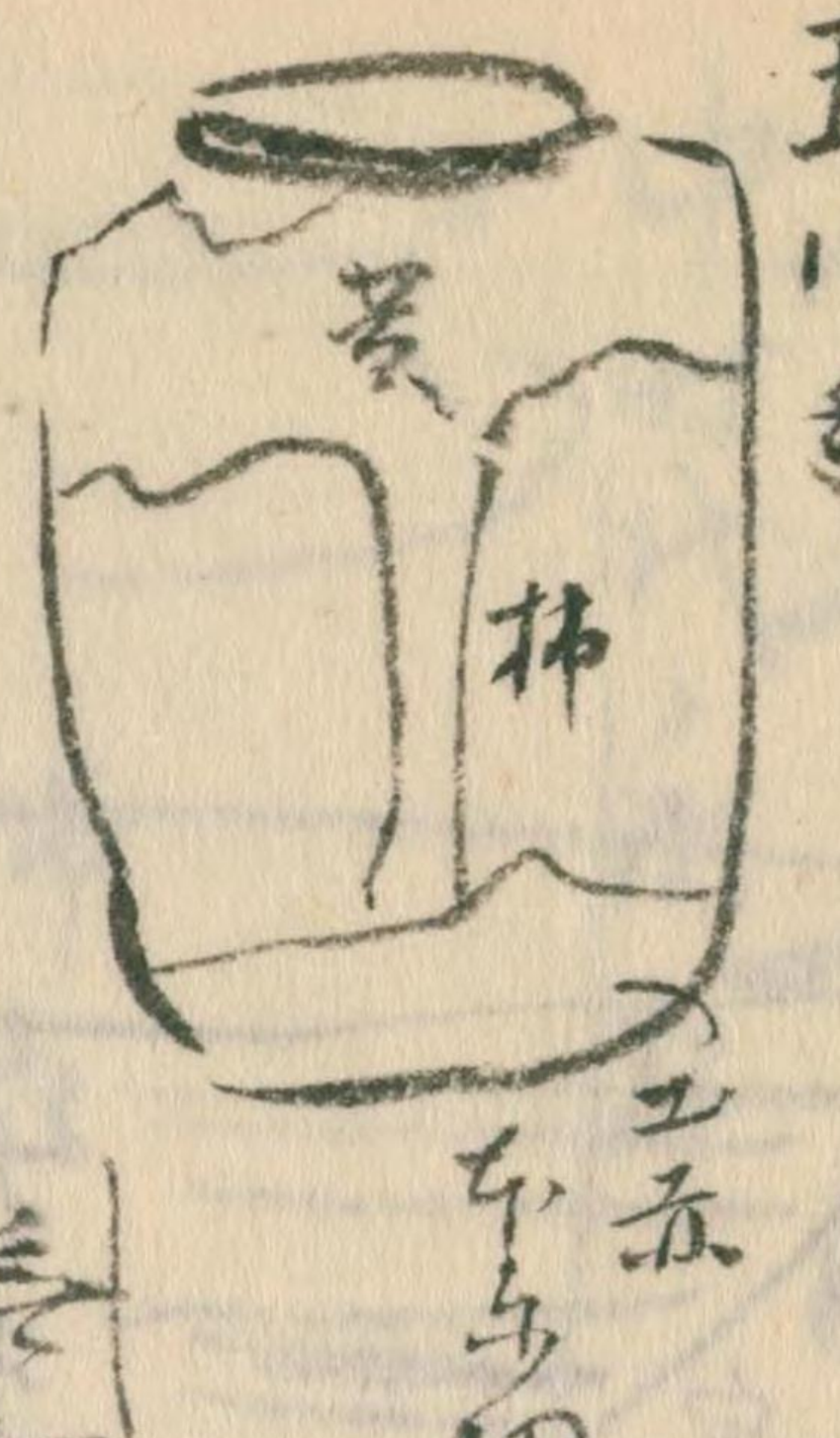

ぜゝ
黒み柿
柿
土黒
土糸切

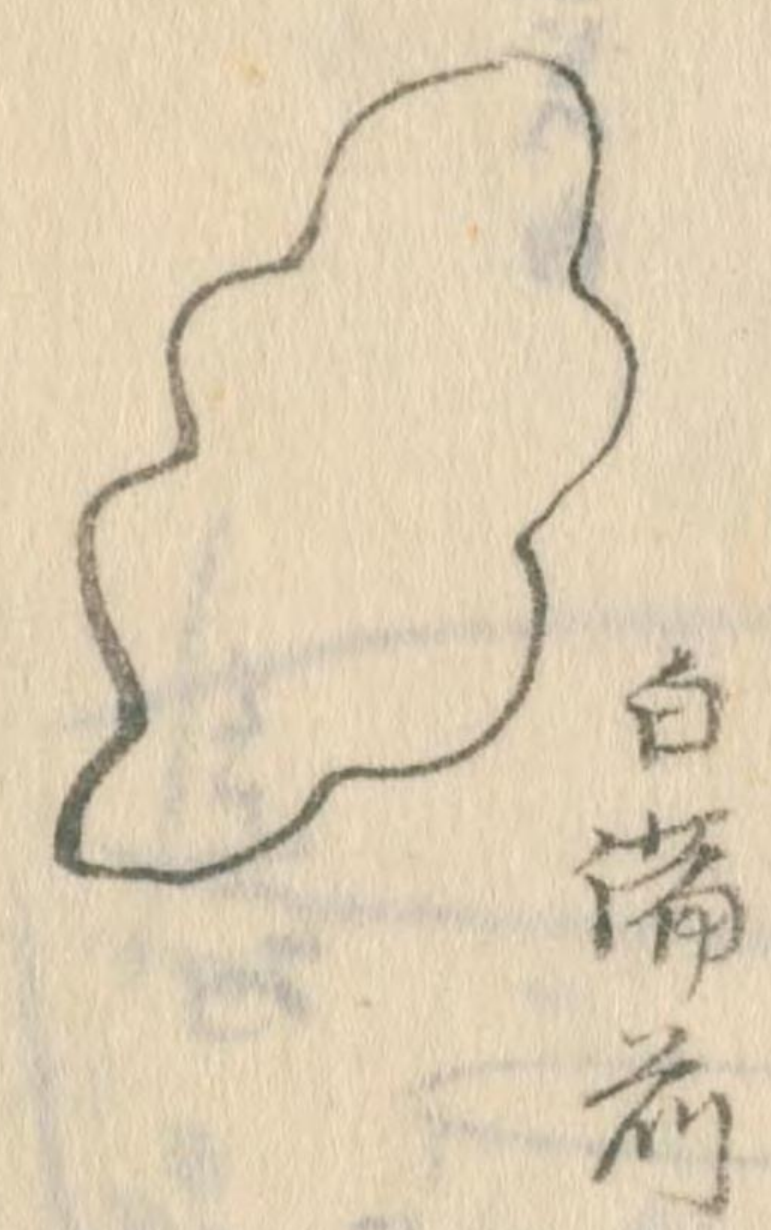

今戸山姉手
黒
柿
裾ノ黄ウス
糸切

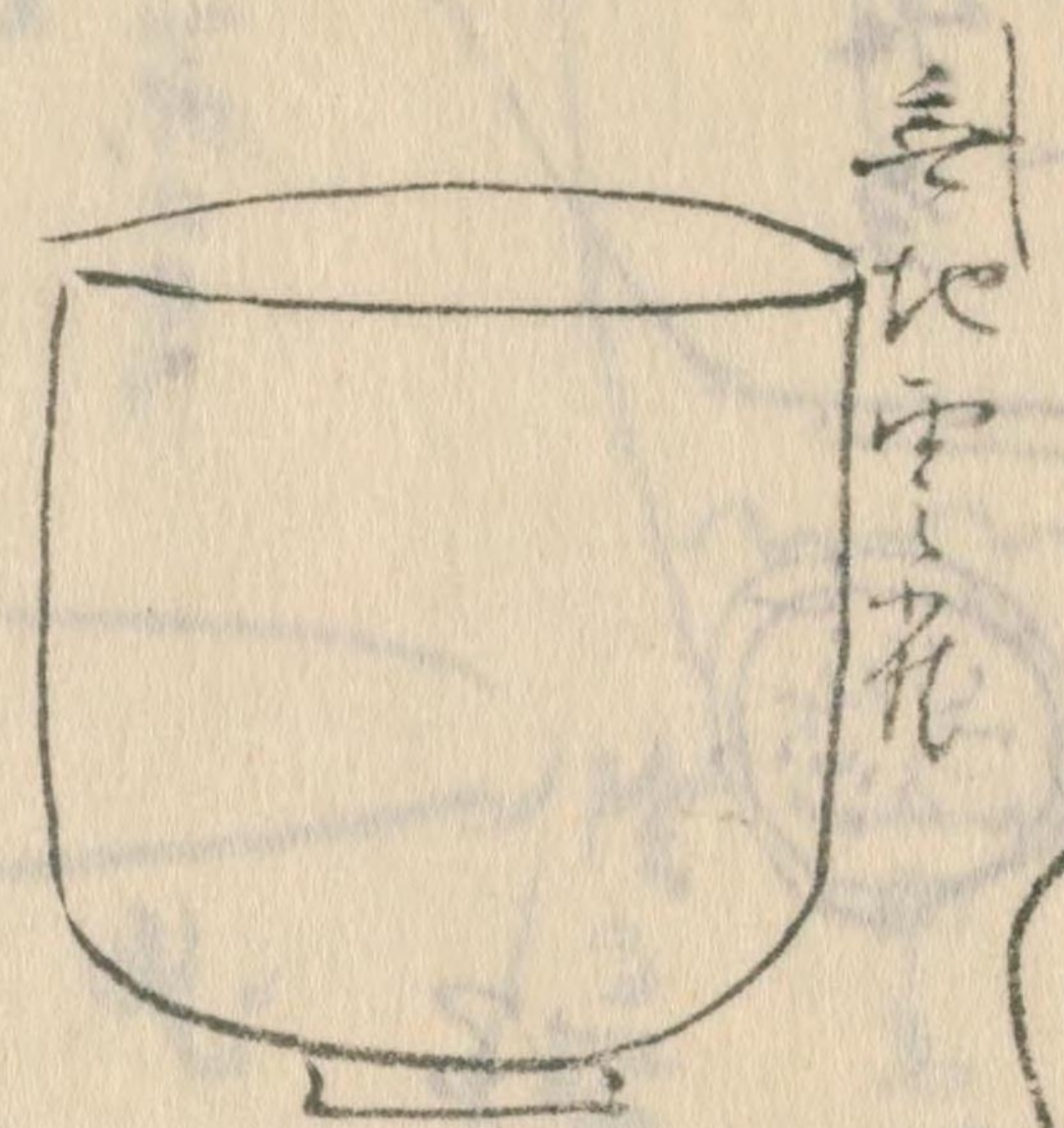

今戸山姉手
黄
黒
土白
糸切

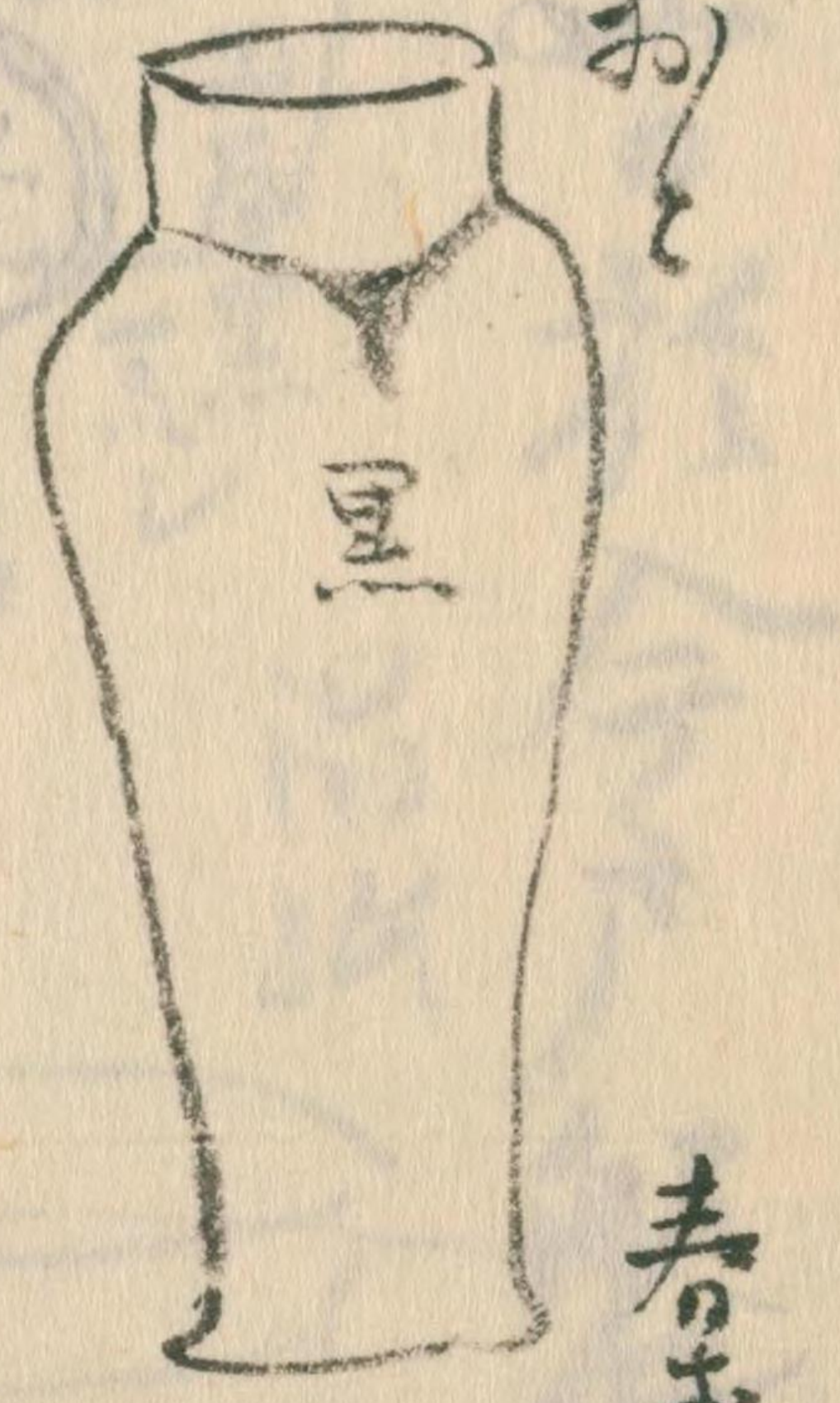


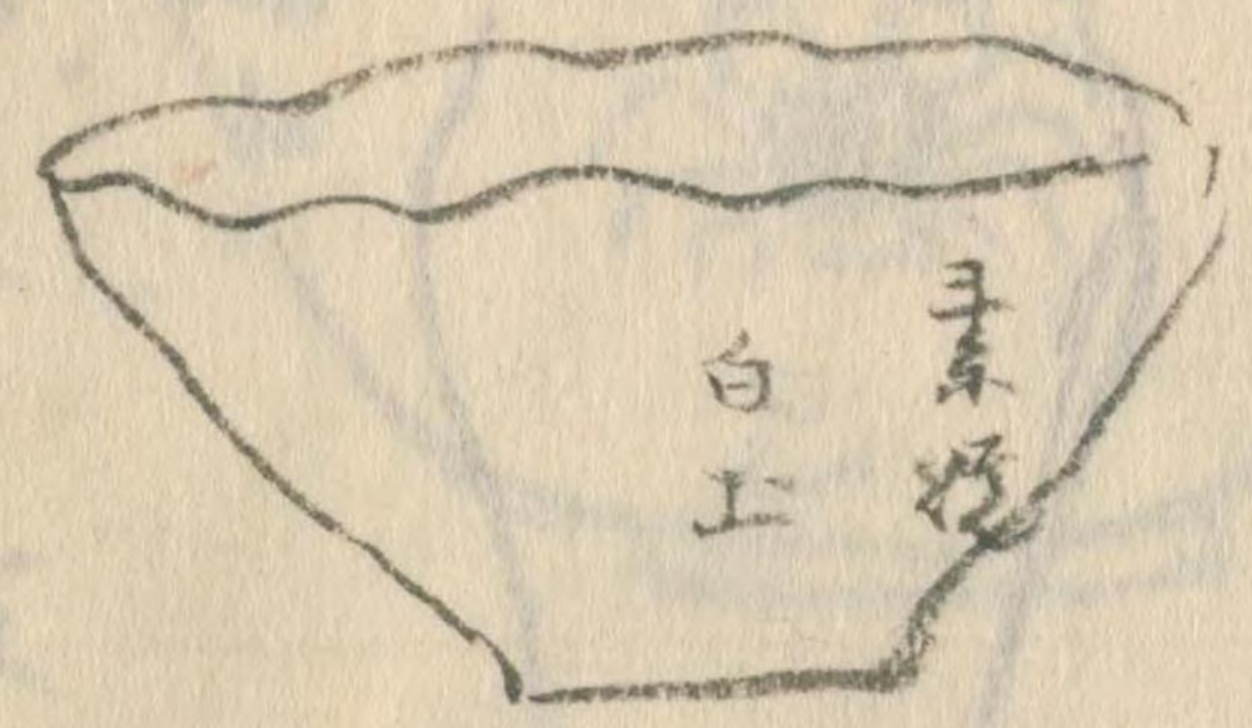

片手
青
カンニュウ
目六ツ

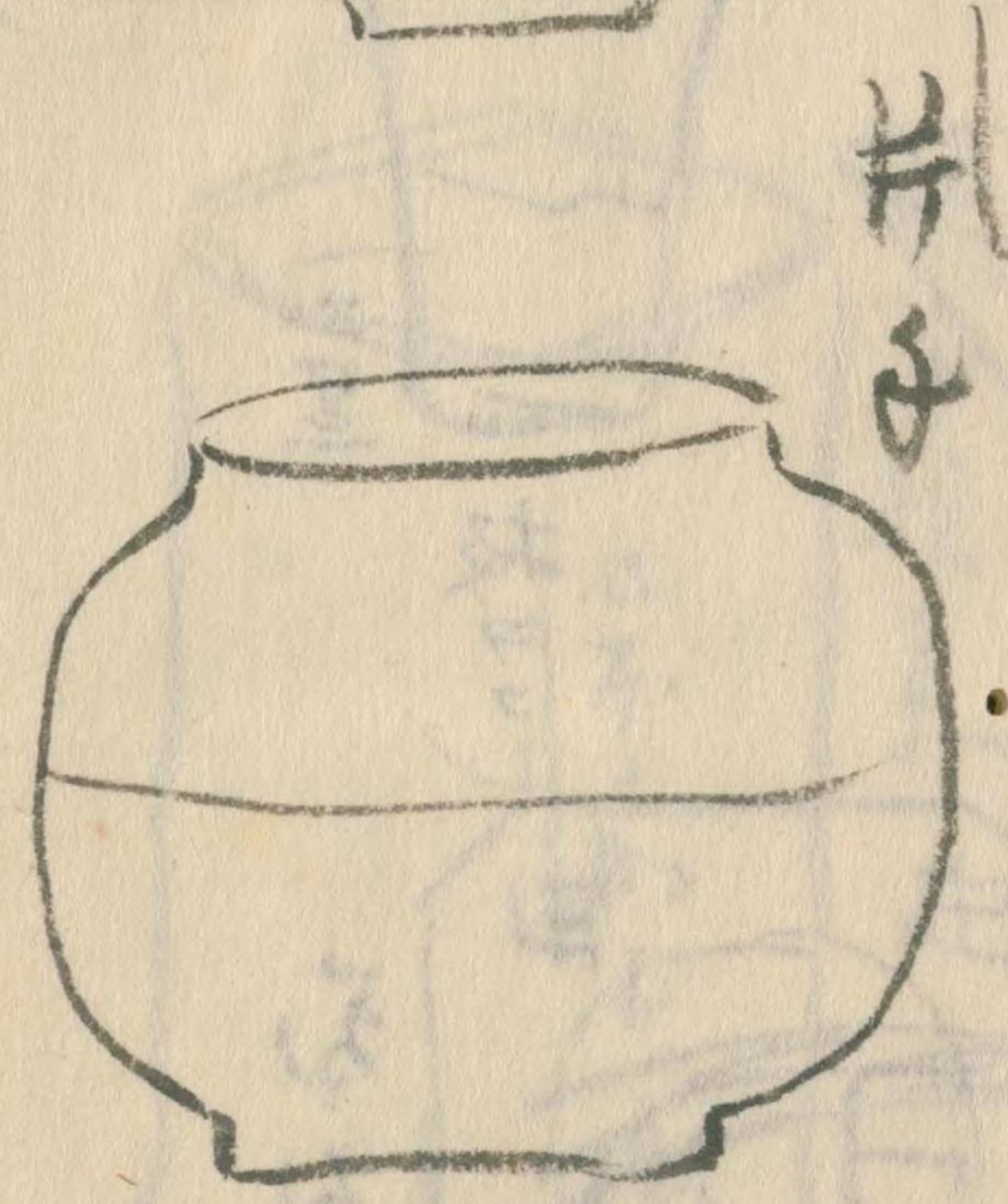


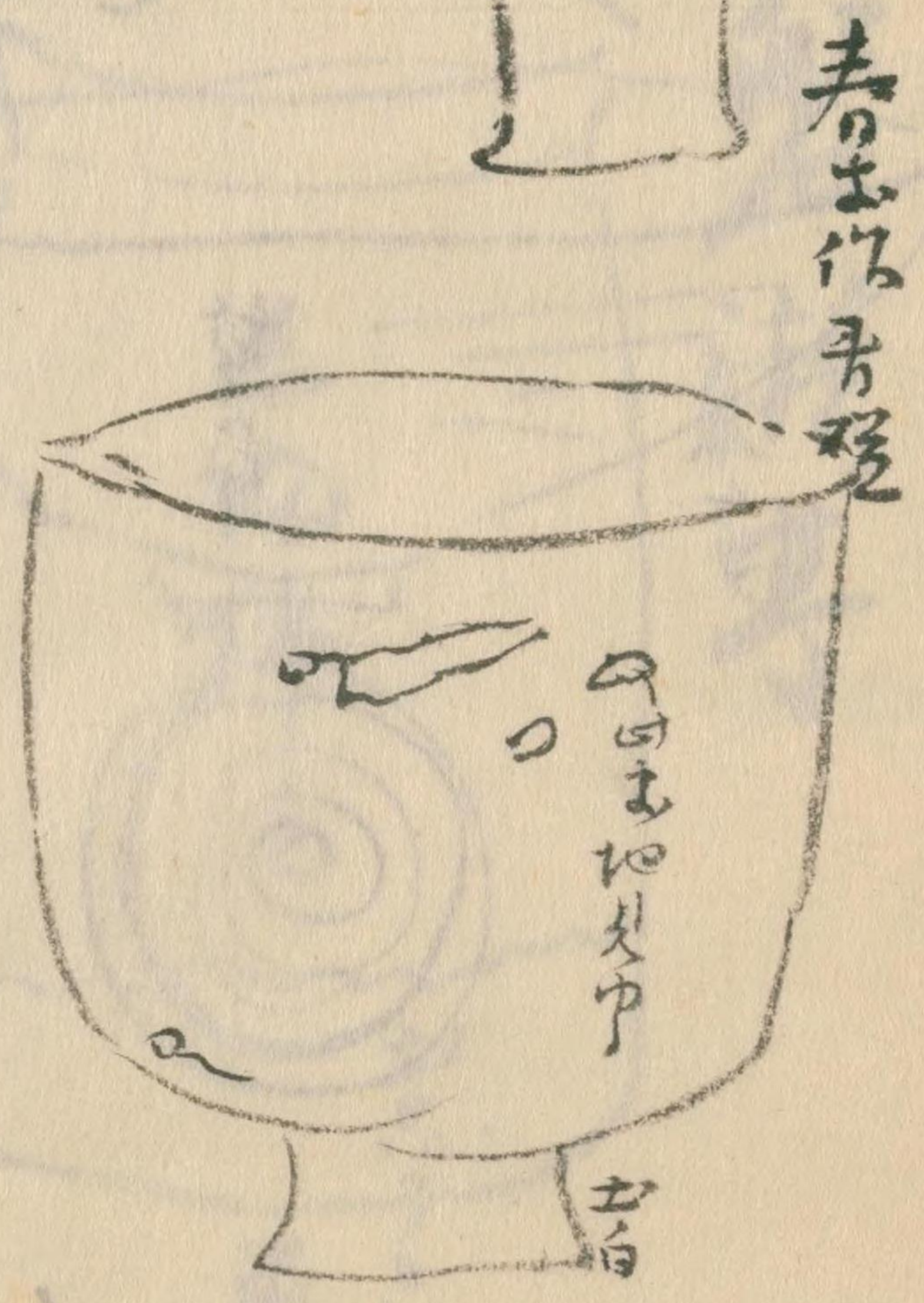




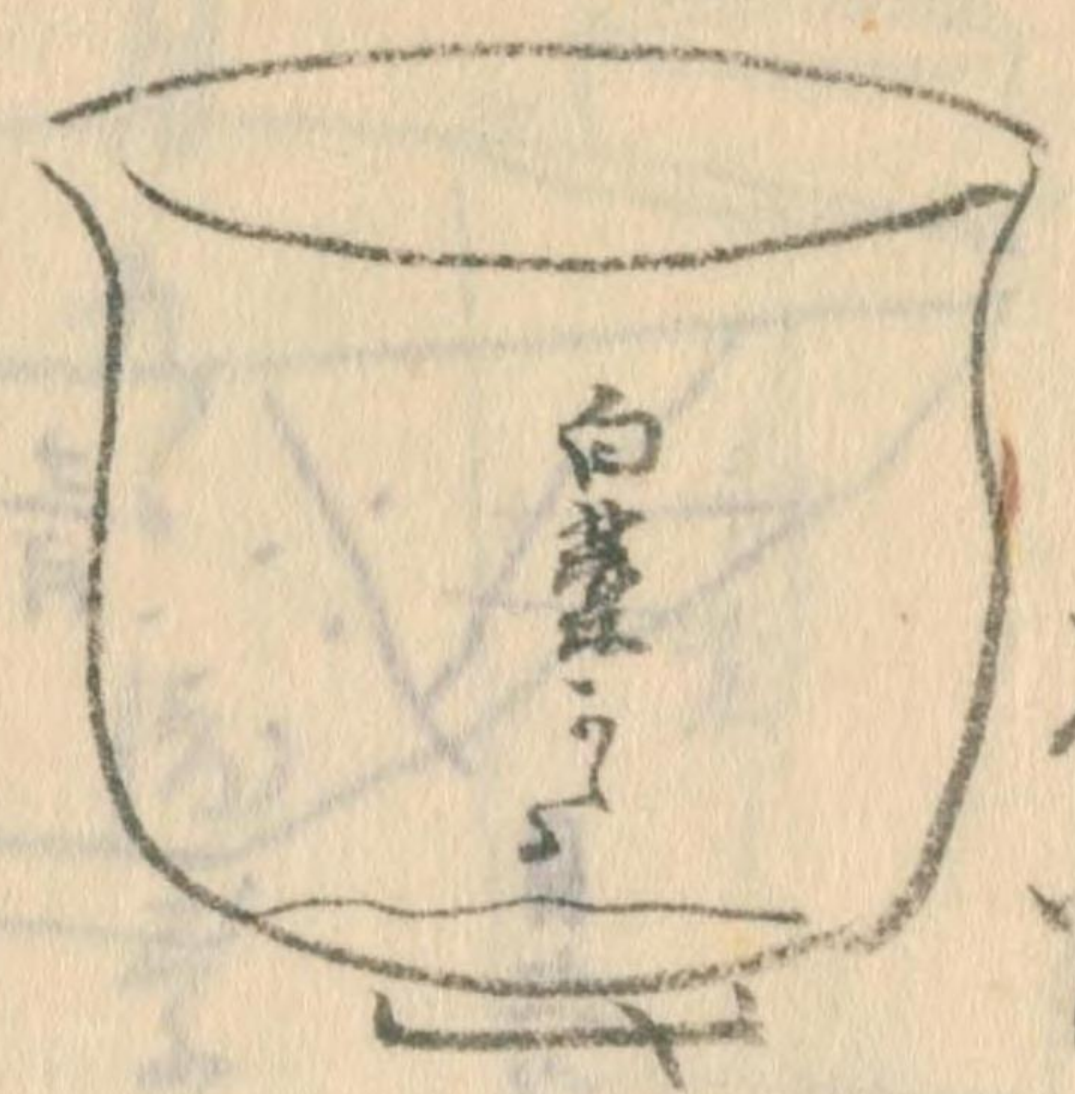




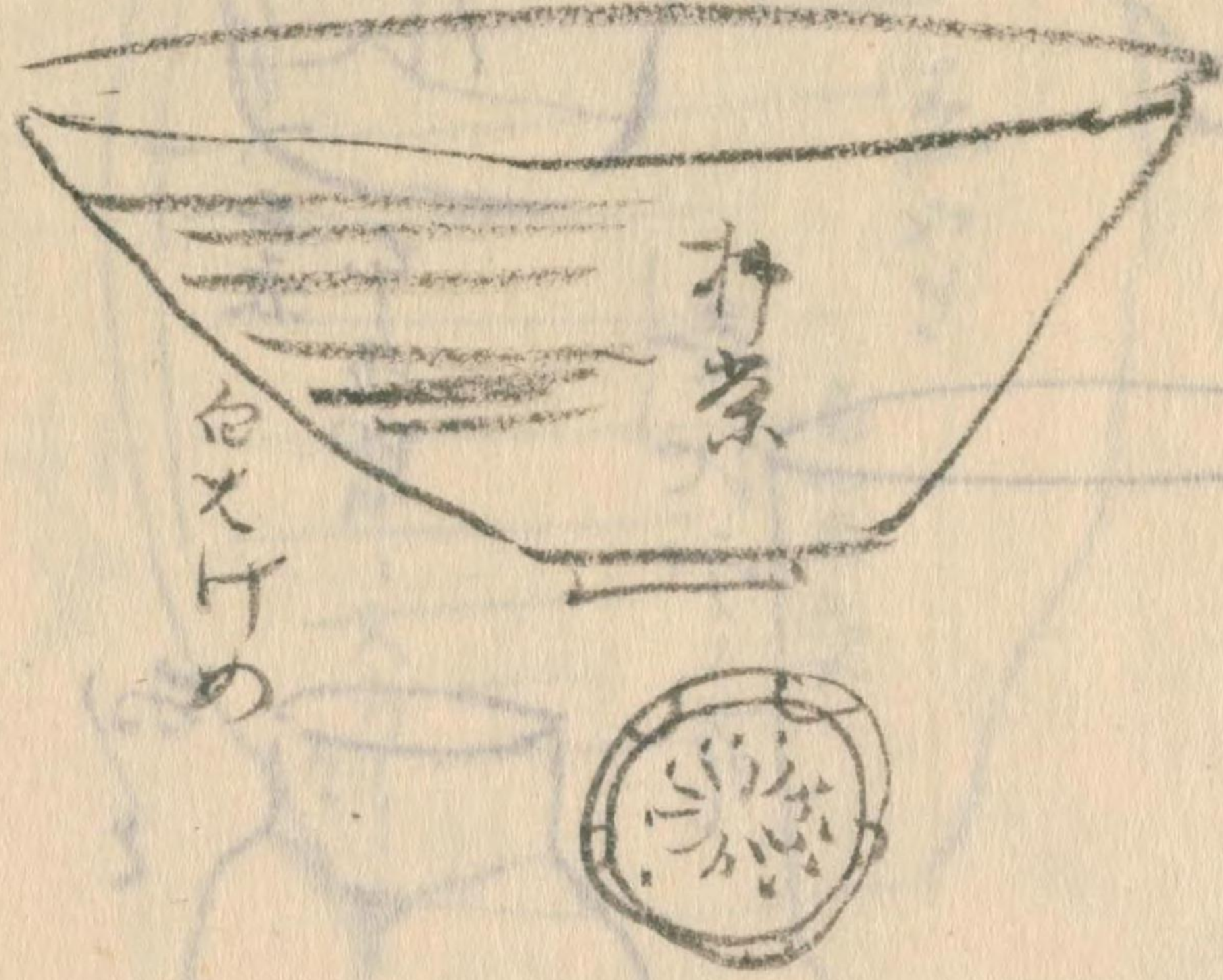




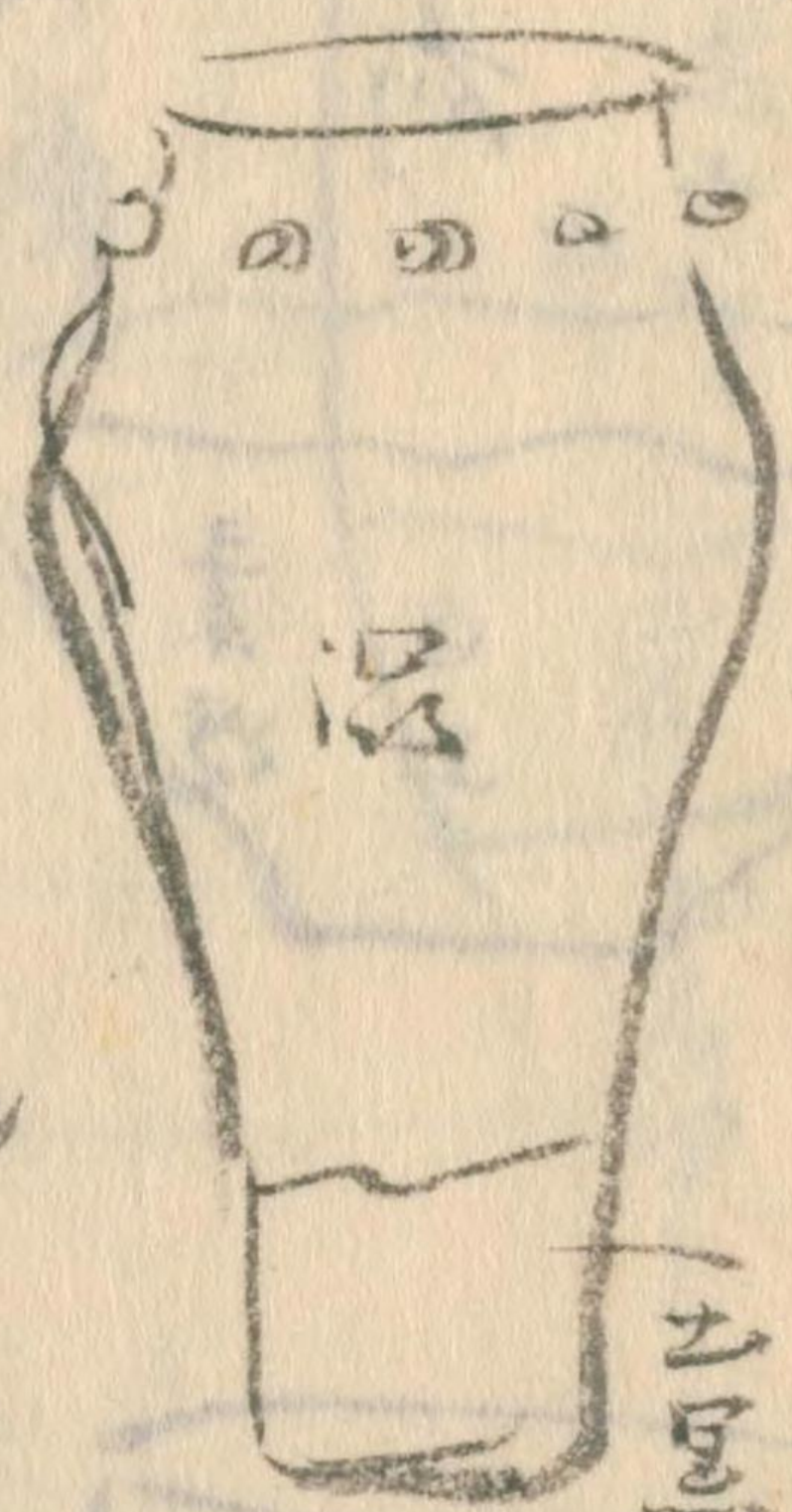
84
1

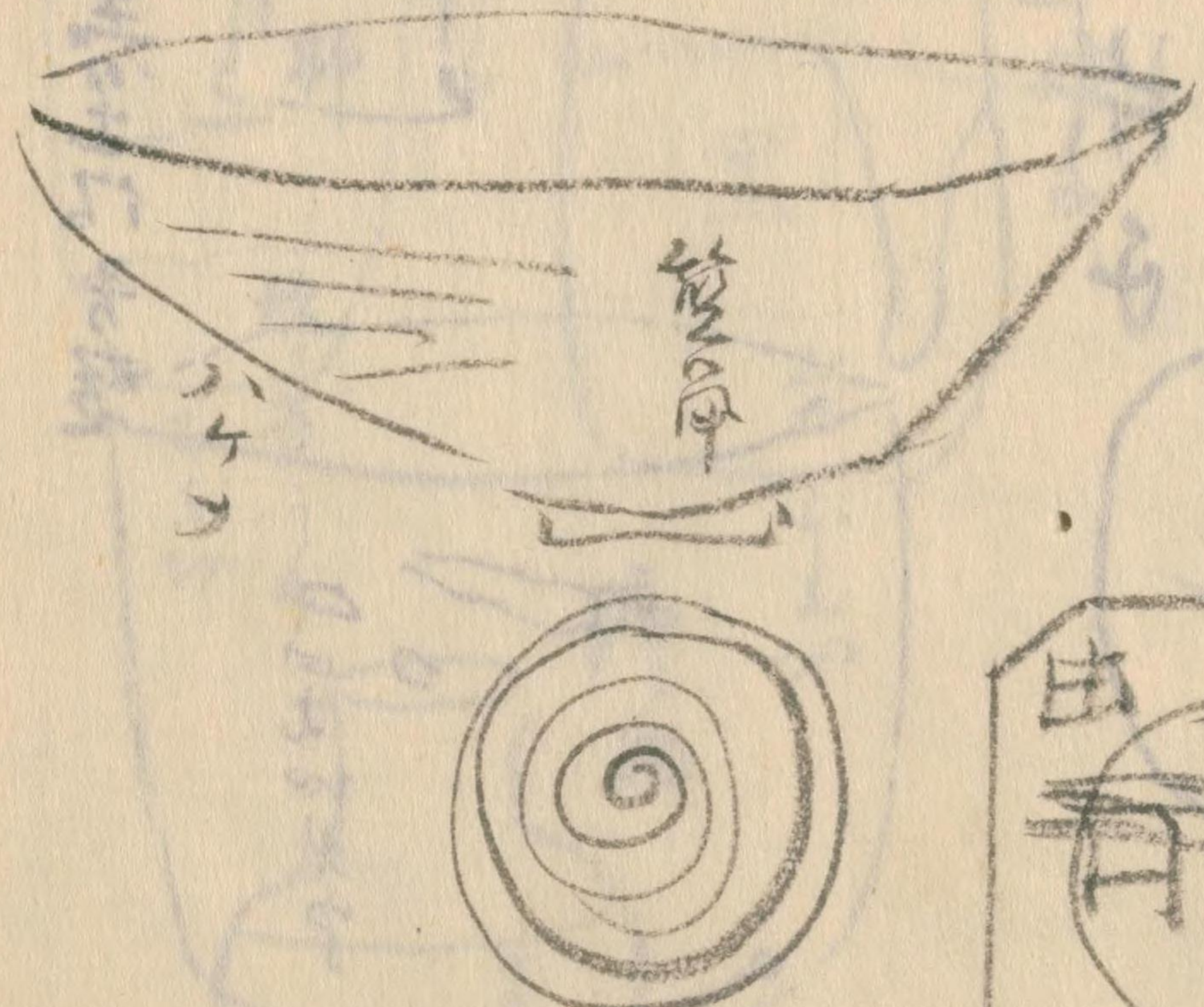

絵川写唐津
白葉うら
土薬白

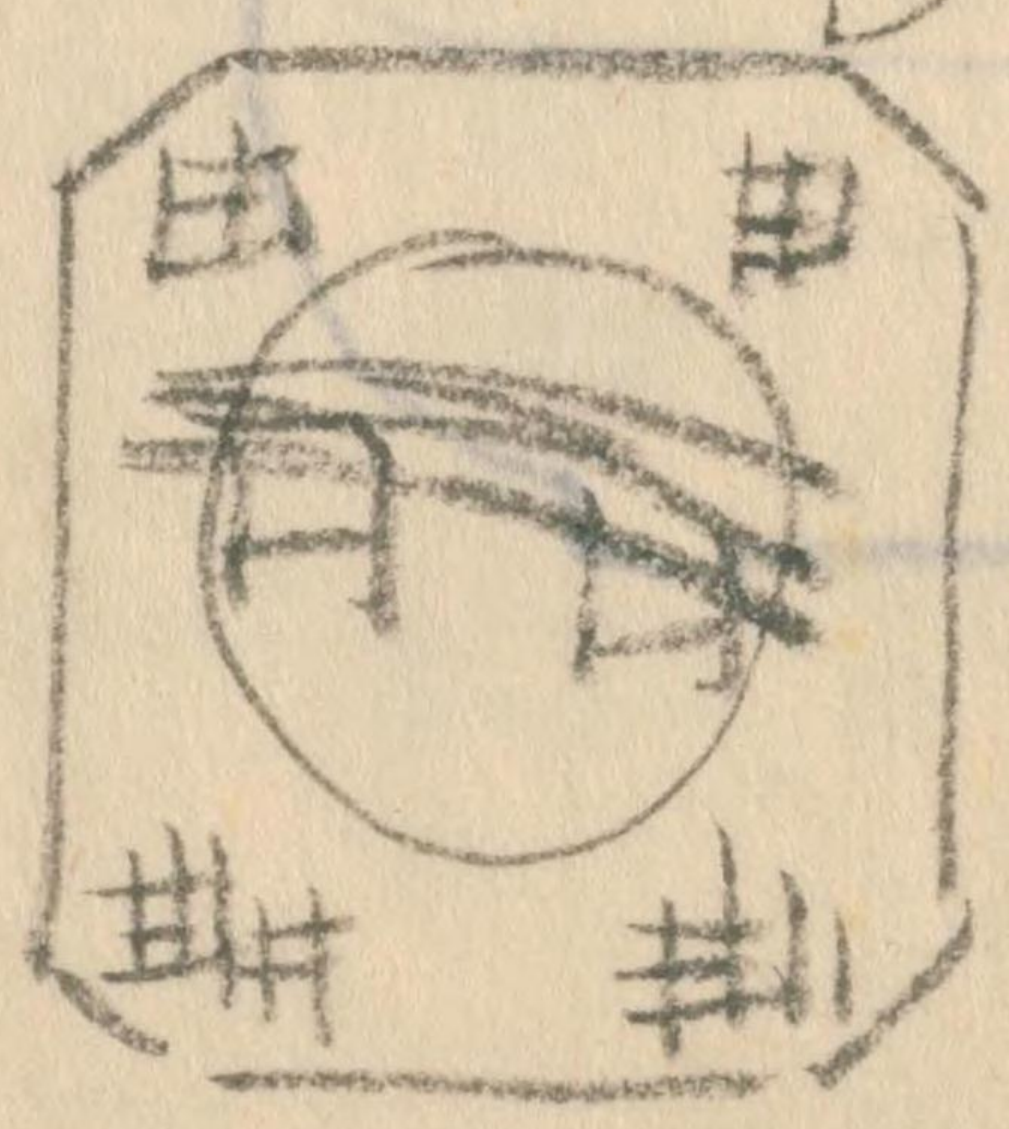
絵ぶ



堀内はけ色

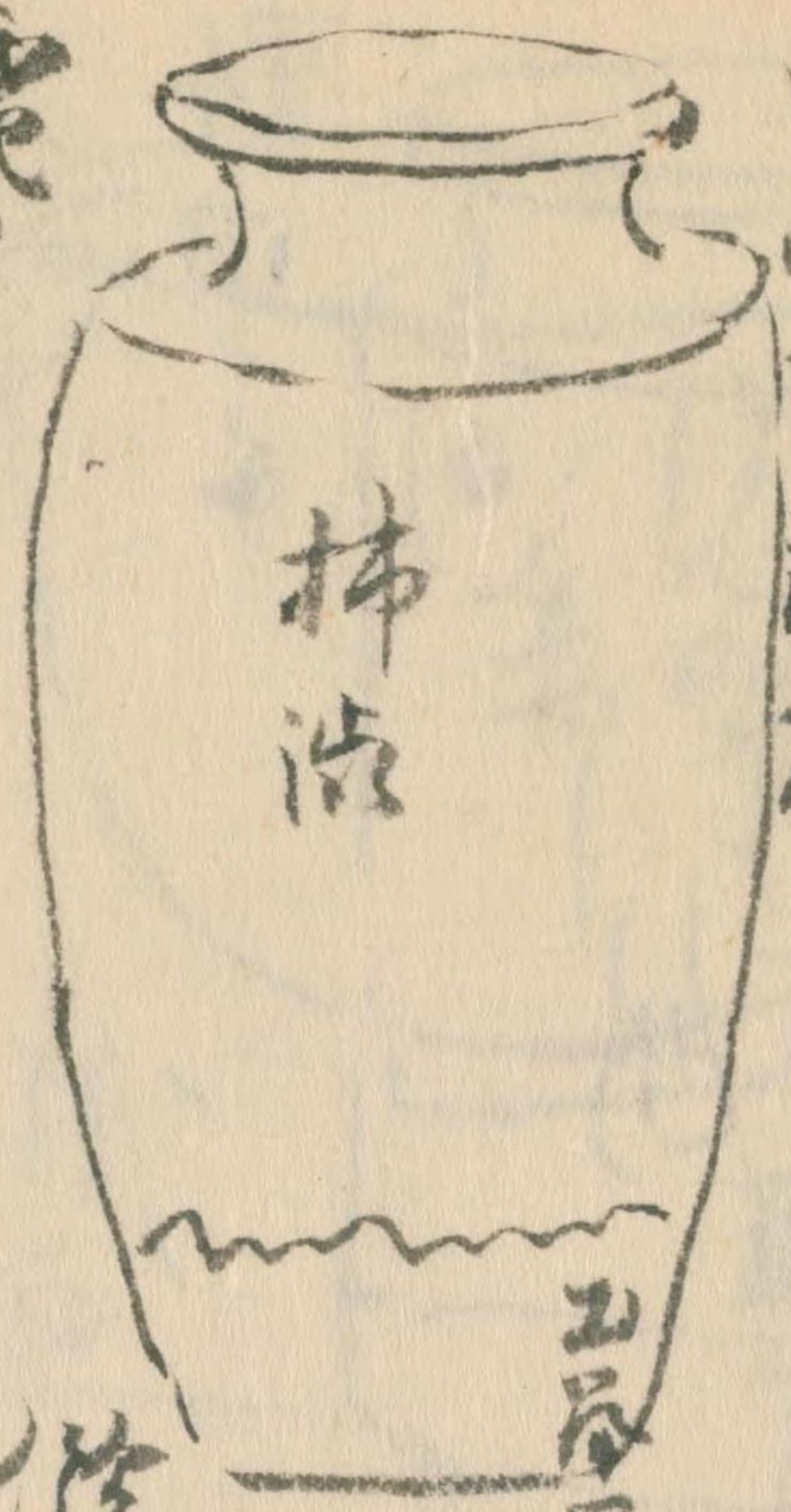






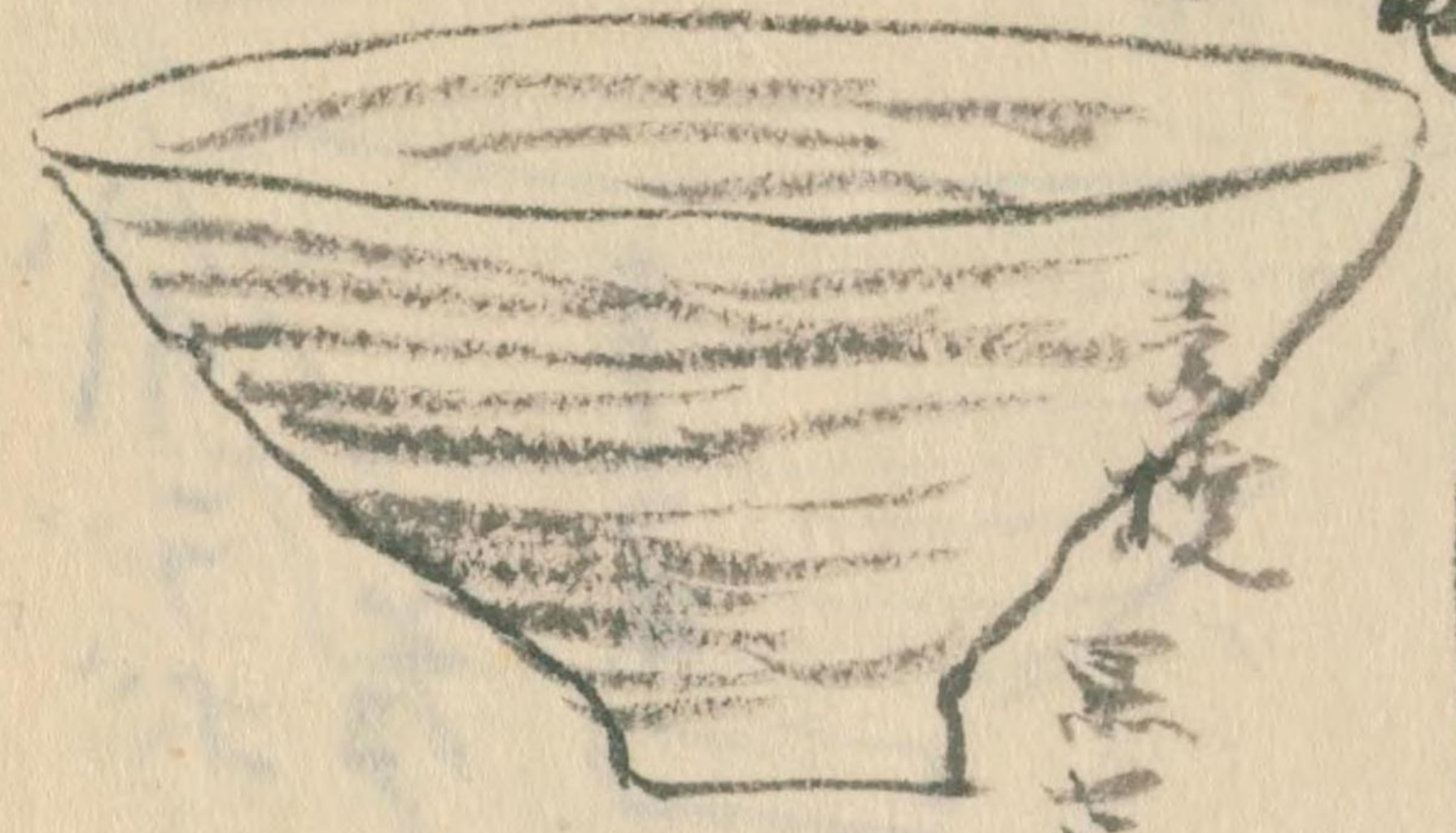
廿六年一月十五日於今戸船瀬亭

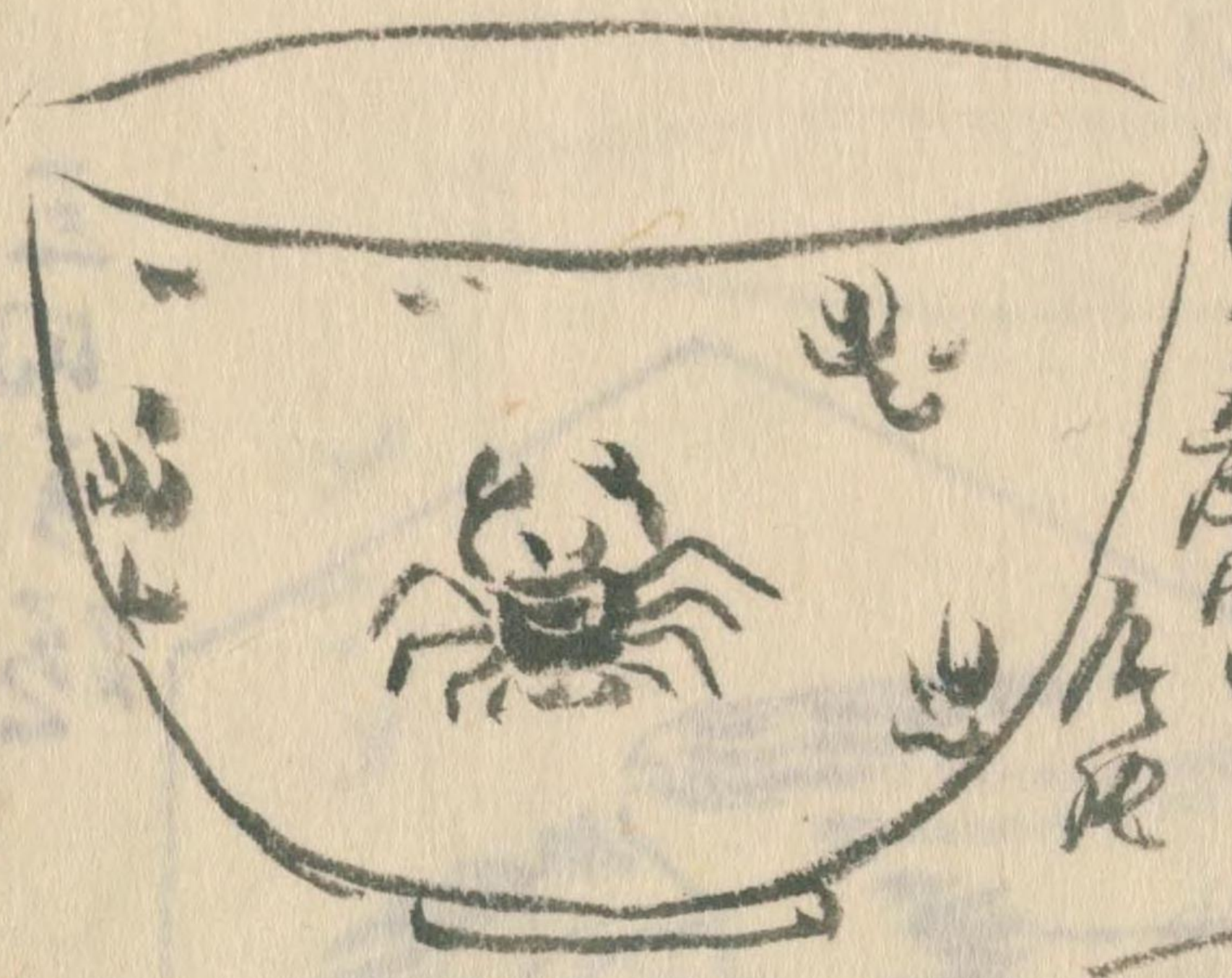
中村氏所持


柿油
土居黒
薬し
本糸切

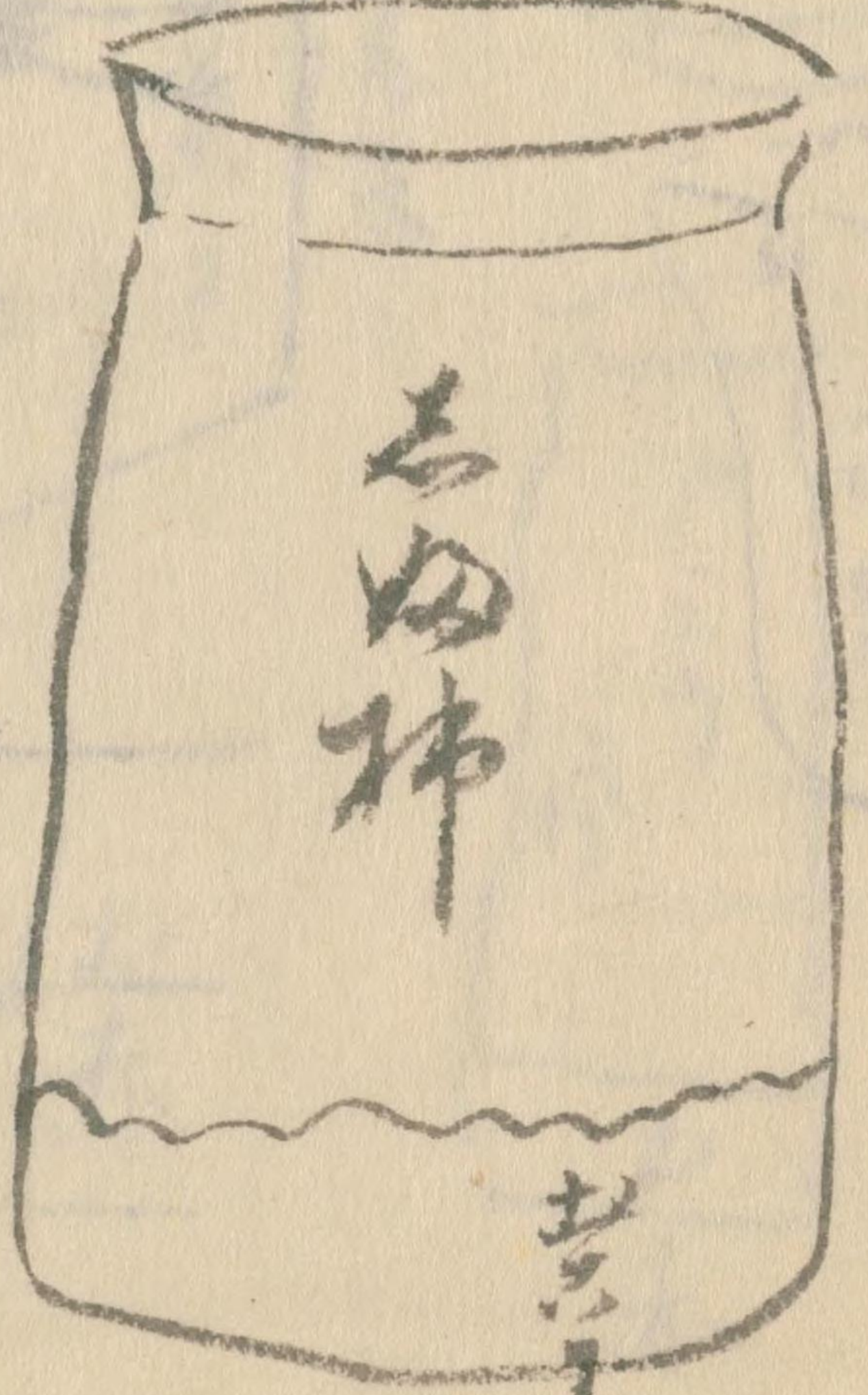
品拭

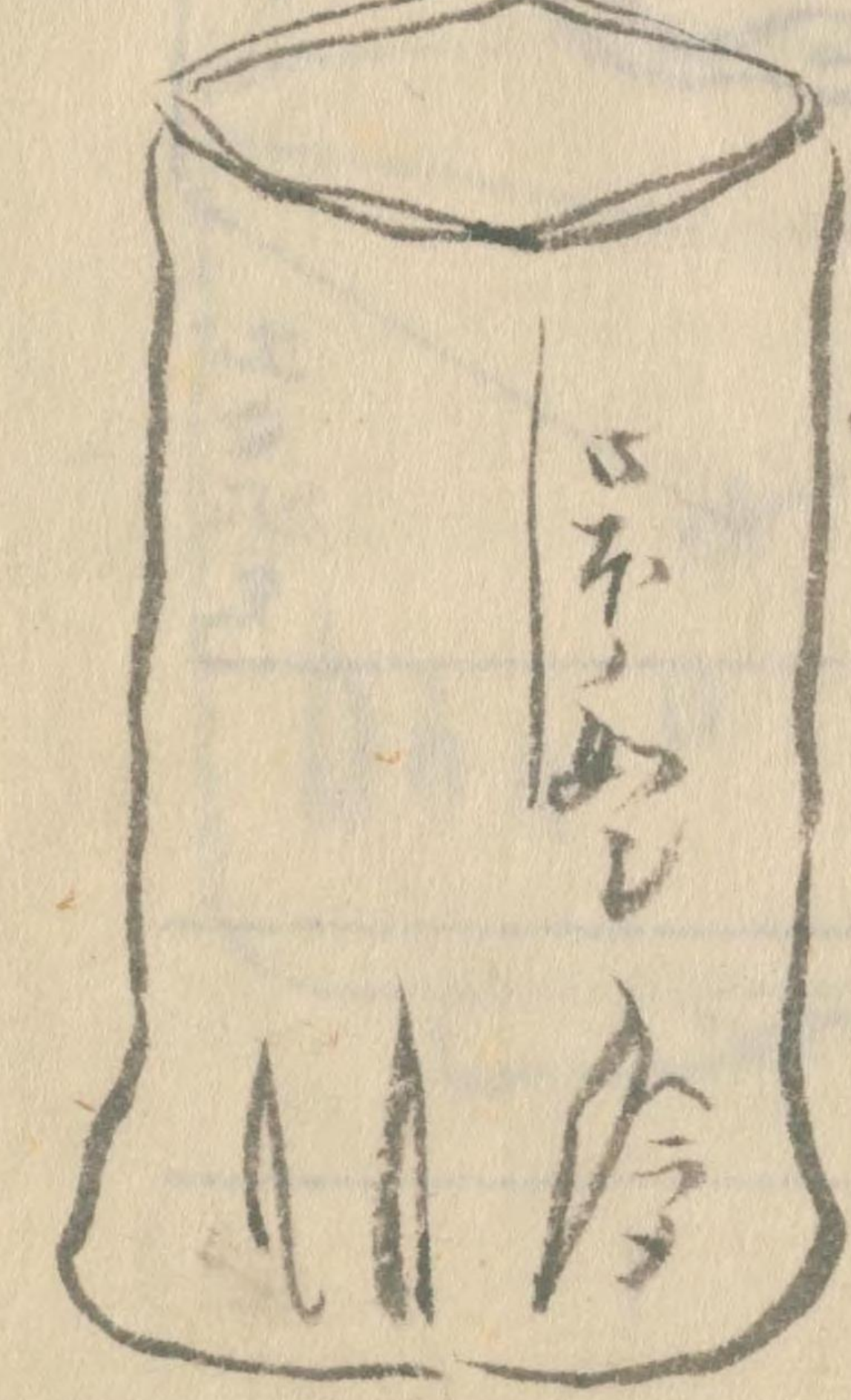
南蛮写し



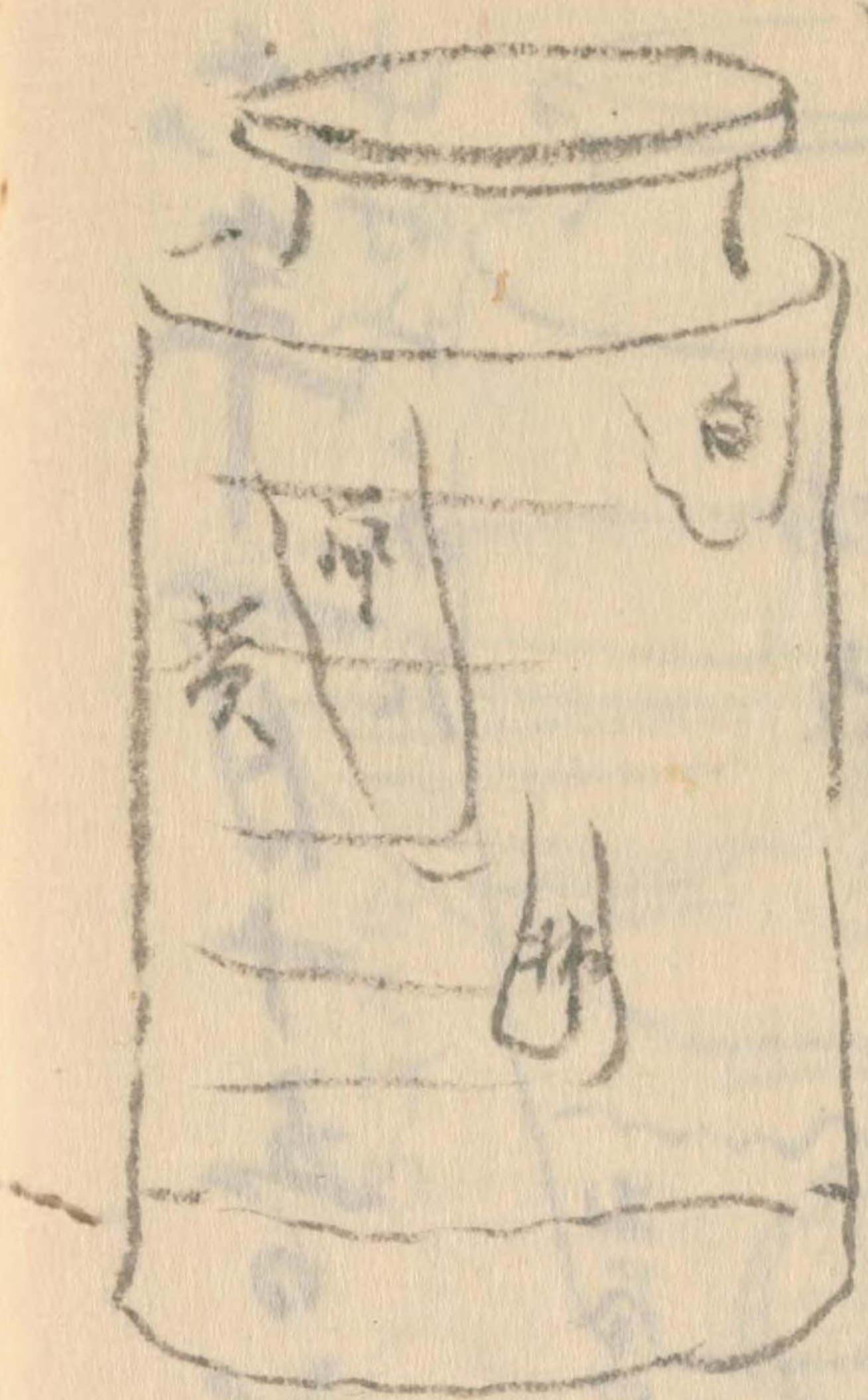


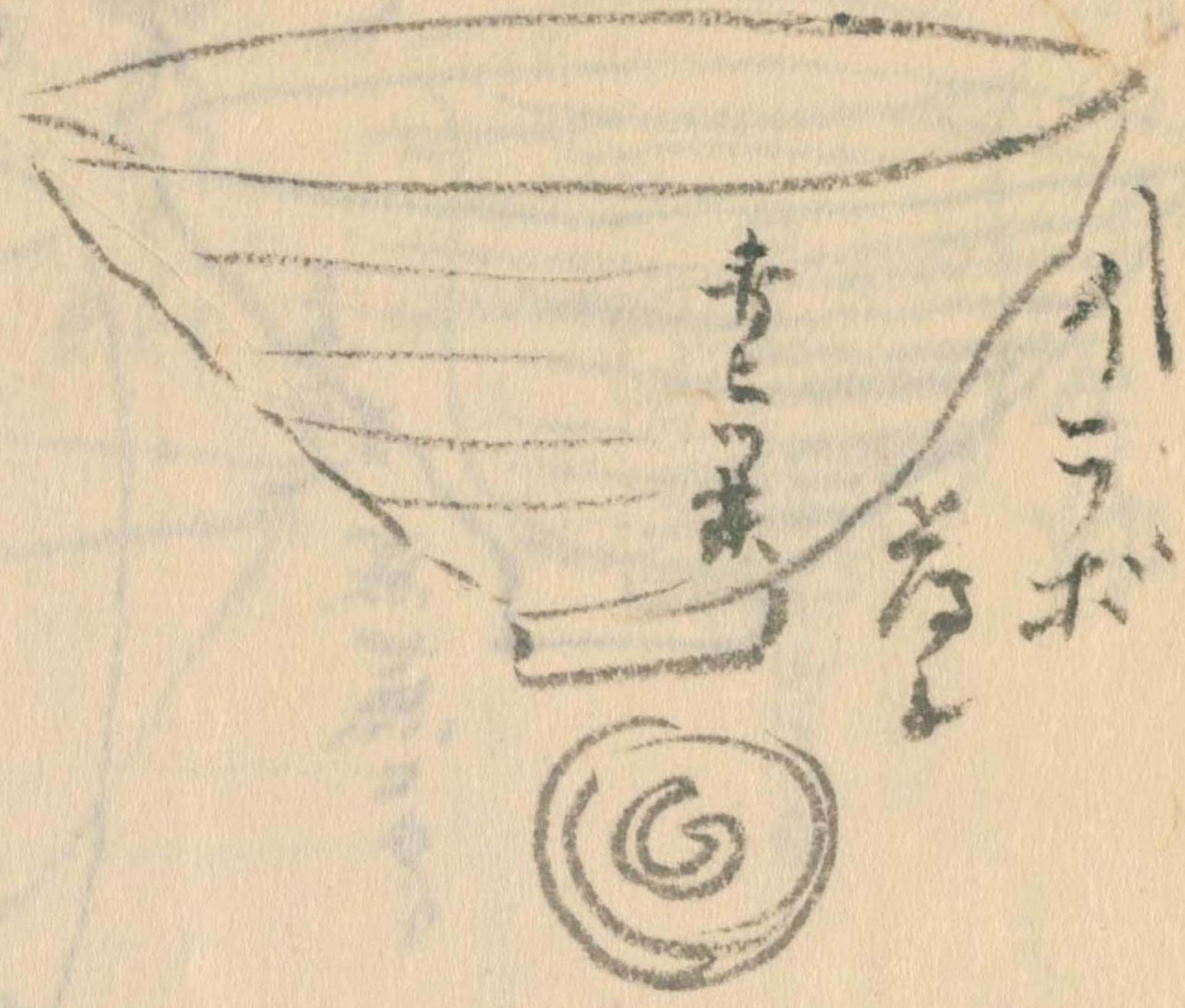
了仲乾山下絵写ス

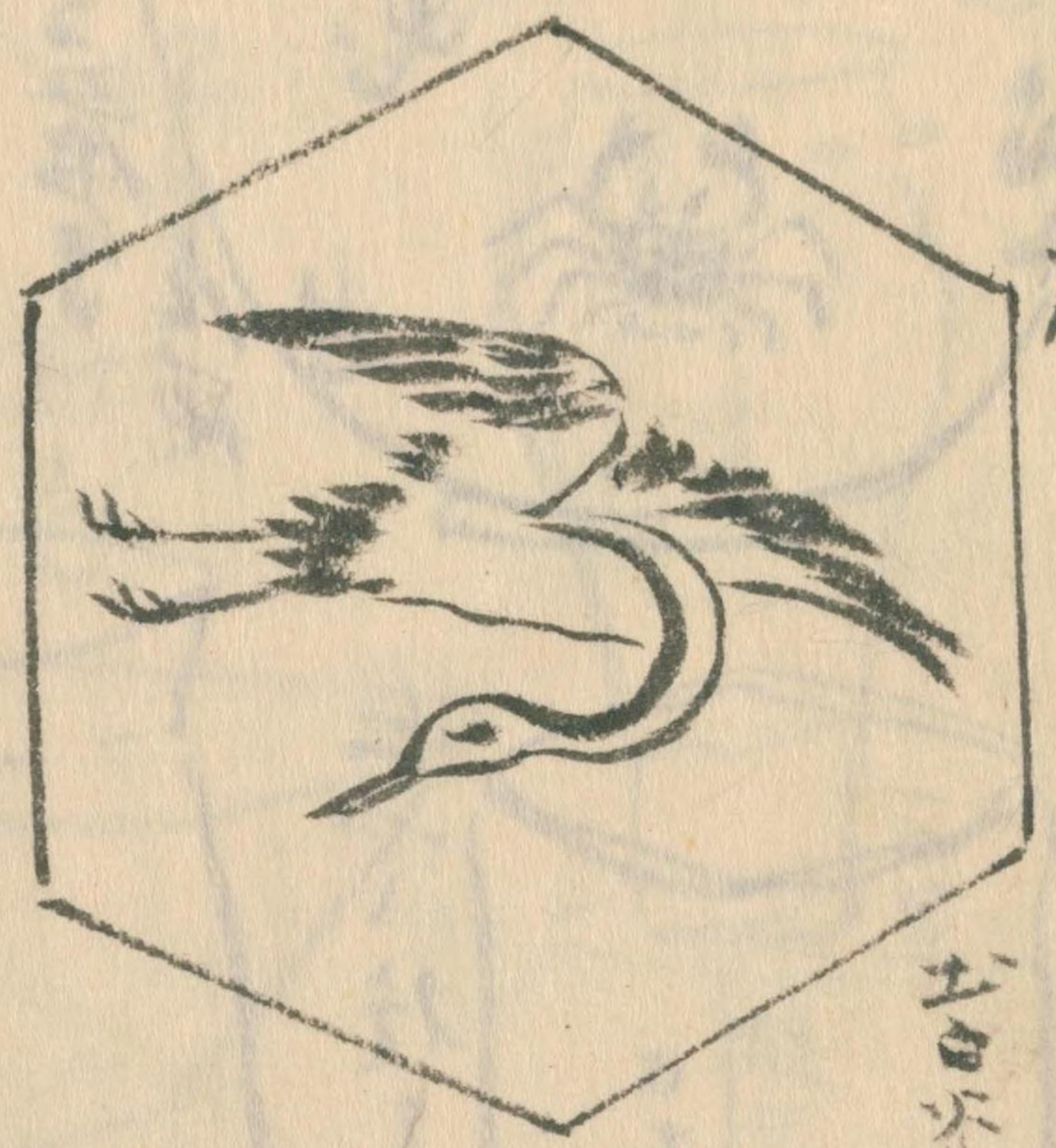


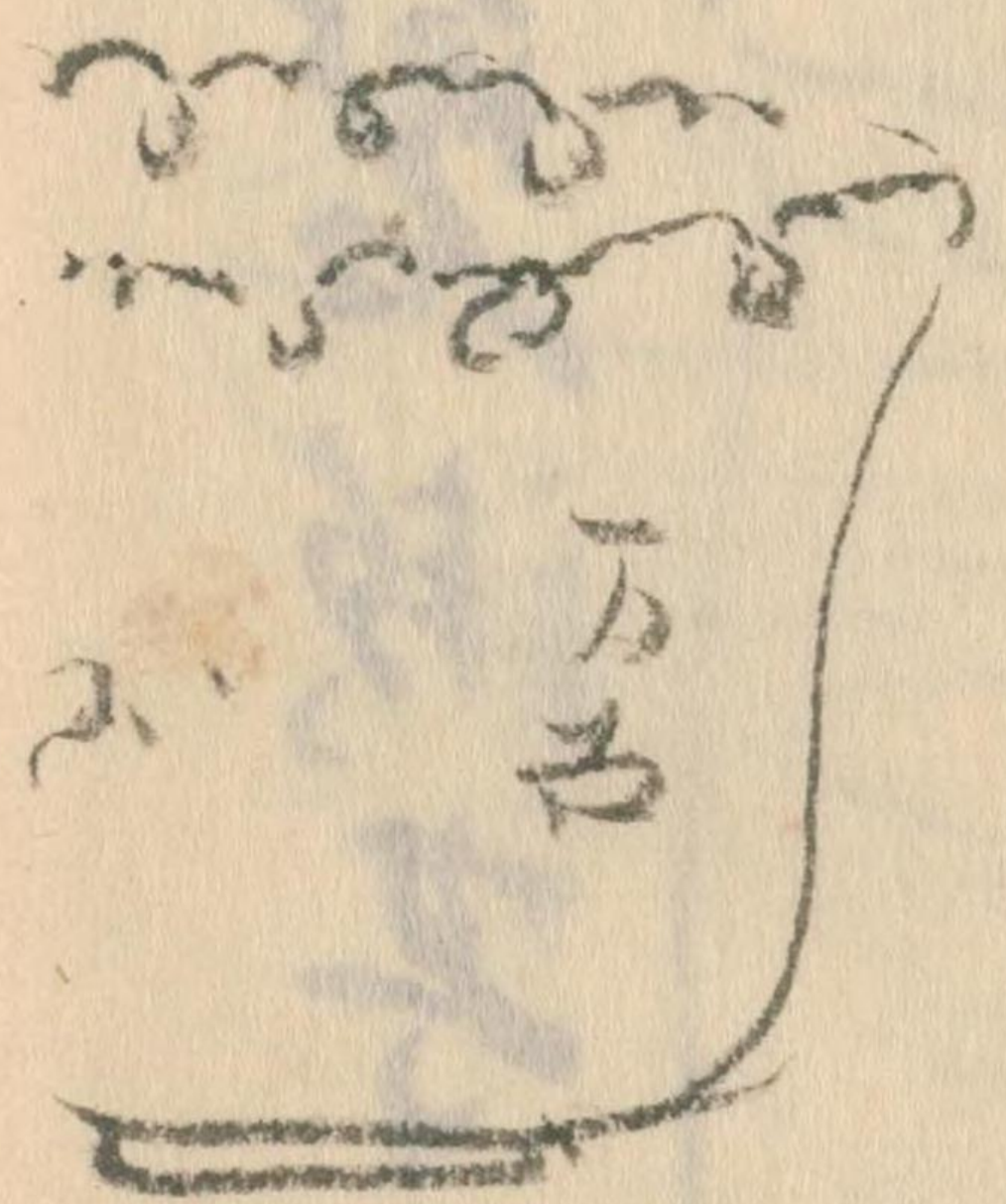

出やへ
検よ
いわつめし
唐

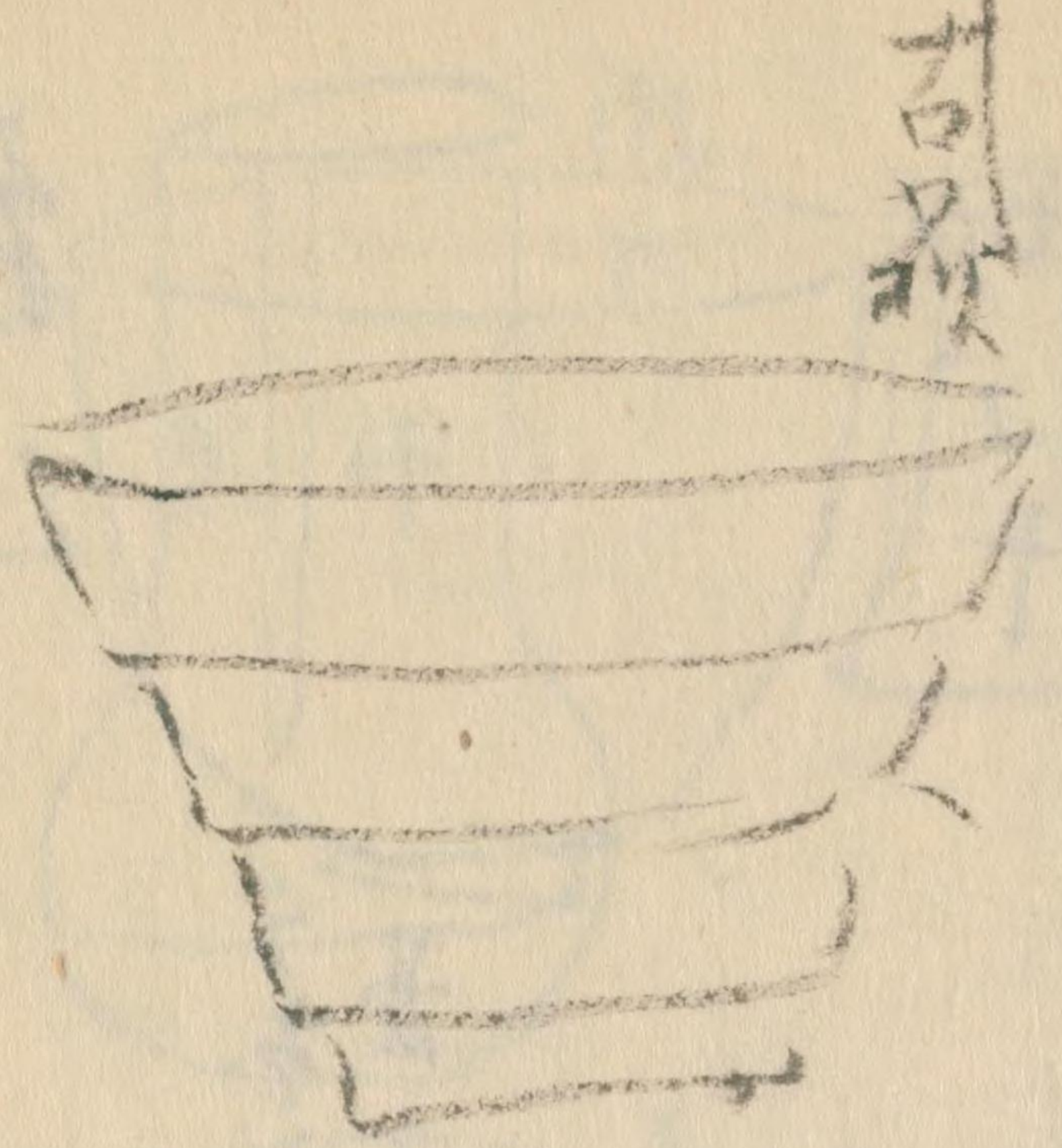
ガラス使用

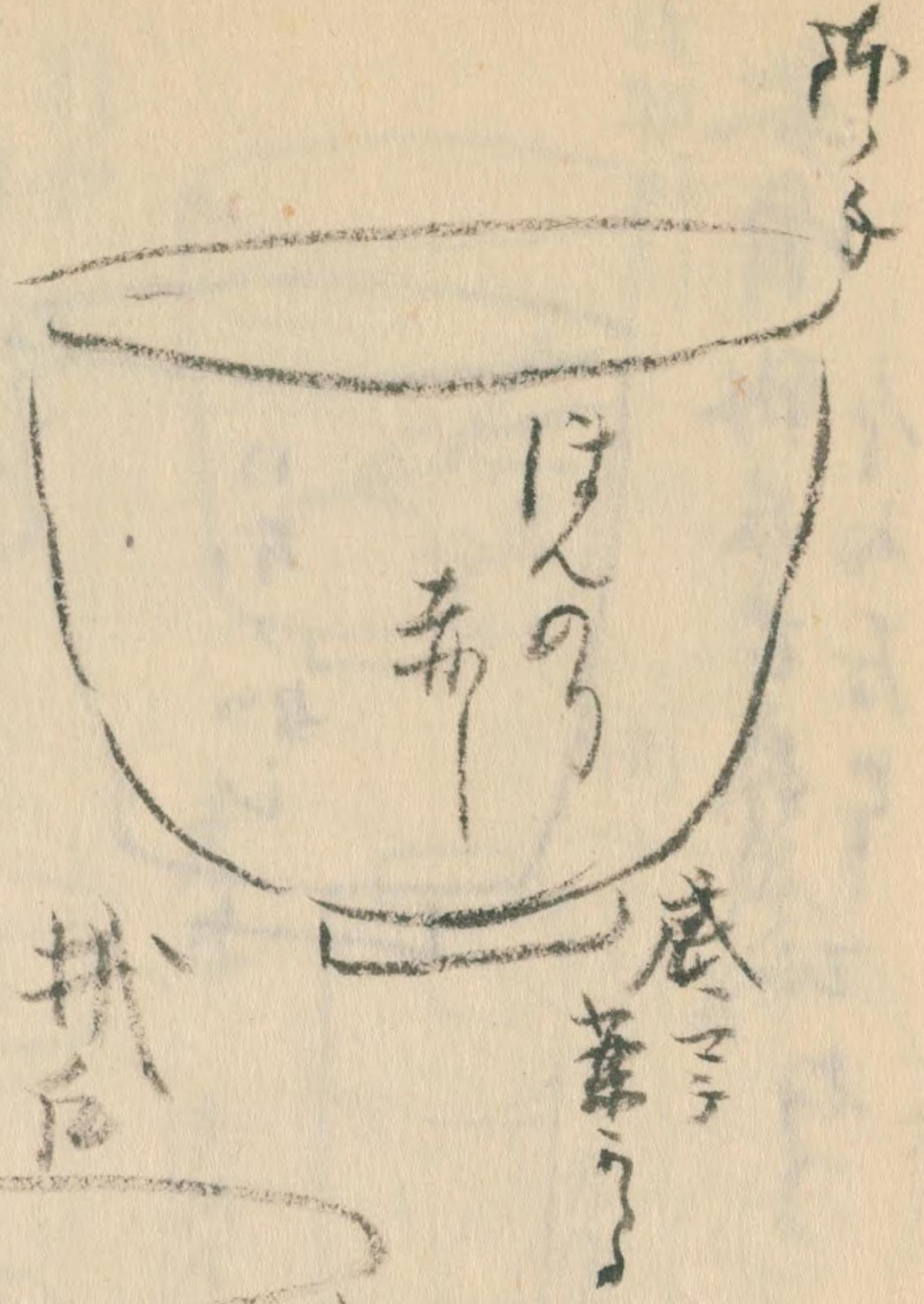

野田ノ手
府
黄

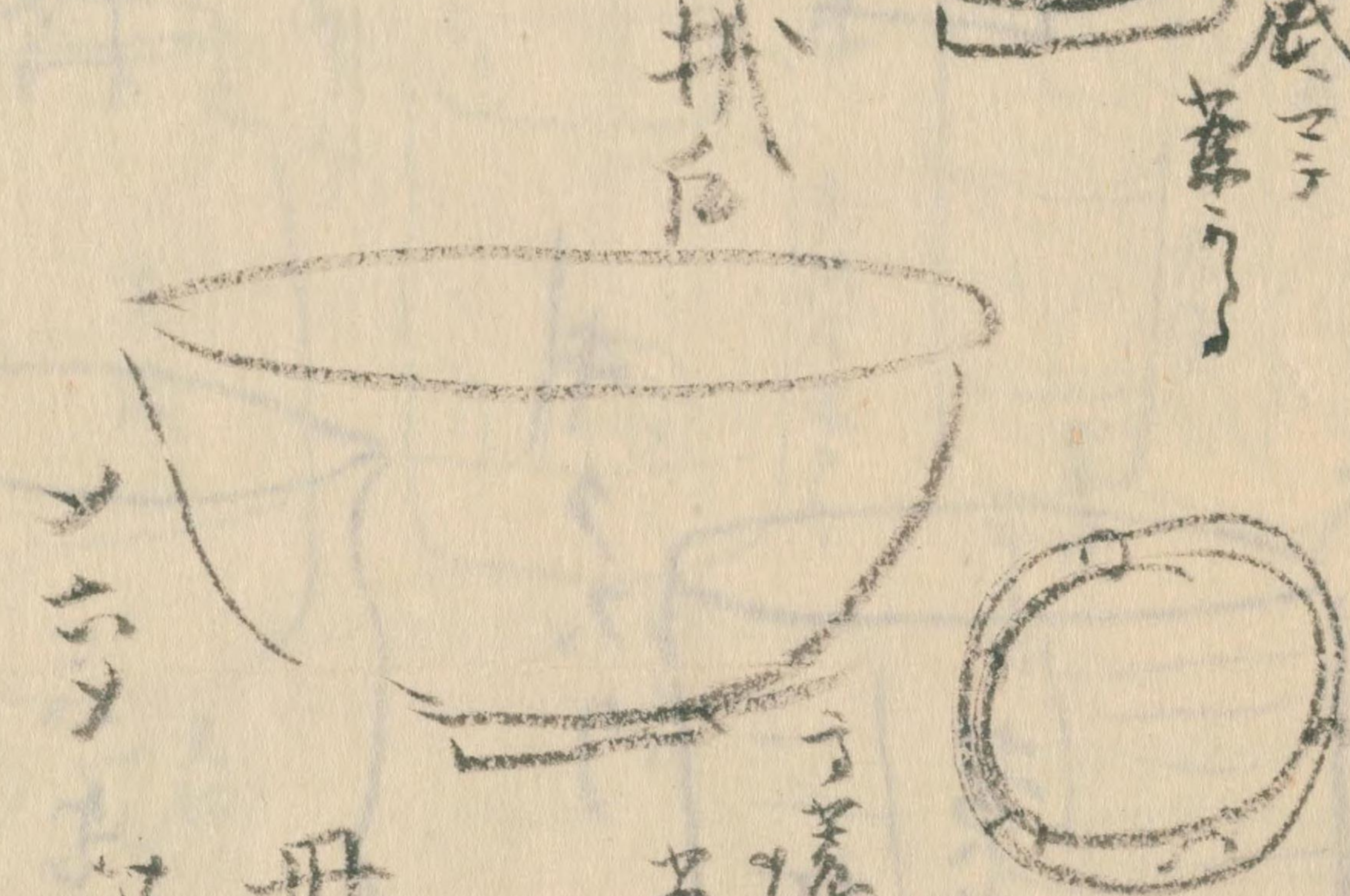

青ノ薬
ハラだ
薬

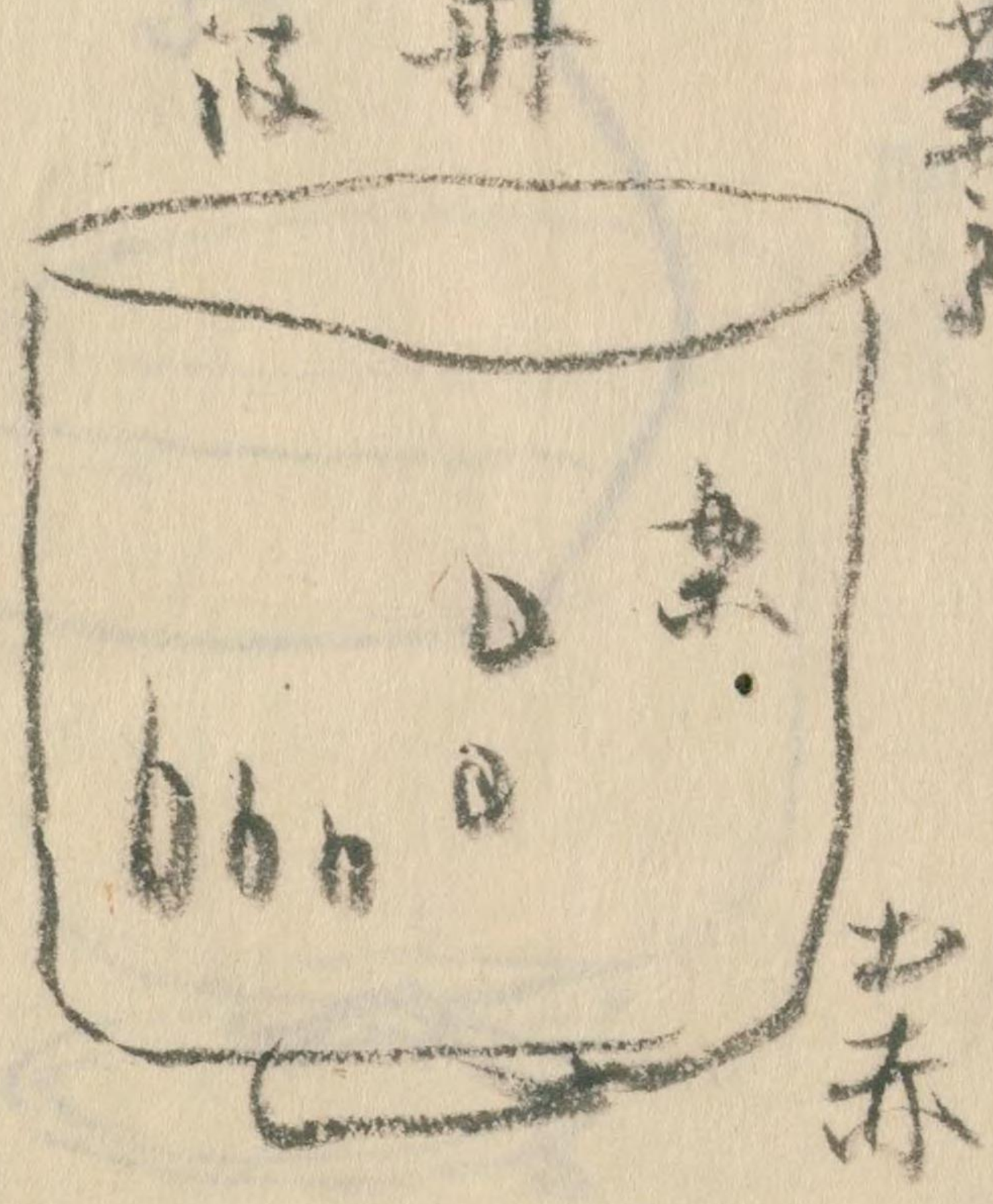

三田青磁
古白火生

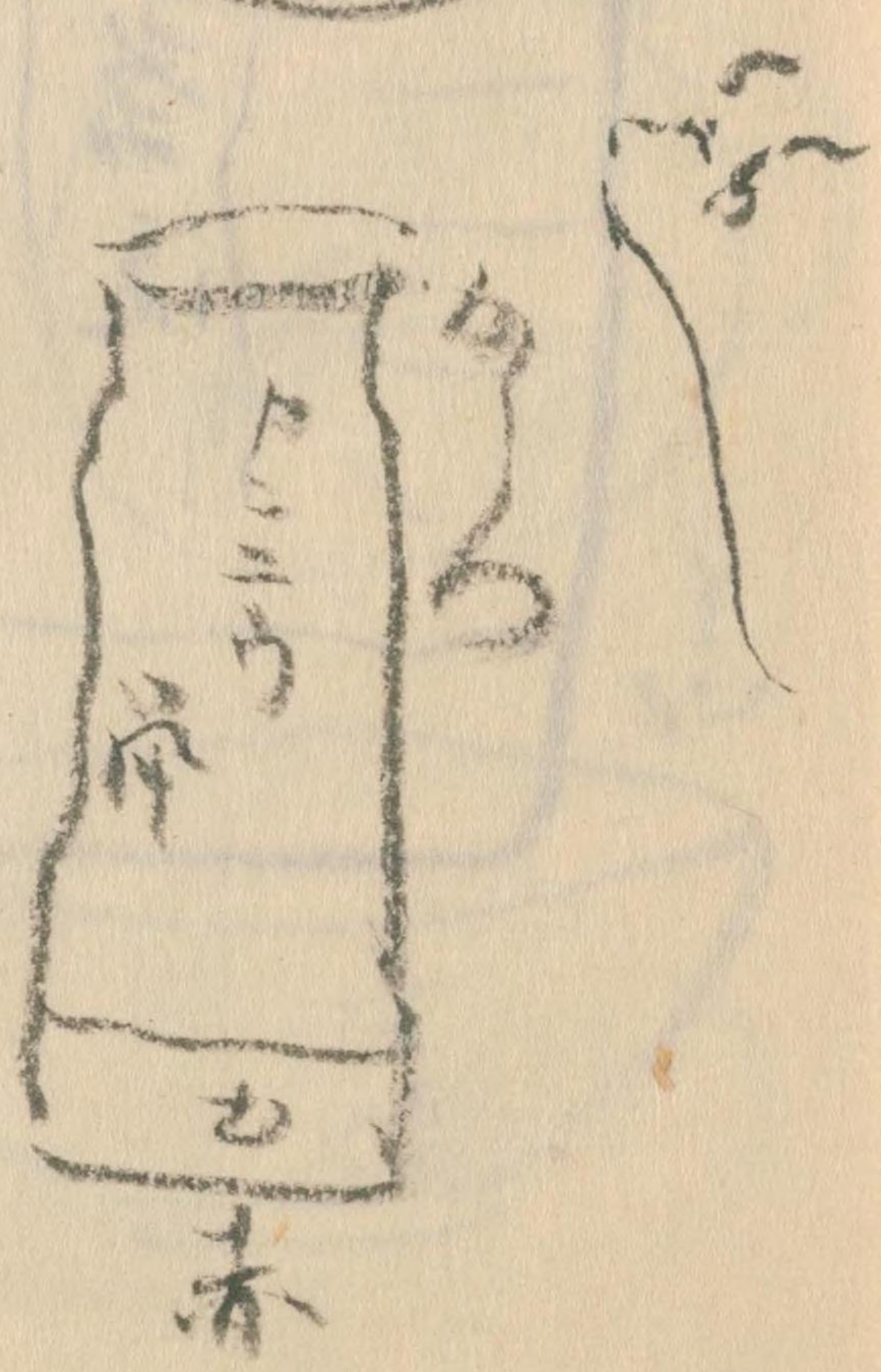

万古


古萩

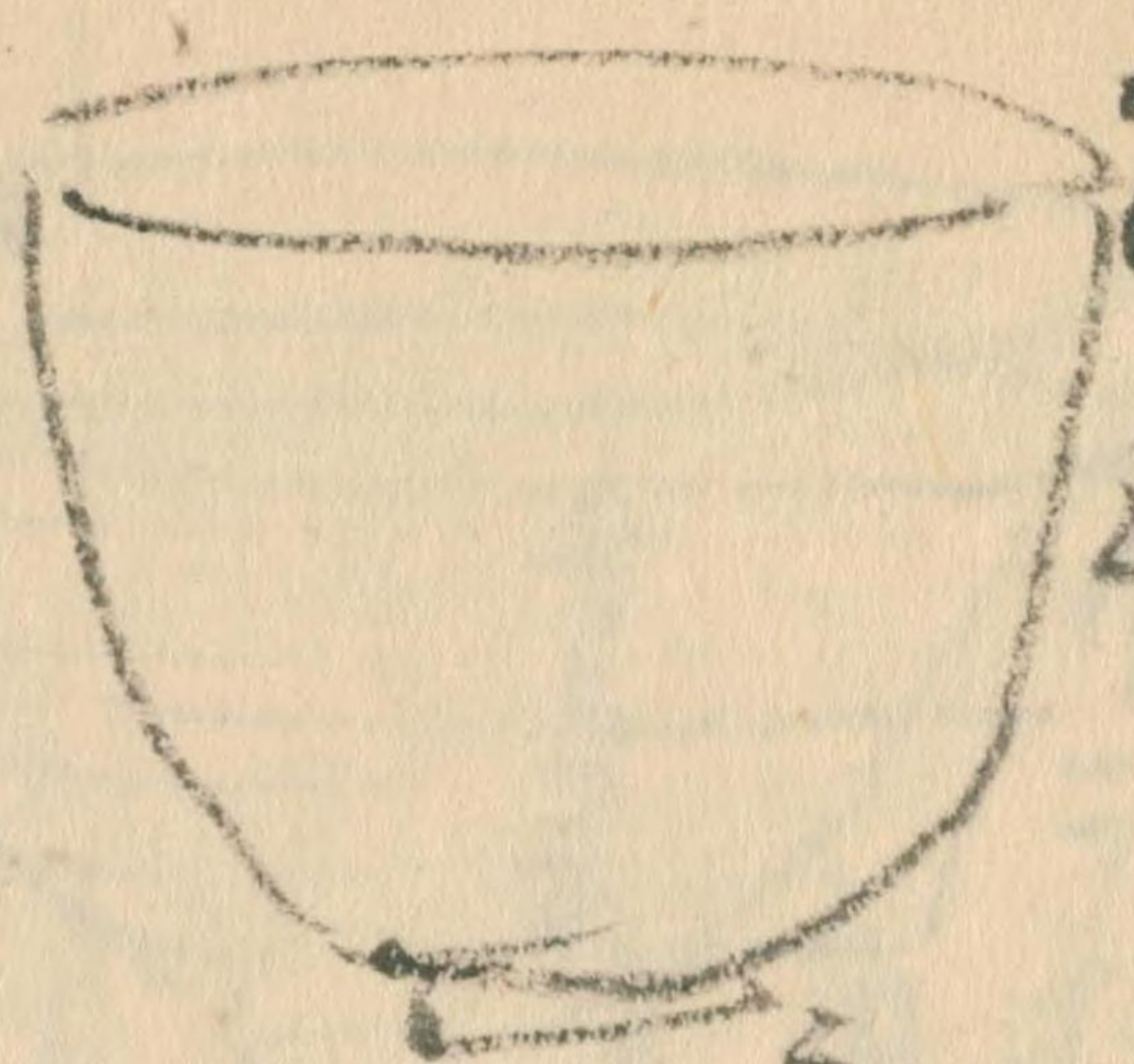

所ノ手
ほんのり赤し
底マテ薬アる


挽臼
下蒼茶
薬アる


丹波
楽
お赤


ドミニウ
府
セ
赤

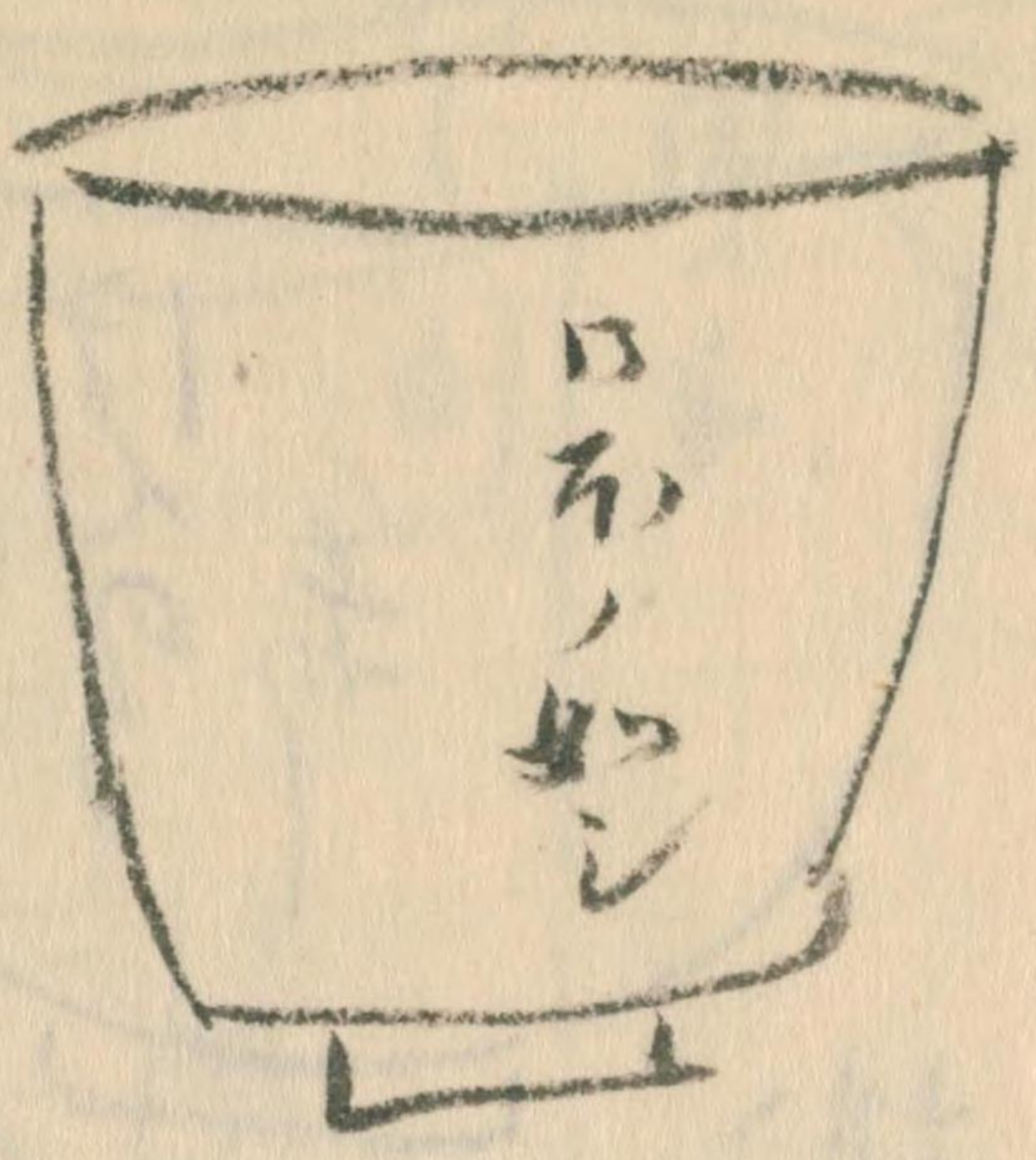
蔵六



う呉写
茶碗

文化

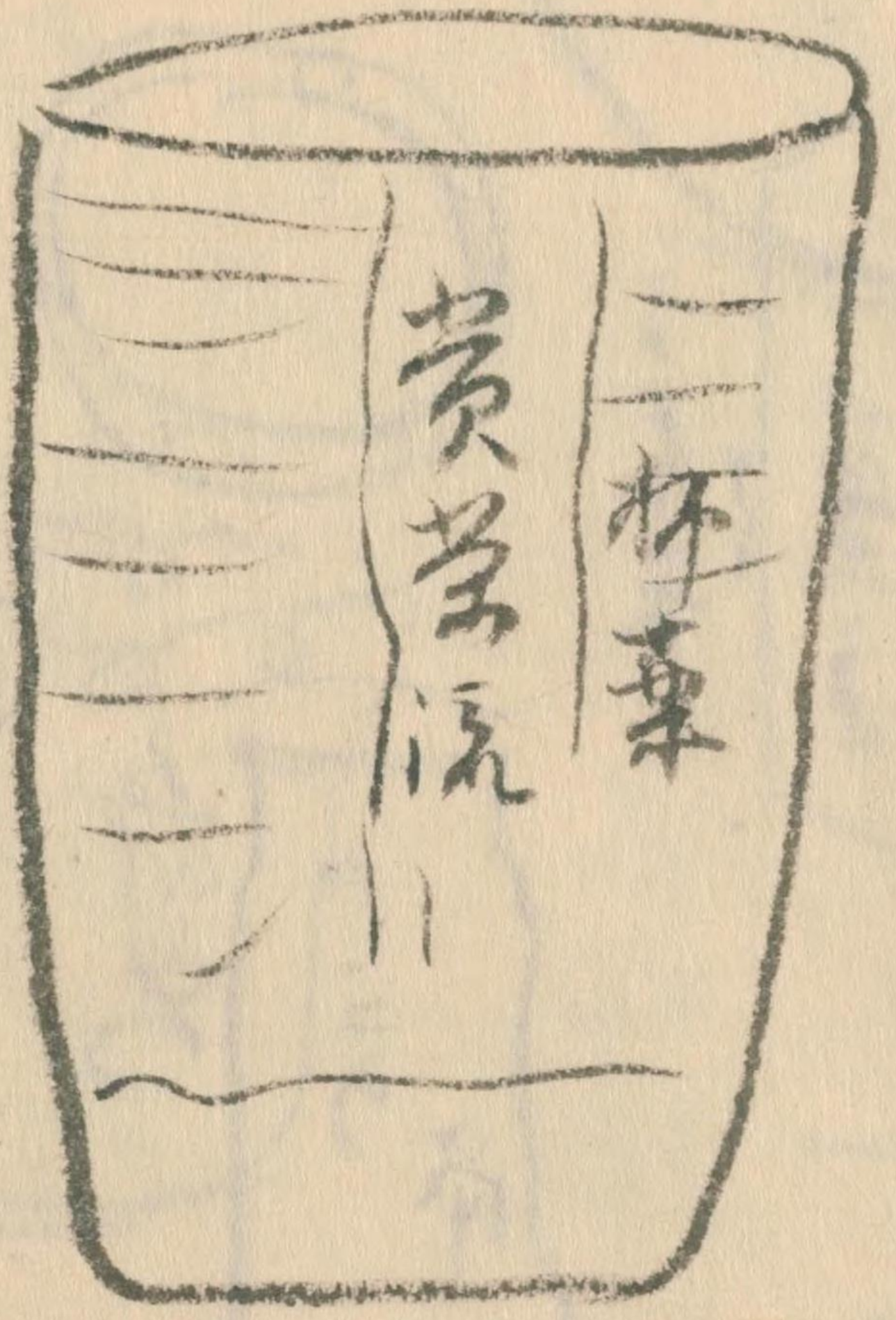
切ゴキ

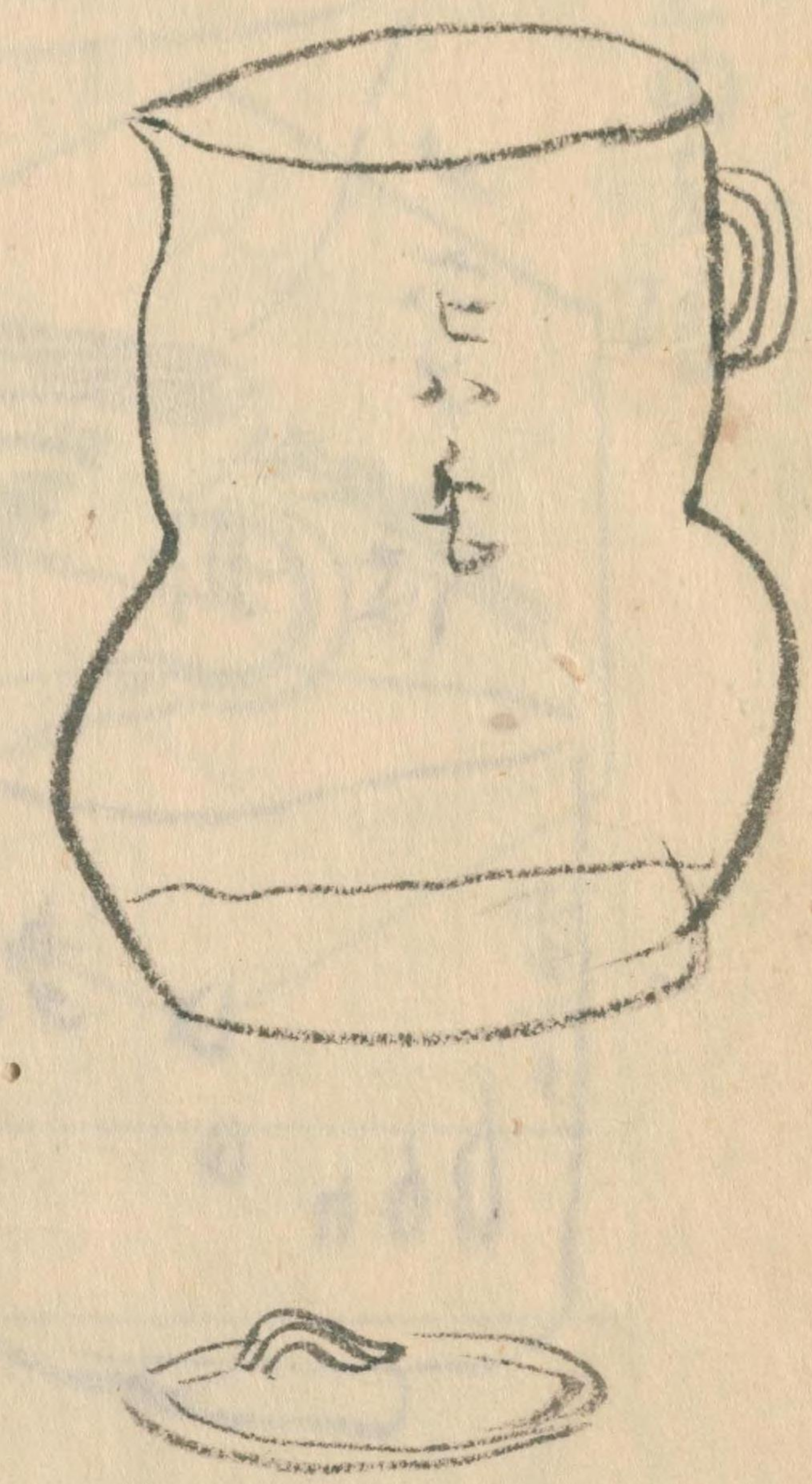


無印、御所丸古器ひねり
彦ね在号

鑑識有之

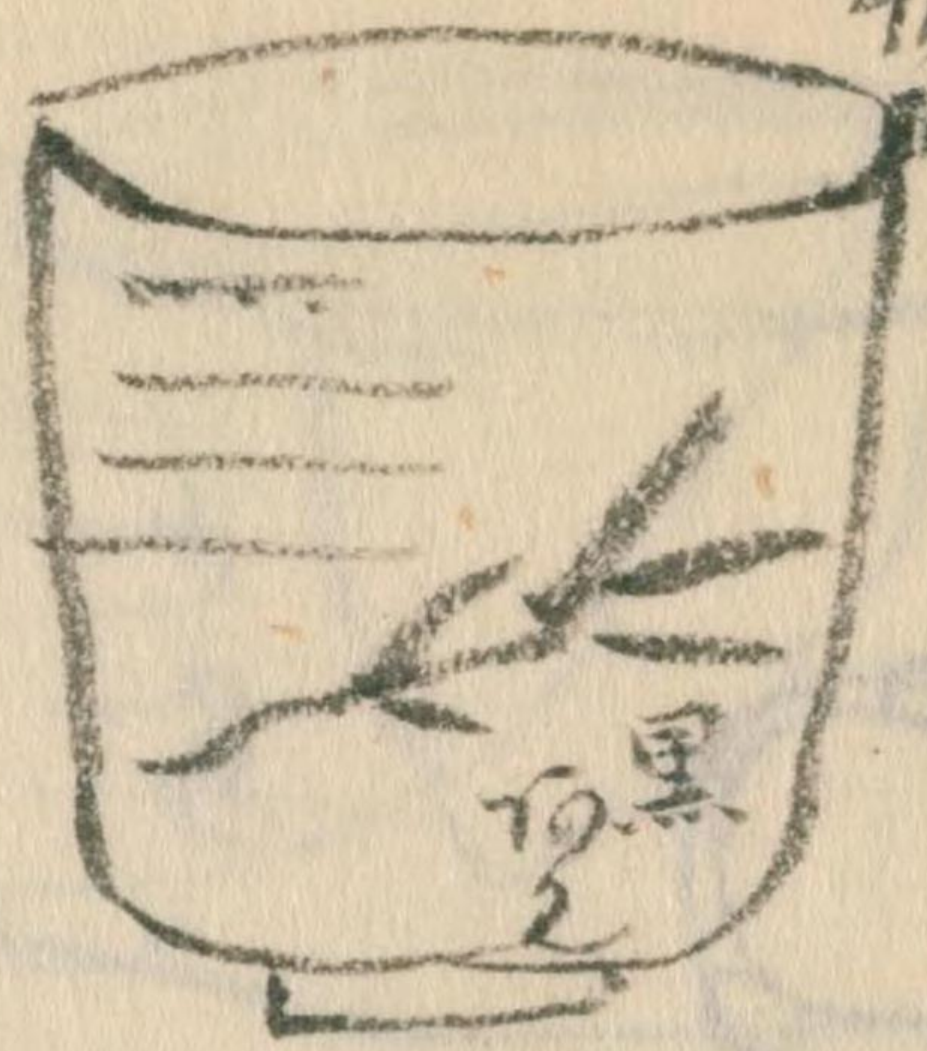
キクスリ





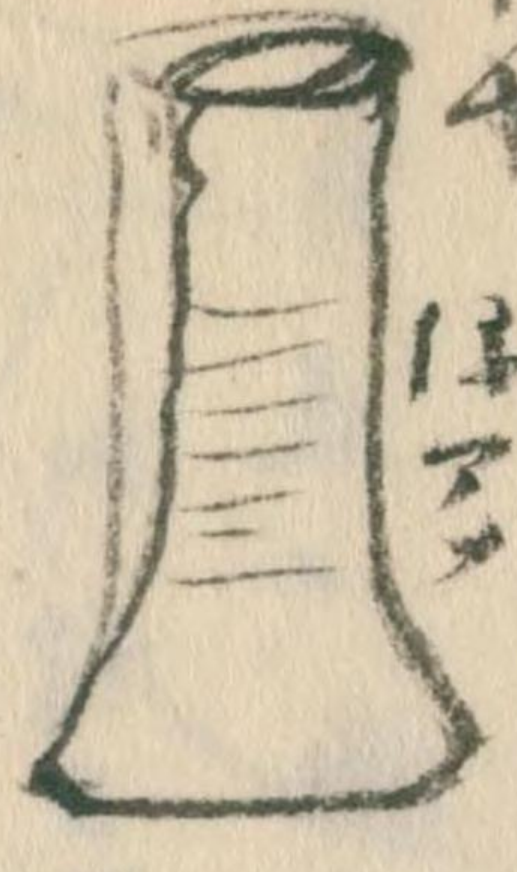
二月廿六唐津や

修鶴軒

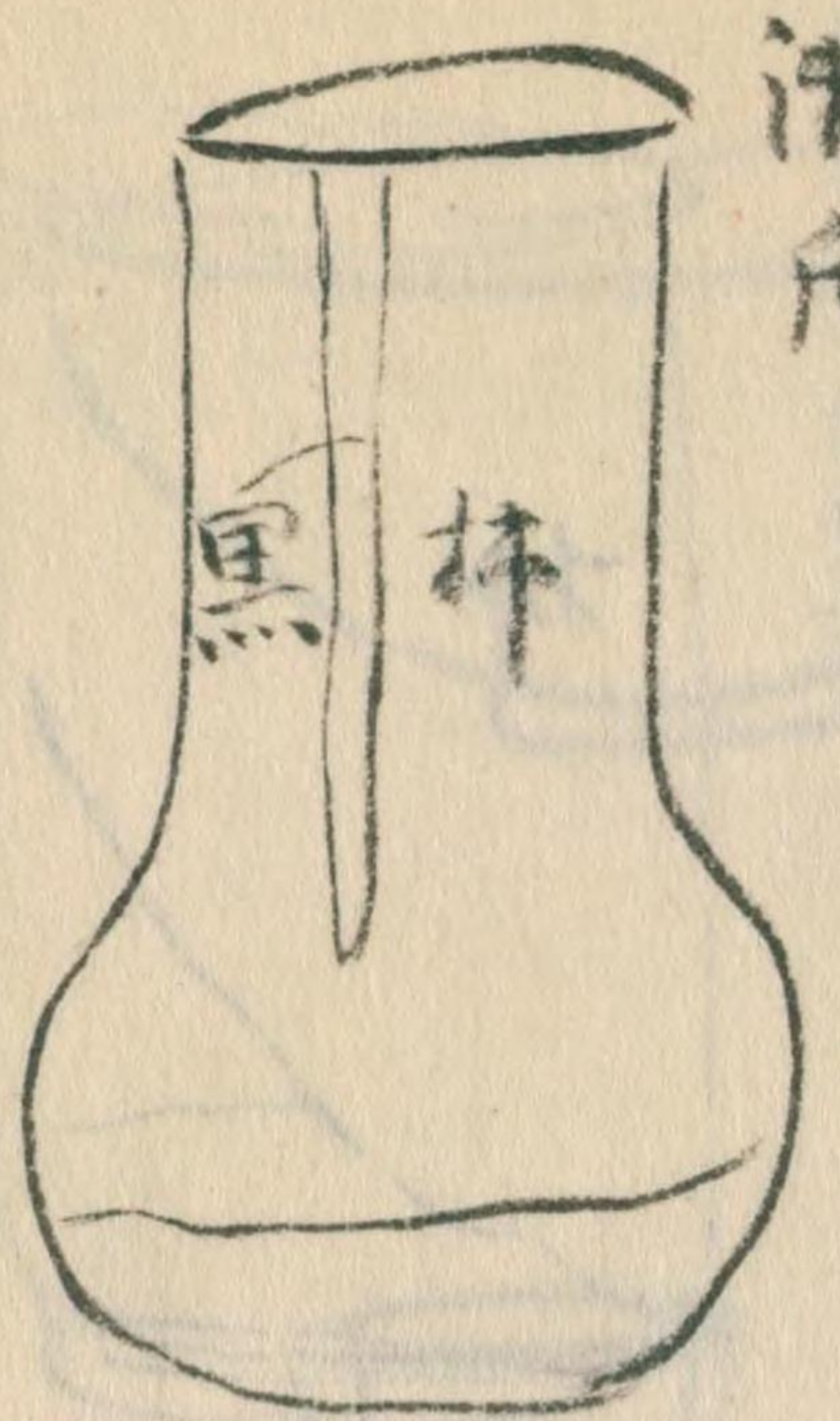


刷し

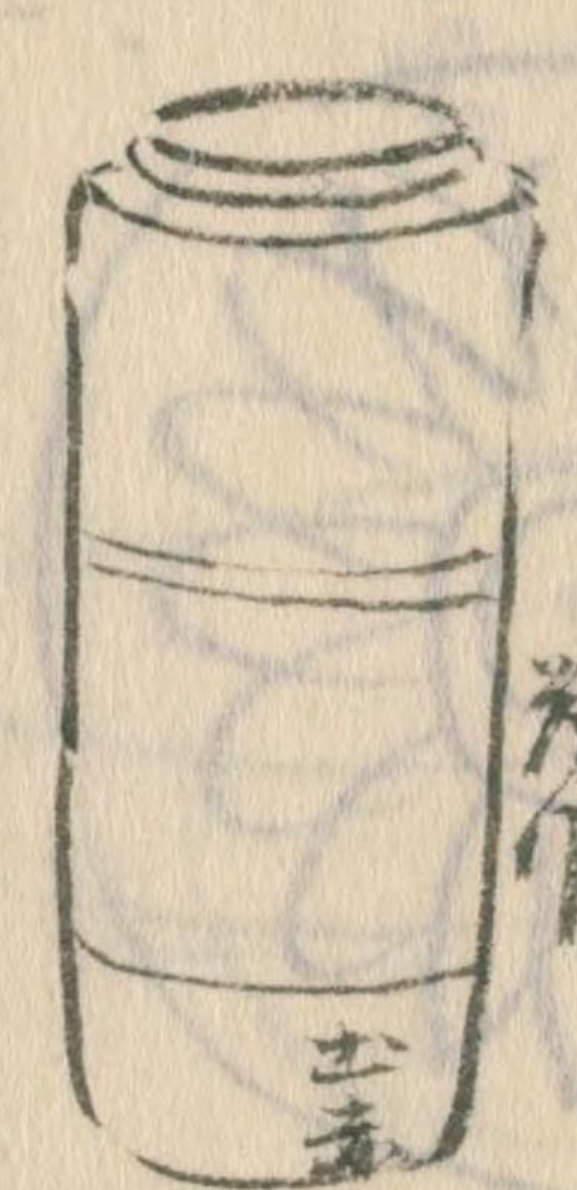
乾や



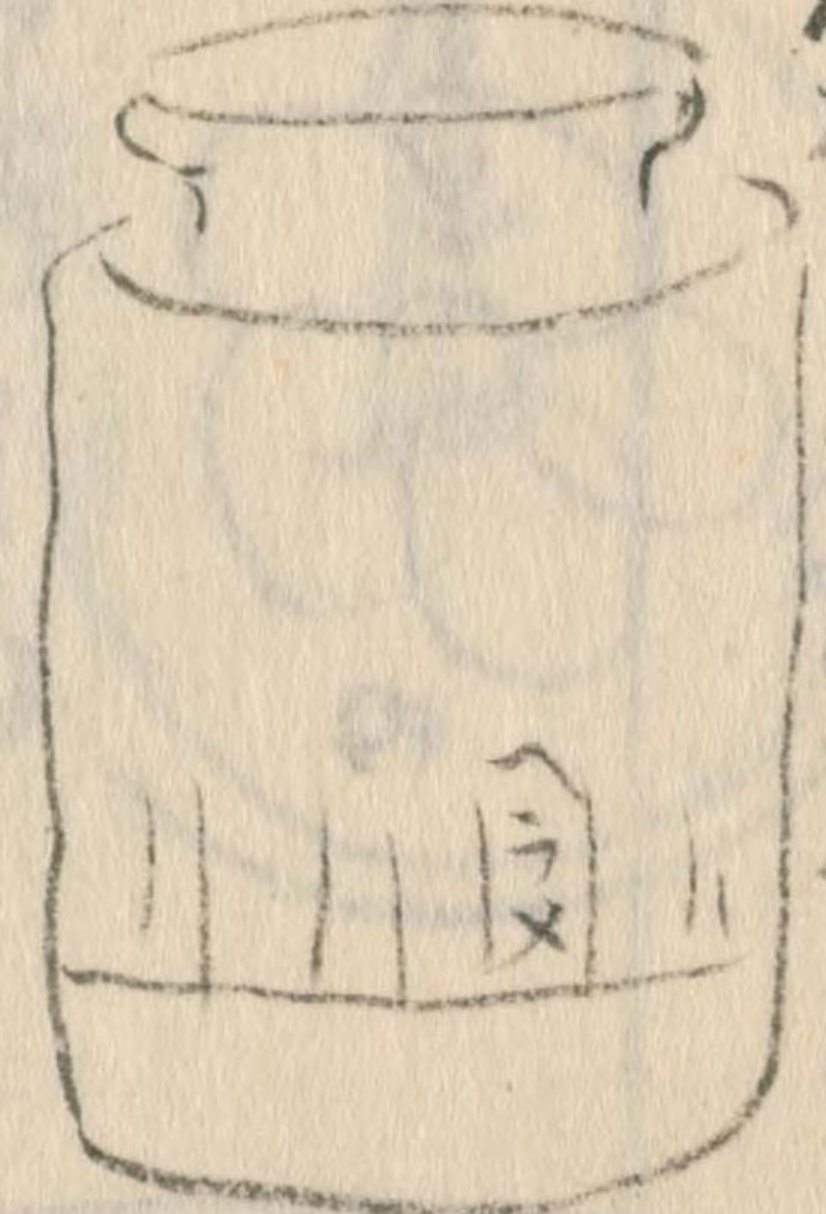
瓶丘



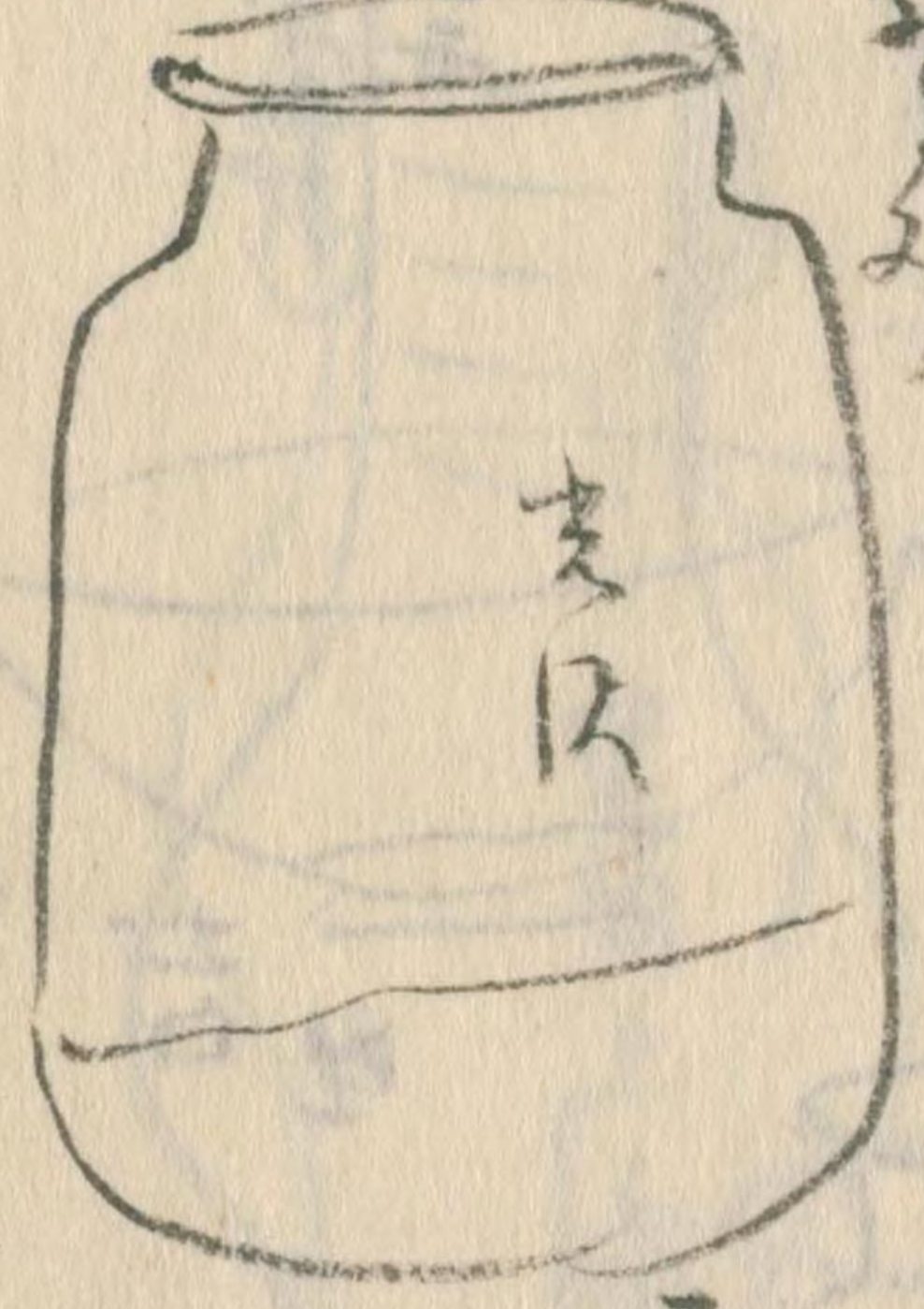
唐津

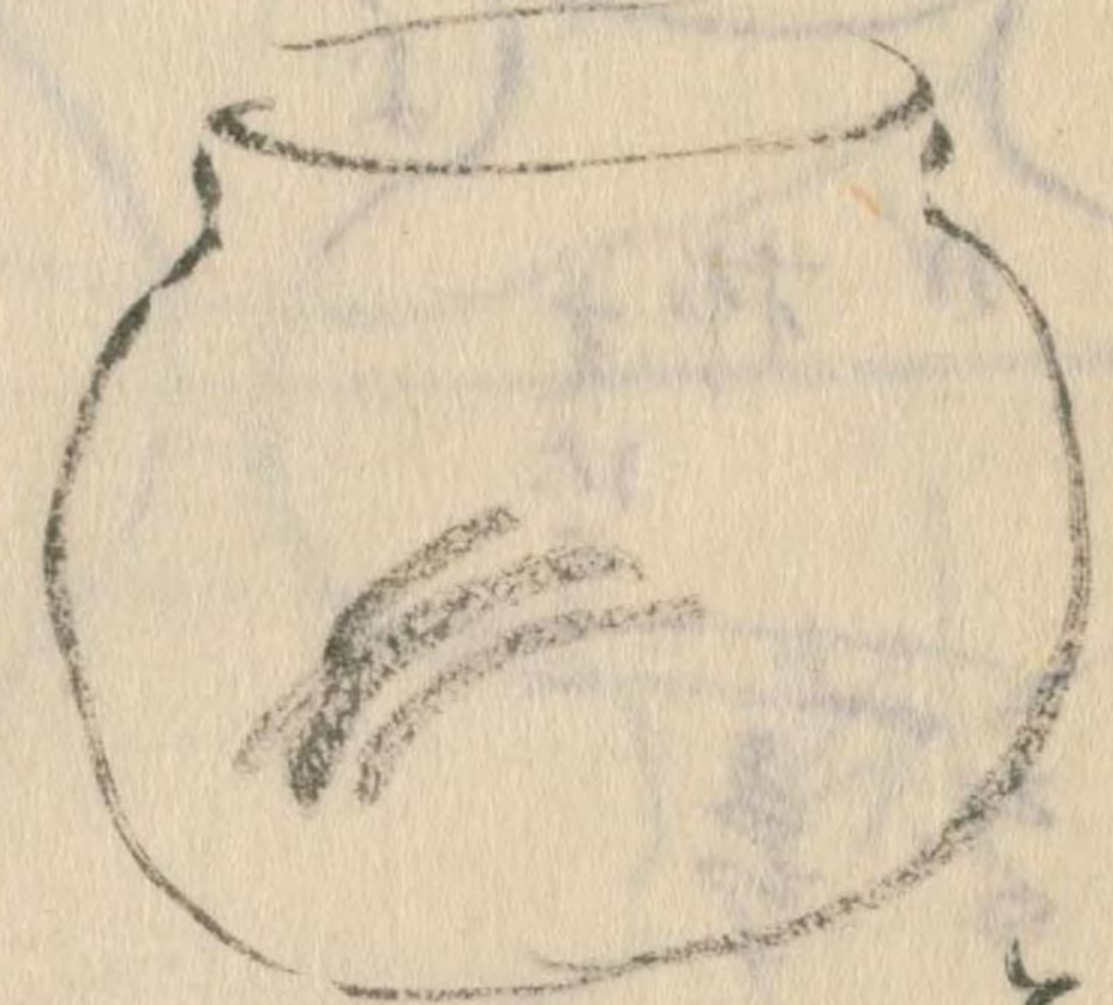


春存

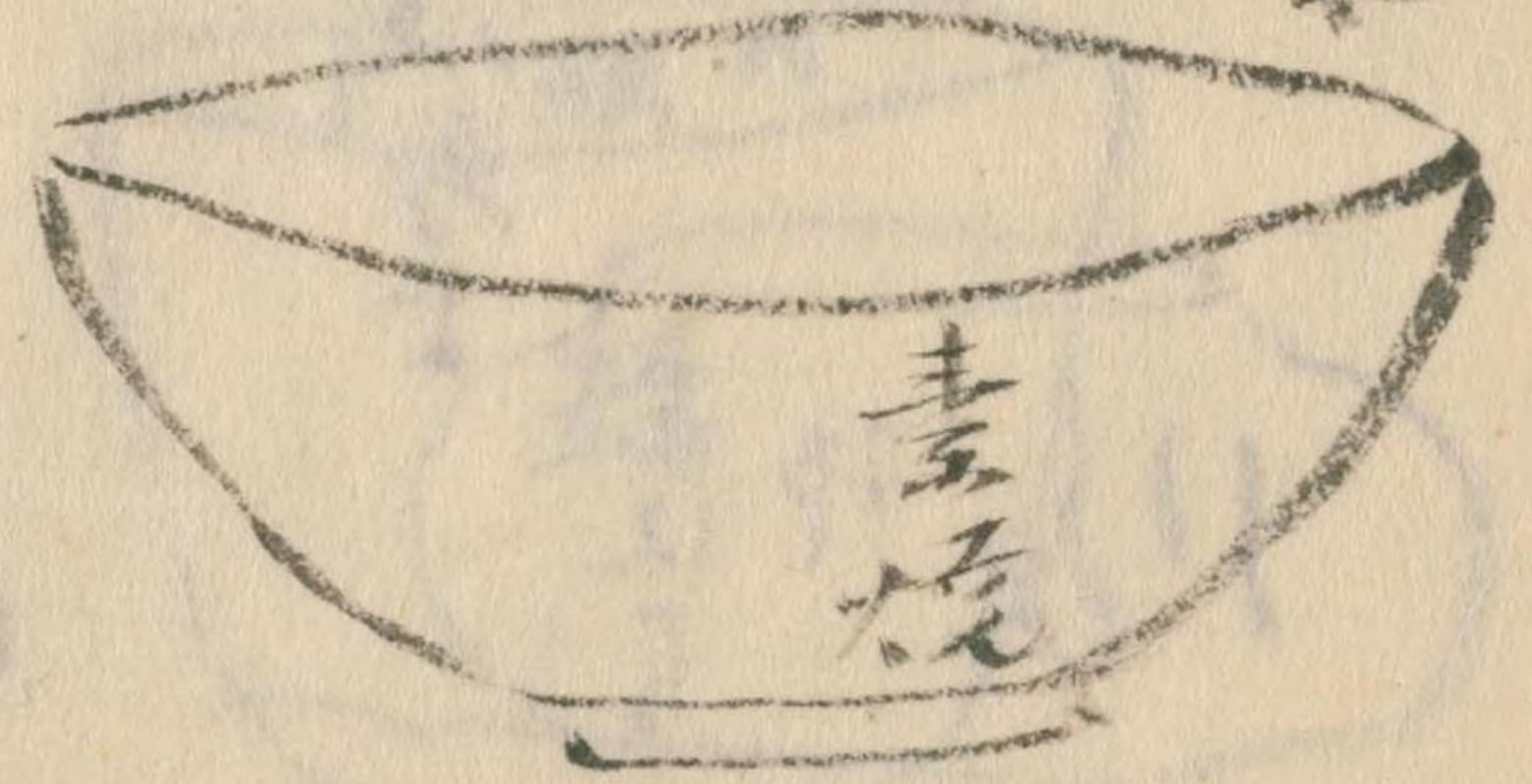


ろつみ

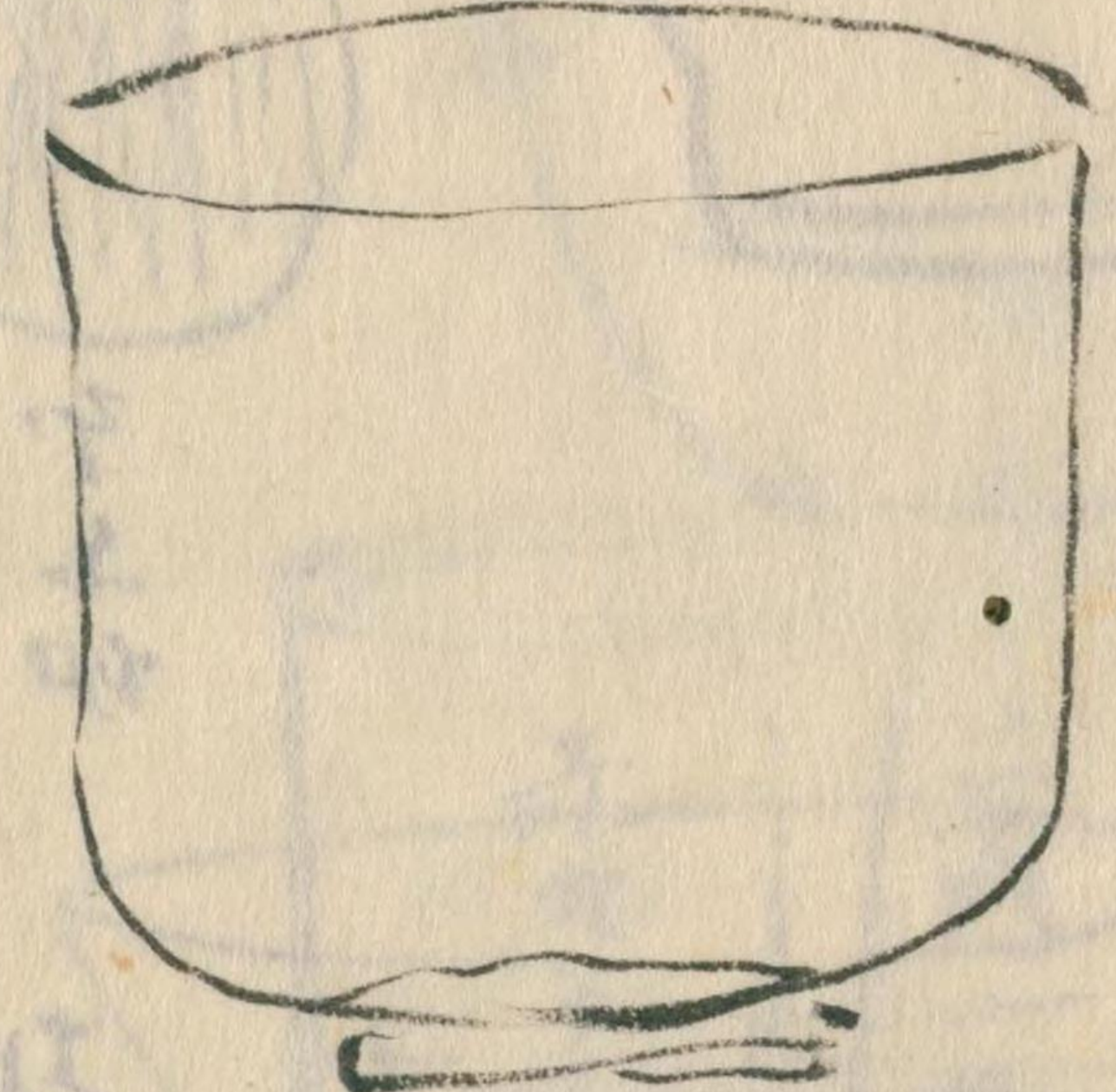


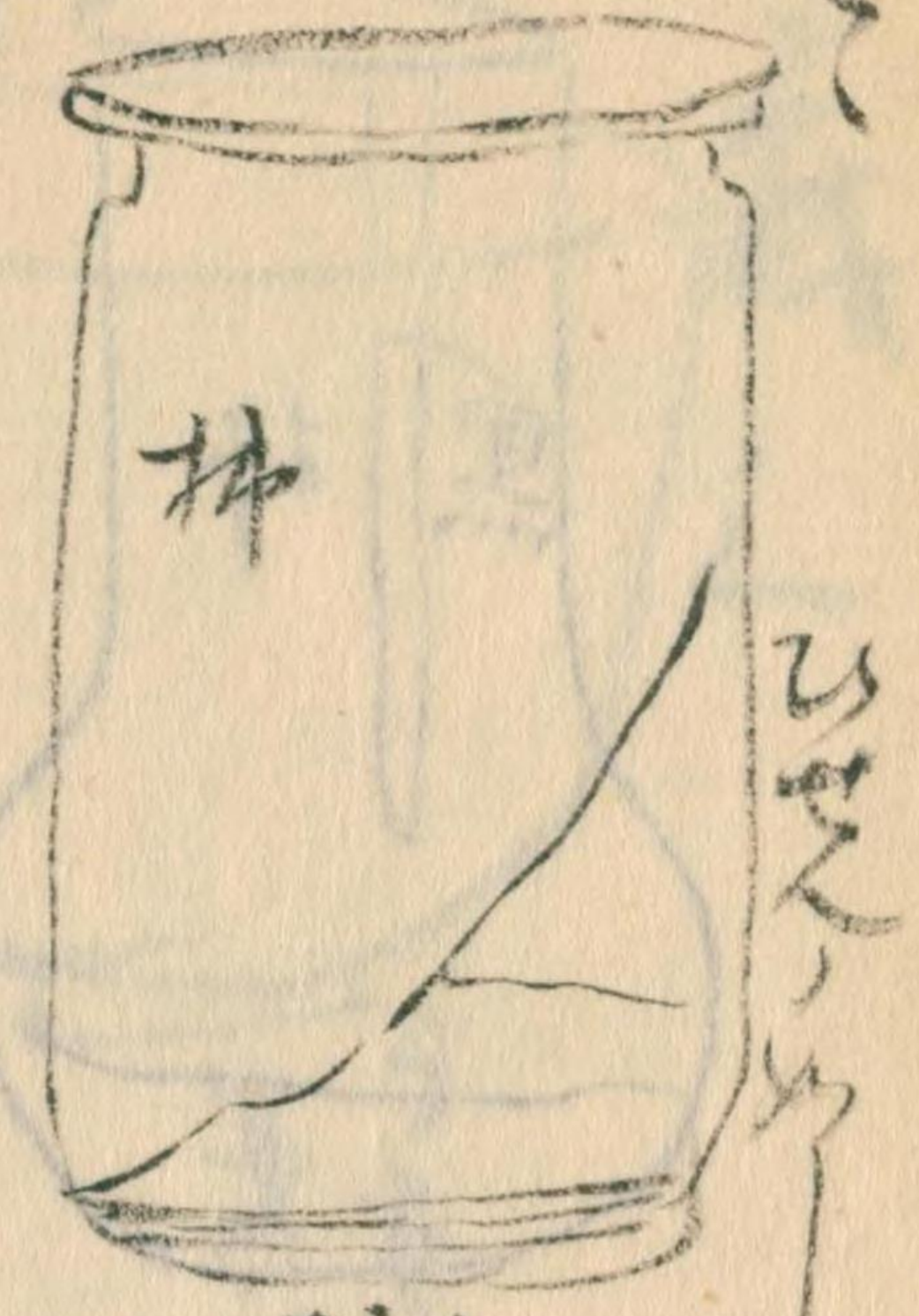


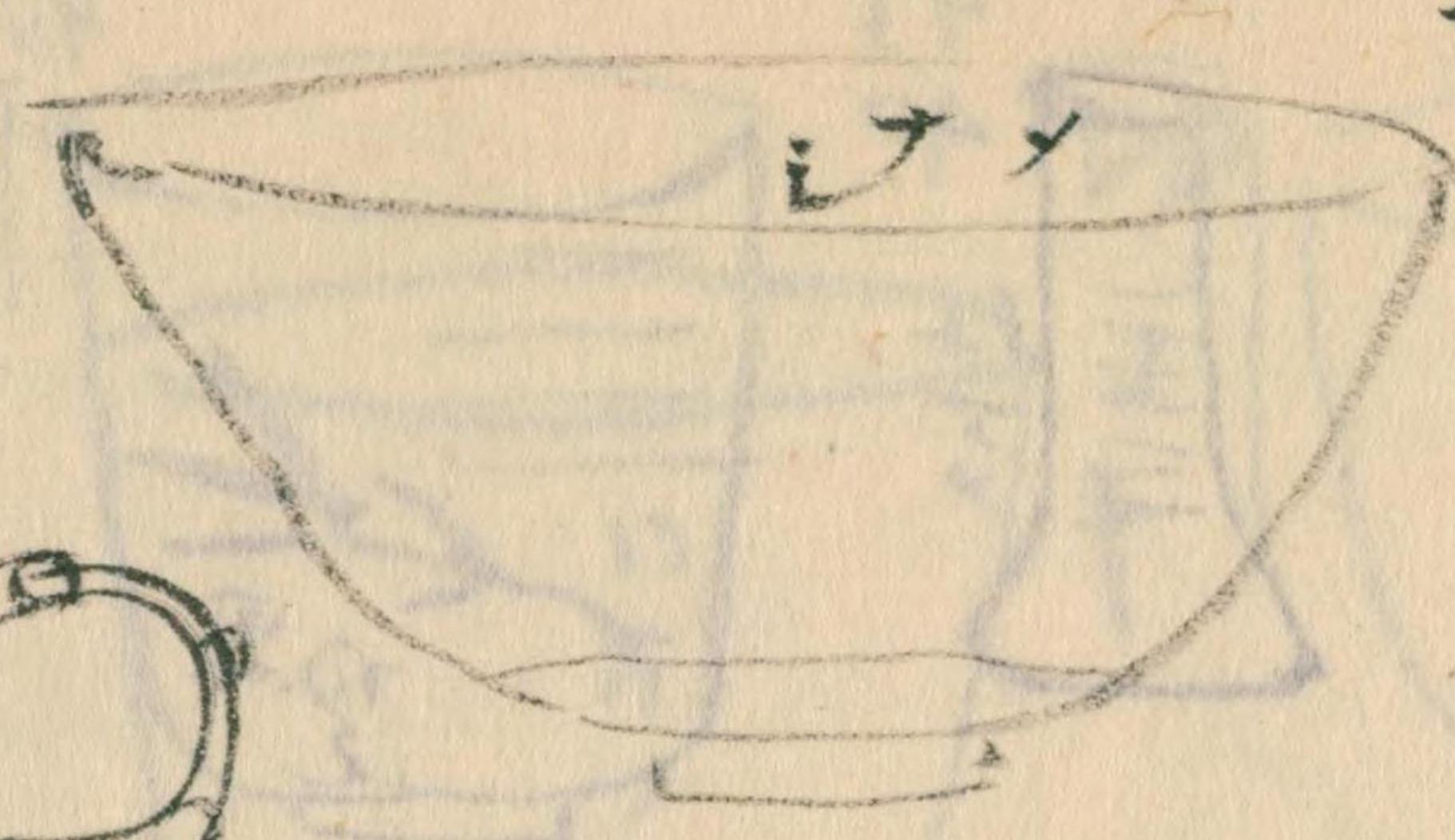
土や

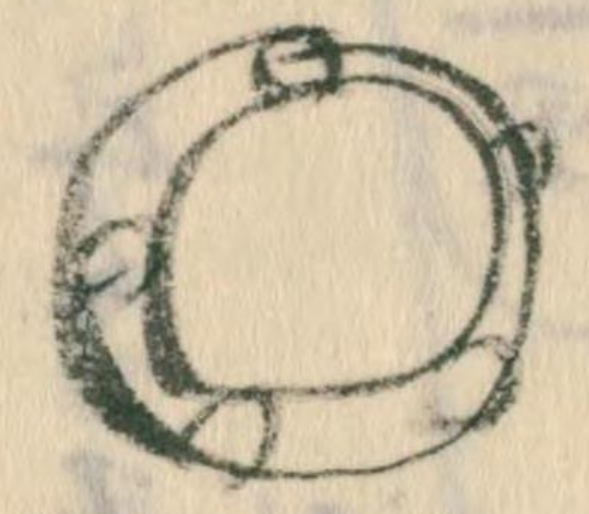


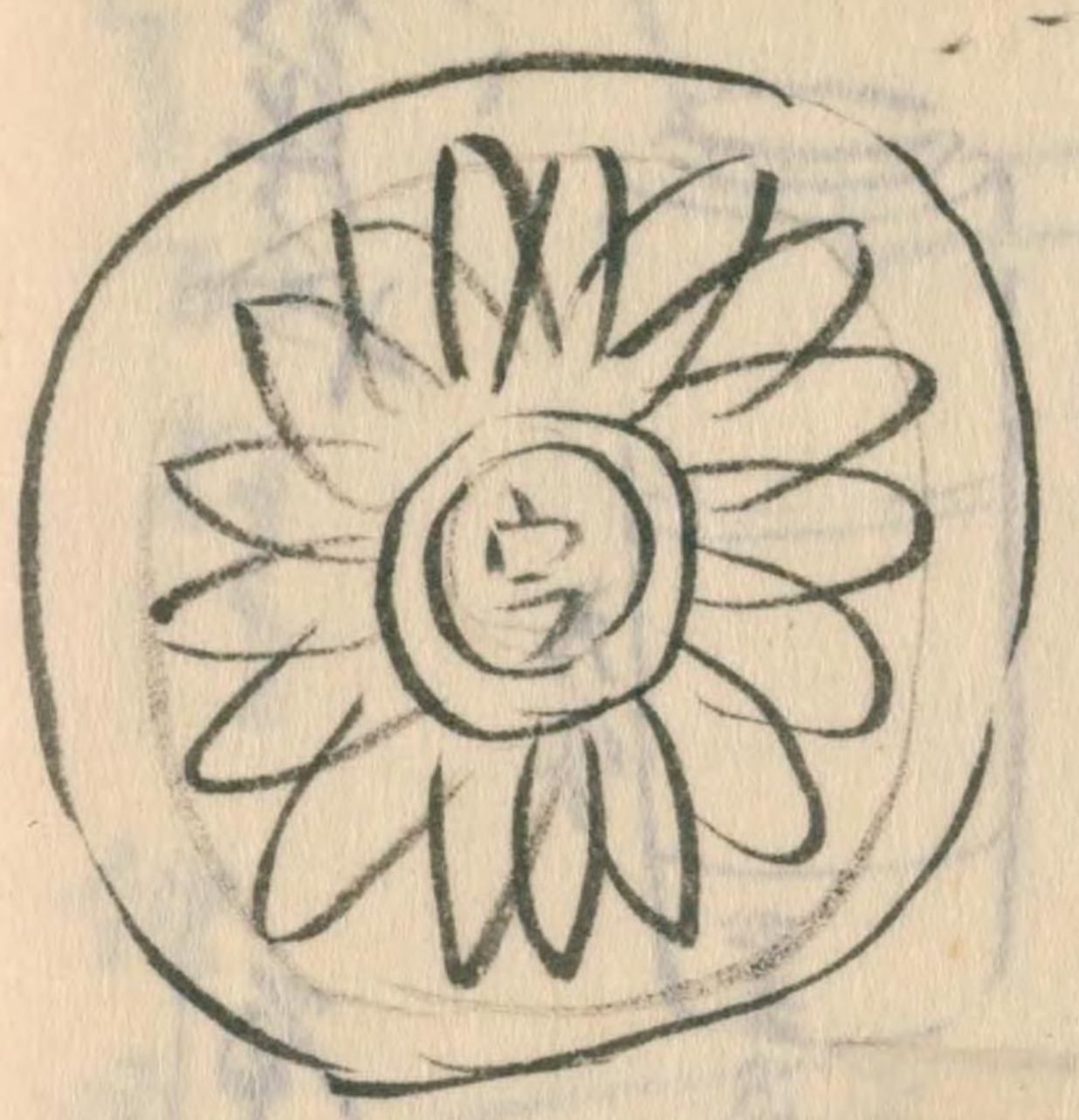
唐津

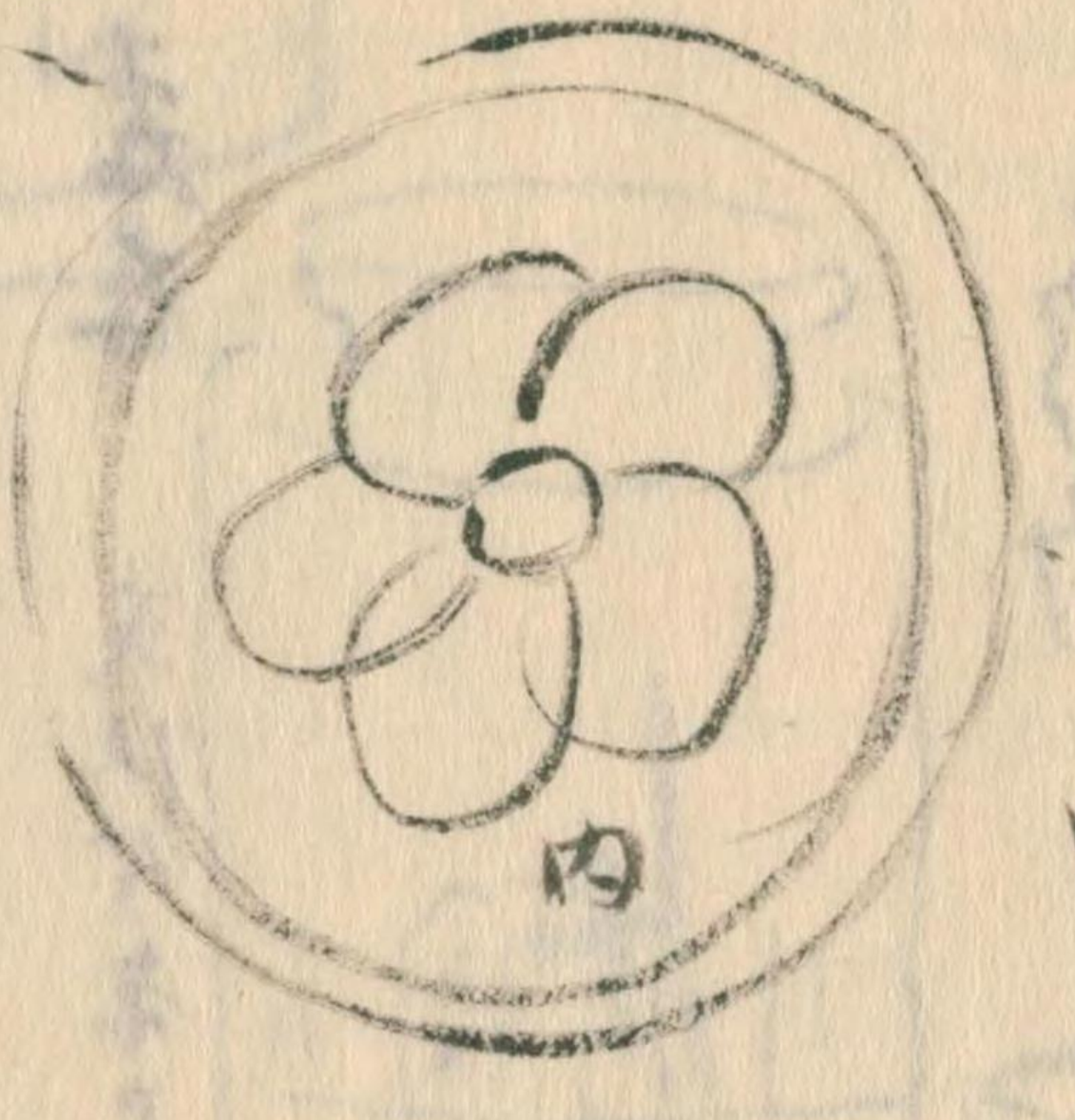


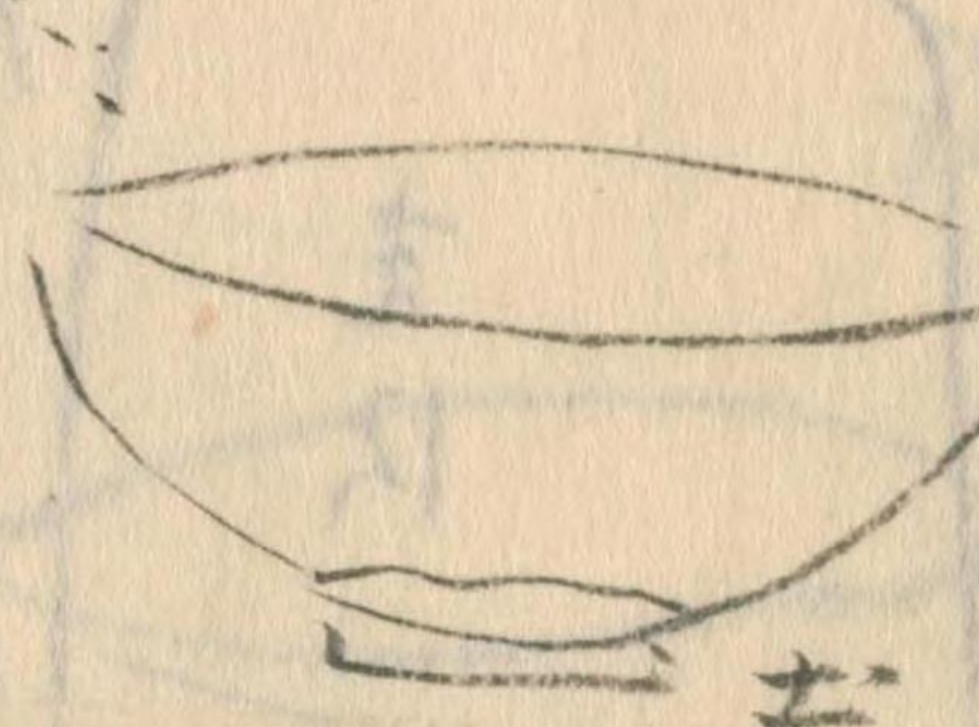

ぜゝ
柿
ひせんノかし
土赤
不知印

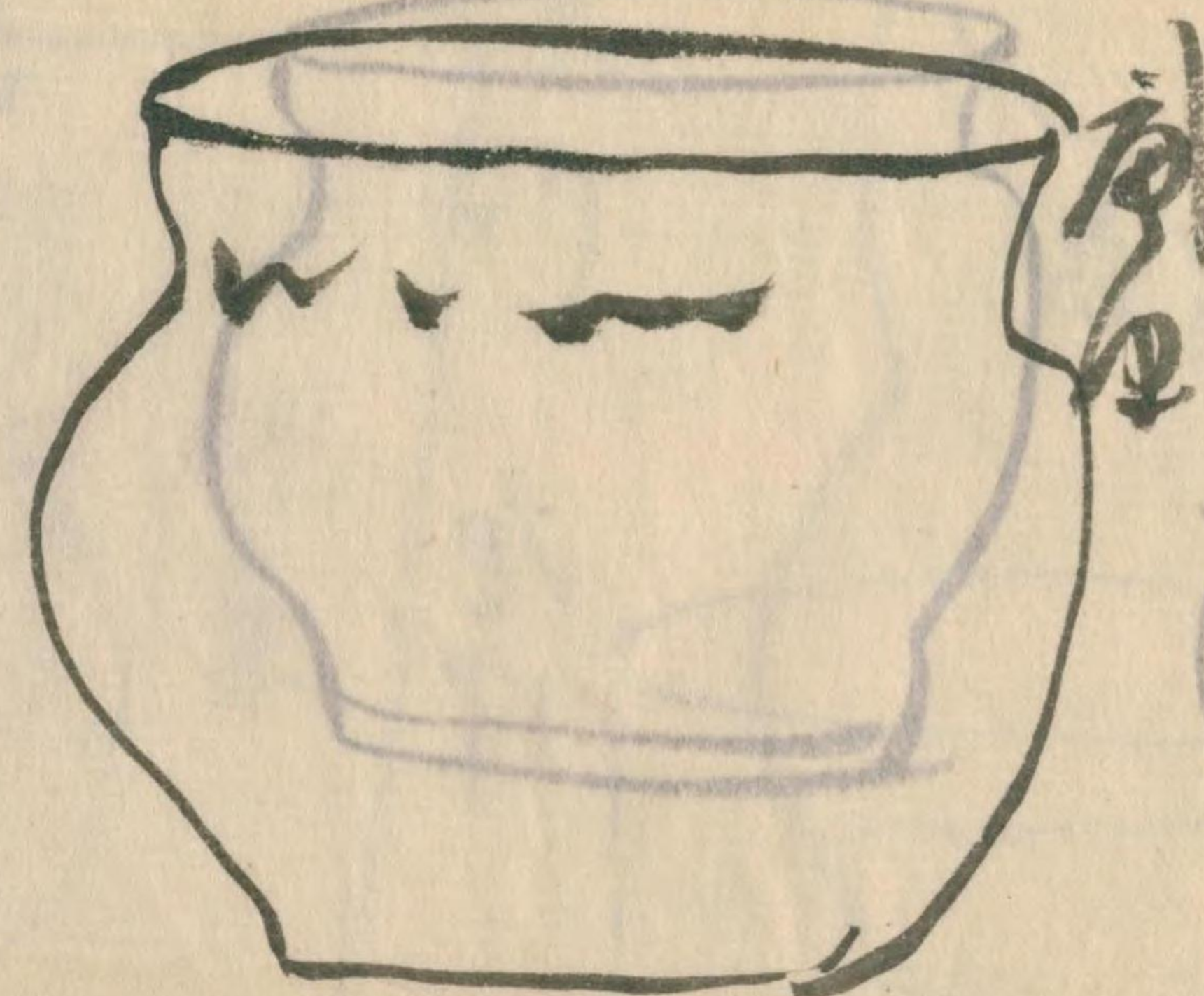

青井戸
レナメ

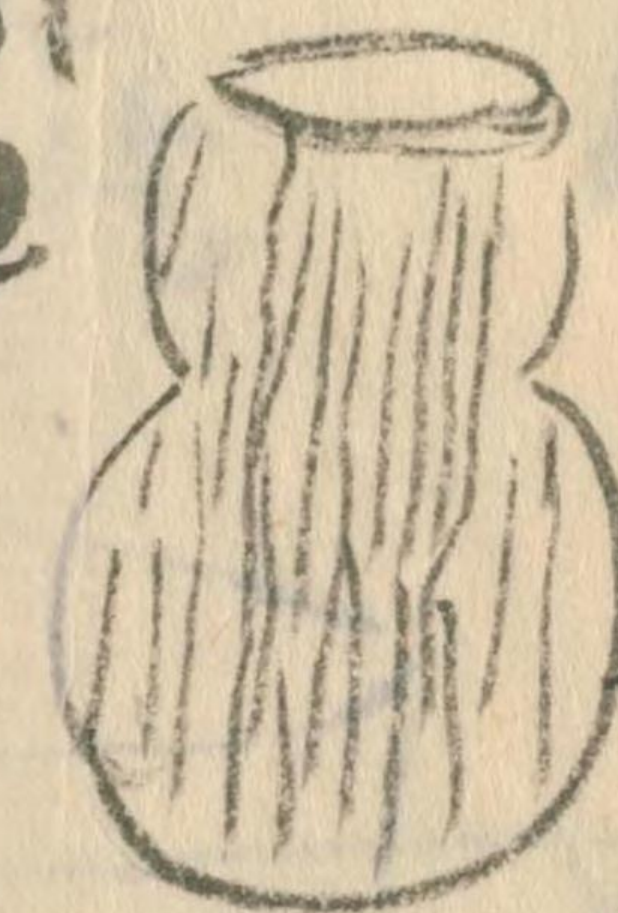


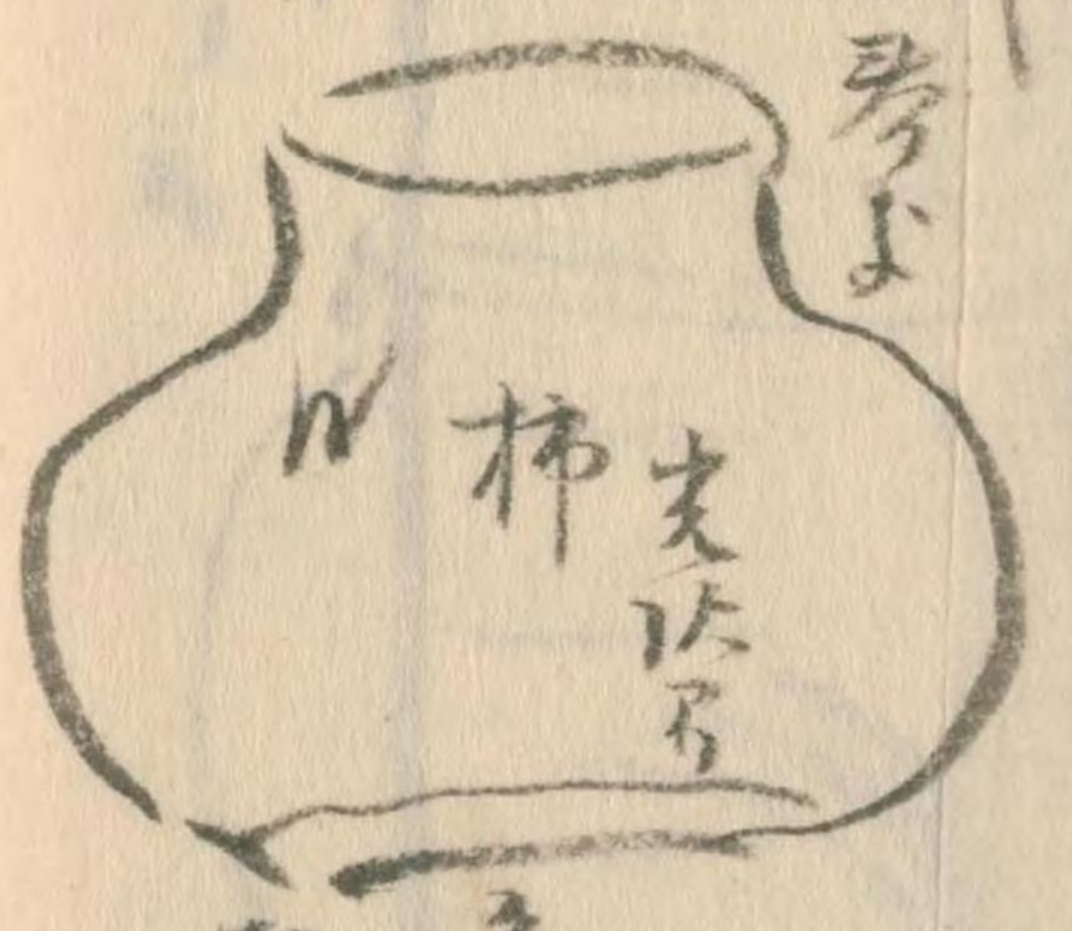

宗

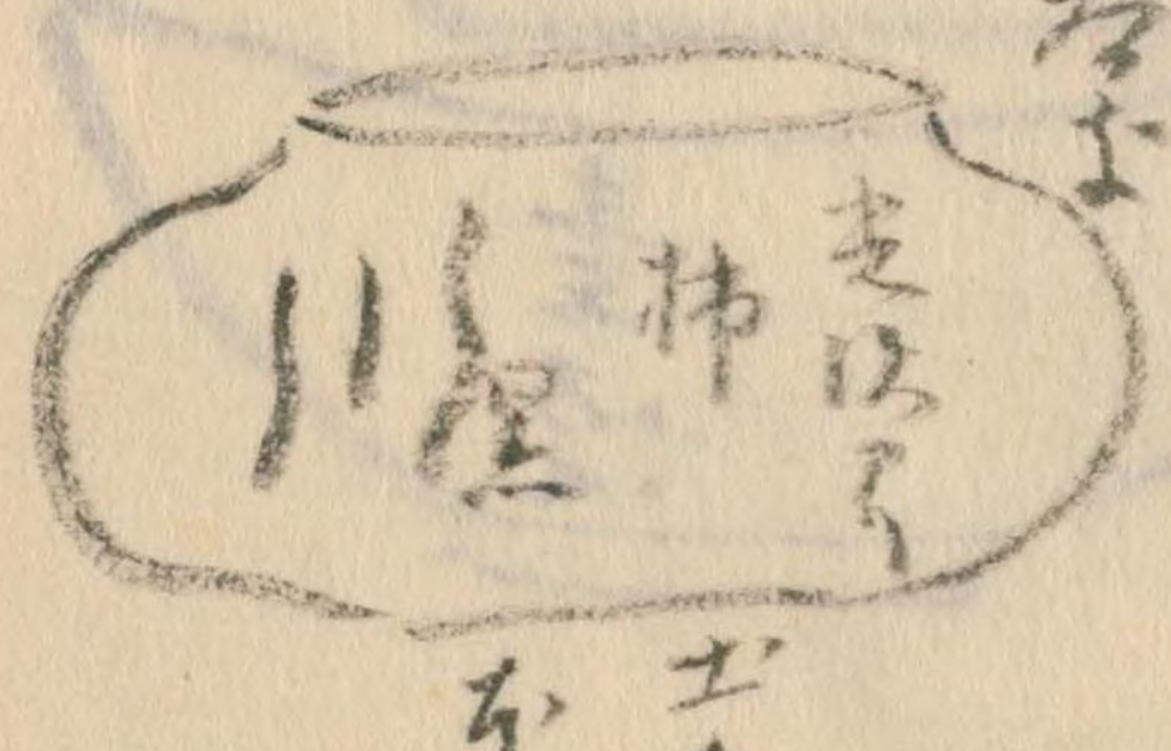

内

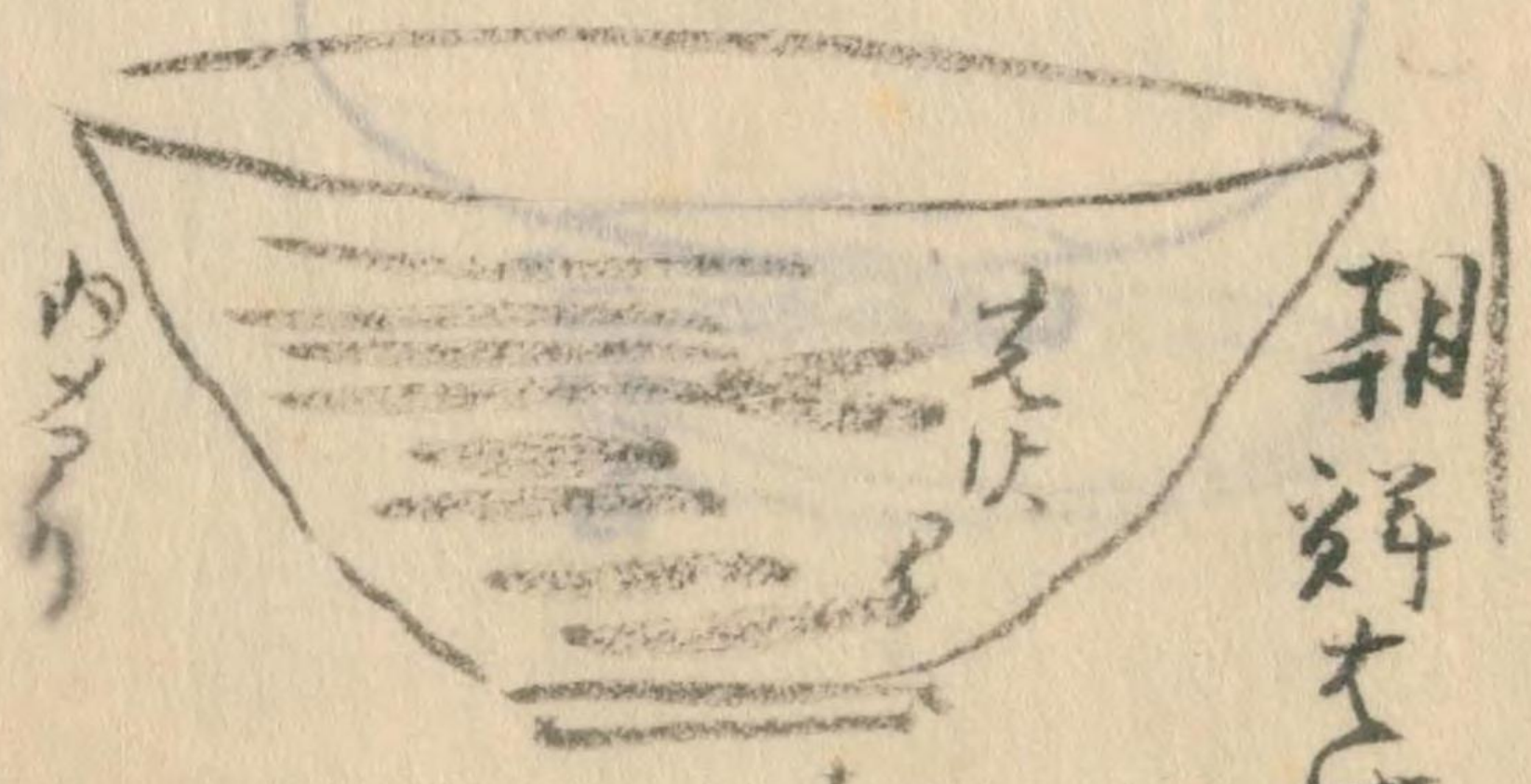

朝鮮香位
土白
堅

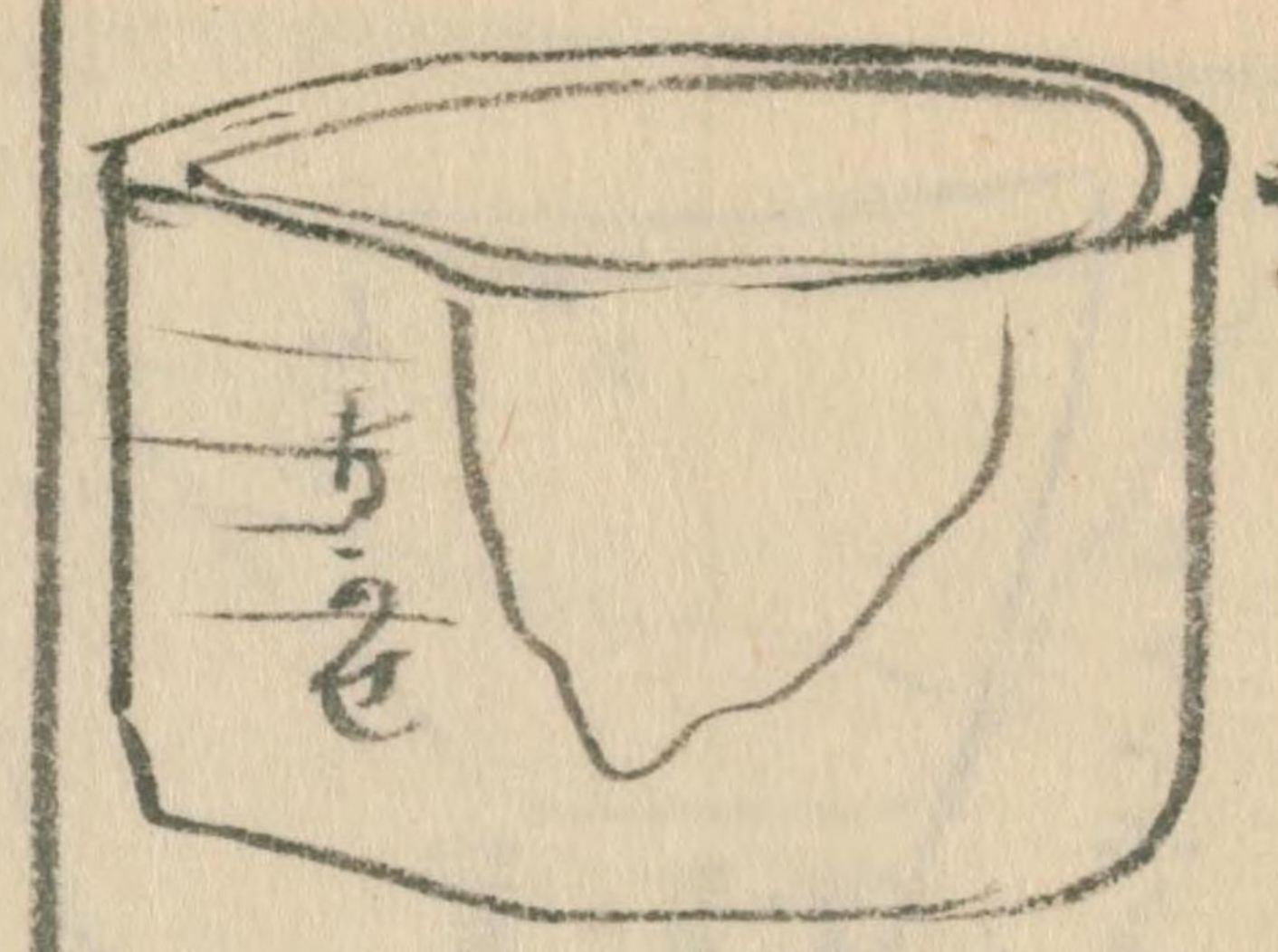

唐津

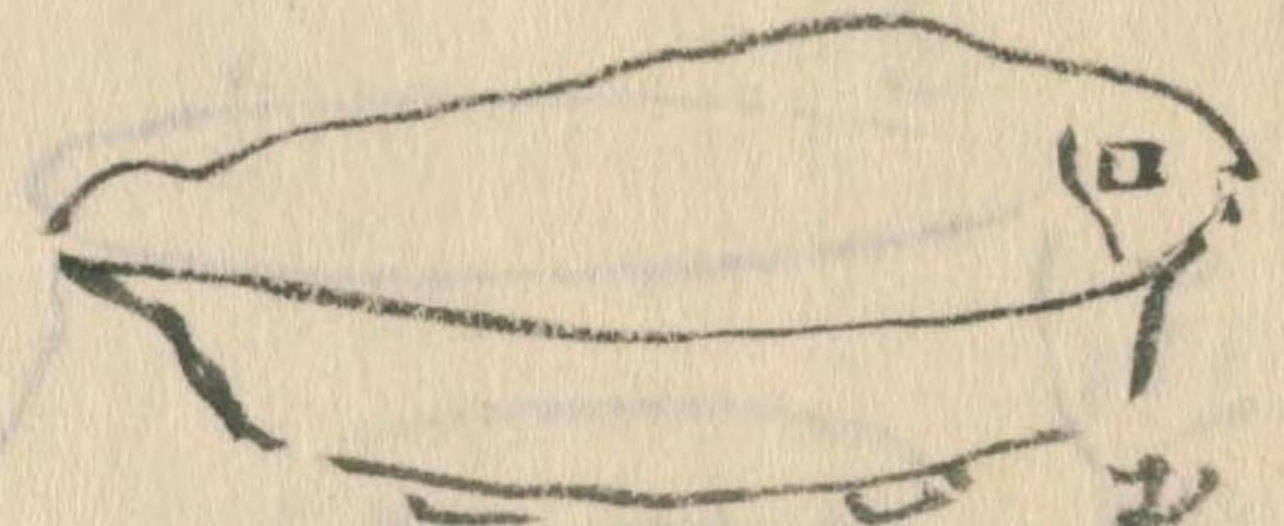

ニトロ
黄上黒釉
不知印

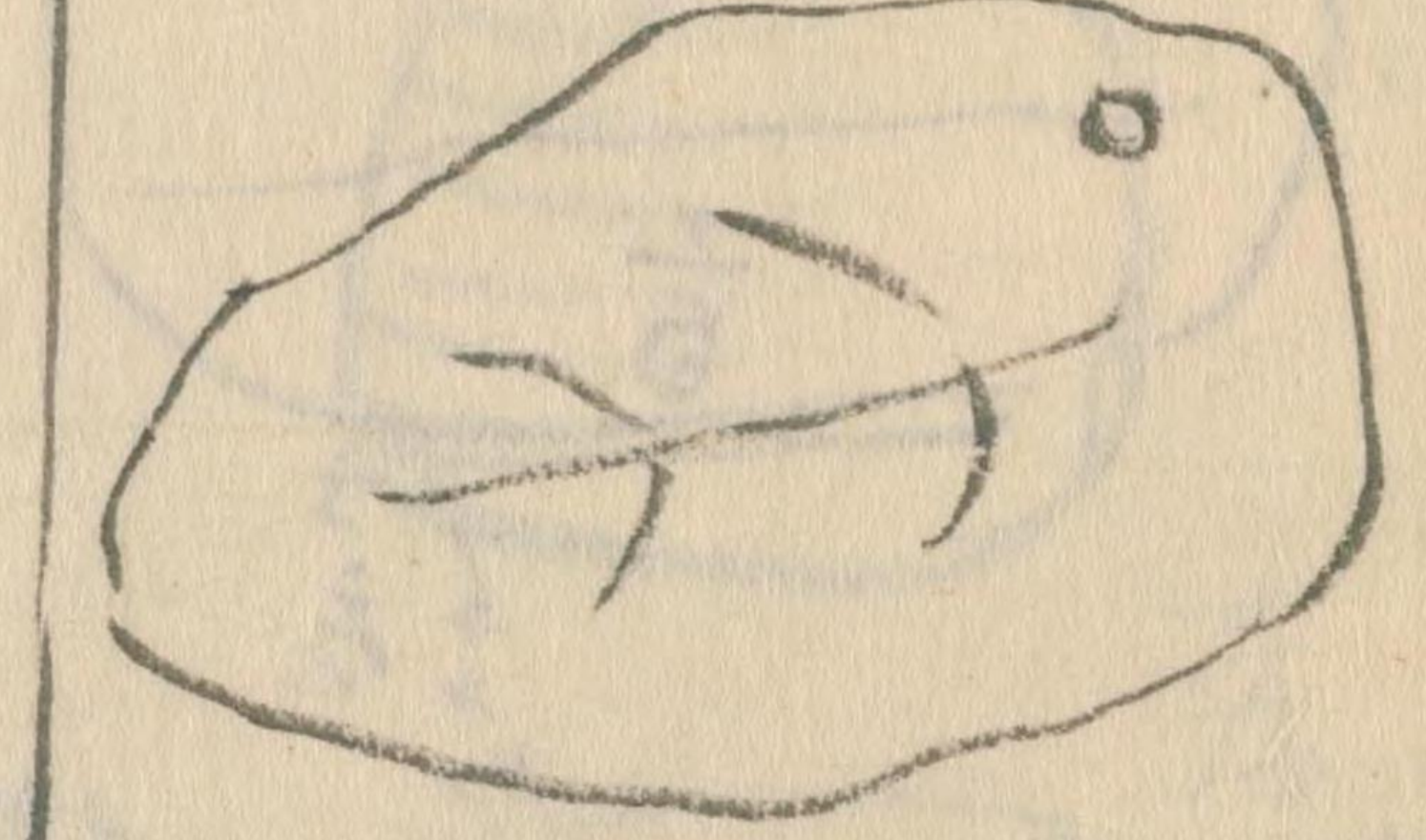

後楽よ
柿
支伏ヲ
土白
無印ナシ

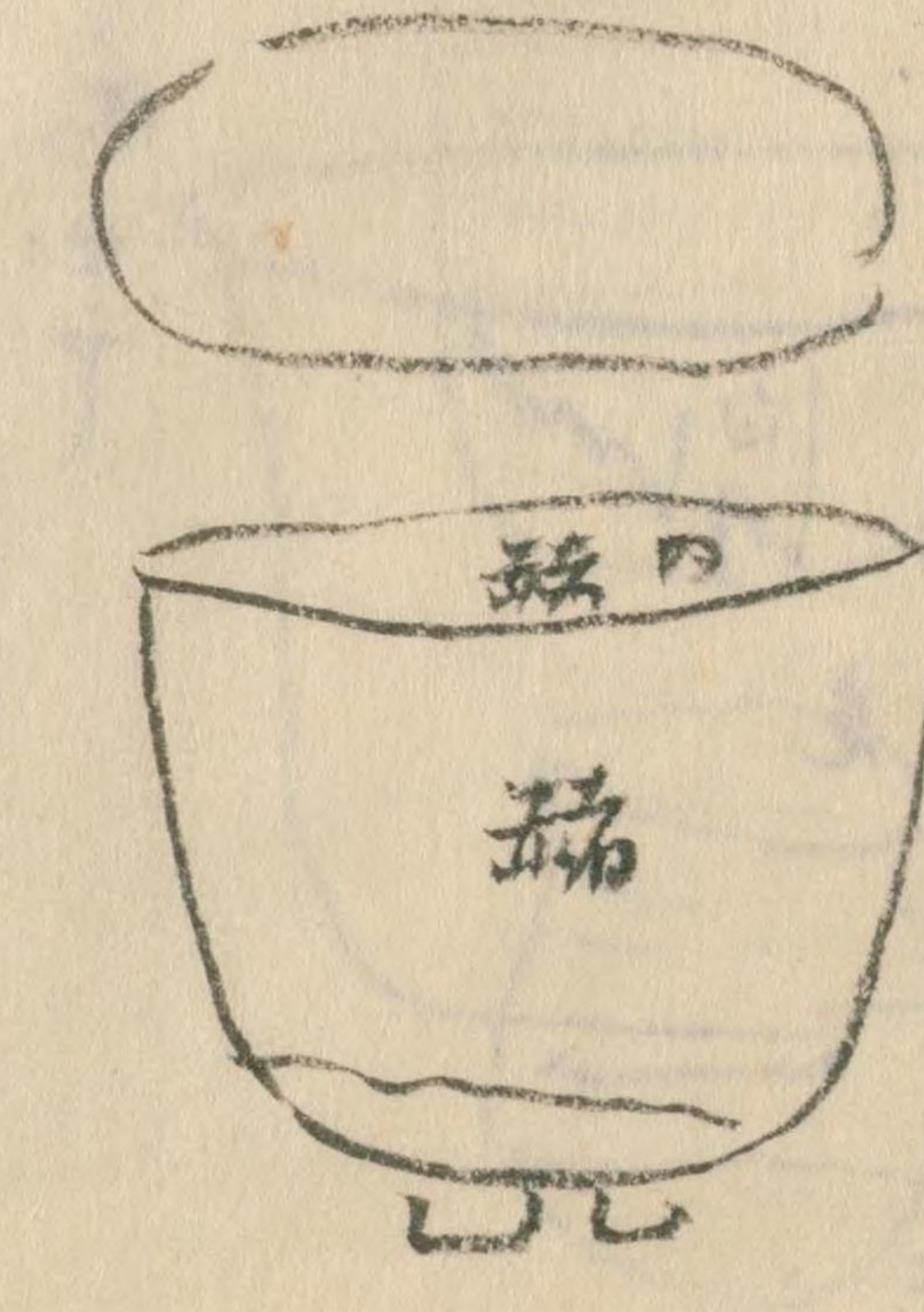

淺草よ
柿
支伏ヲ
黒
土白
不知印

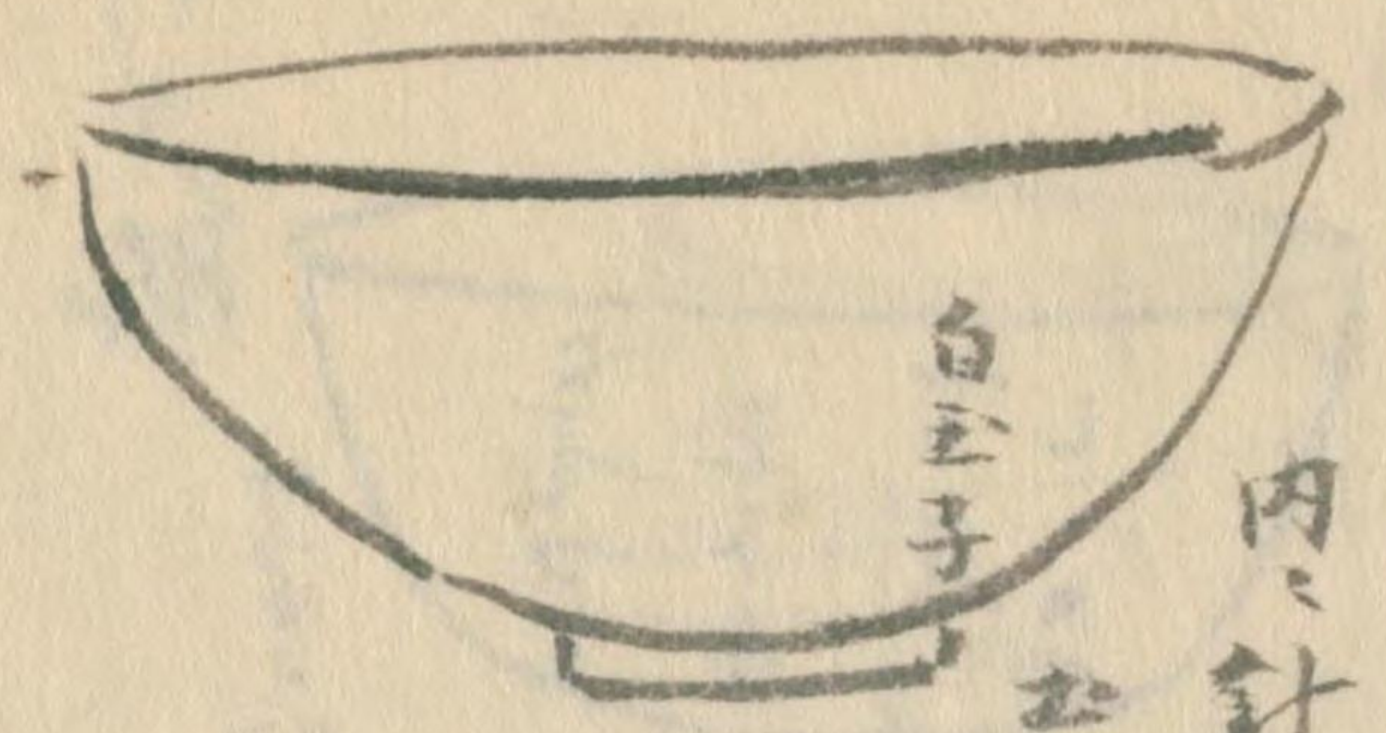

朝鮮大丹包
内メクリ
支伏ヲ
高麗マデ
達ス


ミドロ
青色
土赤
堅

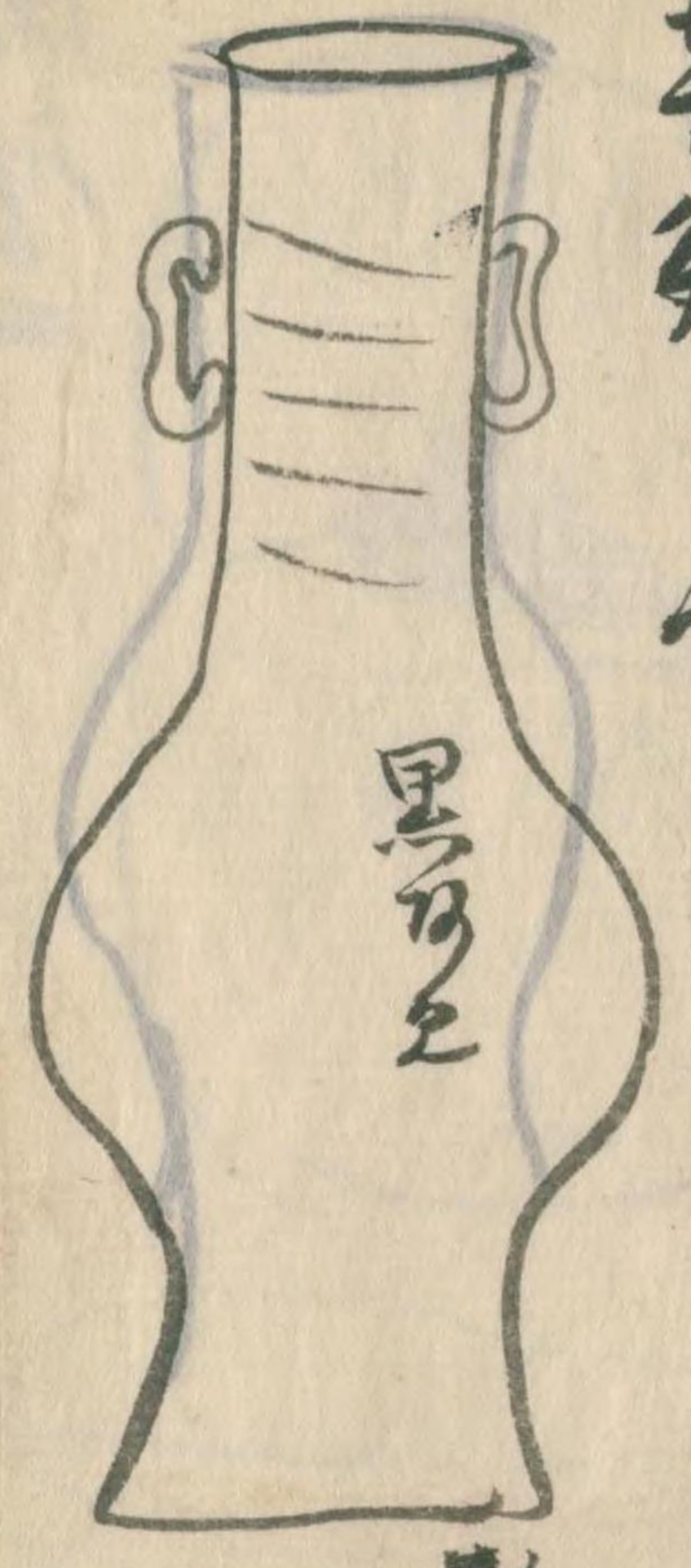

萩
口
土白

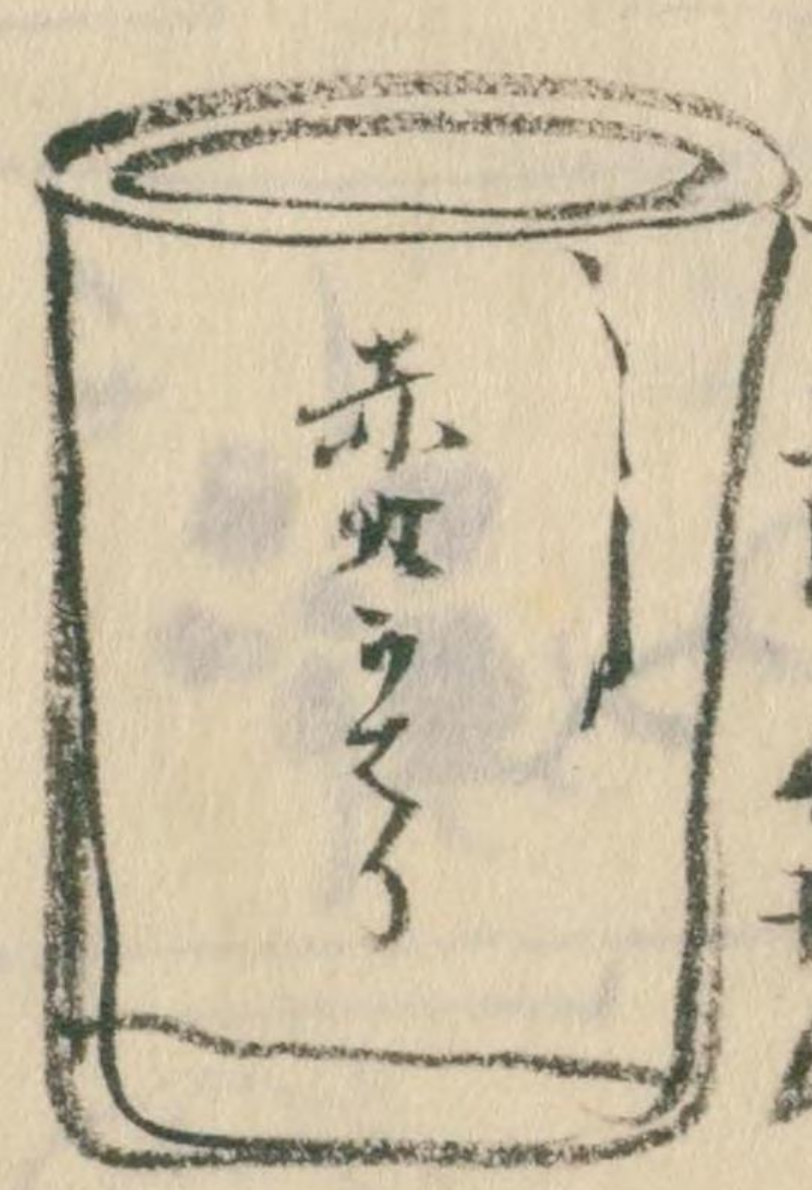



萩
緑 内
緑

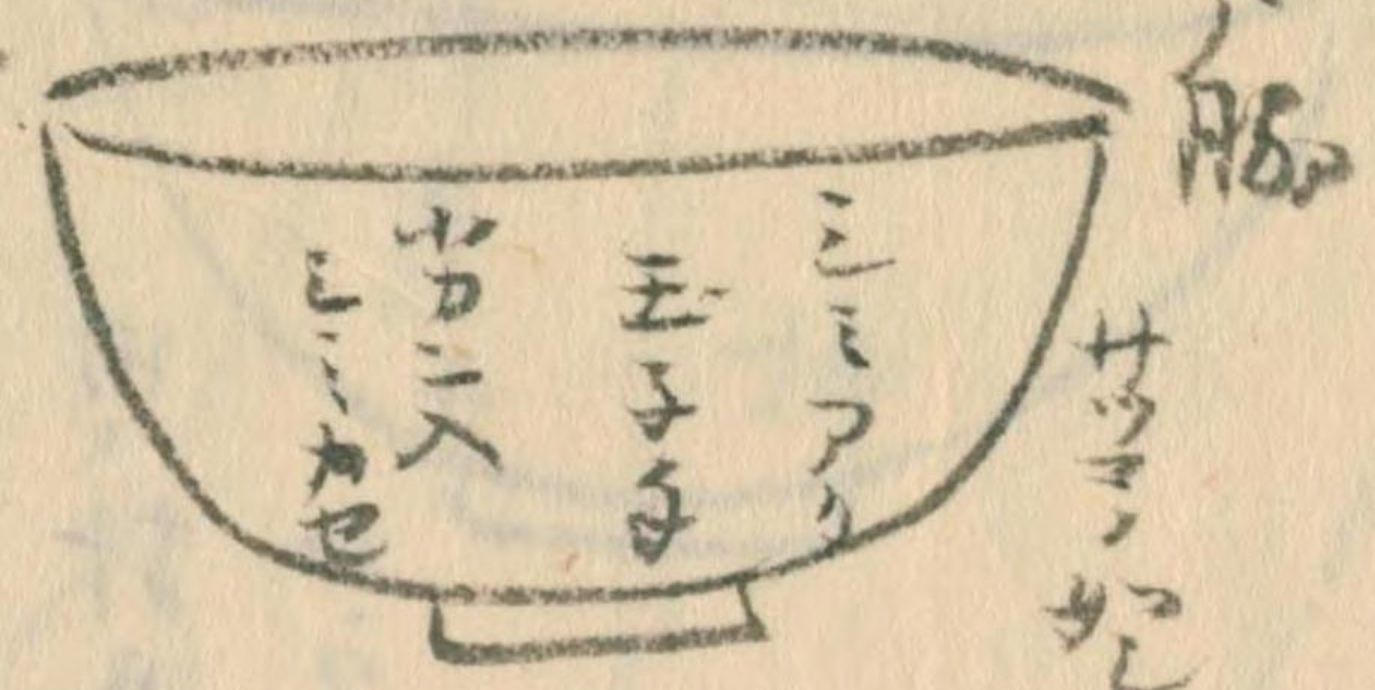

萩
白玉子
内ニ針目四在
おうさく白

三月五ゝ柴井氏尽所や


朝鮮うつ
黒ゆう
土赤

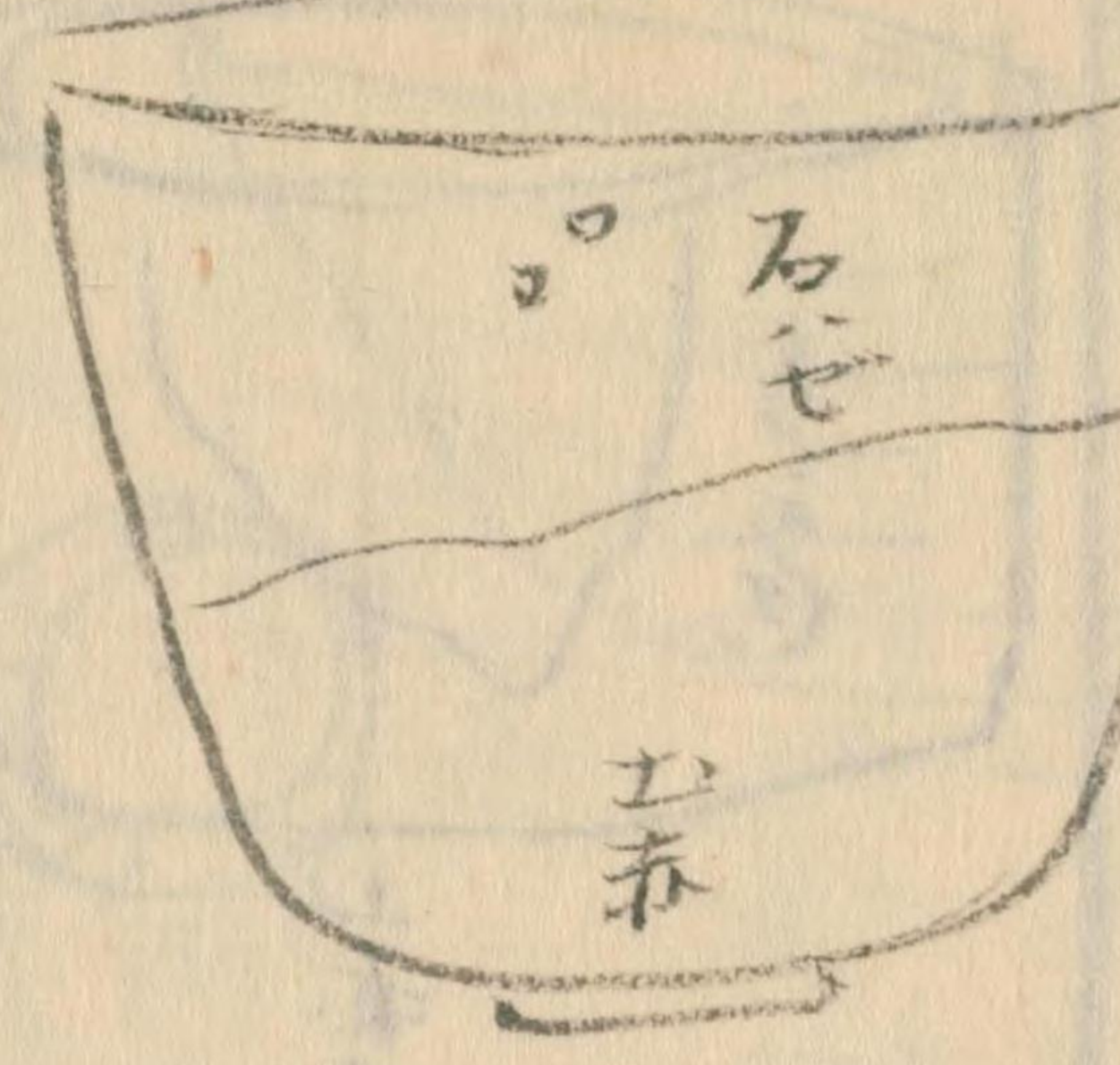

赤ゑうつし
寿布雪ニ高
柴井氏

井ミ脇


ミミアリ
玉子手
出二入
ミミカセ

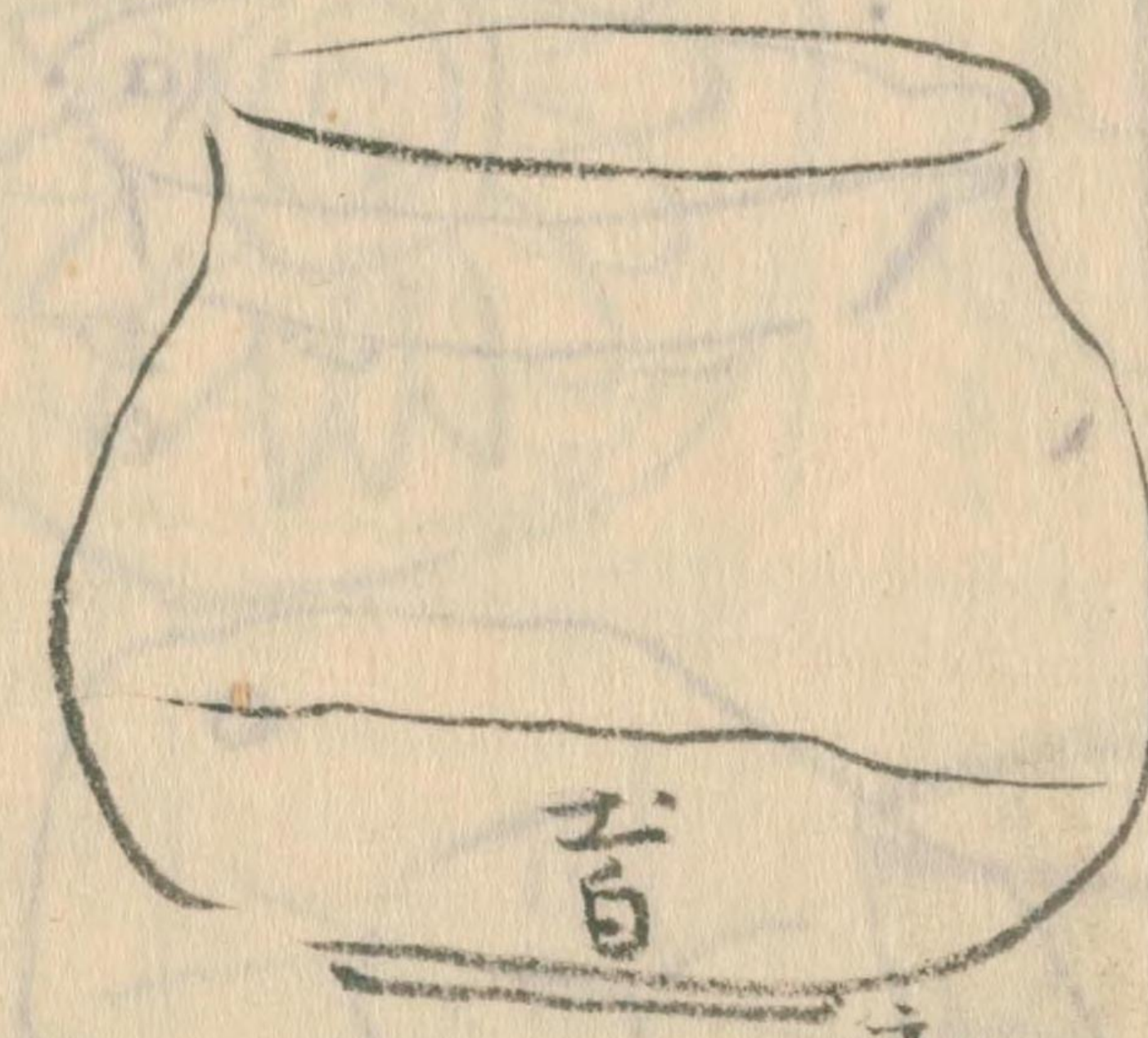
サツマノ如し

唐津



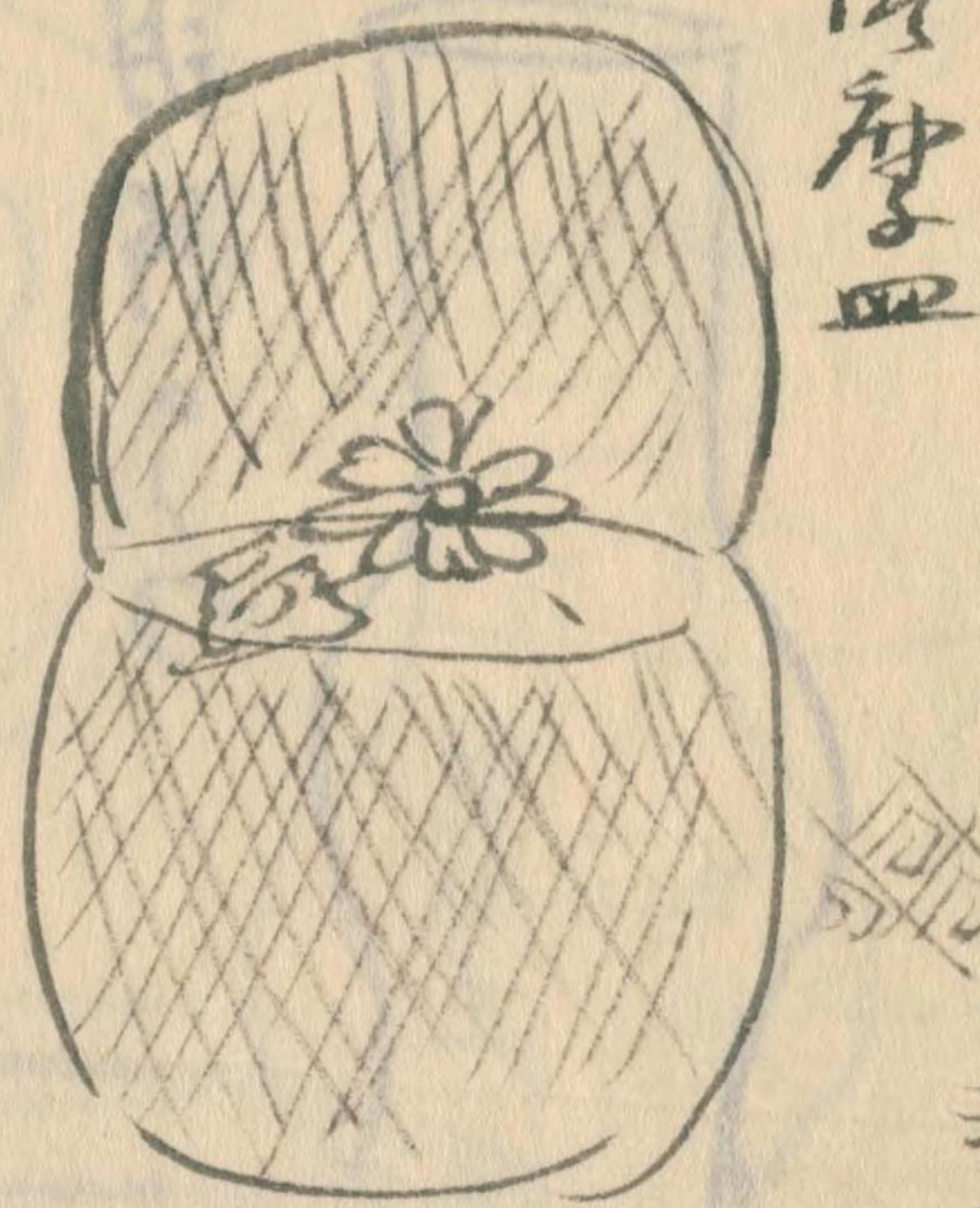
世ミ石ハゼ唐津ト云

カトカラツ

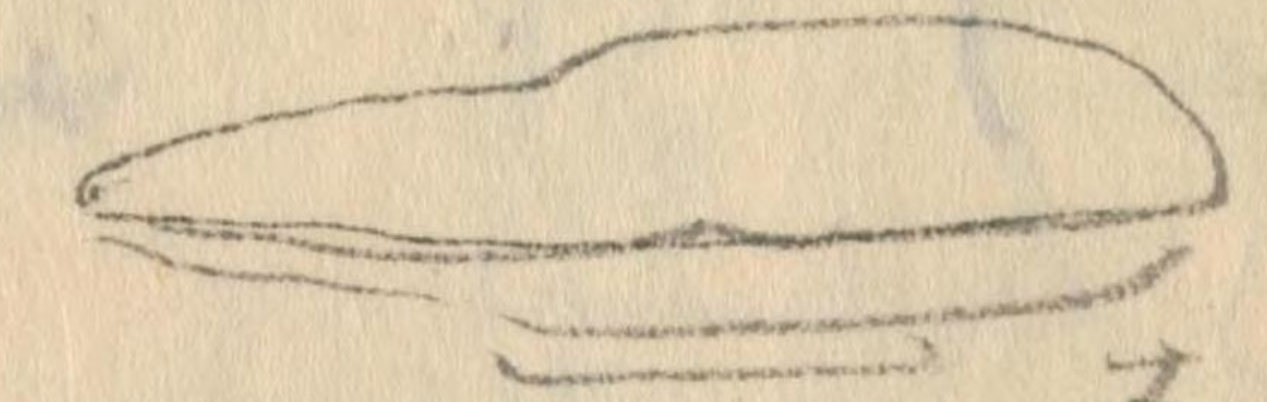


ウ底
手カ如し

薩摩皿

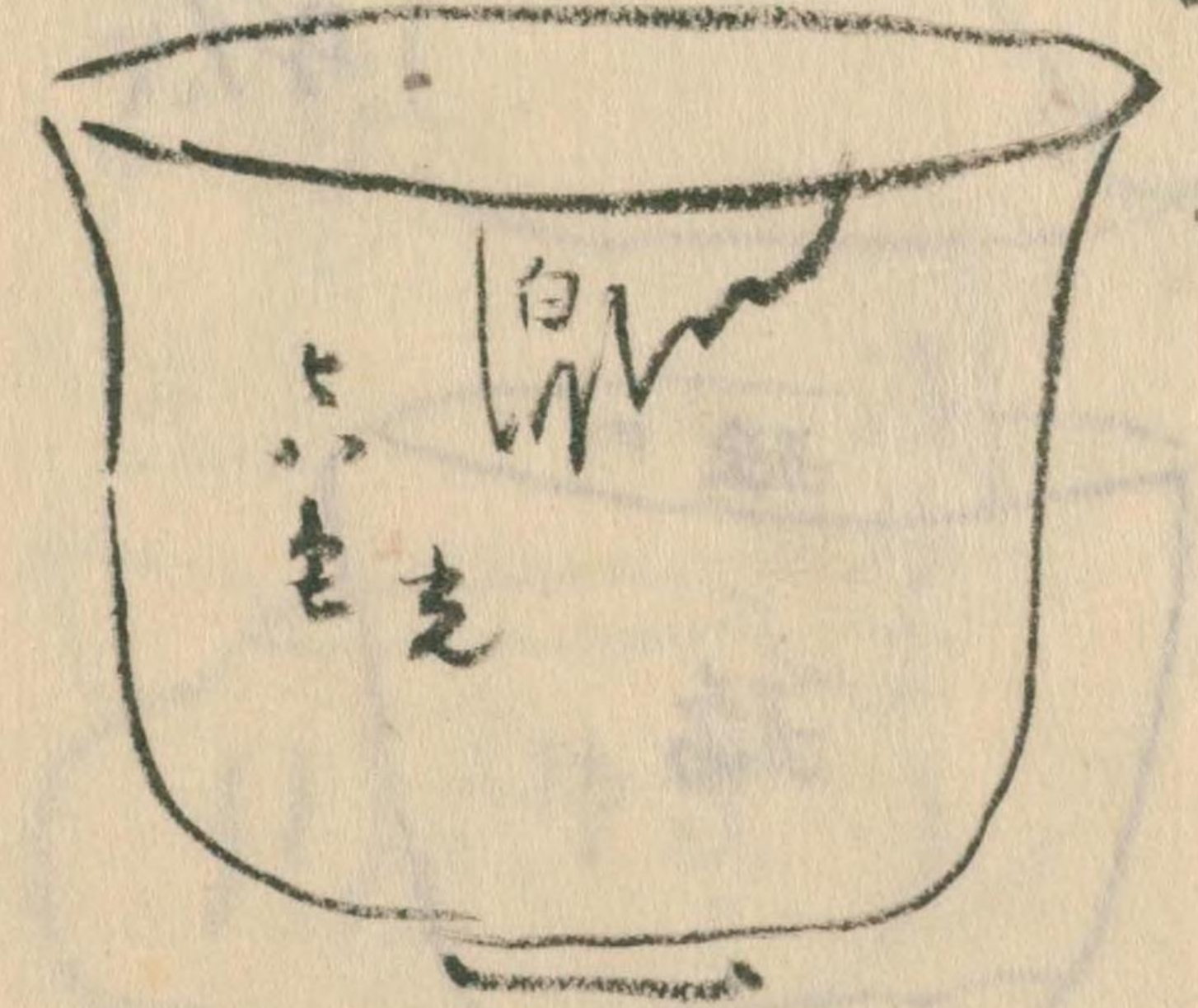


玉子手ノ如しカニ入ナシ

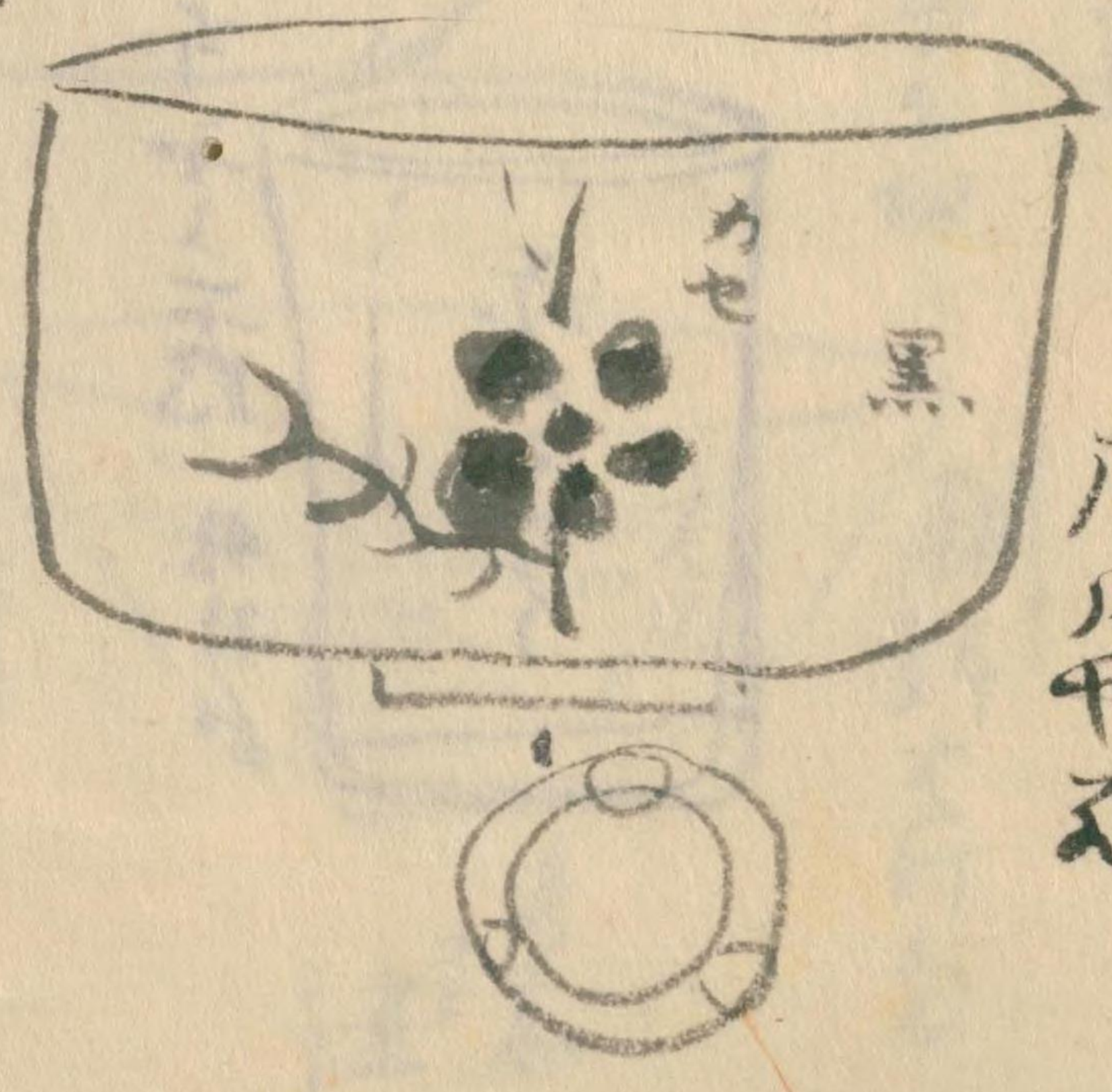


古サツマ

楷ミ木山ヤ



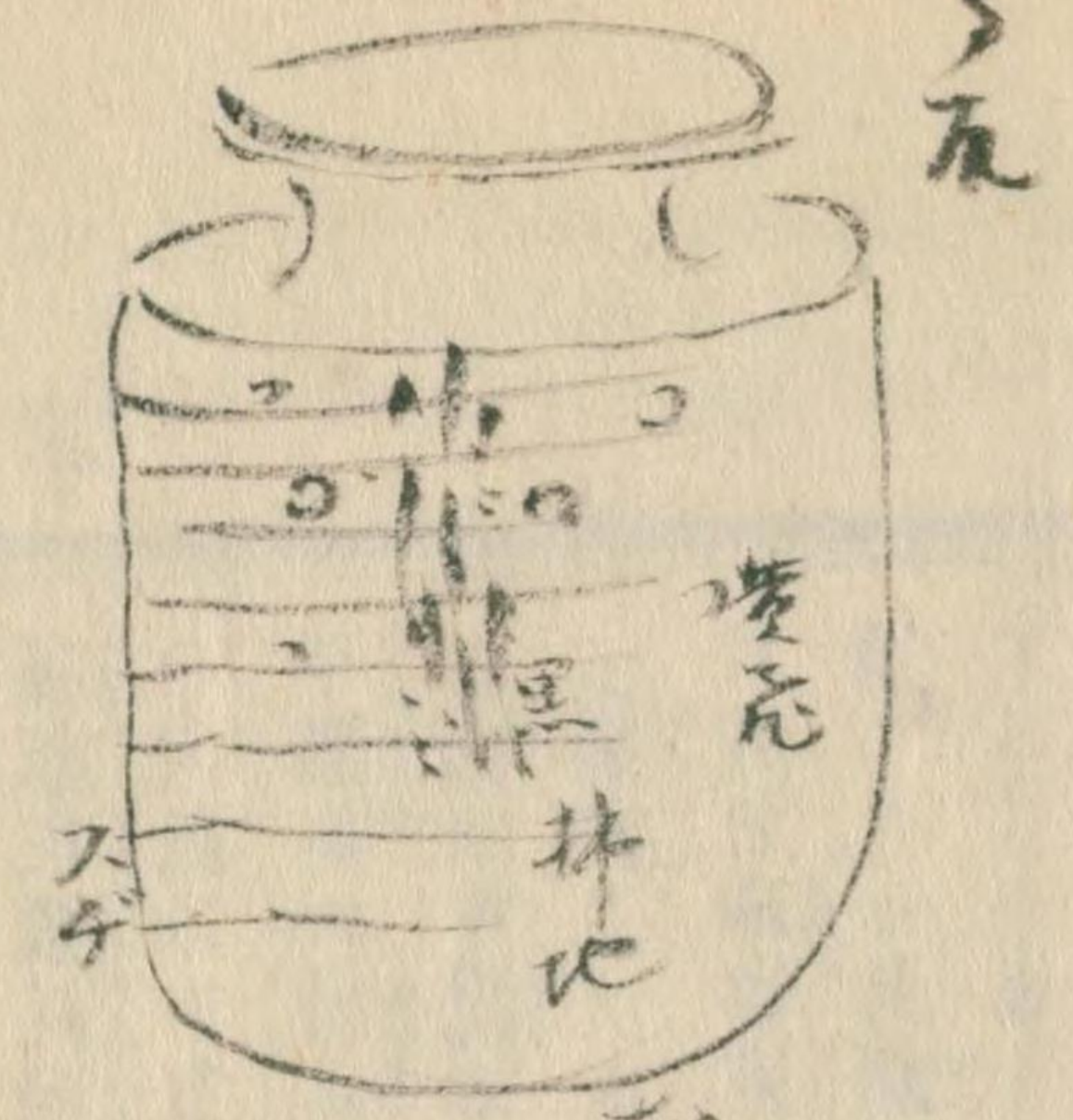
宗入



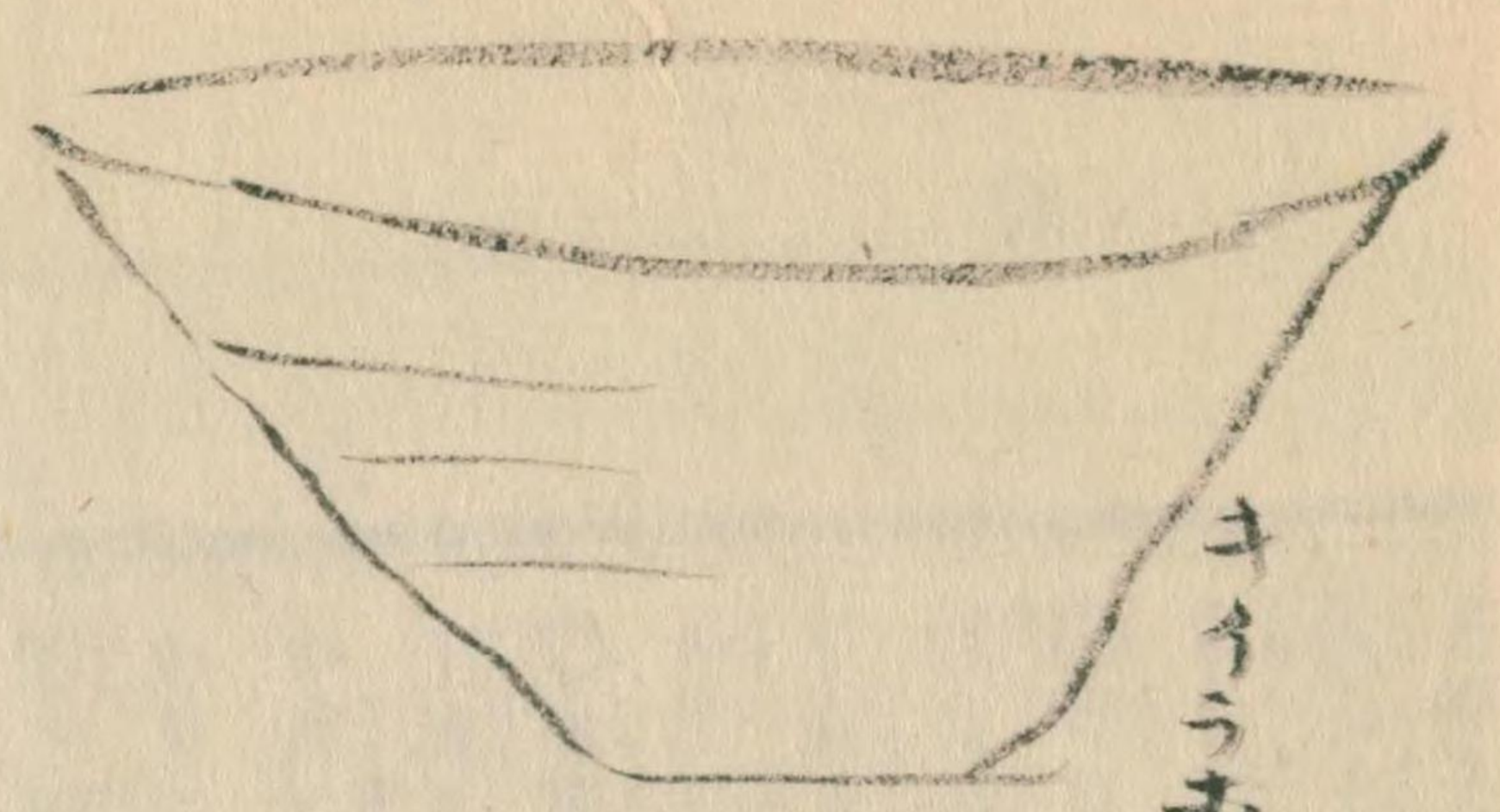
底印有

井戸

高尾

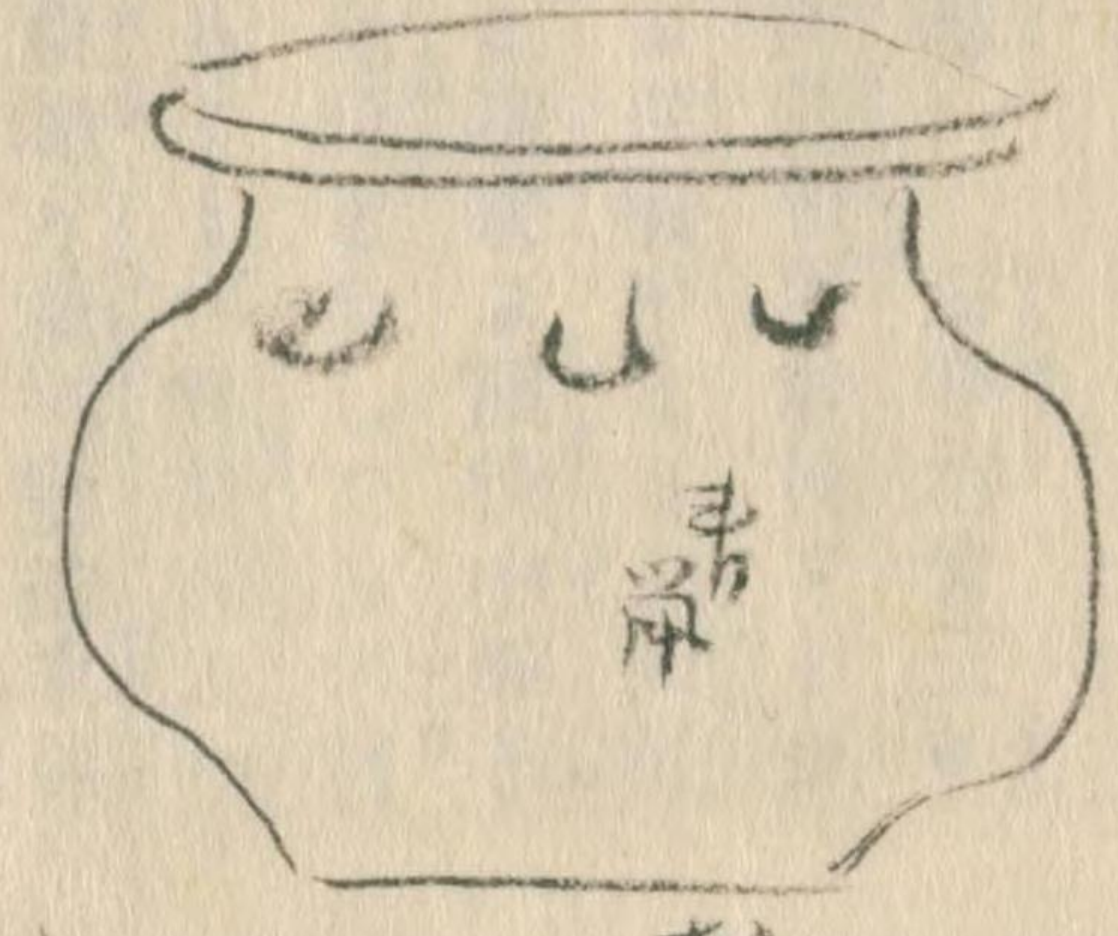


紫土印



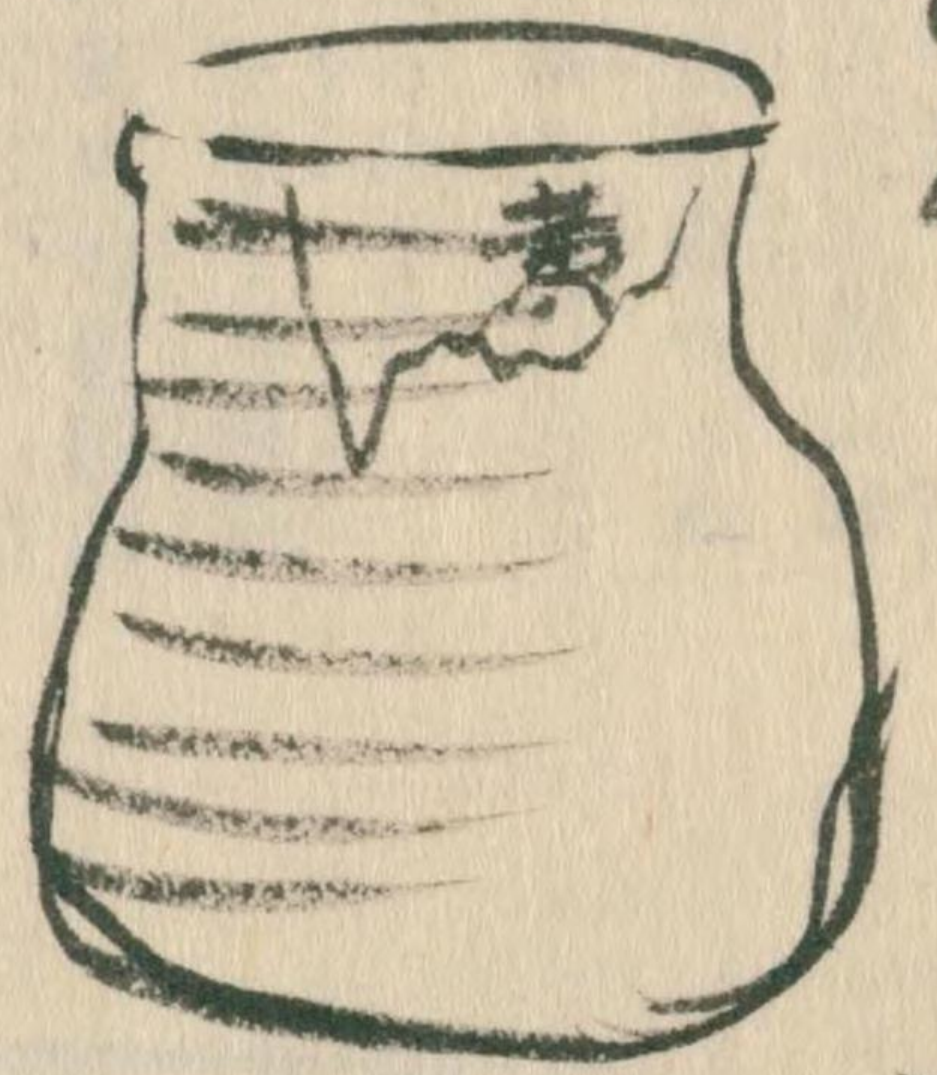
キセウホノ如し
ウ底裏ハ井戸之
黄ウ底
マラウ

エセト

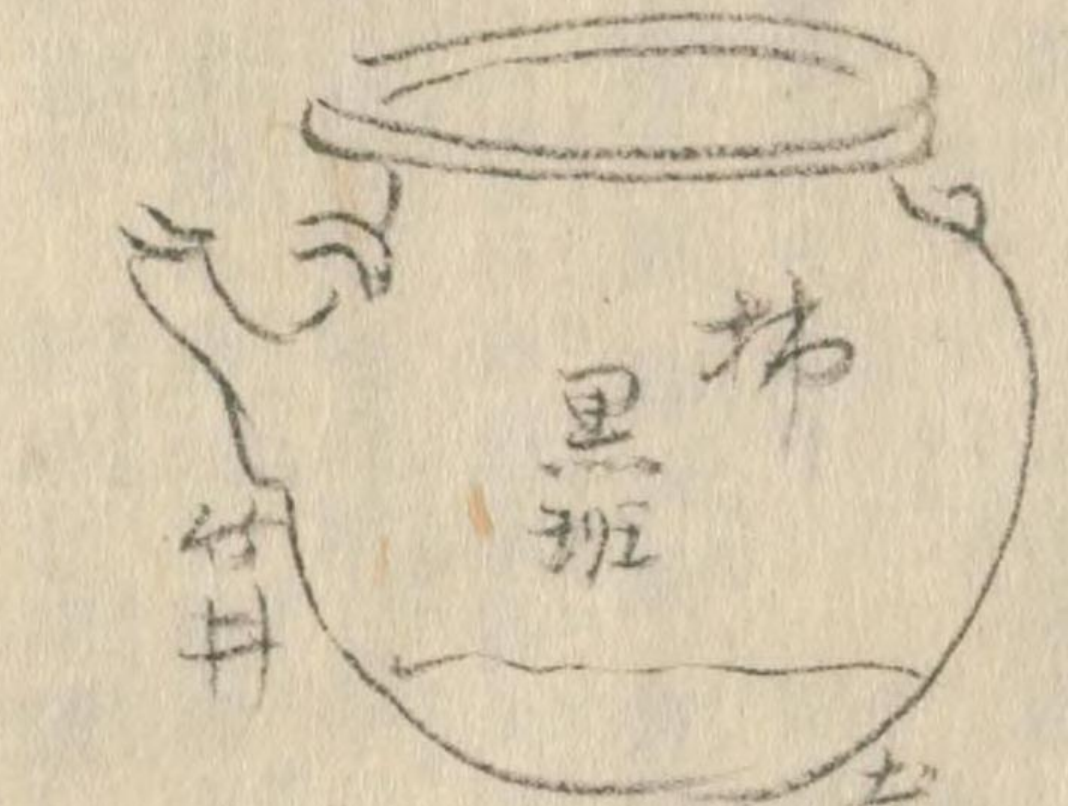


土白

瀬戸

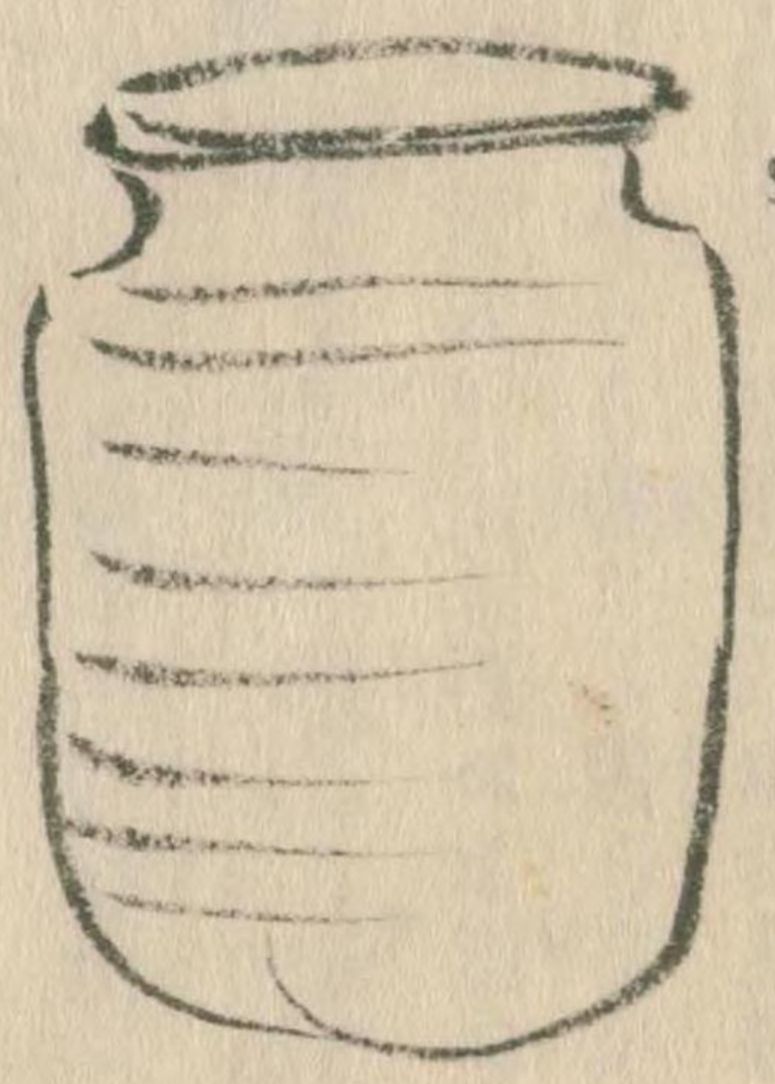


伊賀ニセ



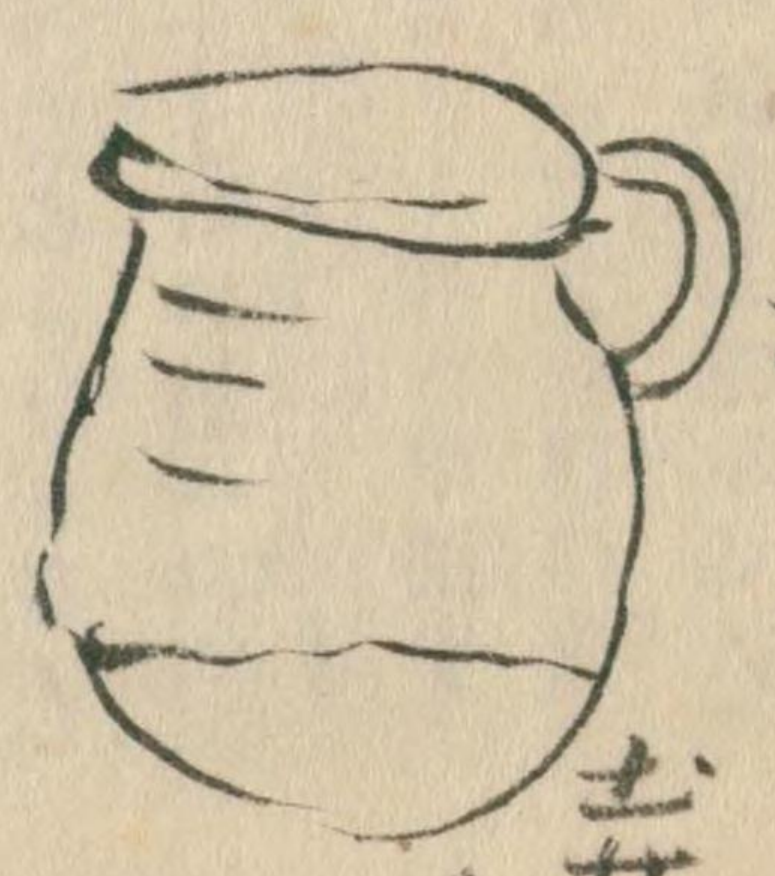
土赤
布目

萩春



十
焼印

唐木



土井ニテリ
赤印ナシ

明治二十五年六月十五日　水

雜說

○緒方乾山の年回　南新二

陶工に名高き乾山深省ハ寛保三年六月二日八十一歲にして江戸入谷村において死去し東叡山の麓坂本町天台宗善養寺に葬す法名を靈海深省居士と號せり本年百五十回忌に相當するをもつて有志の人人去る二日同寺に相會し眞實なる法會を營みしと云ふ當日來會者へ精進の非時を振舞しが是ハ横山町の割烹家尾張屋の寄附する處にて抹茶會席の獻立にて皆甘舌をならせしとぞ同日大槻如電翁ハ佛前において祭方を朗讀されたる由（其全文ハ翁に乞得て後日記載すべし又翁ハ近日乾山の傳を悉敷取調べ申なりと云へバ是をも乞得て記すべし）扨有志の來會者ハ何れも當日の施主なれども殊に施主と云ふべきハ奧様乾升氏なり（根岸笹の雪の横町に住居の陶工）氏ハ舊大聖寺藩士の家に生れ幼稚の頃より陶器の業に志ざし厚く出京して墨水なる三浦乾也翁の門に入り陶器學を修乾也翁も往〻ハ此乾升氏をして陶器の業を相續せしめんとの存意なりしに其事至らずして翁ハ故人と成られたり翁にハ眞工の門人數名有るが中にも取分て乾升氏を愛されたれバ翁の遺志に任せ陶器の業をバ氏が受續事と成たり故に法會にも重立たる施主たりし

曜　二　やまと新聞　第千七百

あり初代乾山（今度年回の人）ハ實に孤獨の人にて世に二代目乾山など〻唱する物有れど實ハ確たる二代目ハ無かりしなりと乾也翁ハ語られき其說の虛ならざるを證するに足るべきもの有り左に記す

上野奧坊用人中寛保度の日記書拔

　隨宜樂院の宮様御代

乾山深省事先頃より相煩ひ候處養生相叶ず今朝（寛保三年六月二日）死去の旨進藤周防守方へ兼而心安く致候に付深省懇意の醫師能越物語り申候無緣の者にて取仕廻等の儀仕遣はし候者もこれ無く深省まかり在候地主次郎兵衛と申者世話致し遣はし候得共輕きものにつき難儀いたし候由就而者何卒取仕廻まかりなり候程の御了簡なされ遣され下され候様に仕つり度由周防守より左衛門へ申聞候に付坊官中迄申入候處何れも相談これあり　御先代御不便にも思召候者の儀不便の事にも候間仕廻ひ入用金一兩下され然るべく候無緣の者の儀に候間幸ひ周防守世話これあり候につき周防守より次郎兵衛へ右之段申聞尤も乾度御上より下され候とこれ無く役人中了簡をもつて下され候間相應に取仕廻ひ遣はし候様に申聞候様周防守へ坊官中申聞られ金子相渡し深省事當地に寺もこれ無く候につき坂本善養寺へ相頼み葬り候由無緣の者の義不便の事に候間右の趣き善養寺へ申談じ過去帳に記し置月忌年忌等回向致し遣はし候様申聞金一兩相渡し是にて右回向これ有る様に取計ひ遣し候様申達し然べく旨何れも申談じ當善養寺ハ左衛門懇意につき同人方より申遣し然べく旨申入置候

右ハ疑ひ無き上野より出たるものなり若此時二代目と稱する者有らバ何ぞ斯る事のあるべきを以て當時二代目の無かりしを證すべし併し乾山より陶器製造の傳書を傳へて今奧村乾升に傳ふるもの有り乾也翁の所有されし頃見たるに三代までハ入谷村に住しと思はる二人とも通常の土器作りの職工に過ざるべし故に傳書ハ所謂寶の持ぐされにてありしを抱一上人へ傳へ又た藐庵老人傳はり是を乾也翁つたはり今乾升氏に傳ふ依て二代目三代目の名を附すれバ抱一上人ハ四代目にて乾升氏ハ七代目なるべし

八號

○如電氏の書翰

大槻如電氏より南新二翁へ左の書翰の送られたり

治二十五年六月廿三日　第千七百十五號

拜啓本日のやまと新聞に貴筆になれる緒方乾山翁百五十年祭の記事拜讀仕候右の内に小生に關係いたし申し候事柄有之に付誤記の分一應申上候乾山の傳書ハ故三浦乾也翁の舊藏に候處此頃仔細有之小生の所藏と相成居申候さて乾也翁の門人ハ乾美乾谷乾隨乾哉乾升の五人有之申候其内にて技藝上達の者を見立て更に小生より相讓り申候心得に御坐候翁の嗣子三浦松次郎氏より小生の貰ひ申候書面にも其趣意を書き載せ申候されバ御記事の如く乾升を今日直ちに七代目などと申候ハ嘗て無之候同人ハ尚未熟の腕前にて乾山ハ愚の乾也の足許へも追付不申此上五年十年の修業を怠たらず相勉め申候へバ兩乾翁の餘風をどうにかかうにか繼ぎ可申とハ豫かじめ定め居申候兎角若き者ハ少し人にチヤホヤ申さるれバ直に高慢の鼻をおやかし技術よりハ天狗のお先きに困り申候何卒右の趣意御掲取被下度候決して取消などの野暮とハ出かけ不申候次に乾山の傳の奇事逸聞も相集め申候間不日出版の運びと致し其節ハ二代三代抱一並に小生までの讓狀をも揭載仕候間御一閲被下度書名ハ乾山風と仕り候心算に御坐候其の內參上縷〻可申述候匆〻以上

壬辰六月十四日　大槻如電拜

南新二老臺

841
124

ガラス使用

841
124

●故熾仁親王殿下墓誌銘

故熾仁親王殿下の墓誌銘は左の如しといふ川田剛氏謹みて之を撰み巖谷修謹みて之を書す

故參謀總長兼神宮祭主陸軍大將大勳位功二級熾仁親王墓誌銘

親王諱熾仁。一品幟仁親王第一子。母妃藤原廣子以天保六年二月十九日生。嘉永二年爲親王。任太宰帥。叙三品。文久二年。孝明天皇憂海防廢弛。問策。親王奏對稱旨。明年。有事於賀茂兩社石淸水社。使親王先往視事焉。元治元年。爲國事掛。是時國家多故。物情騷然。親王爲幕府所忌。免職屛居。既而事釋。召參朝政。慶應三年十月。復爲國事掛。十二月補總裁職。叙二品賜隨身兵仗。聽帶劔。是歲天皇崩。今上登極。明年改元明治。會東軍抗命。二月爲征東大總督錦授旗節刀。於是率衆東下。數月平賊。多賜金帛。明年春。以功賜世祿千二百石。七月辭太宰帥。三年四月。任兵部卿。明年罷。是歲諸侯納封土。以福岡藩內訌難治故。用親王爲藩知事。衆心悅服。明年賞功賜直垂一領黃金五万匹。八年七月。任議官。十二月。叙勳一等。九年三月任副議長。尋陞爲議長兼議定官。十年一月。從幸於京都及大和。二月西南之亂。親王爲征討總督。六師奮戰。賊勢漸挫。遣東久世侍從長西鄉中將等。就褒其畫策得宜。又遣侍臣侍醫。賜酒饌藥劑。及事平勅賞其功。十月拜陸軍大將。兼議長及議定官如故。十一月授大勳位菊花大綬章十三年二月。任左大臣。兼議定官如故。十四年從幸於東北諸州。攝行參謀本部事。及還。慰勞賜金。十五年露帝即位。使親王代往賀之。因巡游歐米諸國。踰歲而還。十八年罷左大臣兼任參謀本部長。十九月九月補近衛都督。二十一年。兼任參軍。二十二年兼任參謀總長。二十四年十二月。兼任神宮祭主。明年補特別大演習觀兵式總指揮官。二十七年夏。朝鮮亂。遣兵護我吏民在彼地者。淸國有違言。乃大擧伐之。因設大本營於宮城。親王奏定大計。九月進大纛於廣島。扈駕西行。時捷報屢至。二十八年一月。特授大勳位菊花章頸飾。又特叙功二級。授金鵄章。先是。親王罹疾。以軍國多事。夙夜侍帷幕。醫師相勸。使其乞假療養於播州舞子別業。遂歸東京是月二十四日薨。享年六十一。天子聞訃震悼。廢朝三日。宮中喪五日。遏密三日。使鍋島式部長弔且賻焉。二十九日。以國葬儀藏柩於城北豐島岡。親王威儀端莊。大度容物。夙致力國家。爲中興元勳。不獨海內仰之。露獨墺伊蘭諸國亦皆贈以勳章。德望如此。而未及見王師凱旋。天遽奪其年。嗚呼惜夫。銘曰。

天潢分派　曰有栖川　偉矣親王　宗室之賢
氣象卓爾　儀容儼然　德高望重　士懷民親
矧當閫寄　以濟時艱　東征西伐　世推大勳
爰卜幽宮　長安其神　神平護國　皇威益尊

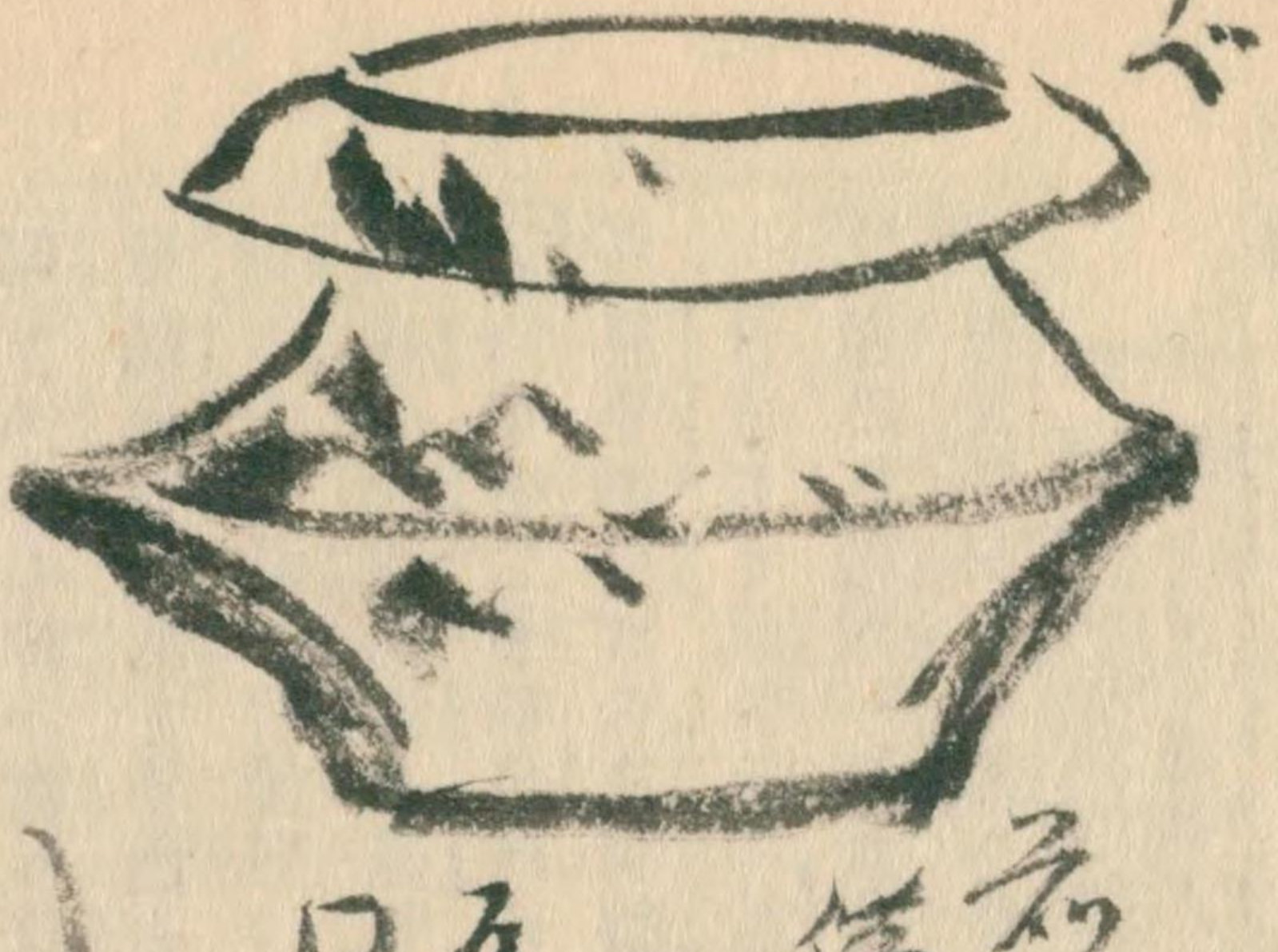
壬辰六月十四日
南新二老叢
大槻如電拜

雑説

国立国会図書館　タイトル『陶器集』 請求記号 841-124
ガラス使用　挟み込み物

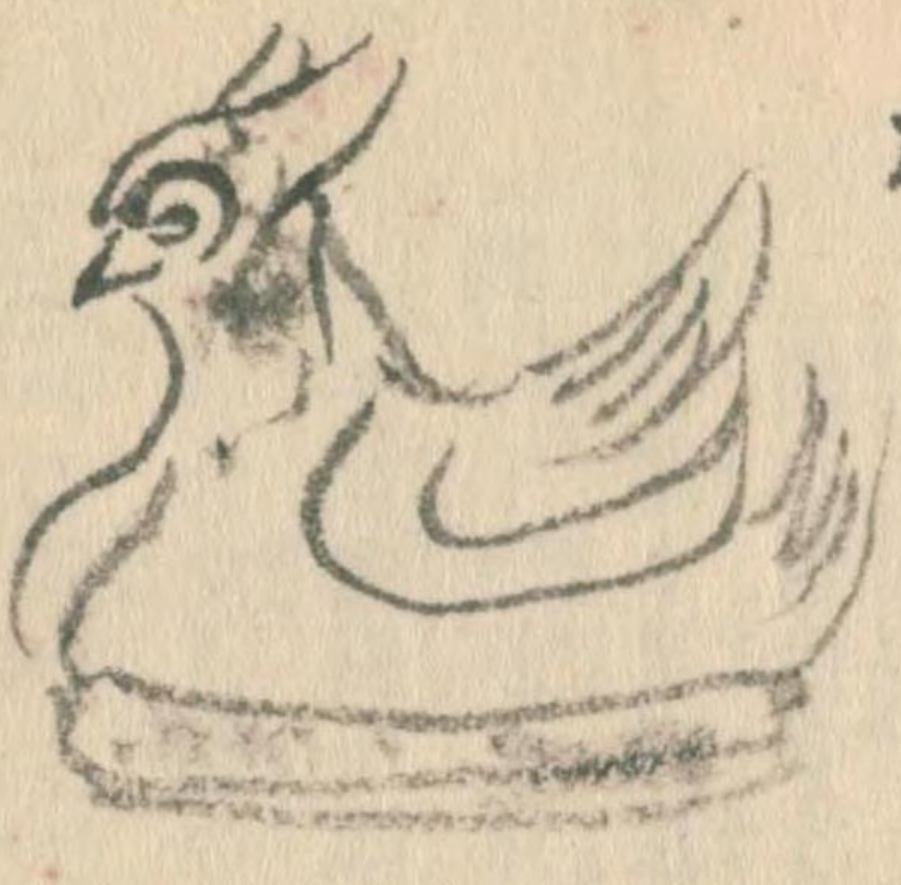
六月四日 前田

トコナベ

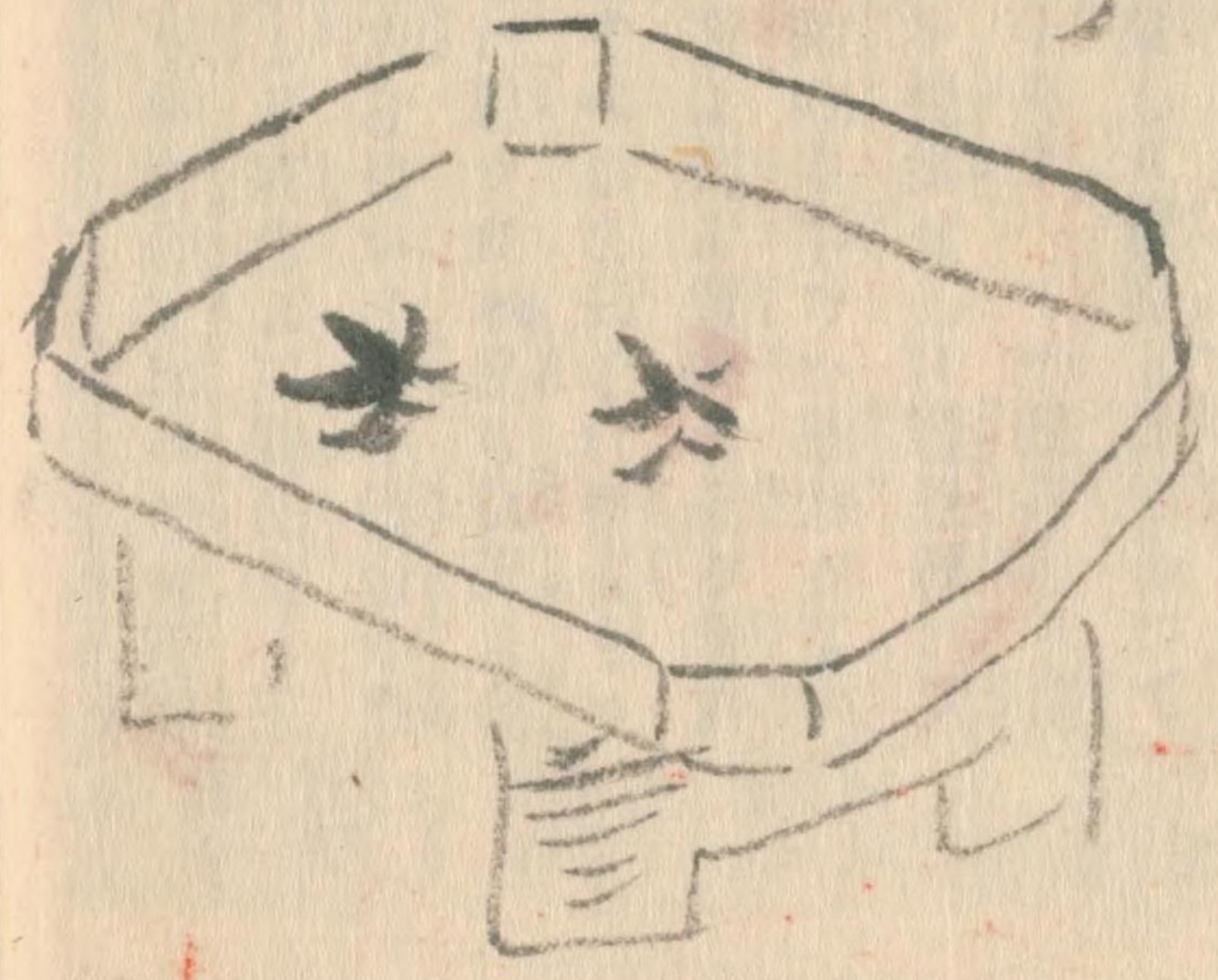


前田氏ハ 備前ト云 延代 尼崎やき左 口二

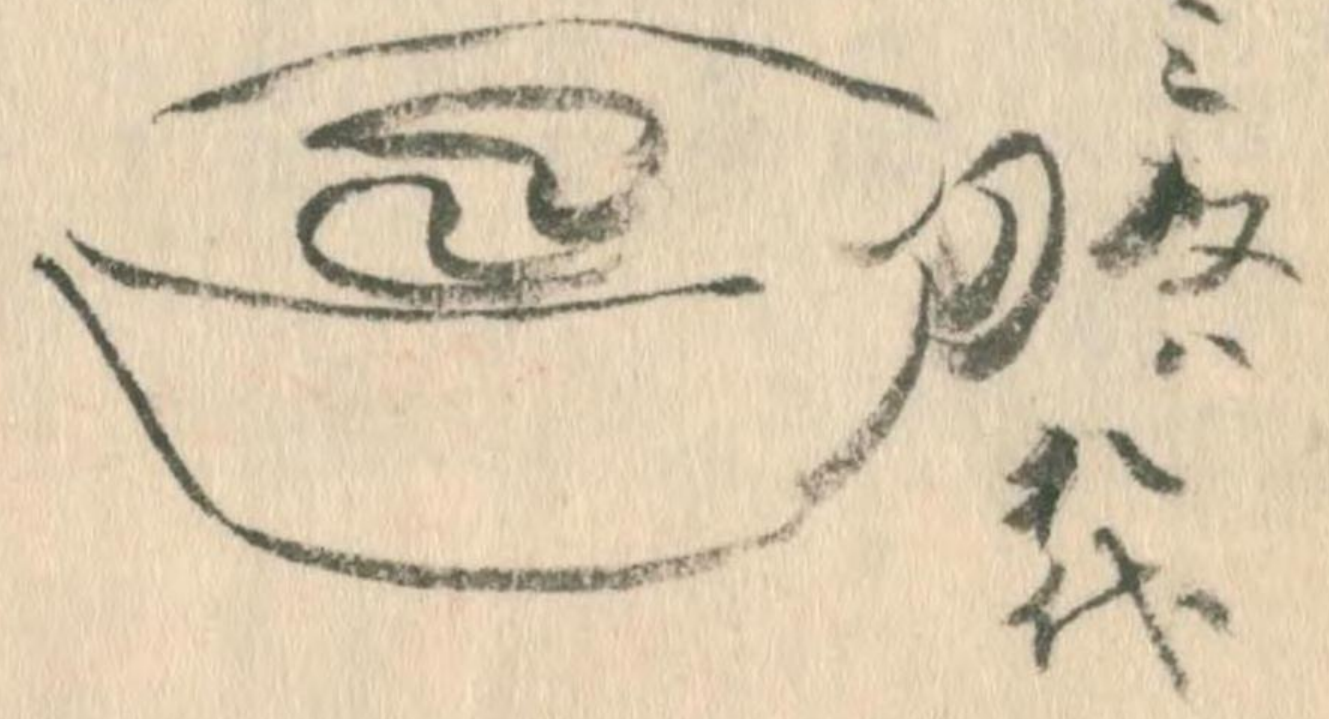
イカ



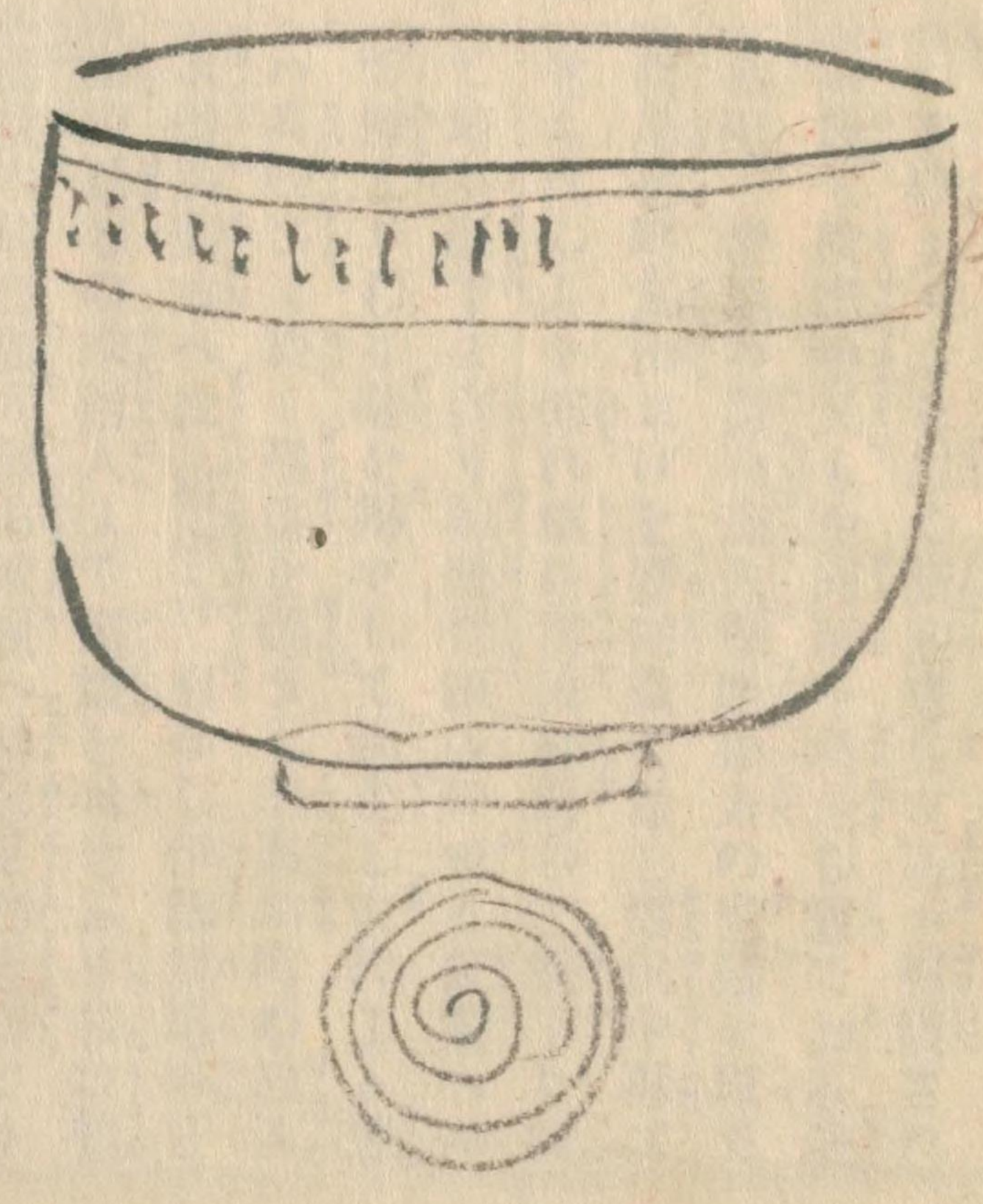
川ノ



ヒヒヒ好ハ 松代

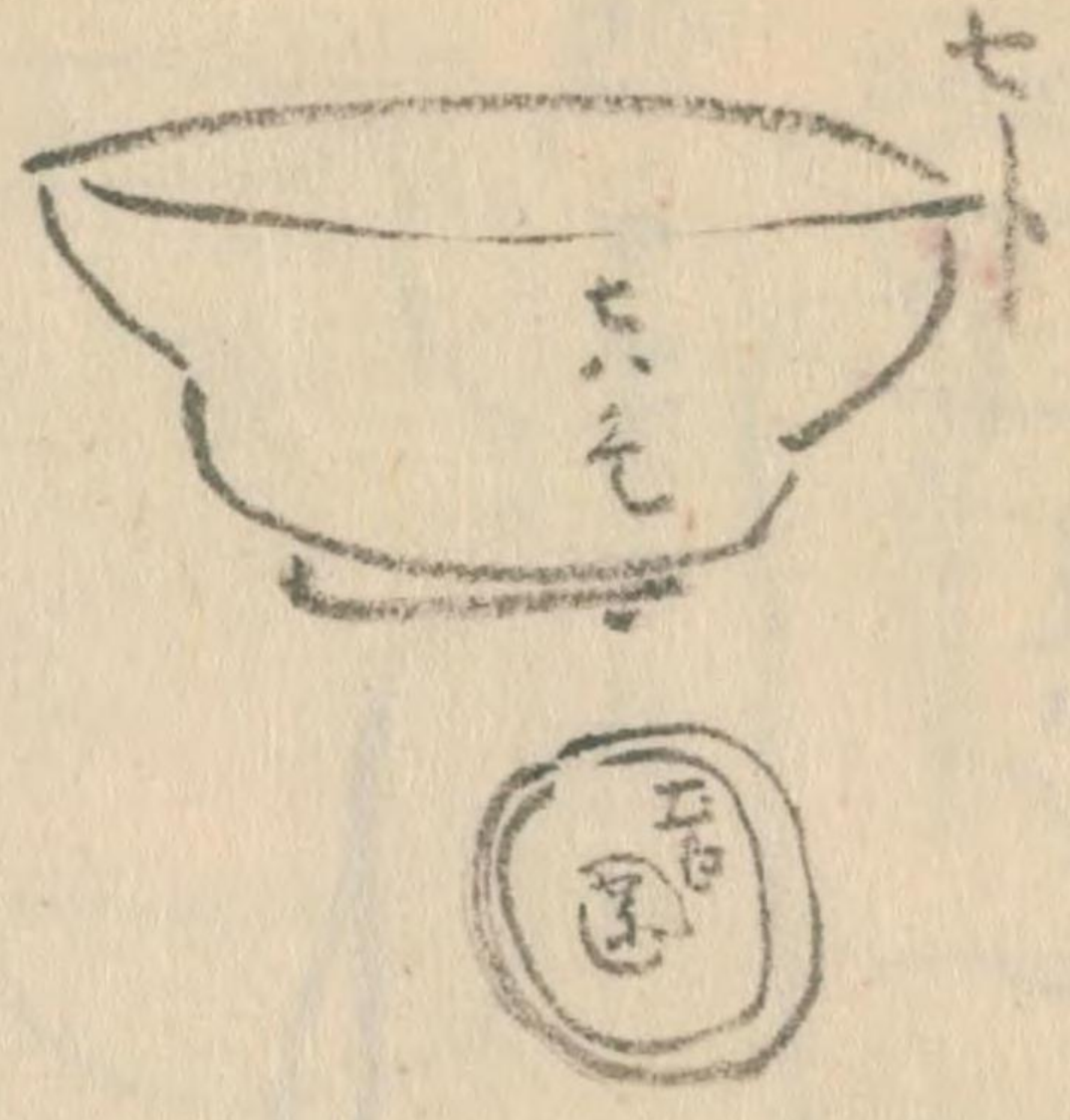


口刈



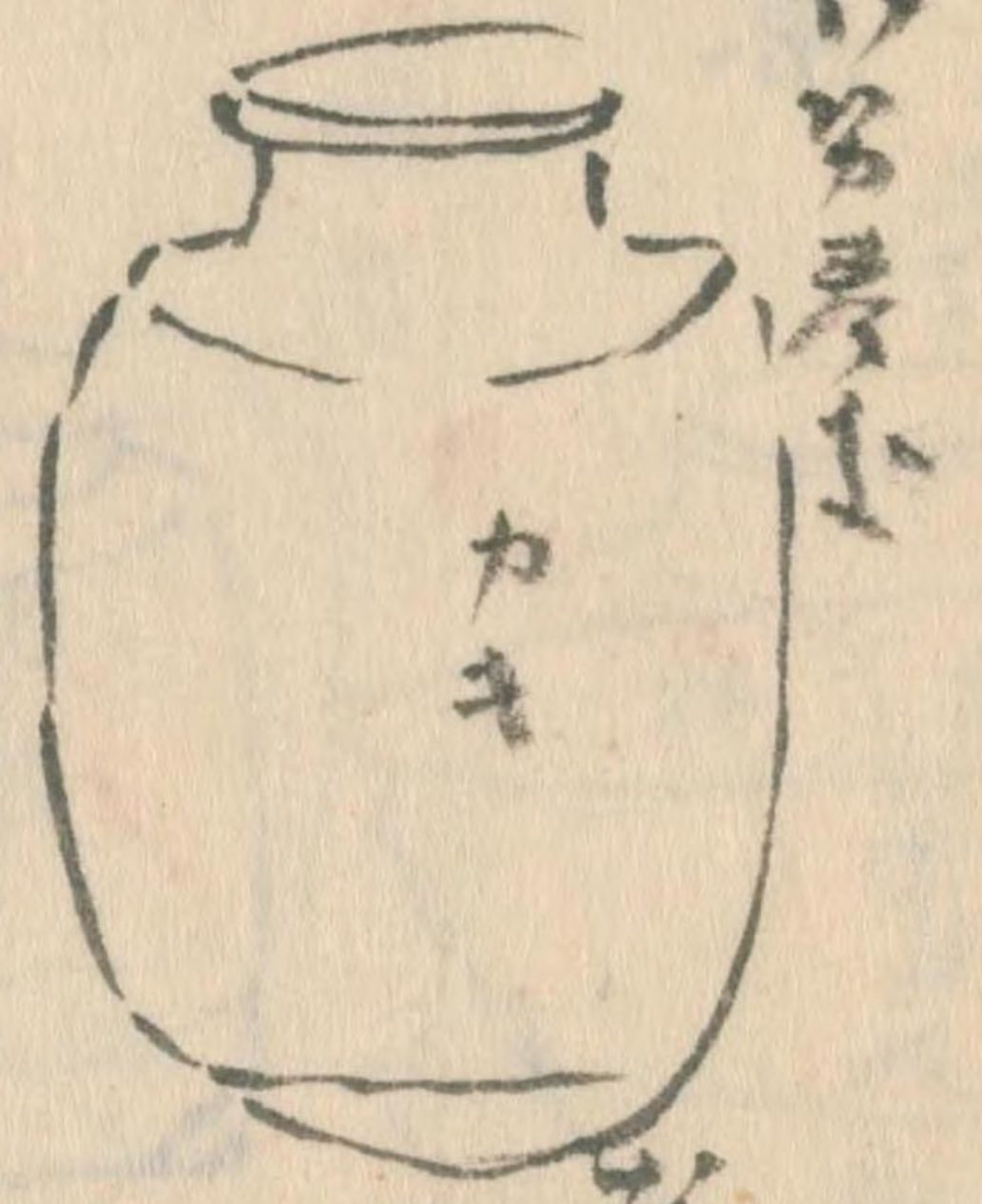
八月廿七 尼崎や介之 我木

キセト



六も

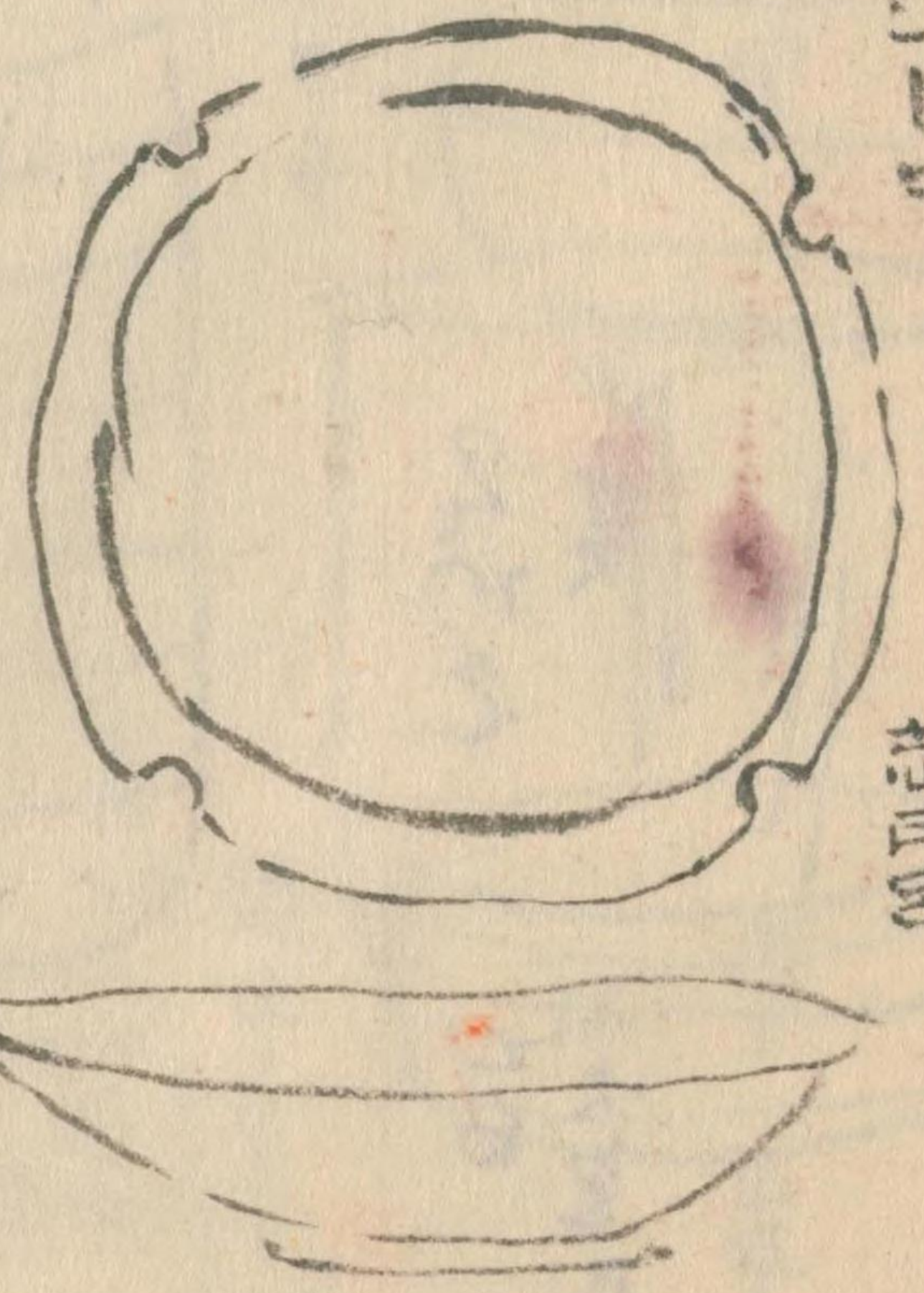
伊賀焼土



カキ

土赤 釉 糸切

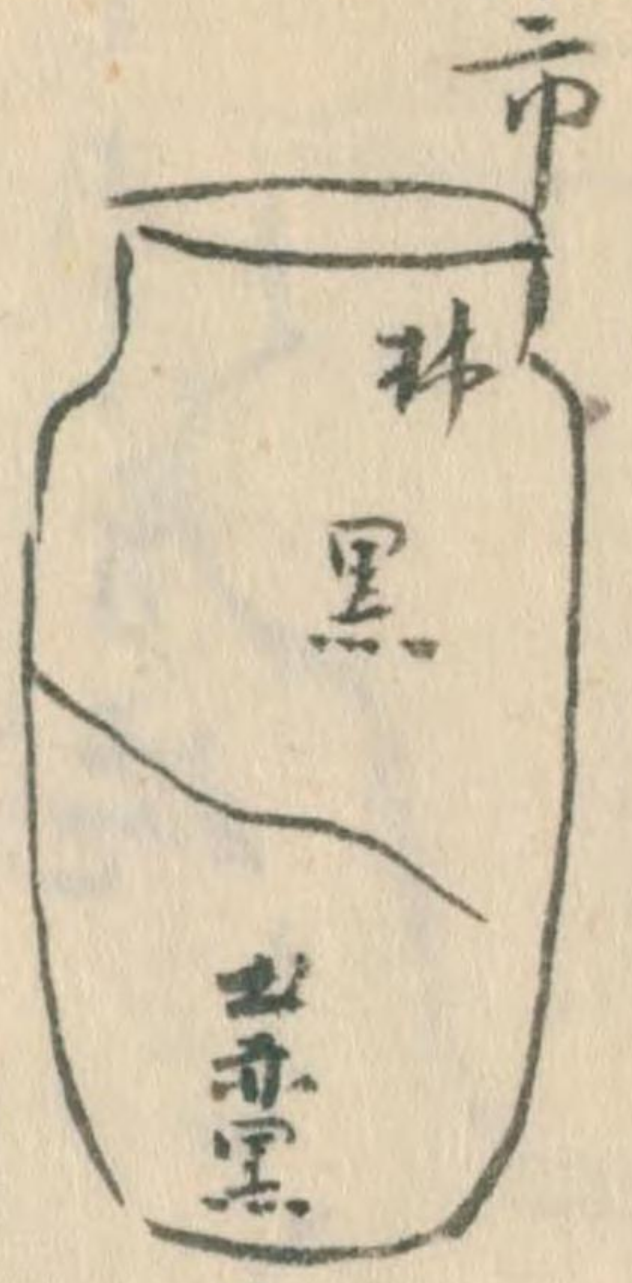
ミトロ



赤戸呂

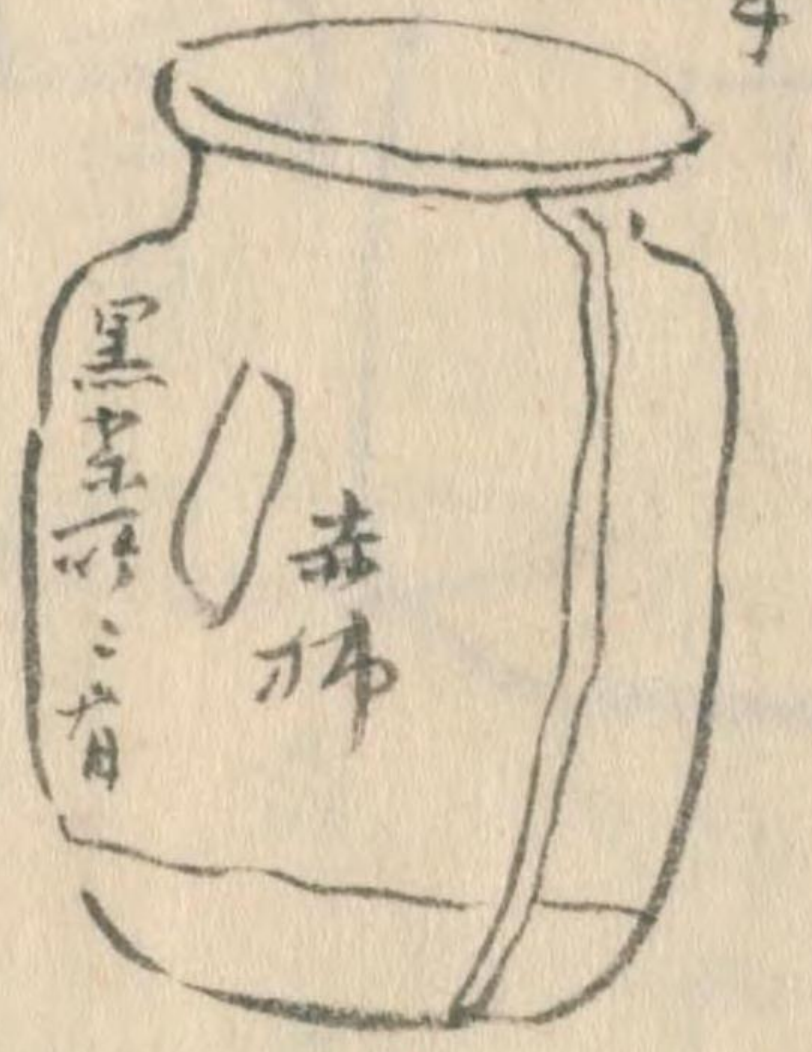
淡ハワカ 坊主手

米市



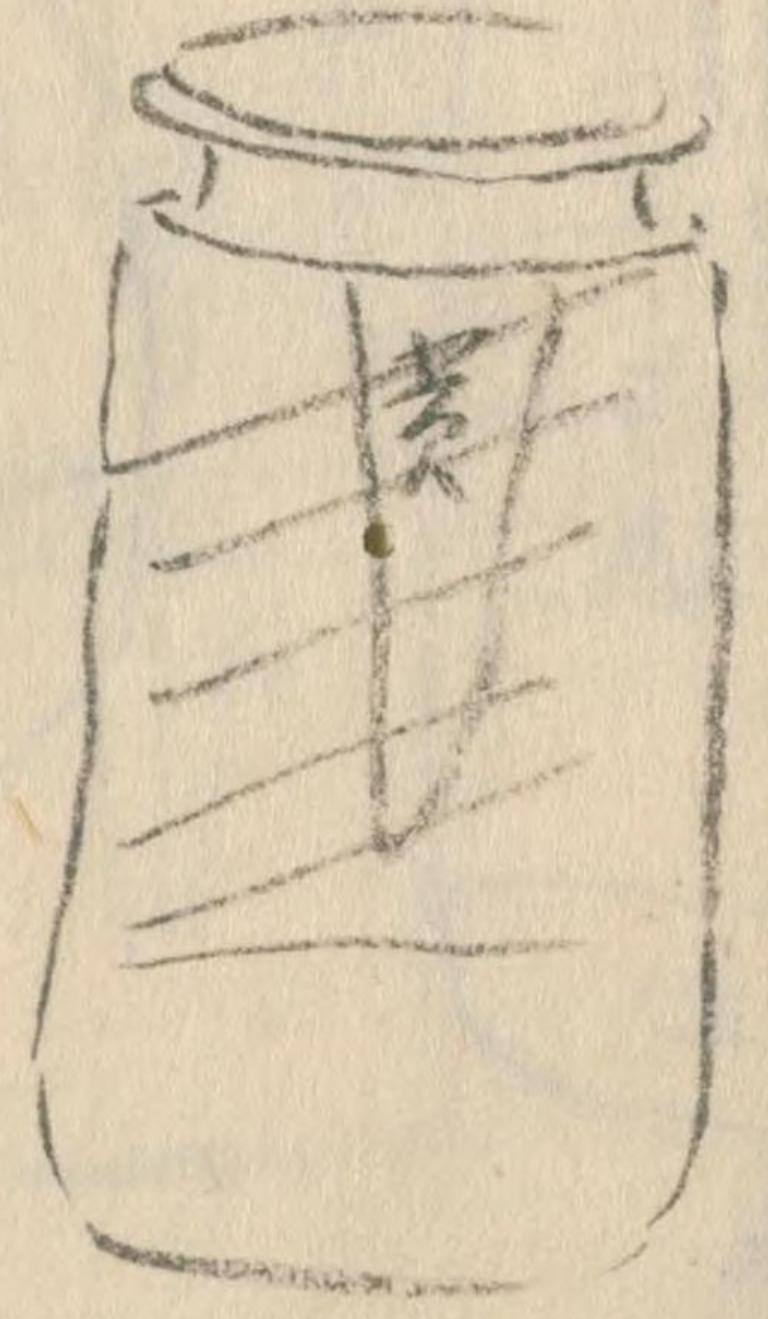
柿 黒

土赤黒 本糸切



黒土所々有 赤柿

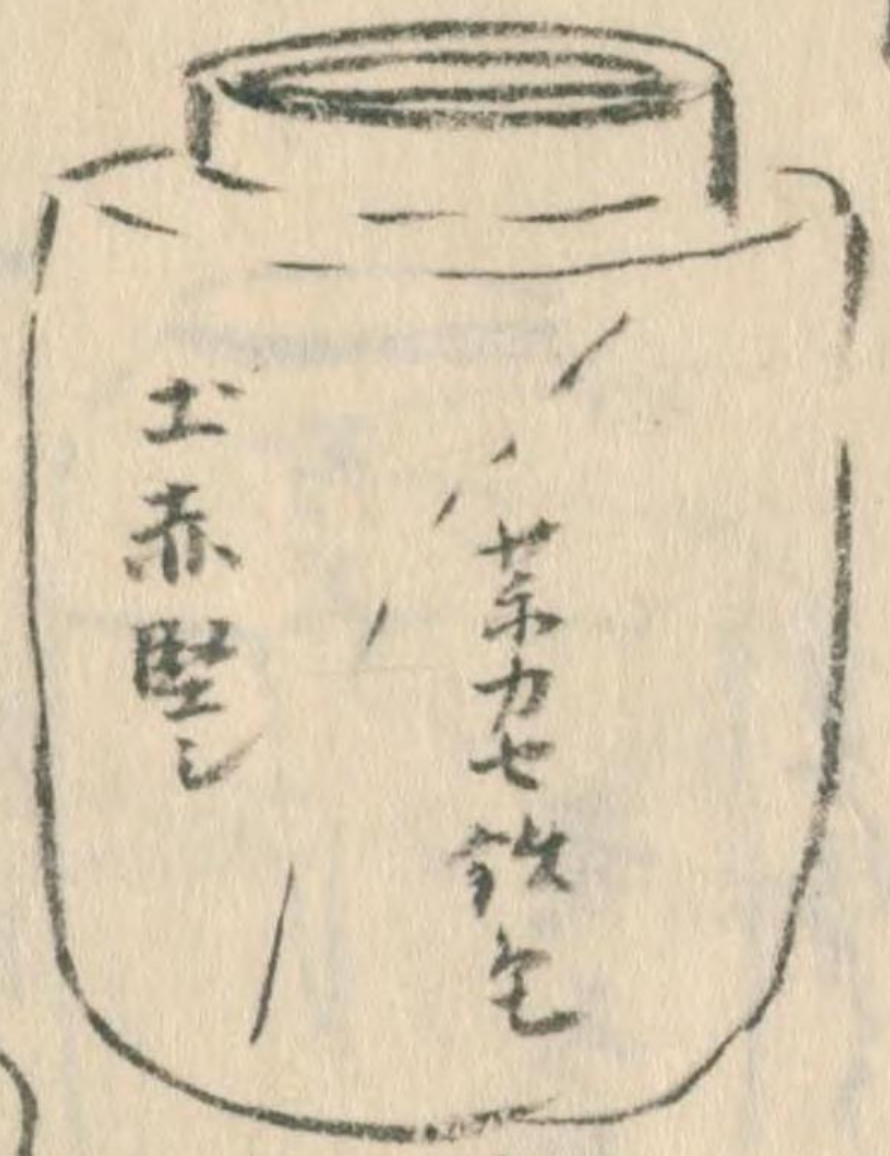
糸切ナシ



素

土白 本糸切

備前

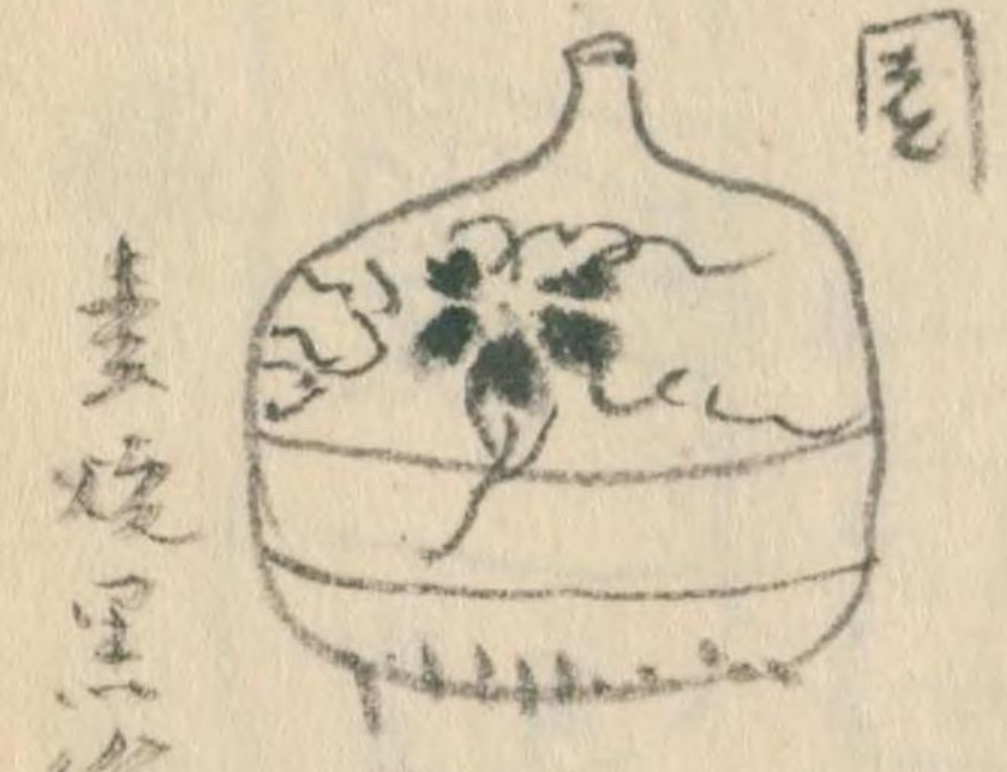


土赤堅シ 八茶カセ欽モ

天一

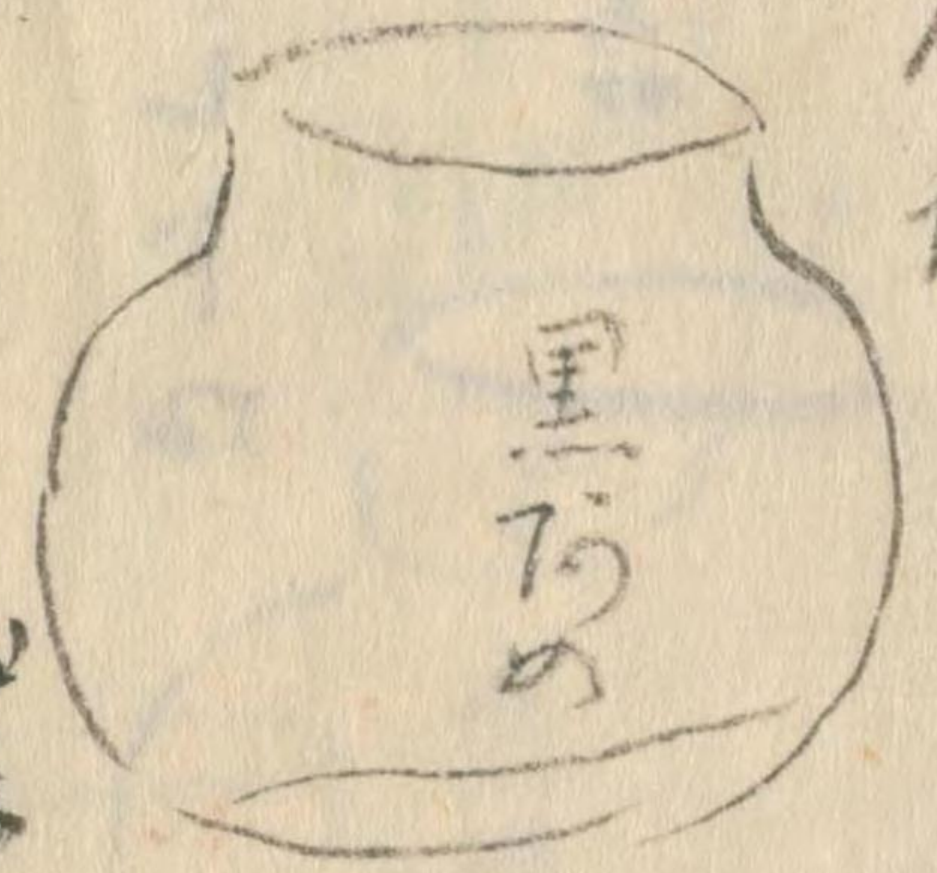
糸切ナシ

後楽園



素焼黒絵

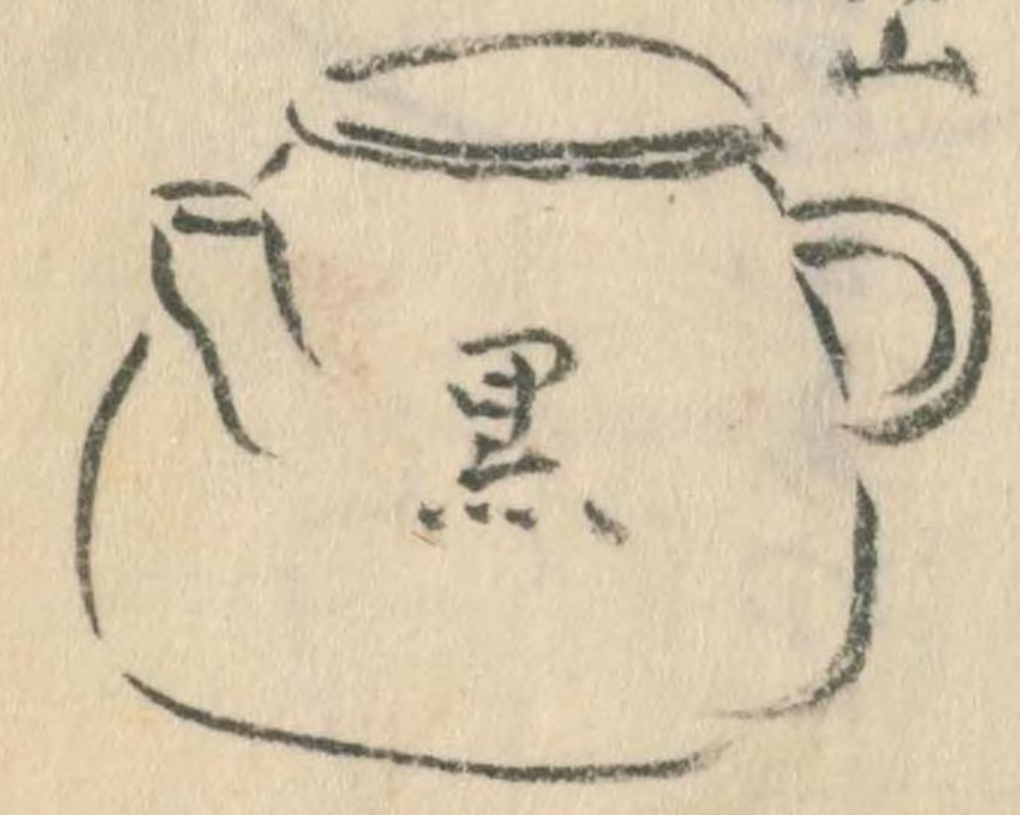
尼ノ内



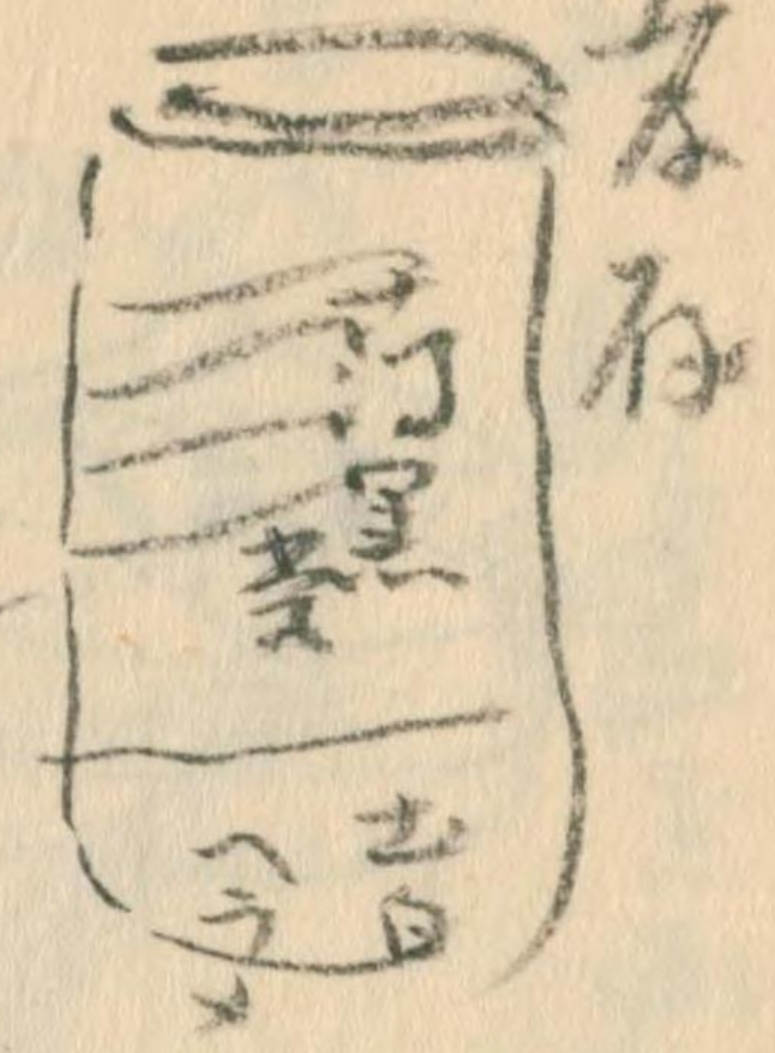
黒ぶの

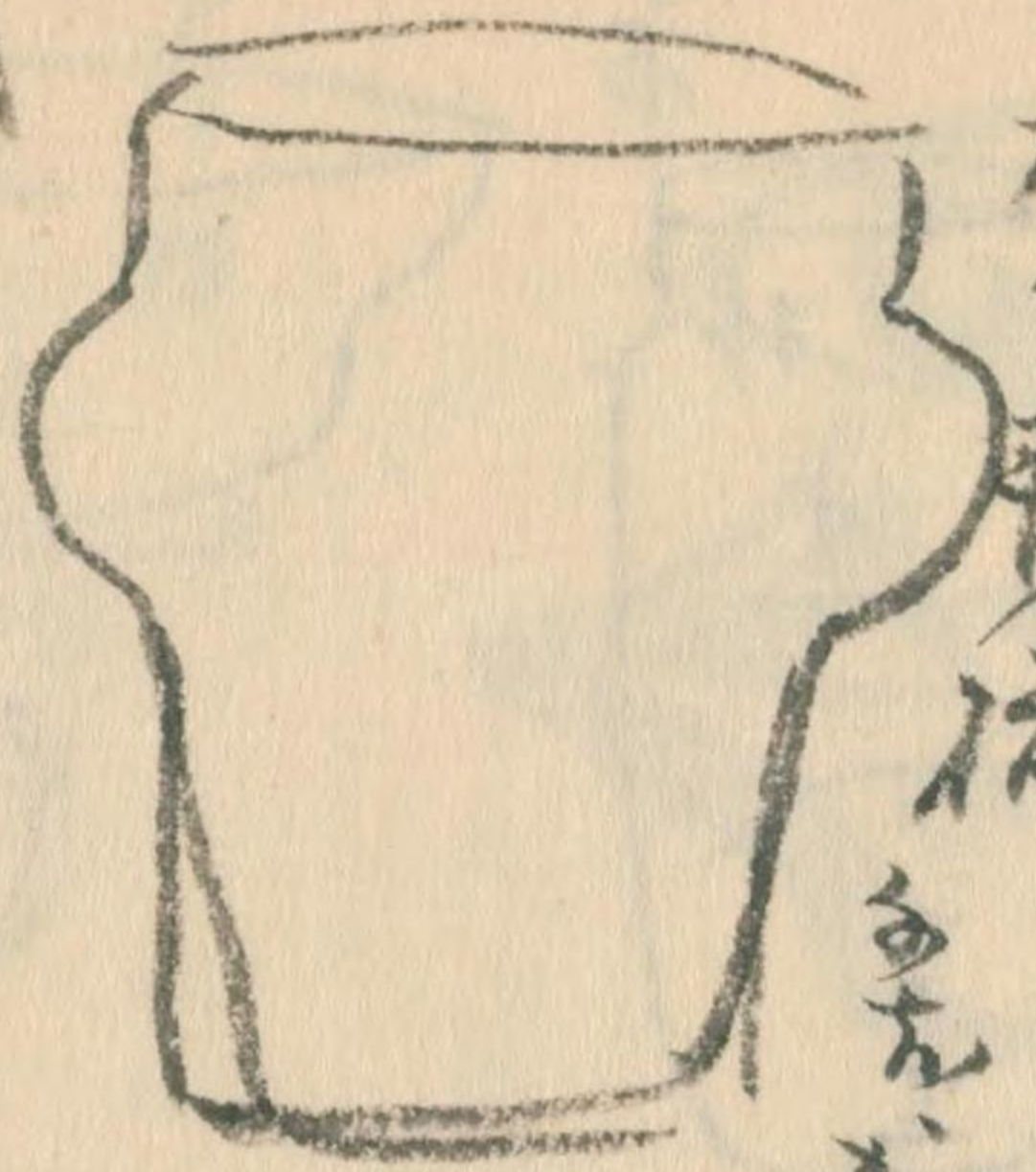
土赤 手印

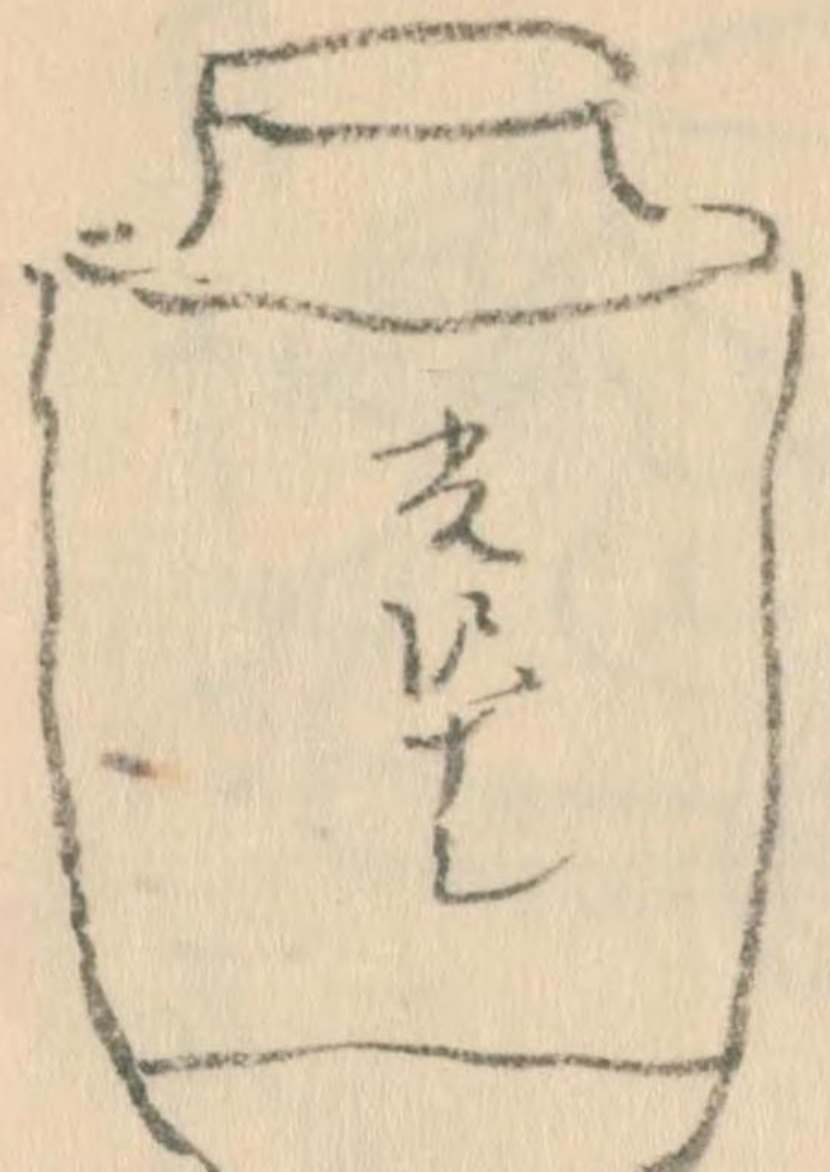
金花山

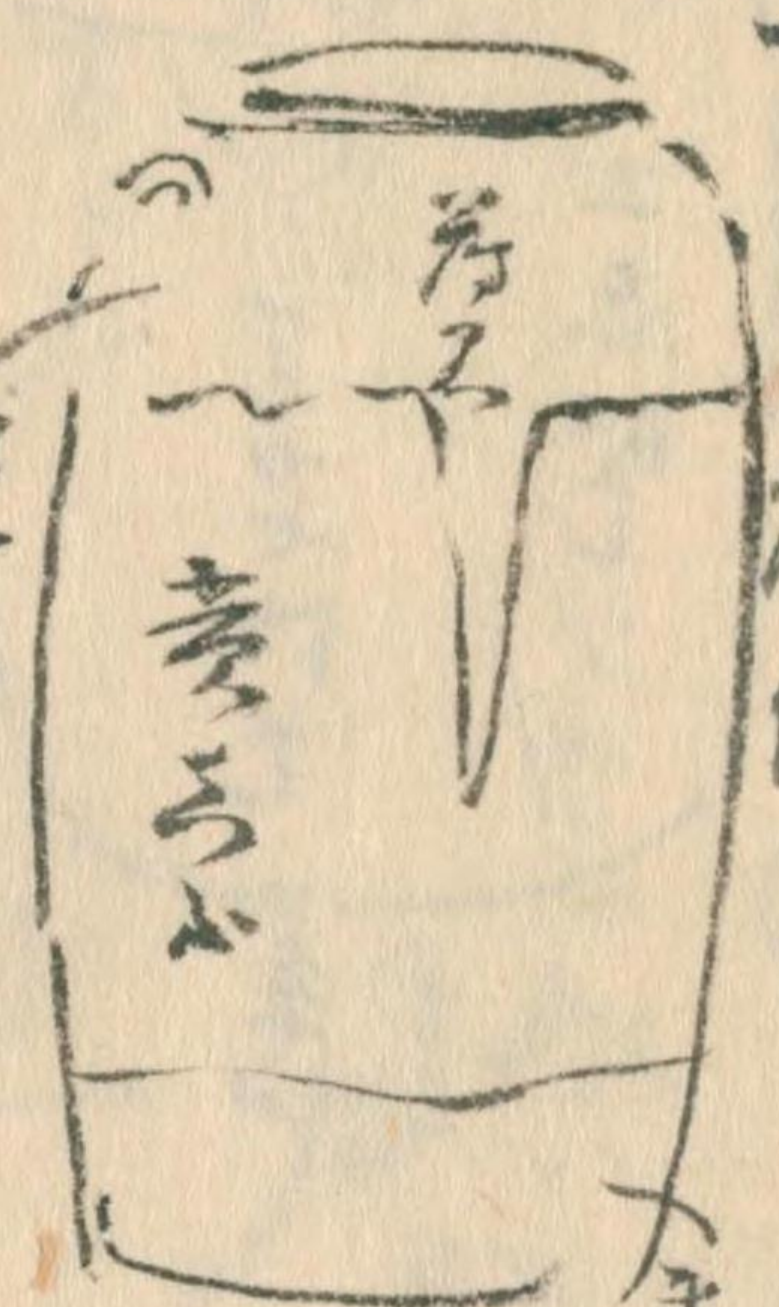


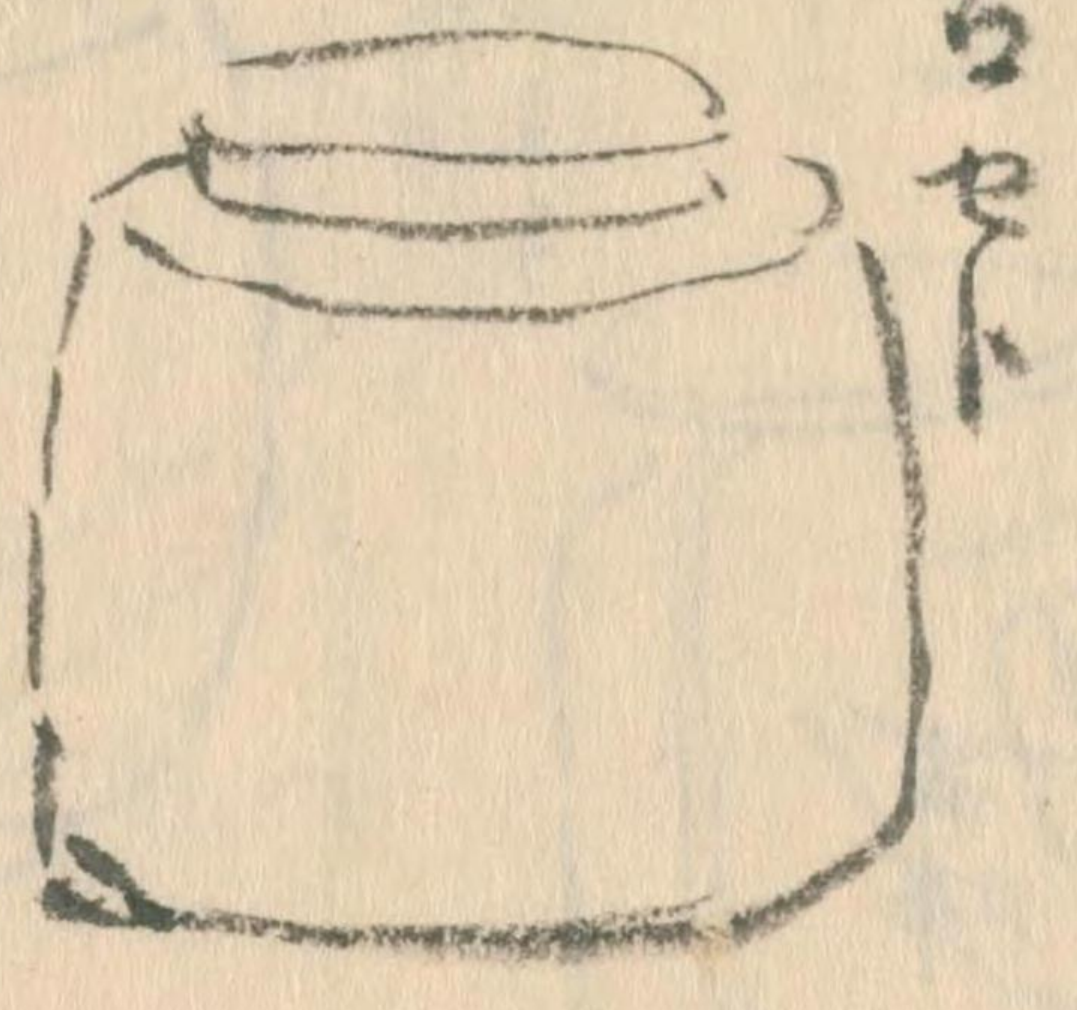
黒

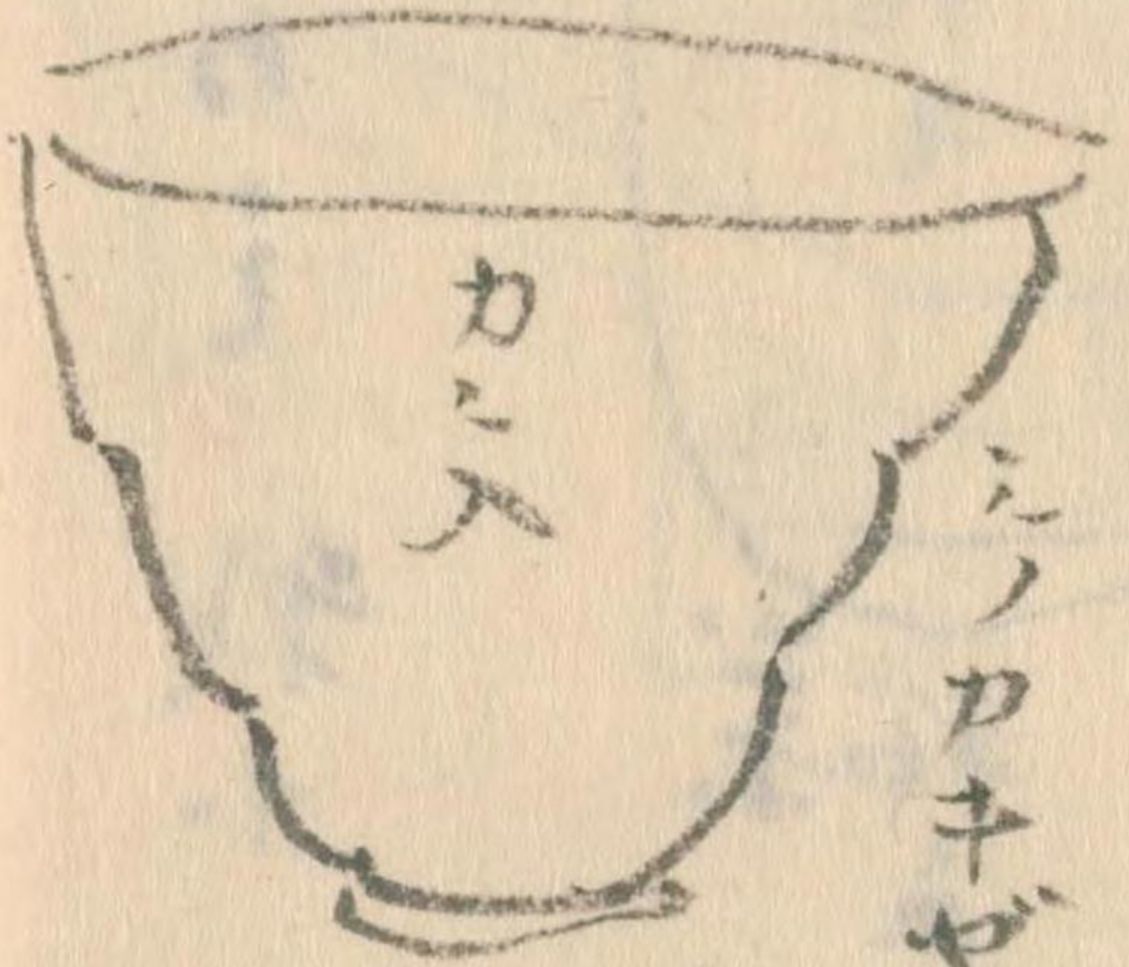

ネジヌキ
黒
黄
土白
ヘラメ

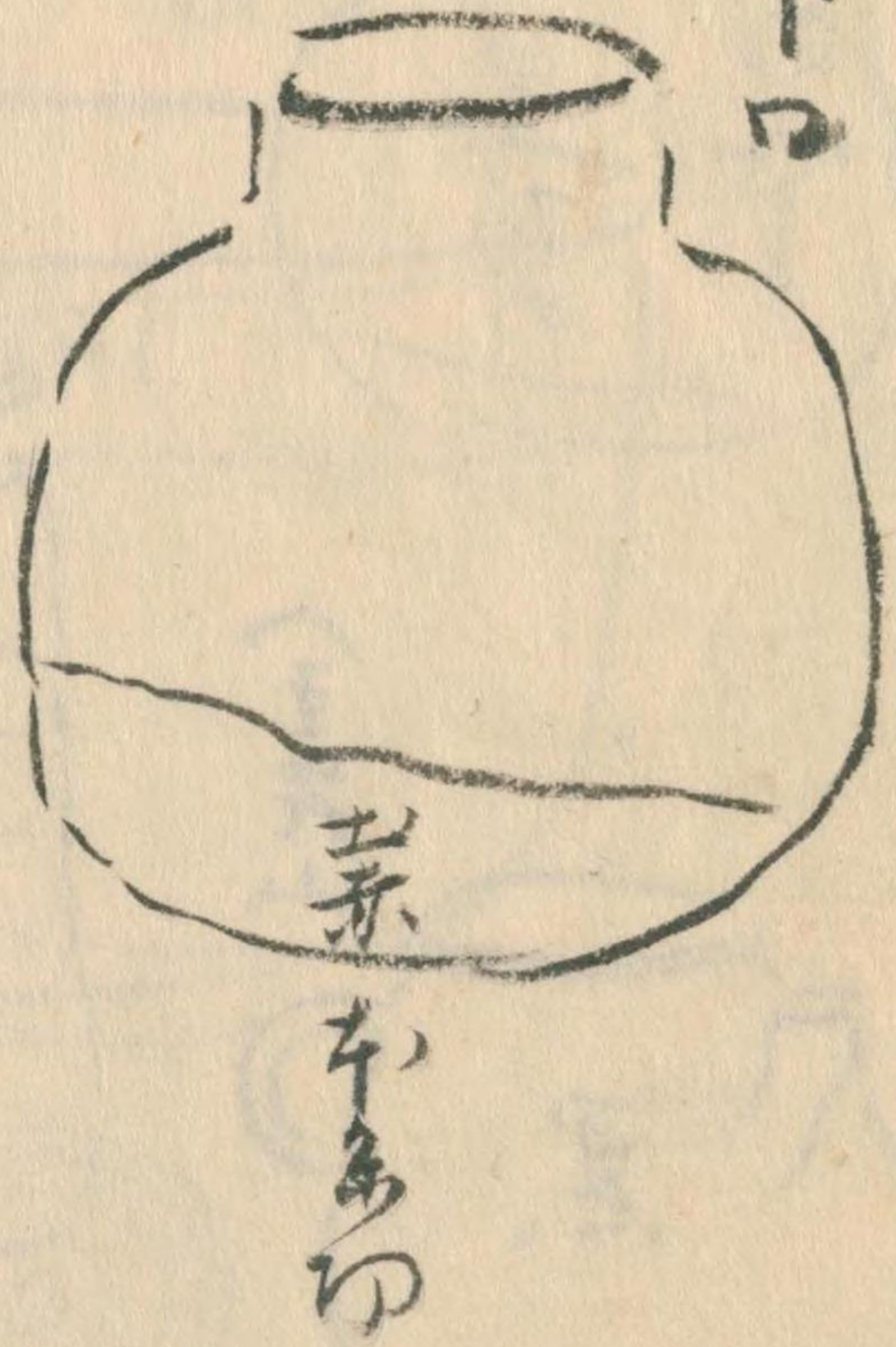


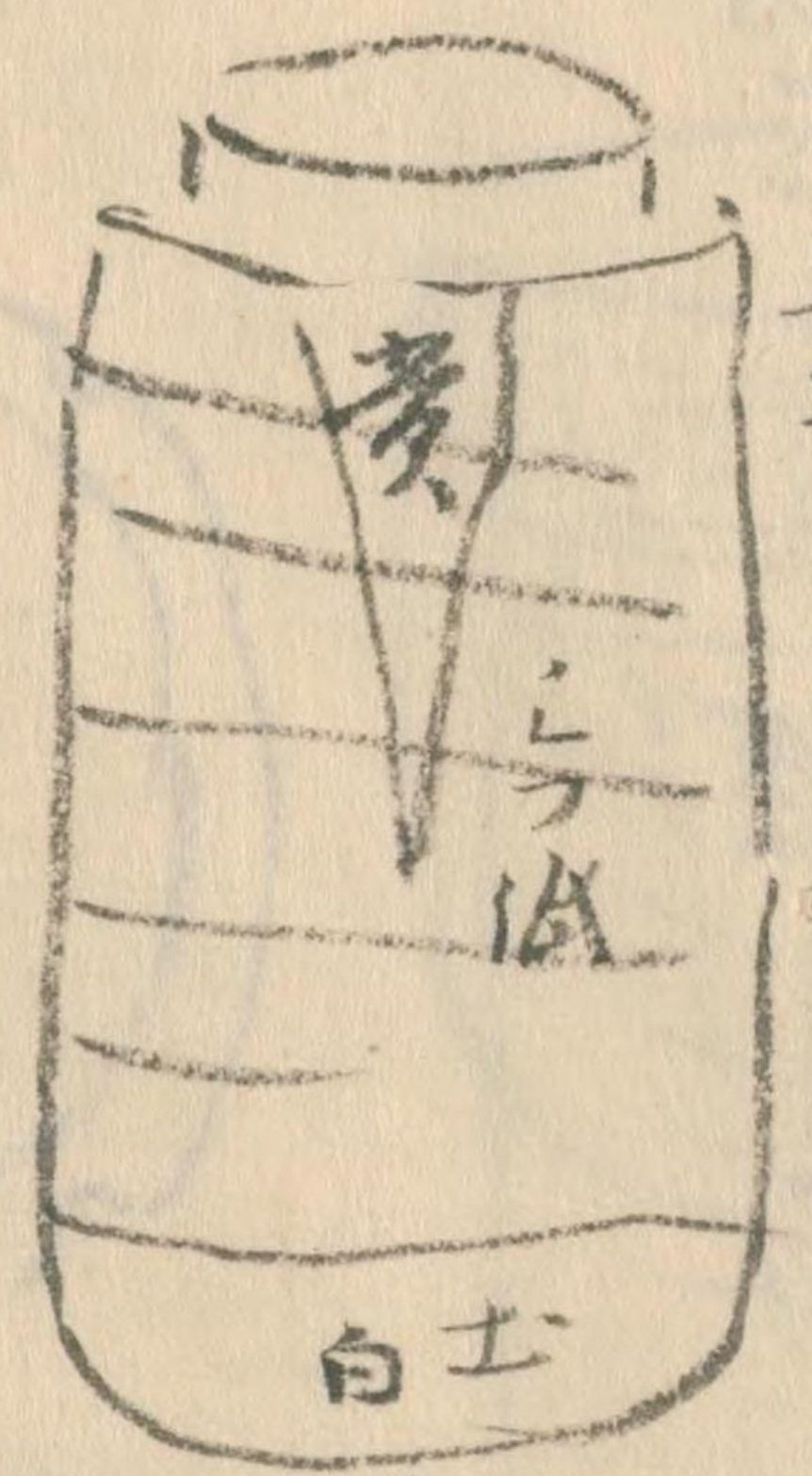


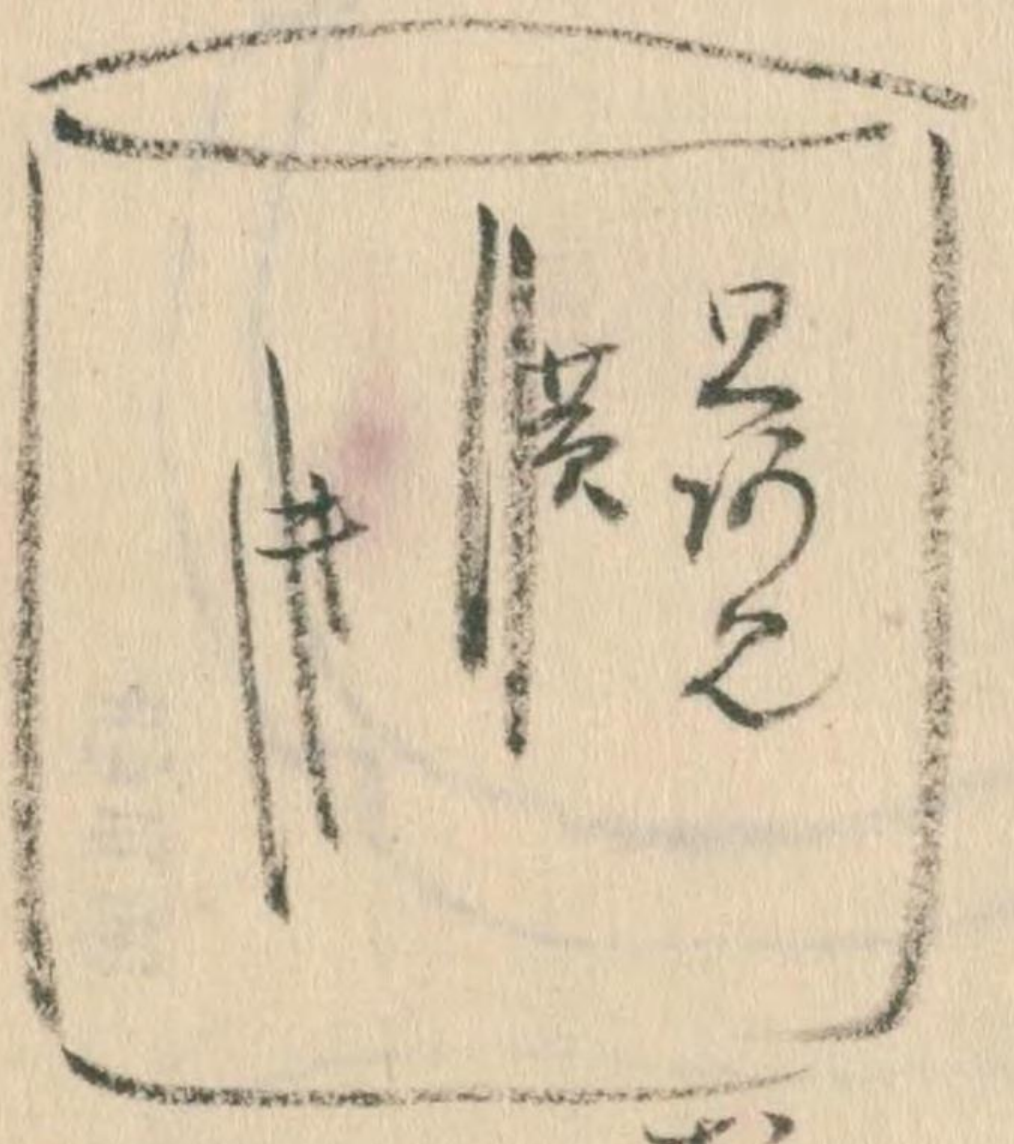


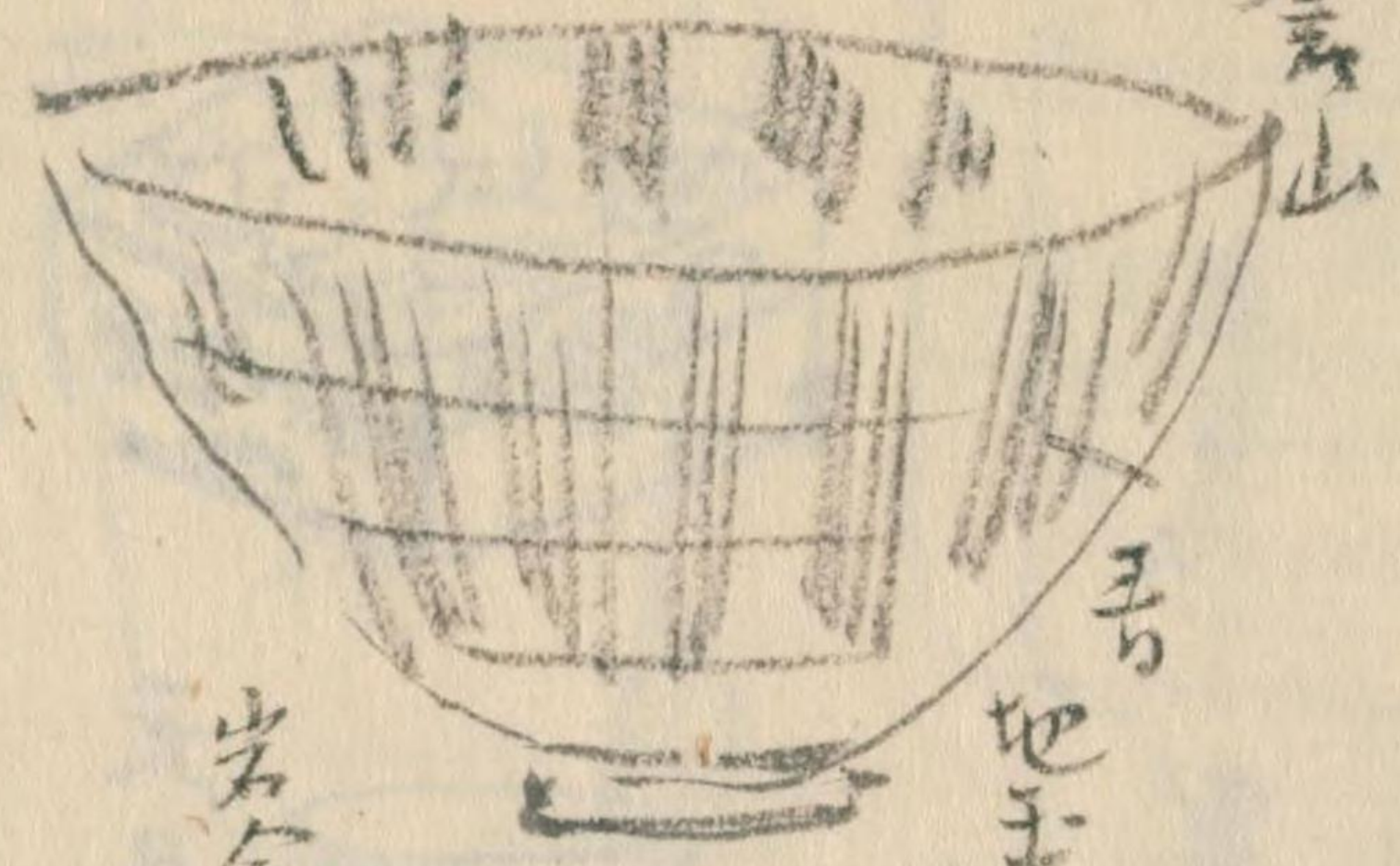


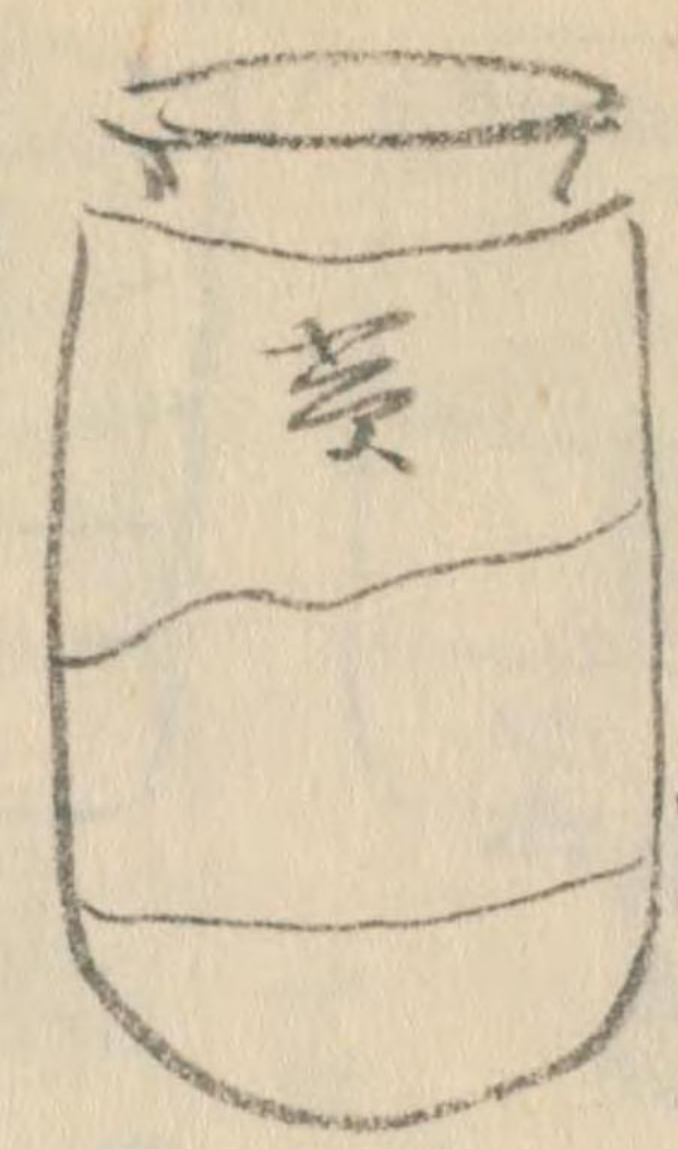


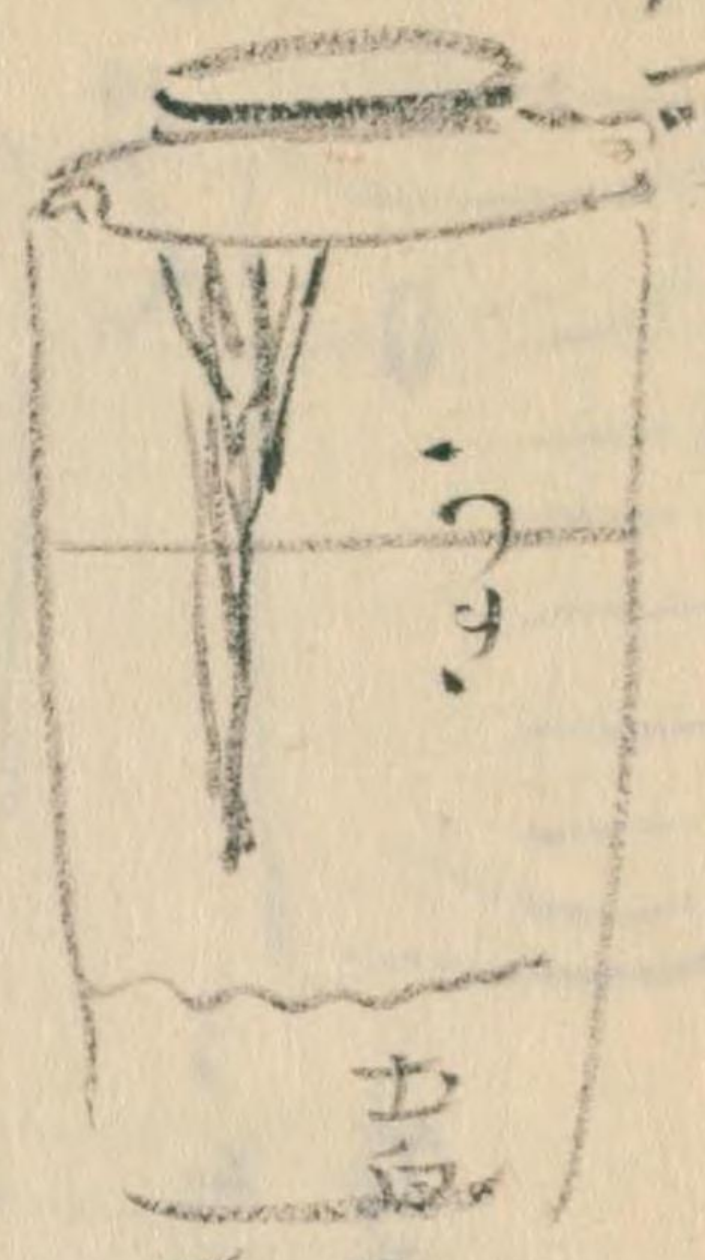


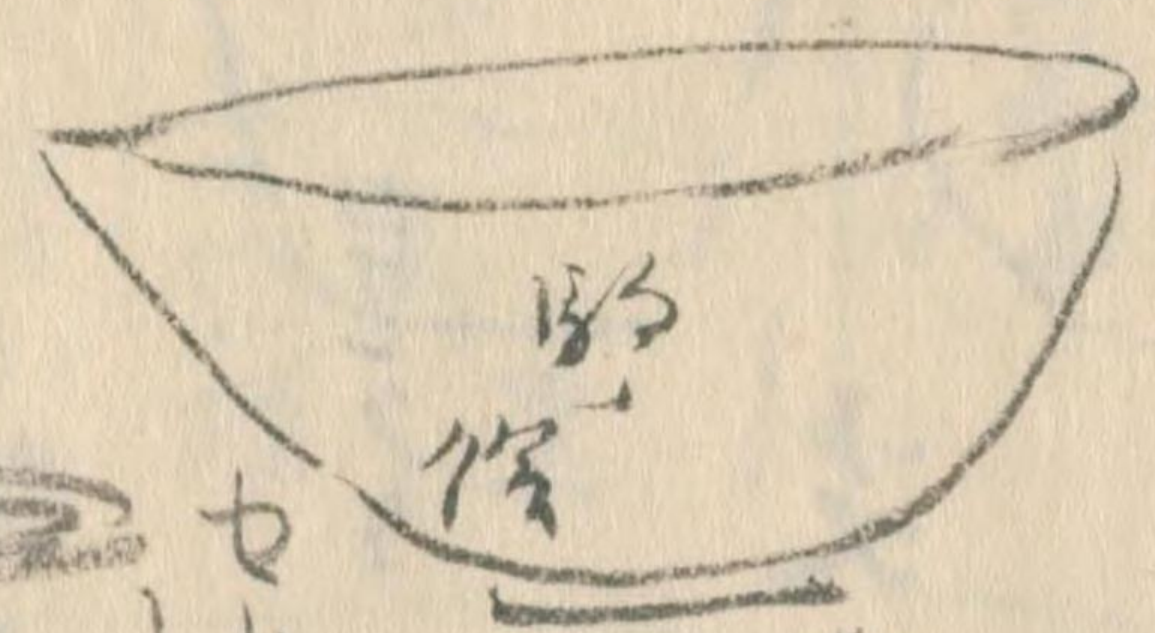


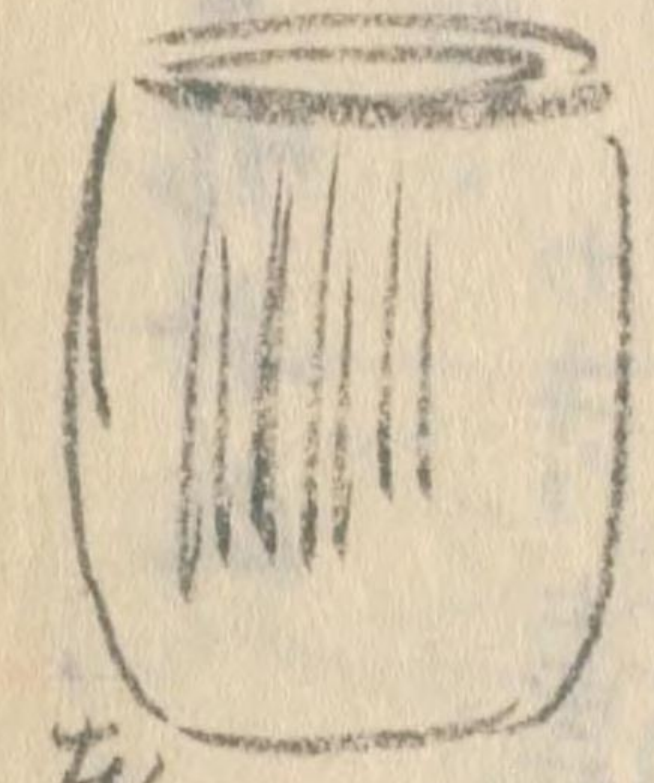


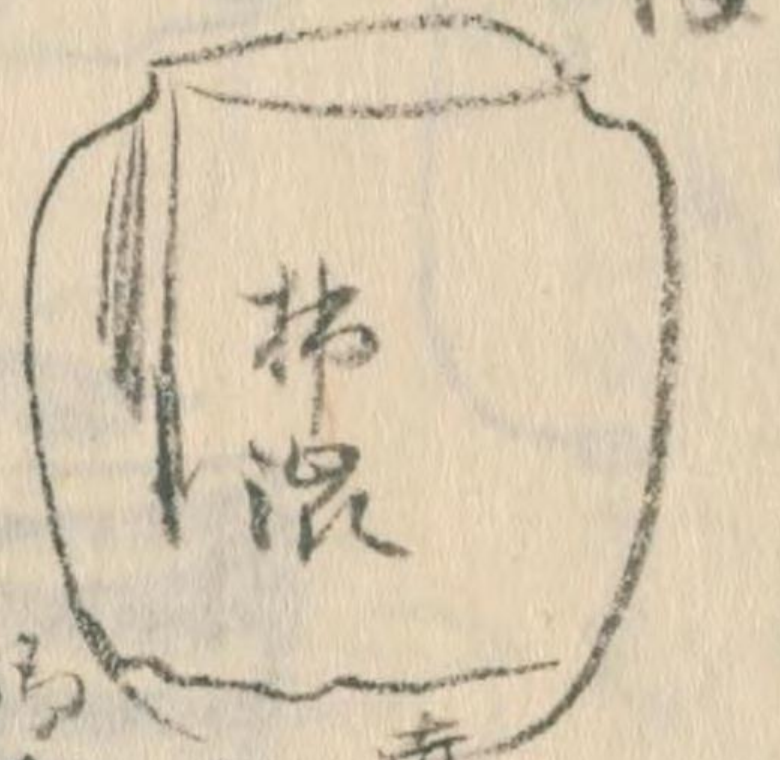

岩倉山
青
地玉子
岩倉山

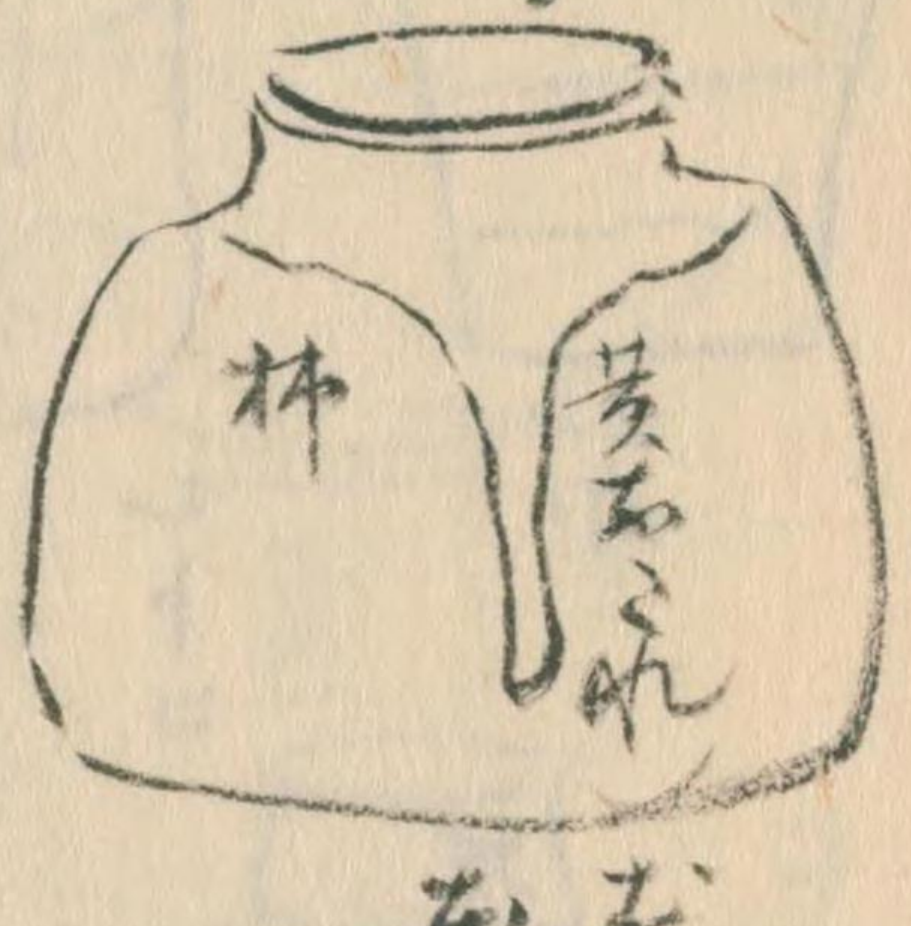


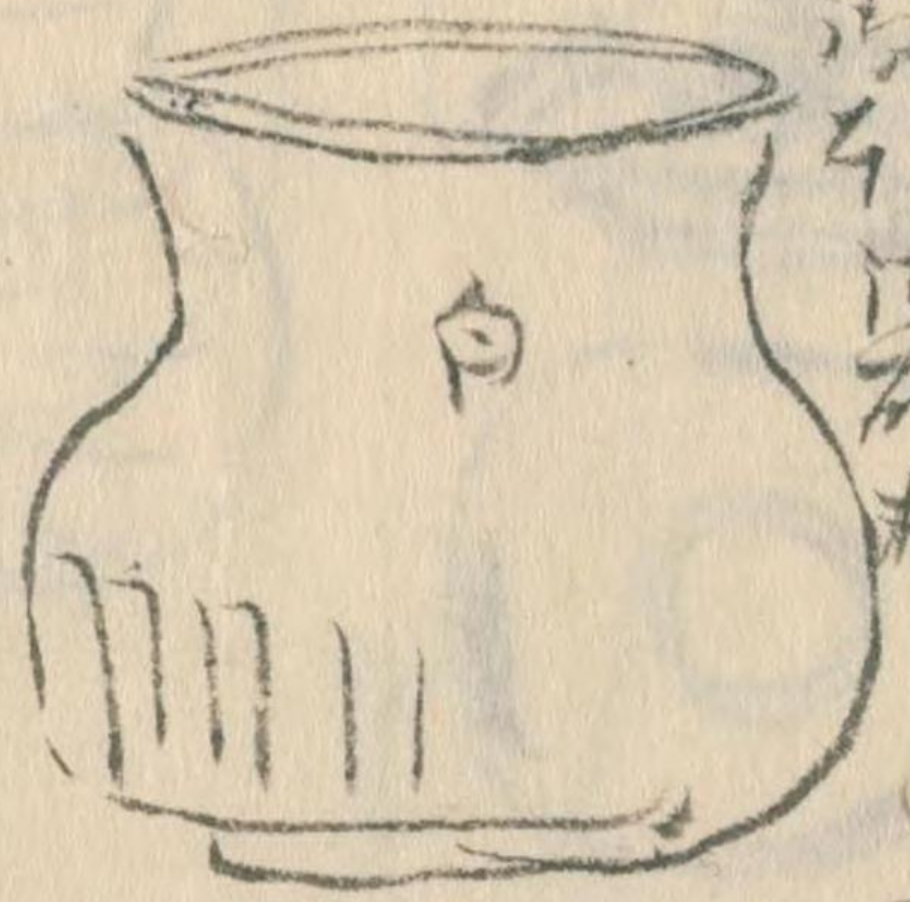


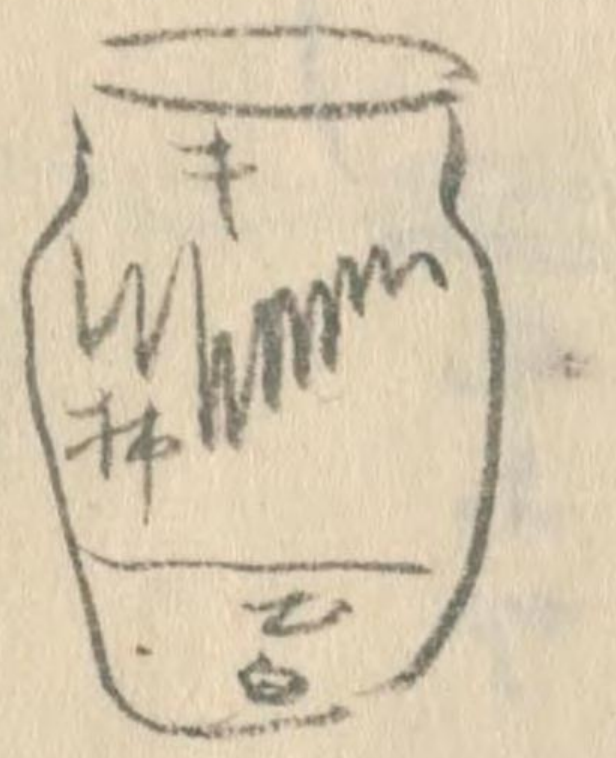


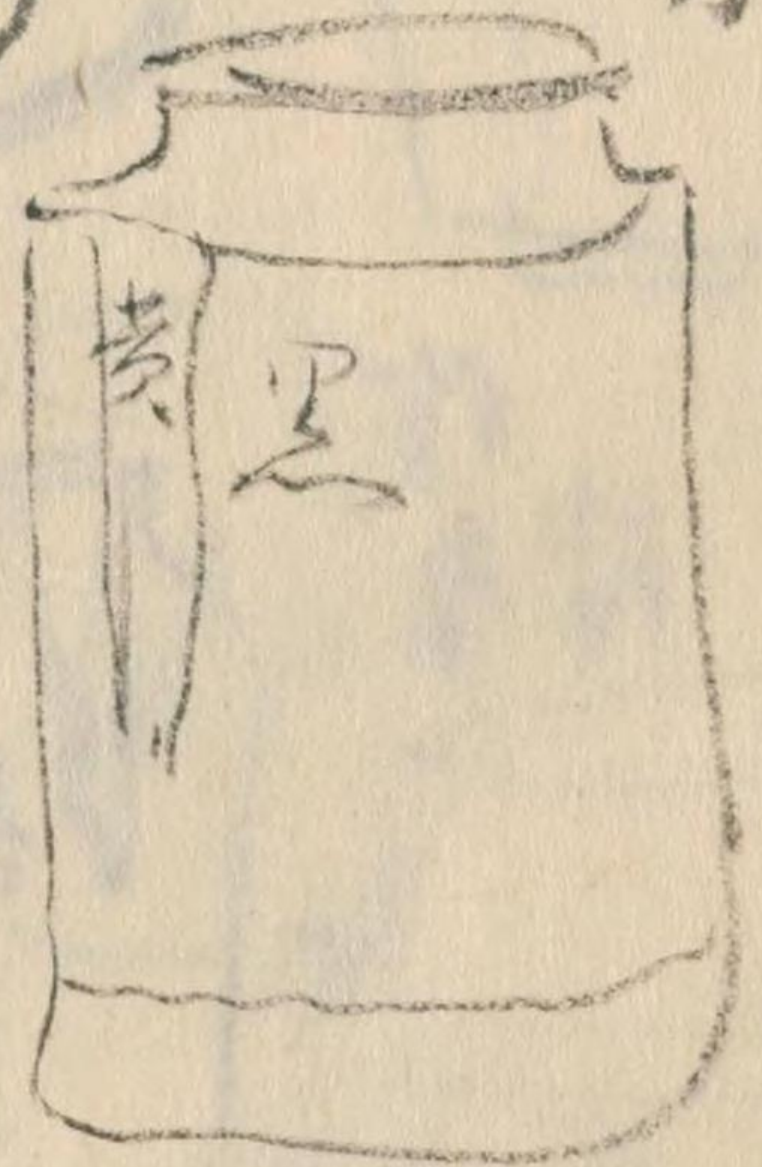


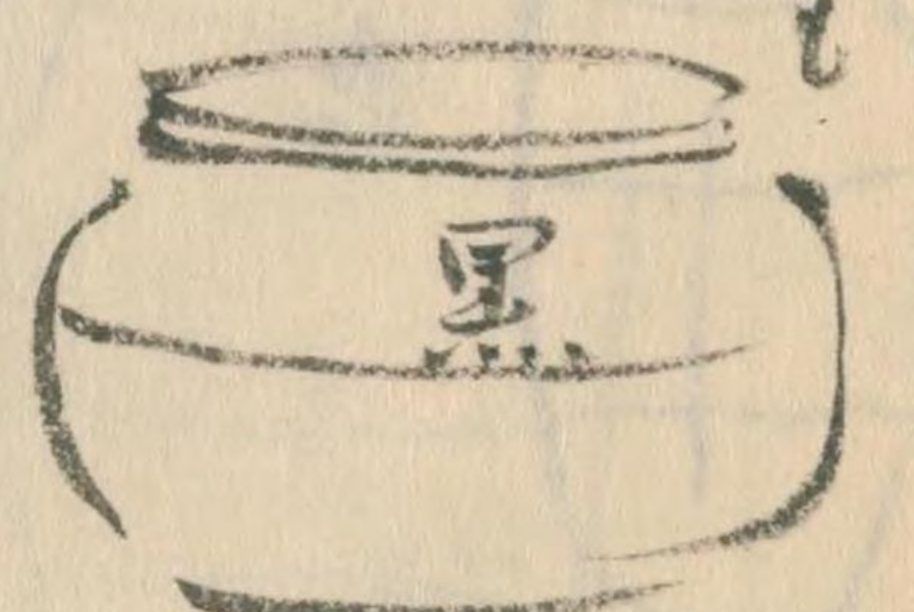


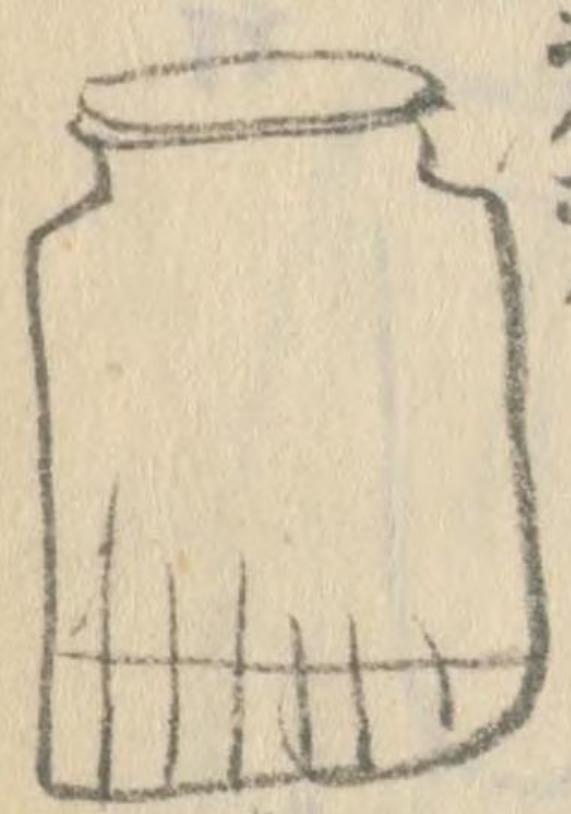


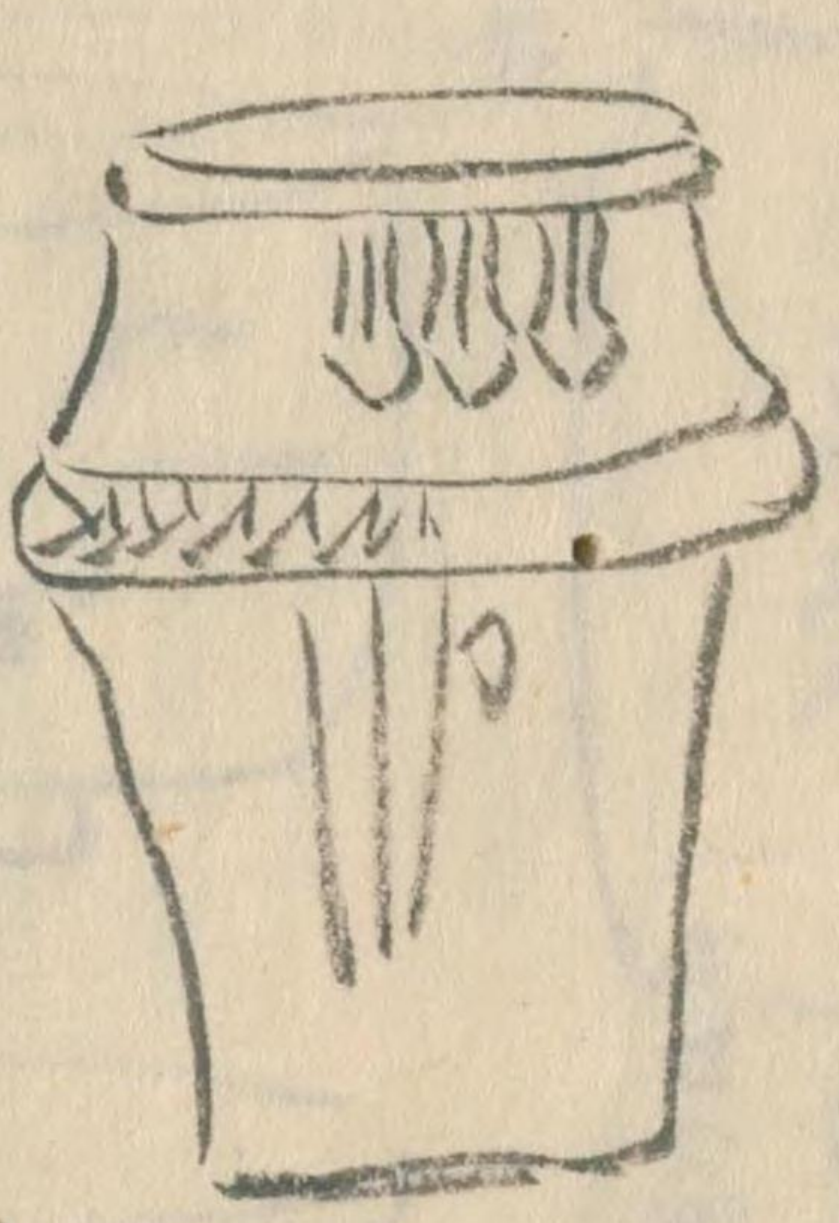


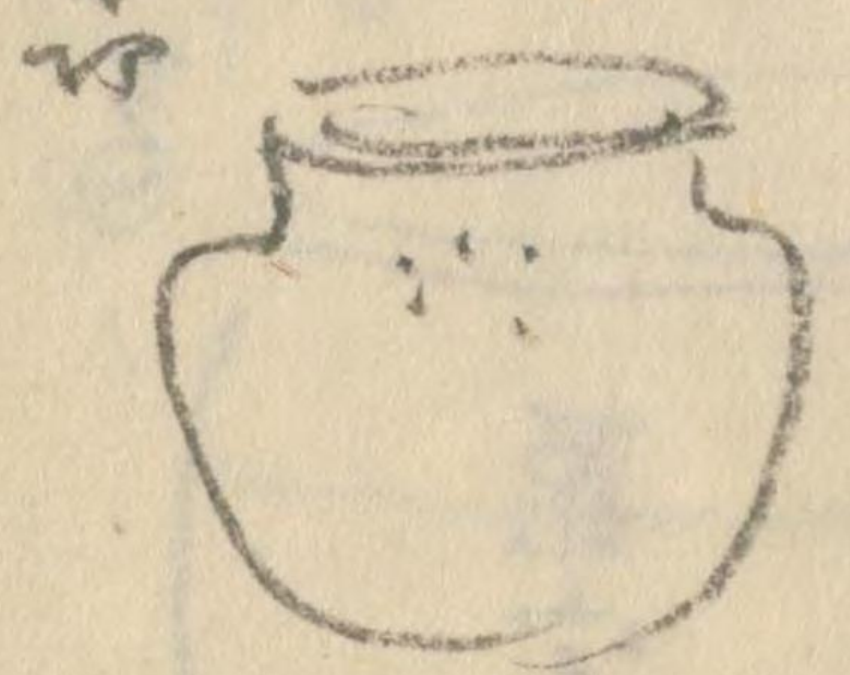


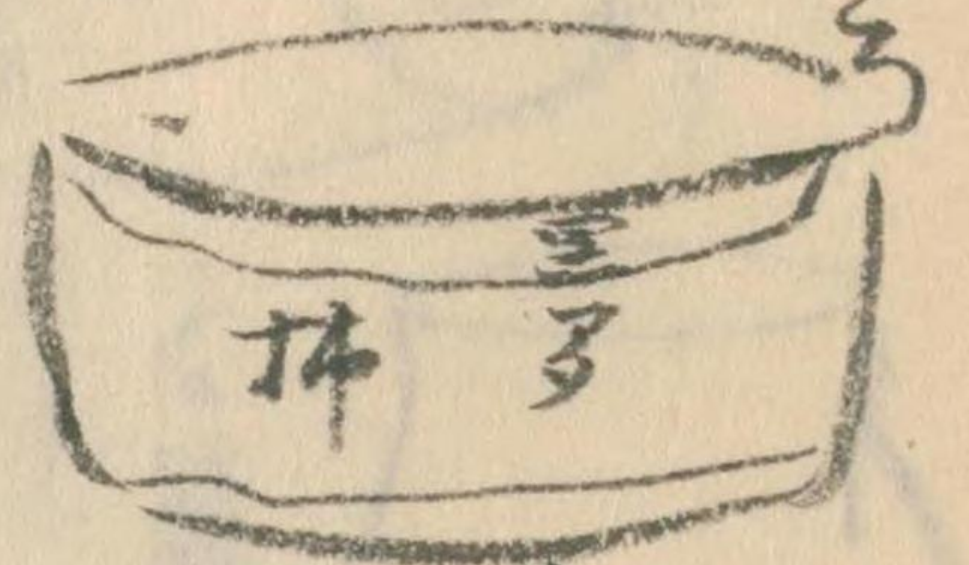


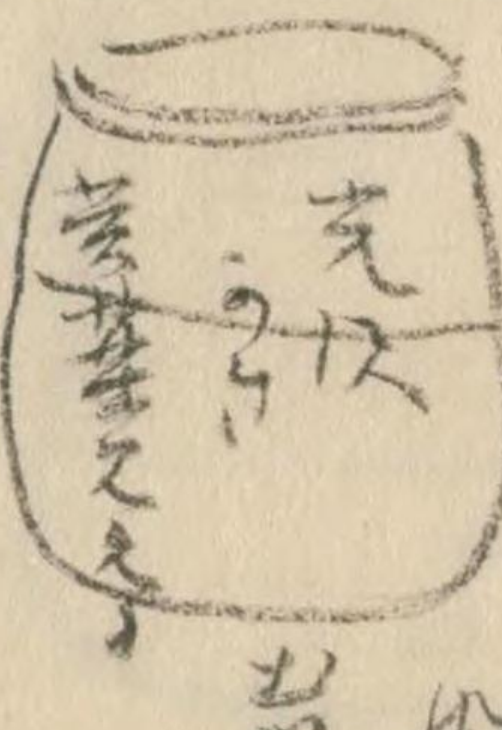










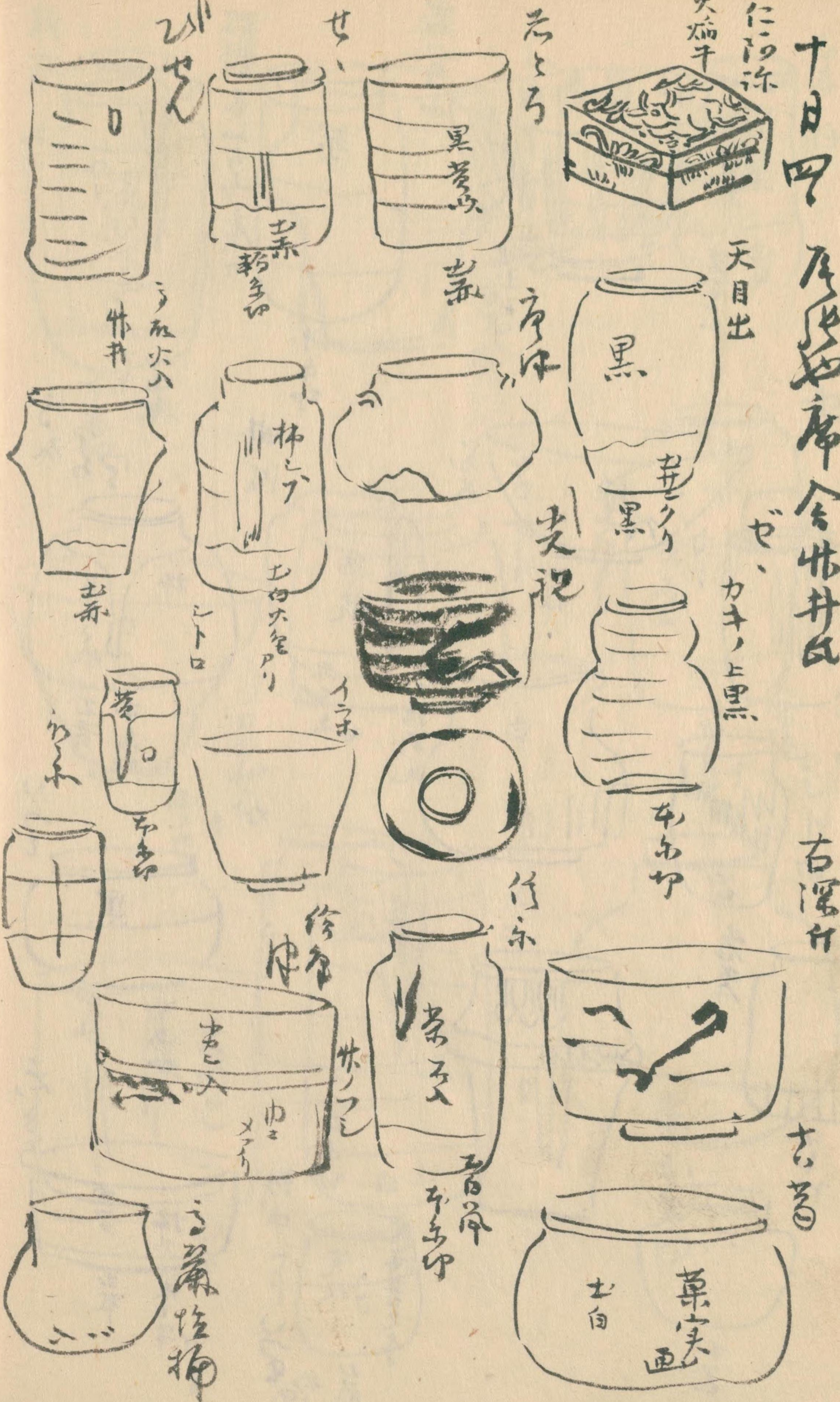


国立国会図書館　タイトル『陶器集』 請求記号 841-124
ガラス使用
841
124

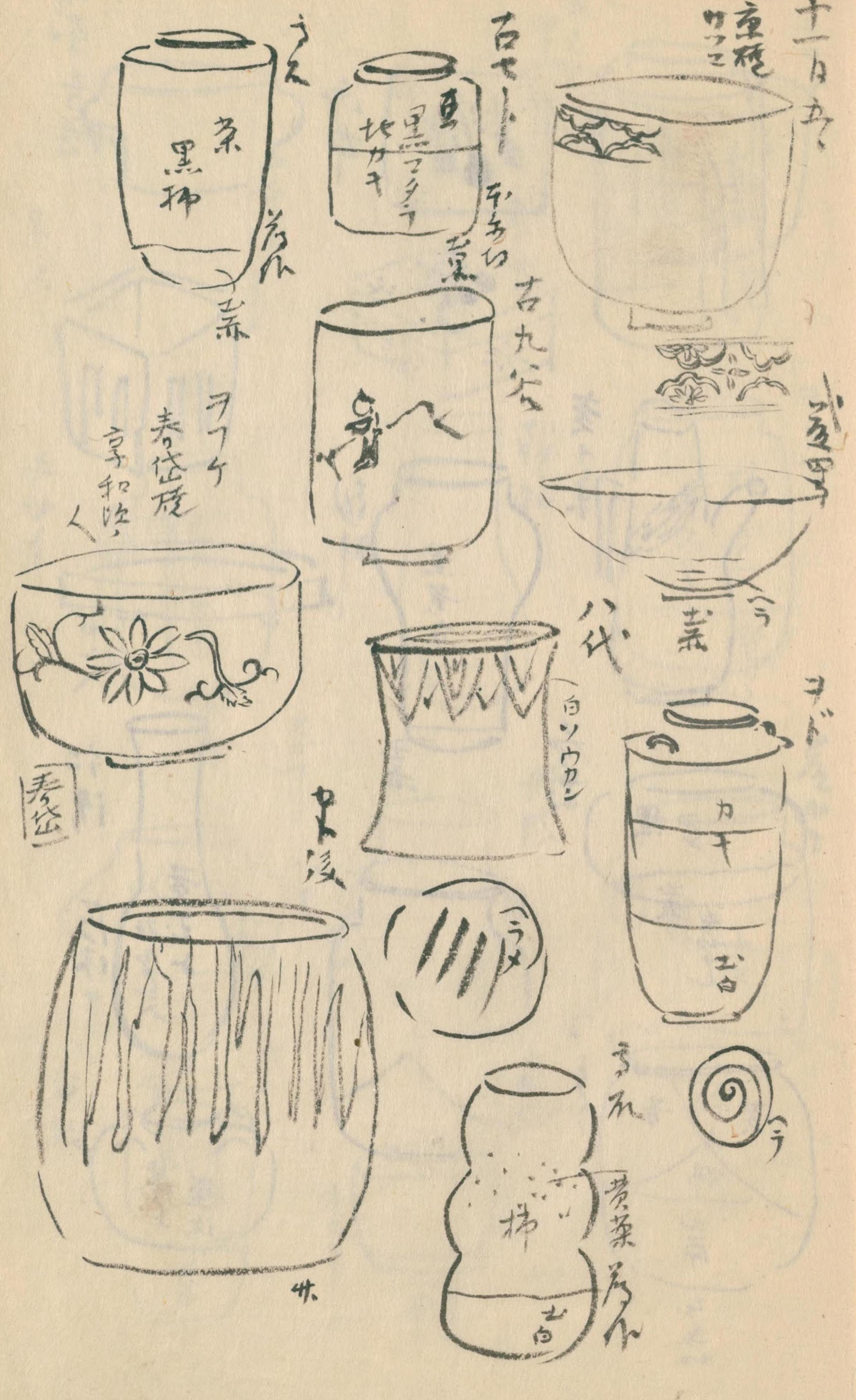
841
124

十月四日

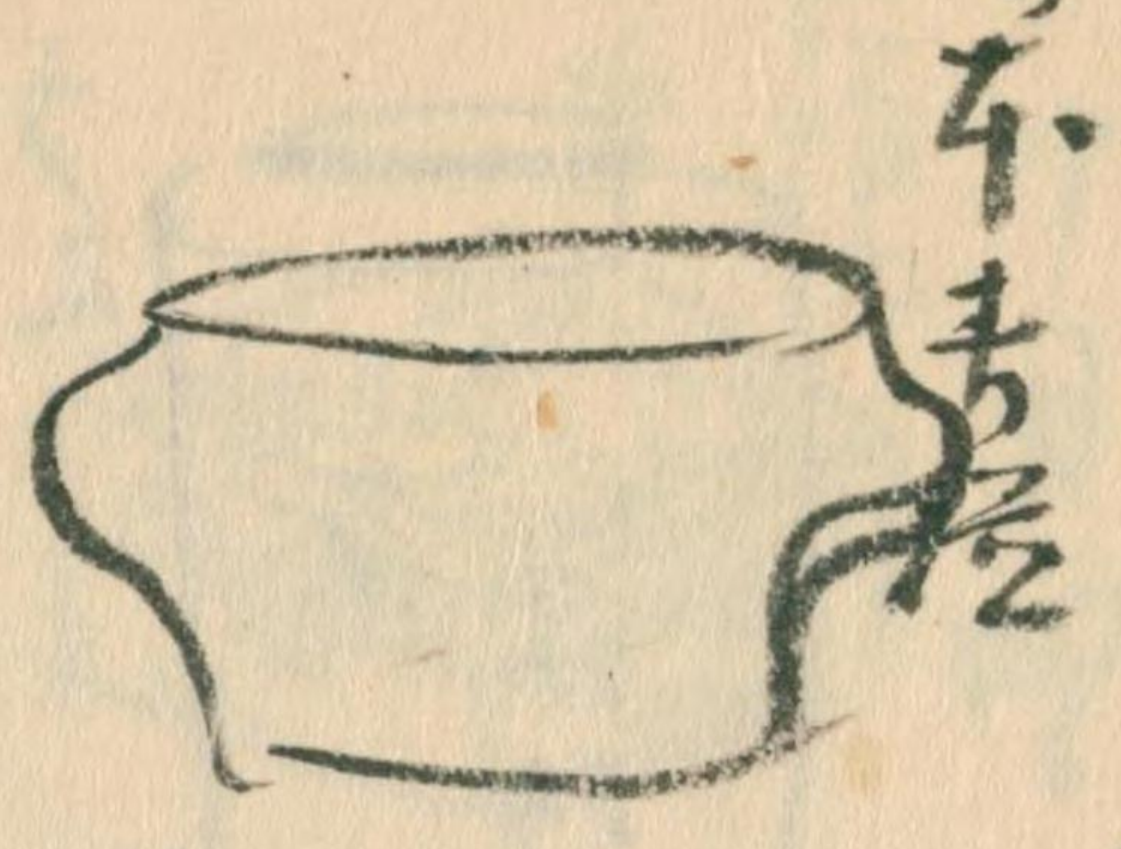
尾張藩今井氏

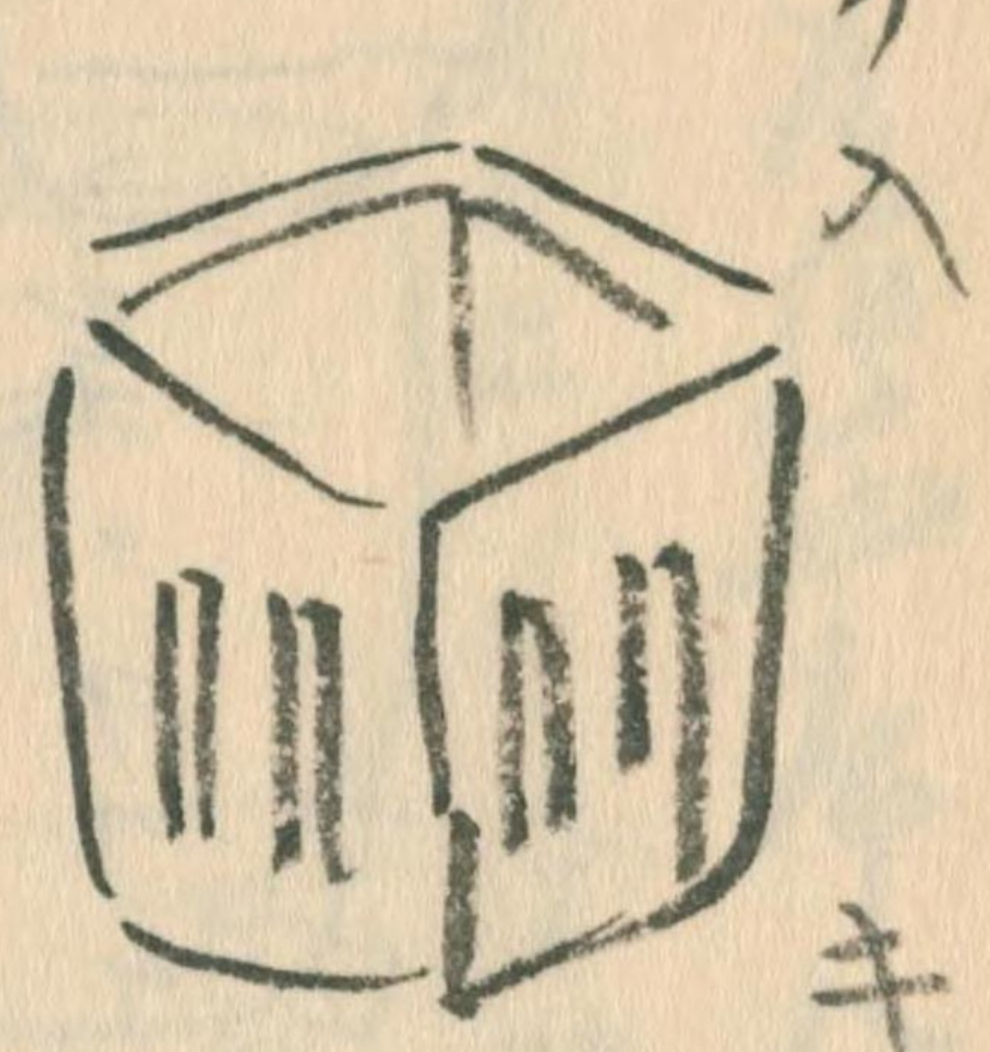

仁阿弥
大猫手
天目出
黒
井戸クリ
黒
ぜゝ
カキノ上黒
本糸切
古深草
志とろ
黒薬
薩
唐津
丹波
せゝ
土赤
粉引
びぜん
今戸火入
竹井
柿ヒフ
土白大釜アリ
シトロ
土赤
イラホ
黄
口
かゝ
本糸切
絵唐津
竹ノフシ
青入
ゆう
メアリ
行平
紫又
土白
本糸切
古萬
菓実
画
土白
古藤
柱柿

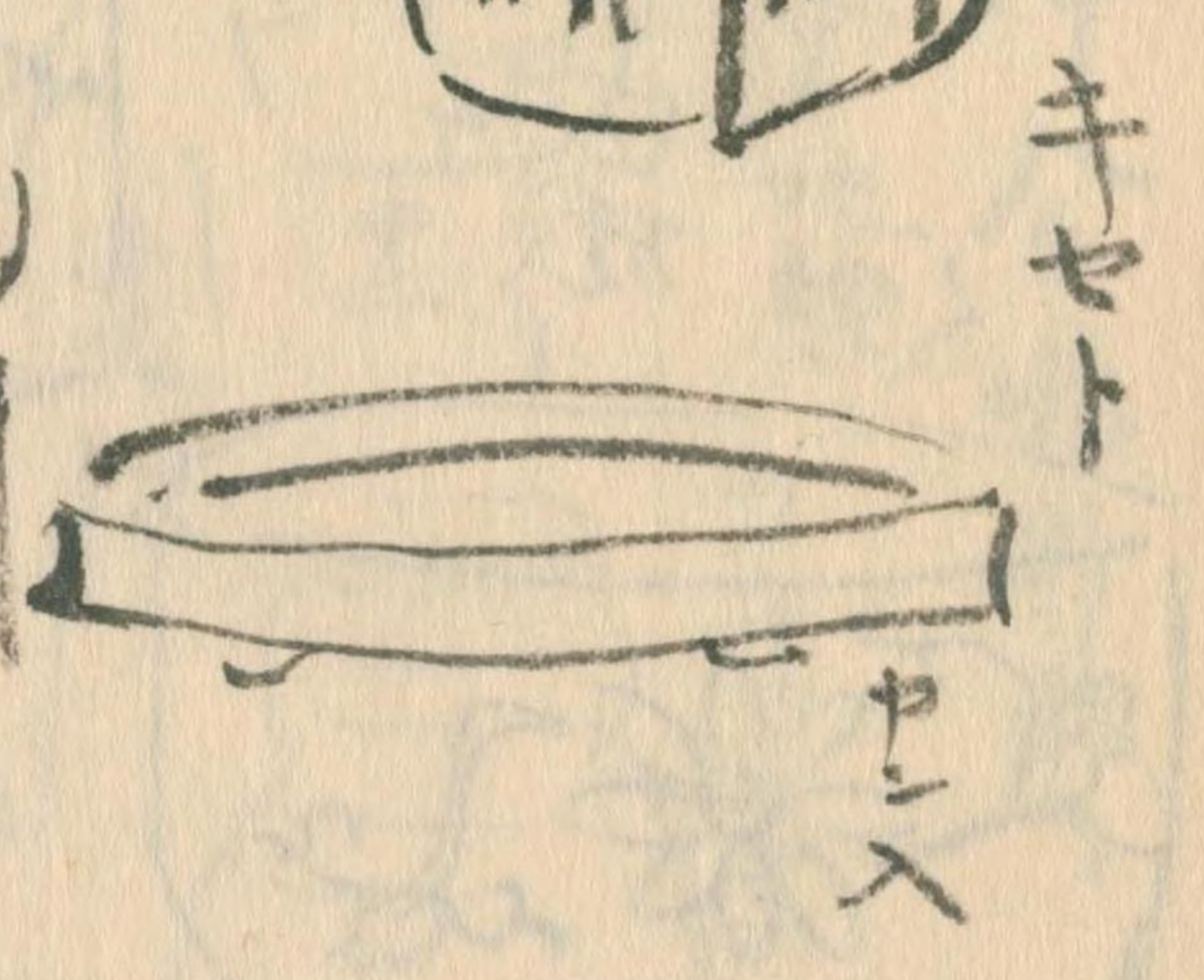
十一月五日

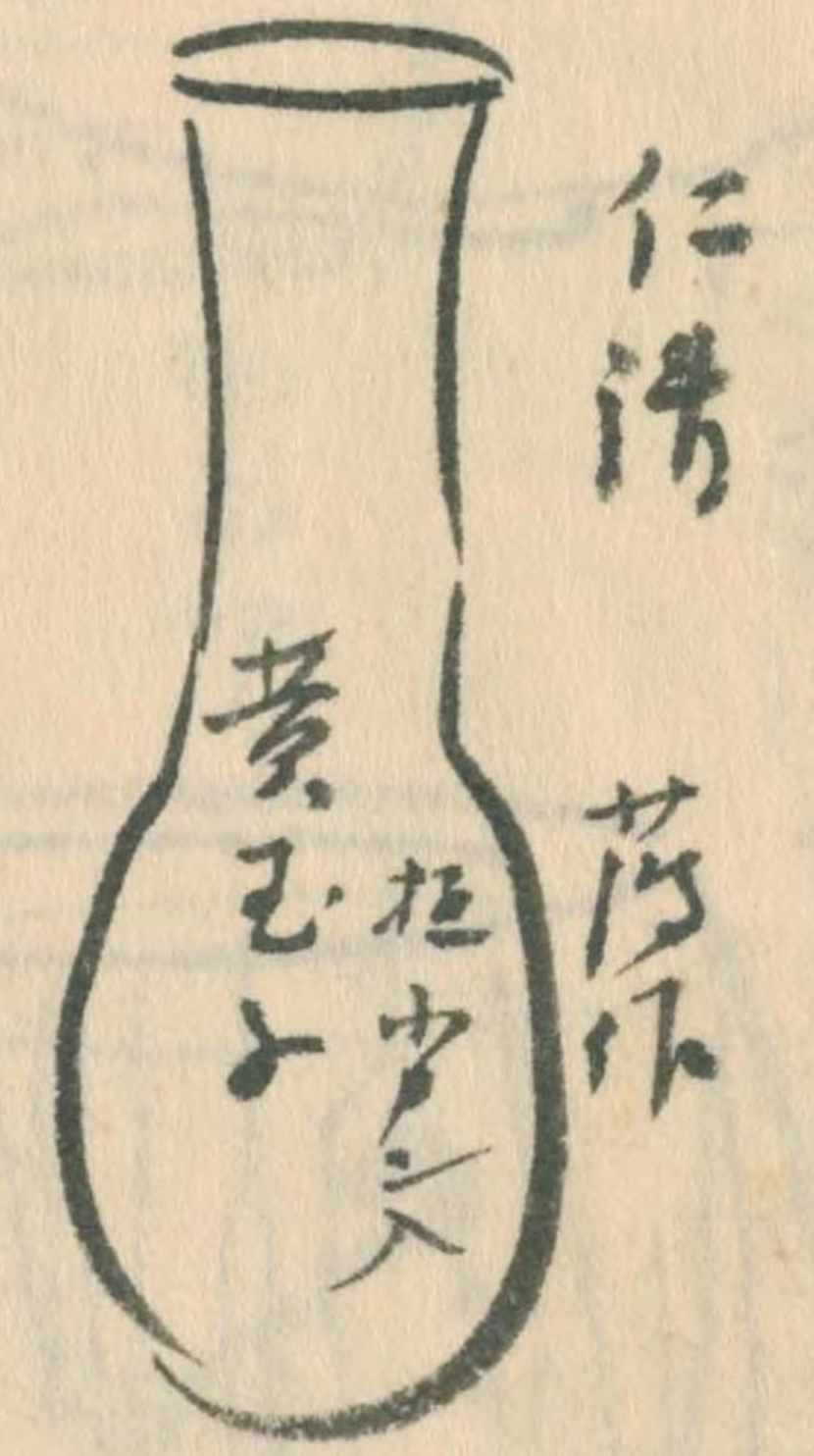

京焼
サワマ
古セト
黒マクチ
柿カキ
本糸切
萬
古九谷
武蔵野
ヘラ
土赤
ちん
茶
黒柿
薩
土赤
ヲフケ
寿悦焼
享和頃
人
寿悦
八代
白ソウカン
ヨド
カキ
土白
古浅
ヘラメ
ヘラ
高原
黄薬
薩
柿
土白
廾

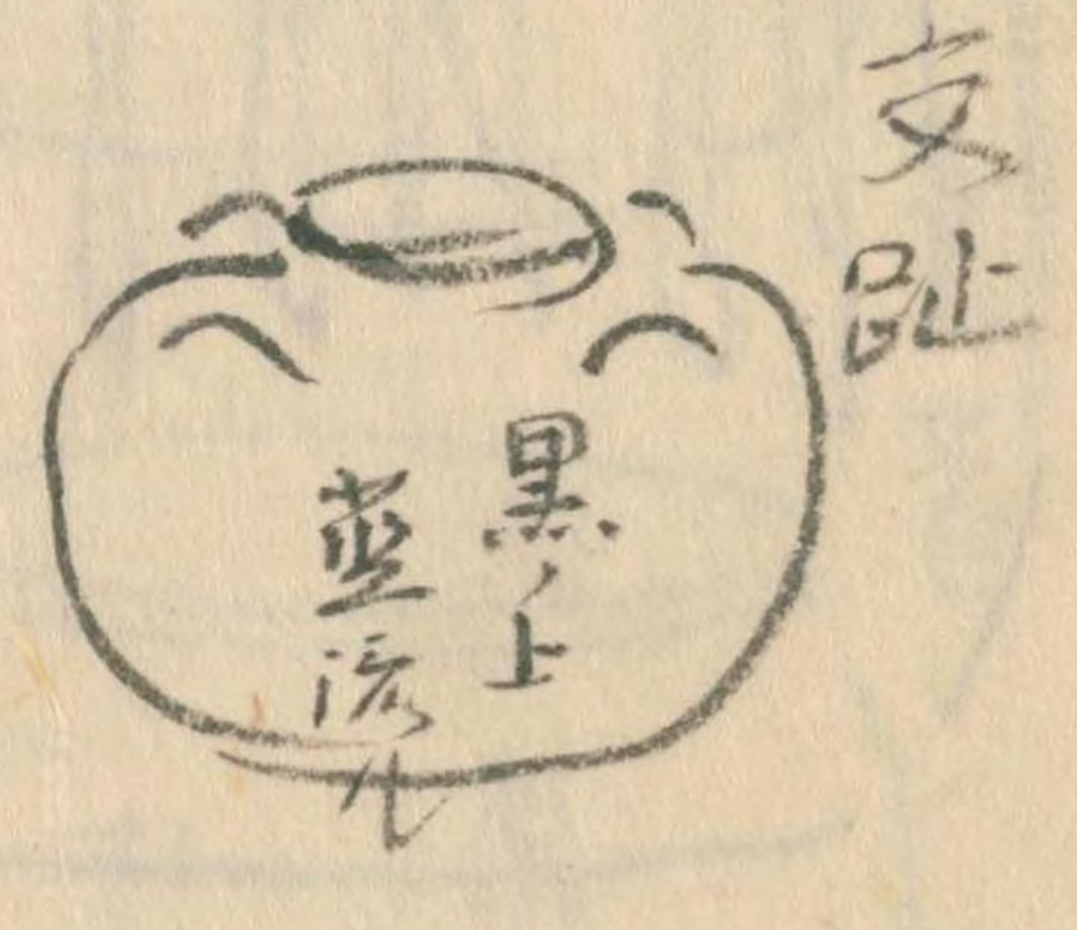
841
124

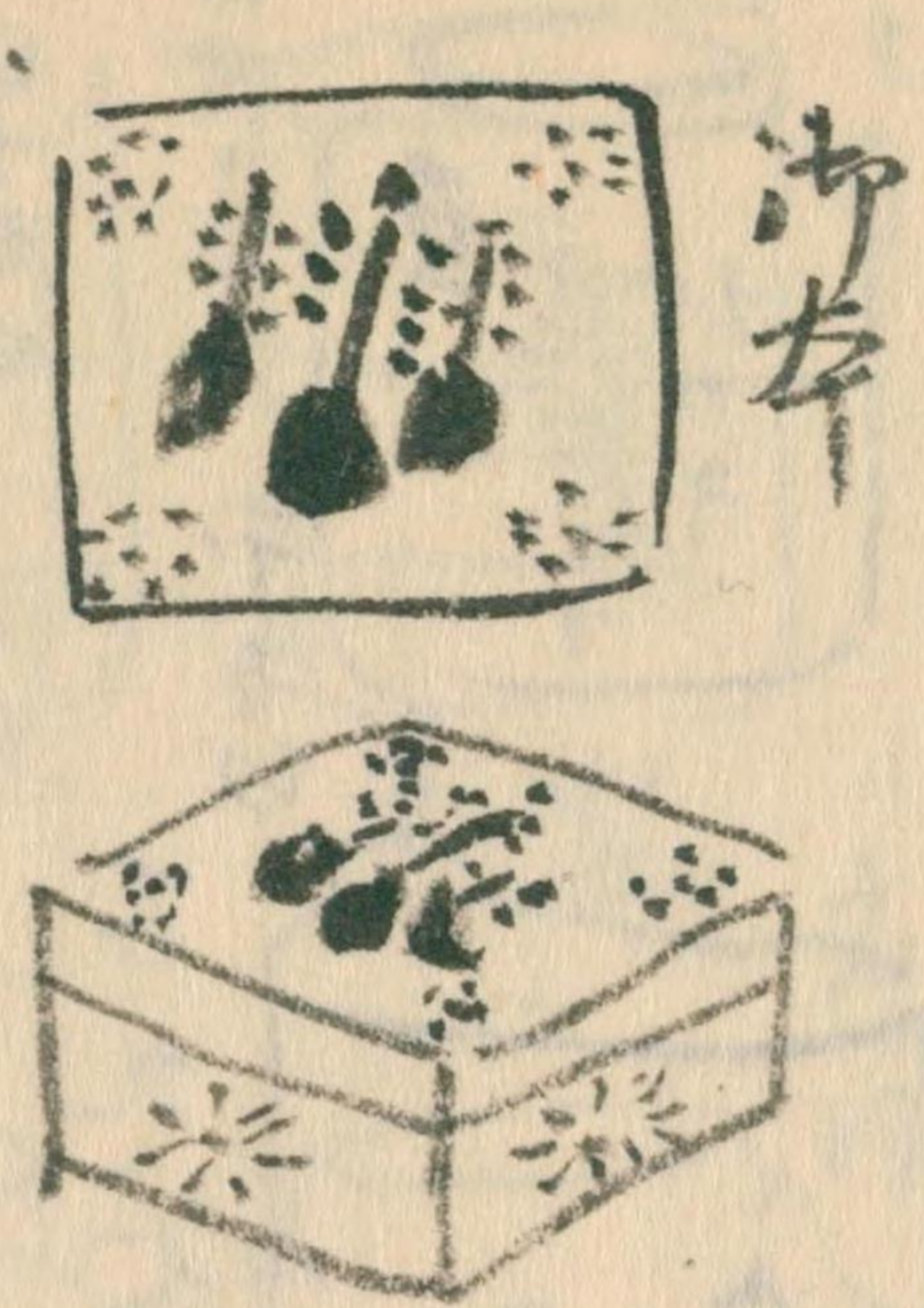

ゴ本青磁

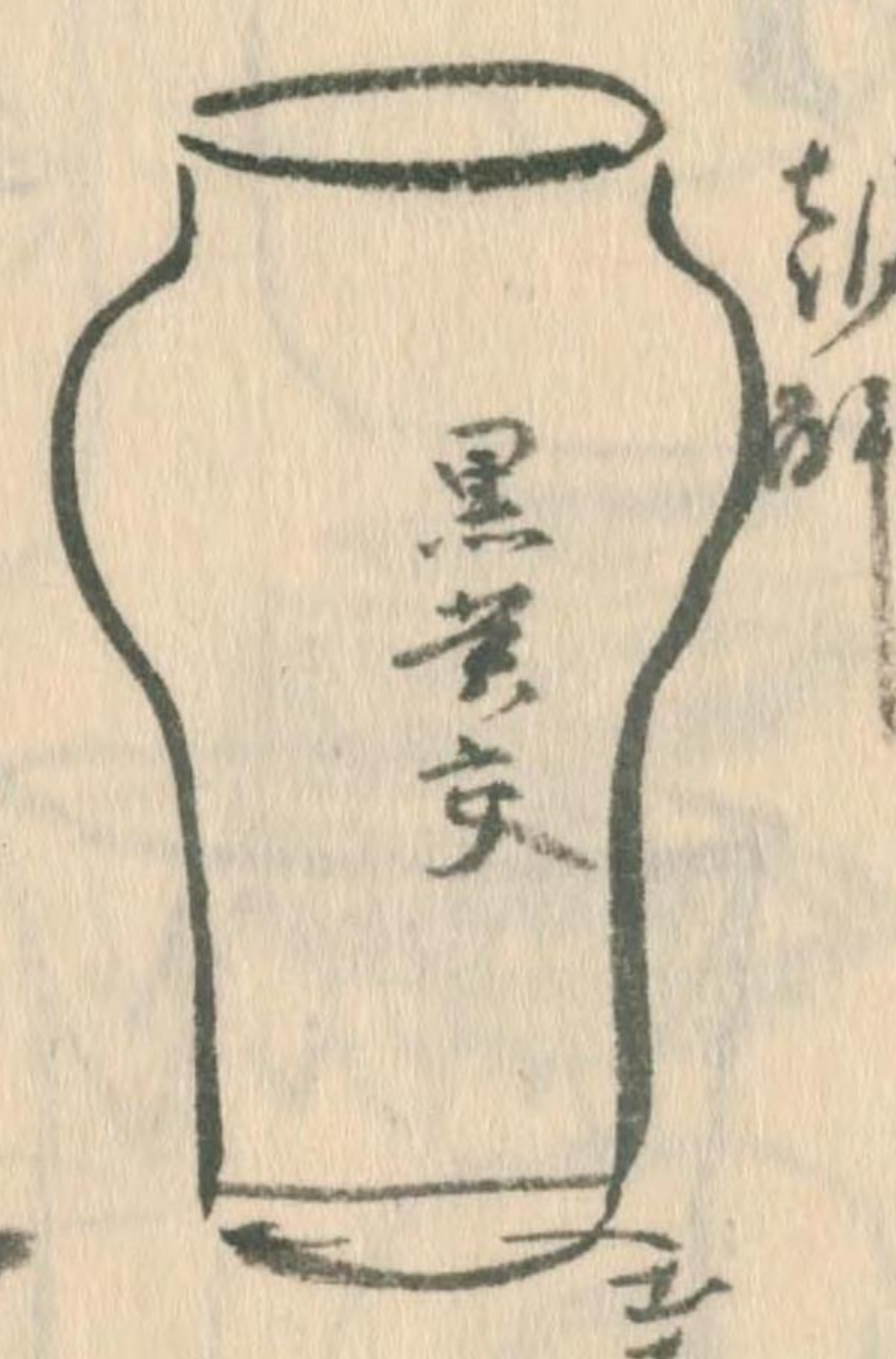

ろ入

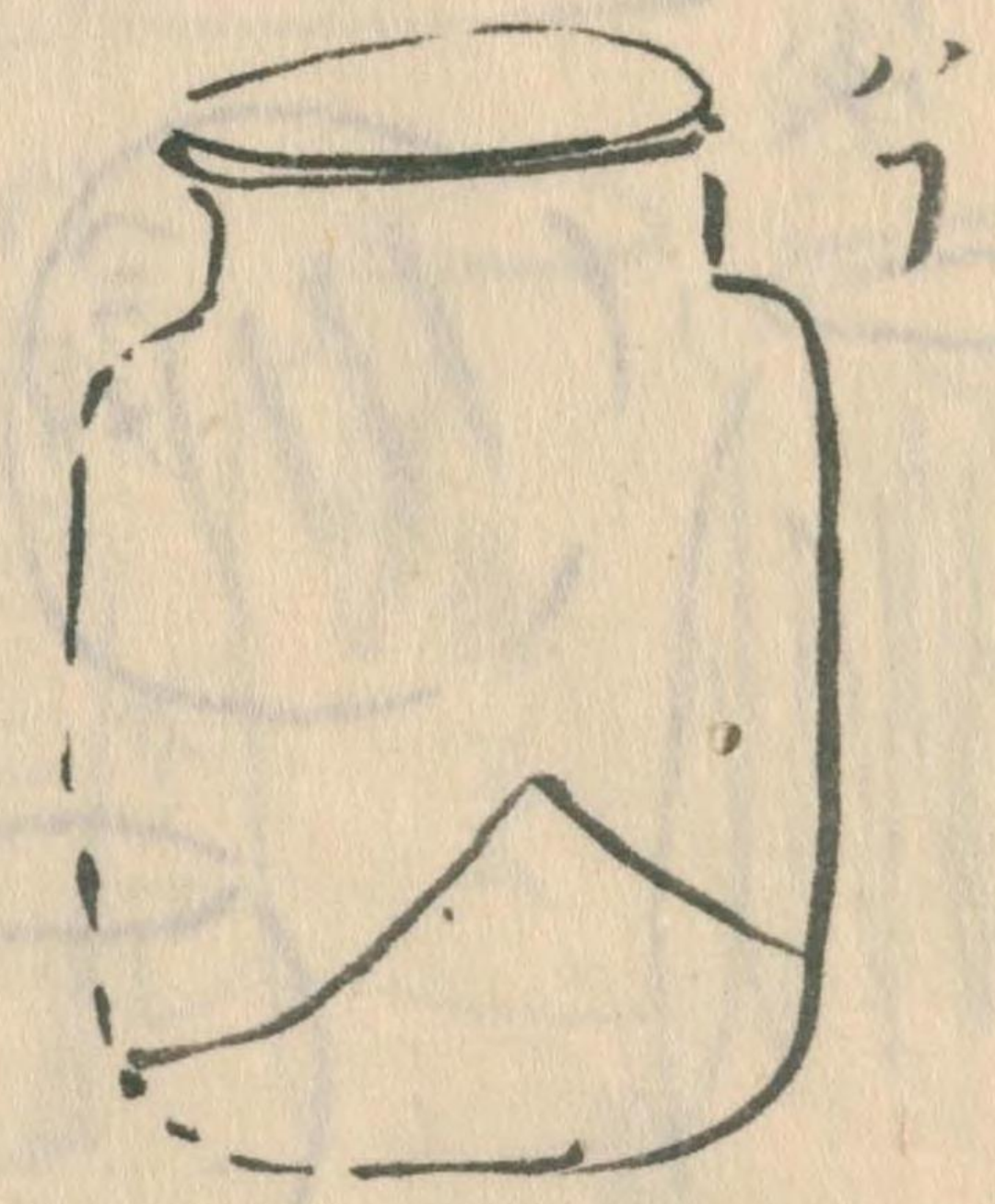

キセト
中ニ入

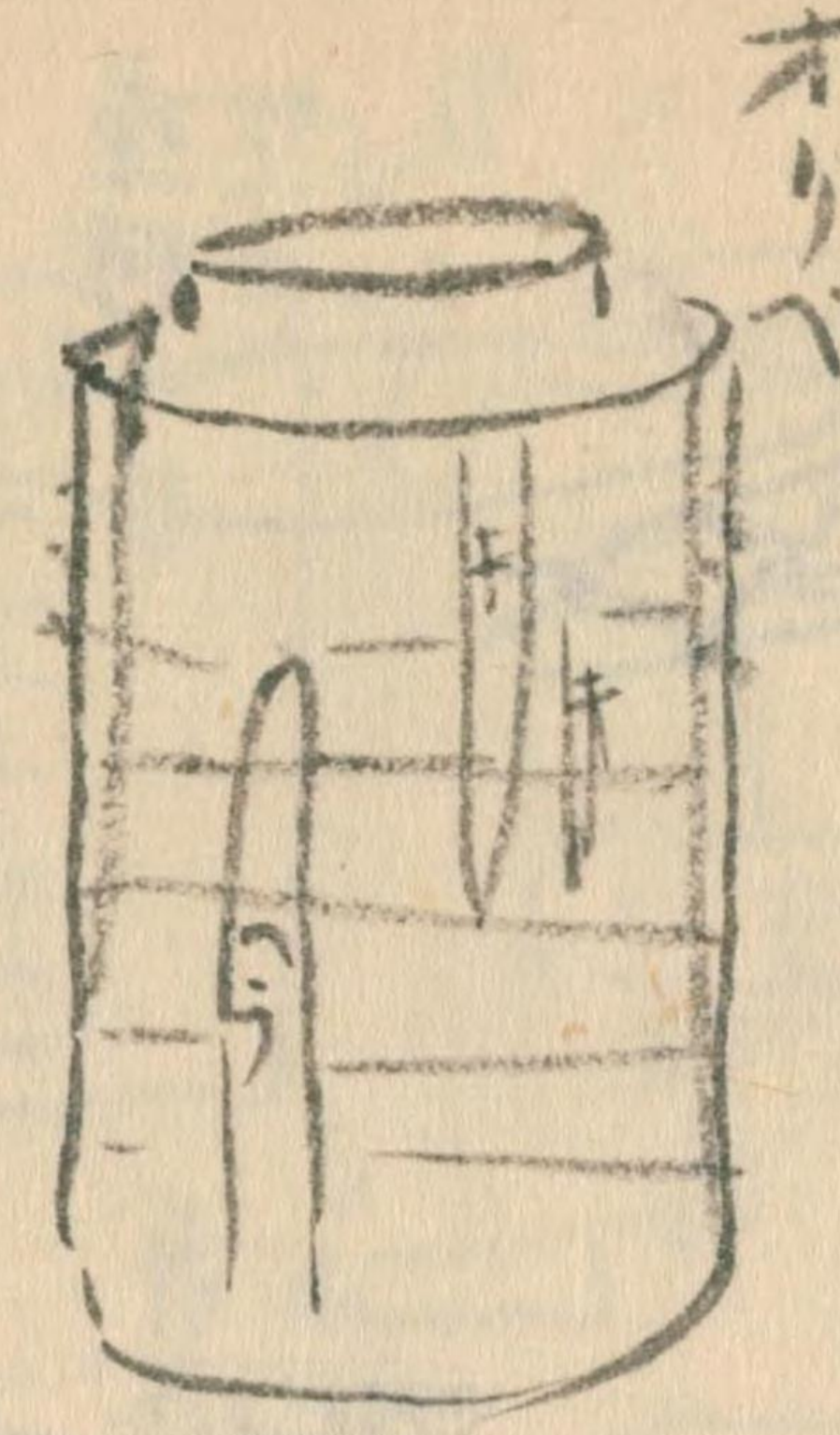

仁清
黄玉子
柾中ニ入
薄作

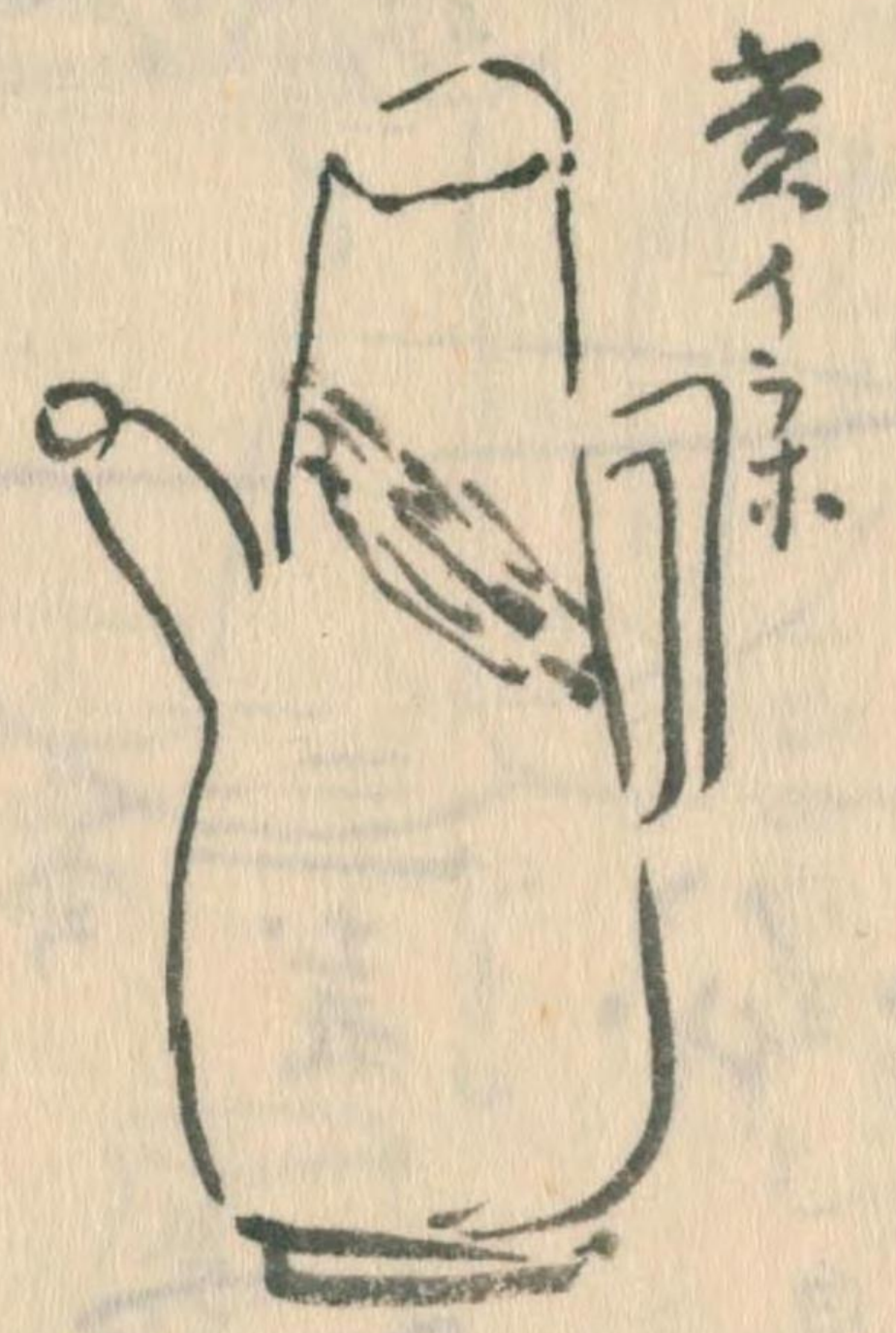

交趾
黒上
藍流レ

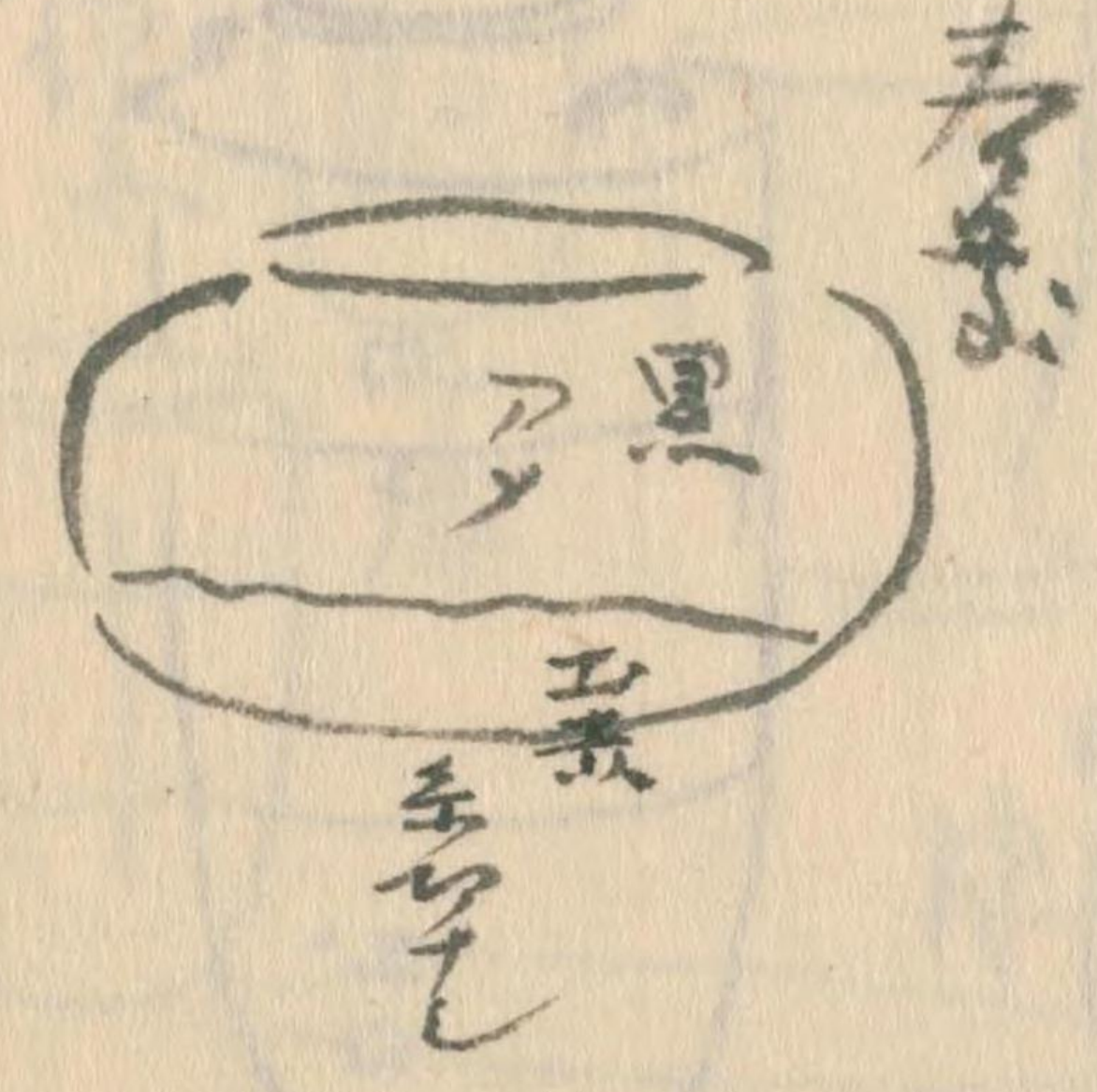

御本

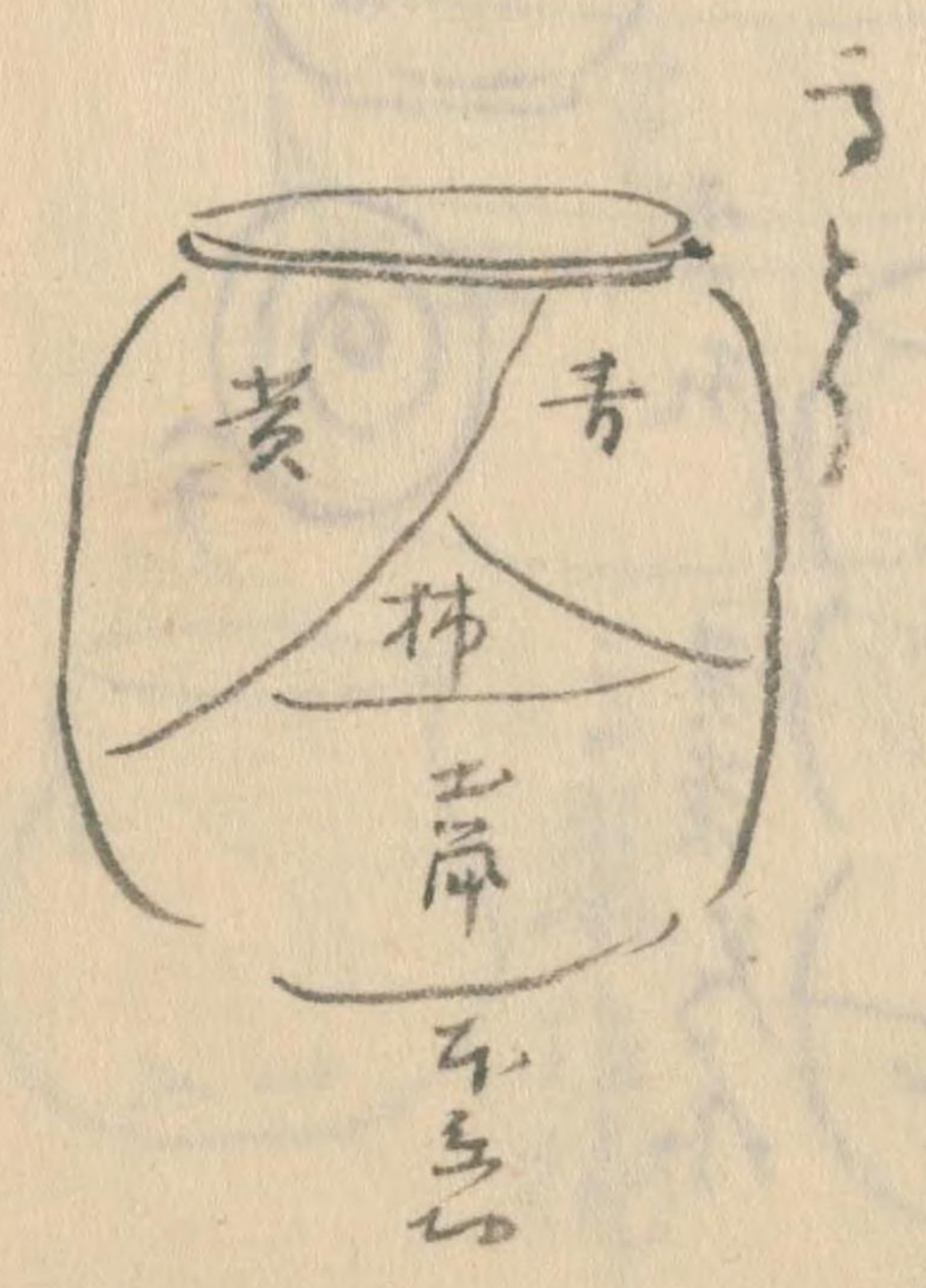

朝鮮
黒黄安
土赤

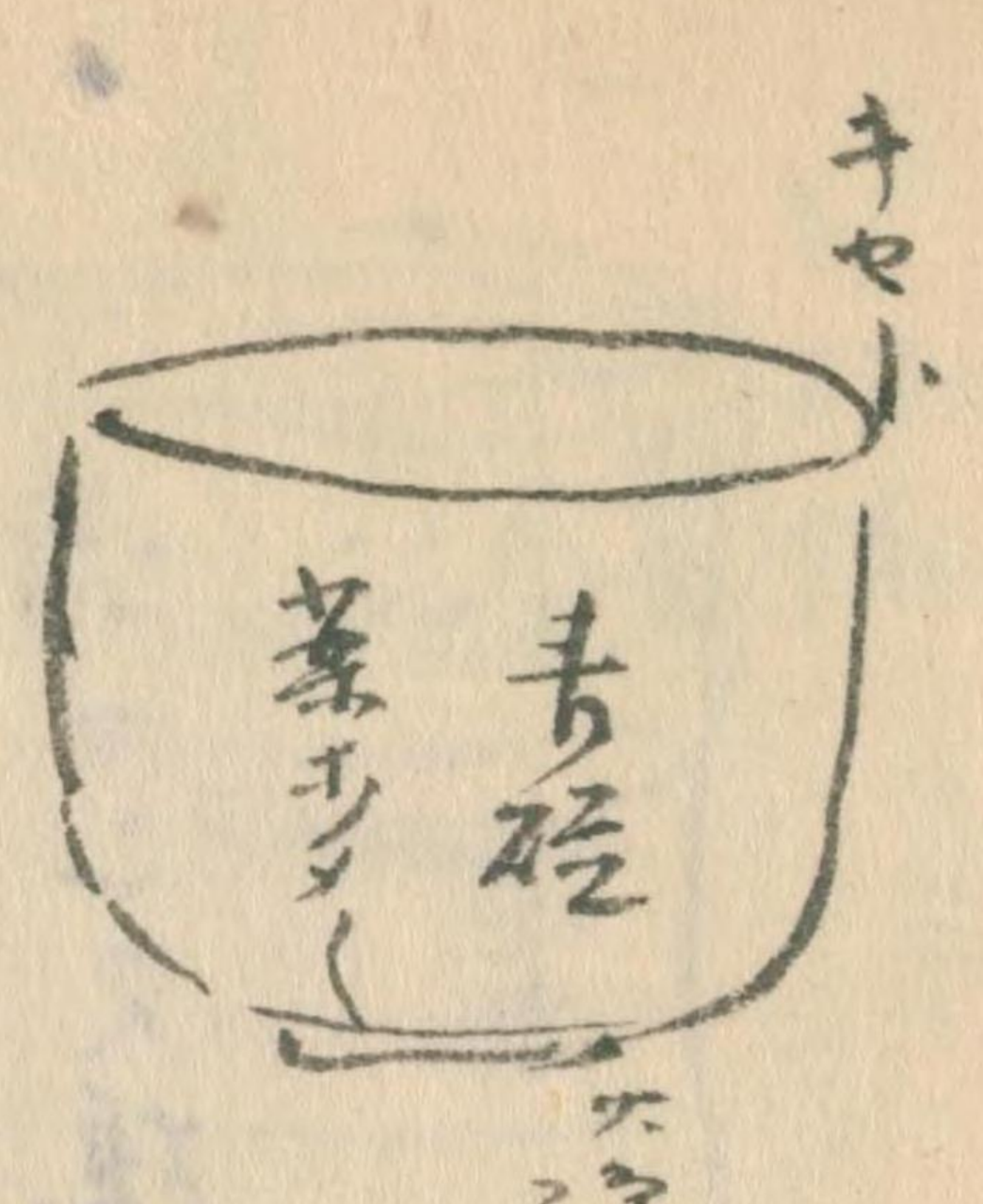

ハケ

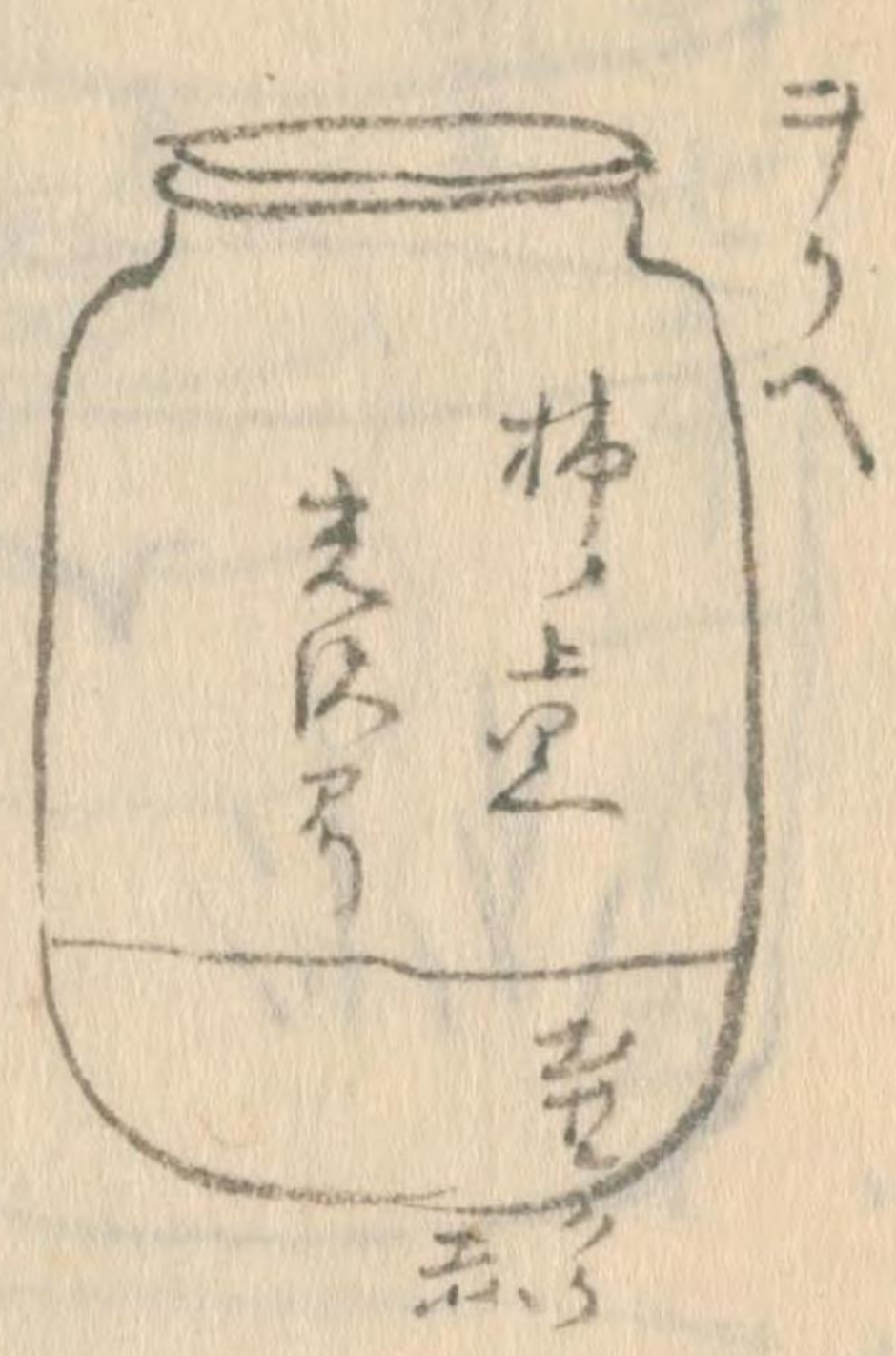

オリベ

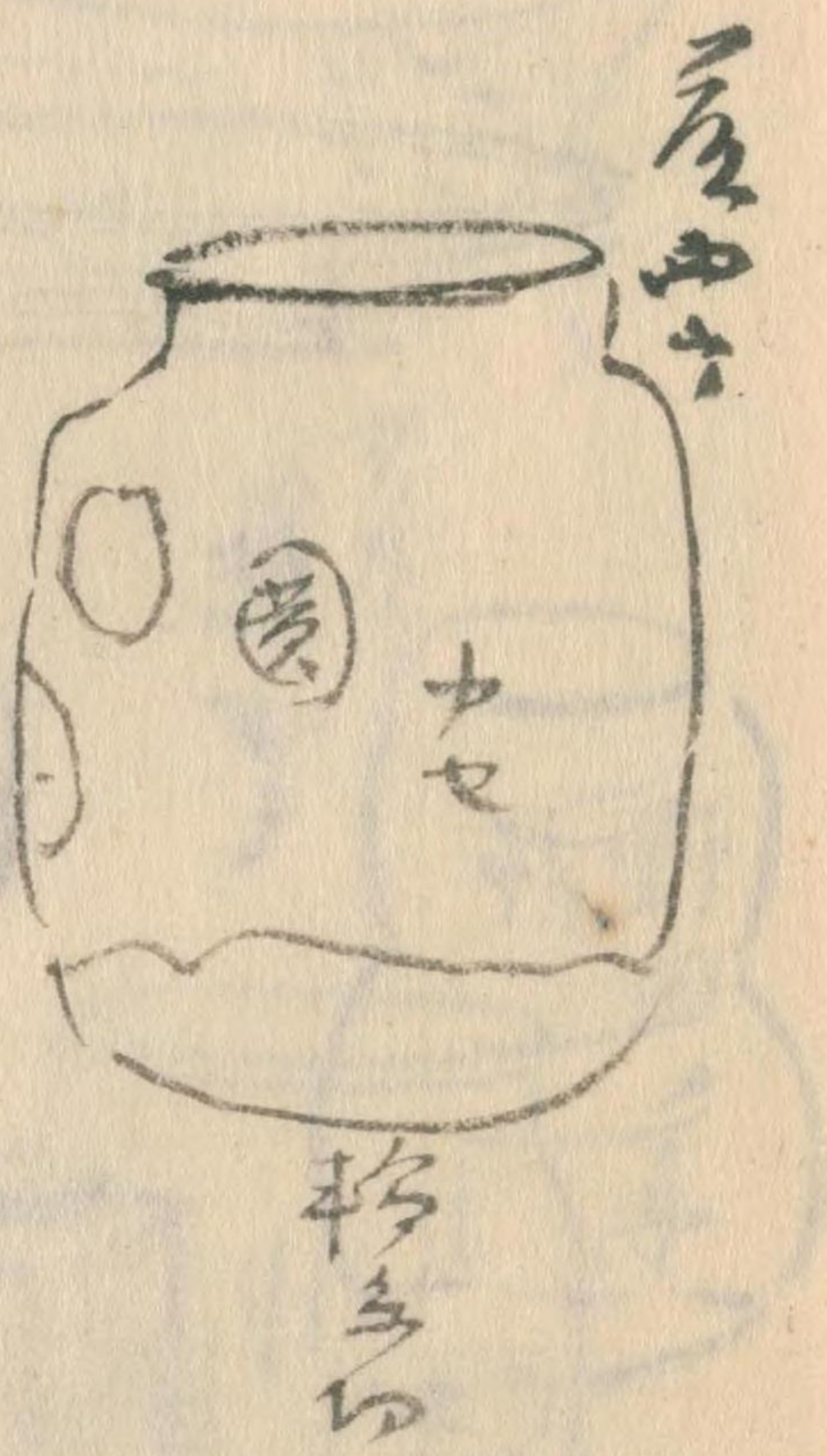

黄イラボ

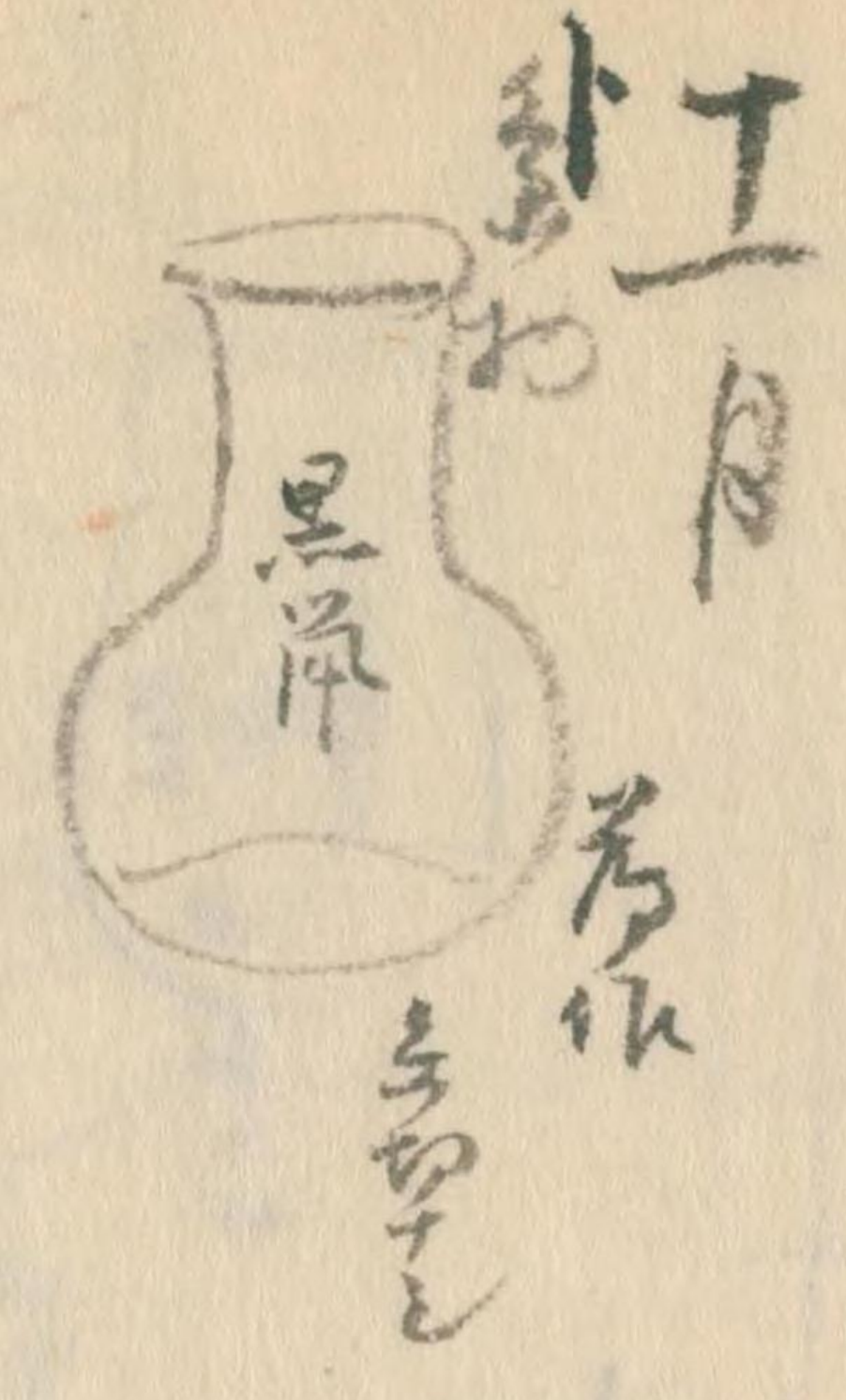

寿楽
黒
アメ
土灰
糸切ナし

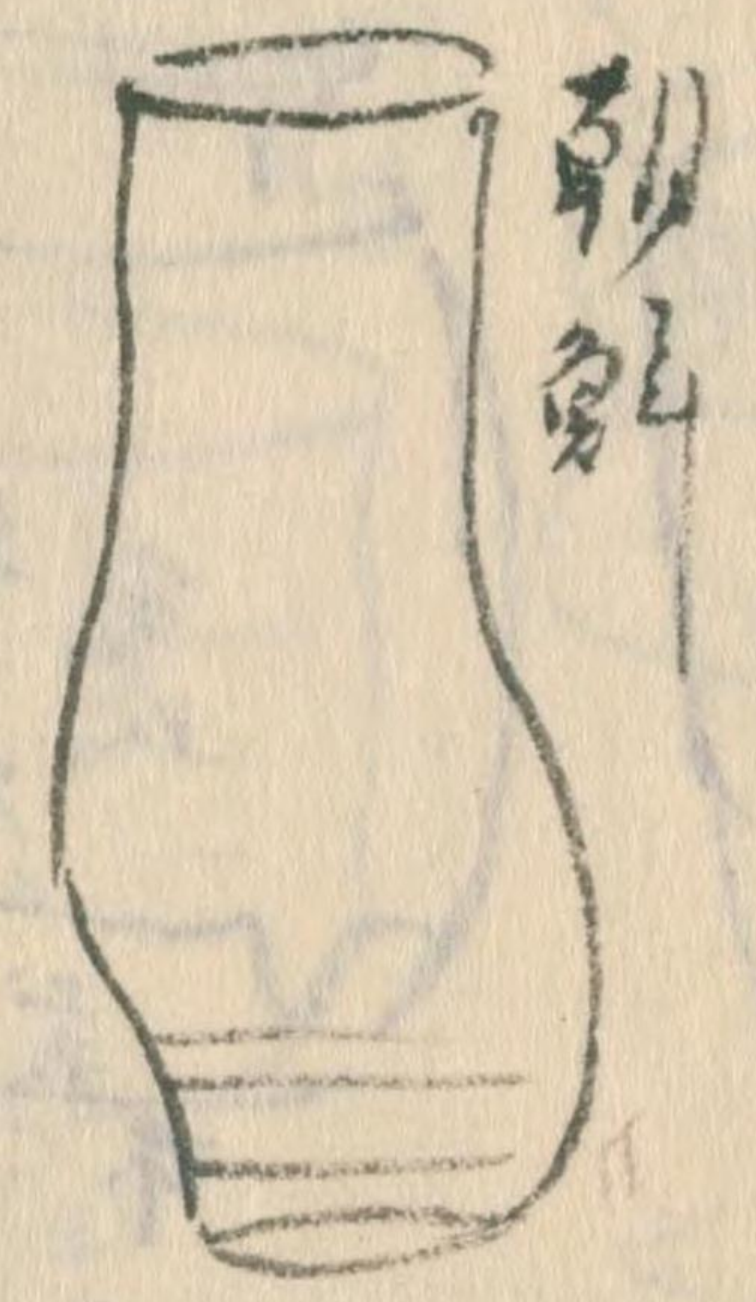

ろくろ
黄
青
柿
土灰
糸切

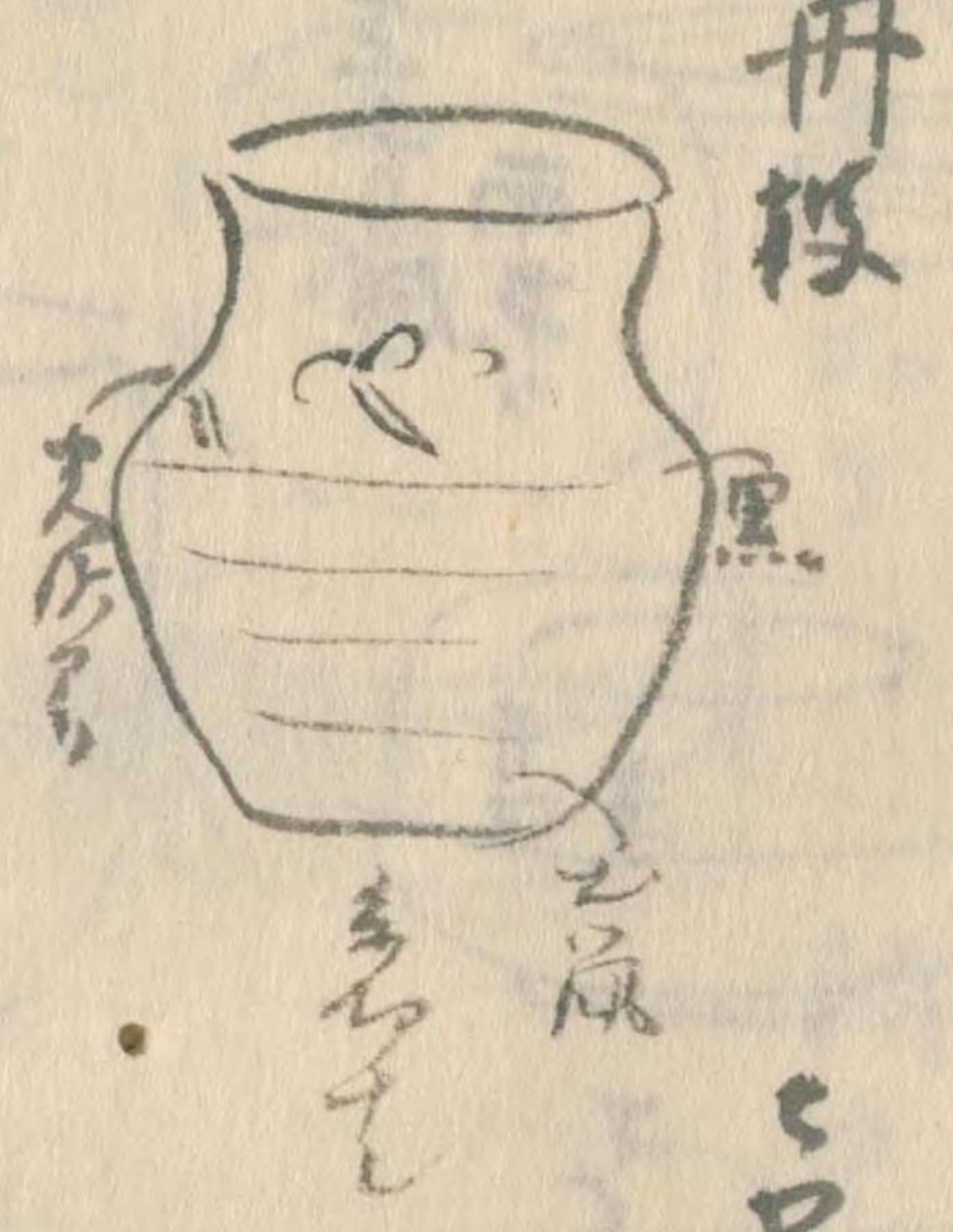

キセト
青磁
茶オンし
大ヒク

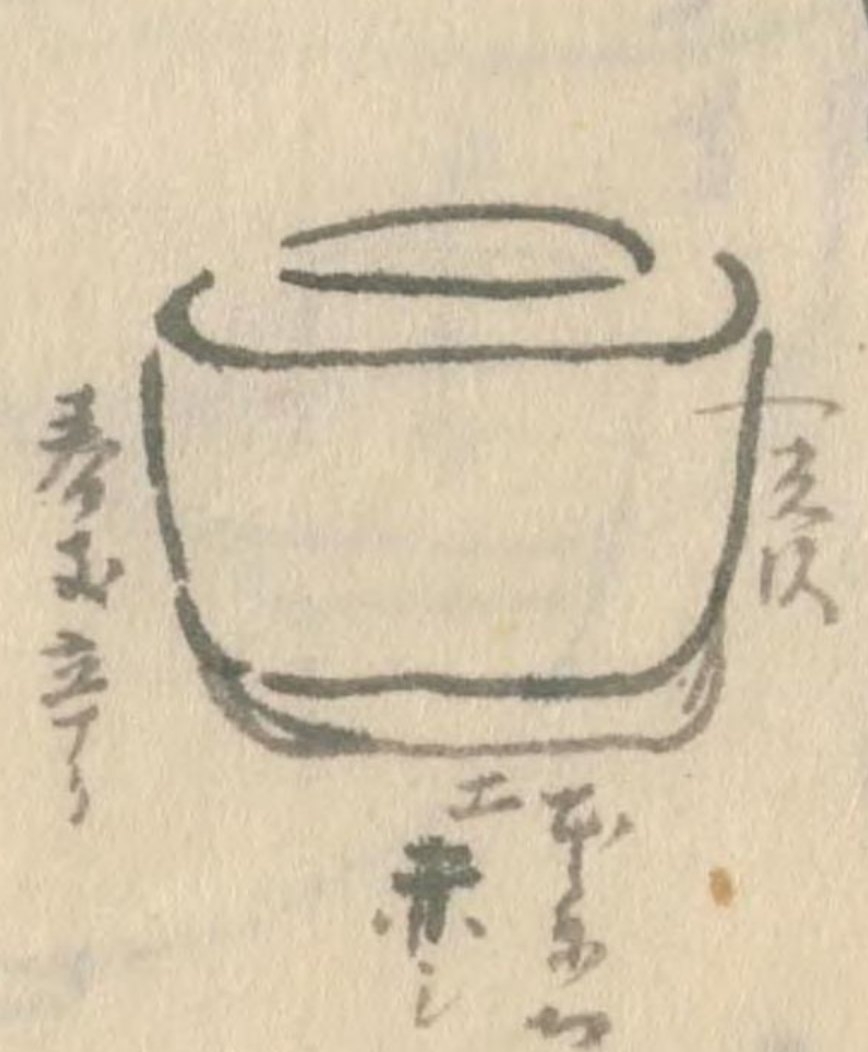

ヲリベ
柿ノ上黒
土灰アリ
土赤ク

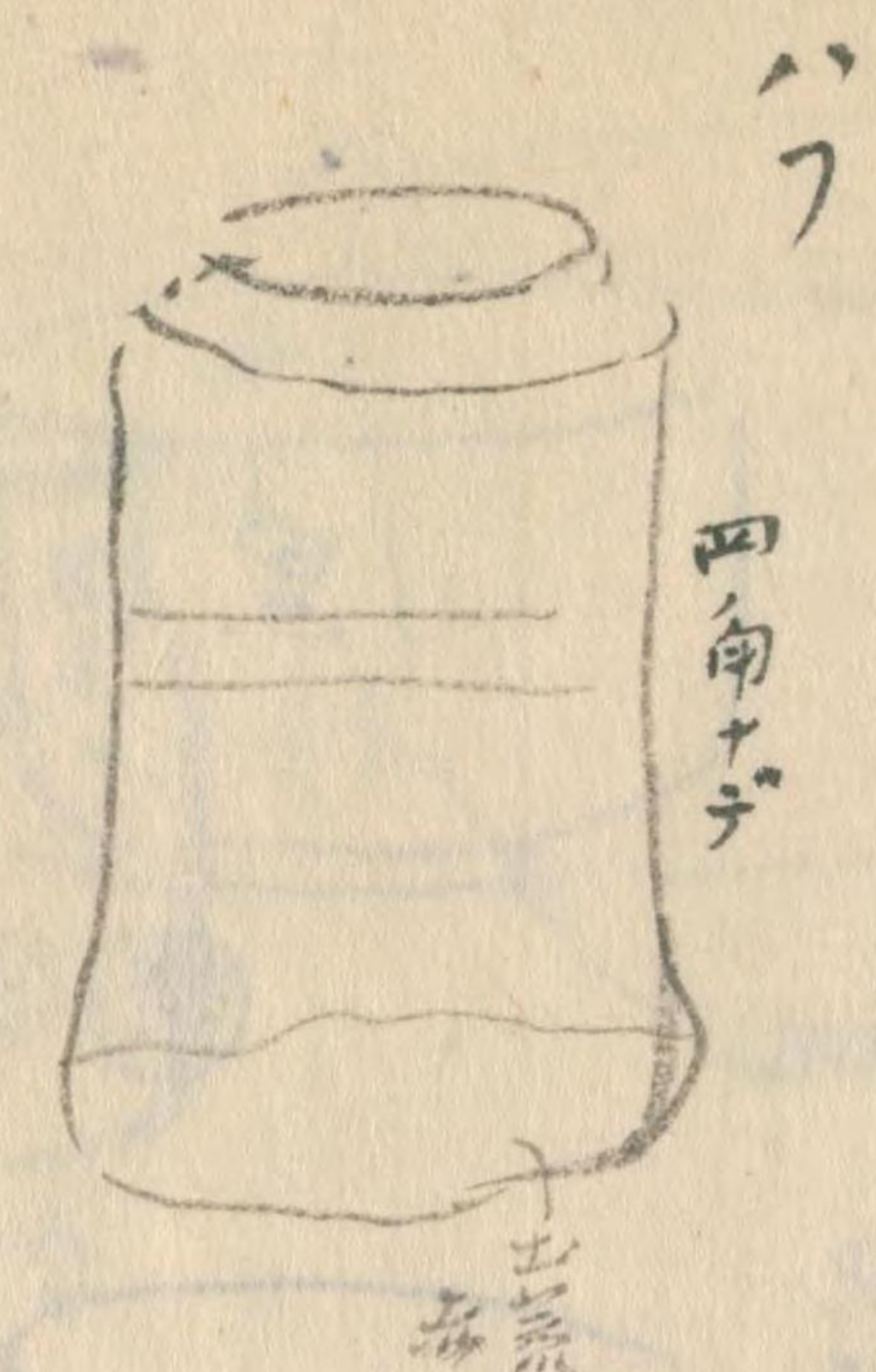

唐出来
黄
中セ
杉糸切

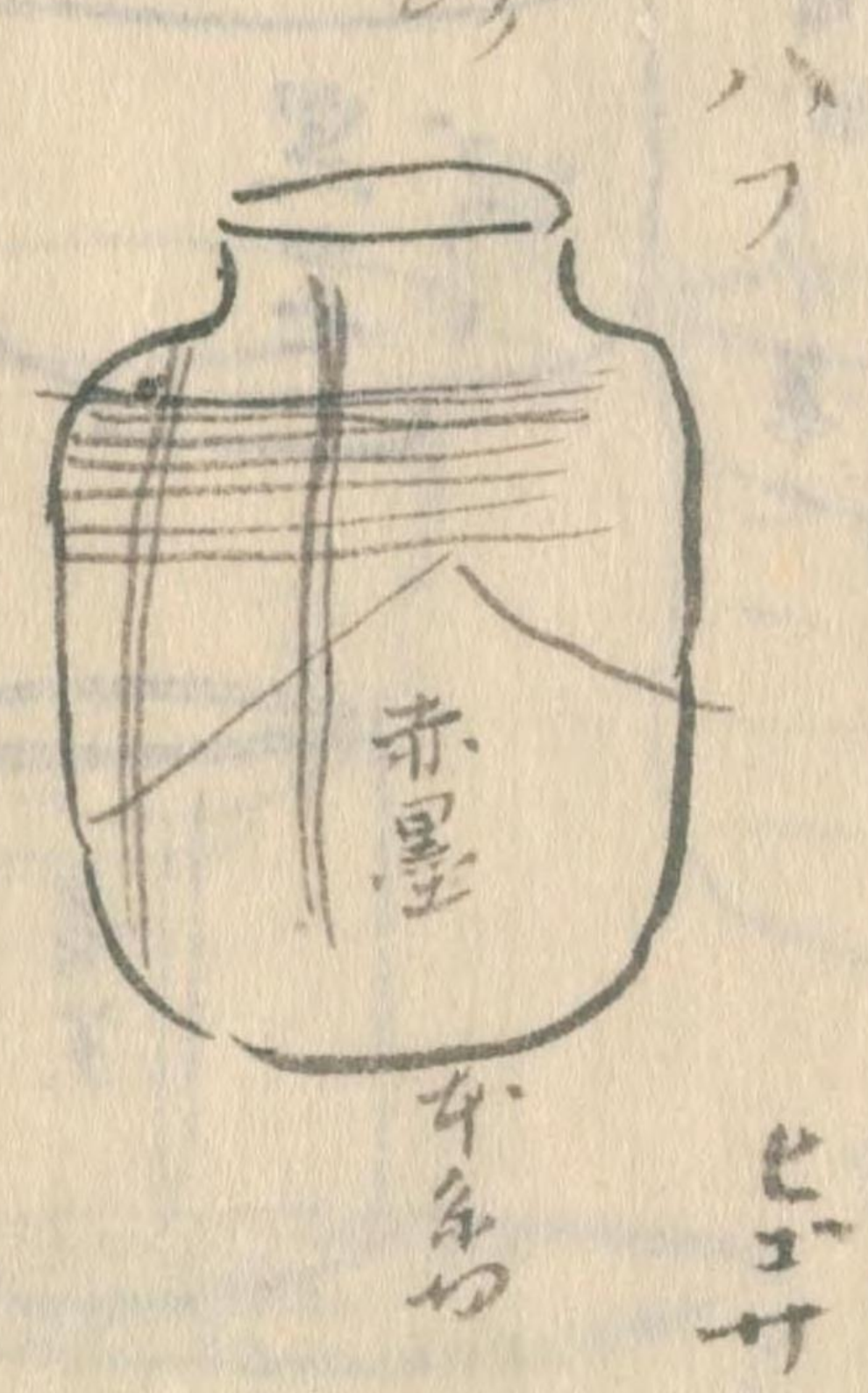

十月
錦わ
黒釉
薄作
糸切ナし

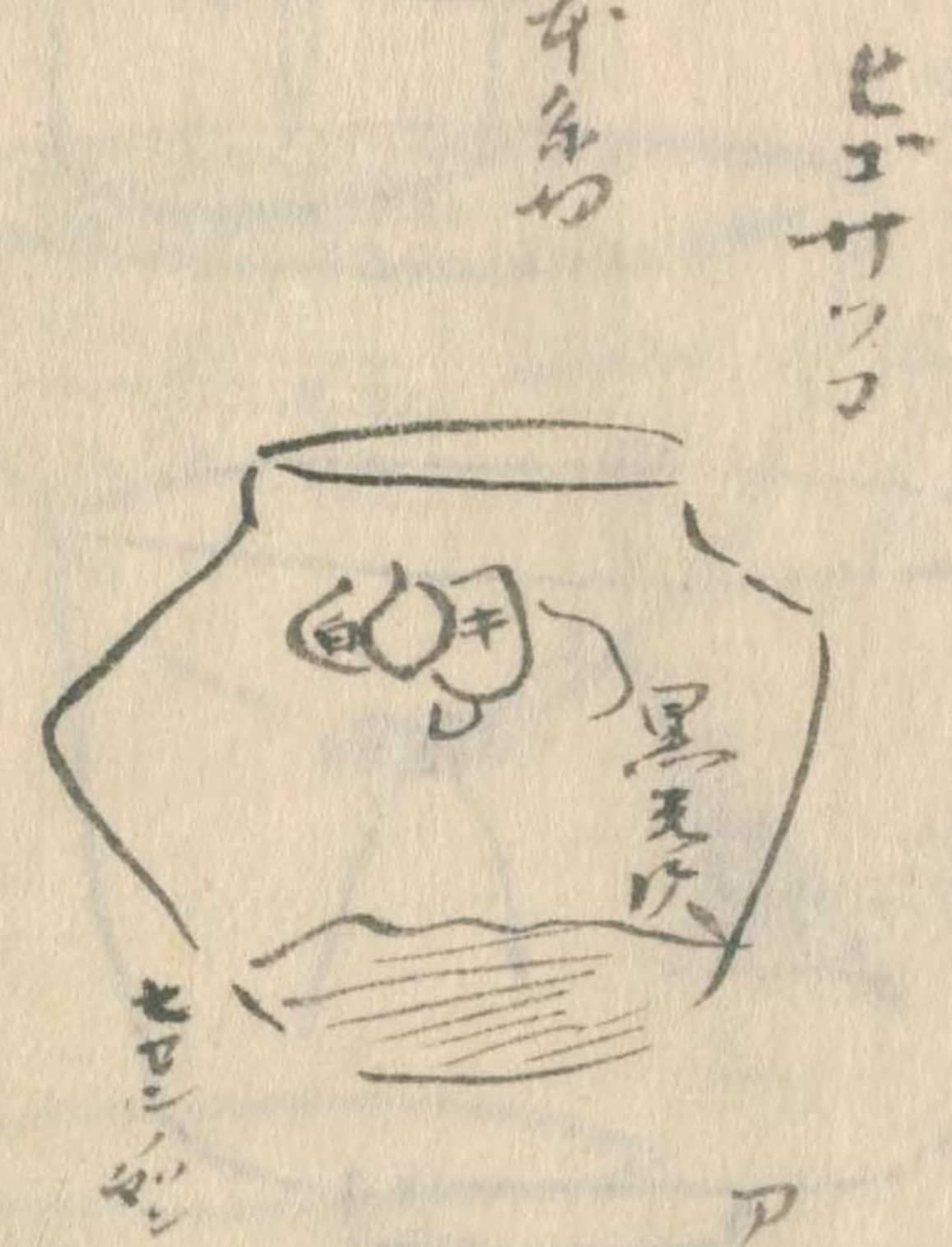

朝鮮

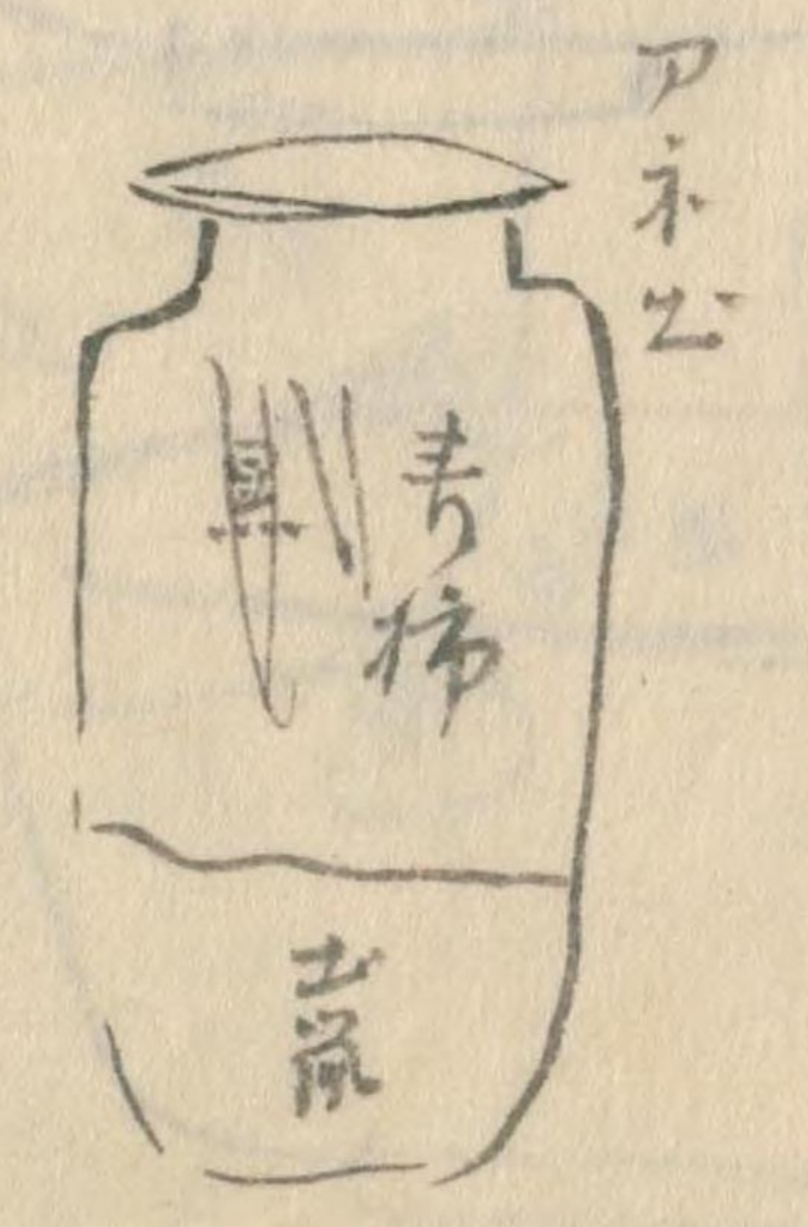

丹波
黒
土灰アリ
土灰
糸切ナし


セト
土灰
黄土立アリ
土赤
糸切


ハケ
四角ナデ
土黄り
無し

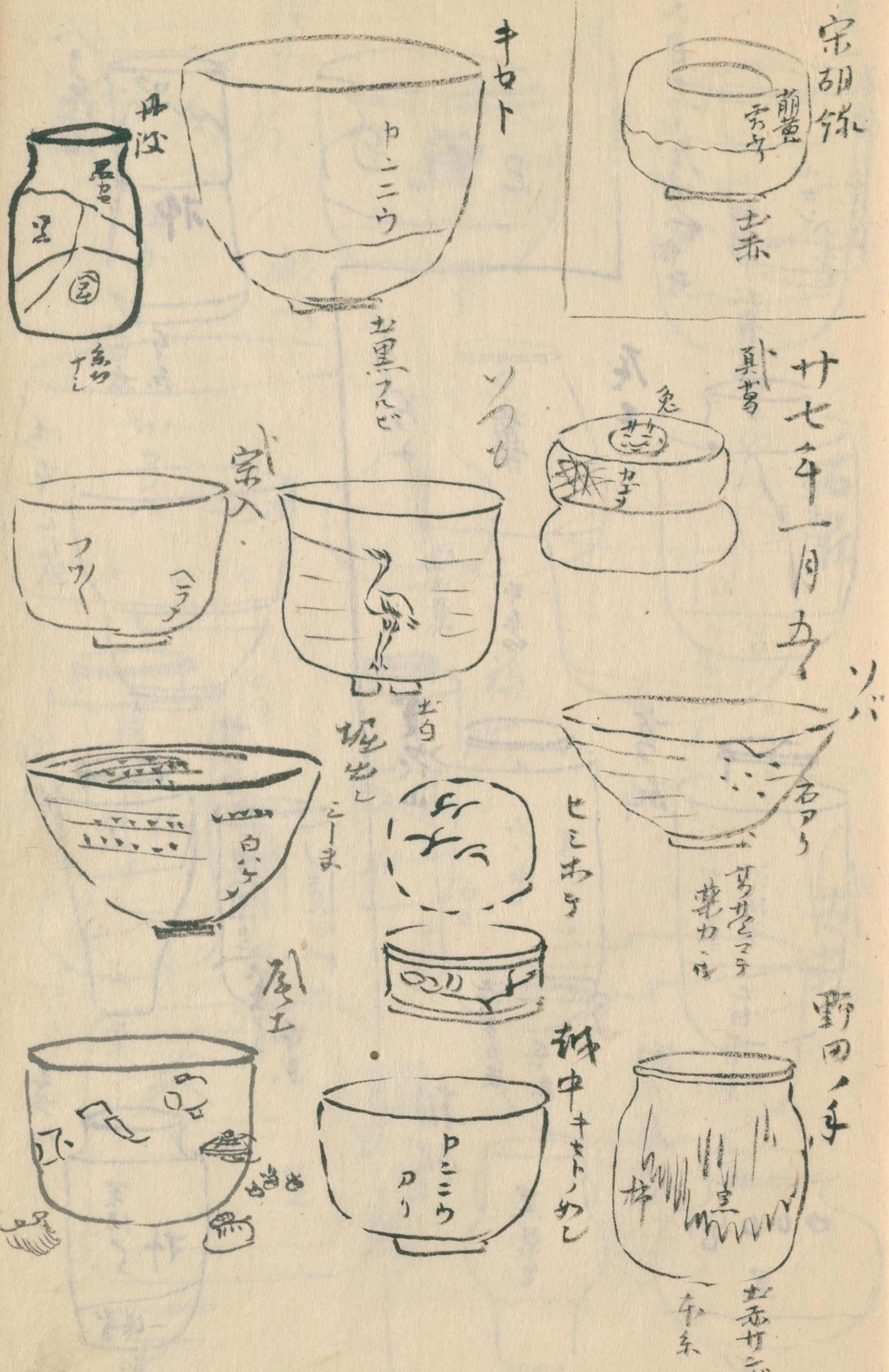

ハケ
赤墨
糸切

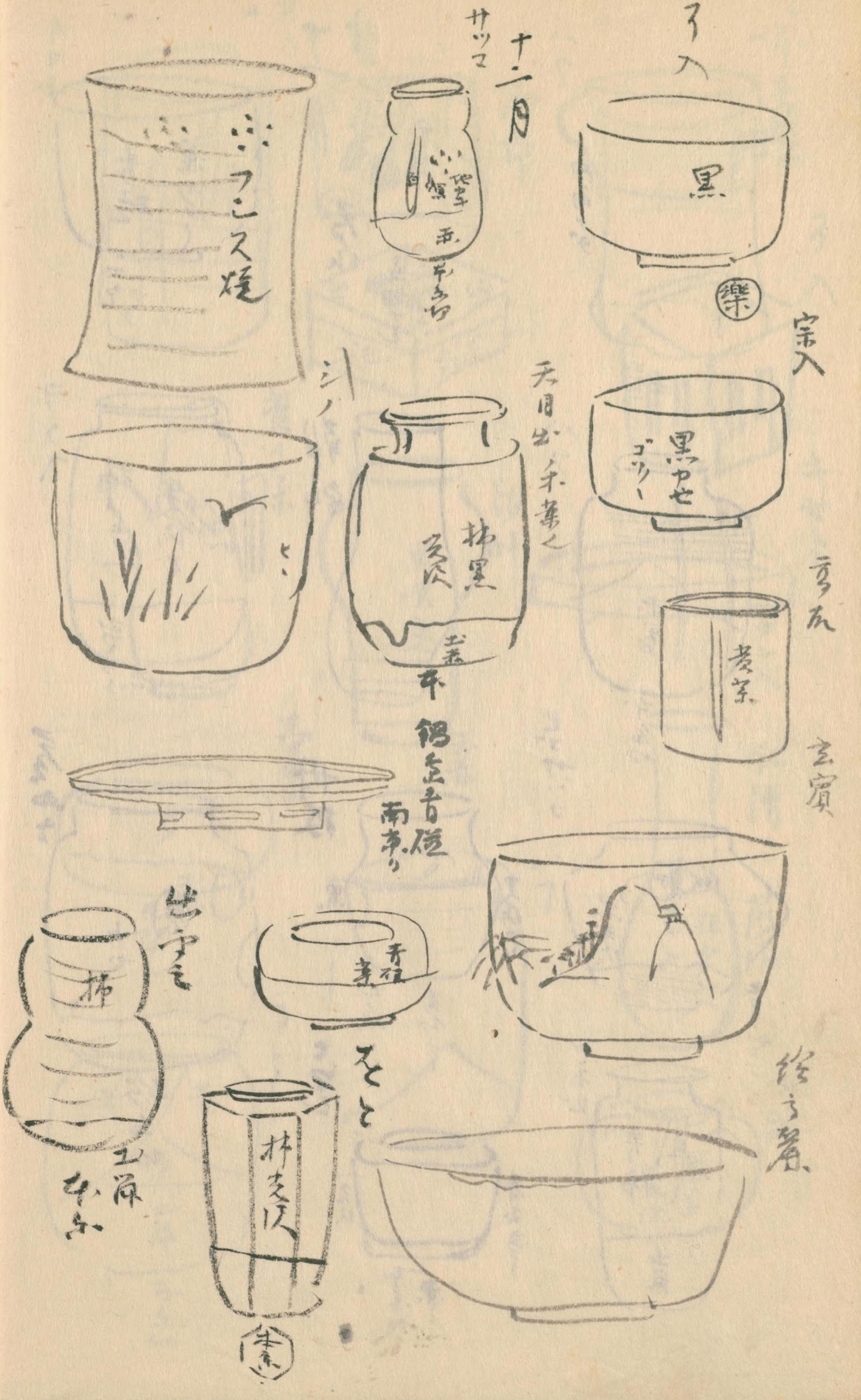

ヒゴサツマ
白
キ
黒灰
セセン/ガン


アネ出
黒
青柿
土灰

841
124

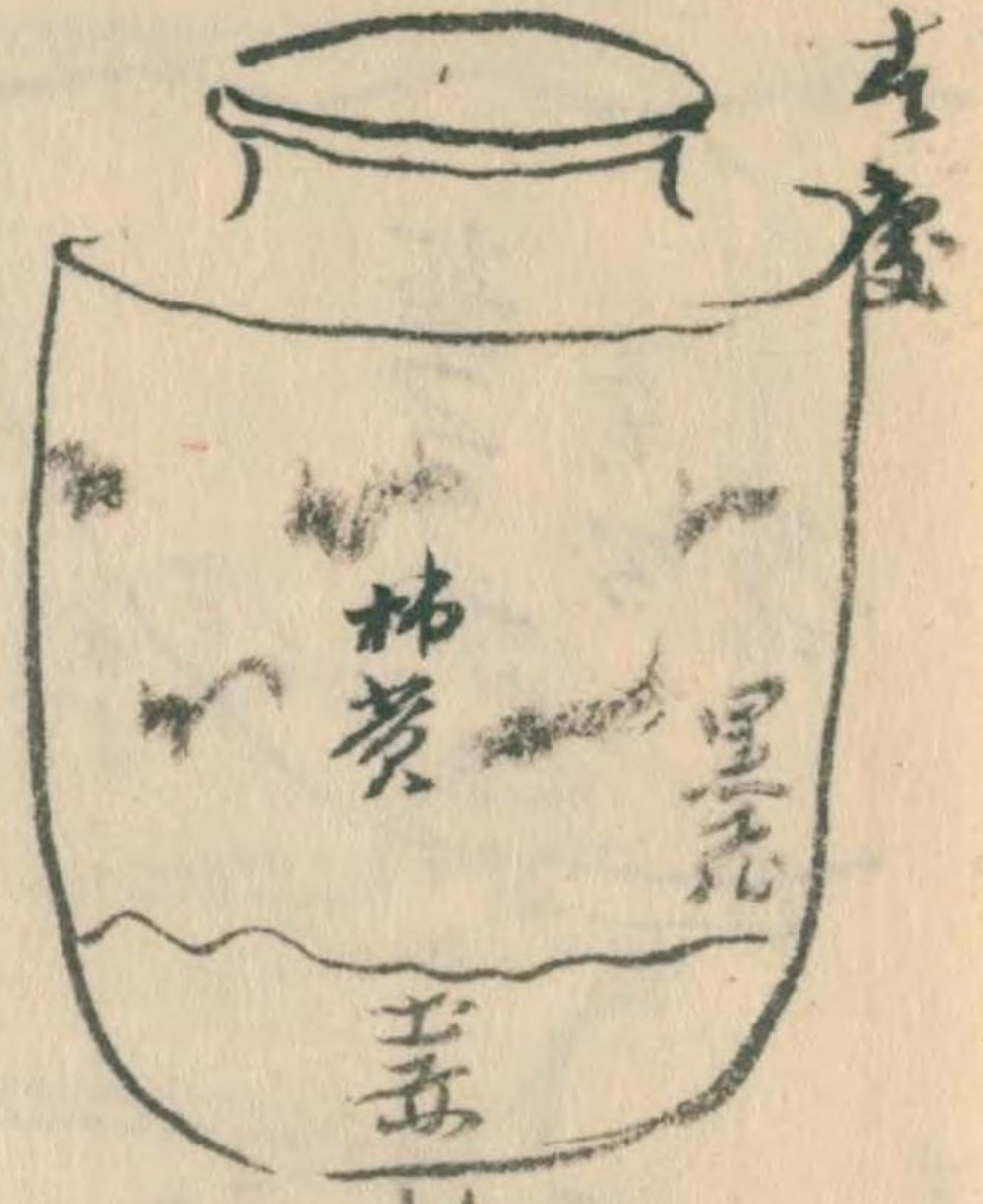
廿七年一月五日


丹波
キセト
ヤニニウ
土黒ワレビ
宗胡銘
前田
秀哉
土赤
ソつも
其葛
兎
宗入
フワく
ヘラメ
土白
堀出し
こーま
白へ
ソバ
石アリ
ヒミねう
葛サニマテ
藥カい
唐土
野田ノ手
柿
土赤サニグリ
本糸
井中キセトノめし
ヤニニウ
カリ

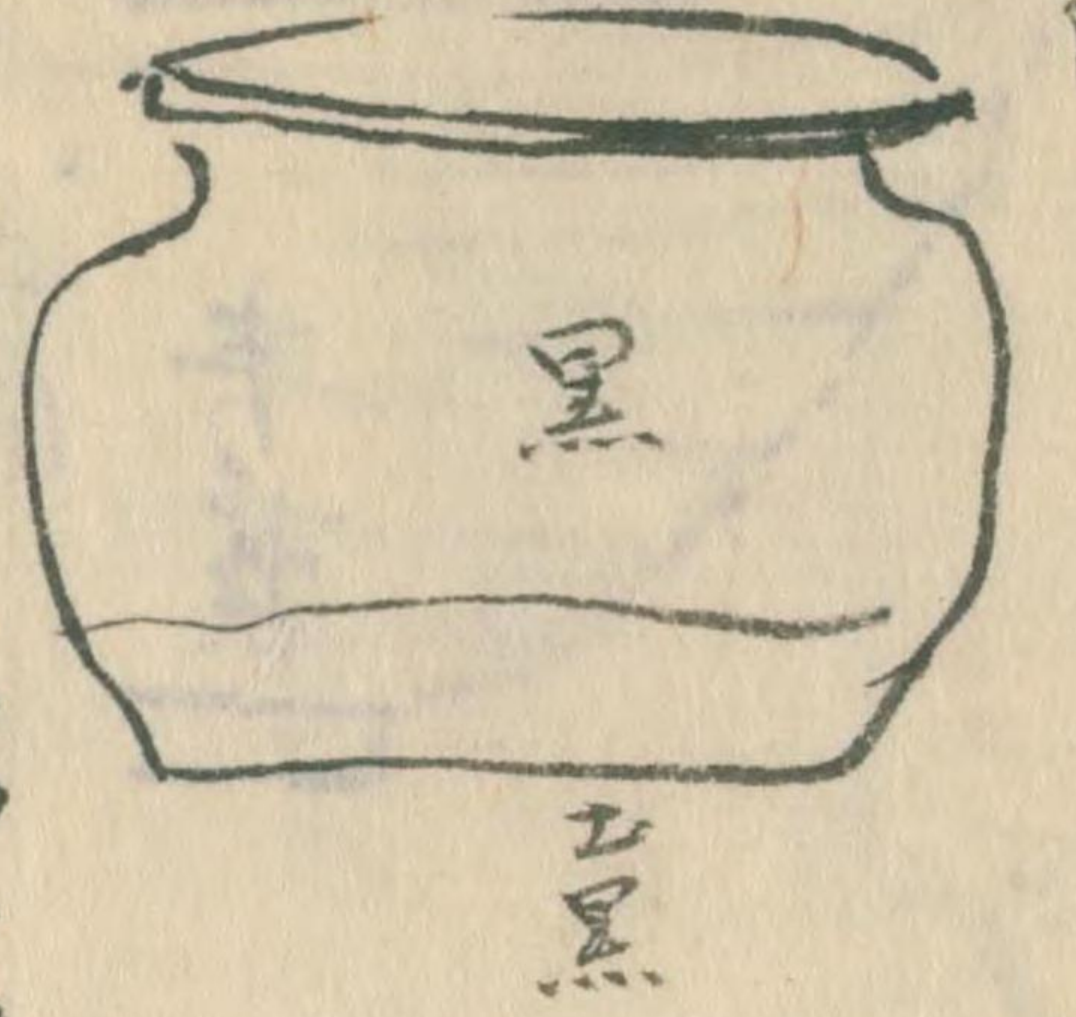

了入
サツマ
十二月
フニス焼
黒
樂
宗入
黒ヤセ
ゴリく
天目出来葉之
シノ
柿黒
土赤
鍋島青磁
南京り
高麗
青磁
玄賓
柿
土層
なかし
青磁
ふと
柿支尺
樂
絵高麗

ガラス使用

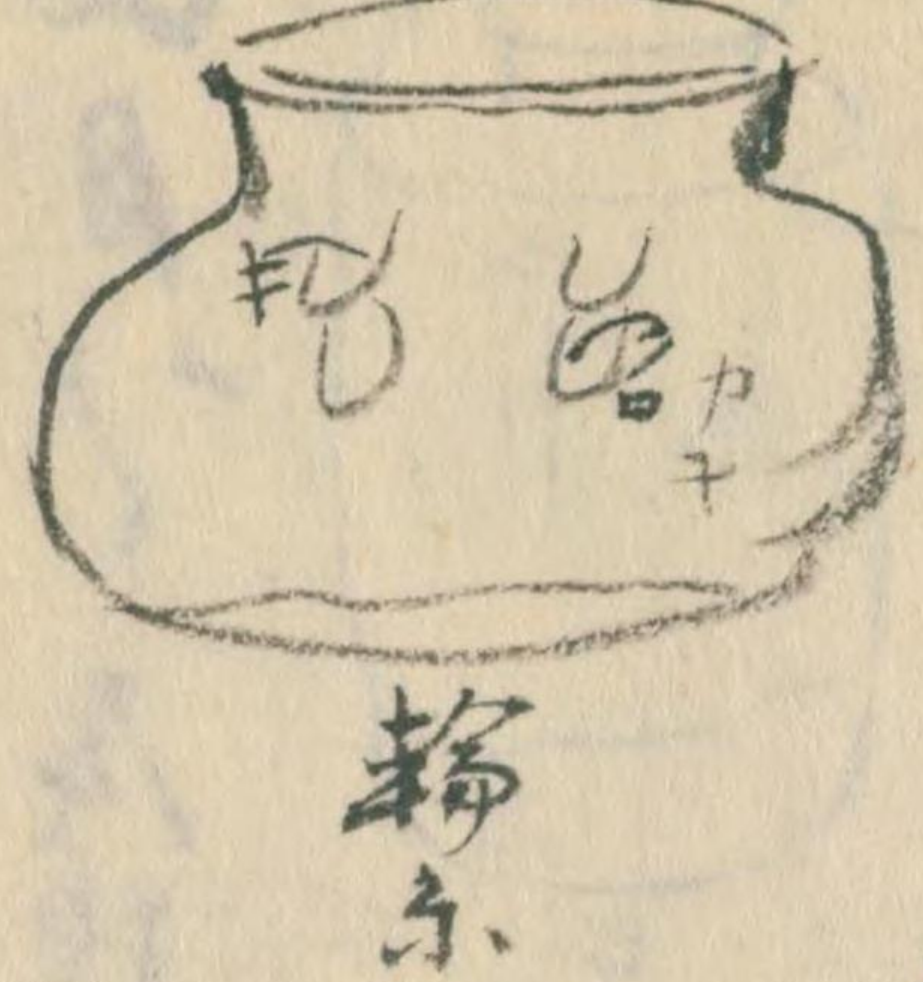
夏山本窯



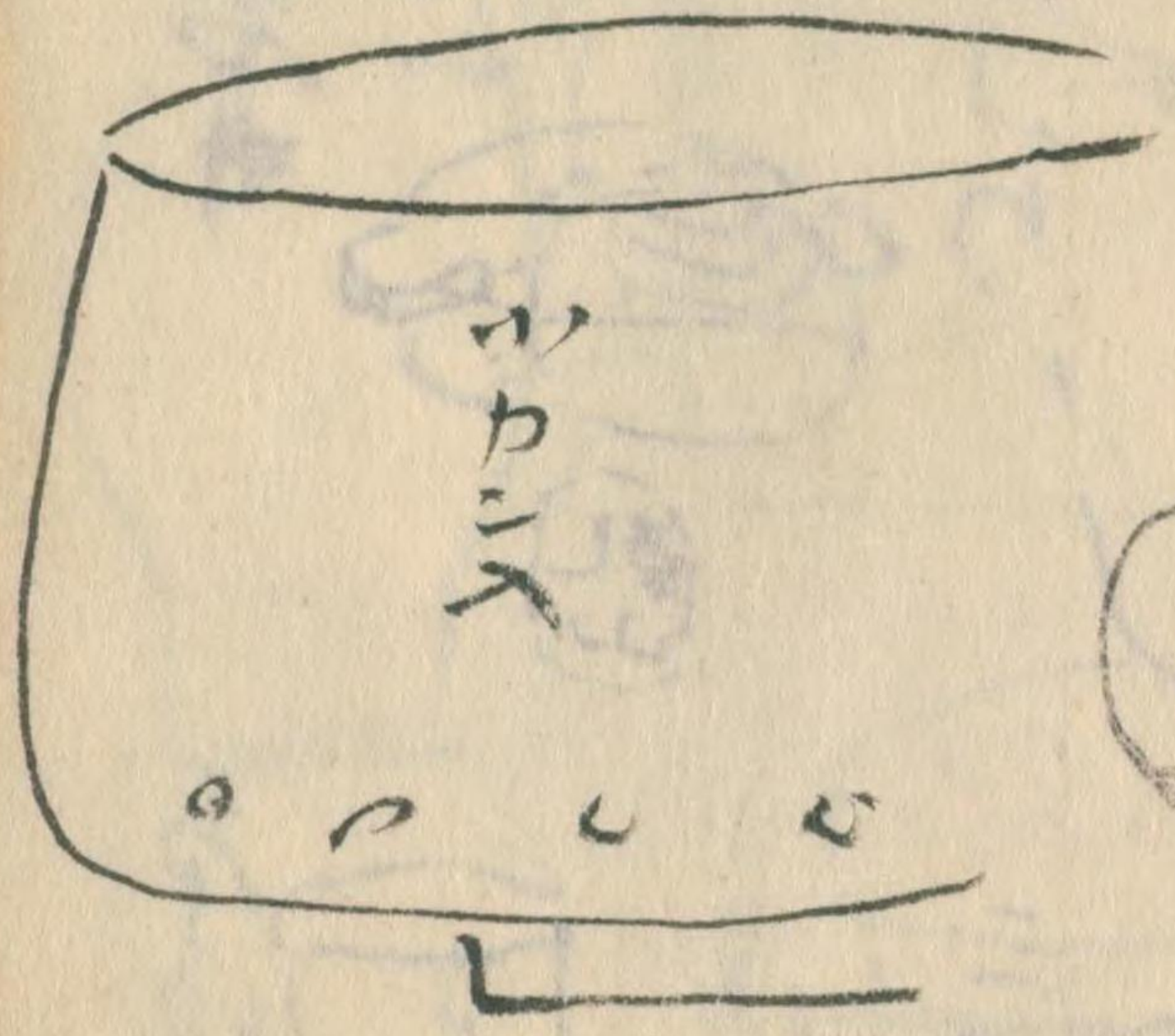
漢作



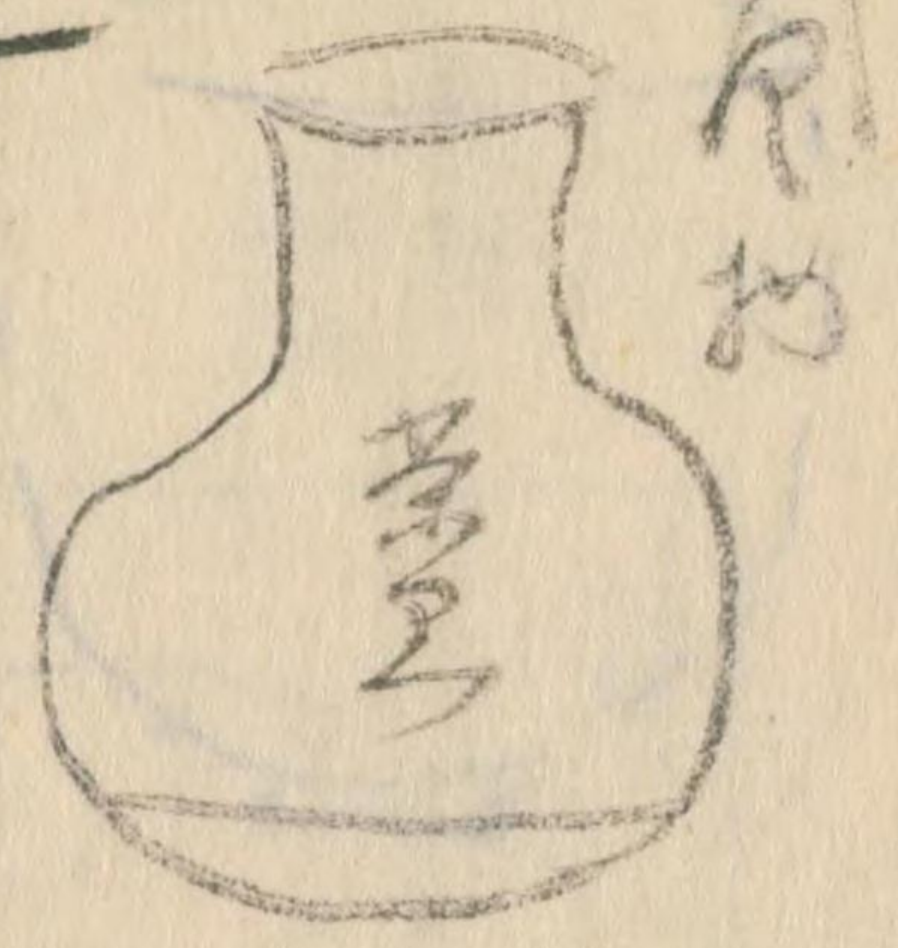
根手アリ



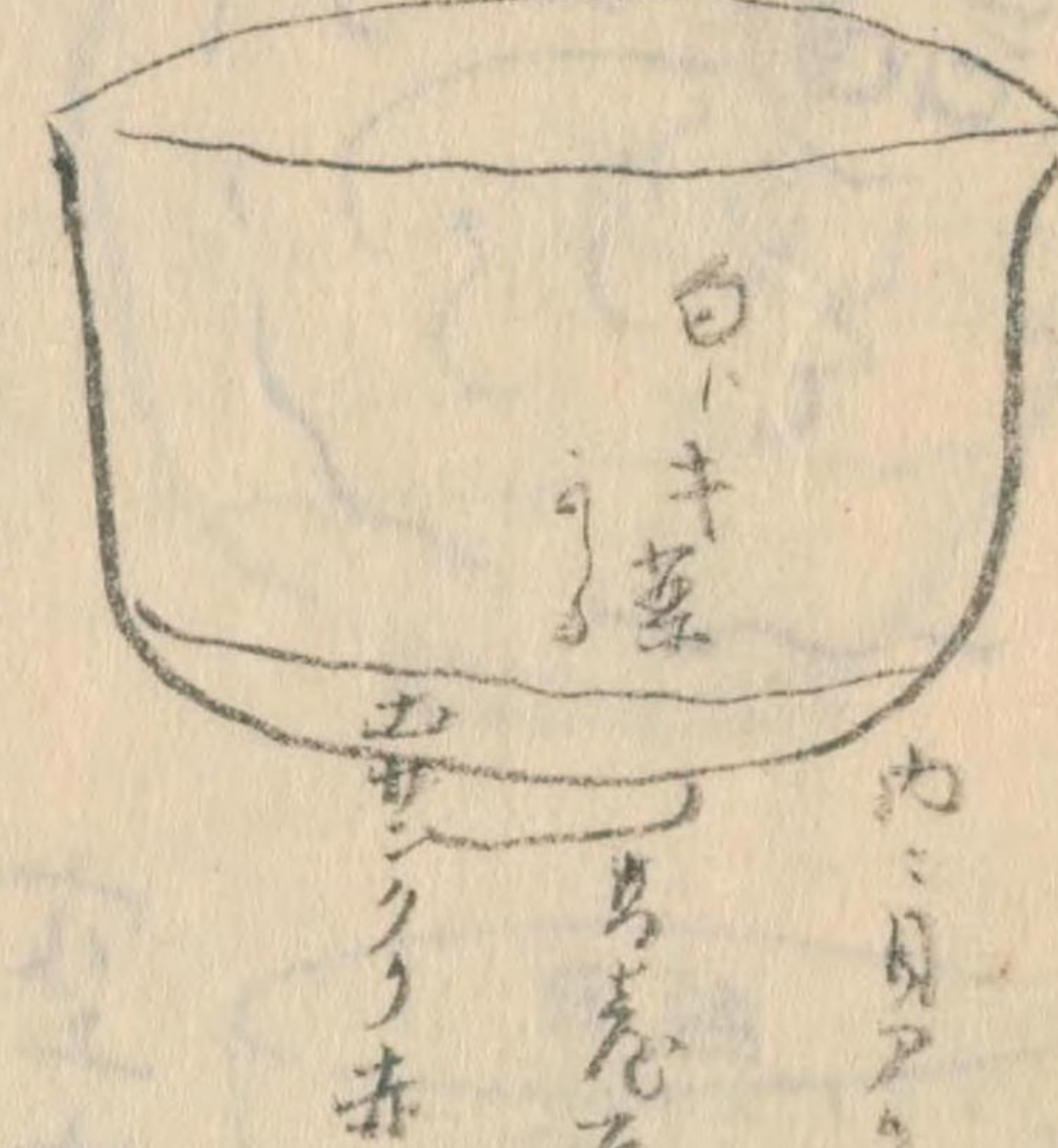
粉吹



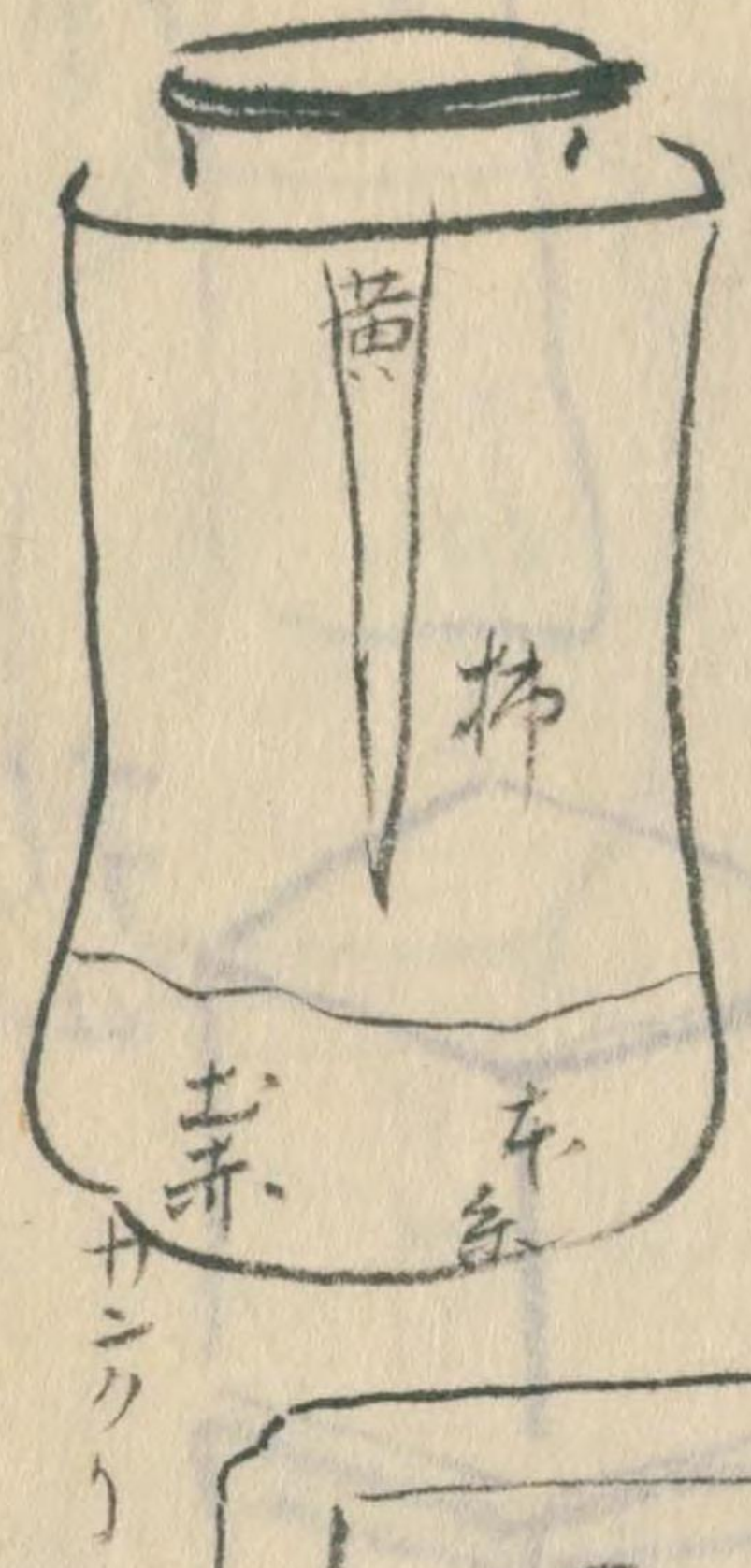
肩衝



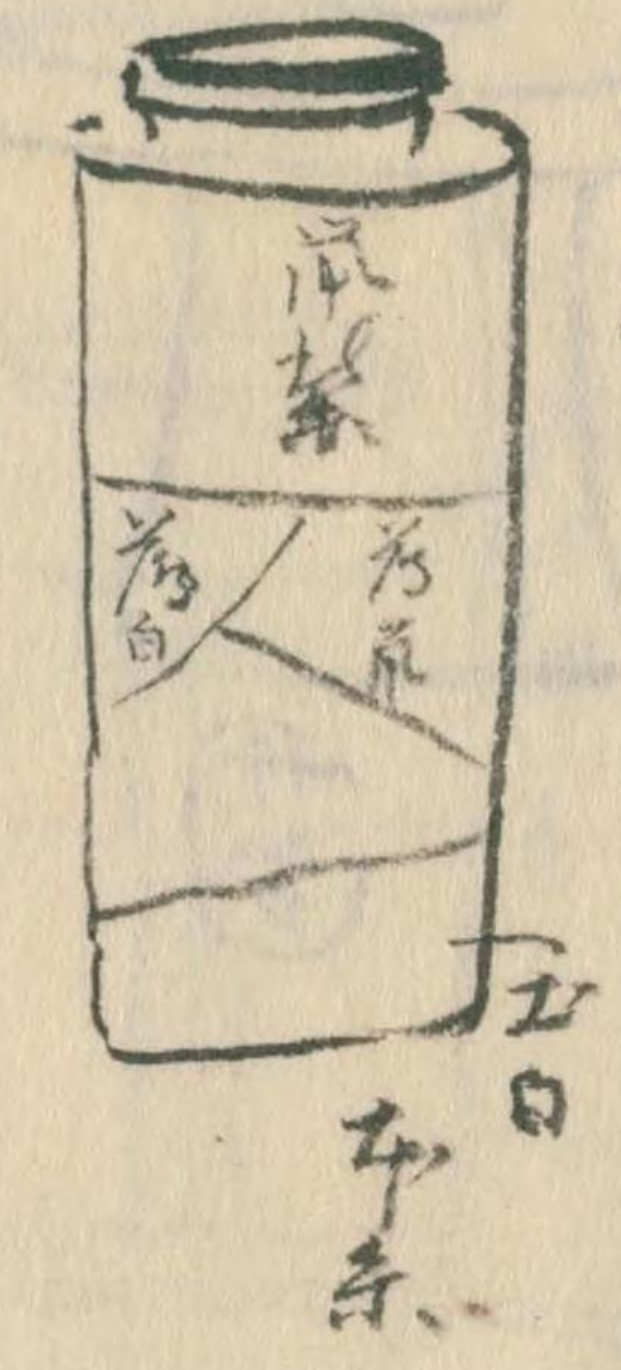
古萩


白ハキ薬
ウス
土ザンクリ赤
高台厚し
内ニ目アリ

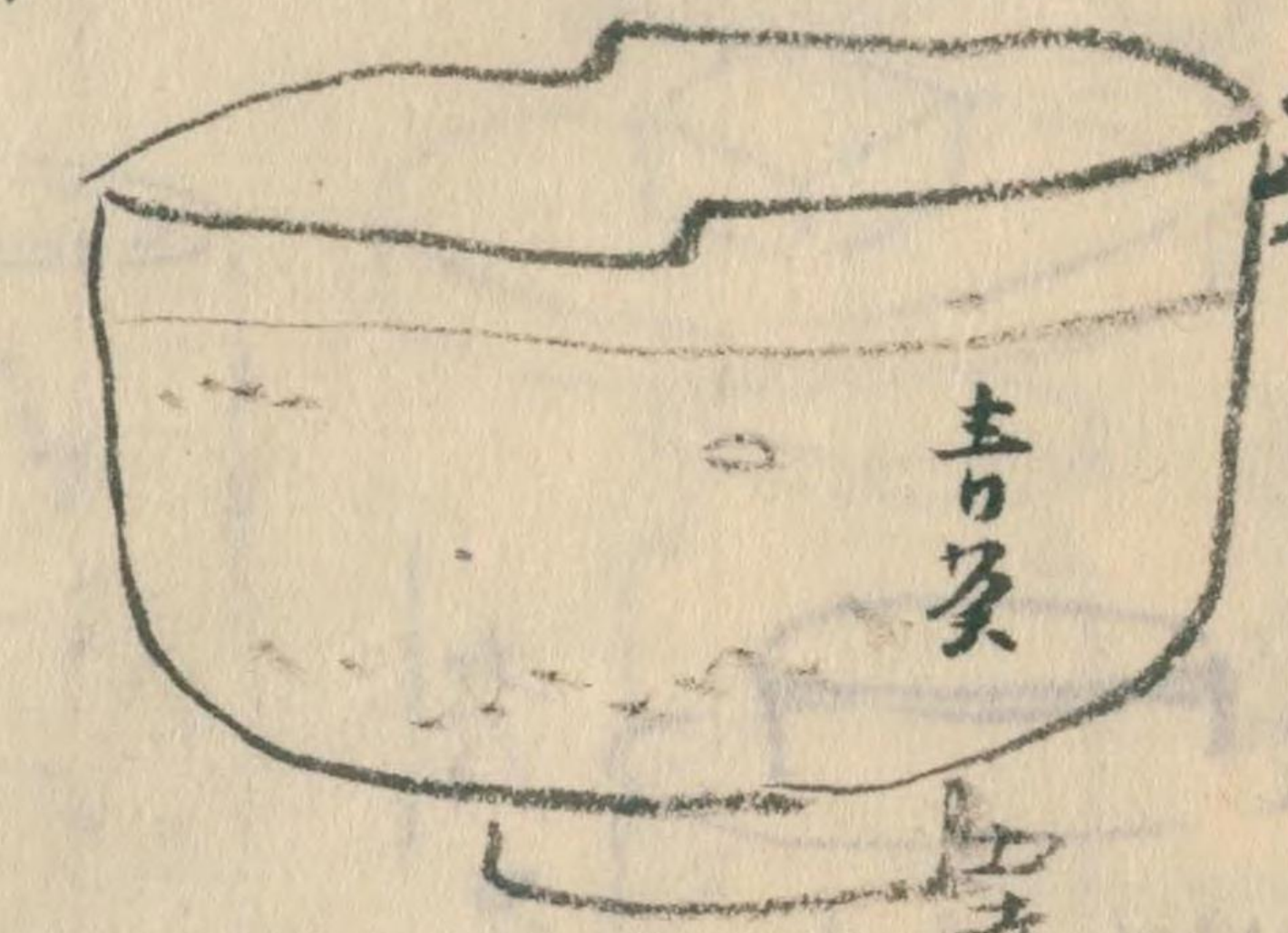
萩

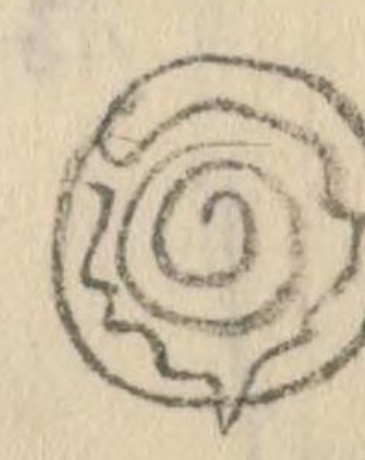


福山

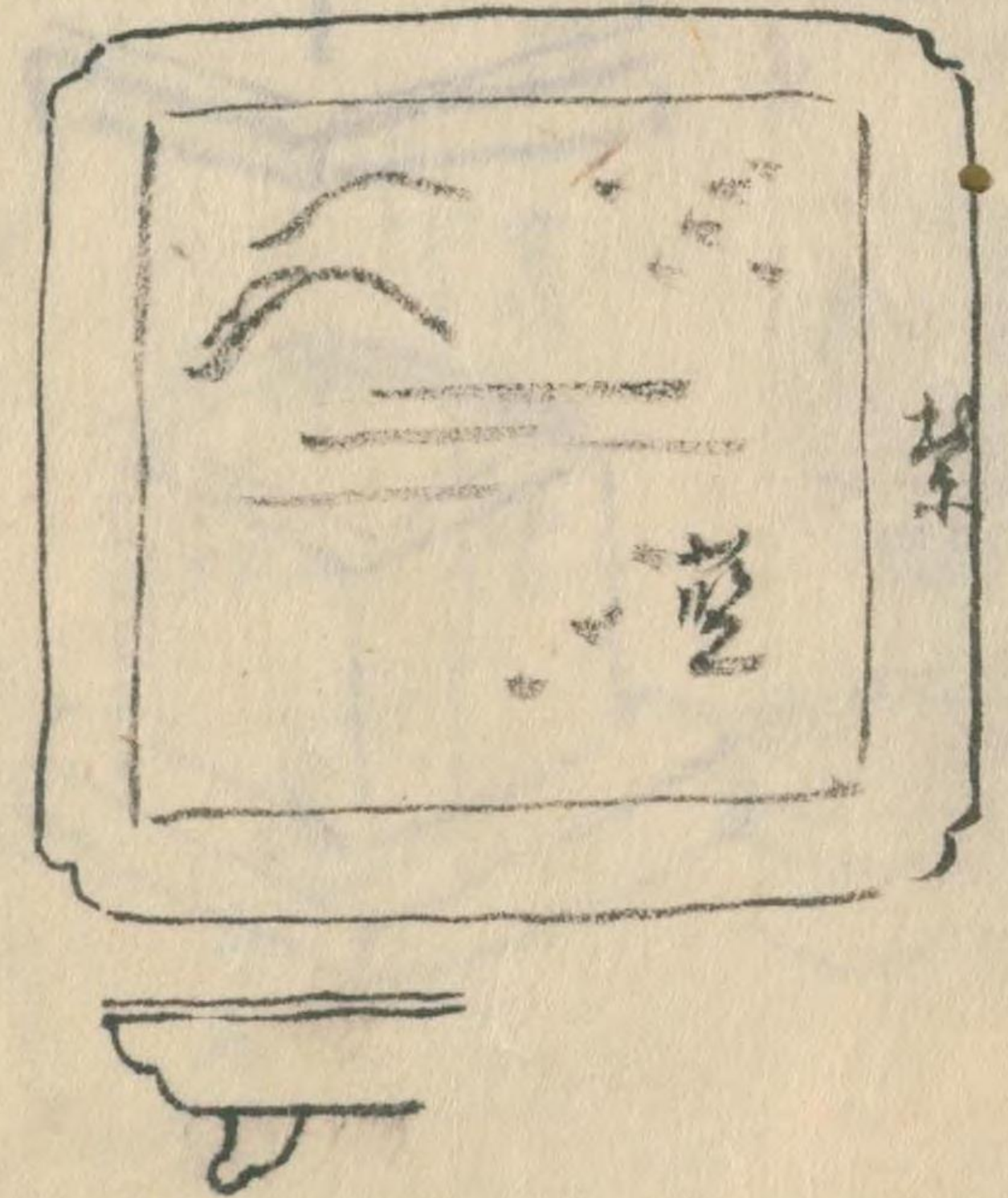


古萩

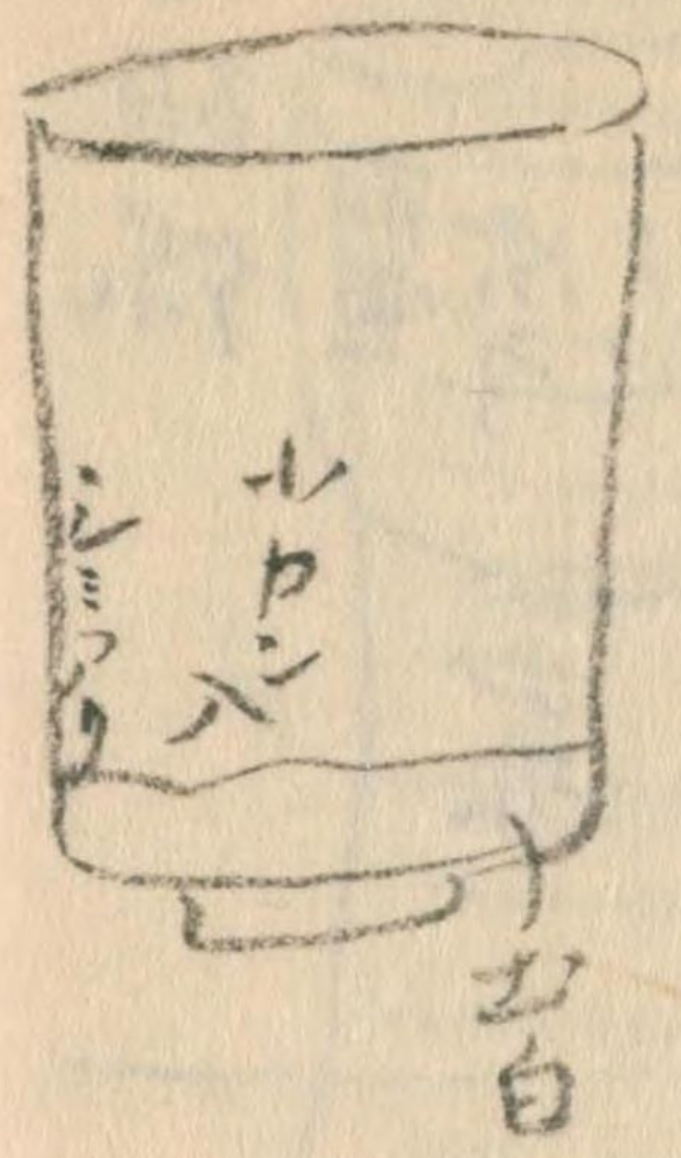




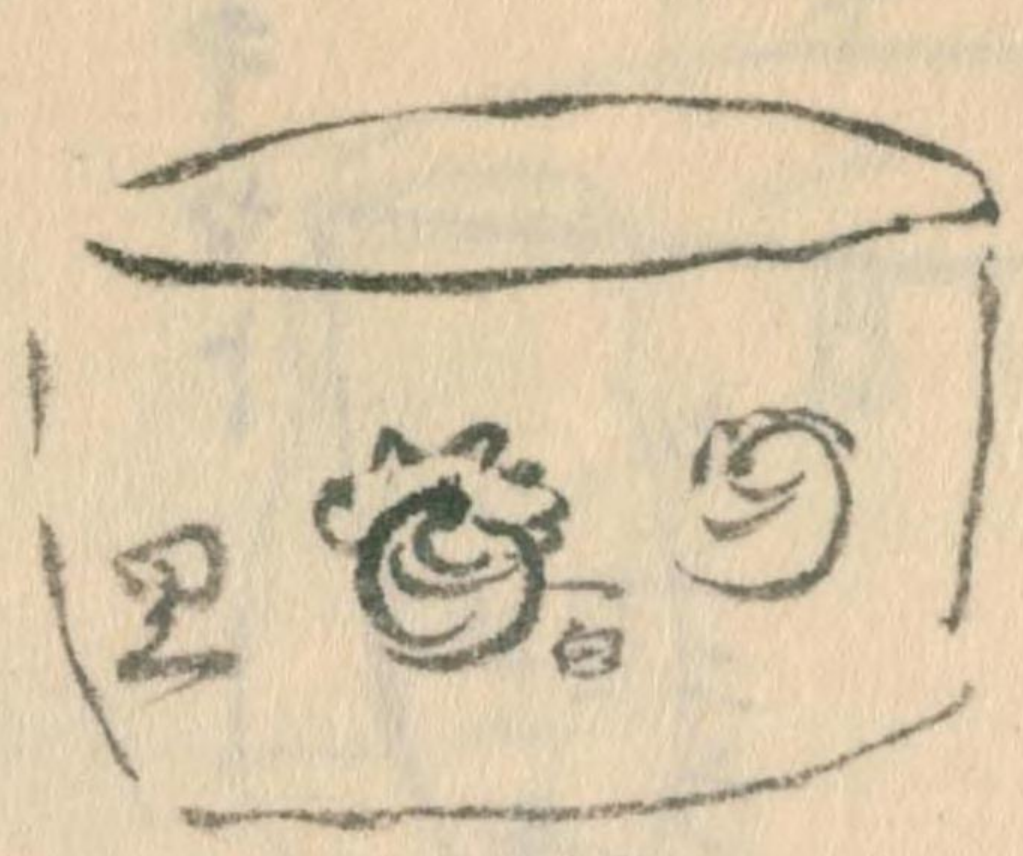
紀州の庭やき



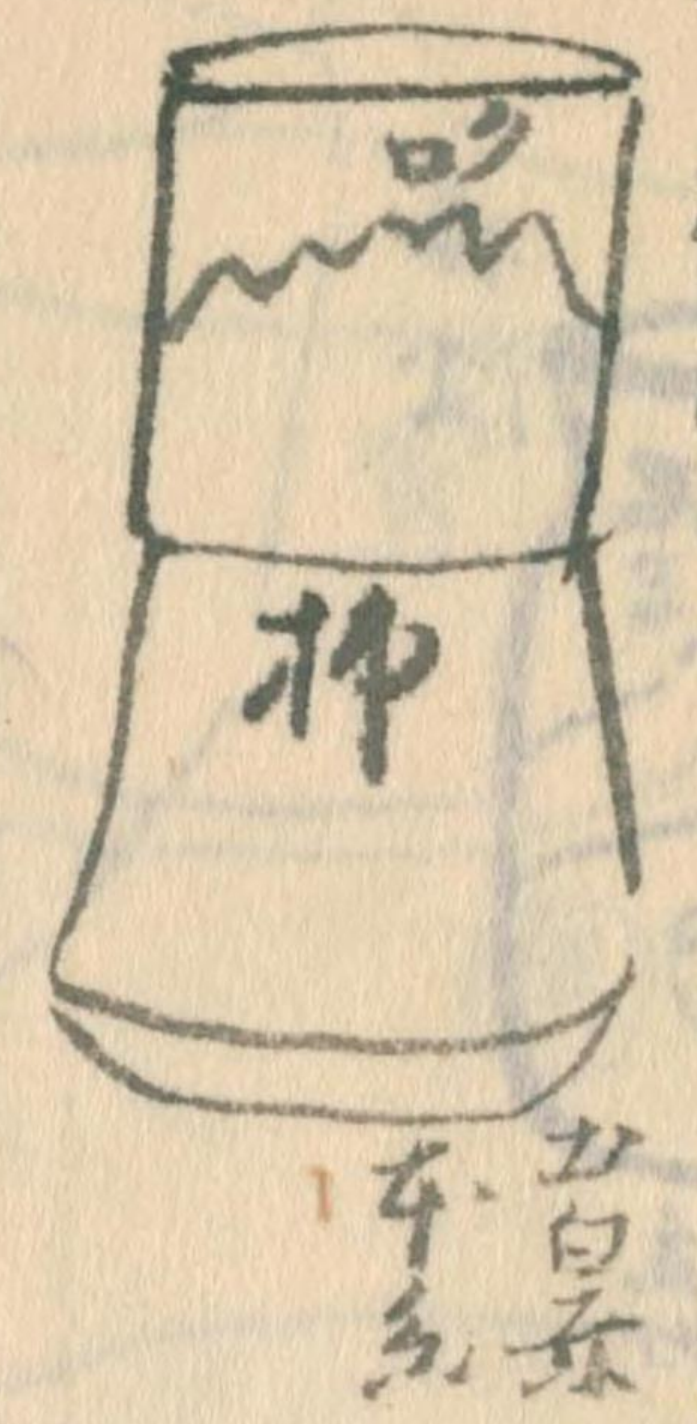
三月十七 唐津白井


ハカン入
シミアリ
土白

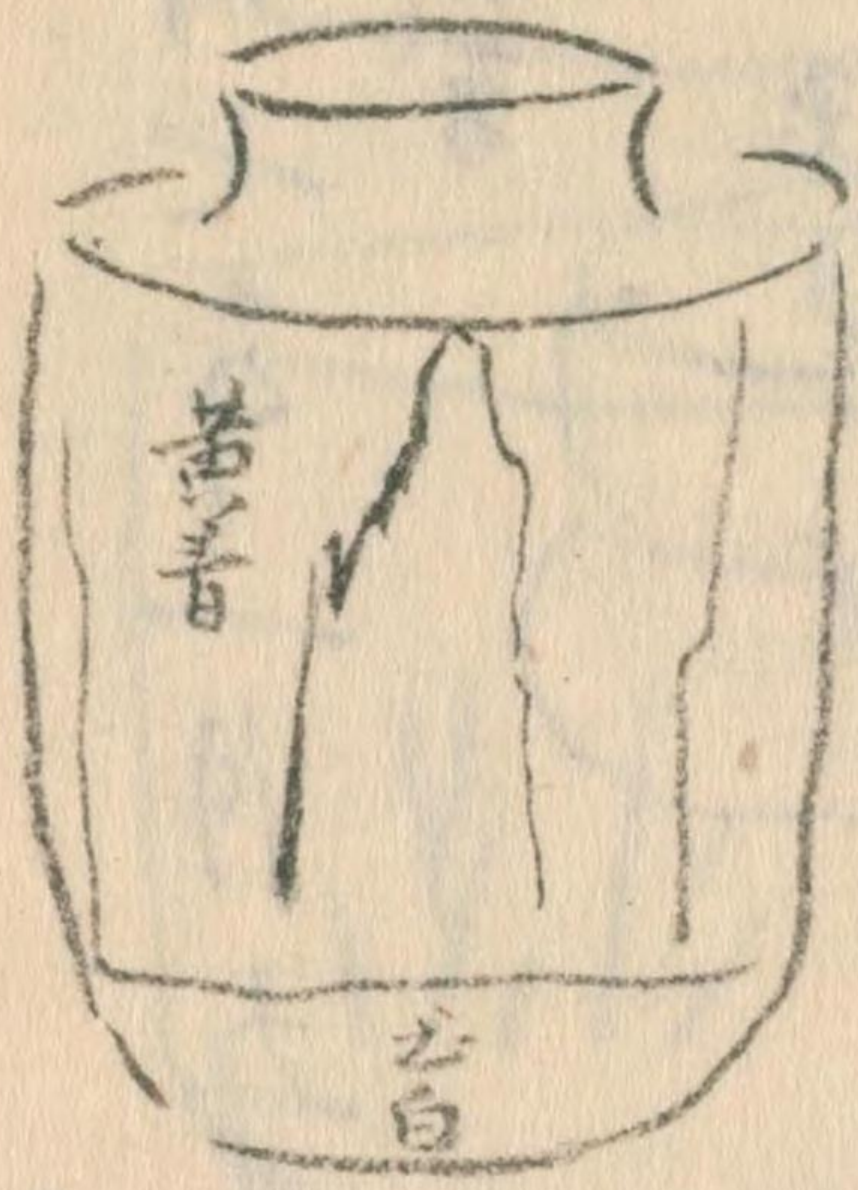
仁清



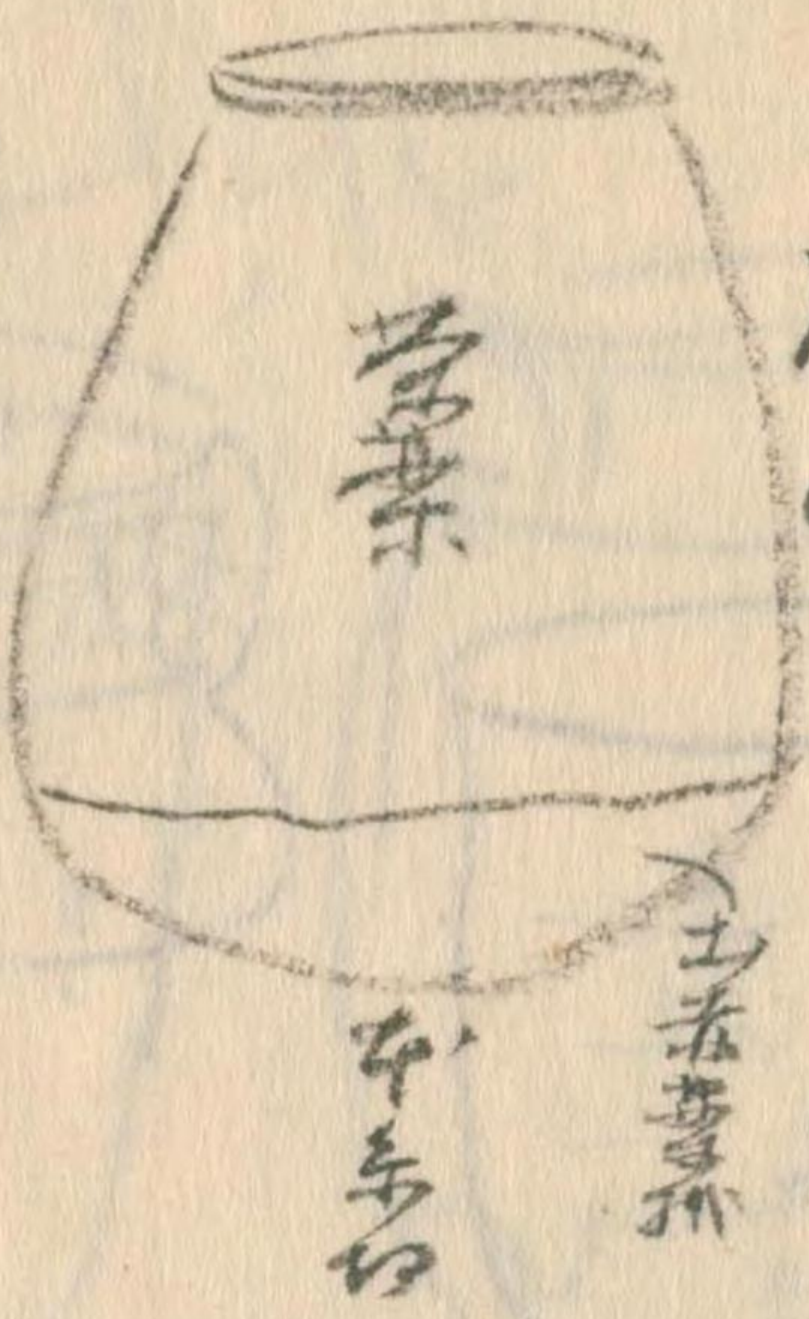
金花山



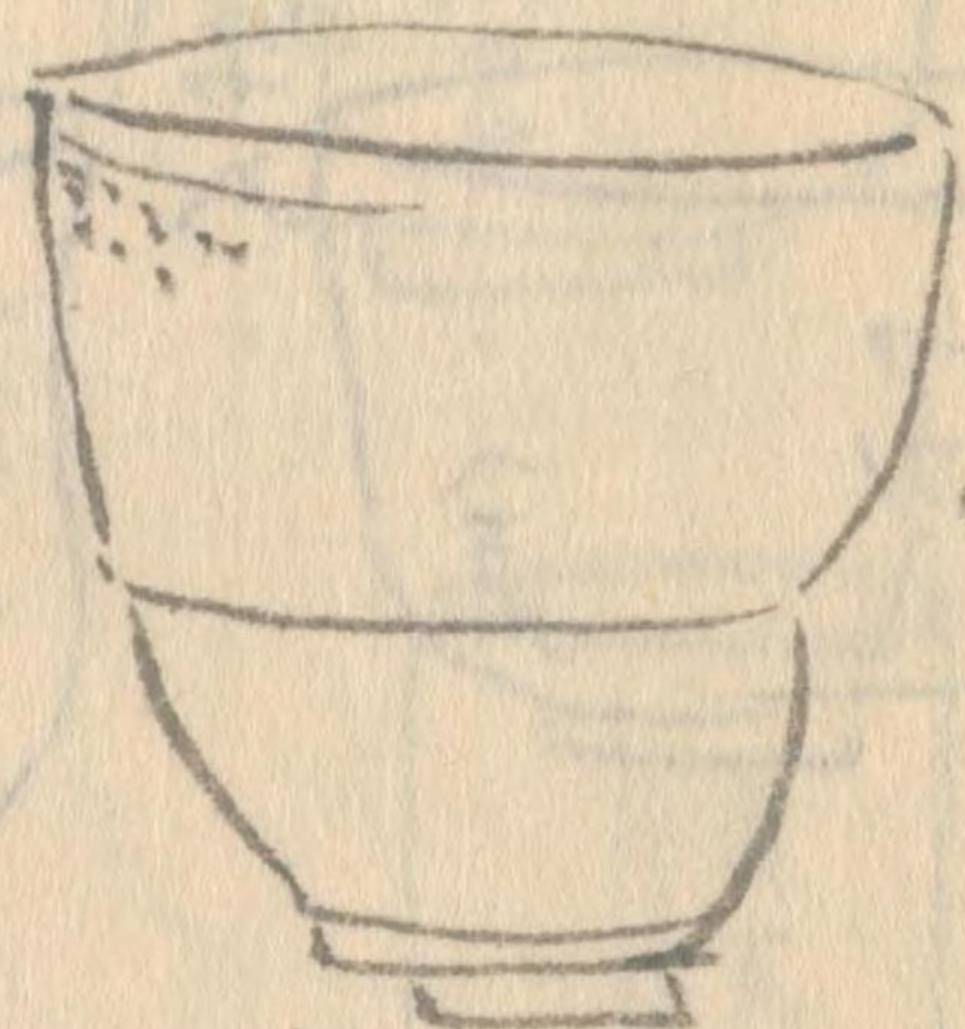
唐土



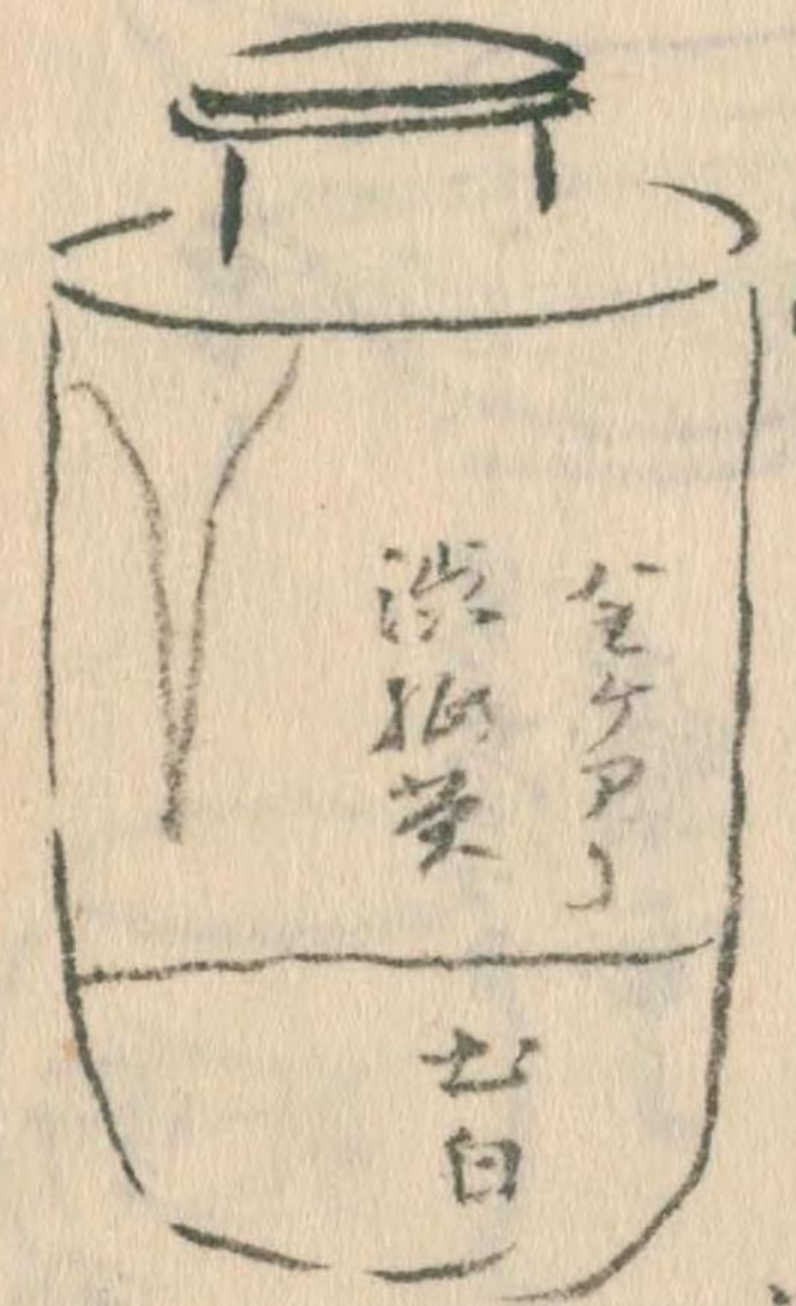
後唐津 茶入



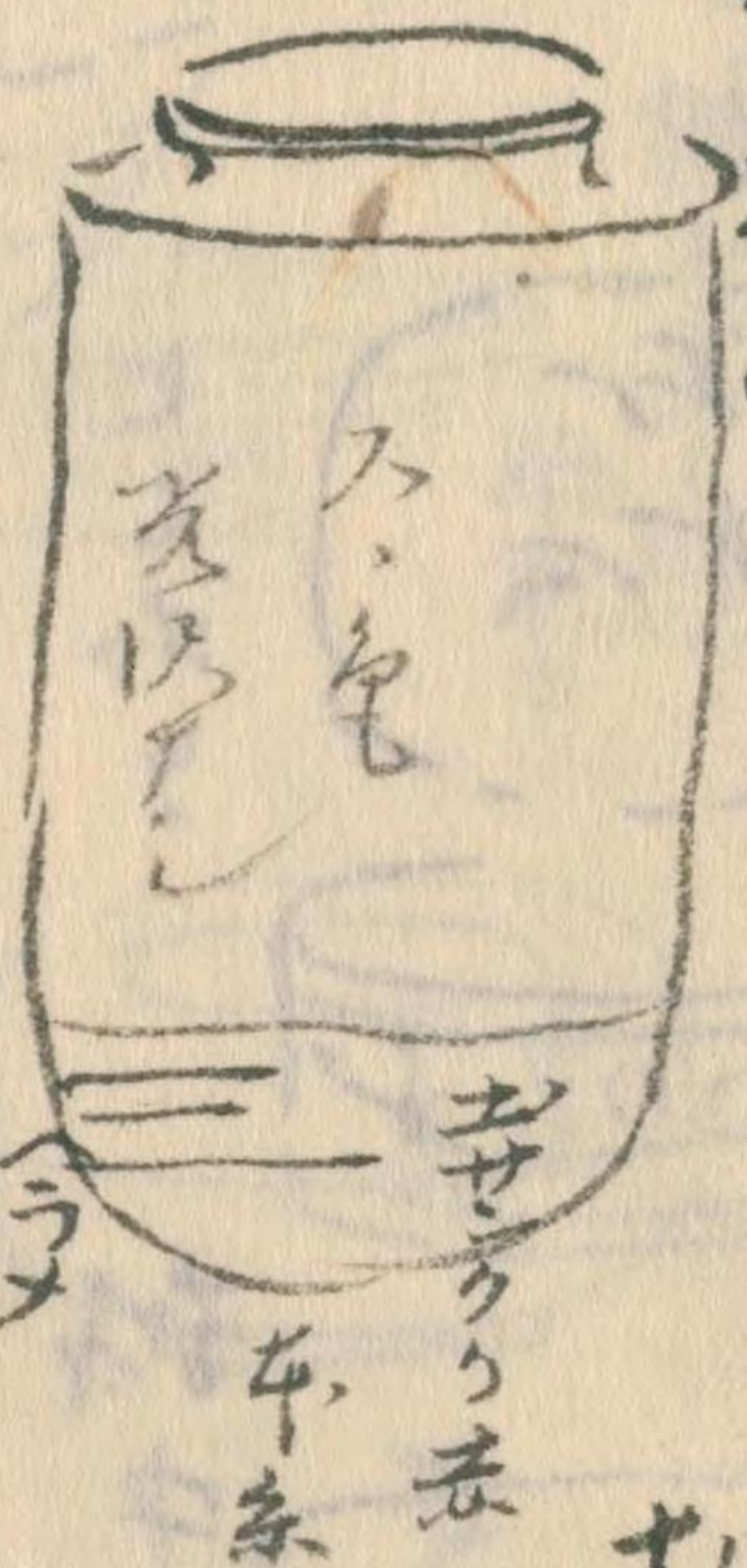
内赤ニ窯



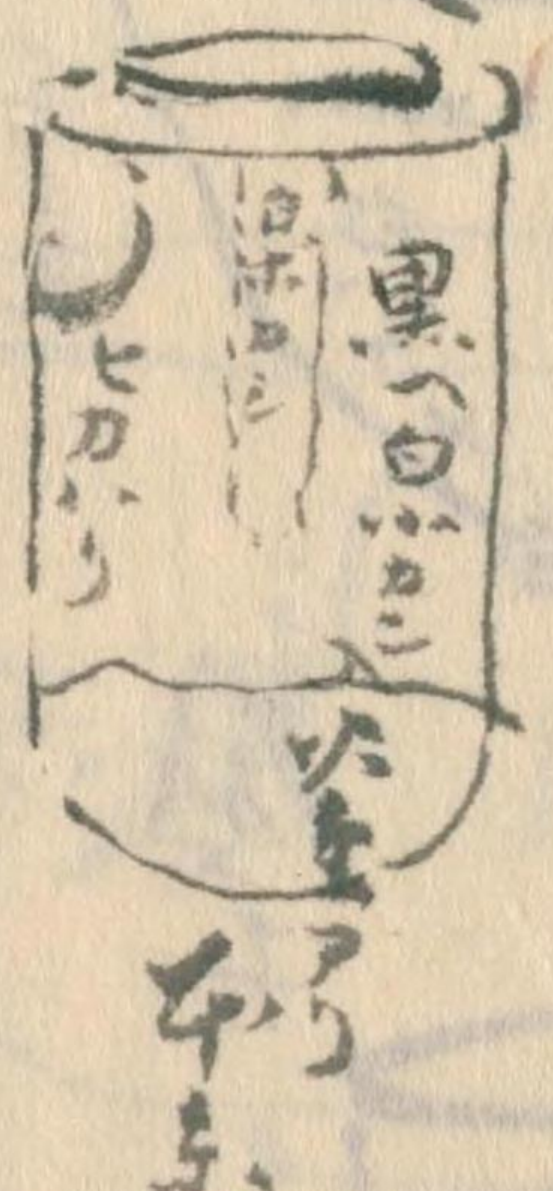
高取



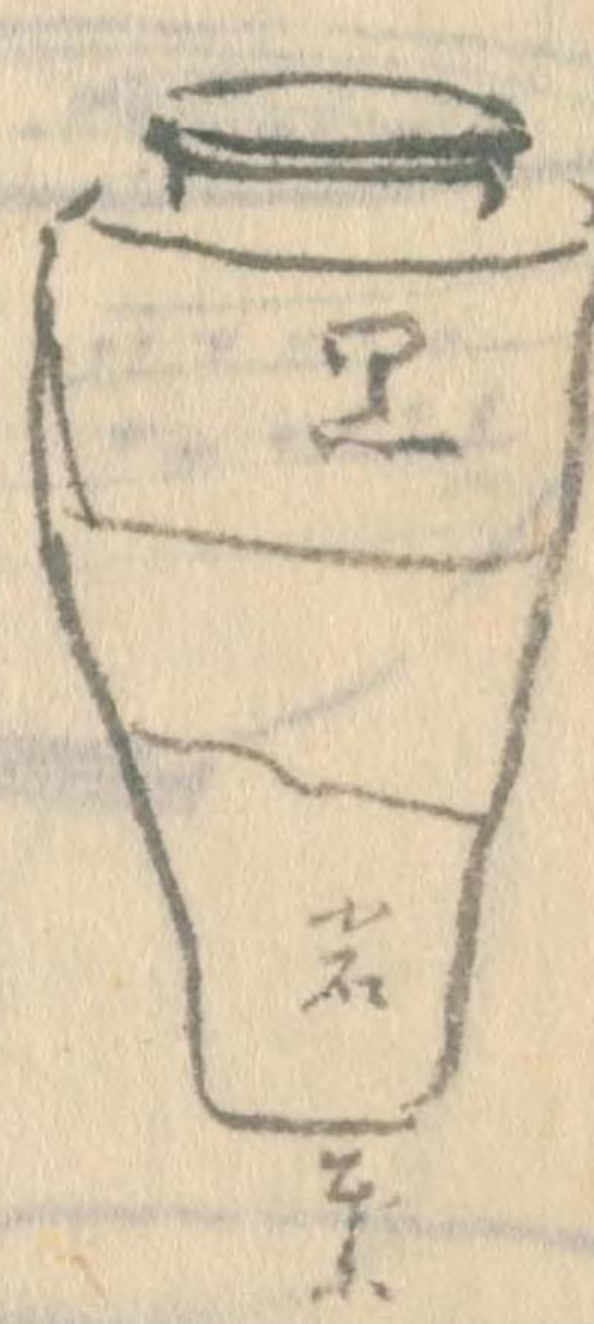
金花山


白
薬アリ
土ザンクリ赤
糸
ウラ

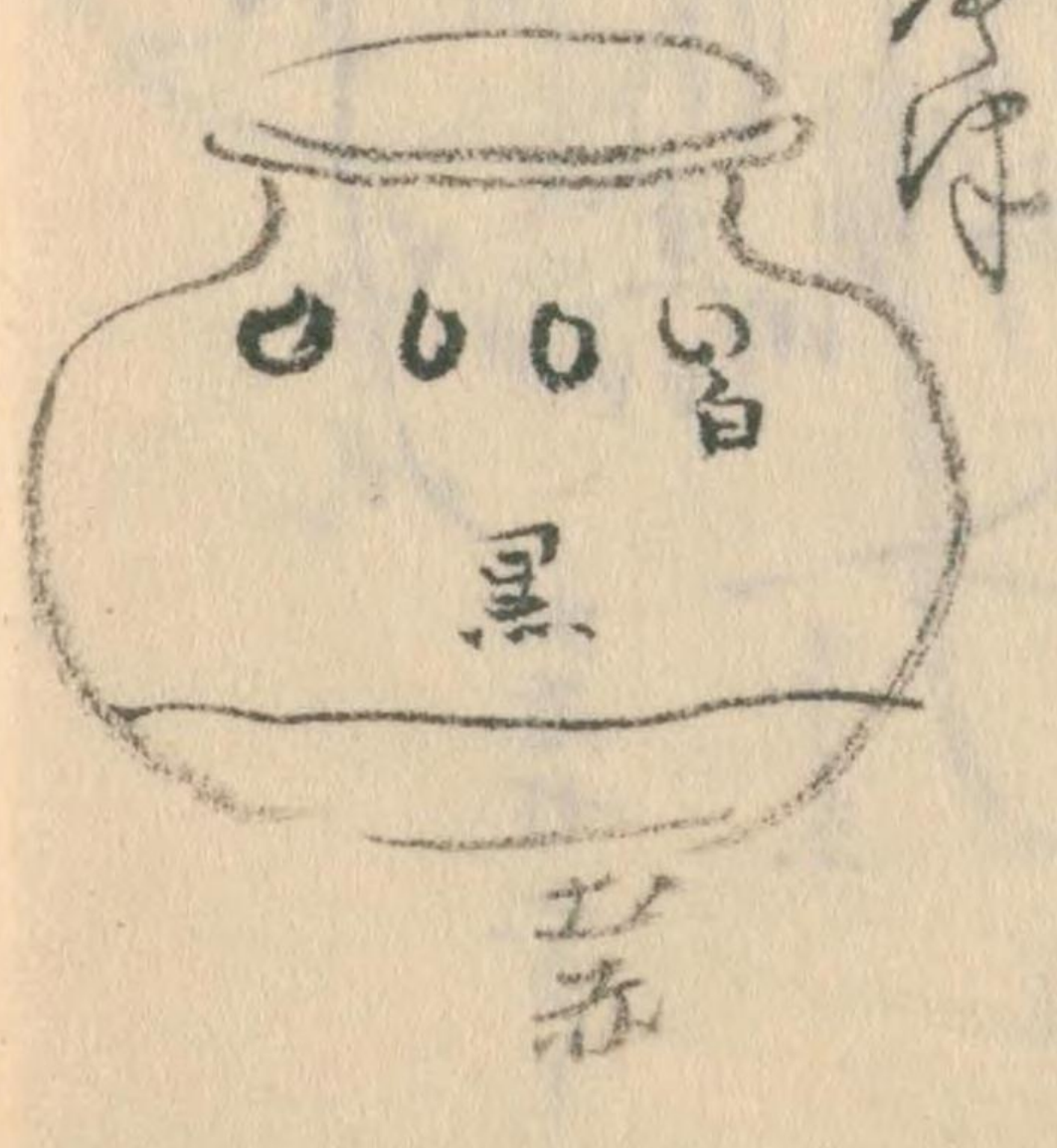
サツマ


黒ヘ白ハカン
薬アリ
ヒカリ
糸

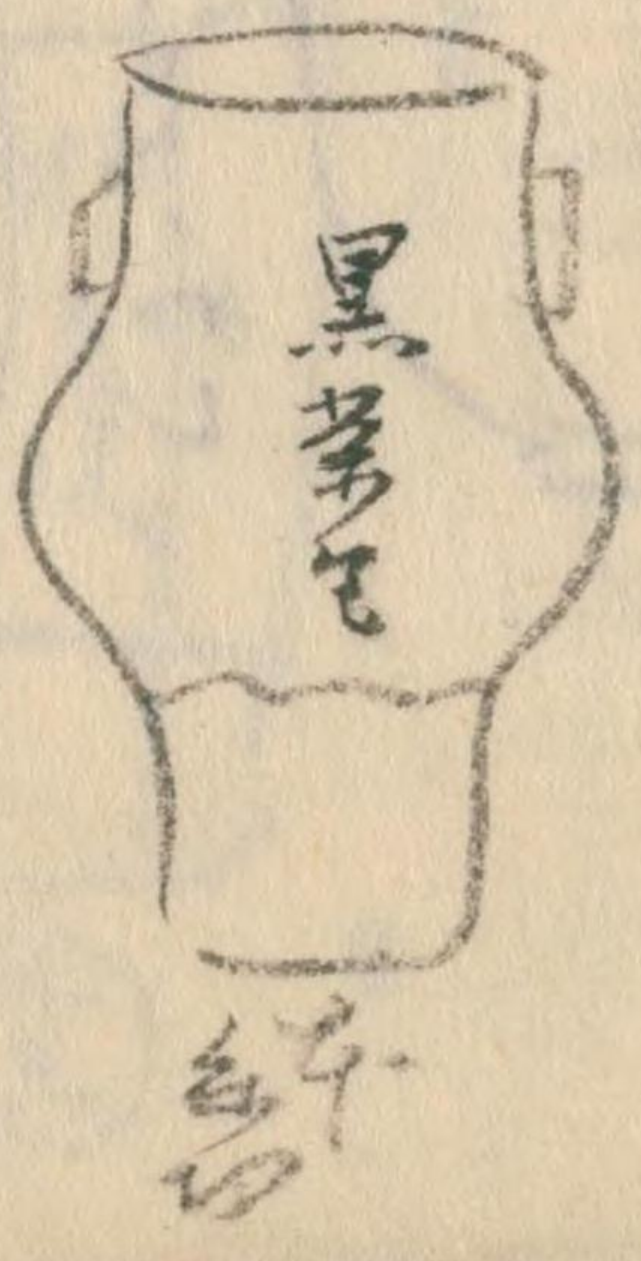
朝鮮



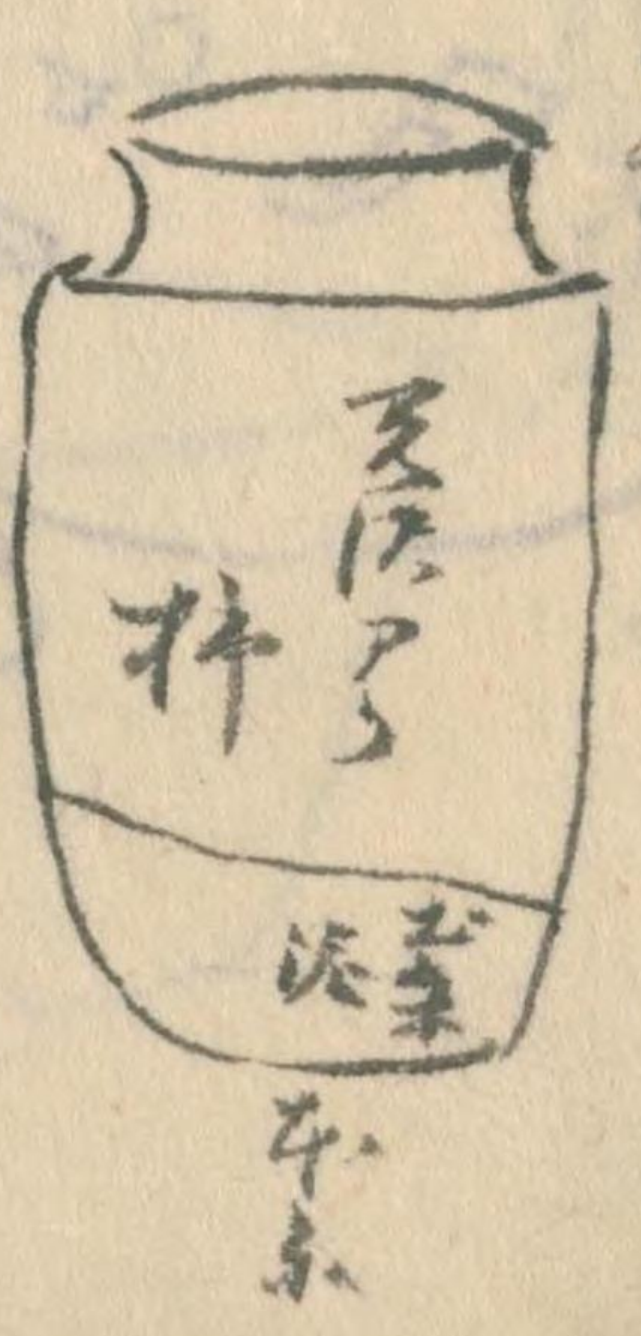
瀬戸唐津



朝鮮

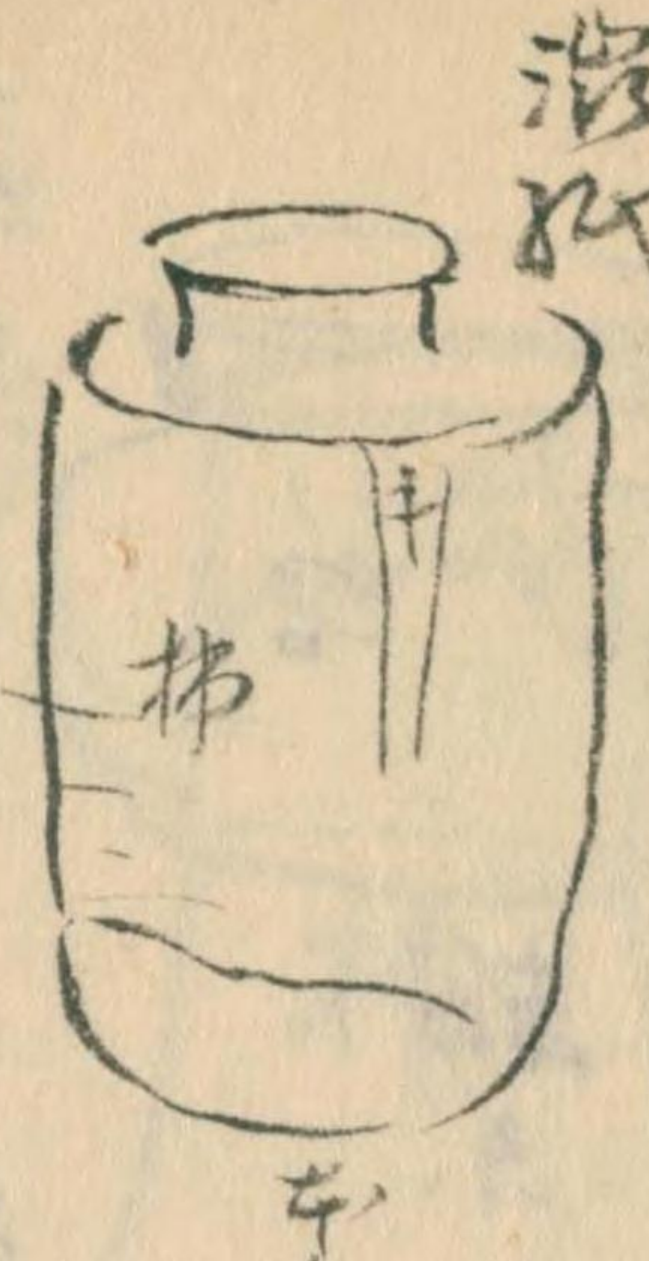


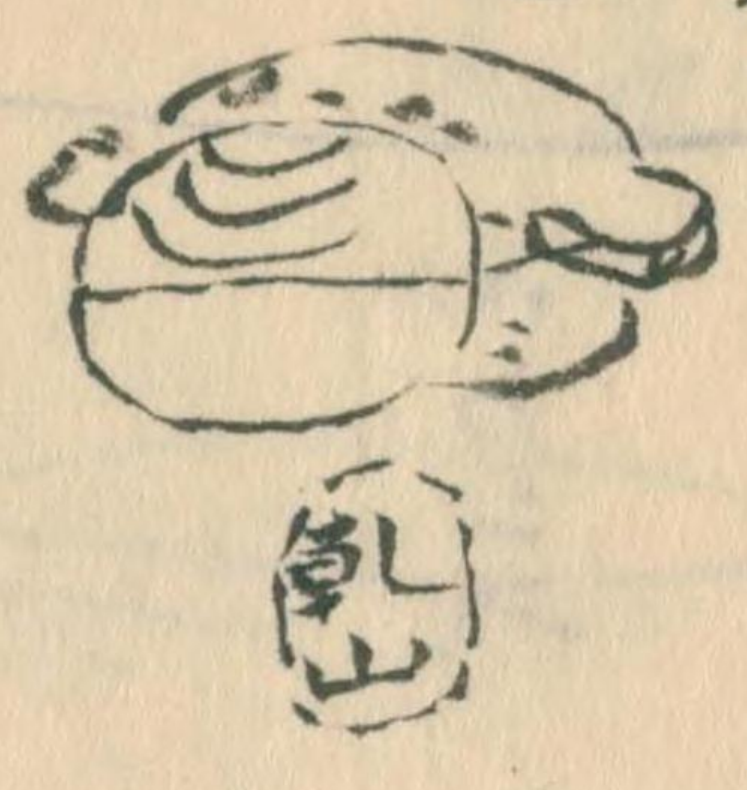
丹波

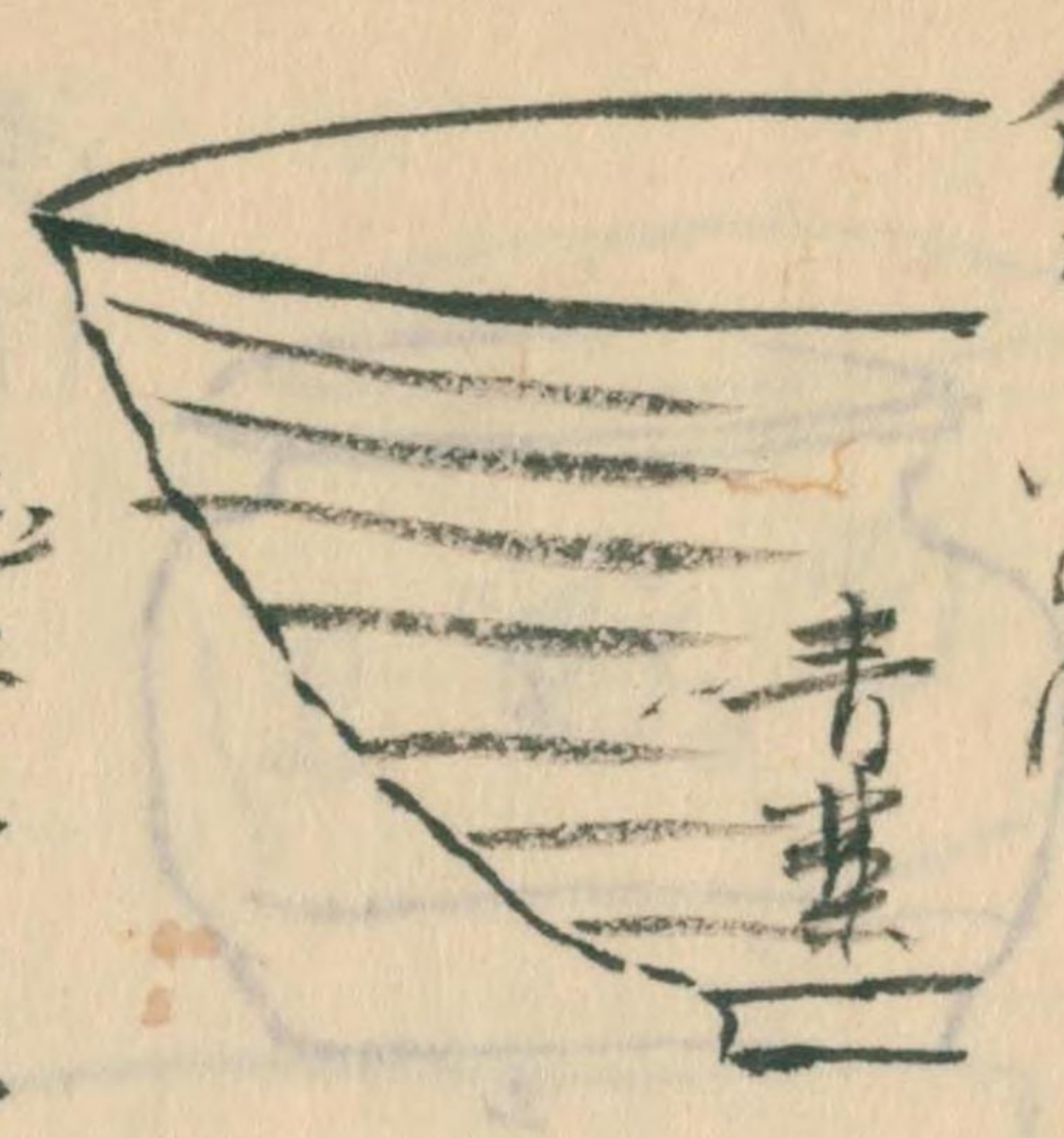


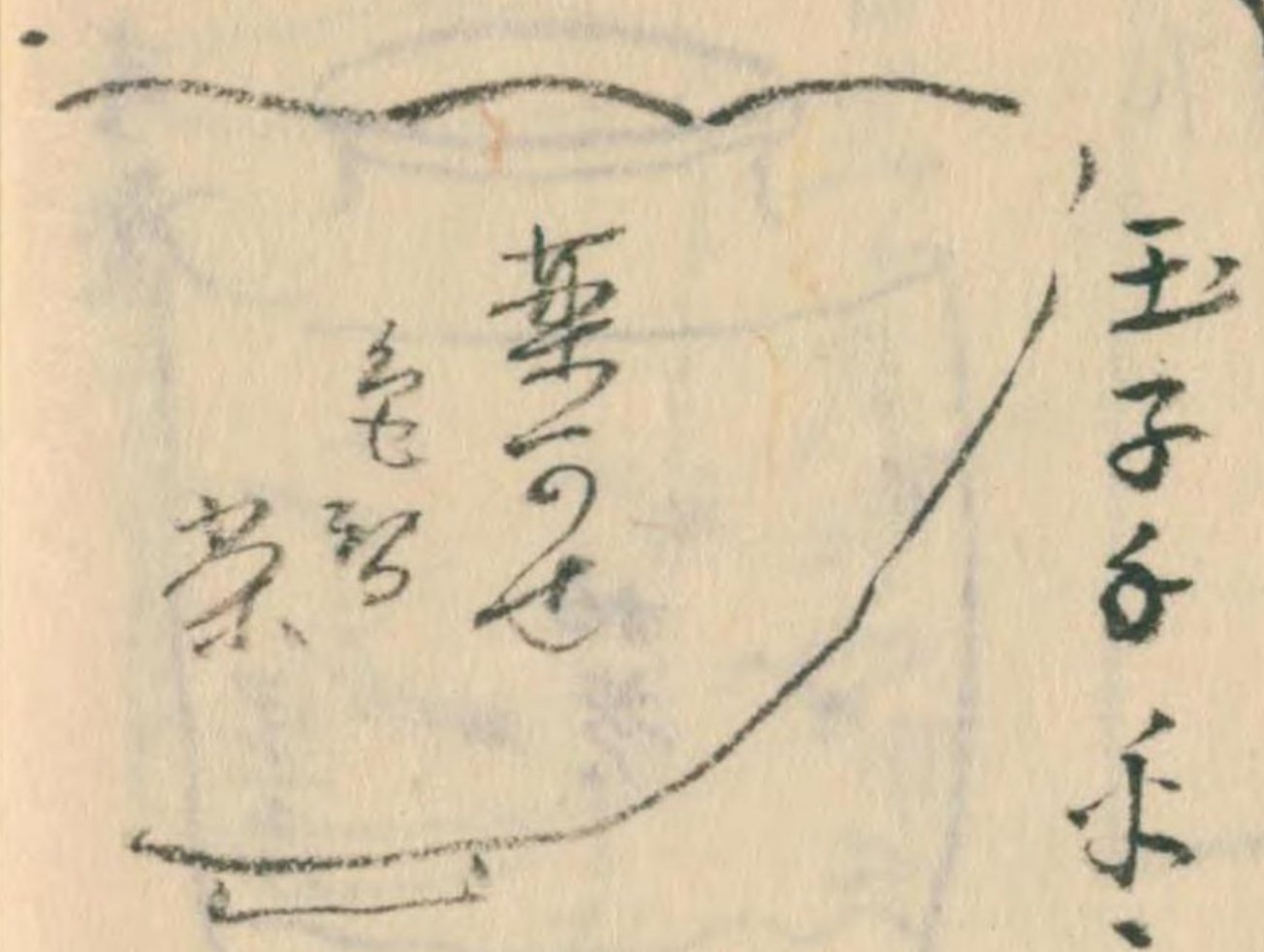
841
124

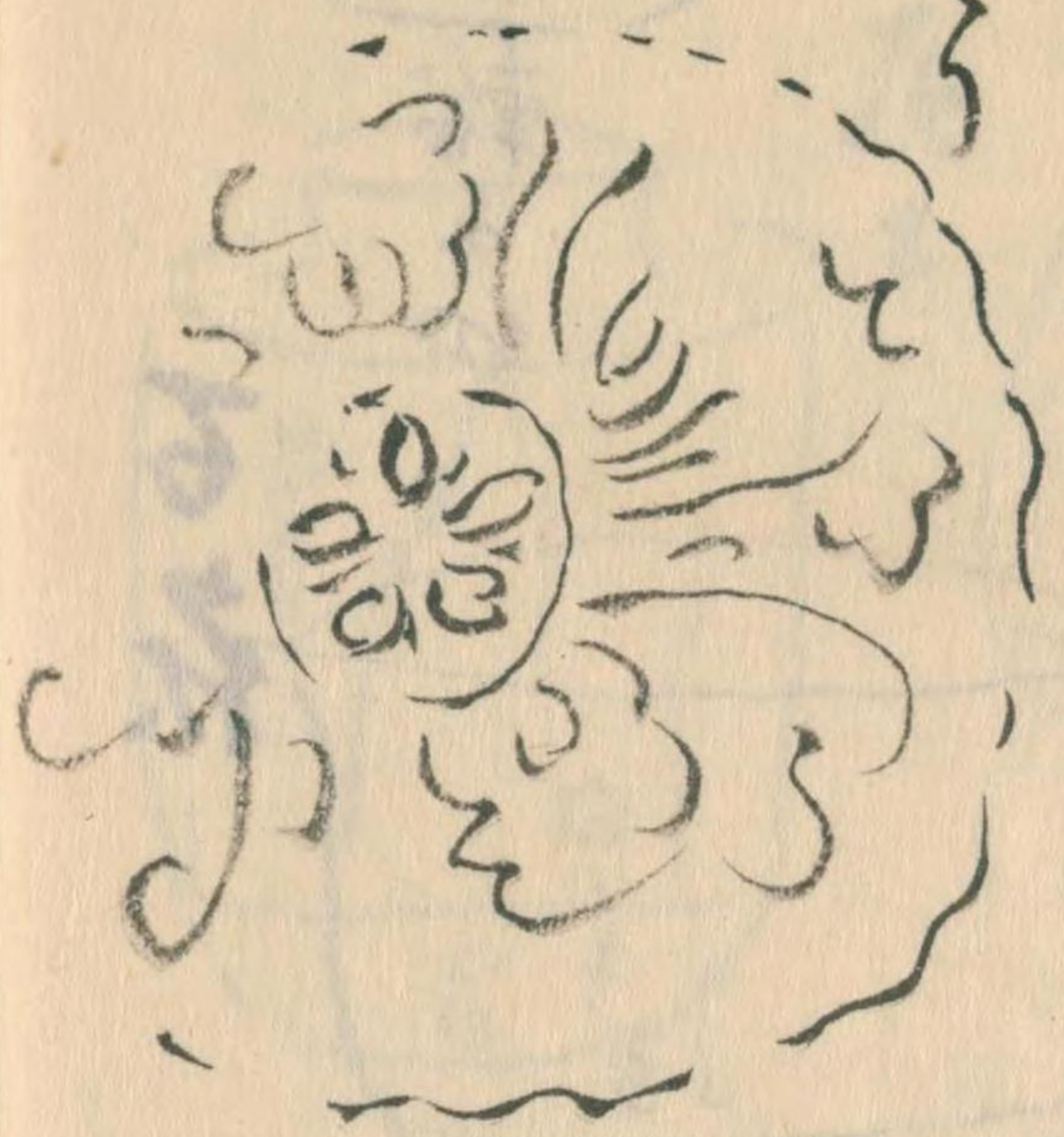
四月ノく　唐津や石井

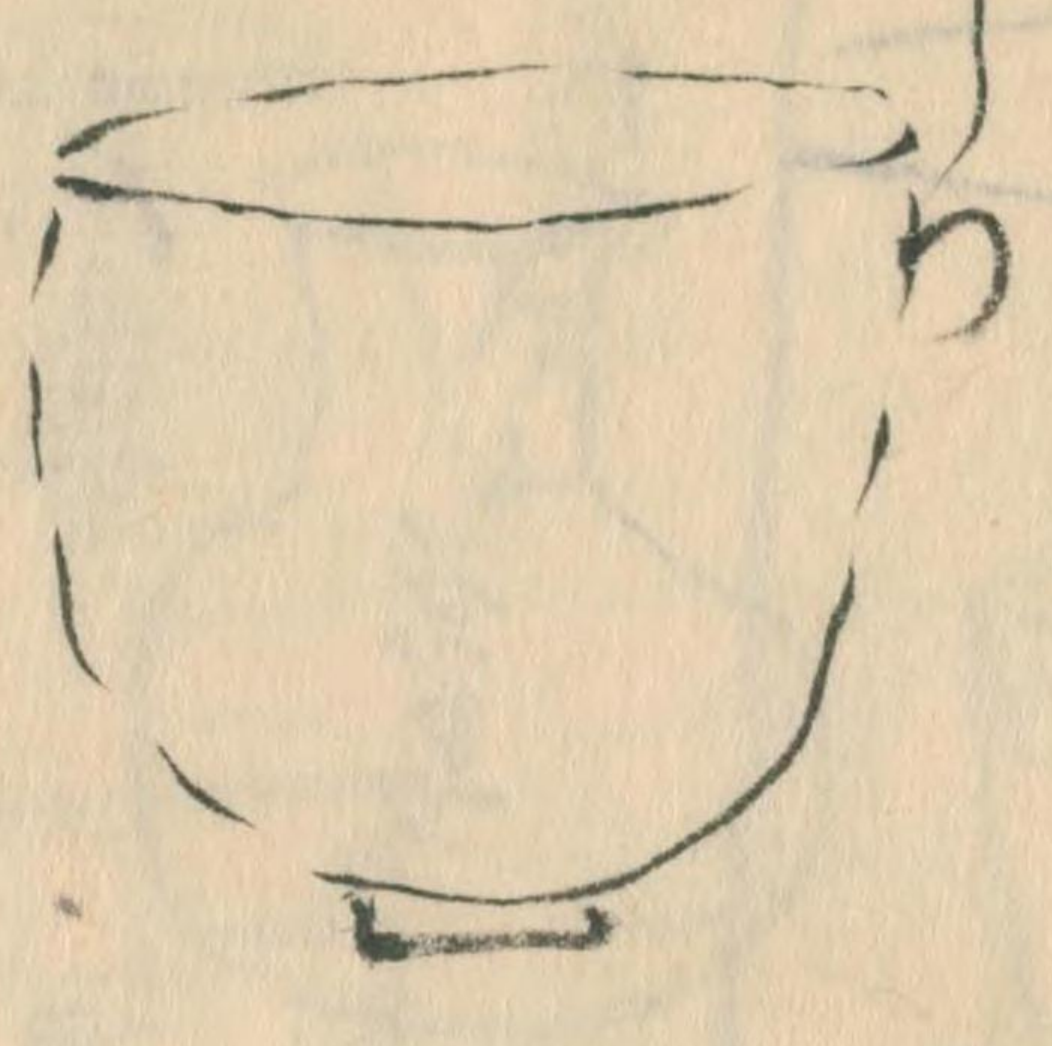


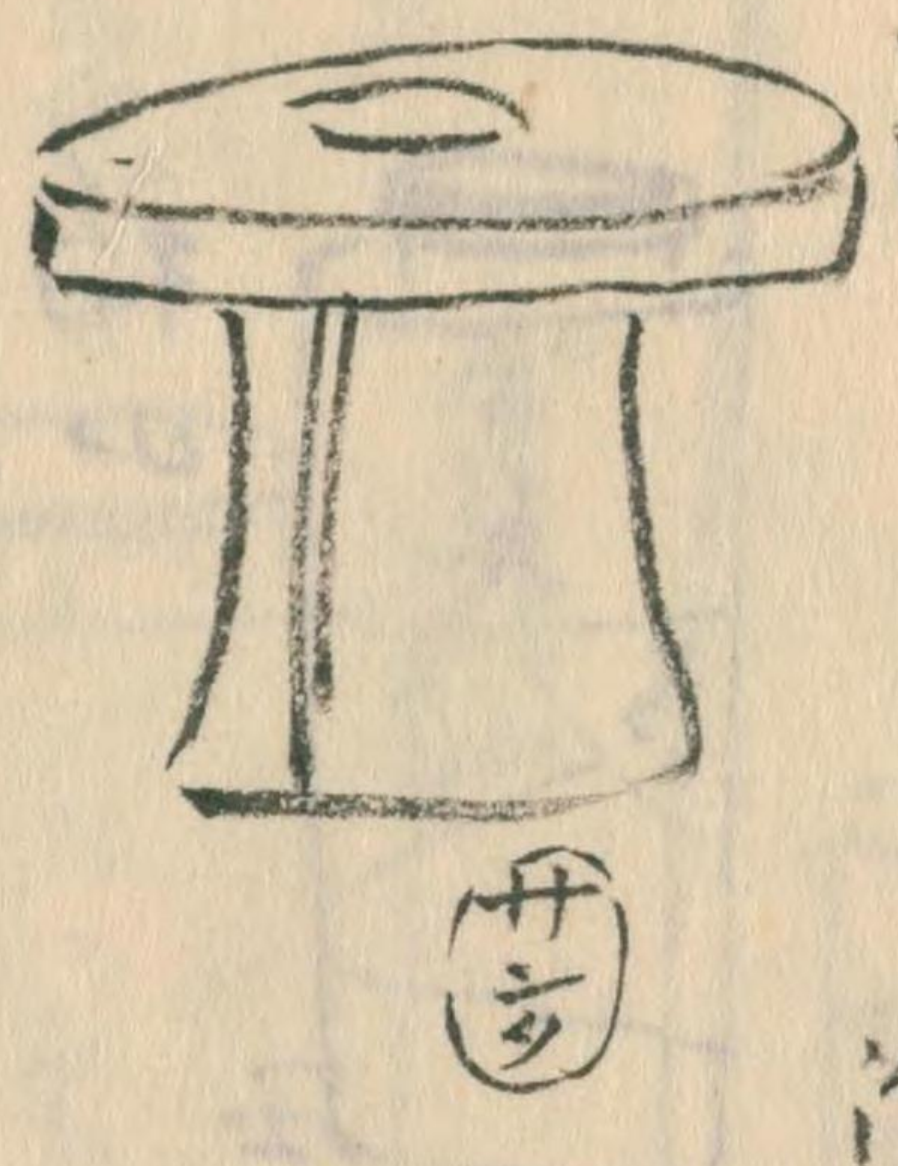


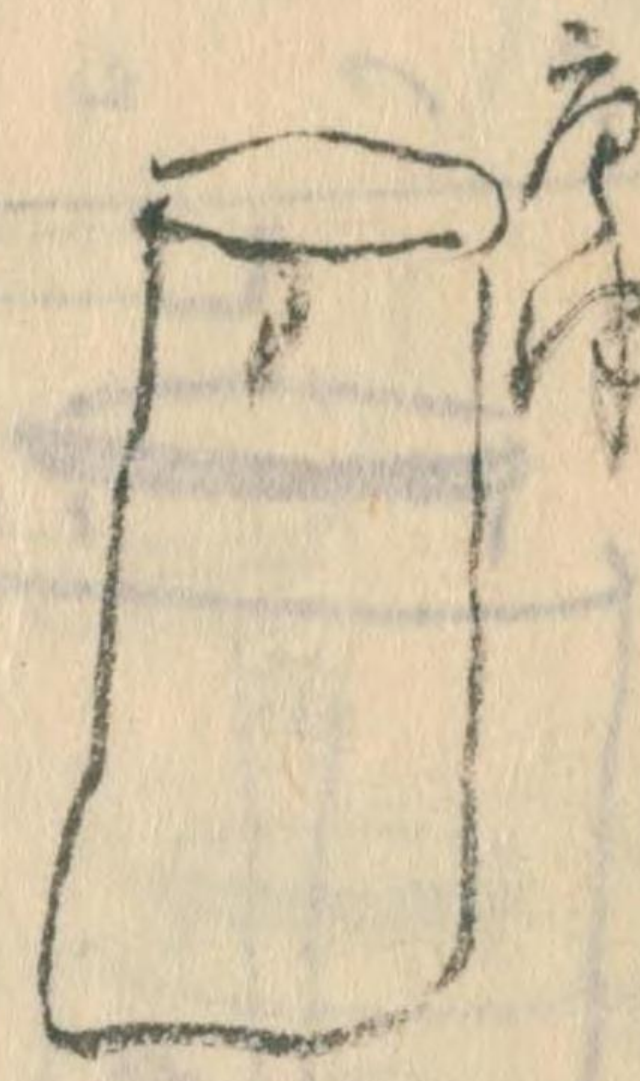


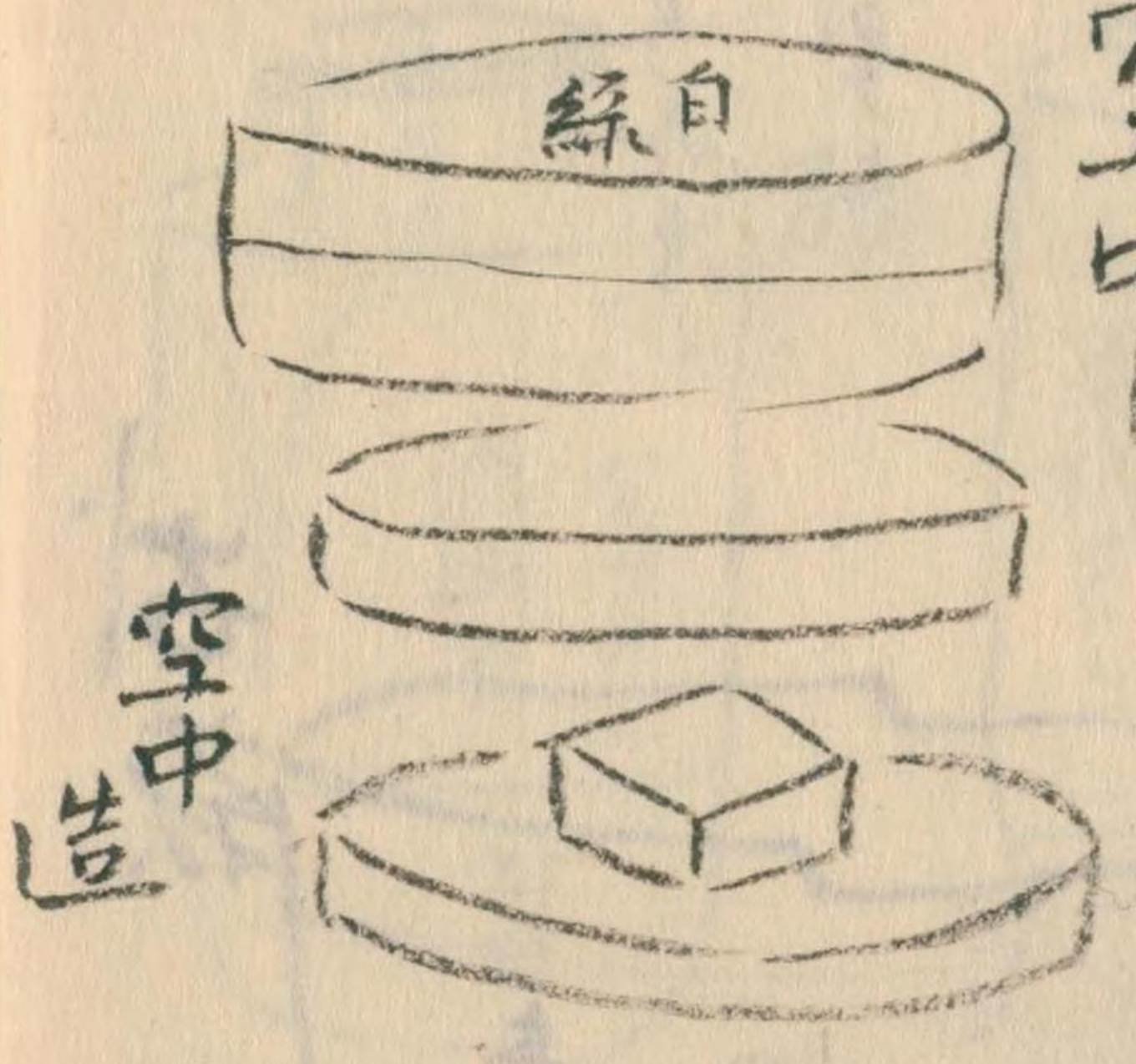

葉つき
色絵
茶
玉子手
ようらう

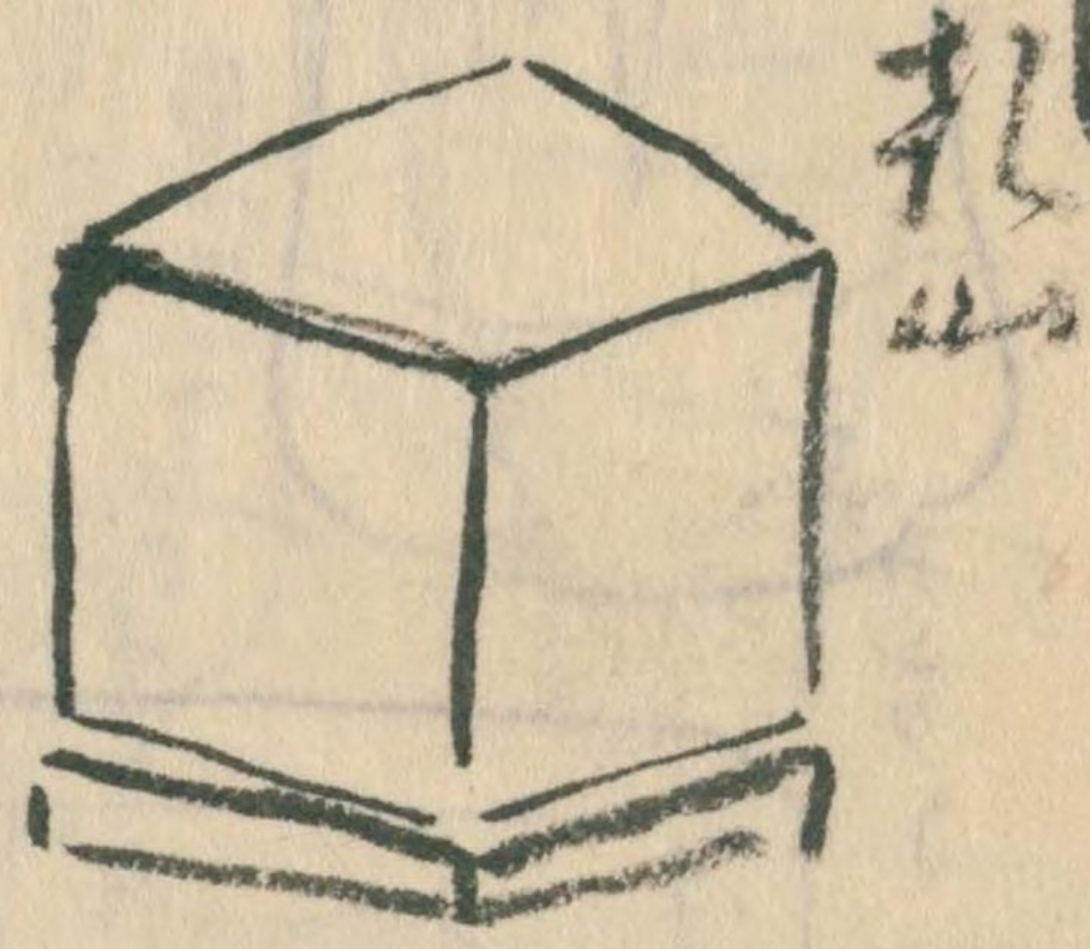


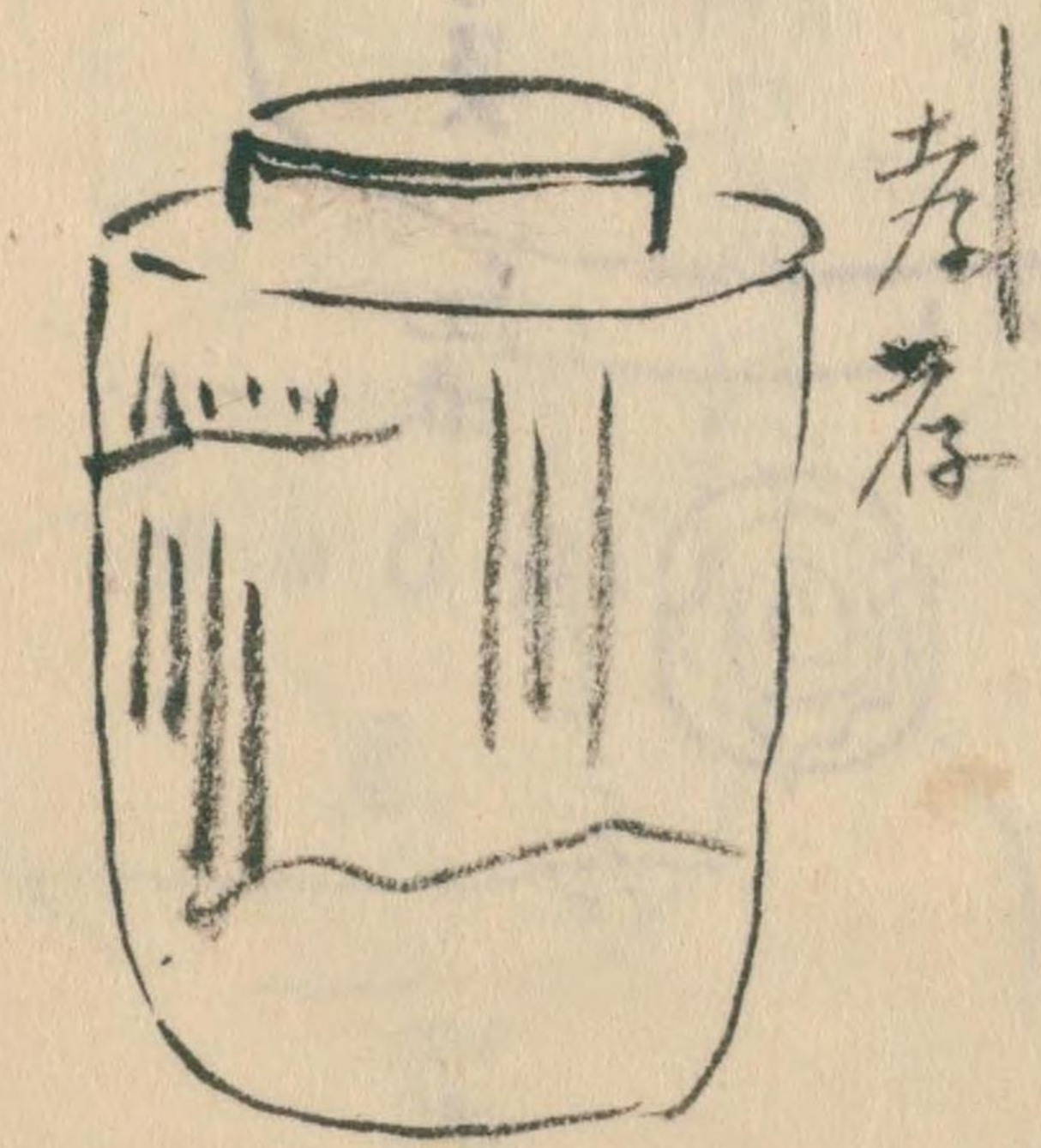


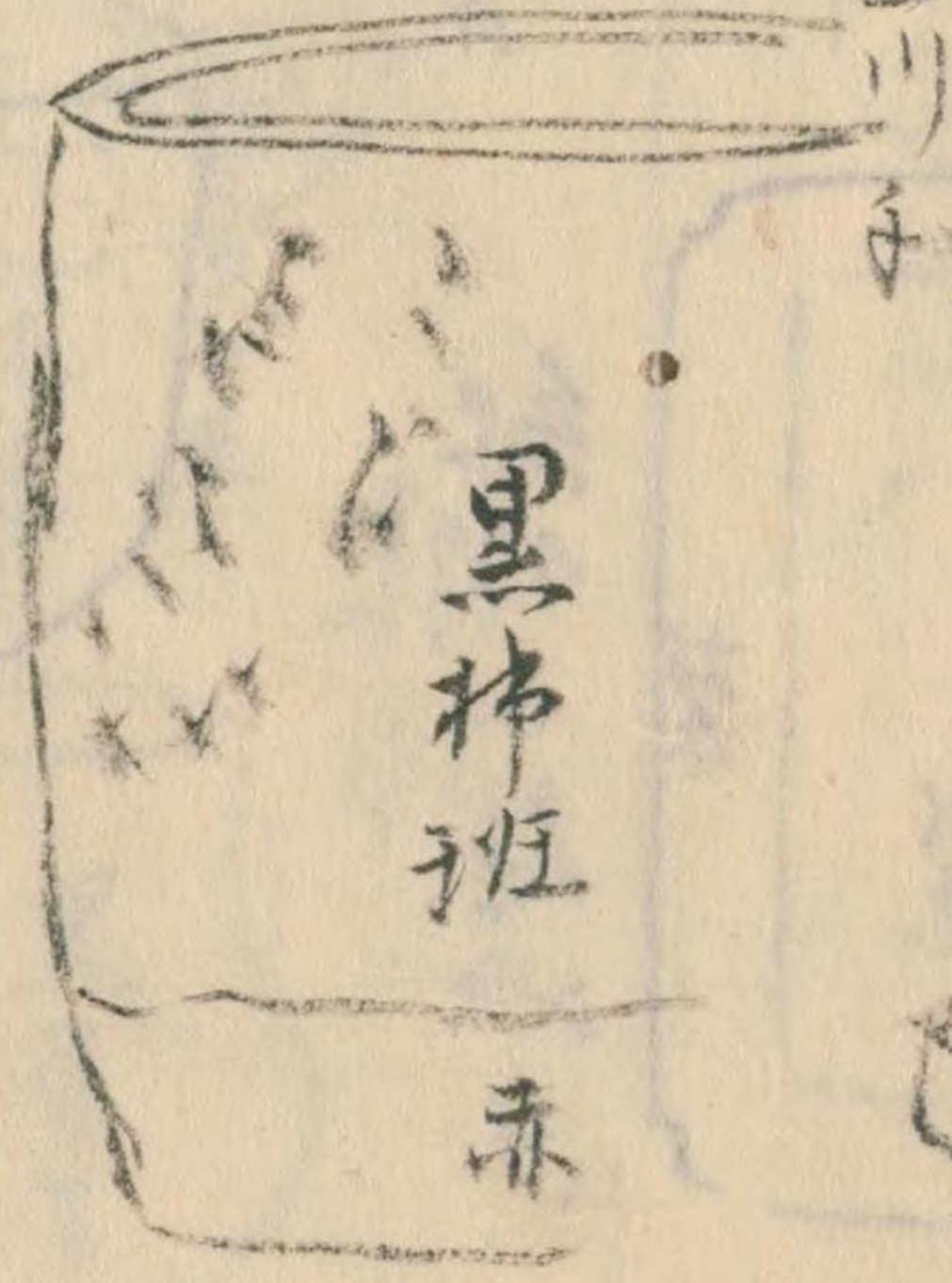


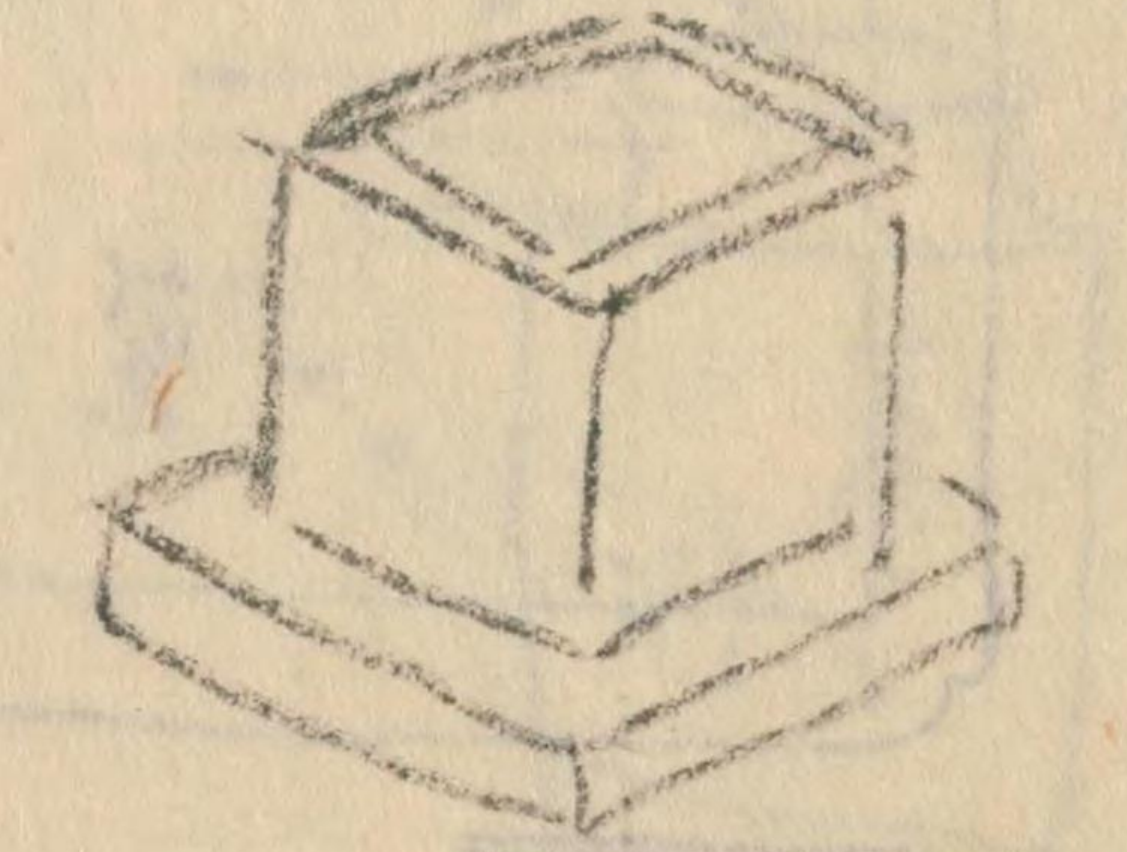




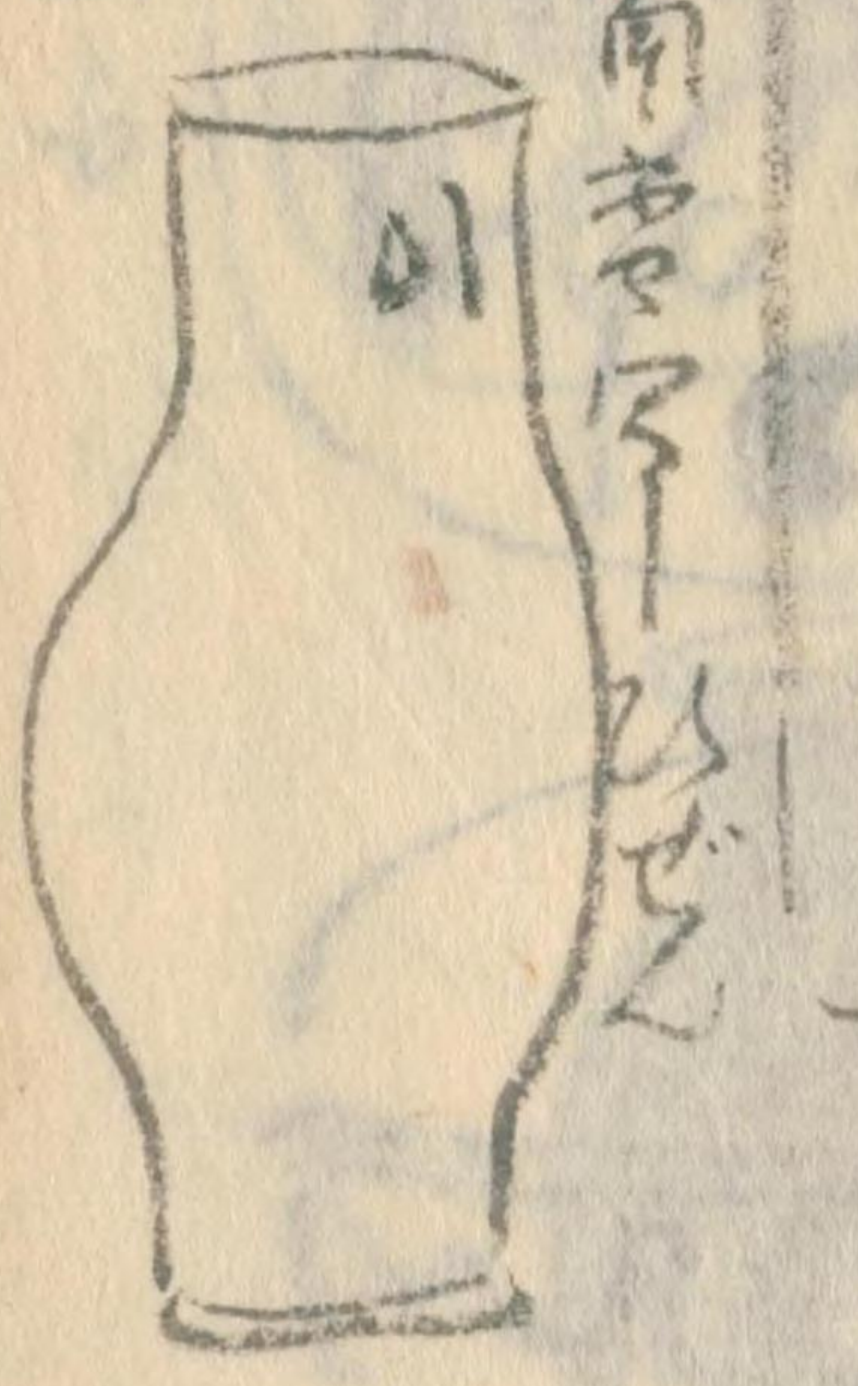


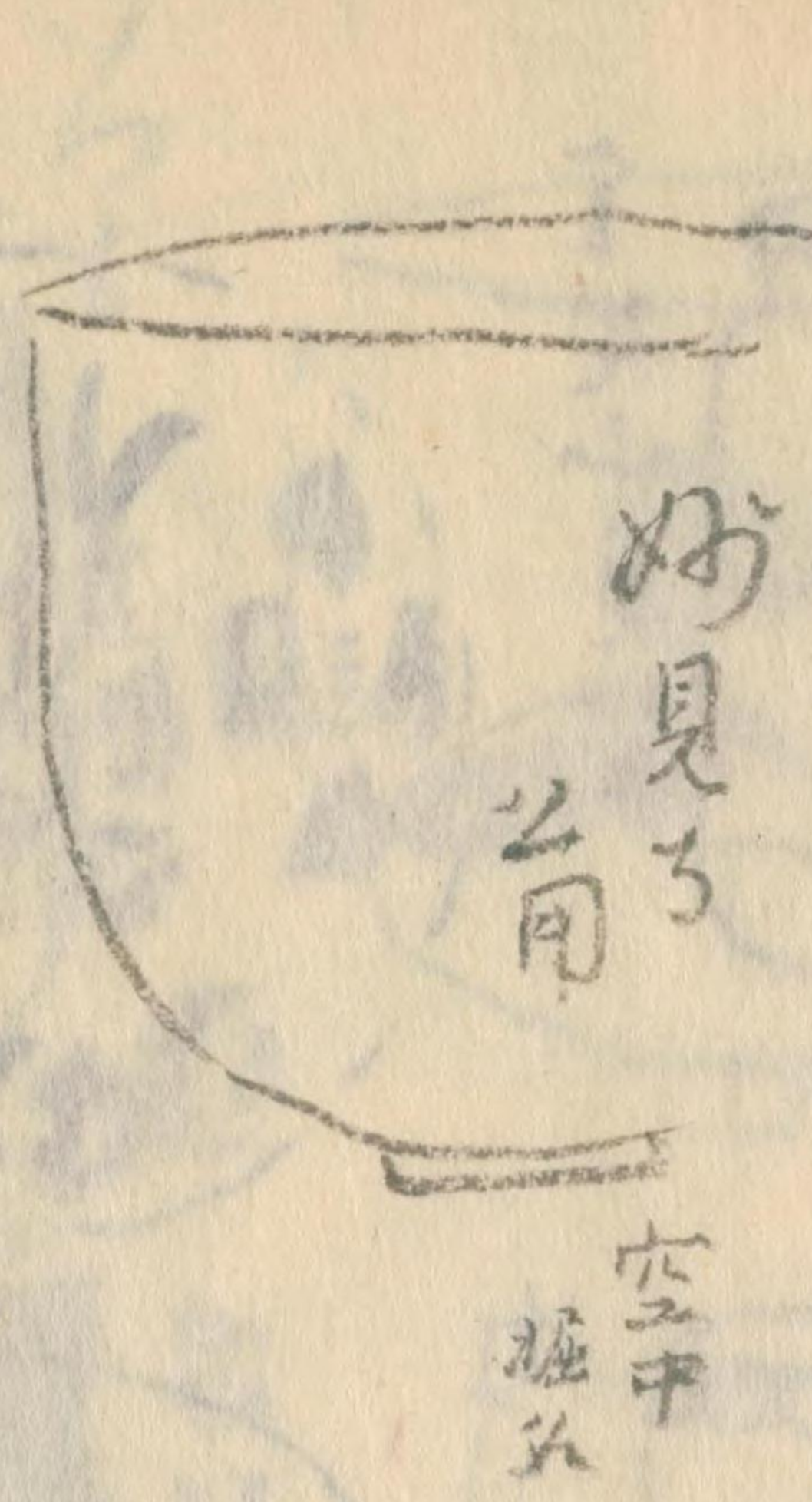


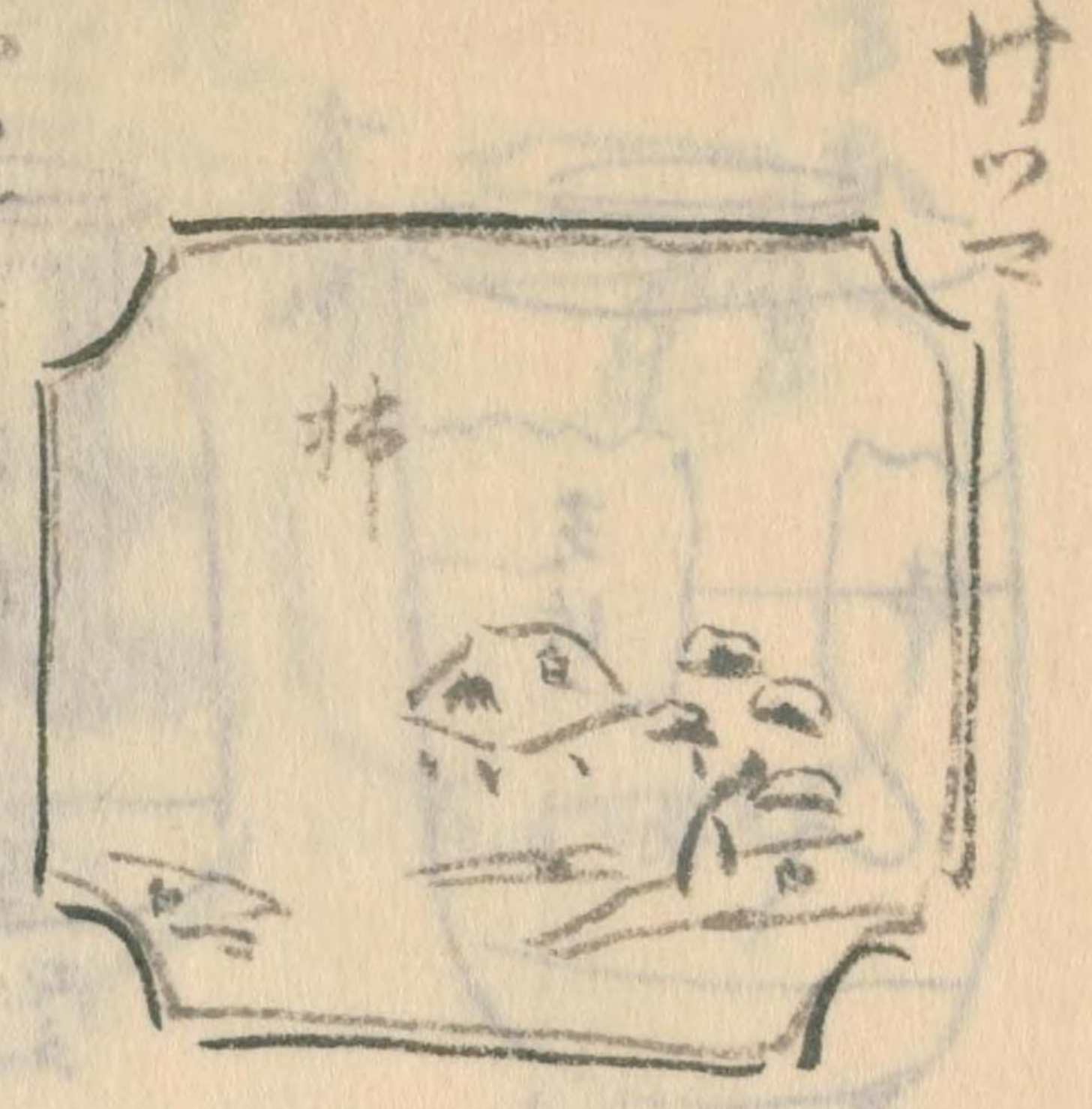


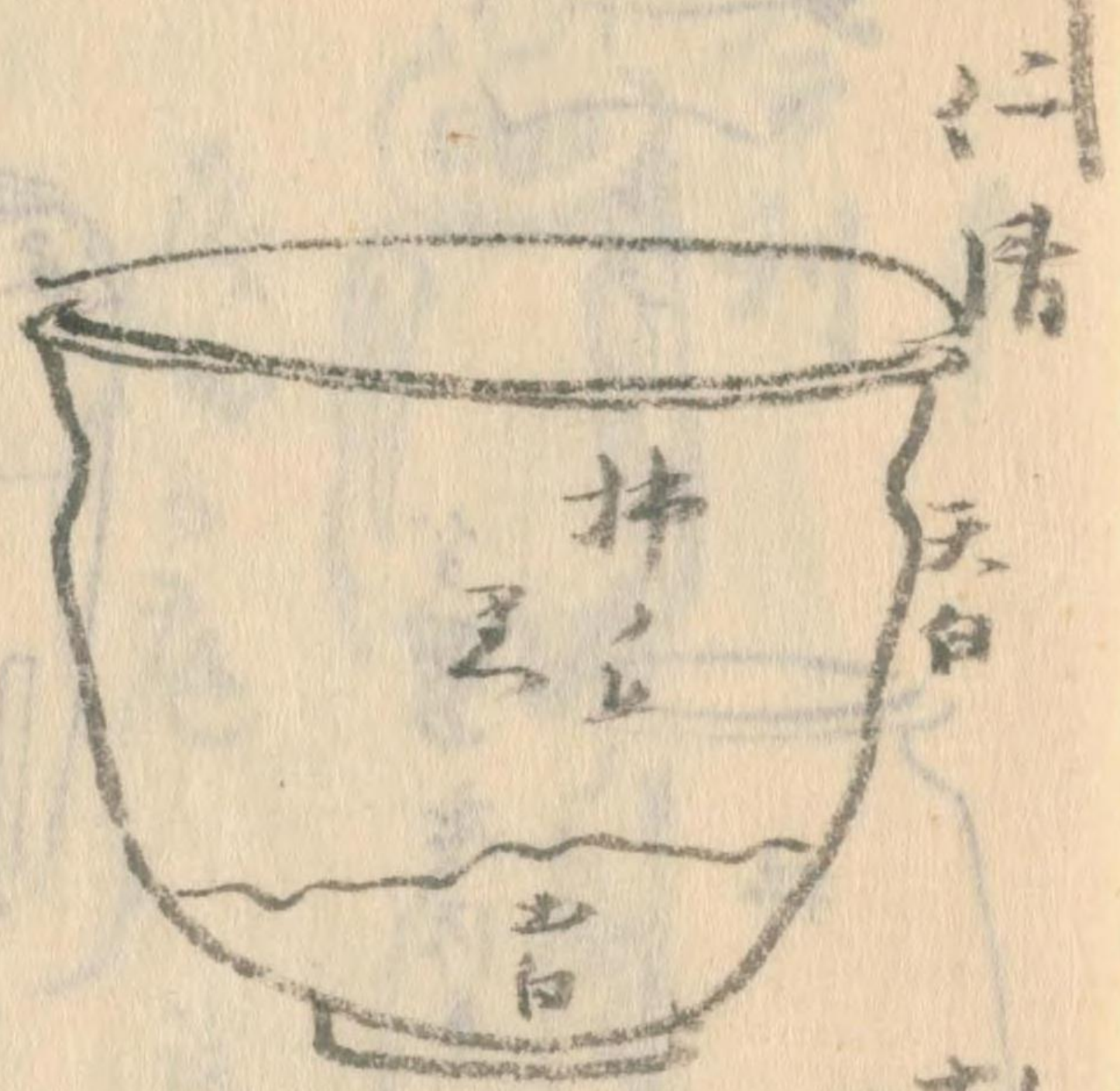


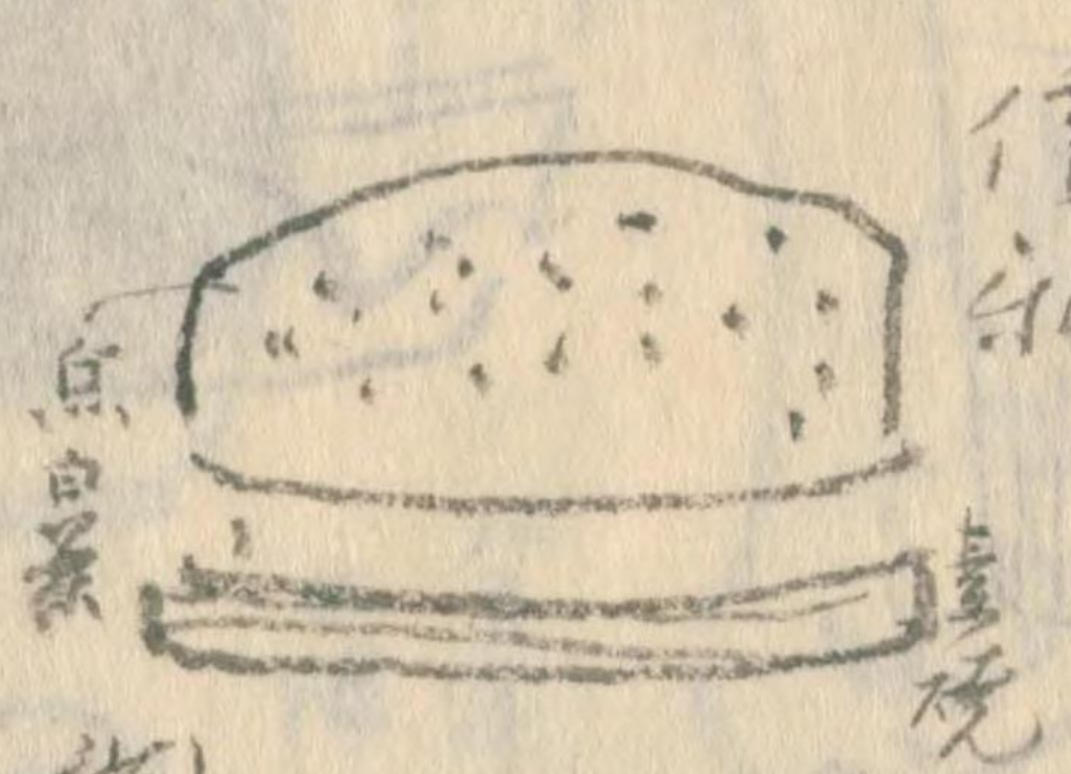
五月廿七
前田氏[illegible]

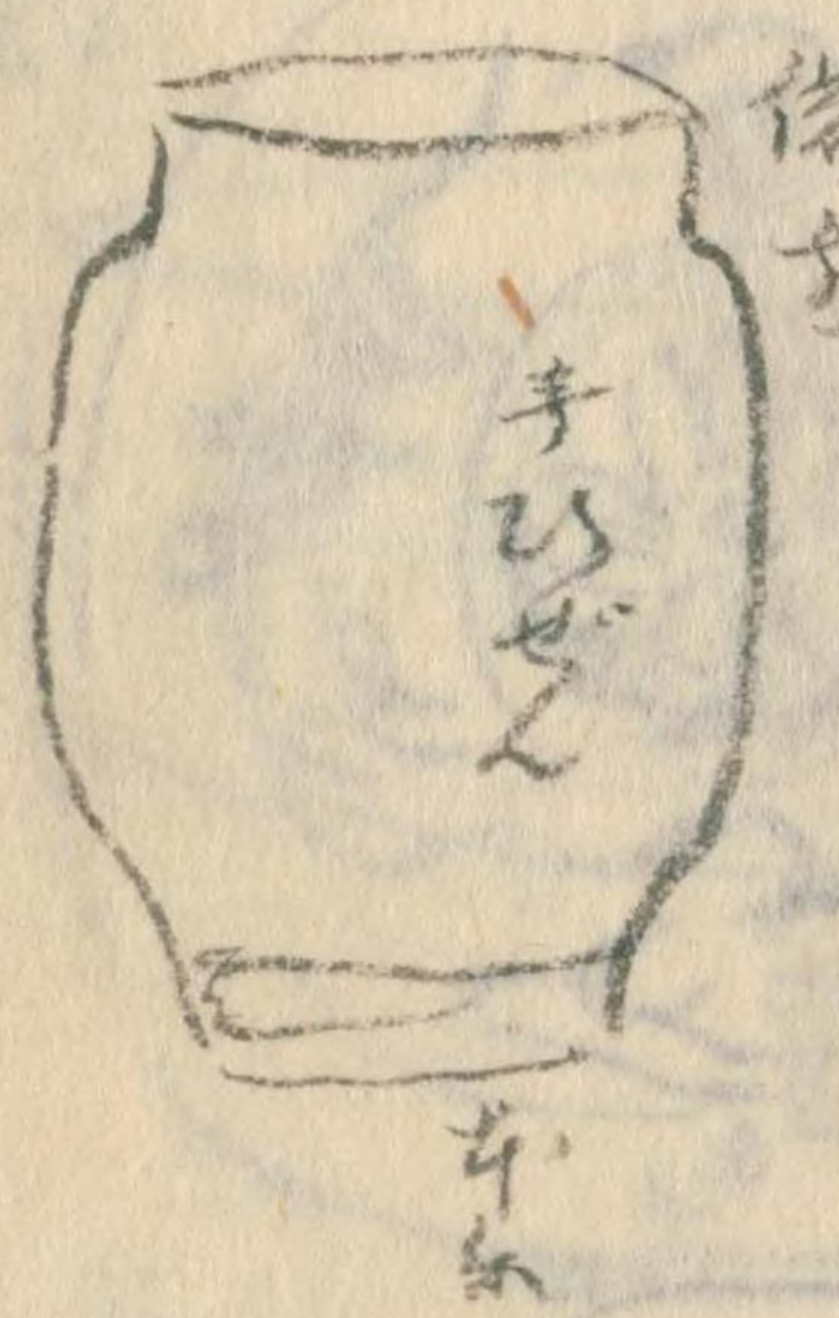


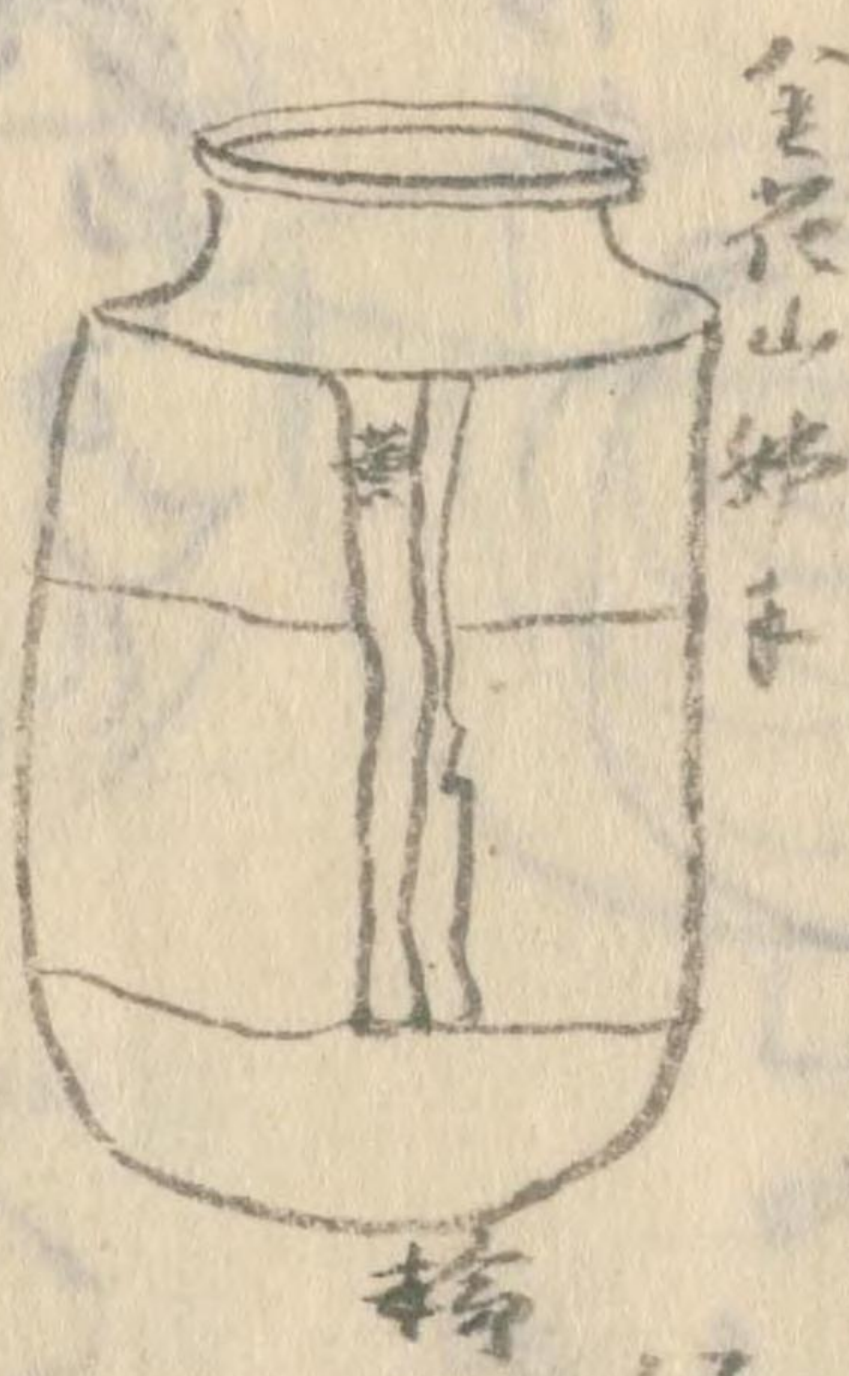

空中
如見ち
前
空中
堀込

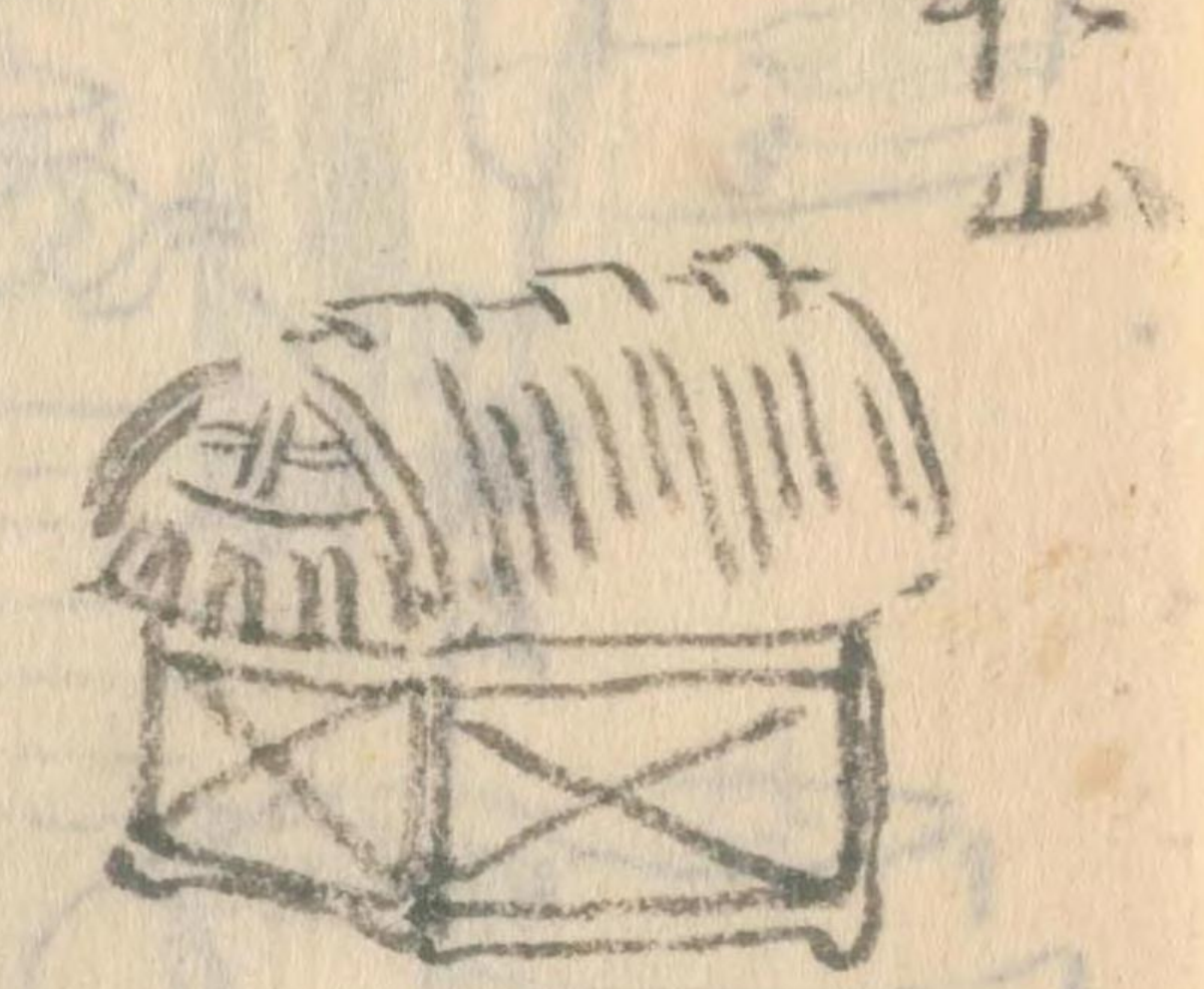


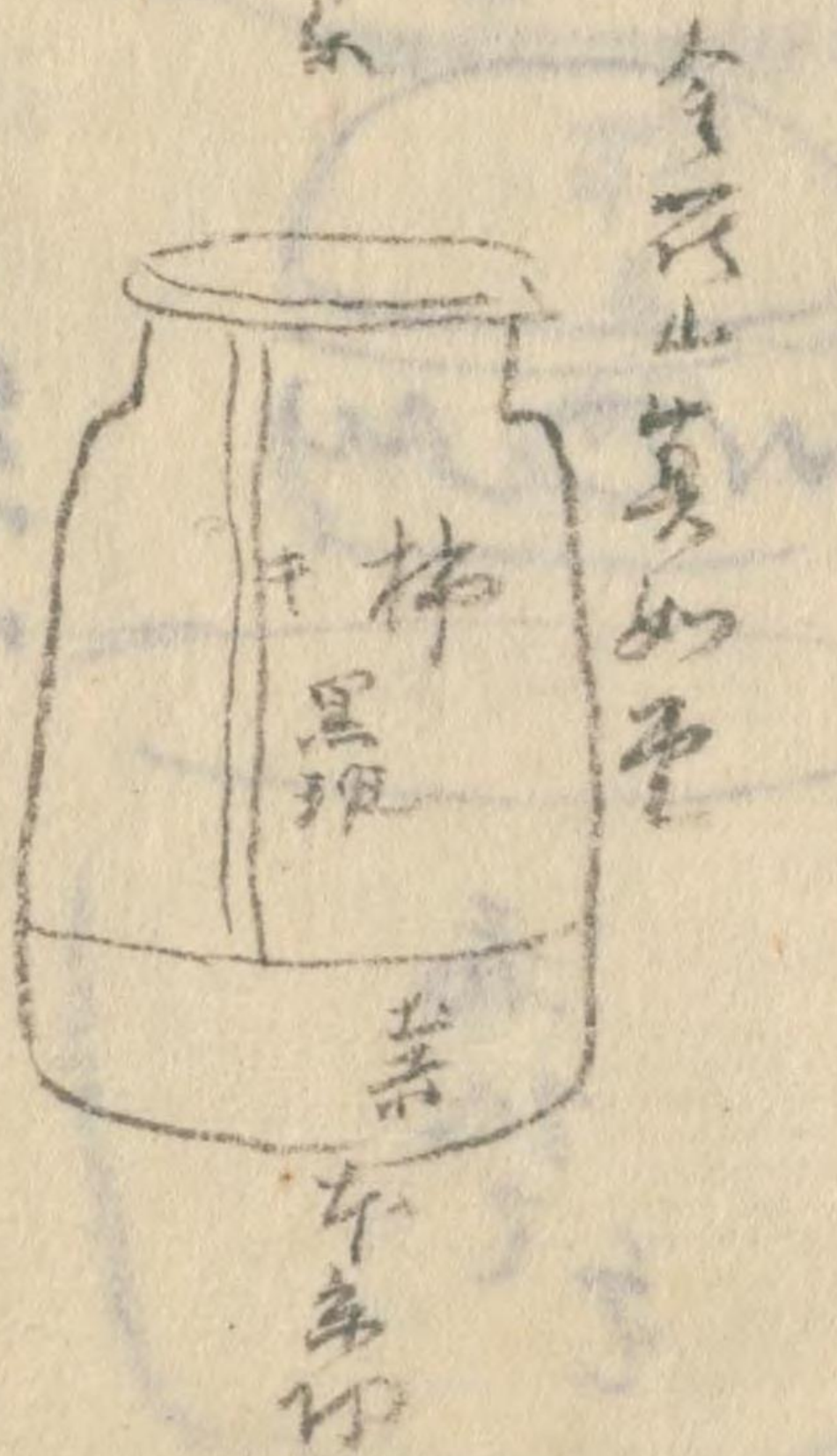


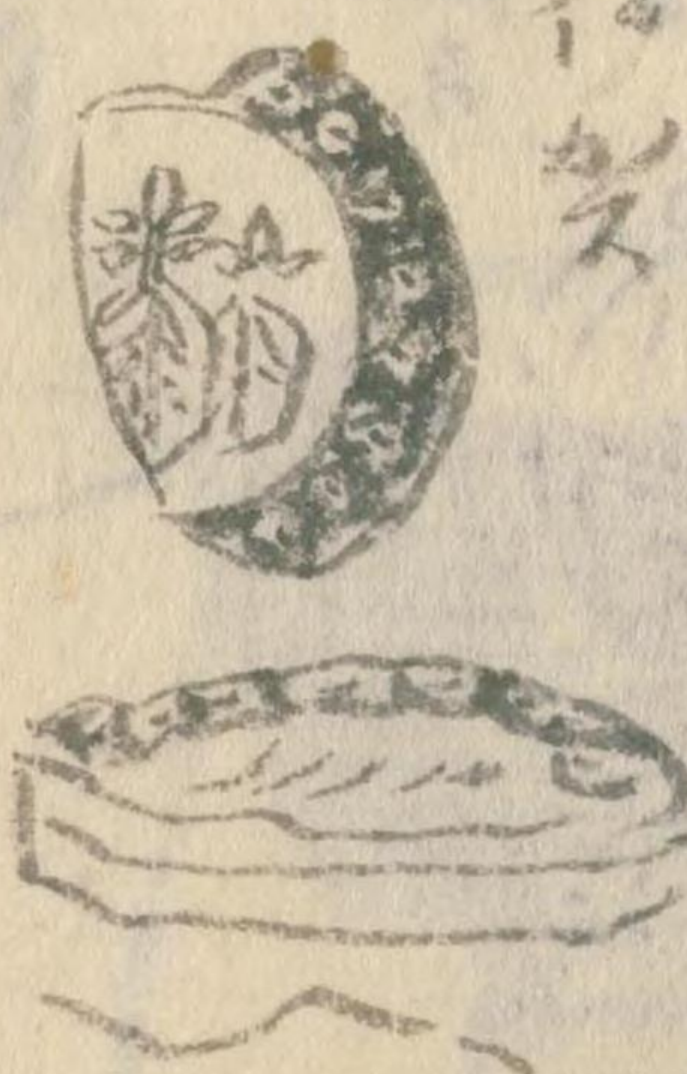


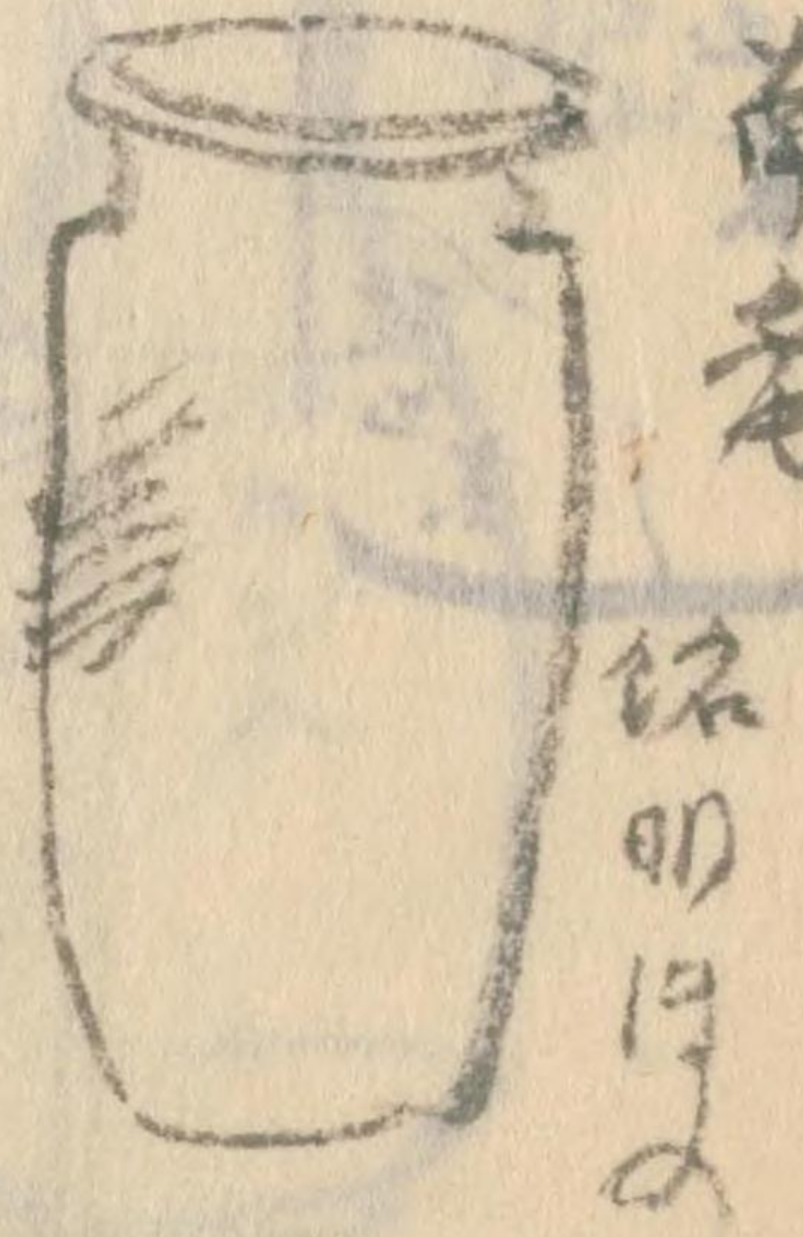


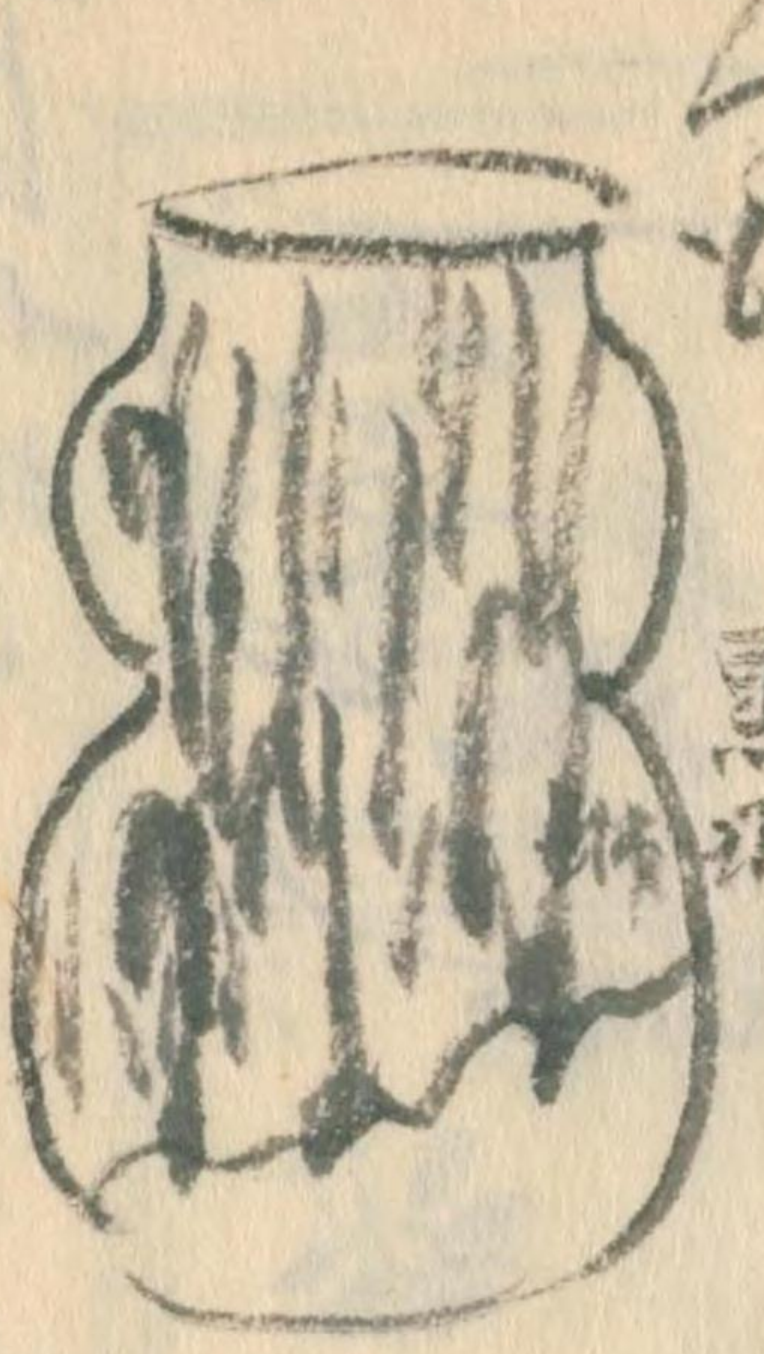


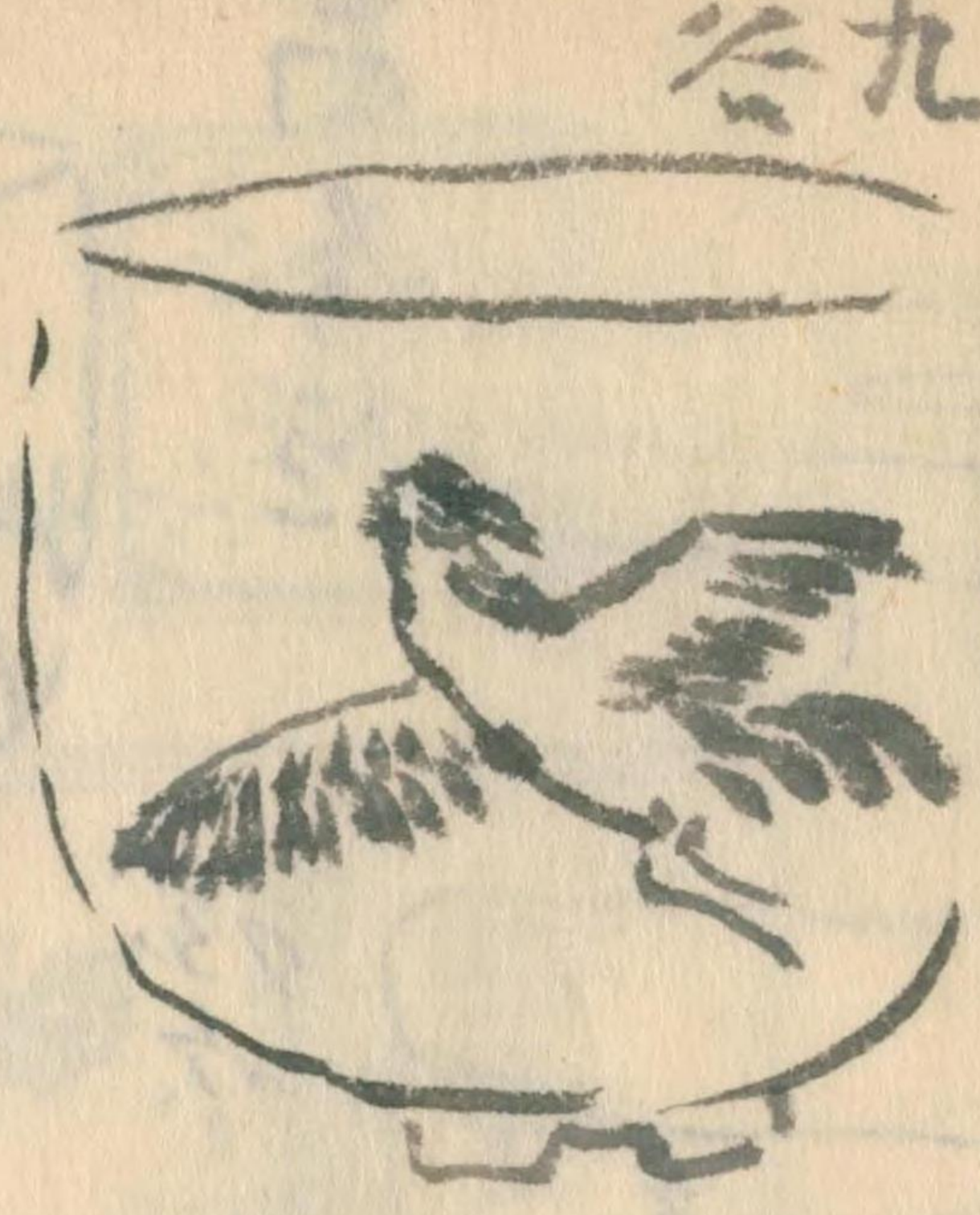


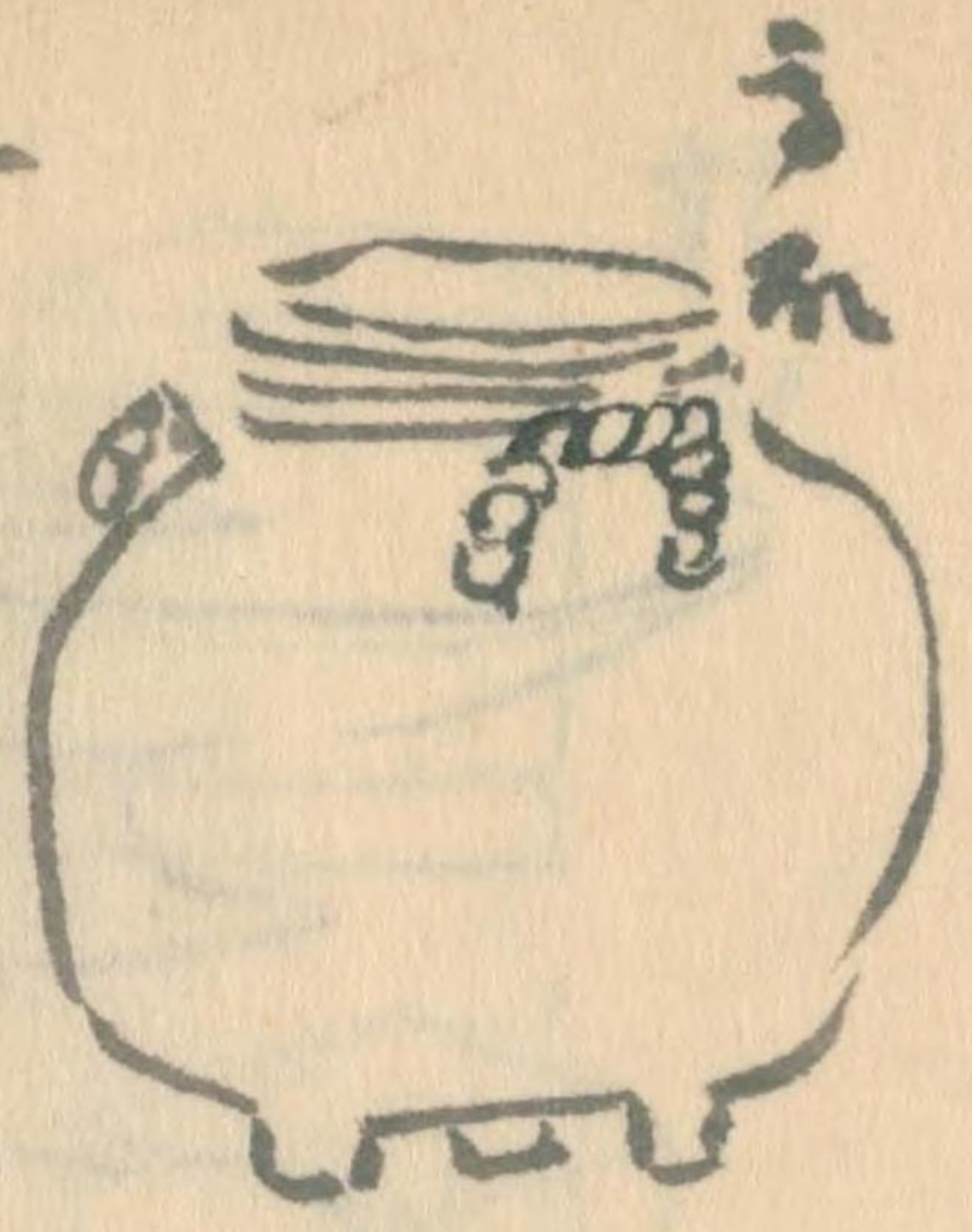

金花山
莫如雪
柿
黒斑
茶
本来印

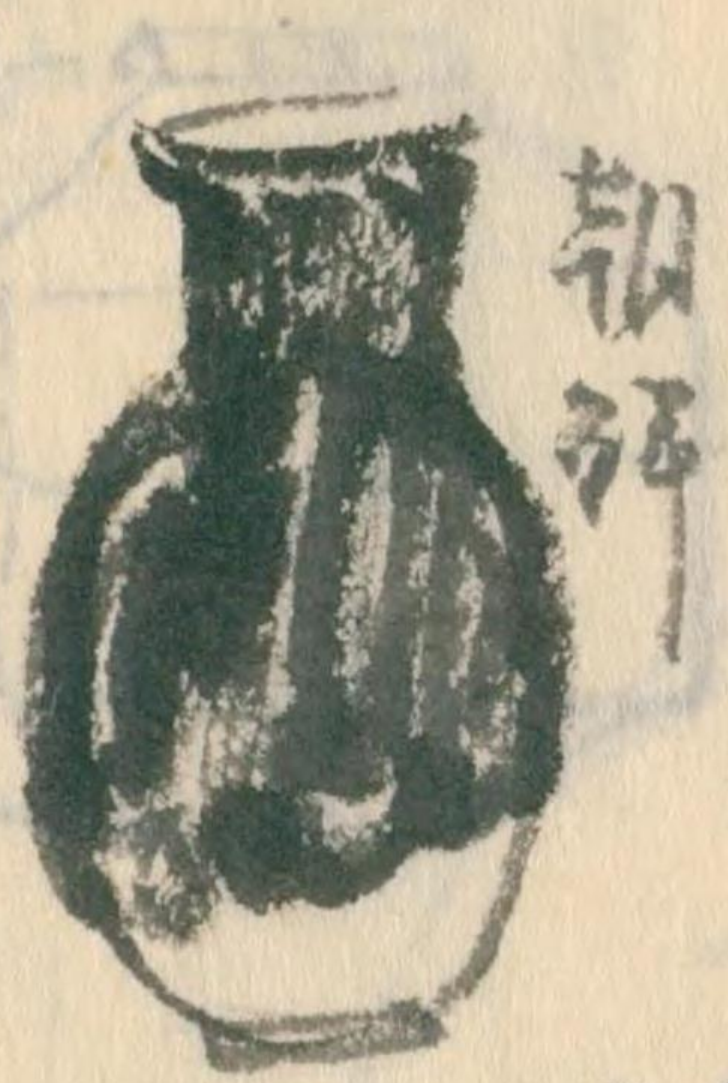


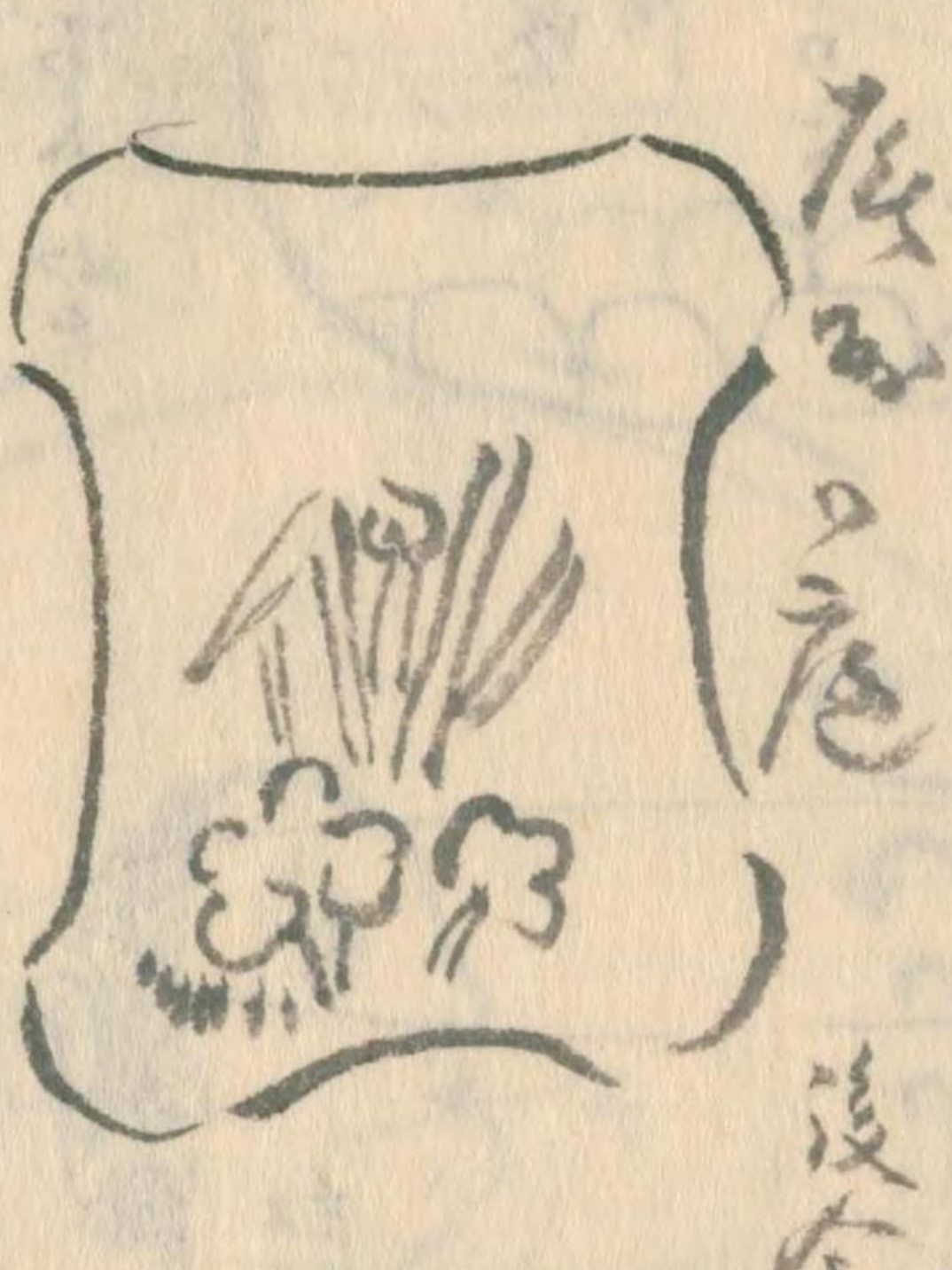


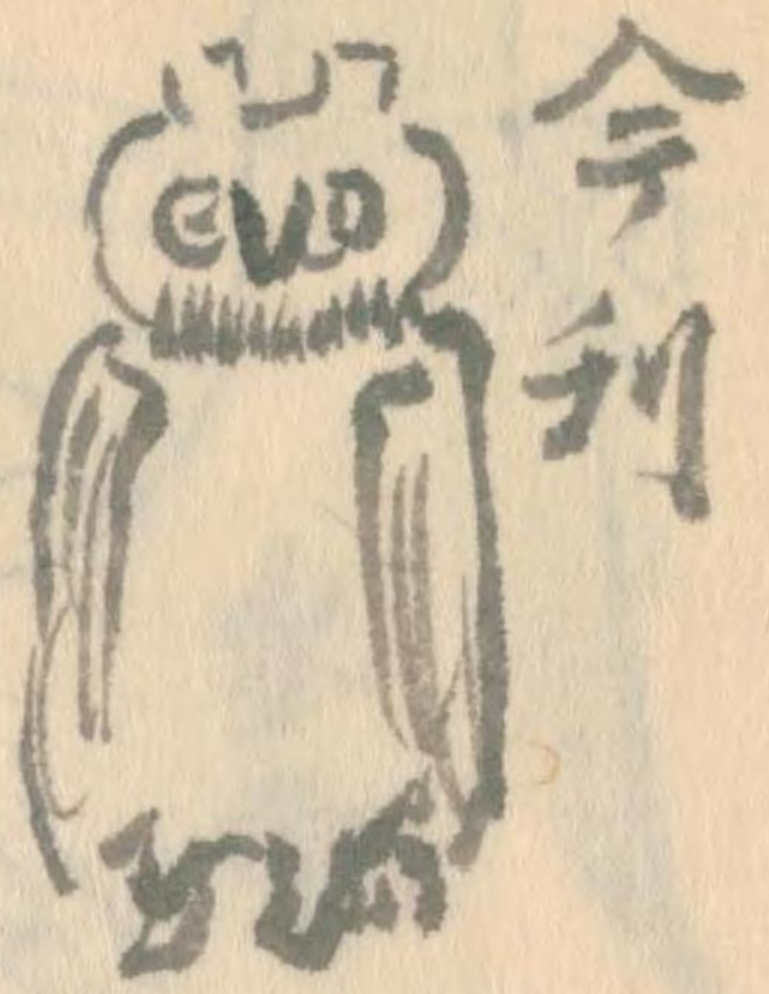

ろせ
黒斑
柿

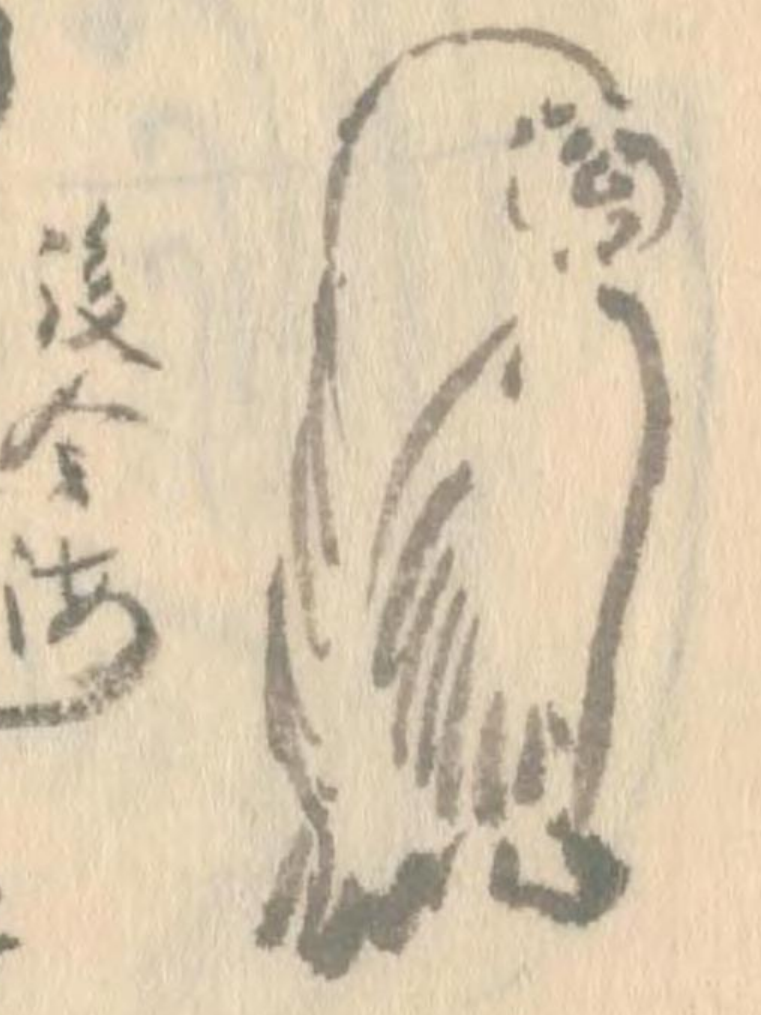

九谷

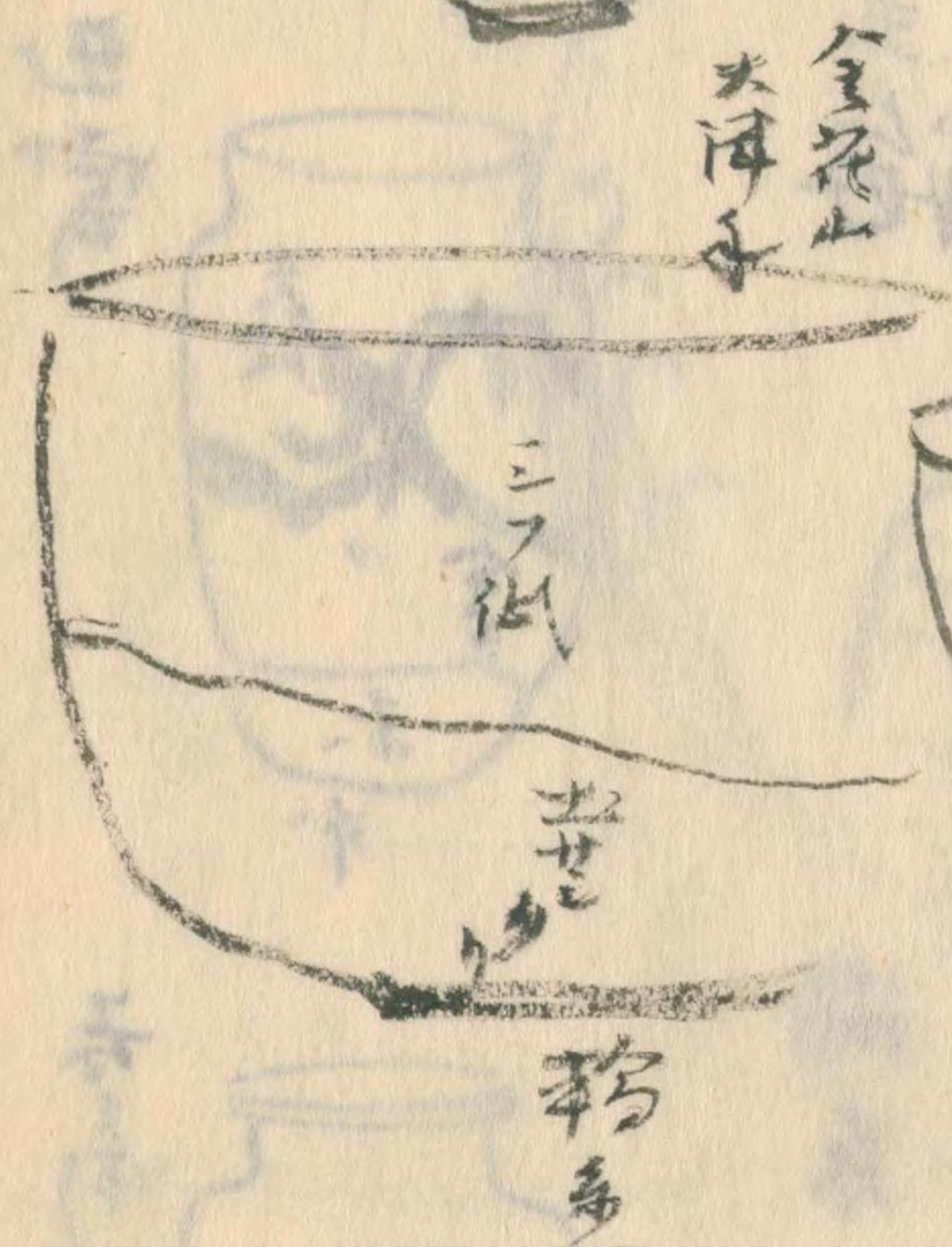

う九

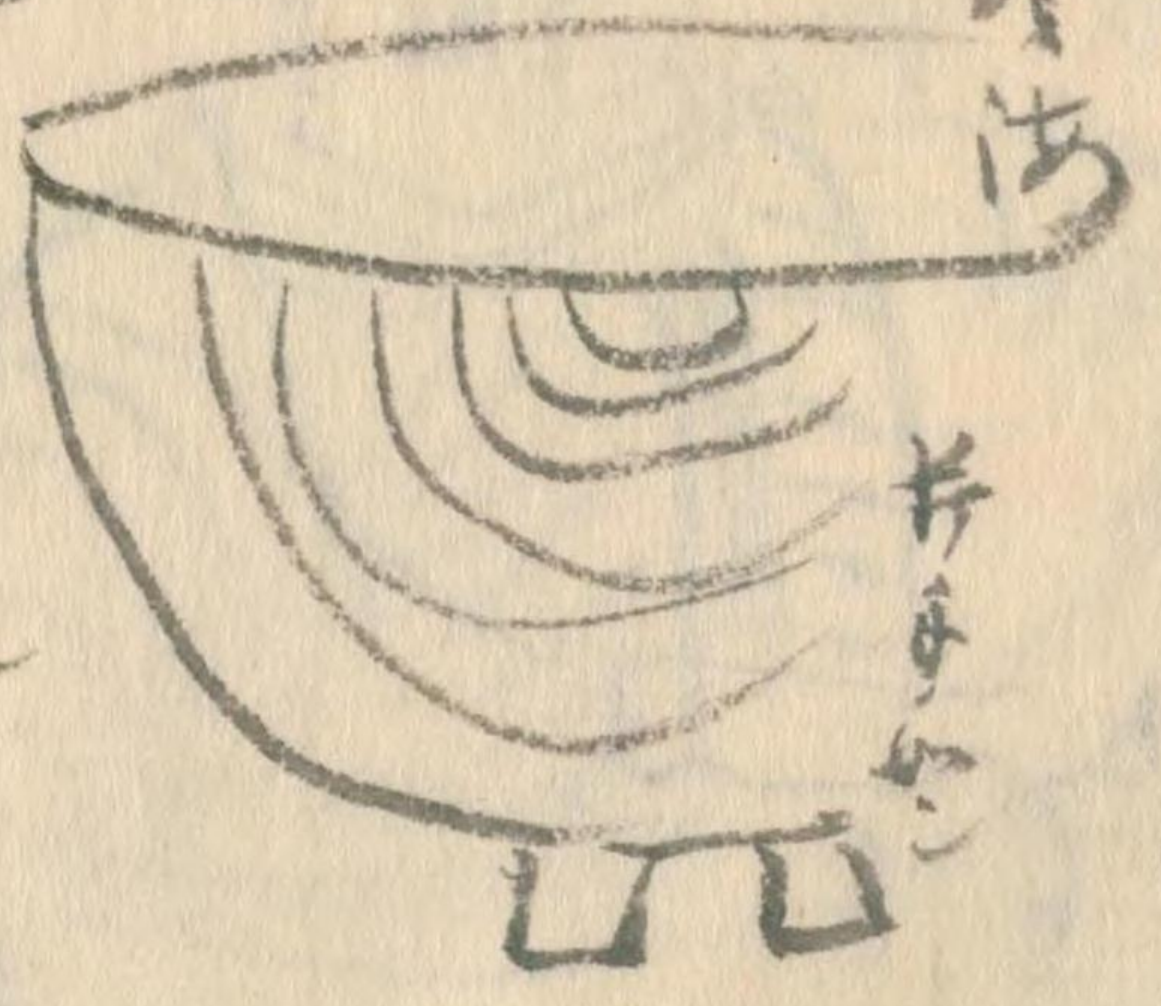

朝鮮

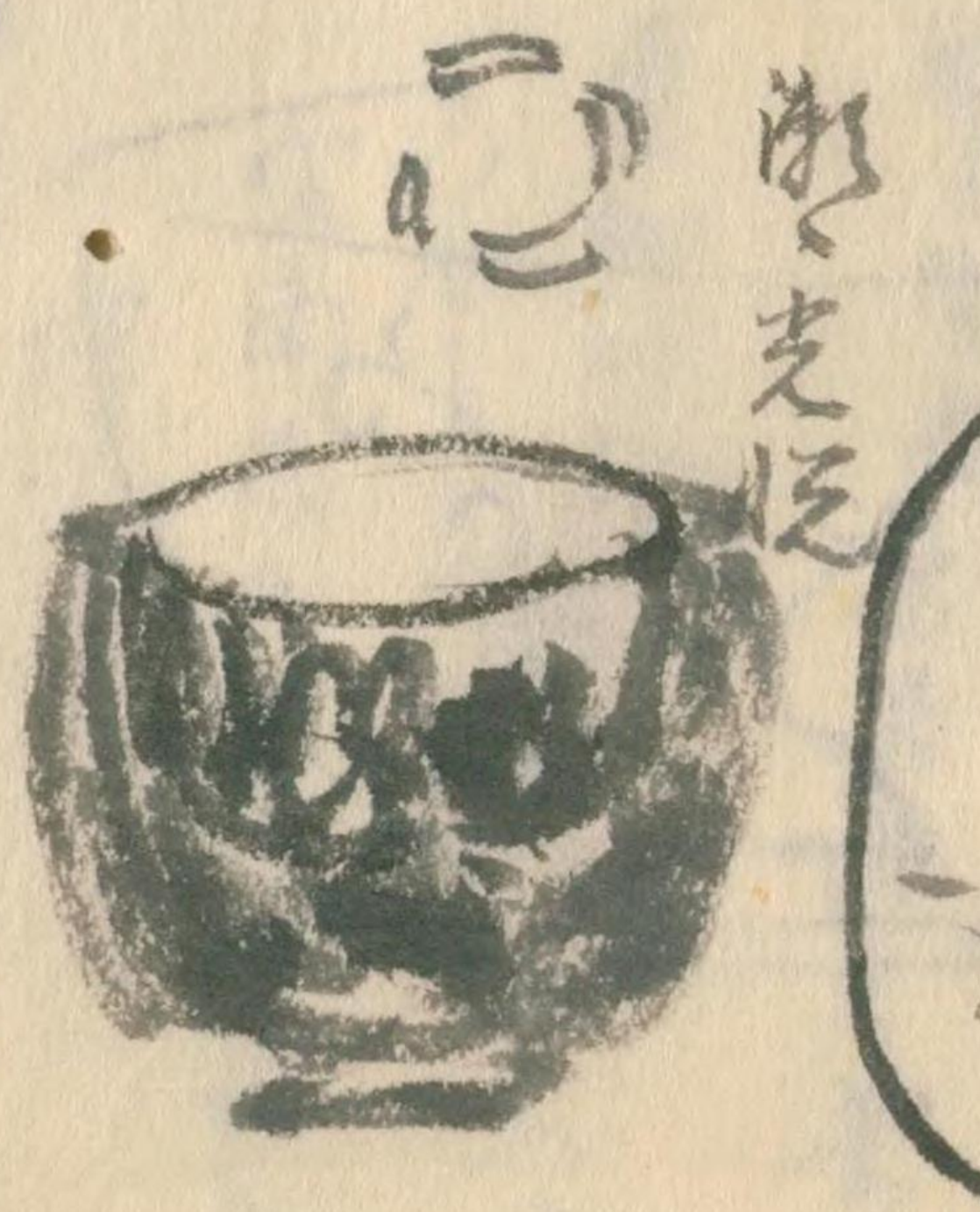

仮るの庵

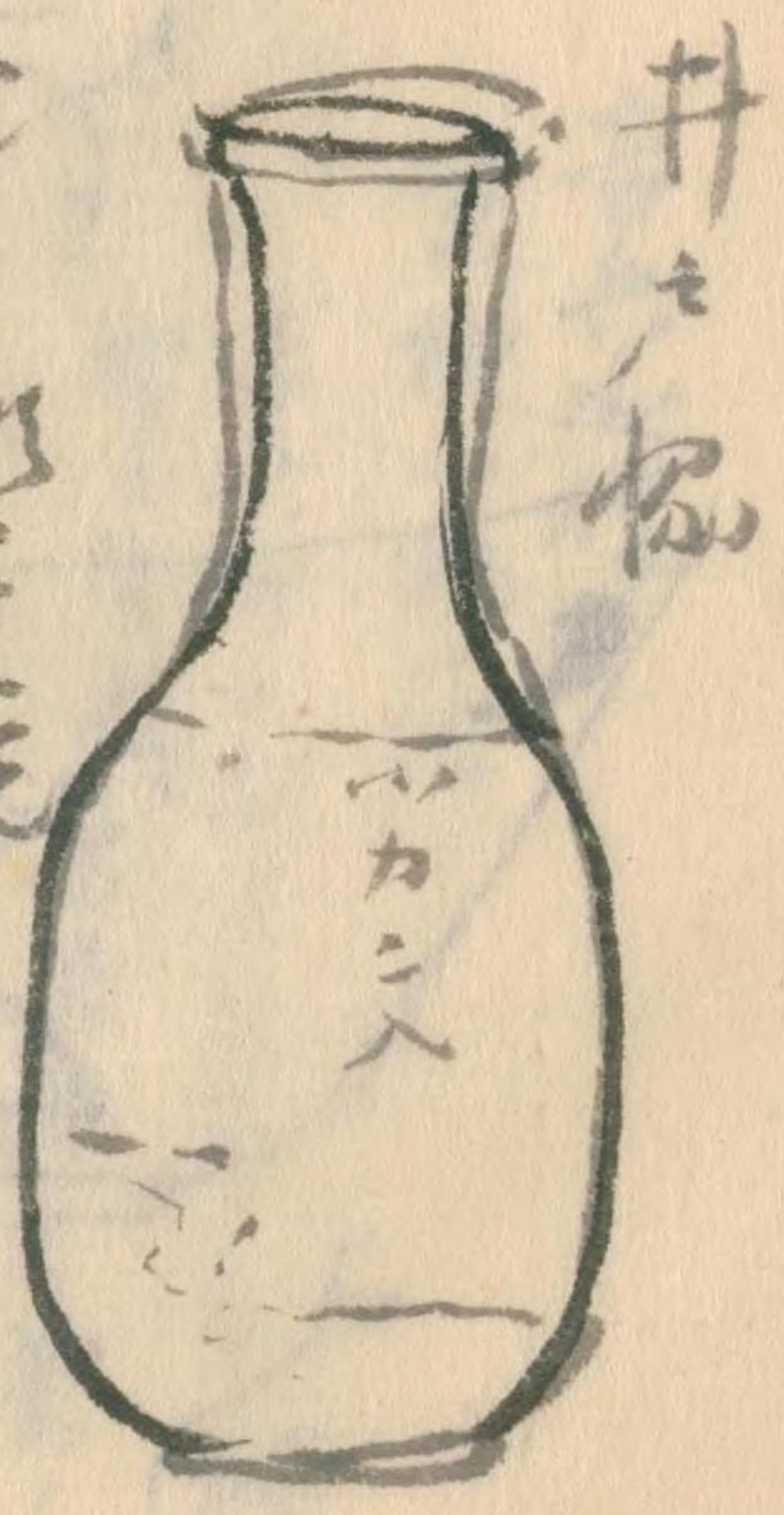

今利

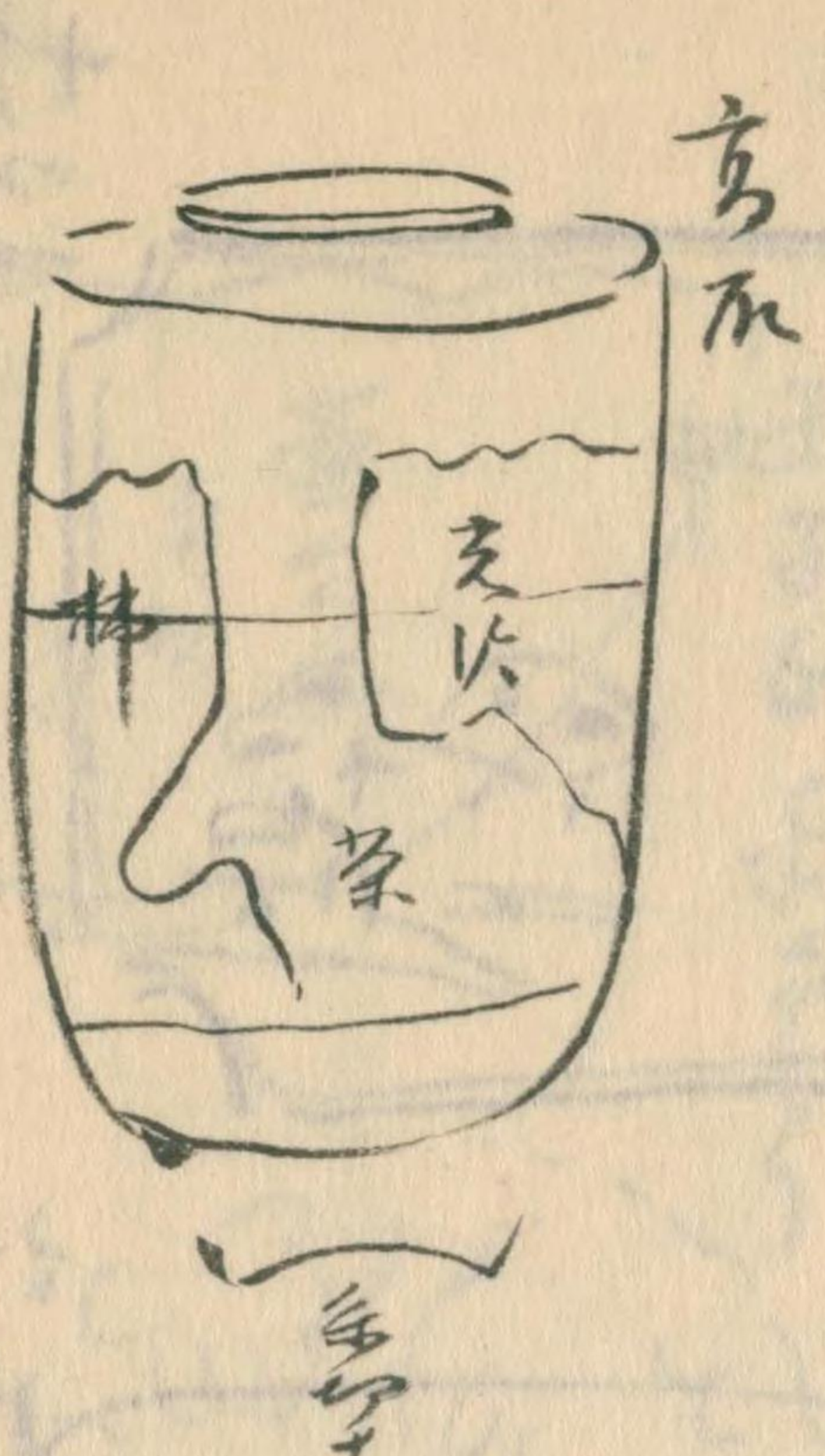

後今治

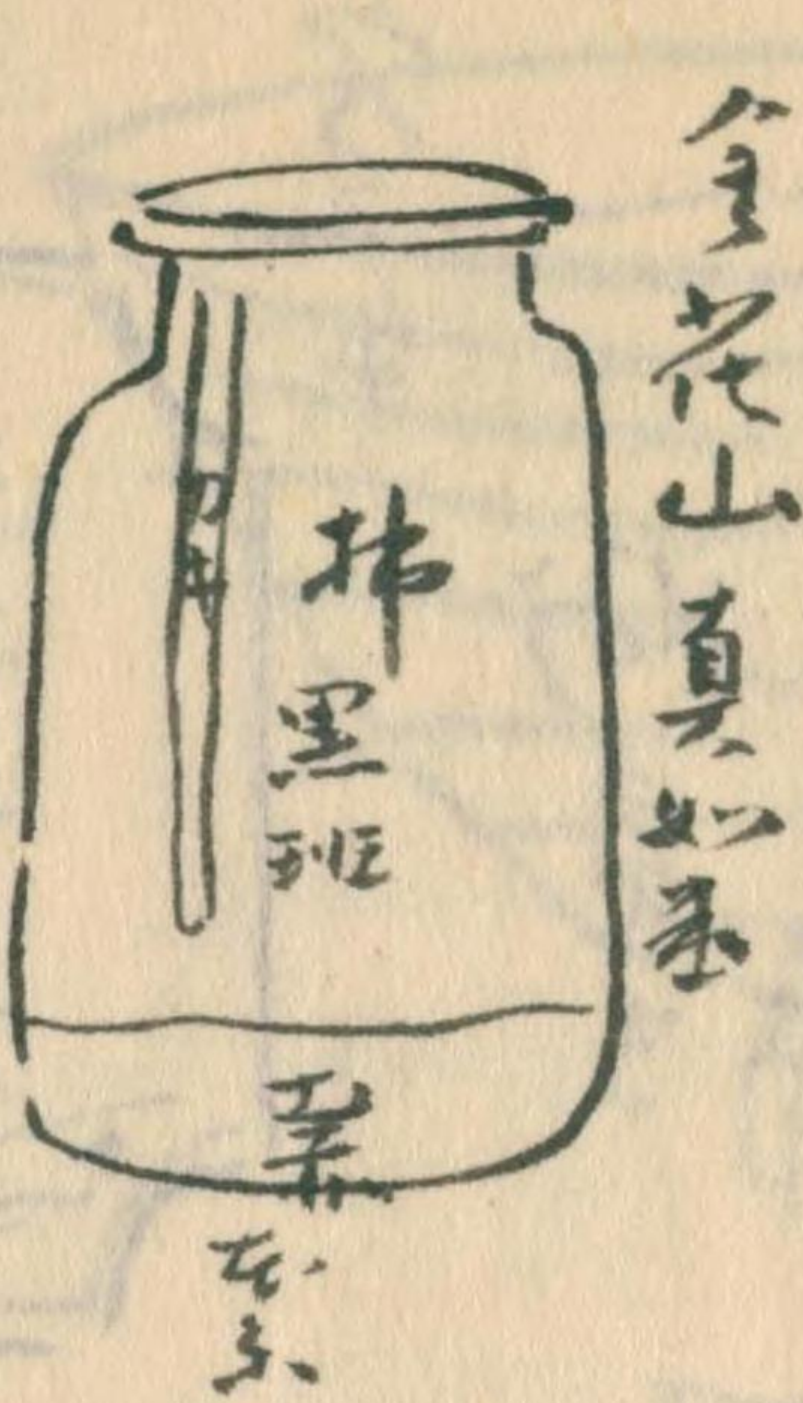

金花山
大津手
ニフ紙
土せき
粉手引

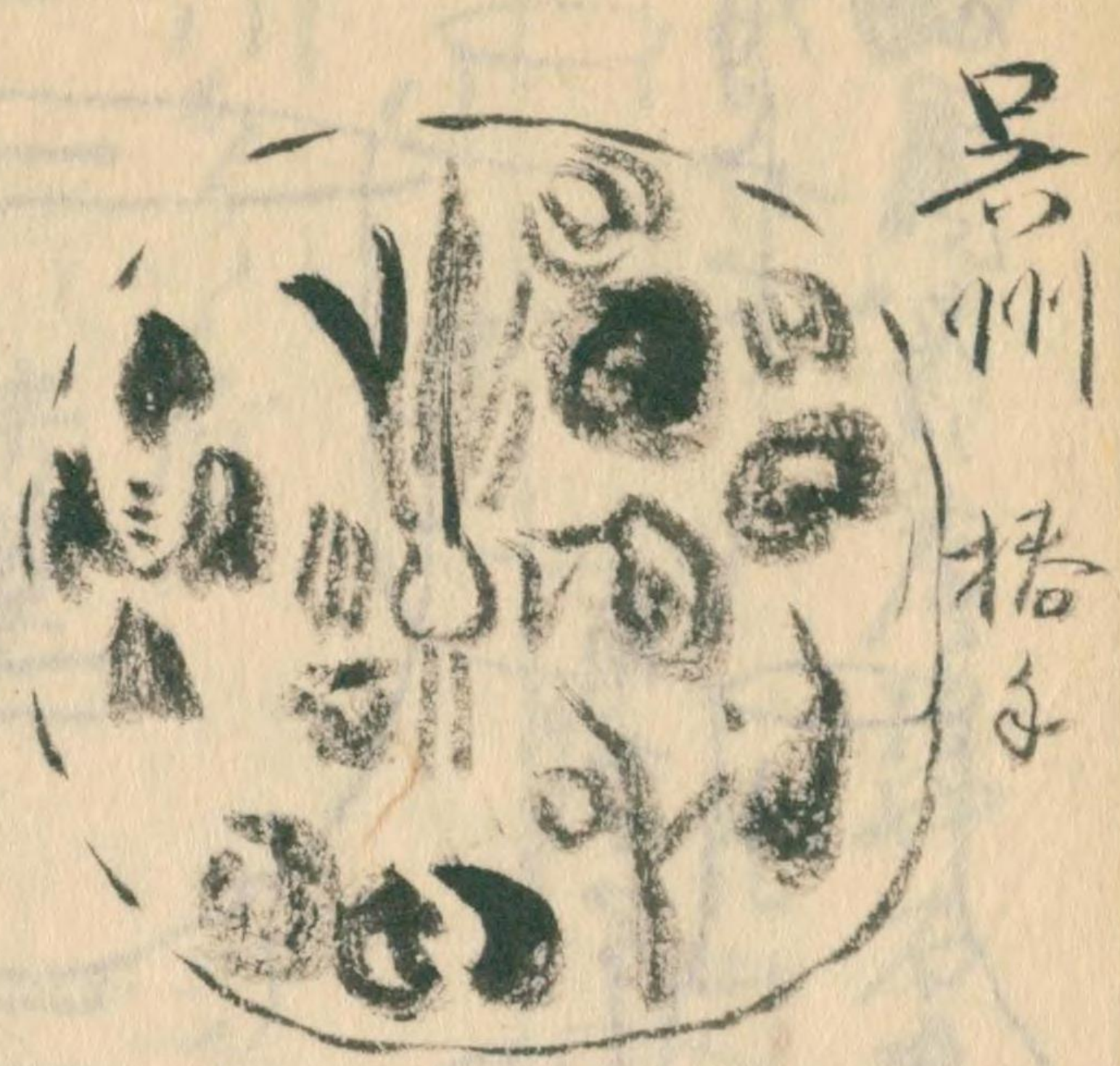

井手やき

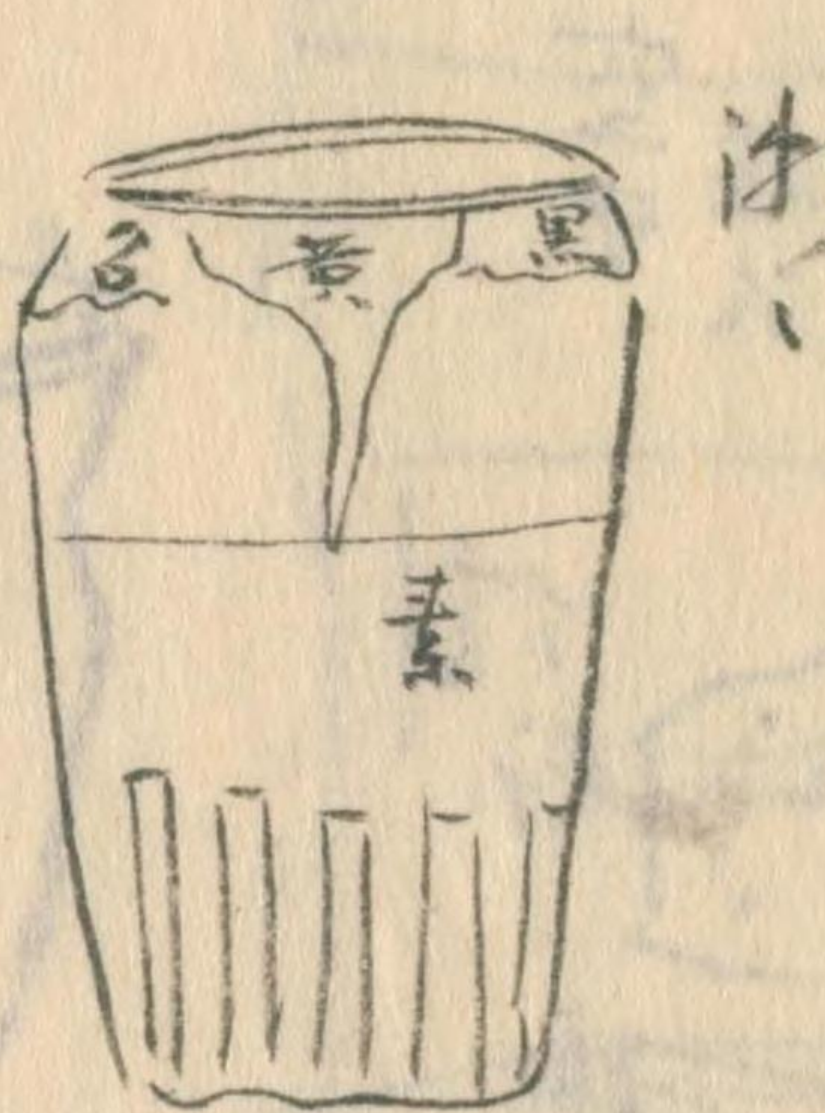

瀬戸光悦

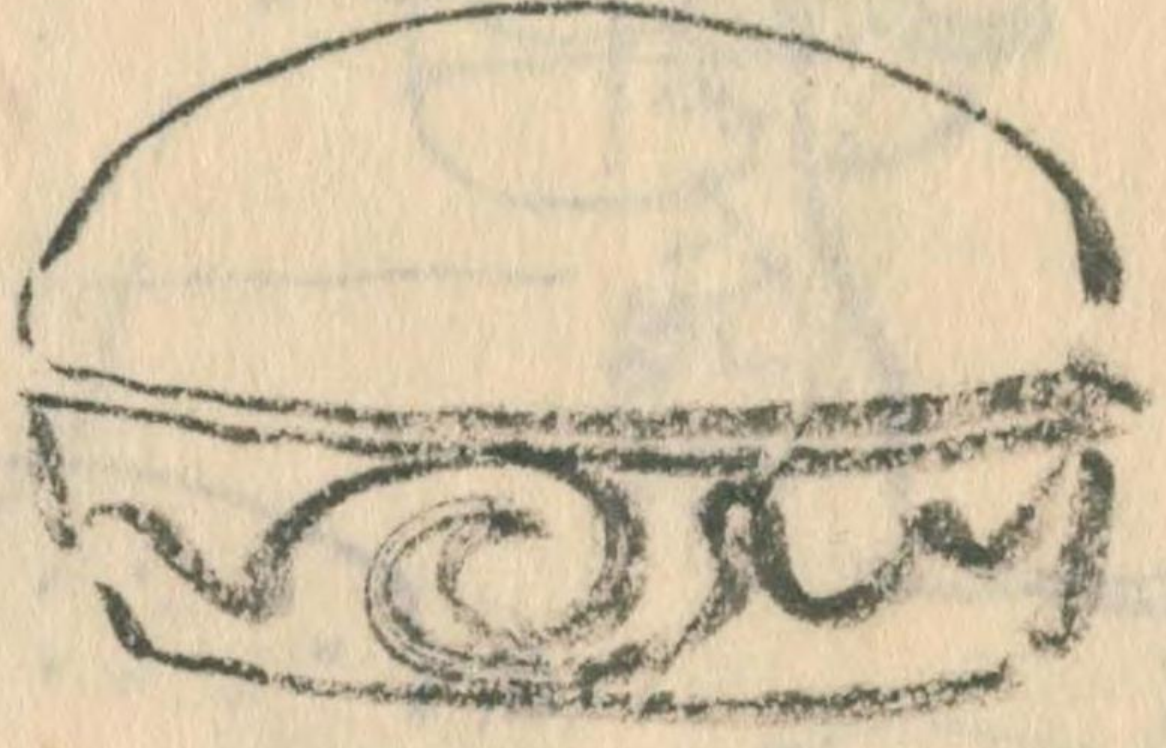

井セノ嶋
ソカン入

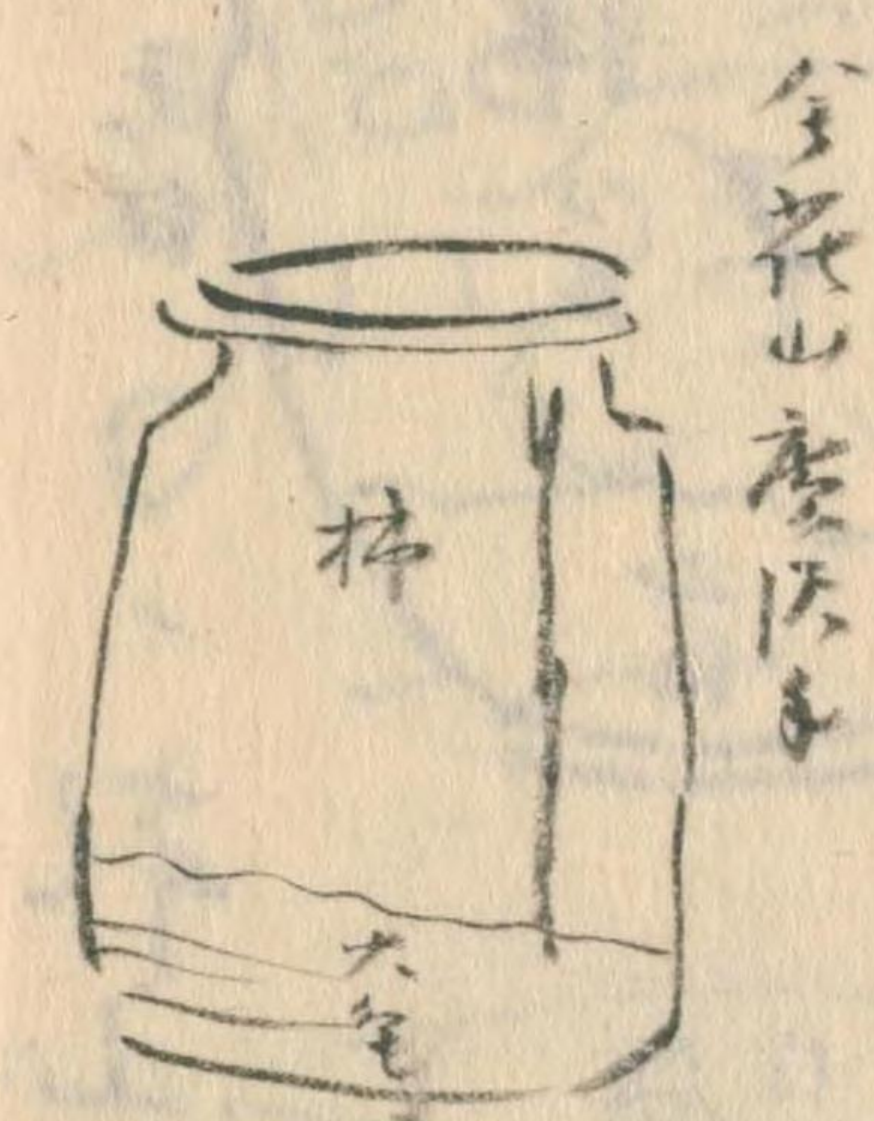

高取
柿
光沢
茶
手アナ

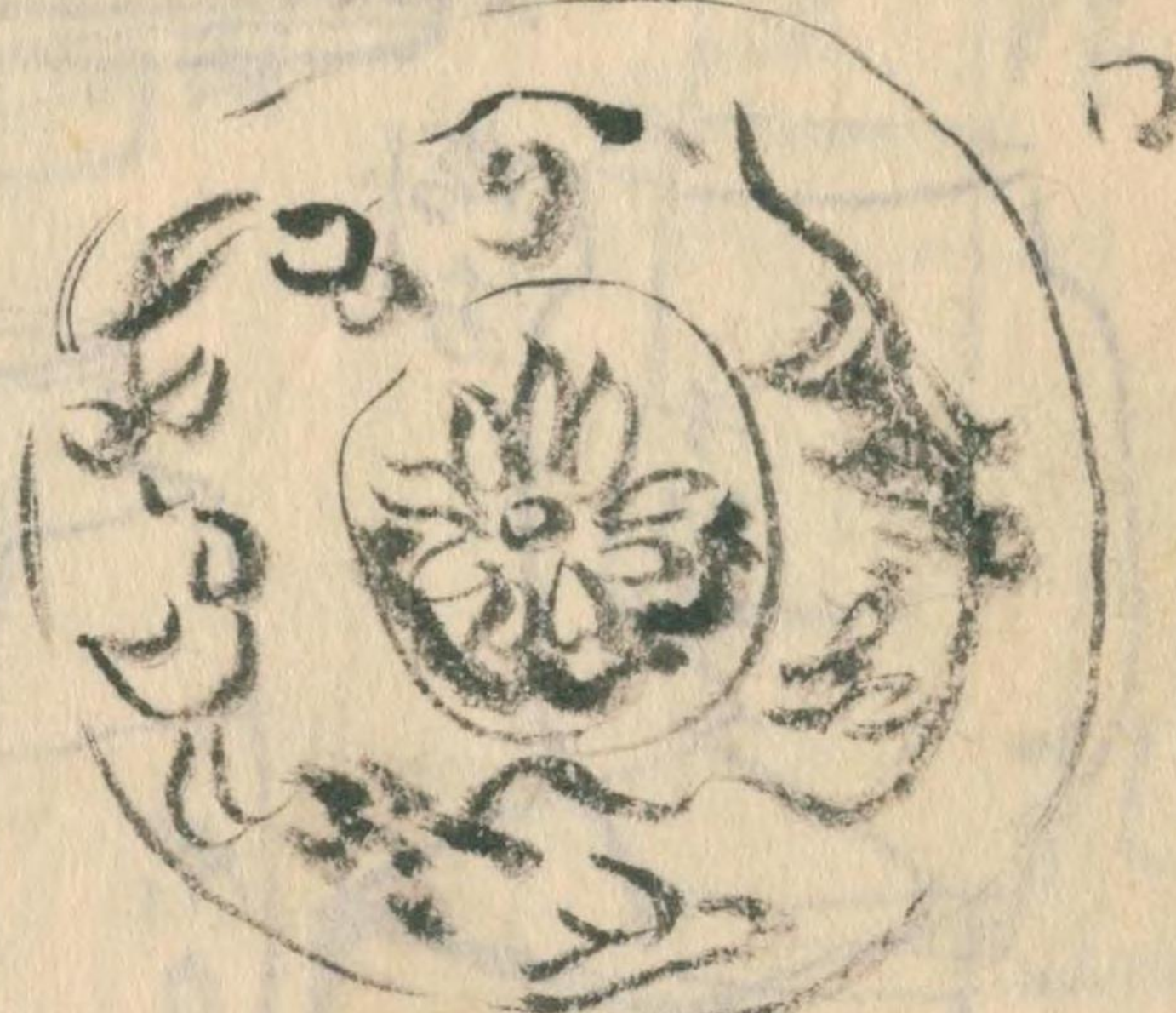

金花山 真如手
柿
黒斑
素
茶

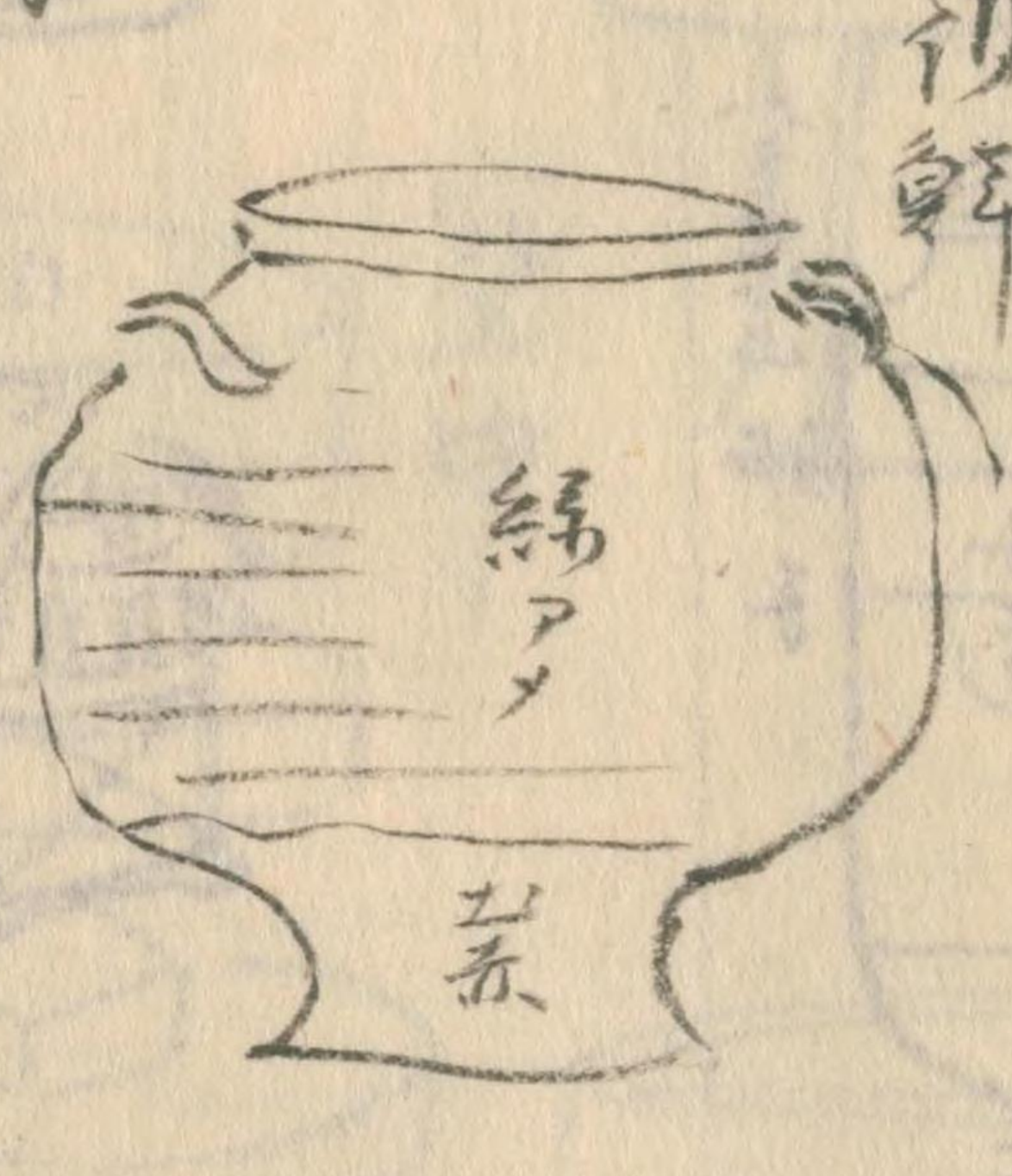

呉州 椿手

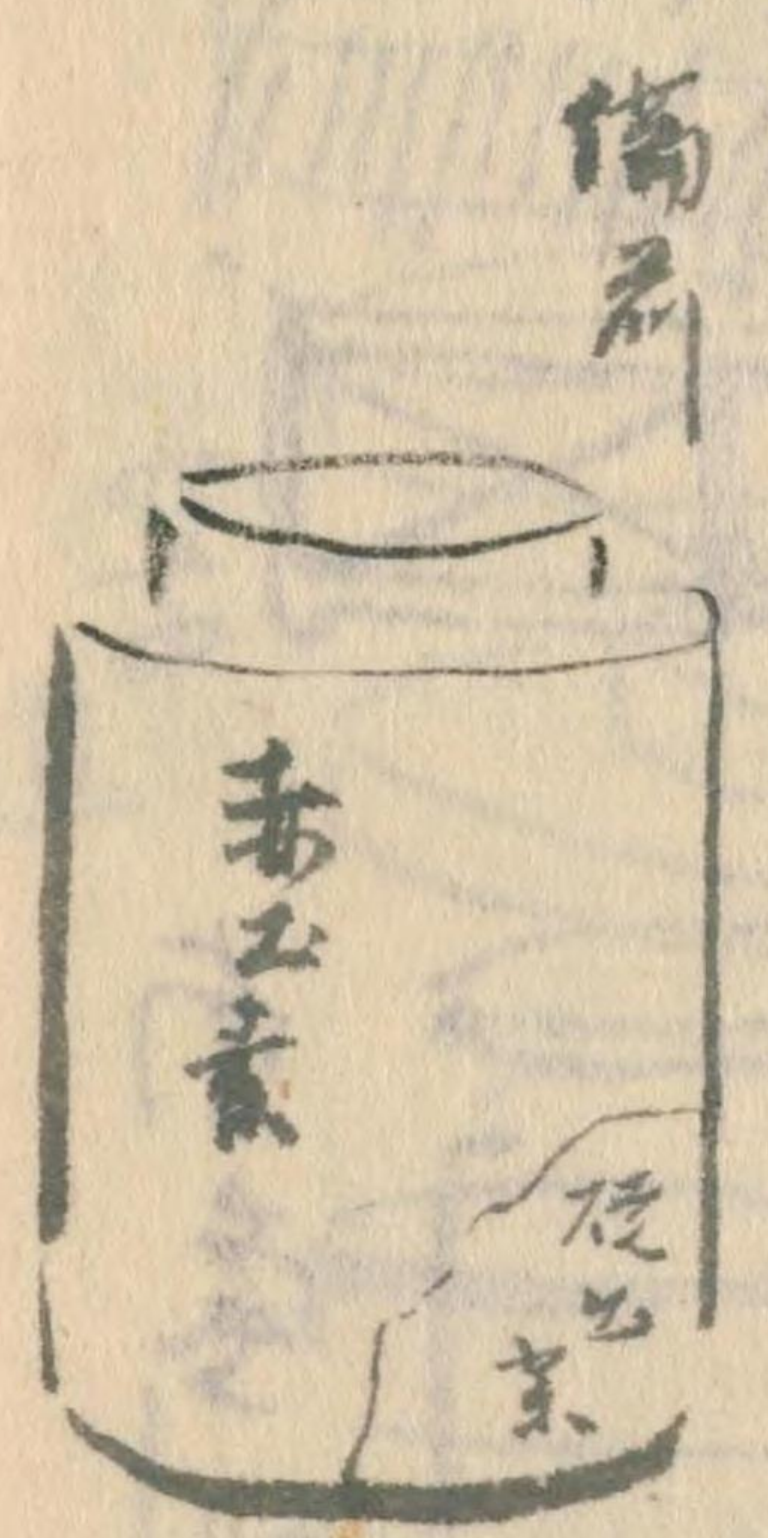

瀬戸
色
黄
黒
素

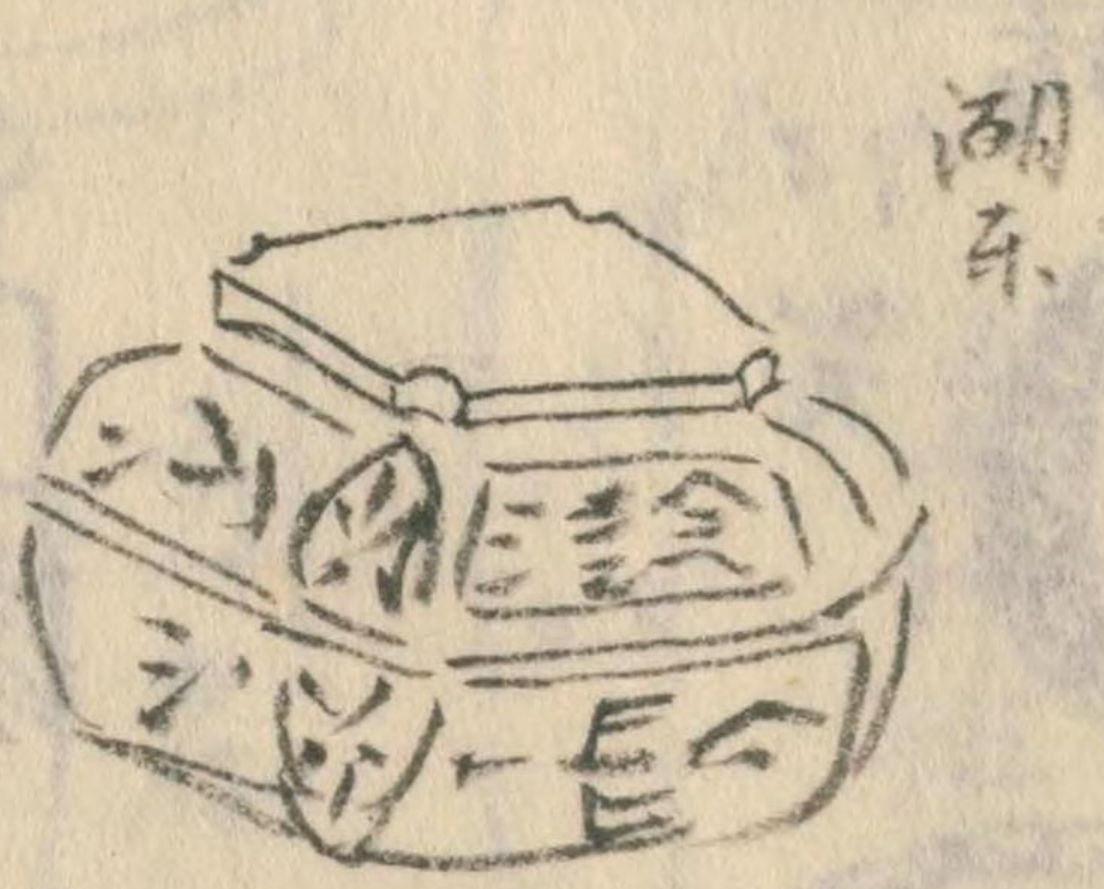


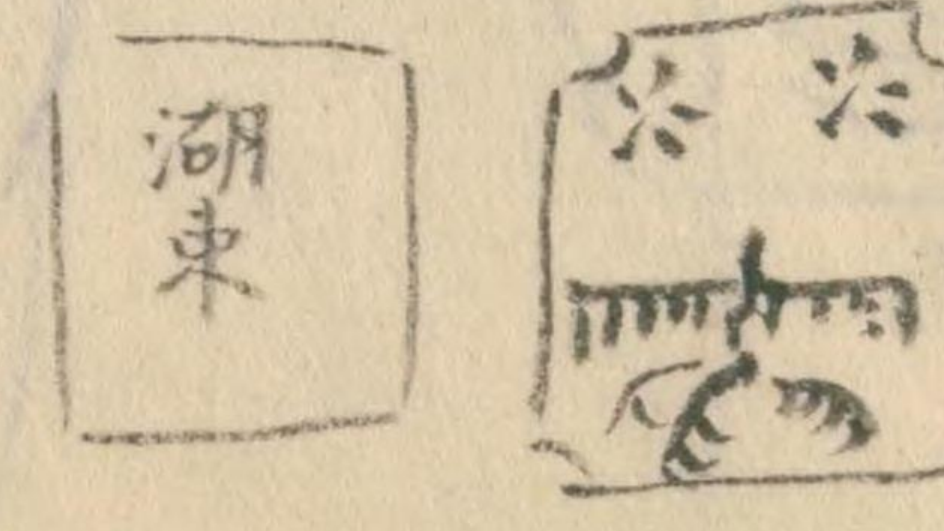

金花山 廣沢手
柿
大窯

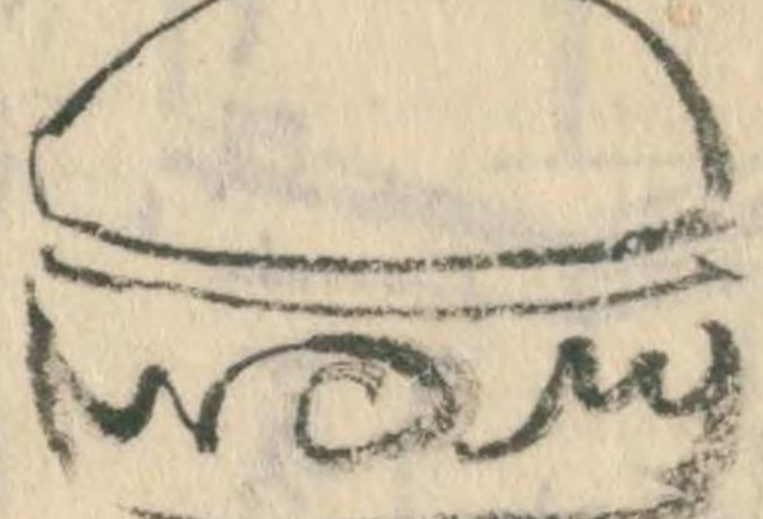

口

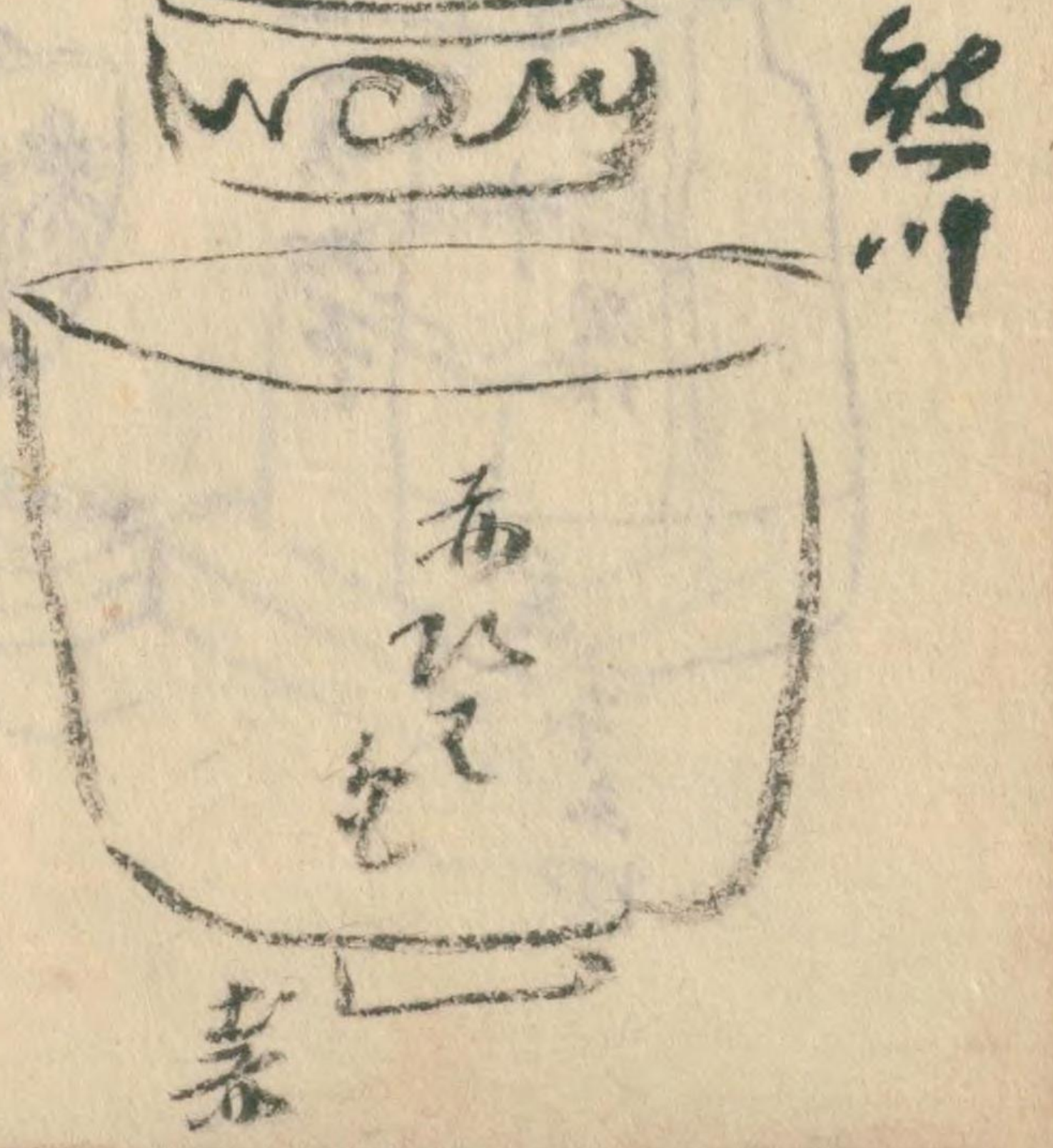

朝鮮
緑アメ
素


備前
赤土素
焼セ 素


湖東


湖東



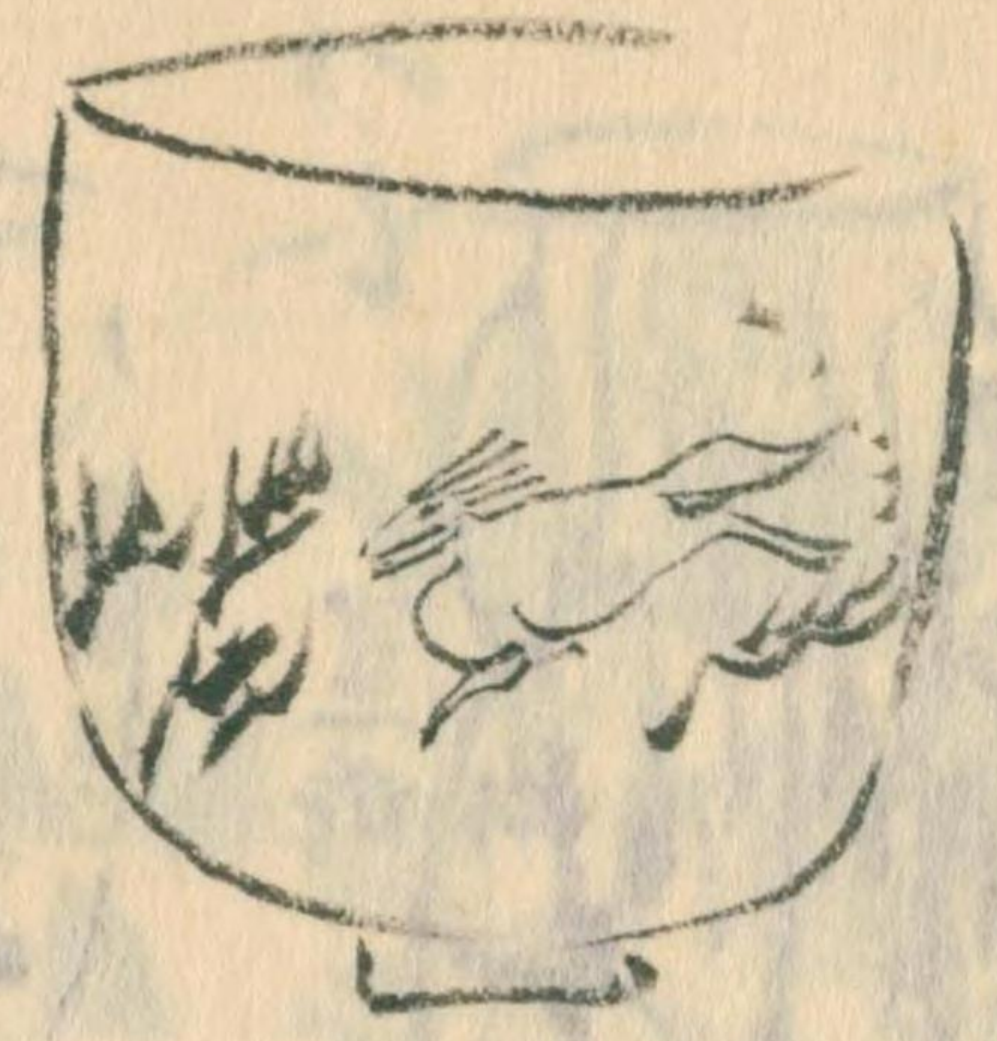

絵川
赤ひてを
素

841
124

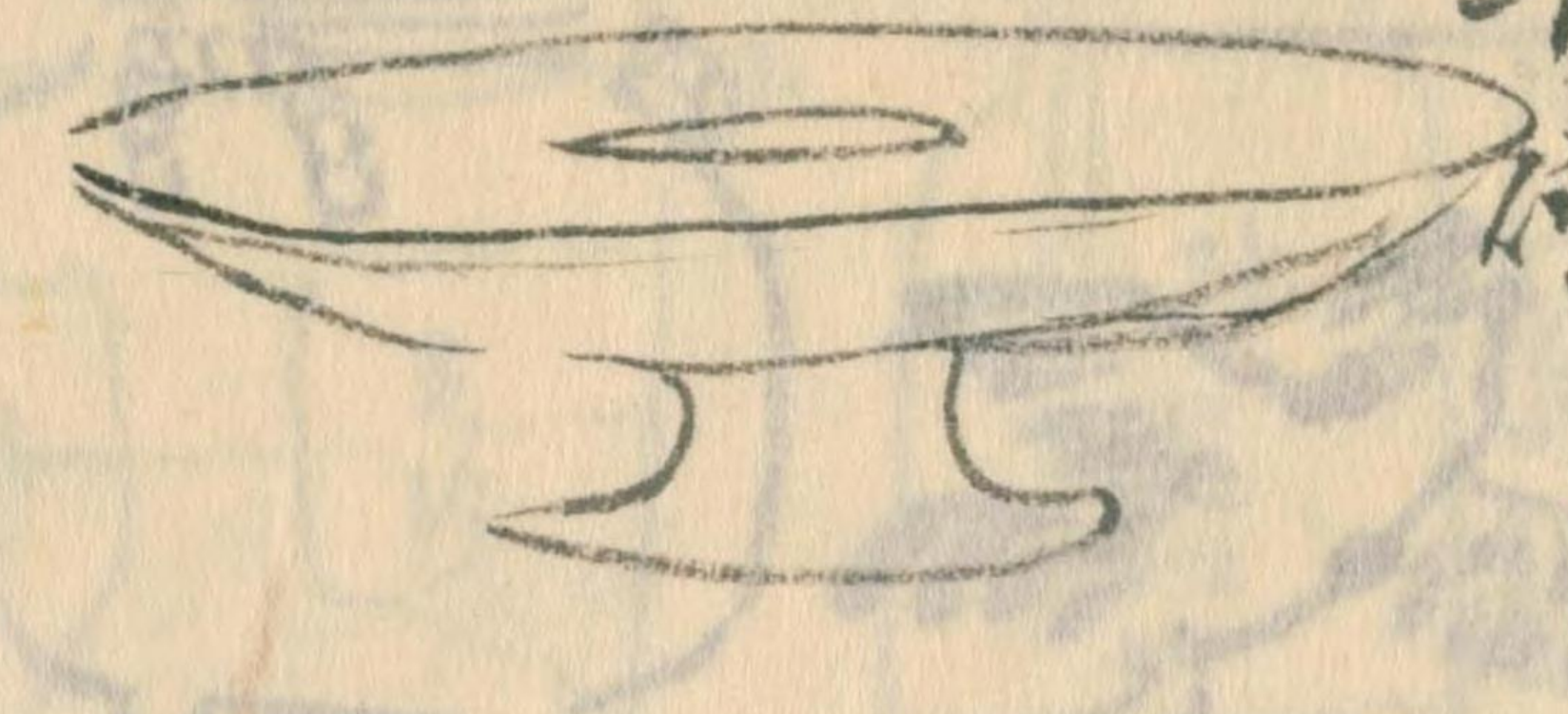
六

四日市丸く

ドコス

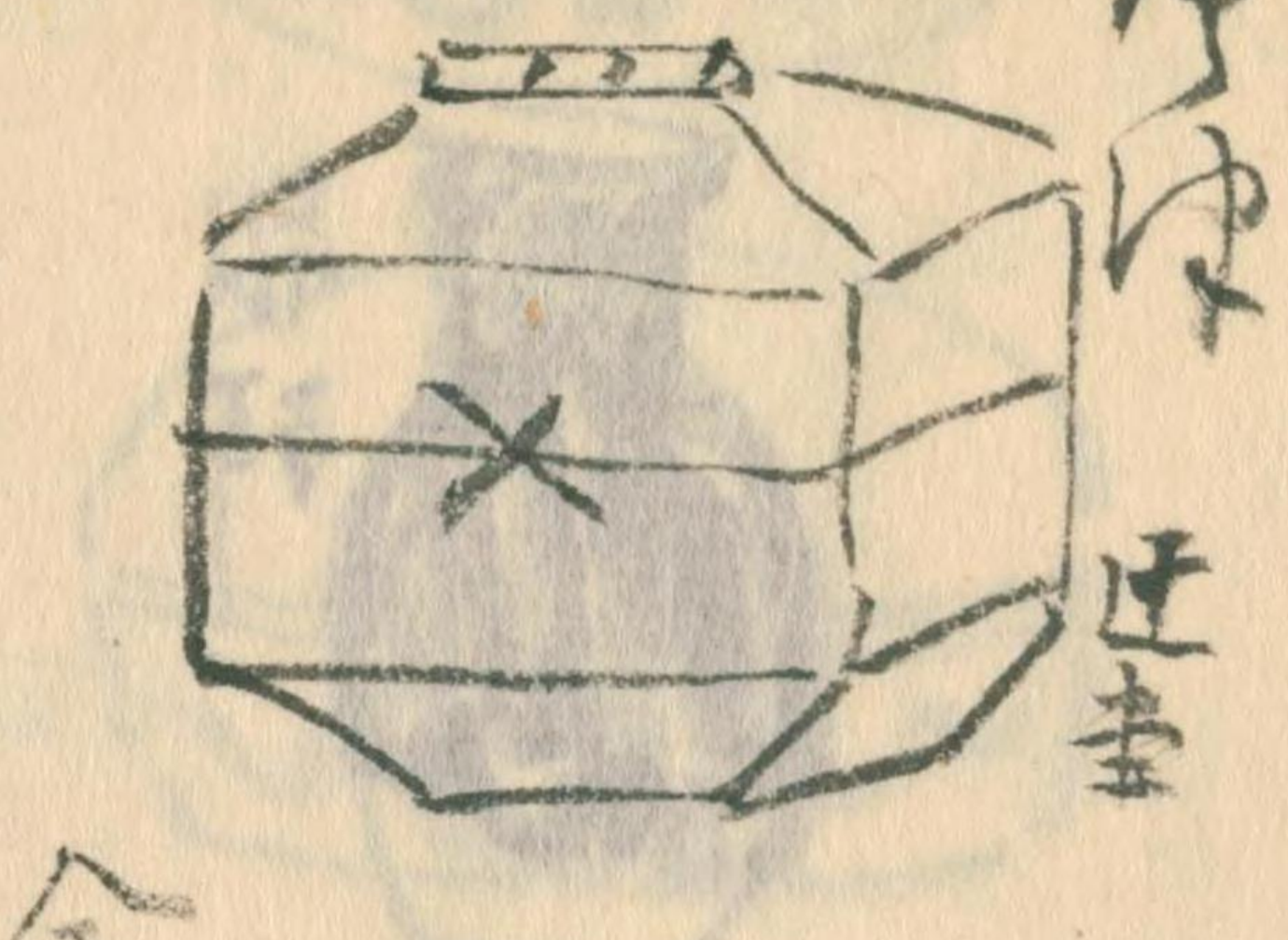


安南香炉



南蛮

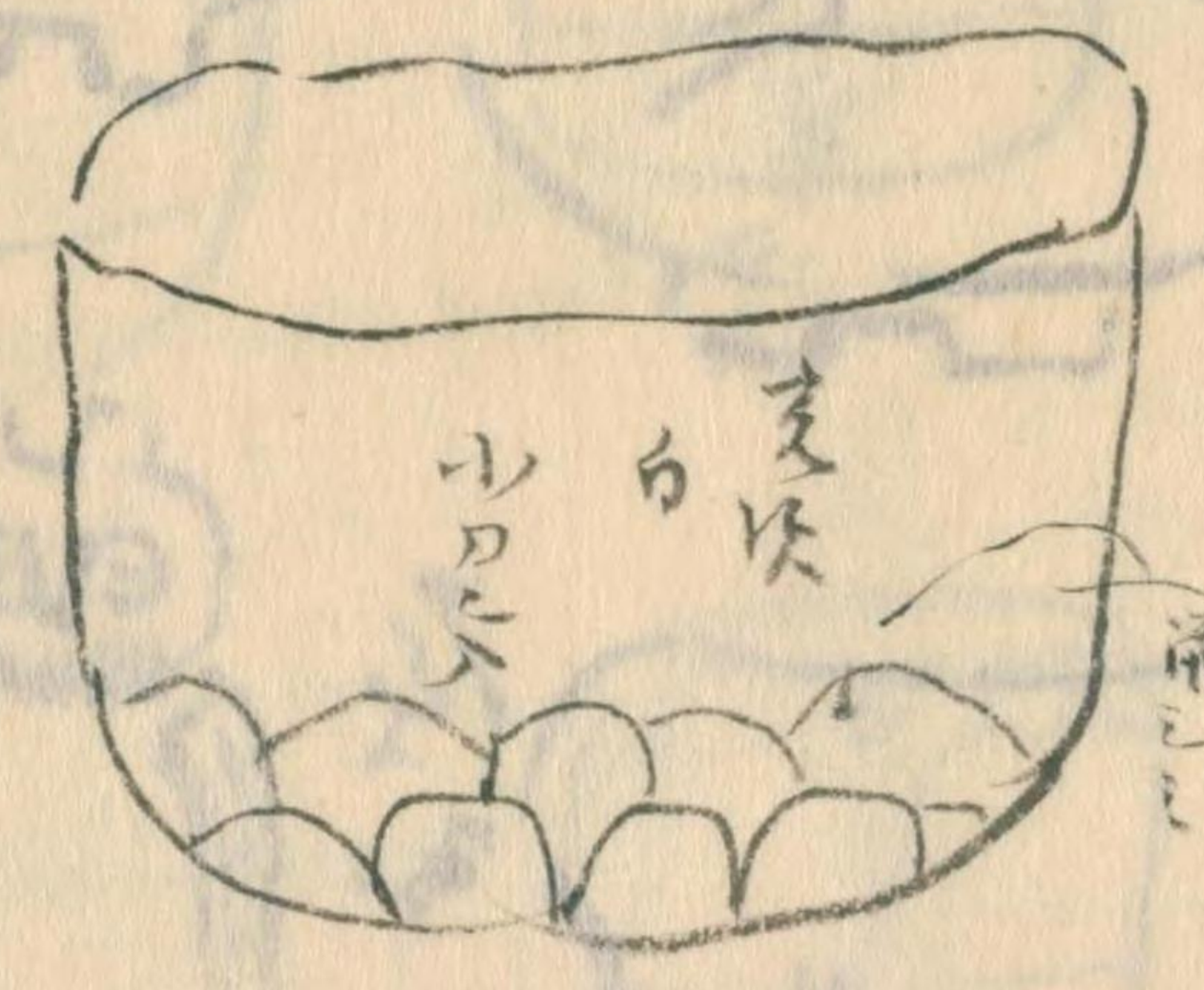
辻蓋



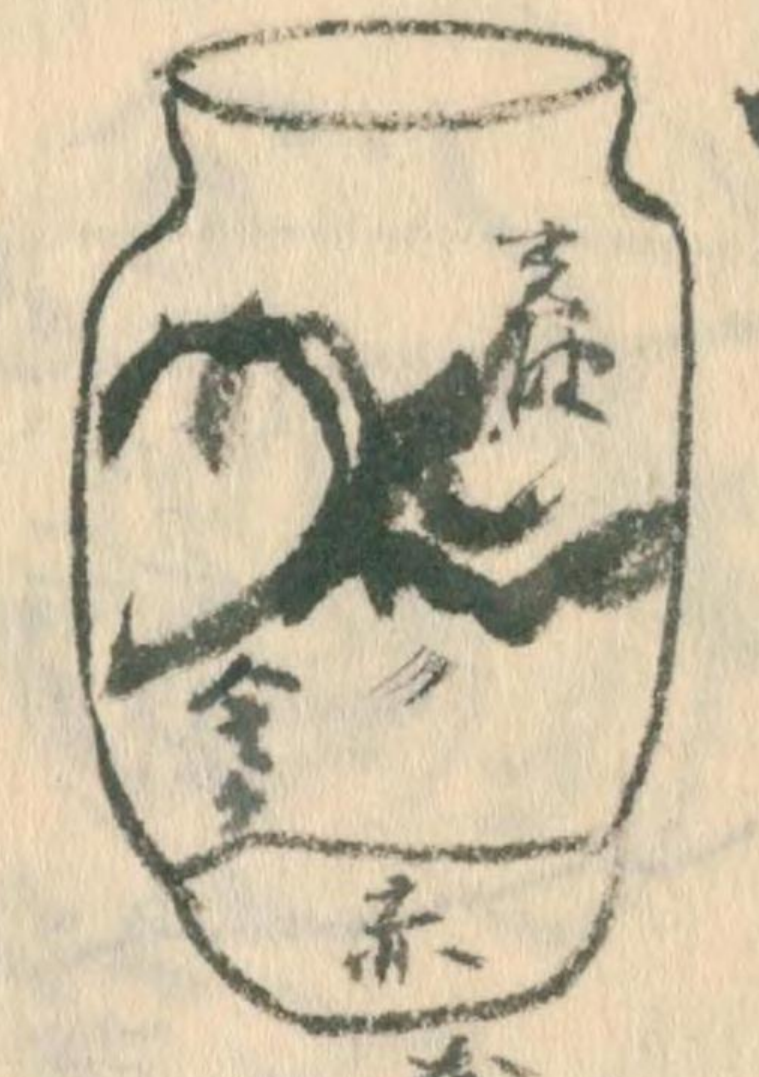
粉吹

呉太ノ如シ

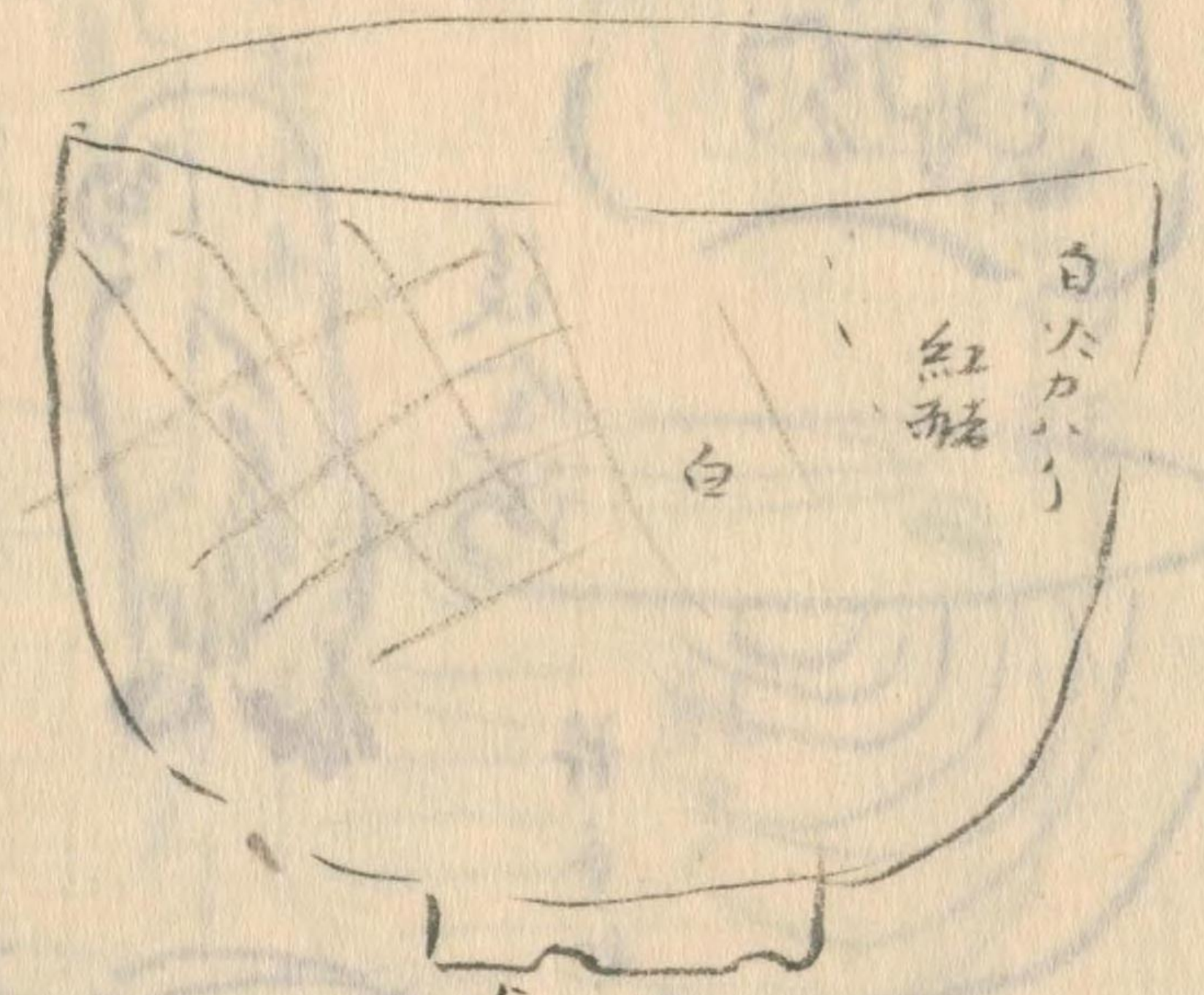
荒シミ



出雲



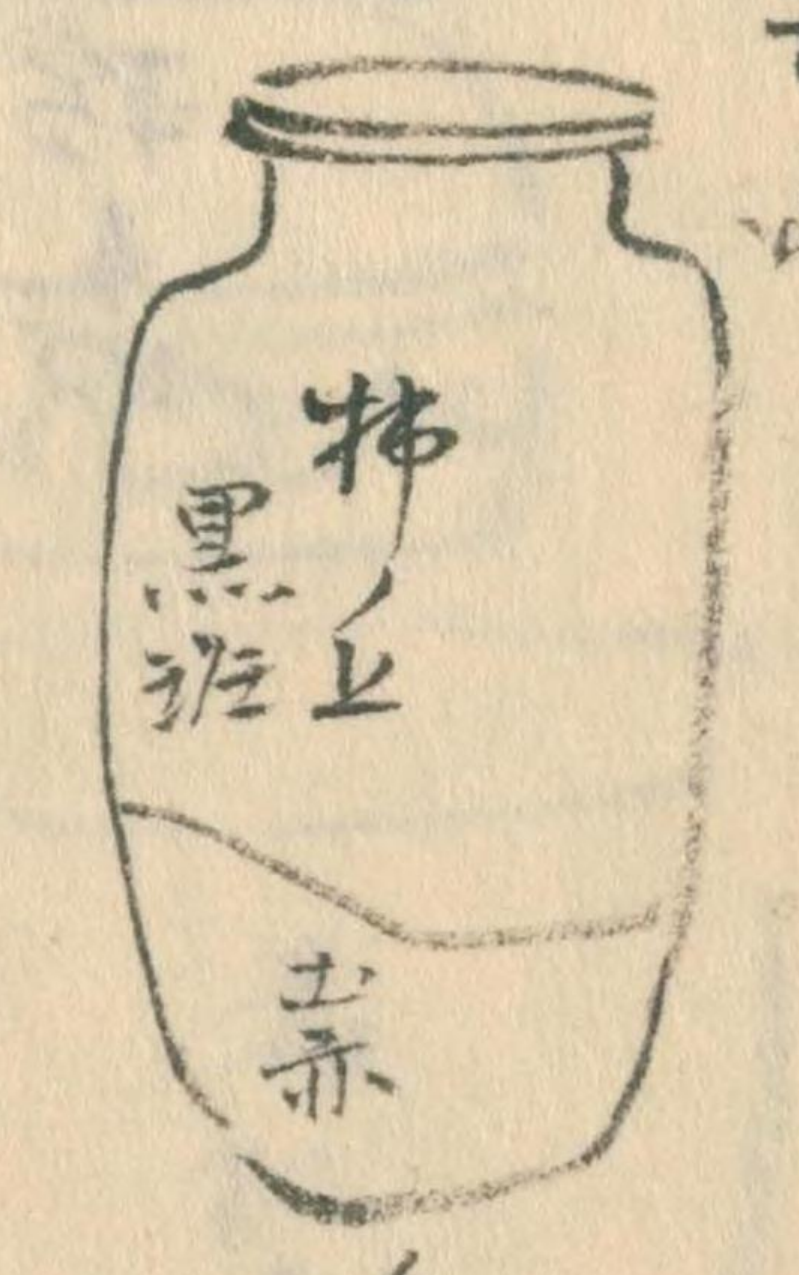
金海



土白

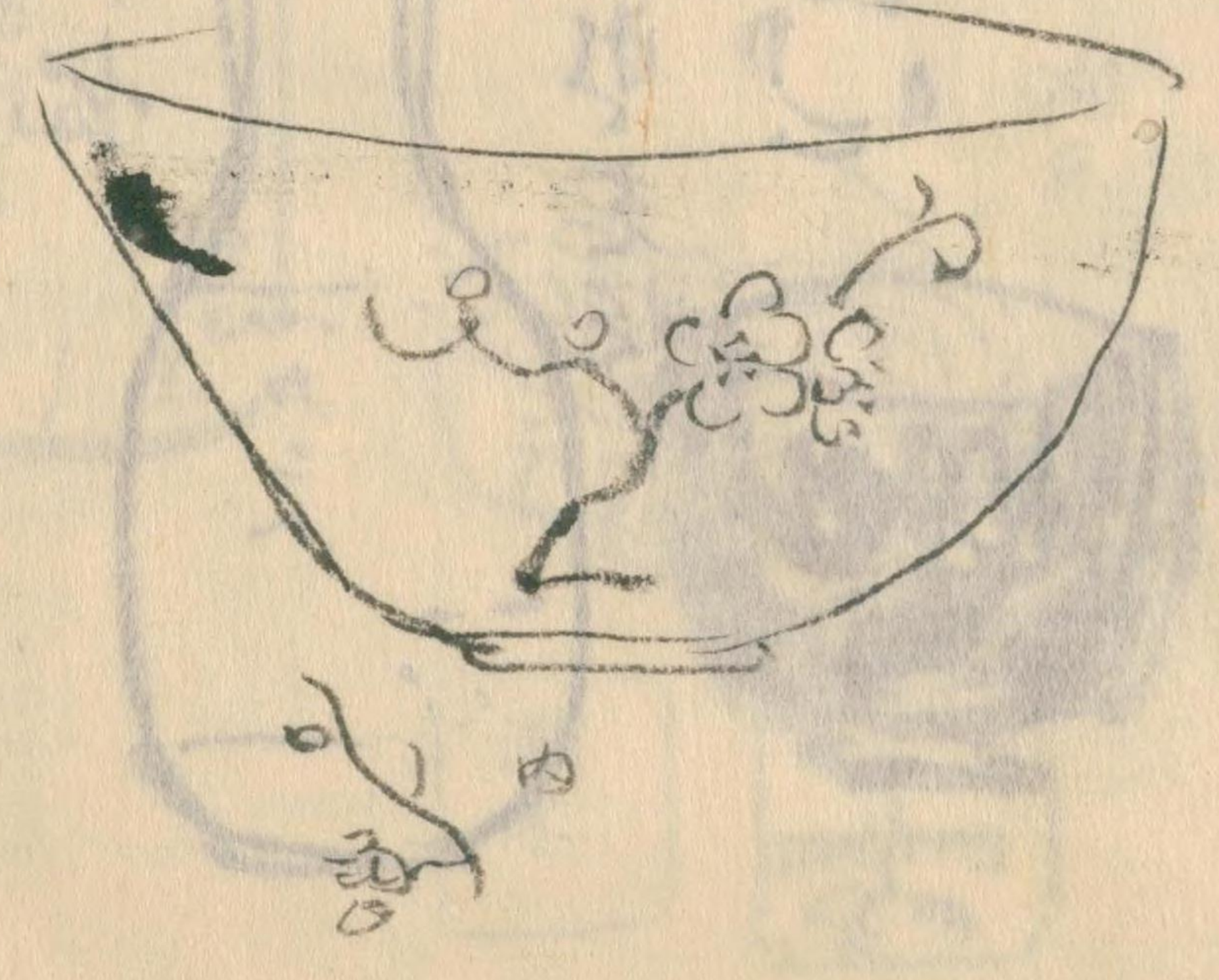
火モアリ

吉向

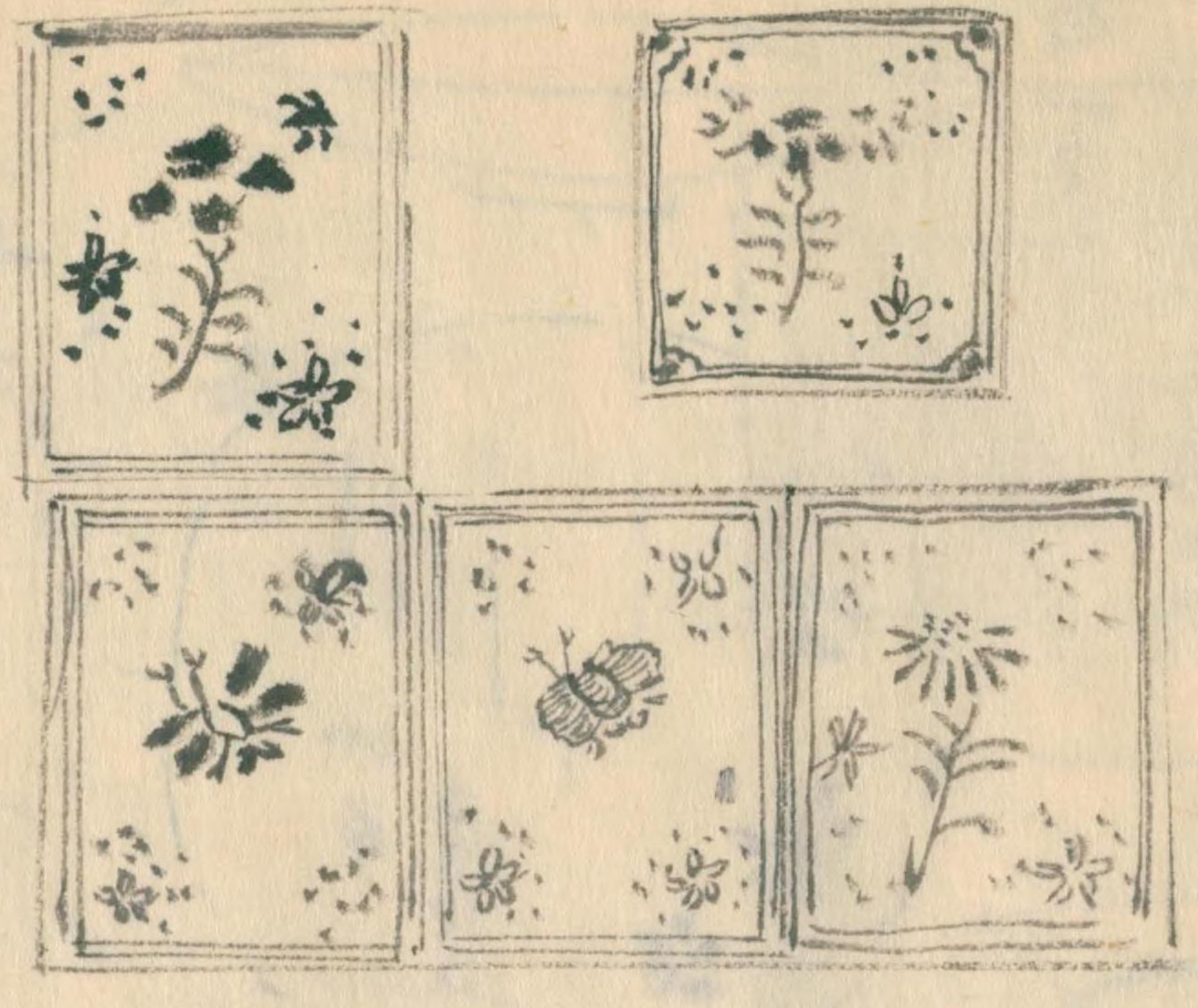


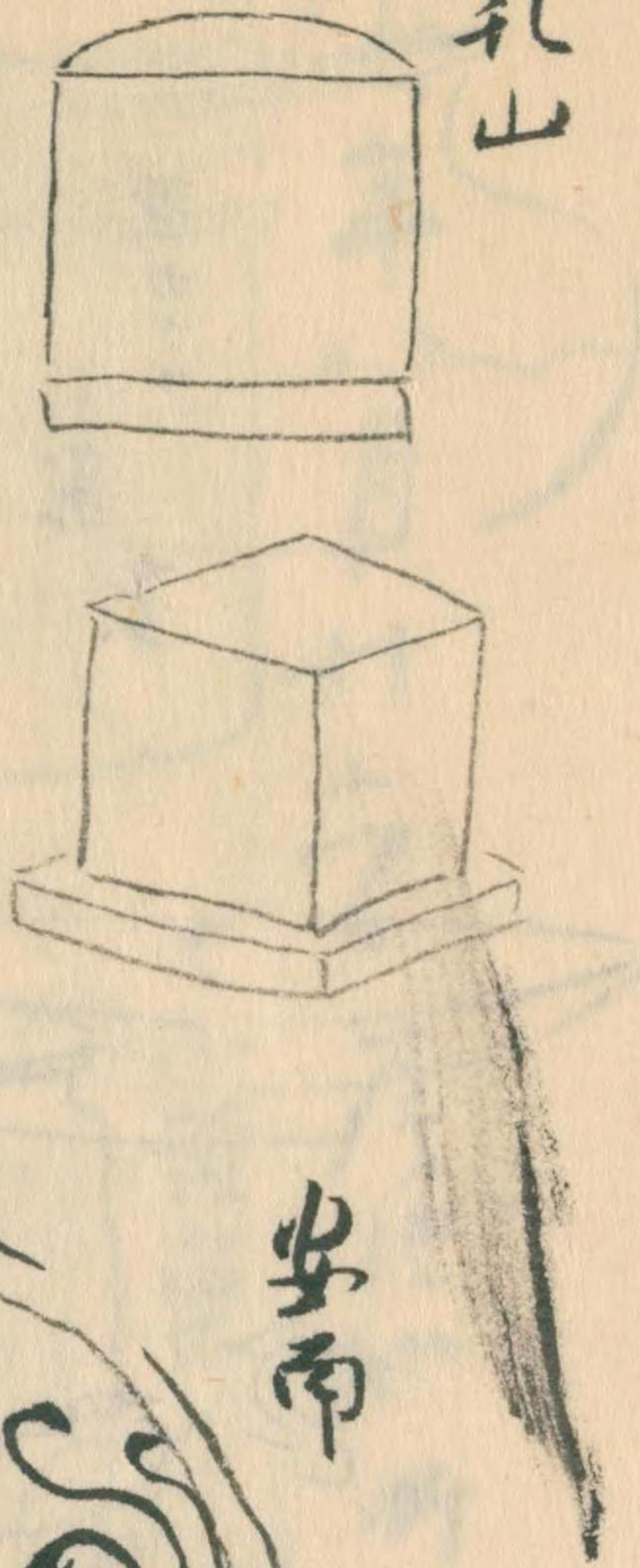
糸切ナシ

湖東

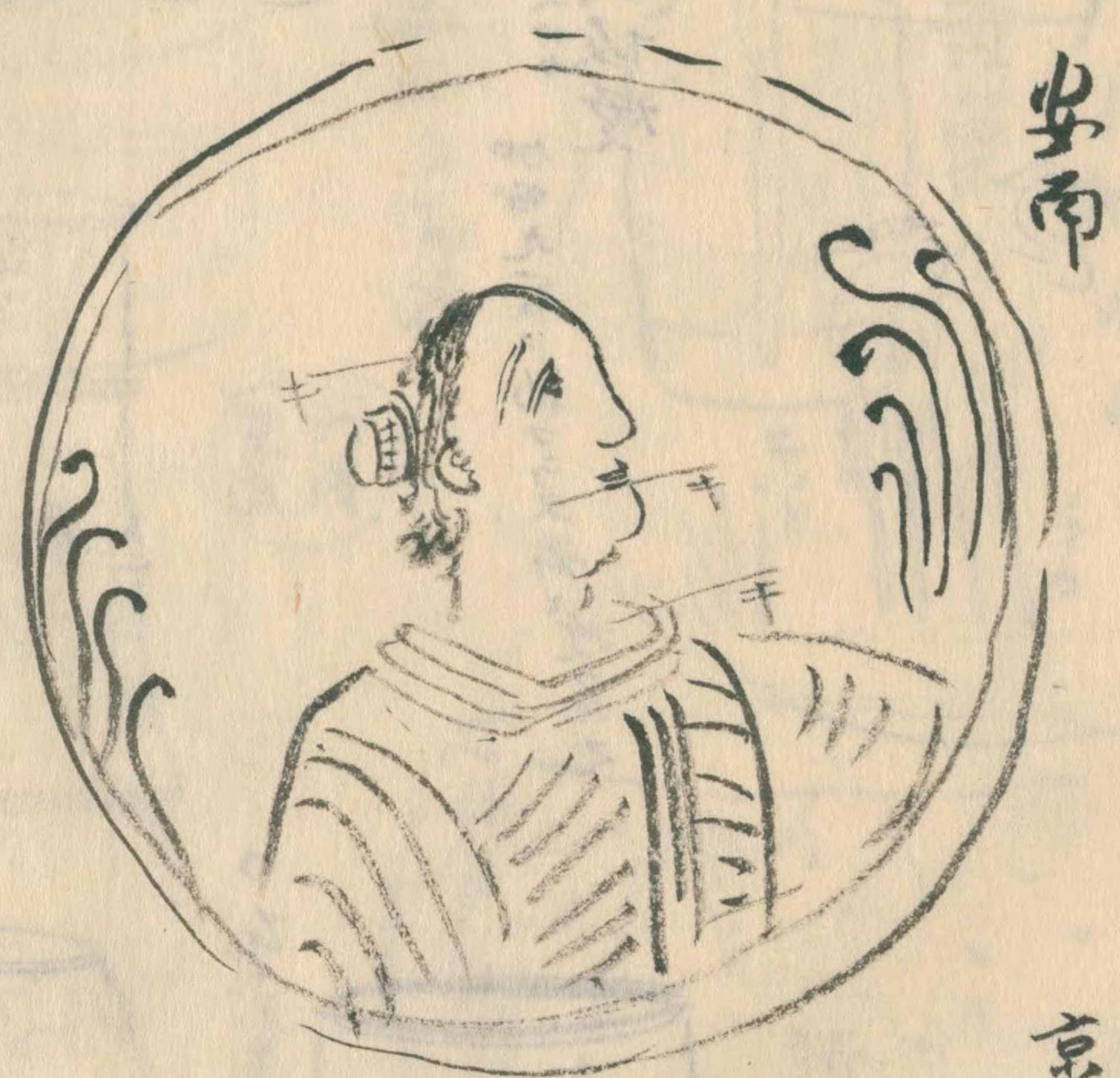


乱山





安南



吉岳山焼

京押小路住

吉岳郎ノ末万屋市ニ至ル

今ニ有之茶器道具業ノ人

寛政時代　東山ニテ茶入ヲ焼

ナシセトニ写シヲ焼之

宗南吉岳山焼物茶入ノ内

相定ナレテ

深山木　雲谷花

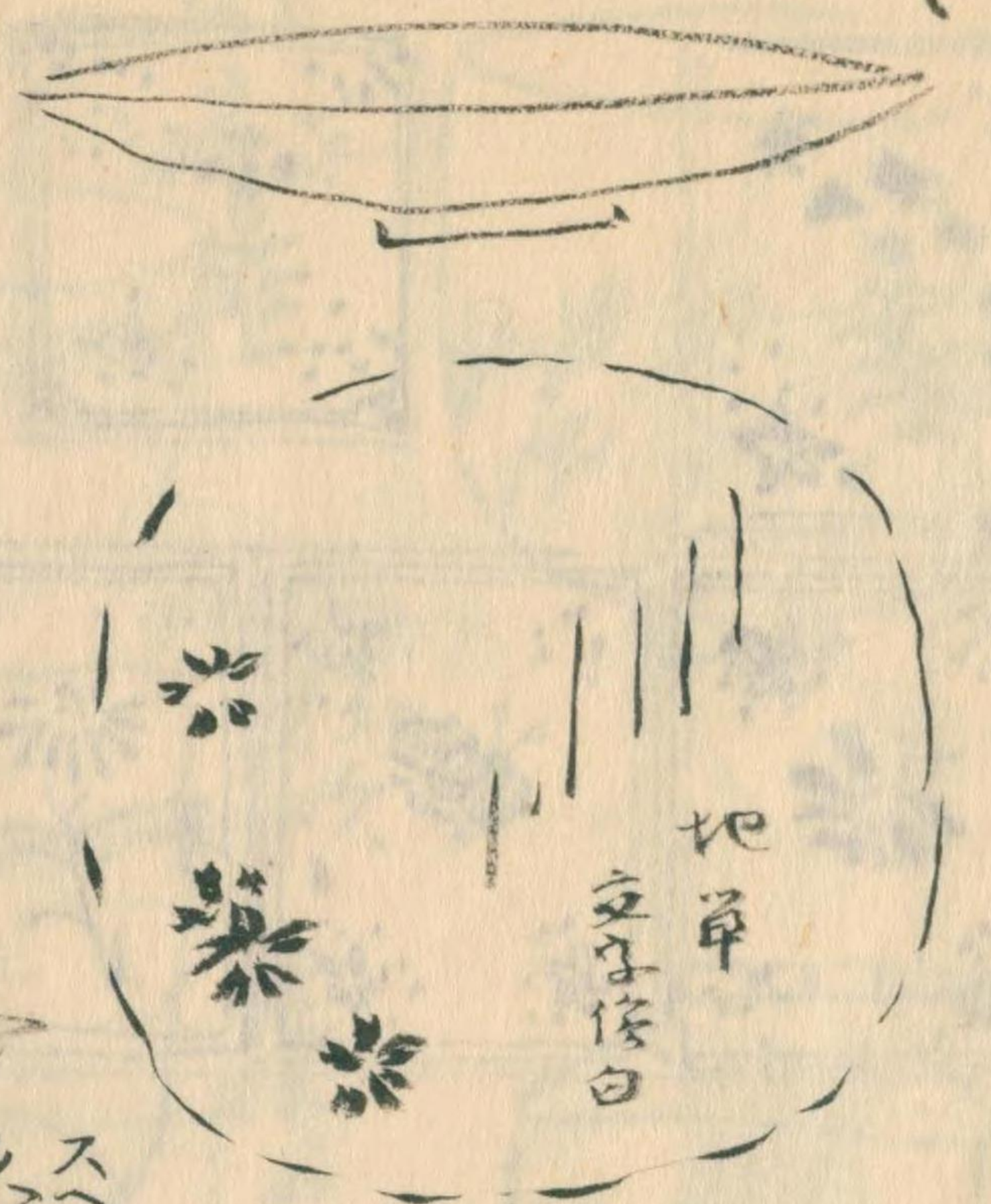
小窟　小堀宗花

841
124

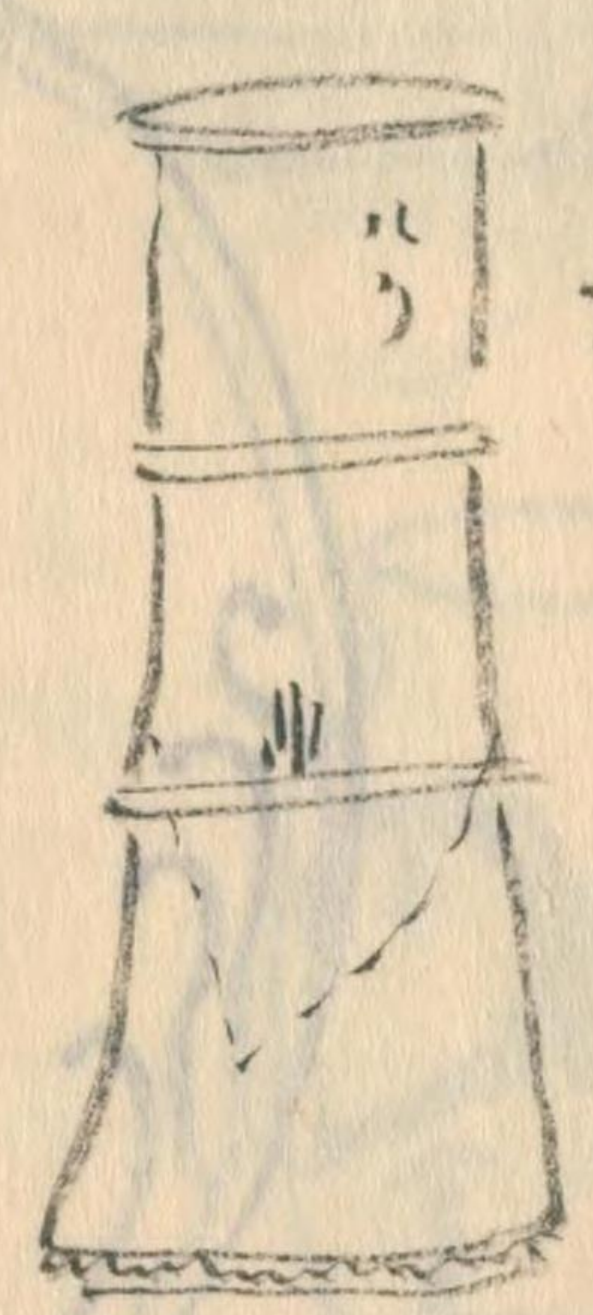
国立国会図書館　タイトル『陶器集』 請求記号 841-124　ガラス使用

七月廿九 自分写と度候也

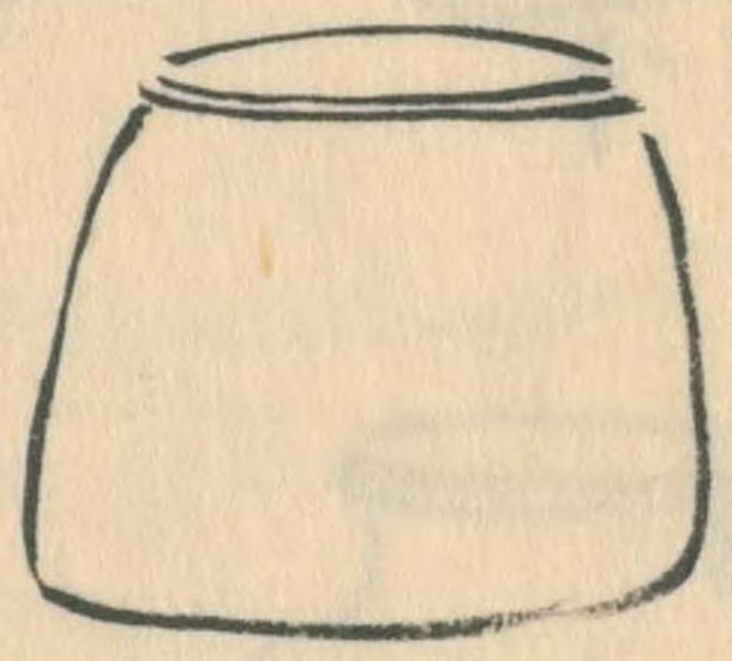
八代



京焼

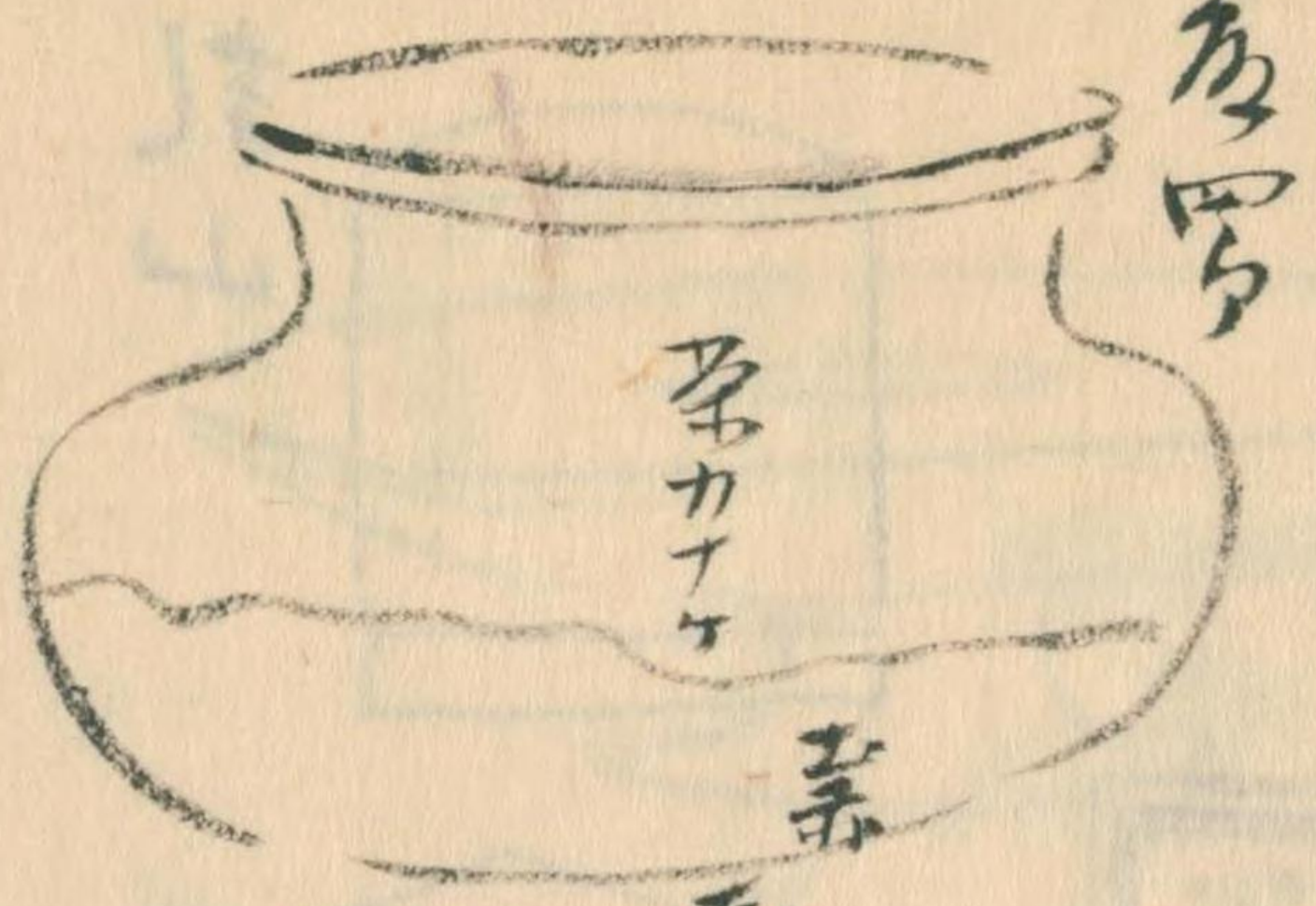


黄セト



本来印

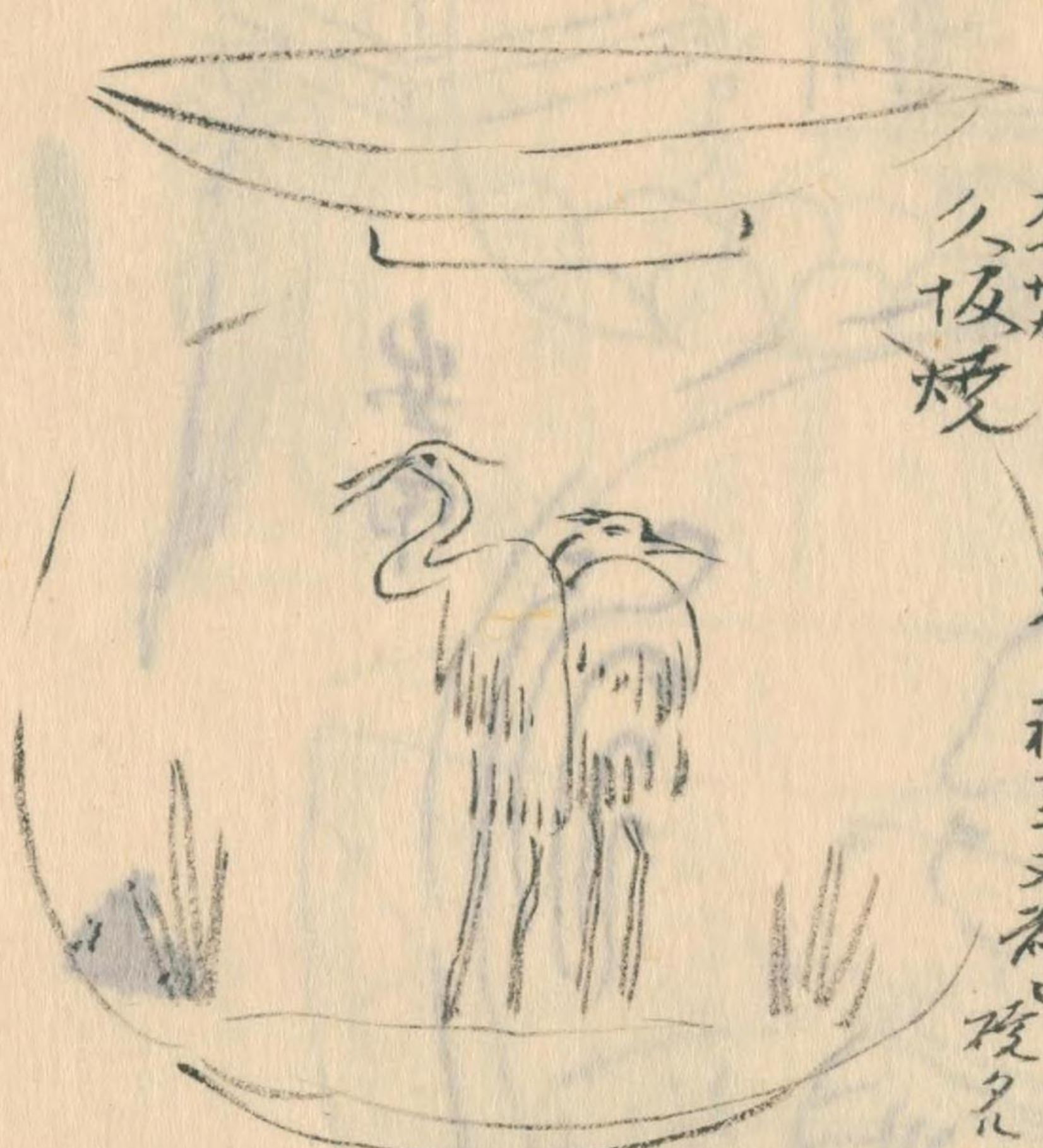
萬暦



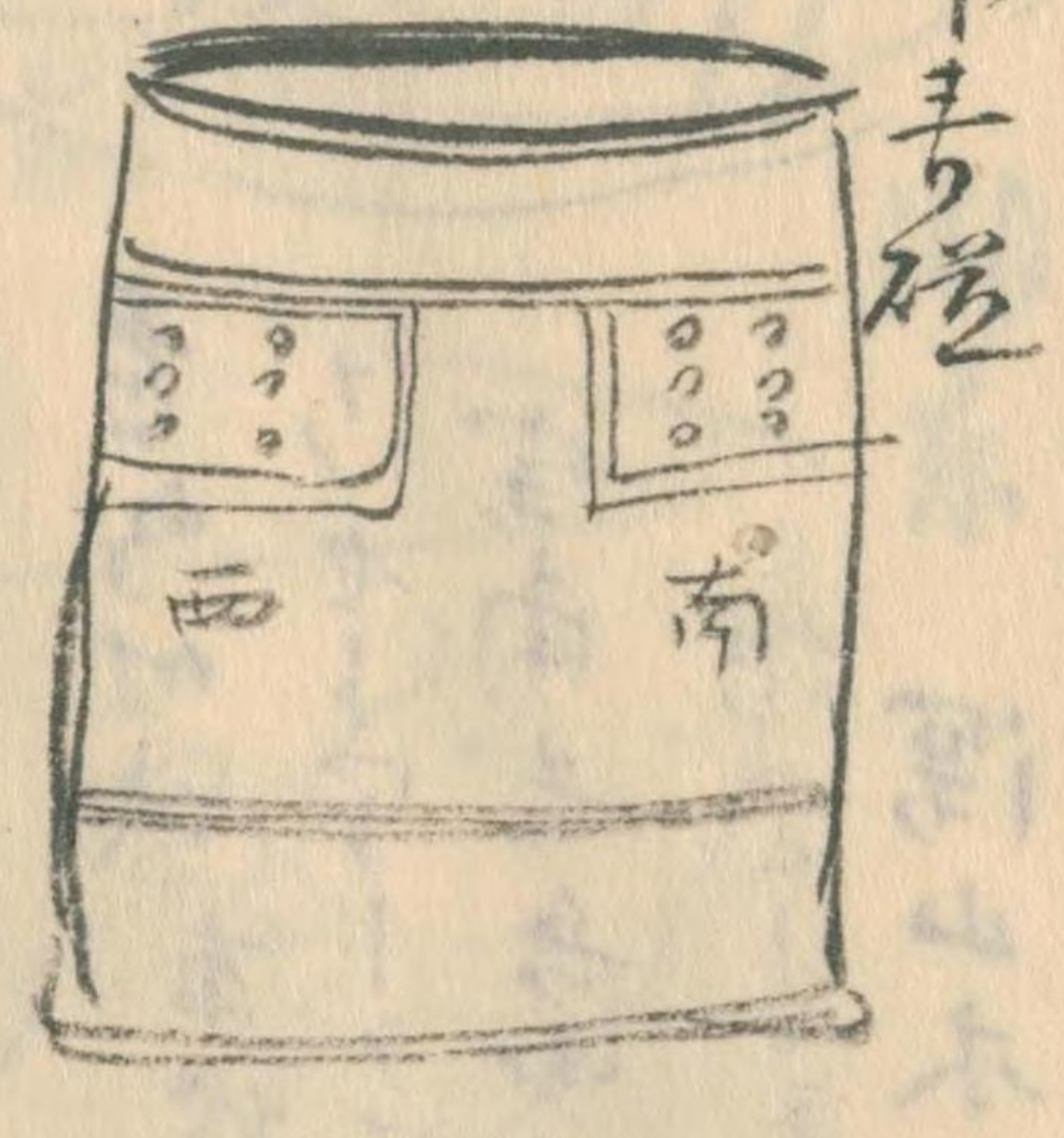
素来

久坂焼（スヘサカ）

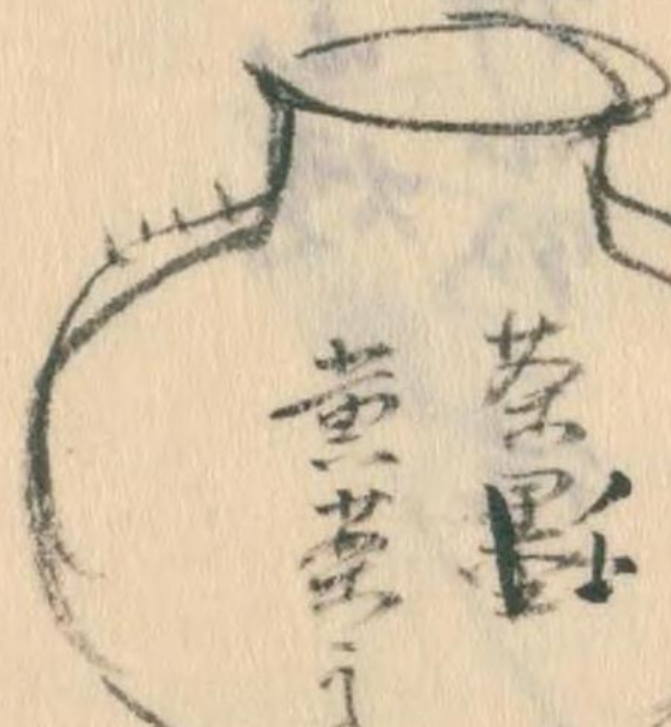
加州九谷ノ物マネテ荷ト焼タル之



日本青磁



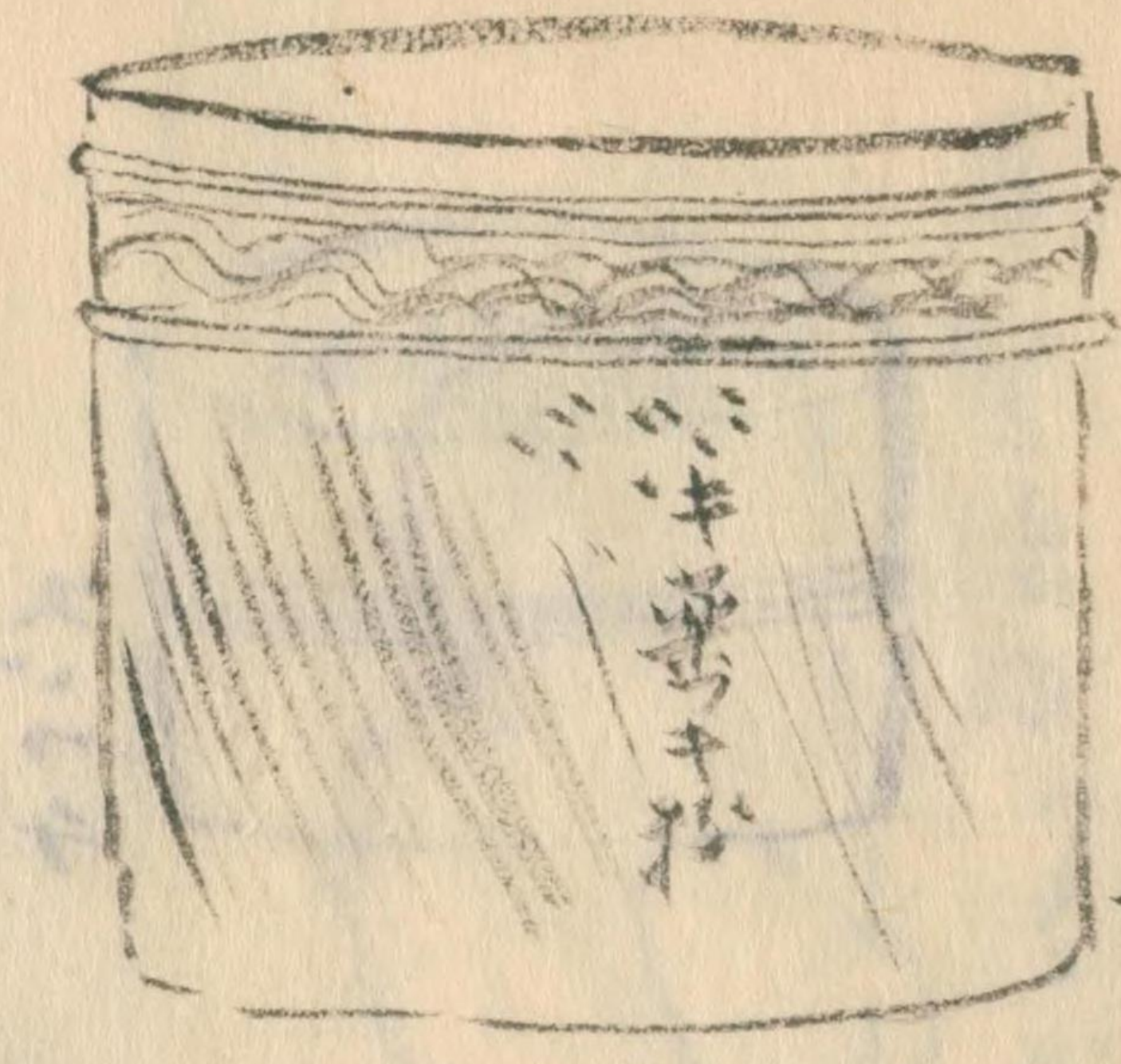
金花山玉川手



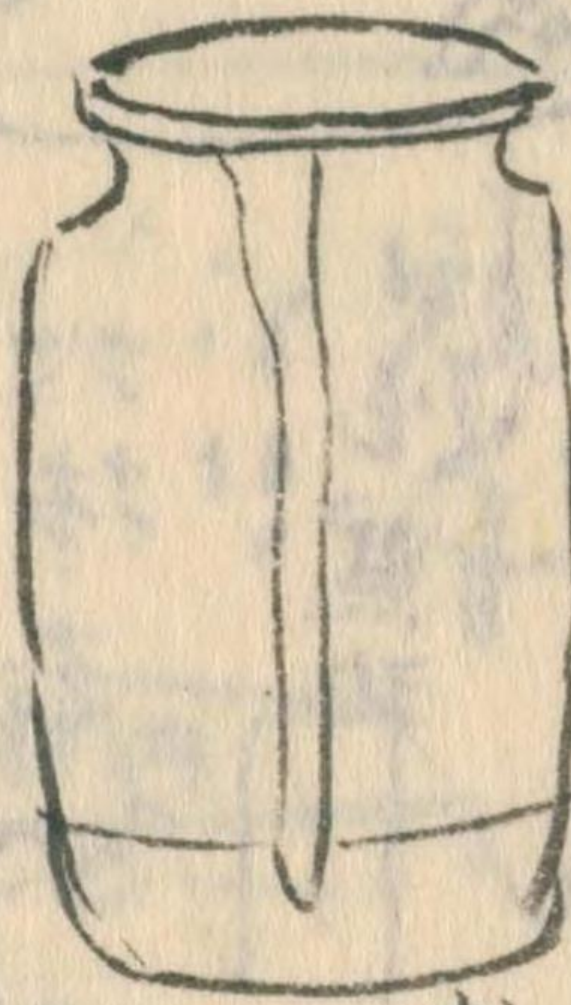
本来

廿七年八月廿六 屋使や竹井 イろ

朝鮮

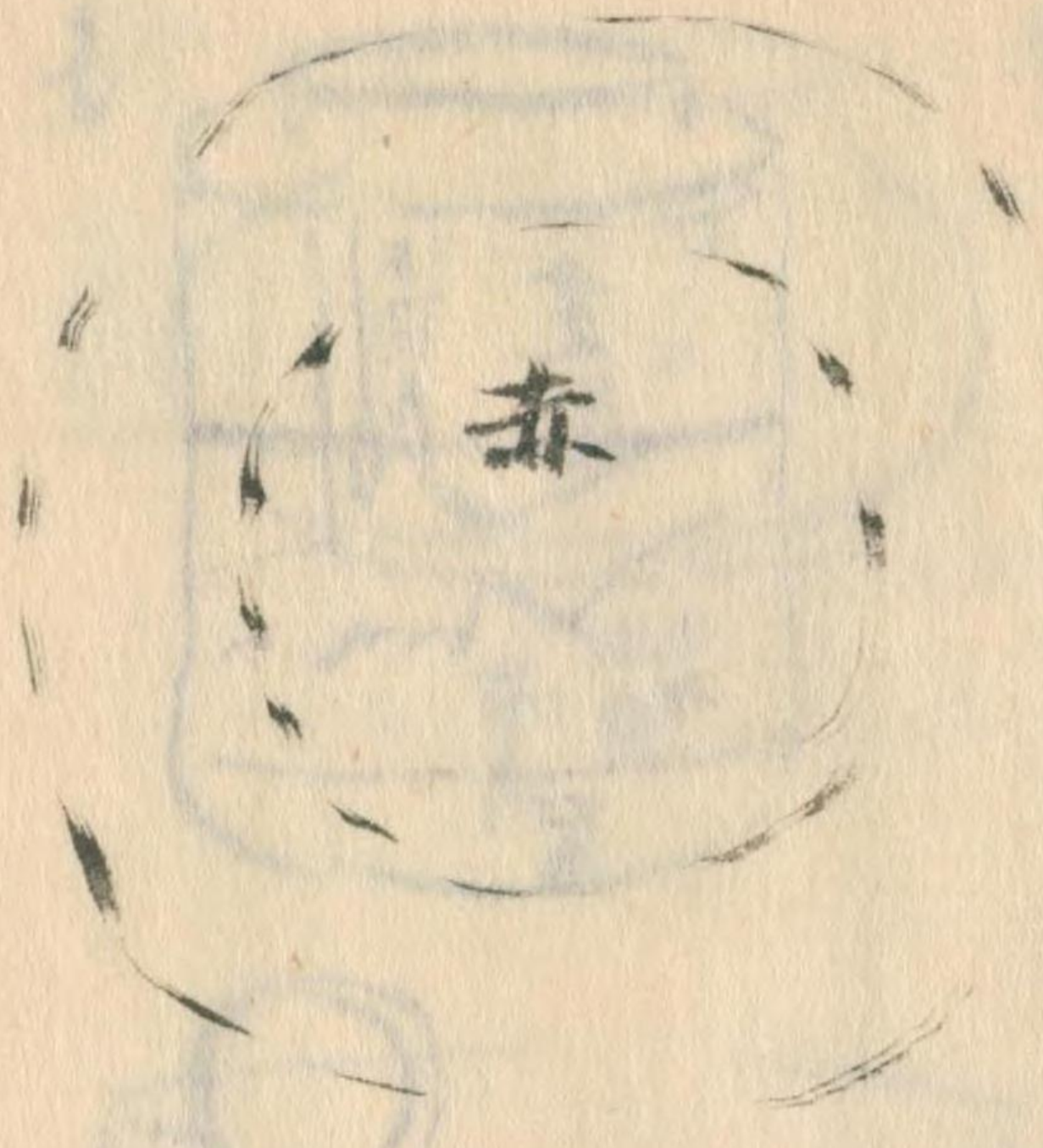


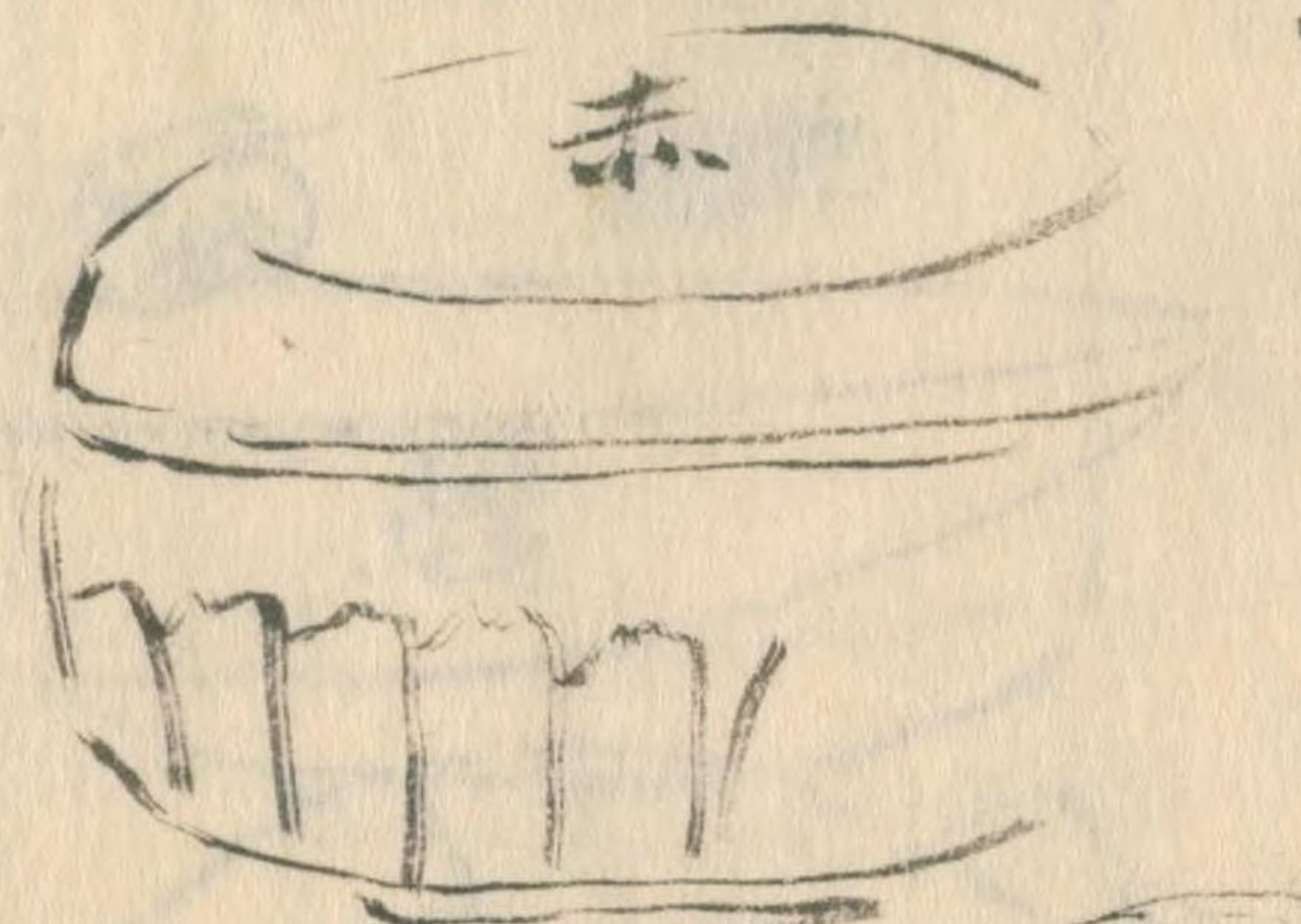
大小黄薬



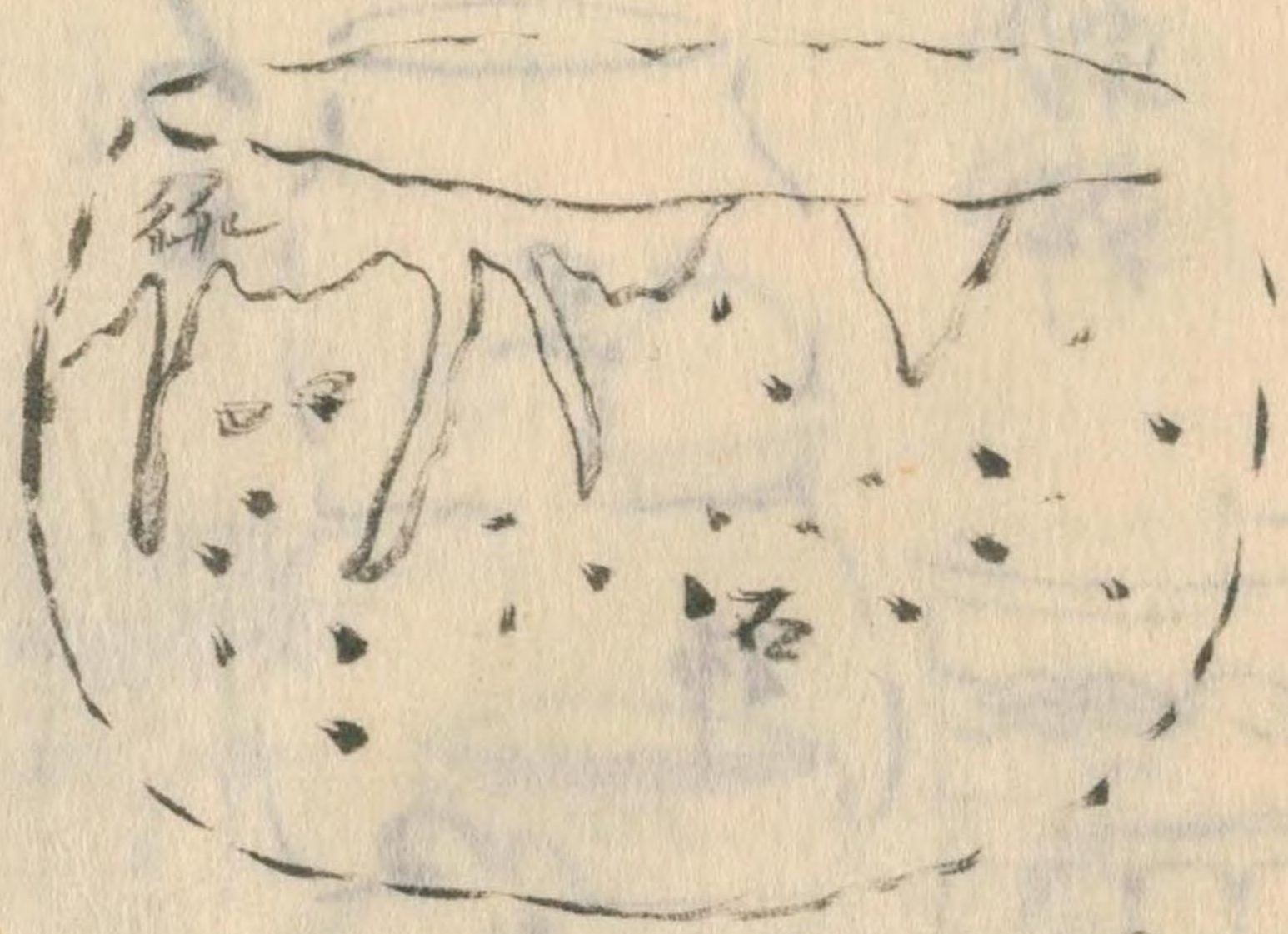
素来

永楽赤玉子あしへ

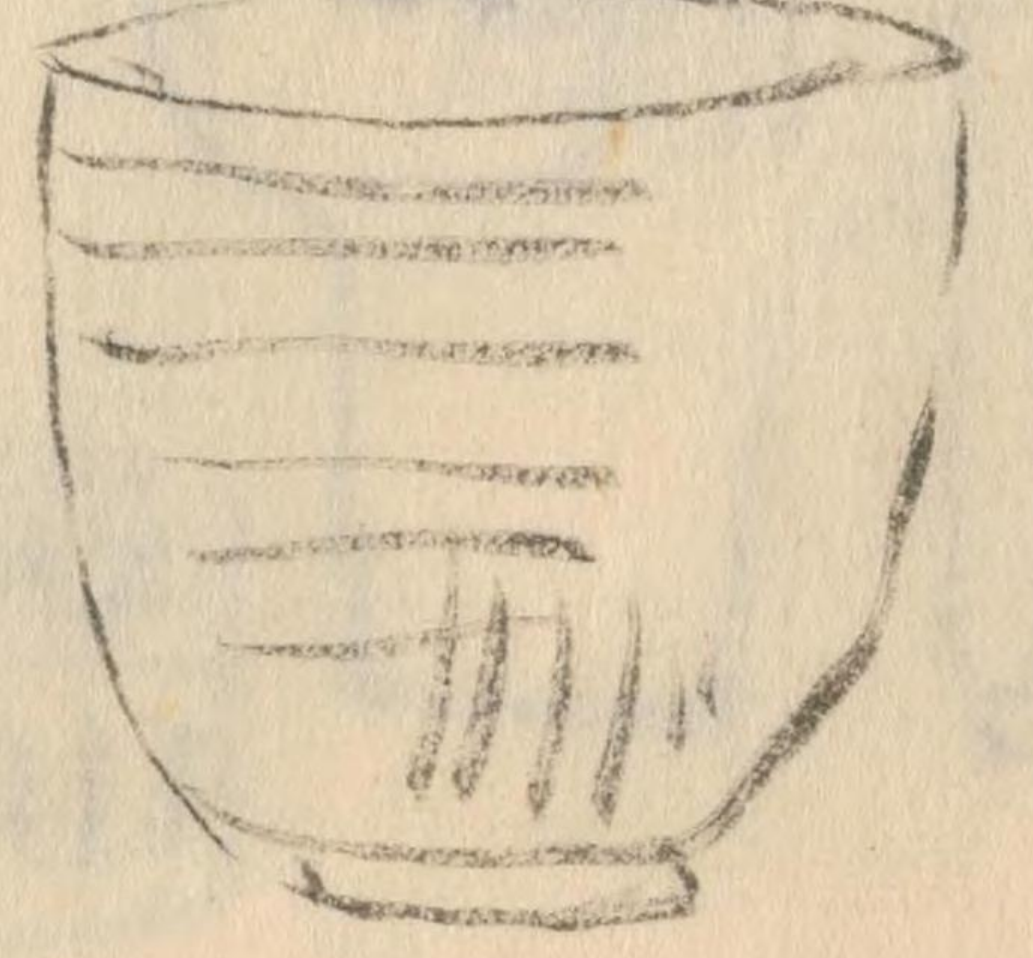




河濱支流

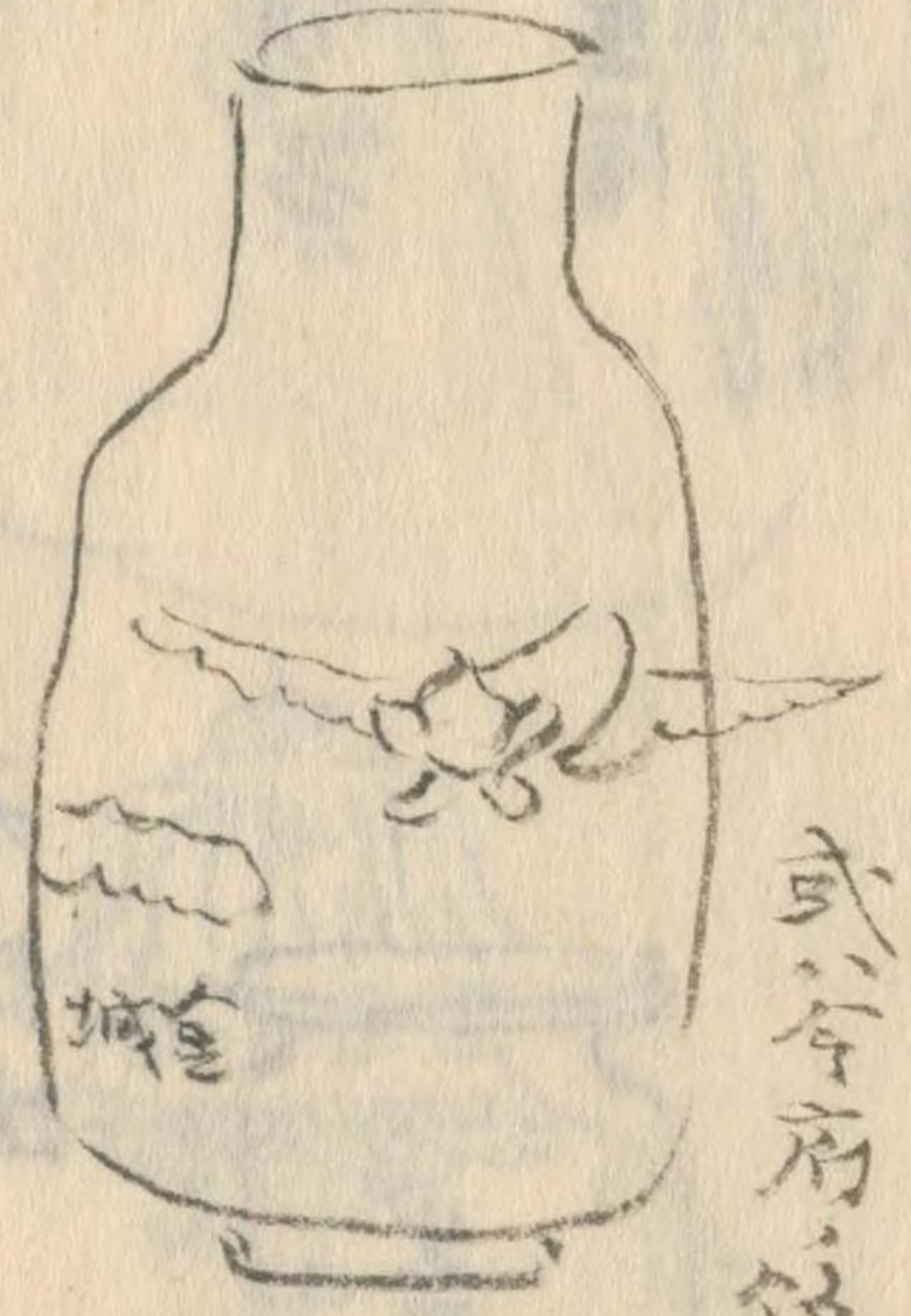


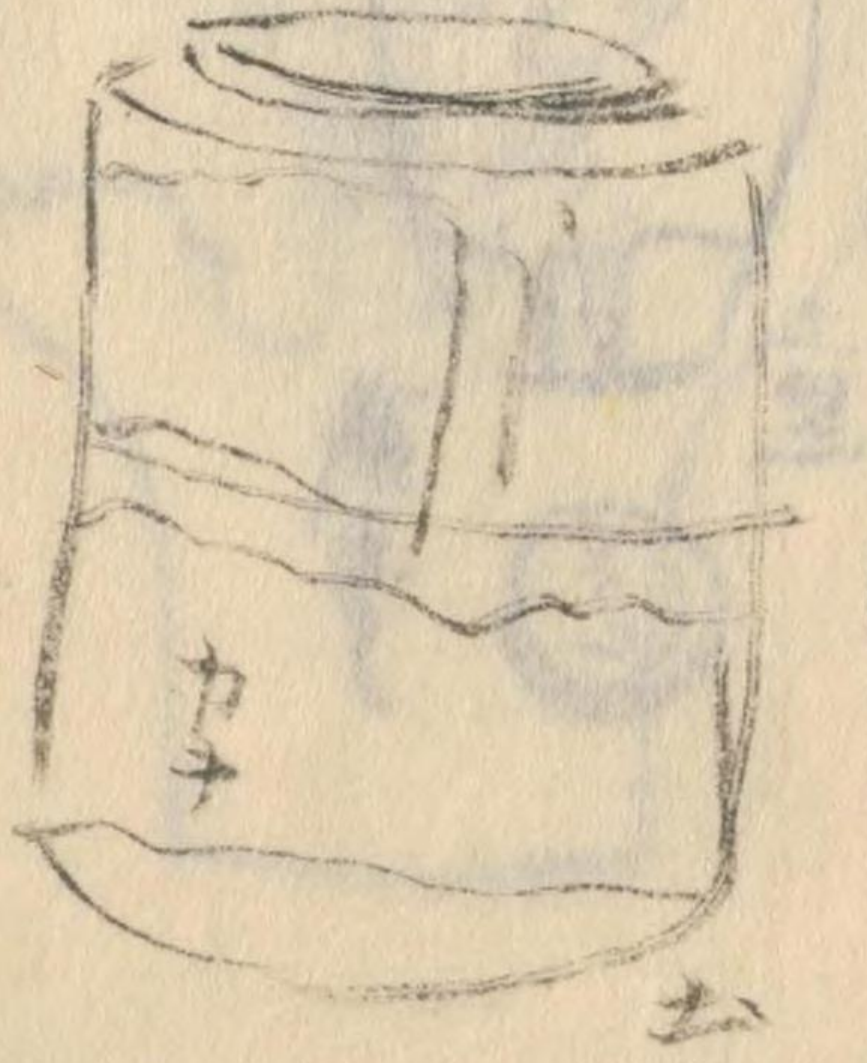
日本写京



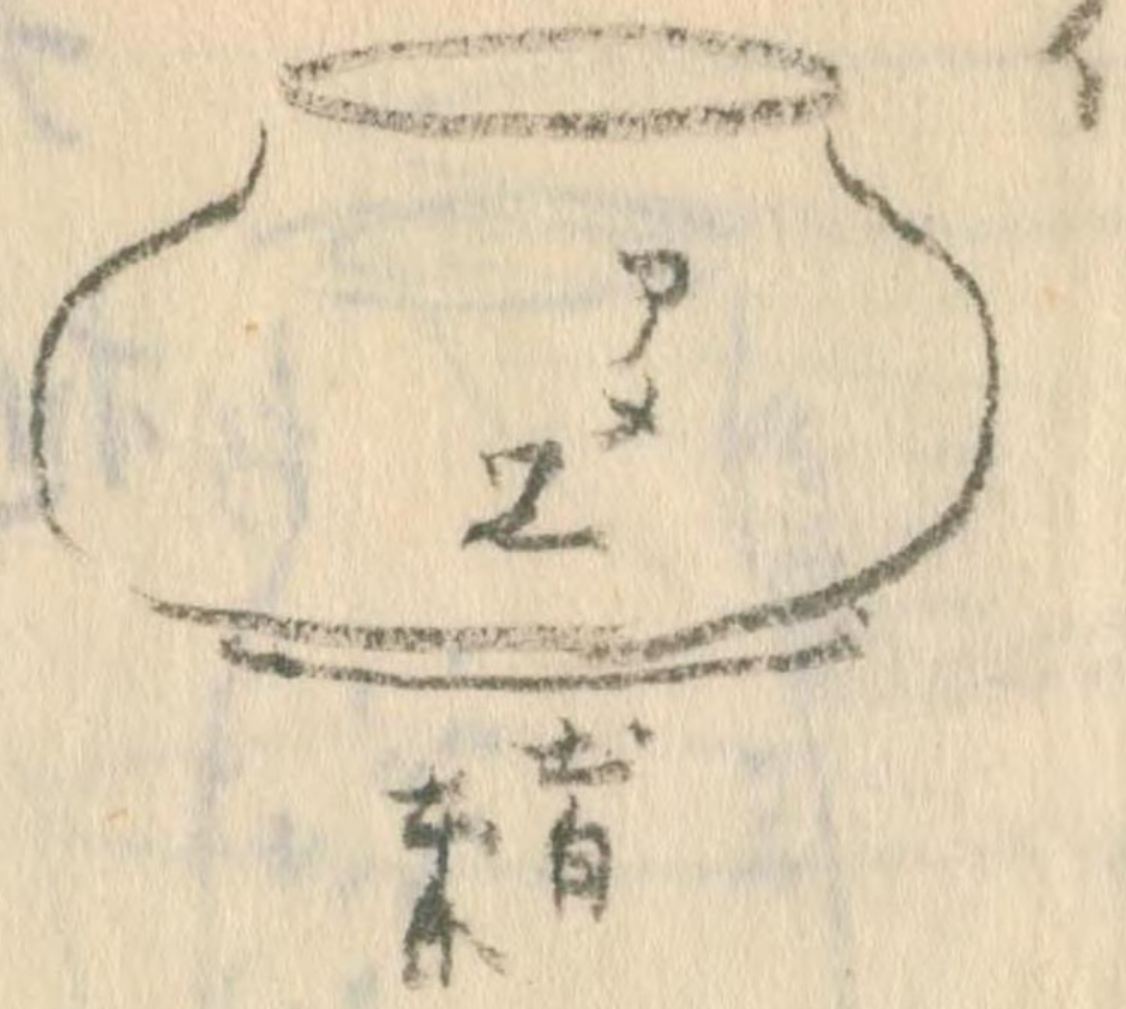
武州分府ニ作アリ 椿手

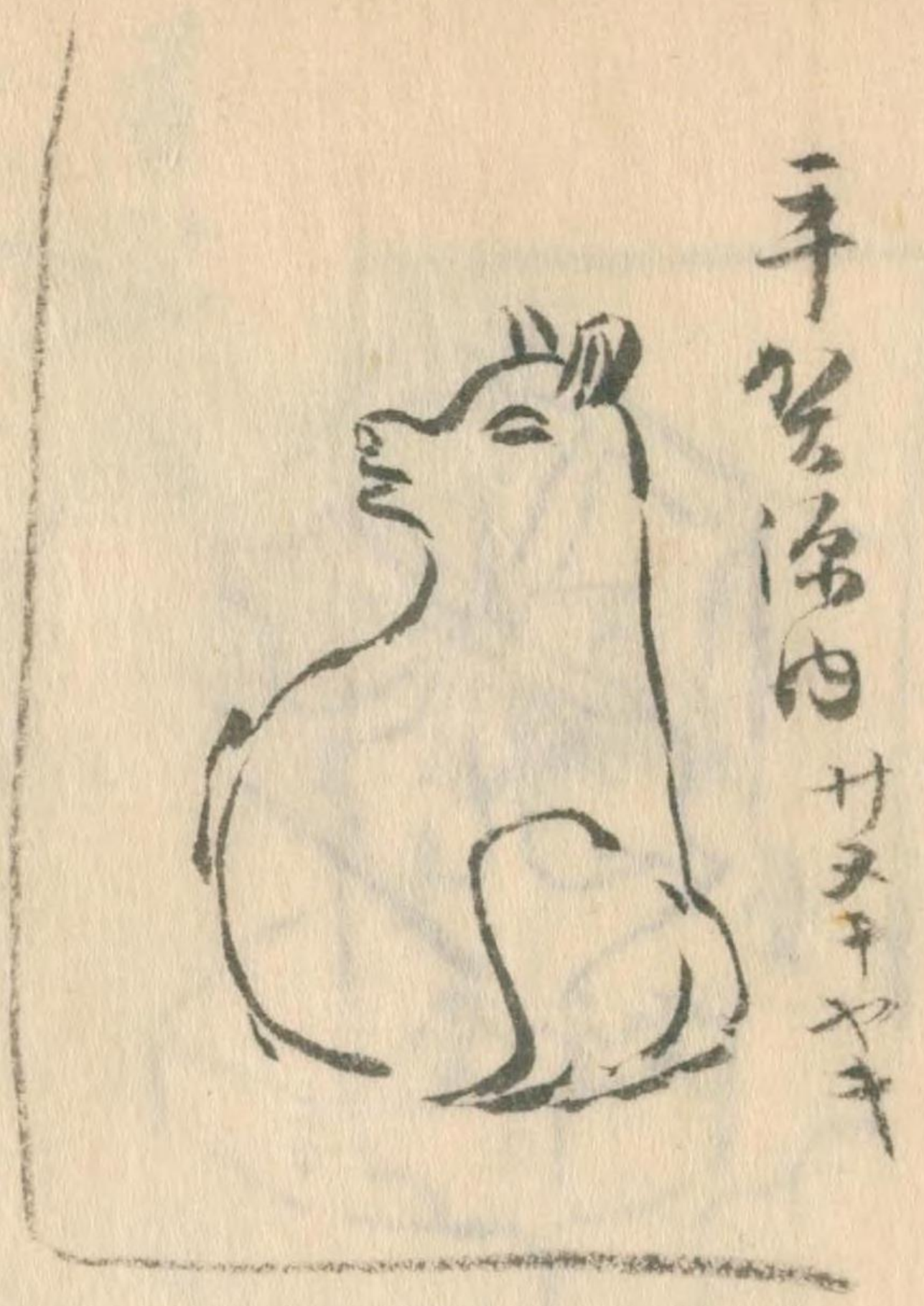
九谷ニ於 李参平

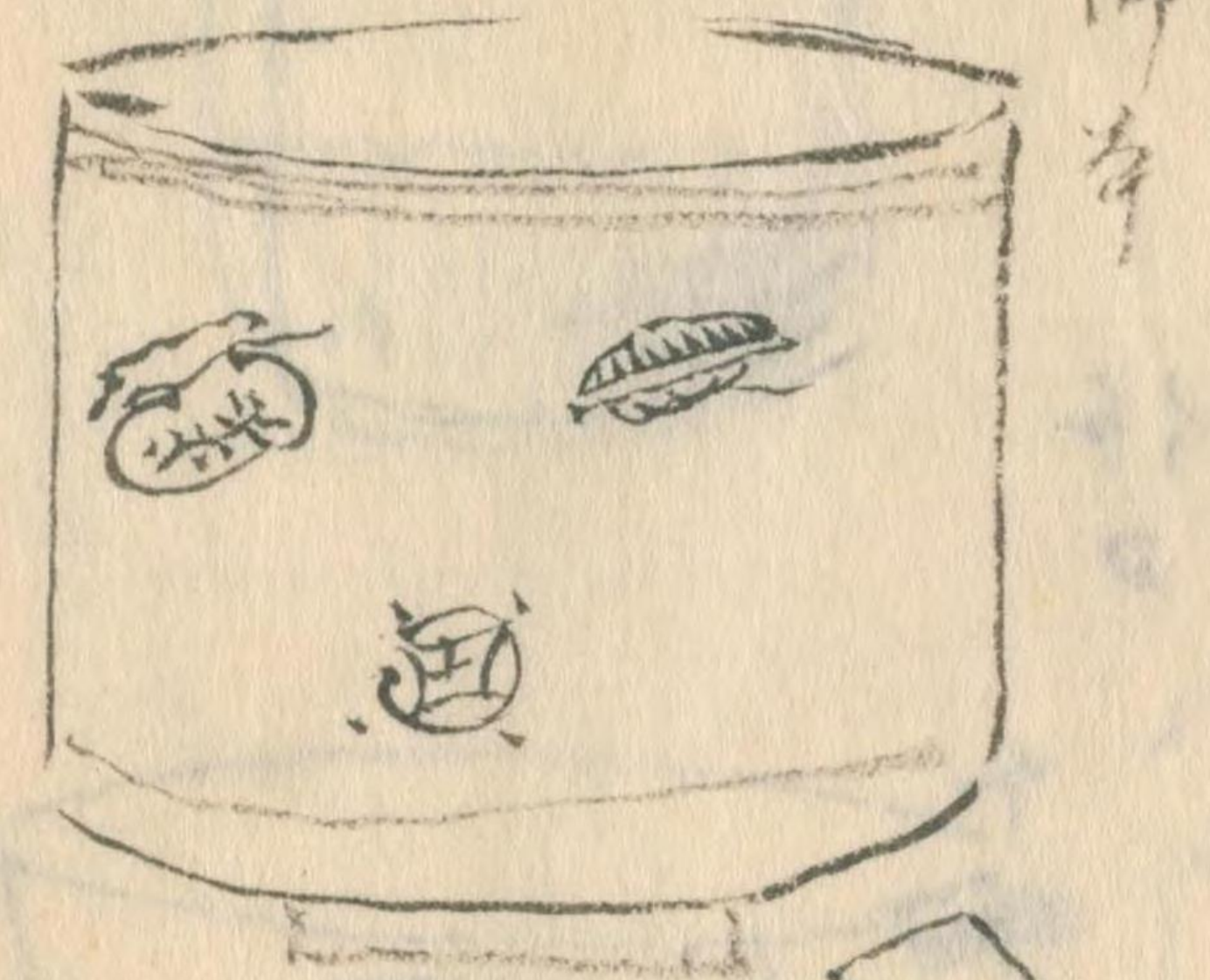


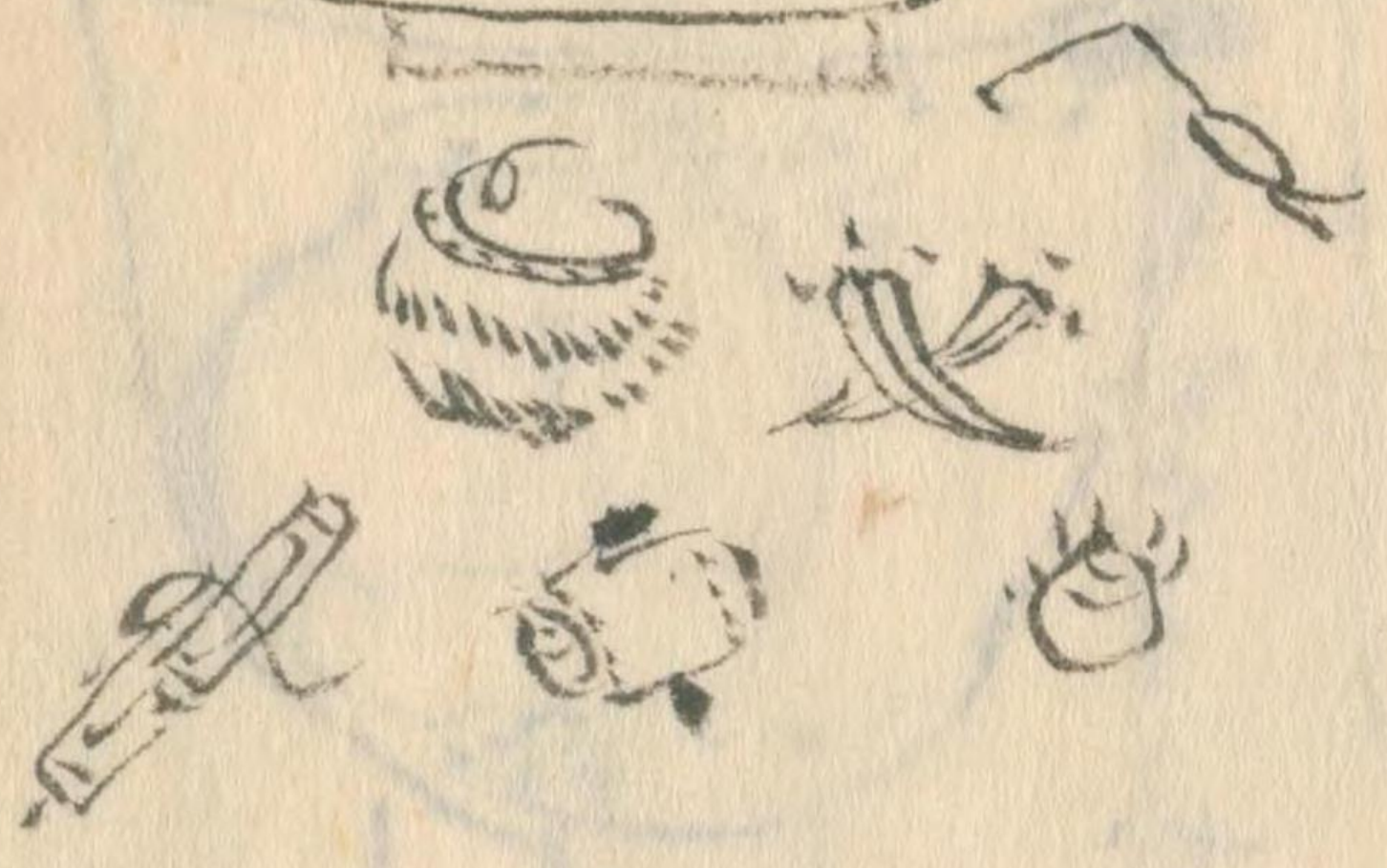


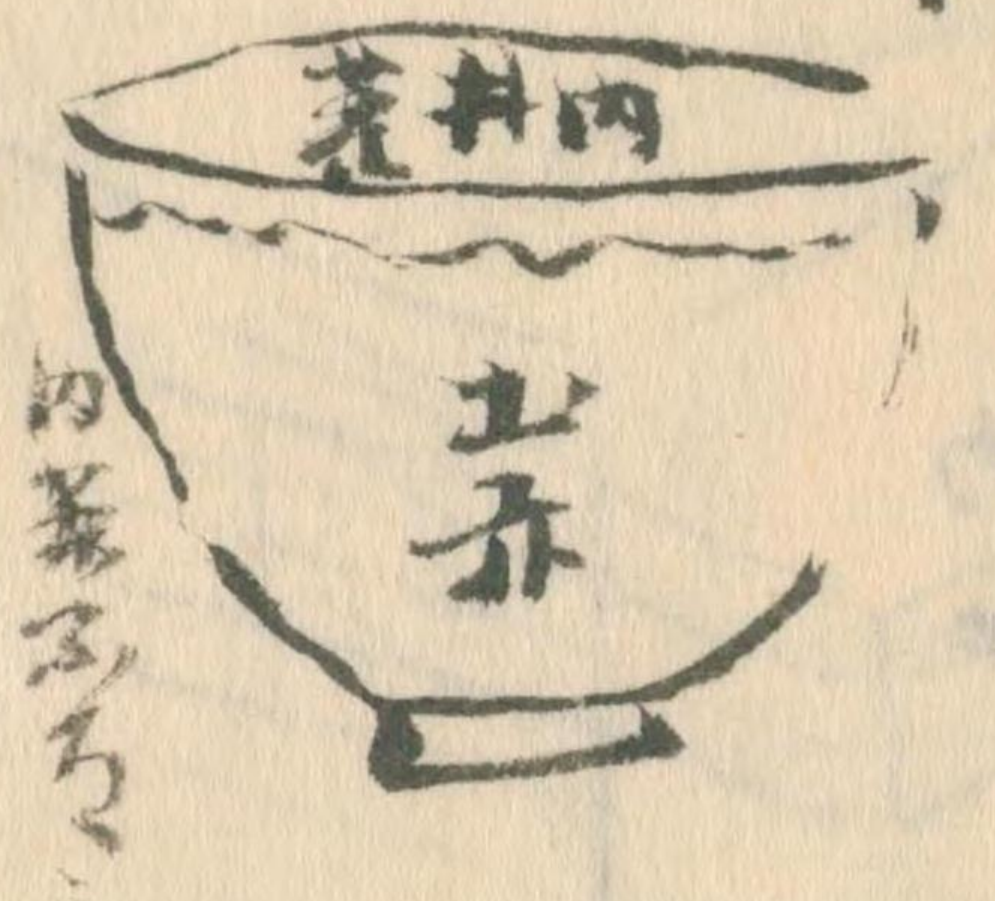
土白

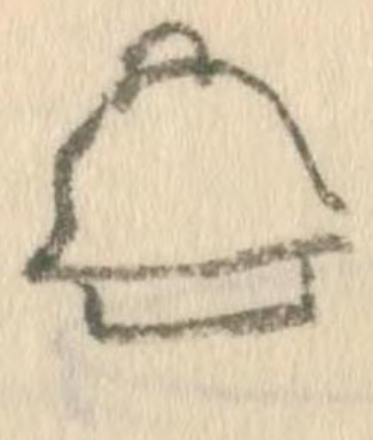


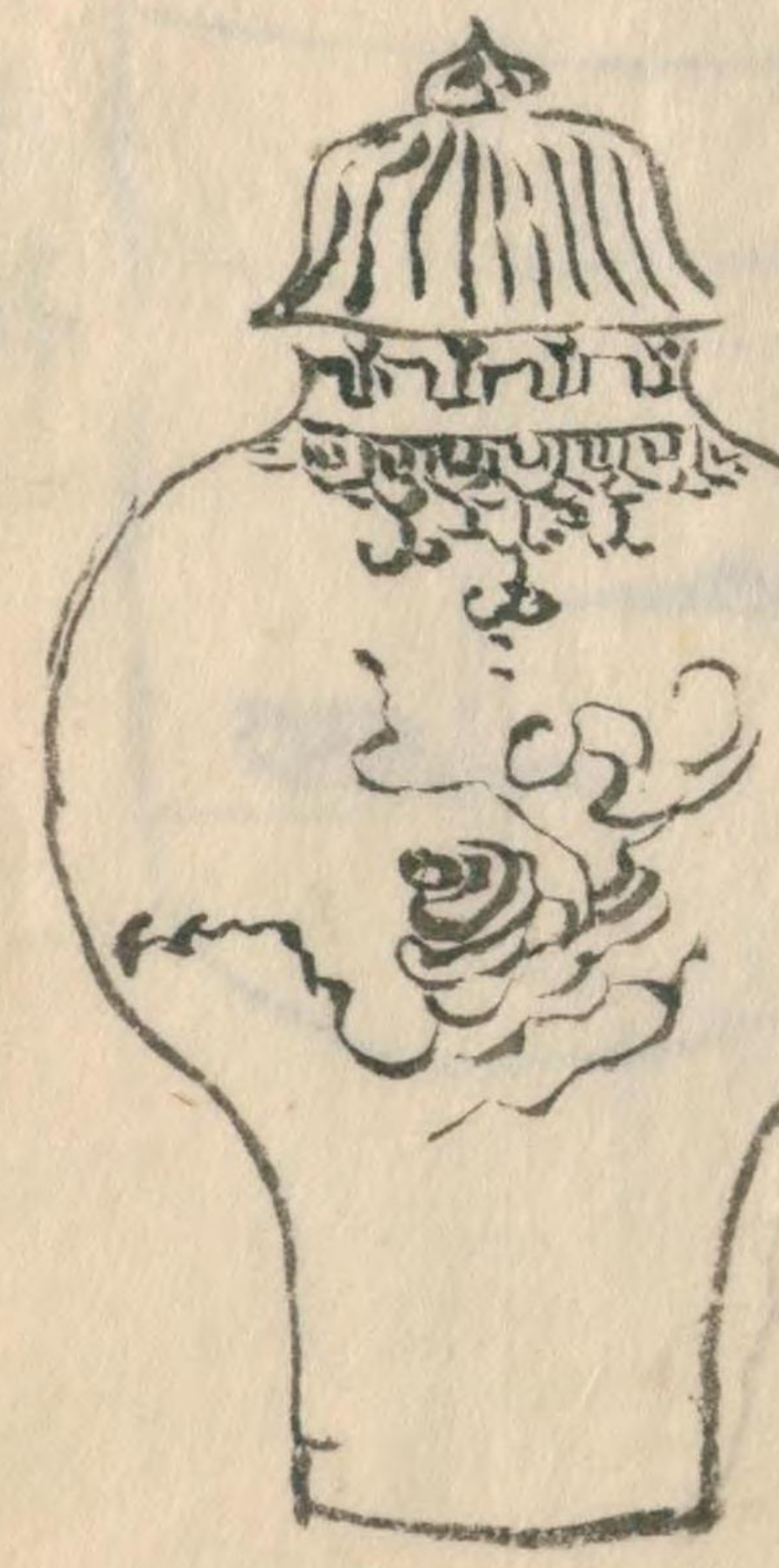


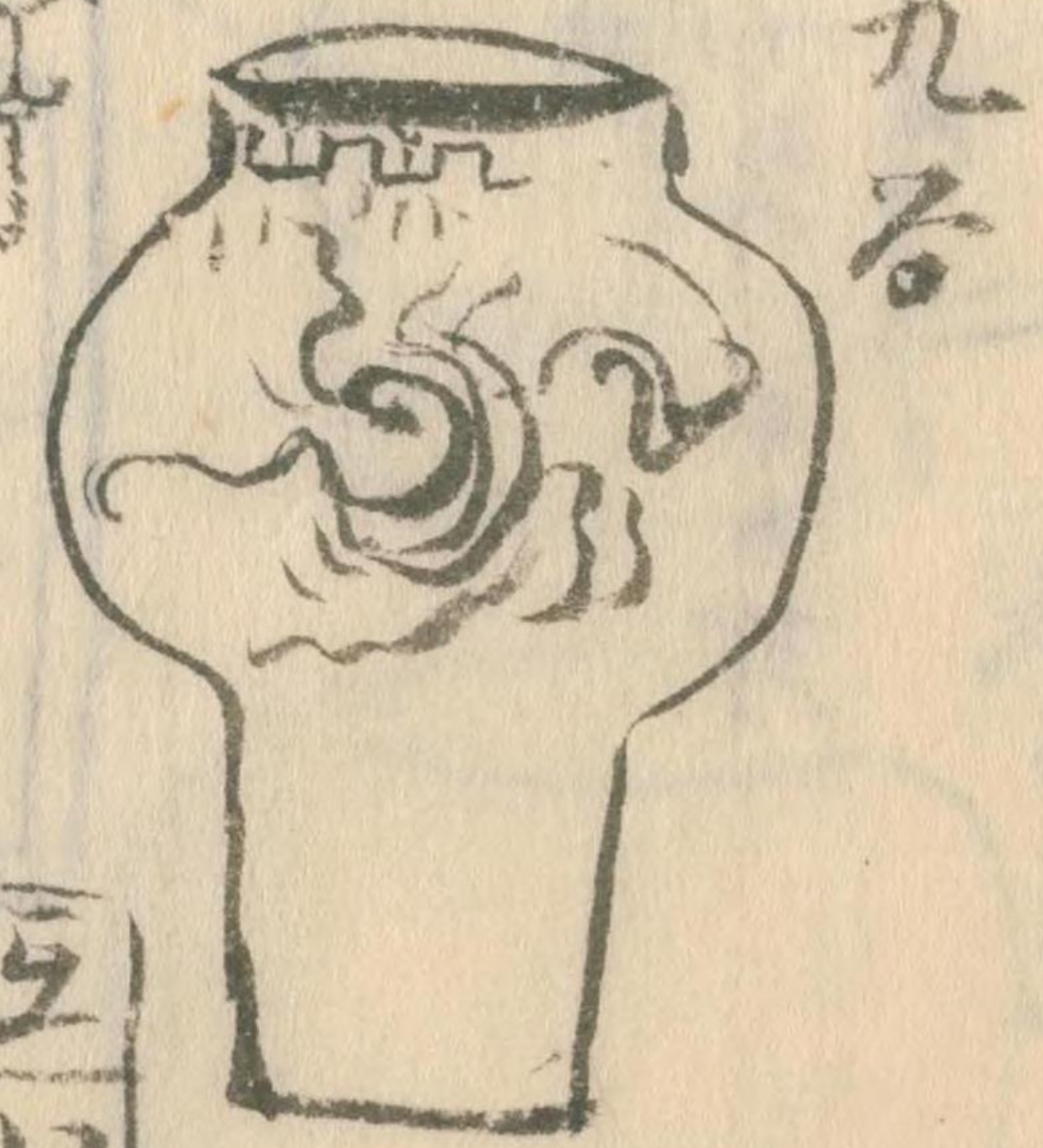


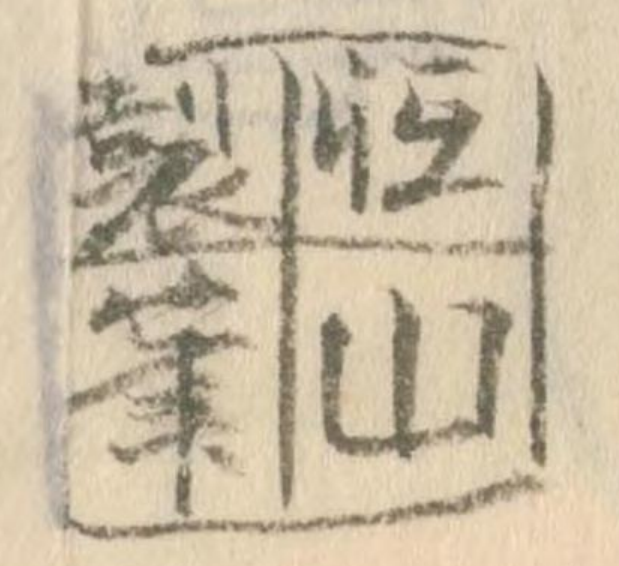


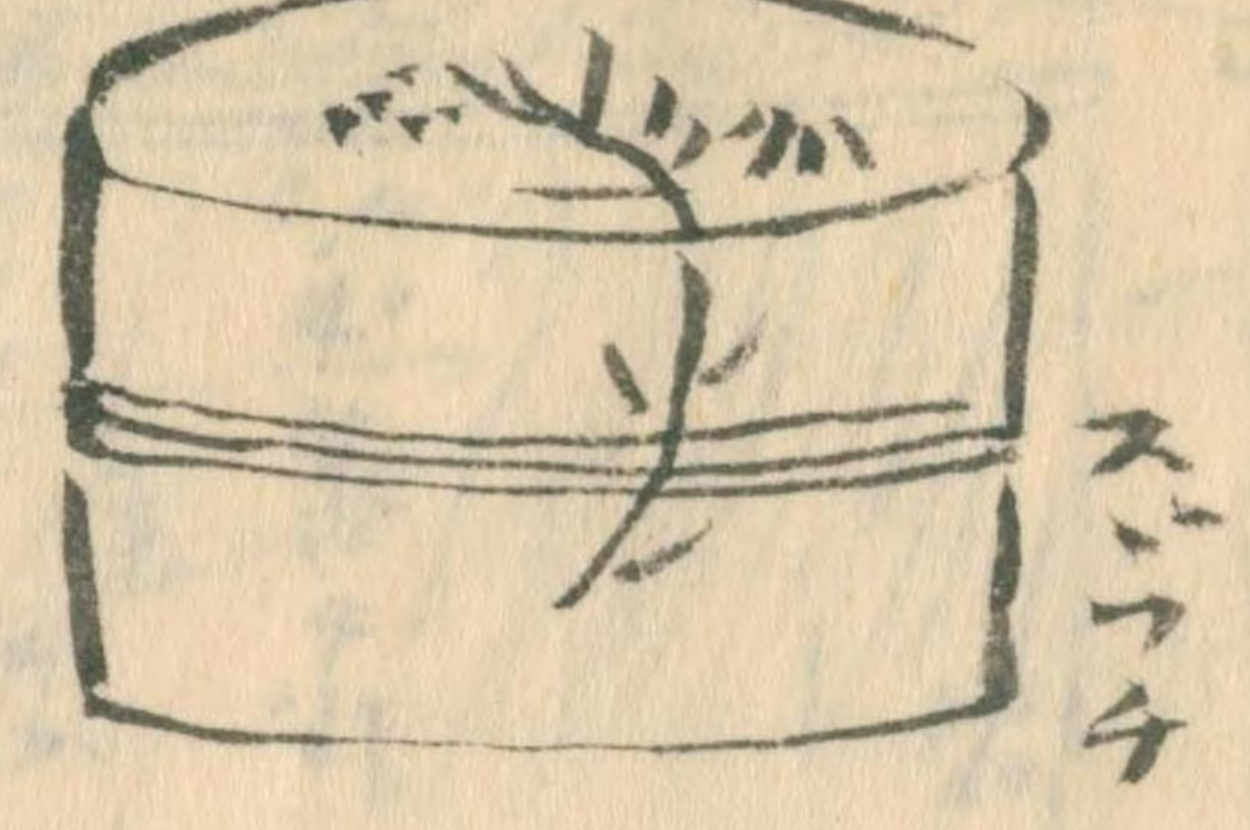

茶丼内
土赤
内茶ろくろう
十一月廿五く前田
武本

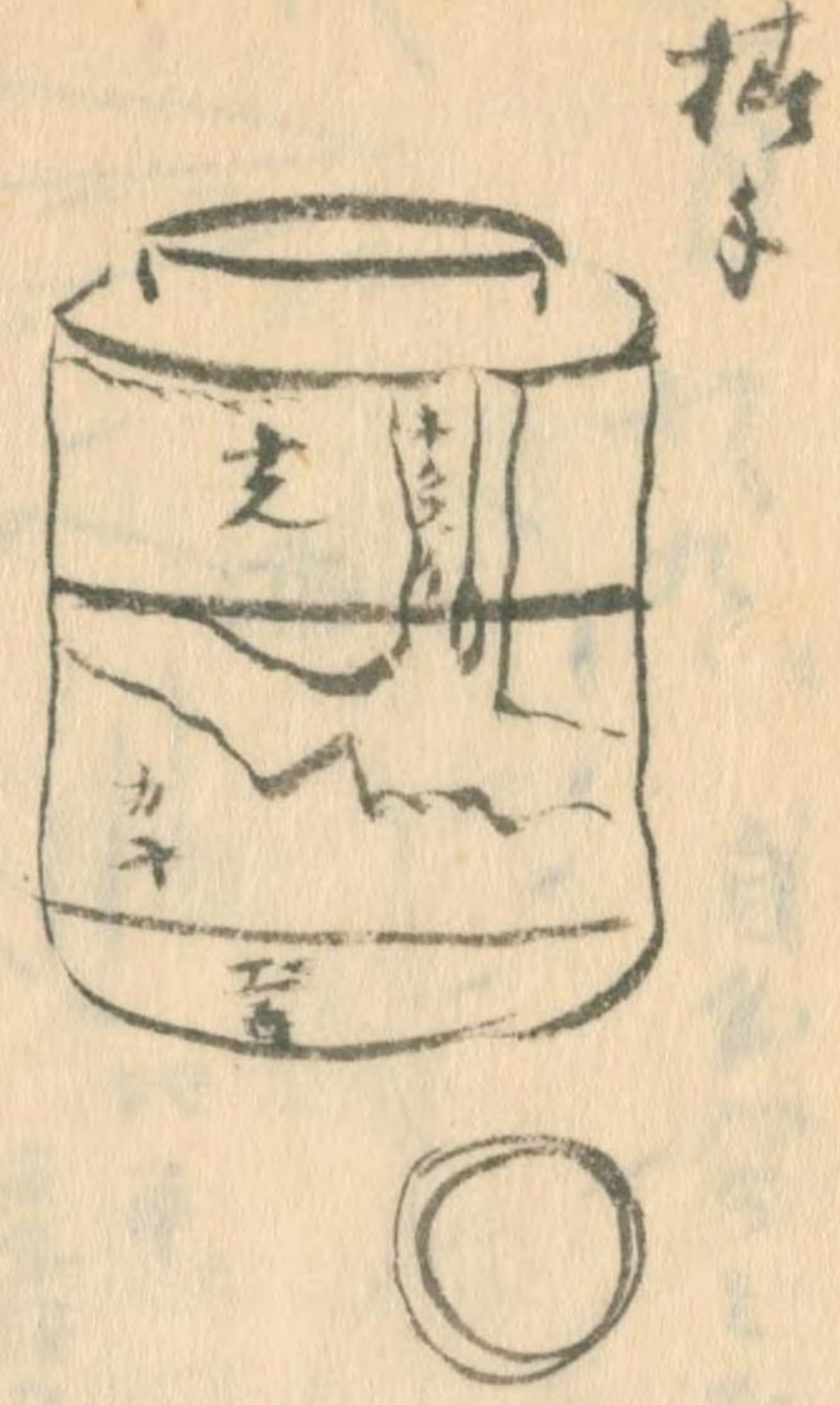


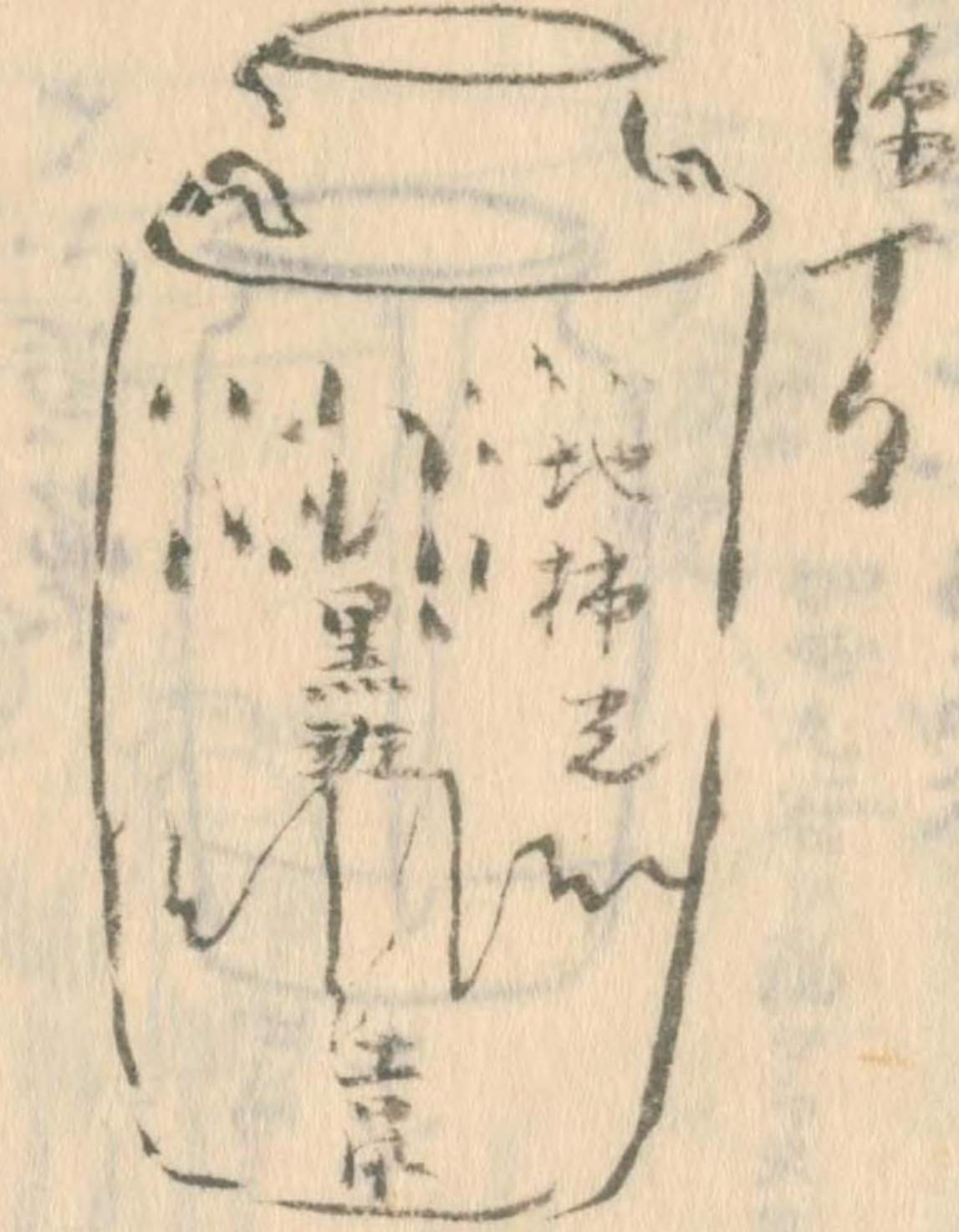


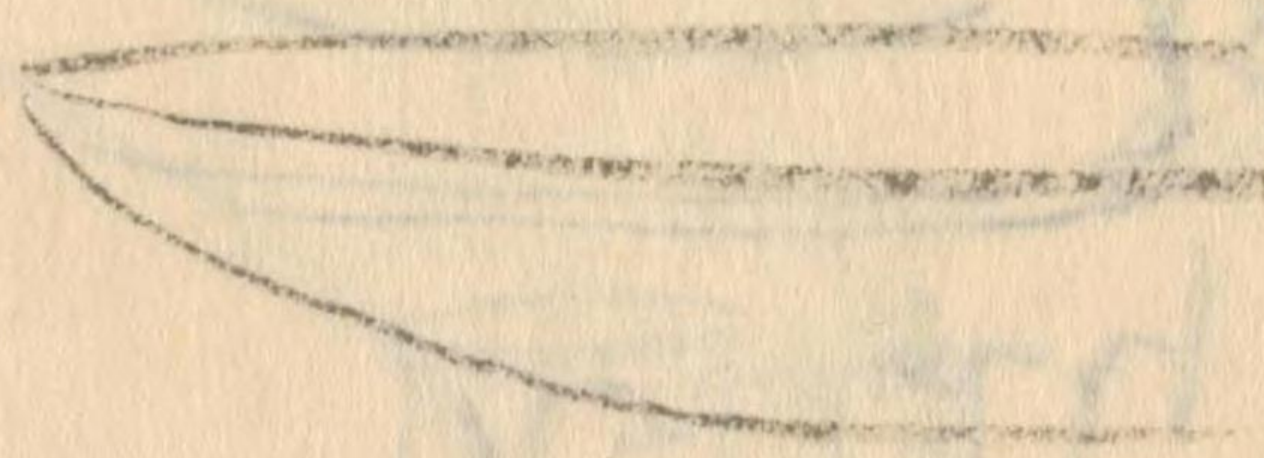


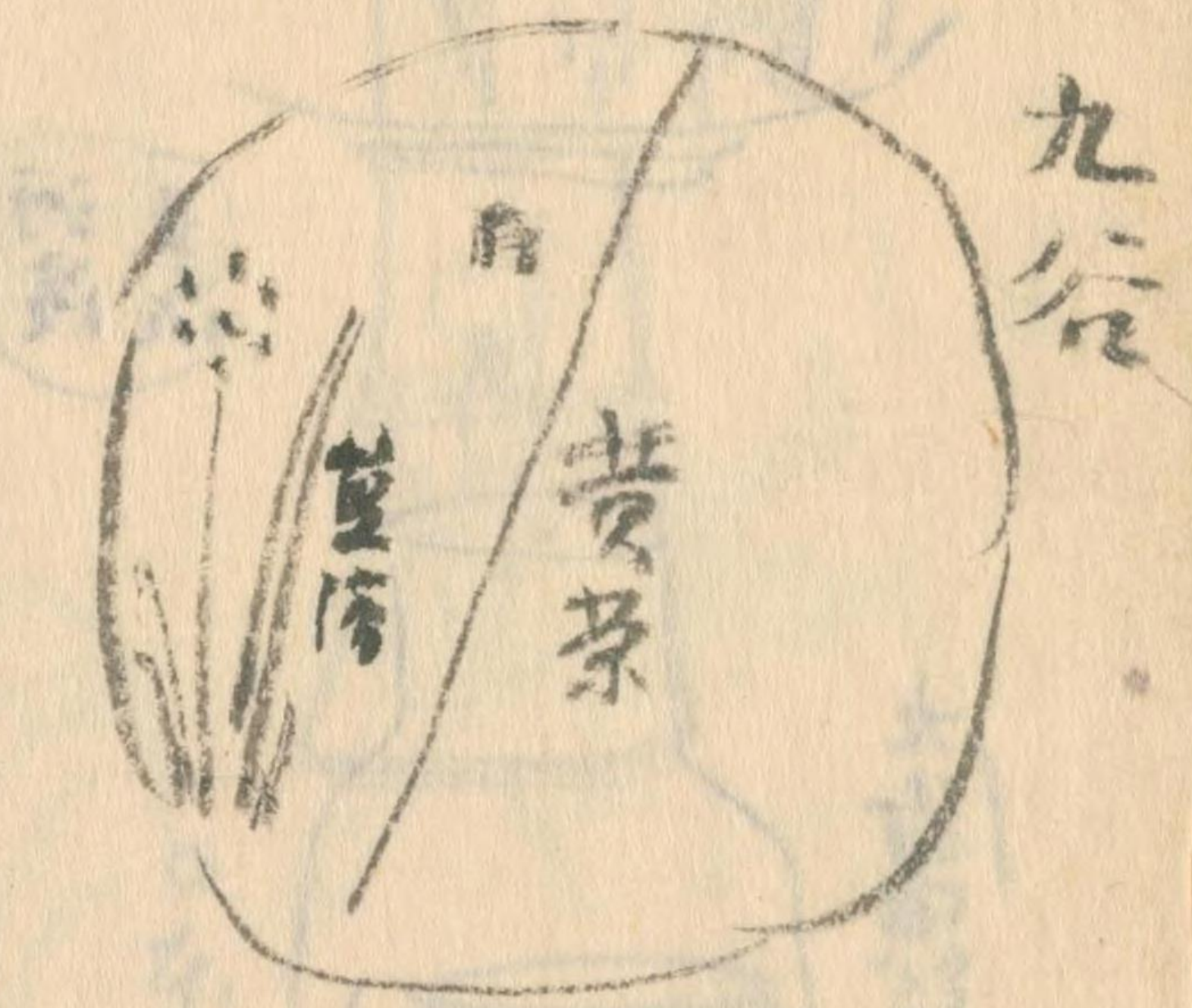


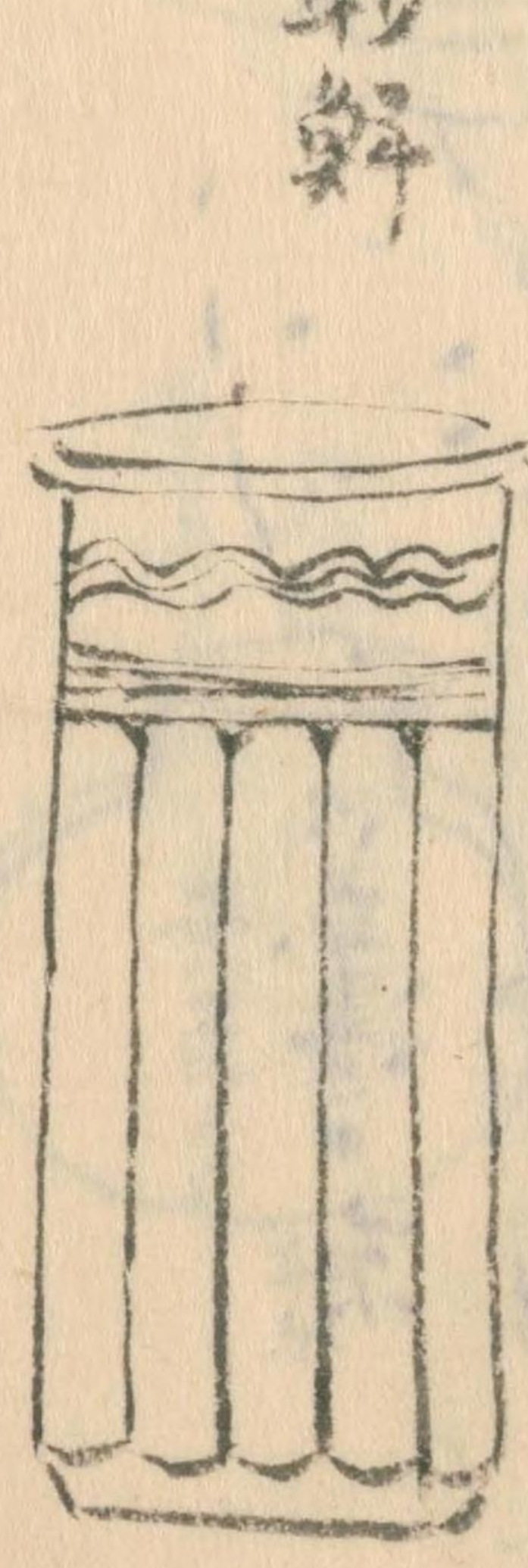


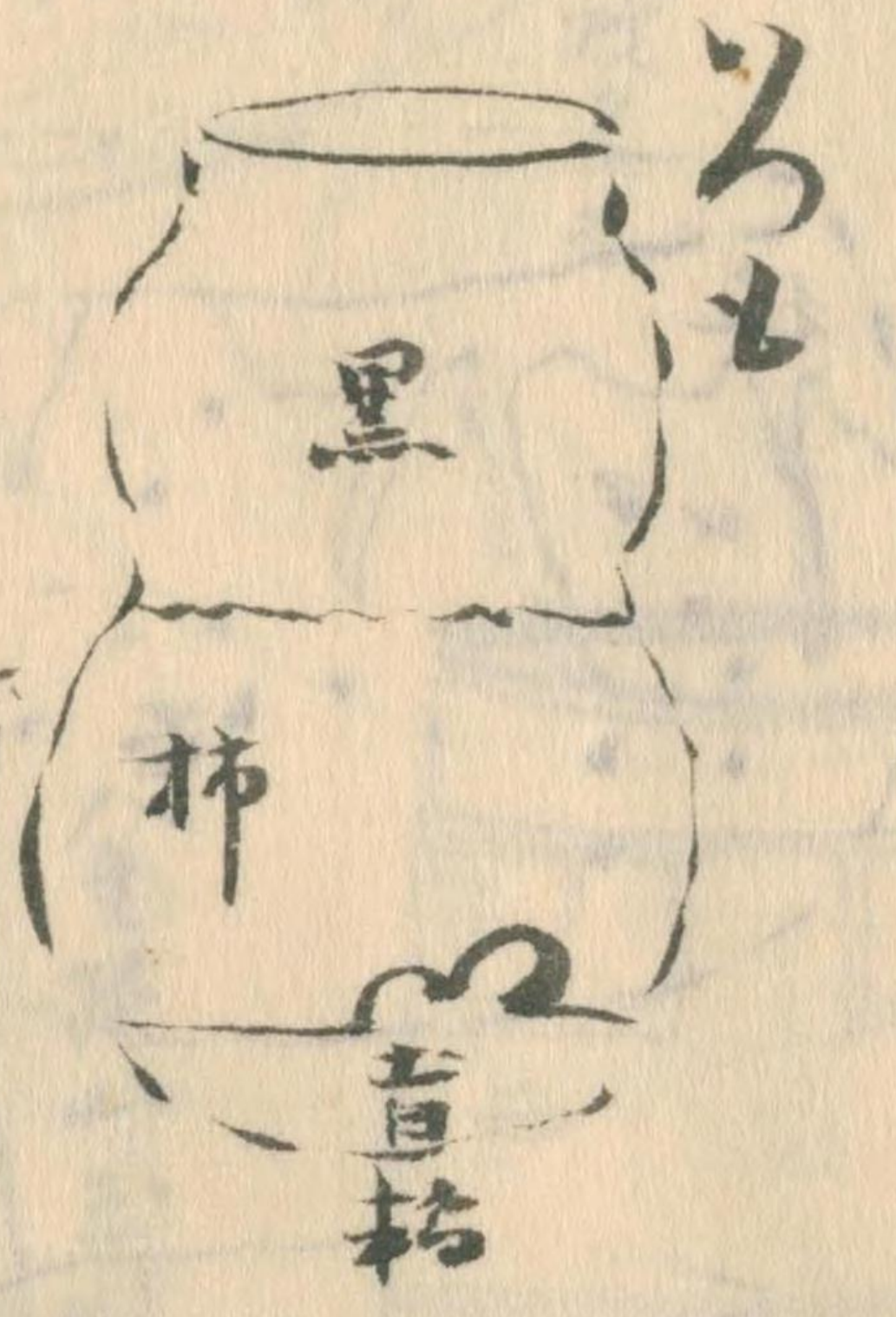


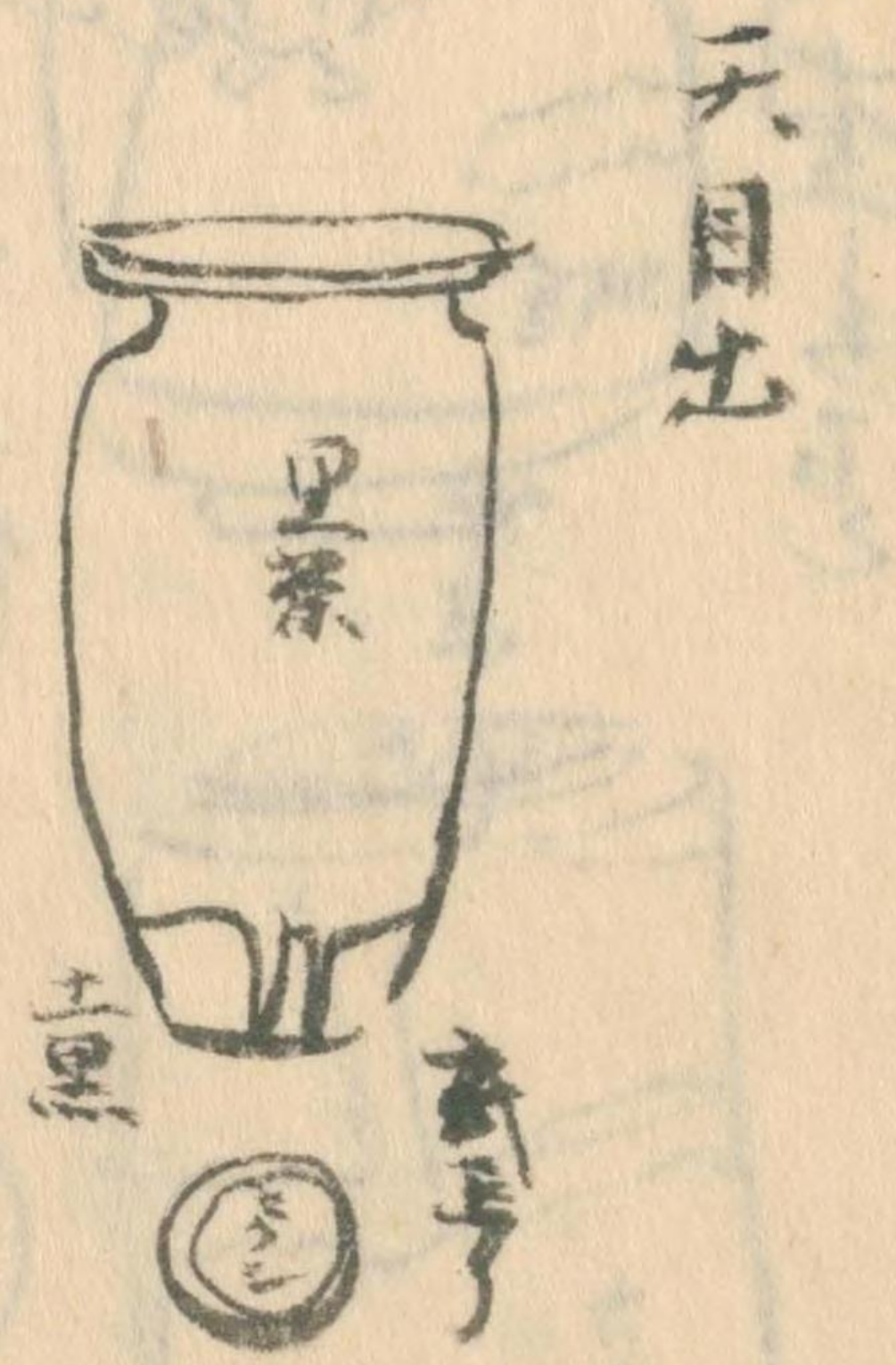

膳すゝ
地柿之
黒斑
土黒





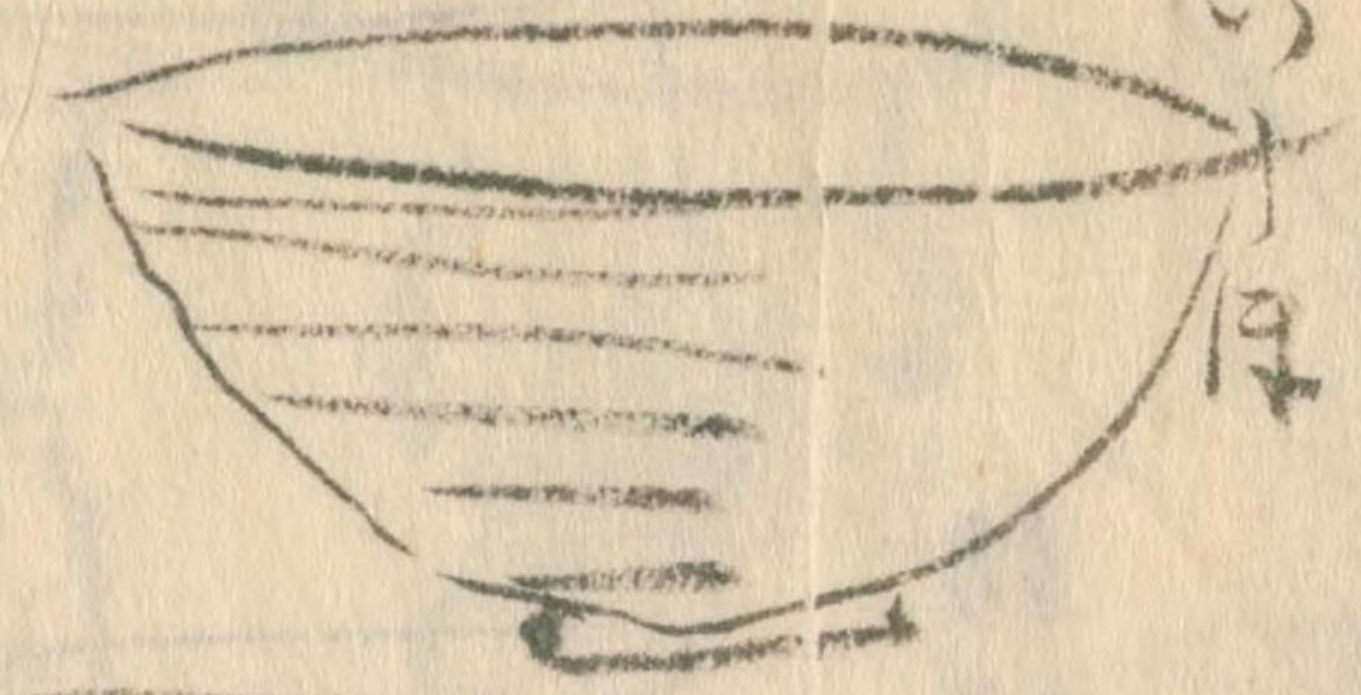


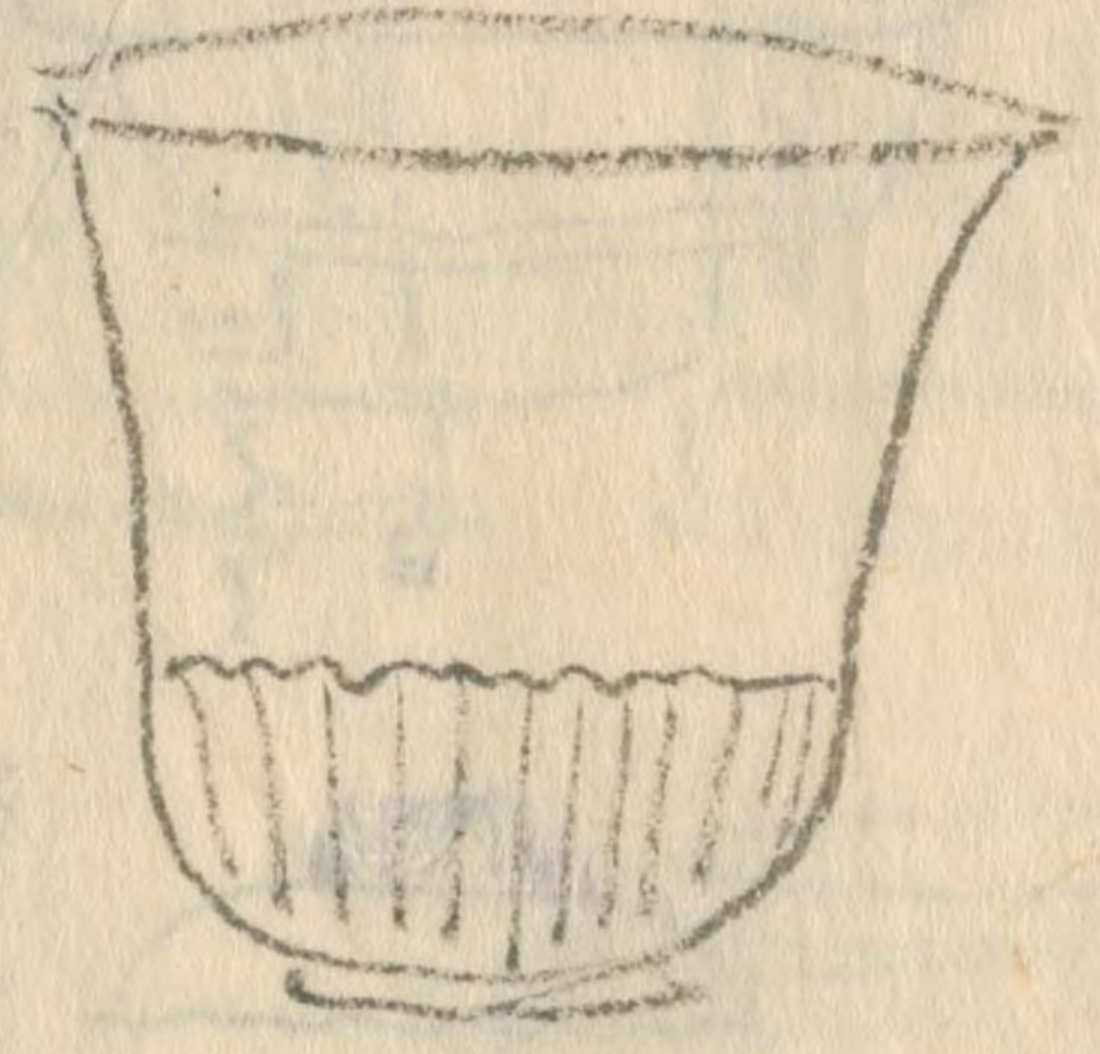


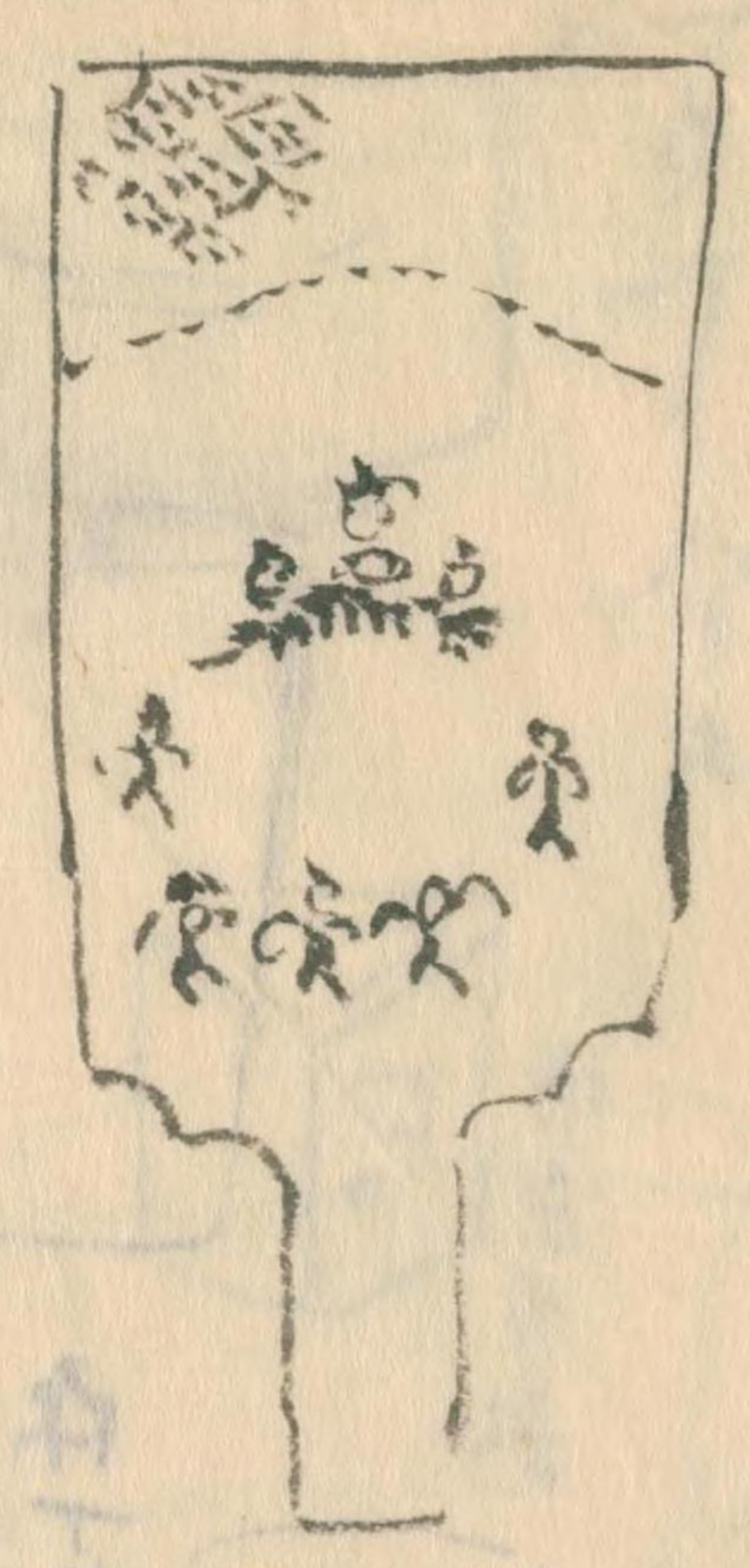


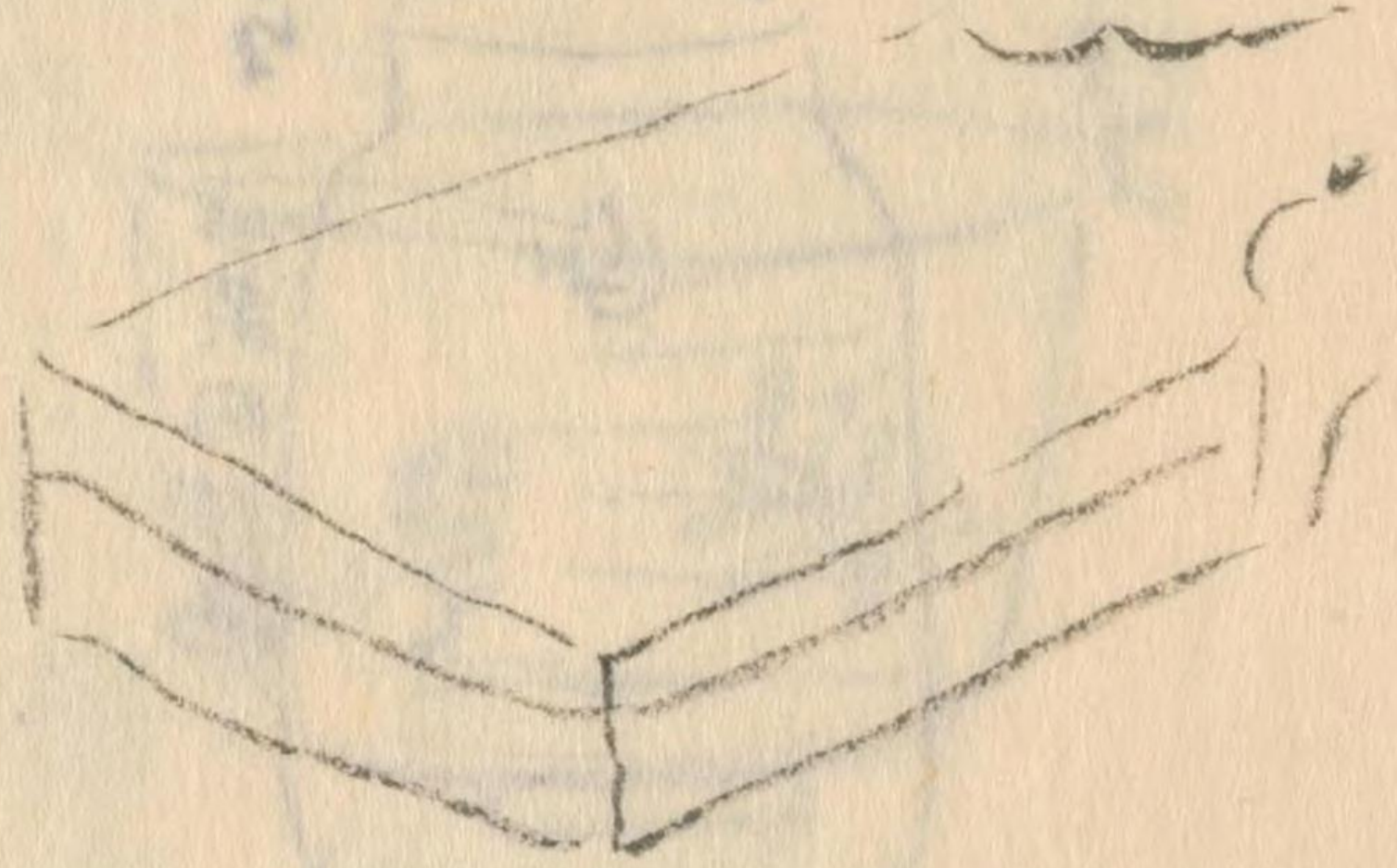
841
124

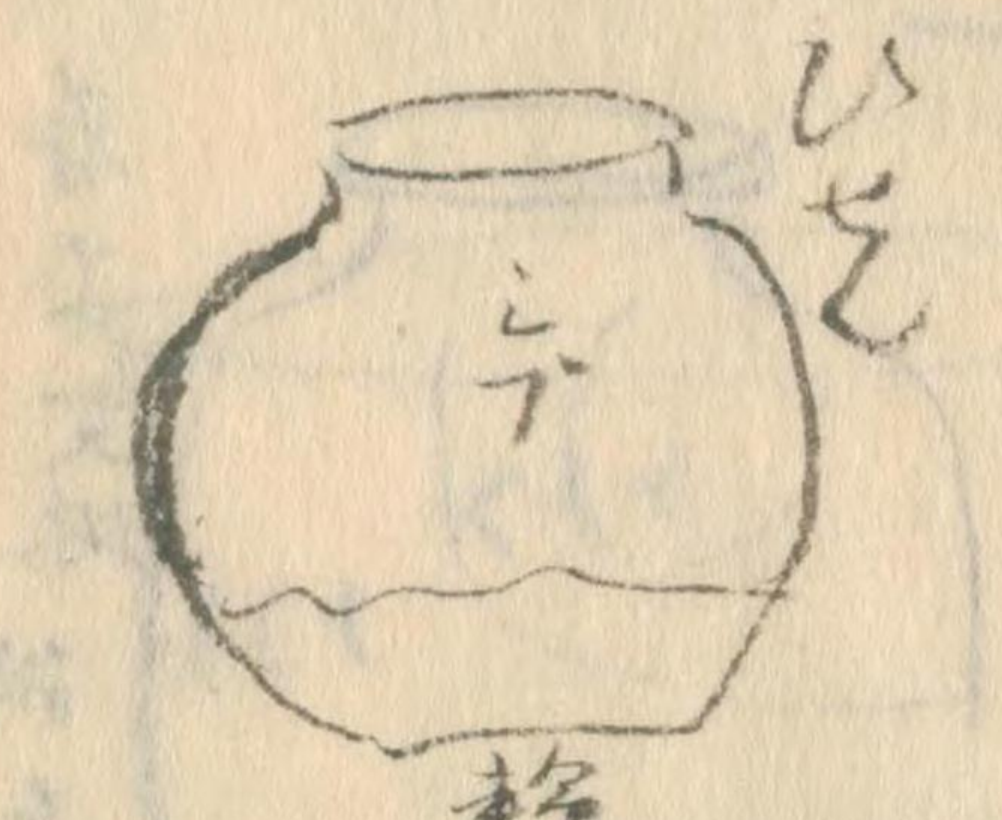
ガラス使用

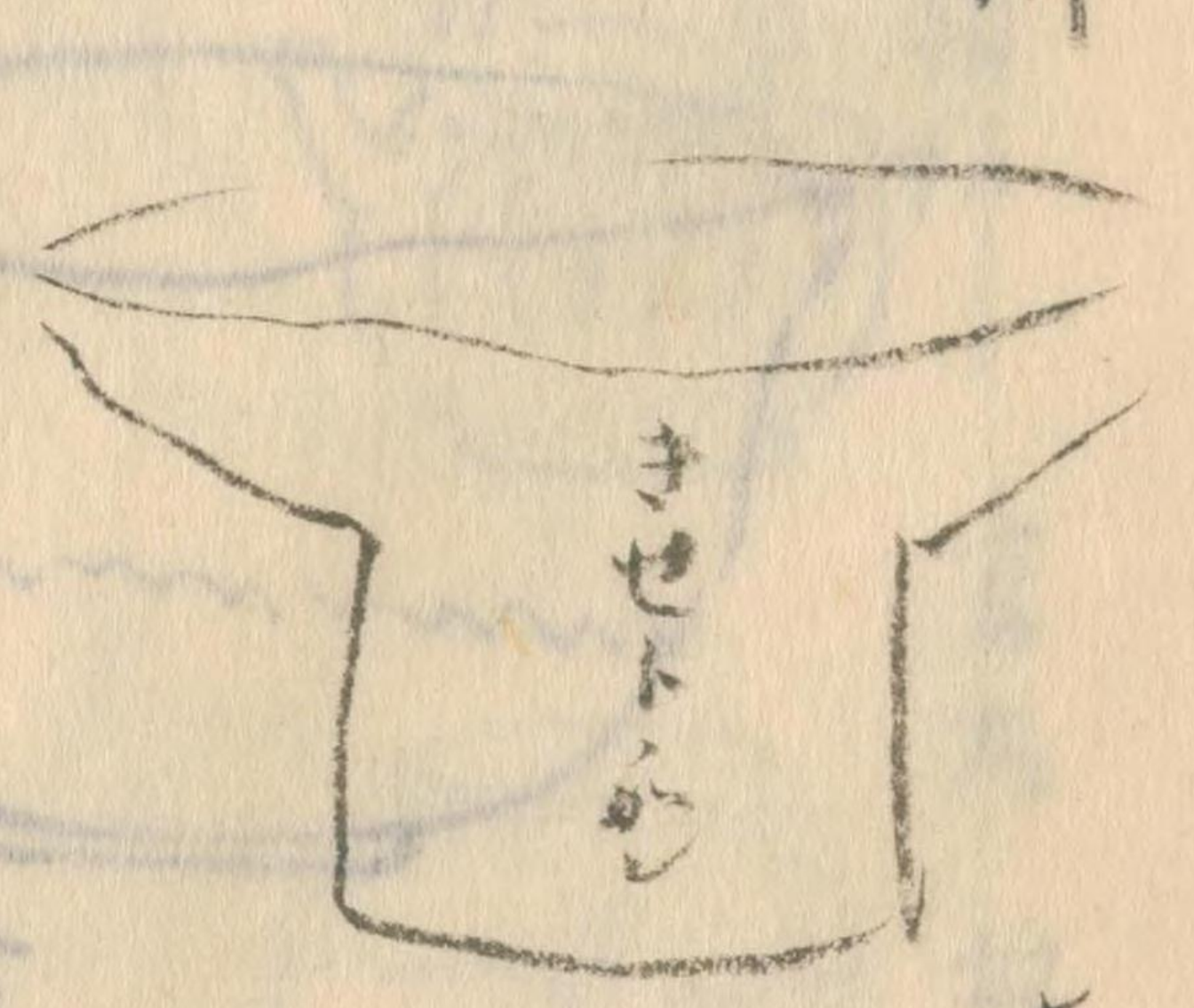

黄いらほ

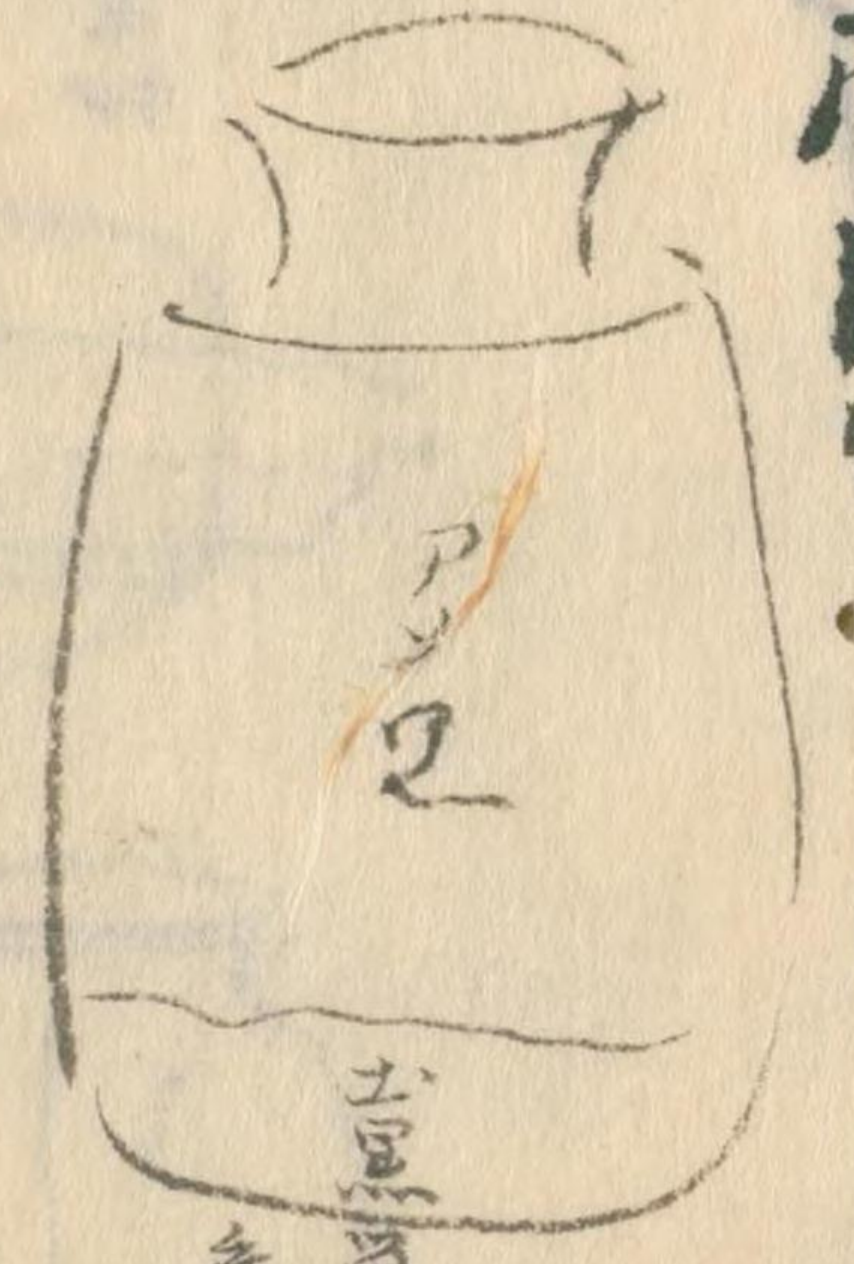

吹墨

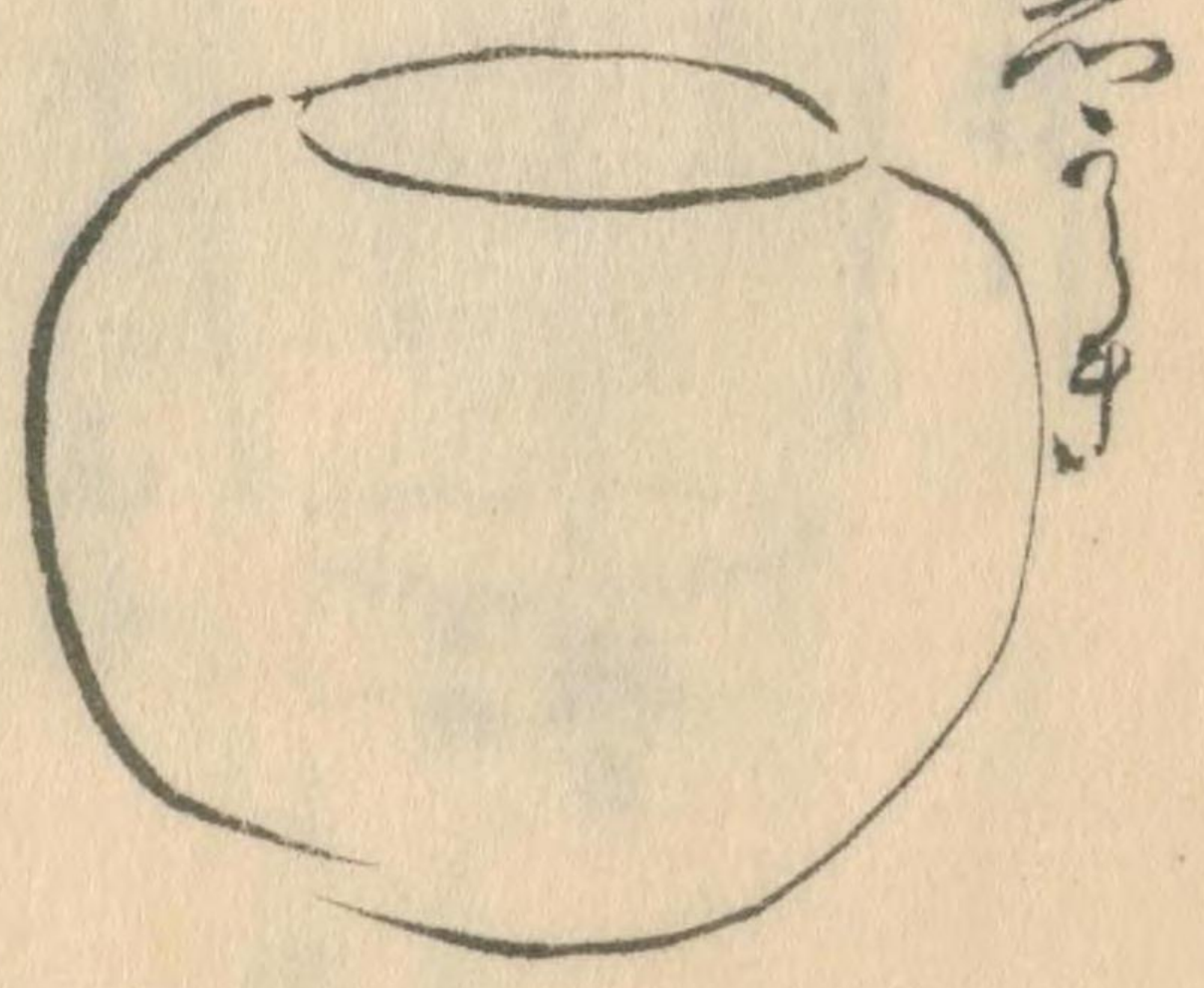

仁清

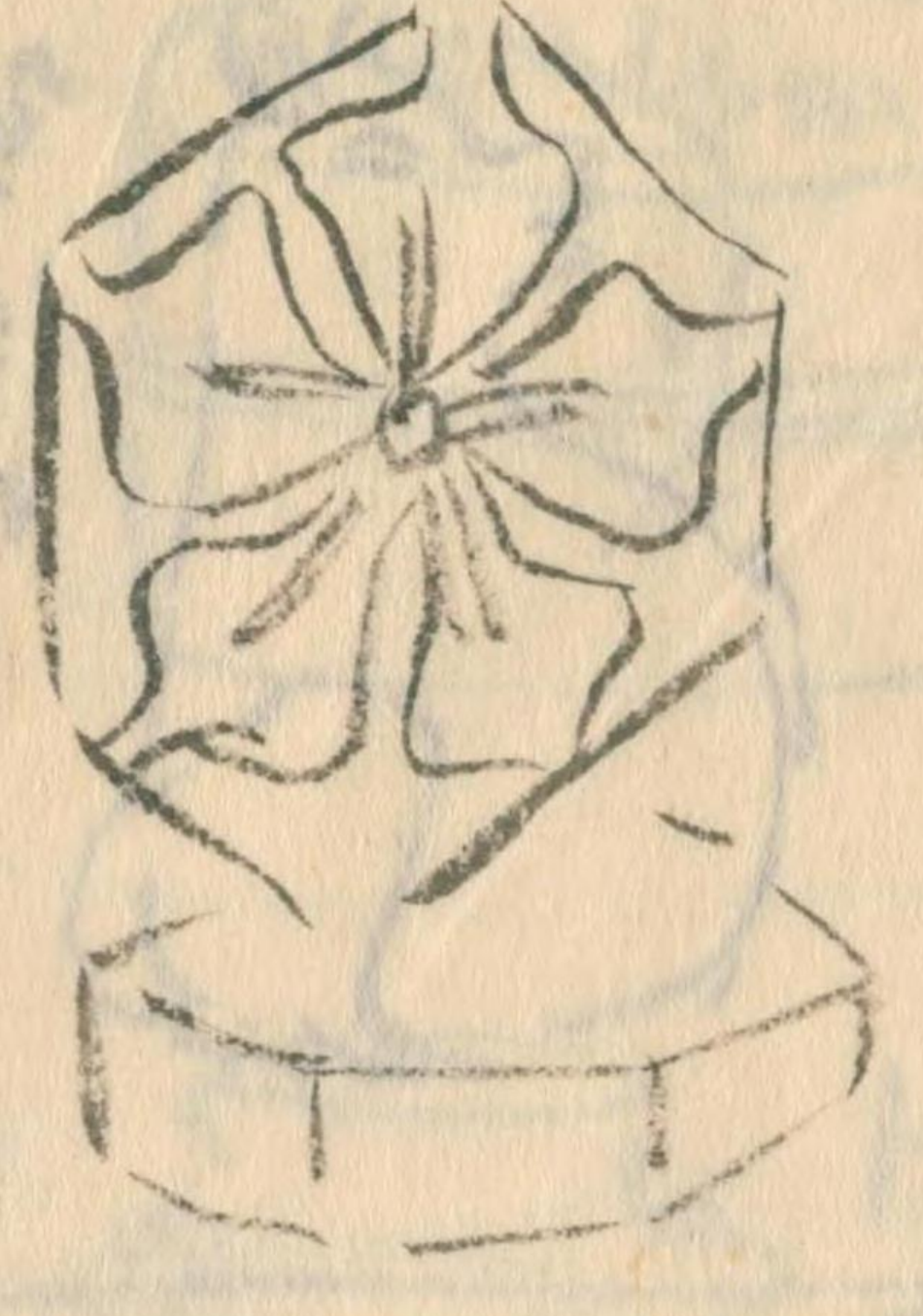

十二月罫ト
饒州

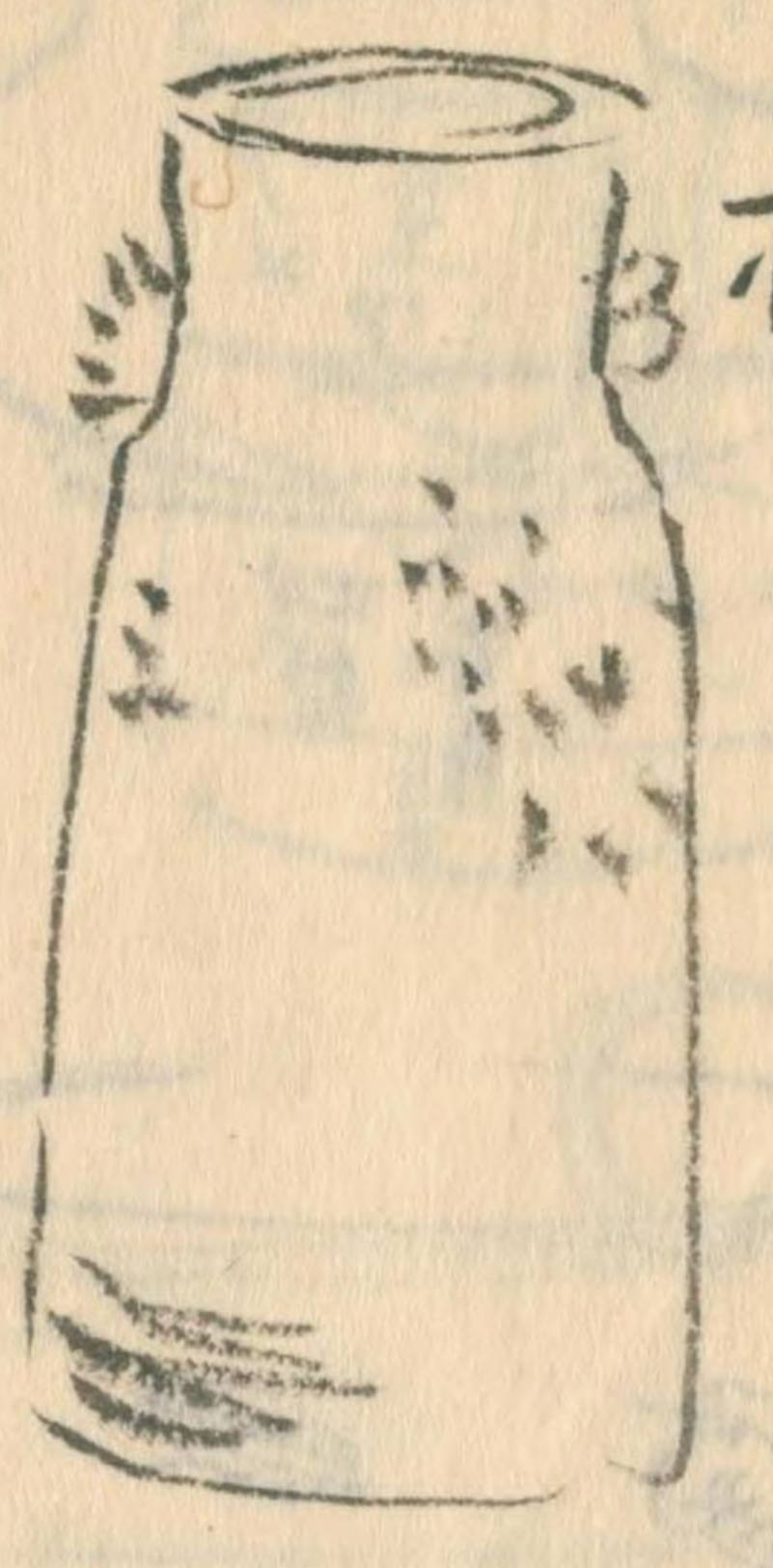

ひそく
ヒフ
粉ふき

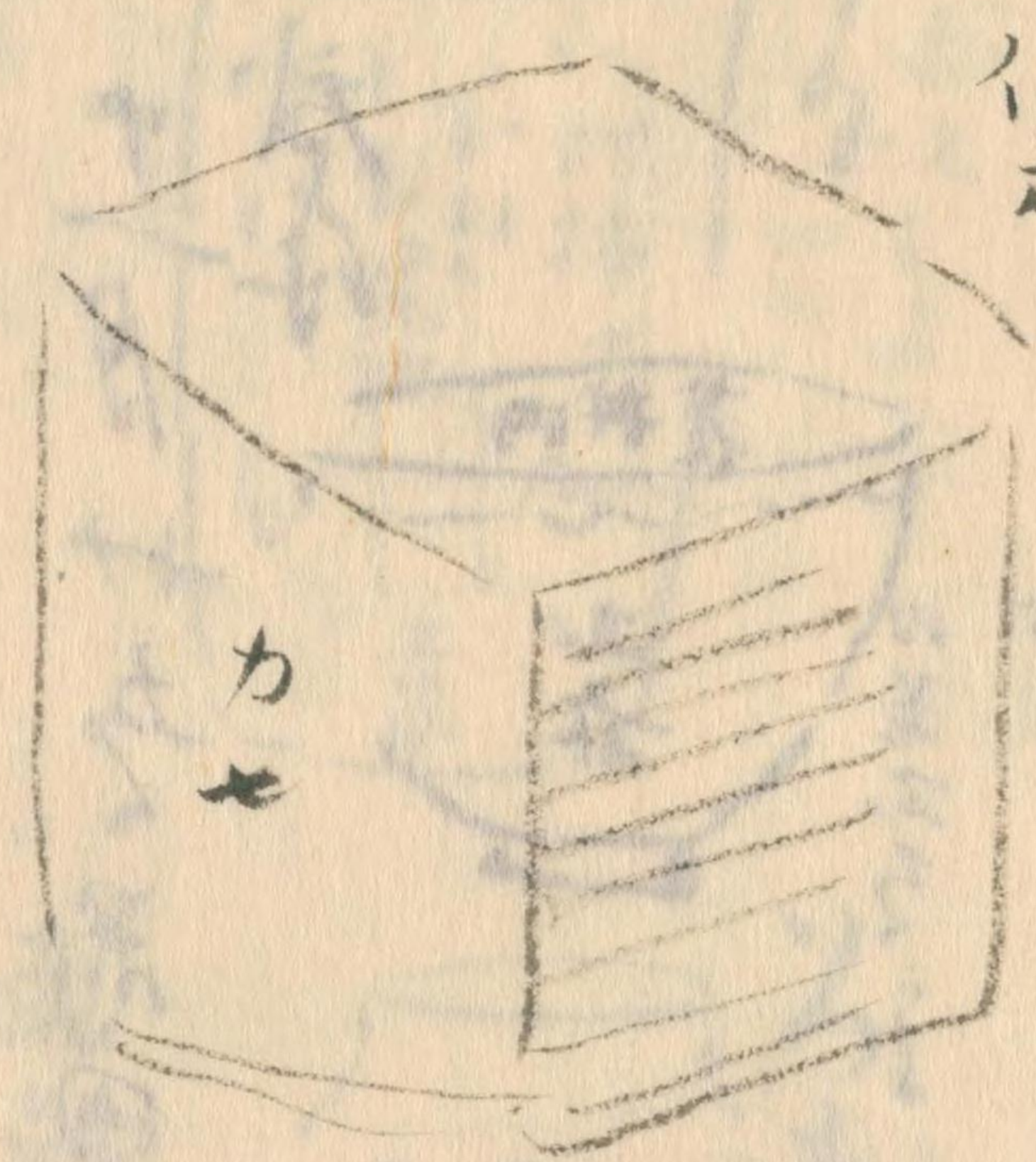

きせトかし

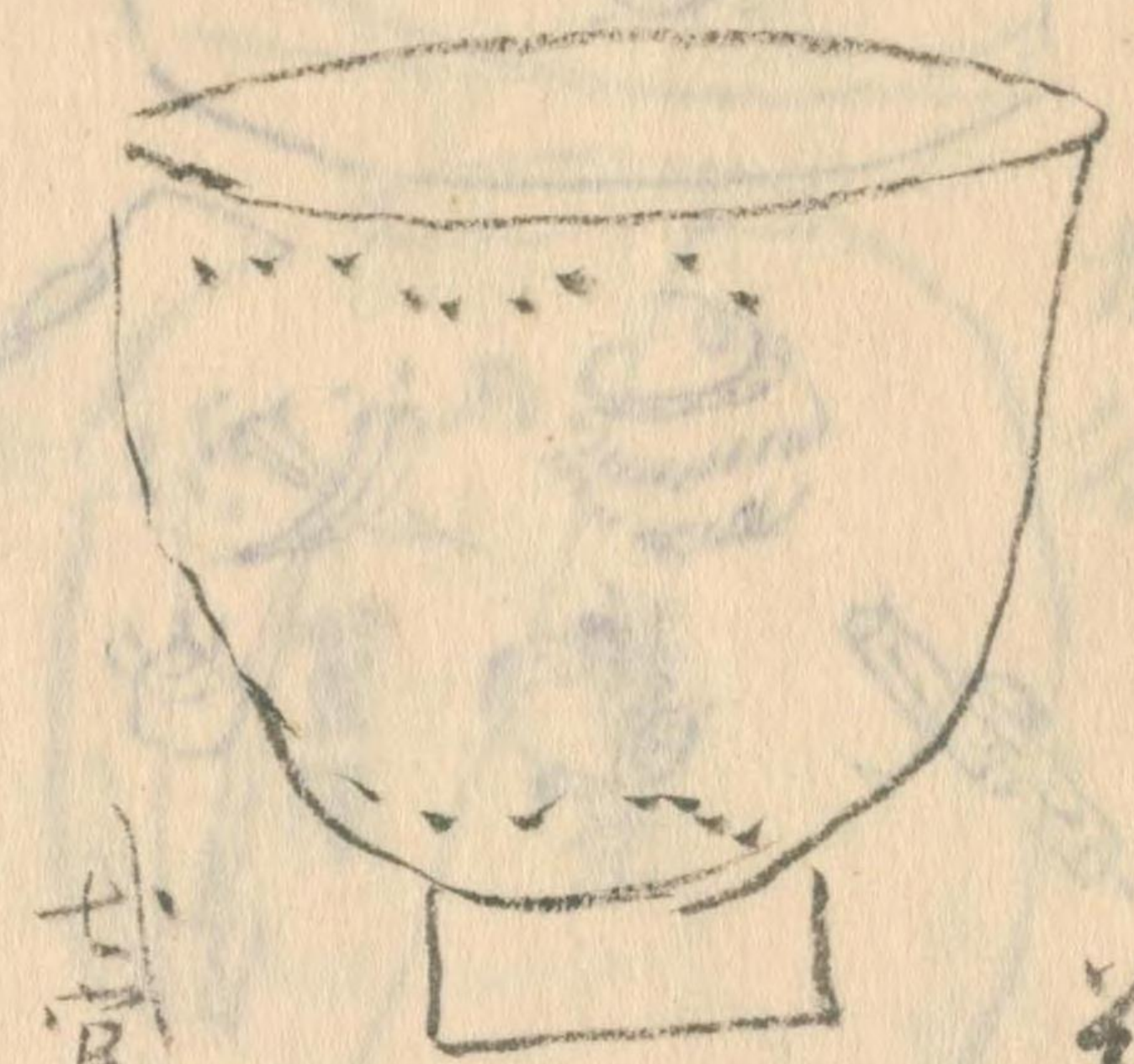

唐津出[illegible]今盃
アメ足
土黒
糸切ナレ

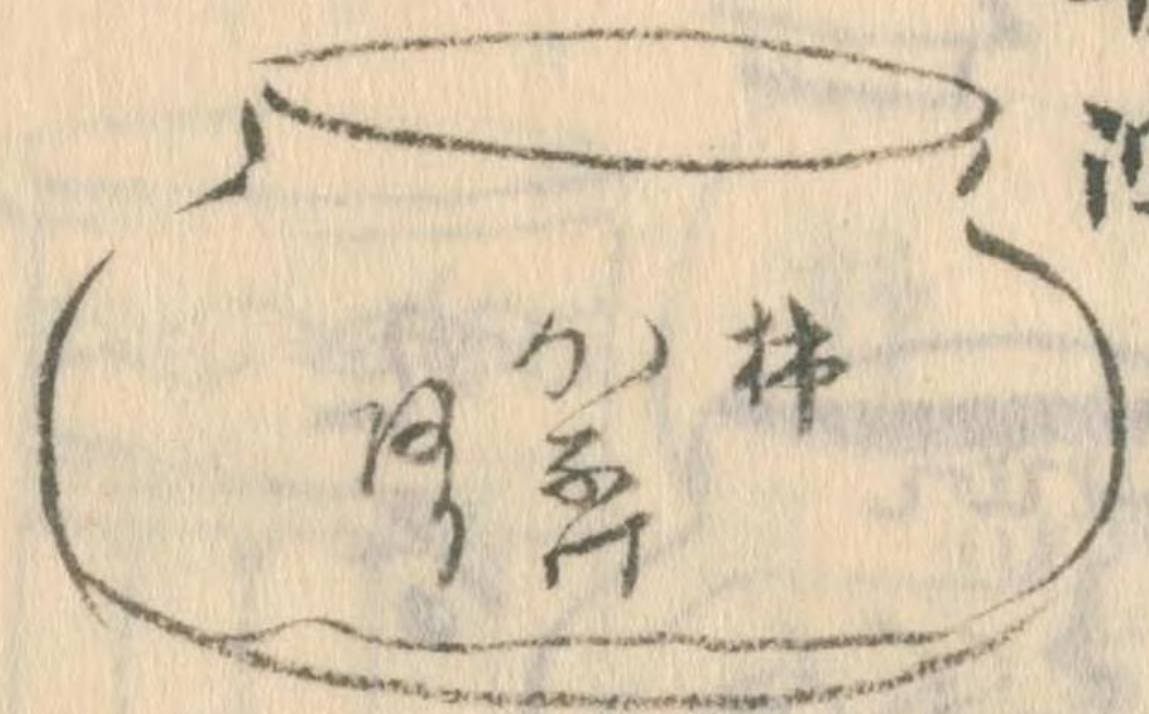

志ゝ手

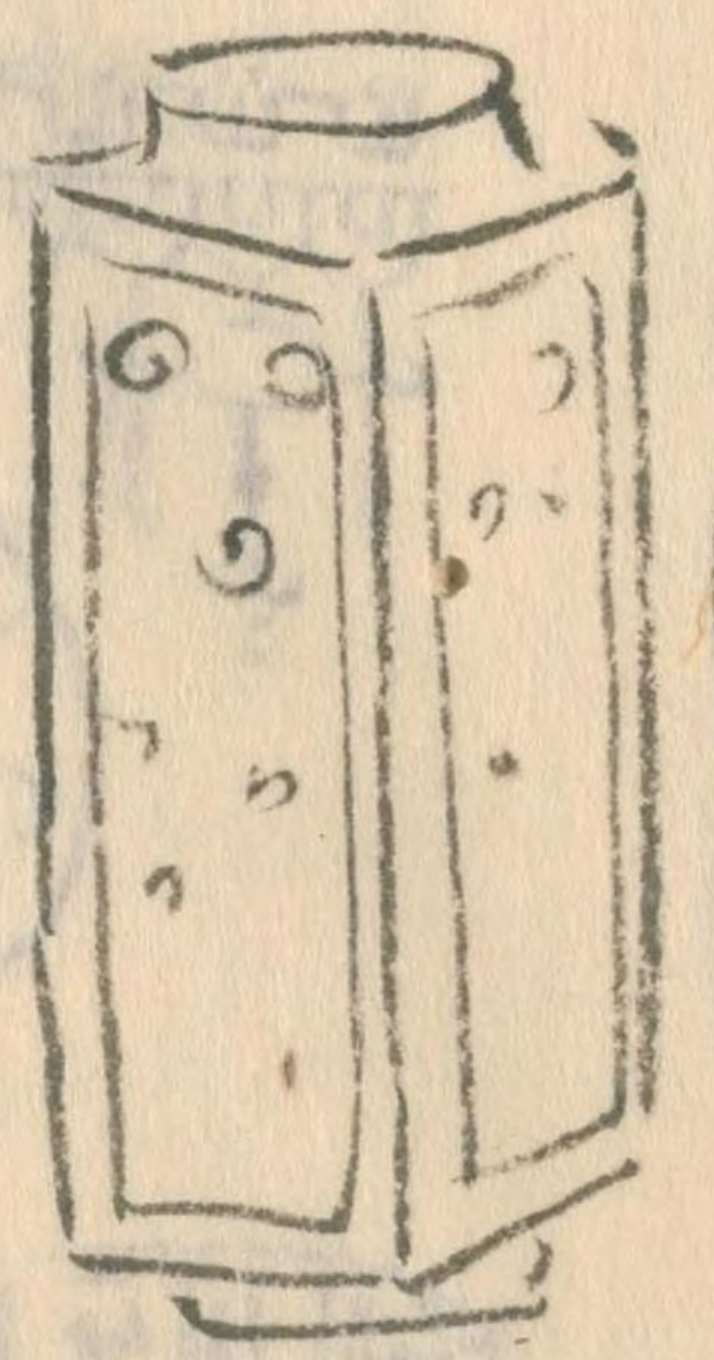


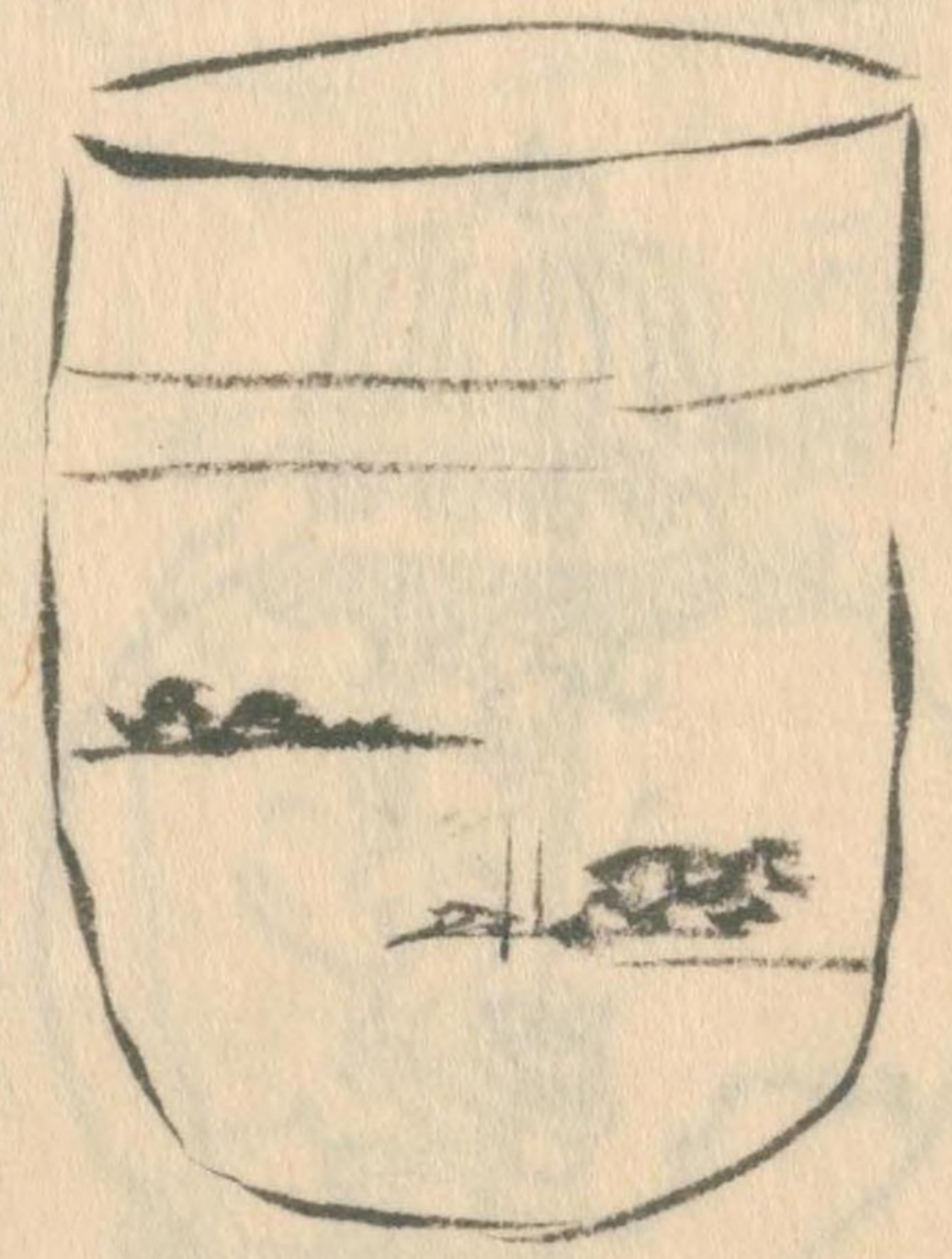

大樋


伊万
カセ

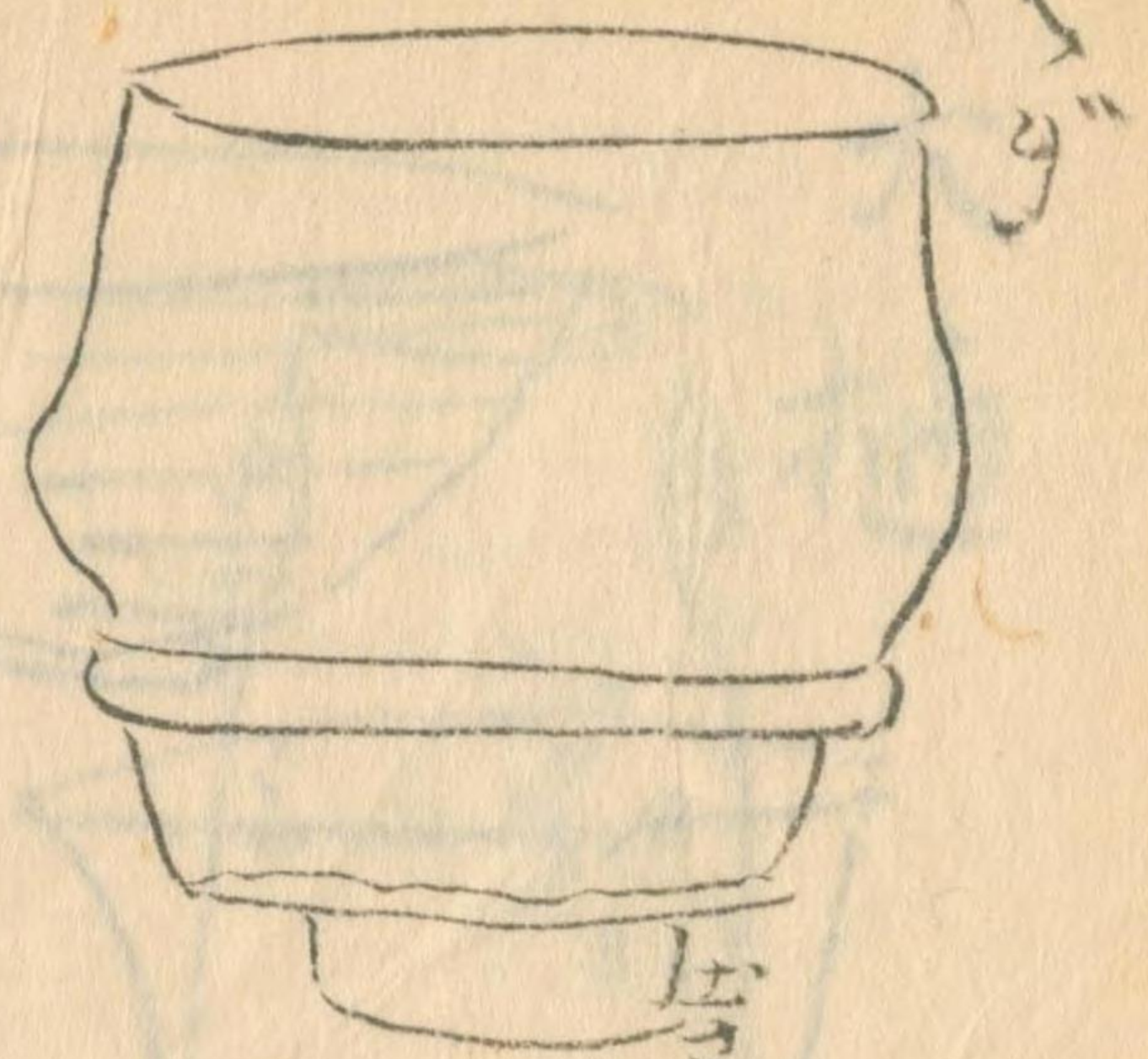

ハンス
七官

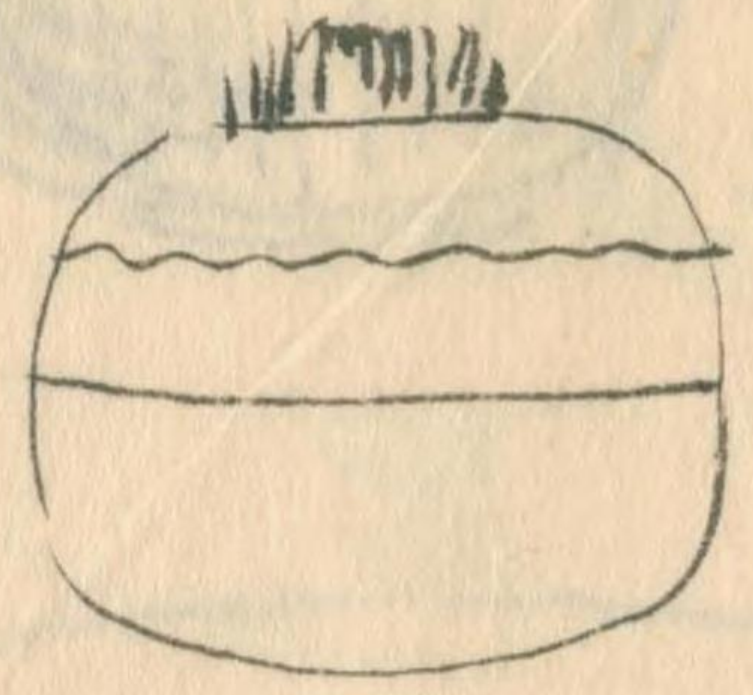

丹波
柿
か斉
同り
本手印

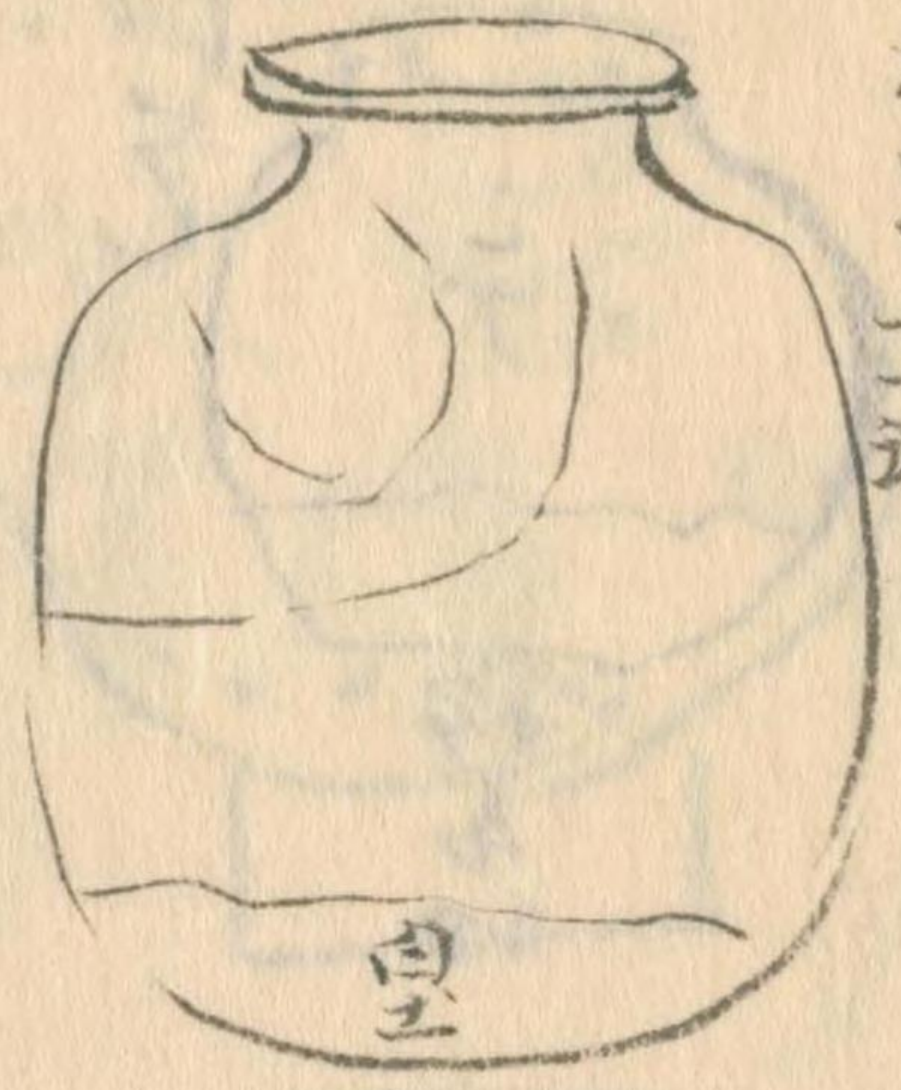


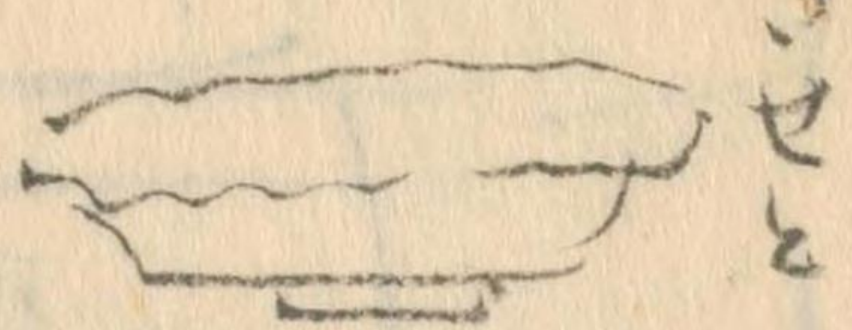

道八小杉

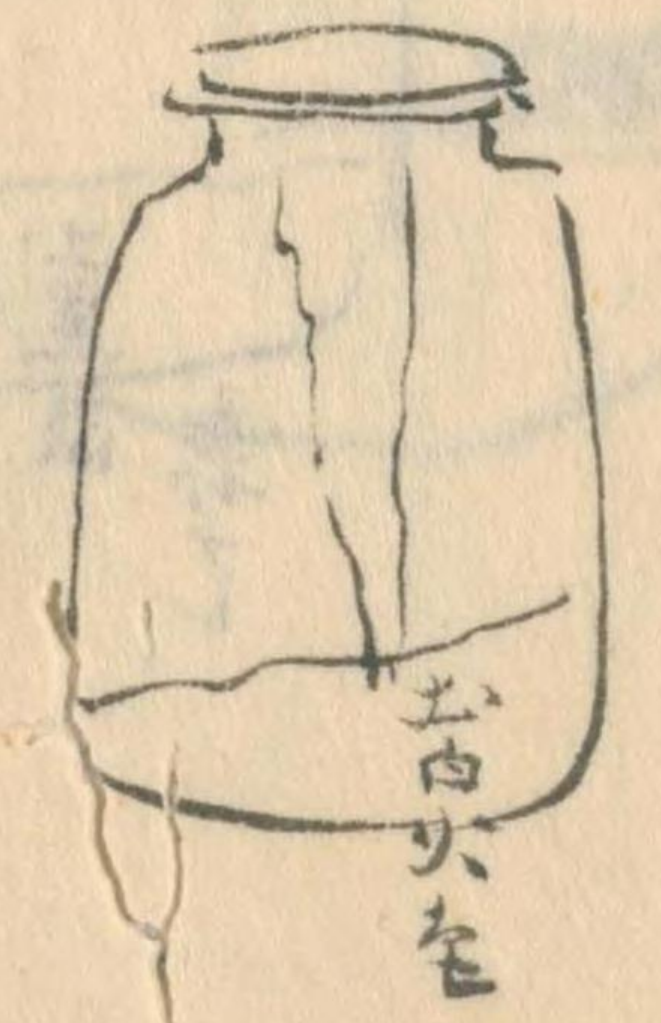
841
124

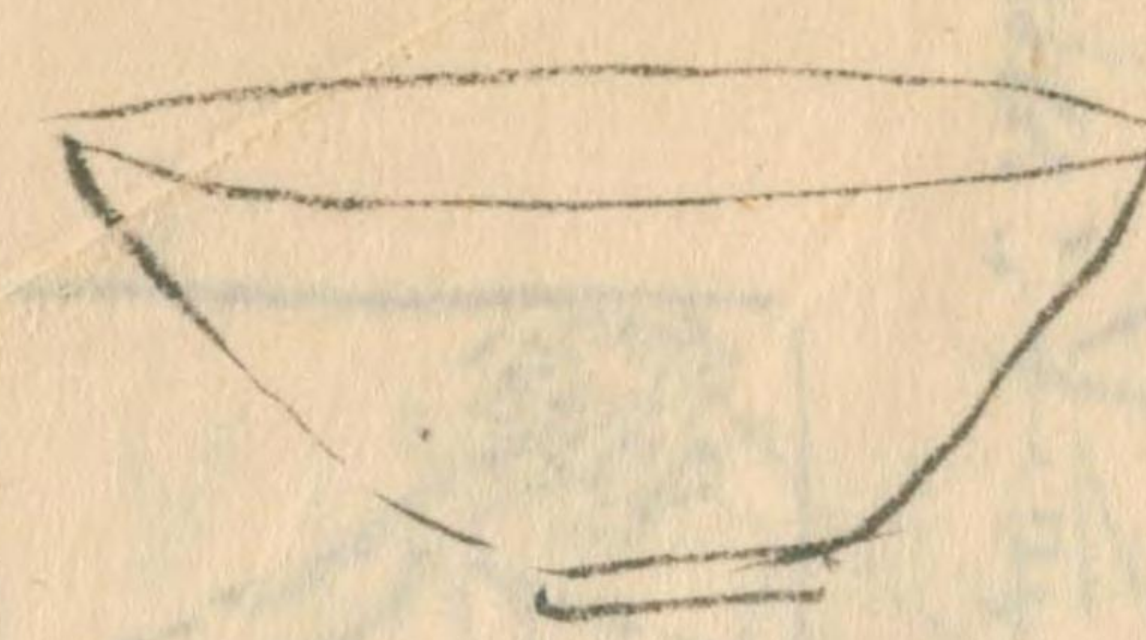

ちが
上ゑ乃
白

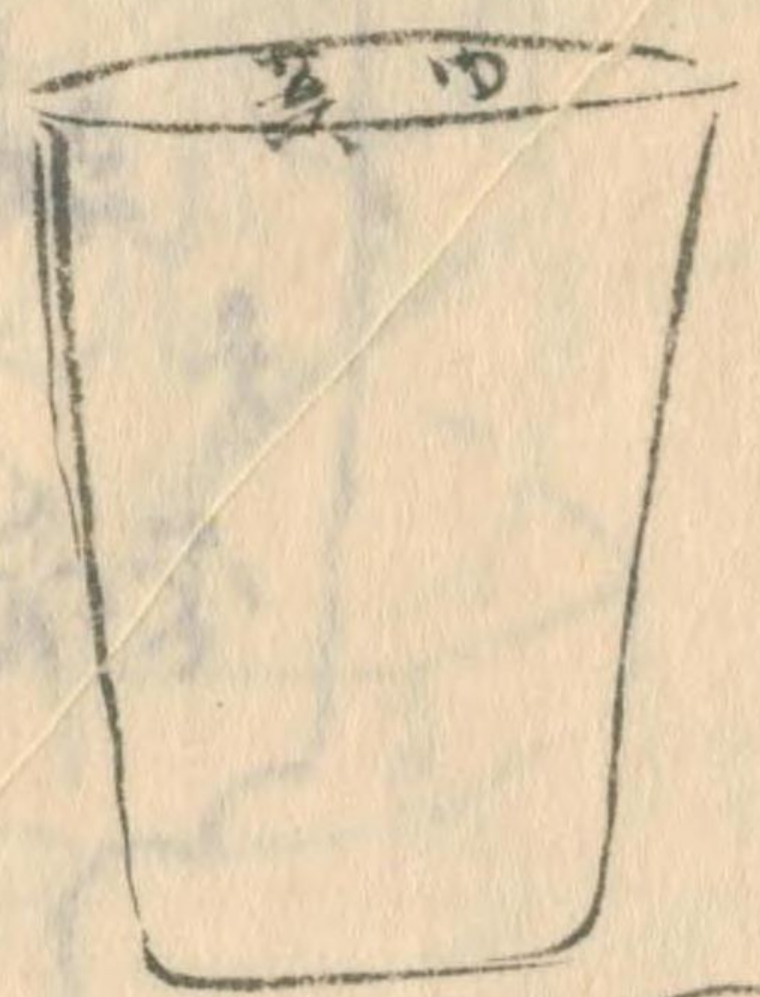

杉木宗四

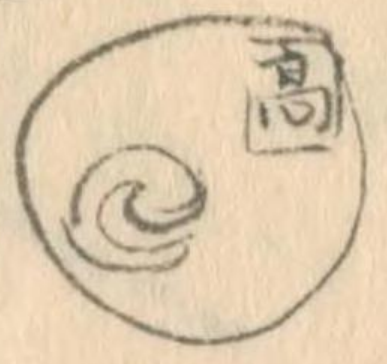

春木文琳 銘東雲
皇
生印

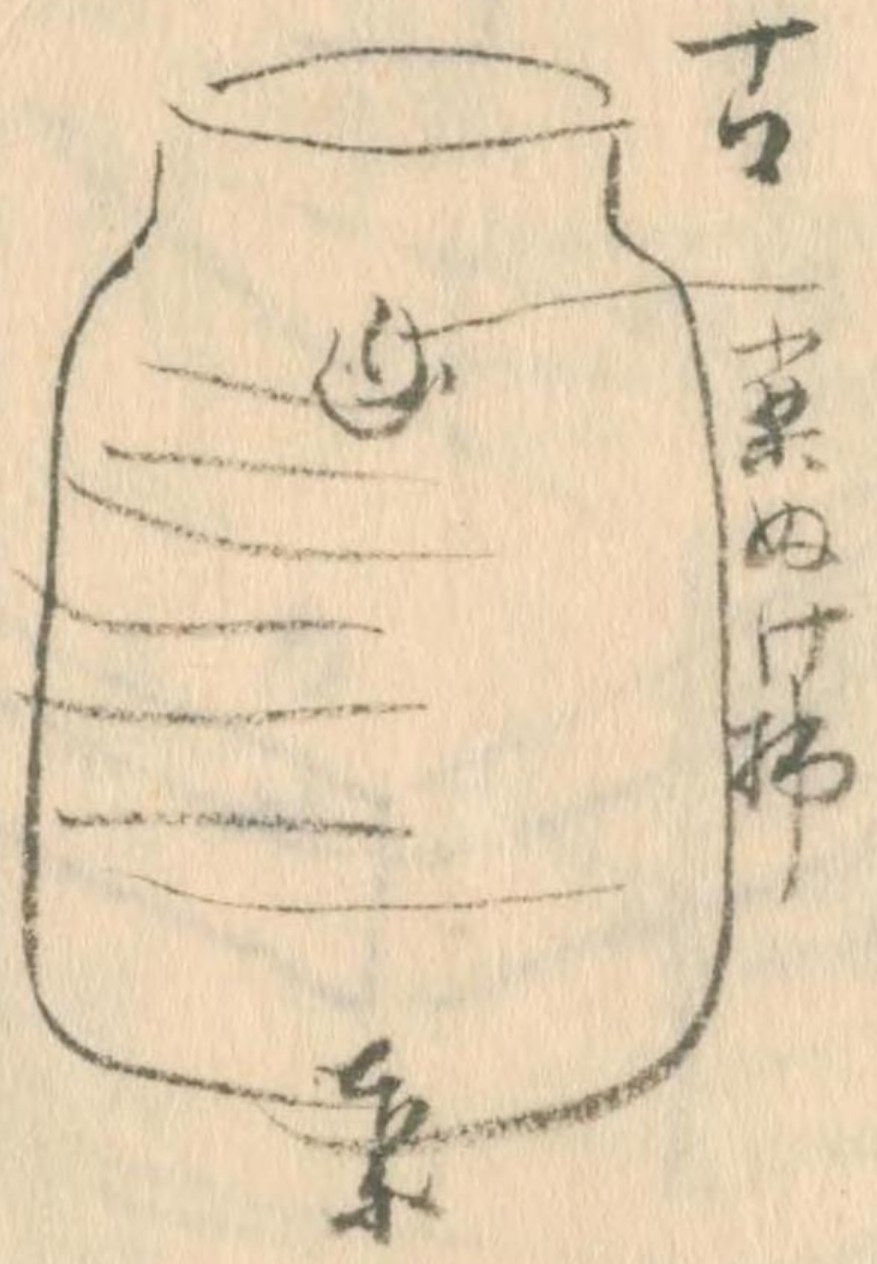

きせと

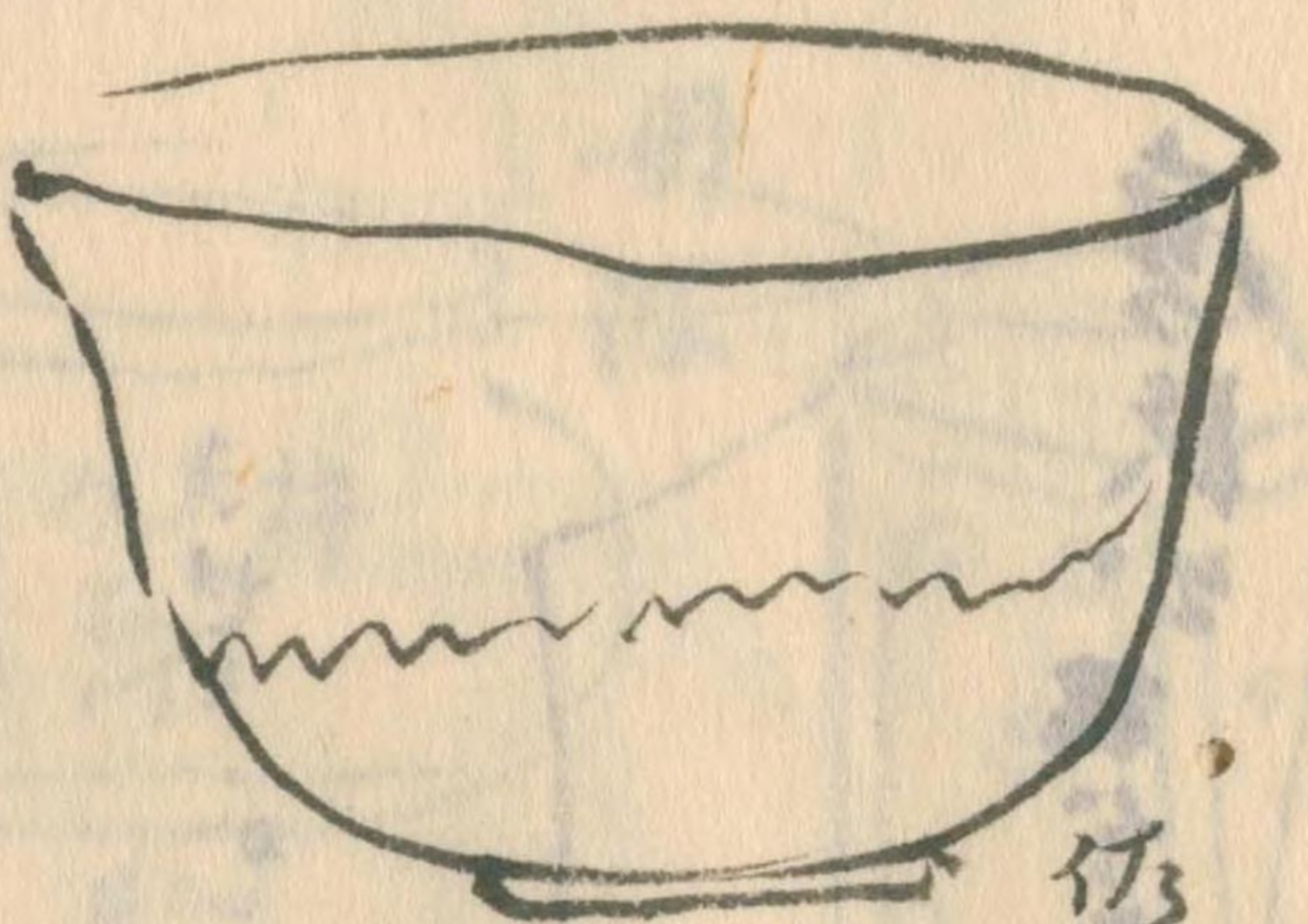

土白火色

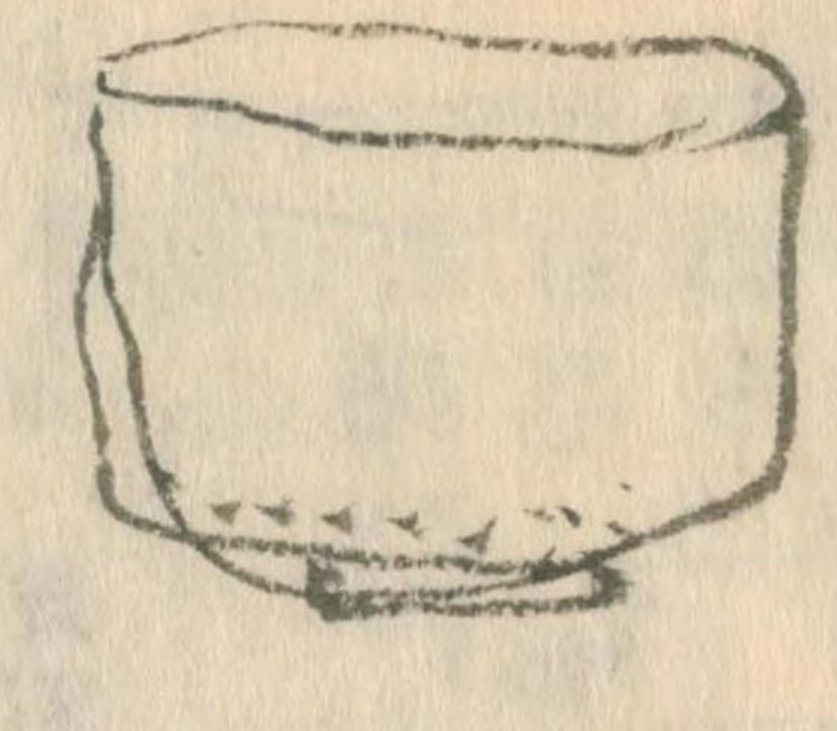

イラホ

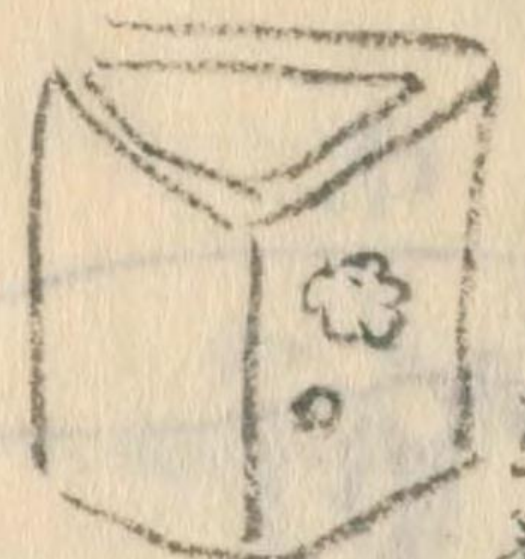

切餅 ナラン

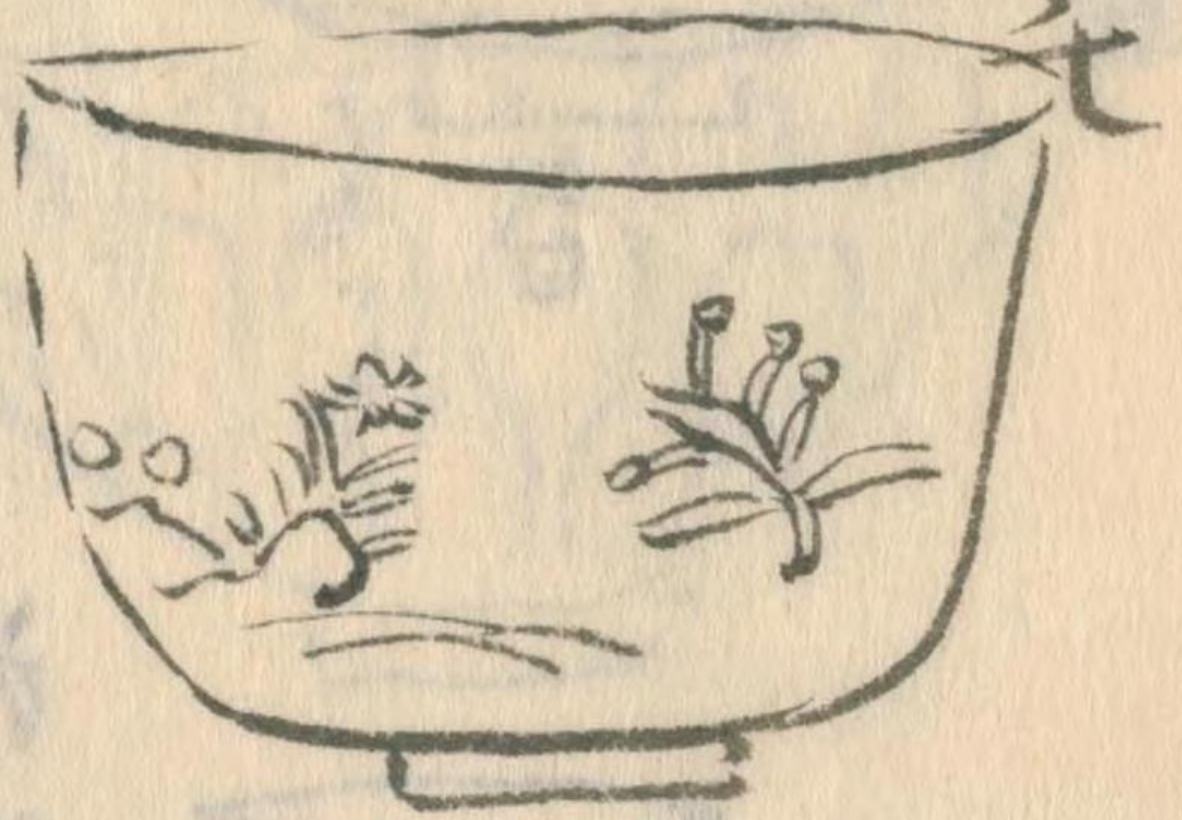

高

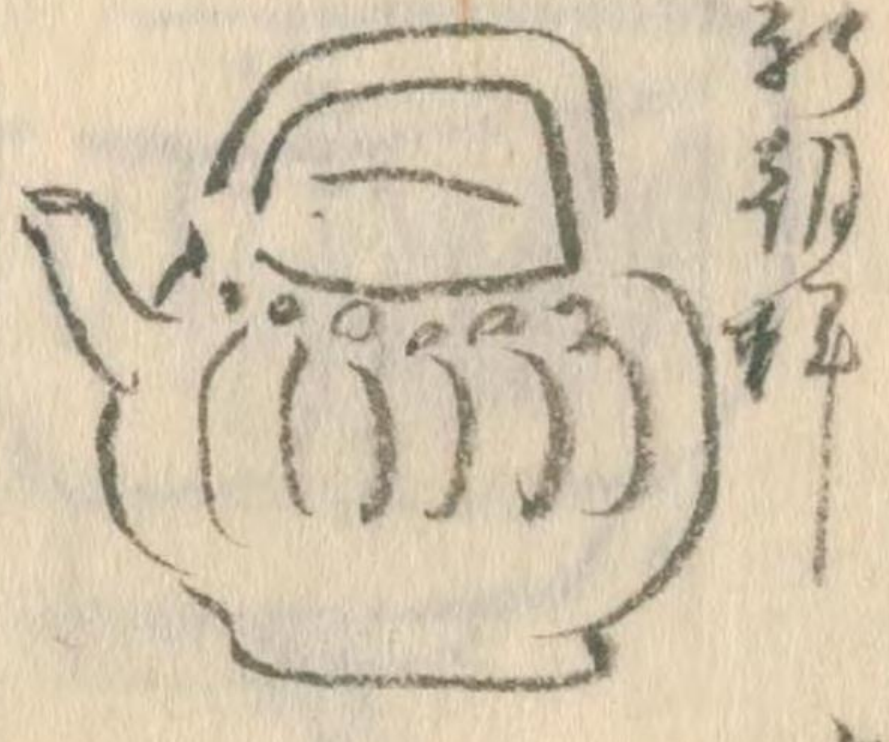

床古
一葉ぬけ物
楽

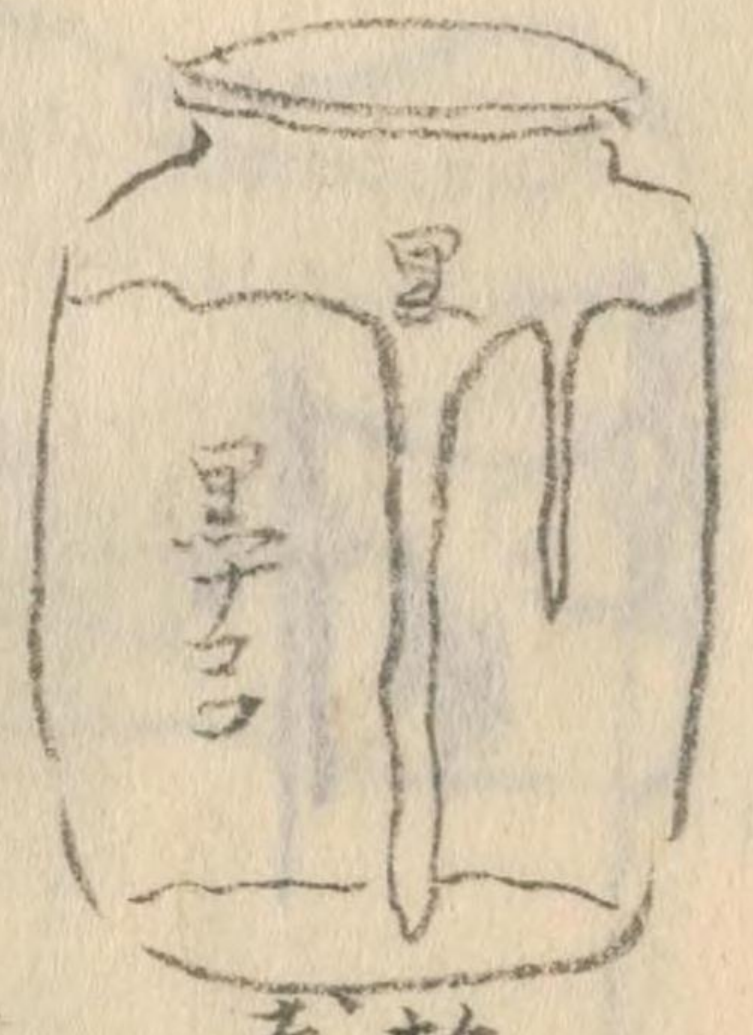

作州 金太之作
文化文政頃ノ人

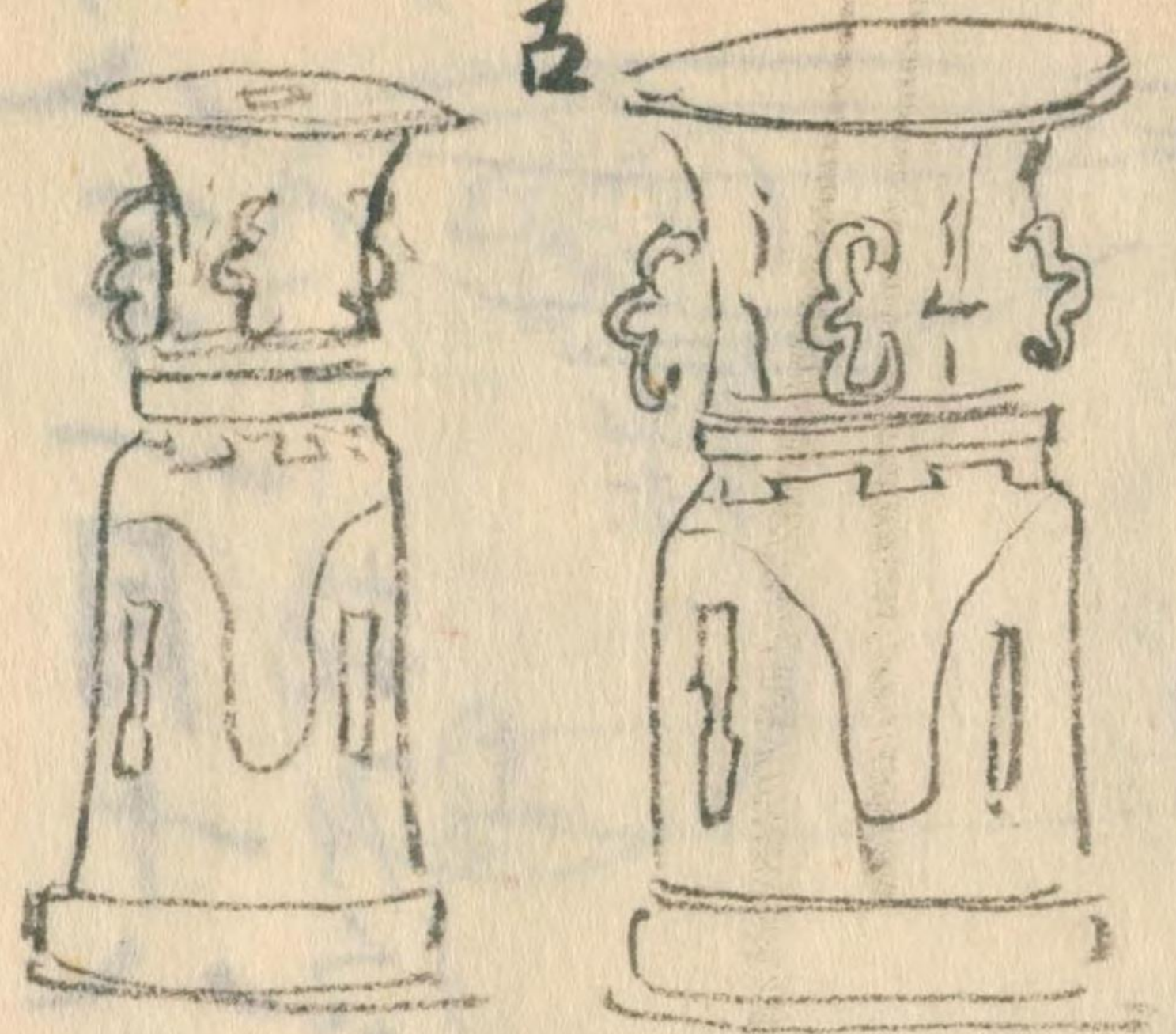

十方サ 今戸
數

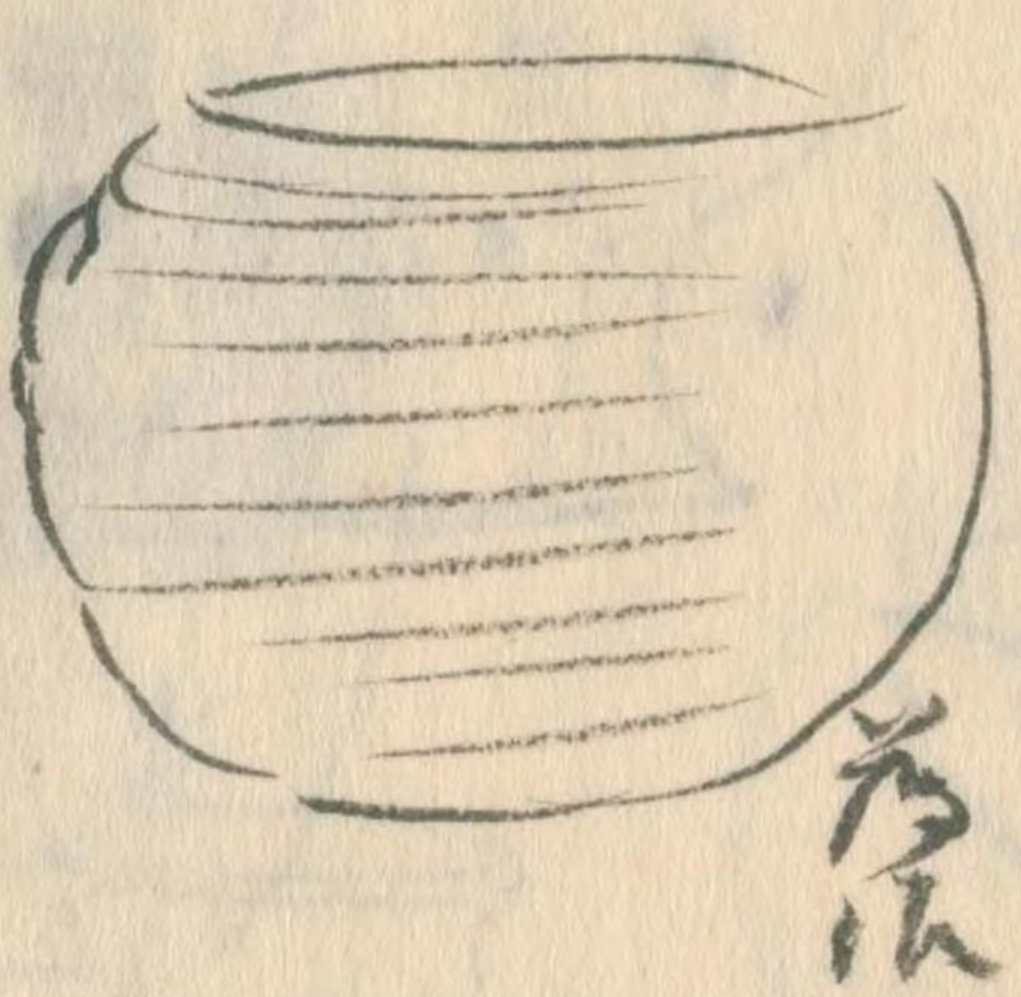

南京青磁

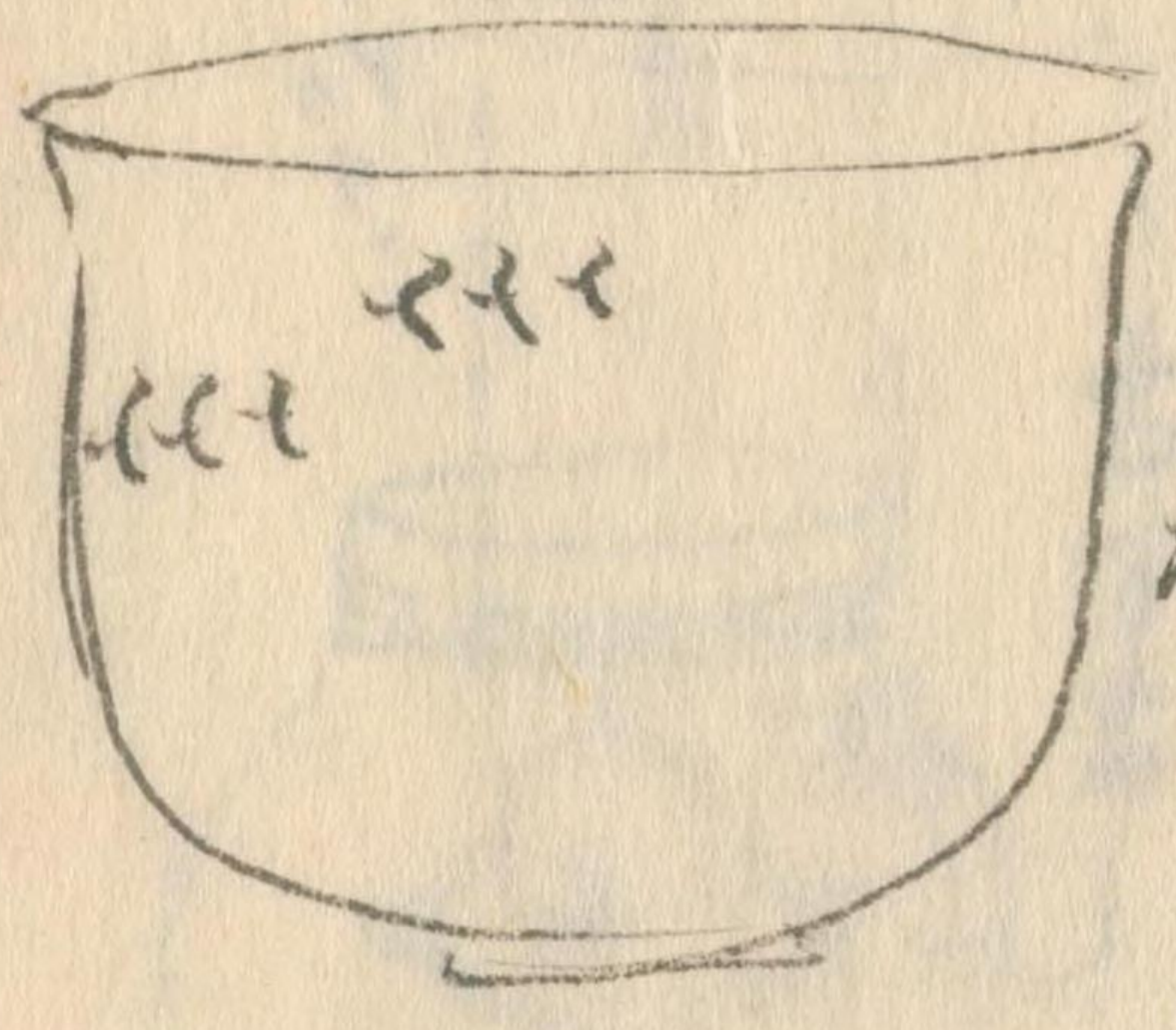

赤ら七

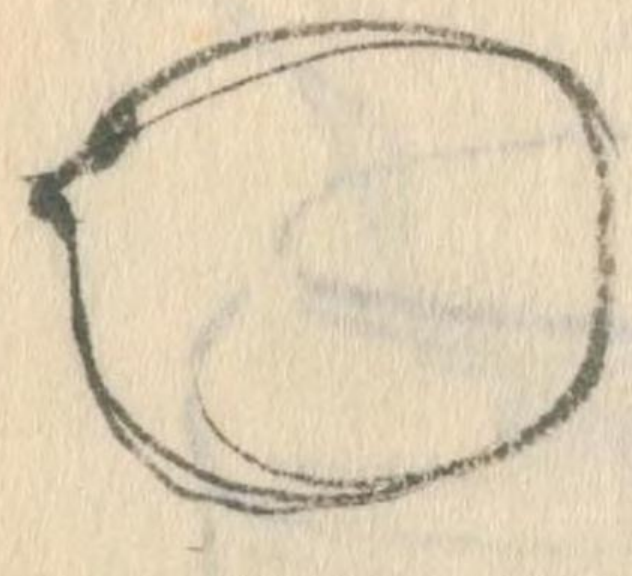

新朝顔


京屋 銘藤ら
星
黒ナコロ
土瓶 輪系
唐人ノ花作


万古

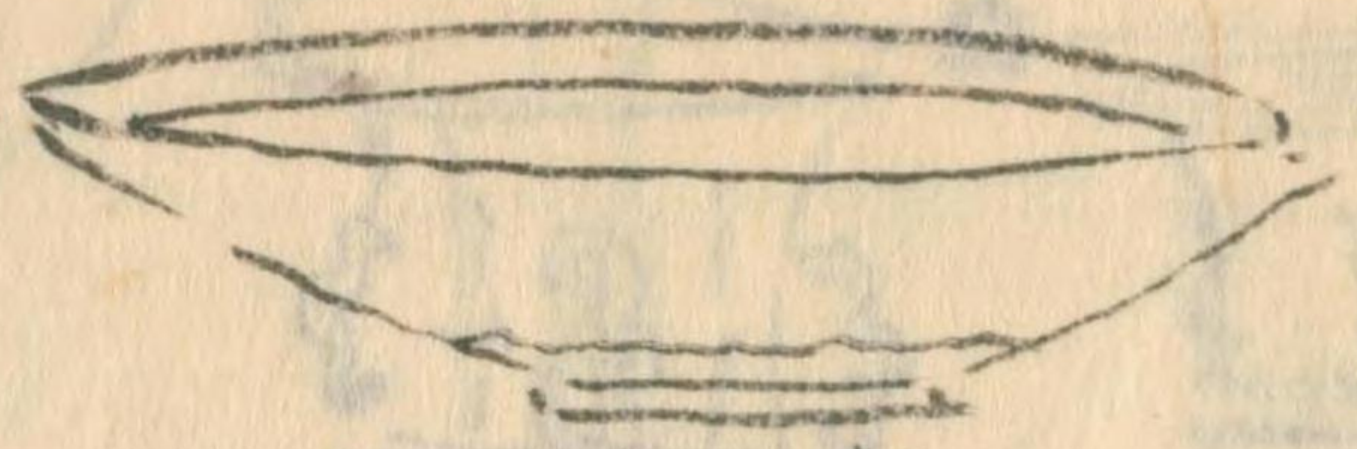

南蛮
萬依


御茶碗写

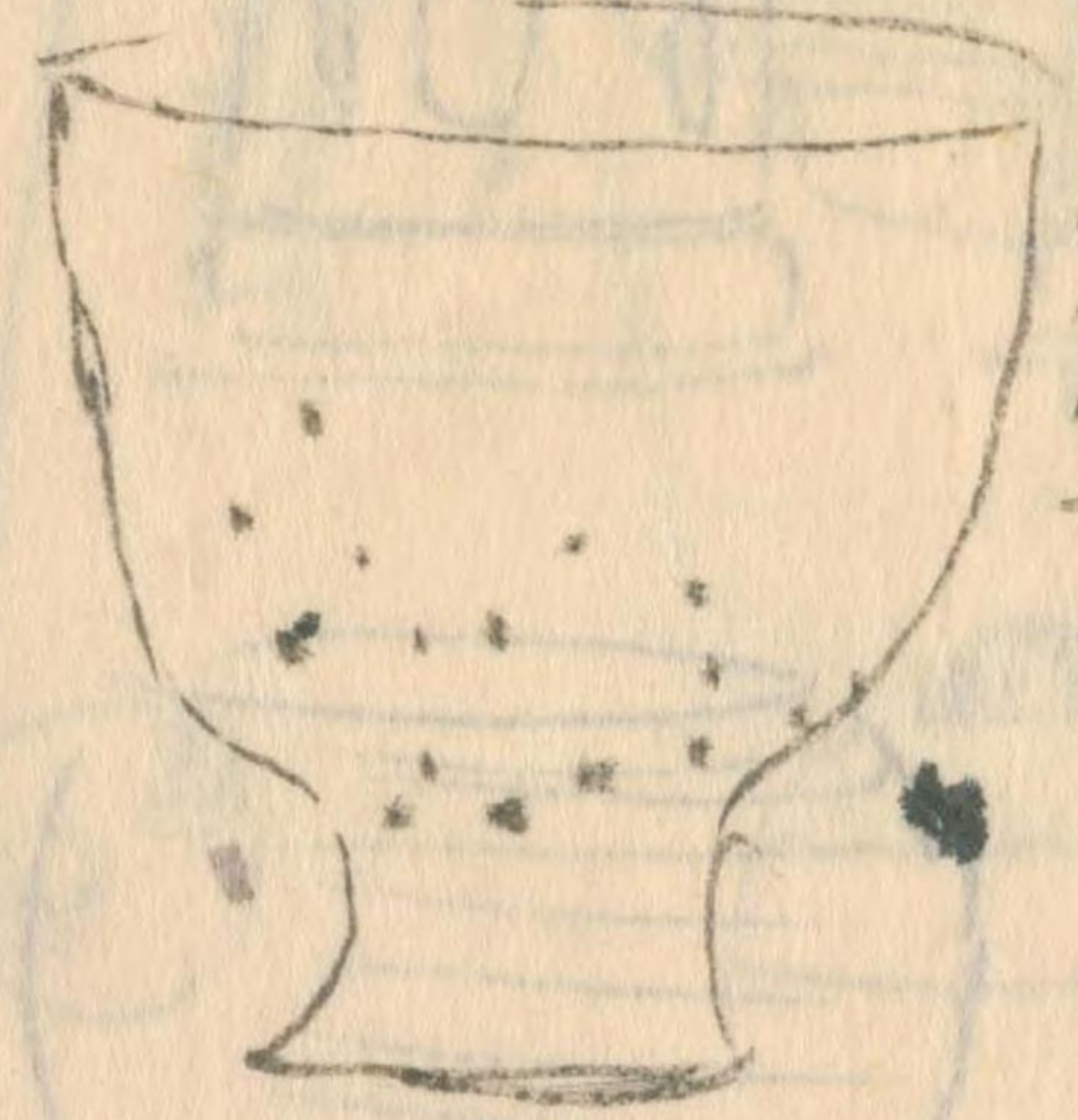


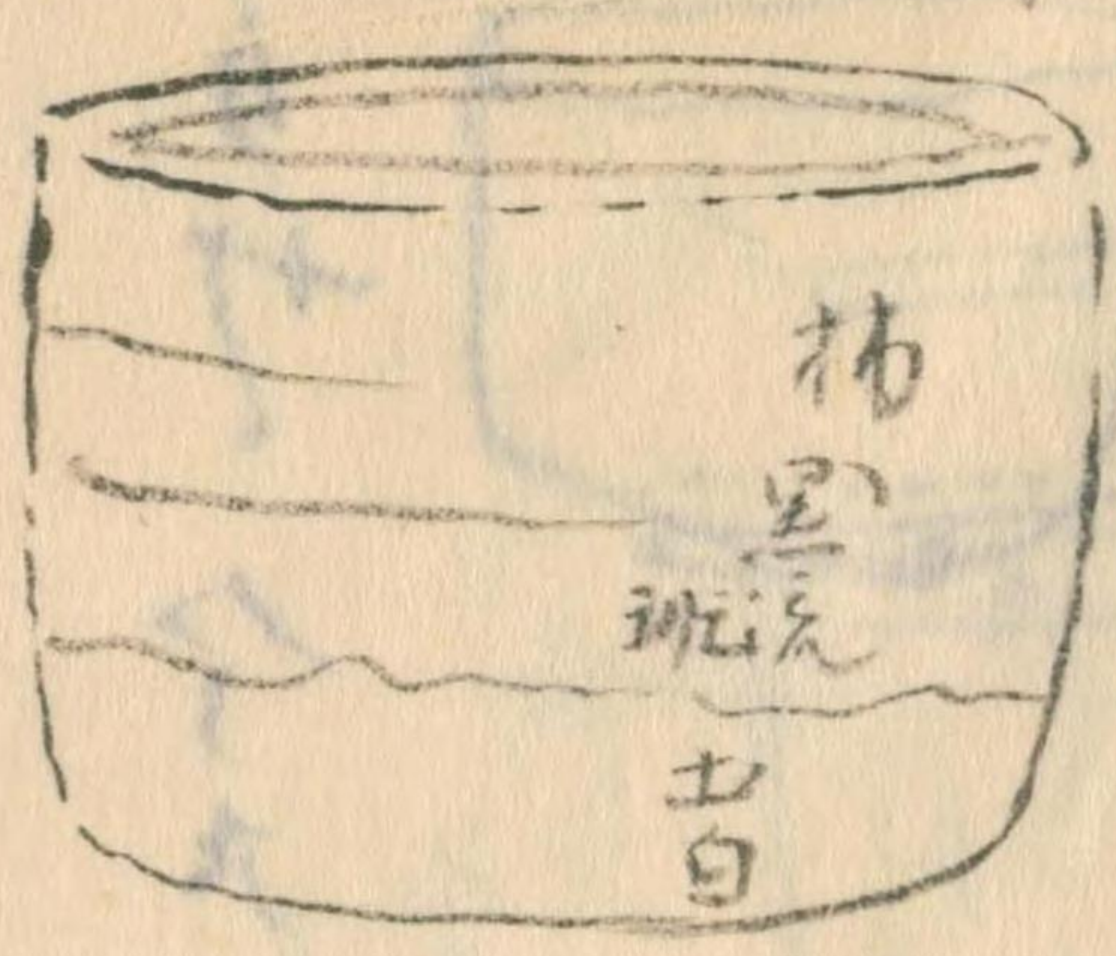
廿八年一月十八日 辰屋やにて

ミろ

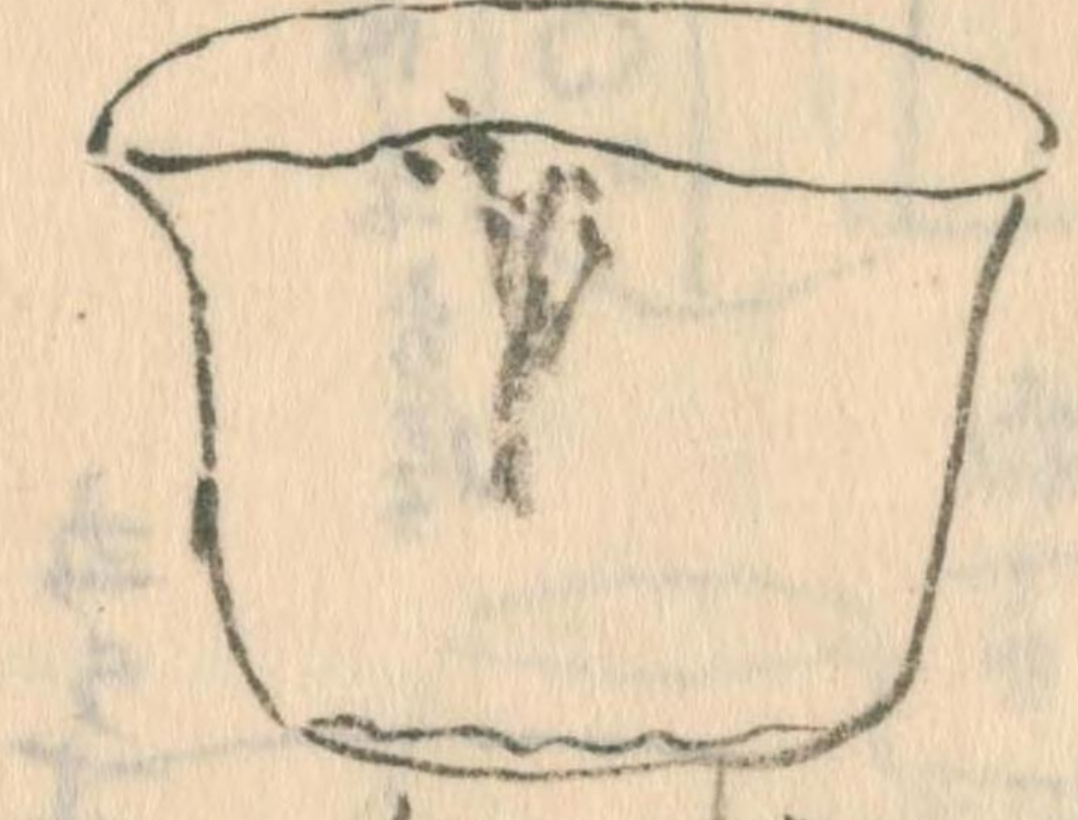


萩 唐人笠之

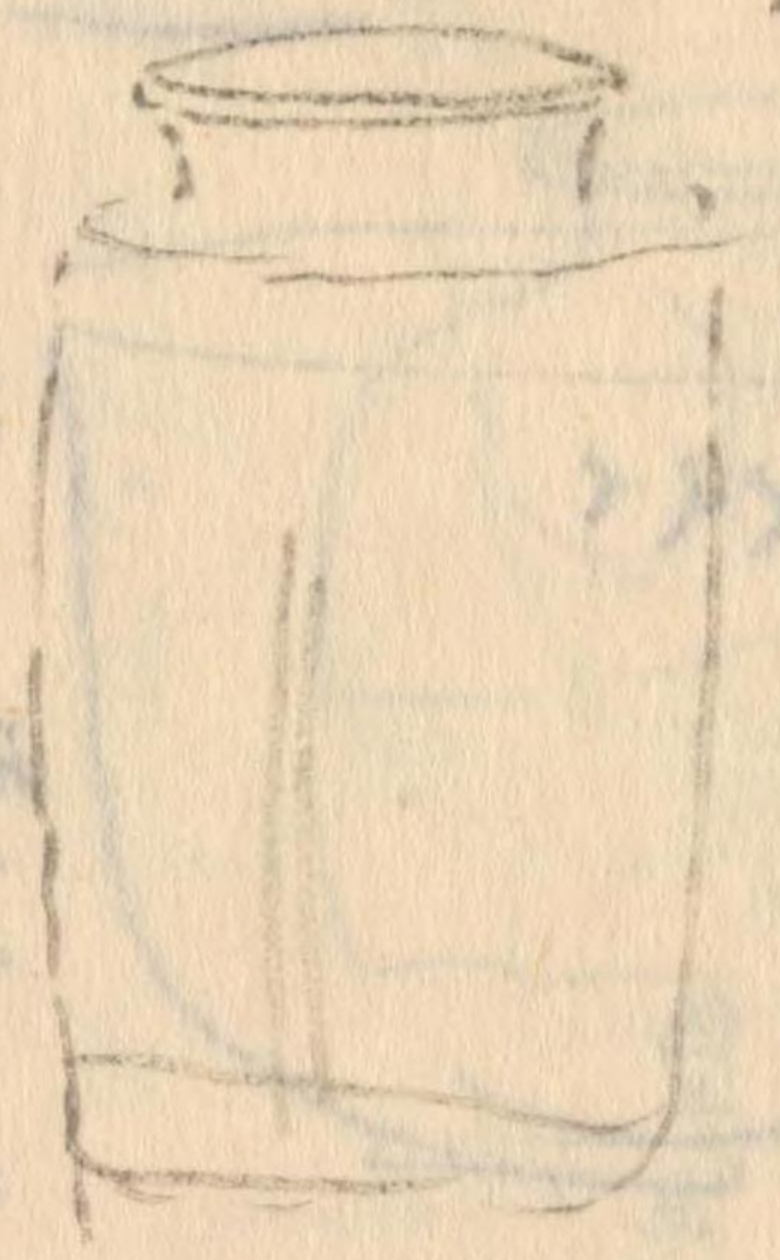



八之花山
ヱボシ
柿
黒流
斑
土白

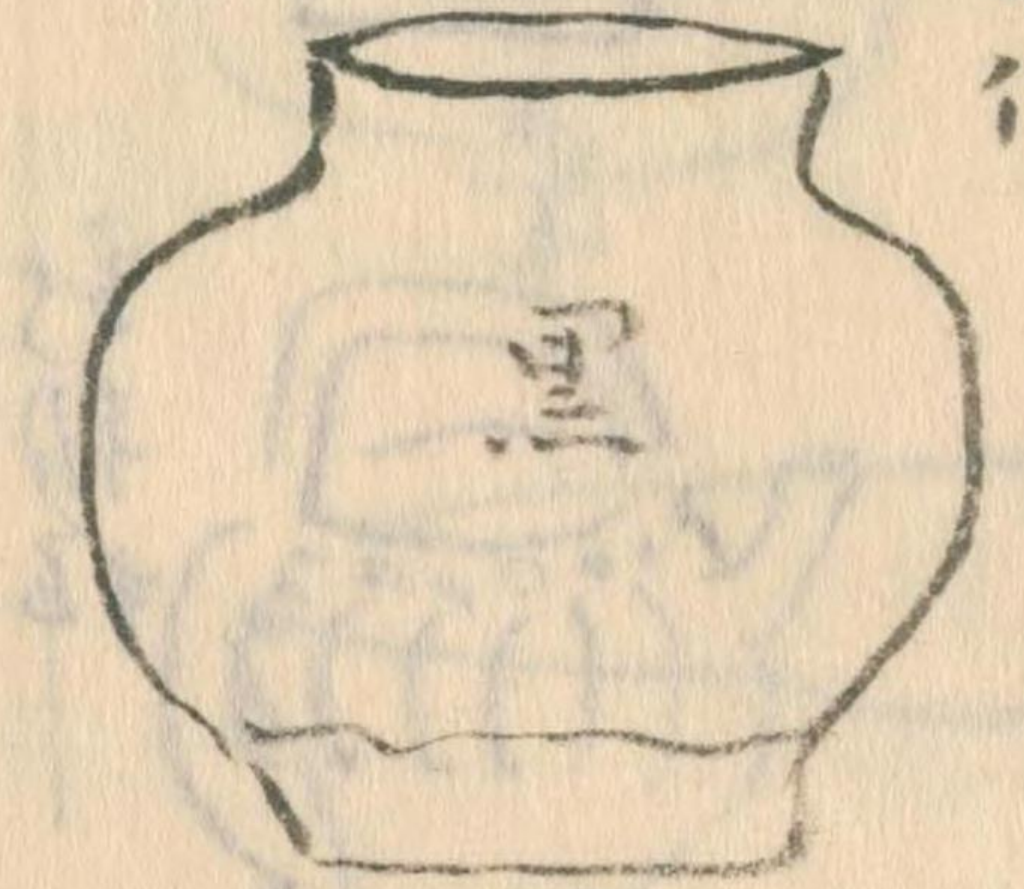
絵セト

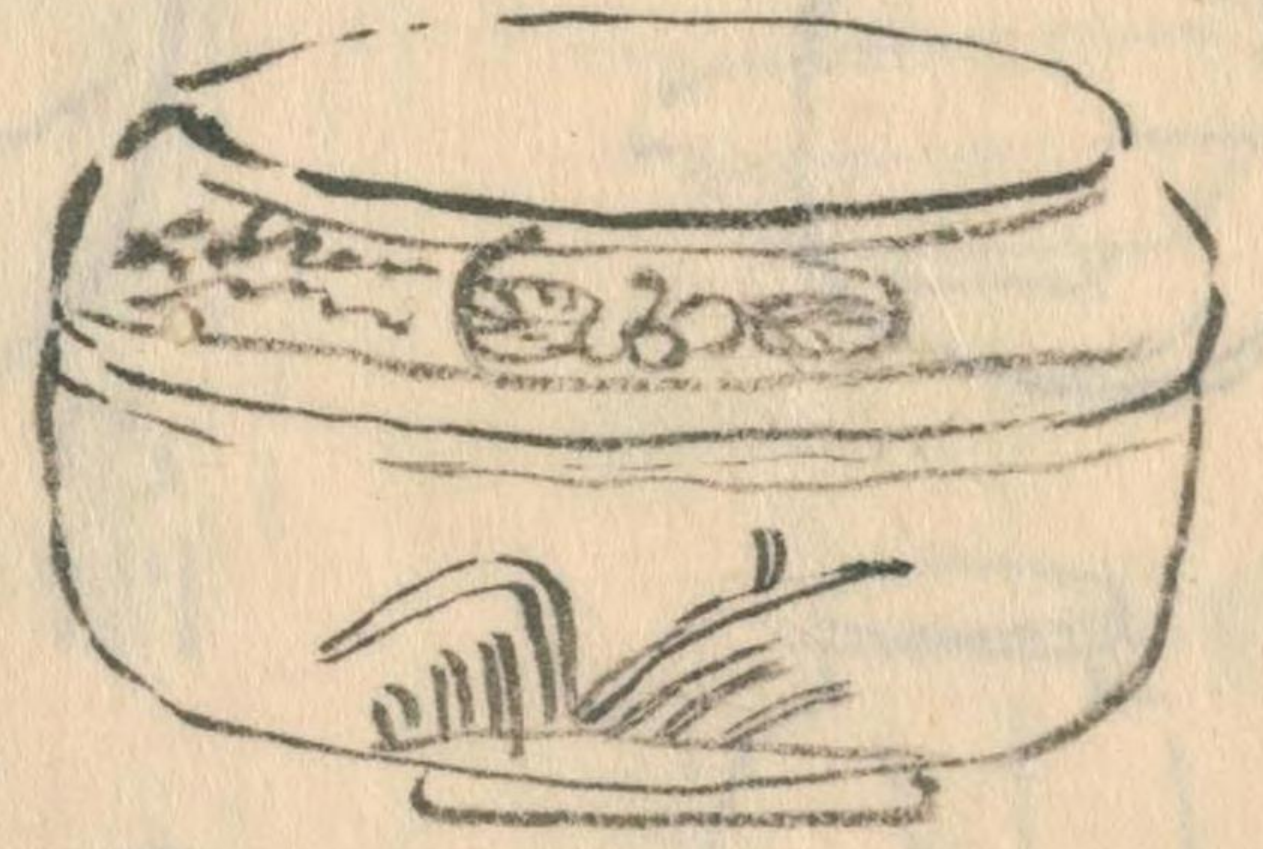


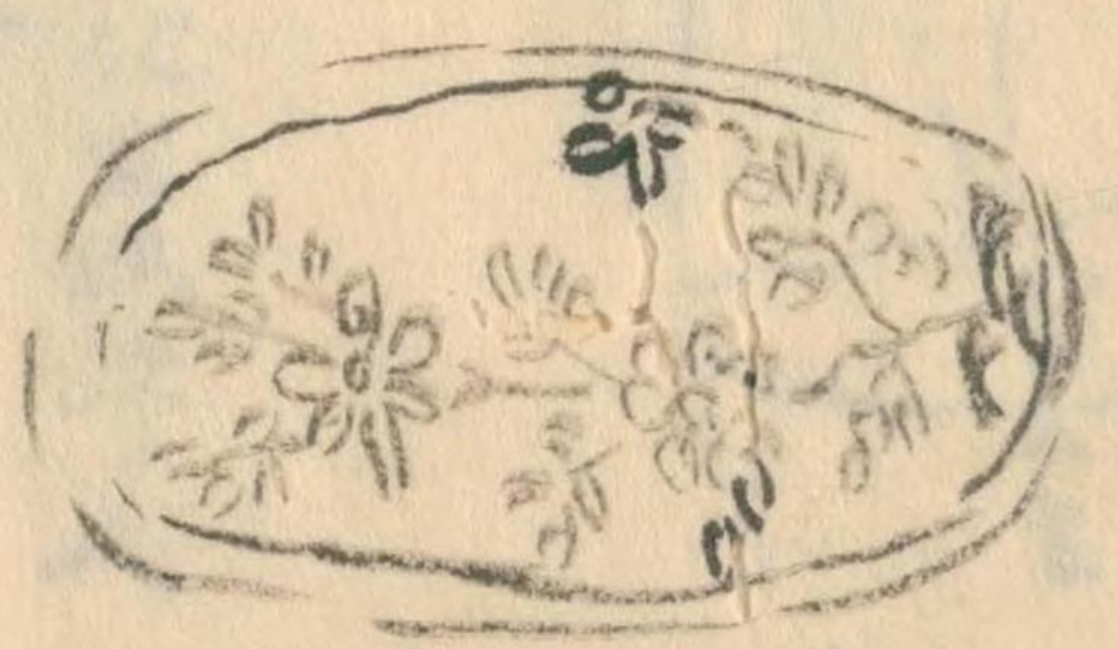
ねちめけり



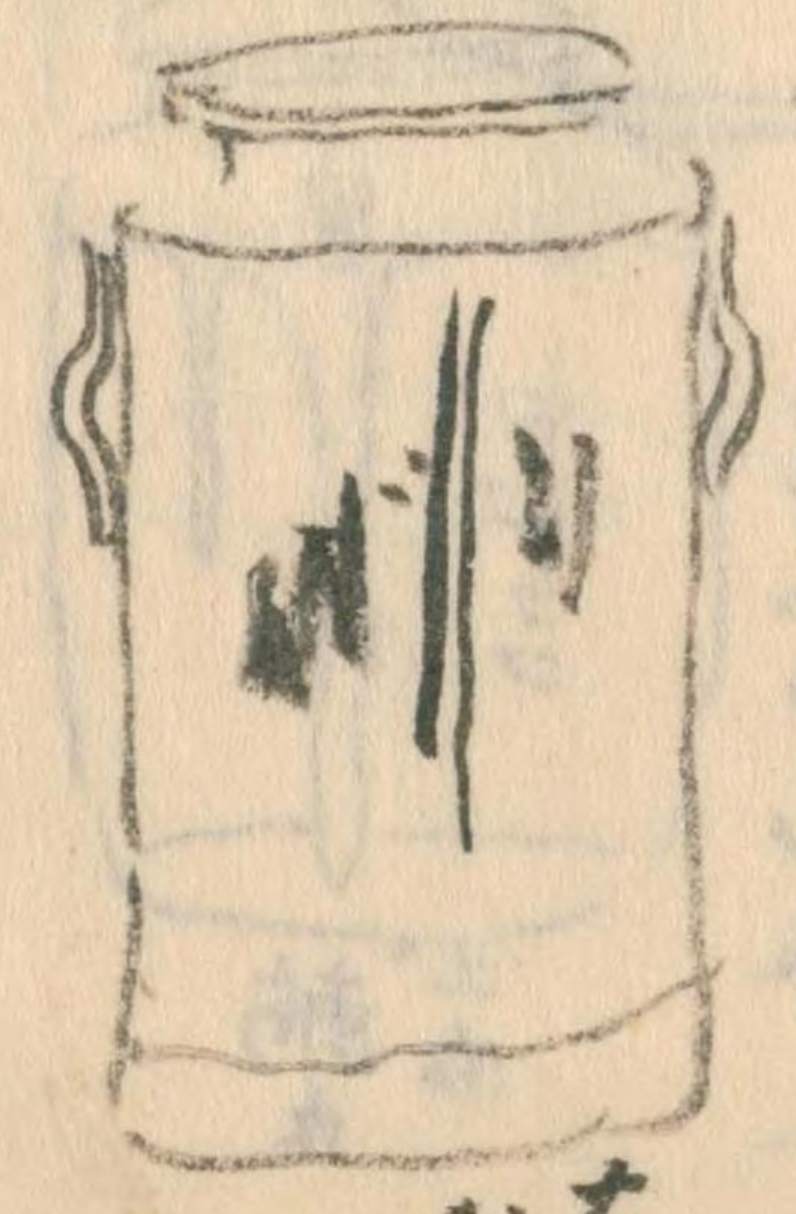
漢作



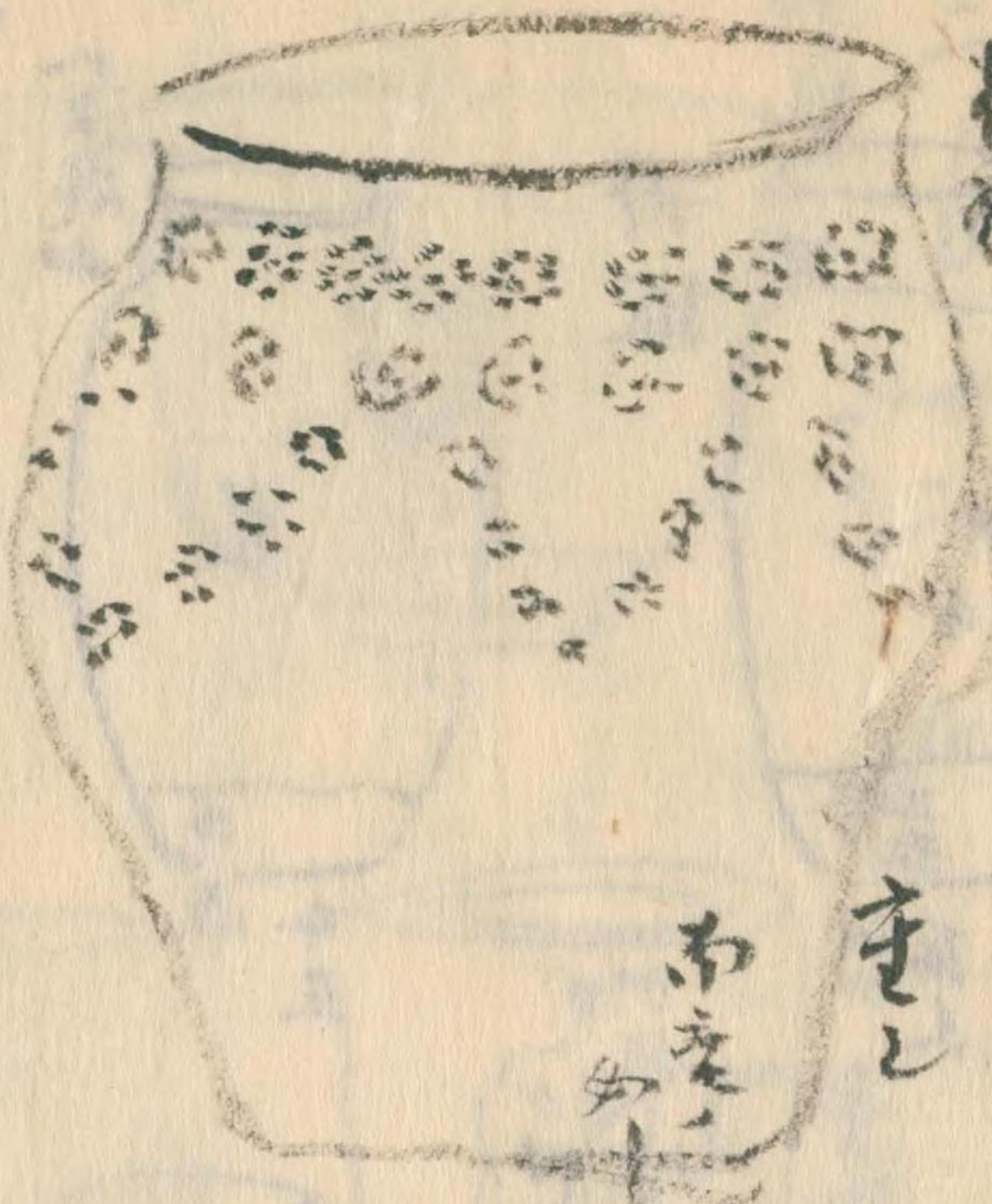


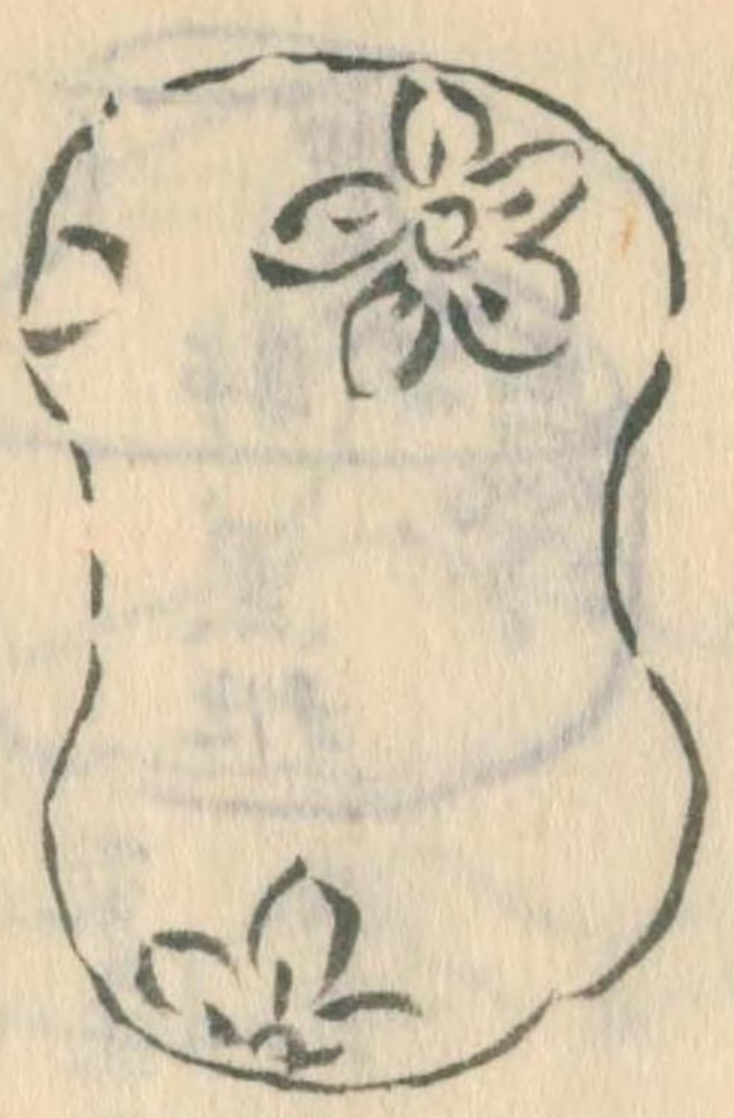


孝花

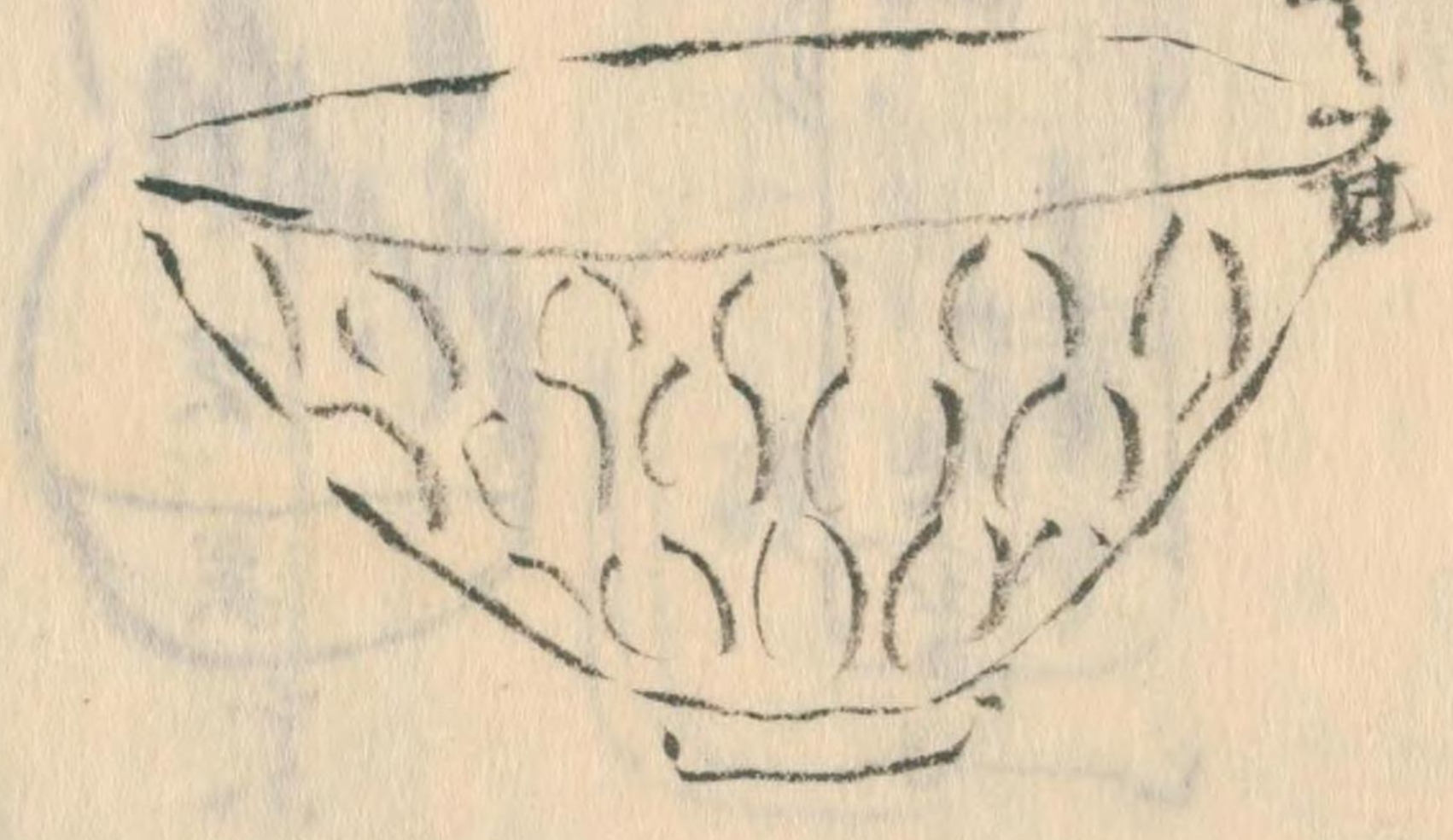


朝鮮

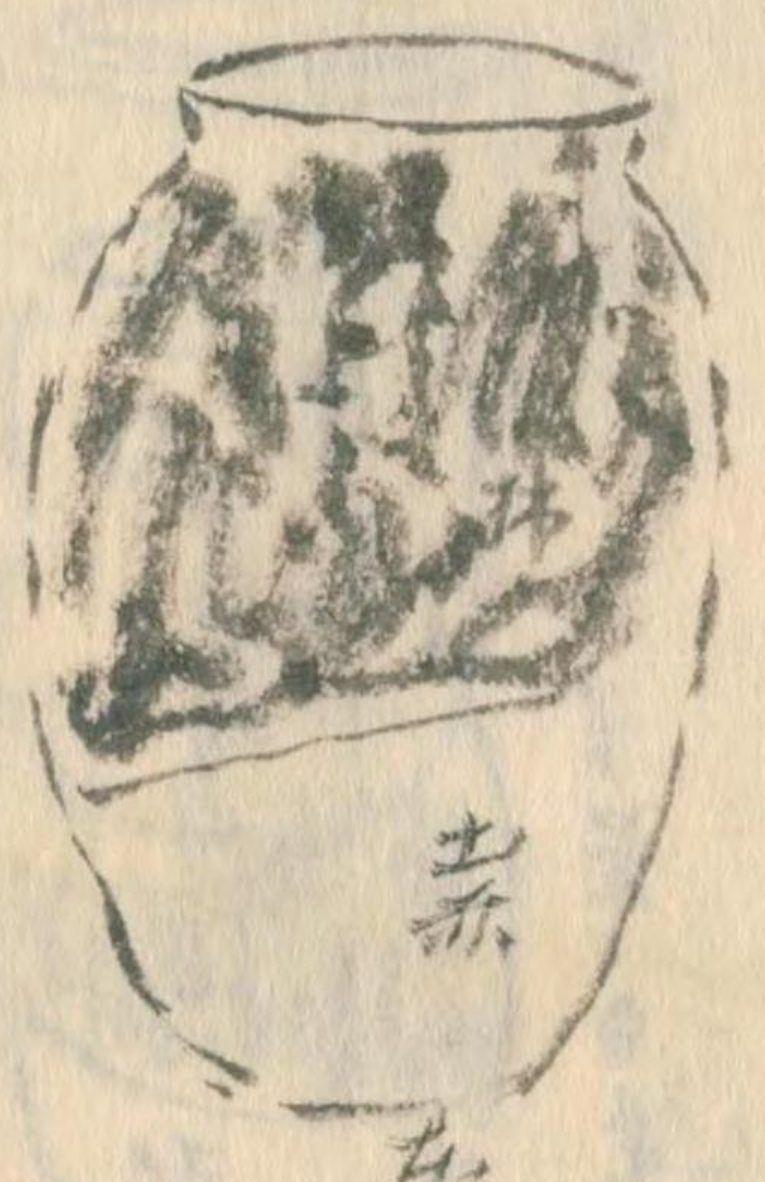


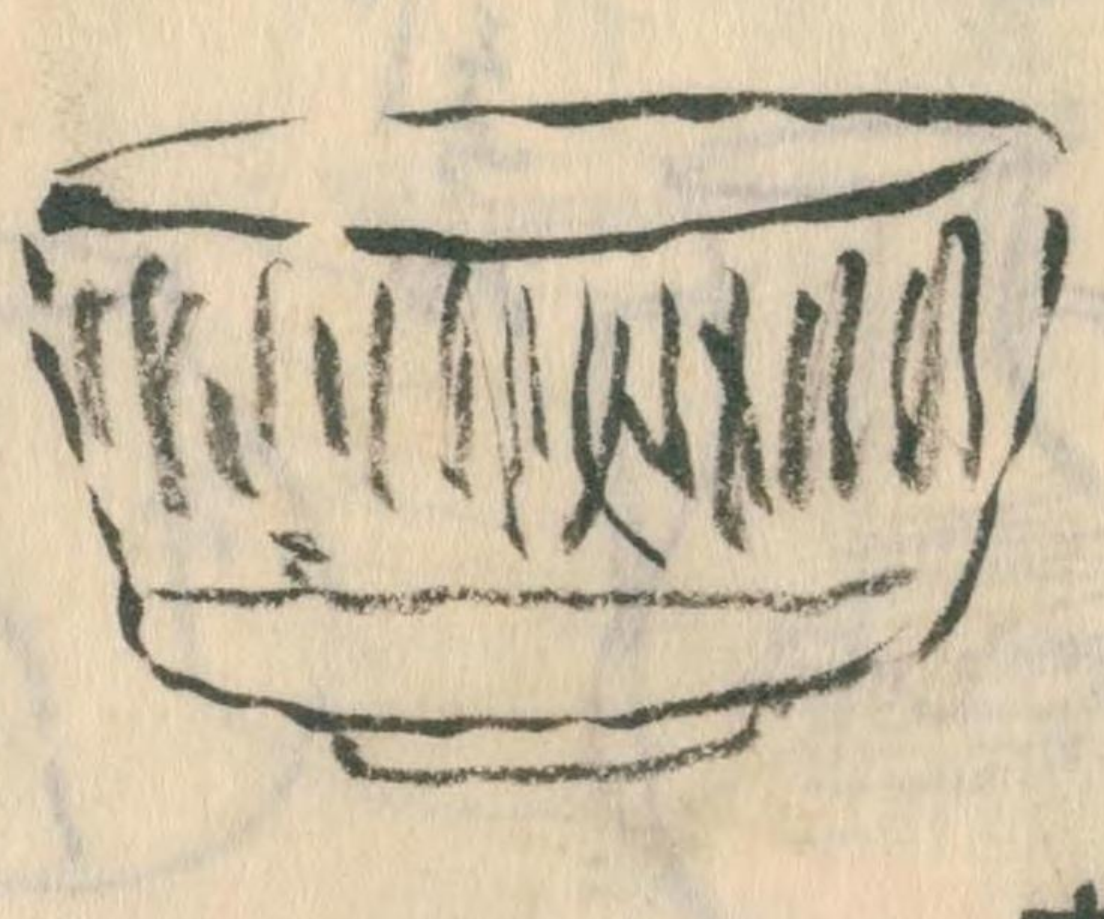


御本雲鶴

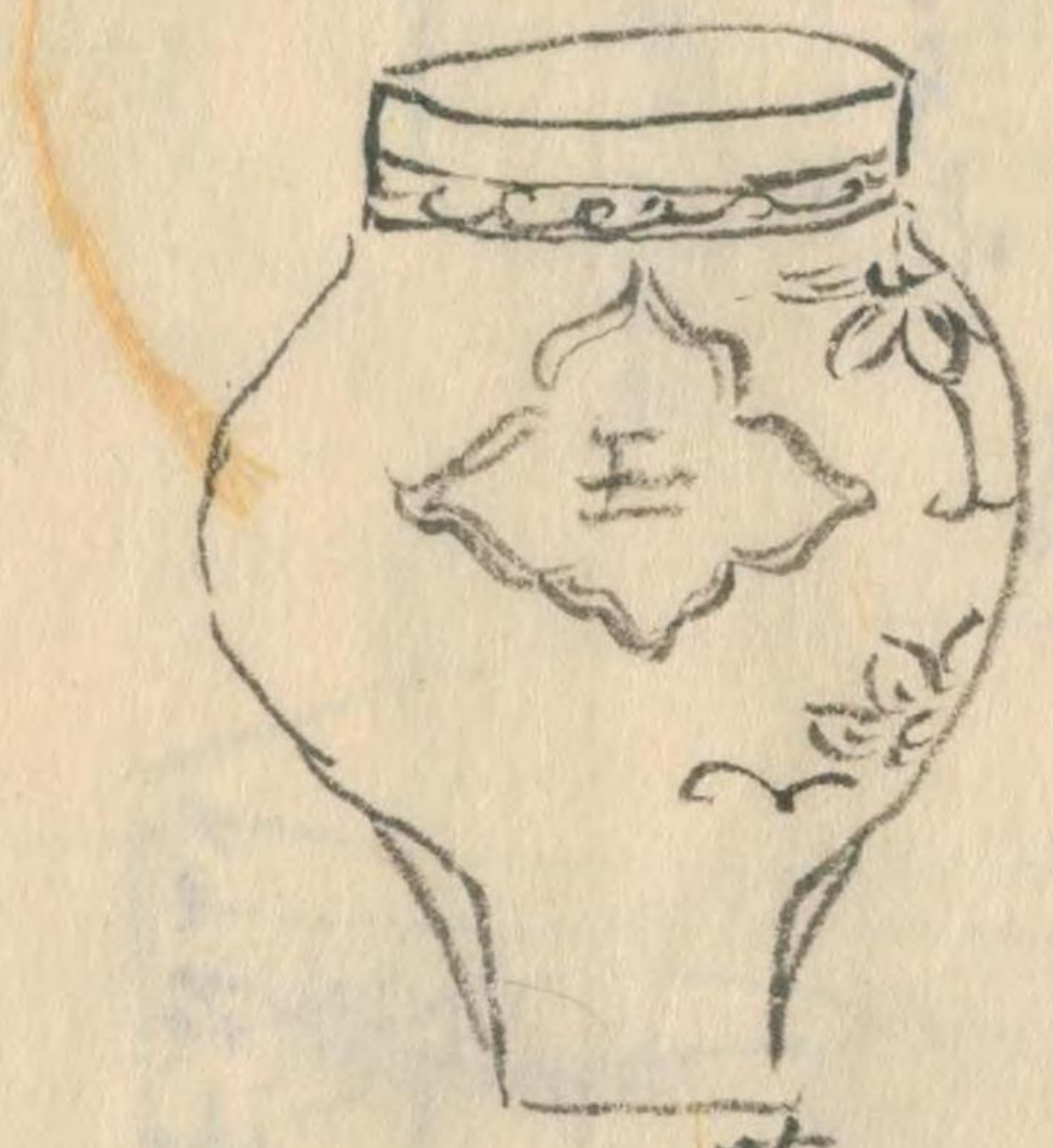


何笑ゴー土

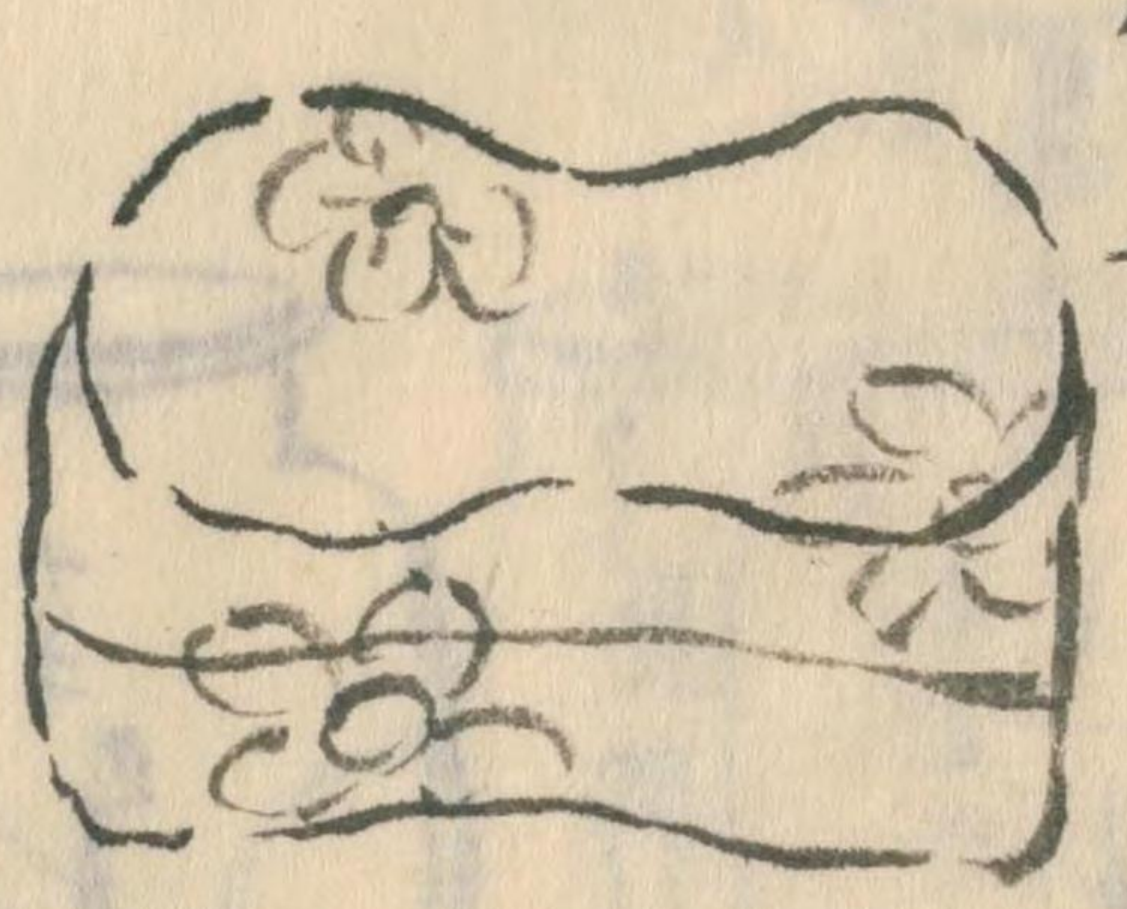




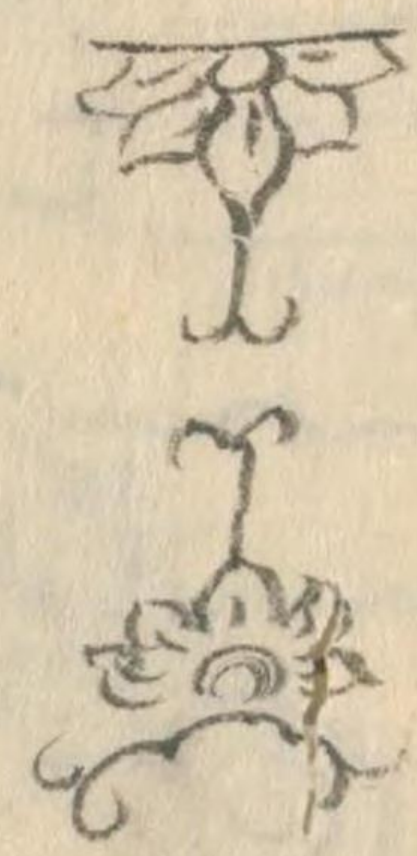
古万古



オリベ香合

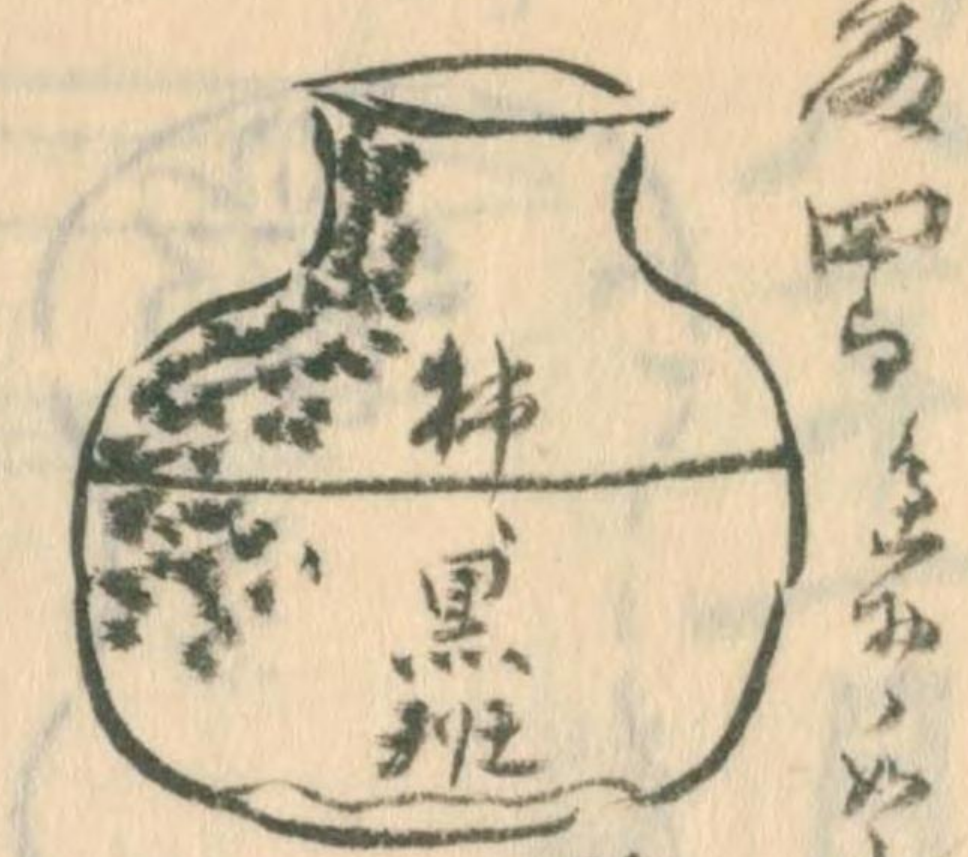


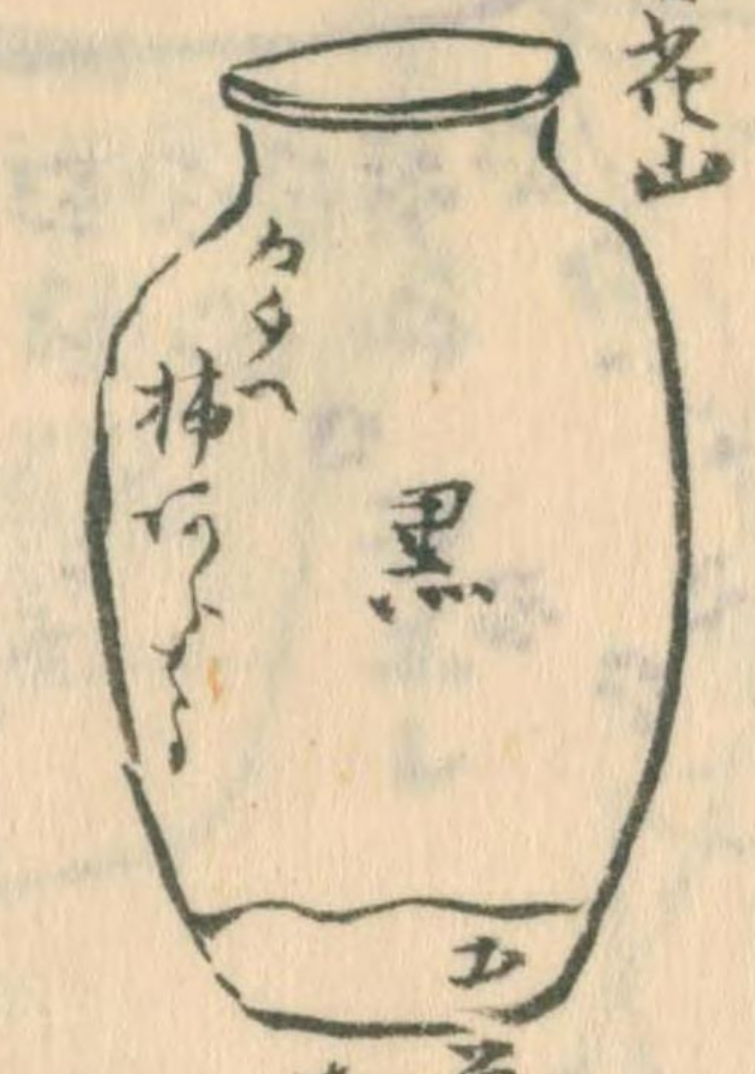
金玉

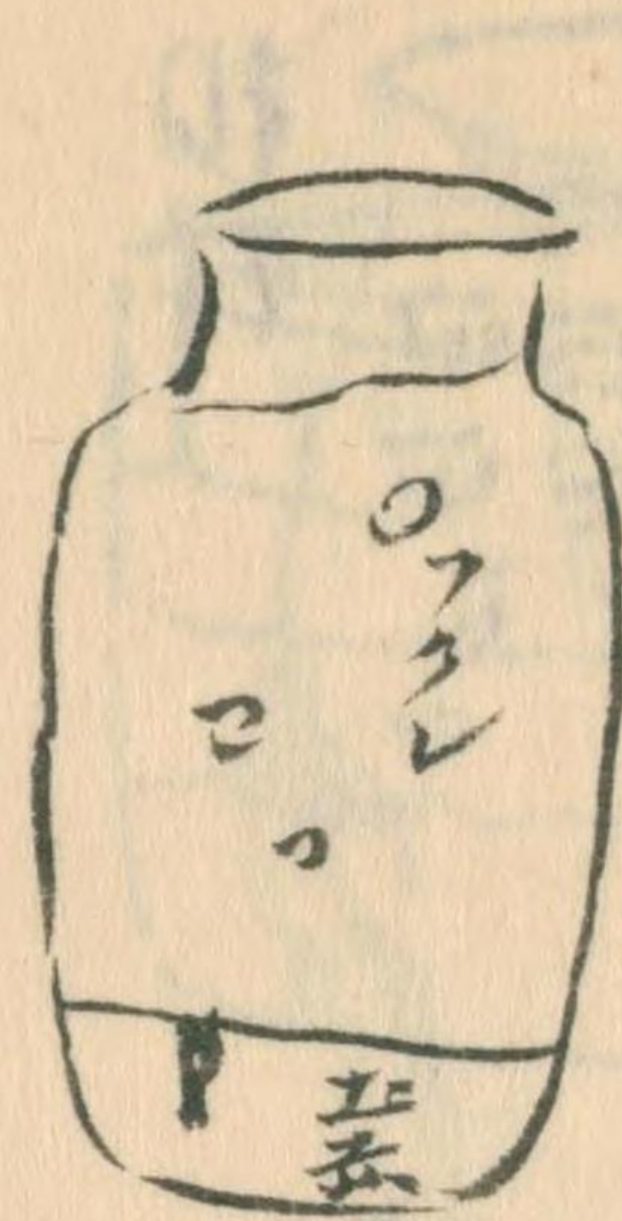


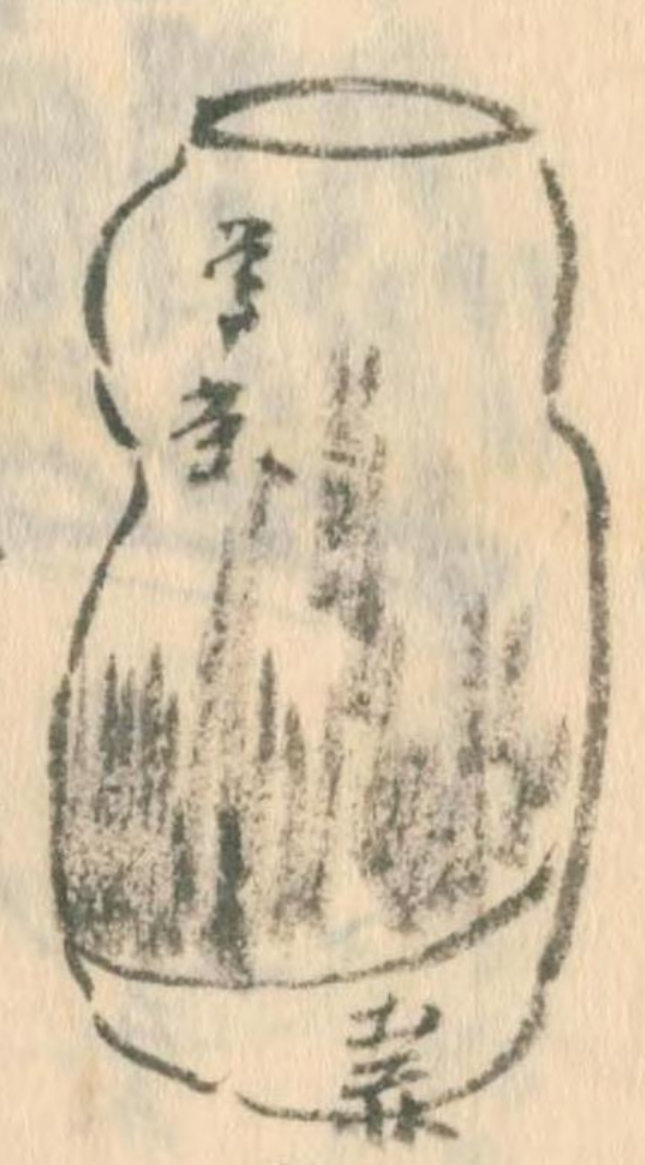
萬堂

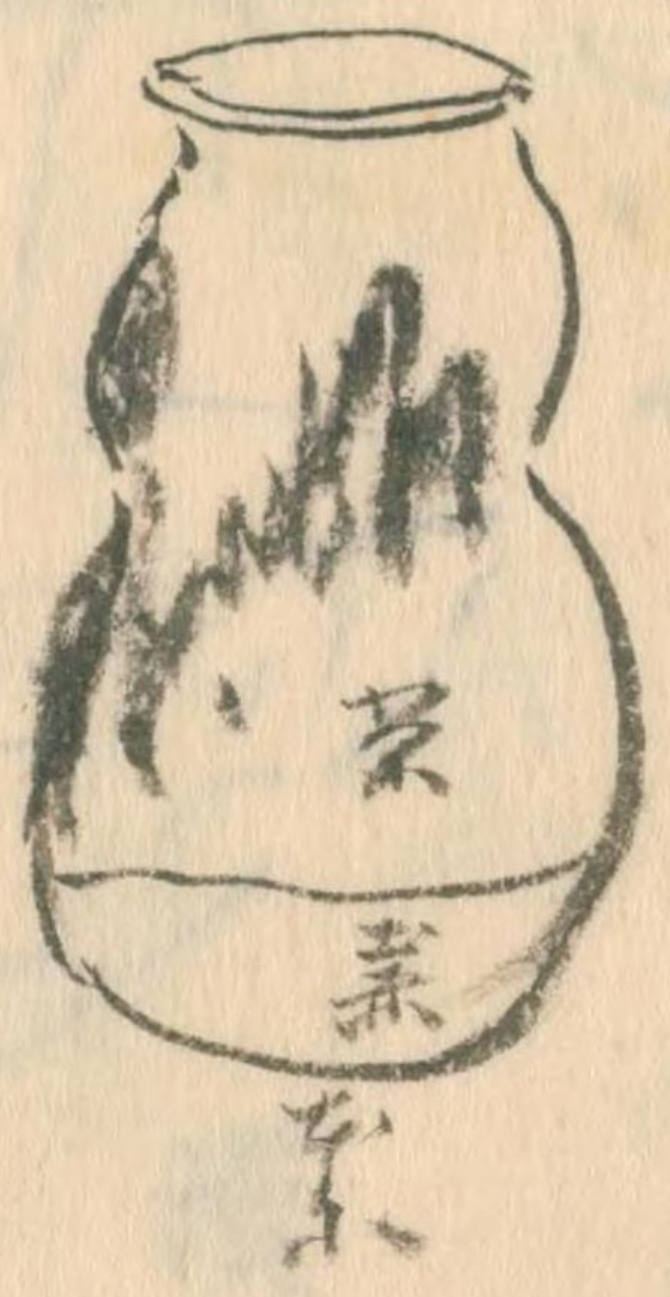
二月

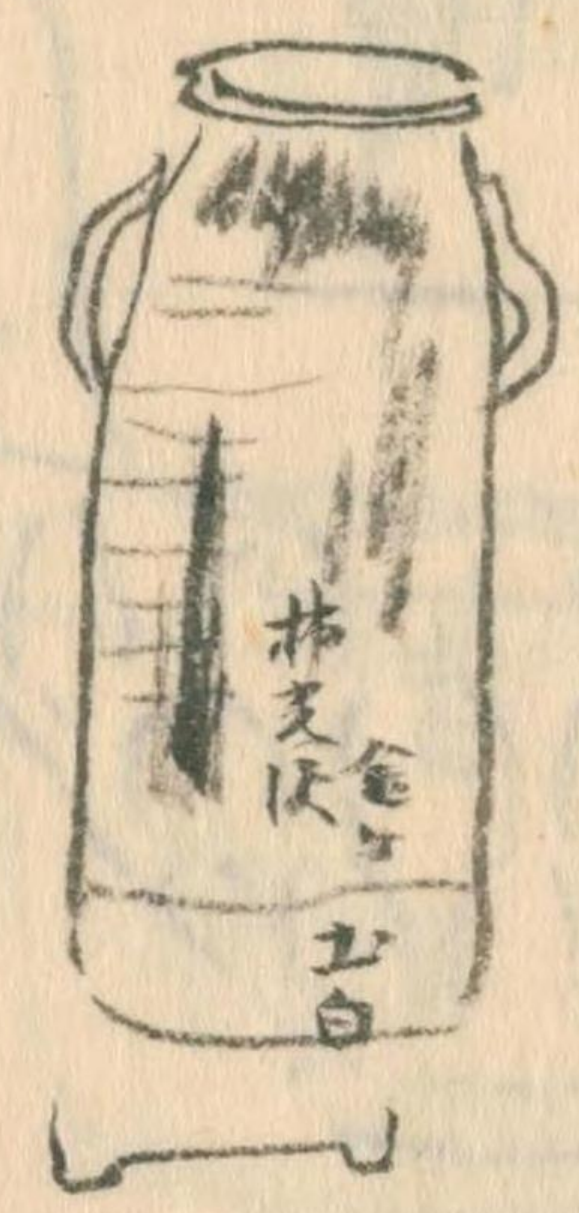

萩 明ら余めし
柿
黒斑
茶葉
本京

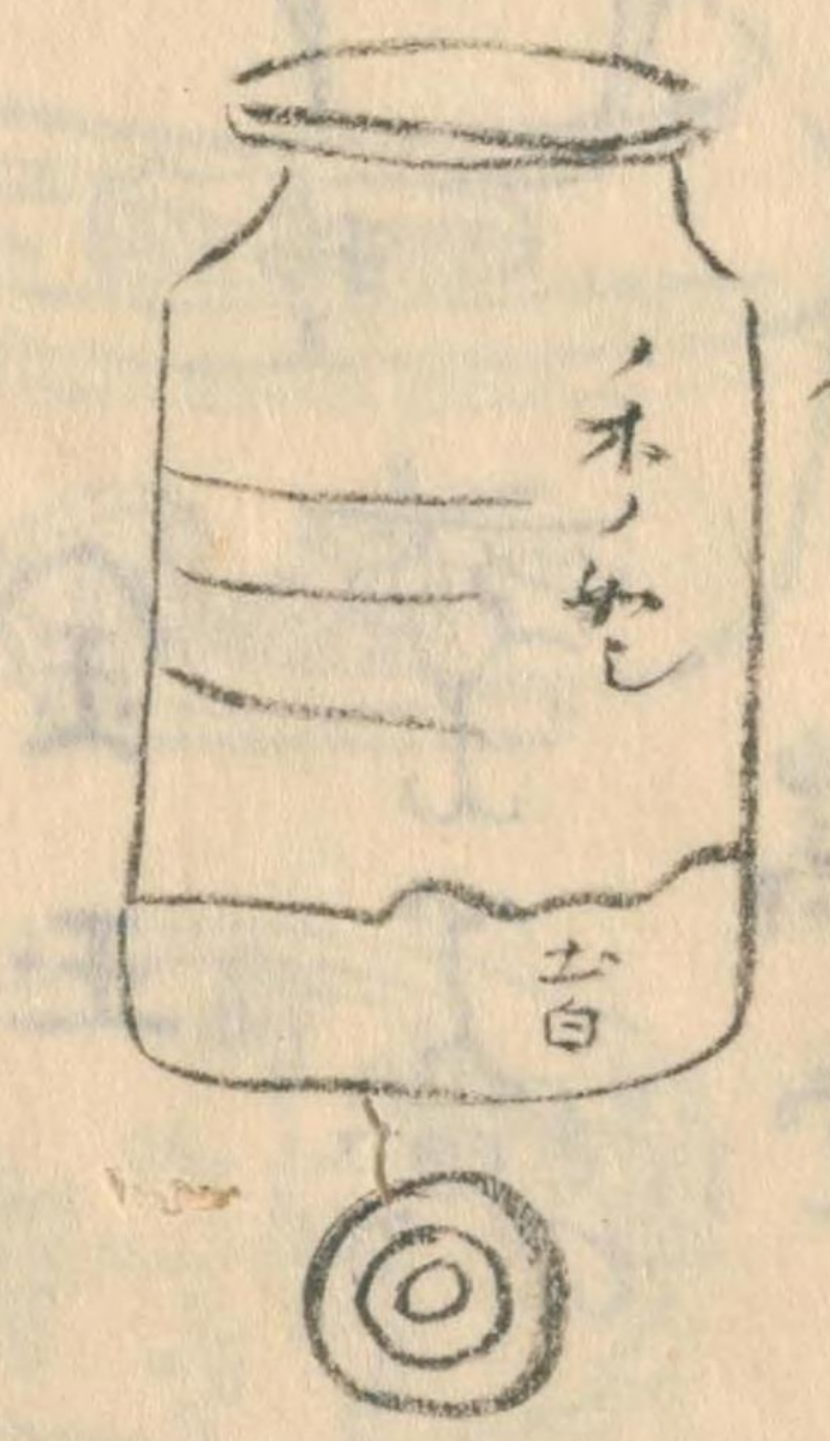

全花山
ウタヘ柿ナラ
黒
土
本京

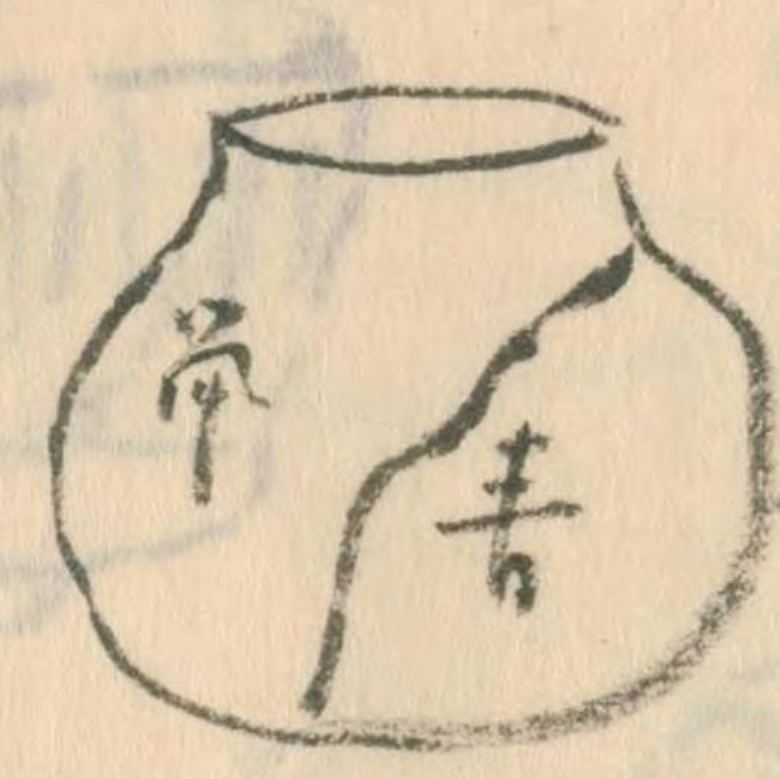

丹波
のフクレ
コッ
土表
新京

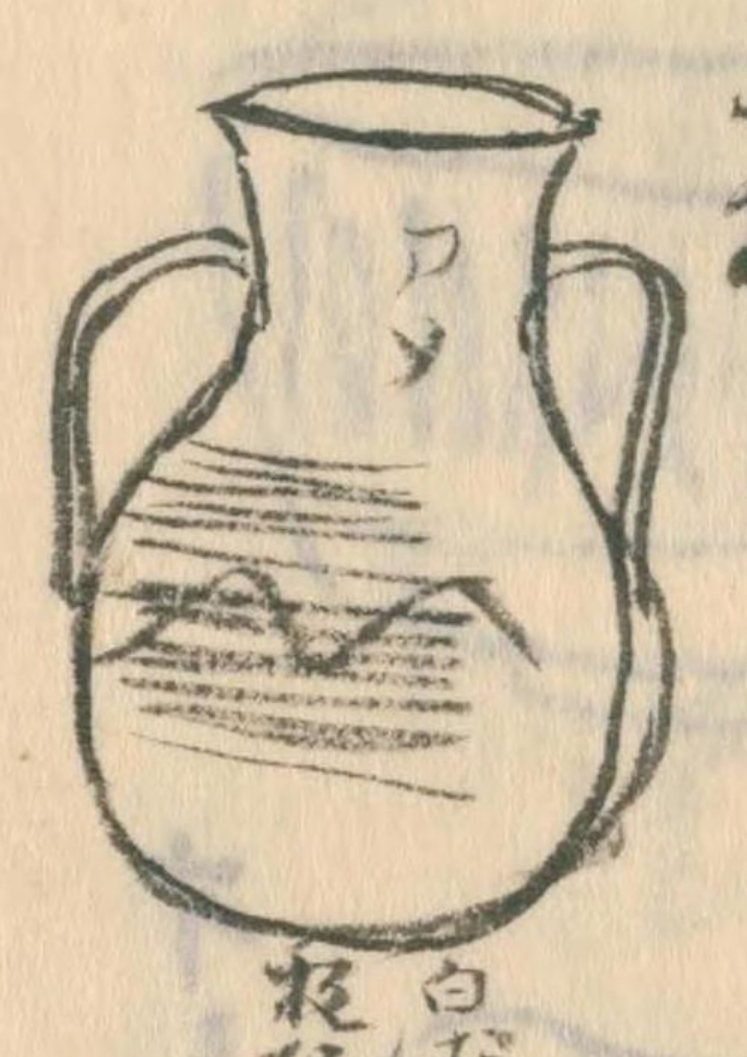


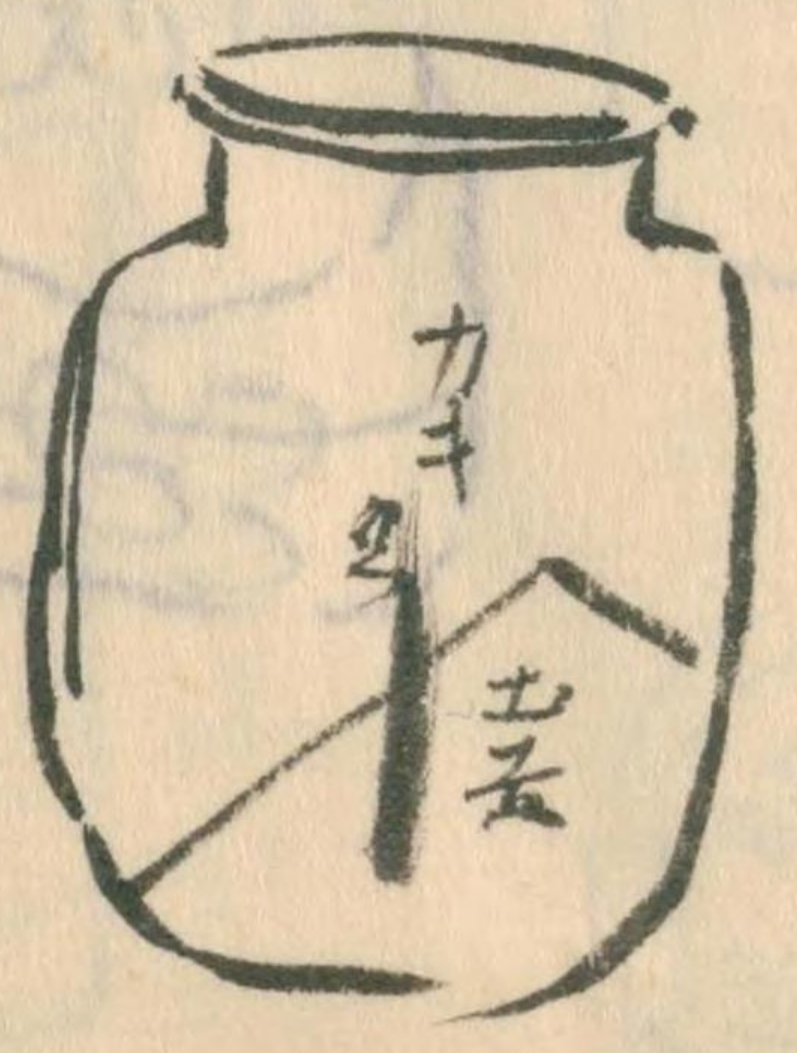


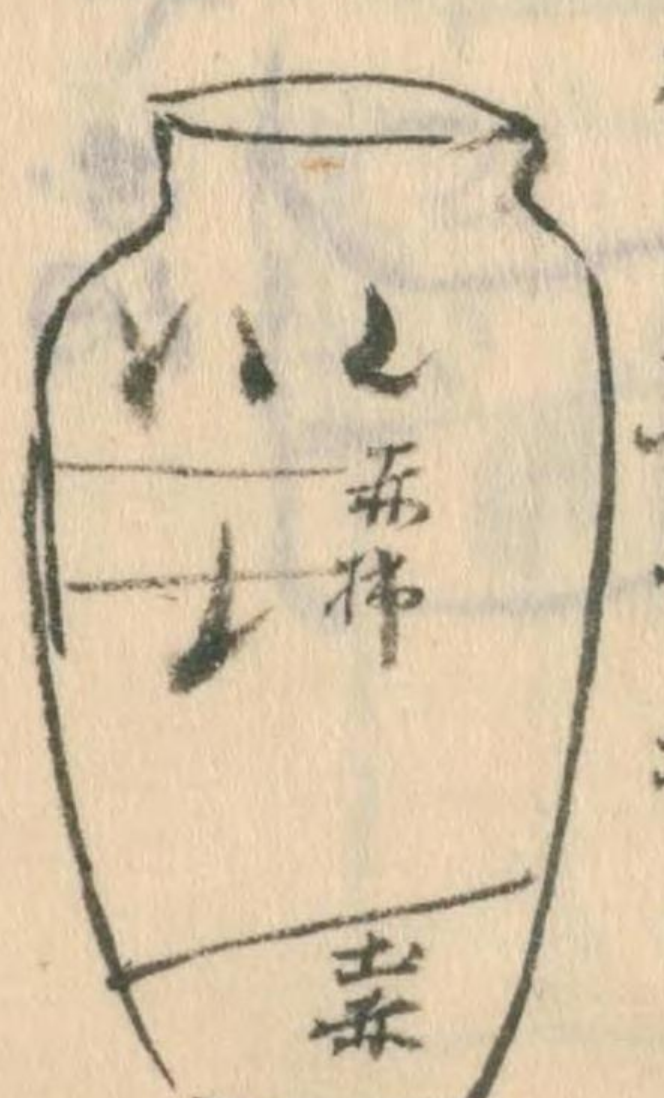



全花山萩手
ノホノヤし
古白

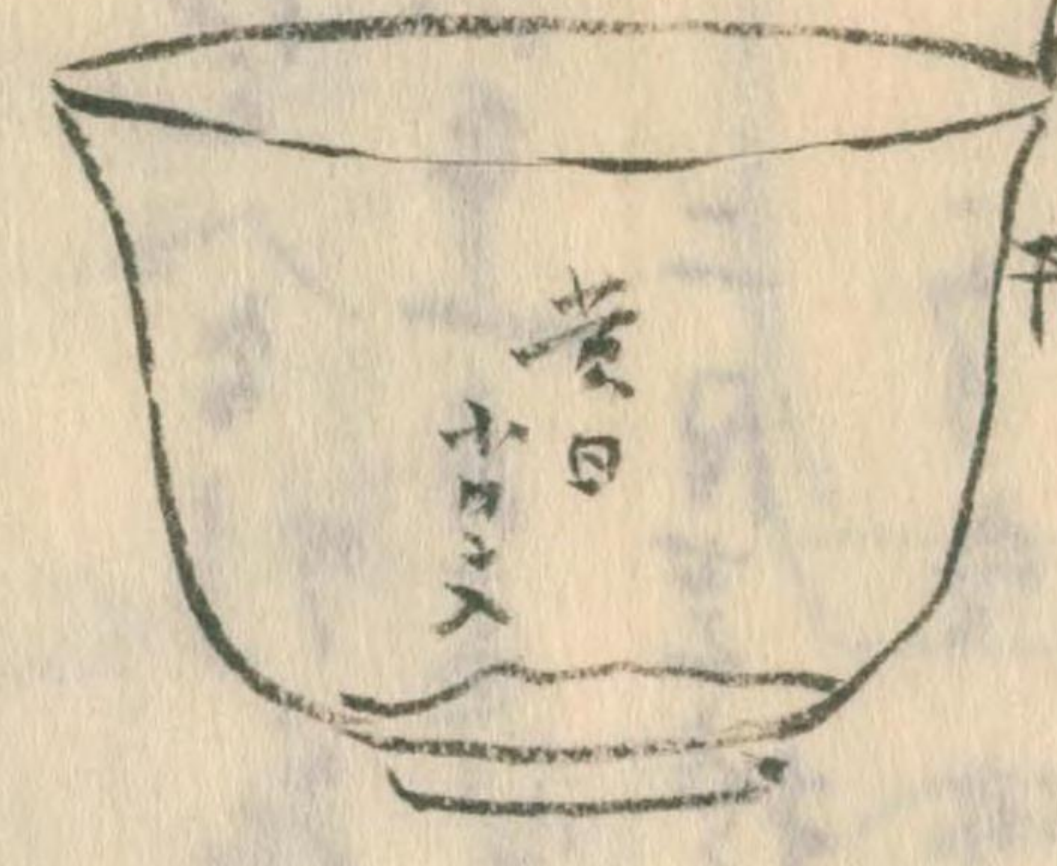


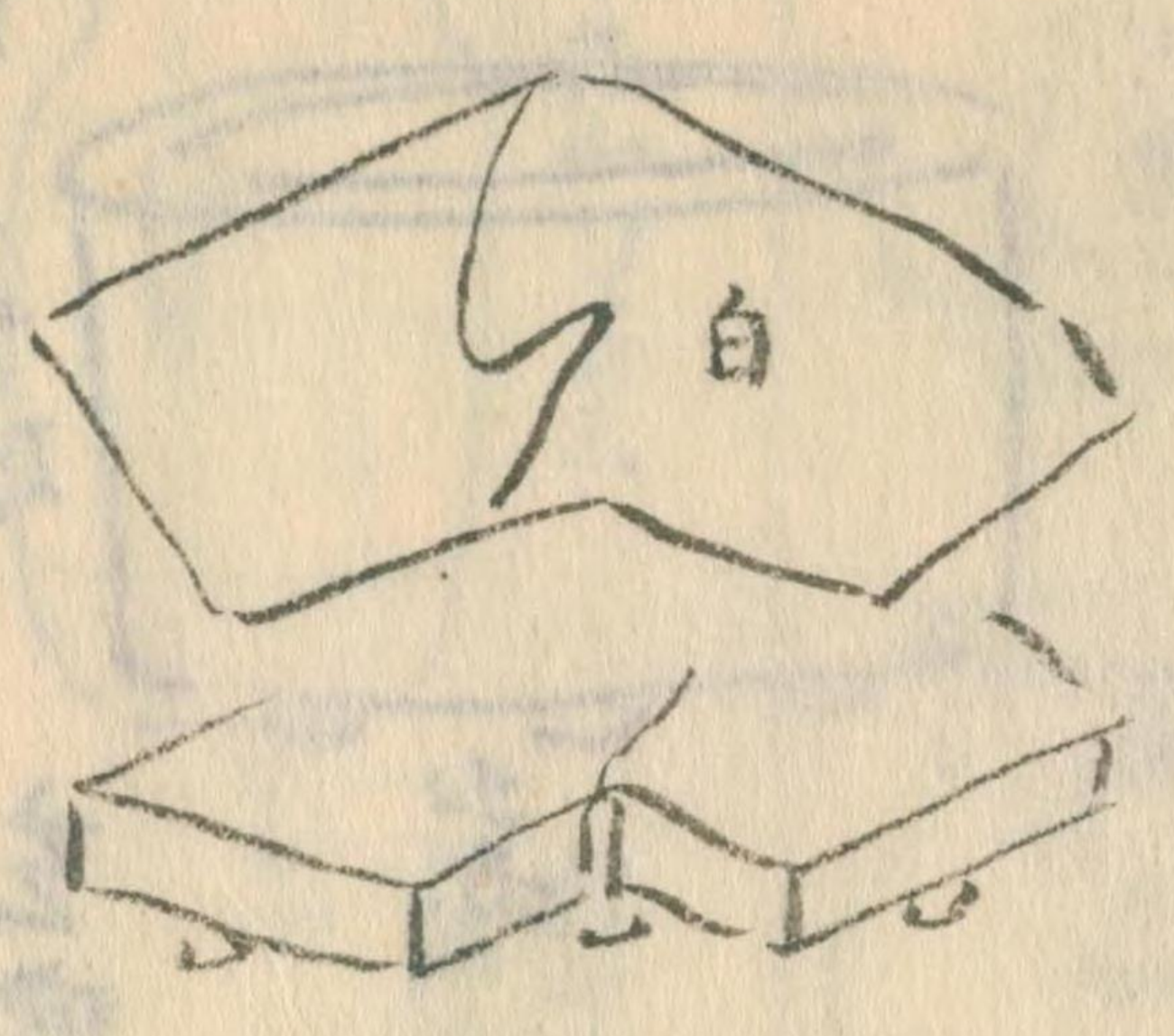


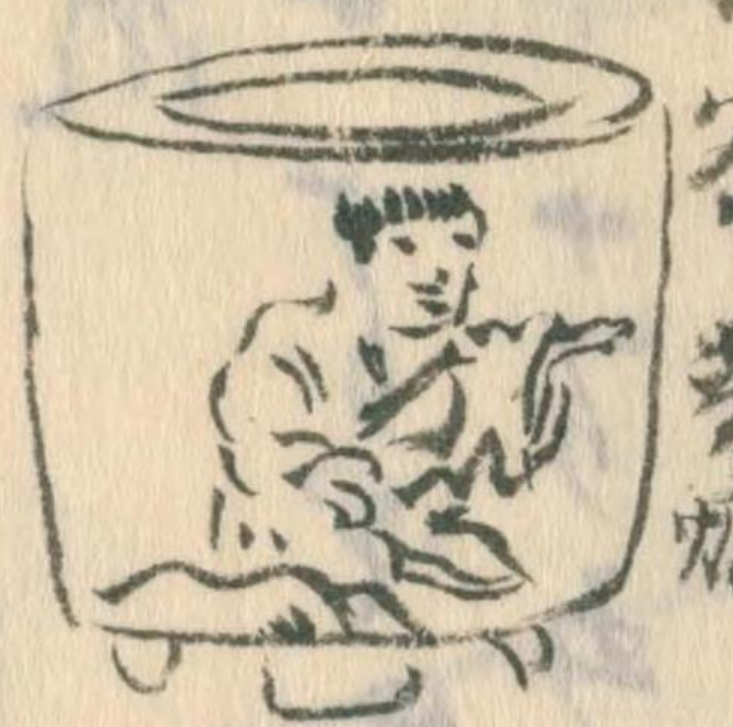


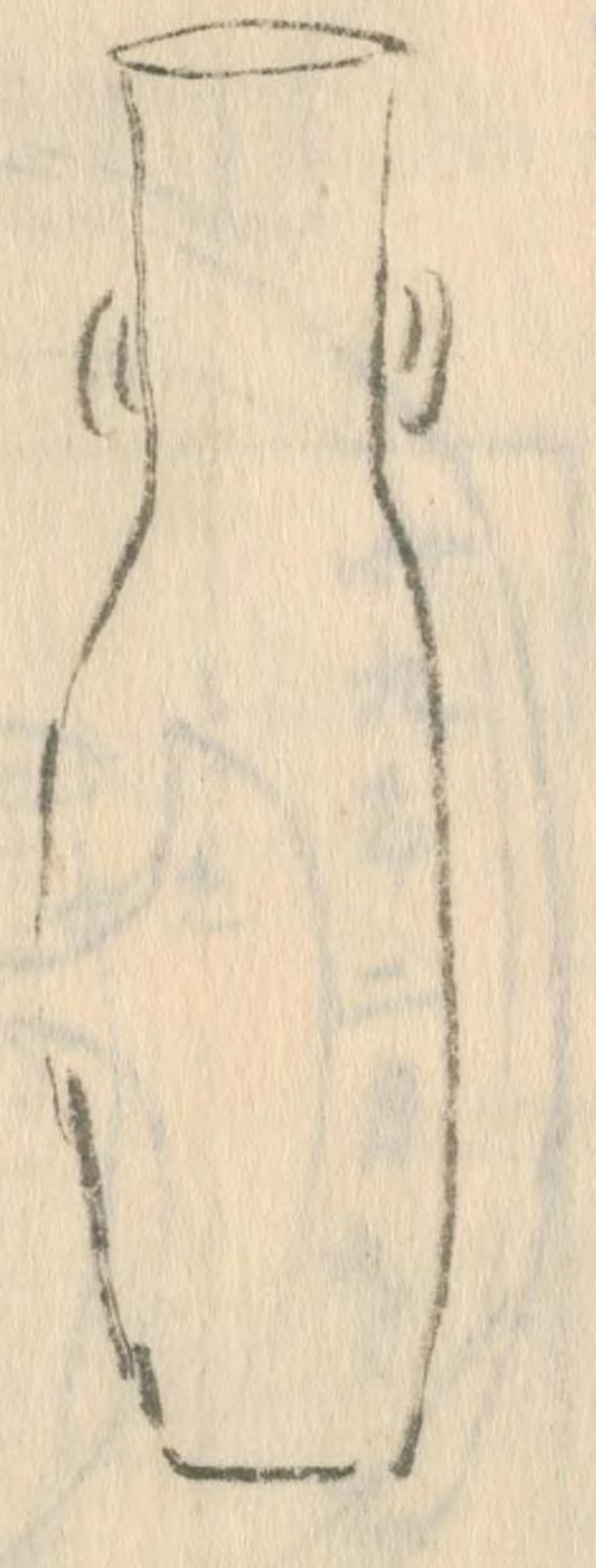


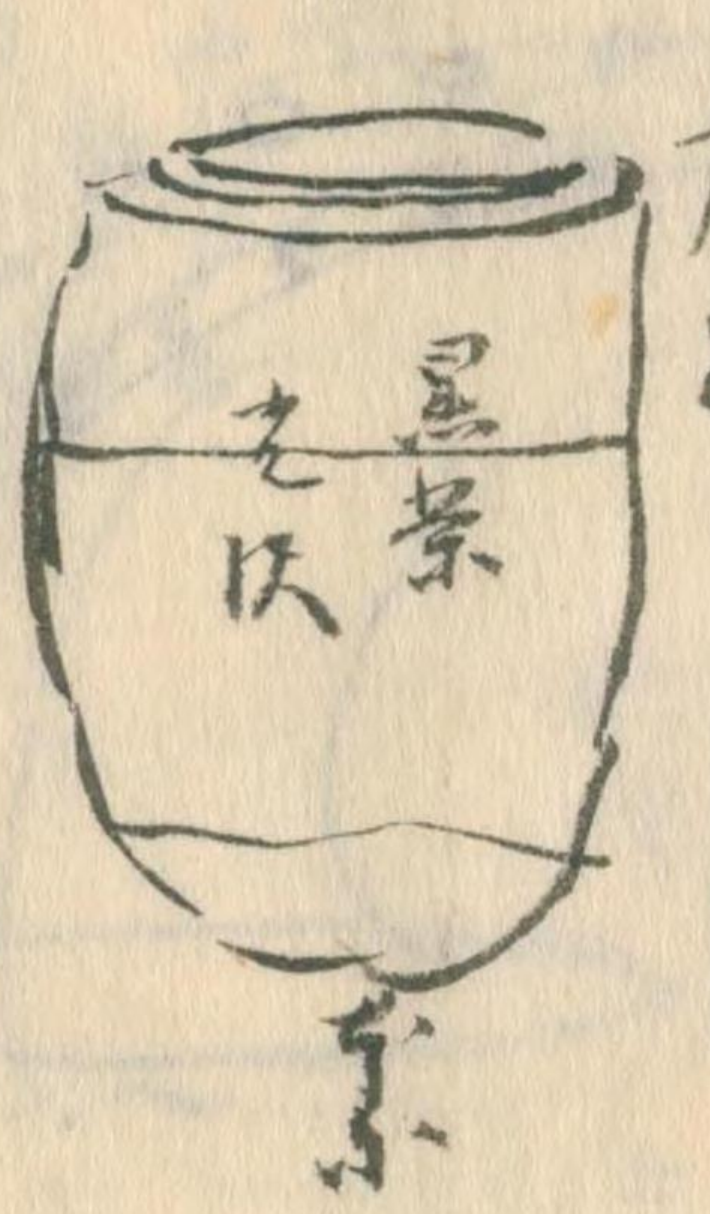
三月十七日竹

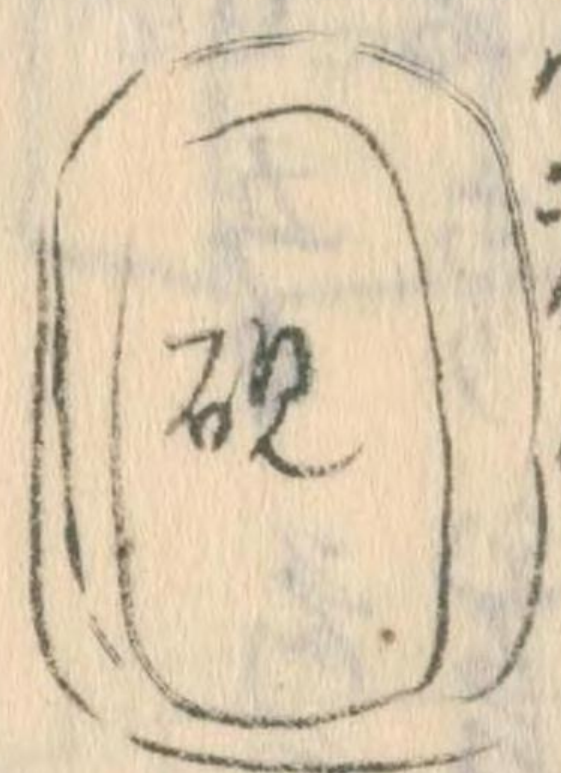


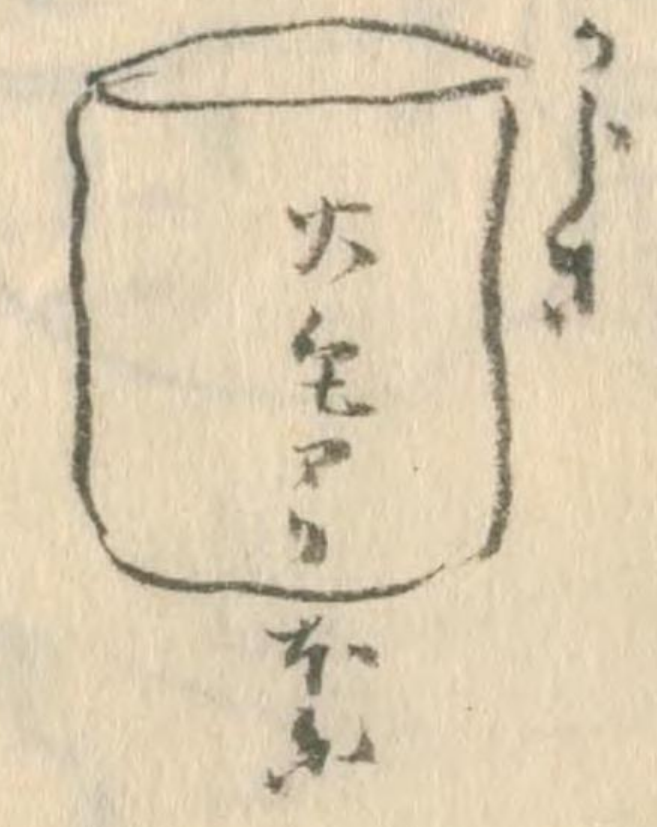


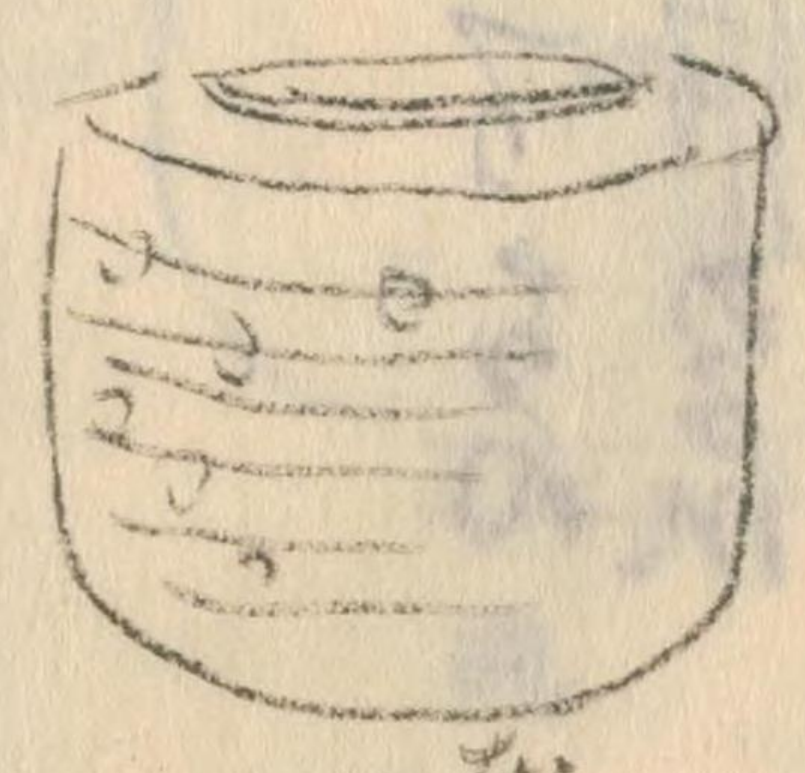


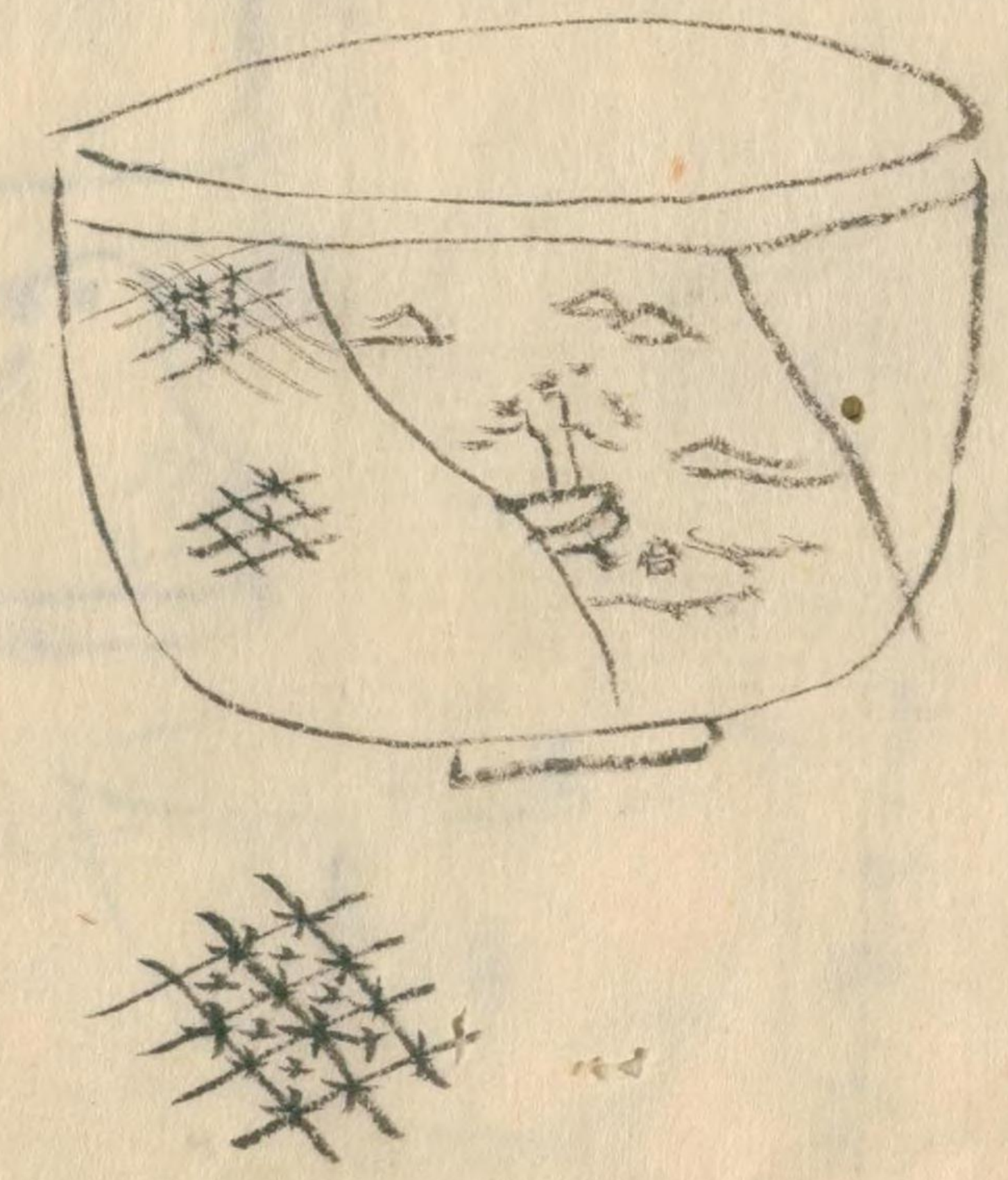


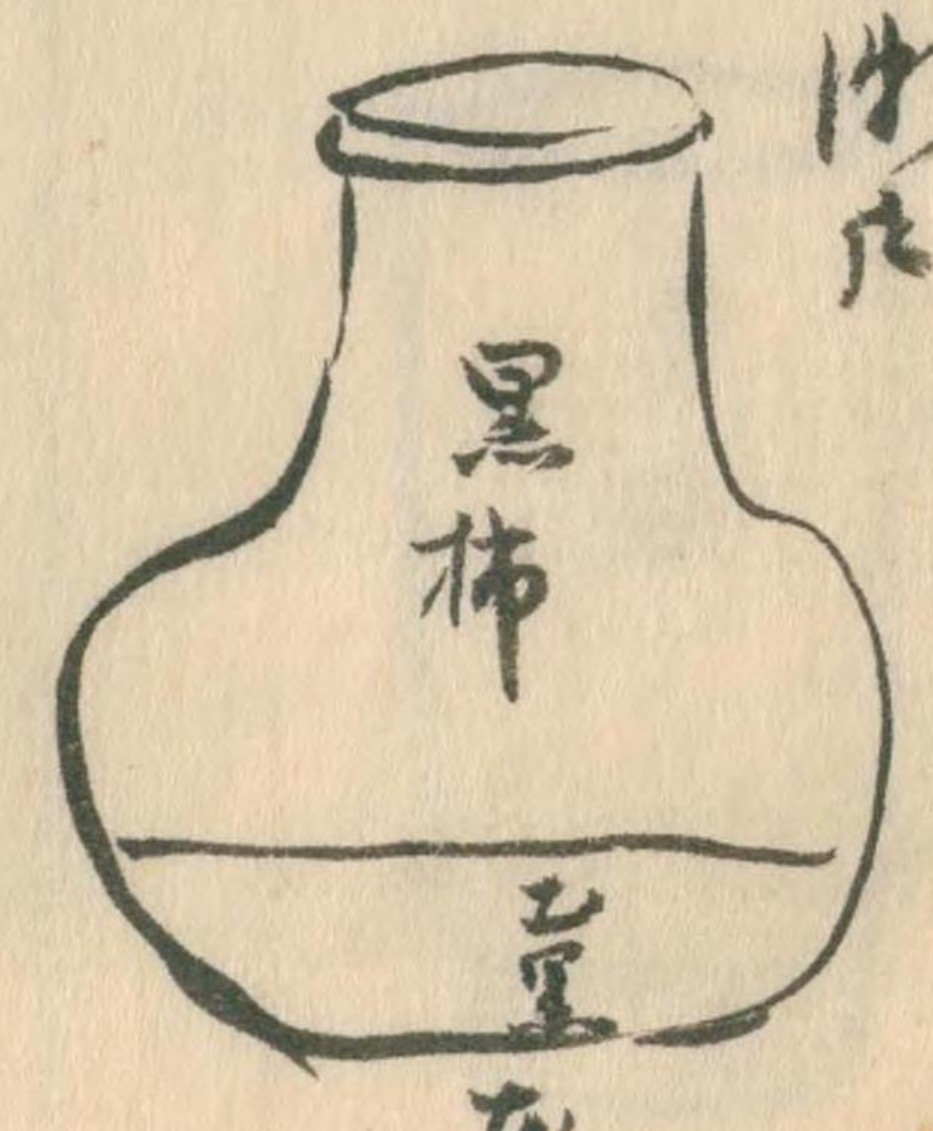




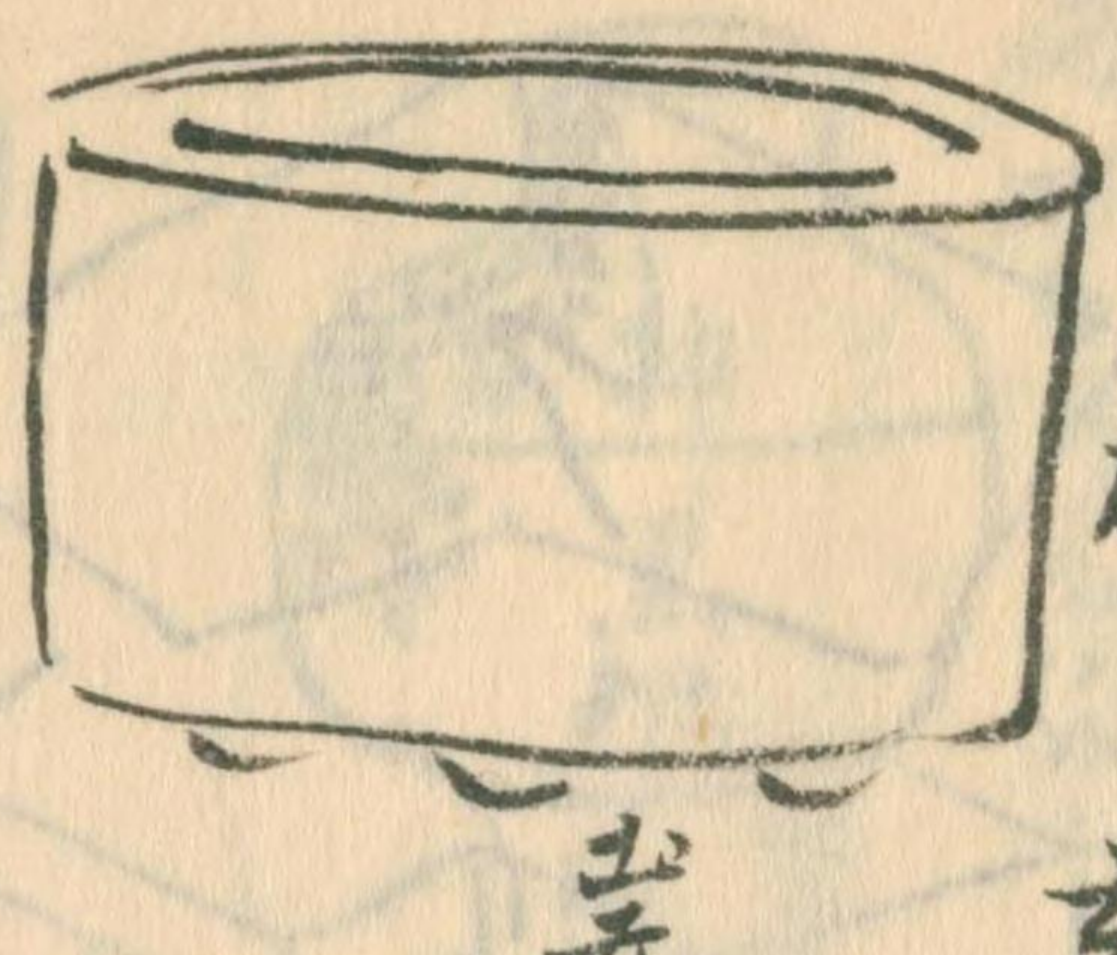








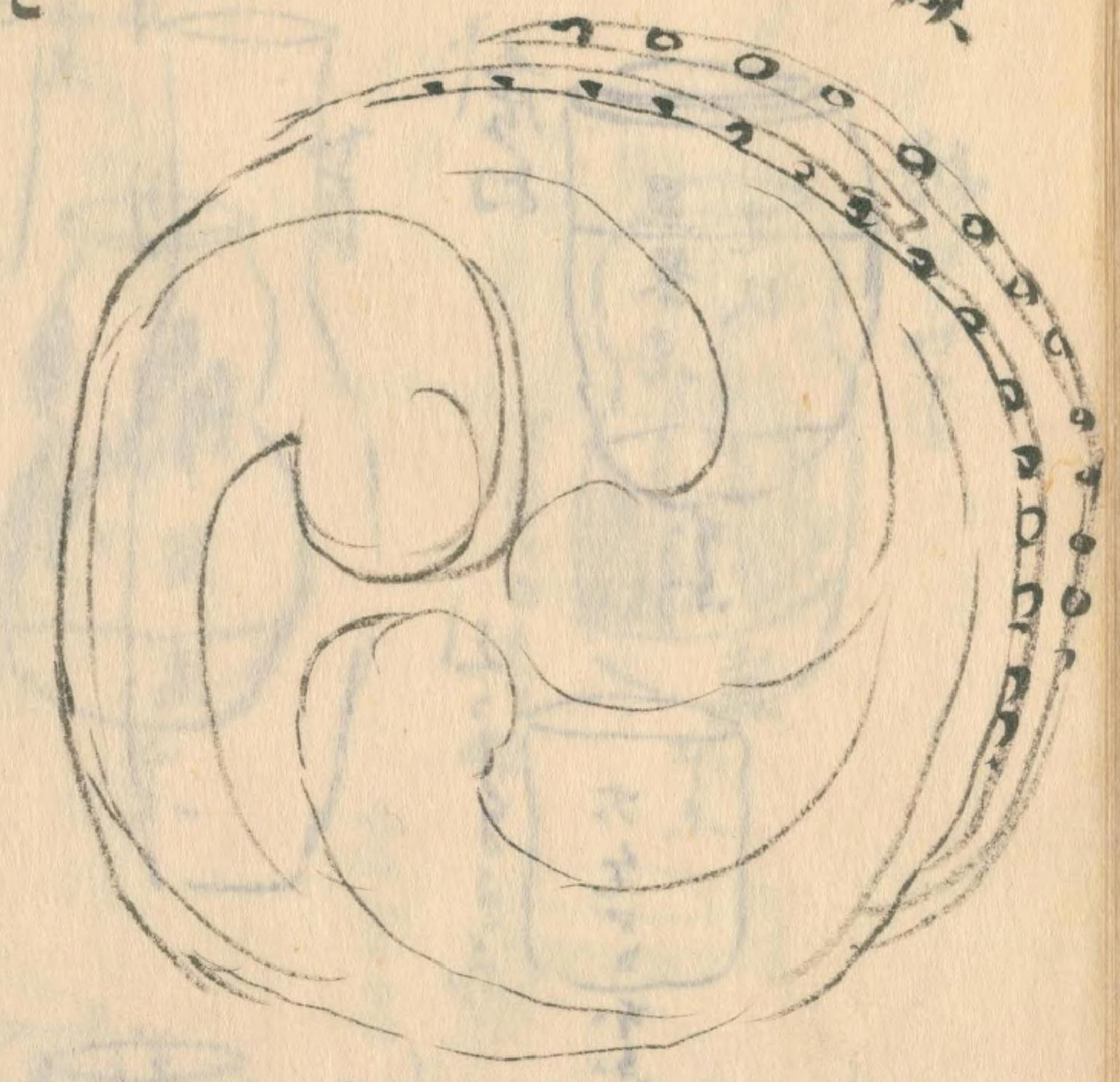
841
124



鍋島青磁

崇

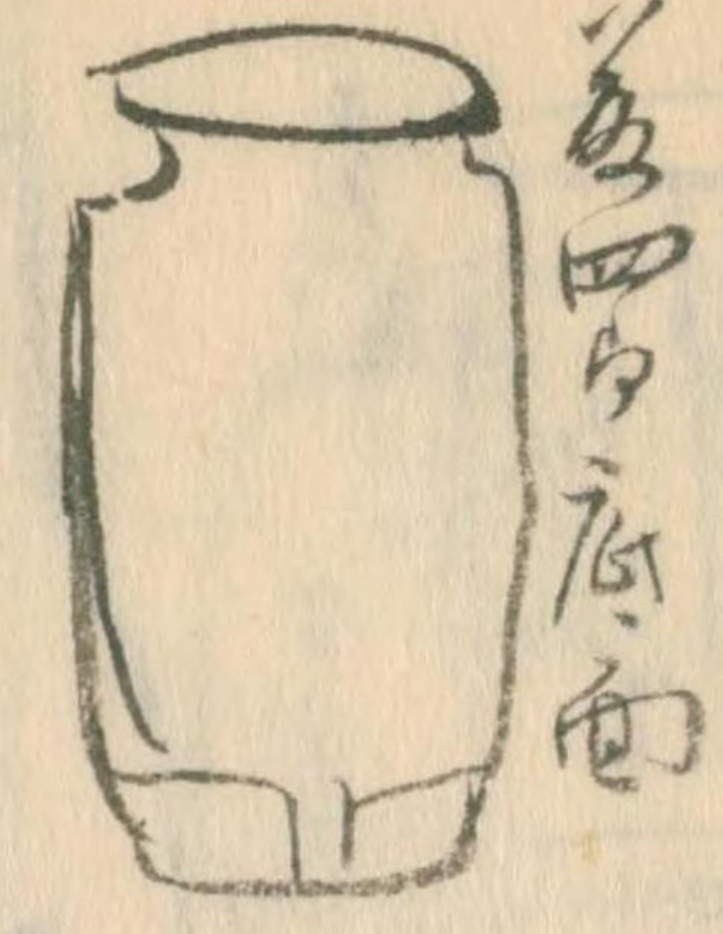
玄賓

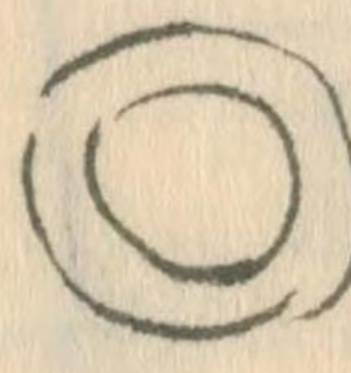


鍋島今村源
廿六年五月赤窯流
二月廿三 相客 十月四 佐井 五日
三月廿 佐井 十月廿三 香 三月
四月廿り休 廿五 赤窯 七月 相客 廿六年一月
六月四 前田 廿七 十日 赤窯
七月休 三月 相客 八月 廿井 〃 三日 前田 十月 相客
八月廿七 相客 四月 石井 九月 前田 〃 三日 佐井
十月 石井 〃 四月 休

廿八年十月十九 庄屋や 織部

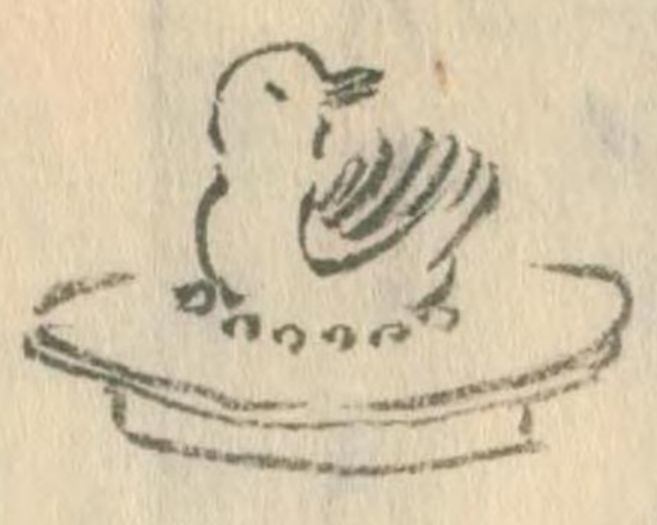
萬暦底面

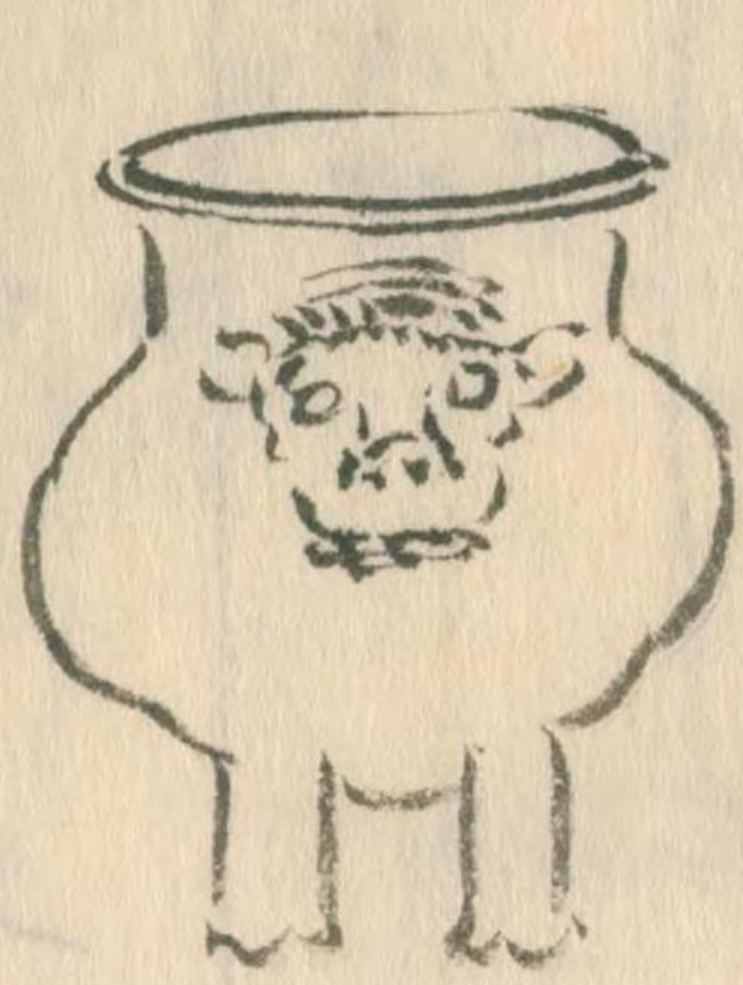


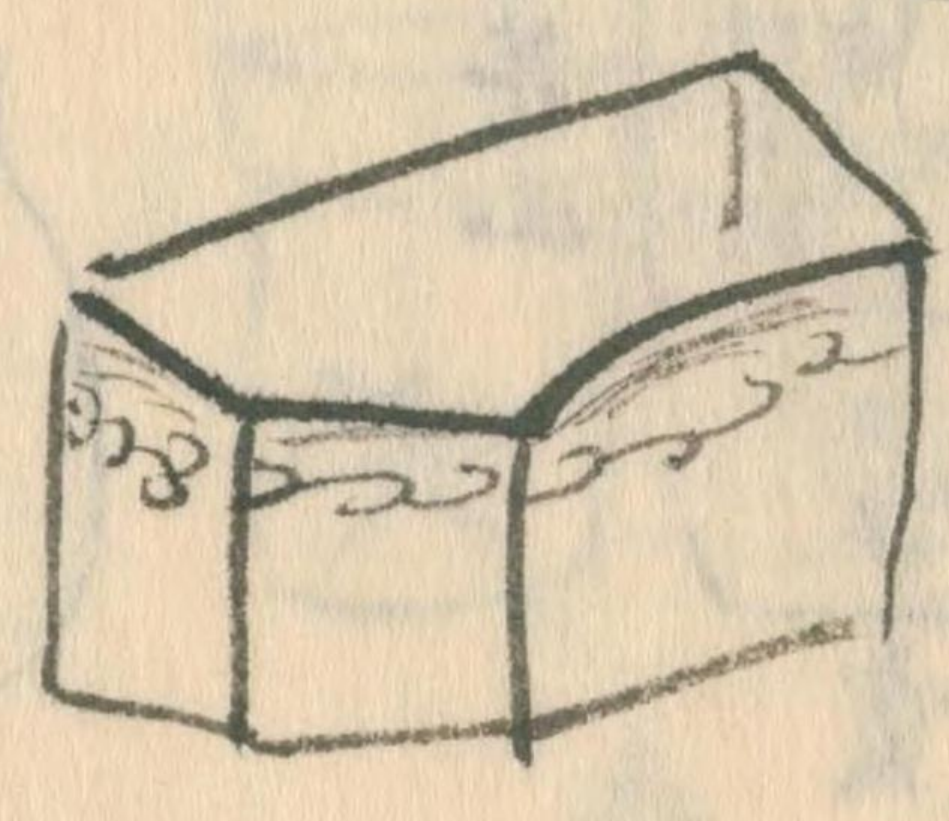


底有

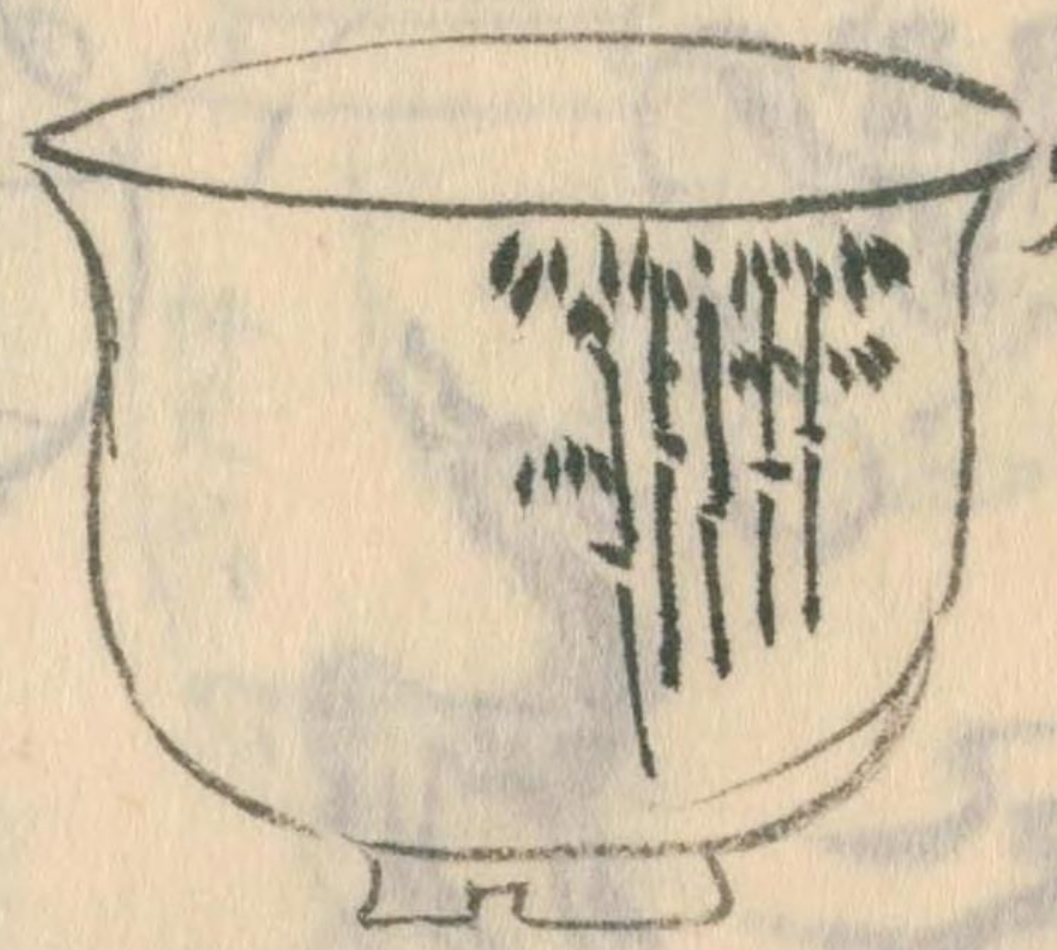
彫ヶ香爐





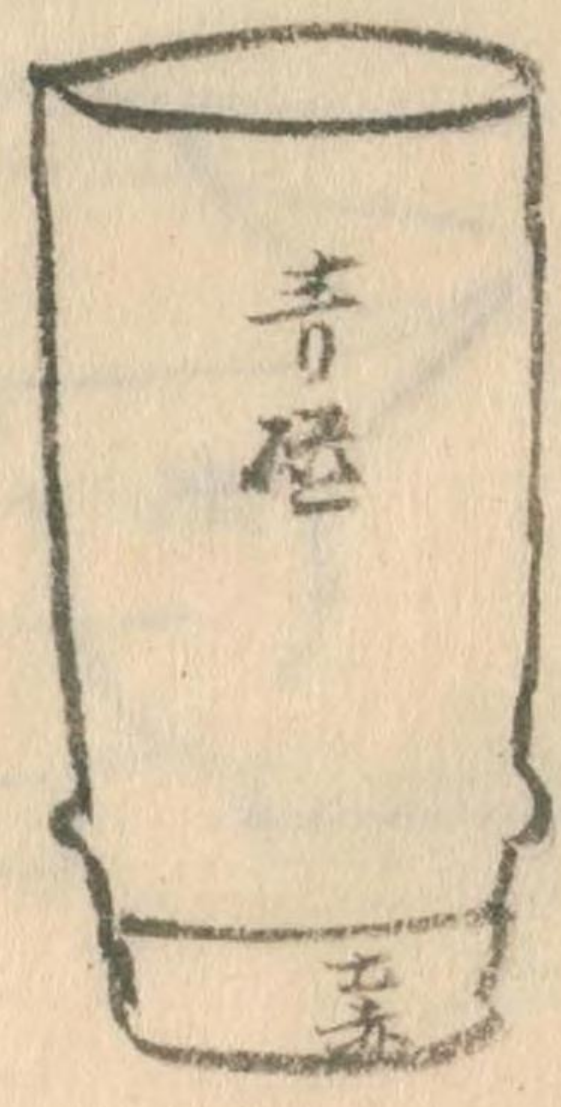


玄賓



虎林
嘉
禧

万古交趾

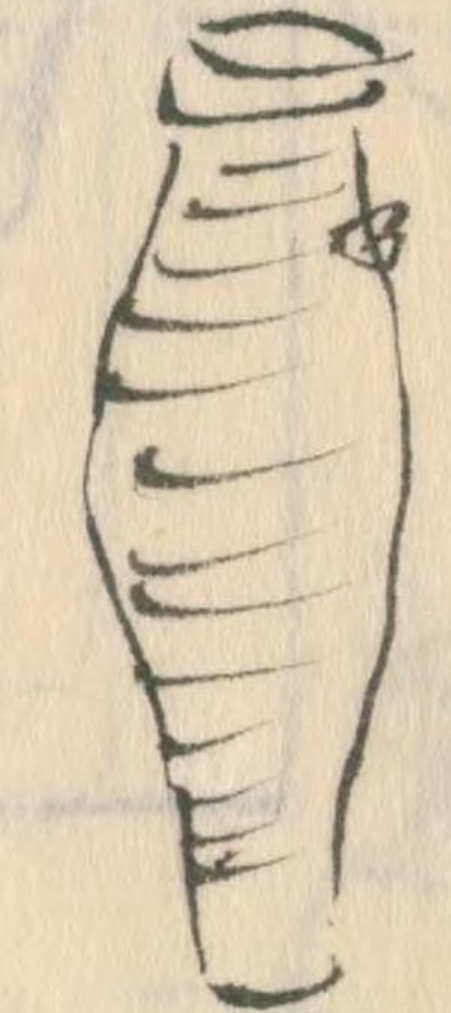


青磁

玉赤

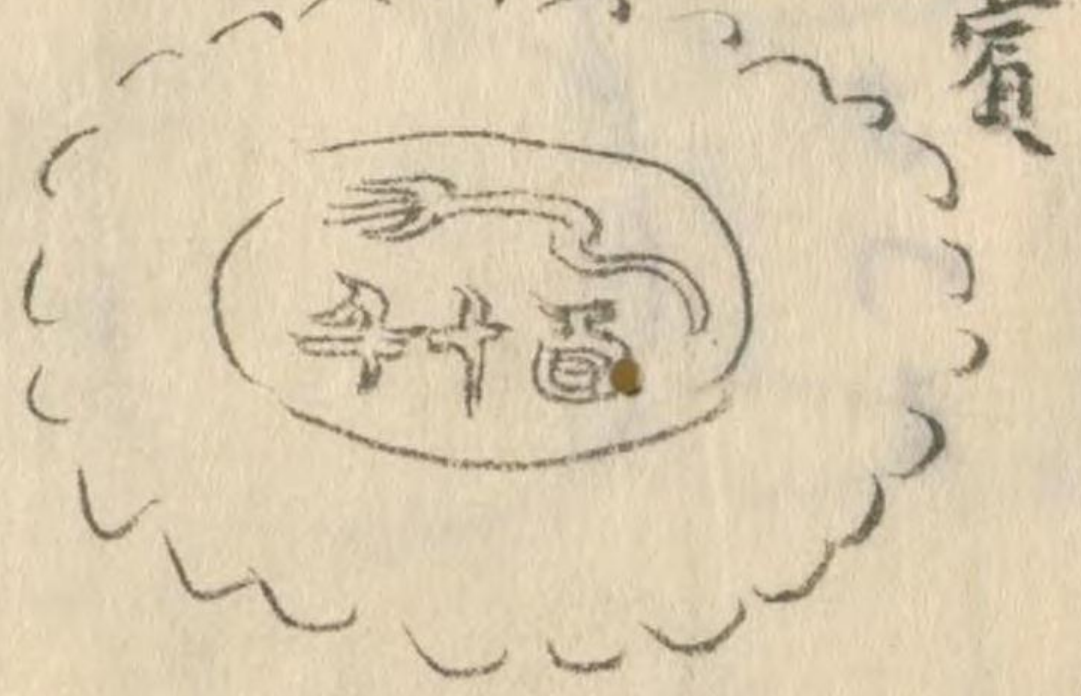
廿九年二月九 石井つえ

たけ色



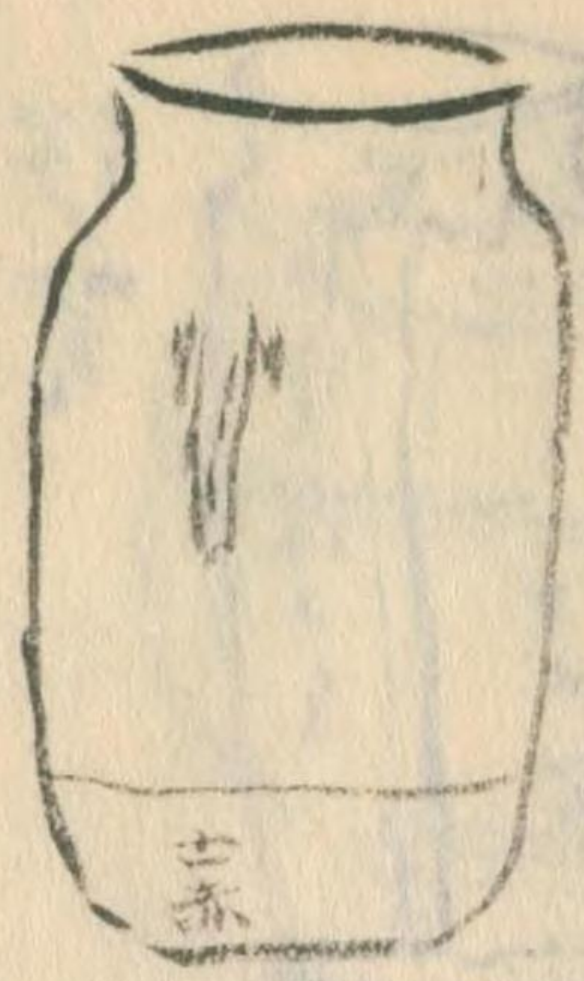
赤印

玄賓



卜、や 柿ノヘタ

金花山 いもの木



玉赤

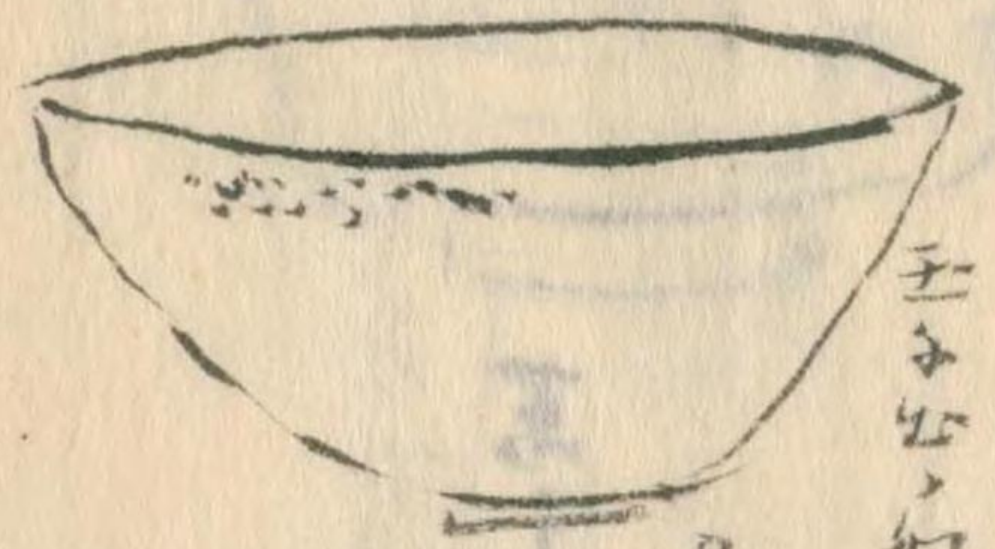
不忘印

松十日

銘忍

ゆくすゑも
我もそも
忍人やあらむ
昔を思
心にひろ

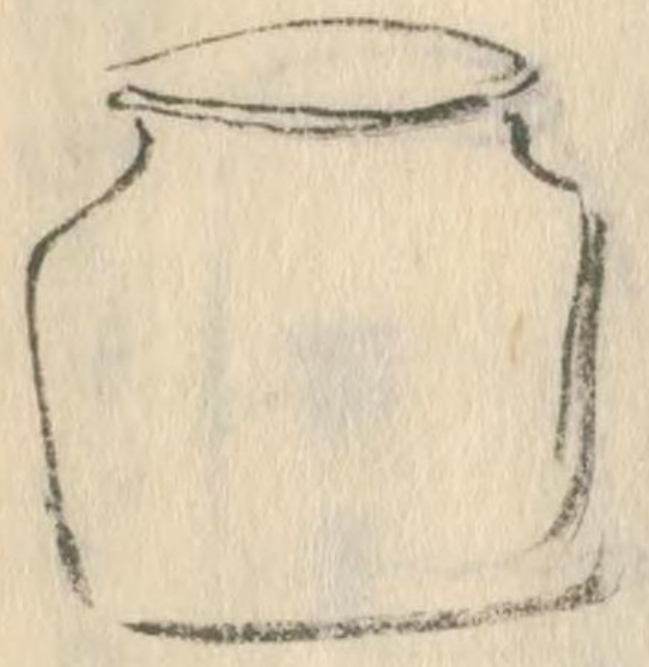
彩吹



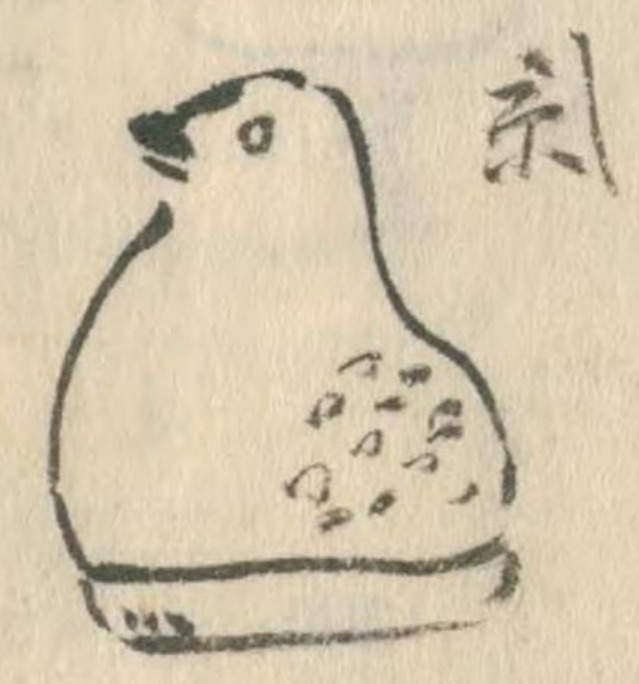
玉子むしろ

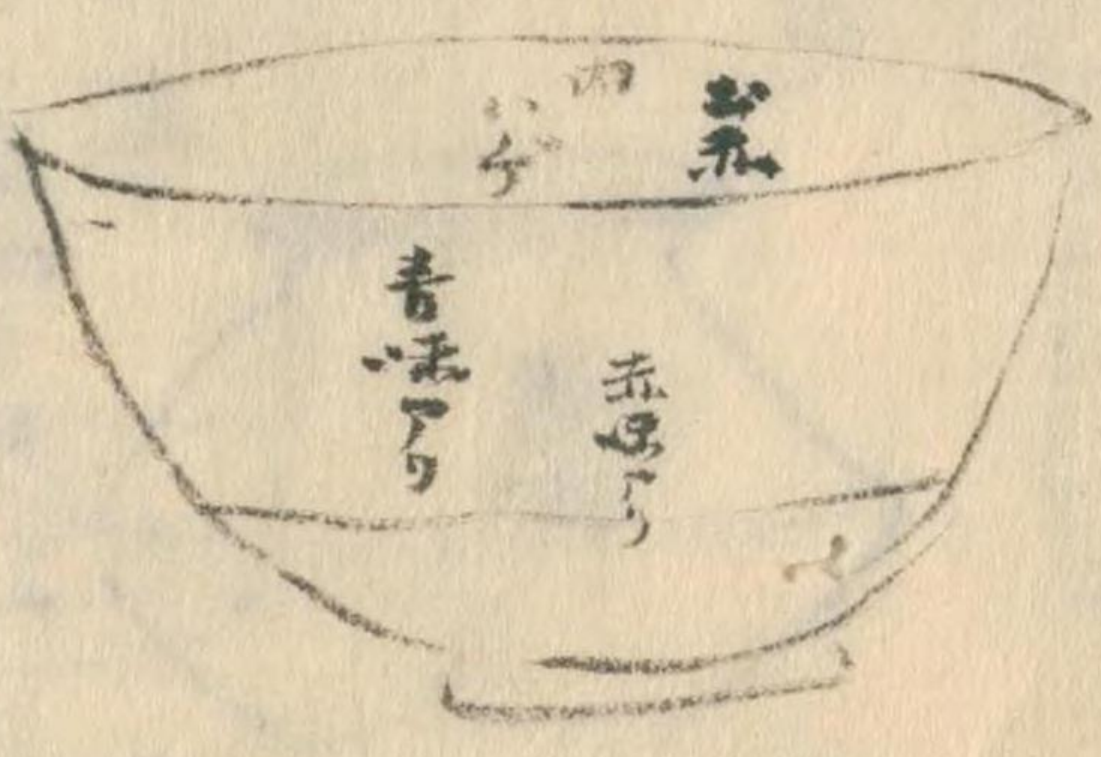
目
つつ
つつ

金花山 文下



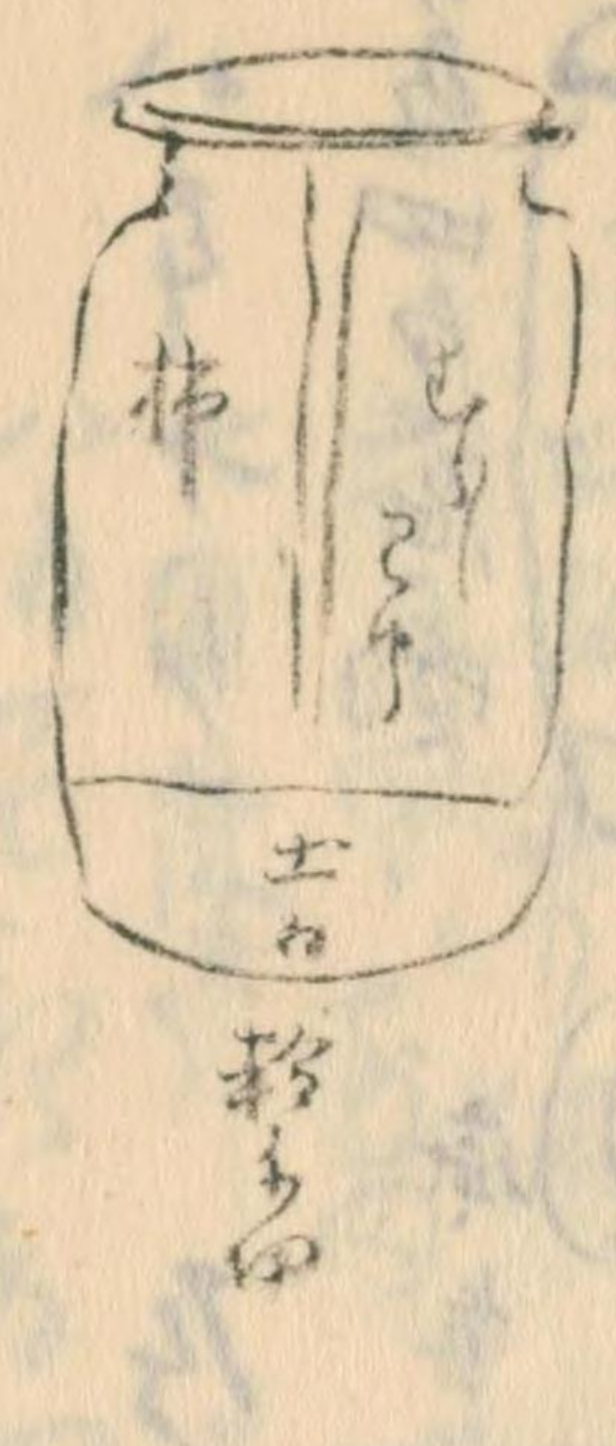
剌

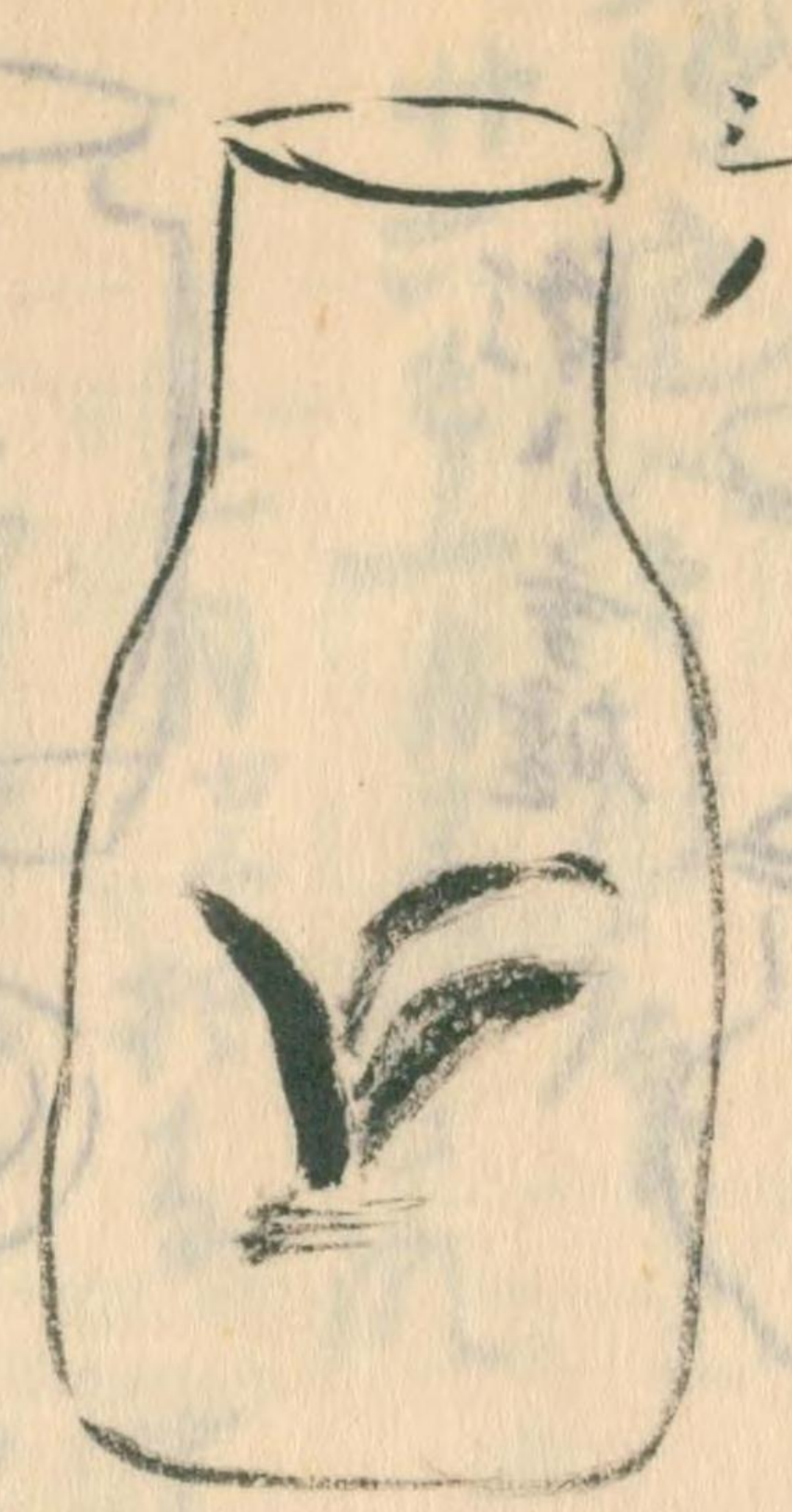


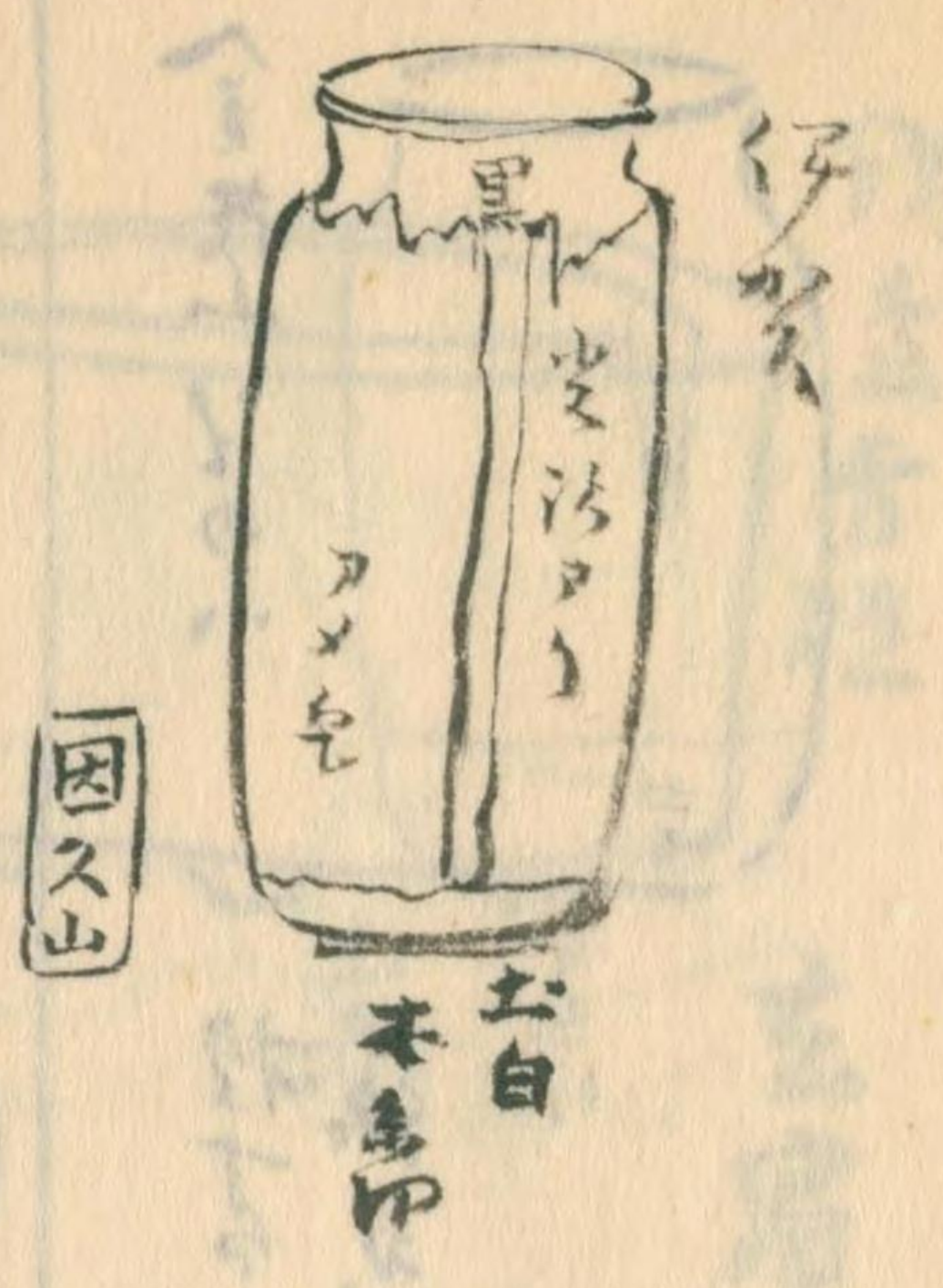


内
いけ
崇
青味有り
赤味有り

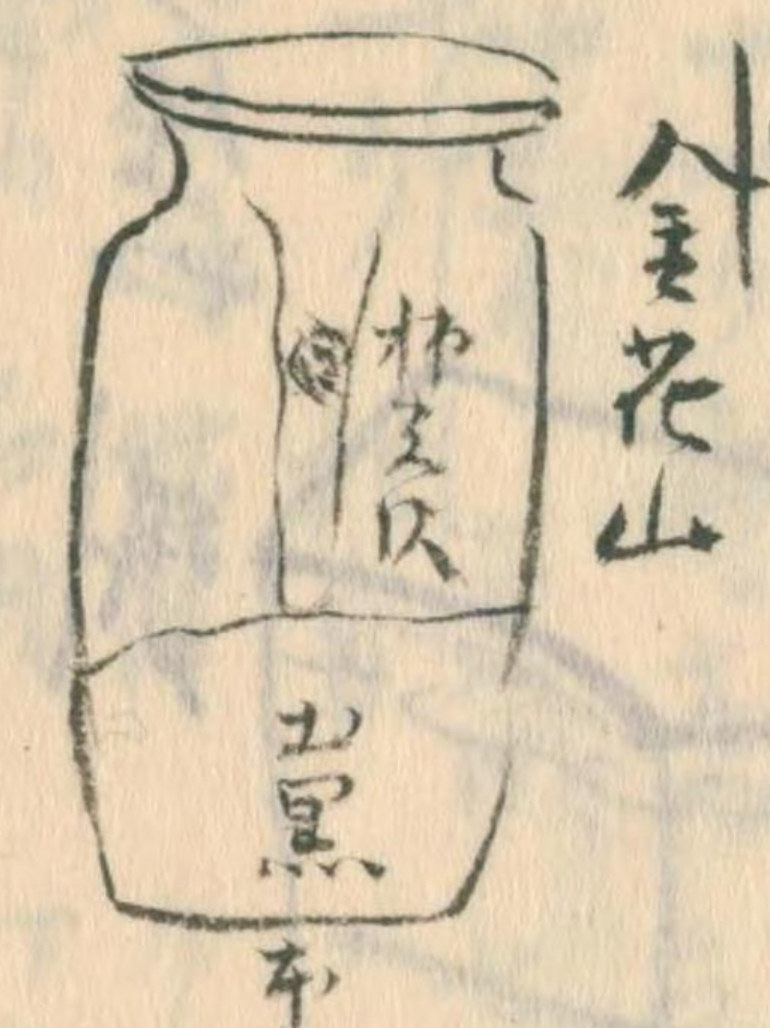
四月七日 三ノ 座敷

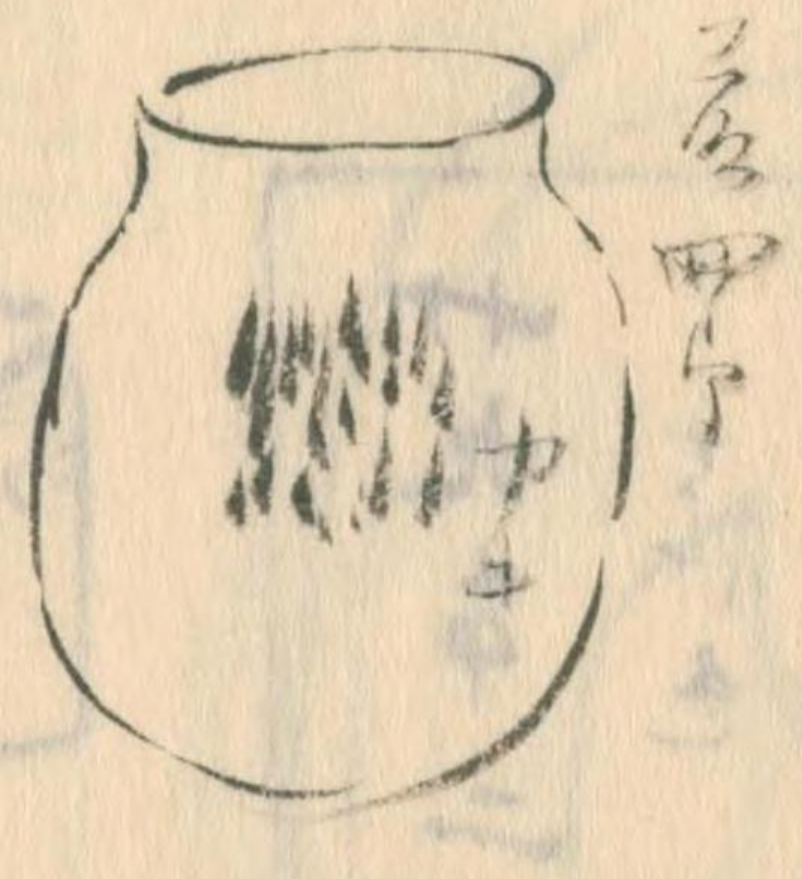


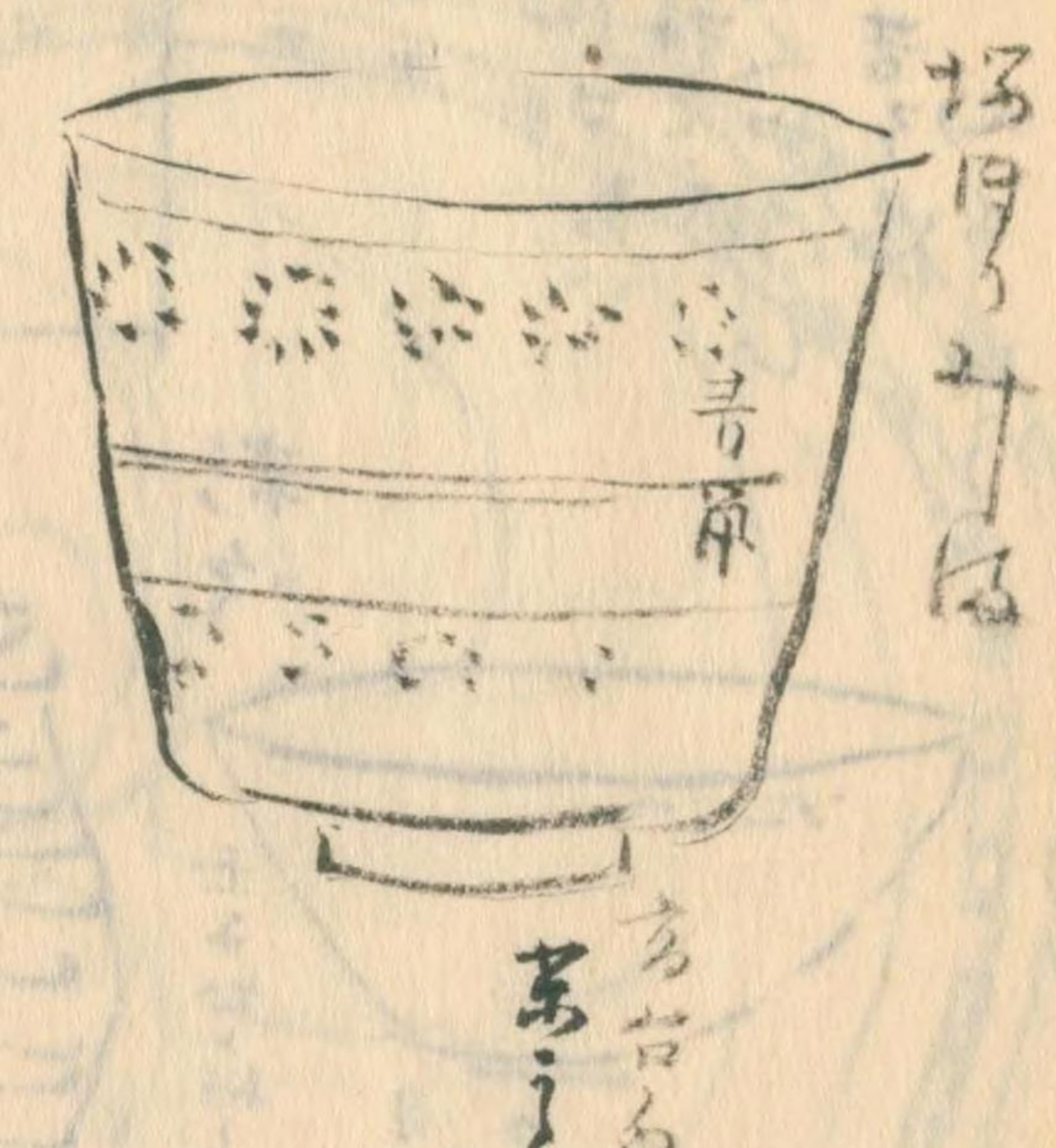


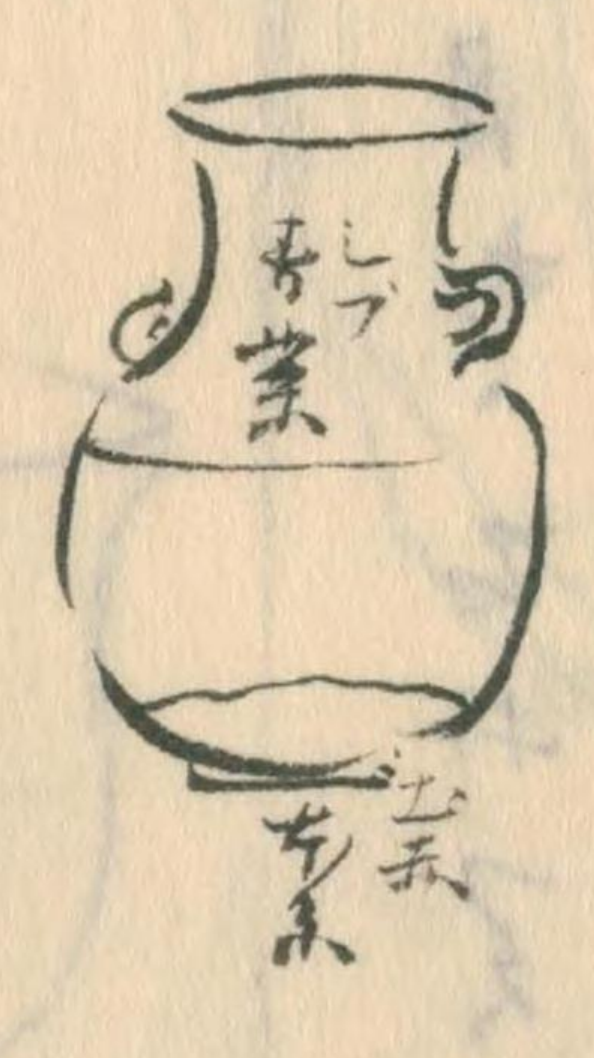


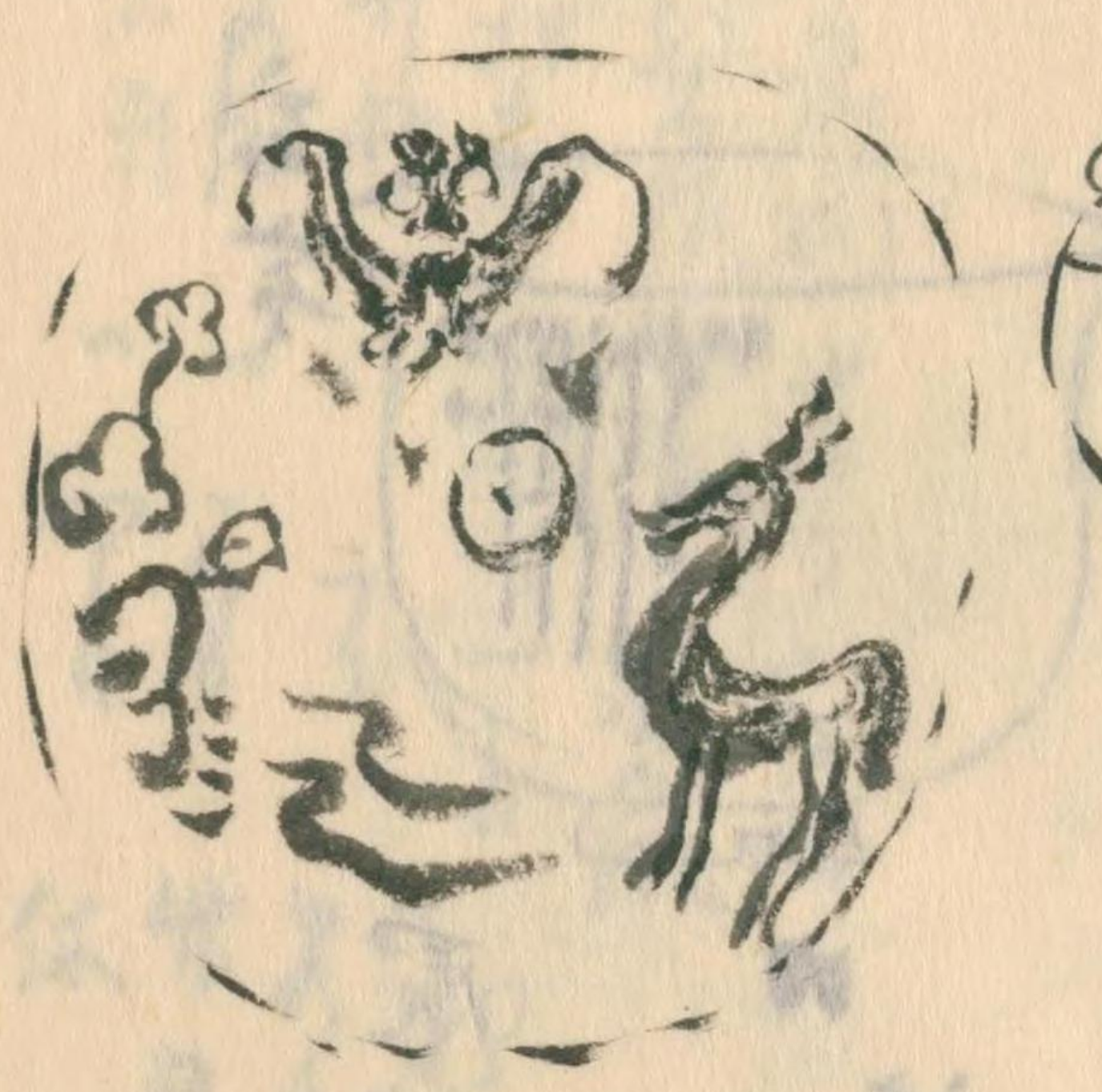
伊賀
黒
アメ色
因久山
土白

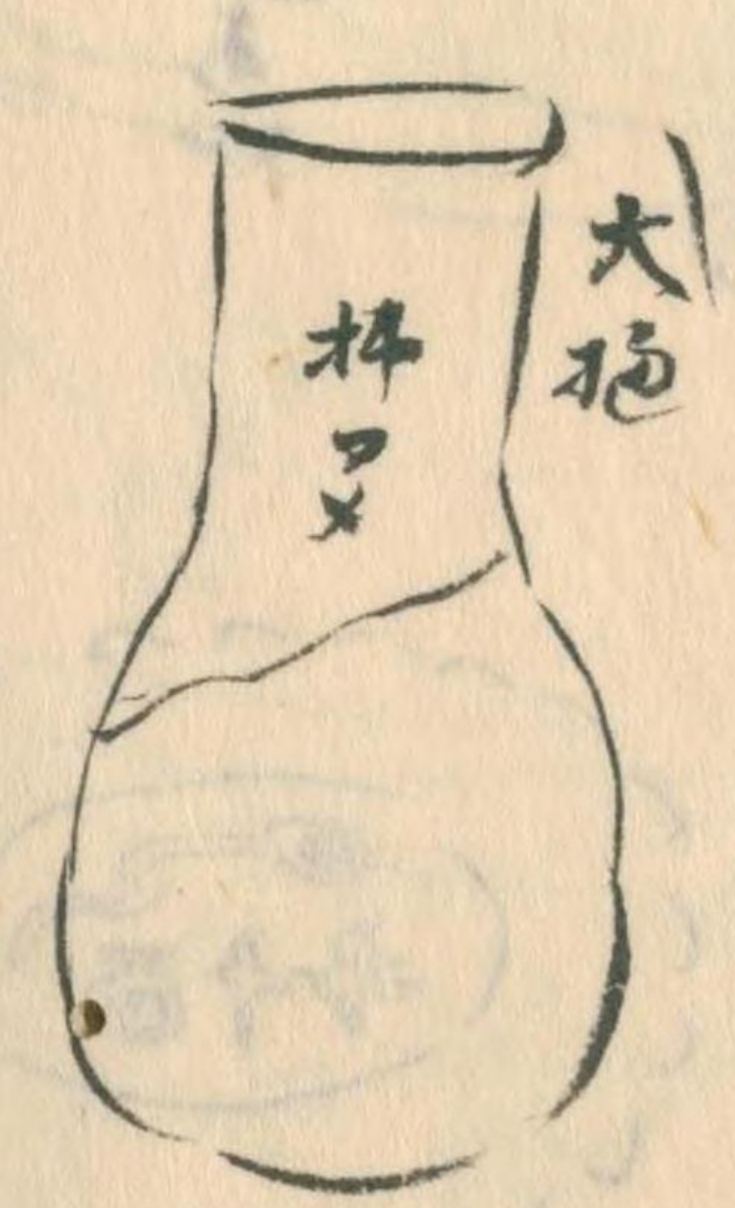


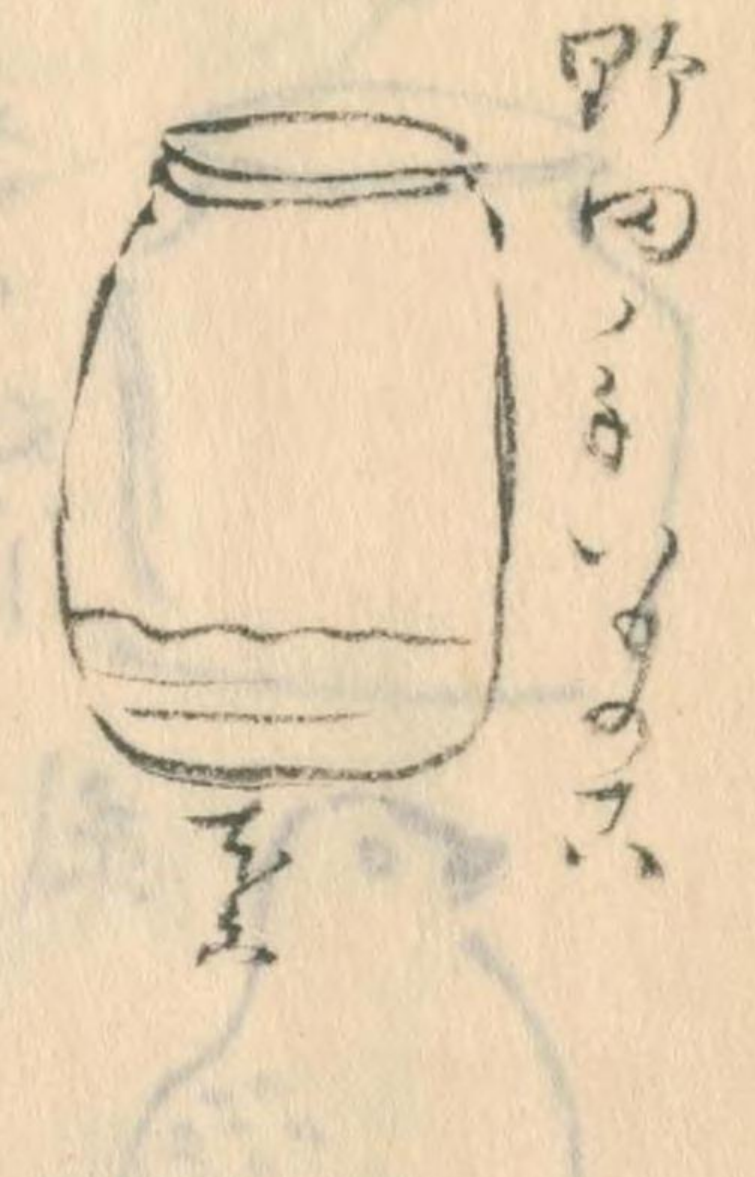


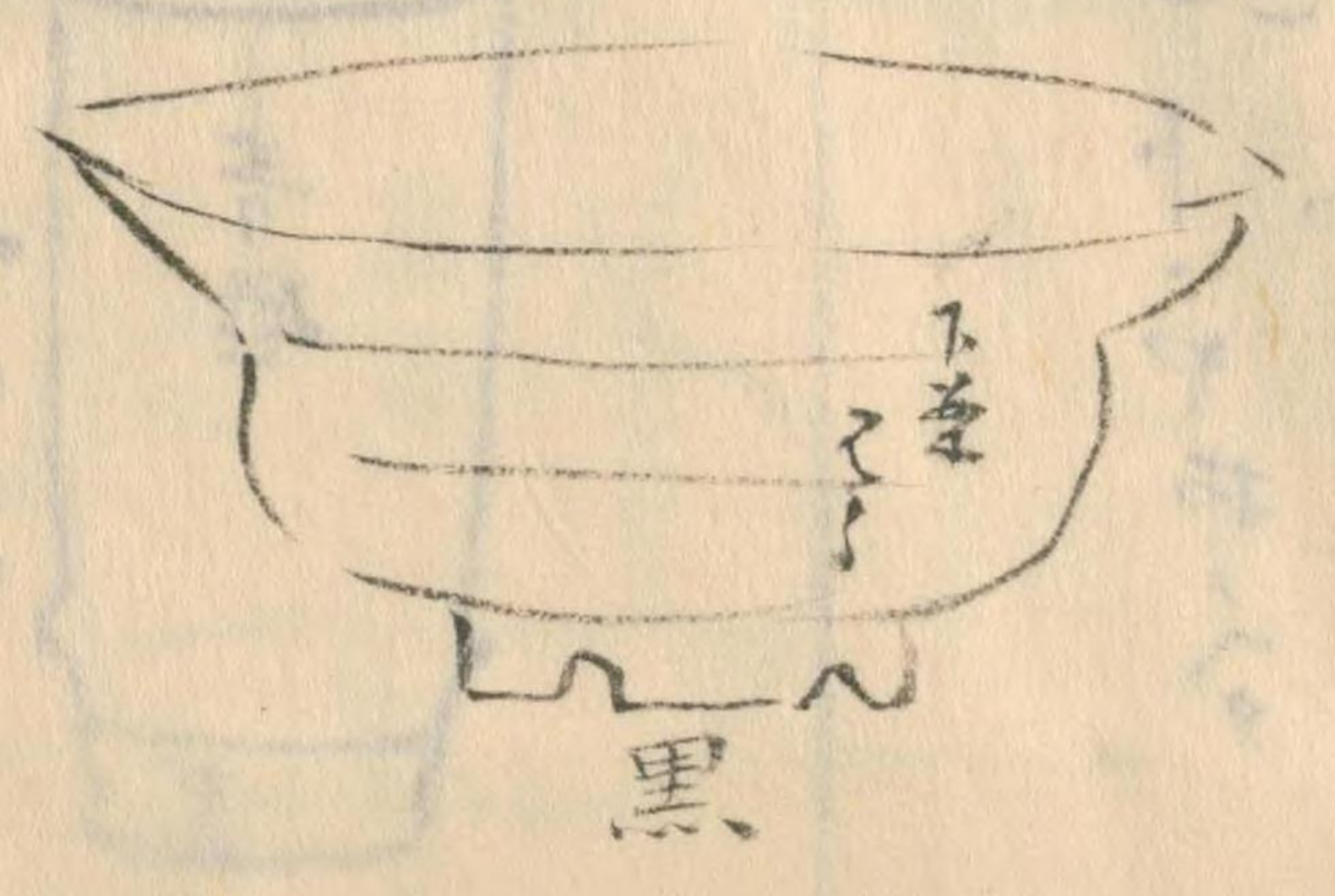


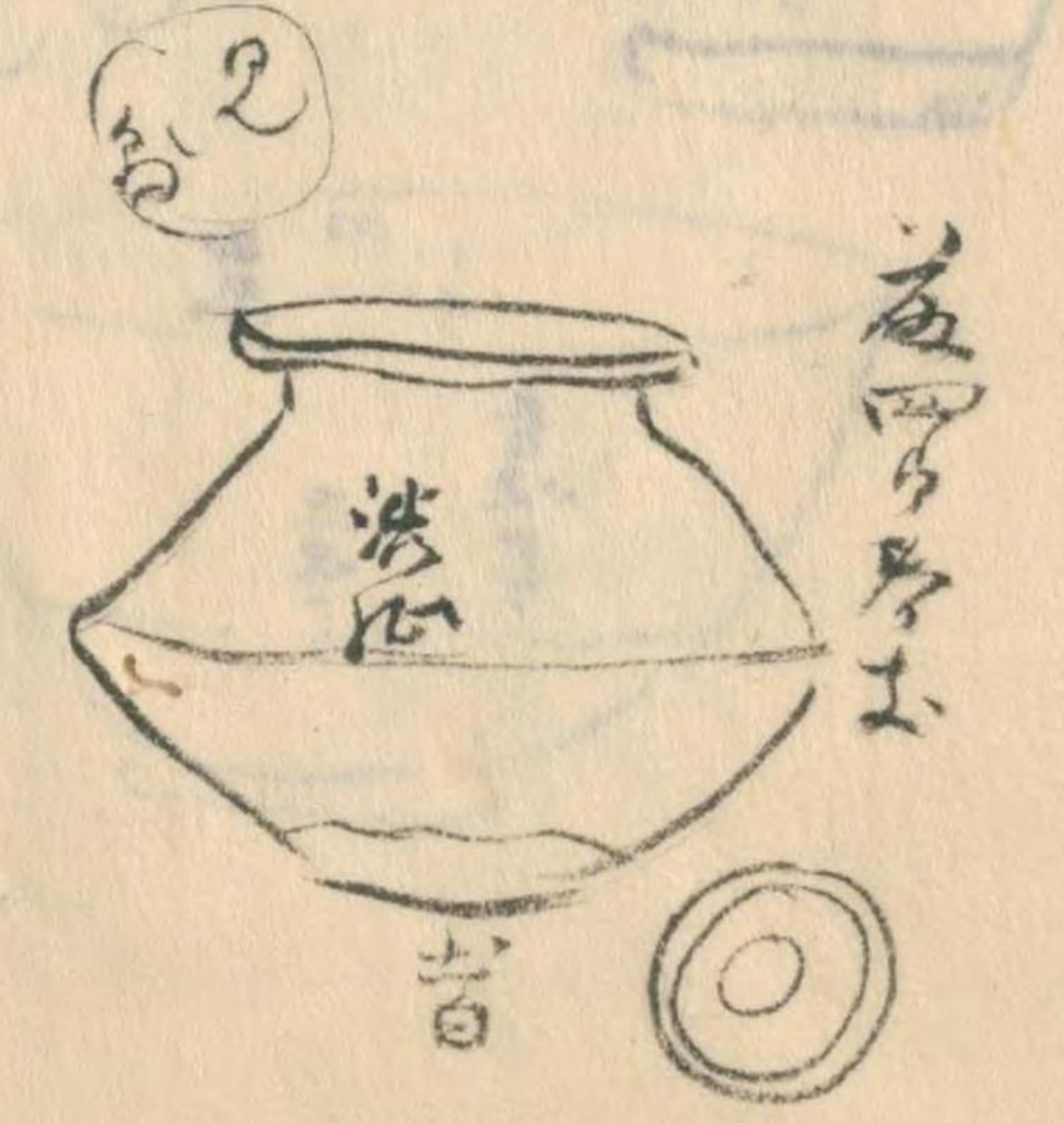






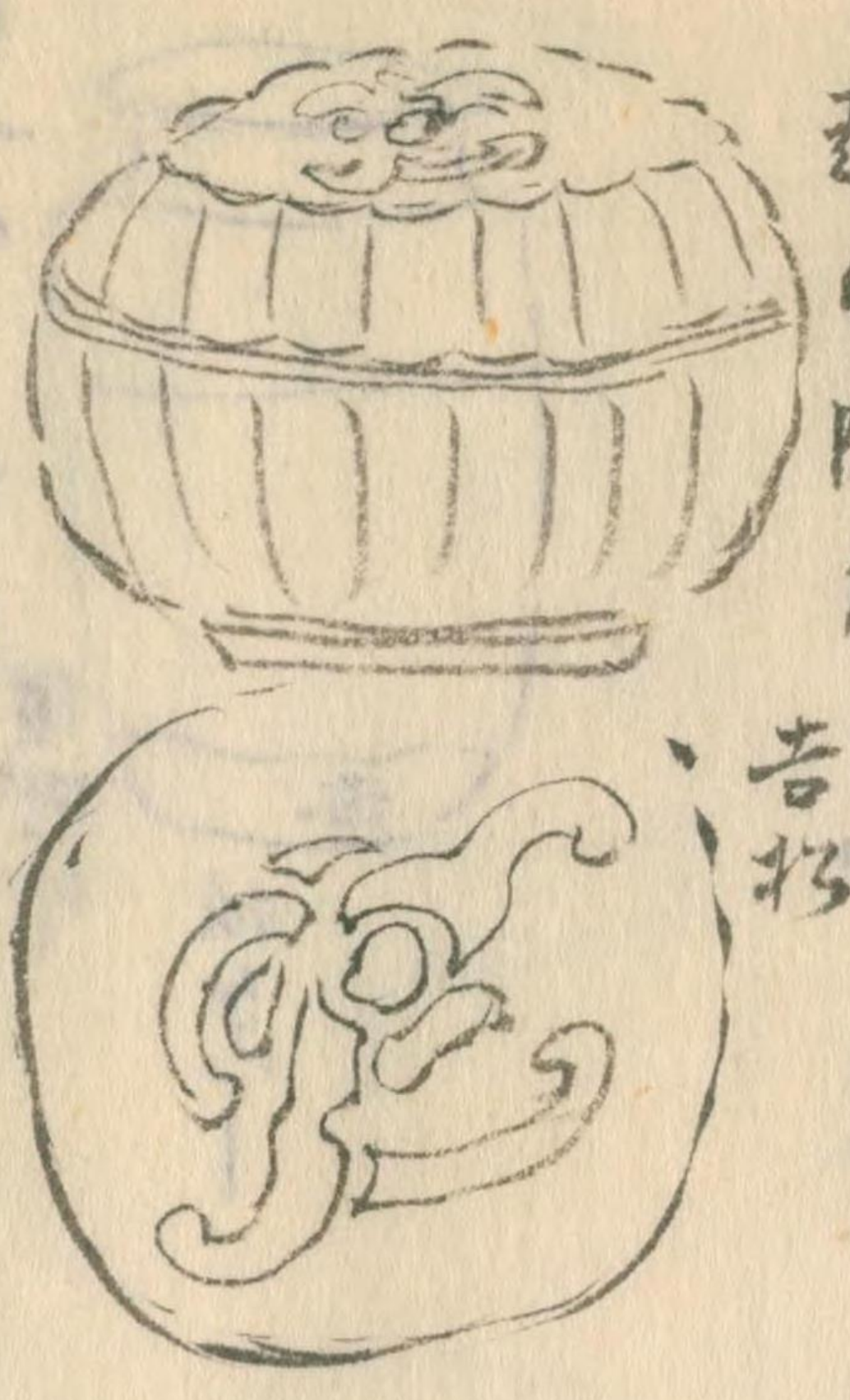


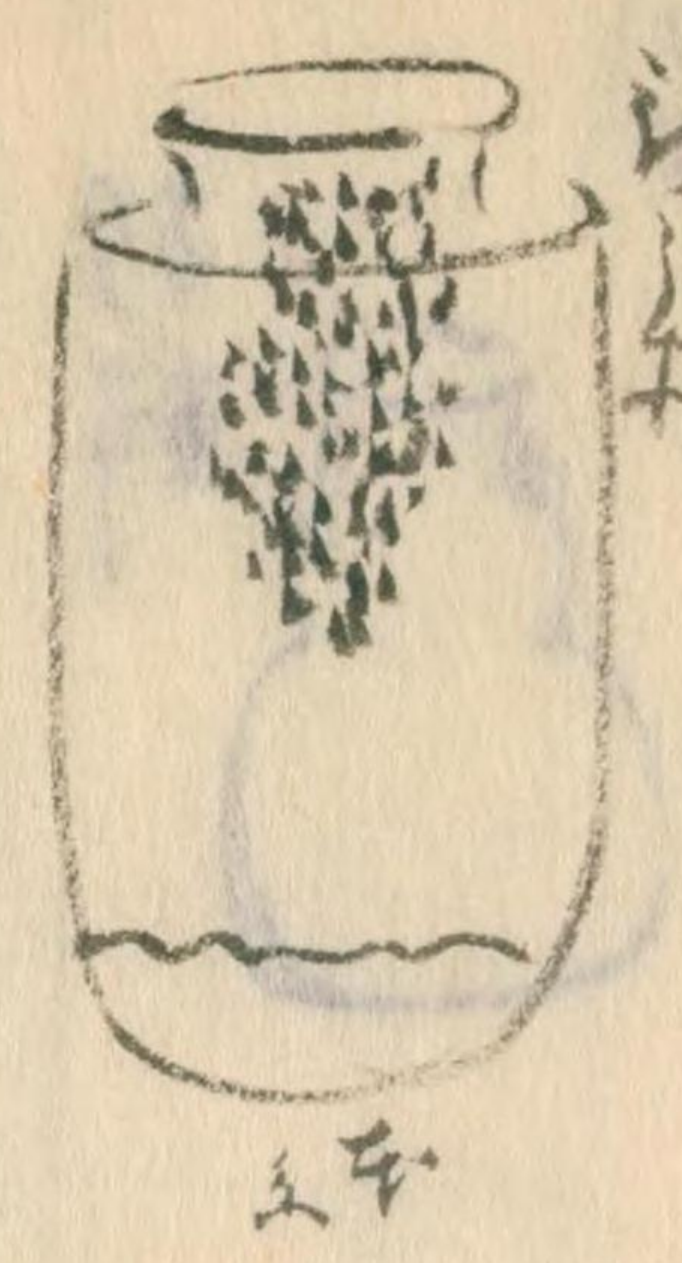


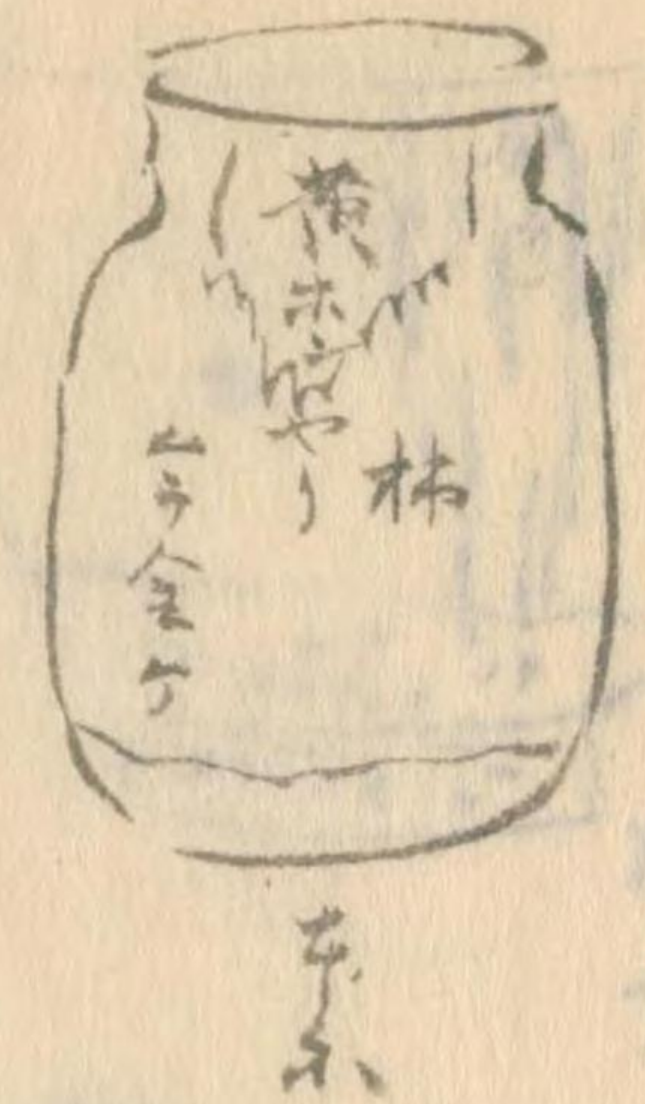


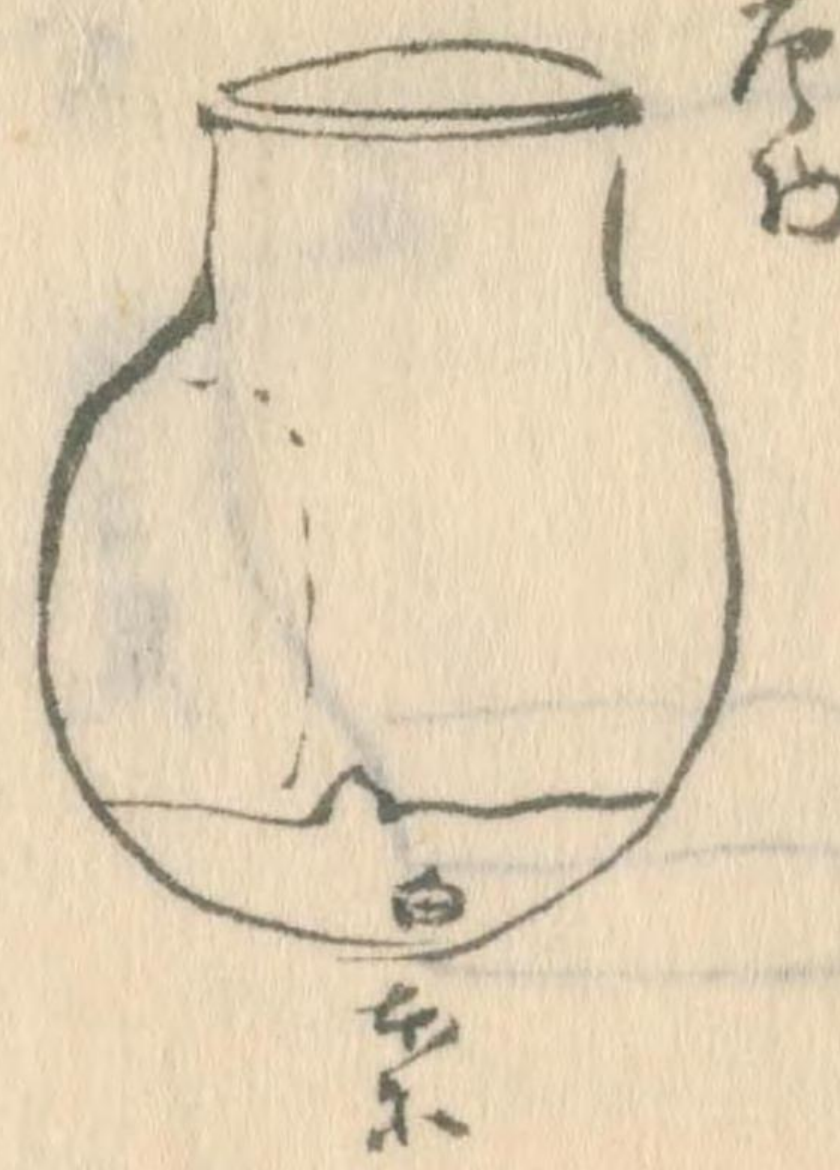
さつま

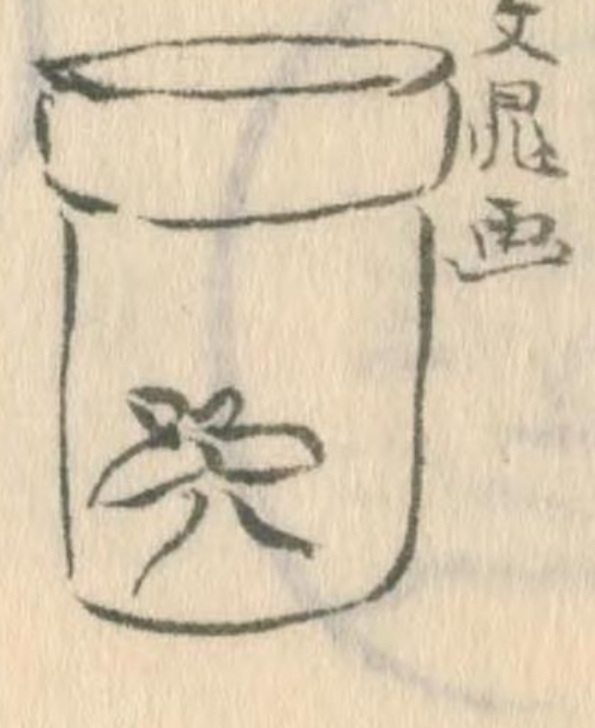
五月四日 岩附寺 座敷

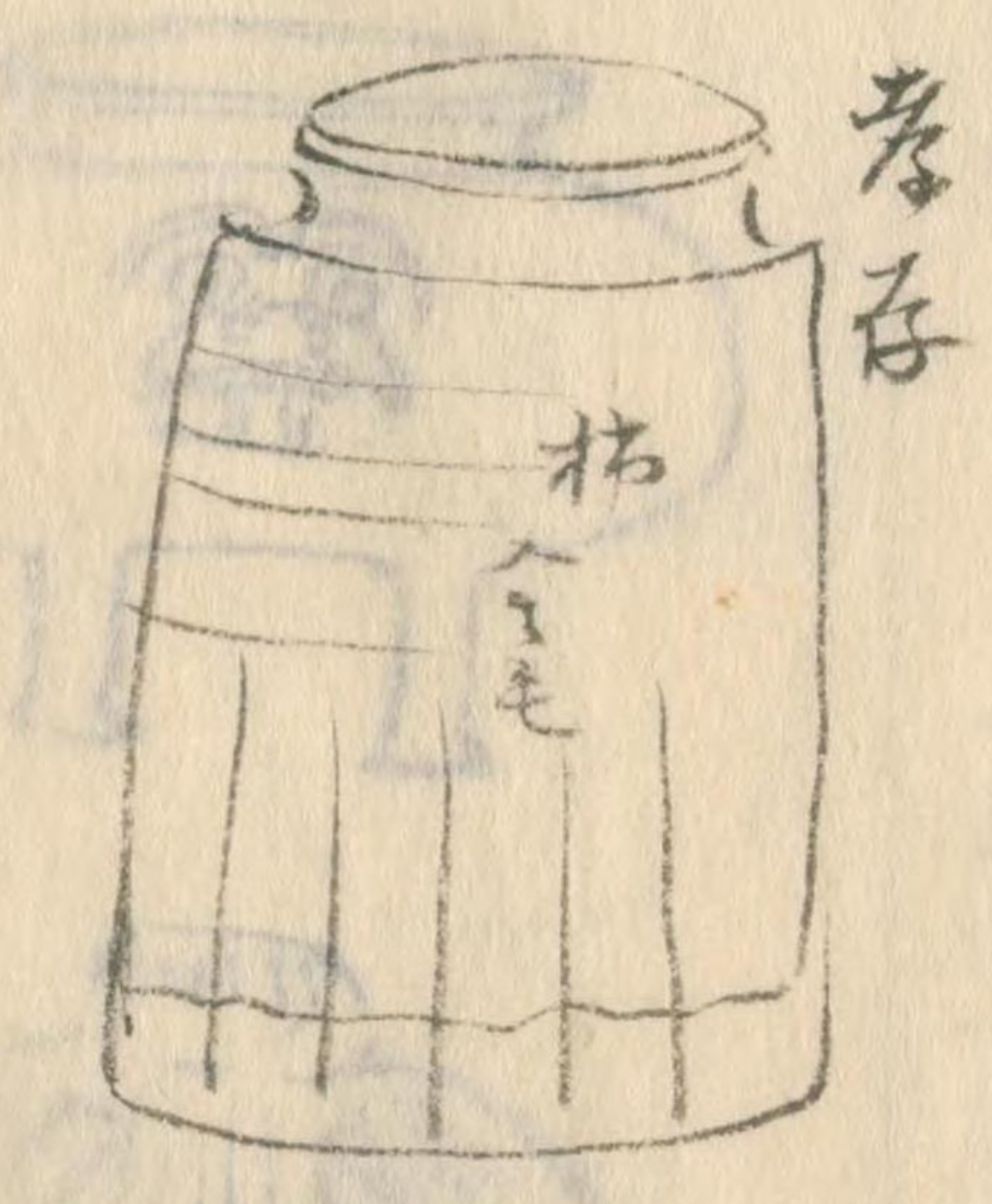


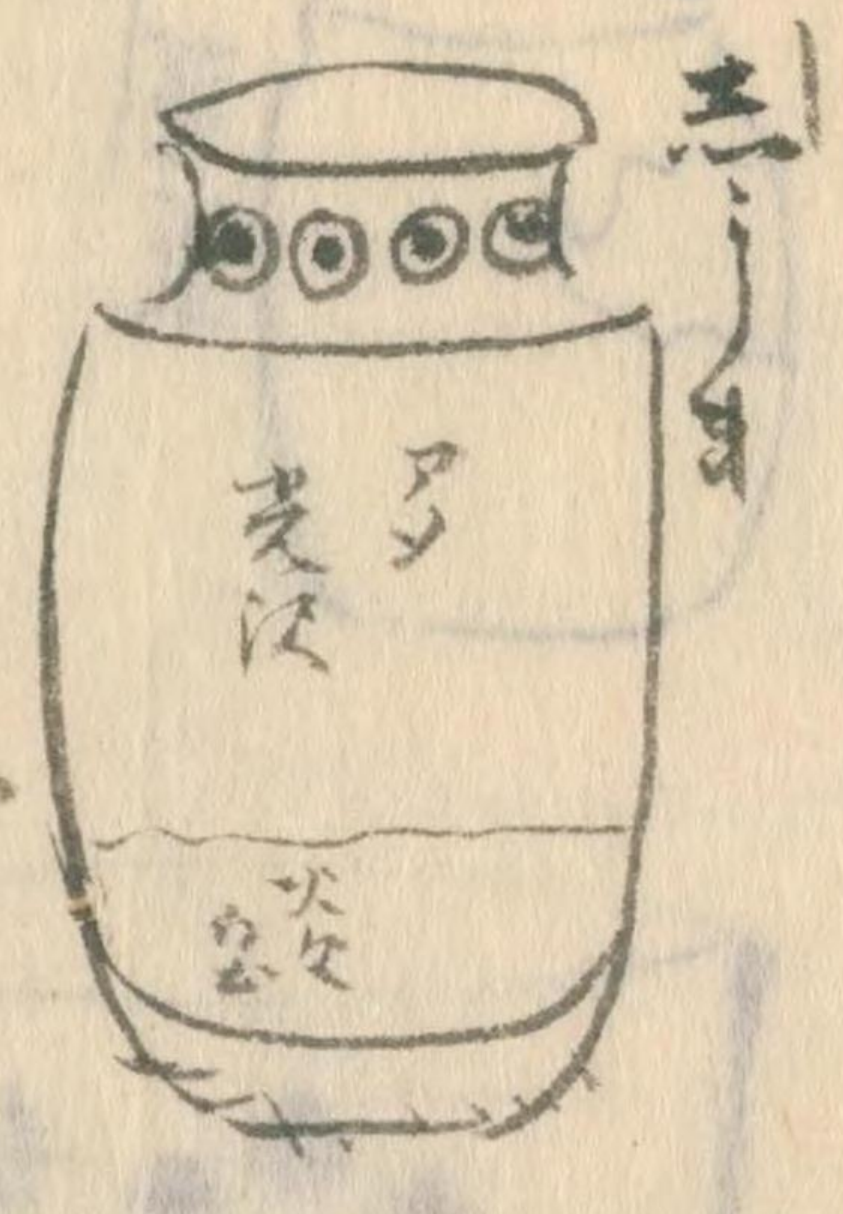


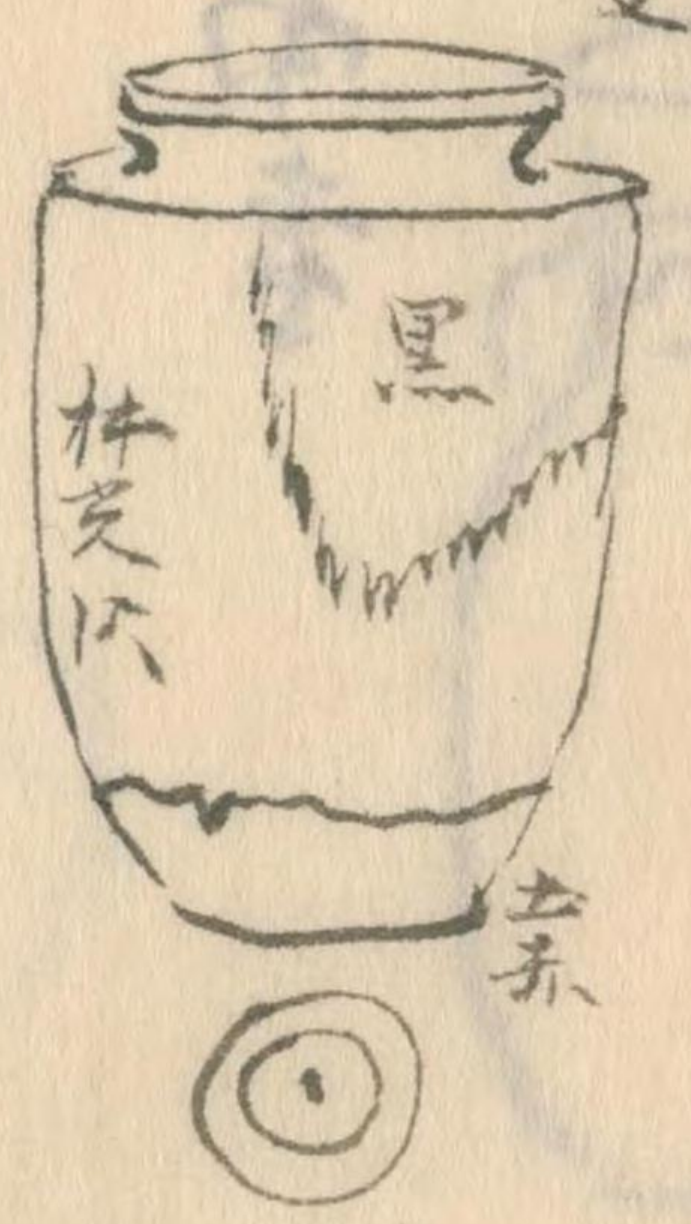


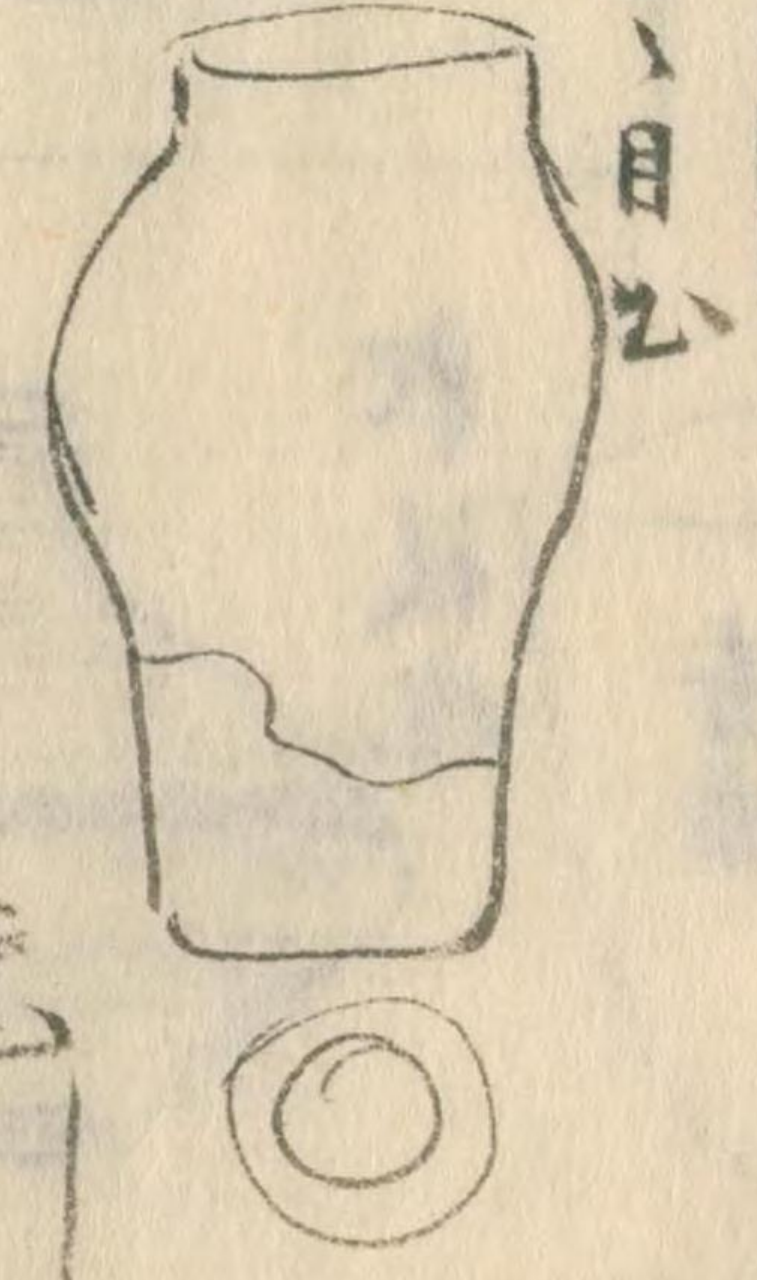


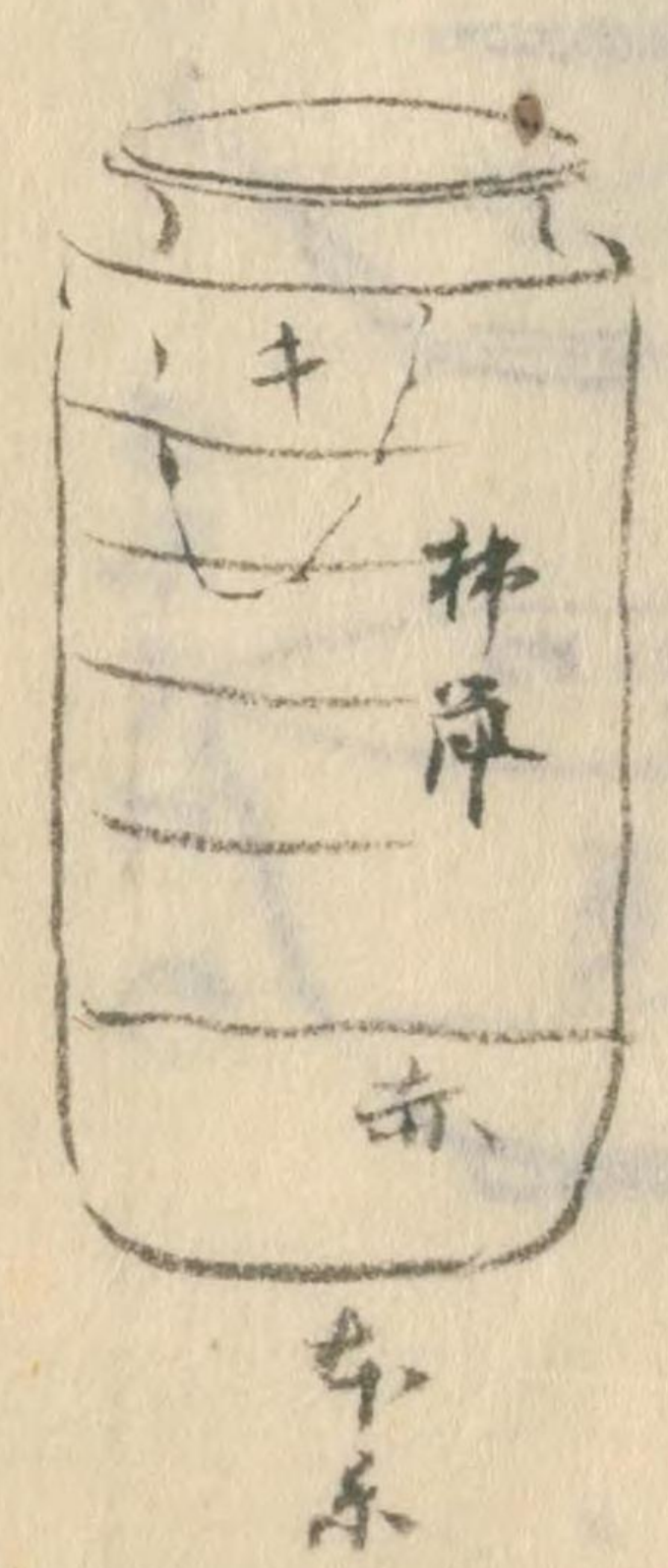


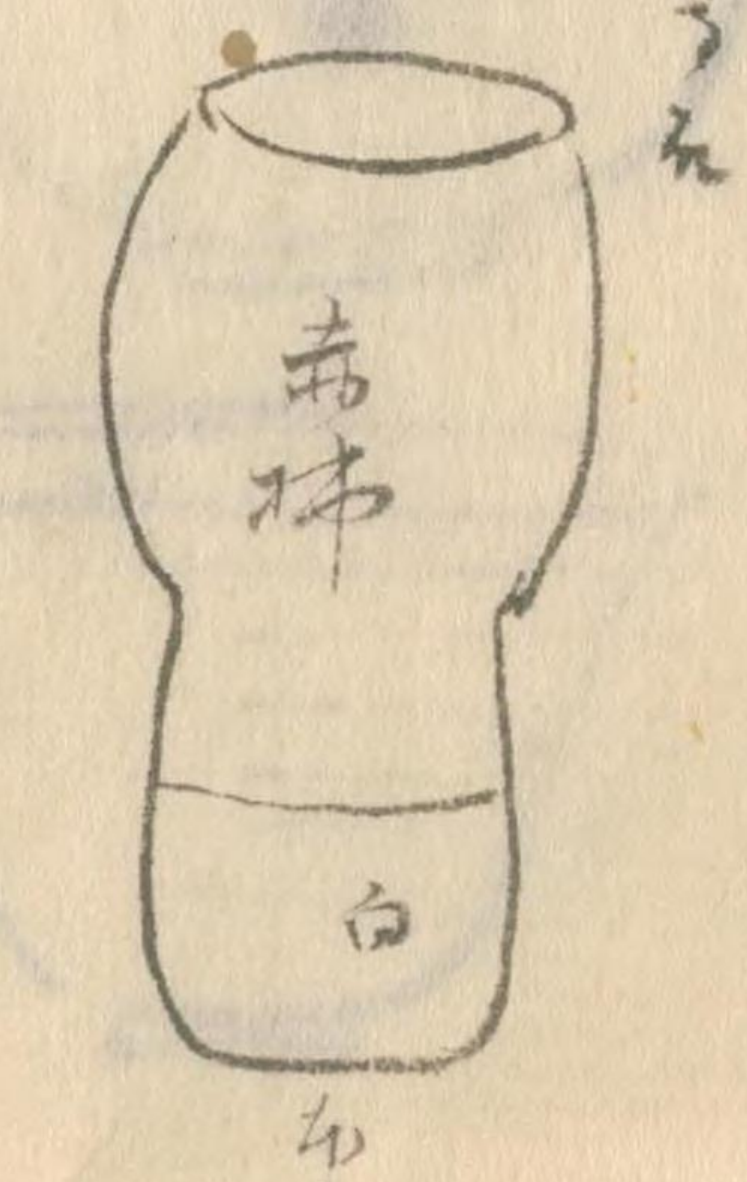


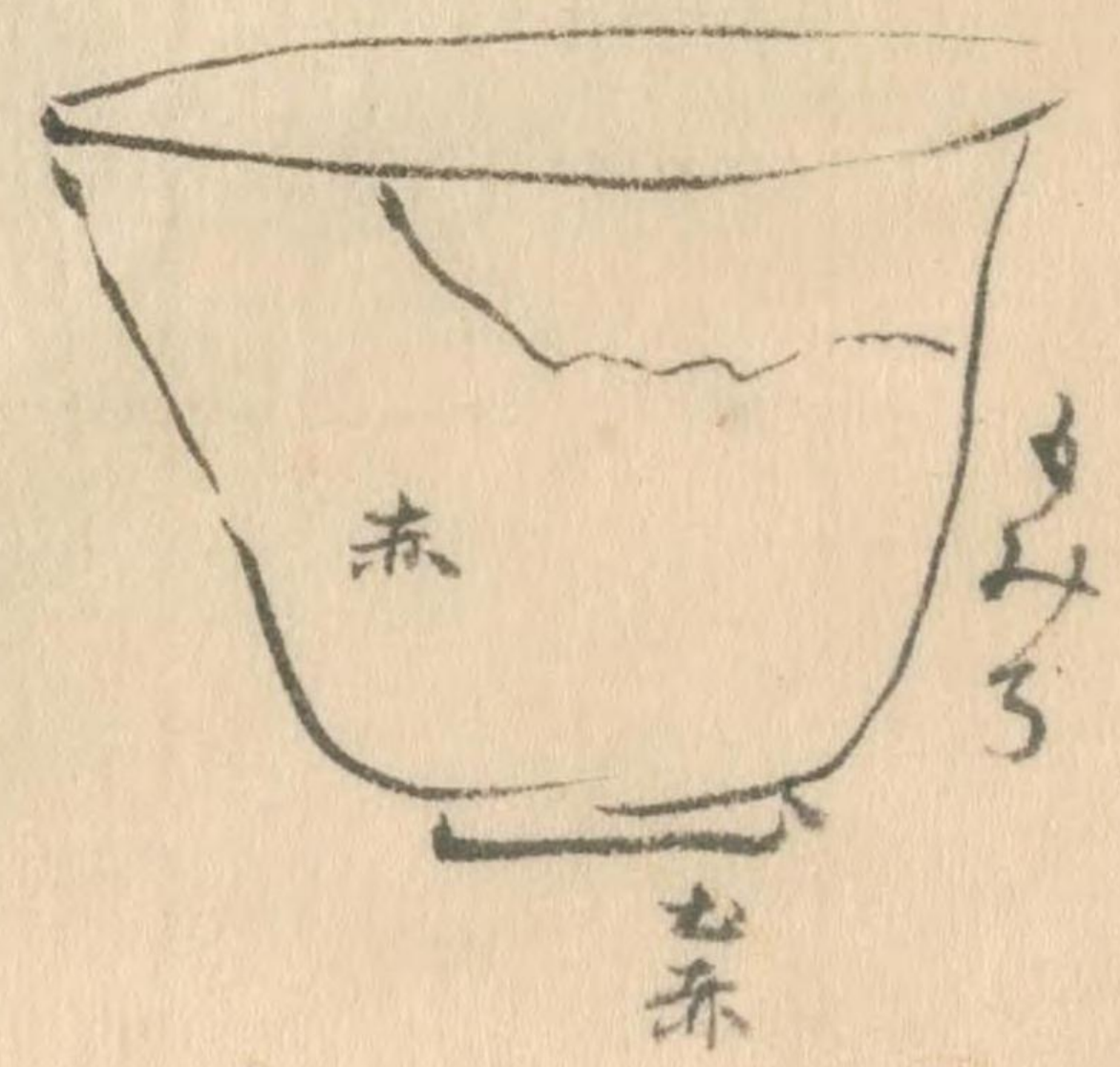












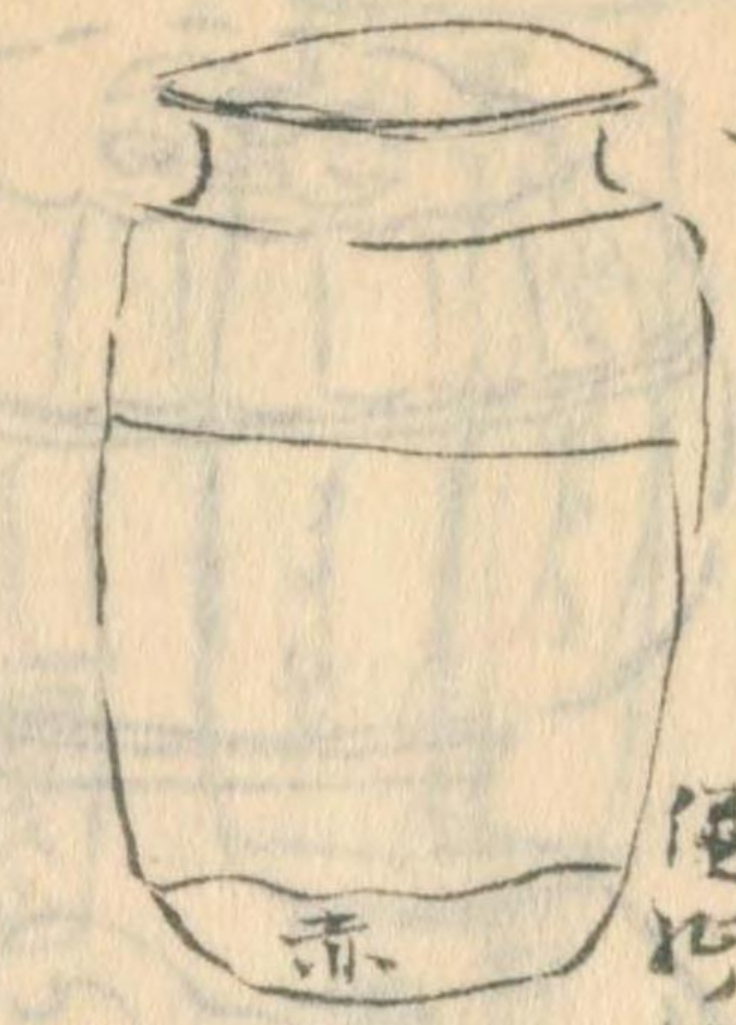
黄薬

841 124

ガラス使用

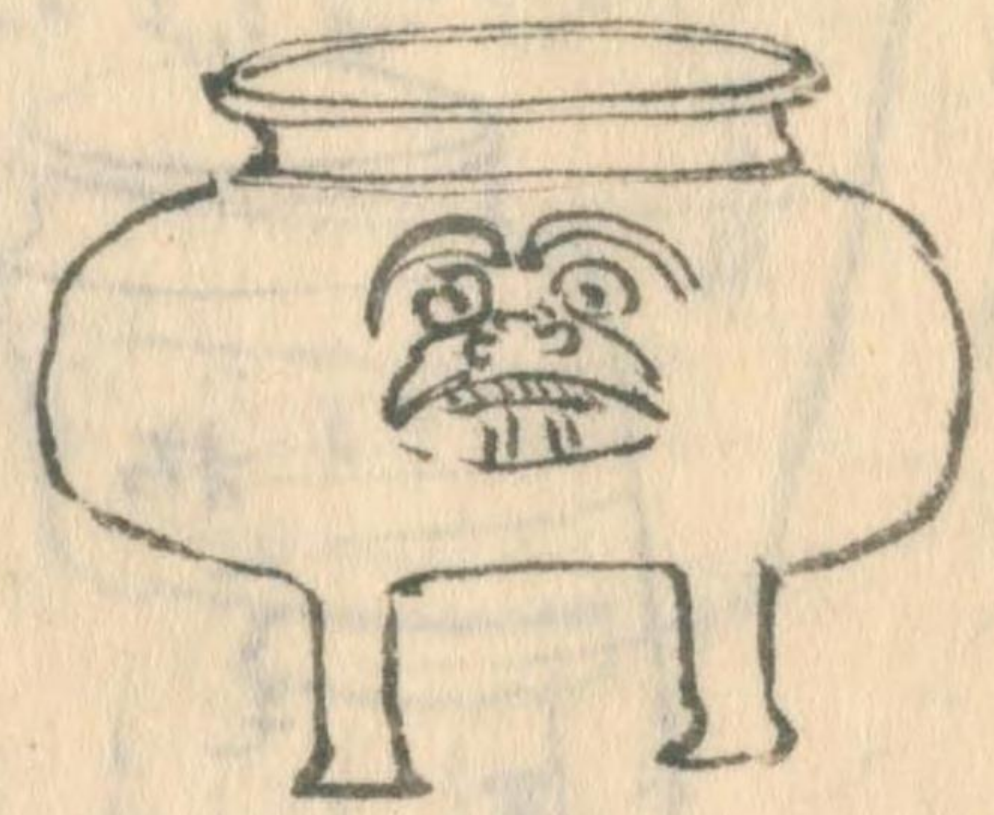
841
124

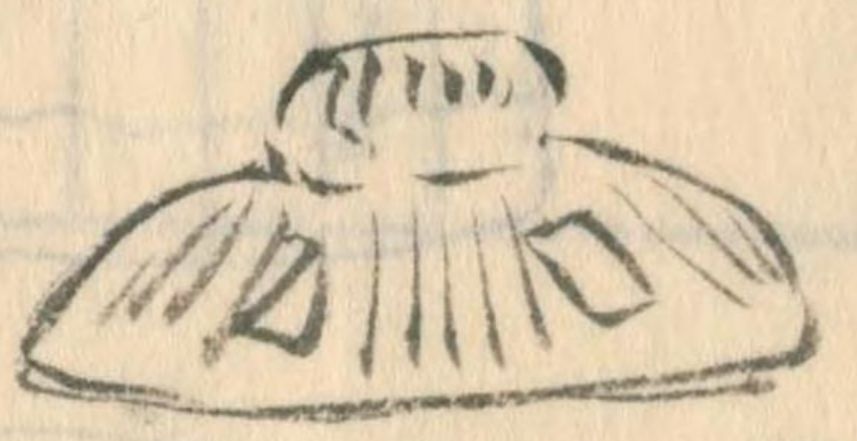
ひぜん



青し 染付也

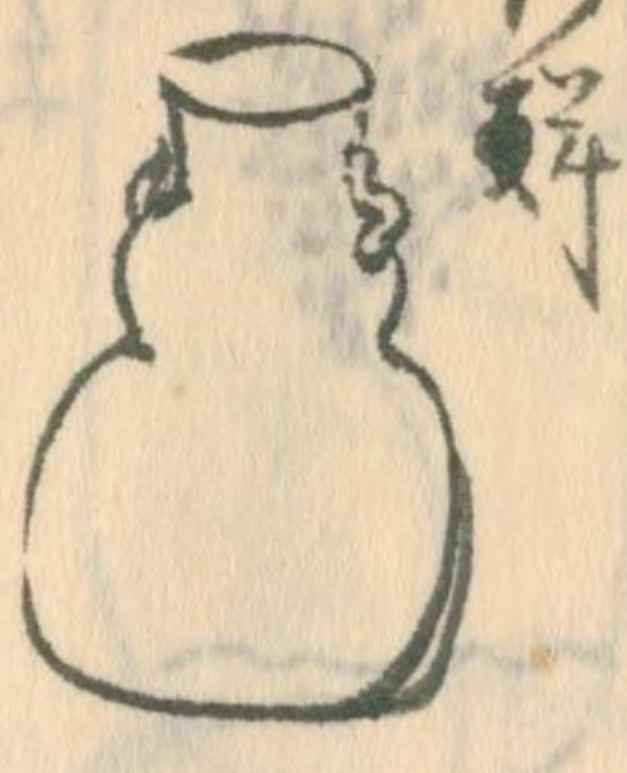
板あし



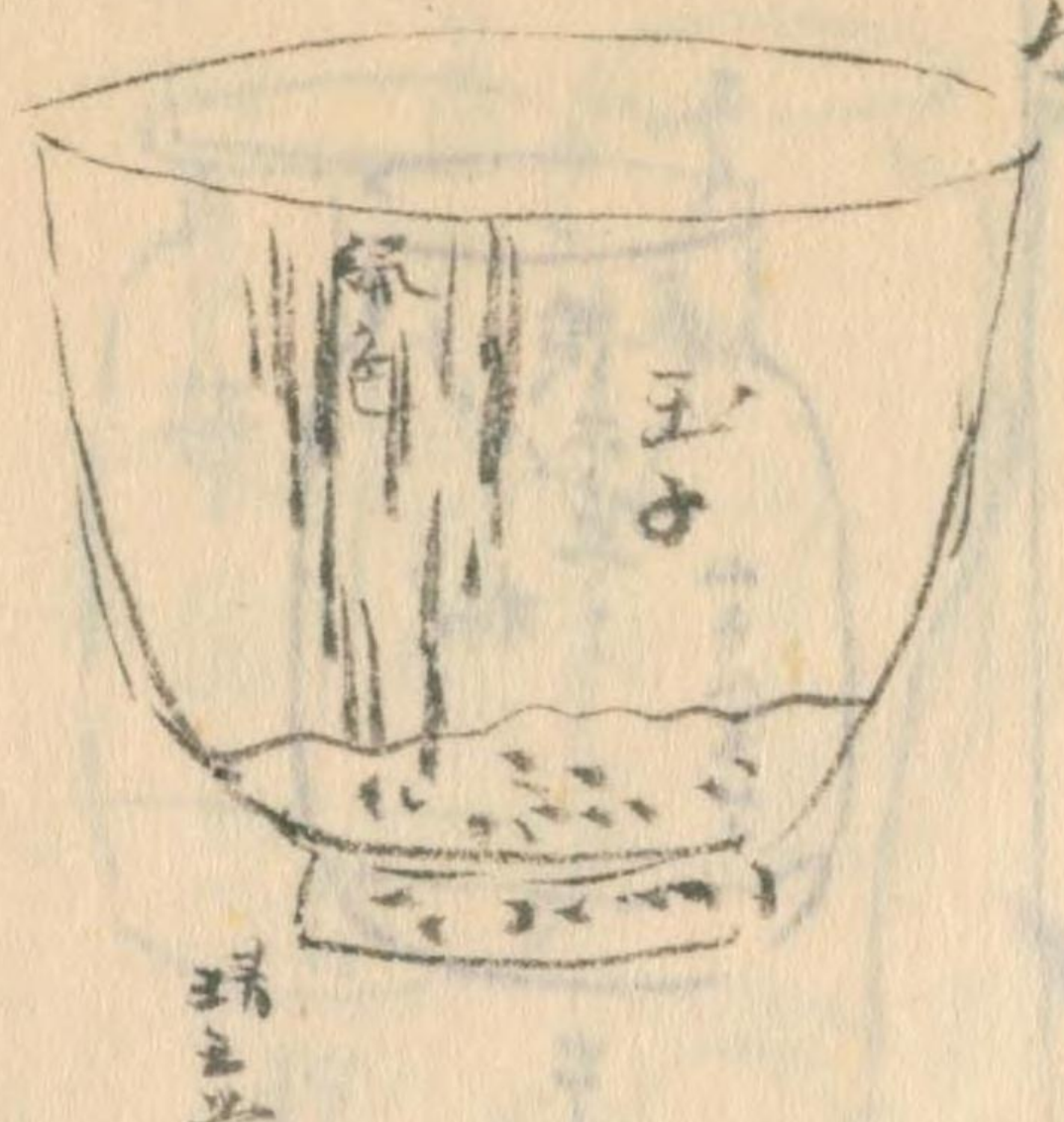


七月六〻 彦坂物 白分

朝鮮

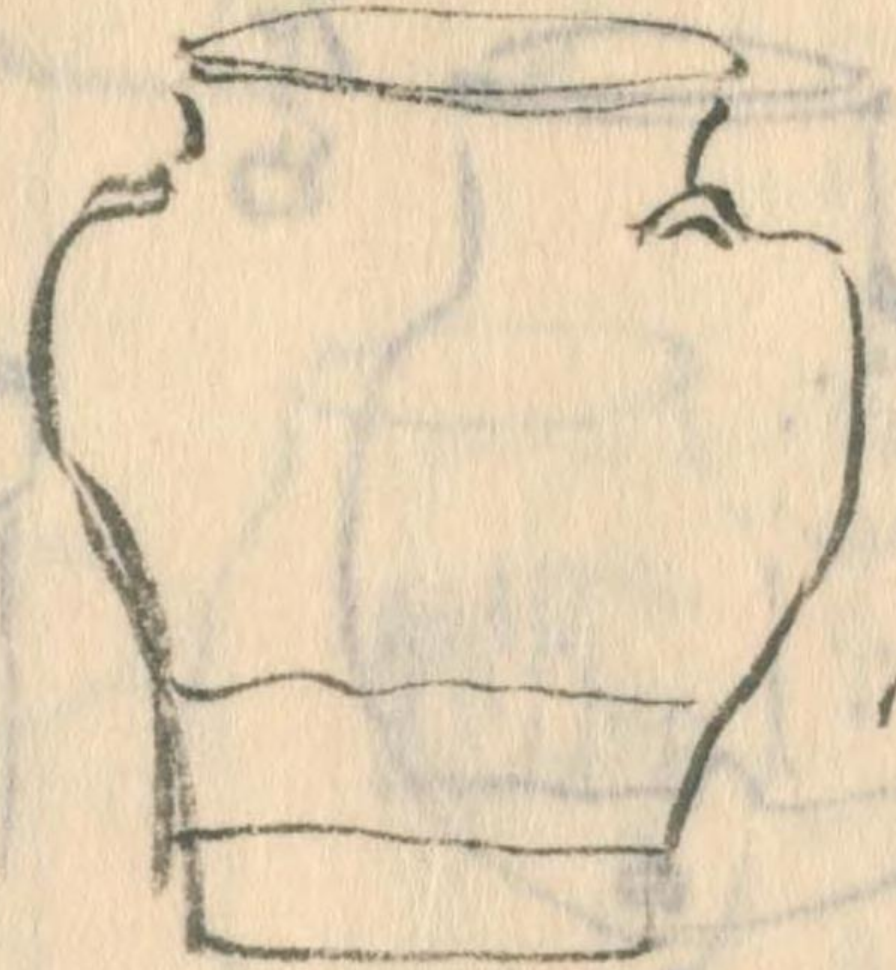


いが

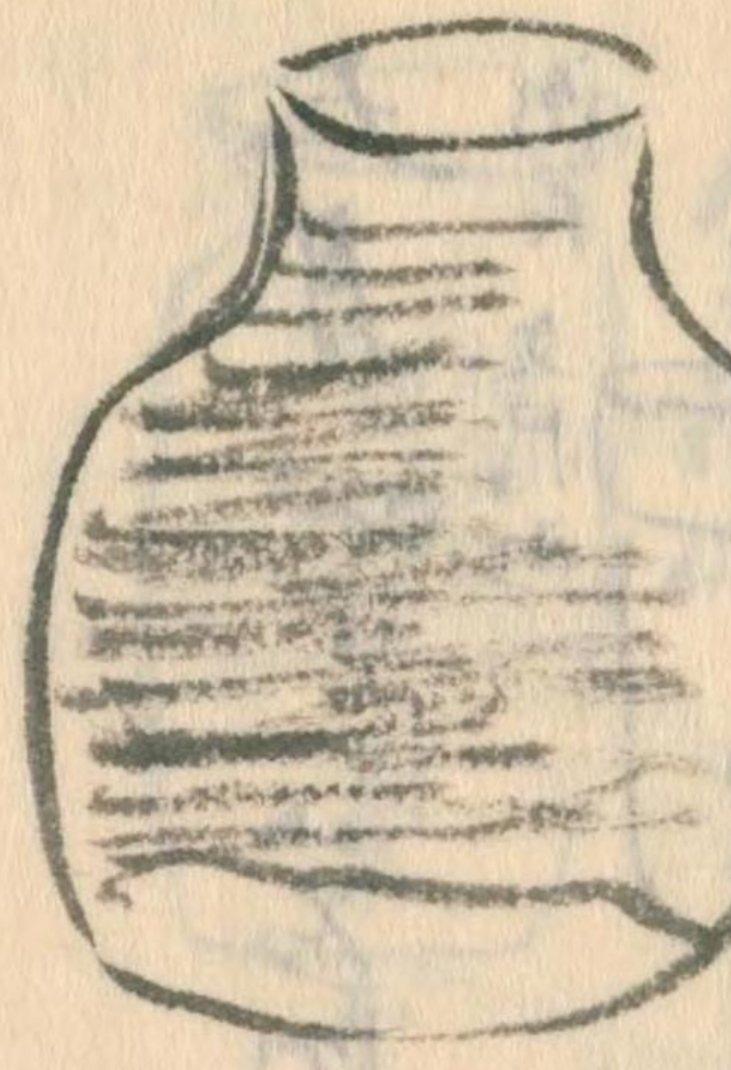


瑞玉堂

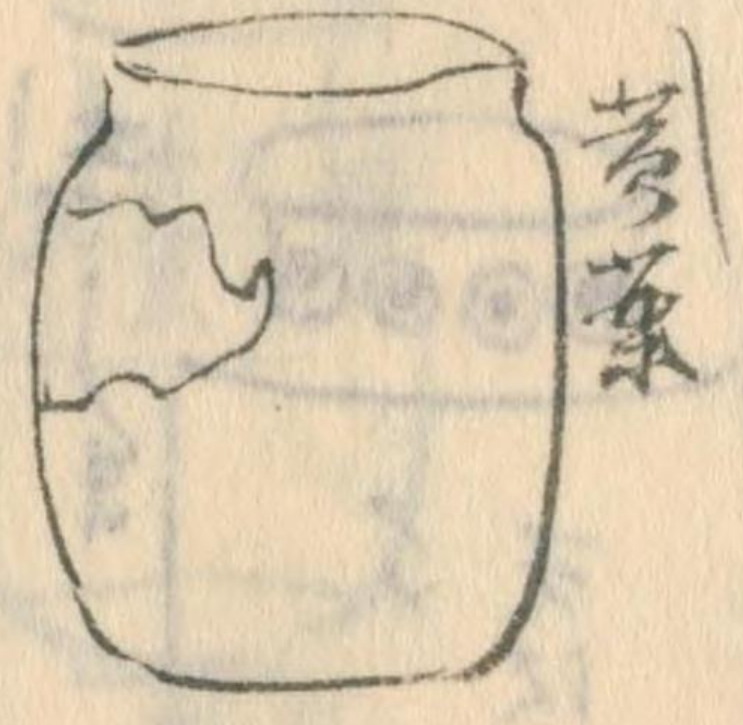
後高麗



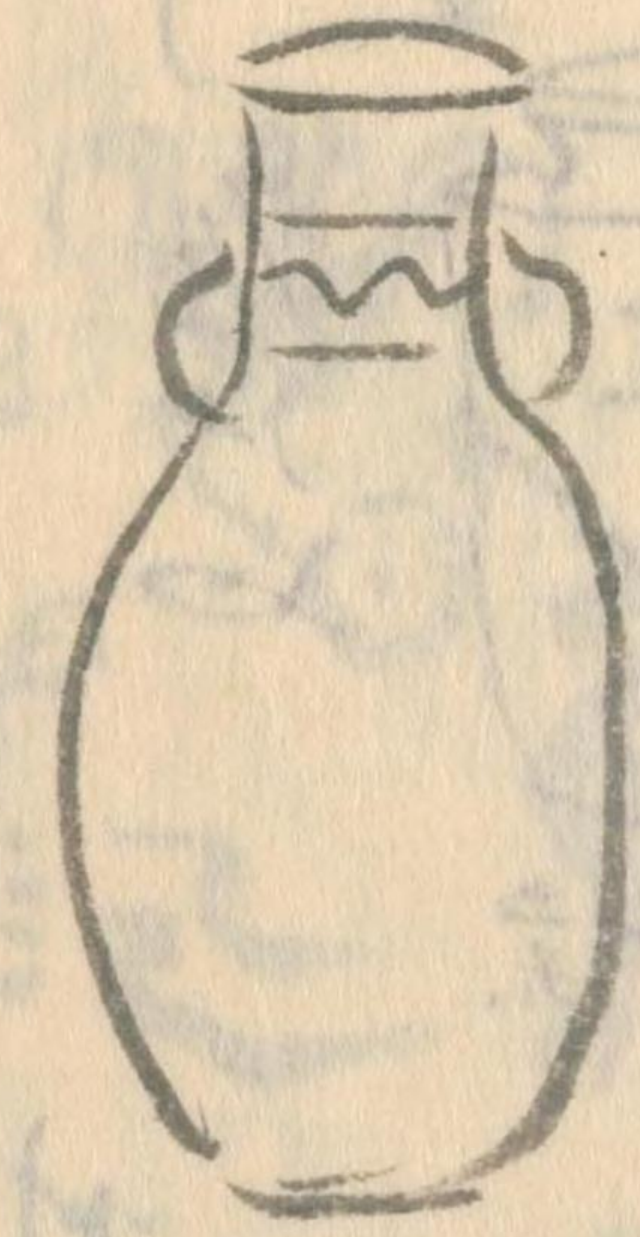
漢作



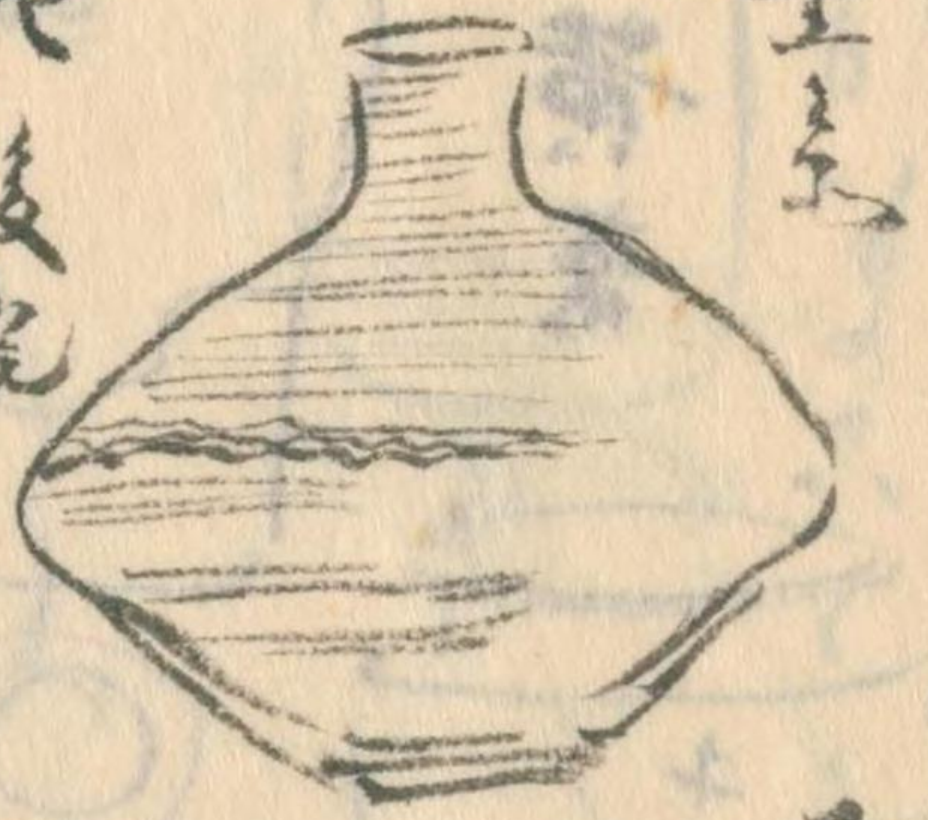
蒿葉



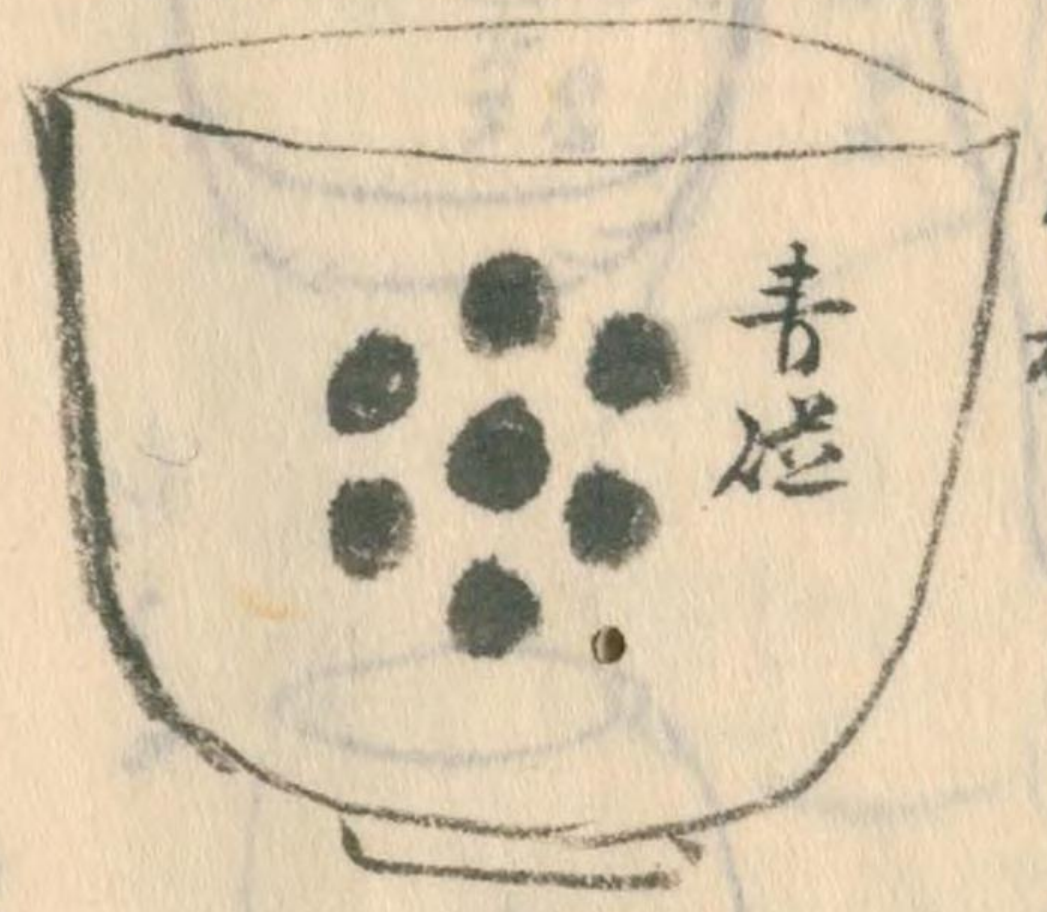
南蛮



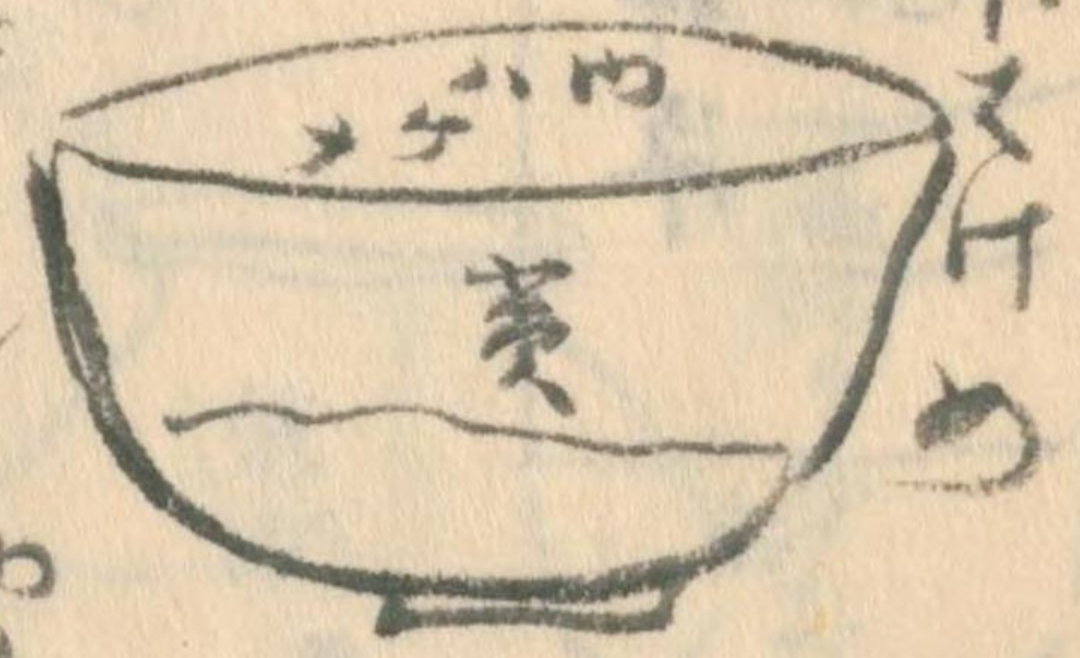
土ゑ



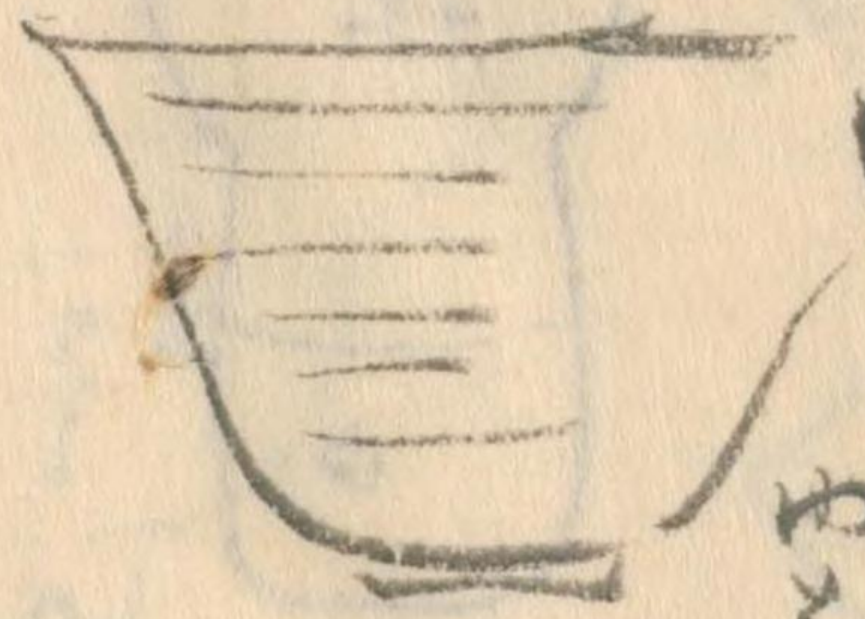
肥後焼



日本てけめ

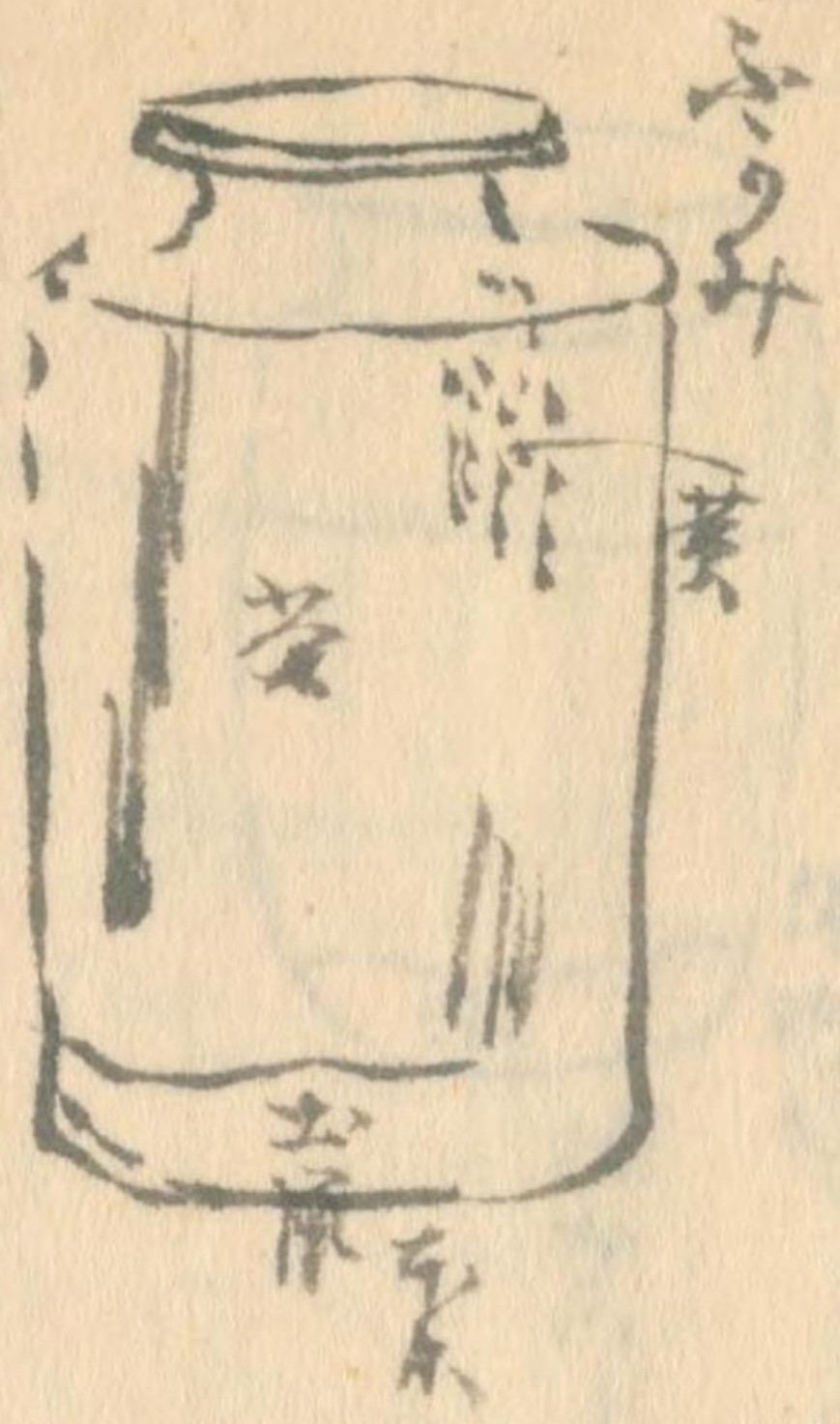


やとけツ

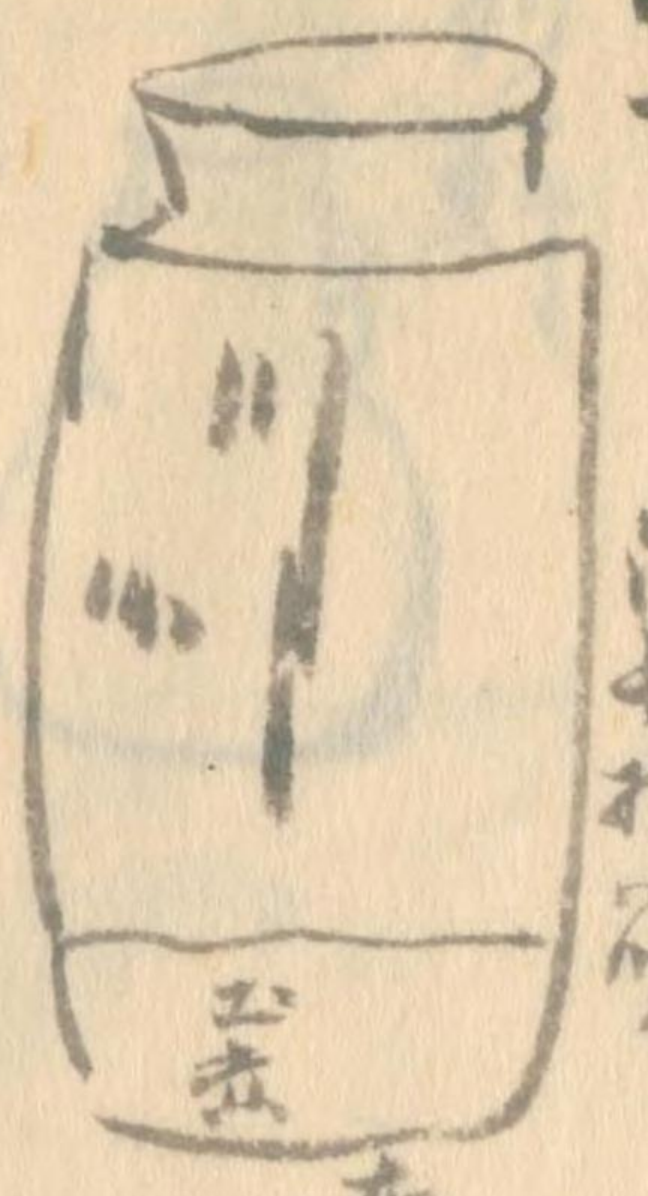


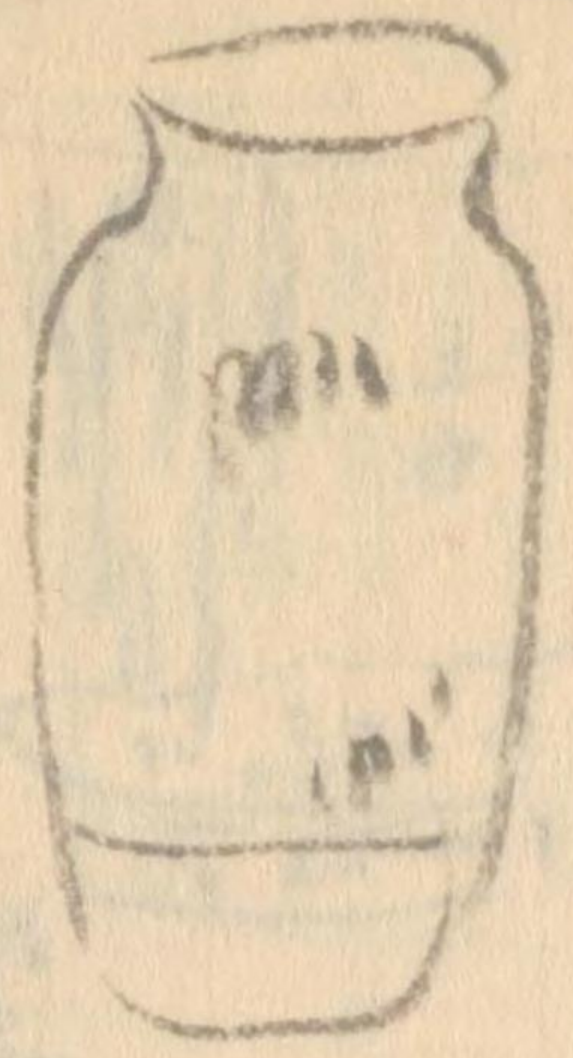
841
12

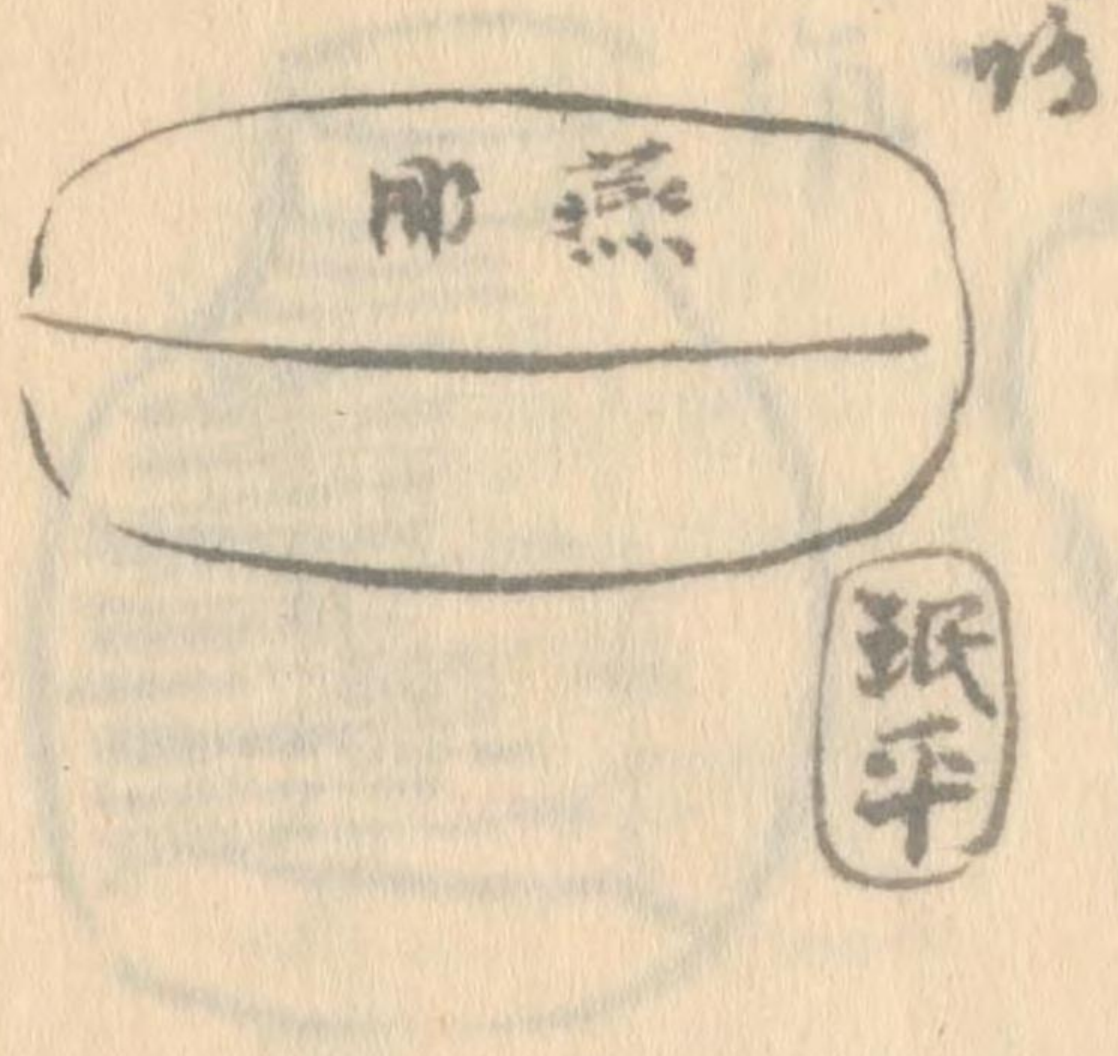
廿九年十月そ庄作也画之

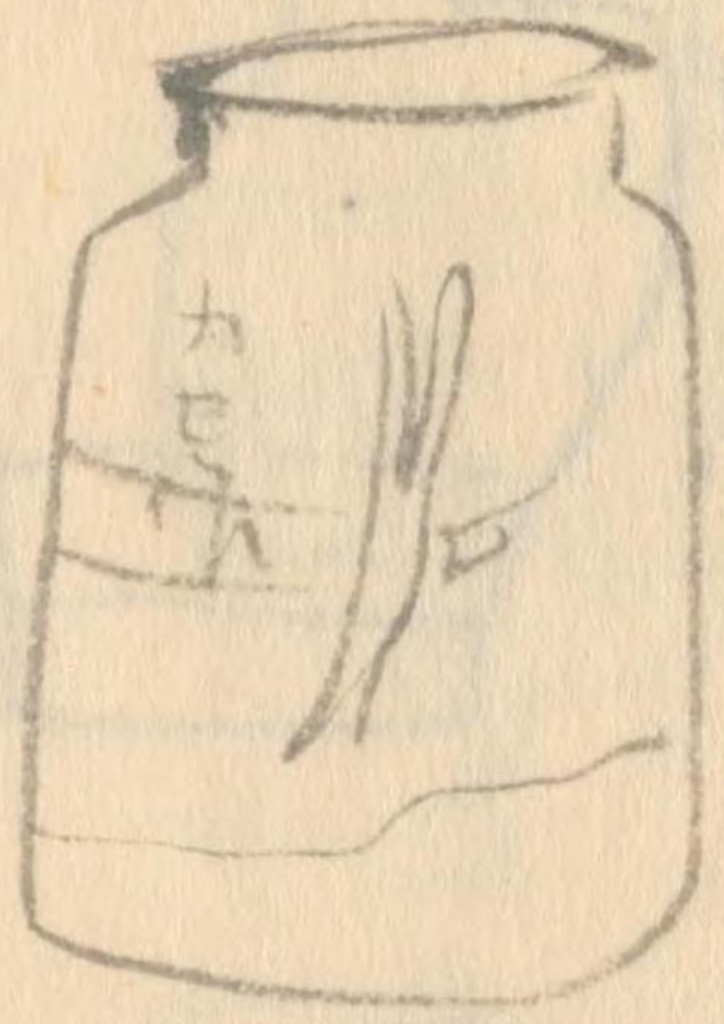

志ぶのみ
清水
黄
茶
古来
東

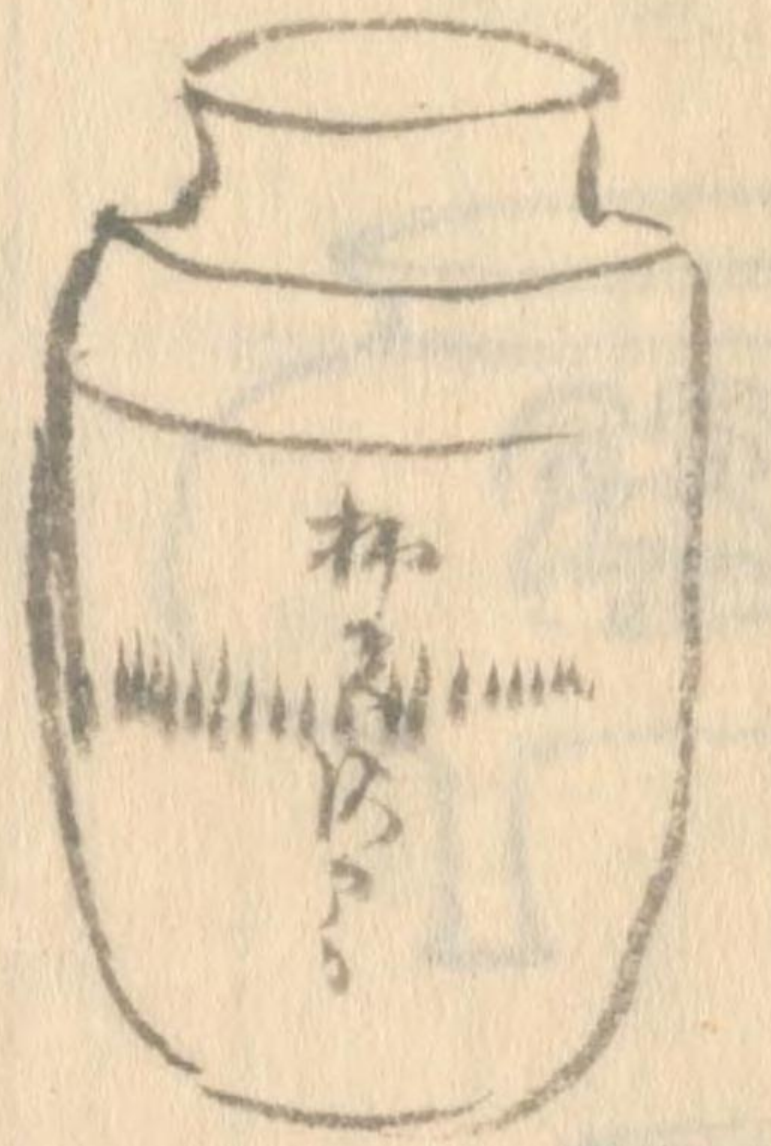
添古

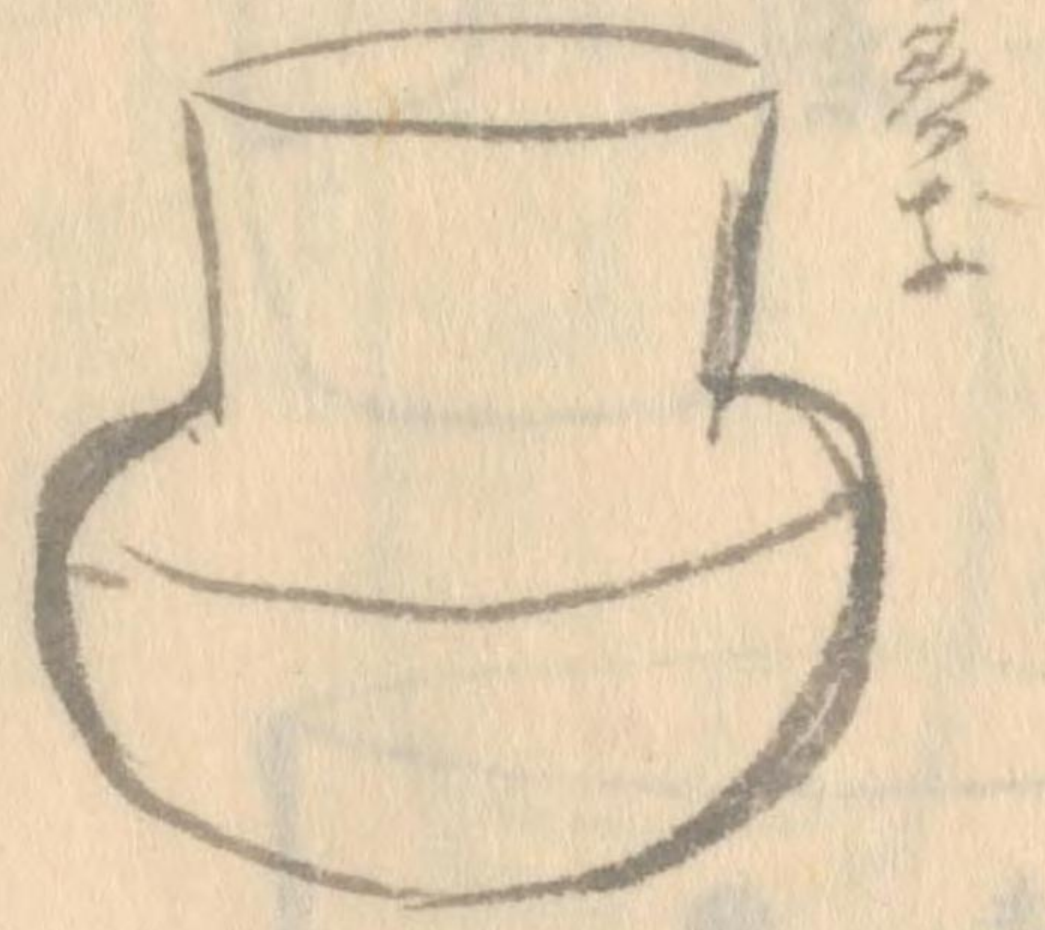


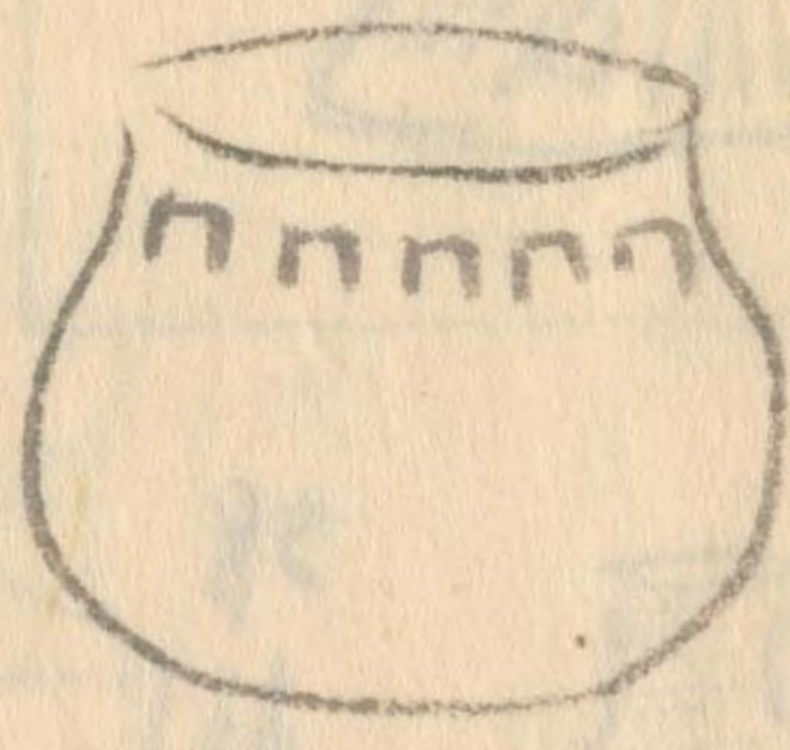


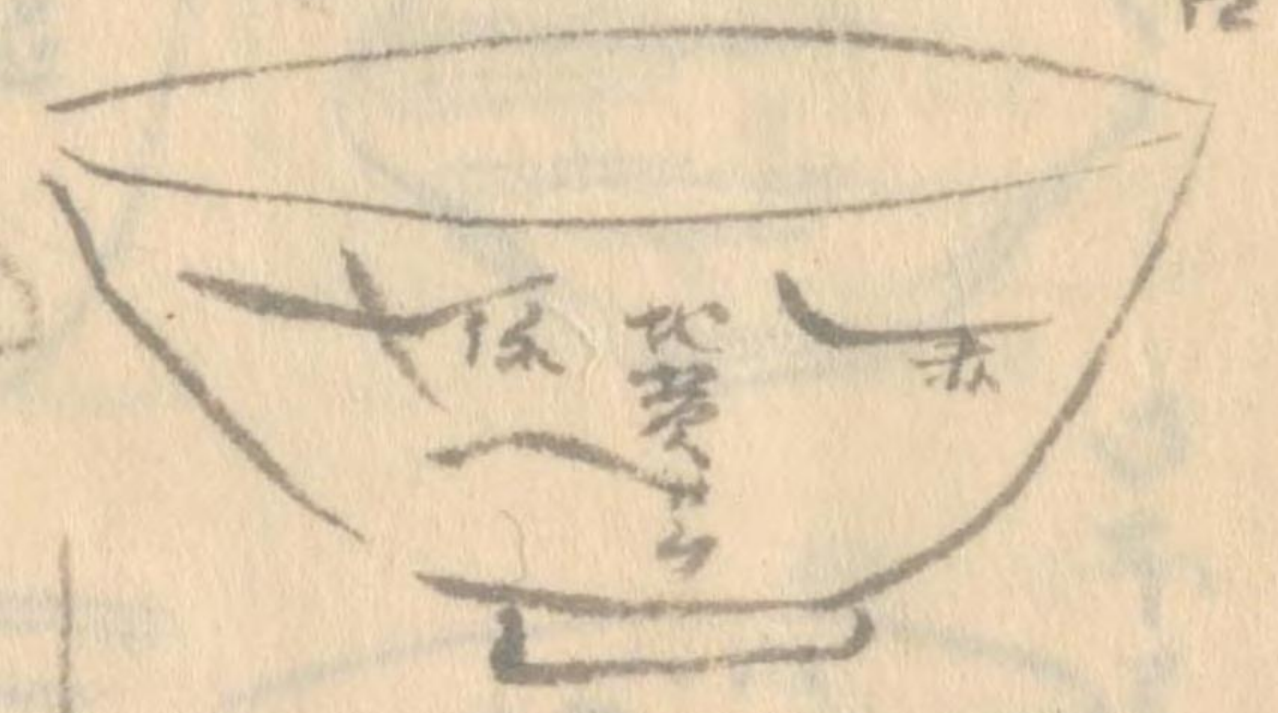


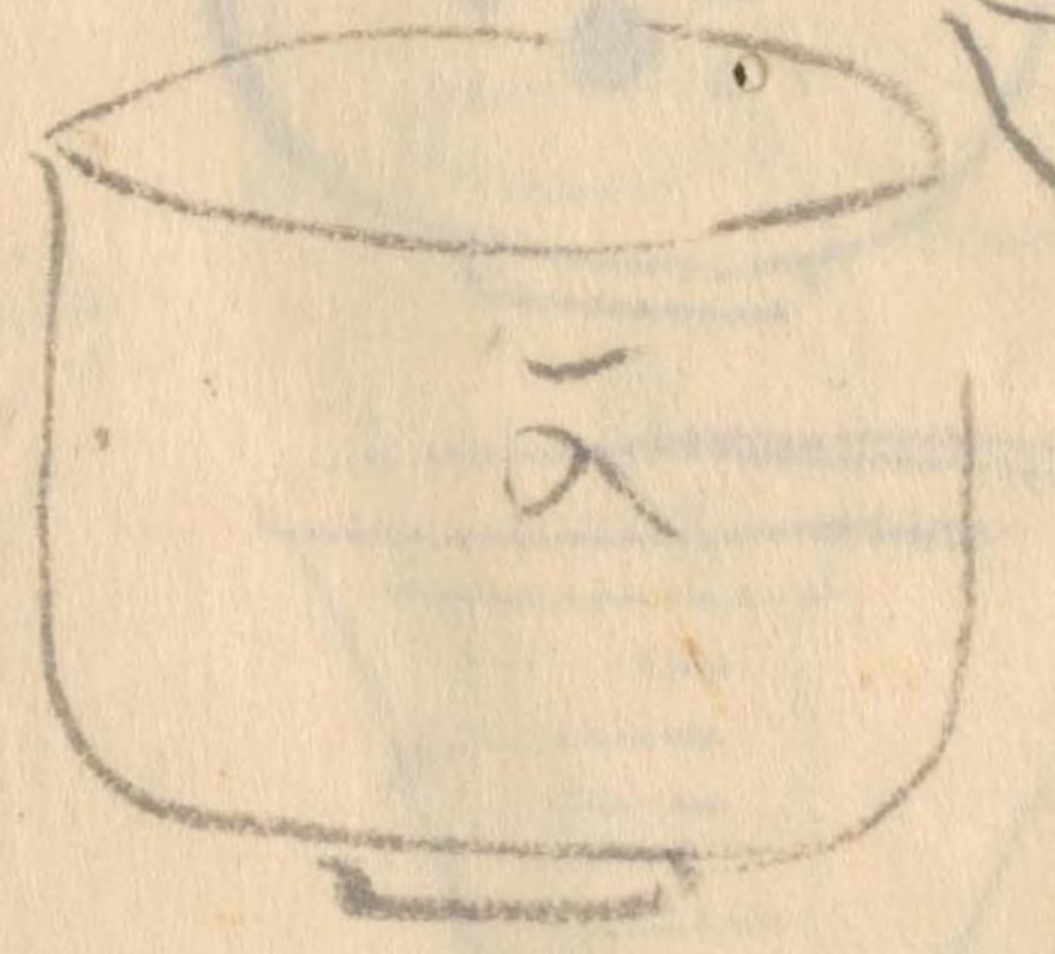








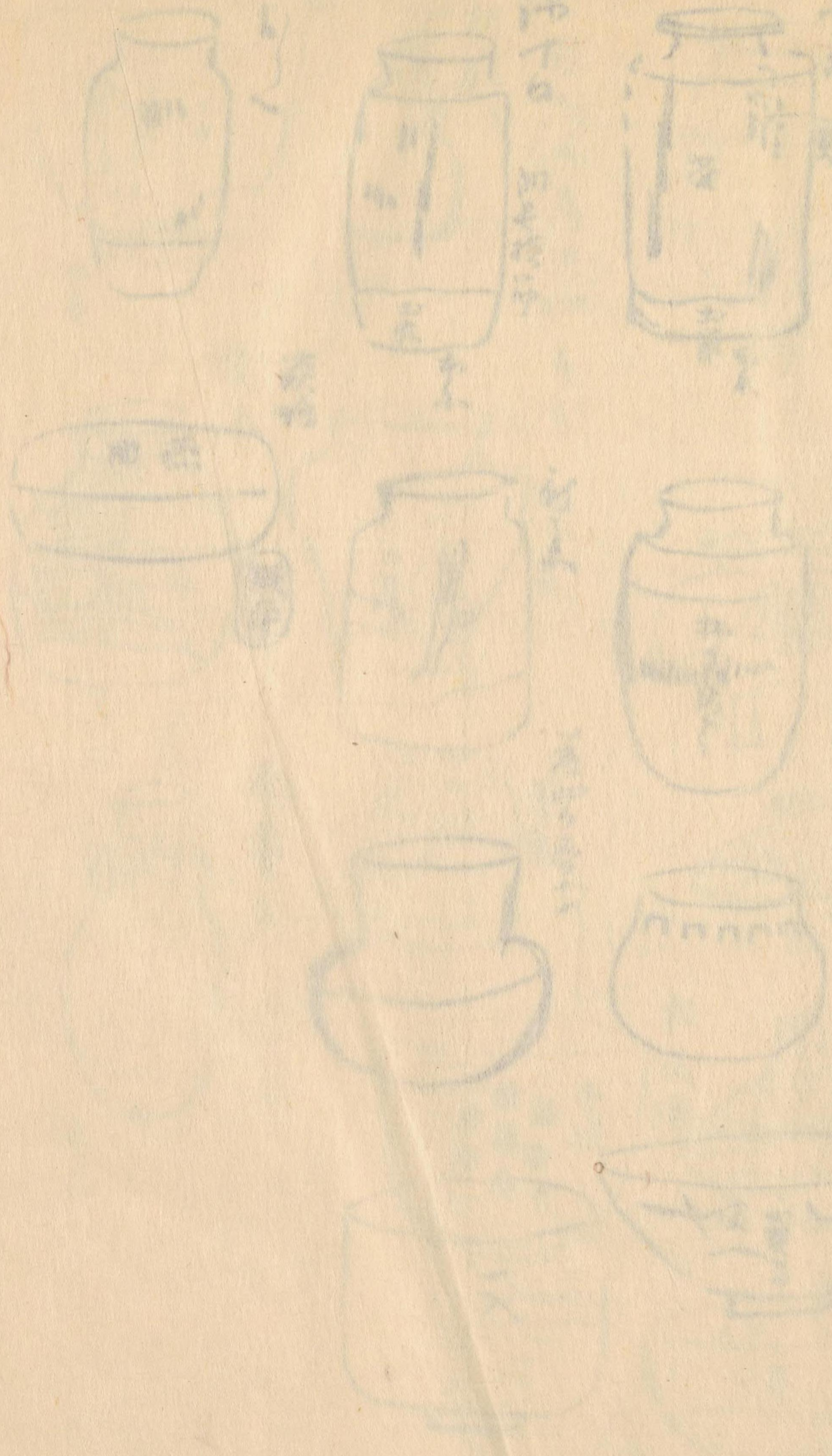




841
124

841
124

廿九年十月五日 [illegible] 画之



ガラス使用

841
124

ガラス使用

帝國圖書館藏

ガラス使用